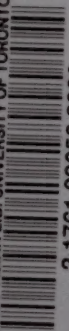


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03058 8826



UNIVERSITY OF TORONTO  
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER  
COLLECTION

*purchased from  
a gift by*

THE DONNER CANADIAN  
FOUNDATION











昭和九年六月一日印刷  
昭和九年六月五日發行

(普及版古事類苑 全六十冊)

(白石製本所 製本)

發行者

後藤亮一

發行者

川俣馨一

印刷者

和田助一

東京市芝區金杉新橋町十二番地

發行所

東京市小石川區竹早町三十二番地  
内外書籍株式會社內

古事類苑刊行會

振替東京三一七〇〇番

發賣所

東京市小石川區竹早町三十二番地

内外書籍株式會社

振替口座東京 八九六〇番  
電話小石川 一〇五五番  
一三二六九番

單式印刷株式會社印刷



阿彌陀佛

開光三十三年三月三十日發行  
開光三十三年三月廿五日出版

阿彌陀佛



明治三十三年三月廿五日印刷  
明治三十三年三月三十日發行

版權所有



神宮司廳



助修

正七位

佐伯有義

助修

三浦千畝

顧問

從學博士位

黒川眞頼

顧問

正五位

本居豊穎

顧問

從五位

木村正辭

顧問兼校正

井上頼圀

編修總裁

正三位

細川潤次郎

編修

正學七博士位

佐藤誠實

副編修

松本愛重

助修

石井小太郎

助修

佐野久成

助修

熊谷直一郎

助修

廣池千九郎

助修

加藤才次郎

助修

山本信哉

助修

馬瀬長松

助修

和田信二郎

助修

村尾節三





鮮建立依他勸導依他怎麼不怎麼不怎麼造次於是顛沛於是商量沒商量沒商量商量這箇不涉方圓長短不染赤白青黃明歷々露室々於是香殿童子出云宗門提撕期他日即今太守現大人相而降臨此道場大坐當陽假使令一大樹深根固蒂連枝者五男三女遠孫近子榮々昌々座中悉太守左右士偉哉上下盛哉一門可世其家可敬今不悲傷即今偕山野口唱一偈欲祝延後昆去矣山野便關七字關應爲他宣揚慶子孫萬歲尙無疆富貴門庭日月長縱是靈椿春老去一株丹桂五枝芳花〔空華日工集〕應安二年八月十五日覺園朴艾律師七年忌拈香其略曰去佛漸遠禪教律之徒相予盾蓋禪佛意也教佛口也律佛身也身口意一體也而今不和合可惜也云々頌曰漠々魔雲蔽覺天毘尼大法一絲懸誰知戒體明如月五濁波中觸處圓

〔臥雲日件錄〕文安四年五月十八日飯尾彦六左衛門來告侍衣者曰讚州來月就景德寺營普廣院殿○足利義教七年忌佛事因請景德長老拈香長老固辭而不已則嘗略拈香也○北曰曩時雖諸山西堂皆拈香今時五山太多而不及請諸山人皆習以爲西堂不可拈香然陸座拈香之選唯在其人而已不必在位崇卑也今讚州太守以景德長老幸爲其人時請之不常合古法亦能具擇法眼可尙也便寄書景德長老以不可固辭之意

臣雖多堅甲利兵以刺史爲先鋒戰必勝攻必取所掌無敵繇是觀之相公之所以佩相印者全刺史汗馬之功也是敵祿受萬戶封位登大夫實吁盛哉縱然夷狄終身爲臣死忠者臣道也天豈無威彰乎天若威彰則餘慶豈不及家門乎祝望夫惟神儀武門柱礎法社金湯執銳被堅爭雄則台兩韓信運籌決勝論功則累百張良忠臣明於麗金崑玉義氣冷於莫雪干霜惜今超紫陽地而卒朝鮮雖開闢於八陣億昨出赤甲城而入京洛如結夢於一場唯有遠江聲之高枕更無連夜語之對牀輝富貴乎吾前雨于珠簾雲于畫棟遺風流乎身後華于瓊筵日子羽觴匹似乎謫仙之宴桃李追配乎召伯之芟甘棠將謂揚名於西海不圖送死於北望過去心現在心未來心何不可得聲聞乘緣覺乘苦薩乘總沒商量正與塵時向上宗乘別有一片本來香看取山僧舉揚舉香云手裏香山呼萬歲兒孫日月照扶桑喝一喝

〔明暗雙々集〕

佛事

同磨守吉政

畫七日拈香

南瞻部州大日本國山陰道但州路居住大功德主豐臣吉英慶長第十八歲次癸丑四月十八日遁先考雲龍院故播州刺史乾堂元公居士大歛忌之辰也預於此日就于當院莊嚴報土集江湖雲侶叢三夜三行道容聞者懺摩會甘露妙供七軸連經頓漸寫者若干部件々品目附悅衆口演今當散席接入當山赤首白足諸查異口同音誦誦大佛頂萬行首楞嚴神呪之次拈出此一瓣舉香云本根一木而元有吾香名山野磬之作五片以其三分名戒香定香慧香而燒則穿破三學人鼻孔以其二分名解脫香解脫知見香而燒則上三世諸佛依此寶薰引導衆生十方衆生依此寶薰證大解脫卽今以件五片一擠并燒以作人天普同供養六凡四聖河沙群類一時弔本寂八百鼻功德不偉哉其惟雲龍院故播州刺史乾堂元公居士雖對萬事無違五常親系姓於豐臣家譜而被呼名南北遠深好於新田源氏則隔置身參商長生者古來少短命而今則亡話夢四十又九年參一字不說旨而歇却連經半卷廿閏三百片團月皎七梳不喫得而放下茶歌一章或時坐瓊筵映花酌酒或時垂珠簾聽雨焚香况又重神靈則心肝鐵石爲佛法則骨肉金湯涵入幡祠影乎放生河手執修造筭寫七寶塔樣乎石清水袖藏觀誦

煙四果四向緣覺聲聞西天東上歷代祖師專爲前往當山太清大和貨增崇品位伏願具慈不守自姓隨處示現法身普入微塵國常轉大法輪

〔絕海錄〕上前關白殿下藤公大衍居士諱日拈香經給社稷肅朝端德宇洋洋萬國歎五十六年如昨夢涅槃生死不相干某相門華胄人倫楷模仁義道德出於其性文行忠信具於其軀坐廟堂而講道則尙友周召陳股肱而就列則致君唐虞萬民於是樂業四海以之晏如加之早享菩薩淨戒深悟真乘親遊海藏闡域頓窮玄樞速舟移於坎壈視世猶如蓬塵於戲真淨界裏元派生佛之相畢竟空中事存去來之殊如一瀝起滅於巨海同片雲出沒於太虛六趣四生非他物殊相劣形總是渠當怎麼時莊嚴報地一句作麼生道究樸熟向寶爐上露个祥雲遍九衢

〔定慧圓明南化國師虛白錄〕

佛事

曹谿院殿前遠州太守剛園宗勝大禪定門

光泰

初七忌拈香

鼻孔司南本何物向沈水佛更參祥秋風吹散桂華塵天上人間七日香器世界瑛部州日出國山城州平安城正法山妙心禪寺養德禪院功德主藤原光長文祿二年菊月初五伏值先考曹谿院殿前遠州太守剛園宗勝大禪定門初七日忌之辰延在斯旦先甲七日就本院開道場百福莊嚴集六和衆修善因善果摩訶威怒王尊像一軀純圓獨妙蓮經若干部疾書之漸寫之就中疾書者使靈雲堂上老師作之銘謹知教中有禪筆頭有眼矣教阿難陀羅尼鉢口儀軌經一會蓮式法師所撰之觀音懺儀一座法身果德之三摩耶形壹基護國堂頭和尚承二十八顆驪珠於其上變木浮屠作玉浮圖者不亦快乎今當散筵借水獻華汲泉點茶盡鼻功德於晨香施眼功德於夕火特飄演窮竟堅固無上神呪之次命蒙釋玄與焚這小獅供養靈山獨尊少室初祖此土他土諸佛諸祖天神地祇每根底使三千佛國一時作栴檀世界神儀還入得栴檀世界麼若入不得無我無人無所住金剛正體露堂堂潛慮遠州刺史成人自卯歲頃以武雄名于世其養男也多以不可讓北宮黜也矣已迨壯年依願前相公結君臣之約相公視刺史如手足刺史亦視相公如腹心可謂君臣道合矣蓋夫相公未握相印前發兵而略關西地幕下



蓋遠望霜陵、則晚嵐咽兮、松柏徒慘、近見襄城、亦寒露泣兮、莓苔漸斑、秋庭不掃、霜葉之紅、雨乾曉鐘、猶薰月支之香煙、細近臣戀遺德、高僧唱法音而已、弟子始自襁褓之比、賜撫育之恩、至于綺羅之齡、進以還納之幸、序燕喜以事君主、著帶褊以備后妃、專依法皇之偏愛、待忝國母之尊名、况復宮闈辭位、崑閭逐蹤以來、晨昏于定惠之窓、陪侍于慈悲之室、茅君洞尋花之春筵、動錦車而追仙蹤、華子崗、旣雪之多宴、近綺席以從光儀、加以天子皇子降誕之時、靈佛靈社祈請之日、只喜蚌胎之共全、頻煩驚頭之禪念、每憶斯事、慨然傷心、側聞恒順寢生之十願王、誘引無際、直至道場之一佛乘、運轡不遑、仍奉造立白檀三尺普賢菩薩像一體、奉書寫妙法蓮華經一部二十八品、無量義經、觀普賢經、阿彌陀般若心經等各一卷、茲經者、太上天皇皇后宮職准后公主兩法親王及弟子等、殊袖白華之至孝、奉寫寶蓮之妙文、又博陸前大相國以下公卿侍臣、在昔護持之繡襦、多年近習之乳質、各鑲七珍、分書一品、字是閻浮檀金之微妙、軸亦摩尼寶珠之清瑩、便於城東平日之禪居、敎臨江左臥雲之碩德、五日十座、開示演說、殘菊色々、旁泥曼陀曼殊之粧、暮鳥聲々、更和念佛念法之唱、辨說如流、智海之浪沸騰、論談遞決、理窟之霧卷盡、惠業多少、奉爲聖靈御成正覺耳、仰願大聖牟尼兩足尊、新來此處、普現色身六牙象、忽向其場、左手佐金剛之印、右手摩烏瑟之頂、速奉引導、九品臺、令證得入三摩地、凡厥畫法界虛空界所有含生、普皆通向稽首和南、

大治四年九月廿八日

拈香文

〔下學集下〕拈香

〔書言字考節用集八〕拈香事見

〔絕海錄上〕太清和尚大群忌請陞座拈香云、此香鬱密栴檀之大樹、廣布四海之清陰、芬馥玉芝之餘香、長擬五峯之瑞彩、薰向寶爐、以奉供養、東方淨瑠璃世界主藥師瑠璃光如來、日光月光二大開士、洎十方三世百億分身釋迦如來、大覺世尊、天上人間大小權實法寶藏、海雖欲尊、不可說微塵刹土菩提薩

る、然るを今、こがねの聲、忽ちやみて、玉のひびき、再び聞えずなりぬるは、我がごちの歎きのみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし、これをいかでか、をしまざらん、かゝるをたれかは、おぼはざらん、あはれかなしきかも、わがかくことあげするを、泉の下にも、さやかにきこしめし、天がけりても、遂にみそなはせと、なんまうす、

〔本朝文粹<sup>十四</sup>〕陽成院四十九日御願文

後江相公○大江

事造 其佛

事寫 其經等

右去九月二十九日、忽出冷泉之寶宮、永遷真如之華界、七七御忌已當今朝、仍於圓覺道場奉供養、件佛經、佛則在世之時、蓮眼早發、經是昇霞之後、金文新成、我聖靈陛下、拋羅圖而逃塵、比萬乘於脫展、落雲鬢而入道、尋三明於方袍、姑射山之上、送八十年之春風、功德林之中、迎四八相之秋月、言其尊儀、娑婆世界十善之主、計其實算、釋迦如來一年之兄、抑大般若經一部六百卷、金剛般若經三百卷、未揭題名、忽作灰燼、無相之月、早藏、雖顯寂滅之理、有爲之悲難忘、不待稱揚之期、今日遺恨、只在此事、總擎此惠業、奉飾聖靈、千官景從、本是諸天之愛子、九品雲登、今則三界之慈親、定知貪憐圓明之覺花、豈敢往還煩惱之火宅、功德之餘、普及遠近、敬白、

天曆三年十一月十八日

別當前大納言源朝臣

〔本朝續文粹<sup>十三</sup>〕待賢門院奉爲白河院追善

敦光朝臣

蓋聞理智法身、雖住不住之境、面順正路、自入難入之門、佛教深奧、邈矣大哉、伏惟禪定法皇、河○白、因乾坤以致化、治勳殖以施仁、聖日普照、如金輪王之臨、四天德風遙翔、似銅馬帝之撫、諸夏然間、逃黃屋而詣、無何有之懸、叩玄關而歸、空假中之道、水月其意、涼燠幾廻、於是鳳闕高排、三代原孝順之禮、鸞與屢幸、每春整拜賀之儀、常憶聖算萬歲之期、秋呼無極、豈圖初秋七夕之候、哀痛忽催、中陰早過、大恩未報、

あしたにまゐるとては、君のみはかしのちりへに従ひ、ゆふべにまかるとては、君のみそでのもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも、なにかことならん、奮よむとては、君を師ともたふとみ、歌つくるとては、我を弟ひのつらにぞをしへ給ひける、中比にして、君はつかへの道にいとまなくおはし、我は世のさがにかゝづらひて、自らうときかたにも遇つるを、君つかへをしぞき給ひて後は、われもおなじちまたに移り住めば、花を尋ぬとては、われ道しるべをなし、月を思ふとては、君が舟にあひのり、うき事も共にうれへ、うれしきふしも共に喜びて、世にありふる業のまめごともあだことも、かたみにへだてなく心をかはせる事、今にはたさせ、其初をくりかへし、數ふれば、相友たる事、既に五十年にぞあまりける、さるを今後れたてまつりて、いつの世にか相見ん、何れの時にかこととはん、常なきは人の身の習ひぞと知るも、是をいかでか歎かざらん、斯るを誰れかはよくたへん、あはれ悲しきかも、文の林、世々に衰へ、言の葉の道、日にくだりゆけるを、賀茂の翁世に出て、今を捨て、古に歸り、青雲の高き心しらしを求め、しづはたの綾あるみやび言葉を、奪み云れど、くひせを守り、舟にきだつくるともがら、彼になづみ、ここにひかれて、猶あやしみ咎むるたぐひは多く、たまあひて、よくうけ引く人なん稀なりしを、君獨り心を起して、あまねく諭し、廣く誘ひしより、近き人は、まのあたり相うつなひ、遠き人は、遙に靡き來て、古振りの歌、世に盛になりたるは、誠に君の力によりてなり、その自らよみ出給へる歌を見るに、古きしらべ、新しき姿、とり／＼に備はらざるはなし、その古をうつせるは、藤原事業の御世におよび、後の巧にならへるは、堀河鳥羽の御時にくだらず、心に思ふことは、口に盡さるることなく、目にふるゝものは、詞にのせざる事なんあらざりける、これを見て、高きも短きも、めでたふとまざる人なし、又ことごのみの人は、その名を君にしられては、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君の一歌を得ては、あたひなきたからにもかへじといひてぞ、深くよろこびけ



接、無日不逢出、則前後列與、入則左右對讀、若偶半日不相見、則如隔歲月、尺牘相遞、奚奴告報、無少間斷、豈圖忽然永訣、幽明契闊、既及周月、音容渺茫、視而不見、聞而不答、而今而後六經之奧義、誰共覩焉、歷代之事跡、誰共論焉、諸子百家之多端、誰共擇焉、詩賦文章之正變、誰共評焉、本朝之治亂興廢、誰共談焉、弓冶之家業、誰共繼述焉、春花秋月之景、誰共吟焉、城南石鼎之句、誰共聯焉、時事之咨詢、誰共議焉、東脩受業者、誰共誨焉、噫、天喪予乎、抑亦使余半死乎、嗚呼、明道先卒、而伊川得壽、子瞻下世、而子由獨存者、其順也、今余喪汝者、其逆也、豈不哀痛哉、在昔先考、○林哭東舟、而惜其不壽、然東舟齡既踰知命、汝未盈強仕、而余才不及先考、而汝才不劣東舟、則不幸之甚、何以加焉、汝視春信、春常猶子、而撫愛之教授之、勵日新之功、祝前程之遠、彼等何忘其恩、余亦何不有其報哉、要須視勝、澄無第五倫之私、唯願無忝其所生、於二孤女、亦願育之、猶視余娘子、而配對可擇其人、汝靈其安之、嗚呼、汝才、官亦惜焉、私亦惜焉、遠近亦惜焉、親疎亦惜焉、況於骨肉同氣乎、嗚呼、汝有登瀛之才、未用于世、然其名既馳、殊域痛哉、惜哉、今其靈昇天、託奎星之傍乎、入地爲修文郎乎、仰望昆侖、不見其影、俯叩磅礴、不聞其聲、臨墓躊躇、不能去焉、情長筆短、不堪慟哭、一瓣之薺、一灌之酒、魂魄其享、

讀了春信、自讀其所作祭文、次春常讀哀文、事畢時、水戸羽林君裁賜祭文、且奠清酌朋樽、及乾魚一筥、使人見一、號卜爲使、號卜向墓前讀祭文、讀了焚之、次卜幽、讀其所作誄、其次伯元金節等數輩、守序或祭文、或挽詩、皆自讀之、余命重晴、悉供碑前、諸祭文挽詩等數於別部事畢、門生等皆去、余亦歸宅、

〔琴後集十五〕祭芳宜國大人墓文

茲に文化の五とせ九月八日、平春海、謹て芳宜國の大人○加藤のおくつきのみまへに、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼て、うなねつきてまうさく、あはれかなしきかも、君はわれに、十といひて一とせのこのかみにおはすながい、まそのかみを思ひ出るに、君はまささにさかりの齡におはして、我はまだわらはにてぞ侍りける、常に縣居の庭に、物まなびにゆきかひたるとき、

兮。動以天守以約。惟其家之有無兮。墓孔聖之無悼。想母之誕汝兮。寤驚而遂瘞矣。嗚呼。悲夫。噫兮。宿草拱木之墓。嗟三歲之夢兮。惟若妣乃我述。時其不可忘兮。覺今夏而昔秋。倏忽焉來去兮。晏天不弔。而不假之年。上堪下與之間兮。聚者散者。終古長令。誰其使然哉。

按惺窩寄先生書曰。祭文一首。誰某爲誰某之製文哉。不審大半足下之高手乎。若然則殤子代他人而爲之歟。云々。此文先生不直呈之。惺窩傳見之。而有此語乎。

〔爲峯文集七十五〕天倫哀事

萬治辛丑

元寬文

三月五日。余弟讀耕齋林靖彥復。罹微恙。十一日發熱煩悶。十二日曉暝而逝。○中

十四日黎明。遺柩於別墅。以今日巳時爲葬期。○中既而余臨窆處。作祭文。使春信讀之曰。

嗚呼吾弟。其生也後於吾。而其沒也先於吾。自汝之生三十八年。對牀研覃。以講磨家業。而仰儒風。匹似雁影之連行。彷彿鵲鶴之在原。未嘗相離。而無聞於牆。今不幸而遭汝之喪。如綴羽翼。如失左右手。嗚呼悲哉。汝博聞強記。一過成誦。詩賦文章。下筆不休。一時之奇才。千里之駿足也。長於賈生五年。而少於南軒十歲。天何奪其年之速也。嗚呼惜哉。汝爲人也。昔事父母。起孝起敬。天倫之際。友悌孔懷。怡怡如也。按同志之朋。有信教授不倦。行清白而執志堅固。不謂富貴不求。利達守分而憂如也。鴻鵠之志。未遂而落。檣櫓之材。未用而折。嗚呼痛哉。使汝孤兒主喪。以襄葬事。爲汝聊標其行操。私益曰。貞毅嗚呼汝之生也。甲子之年。而今葬。汝偶當甲子之日。命哉。哀哉。尙饗。辛丑三月中旬甲子之日。家兄向陽林之道。滴淚書之。

十二日

○四

周月忌辰也。余自昨夜。赴別墅齋戒。今晨春信奉常早來。巳時前後諸門生集會。微雨淋漓。

墳墓路滑。余命清隆重晴等。掃除墓邊。陳設奠供。既而余謬衣素服。燒香灌酒。使春信讀祭文曰。

辛丑四月十二日。當彥復弟一周月忌辰也。家兄向陽林子。薦棄盛酒菓等。庶品祭新墳曰。嗚呼昔者共在京洛。起臥同經。朝晚伴食。余漸成長。汝猶童稚。既而東來。溫清省定。無不携手。厥後余雖別居。咫尺隣

〔南浦文集〕祭一唯參公文

維文祿二年龍集昭陽大荒落九月朔壬子同八日己未吾宗薩隅日三州太守一唯三公大禪定門○  
津久唱滅於高麗一邦越歷十餘日屍骸萬里歸于薩州官府哀悼之餘世臣幸侃○新謹備伊蒲之淨  
饌致祭於靈筵其文曰

嗚呼哀哉

與宣父業 緝文王熙 外壯勇武 內含仁慈 入遐荒地 遠航高麗 每舉松扇 三軍指揮

威橫三國 名聞四夷 今年在蛇 哲人云萎 吁君在日 多藝無遺 學孫吳法 嘆周孔衰

十歲騎馬 下視胡兒 石弩射虎 前驅王師 三百六旬 半在仙堦 羯鼓聲高 衆樂猶罷

月迎良明 花延舊知 自今以往 念茲在茲

嗚呼哀哉

多歲助勞 唯不傷悲 東關西塞 冗不見治 南蠻北狄 恨來已遲 手提三尺 坐定漢基

氣純太阿 方薦越砥 有望諸葛 抗讎漢其 又嫌接輿 政化已而 不深斯道 何憂多岐

嗚呼哀哉

二十餘歲 一黍半炊 病床夢脆 時日過移 我辱家譜 人誰不知 遙遙華胄 綿々葛藟

胸霧未霽 淚雨四垂 漣如泣血 奈此嗟咨 黃雲一燧 玄月一卮 靈光不昧 敢昭鑒之

嗚呼哀哉尙饗

〔羅山文集四十〕哀殤文 慶長十年作

惟旦月之肇兮魂而升乎九天將謂夫痘疹耶夏不遷乎菊泉大明醫家書泉亦以爲痼疾耶哀厥藥之

惟愆惟摩頂以放踵兮矧茲頓復含飴食母死而蘇兮侍兒狂如白癡席上空所有兮惟滿宮之玩好房

中其所見兮惟周身之襪襪衆人皆弔我兮來吾道夫中情淚下其如霰兮恨卜商之失明朋友愈慰余



岳接武於台山，論三光在其初，命義仲以口賓賓之儀，酌八龍口其一非荀氏，以垂離畢之澤，四王執蓋，一人傾冠，況口觀念月昇，則入火生，以現大聖之色相，決擇永解，亦揮玉箸，以降他宗之棟梁，三身覺成，早爲界外之身，五眼相具，永作世間之眼，然猶擁護佛法於我山，莫留應化於此地，叩必答，如曉鐘之待霜，仰必臨，似秋月之浮水，我等隔溫顏於生前，竭寒心於沒後，今鍾忌辰，聊致月祀，伏願和尚暫出本覺之宮園，忝照末弟之禮奠，周衛日數之檢而報釋尊眷顧三密之口而傳慈氏尙饗。

中納言大江匡房卿作

〔梅花無畫藏〕

武州江戸城祭太田二千石春苑道灌禪定門

文明應二癸丑以前十一  
武藏而作此祭文今記之年

維時文明龍集丙午秋之孟念有六日，太田二千石公春苑道灌，入相陽精屋之府第，匠作君之幕僚，系白刃之厄，形骸隕墜，魂魄飛沈矣。公共厥爺自得道真老人，積汗馬之勞，幹楨于國家，至炊骨，稔存而息，沒寔所哀鍾也。同仲秋十日，伏值二七日之忌齋，漆桶萬里，謹具香華，燈燭不腆之儀，敢昭告亡靈。厥詞曰：

嗚呼哀哉

上天所賦

若人爲英

藹然和氣

如花就榮

八州草木

悉服威名

倭歌三昧

文武兼并

嗣孫吳術

胸數萬兵

揮羽扇戰

護帝旗征

深屯敵地

剪棘除荆

履岨香嶺

唾血共盟

長橋虹臥

不屑修營

重城擊柝

誅暴屠鯨

關塞不鎖

女織男耕

鄭有子產

齊亦晏嬰

天乎天也

白刃俄生

時乎時也

黃葉暗驚

五十五載

露栖樗莛

託蟻宮夢

謝謁角爭

比斯亡極

海淺俗輕

棄忠泥土

混節濁清

雖無所訴

天鑑惟明

見機合速

胡爲請嬰

陀羅尼雨

妄想洗聲

非來非去

湛然圓成

孫子百世

松秀柏萌

祭具不腆

獨爐續粢

野菓清酌

默告丹誠

嗚呼哀哉來饗

に此道を明らかにせんと、往しとしより子病あつかりつるが、その比は愈て見えしを、予が府にかへりける後更に外のいたはり出来て、ほどなく世をされりとうたへ来るをきゝて、我たまもきゆるばかりになりぬ、ごとしはいかなるとしぞや、京師に志明府の館をすてたまひしより、丹州の田中、播州の沼田、若州の柳川、上州の山口、武城の山下、あひつゞきて世をされり、天何ぞ學を好む人に幸せずして、予がたすけをうばふことのすみやかなる、あゝ、かなしい哉、まかはいへど又終によに久しきものにあらじ、誠齋何ぞ我をあざむかん、生て此道を與さんことは、われに望みをたえぬ、天にあるの靈、永く此道を守り、神となりて我に生前の弱をかへせ、はるかに薄奠をよせて泣て我哀をのぶ、尙くはうけ給へ、

さだめなき時雨の雲と消ぬらし人はまことの名のみ残して  
限ある身こそくちせめ神は世に守れまことの道のさかえを

執齋希賢拜書

誠齋、攝州平野土橋七郎兵衛友直、享保十二年辛、

祭文

〔昔家文章<sup>七</sup>祭文〕祭連聰靈文

維貞觀七年歲次乙酉九月甲子朔二十五日戊子、前進士菅<sup>某</sup>奉家君教、以醴粟之奠、致祭于連聰靈、嗚呼汝連聰、去年十月客死城南、驚聞千萬、哀慟再三、泉墟掩閉、心事誰談、殯腸不輟、零涕空含、嗚呼星霜易轉、感悼難堪、蕭々日景、慘々煙嵐、蘭芳迥野、菊馥寒潭、家君愛爾、爾勿相慙、禮昔攸嗜、粟先所甘、誘爾魂氣、嘉斯德翼、嗚呼幽明匪一、生死何參、無夢無祭、孰拜孰酣、醴粟之薄、連聰尙饗、

〔朝野群載<sup>三</sup>祭文〕祭慈惠大師尊靈祭文

維年歲次月朔三日

謹以香花灯明果菜蔬食之薦、敬獻延曆寺第十八座主大僧正慈惠和尚之尊靈、伏惟和尚降神於靈

大炊助なりける溝江氏の長澄とて、こしの國金澤といふ所にゐるよしして住けり、心ばえ品々たえず身におこなへるさまも、生れあへる卦爻のまゐるしありけらし、豚魚に及ぶとかいへる信を守り、よろづ我なすべきわざは、いふにやはおよぶものゝふのたけき心をやはらぐる道にさへ、情ふかゝりしかば、身づからもとどしごろ交を金蘭にしめ、またしみを瓜葛にたぐへりまかあるに、慶長の三の年長月の末つかた、ふりみふらずみしぐるゝ空のさだめなき世のならひ、心地例ならず侍りしに、三たびひちを折し輩も、まゐるしを空しくし、ひとへに身に代らんとせし人も、いのるにあやなく、つひにことし二月の中の五日終焉なりしは、まことに娑羅林のかげをまたふにや有けん、又花の本にてさねがひし、古の人のあはれも思ひいづめり、さてあるべき事ならねば、からをみてだにといひしあたりちかき、ふか草やまのけふりとのぼりしかば、夢うつゝ、とおもひわかすなん、されば九會の般若に説し六の喻も、今更おろかなる心をおごろかせりき、うたうたはぬためしあれば、ことにいで音にだにたてずまづみしこと、さすがもだしはてがたくて、かのよはひのほごもなごりがちに、挽詞の數につくりあらはし、なほ百句の連歌を卷そへつゝ、かつは平生の嗜好になすらへ、かつは轉法輪の縁をむすばしめんとなり、おとする風の斧の柄をすて流るゝ水の琴の緒をたちし心の友は、まことに有がなからんかし、世の中の誰もかくはいふらめど、事にふれざらましかば、ふかくおぼえぬたぐひもやあらん、

〔扶桑殘葉集<sup>五</sup>〕誠齋を悼める詞

三輪希賢

嗚呼誠齋、何ぞ世を蚤うせる、子が性は仁愛、社倉を設て郷の民をすくふ、子が志は正大、學校をたて、郷の生を教ふ、ともに當世のいまだきかざる所、子みなこれが誘ひをなせり、惜いかな、いまだ其大になれるを見ずして、その徳もまたいまだ厚くつむには及ばざるに、何ぞ世をはやうせる、過し比、予都にのぼりて、子が郷にあそび、子も來りて京都にわかる、手をとりて約すらく、必大



亭山連行險艱止兮致仕車旣懸彼山之幽兮手展殘編庵門之雪兮影映富巔鳶飛魚躍兮其天其淵  
有時有命兮忽入黃泉嗚呼老人兮可哀可憐音容契闊兮視而不見聽而不聞焉拙語一章兮代一瓣  
之香燭辛丑暮春上旬

〔驚峯文集八十〕辻達哀詞并引

戊申八年

寬文

之秋九月之望門人辻達沒於武城之廬嗚呼痛哉嗚呼惜哉達字思聰初名了的后改

聊適洛陽之產也李仕水戶故黃門及今參議兩卿君恩遇殊厚出入余門三十餘年問字請益禮敬  
不懈先考○林道春常謂穎悟也余及亡弟讀耕親炙超群講席雅會無不陪從加之預覽永譜傳編輯之

列癸未之冬華洛之行同塗戊子黑髮之役來會余之接彼彼之信余非尋常門生之比者衆之所知  
也其疾病時間而相見告訣未幾聞訃悼而垂淚既葬而永思思而不止賦哀詞一篇冀其牌座

重陽過兮籬菊荒淚痕滴盡露瀼瀼兮秋風暴兮芭蕉傷遺文讀殘字行々舊題幾多出肺腸宿病終是入  
膏肓朝繹暮繹百千卷箱暑往寒來四十五霜吟花吟月維昔不忘歸冥歸泉如今則亡思聰思聰何處  
相羊白雲漠々悵然空望

〔蒲生君平遺稿中祭文〕祭妣貞樹孺人哀辭

維文化丁卯冬月日哀子秀實謹奉香之與水敢昭告于妣貞樹孺人上野氏之神嗚乎哀哉皇天降禍  
不在余躬遇聖善之方喪覺祿命之斯窮忽吞聲而斷腸遂心迷而蒙瞶若背乳而夜孺知身老而情同  
以罪逆之餘生慕道德之遺風將有禮於追遠豈成情在慎終禮非少連情事孫才宵夢於凶晝泣於縗  
思齊母儀懷之哀々孝貞恭順處勞不回春秋是職織組縫裁朝夕之務酒食鹽梅觀內事之脩整莫不  
惟其懿德百歲必傳芳譽一室當爲善則報知子之慈母欲爲臣而王國有方寸之曾飢無曲尺之苟得  
尙饗

〔扶桑拾葉集二十七〕代賀豐州挽辭

藤原肅

かるべし、これをつまば、棟にみち、のせば牛もあせすべし、日のもとやすみうかりけん、またいかなる心ざしにておはしけん、そのかみもろこしさいです、でにのりうかびたまひしが、彼康頼がさすらへて、親には告よといひし、ま山嵐にもござれて、そのほいとげず、こ、かしこにかくれ家もどめておはせしが、花ものいはねども、その名世にかうばしく、誰いひそめしこと、なく、いにしへの人とても、吾くに、出たまひし中には、此人のさえのかみにた、むこと、かたがるべしとなむもてあつかひける、めでたき人にておはせしが、過にし長月五〇元和中の二日の月ともに、雲がくれたまひぬ、まことに闇路にをもむきて、ごもし火をうしなふやうに、みな人思ふべら也、はま千鳥のあごもたぐひなく、わかうらはのよしあしまで、よく分ちたまひしに、かなしといはむかたなし、みづからいにしどの夏母にをくれしことを、わが子に告させ侍しかば、よ、となきたまひ、あはれる言葉かき、からのうた二までをくりたまへし、それをやがて、此秋のかたみに見なし奉らむとは、つゆおもはざりき、さだめなき世にこそあなれ、いとあたらぬことながら、我も今又やまどうた二うたかきて、むくひたてまつるものならし。

入の世をあはれといひしあはれさのそのあはれさになりけるかな  
すみはてぬ世のならひこそかなしけれむかしかはらぬ月はい、で、も

〔露峯文集七十一〕井上幽山老人哀辭并引

前筑州刺史井上老人、以萬治辛丑

〇寛文元年

二月二十七日、卒於江府退廬、年七十七、老人仕官勤事數

十年、去歲致仕、自號幽山、此老與余先考羅山子年相若、有久敬之交、常好讀易、以畢比名堂、以艮坎扁

亭、余亦相識二十餘年、至是聞其訃、不堪哀、痛哉、哀辭一章、以供其墓前曰、

嗚呼井筑牧兮、筮仕有年、職役歷試兮、食祿萬有三千、掌紉彈事兮、風霜凜然、問黎民苦兮、巡察東海、辟路之郵、禁耶蘇法兮、專對西洋、長崎之邊、威名籍甚兮、功勞永傳、暇日讀易兮、畢比堂前、亭號艮坎兮、水

時雨ゆくうき世の雪の外にすむ無何有の月や君ながむらむ

宇宙之間奈死生是天是命有誰爭可憐一夜文星墜秋氣摧蕤苑英

又

三十餘年西與東往來如影伴春風交情未及駟蚤事空作挽詞聊報公

又

天喪斯文否遊魂歸太虛威儀憶冠帶容貌曳衣裾不用封千戶所貪書五車  
除  
然雙袖淚何日又能

あまつほしやよ身は苔の下ながらうづもれぬ名といづれたかけん

あなわびしもちゐをゑがいてあたへたらん身の後の名もさはいへれどあらまほし

〔續惺窩文集〕追悼文

明心拜上

是や、もろこしの文をくだらよりわたしめしは、人のすべらぎ十つぎあまり六の御時○藤原に

あたれり、そののち盤をあつめ雪をつむ人、野べのかづらのはひひろごり、林にまげき木のはの

ごとくおほければ、桂のえだ折々に名だたる人いでおはす、既戸の御子は、十と七に法をわかち

て、世をまつりごちどねりのみこは、ちはやぶる神代の巻をえり、吉備のおごゝは御門をし

へ、小野のたかむらは、人のよみえぬ文よみ、たかの、大し○空北の、御神、前の中つかさのおほ

さみ○兼後の王○平にしの宮のおとゞ○明北の文をのこせし卿公○藤原は、四の舟をえらばす、

元亨にのべしふみ○元亨は、法のわたちのくらにいれり、ちかきよには一條の大ぬし○藤原こ

そ、五百とせに一度、かしこき人はいづといへば、北の、御後は、我ならでたそやとのたまひしと

なむ、かゝる人には、桐にすめる鳥の毛、あしをおられし獸の角に似たり、爰に背の山人○藤原と

いふ人あり、四のふみ五のつねをむねとして、凡今の世にあらゆる文、みのこしたまふはすくな



らぬかなしさを歌うたひ戀まのびて、をの／＼その徳をあふぎたうとみ、もがりにまうで、いたみなげくにも、囀ゆすりておしますしもあらず、まかはあれど、六とせのあなた、をのれ中たえしくめちの橋は、又つくることなき、かづらきの神もうらめしく、高間の山の雲と見はてつるかなしき思ひやるべし、人の心の淵瀬隙なく、あすか川のたけきものならで、げふをまつことなく、目のまへにながれかはるならひなればにや、そのかみのこととりかへしいまおもへば、くやしきこともうちまじり、あはれにはかなく、いづれのとしやらん、さだかならねど、すゝき一むら松あまた、軒ちかくうへられて、

まげき野のむしの音かねて我ぞなく一むらすゝきうへそめしより  
身をかくすすがの山もあらなくになれだにまげれ庭のまつかげ  
などうめかれし雙さながらさくかどあやまたれ、ありさまみるかどうたがふかのすゝき松此  
比の露霜にいかならんと、なき人の宿おもひやりて、

霜やたび置ながらしそはなすゝきなれぬる袖と人もみるがに  
たれきけと宿の松かせまらぶらんむなしきことをともたえずて  
ともにみしその春秋の山かづらながき世かけてなちぎりけん  
うらみじとむべもいひけりをのづからされるはうとくかつわすれゆく  
今はたゞゆふつけ鳥とねをぞなくくるゝ夜ごとのむかしこふとて  
かたみとてのこるもあだのおもひ川よしさはきえぬ人のうたかた  
をのが身よ草にもあらず木にもあらで、さらぬわかれをたへまのおべく  
おりたちてあはれをなにといひなさん人はきえにし雲のはたでに  
春の花ちりぬとおしみ秋の月いりぬとこひし人もいづらは

さだめ身をたて、四五の文を事とすといへれど、なをそのみちくらかりけるにや、日のもこのあ  
さましき末の世にむまれても、いかなるちぎりおはしけん、すたれ行孔門の戸ばそをたゝき、ふ  
すゐのどこのねぶりをさまし、匿にかくせる、たまゝもひかりみがきいで、世におこなへるこ  
と、又ろなうこそあらめ、此人のどをつおや、京極の黄門○藤原家は、まきしまの歌におきてはいづ  
れの人かなみせん、ねざしことなるすちに、あやしきことのほもらさじどかくろへたまふれ  
ど、をのづからきりよくろにものすれば、世人めでまどふ、たがひにをのれをしれるにやあらん、  
まのびあまるおり／＼は、ことにいで、ものたまへりしを、かつわらひて、なしつぼの五の中の、  
またがふもどすけ等は、かうやはあながちにはちあへるど、あらそひにくみしはさるものにて、  
三十あまりのよしみをばいかゞはする、紙幘のあはれみをかうぶりしより、もはら春の花のえ  
んなるあした、尾上の雲にたなびかれて、苦のむしろになみぬ、秋の月のおかしきゆふべ、まねけ  
る尾花が袖ふりはへて、ふもとの千種にたはれあひ、人まつむしの聲きくからに、われかど行て  
どぶらひけむよ、今はたたれにか、友なはんとすらん、どもす日ぐらしさしむかひ、まめごとにま  
れ、あだごとにまれ、ものいひたるに、かいなからず、いらへはづかし、心のちりもかきはらひ、黄  
生を見ざればども、かゝる人にやありし、世つぎの翁とやらんも、太いぬ丸にあひて、ふくれしは  
らほそらかに、よみちもやすくどはよろこびける、げにあらましかば、の人なきは、くちおしきわ  
ざなめる、おりにふれ時につけつゝ、かきかはしけん玉づきは、かすつもりてつかぬばかり見出  
たるに、ふそ人にてだになき跡とおもふは、いかゞあはれならぬ、ましてかきくらさるゝやみの  
うつゝ、はいふべくやある、硯をあらひし池のちからおぼえて、きよげなるもじづかひ、すみつき  
けしきばみ、えならぬにはひくは、りたるはいみじく、千とせのかたみにもこれこそは、どの  
ごとになみだもよほすつまとなりぬ、門生の三とせの藤衣はづるゝ、いどは泪の玉のをともな

ここまで、かきくづし思ひいづめれば、せんかたなし、いやしきちまたに、身ははぶれ給へりしか  
ど、あかきうしの子に、でまだらならず、又角ありけり、箕裘のわざをつぎ、家につたはるこそのは  
のあさき色見えまうく、かつははちらひ、おもておこすばかり、思ひ入江のみごもりに、そのも  
くづ花さきいで、心のおくになるものなし、六十に今ひさつかすたらぬよはひにて、うせたまへる  
きはまで、その道にたゆみなく、おはせしよそひさぞありけん、世の中たへぬうれはしさを、な  
かなかものだにおもほしたらで、ひちをものすばかりのたのしみをあらためず、つねにのた  
まへることありき、石のはざまにおひたるかえはみさをもてつけてさ、やかなるぞおかしき  
や、ねこじて外にうへなんはあさまし、向氏が何の文のその二の卦の所にいたりて、ごみのまづ  
しきにまかすぞ、まじりけん心にはや、まさりけんかし、三のすべらぎ五のみかごのすなをな  
みここのりをまもり、つゝしめるのみにあらず、百の家の文、千々の零々、ふかくすし、ばらにあ  
ぢはひてやむことなし、心のにしきをりえて、はたばりひろく、おさよりもあざやかに、口のぬひ  
ものはりよりもこまやかならし、ふでおちては雨風たゞよひ、こゝめもつかやによばふべし、霜  
をかぬ南の海にあそびて、赤人がまほみちくれば、さいひしうらなみに立、おもかげのむかしを  
こひ、玉津島入江の水にうつれる月のかほよきをみて、蛛のふるまひかねてまゐるく、そをりひ  
めのなごりとまれるこゝちすべし、こゝに聖廟菅氏跡たれます、みやばしらふとしきたて、あけ  
の玉がきまばゆきまで、國のつかさそれがし、むらいならず、これが禪の文つくらまほしくこふ  
こととしありて、相如が長門よりも、おもしろいなぶることをえすむまやのおさにくしとらすな  
ど、まらぬひのつくしにさすらへ、都府樓のうれへ、かはらの色にのこるくまなくかきあらはし、  
そのむつかりをあやしみ、そのうらみのふかきをさがむ、これらぞひとりあゆむといはむもに  
げなからず、ざえひろくかしこきはかせども、代々にたえず、水上をたづねながれをくみ、家を



九百やはあらぬとなげきあまり、立ぬはぬきぬきし人すらも、つゐにかせの上のちりとなり、むなしくいははのゆかをさゝめ、なに山ひめのぬのさらす、伊勢の御がふることも、こゝらむかし  
の夢ならぬかは、こがねもてちりばめるとの、むらさきもて色どれる軒端いくへかさねて、めも  
かゝやかしく、ちりもすへず、あかねことなうかりのやどりに、すみはてんとまなしたらんこそ、  
をの、えまづめたりし人よりもをろか成べけれ、たれありてか、まばしも世をのどかにおもは  
まし、半は泉にうづもれ行、うらみのなみだ、袂にはすまもなきを、ちかく又背の山人といへる人  
なむ、もとやはらげる五のどしの長月中の二日ばかり、をはりどり給ひ、はかなきかすにいり給  
めるぞ、いひてもあまりあるあたらはかせぞかし、ひつぎは定家の卿のふるきあど、時雨の亭と  
かやいへる所におさめはふむりつ、さきくもあまたたびなやみたまふることのありし中に、  
かぎりとおぼえ給へるひとたび、をのれに給はせんとて三ながめたまへる、

まのばれんわれならなくにまづまのぶどもにみし世の春秋のやま

からうじておこたり給し後、たいめん給はるつゐでがてら、あさくもいひけち給へるうれたさ、  
ともに見し世の春秋をば、まのばぬ人ありなんやなどあされ、

ものごとにされるはうときゆくゑとて君にうらみんことはやある

かへすくもおぼしおとすかな、ねたくかこたまほしといひたはれて、このうちはじめたる五  
文字こそ興ありておぼゆめれ、かうやはいひいづべき、みな人のなごぞむげによまゝし、俊頼の  
あそがいひけん、これぞむくのはみがきのはなあぶらならめといひまろふも、かつはおこがま  
しく、

あけぬるかくる、夜ごとのことはりを夕つけざりもわれにつぐなる

まことにさるべくいひはやし、人きくまじければなどよしなしごとうちかたらひし、はやくの

朝臣廣足、治部少輔從五位下大宅朝臣金弓等、監護喪事、又遣三品刑部親王、正三位石上朝臣麻呂、就第弔賻之、正五位下路真人大人、爲公卿之誄、從七位下下毛野朝臣石代、爲百官之誄、大臣宣化天皇之玄孫、多治比王之子也、

〔續日本紀七元正〕養老元年三月癸卯、左大臣正二位石上朝臣麻呂薨、帝深悼惜焉、爲之罷朝、詔遣式部

卿正三位長屋王、左大辨從四位上多治比真人三宅麻呂、就第弔賻之、贈從一位右少辨從五位上上毛野朝臣廣人、爲太政官之誄、式部少輔正五位下穗積朝臣老爲五位已上之誄、兵部大丞正六位上當麻真人東人爲六位已下之誄、百姓追慕、無不痛惜焉、大臣泊瀬朝倉朝廷〇續大連物部目之後難波朝〇孝衛部大華上宇麻乃〇乃之子也、

哀詞

〔倭富文集五和歌〕悼某人慶長十六年八月八日

なにがしの主さる事のゆへありけらしもの、ふのたけくいさめるこゝろざし、いちはやきあまりにや、秋の半、まだをきあへぬ霜のつるぎのさや、つかのまにみづからきえしはかなさをおもへば、なをあとさへのこる庭た、きのほらからあまたあるが中にかべにむかふるのり、ごもしびをか、げまし、いはほにたゝめるゑるしのころもをつたへつぐべき人も、さぞなえたふまじく、なんかなしみあへる、どなりのかりもかきもへだてなきあはひ、いとせめてうたはぬ歌のまのび音にやとて、

つらねこしおなじえにしをみづ鳥のひとりやくがにさぞまごふらむ

いさむなはなをいやたかき大ひえやはたちあまりの五とせの秋

いろにそむ心のはなをいま見ればむなしき法のたねよりやさく

〔舉白集九〕妙壽院〇藤原をいためることば

玉のをのながきためしにいひつたへけん、八百とせのよはひたもてりし翁すらも、つゝに妻の

〔日本書紀二十九〕

朱鳥元年九月丙午天皇病遂不差崩于正宮 辛酉殯于南庭 甲子肇進奠卽諒

之第一大海宿禰菰蒲諒壬生事次淨大肆伊勢王諒諸王事次直大參縣犬養宿禰大伴總諒宮內事

次淨廣肆河內王諒左右大舍人事次直大參當摩真人國見諒左右兵衛事次直大肆采女朝臣鏡羅

諒內命婦事次直廣肆紀朝臣真人諒膳職事 乙丑直大參布勢朝臣御主人諒太政官事次直廣參

石上朝臣麻呂諒法官事次直大肆大三輪朝臣高市麻呂諒理官事次直廣參大伴宿禰安麻呂諒大

藏事次直大肆彼原朝臣大島諒兵政官事 丙寅直廣肆阿倍久努朝臣麻呂諒刑官事次直廣肆紀

朝臣弓張諒民官之事次直廣肆穗積朝臣虫麻呂諒諸國司事次大隅阿多牟人及倭河內馬飼部造

各諒之 丁卯百濟王良虞代百濟王善光而諒之次國々造等隨參赴各諒之仍奏種々歌舞

〔日本書紀三十〕

持統元年正月丙寅朔皇太子率公卿百寮人等適殯宮而慟哭焉納言布勢朝臣御主人諒

之禮也諒畢衆庶發哀 三月甲申以華緩進于殯宮此曰御蔭是日丹比真人麻呂諒之禮也 五月

乙酉皇太子率公卿百寮人等適殯宮而慟哭焉於是隼人大隅阿多魁師各領已衆互進諒焉 二年

三月己卯以華緩進于殯宮藤原朝臣大島諒焉 八月丙申嘗于殯宮而慟哭焉於是大伴宿禰安麻

呂諒焉 十一月戊午皇太子率公卿百寮人等與諸蕃賓客適殯宮而慟哭焉於是率奠奏楯節舞諸

臣各舉已先祖等所仕狀遞進諒焉 己未蝦夷百九十餘人負荷調賦而諒焉 乙丑布勢朝臣御主

人大伴宿禰御行遞進諒直廣肆當麻真人智德率諒皇祖等之鷹極次第禮也古云日嗣也畢葬于大

內陵○天

〔續日本後紀十二〕承和九年七月丁未太上天皇○

崩于嵯峨院春秋五十七遺詔曰○中葬限不過

三日無信卜筮無拘俗事○

是魂歸日等之事○

〔日本書紀二十五〕

大化二年三月甲申詔曰○中爲亡人斷髮刺股而諒如此舊俗一皆悉斷

〔續日本紀二〕

大寶元年七月壬辰是日左大臣正二位多治比真人島裏詔遣右少辨從五位下波多



人雜色人等充之、伏聽天裁、謹以申聞者、蓋聞既訖、○中自今以後、永以爲恒例

延曆十六年四月廿三日

〔日本書紀<sup>二十</sup>〕十四年八月己亥、天皇病瀕留、崩于大殿、是時起殯宮於廣瀨、馬子宿禰大臣、佩刀而誅物部弓削守屋大連、听然而咲曰、如中、獵箭之雀鳥焉、次弓削守屋大連、手脚搖震而誅、○也馬子宿禰大臣咲曰、可懸鈴矣、由是二臣微生怨恨、

〔日本書紀<sup>二十一</sup>〕元年五月、穴穗部皇子、欲軒炊屋姬皇后、而自強入於殯宮、寵臣三輪君逆、乃喚兵衛重理宮門拒而勿入、穴穗部皇子問曰、何人在此、兵衛答曰、三輪君逆在焉、七呼開門、遂不聽入、於是穴穗部皇子、謂大臣與大連曰、逆類無禮矣、於殯庭誅曰、不荒朝廷、淨如鏡面、臣治平奉仕、即是無禮、方今天皇子弟多在、兩大臣侍、雖得恣情、專言奉仕、

〔日本書紀<sup>二十二</sup>〕二十年二月庚午、改葬皇大夫人堅鹽媛於檜隈大陵、是日誄於輕街、第一阿倍內臣鳥誄、天皇之命、則奠靈明器、明衣之類、萬五千種也、第二諸皇子等、以次第各誄之、第三中臣宮地連鳥摩侶、誄大臣之辭、第四大臣引率八腹臣等、便以境部臣摩理勢、令誄氏姓之本矣、時人云、摩理勢鳥摩侶二人能誄、唯鳥臣不能誄也、

〔日本書紀<sup>二十三</sup>〕三十六年三月癸丑、天皇崩之、○時年七即殯於南庭、九月戊子、始起天皇喪禮、是時群臣各誄於殯宮、

〔日本書紀<sup>二十四</sup>〕十三年十月丁酉、天皇崩于百濟宮、丙午、殯於宮北、是謂百濟大殯、是時東宮開別皇子、○天年十六而誄之、

〔日本書紀<sup>二十五</sup>〕元年十二月甲午、初發、息長足日廣額天皇、○舒喪、是日小德巨勢臣德太代大派皇子而誄、次小德栗田臣細目代輕皇子而誄、次小德大伴連馬飼代大臣而誄、乙未、息長山田公奉誄、日嗣、

跡而上證

右開泉壤入我劇泥沙委天西與地下隨聞爲哭始哭罷想平生一言遺在耳曰吾被陰德死生將報爾惟魂而有靈莫忘舊知己唯要持本性終無所傾倚君暇我凶惡擊我如神鬼君察我無辜爲我請冥理冥理遂無決自茲長已矣言之淚千行生路今如此聞之腸九轉幽途復何似拙詞四百言以代使君誄

〔續日本紀三〕大寶三年十二月癸酉從四位上當麻真人智德率諸王諸臣率誄太上天皇○持諡曰

大倭根子天之廣野日女尊

〔續日本紀三〕慶雲四年六月辛巳天皇崩十一月丙午從四位上當麻真人智德率誄人率誄諡曰

倭根子豐祖父天皇

〔續日本紀三十六〕天應元年十二月丁未太上天皇○光崩癸丑當太上天皇初七於七大寺誦經○中

略明年正月己未正三位藤原朝臣小黒麻呂率誄人率誄上尊諡曰天宗高紹天皇

〔續日本紀十九〕天平勝寶六年七月壬子太皇太后○文武后崩于中宮八月丁卯正四位下安宿王

率誄人率誄諡曰千尋萬藤高知天宮姬之尊是日火葬於佐保山陵

〔續日本紀四十〕延暦八年十二月乙未皇太后崩丙申明年正月十四日辛亥中納言正三位藤原朝

臣小黒麻呂率誄人率誄上諡曰天高知日子姬尊壬子葬於大枝山陵皇太后姓和氏諱新笠贈

正一位乙繼之女也

〔續日本紀四十〕延暦九年閏三月丙子是日皇后崩甲午參議左大辨正四位上紀朝臣古佐美率誄

人率誄諡曰天之高藤廣宗照姬之尊是日葬於長岡山陵皇后姓藤氏諱乙牟漏贈內大臣從一位良

繼之女也

〔類聚三代格七〕太政官符

應停土師宿禰等預凶儀事

右太政官今月十四日論奏○中其殯宮御膳誄人長及年終奉幣諸陵使者普擇所司及左右大舍

誄雜載

嗟々春夢一覺超過閻浮嗚乎閻浮一起泥丸非負岸無彼此界無凡聖安穩之土隨厥自性爰陳哀詞以伸恭敬

〔栗山文集註四〕阿波信惠公誄

維安永九年歲次庚子八月二十有七日從四位下侍從兼木工頭源公○蜂須賀宗鎮薨九月十有二日將奉

靈柩以就幽宅禮也乃命史臣博采群議奉以美名其辭曰維公徵柔慈和小心謙讓蘭桂其操金玉其相受封南服王室之藩奉上撫下侯度無愆從諫如流廷無忌言親民如子邦歸于仁居高懼傾以富爲憂中年辭位菟裘優遊豈弟君子福祿所將庶幾仁壽享此百祥如何不淑遠和在床臨配莫瘳封內狂奔社稷山川寧莫我聞屹達不及方藥空陳頽勢不支奄棄群臣嗚呼哀哉大夫庶僚攀號靡及群黎百姓晨哭夜泣嗚呼哀哉日月不居大事無退靈駕將遠荼毒百倍赫々阿淡爲師爲君不解于位十有六年偉哉大行式受大名以副臣民思慕之誠謀諸史官又詢耆德僉曰維公小心翼々不亦偉哉四方爲則又曰柔質受諫愛民繼之曰惠何有間然惟是非私公議輿論小子敢曰褒揚衆美聊是寃宥奉以遵禮嗚呼哀哉

〔菅家後尊〕哭與州藤使君（謚實）九月廿二日延喜元年四月十四日

家書告君裏約略寄行李病源不可醫被人厭魅死曾經共侍中了知心表裏雖有過直失矯曲孰相比東涯第一州分憂爲刺史盈口含水雪繞身帶弦矢僚屬銅臭多鑠人煎骨髓士風施布惡慙勲貞細美兼金又重裘鷹馬相共市市得於何處多是出邊鄙邊鄙最橫俗爲性皆狠子價直甚蚩氓弊衣朱與紫分寸背平商野心勃然起自古夷民變交關成不軌邂逅當無事家麻如意指總領走京都豫前顏色喜便是買官者秩不知年幾有司記曆注細畫三四紙歸來連座席公堂偷眼視欲酬他日費求利失綱紀官長有剛腸不能不切齒定應明札察屈彼無廉耻盜人憎主人致死識所以精靈入冥冥不由見容止骸骨作灰塵無處傳音旨葬來十五旬程去三千里廻環多日月重複幾山水憶昔相別離寧知獨傷毀



可調維公綴緒良稱周輪幼挺芝蘭長負楨幹風度溫良天資偉峭才思日滋品進月旦司叶妙選志存  
匪贊退食委蛇敢事惕玩比勵茂先實維宵旰行館修業恒慮凋換上奉烈祖思合燕衍僥焉孜孜竭思  
講貫於皇神統萬世不渝聖君代興文教誕敷主明臣亮交襄訂謨事追延曆定鼎此都八紘同軌益衍  
丕圖朝儀邦禮周愛咨諏有式有格百代遵模暨古覽今就不嗟吁於皇神統斯道未汙人存則舉明哲  
所俱蓋公之志茲焉覃研涉獵典實稽在古先架插湘帙案展華賡曉窓夕燭事徒遷延日檢月索必詳  
所訟纂言紀故聚分成篇補漏拾佚思雖以全管衍載盛事豫將然君子秉心維其塞淵匪躬之故就知  
乾々孟子有言澤及五世瞻公之先實近皇系綿々紹々曾無陵替種非庸羹生合靈契秦晉爲匹琳琅  
有綴公娶近衛公女有五千垂紳廊廟鴻儀繁棟若人在班貪飲風制天枝之雋對揚嘉惠夕拜夙承春儲旋隸  
九遷寵榮固不漱歲云何一旦惘惘在身昔進今退歎阻要津翔翼戢翼騰鱗洵鱗玉珮罷響珠履絕塵  
投版散帶比蹤隱淪才義閒暢不如韜真澄慮玄理法祛妄因優遊歲月忘緣屈伸期願可永乃限六旬  
云何不弔哀籲若異在莠時候載陰載陽飄忽人世倏存倏亡音容在目空此在床靈輜既祖丹旌彷徨  
哀風夕起蕭々白楊楚輓差息形骸景藏親戚心痛腸離淚滂遺草在几餘軸著箱思邇跡遠節換胡忙  
死生亦大昔人所傷嗚呼曷歸惟我覺王覺王之道不生不滅斷我昏迷獨我遺結四智本明三身匪別  
圓照標名名與實埒其圓伊何真成罔缺廓周三際彌綸十刹其照伊何靡暗不徹在俗在真如日如月  
世實虛假害悲永訣泥洹非遙般若爲筏于嗟靈光億劫不閱

〔北禪文章〕奉誄隨宜樂院一品准三后入道親王

嗚乎天上碧桃日邊紅杏種非常種境豈凡境維昨之春爛其光景維今之春寥乎沈影嗚乎龍章鳳質  
早入空門福足慧足位尊德尊主法教利窮理宗源何事一旦異亡與存嗚乎十善所薰德本夙植旺化  
關東報恩闕北三歸三聚其儀不貳法旌俄凋依賴孰得嗚乎安樂所立大小兼全大中之小事有薰偏  
寔仰教令正行邪蠲庶幾永世秩々毋後嗚乎昔辱知遇朱門屢遊不陵不援欲挹風猷境變人去誰禁

藤姓分派利仁雲仍以州爲氏乃是加藤景道親虞奧夷膺德光員景廉會源師與爲之爪牙爲之股肱  
枝々葉々綿々繩々參州之產爰得嘉明萬人之傑一世之英戰功超群武名大鳴報勞厚賞家門經營  
豫章之壘會津之城藩衛至堅士林欣榮更嗣其封境內又安四品之級拾遺之官彤弓盧矢白馬銀鞍  
森々其戟裝々其冠月照關塞花移欄干江府高第門外波瀾或侍公宴或招人豪有恩有禮以遊以放  
山肴野蔌海錯陸毛天淵之間魚躍鳥翔孫吳奇正三略六韜文選寫點聊窺風騷進而有時仕而壯強  
漸老辭職退而匿光石州地僻山靜日長十有九年砢葛暑霜遊今不歸白雲之鄉孝子號泣不可永忘  
嗚呼痛哉辛丑二月下旬

【小雲樓稿<sup>十</sup>文】廣幡源公誌并序

維明和八年辛卯九月二十七日正二位前權大納言源公○長薨年六十一越十月十六日占佳城于  
萬年之山克葬焉證曰圓照院嗚呼哀哉謹按家譜公之王父亞相公廼永祿皇帝○正之曾孫肇基廣  
幡實爲宗室之房內府公○忠嗣之而公則其嗣也族望既崇世居清要公少勵志密勿皇家夙夜匪懈  
傍耽思典新尋檢古昔進仕母追影歛殆忘其於朝儀罔不該通所撰著有新撰典故仗議類聚若干卷  
是其爲志豈泛々所能比哉既以世蔭卽歲叙爵累遷權中納言兼春宮權大夫尋至權大納言叙正二  
位順其門地固不止此而不幸罹病乃優畱致仕居家自願齒遇甲子溘焉長逝嗚呼哀哉以楨幹之器  
疾沮其位以頤養之靜生不永齡悲夫曳屨之聲久歇金殿之所執紼之喝俄臨黃泉之埏馳景忽焉西  
頽化臺值其下閔嗣公右近衛大將閣下○前鬱罔極之思增何特之歎喪哀祭敬靡所不盡霜露早降  
怵惕之痛若至風樹不靜眷戀之思曷已修妙善於法場訊誅辭於貧道嗚呼哀哉棲禪雖遠誼比較然  
之戚深仁摘藻非工嘆等陳思之殲吉士何以弔之嗟世浮幻何以薦之表性異當其詞曰  
猶與楓宸貴冑槐位高標在昔皇胤騰懋昂霄世有令德順仕聖朝巍巍執宗室儀表百寮奕葉之光妙齡  
遷喬地分清切雲衢吐歎日邊紅杏天上紅桃比類振古豈曰輕寵朝推華轍家蔚豐條閱閱既崇鼎鼐

萬治辛丑正月二十一日，前拾遺中大夫加藤見明成，蓋棺於石州幽居。二月四日，訃聞於江府。孝子子默哭慟，哀慕居喪有禮。友人林恕作誄而述其祖先功業曰：原夫加藤氏出自鎮守府將軍利仁利仁，雖爲宰官之裔，早有將帥之譽。討東關逆賊之亂，稱北陸士林之魁。其孫吉信任加州別駕，以其所治之州弁於本姓之上，而爲加藤氏。其玄孫景道，屬鎮將源賴義，討奧賊厄于園中，遂殲彼姦雄。其孫光員，景康伯仲並稱，及鎌倉右幕下朝源始揚義旗於豆州。景康手自斯廷，討平兼隆于山木館，可謂源家再興之首功也。其後與光員共嘗石橋之難，渡西洋之波，功勞彌彰。封賞有加，子孫漸漫分處諸州。見之顯考曰：左典厩嘉明產于參州，仕豐臣秀吉，在行伍之間。江州志津嶺之役，爲先鋒之最，抽衆執槍，突出得首。級由是敵軍崩解，進入北越，剿柴田之壘。秀吉并吞閩國之勢，職此之由。其餘南嚮西略，東征無不從焉。屠城斬獲之數，不可勝計。遠有事於朝鮮，督蒙衝渡海，到處接戰，屢克嘗與明國援兵相當，以寡勝衆，奪彼船艦，其兵威振殊域。名高本邦，秀吉頌稱其勇，增其封至是。感賞不啻賜豫州之內十萬頃，以爲採地。既而秀吉薨，嘉明奉屬東照大神君，東討上杉景勝，開石田氏作亂于洛邊，率旨與諸將共班師。西馳陣於尾州，而後岐阜之戰，鄉戶之爭，關原之大捷，暨命決死，以立大勳。益封十萬石，總貳拾萬斛，及台德大相秀忠之治世，而恩眷愈渥，禮秩益進，大猷贈相國。德川爲幕府之嗣君，初有若鑑嘉儀時，擇諸將有勇名者，特舉嘉明奉勳其事，可謂武林之廣譽也。其後嗣察嘉明之忠赤，而改豫州采地，移領奥州會津，以爲東塞之鎮，加倍其祿，賜四十萬石。其餘有所統隸，嗚呼濟祖先之美，高一家之門者，盛哉！偉哉！更者嘉明之令嗣也，夙有聲聞，不辱家風。難波之役，代父董軍，父沒，襲封會津，及大猷贈相國之重，熙官階進昇，近侍顧問，既而春秋漸高，與居不快，辭方鎮之職，閑居石州之某邑。子默留侍江府，守其分勳。其事有餘力，則寓心於儒風，道與於文雅，屢問石州之安否，而歎定省之有闕。舉世知其篤實，余先人羅山子，與典厩及更至子默，執奕世之交，余亦曾於更，有眷遇之厚，况與子默，金蘭之志，既有年，則聞更之訃，何不助其餘哀哉！嗚呼！更在石州十有九年，至今茲其齡七十歲，其出處如此，夷險一節，命矣哉！其誄曰：



我亦兄臣奉宜恩詔仍賜金香爐

〔貞慧傳〕貞慧性聰明好學大臣

○藤原鎌足

異之以爲雖有堅鐵而非鍛冶何得干將之利雖有勁箭而非羽

括詎成會稽之美仍割膝下之恩遙求席上之珍故以白鳳五年歲次甲寅隨聘唐使到于長安

○中以

白鳳十六年歲次乙丑秋九月經自百濟來京師也其在百濟之日誦詩一韻其辭曰帝鄉千里隔邊城

四望秋此句警絕當時才人不得賴末百濟士人竊妬其能毒之則以其年十二月廿三日終於大原之

第春秋廿三道俗揮涕朝野傷心高麗僧道賢作誄曰夫豫計運推著自前經明鑑古今有國恒興絲綸

紫闕者以薦賢爲本緝熙宗室者以舉忠爲先故以周公於禽躬行三簣仲尼於鯉間用二學斯並遠理

國家而非私者明矣由此觀之凡英雄處世立名榮位獻可替否知無不爲或有寬猛相濟文質互變是

則聖人之所務也唯君子哉若人景德行之高山仰之有一於此理固善乃使法師遣唐學問有敎相近

莫不研習七略在心五車韜胸思甄否泰深精去就鬼谷再淚恐分人士韋編一絕陶鑄造化足以席上

智蘊策才堪例而忽承天勅荷節命駕又詔廓武宗劉德高等旦夕撫養奉送倭朝仍還海至於舊京盡

上錫命幸蒙就舍居未幾何痼疾該微咨嗟奈何維白鳳十六年歲次乙丑十二月廿三日春秋若干卒

於大原殿下嗚呼哀哉乃作誄曰

於穆丕基經綸光宅懿矣依仁翼修軌格軒冕籍甚謨宜廟略惟岳惟海如城如鄴諫魚諫鼎乃儔乃伯

積善餘慶貼厥哲人間道西唐練業泗濱席間函丈覃思秀神荆山抱玉卞氏申規漢水厥珠龍子報隨

賓于王庭上國揚輝爰受朝命建節來儀臂齒方新橋父猶煥近署多士紫微壯觀四門廓啓三端雅亮

王事靡盬將酬國寶世路芭蕉人間闔城鼠藤易絕蛇簪難停蘭芝春萎松竹夏零風遭激射鸞掛網刑

嗚呼哀哉顏回不幸謂天喪子延陵葬子稱其禮與書筆猶存身精何處覩物思人堂下莫叙嗚呼哀哉

車珠去魏城碎辭趙才之可惜日還當喜嗚呼哀哉

〔爲峯文集八〕

前拾遺加藤叟誄并序

汝の跡を繼しめて、夜の守り日のまもり守り幸へ、堅石に常石に榮えしめ給へと祈りつゝ、跡に残れる妻子らを始め、親族ども諸共に種々の物を備へ奉りて、廣く厚く祭り仕へ奉ることの由を、耳彌高に聞取りて、守り給へ幸へたまへ、

と祖父命の記し給へる詞をそのまゝに、信太郎忠英、かしこみ愼みも御前に讀上げ奉ると白す、

〔上宮聖德法王帝説〕伊我留我乃、止美能井乃美豆、伊加奈久爾、多義底麻之母乃、止美乃井能美豆、是歌者、膳夫人、以病而將臨、沒時乞水然、聖王不許、夫人卒也、即聖王誄而詠是歌、即其證也、

漢文録

〔藤原家傳〕即位二年

○天智

冬十月、稍纏沈痾、遂至大漸

○中略

十六日辛酉、薨于淡海之第

○中略

甲子、遣

宗我舍人臣詔曰、內大臣某朝臣、不期之間、忽然薨謝、如何蒼天殲我良人、痛哉悲哉、棄朕遠遊、惟矣惜矣、乖朕永離、何爲送別之言、何爲不送之語、非詒實是、日夜相携、作伴任使、朕心安定、云爲無疑、國家之事、小大俱決、八方寧靜、萬民無愁、將茲辭爲贈語、語鄙陋而不足、嗚呼嗚呼、奈何奈何、公獻說廟堂、於民

自利、論治帷幄、與朕必合、斯誠千載之一遇也、文王任尙文、漢祖得張良、豈如朕二人哉、是以晨昏握手、愛而不飽、出入同車、遊而有禮、巨川未濟、舟楫已沈、大廈始基、棟梁斯折、與誰御國、與誰治民、每至此念、酸切彌深、但聞無上大聖、猶不得避、故微慰痛悼、小得安穩、若死者有靈、信得奉見先帝

○齊明

及皇后

○德后問人皇女者、奏曰、我先帝陛下平生之日、遊覽淡海及平浦宮處、猶如昔日焉、朕每見此物、未嘗不極目傷心也、一步不忘、片言不遺、仰望聖德、伏深係戀、加以出家歸佛、必有法具、故賜純金香爐、持此香爐、如汝

誓願、從觀音菩薩之後、到兜率陀天之上、日々夜々、聽彌勒之妙說、朝々暮々、轉真如之法輪、既而公卿大夫百官人等、皆起喪庭、舉哀

○中略

粵以庚午閏九月六日、葬於山階精舍、勅王公卿士悉會葬所、使大

錦下紀大人臣告送終之辭、致贈賻之禮、

〔日本書紀二十

略

八年十月辛酉、藤原內大臣足

○錄

薨

○中略

甲子、天皇幸藤原內大臣家、命大錦上蘇

去年の十二月の中頃より、病重りしかば、妻子は更にも云はず、己れも仕奉る大神の御前に祈り、白し、薬師によさし、何くれと心の及ぶかぎりものしつれば、漸々に重りもて行て、正月二日の日、病の床に在つ、信太郎を呼て、硯と紙筆を持て來よとあるに、やがて持て枕邊に至れば、我も皆と共に新年を祝はむとて、

今朝よりは煩はしきも忘れけり千世の初日のめぐみいづれば

みそら行く天津はつ日の御恵にけさいさましき春をむかへつと詠み出で給はしめ、あくる三日の日の夜戌時のころに常にかはらぬ聲にて、信々と二聲呼けるに、信太郎、直にその枕邊によれば、何事にかあらん、唱言をいと靜かにや、暫らく唱へていさ、かも苦しき氣ざしなく、眠ることく、四十になれる今年の正月の三日の日を、生涯として、過ぬる事の痛ましとも惜しども悲しども、更に言に述べくも非ず、さる最後の際にも、神の道の尊き事を思ひ奉りつゝ、けて祝言の歌よみて、信太郎に書しめたるぞ、いはゆる辭世の言葉となりぬるは、最々哀なる事なりかしと、妻なる伊久子信太郎、その外親類ども、枕邊に泣腹ばひ、泣いさち、魂よばひすれど、更にかひこそ無りけれ、斯て有べきにあらねば、野邊送りのごとくも取まかなひ、藤原正包に何くれと物せしめて、大内臺に葬りぬ、この正包は、年ごろ昵近づきて有けるに、跡の事どもをも頼み置つればなり、靈名をやがて忠榮神靈と稱へて、先祖の靈等、また生の母の靈と共に、家の守護神と齋ひて、己れ忠雄、涙ながらに靈前に向ひて、

靈屋に鎮り坐して子孫らが行末永く守りましてむ

礎の堅き勤の魂より幸へまもれ靈の眞はしら、遣ながらにかくまかなひ、かく詠出し、父の心を思ひはかりて、我がうづの眞名子汝忠榮命、此の靈屋に平けく安らけく鎮りて、常に突立し靈の眞柱の礎かたき大倭魂をふり起して、汝の眞名子信太郎忠英が身を健に成長らしめ、命長く

見えしをつひに夏のなかばには、はかなくもみまかられぬ、あはれかなしきかもや、萩の屋のぬし、あはれいたはしきかもや、植村のぬし、ぬし、今おい人をのこし、うち君をのこし、むすめ子たち四人をのこして身まかられぬ、先だつぬしの心、おくる、人々のかなしみ、とりあつめて思ひやるにたへがたし、ぬし、はらからおはせず、おのれ心の内に、はらからのかなしみをつくさんぞす、心のかなしみをつくすは、花をたむくるにあらず、香をたくにあらず、心のかなしみをつくすは、ただこの葉にあり、そのことは、たたくみをもとむるにあらず、かざりをむねとするにあらず、たゞまごころをのべつくすにあるべし、かれ魂ごこの前にうつぶしにして、まのびごまをすことまかす、

〔氣吹酒屋文集〕山口忠雄の願に依て加筆し給へるまぬびごと

ち、の實の父、命、從五位下因幡守大中臣忠榮朝臣の御前に、信太郎忠英惶み／＼も祖父命從五位下讃岐守忠雄朝臣の記し給へる誄文を讀奉る事を、平けく安けく聞し食せと白す、

我がうづの眞名子汝忠榮命、現世におはせる時なも、遠つ祖の代々に仕奉り來しまに／＼、此の皇神の定式の御祭は、更にも言はず、臨時の祭もよく仕奉り、天の下安らけく平かに、五穀豊に氏子取子親族朋友に至るまで、禍事なく榮えむ事を祈り申すこと、日毎に怠なく、往し年朝參して、從五位下因幡守の御任し蒙ふり、大朝廷の御典の學問は、本居宣長大人の學風を、まじひ平田篤胤大人の教子となりて、晝夜と言はず、はげみ學びたるに、遠き近き邊りの人々訪ひ來て、その交はる友ごとに、みな古しへの道の義を論ひ明す人々なるが、また歌をも好みて、始は冷泉殿の御流を學び、後には古風の歌をさへに詠おぼえて、月ごとに日を定めて、友達を集へて詠かはし、常に空言なく、實心に親族を睦び、ちかき年ごろより、病に勞はりつゝ、も語らふ事などありて、使を越せば、勞はしげもなく、速に使と共に行くなど、いさ、かも厭ふ色なく、實やかなりきか、そに



〔泊涓文藻〕<sup>三</sup> 哭植村正路諫

あはれかなしきかもや萩の屋のぬし、あはれいたましきかもや、植村のぬし、漢臣、いまをさむことあり、みたま天がけりてもきこしめせ、ぬしは、おのが心しりの友也、おのがうた學びのともなり、ぬしは、おのが月花のともなり、ぬしは、おのが酒み、つきのともなり、ぬしはおのれとあひしりそめて、ことしまで、はたせにすぎたり、おのが友とする人、凡ていくも、たりとあるが中に、年久しくあるが中に、へだてなくあるが中に、學びにらうあり、あるが中に、歌にたけたり、あるが中に、まめ人也、あるが中に、みやび人也、ぬし歌よむことをたしむ、おのれまたたしむ、おのれいにしへまなびに心を深む、ぬしまた心を深む、ぬし酒をのむ、おのれまたのむ、おのれ月花にあくがゐる、くせあり、ぬし又このくせあり、ぬし手かくわ、ざをこのむ、おのれよくせず、おのれは天の下のいたづら人にて、海山の歌枕をたのしみとす、ぬしは、おほやけ人の數にいりたれば、身を心にまかせず、たゞこのふたつのみなんひとしからざりける、大かた心あへるごちも、すみかほごへだてたるは、思ふがまゝに、むつびかはすことかたし、ぬしとおのれと、すみか、たゞはひわたるほど也、大かた心あへるごちも、よはひいたくたがへれば、へだつとなしに心おかるゝものなり、ぬしは、よとせのこのかみなり、おのれは、よとせのおとゝなり、かゝれば、學びの道にもはらから、あそびたはぶれたるかたにもはらからとしたり、朝にとひ夕にとはれつゝ、たぐひなきむつびかたきなりき、此の近きとしごろとなりては、ぬしもおのれも、うひまなびどもの道しるべするわざにいとまなくて、あしたゆふべに、とひとほるゝこと、おのづからまどほになりもてゆきにたれど、猶ことゝある時は、夜中あかつきといはず、古書の上に、うたがはしきことあればとひおこされ、ふるうたごもの中に、いぶかしきふしをば、きこえかはしつゝ、なん有りける、さるにぬし、去年の冬より、そこはかどなくいたづきそめられて、ことしの春、いさゝかおこたりさまに

繼氏古言學乃道乎極米賜比其古意乎本原天止之又廣久中昔乃書籍等乎涉獵之賜留麻介爾適波翁乃諭爾戾里翁能謬乎紕之賜留倍事雖有是翁乃意乎繼氏學乃道爾公奈留故也大人又詠歌作文賜布事毛甚深久心中爾思比廻氏之猥爾云散須事乎好美不賜然有世乃凡人乃大人乎不識者等波懶支心辨爾怠情賜止乃美思倍大人乎識人等波彌其心深左尊比仰耶里大人又漢學乃方爾至深久詩爾微久妙爾坐之齡弱冠久坐之頃世爾所知多博士止交波賜禮今毛猶其道乃人等稀波爾大人乎博士乃濟爾思倍有介大人三四年以來何止無久老衰倍賜比之去去年乃初夏病危篤久惱賜留倍刻演臣乎召氏千萬乃事宣告賜置賜之言坐勢之天地能神相字豆奈比賜留倍也危篤左之漸平復由伎氏今年迄存在賜留比奴雖然心神恍惚久之奈利賜天詠歌援筆賜布事乎佐平佐不坐遂波爾此二月乃七日與又危篤久之惱增賜比手足瘳口喝斜氏告賜布言御心爾任不賜然留御病乃苦瀨爾演臣我手乎援倍氏演臣與予波可死止告賜留倍一言乃憶爾所聞氏今猶耳爾殘里嗚呼哀哉我大人嗚呼惜哉我大人大人爾物學留倍人等大率百乎以丘數之倍雖然今日乃哀悼演臣一身爾聚禮古今知須其若平乃人等毛亦各々其一身爾所思可哀悼抑古言學乃道天下爾行禮始奴留高津乃阿開梨與利波雖云實熟久古言乃言乃意悟明天世間爾廣久汎久令所知之縣居翁止古可謂介其縣居翁能跡乎繼天此江門乃大城乃邊爾之其學平傳流之波芳宜園能乎遲止○加我織錦齋能大人乃止二人爾奈坐之多然留芳宜園乃乎遲世乎去天大人一人殘里賜比之天下乃古言學夫人等誰可大人乎賴美可不開里介今大人死里坐之乎大人爾物學留倍人若干乃哀悼乃美可又天下能古言學夫人等乃哀悼也嗚呼哀哉我大人嗚呼惜哉我大人愛爾大人死里坐天七日登云爾當禮今日文化之八年止云年乃二月乃十日除九日乃日乃春日乃霞朝演臣右手爾時乃花乎取左手爾古里薰物擊天與柳乃御前爾宇須豆麻里居天三度乎呂賀美九度項根突拔天悲美悲美白須此志努昆許登平御靈天翔里依來毛氏所聞看世我爾之許里乃字志我古登自利能字志

那比道引氏此書附許々陀久麻米爾伊佐乎新有那難忘久難捨久思賜布故此功平萬世麻  
氏爾語繼乍斯怒比爾爲登與後乃名平稱爾舉氏自今彼言靈有功老翁登會佐故此美名平此世之裏  
登負持氏罷路母宇斯呂夜須久罷理通登世天明之四年登云年能加美那月乃廿日餘三日乃日乃  
夕日之降知宜長賀悲美母告流此言平耳振立氏宇麻良爾所聞食世許登多麻伊佐哀能乎遲

〔松屋文集下〕叔母のひさきの前にてまをし、詞

言久母綾仁悲佐黃泉國仁行人乃別母仁奈在計頃者黃泉神乃召賜奈之多敵乃使夜來都夏伊加佐  
麻爾所思毛世加虛蟬乃惜此世乎露霜乃置天罷坐流堀家可治君乃靈仁白須事阿利宇麻良爾所聞  
看世此君夜父母乃加久斯麻爾在止念氏於母夫氣仁末禮志萬家法平過事無久失事無久貞久淨  
支明支直支心平以天生能極美伊佐佐計母人乃爲仁惡留可業者爲奴人仁奈在計流麻賀津比登云  
神乃麻賀事天是乃年乃年己呂阿都迦比惱美賜計禮宇加良等齋忌戶坐木綿取持天天地乃神祇  
爾乞轉事其禮可比奈久靈刻伊乃知多延奴禮婆白妙乃麻衣着而棺前爾鹿自物膝折伏禮拜仕  
奉掃持御食人哭女等能葬之和邪平備天板倉山仁興立之而磐隱坐靈者黃泉路遠久往坐毛又時  
時仁天翔歸來坐氏生子等平守利惠比幸倍倍賜止白須

辭別天黃泉神仁申久豫母都志許賣平於古世天此梶君之靈平武加倍志免賜天千引乃石乃塞利  
奈久安仁加通登世文化乃二年登云年能四月乃九日乃日乃夕日之降知高尙恐美恐毛申須

〔泊酒文藻三〕奉告織錦齋大人之靈誄

嗚呼悲哉織錦齋大人村田嗚呼惜哉琴後大人大人與大人與左言侍里御靈天翔里依來  
坐毛所聞看世大人齡四十七爾坐世時濱臣十七歲爾始氏淺草乃庵平訪參真世與利今年迄二  
十年濱臣我居宅大人乃御許爾程不近之朝夕爾不訪聞止謹云濱臣我心神懦弱久之學乃道爾拙  
止之難云二十年我間爾自然大人乃學乃心法平知理大人乃學乃心法熟久縣居乃翁乃〇知真心平

松倉嵐蘭は義を骨にして、實を腸にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ、予とち  
なむこと、十とせあまり九とせにや、此三とせばかり官を辭して、岩洞に先賢の跡をまたふとい  
へども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波もたゞよふ、されども榮辱の間に居らず、日  
日風雲に坐して、今年中の秋、中の三日、由井金澤の渡の枕に月をそふとて、鎌倉に杖をひき、其か  
へるさよりこゝちなやままうして、終に息絶ぬ、おなじき七日の夜の事にや、七十年の母にさき  
だち七歳の稚子におもひ殘す、いまだをしむべき齡の五十年にだにたらず、公の爲には、腹おし  
きりても悔まじきうつはもの、はかなき秋風に吹まはれたる草の袂、いかに露けくも、口惜  
もあるべき、今はの時の心さへまられて悲しきに、老母の恨はらからのなげき、またしきかぎり  
は聞傳て、偏に親族の別にひとし、過つる睦月ばかりに、稚子が手をとりて、予が草庵に來り、かれ  
に號得さすべきよしを乞ふ、王戎五歳の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘て、嵐戎と名づく、其よ  
ろこべる色、今目のあたりをさらず、いける時むつまじからぬをだになくて、ぞ人はとまのばる  
る習ひ、まして父のごとく子のごとく、手のごとく足のごとく、年ごろいひなれむつびたる俤の、  
愁の袂にむすば、れて、枕もうきぬべきばかりなり、筆をとりて、思ひをのべむとすれば才つた  
なく、いはむとすれば胸ふたがりて、たゞおしまづきにかゝりて、夕の雲にむかふのみ、

秋風にをれてかなしき桑の杖

〔鈴屋集<sup>六</sup>文〕告田中道麻呂之靈詞

道麻呂<sup>夜</sup>、宜長、今告<sup>流</sup>、事有<sup>理</sup>、宇麻羅<sup>爾</sup>所聞看<sup>世</sup>、田中<sup>能</sup>道麻呂、美麻斯齡以謂<sup>波</sup>、吾兄<sup>登</sup>可云<sup>久</sup>、學  
乃道<sup>波</sup>、吾子<sup>母</sup>登<sup>那</sup>在<sup>郭</sup>、此年<sup>比</sup>、吾兄<sup>乃</sup>如<sup>久</sup>、吾兒<sup>乃</sup>如<sup>久</sup>、牟加斯<sup>久</sup>、波斯<sup>久</sup>、悲<sup>久</sup>、實具<sup>久</sup>、思賜<sup>氏</sup>有  
流<sup>郭</sup>物<sup>平</sup>、吾<sup>平</sup>量<sup>氏</sup>、伊豆<sup>知</sup>向<sup>佐</sup>、毛<sup>能</sup>坐<sup>流</sup>、伊加<sup>佐</sup>麻<sup>爾</sup>所思<sup>世</sup>、加<sup>惜</sup>、佐<sup>氏</sup>此<sup>世</sup>、平<sup>放</sup>坐<sup>流</sup>、道麻呂<sup>氏</sup>、生<sup>乃</sup>極  
美<sup>萬</sup>集<sup>集</sup>、爾<sup>心</sup>、碎<sup>氏</sup>、力<sup>平</sup>、畫<sup>志</sup>、人<sup>乃</sup>、得<sup>不</sup>解<sup>難</sup>、事<sup>平</sup>、此<sup>彼</sup>、登<sup>詳</sup>、爾<sup>釋</sup>得<sup>氏</sup>、吾<sup>業</sup>、平<sup>輔</sup>、人<sup>母</sup>、伊<sup>耶</sup>



之彌可起母加歲時積往麻爾佐夫之岐事乃未彌可益母加朕大臣春秋麗色波平誰俱母加見行弄賜平山川  
 淨所者孰俱母加見行阿加良閉賜平歎賜比憂賜比大坐止詔大命平宜美麻之大臣乃萬政總以無忌  
 緩事無曲傾事久王臣等母平彼此別心無普平奏比公民之上母平廣厚慈而奏事此耳不在天皇朝平覽  
 之間母罷出而休息安布母事無食國之政乃平善可在狀天下公民之息安母流事平旦夕夜日不云思  
 議奏比仕奉者歎美明美意太比之美多能母志美思保大坐平間爾忽朕朝平離而罷止宮其志言  
 乃罷道母宇之呂輕久心母意太比爾念而平久幸久罷止宮其須爾詔大命平宜  
 〔續日本紀三十六〕天應元年二月丙午三品能登內親王薨遣右大辨正四位下大伴宿禰家持刑部卿  
 從四位下石川朝臣豐人等監護喪事所須官給道參議左大辨正四位下大伴宿禰伯麻呂就第宜詔  
 曰天皇大命止麻能登內親王爾告止詔大命平宜此月頃間身勞須聞食氏伊都之病止氏參入岐岐  
 朕心毛慰米麻佐牟止今日加有平明日加有止所念食爾待比賜間爾安加良米佐須如事久於與  
 豆禮母加年毛高久成留朕平置氏罷麻之奴止聞食母驚賜比悔脫○此下恐大坐須如此在止知未  
 妻心霞母談比賜比相見母物平悔加哀毛云都○都上爾不知然之三字恐然毛在母加波汝乃志波  
 覽乃久間毛忘得末之自悲備賜比之乃比賜比大御泣哭川大坐須然毛治賜止所念之位止奈一品贈  
 賜不子等波平二世王爾上賜比治賜不勞久思麻之罷麻佐平道波平幸久都々牟事無久宇志呂毛輕  
 久安久通止其世告止與詔天皇大命平宜內親王天皇之女也適正五位下市原王生五百井女王五百枝  
 王薨年四十九

〔芭蕉文集下〕嵐蘭誄

金革を擲にしてあへてたゆまざるは士の志なり文質偏ならざるをもて君子のいさをしとす

天<sup>平</sup>志<sup>他氏</sup>乃<sup>人</sup>等<sup>相</sup>交<sup>天</sup>亂<sup>米</sup>之<sup>和</sup>加<sup>佐</sup>乃<sup>國</sup>波<sup>六</sup>雁<sup>命</sup>爾<sup>永</sup>久<sup>子</sup>孫<sup>等</sup>可<sup>遠</sup>世<sup>乃</sup>國<sup>家</sup>止<sup>爲</sup>止<sup>定</sup>天

授<sup>介</sup>賜<sup>天</sup>此<sup>事</sup>波<sup>世</sup>々<sup>之</sup>爾<sup>過</sup>利<sup>遠</sup>志<sup>此</sup>志<sup>平</sup>知<sup>天</sup>太<sup>比</sup>吉<sup>久</sup>膳<sup>職</sup>乃<sup>內</sup>毛<sup>外</sup>護<sup>利</sup>守<sup>比</sup>太<sup>天</sup>灾<sup>患</sup>乃<sup>事</sup>等<sup>毛</sup>

无<sup>久</sup>在<sup>志</sup>給<sup>天</sup>太<sup>戸</sup>度<sup>思</sup>食<sup>止</sup>申<sup>宣</sup>太<sup>麻</sup>天<sup>皇</sup>乃<sup>大</sup>御<sup>命</sup>其<sup>麻</sup>虛<sup>川</sup>御<sup>魂</sup>毛<sup>聞</sup>止<sup>太</sup>戸<sup>申</sup>止<sup>宣</sup>太<sup>麻</sup>

○按ズルニ、文ニ宣命トアレドモ、諫詞ノ體ナルヲ以テ、姑ク此ニ收ム、次ニ舉ル所ノ續日本紀

ノ宣命モ亦同ジ、

〔續日本紀<sup>二十</sup>〕天平神護二年正月甲子、詔曰、今勅<sup>久</sup>掛<sup>畏</sup>岐<sup>淡</sup>海<sup>乃</sup>大津宮<sup>仁</sup>天下所知行之天皇

我<sup>天</sup>智<sup>爾</sup>御<sup>世</sup>爾<sup>奉</sup>侍<sup>之</sup>末<sup>之</sup>藤原大臣<sup>足</sup>錄<sup>復</sup>後<sup>乃</sup>藤原大臣<sup>爾</sup>比<sup>等</sup>賜<sup>天</sup>在<sup>留</sup>志<sup>乃</sup>比<sup>己</sup>止<sup>乃</sup>書<sup>爾</sup>勅<sup>天</sup>在

久<sup>子</sup>孫<sup>乃</sup>淨<sup>久</sup>明<sup>岐</sup>心<sup>乎</sup>以<sup>氏</sup>朝廷<sup>爾</sup>奉<sup>侍</sup>幸<sup>乎</sup>必<sup>治</sup>賜<sup>幸</sup>其<sup>繼</sup>方<sup>絕</sup>不<sup>賜</sup>止<sup>勅</sup>天<sup>在</sup>我<sup>故</sup>爾<sup>今</sup>藤原永

手朝臣<sup>爾</sup>右大臣之官授賜<sup>止</sup>勅<sup>天皇</sup>御<sup>命</sup>乎<sup>諸</sup>開<sup>食</sup>止<sup>宣</sup>

〔續日本紀<sup>三十</sup>〕寶龜二年二月己酉、左大臣正一位藤原朝臣永手薨、時年五十八、奈良朝贈太政大

臣房前之第二子也、母曰正二位牟漏女王、以累世相門起家、授從五位下、勝寶九歲至從三位中納言

兼式部卿、寶字八年九月任大納言、授從二位、神護二年拜右大臣、授從一位、居二歲轉左大臣、寶龜元

年、高野天皇<sup>爾</sup>不<sup>念</sup>時<sup>道</sup>鏡<sup>因</sup>播<sup>○</sup>播<sup>字</sup>籍<sup>恩</sup>私<sup>勢</sup>振<sup>內</sup>外<sup>自</sup>廢<sup>帝</sup>仁<sup>淳</sup>勅<sup>宗</sup>室<sup>有</sup>重<sup>望</sup>者<sup>多</sup>羅<sup>非</sup>臺

日嗣之位、遂且絕矣、道鏡自以寵愛隆渥、日夜僥倖、非望泊于宮車、晏駕定策、遂安社稷者、大臣之力居

多焉、及薨、天皇甚痛惜之、詔遣正三位中納言兼中務卿文室真人大市、正三位員外中納言兼宮內卿

右京大夫石川朝臣豐成、弔贈之曰、藤原左大臣<sup>爾</sup>詔<sup>大</sup>命<sup>乎</sup>宣<sup>大</sup>命<sup>座</sup>詔<sup>久</sup>大臣<sup>明</sup>日<sup>者</sup>參<sup>出</sup>來<sup>仕</sup>止<sup>幸</sup>

待<sup>比</sup>賜<sup>間</sup>爾<sup>休</sup>息<sup>安</sup>麻<sup>利</sup>參<sup>出</sup>麻<sup>波</sup>事<sup>無</sup>帝<sup>天</sup>皇<sup>朝</sup>乎<sup>置</sup>而<sup>罷</sup>退<sup>止</sup>聞<sup>看</sup>而<sup>於</sup>母<sup>富</sup>佐<sup>於</sup>與<sup>豆</sup>禮<sup>母</sup>多<sup>波</sup>

許<sup>止</sup>乎<sup>如</sup>云<sup>信</sup>之<sup>爾</sup>有<sup>者</sup>仕<sup>奉</sup>之<sup>太</sup>政<sup>官</sup>之<sup>政</sup>波<sup>誰</sup>任<sup>之</sup>加<sup>能</sup>伊<sup>麻</sup>執<sup>授</sup>加<sup>能</sup>伊<sup>麻</sup>恨<sup>加</sup>悲<sup>母</sup>加<sup>朕</sup>大<sup>臣</sup>誰<sup>爾</sup>

母<sup>我</sup>語<sup>比</sup>佐<sup>爾</sup>孰<sup>爾</sup>加<sup>我</sup>問<sup>比</sup>佐<sup>氣</sup>悔<sup>爾</sup>惜<sup>爾</sup>痛<sup>爾</sup>酸<sup>爾</sup>大<sup>御</sup>泣<sup>哭</sup>之<sup>坐</sup>止<sup>詔</sup>大<sup>命</sup>乎<sup>宣</sup>麻<sup>加</sup>惜<sup>母</sup>加<sup>自</sup>今<sup>日</sup>

者<sup>大</sup>臣<sup>之</sup>奏<sup>之</sup>政<sup>者</sup>不<sup>聞</sup>看<sup>夜</sup>成<sup>幸</sup>自<sup>明</sup>日<sup>者</sup>大<sup>臣</sup>之<sup>仕</sup>奉<sup>儀</sup>者<sup>不</sup>看<sup>行</sup>夜<sup>成</sup>幸<sup>日</sup>月<sup>累</sup>往<sup>麻</sup>爾<sup>悲</sup>事<sup>乃</sup>

大臣誄

畏哉讓國而御坐志天皇平恐美恐母誄白臣某畏哉日本根子天皇者久俱帝位爾御坐氏常爾資治乃道乎求給止布古伊夜益爾深計禮故乎溫氏新平知女廢多留志與志絕多留志繼氏孝平本止志政平爲志儉乎專爾志物乎愛美給加布故爾仁恩乃光天下爾被利至是是爾仰枝彼乎仰爾代爾代爾絕爾尊枝御名乎奉天地乃共長日月乃共遠久止稱白止佐平奏麻爾爾御證乎奉給布臣等毛共爾稱白佐止恐美恐母誄白臣某

卿誄

畏哉讓國而御坐志天皇平恐美恐母誄白臣某畏哉日本根子天皇者聰明仁愛爾御坐志然毛謙讓乃心深久下遠憐美太情厚志萬乃政枝○枝百世乃則止誰加不孝仰嗚呼哀哉姑射雲暗志龍氏御何乃日加還給止恐美恐母誄白臣某

侍臣誄

畏哉讓國而御坐志天皇平恐美恐母誄白臣某畏哉日本根子天皇者仁愛乃御心深計禮仕奉爾人々毛厚恩乎酬比奉止恐美恐母誄白臣某

〔政事要略二十六年〕十一月上卯相嘗祭事

高橋氏文云六雁命七十二年秋八月受病同月薨也時天皇行○景聞食而大悲給准親王式而賜葬也於是宣命使遣藤河別命武男心命等宣命云天皇加大御言止良宣久王子六鴉命不思佐流外爾卒上太利開食迷之夜晝爾悲愁給比川大坐須天皇乃御世乃間波平爾相見佐奈波思須保間爾別利由介然今思食須所波十一月乃新嘗乃祭毛膳職乃御膳乃事毛六雁命乃勞始成流所奈利是以六雁命乃御魂平膳職爾伊波比奉春秋乃永世乃神財止仕奉志迷子孫等平波長世遠世乃膳職乃長毛上總國乃長毛淡國乃長毛定天餘氏波萬介太麻波天乎佐女太麻波平若之膳臣等乃不繼在朕加王子等

方少南次其方少退諫人右大辨通熙朝臣胤保等着座次左大將以下兩段再拜四拜次大將被讀宣命  
立了亦兩段再拜四拜次目實愛朝臣實愛朝臣參進被渡宣命實愛爲內暨內舍人於陵前令燒宣命  
御幣御幣者其此間諫人申諫詞事了左大將以下退出略今日陣上卿右大臣於宣陽殿西廂有御  
拜總而御幣昇立以下如荷前云々委不及聞宣命詔書諫詞等後聞續左略中

宣命

天皇仁掛畏岐後月輪山陵光格○恐美恐美奏賜止倍奏久明久淨岐御意以氏大八洲國所知志與  
端拱天天下平治賜止古三十九年無事久無故久上下倍和睦久公民茂愈富足止思食毛奈宮殿毛  
古乃法乃隨爾營比多廢多祭禮平與志賜布又諸乃事毛古爾復志賜止多介禮百官毛皆慶仰岐  
公民毛厚慈平蒙戴氏仕奉奴讓國賜志與國家愈平爾臣庶愈忠心懷天仕奉天此食國乃猶毛  
能治留事波偏爾恤賜比矜賜加故止奈利仰岐畏美賜比天地止共爾長久孝道平盡志仕奉止念行  
爾志近來御藥乃事有氏驚岐聞食氏朝久止奈夕久止奈神祇爾祈利奉利賜加志少久愈賜比古來爾稀  
留奈聖算平重賜比志一多比以氏喜備一波多以氏懼知給爾早毛朝觀乃禮平行給止者幸思保之大  
坐坐間爾不慮毛此孝子平捨給氏姑射乃霞爾登利賜止布聞食氏驚岐惜爾痛爾酸爾賜比大御泣  
哭之大坐利毛會毛會毛御名乃事波久俱絕止霞爾孝波父平嚴爾須留大奈留莫止奈又大行波爾大  
名平受止奈聞食須御證平不奉藥山與高久仰奉留恩德平伊何爾岐止須倍所念志又大臣毛進奏  
須爾故是以氏吉日良辰平擇定氏御證平光格天皇止稱白志奉利恒爾志無岐御幣平令捧持  
氏奉出利正二位行權大納言兼左近衛大將春宮大夫藤原朝臣輔熙正四位下行右近衛權中將  
藤原實愛等平差使氏諫人平率志恐美恐母諫奏志幸略○此狀平平久安久聞食止恐美恐美奏賜  
止倍奏

天保十二年閏正月二十七日



國文讀

爲亡人云々誄、とあるをおもへば、古は貴人のみならず、下ざま、で誄せしこと著し、

〔日本後紀<sup>十三</sup>〕大同元年三月辛巳天皇崩於正寢、四月甲午朔、中納言正三位藤原朝臣雄友、率後

誄人左方中納言從三位藤原朝臣內麻呂、參議從三位坂上大宿禰、田村麻呂侍從從四位下中臣王、

侍從從四位下大庭王、參議從四位下藤原朝臣緒嗣、右方權中納言從三位藤原朝臣乙亥、參議從三

位紀朝臣勝長、散位從四位上五百枝王、參議正四位下藤原朝臣繩主、從四位下秋篠朝臣安人等、率

誄曰、畏哉平安宮、御坐志天皇乃、天都日嗣乃、御名事、宣恐母誄白臣某、今改下同、未、畏哉日本

根子天皇乃、天地乃、共長久、日月乃、共遠久、所白將去御證、止稱白久、日本根子皇統彌照尊、止稱白止

恐母誄白臣某、

〔類聚國史<sup>三十五</sup>〕天長元年七月甲寅、平城天皇崩、丙辰、奉誄曰、畏哉讓國而平城宮、御坐志天皇

乃、天都日嗣乃、御名事、宣恐母誄白臣某、今改下同、未、畏哉日本根子天皇乃、天地乃、共長久、日月

乃、共遠久、所白將去御證、止稱白久、日本根子天推國高彥尊、止稱白止恐母誄白臣某、

〔續日本後紀<sup>九</sup>〕承和七年五月癸未、後太上天皇<sup>仁明</sup>、淳崩于淳和院、甲申、令參議從四位下刑部卿

安倍朝臣安仁、上太上天皇誄、誄曰、畏哉讓國而御坐志天皇乃、天津日嗣乃、御名乃事、恐母

誄白臣某、今改下同、未、畏哉日本根子天皇乃、天地止共長久、日月止共遠久、所白將往御證、止稱白久、

日本根子天高讓彌遠尊、止稱白止恐母誄白臣某、

〔實久卿記〕天保十二年後正月廿七日壬午、今日尊誄、策命使泉涌寺江參向也、仍已刻許、于泉涌寺

參向、衣也東久世三位同參向、未刻許、策命使左大將<sup>兼典</sup>、參向、前馬前、左中將爲知朝臣云々、不及見、次官

左中將實愛朝臣、誄人右大辨、中右少將通照朝臣、侍從胤保、各並諸殿事、等參向、權中納言、傳典、頭左

中辨光政朝臣、上行土予、東久世三位勸修寺侍從<sup>寺門</sup>等、御陵北方假屋座爲詰候、先內暨內舍人等昇

黑漆案立、山陵前、次置御幣、如、夾細網、帶、次置雜給幣、次左大將、被着陵前座、次次官實愛朝臣着座、大將

何晏註に、誅者哀死而述其行之辭也、と云へるごとき意に依りたるめれど、全合へるにはあらずと知るべし、さて其後天皇には、誅して謚號を奉り給へり、續紀に、大寶二年十二月甲寅、持統天皇崩給へる事條に、辛酉、殯于西殿、同三年十二月癸酉、從四位上當麻呂、人智德、率諸王諸臣、奉<sup>レ</sup>誅太上天皇、謚曰大倭根子天之廣野日女尊、是日火葬於飛鳥岡壬午、合葬於大內山陵、○中さて右に擧たる如く、文武の御世、持統天皇崩の時、例のまゝに誅奉り、始めて御謚を上り給ひ、相繼て文武元明元正聖武大炊等の天皇たちをおきて、光仁桓武平城嵯峨天皇に仁明天皇の御世に崩たまへり、淳和の天皇までにおよびて、○中仁明の御世、嵯峨天皇崩の御時より、誅の事も御謚上りたまへる事も、史ごにも見えず、廢給へるなるべし、

續後紀、淳和天皇の遺詔に、予聞人沒、精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉、散之山中、と詔へるによりて、崩の後、火に化し奉り、御骨を碎きて、大原野の西山の嶺上に散し奉りて、陵を作られず、また前の御世、知食し嵯峨天皇は、この天皇におくれて崩り給ひけるが、遺詔によりて殊に薄く葬りて、これも陵を作られず、故諸陵式に其二陵を載られず、かゝる御ありさまなりけるにあはせて、嵯峨天皇の崩の時より、誅の事も御謚の事も廢給ひたりしなるべし、

さて文武天皇の時より、誅して始めて御謚上り給へるは、説文に、誅、謚也、禮記曾子問に、孔子曰、云々、賤不誅、貴幼不誅、長禮也、何晏注に、累舉其平生實行爲誅、而定其謚以稱之也、といへる如き説によりて、漢風を擬して、御謚號を作りて上られたるなるべし、○中

そも、天皇たちの崩ませる時、誅し奉れることは、上に擧たる如く、推古紀をはじめて、をりをり載られたれど、まことはいさ上代よりの事なりけむを、その度々の事の傳はらざりつるによりて、紀には載られざりつるなるべし、臣たちに誅賜ひしことはさらなり、かの孝德紀に、

天智<sup>〇</sup>御世<sup>〇</sup> 奉侍<sup>之</sup>末<sup>之</sup> 藤原大臣<sup>〇</sup> 錄<sup>〇</sup> 復後<sup>〇</sup> 乃<sup>〇</sup> 藤原大臣<sup>〇</sup> 比<sup>等</sup> 不<sup>〇</sup> 賜<sup>〇</sup> 天<sup>〇</sup> 在<sup>〇</sup> 留<sup>〇</sup> 志<sup>〇</sup> 乃<sup>〇</sup> 比<sup>〇</sup> 己<sup>〇</sup> 止<sup>〇</sup> 乃<sup>〇</sup> 書<sup>〇</sup> 勅<sup>〇</sup> 天<sup>〇</sup> 在<sup>〇</sup> 下久<sup>〇</sup> 略<sup>〇</sup>

〔歷朝詔詞解<sup>五</sup>〕志乃比己止乃書は、書紀の敏ぎ卷より末の卷々に、誄をシノビゴトタテマツルと訓る是也、此字累舉其平生實行爲誄、而定其證以稱之也、また哀死而述其行之辭也、など注したる、皇國の志のびごと其意也、

〔伊呂波字類抄<sup>辭字</sup>〕誄

〔釋日本紀<sup>十三</sup>〕誄<sup>青</sup>イ

手<sup>〇</sup> 筆<sup>〇</sup> 云<sup>〇</sup>、力<sup>〇</sup> 水<sup>〇</sup> 切<sup>〇</sup>、果<sup>〇</sup> 也<sup>〇</sup>、周<sup>〇</sup> 禮<sup>〇</sup>、太<sup>〇</sup> 祝<sup>〇</sup> 作<sup>〇</sup>、六<sup>〇</sup> 辭<sup>〇</sup>、六<sup>〇</sup> 日<sup>〇</sup>、誄<sup>〇</sup>、禮<sup>〇</sup> 記<sup>〇</sup> 曰<sup>〇</sup>、賤<sup>〇</sup> 不<sup>〇</sup> 誄<sup>〇</sup>、賈<sup>〇</sup>、說<sup>〇</sup> 文<sup>〇</sup> 云<sup>〇</sup>、證<sup>〇</sup> 也<sup>〇</sup>、文<sup>〇</sup> 選<sup>〇</sup> 第一<sup>〇</sup>、曰<sup>〇</sup>、美<sup>〇</sup>、終<sup>〇</sup> 則<sup>〇</sup> 誄<sup>〇</sup>、人<sup>〇</sup> 之<sup>〇</sup> 儀<sup>〇</sup>、爲<sup>〇</sup> 誄<sup>〇</sup>、以<sup>〇</sup> 美<sup>〇</sup> 之<sup>〇</sup> 也<sup>〇</sup>、呂<sup>〇</sup> 延<sup>〇</sup> 濟<sup>〇</sup> 曰<sup>〇</sup>、誄<sup>〇</sup>、果<sup>〇</sup> 也<sup>〇</sup>、有<sup>〇</sup> 功<sup>〇</sup>、業<sup>〇</sup>、終<sup>〇</sup> 者<sup>〇</sup>、果<sup>〇</sup> 其<sup>〇</sup> 功<sup>〇</sup>、而<sup>〇</sup> 記<sup>〇</sup> 之<sup>〇</sup>、

〔段註說文解字<sup>三</sup>〕上<sup>〇</sup> 誄<sup>〇</sup>、證<sup>〇</sup> 也<sup>〇</sup>、當<sup>〇</sup> 云<sup>〇</sup>、所<sup>〇</sup> 爲<sup>〇</sup>、證<sup>〇</sup> 也<sup>〇</sup>、曾<sup>〇</sup> 子<sup>〇</sup> 問<sup>〇</sup> 注<sup>〇</sup> 曰<sup>〇</sup>、誄<sup>〇</sup>、宗<sup>〇</sup>、倭<sup>〇</sup> 訓<sup>〇</sup>、深<sup>〇</sup> 中<sup>〇</sup> 編<sup>〇</sup>、十<sup>〇</sup>、志<sup>〇</sup> 乃<sup>〇</sup> 比<sup>〇</sup> 己<sup>〇</sup> 止<sup>〇</sup> 乃<sup>〇</sup> 書<sup>〇</sup>、日本紀に誄を訓せり、哀言の義也、

〔倭訓深<sup>中</sup>編<sup>十</sup>〕志乃比己止乃書、日本紀に誄を訓せり、哀言の義也、

〔比古婆衣<sup>五</sup>〕誄詞

志乃備詞は、人の身まかりたるとき、其人を慕ひて、其靈に告ふ詞にて、上古よりの禮義なり、書紀よりはじめて、誄字を當て、用ひきたれるこれなり、

古によりて正していはむには、志<sup>シ</sup>奴<sup>ビ</sup>比<sup>ヒ</sup>詞<sup>ヒ</sup>といふべきを、今はや、後ざまに志<sup>シ</sup>乃<sup>ノ</sup>備<sup>ビ</sup>詞<sup>ヒ</sup>といひてあるべし、書紀の誄字には、シヌビゴト、シノビゴトと、二ざまにさしたり、

續日本紀なる、天平神護二年正月の詔詞に、志<sup>シ</sup>乃<sup>ノ</sup>比<sup>ヒ</sup>己<sup>ヒ</sup>止<sup>ヒ</sup>の書にとて、其詞もいさ、か見えたるをおもへば、そのかみ世々の誄詞を記せる書ありしなり、<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>さて志乃比詞に、書紀より始めて誄字を常用られたるは、周禮<sup>春</sup>官<sup>〇</sup>に、作<sup>〇</sup>六<sup>〇</sup>辭<sup>〇</sup>、以<sup>〇</sup>通<sup>〇</sup>上<sup>〇</sup>下<sup>〇</sup>親<sup>〇</sup>疎<sup>〇</sup>遠<sup>〇</sup>近<sup>〇</sup>云<sup>〇</sup>々<sup>〇</sup>、六<sup>〇</sup>曰<sup>〇</sup>誄<sup>〇</sup>、註<sup>〇</sup>に、謂<sup>〇</sup>積<sup>〇</sup>累<sup>〇</sup>生<sup>〇</sup>時<sup>〇</sup>德<sup>〇</sup>

行<sup>〇</sup>、以<sup>〇</sup>錫<sup>〇</sup>之<sup>〇</sup>命<sup>〇</sup>主<sup>〇</sup>爲<sup>〇</sup>其<sup>〇</sup>辭<sup>〇</sup>也<sup>〇</sup>、また論語に、誄<sup>〇</sup>曰<sup>〇</sup>、麟<sup>〇</sup>爾<sup>〇</sup>于<sup>〇</sup>上<sup>〇</sup>下<sup>〇</sup>神<sup>〇</sup>祇<sup>〇</sup>疏<sup>〇</sup>に、累<sup>〇</sup>功<sup>〇</sup>德<sup>〇</sup>以<sup>〇</sup>求<sup>〇</sup>福<sup>〇</sup>、<sup>〇</sup>釋<sup>〇</sup>名<sup>〇</sup>に、誄<sup>〇</sup>累<sup>〇</sup>也<sup>〇</sup>、累<sup>〇</sup>其<sup>〇</sup>事<sup>〇</sup>、而<sup>〇</sup>稱<sup>〇</sup>之<sup>〇</sup>、

# 古事類苑

## 禮式部三十六

### 哀悼文

凡ソ死者ニ對シテ哀悼ノ意ヲ表スルモノニ、誄詞、哀詞、祭文、願文、拈香文等ノ數種アリ、  
誄詞ハ、シノビコト、云フ、シノビハ慕ナリ、コトハ言ナリ、死者ヲ哀慕スル義ナリ、桓武平城  
淳和三天皇ノ登遐ノ時ノ誄ハ、懿ヲ上ラシメガ爲メニシタルモノニテ、漢土ノ法ニ倣ヒタル  
ナリ、是ヨリ先、藤原鎌足薨ゼシ時、誄ヲ賜ヒシ事、續日本紀ニ見エタルドモ、其文傳ハラズ、景  
行天皇ノ朝、六雁命薨ゼシ時、及ビ光仁天皇ノ朝、能登内親王、藤原永手等ノ薨ゼシ時、賜ヒシ  
所ノ宣命ノ如キハ、即チ誄詞ノ體ナルヲ以テ、今國文誄ノ中ニ收ム、漢文ノ誄詞ノ書冊ニ見  
エタルハ、大織冠傳、貞慈傳ニ載セタルヲ以テ始トス、

哀詞ハ、死者ヲ哀悼シテ其情ヲ陳ベタルモノニシテ、祭文ハ死者ノ靈ヲ祭ルモノナリ、

願文モ亦一種ノ哀悼文ニシテ、佛事ヲ修スル時ニ用キルモノナリ、即チ死者ノ爲メニ佛像  
ヲ造リ、經文ヲ寫シテ、追善供養スル時ニ於テスルモノニテ、此修善ノ力ニ憑リ、轉迷開悟セ  
ンコトヲ願フモノナリ、

拈香文是モ亦一種ノ哀悼文ニシテ、神家ノ僧徒ノ朗讀スル所ナリ、先ヅ香ヲ拈シテ而シテ  
其文ヲ讀ム故ニ拈香文ト云フ、

〔續日本紀<sup>二十七</sup>〕天平神護二年正月甲子、詔曰、今、勅<sup>ノミタカヒ</sup>久、掛<sup>ノミタカヒ</sup>畏、淡海<sup>ノミタカヒ</sup>乃、大津宮、仁、天下所知行之、天皇





古事類苑

禮式部三十六

哀悼文

誄

九四一

國文誄

九四四

漢文誄

九五五

誄而上登

九六一

誄雜載

同

哀詞

九六四

祭文

九七三

願文

九七九

拈香文

九八〇



遣フコトモナラザリシトゾ、然ルニ享保十一年六月、淨圓院様御逝去ノトキ、三十五日過サセラル、ト書ニ、御鷹匠頭へ、御鷹仕込ニ組ノ者、野先へ出スベシト仰出サレ、尤鷹ノ捕リタル雲雀差出スニ及バズトノ命ナリシトナリ、大統ヲ尊重シ玉ヒ、私親ヲ顧ミ玉ハザル盛慮、カクノ如キ御事也。



〔最有院殿御實紀〕慶安四年四月廿八日、又端午の嘉蒲甲小旗等も、御中陰○鎌川はてさせ給ひし後、獻すべしと令せらる、

〔嘉永六年御中陰一條書留〕丑七月廿七日牧野備前守御渡

大目付江

御中陰○鎌川ニ付、當八朔、御祝儀御禮無之儀ニ相成候事、

〔金銀御吹替次第第十三御書付〕天明六年九月八日○此日鎌川

覺

一御中陰之内、總而他行留之事、

一於都屋々々、聲高成義、相慎可申事、

一都屋々々火之元別而入念、大切可致事、

一町方洗湯へ罷越候はゞ、當番之ものへ相斷、罷歸候節も、右同斷之事、

一月代刺候事は、追而相觸可申候間、差控可申候事、

一御中陰之内、夜廻り之義、時半之外ニ、半口廻り致し、別而入念、見廻り可申事、

但手代壹人男壹人

一當番之銀見役掛役は、不及申、非番之者共迄詰合可罷在候事、

右之通被仰付候間、急度可被相守候、以上、

午九月八日

銀見中

掛役中

月書

用都屋

〔甲子夜話三〕佛廟○鎌川ニハ、御歷代ノ御忌日ナドハ、至テ重ク御取扱アリテ、御慶ナド、其役ノ者

懷那法蓮房信空

〔滿濟准后日記〕永享三年九月十五日、故妙法院僧正五旬引上、今日結願了、總寺寺僧皆請了、就此事、昨日内々觸穢一段相尋處、寺家宿老弘甚法印、并定盛法印、載書狀申機、當寺物忌令、雖不分明、卅五日佛事ヨリ加行ヲ始トシテ、其日一日事出入、更不憚之條先例候、但其日入堂早旦ニ仕、其後可罷、向法式云々、次重服者入堂事、七十五日以後無相違云々、次中陰難僧事、五十日以後且不憚之云々、況今度儀、四十九日來廿日也、今五箇日引上沙汰事間、總寺可罷向條、不可有其憚云々、

〔蓮如上人遺德記〕長祿元年丁丑六月十八日、嚴父法印圓覺、存如上人、于獲驛ニ及ビタマヒス、然ドモ兼壽上人如○蓮ノ興法ノ志ヲ感ジテ、後代タノモシク思召、終ニ歸寂シタマヒス、一扇愁淚ニ沈ミ、列衆袖ヲ絞リス、シカレバ葬送中陰ノ間、念佛報恩ノ經營、フタゴ、ロナク勤行ノ丹誠ヲ抽テ、五旬ノ忌辰ヲ經ヲハリス、

〔蓮如上人遺德記〕同年八月明應季春ノ天、先師入十五連日ノ長病ニヲカサレ、衰老不食シタマヒ、身體昔ノゴトクナラズ、中廿五日ノ曉、大地鳴動シケリ、聞人不思議ノ思アリ、是即權化入滅ノ瑞相ナリ、略然シテ午ノ正中ニ、頭北面西ニ臥タマヒ、睡レルガゴトクニテ、終ニ念佛ノ息絕畢、時ニ春秋八十五歲、略中同廿七日、遺骨ヲヒロヒテ、卽廿八日ヨリ仲呂十七日マデ、忌辰ノ日數ヲツグマテ、念佛勤行ヲ勵シ、書問ノ異文ヲ讀誦シ、本式ニ任テ、五旬ノ中陰ヲ致シタマフベシトイヘドモ、佛事供養ヲ要トセズ、タゞ歸命ノ信心ヲ本意ト思召、存日ノ時、タゞ三七日バカリ、ソノ營ヲナスベシト仰置レシ旨ニ任テ、カクノ如シ、凡報恩ノ誠ヲ致シ、懇志ヲ抽ンヅル類、イヨク稱計スベカラズ、

〔權記〕長保六年元弘三月三日丁亥、晚景内豎來告、卽參入有作文、先是豫議曲水宴、而依倚侍○三侍藤原經子、卅九日内被止、此年二月薨、

坐、夏无餘言矣、歛其死屍置幽谷中、不運數日、其墓所方有誦法華聲、其音甚貴、似存生音、連夜誦經、更不休息、四十九日法事已後、其聲不聞、若替中有生、往生淨土矣、

〔法然上人行狀畫圖 三十九〕上人臨終のとき、遺言のむねあり、孝養のために、精舎建立のいごなみをなすことなかれ、心ざしあらばおの／＼群集せず、念佛して恩を報すべし、もし群集あれば、閑靜の因縁なりとの給へり、まかれども法蓮房世間の風儀に順じて、念佛のほかの七日々々の佛事を修すべきよし申されければ、諸人これにまたがふ、

初七日 導師信蓮房

檀那大宮入道内大臣 實宗公  
○中略

二七日 導師求佛房

檀那別當入道孫 某甲

三七日 導師住眞房

檀那正信房湛空

福經物唐朝王義之摺本、一紙面十二行八十餘字書之、○中略

四七日 導師法蓮房

檀那良清 ○中略

五七日 導師權律師隆寛

檀那勢觀房源智 ○中略

六七日 導師法印聖覺

檀那慈鎮和尚 ○中略

七々日 導師三井僧正公胤

三月

朔日

御速五  
夜七分

六道供養 講式

二日

御速五  
夜七分

金曼供

三日

御速六  
夜七分

論義

四日

御速六  
夜七分

法華讀誦

五日

御速七  
夜七分

四箇要法

六日

御速七  
夜七分

施餓鬼

七日

御速百  
箇分

一切經轉讀

八日

御速百  
箇分

台曼供

〔松屋文集下〕しのぶぐさ

はづきついたちの日よりは、御ゆをだにつゆばかりまゐらず、いそぐたのみすくなくなりま  
さりて、四日の申のときばかりにものゝかれ行やうにきえはてたまひぬ○吉備津彦神社、阿  
蘇井高向母中略、な  
ぬかなぬかの事は、はゝ君の有し世にものし玉ひし、おきてのまゝに、おろかならずけうじつ  
うまつるとはすれど、ほうしをよばねば、たゞくだもの花などもたせて、めなるもの、みはかにま  
あり家のうちにては、みたまをまつれる所に、くさぐさのものそなへ奉りて、さきにどかくの事  
せし人ども、よびつごへてものくはせ、または目つふれたる人にも、ものどらせなどするのみなれ  
ば、ほうしのことゝしくすなるわざにくらべては、みだてなくおろかなるやうになむ有ける、  
○中 四十九日のわざなども、昔の御心にかなふべき事どもをなんしける、

〔法華驗記〕第三十叡山圓久法師

沙門圓久、叡山西塔院住人也、成就房聖教大僧都弟子也、○中 臨最後時、手執經卷、口誦妙法、向西方



御法事日割

一月

廿二日

御初夜七分

百光明供

廿三日

御初夜七分

胎曼供

大御臺様御附法事

同日

廿四日

御初夜七分

八講四座

大御臺様御附法事

同日

廿五日

御初夜七分

八講四座

大御臺様御附法事

同日

廿六日

御初夜七分

布薩戒

大御臺様御附法事

同日

廿七日

御初夜七分

法華三昧

同

同日

廿八日

御初夜七分

法華十種供養

廿九日

御初夜七分

法華頓寫

御經供養

岡角左衛門女也。略○中五月以來、病臥不食、逐日疲勞増張。略○今日申刻死去也。残念至極可憐可悲、年齡七十四、十六日丙寅今夜より母公お秀、いく三人内々御長屋ニ而勤中。陰、白木位牌前机白布打敷等設之、燈明香花水等、晝夜不斷、日々供御膳也。お秀者自明日、日々慕參、母公ハ、七日七日計御參詣之積、勿論内々雖混穢、表向無穢之姿、表口不爲其設、於火者、雖無着服之人、與他所之火不混、爲本所之儀也。

〔文恭院様薨御一件〕二月○天保十二年十三日

右衛門督殿家來兼へ

東叡山ニ而御法事二日目、中堂へ御拜禮ニ御出可被成候、尤直垂御着用可被成候、

二月廿四日

土井能登守

於増上寺御法事中、勤番被仰付候、

右於芙蓉間、掃部頭老中列席、大炊頭申渡之、

二月十四日

跡都信濃守へ

御法事拜禮之席

侍從以上 埋闔之内より壹疊目

四品 埋闔之外上より壹疊目

諸大夫 同上より貳疊目

布衣 同上より三疊目

無官 同上より四疊目

右之通可被得其意候

〔大江俊章記〕寶曆八年四月廿四日、中陰○前日、後卅日ニ、七々日つゝめ、法事日割候様可申含、但初月忌ヲ盡七日ニ積リ也、五月廿二日、七七日も也、○中明日初月忌ニ付非時、正行院依招入來讀經有施物、○中略三分午後及夕、佛壇中陰之設悉撤却之、○土器之類、後來不可用、品流、川是俗之習也、四十九日之餅撒之、世上之習にまかせ、升の裏ニテかき餅を切生味噌鹽を付て、爲子者喰之、其餘人々任心喰之、

〔大江俊矩記〕寛政四年十二月廿三日、巳半刻御終焉、○後、中略、廿五日己丑、戌刻前御入棺、廿六

日庚寅、巳刻墓參、○白餅五ツ、盛土、二盃、隨身備之、母公予妻青侍一人、女一人、下部一人等也、各步行、予昨夜之通着、用母公妻等、白小袖綿帽子、○但途中ハ常服被、宿坊より仕替、蓋略儀也、先宿坊參拜、靈牌燒香、參墓所立花供水燒香拜、此

間正行院讀經、立小卒都婆、○中

一今日より備御膳、○一度、朝膳略之、夕膳計供之、朝夕燒香拜、御膳入夜撤之下之、御飯御菜、母公予妻各受之、又到

來之品々、必先備之、又有事則必申上、終日着袴肩衣、已下日々如此、

一晝夜香花燈水不斷、日々同之、

廿九日癸巳、初七日也、○中略

一葬送之節、御供并萬事致世話出入之者等、家僕共一統給非時、○凡八人、家内八人、

五年正月六日庚子、二七日也、二月十二日乙亥、盡七日也、○中參詣母公予伴、宿坊より大卒都婆

建之讀經了、宿坊にて、日々參詣預世話候相抄申述、且老婆へ白銀壹兩爲心付送之、

一親キ出入之者共相招、非時爲給、○中略

一晚最中陰之祀壇悉撤却之、○土器之類、後來不可用、品流、川是俗之習也、事移御牌於壇、○新造、備燈明香華拜、

一四十九日之餅撒之、世上之習にまかせ、升の裏にて笠餅をきり、生みそ生鹽を付、爲子者喰之、自

餘之人々任心喰之、

〔玉峯院凶事之記〕寛政十二年八月十五日乙丑、京極宮年寄石見者、勢州龜山城主石川主殿頭家臣

閏六月〇寬延十二年巳刻

一初七日御遠夜、二番鐘五半百光明供袍裳袴袈裟、

一番鐘、衆僧俗人、參集于常行堂着裝束、次有案內、衆僧俗人參堂、酒水薰香シテ着座、二番鐘報ニ案內シテ、總奉行等參堂、次ニ御導師准后宮供奉行列、入御于帷被着曲簾、衆僧俗人參迎、勅額門外、次發四智讚、次鉦一雙、次俗人奏樂、次有案內、武家參迎、次ニ俗人先進復本座、猶不止樂、次衆僧登階復本座、次御導師御上堂、武家へ有御會釋、此時開幕、次御導師御入堂御着座、此時止樂、次武家復座、次發上樂、御導師御登高座、次着座、讚鉦一雙、次御表白、次諸天讚、鉦三雙、次御修法畢而御下高座、次御燒香御復座、次武家拜禮、次奏樂、御導師從裏口御退座、武家へ有御會釋、次閉幕、次武家退去、次衆僧俗人退散、

同十二日

初夜開闢二番鐘八時

一番鐘、大衆參集、二番鐘報案內、武家參堂、次啓案內、准后宮御出座從口、次例時、導師觀理院僧正、次導師下座、次武家拜禮、次准后宮御退出、次武家退出、次衆僧退出、

閏六月十三日

後夜二番鐘七半

一番鐘、大衆參集、二番鐘報案內、武家參集、次啓案內、新宮御方御出座從口、次懺法、導師凌雲院僧正、次導師下座、次武家拜禮、次新宮御方御退出、次武家退出、次衆僧退出、

同十三日巳刻

初七日御當日一番鐘五半二番鐘四時

胎曼供袍裳袈裟



戒十七日、勅使西園寺前内大臣實晴公、山に參向あり、正一位太政大臣を贈らせ給ひ、大猷院殿と追號せらる。宣命使平松の納言時量なり、これにより主上○後より大乘妙典進め給ふ。院使四辻大納言公理卿、新院使姉小路中納言公景卿、女院使五條中納言爲通卿、參向、各御贈經あり、攝家門跡清華衆、みな納經せらる。十八日、遠夜法華八講、廿日、五七忌法華八講、五加陀、廿一日、遠夜頓寫、廿二日、六七忌經供養、廿三日、遠夜論義、廿四日、七七忌金曼茶羅供、廿五日、遠夜圓頓戒、廿六日、滿百忌圓頓戒一切經轉讀。

〔基量卿記〕元祿八年七月九日、北尾芳安道英來、病人彌以難治之症之由申之。○中今宵寅刻、如眠已絕氣、各愁涙無他。十一日、葬送戌刻也。○中料銀五十兩遣之、中陰廿兩外二遣之。十六日、初七日也、家内中陰之法事、并淨花院之法事、今日令結願了、今日依爲一七日也。八月十日、惠涼院月忌至、今日、四十九日取越、今日當盡七日、修佛事了。

〔享保集成絲綸錄九〕寶永六丑年正月

御中陰獻上之覺

一從御三家者、八九度程も可被獻候事、

一在江戸之分者兩度在國在所之分は一度可有獻上候事、

一侍從以上御檜重、四品并拾萬石以上は、御干菓子此外は其品可爲伺次第事、

但侍從四品拾萬石以上に而も、二度目之獻上物は、何に而も可爲伺次第事、

一隱居之衆者拾萬石以上之分より、在江戸在所共に、以使者御精進物一度、可差上之事、

一國持嫡子之分、在江戸在所共に、一度御精進物類、以使者可差上候事、

一在國在所之面々、御中陰一度爲伺御機嫌使札可差上候事、

〔柳營水無月記〕御中陰○德川御法事次第

室、妙法院宮、下川原宮、以上三人、非直諷誦也、次聖護院准后直諷誦也、次大覺寺僧正、梶井僧正、予諷誦、實相院僧正、淨土寺僧正以下在之、今度大御堂在京間、被進諷誦僧都、間最結句也、今度僧中凡人諷誦以上三人也、定助僧正、忠藝僧正、光經僧正也、以下導師作法如常、今度着座公卿被略之了、實篋院殿御佛事時御例也、鹿苑院殿御佛時事ハ、着座兩人歟在之、道場同所也、今度被物代公方三千疋、應永十五年、故鹿苑院殿御時、如此云々、御臺御衣歟、俗中大路三萬疋云々、御室妙法院宮等不知之、聖護院准后以下、悉三百疋也、道場ナム○ナムヘ註、事仁和寺等持院蓮池向小坊也、東西五間南北三間ヲ以爲道場也、幡花鬘等如常、中央立佛臺、奉懸新圖藥師像一幅計也、其前ニ立高机漆、佛供等備之、前ニ又立小机、其前立禮盤歟、不分明也、法事終テ、當御所還御裏松亭也、

〔萬松院殿穴太記〕五月

○天文九年

四日戊辰の辰の刻に、御年春秋四十と申に、○足利義晴、臨終正念にまし

まして、御事されさせ給ひけり、○中略

五月廿六日、廣鹿院

にて御中陰の結願有ねんかうは仁如

和尚なり、已刻ばかりに、内より烏丸大納言

直筆

廣橋中納言同兩勅使にて、妙典一部八軸を白

紙にすりて水精の軸したるを、引合につゝまれて、あしうちにすへて持向ふ、妙安和尚、出迎ひて

受取、○中略

今日申刻に、御影をば巻て盆に居て、萬松院へ移さる、此處にて御佛事有、維那は實西堂

なり、此程爰かしこより參つどへる印寫の御經は、籠り僧のわかつてとれり、漸寫は車につみて、

賀茂川に流されたり、○中略

閏五月廿三日、四十九日の御佛事有て御精進をあげられ、高和泉守師

宣御代官にて、北野の石の烏居へまゐり侍りぬ、

〔大猷殿院御實紀〕

八ノ

慶安四年四月廿日申の刻、遂に正寢に薨じ給ふ、○錦川、御齡四十八、廿六

日、靈柩東叡山を發して日光山に赴き給ふ、五月六日、三佛堂へうつらせ給ひ、かさねて大黒山の

嶺にしづませ給ふ、この夜、遠夜論義五番、七日、初七忌胎曼茶羅供、九日、遠夜論義、十日、二七忌法

華三昧、十二日、遠夜法華讀誦伽陀四段、十三日、三七忌施餓鬼、十五日、遠夜論義、十六日、四七忌布薩

恩和尚拈香名字不知之、實相院寶池院、予以上三人、參御丁聞所了、管領申入條々在之、今日則於等持院申入了、十九日、勝定院殿御中陰、今日被引上御結願、凡此引上事、先日諸大名意見在之、三月カケ不可然云々、仍結願日次事、被尋仰在方聊處、今日并廿五日、可宜由申入故也云々、於等持院禪僧佛事、陸座拈香等如常、陸座惟肖和尚天下第一才人也云々、千僧供在之、參御丁聞所入數大覺寺僧正、梶井僧正、實相院僧正、淨土寺僧正、寶池院僧正、地藏院僧正、予以上七人也、諸大名ハ悉御棧敷下土壇ニ祇候、大覺寺一人單衣也、以下重衣、禪家法事了、御經供養在之、御導師房能僧正、香法服着同甲袈裟了、題名僧三人、鈍色各着甲袈裟、最末一人凡僧着青甲、勸堂違了、今度被任寶篋院殿利義寺御四十九日經供養例、被略着座了、導師自平座起、進寄禮盤前三禮、次登禮盤等如常、次金二丁師導之、打下座、次同散花等了、開眼詞又如常、表白末ニ堂達誦誦文二通ヲ持テ寄導師左方脇ゴシニ誦誦文二通ヲ一度ニ渡之了退出、一通施主一通大方殿云々、導師以左手二通誦誦ヲ一度ニ取之、置左脇机了、次揚經題名宸筆御經ヨリ一々揚之、此時題名僧各机上ノ經ヲ取テ解紐置机計也、不及讀誦題名僧前ニハ、經各三局置之、導師脇机ニ一局以上、開結十局、歟、次正誦誦一通讀之、次大方殿次御南向、此兩人女中也、公方御誦誦次ニ讀之、每度金三丁讀之、其後佛名教化等也、次管領山誦誦讀之也、此條如何故香嚴院殿御佛事時、故鹿苑院殿御代、其時管領勸解由小路入道道將誦誦四位雲客、次五位殿上人ニ被讀之條分明事也、御導師、只今御導師ガ祖師房淳僧正也、秀記所持歟處ニ、今度遣彼時儀ニ女中、次關白等前ニ讀之條、所存如何凡於御一族ハ、故鹿苑院殿御代以來四位殿上人ニ被准キ、諸方此儀ヲ存歟、但爲時故實如管領事ヲバ一段賞翫又各別也、次前關白九條關白二條右府一條以下、俗中誦誦數十通讀之、每度不及打金ヲツッケテ讀之、仍誦誦ヲバ兼テヨリ悉ク重テ置之也、最結句ニ、召次幸正ガ誦誦讀之也、此誦誦事又如何仙洞召次、如此嚴重砌へ誦誦等捧之事、先例在之歟如何、凡於誦誦者、貴賤ニ不依條ハ、雖爲勿論、旁不審專一也、次僧中誦誦、御

唄子

散花 安養院

伽陀 隆増

廿一日 日中

供養法式 圖清

伽陀 隆専

唄子

散花 弘忠

廿二日 日中

供式 密嚴院

伽陀 實有

唄 圓清

散花 隆増

廿三日 日中

供式 子

伽陀 實圓

唄 密嚴院

散花 釋迦院

〔滿濟准后日記〕應永卅五年

○正長元年

正月十八日、今日已半計御事切了。○足利御年四十三也、廿四

日、今日御初七日也、可有御談合、子細在之、可參申由承間則參了、管領同參申、被仰云、御中陰事、三月カケハ不可然、由大名等申之、乍去引上事ハ、故御所様御嫌事間、可有如何云々、予申云、誠三月カケ事ハ、世俗ニ嫌來也、故鹿苑院殿○足利御代ニハ、香嚴院殿御中陰計、三月ニカケラレ候キ、其外ハ

悉被引上了、近來又其例不快候上ハ、只可被引上、二月ニテ可被結願條、尤可然由申了、仍其分ニ御

治定了、廿六日、等持院御中陰、來月十九日可被結願云々、京門跡御作善、又可爲同前由申了、廿

八日、勝定院殿○足利御二七日御佛事被引上、今日於等持院御沙汰云々、二月二日、勝定院殿三

七日御佛事、今日被引上、於等持院御沙汰云々、於法身院奉勤修御中陰、三七日、同今日引上勤修之、

初段延理趣三昧在之、佛經供養法等如形、導師禪那院僧正、六日、今日勝定院殿四七日御佛事、被

引上云々、十日、今朝辰末剋參、等持院今日御卅五日、被引上御沙汰、爲燒香也、寶池院同道、陞座大



有法事自今日如此被定之、毎日可爲此式、

供養法 圖清法印

伽陀 摩訶 頌子

散花 摩訶

振鈴以後、寶篋印陀羅尼 七反、但今日無舍利禮

十六日

日中、歇都供舍利講式 摩訶法印

舍利禮 七反、昨日同之

十七日

日中供養法 摩訶 舍利法、式有之、供養了、舍利禮七反、

伽陀 摩訶 頌子 散花 摩訶

十八日

日中供密嚴院式

伽陀 摩訶 頌子 散花 摩訶

十九日

今日二七日、阿彌陀三昧、

供養法、隆禪法印 摩訶法印、摩訶法印、

調聲 摩訶 讚禪院 頌子

散花 摩訶 四智心略讚 摩訶

廿日日中、夜陸有之

供養法式御勤仕

陰之中不可修佛事之由兼被相定云々

〔吾妻鏡〕

文治六年

○遠久

四月廿日癸卯

佐々木左衛門尉定綱飛脚參着申云去十三日亥刻右武衛室妻○藤原能保依難產卒給云云

五月十日癸亥右武衛室家四十九日可被修御佛事之由被仰

遣佐々木左衛門尉定綱導師請僧布施事募近江國田上報恩寺等乃貢可致其沙汰之由云云

〔空華日工集〕永和四年四月十七日今日已刻管領上杉兵部敬堂道謹居士逝去年四十六廿日余引衆爲兵部收骨鏡鼓送骨安置方丈客廳○中乃以方丈客堂爲假道場行中陰之儀五月廿二日

敬堂五七忌中山拈香六月六日敬堂盡七諱齋管領刑部所辨也陸座西來方崖和尚拈香少室和

尚

〔鹿苑院殿追善記〕北山准三宮大相國御道號尊靈御中陰御追善法事

應永十五年

戊子

五月六日酉刻薨

御年五十一

尊靈御中陰御追善法事

自十二日於北山御房座主御本房也御中陰儀被始之當門跡事賈俊大僧正以來異他之上當座主御房爲

御猶子儀而每事門跡內外爲御計之故也隆須自昨日十一被始之例日之間自今日有其沙汰也今日即御初七日也引聲理趣三昧被行之事師自辰時不斷光明真言晝夜十二時十二人供養注自十

三日三時被嗣之朝理趣三昧寶篋印陀羅尼有別慈救呪廿一反日中舍利請解脫房伽陀實圓唄供勤

散花院例時禮懺以下如常阿彌陀大呪七

十四日

理趣三昧如例日中駄都供養法予

十五日橋證以後寶體印陀羅尼七反無行道朝夕如常

日中駄都供養法前方便之後舍利講式解脫房有法事昨日駄都計者色少トテ被副講式了云々

九二五

佛式部三十五

佛祭下

九二五

東宮、一院、女院、中宮、くわんはく殿、つぎ／＼の殿ばら中納言どの、うへたかまつどの、おほかたすべて庭のひまなし、世中の布といふもの、すべてけふにつきぬらんと見えたり、僧どものそへもの、布施など、すべてなか／＼なれば、かきつくさず、いみじう世にめづらかに侍めりしか、その日やがて殿ばら宮、みなかへらせ給にしかば、御堂かきさましたるやうになりしかば、御堂の上下、みななみだをながしてぞ、あはれにこそわりにこそ見えしか。○中かの權大納言○藤原行成の御法事も、○九日同日世尊寺にてしたまひける、この僧ども、いごまあくをまちて、夜ぞせさせ給へる、あはれなる殿の御しにこそ。

## 〔平治物語〕三、頼朝被宥、遠流事

今日、斬ラル、明日失ハル、ナド聞エシカドモ、其日モ延ビケレバ、兵衛佐。○源朝是ハ偏ニ氏神ハ幡大菩薩ノ御助也ト、彌心中ニ祈念深クゾオハシケル、角一日モ命延ビタラバ、念佛ヲモ申、經ヲモ讀ミテ、父。○義朝後世ヲ弔ハントテ、率都婆ヲ作ラントシ給ヘドモ、人、刀ヲ許シ奉ラ子バ、丹波ノ藤三ヲ語ヒテ、小刀并木ノキレヲ乞給ヘバ、國弘何事ノ御手ズサビゾヤ、頭殿。○義朝ヲ始進ラセテ、御兄弟多ク失サセ給ニ、御經ヲモアソバサデト申セバ、兵衛佐、天下ニ物思者我ニ勝ル人アラジトコソ思ヘ、去年三月ニ母ニ後シ、今年正月父討レ給、義平朝長。○源朝ニモ別レ奉ルサレバ、此人々ノ菩提ヲモトハント思テ、率都婆ヲナリトモ作ラバヤト思故也、就中故頭殿ノ六七日モ今日明日ナリ、四十九日モ近附バ、異ナル供佛施僧ノ儀、コソ叶ハズトモ、ソレヲセメテノ志ニセント思ヘバ、小刀ヲ尋ル也ト宣ケレバ、國弘モ哀ニ覺エテ、彌平兵衛ニ此由ヲ語レバ、宗清感ジ奉リテ、小サキ率都婆百本作リテ奉ル、自モ造立書寫シテ、或僧ニアツラヘテ、形ノ如ク供養ノ儀ヲゾ達ラレケル、

## 〔百練抄〕

四十四條

天福元年五月廿九日癸酉、普賢寺入道攝政。○藤原莫十四終焉之時、各不可有面謁中

にてせさせ給きこしめしけるごきを、ほどけにつく々奉らせ給へるなりけり、其程の事ども、おもひやりきこえさすべし、いろ／＼の御ぞごもしかさねて、御誦經にせさせ給ふ、御たもとにむすびつけさせ給ふ殿の御まへ、藤原道長

たちかさね見すべきさまをしらさねばかねのおとにてきつとしらなん、これを皆わかたす、山の座主給はりて、

我しあればたしかにきせん心ざしいろ／＼ふかき花のたもとは、東宮殿ばらの御誦經みなり、

〔日本紀略後十四〕長元元年正月廿二日戊午、於法成寺被修、故入道前大相國藤原道長、四十九日法事、請僧百口、今夜上東門院藤原一經后并中宮藤原一經后、自法成寺還御上東門院、

〔榮花物語三十〕萬壽四年十二月四日うせさせ給て、藤原道長ついたらち七日の夜御葬送、御年六十

二にならせ給けり、中御いみの程くわんはく殿、藤原道長法華經一部あみた經あまた、經一げを

あげさせ給ひて聞かせ給ふめり、中又七日々々の御すきやう、僧達ひとわたり引わたすばかりの事どもをぞさせ給すていみじかりし御なごりなれば、末までめでたしと見えたりし

は、すの廿八日女院極樂淨土か、せ給ひて、色紙の御經などして申あげさせ給、その御法事あり

さま、かゝすどもおしはかるべし、殿の御まへには、百體の觀音をつくり奉らせ給、よるをひるに

いそがせ給、やがて御法事に申あげさせ給ふべきなり、千部の法華經おぼしめし初めたりしも、

いみじういそぎさせ給、これも此度同じうはとおぼしいそがせ給、中かくて萬壽五年藤原道長

年になりぬ、中御法事は藤原道長正月二十にせさせ給べければ、よるをひるに、よろづいそが

せ給、御ほどけは極樂淨土をぬひ佛にせさせ給ふ、御經は金泥正月廿八藤原道長日なればいと近

くなりぬといそぎたち給ふ、中廿日藤原道長なりぬれば、よろづゆすりあひたり、おほやけ、



相師於法性寺供養佛經被訪故大相國御書提也、四日癸酉於法性寺修故大相國七々奠、

〔本朝文粹十四〕爲亡息澄明四十九日願文

後江相公

弟子朝綱敬白、悲之又悲、莫悲於老後子、恨而更恨、莫恨於少先親、雖知老少之不定、猶迷先後之相違、伏惟亡息兵部郎中澄明夏季受病、秋初背世、今當七七忌、令修此惡業、中嗟吁幽靈、知我此志、稽首和南敬白、

天曆四年月日

左中辨大江朝綱

〔蜻蛉日記〕四十九日の事、たれもかく事なくて、家にてぞする、わがしる人、大かたの事をおこなひためれば、人々多くさし合ひたり、我心ざしをば、ほどけをぞ畫がかせたる、

〔源氏物語四〕かの人八の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、ことそがす、さうぞくより初めてさるべきものども、こまかにすぎやうなごせさせ給ふ、經ほどけのかざりまで、おろかならず、

惟光が兄のあざり、いとたうとき人にて、二なうしけり、御ふみの師にて、むつましくおぼす、もんざうはかせめして、願文つくらせ給ふ、その人どなくて、哀れと思ひし人の、はかなきさまになり、にたるを、あみだ佛にゆづり奉るよし、あはれげに書きいで給へれば、たゞかくながら加ふべきこと侍らざめりと申す、

〔榮花物語二十一〕御忌のほどなど、○藤原いとあはれにつれ、なる事ども多かり、○中二月

十八日、御法事、ながたにてせさせ給ふ、七僧百僧など、そのほどの御有さま、あるべきかざりせさせ給ふ、哀れにかなしうてすぎもていぬ、

〔日本紀略十三〕萬壽二年八月三日壬子、東宮○後妃○藤原尚侍藤原嫡子○後產男子、○冷泉五日甲寅、尚侍

從三位藤原嫡子○九、九月廿一日庚子、尚侍七々法事、

〔榮花物語二十七〕御堂には、かんのとの、○高御はうじ、九月廿一日に、あみだ堂

〔延喜式伊勢大神宮〕凡福宜、大內人、雜色、物忌父、小內人、遭親喪、不敢觸穢、及着素服卅九日之後、祓清復任。

〔性靈集〕藤左近將監爲先姐設三七齋願文

伏惟從四位下藤氏、旦登四德、晚崇三寶、朝厭閭閻、夕愍都率、身與華落、心將香飛、所冀時攀椿葉、數嘗仙桃、誰期秋葉易落、夜燈忽暗、而華不寫、鵲鵲悲、娥影滅、今窓月怨、逝者休、樂留人則苦、痛哉、苦哉、弟子等早丁荼毒、擗踊難居、號天扣地、肝腐心爛、綈管長運、三七忽臨、不凭三寶、何答岳瀆、謹於高雄道場、轉諷妙法、禮供金仙、伏願垂此善業、運彼逝榮、心連發於八池、覓藥開於九殿、法界總是四恩、六道誰非佛子、不謂怨親、悉歸本覺之自性。

〔性靈集〕爲弟子僧眞體設亡妹七七齋并奉入傳燈料田願文

夫佛有五智、因業各異、所謂阿哩也、囉多曇納委縛多他揭哆、卽是檀那之報德也。○中略想亡妹和氣朝臣氏、叱卦陶性、柔氣治身、天地覆載、早歲嬰孩之年、特怙懷哺、遂孤匍匐之齒、所冀崇四海於母儀、圖窈窕三泉乎天死、嗚呼哀哉、悲哉、奈何眞體等、悲運枝之半枯、痛同氣之一休、淚與朝露泣、泣心將晨霜消、竭日月過流、七七忽臨、謹以天長三年十月八日、先人所遺、土佐國久滿並田村庄、美作國佐良庄、但馬國針谷田等、永奉入神護寺傳法料田。田數在別殿兼延龍象演說大日經并設百味奉獻三寶伏願籍此妙業濟拔梵魂五智顯燄日之容三部現座月之貌見本有之莊嚴證妙覺之理智先考契一實於如如先妣得十力乎智智無明黑暗之鄉妄想顛倒之宅同照心佛之光明共焚蔥炬之熾炎。

〔本朝世紀〕天慶八年九月五日戊戌、今日前左大臣正二位兼左近衛大將皇太弟傳藤原朝臣仲平薨、十月廿二日乙酉、今日故左大臣家四十九日、建行極樂寺也。

〔日本紀略村上〕天曆三年八月十四日乙酉、戊時、太政大臣藤原朝臣忠平薨、小一條第。十七九月廿七日丁卯。第十四左相府實朝奉爲故大相國、修諷誦廿二箇寺、十月二日辛未。第十四是日右丞

被始御法會領寫供養

八月二日乙卯今日五七日也、一如三七日、五日戊午、自去夜伺候午初刻退出、

今日六七日也、一如五七日、八日辛酉、今日故女院七々日也、於般舟三昧院有御經供養中於泉

涌寺御法會法用理趣三

今日御中陰結日也、亦自去月廿三日到今日、於般舟院御中陰佛事之龍僧

三十口也、亦七々日連夜

當日別段勤行、兩寺別段警固武士無之、若狹侍從警固許也、

〔後愚昧記〕應安五年正月四日後、聞今曉梶井宮無品法親王恒鎮、故入、滅云々、二月廿三日、今日故

梶井宮四十九日佛事也、願文予公忠

實之、依任繼示之也、導師安養院良憲法印也、昨日實音卿、爲

彼宮於本所修佛事、願誦文可清書之旨示之、而本所願文清書了、一身相兼之條、先規不審、仍稱其由

返遣之、既及闕如、枉而可書送之旨再三懸望、仍今朝書遣了、先規可勘知之事也、

〔三中口傳〕中陰問事

中陰問裝束用布、是准俗家所申也、扇冬ノハ濃夏ノハ無薄也、

自四月着生奴袴ヲ冬ニナレドモ不練、自九月ハ着練奴袴、夏ニナレドモ不用生、是着始タル物ヲ

一周忌之間不改儀也、關白口入、粗有先規歟、

衣并奴袴可用平絹、

懺法次行恒例御佛供養日、中陰修臨時佛事是定事也、着素服者、群居簾中、不露顯、重服時、上齒因之

外、云強飯、云節供、事不違例、又吉事猶可行、又不可乘新車、着服人元三出仕、雖無先例、只不可指出歟、

又元三裝束、吉服不可有巨難、又彼事役人勤御陪膳事、尤可被除之、雖除服猶月忌等ニハ着墨色、先

例不可勝計、

〔源平盛衰記二十〕御所侍酒盛事

抑人ノ死スル跡ニハ、淺マシキ賤男賤女マデモ、程々ニ隨ヒ、香花燈明ヲ備ヘ、例時懺法行テ、亡魂

ノ菩提ヲ弔フハ、尋常ノ事ゾカシ、

右奉仰云、國母仙院升遐○正平十四年四月、後村上皇之後、忽忽光陰、白駒難繫、七七尊忌、赤烏云翔、爲奉資子後御菩提、所勤修大概如件。○中

正平十四年六月十五日

別當正二位行大納言兼右近衛大將通冬奉白

〔前恭禮門院御凶事記〕寛政七年十一月三十日女院○桃圖后恭禮崩御、院藤原富子十二月廿三日庚子、入夜自千種家到來如左、

一般舟院泉涌寺御法事中、勝手次第登詣可有之候備進物可被任先格候、

正月八日 同十日 同十一日 同十三日 同十四日 同十六日 同十八日

八日

御中陰御法事御日限、右之通二候、

一御法事中、火用心之儀、尙以堅可被申付候事。○中

右之趣申達候、尤次へも可被相達候也、

十二月廿三日

〔實久卿記〕弘化三年六月廿一日甲戌、武傳兩卿被參女院。○光格后新清和院、欣子內親王辰刻被歸參女院御養生

不被叶、昨二十日亥刻、崩御之旨言上、新大納言被奏之。○今日七月廿六日己酉、今日前新清和院初

七日也、於般舟三昧院御佛經供養、御導師前大僧正順忍、題名僧三人、參仕公卿內大臣、源大納

言、清水谷前大納言、實山科中納言、源宰相、有布施取殿上人四人、○名略於泉涌寺御法會、○口口

口口御導師果海長老、衆僧七口、參仕公卿源大納言、中山中納言、○忠新宰相中將、○公布施取殿上人、○略名

之廿七日庚戌、今日二七日也、於兩寺御法會、無公卿以下參仕、○中將今日廿九日壬子、今日三七

日也、一如二七日、三十日癸丑、今日四七日也、卯終刻着雁衣乘輿、○供侍參般舟三昧院、○今日先於

御牌前奉燒香念誦、已初刻被始御經供養。○中次參泉涌寺、先於御牌前御墓前奉燒香念誦、未初刻、



どせさせ給、またあかつきにどの、うへの御まへ、一品宮○三條皇女、ひとつ御車にて、わたらせおはします、どの、御方宮など、女房車二十ばかりあり、宮の女房、こたみばかりのみやづかへとおもふに残りなく参りたり、萬まだくらき程にて、おぼつかなければ、くはしくかきあらためず、おはしましつきて、此堂の北の方の廊におりさせたまふ、あかくなるに見れば、御まへよりはじめ、みな墨染におはしましあふにいとかなし、よろづしたて、ひつじの時ばかりにぞ事はじまる。○中殿の御まへ、道女院上東門院彰子、一條后中納言關白殿藤原通頼つぎの殿ばら、一品宮、みやづかさどもしもべまで、かたじけなきまでつかうまつること、かたはらいたし、女房の御誦經、みなきぬをぞつゝみてつかうまつる、御誦經に御装束二くだりなり、れいの御装束に、またあまの御装束にびいろにてせさせ給へり。○中ほどけは、このつくらせ給へる阿彌陀の三尊、御經のほどおしはかるべし、講師などの申つゝけ給ふありさま、中々なる物まねびなればかゝす、かくてことどもはてぬれば、かきさましたるに、一品宮は、やがてけふの御つばねにごゝまらせたまひぬ。

〔百練抄四條〕天福元年九月十八日己未、及晝有女院○後堀河后藤子崩御云々前年十月十九日庚寅、上皇○後堀河奉爲故女院、被修五七日御佛事未廿二日、日次、不俟仍今修之廿七日戊戌、公家於法成寺被行御齋會、依故女院御事也。

〔新待賢門院七七忌御願文〕一品内親王家

奉圖繪胎藏金剛界曼荼羅各一鋪

奉書寫八名普密陀羅尼經一卷

奉摺寫般若理趣經五卷 寶篋印陀羅尼經七卷 梵網經二卷 妙法蓮華經一部八卷 無量

義經一卷 觀普賢經一卷 阿彌陀經一卷 般若心經一卷

七日御誦經使、廿日丙辰、四七日御誦經使、雖當御衰日被立畢、廿七日癸亥、五七日御誦誦使、  
二月三日己巳、六七日御誦誦使、七日癸酉於慈德寺修東三條院御齋會中陰也、十日丙子修卅  
九日御法事、依明日坎日也、公家有御誦誦并布施、

〔榮花物語二十九の節〕

三月八日よりなやませ給て、萬壽四年九月十四日のさるの時にうせ給ぬ○三條后

藤原中略は、はかなく五七日にもならせ給ぬれば、日ごろつくらせ給へる五大尊、一萬の不動尊供養

したてまつらせ給、その頃は、あしき御もの、けごもにて、うせさせ給ぬれば、佛道さまたげにや

とて、今にたゞ極樂へとのみ御心ざしなりけり、講師にはけうえん法橋いといみじうつかまつ

る殿のうへの御前○研子母藤原長妻倫子など、いみじうなかせ給、女房など、おなかたはらいだと思ふま

でなければ、講師はあきれつゝ、をやみがちなり、御法事は十月廿八日とさだめさせ給へり、それ

は、しろかねの御ぐごもして、阿彌陀の三尊をぞつくり奉らせ給ける○中略かくて七々日の御あ

りさま、せさせ給ことゝも、えかきつゝけす、このたびの御ほどつけくらせ給御かざりの御れう

には、やまどのかみやすまのあそんのがり、たまをめしにつかはしたれば、京のいへにたてま

つるべきよしいひあげたれば、まゐらすとて、いづみそへたり、

かすならぬなみだのつゆをそへて、だにたまのかざりをまさんとぞおもふ、おなじ御れうの

たまを、ごんだいふためまさかこひたりければ、あかぞめ、

わかれにしたまはかへすにかたけれどなみだのみこそそでにかゝれる、どの、御こゝちも

こぞよりかくなやましうおはしませば、御堂のこど、よるひるいそがせ給、このみやの御こどの

のちいとゞくるしうなりまさらせ給へれば、あはれにこゝろぼそくおぼさる、いとおそろしき

ことになげき給へれば、御ほふじの僧の法服御誦誦のれうの御ぞの事、染殿にも、おほかたの人

口於法性寺爲太后修法會云々僧等給度者朝綱朝臣作願文吾自書之其文云々皇帝我稽首和南云々

〔本朝文粹十四〕村上天皇爲母后四十九日御願文

後江相公

皇帝諱成明稽首和南三寶境界蓋聞大寶蓮尊其四時而不凋摩尼珠光照三世而彌朗乃知八正分源斷疑網於愛海三明告曉飛覺月於昏衢者也伏惟先太后大慈在情撫萬姓於一子碩德被物頒十善於四瀛偏承靈愛既在朕躬爰移仙居於九重之裏營孝恩於萬機之先椒房花朝蘭殿雪夜春往秋來所視者珍膳之甘苦晨省昏定所問者玉枕之高卑一夕五起竊所庶幾也開計寶算之盈數獨歎喜懼之交懷銀燭金沙先朝之舊賜非可驚眼鶴綾鳳錦故園之浮埃誰敢留心唯須迎日月於仙家以祝王母之齒胃春秋於法肆以表臣子之誠扇梵風而增壽命藥師如來之本願殊妙降法雨而洗災患金光明經之威力最勝故鑄白銀鑄出滿月之容研黃金寫成貫花之偈其外奉書同金字金剛壽命經百卷般若心經一千卷兼期春風敬展講席哀樂如夢未就是界之壽禍福相改忽赴他方之遊翡翠簾前花枝添戀古之色珊瑚床下鏡匣遺染淚之塵坐憂臥憂空思瑤裙之去日何朝何夕再逢翠黛之歸時觸物之感莫不催悲方今佛經云空留何益今此之所講趣異誠同去年初心只契延齡之驗今朝新變欲開出世之門總擎惠業奉胡山陵噫婆遺哀縱肩千行於眼下真如新飾定現萬字於胸前仰願紫頭雲鬢鷄足山開無上世尊高並妙覺之座摩訶迦葉跪奉付囑之衣然後功德成林普開惠花於四生之意樹菩提分種將濕甘露於六趣之身田後應既俊佛心唯照本志無遠朕恨云何三世十方共垂證明稽首和南敬白

天曆八年三月二十日

〔日本紀略十〕長保三年閏十二月廿二日己丑東三條院○顯融崩于行成卿第四年廿八日乙未初七日御誦經使七箇寺四年正月六日壬寅東三條院二七日御誦經使十三日己酉故院三

中陰法事被始行、參仕公卿右衛督（手經）殿上人濟繼朝臣（但自今日不參經數日皆先着參吉服云）素服宣下無之故也。廿八日己卯、今日於般舟院（伏見）爲三七日御法事、有御經供養兼日因事傳奏及案內之問可構參也。十二月廿三日癸卯、傳聞今日於般舟院御中陰正日（壹七）御法事云々、有御經供養、御導師定法寺公助僧正也、依無施主然御願文只主典代獻御誦經文（例誦）此後舊臣結願經供養、導師同上、本尊普賢像（之例也）顯文予草滑書等共計會之、此外道場之儀、并着座公卿等、重可尋記之、今度御中陰四十一日事終歟、自十一月十一日至今日也。

〔墓量卿記〕元祿九年十一月廿五日、○此月十一七々々着座以下御治定分書付之、僧乞奉行、○中略

### 般舟院

初七日十一月廿七日○此下 二七日十二月四日 三七日同七日 四七日同八日 五七日同十日  
六七日同十四日 壹七日同十六日

廿六日、自今日於持明院有御法事云々、後開初七日廿七日之義、奉行傳奏、兼而武家傳奏へ不通處、存知之旨相違、自廿七日御法事有之分ニ覺悟、武家へモ其通獲通歟、今日御法事之刻武家警固武士不候、甚以不可然、奉行傳奏申屆之旨、疎略之由、武家傳奏令譴責云々、又凶事傳奏奉行所存者、七月七日之御法事着座公卿始布施取殿上人催之義、總而七々御法事之日義者令存知、其外每事御法事義ハ寺沙汰并武家之爲沙汰之由相存七々日、自御葬送七日ニ相當日ヲ爲初七日、先例又至唯今諸人之中陰如此處、自廿七月初七度初行分ニ武家傳奏覺悟、彼是令相違及違亂云々、可即記、十二月十六日、明正院御法事七々日結願也。

〔西宮記臨時四〕天曆八年正月四日、太后○臨御后於昭陽舍藏○中二月二十二日、當太后七々日御

忌、仍本宮於二條院修法會、午刻着東廂座（取黑樣袍、純色下殿、同）權大僧都延昌參上、供呪願齋會、如例、先是每當七日齋會、但不召僧云々、○中 三月二日御四十九日間、候二條院二十口僧給度者二十



非諷誦更無先規事也。十七日癸丑<sup>六</sup>公家於法勝寺被修御齋會依故院御法事也。廿四日庚申故院七々御佛事也。繁茂法師調新車十二兩分引御前僧云々。

〔敦有卿記〕貞治三年七月七日太上天皇<sup>光</sup>崩于山國御庵室依爲兼日御素意御中陰御佛事儀無殊事只於大光明寺每日大悲呪朝夕各一反每七日待夜誦誦許也。十二日今日五七日御佛事也。仍御幸大光明寺<sup>明</sup>光先拈香次誦經<sup>以上樂嘉</sup>次陞座拈香誦經<sup>以上仙洲</sup>廿六日今日七々日御佛事於大光明寺被行之如例先有御談義次誦經之外無殊事<sup>樂嘉御分於天口寺</sup>

〔太平記三十九〕法皇御葬禮事

感恩慕德舊臣多シトイヘドモ預メ勅ヲ遣サレシニ依テ參リ集ル人モ稀ナリシカバ總ニ龍僧三四人ノ勤メニテ御中陰<sup>光</sup>光ノ菩提ニゾ資シ奉リケル。

〔大外記師茂記〕貞治三年

大藏省

請雜物等事

調布佰肆拾端

黑葛拾貳連

筵伍拾陸枚

中取拾肆脚<sup>在勅</sup>

人夫伍拾陸人

右今月廿一日太上天皇<sup>光</sup>六七箇日七々箇日十四箇寺御誦經料依例所請如件。

貞治三年八月廿一日

正六位上行少承紀朝臣國益

〔和長卿記〕明應九年十一月十一日壬戌今夜御葬禮<sup>此年九月二十日</sup>傳聞自今日於伏見般舟院御

修之有百僧供、早旦各群集、布施口別、白布三段、袋米一也、主計允行政、前右京進仲業、奉行之云云、  
僧衆

鶴岳二十口。

六所宮二口

伊豆山十八口

宮根山十八口

大山寺三口

觀音寺三口

勝長壽院十三口

高麗寺三口

岩殿寺二口。

大倉觀音堂一口

窟堂一口

慈光寺十口

眞慈悲寺三口

淺草寺三口

弓削寺二口

國分寺三口也

〔古今著聞集<sup>十三卷</sup>〕後鳥羽院かくれさせ給て、四十九日の御導師に、聖覺法印參たりけるに、御佛事座をかさねて、ことをはりて罷出けるを、奉行人す、みよりて、七條院<sup>○後鳥羽母藤原殖子</sup>の御さたにて、臨時の御佛事あるべし、まばらく候はせ給へといひて、則佛經とりぐしたりければ、聖覺禮盤にのぼりて、恒例の佛經さんたんはて、結句に生ての別を天外に尋れば、蜀山の雲遙にへだ、り死しての悲を地下にもとむれば、霸陵の水轉明也、分段の習こりはてぬ、親共ならじ子ともならじ、上界の望は猶ふかし、我ためにも人の爲にも、只此句計をいひて、かねを打たりける、取あへぬ程に、めでたくぞつらねたりける、生ての別天外に尋れば、蜀山の雲はるかに隔れるといへるは、隱岐の御所の事なり、かれも是も歸にかなしき事なり、前後相違の御追善、あはれつきがたき事なり。

〔百練抄<sup>十四條</sup>〕

文暦元年八月六日壬申、畫方仙洞<sup>○後河</sup>

物忌

或云、去夜御絶入、今朝又有此事、及酉刻已

御事切給、春秋廿三、九月十日、丙午故院五七日御佛事、北白川院<sup>○後高倉院妃藤原陳子</sup>御沙汰也、今日御隨

身左近將監久清奉爲先院於法華堂、修小善諸卿參會、大藏卿爲長卿、書御願之旨趣、其狀非御願文

之。廿日丙寅，宰相中將被入來云，依院宣上達部早可參法勝寺者，是故院御法事可被行之故也。今日土御門前寮院佛供養等身阿彌陀一體，經廿部，又右衛門等身阿彌陀佛一體，金泥經一部，經廿部供養。今日故院御法事也。廿二日戊辰，今日丈六釋迦佛一體，大般若一部，宗章供養云々。廿三日己巳，御懺法之次，法橋信緣供養佛經半丈六阿彌陀一體等身八體，金泥經一部，素紙廿部，講師隆覺律師○被物六伊與守基隆等身釋迦三尊，千部經供養，信乃守盛重供養佛經半丈六阿彌陀三尊，造立金泥經一部，色紙經廿部，花机佛壇禮盤前机磬臺，散花机，經机廿前，花宮，皆悉新華美也。○中又播磨守家保六觀音木像，金泥五部大乘經，阿彌陀經千卷，經廿部供養，又以過差，凡人々佛經濟令屈畢，予退出不見殘事。○中長門守經敏供養佛經云々。凡人々功德不可記養。廿五日辛未，今日御四十九日也。院先遣御三條殿令達御懺法給以服御車，曉更御幸法勝寺阿彌陀堂。○南御所御法事畢，號故院女御之人，於白河新阿彌陀堂被佛經供養云々。講師覺譽已講被請，日者御前僧廿口云々，等身釋迦阿彌陀木像，金泥經一部，色紙廿部，前日者御前僧廿口被供養也。○中御冊九日間，人々所供養佛經，在別目錄也，此日記定有辦事歟，所聞及大略記之故也。

〔吾妻鏡〕十二建久三年三月十六日戊子，未刻京都飛脚參着，去十三日寅刻，太上法皇○後白河於六條殿崩御，御不豫，大腹水云云。十九日辛卯，迎法皇初七日忌，景於幕府被修御佛事，義慶房阿闍梨爲御導師，請僧七口也。幕下○源朝每七七日御潔齋有御念誦云云。廿六日戊戌，第二七日御佛事被修之，導師安樂房被崩御事，今日具披露于關東云云。四月四日乙巳，三七日御佛事也，導師慧眼房阿闍梨自今日幕下可令讀誦，每日一卷法華經給云云，是日來御日所作外也。廿八日己巳，法皇三十五日御佛事也，慧眼房阿闍梨爲御導師，布施綾被物二重，御馬一疋。置鞍云云，亦來四十九日御佛事，可爲百僧供，仍錄倉中并武藏相模伊豆爲宗之寺社供僧等可從其請之由，被下御寶行政仲業等奉行之，又於京師可被修御追善之旨，兼日有御沙汰云云。五月八日己卯，法皇四十九日御佛事於南御堂被

原忠令參給也予此後退出雨脚頻下黃昏例時次備中守忠經又供養等身阿彌陀三尊經廿部講師  
律師覺基云々其後每日三尺阿彌陀佛供養講師忠胤云々藤宰相每日供養也此曉懺法之次大貳  
經忠供養等身阿彌陀木像三尊經廿部講師覺心已講云々僧前料米三百石綿千兩進上云々  
閏七月四日相具中將未時先參女院御所則參院今日依爲四七日藤相公長實造立等身尊勝佛經廿  
部供養法印覺猷爲導師真言供養御前廿口僧爲讀衆但無鉢只四智讚許者經廿部同供養攝政殿  
以下出仕公卿皆參皆直衣皇后宮大夫取被物每僧給被物次等身阿彌陀佛御經廿部供養以已講  
維覺爲講師依當巡也事畢給被物餘僧布施許也次例時秉燭以前人々退出十一日丁巳今日五  
七日也新院令修御佛事御也十二日戊午今日院奉爲故院阿彌陀等身九體造立同經千卷金泥  
御自筆阿彌陀經九卷供養○中因幡守通基供養佛經等身阿彌陀三尊金泥經一部素紙經廿部供  
養十三日己未今日人々多奉爲故院於三條殿供養佛經云々內大臣等身一體金泥一部經廿部  
法眼行慶等身阿彌陀一體法性寺座主最雲近江守宗兼等身阿彌陀三尊經廿部備前守忠盛等身阿彌陀已上  
五人佛經供養云々十六日今日前齋宮善子又前齋宮侑子被供養佛經云々晴旦日之中家保朝  
臣造五智如來等身大般若一部金泥經一部經廿部十八日甲子今日當六七日也曉御懺法之次  
藤宰相供養阿彌陀佛講師忠胤院又供養觀音地藏不動尊云々午時許着直衣相具右少辨參入院  
令供養給尊勝佛丈六木像尊勝陀羅尼一萬遍導師法印覺猷真言供養無錢只四智讚許事畢皆給被物  
布施次仁和寺宮令供養等身木像阿彌陀佛金泥經一部四卷經尊勝陀羅尼經大寶樓閣秘密陀羅  
尼經素紙經廿部以覺舉已講爲導師每僧給裏物被物布施藤大納言以下取之給衆僧關白殿以下  
上達部皆參及申時予退出此後人々多供養佛經云々○中新中納言密談云院四箇度令供養佛經  
給也是偏以御倉物費用也全不召功物也成功物女院御產御祈料云々晚景雨下每當七日七箇寺  
有御誦經十九日乙丑今朝御懺法之次阿波守有賢供養佛經講師覺舉云々有賢供養寺院長官故丹後守資賢奉仕



安置御佛

東面

東庇敷高麗爲僧綱六人座南西庇敷紫端爲凡僧座北庇廳中爲新院鳥御所仁和寺

宮座其中欸戶並三箇間懸黑御簾南廣庇敷紫端疊爲公卿座東上南庭立三間帷爲御瀧御所中

略先藤宰相長實卿供養佛經等身木像阿彌陀佛一體色紙經一部素紙廿部忠胤爲導師院御于簾

中供養畢藤大納言以下皆取被物給僧廿口皆具被物也則早出佛畢此間小雨下二七日御佛阿彌陀佛等身

本像也金泥御經一部素紙廿部供養已講覺心依次供養事畢給被物諸僧布施許也藤大納言以下

取之佛經皆故院被沙汰置也每七日御等身阿彌陀木像金泥經一部素紙廿部每日三尺阿彌陀木

像一體素紙經廿部被供養也是皆御存生時被沙汰置鳥羽御倉也今日七箇日御誦經法勝寺白川新堂勝剛院

香隆寺已上每度殘三箇寺相替云々治部卿以藤宰相被奏新院云御正日以百七僧如大法會可被行於御法事者曼

陀羅供養讚衆卅口之由令書置御也而凡人禮以法事爲宗以正日爲次事仍頗先後相違也然者從

新院御方可被行佛事者御法事以百七僧可候也以曼陀羅供欲宛五七日如何且又舊例之處萬壽

四年御堂道長藤原薨給時本所法事百僧又上東門院以百七僧被行仍二箇度大佛事被行也者仰云

可云合權大納言者被尋之處上東門院例凶事已吉例囊何事可候哉と申了又重仰云猶思食之故

院有思食樣令書置給可有也御法事曼陀羅供養可有也者予申云偏如御遺言可候ハ不可有左右

也只如本可候之由奏畢廿七日癸卯三三七日御法事諸寺御今日藤宰相長實如初等身阿彌陀佛

造立經廿部供養每七日如此講師覺與已講廿僧有被物又左大辨爲子國防守等身阿彌陀佛造立供

養經廿部講師依仰覺晴勤也又例講講師行祐已講新院服御車調出初令乘給從北御門方引廻則

入御卅日丙午院今日爲奉故院臨時可令供養佛經給者仍辰時許相具中將參院畢丈六阿彌陀

三尊經百部阿彌陀經百卷御供養以覺與已講爲講師有御願文行盛朝臣作之朝隆清書說法體於

事表了事了講師被物三重諸僧各一重也外給布施予以下上達部七人或布衣相加之次又從皇

后宮等身木像阿彌陀三尊被供養經廿部講師律師隆覺有被物諸僧布施各措僧前下文關白殿

○

冷泉院五七日御法事也判官代以道朝臣依源中納言御消息來授御願文兵部權大輔宣云可清書

于時爲參院東帶之間也仍暫不束帶清書奉送了參院之間比至東三條殿左丞相座之由此參入

先參入之人右宰相中將着劔金宣藤大納言左衛門督右衛門督左宰相中將左三位中將不着暫之

皇太后宮大夫參同被着劔大夫問藤大納言以着劔否事納言答一條院御法事之日不着云々案之

法皇平生時參其宮之者不帶劔笏例崩後亦參院之人更不可帶至于此院不可用彼例依丞相命與

皇太后宮大夫先參院丞相此春宮大夫被參亦不帶劔大夫依同多解劔置笏余藤原同之未刻許

搥鐘僧侶參上此間內大臣被參暫就殿上座次入西渡殿座院司左大臣以下在右大臣被參即相引

諸卿就座庭殿南費子右宰相中將依衰日不入堂殿放出三間其西中間立佛臺平文懸極樂曼陀羅

一禪堂莊嚴如例願文書鈍色紙名香裏同色薄物妙法蓮華經一部開結阿彌陀心經等書黃昏銀堺

墨字羅紙以銀泥書外題延朝申之其講師前權大僧都院源讀師大僧都定澄三禮權少僧都慶命讀

師權律師懷壽唄阿闍梨散花阿闍梨覺緣堂達阿闍梨守聖此外卅僧請僧籠候僧在此中院司參議

以上不着素服十二月七日丙午公家被行太上天皇七々御齋會此日早旦權左中辨經通朝臣送

書云御經外題可奉書之由卽書之左史生孝樹爲使送之也書了欲持參束帶之間自行事所催遲由

卽便付奉送參院實經朝臣於南院被行先例無御願寺院之時於東西式部彈正在西中門南廣搥鐘

之後大臣以下着座講讀師等自東西參各有講讀師前治部玄蕃供奉如例無者用代官亦如例圖書

引堂童子大夫等着庭中座東者脫履就花机下公家御詔誦五百端啓白之間左近少將朝任朝臣就

講師座下仰度者之事須啓白之後可仰之早也亦着襖袍襖袍是難袍也從本官役者可着位袍歟

〔中右記〕大治四年七月十三日當故院白河此初七日然而未被始例時也十五日辛卯初七日佛

供養權少僧都實覺爲講師諸僧表衣甲袈裟指其裝束也廿日丙申依故院第二七日相具中將參

院本師也今日初參入人々或被參僧侶且在座之間西對代廊母屋三間東南西庇皆放上母屋中央間

奉寫金字妙法蓮華經一部八卷、無量義經、觀普賢尊勝陀羅尼、阿彌陀、般若心經等各一卷、奉寫墨字妙法蓮華經一部八卷、無量義經、觀普賢經各一卷、大般涅槃經一部四十二卷、

右先年依仰所奉寫也

以前供養尊像、演說妙典、造寫之趣、大槩如右、伏惟太上法皇、昔是無何在、心辭萬乘而脫屣、今亦有爲厭世、入三密而出家、去春以還、聖體不豫、摩耶入夢、毒龍遺吸珠之悲世尊患風、着城施獻藥之術優鉢羅之萼、三艱失方、枋檀榘之藁、一服無驗、略○中愛三五七之良因、聖主每度修福於七箇寺、四十九之惠業、國母臨期、開講於一伽藍、定知真如宮裏、三明之月更朗、菩提樹下、七覺之華爛鮮、略○中宮臣某且尋上皇之教、撰且奉中宮○朱雀皇后藤原種子之令旨、右膝着地、左手揮淚、令脩如件、敬白、

天曆六年十月二日

別當中納言從三位兼行春宮大夫左衛門督藤原朝臣師尹敬白

〔朝忠集〕六年○天曆八月十五夜、朱雀院みかど、かくれさせ給て、御四十九日こもり候ける殿上の人

人よみあつめけるに、

つれづれとへにけるとしをかぞふればむかしとほくも成にけるかな

〔日本紀略五〕冷泉康保四年五月廿五日癸丑、巳時天皇上崩於清涼殿十二六月二日己未、七寺修

誦、誦依初七日也、九日丙寅、先帝二七日也、發遣七寺誦經使、十六日三十七日御誦經使七寺、廿

三日庚辰、四七日御誦經使七寺、卅日丁亥、五七日御誦經使七寺、七月六日癸巳、六七日御誦經

使七寺、七日甲午、關白左大臣○藤原賴原於冷泉院奉爲先帝被修誦、以螺鈿箏、倭琴、橫笛、高麗笛、宛

之、十四日辛丑、於清涼殿被修先帝七々日御齋會、嘉祥三年例也、又舊臣等、於冷泉院修之、少僧都

觀理爲講師、

〔權記〕寛弘八年十月廿四日癸亥、入夜主計官人代茂方來、申冷泉院崩給之由、十一月廿九日戊戌、

官行事用度所須用大藏省物太上天皇崩後四十九日爲薰修之終焉

〔三代實錄三十九〕元慶五年正月七日丙辰太上天皇五七遣從七位上守左兵衛權佐兼尾張守藤原朝臣高藤尉一人府生一人於東大寺從五位下行左馬助安倍朝臣三寅允一人史生一人於興福寺各齋調布百五十端修轉念功德用穀倉院布也明日正當五七避重日故今朝修之廿二日辛未太上天皇七々設齋於圓覺寺王公畢會

〔日本紀略字多〕仁和三年八月廿六日丁卯今日巳二剋光孝天皇晏駕于仁壽殿九月三日癸酉是日先帝晏駕初七日仍遣使於近陵七箇寺修諷誦十日先帝二七日誦經十七日先帝三七日誦經廿四日先帝四七日誦經十月五日乙巳先帝五七日誦誦事於御殿轉讀大般若經限以三箇日請僧百口十四日甲寅是日修先帝七々日御齋會於西寺

〔本朝文粹十四〕陽成院四十九日御願文

後江相公

奉造其佛

事寫其經等

右去九月二十九日忽出冷泉之寶宮永遷真如之華界七々御忌已當今朝仍於圓覺道場奉供養件佛經○中言其尊儀娑婆世界十善之主計其實算釋迦如來一年之兄抑大般若經一部六百卷金剛般若經三百卷未揚通名忽作灰燼無相之月早歲雖顯寂滅之理有爲之悲難忘不待稱揚之期今日遺恨只在此事總警此惠業奉飾聖靈千官景從本是諸天之愛子九品雲發今則三界之慈親定知貪憐圓明之覺花豈敢往還煩惱之火宅功德之餘普及遠近敬白

天曆三年十一月十八日

別當前○前大納言源朝臣○陽成皇孫清隆

〔本朝文粹十四〕朱雀院四十九日御願文

後江相公

奉鑄純銀阿彌陀佛像一軀觀世音菩薩并得大勢至菩薩像各一體



五位上坂上大宿禰正野左京亮從五位下飯高朝臣永雄等爲東大寺使散位從五位下百濟王教福源朝臣類等爲元興寺使利部少輔從五位下藤原朝臣關雄散位源朝臣同等爲興福寺使散位從五位下丹墀真人繩主文室朝臣聖田麻呂等爲大安寺使前越後守從五位下丹墀真人氏永散位大宅朝臣年雄等爲西大寺使散位從五位下高階真人信澄在原朝臣善淵等爲法隆寺使散位從五位上百濟王慶世從五位下橘朝臣三夏等爲藥師寺使丙戌○先七七莊嚴清涼殿安置金光明經地藏經各一部及新造地藏菩薩像一軀屈請百僧修先皇七七七日御齋會

〔三代實錄清一和〕

天安二年八月廿七日乙卯文德天皇崩於冷然院親成殿九月七日乙丑遣大學頭

從五位上兼行東宮學士豐階真人安人存問供御葬之群臣安置十僧於近陵山寺四十僧於廣隆寺合五十口始自今日至于四十九日轉經念佛安置沙彌二十人於陵邊晝夜結番修大佛頂三昧并年之後當令得度十月十六日癸卯延五十僧於廣隆寺修文德天皇七七日御齋會公卿已下會集又分頭道使近陵諸寺修轉念功德十七日甲辰便請廣隆寺五十僧於東宮限以三日轉讀大般若經廣隆寺四十僧近陵寺十僧始自御葬明日至于四十九日讀經念佛

〔三代實錄三十八〕

元慶四年十二月四日癸未是日申二刻太上天皇○清和崩於圓覺寺十日己丑太

上天皇崩御後初七分遣使者於七箇寺修轉念功德從四位下行權左中辨兼木工頭藤原朝臣春景內藏允一人向粟田寺齋佛布施名香一斤和屯綿一連僧布施調綿二百屯勘解由長官從四位下兼行式部大輔橘朝臣廣相內藏助一人向圓覺寺右近衛少將正五位下兼行播磨權介平朝臣正範內藏允一人向常寂寺正四位下行右近衛中將源朝臣直內藏屬一人向禪林寺從四位下行內藏頭和氣朝臣彝範寮史生一人向真觀寺右兵衛權佐從五位下藤原朝臣敏行內藏屬一人向觀空寺從五位上行左兵衛佐源朝臣湛內藏屬一人向永尾山寺佛僧餽物並同粟田寺先皇遺詔不欲費官物故用內藏寮綿別修此事十一日庚寅於圓覺寺延僧五十口始自今日晝讀法華經夜誦光明真言辨

〔續日本後紀仁明〕水、和七年五月癸未、後太上天皇和崩于淳和院。己丑、修後太上天皇初七、誦經於京邊七箇寺。丙申、遣使於左右京、賑給以當。後太上天皇二七日也。

〔文德實錄〕嘉祥三年三月己亥、仁明皇帝崩於清涼殿。乙巳、晏駕之後、初、益七日、仍遣使於近隣七箇寺、以修功德。右近衛少將兼土佐守從五位下小野朝臣千株、及內豎十八、爲紀伊寺使。正四位下行大舍人頭兼越前權守高枝王、侍從從五位上島江王、刑部大輔正五位下藤原朝臣行道、內舍人一人、內豎十人、爲寶皇寺使。從四位上加賀守正行王、中務大輔從五位上並山王、散位從五位下藤原朝臣正岑、駿河守丹墀真人貞岑、爲來定寺使。從四位下大學頭時宗王、從五位下正親正善永王、刑部少輔藤原朝臣關雄、爲拜志寺使。從三位大藏卿平朝臣高棟、散位從四位下世宗王、從五位下永直王、內舍人一人、內豎十人、爲深草寺使。散位從四位下基棟王、從五位下安原王、大原真人宗吉、橘朝臣三夏等、內舍人一人、內豎十人、爲真木尾寺使。散位從四位下道野王、從五位下高原王、大判事藤原朝臣本雄、加賀介良岑、朝臣清風、內舍人一人、內豎十人、爲檜尾寺使。四月己酉、是日公卿會議定、先皇七七日御齋會司、中納言從三位源朝臣弘、參議宮內卿從四位上滋野朝臣貞主、參議右大辨從四位上藤原朝臣良相、參議從四位下式部大輔伴宿禰善男、散位從四位上源朝臣生、從四位下木工頭興世朝臣書主、右少辨從五位上橘朝臣海雄、散位從五位下藤原朝臣菅雄等六、位已下三人、爲御齋會行事圖書頭從五位下橘朝臣高成、左衛門佐從五位下紀朝臣道茂等六、位一人、爲造佛司。左京大夫從四位上正行王、雅樂頭從五位下藤原朝臣貞敏、侍從從五位下橘朝臣信蔭等六、位已下四人、爲莊嚴堂司。彈正大弼從四位下清原真人長田、治部大輔從五位上坂上宿禰正野、散位從五位上丹墀真人門成等六、位已下三人、爲供僧司。壬子、遣使於七箇寺、修二七日御齋會。每寺公卿大夫、并內舍人、內豎等一兩人、已未、遣使於七箇佛寺、修三七日御齋會。如前日儀。丙寅、遣使於七箇佛寺、修四七日御齋會。如前日儀。癸酉、遣使於七箇佛寺、修五七日御齋會。亦如前日儀。五月庚辰、修六七日御齋會。從

是三箇度也、明德被用、應安例云々、明德四滿親朝臣、爲度者使、吉服帶劔參入云々、

前院舊臣等、思々修御佛事、

本院御佛事、願文、端作某院云々、年號月日下有別當位執權位署曰、諷誦文、某院請諷誦事云々、年號下有別當位署、

治承度五七日七僧法會、爲中宮御沙汰、願文書月不乘年號日許、諷誦文中宮職請諷誦事、又年月日許也、可人諷誦也、准據條後准

舊院舊臣等、修御佛事、一品經供養、願文發端云、前院舊臣等、敬抽勇猛一心之志云々、文書年號月日書乘之、諷誦如常、

〔續日本紀三〕慶雲四年六月辛巳、天皇崩、壬午、自初七至七七、於四大寺設齋焉、

〔續日本紀十七〕天平二十年四月庚申、太上天皇正元崩於寢殿、春秋六十有九、壬戌、於大安寺誦經、

甲子、於山科寺誦經、丙寅、當初七、於飛鳥寺誦經、自是之後、每至七日、於京下寺誦經焉、五月丁丑、勅令天下諸國奉爲太上天皇、每至七日、國司自親潔齋、皆請諸寺僧尼、聚集於一寺、敬禮讀經、

〔續日本紀十九〕天平勝寶八歲五月乙卯、是日太上天皇武聖崩於寢殿、辛酉、太上天皇初七、於七大

寺誦經焉、戊辰、二七於七大寺誦經焉、乙亥、三七於左右京諸寺誦經焉、六月丙戌日二日、五

七、於大安寺設齋焉、僧沙彌合一千餘人、丙申、六七於藥師寺設齋焉、癸卯、七々於興福寺設齋焉、僧并沙彌一千一百餘人、

〔續日本紀三十六〕天應元年十二月癸丑、當太上天皇光仁初七、於七大寺誦經、自是之後、每值七日、於

京師諸寺誦經焉、又勅天下諸國七七之日、令國分二寺見僧尼、奉爲設齋以追福焉、

〔續日本紀四十〕延暦八年十二月乙未、皇太后高野新笠后崩、丙申、勅曰、中宮七七御齋、當來年二月十

六日、宜令天下諸國、國分二寺見僧尼、奉爲誦經焉、又每七日、遣使諸寺誦經、以追福焉、

せ川をいひ、尋初開男云々なども、ふるき物語書どもなどに見えたる事にて、その外も皆世の中にいひならへる説によりて、作りたるもの也さるをかへりて世にいひならへるは、此經より出たるものご心得たる人もあるは、いみじきたがひなり、つくりたる名ごものさまも、事のさまも、あらたにものしたるさまにはあらず、世の説をどれるほど、ふるき物をや、

〔尺素往來〕凡三十五日、謂之小練忌、四十九日、謂之大練忌、

〔拾遺和歌集七巻〕四十九日

すけみ

秋かせのよもの山よりおのがまゝふくにちりぬるもみぢかなしな

〔伊勢物語〕昔たかきこと申女御おはしましけり、うせ給ひて七々日のみわが安祥寺にてまけり、○下

〔狭衣四之中〕せちに戀しくおぼえ給ふ夕ぐれに○放哉部略

ゆめさむるあかつきがたをまちしになゝぬかにもや、過にけり、なごおぼしつゝけらるゝ、

〔續詞花和歌集九巻〕もの申けるをんな身まかりて、三七日許になりけるに、かの家につかはしける、

大藏卿匡房

かはるらん月日もまらず歎くまにあはれはつかも過ぎにける哉

帝室中陰

〔續日本紀十二聖武〕天平七年十月丁亥、詔親王薨者、毎七日供齋、以僧一百人爲限、七七齋訖者、停之、自今以後、爲例行之、

〔後成恩寺關白諒闇記〕御中陰後、舊院素服人除服事、宣下之上卿、着陣行之、御誦經度者使共羽

日法事、公家御衰日、并重復日被憚之、寛弘五七日、依復日、翌日被立之、建久依御衰日、止五七日法事、

七々御法事等數日被引上之、文永五七日、依爲復日、不被立御誦經并度者使、應安自三七日立之、彼



也。

〔佛說地藏菩薩發心因緣十王經〕爾時秦廣王告亡人言、哀哉、苦哉、弔苦、頌曰、

汝去過死山、漸近閻魔王、山路無衣食、飢寒苦何忍、

爾時天尊〇地說是偈言、

一七亡人中陰身、驅將墜墮數如塵、且向初王齊檢點、由來未度奈河津、

召於亡人坐門關、死天山門集鬼神、殺生之類先推問、鐵杖打體難通申、

第一秦廣王、不動明王、

〇按ズルニ、本書ニハ尙ホ二七三七五七六七七七百日一年千日等ノ事アリ、

〔玉勝間〕十王經

よに十王經といふ物あり、佛說地藏菩薩發心因緣十王經と題號したり、そのいへることゝも、  
 みなむげにつたなきいつはりごとのみ也、さるはもろこしにても、偽經といふ多くあるを、こ  
 れはさにもあらず、たゞ皇國人の作れるもの也、其文の中に、一切衆生、臨命終時、閻魔法王遣閻  
 魔卒、一名奪魂鬼、二名奪精鬼、三名縛魂鬼、即縛三魂、至門關樹下、樹有荊棘、宛如鋒刃、二鳥栖掌、一  
 名無常鳥、二名拔目鳥、我汝舊里化成關、示怪語、鳴別都頓宜壽、我汝舊里化成鳥、示怪語、鳴阿  
 和薩加、爾時知否、亡人答曰、都不覺知、云々然通樹門、閻魔王國、魂死天山南門、亡人重過、兩莖相逼、  
 破膝削膚、折骨漏髓、死天重死、故言死天、從此向入死山、險坂尋杖路石、願鞋云々、死天冥途間、五百  
 丈、縊那云々、葬頭河曲、於初江邊、官廳相連、承所渡前大河、卽是葬頭、見渡亡人名奈河津、所渡有三、  
 一山水潮、二江深淵、三有橋渡、官前有大樹、名衣領樹、影住二鬼、一名奪衣婆、二名懸衣翁、婆鬼警盜  
 業、折兩手指、翁鬼惡無義、遍頭足一所、尋初開男、負其女人牛頭鐵棒、挾二人肩、追渡疾瀨、などいへ  
 る別都頓宜壽はほど、ぎす、死天山はまでのやま、葬頭河はさうづがは也、所渡有三とは、みつ

附 中陰

佛家ノ説ニ據ルニ、凡ソ人死シテ後、極善ノ者ハ、即チ善所ニ生レ、極惡ノ者ハ、徑ニ惡趣ニ生ルレドモ、善惡ノ未ダ極ラザル者ハ、中有ノ身ヲ受ケ、其善惡ノ輕重ニ從ヒテ、七日ゴトニ轉生シ、七々即チ四十九日ニ至レバ、必ズ他處ニ生ル、是ヲ累七ト云フ、是レ則チ中陰ナリ、因テ七日ゴトニ、死者ノ爲ニ佛事ヲ修シ福ヲ薦ムレバ、惡趣ニ赴クベキモノモ、善所ニ至ルコトヲ得ルト云フ、中陰ノ法事ハ實ニ此ニ本ヅク、而シテ特ニ、初七日、五七日、七々日ヲ以テ、重シトス、抑、此法事ハ、吾邦ノ史ニハ、始メテ文武天皇ノ登遐ノ時ニ見エテ、帝室ヨリ以下凡庶ニ至ルマデ、例トシテ之ヲ行ヒ、終ニハ中陰ノ三箇月ニ涉ルヲ忌ミテ、遞次ニ日ヲ縮メテ行ヒシ事アリ、要スルニ中陰ハ服紀ト混ゼシ者多ケレバ、互ニ相參看スベシ、又生前ニ自ラ中陰ノ法事ヲ行フアリ、是ヲ逆修ト云フ、事ハ釋教部ニ詳ナリ、

名稱

〔蓮歩色葉集〕中陰

〔餞頭屋本節用集〕中陰

〔貢丈雜記〕凶事十六中陰云は、人死して、七々四十九日の間を云、中有とも云、四十九日の間は、死したる人、極樂へも行ず、地獄へも行ずしてまよひありくによりて、法事をして、極樂へおもむく様にする事也とぞ、是は出家方の説なり、地獄極樂の事なごは、方便の説にて、皆假に設たる儀なり、

〔釋氏要覽〕雜下累七齋 人亡、每至七日、必營齋追薦、謂之累七、又云齋七、瑜伽論云、人死中有身、其化起一相、似身、若未得生緣、中陰經云、中有、極善惡無中有、既受中有身、即中下品善惡業也、故論云、餘業可轉也、如世

轉生死、乃至七七日止、自此已後決定得生、又此中有七日死已、或於此類由餘業可轉、中有種子便於餘類中有生、今茲經旨、極善惡無中有、既受中有身、即中下品善惡業也、故論云、餘業可轉也、如世七日七日齋願、是有身死生之際、以善追助、令中有種子不轉生惡趣、故由是此日之福、不可闕意、

宣陽門院中男女致屈言。二日癸亥召兼光光雅等卿仰御忌月○後不可被置之間子細兼光卿深  
 以伏理光雅卿日本不可有忌月之禮之由議奏之人也。九日庚午今日依後白河院御忌月臨時祭  
 可移他月之由雖令申之趣依其理不改也。凡奉爲皇祖置忌月例我朝無跡非親帝行退密之禮只承  
 和一代也彼後度已不置御忌月可何及異議哉。

〔公卿補任〕

元

延寶九年○天和元年

九月十五日石清水放生會去月依御忌月

○元

寶八年○御父後水尾延

引上卿葉室大納言參議左衛門督辨俊方宣命奏上卿右大將奉行隆眞朝臣。

〔源氏物語乙女〕

「ささらぎの廿餘日朱雀院に行幸あり花ざかりはまだしき程なれば彌生はこ

宮○源氏物語乙女の御忌月なりとくひらけたる櫻の色もいとおもしろければ院にも御よういここにつ

くろひみがせ給ひ行幸につかうまつり給ふ。

〔宗建卿記〕

享保廿年十二月十二日武傳參洞自主上○櫻

被仰進來年正月母后新中和門院○中御

斷向子享保五年正月二十日

御忌月節會可有如何之旨勅問關白左右大臣之處則被獻勅答之間被入御覽於

然者元日白馬等も被停止國栖立樂等尤不出御候歟於踏歌者被止節會可然候歟。

〔殿曆〕康和四年二月二日丁亥今月齋月也雖然忌月上爲身重服仍念珠雖然不會僧尼服者又祭日

ハ不可念珠其間事等皆民部卿に示合也非服時不可企念珠縱雖忌月非服時者可有憚歟。

〔中右記〕大治五年十一月八日丁未新中納言師時密語云當忌月人不着穩座事也今月故入道左府

十一〇源後房保安二年十一月十二日

莫忌月也仍不着者早退出而問兄師賴卿着穩座如何兄弟二人作法已殊何是何

非可尋知歟。

〔明月記〕建久十年二月廿二日甲申春日祭日也去正月依蒙催勤仕使役抑今月忌月也仍申其由之

處不可憚之由重有院宣仍領狀上申日去十日也依關東穰氣延來洛中被行祈禱御卜諸社祭延引

被用下申日云々。

孝明帝忌月、請獻俘、不作樂、方慶謂禮有忌日、無忌月、亦引荀訥等忌時忌年之說以折之、草公肅傳、舊制忌日之前三日、後三日、皆不聽事、公肅亦引禮無忌月之說以著其非、

○按ズルニ、支那ニハ、夙ニ忌月ノ說アリ、晉書ニ、穆帝納后、欲用九月九日、是忌月、范汪問王彪之、答云、禮無忌月、不敢以所不見便謂無之、博士曹耽荀訥等、並謂無忌月之文、不應有妨、王治曰、若有忌月、常復有忌歲、トアリテ、此後萬歲通天中、建安王攸宜、契丹ヲ平グテ凱旋セシ時、孝明高皇帝ノ忌月ナルヲ以テ、闕ニ詣テ俘囚ヲ獻ズル際、軍樂ヲ廢セントス、サレド侍郎王方慶等禮經ニ此事ナシト論ゼシ事、唐書ニ見エタリ、

〔年中行事秘抄正月〕元日宴會事

御忌月例

國栖奏源右府說、唯奏歌不奏、留源戶部說忌月制作樂、注云、歌又同之、奏笛之說、不得其意、天仁止  
音樂并

參例長元四七

〔日本紀略四七〕康保三年正月一日丁卯、不受朝賀、有小朝拜宴會、但無御出、依御忌月也、

〔小右記〕長和五年六月二日甲戌、今日遷幸一條院、中略、今日雅樂寮不奏樂、依御忌月、〇一條、寛弘  
八年六月二

十二日、歟、後日間頭爲成、申云、依例祇候、臨事可有定歟者、仍觸行事上俊賢卿云、不可有音樂之由、已有其定、可仰外記者、仍不奉仕云々、

〔百練抄後三條〕延久四年、後冷泉後三條兩代之間、不被行踏歌節會、依朱雀院御忌月也、

○按ズルニ、後朱雀天皇、寛德二年正月十八日崩ズ、百練抄ニ朱雀ニ作ルハ蓋シ誤ナリ、而シテ踏歌節會ハ正月ナリ、故ニコレヲ行ハザリシナラン、

〔玉海〕建久五年三月一日壬戌、親宗朝臣來云、御忌月不可被置之由、依令申奉爲故院、〇後  
河不忠之由、



蓋出自釋氏乎、余曾聞老浮屠之談曰、七年忌以上至百年忌之說、不見佛書、自本朝中葉偶行之、三百年來、無貴賤皆有此事、年忌既然、則月忌亦可然、苟志於儒學者、年忌月忌不可說也、然行三年喪之難者、不能爲之而廢、每月忌之易者、爲之而食肉、則事亡之禮、追懷之情、不如世俗不識字者、況於古禮之制乎、然則雖辨月忌之非古禮、暫從俗素食、在家齋戒、則或其免咎乎、

〔康富記〕文安四年四月三日甲子、先人御命日也。

〔御文三〕抑今日ハ、懿聖人ノ御明日ハ、イイデ〇親鸞弘長二年十月二十八日、トシテカナラズ報恩謝德ノコ、ロザシヲハコバザル人、コレスクナシ、略中

文明七年五月二十八日書之

忌月

〔江次第抄元日宴會〕御忌月并不出御儀

忌月、先皇并母后崩御之月也、當忌月之時、元日白馬無出、御止音樂、十六日節會、總不被行之忌月出御例者、天永四年正月三日、御元服後宴被附行元日節會、元享元年十一月廿三日、豐明節會、懸御簾出御、此外無先規、而永德二年正月一日有出御、內辨內府鹿苑院准后〇足利義滿初度勤仕無出御者、可爲無念、仍准據天永元享例出御云々、但檢本文、有忌日無忌月云々、天永元享諸道勘文同有此儀也、御忌月時唯奏歌云々、

天曆九年以後、長和二年以往、正月一日節會、依御忌月止國栖奏、或只奏風俗不奏笛、永承三年正月七日節會、內辨內大臣也、國栖奏歌不奏笛、永久二年正月七日、內辨內大臣也、國栖奏風俗不奏笛云云、

〔陸餘叢考三十三〕忌日忌月

六朝時、又有忌月之說、晉穆帝將納后、以康帝忌月疑之、下其議、荀勗王洽等謂、古但有忌日、若有忌月、則更當有忌時、忌年、益爲無禮、南史張融傳、融有孝義、忌月三旬不聽音樂、唐書王方慶傳、議者以

傳受シ、印信ヲモユルシタク思ニ、此僧年十九ニ成ケレバ、灌頂ヲモユルサズ、シカモ風氣ヲモカリケレバ、老耄ノ上、病サヘ日カサナリテ、傳法ノムナシカラシ事ヲナゲキテ、弟子ノ僧共ニ、炎魔天供シ、テ命ノベテ此僧ニクハシテヤウ授テ慧命ヲツガント思フ由シ申合ス、弟子共此御年ニテ御祈禱ハ、人聞モ不可然、詮ナキ事也ト諫メ申シケレドモ、我命ノ惜ニハアラズ、法命ヲコソオシメ、人ハイカニモイヘ、イタム所ナシ、法ノ爲メ、百日ノ暇申サンニ、炎魔王、ナドカタマハザルベキトテ、行法始サセヌ、十月ノ初ナリケルニ、正月ニハ灌頂ヲコナフベキ用意ニテ、百日ノ加行、同ク始ム、去程ニ心地例ザマニ成テ、要法ナンド且傳授シケリ、サテ我身ニハ、密教ノ肝心ヲ傳テ、彌陀ト地藏ト一體ノ習ヲ知レリ、略中然バ大乘ノ法ニアヘルシルシニ、地藏菩薩ニ隨逐シ奉テ、光明眞言ヲ誦シテ、地獄衆生ヲ加持セント思ナリ、サレバ何レノ日死セリトモ、廿四日ニ、我月忌ヲパスベシ、ヤガテ今月廿四日ヨリ月忌始ヨトテ、伊豫ノ阿闍梨ト云弟子ニ、十月ニ月忌始ヲサセテケリ、サテ正月十四日ニ灌頂ノ作法違亂ナクオコナヒヲハリテ、十五日ヨリ、又病起リヲモレリ、今ハ思事ナシトテ、聖財世寶ノ付屬沒後中陰ノ用意ナンド申ヲキテ、偏ニ臨終ノ支度也、

〔公忠公記〕貞治二年六月廿二日、忠光卿示送云、今夜着陣、雨降之上、明夕關白宣下、下條前關白再任云々〇藤原夏基可奉行之、兩理難治之間、明日雖爲亡父、實藤大納言月忌爲公事之治定上者、被有<sub>レ</sub>用之由存候也、

〔陰涼軒日鑑〕寛正三年二月二十四日、京極教智依手脚不便、申入道之御暇并衣、仍普廣院殿、〇足利義教、嘉利其時重可被<sub>レ</sub>仰出之由有之、教智居士在于當軒、仍命此旨也、

〔元長卿記〕明應十年二月十七日、後常樂院殿御月忌也、自曉天念誦廬山寺竹中入來、每<sub>レ</sub>月之事也、

〔登峯文集六十三〕答蘆田氏忌日間

來書曰、今末俗、每月之忌日、素食傳習而不廢、此人心遺哀之所然、自不能息也云々、熟思月忌非古禮



印堂童子

○藤原兼仲

并爲俊勤仕法用了收花筥如例佛經供養數刻表白了給御布施御導師被物一

重中御門亞相取之

○預法印傳之

裏物重經朝臣取之題名僧紙裏各一兩卿并重經朝臣予爲俊信經等各

一反取之小時退出

六年十一月十七日丁卯早旦參龜山殿御月忌○後嵯峨當番也奉行人親忠依所

勞不參當日事可汰沙之由相語公卿帥前藤中納言大藏卿參入僧御導師靜明法印題名僧禪助法

印已下七八口計參仕御經御布施等知嗣朝臣被沙汰進每事雖催具院山○龜山御幸遲引之間數刻抑

之

〔花園院天皇宸記〕元應元年八月三日乙卯依御月忌

○伏見

參衣笠殿如例先懺法聽聞了召英成尙康

等永福門院御惱事令評定西園寺大納言候其座酉刻許御月忌如例導師憲守已講先々御月忌於

明靜院被行之而後深草院御影內被籠御骨仍御如法經間被憚之仍於顯成院被行之初夜懺法聽

聞了退出

〔親長卿記〕文明十一年二月廿四日參安禪寺殿有點心時等未刻許參內

○下寮

以勾當內侍申云關白

宣下事可申沙汰云々但於廿七日者舊院○後花園文明二年十二月二十七日崩聖忌宣下不審之間尋申右府之處注

進如此之間但可爲寂慮之由申了仰云爲本家申請之上者爲上難被仰是非但本人有斟酌者可然

之由有仰但先皇聖忌有例者不可及是非重可尋申由有仰已於番衆所參會勸中仰此子細了何樣

可申參云々廿六日早旦參內隆之番請取也○予來月請取之立誓締三品了自陽明○近有御使關白宣下事明日

依聖忌○後花園院可斟酌之樣及御沙汰云々儲日爲來月五日雖然元長申沙汰於來月者難治云々何樣

可被仰合勸修寺大納言云々廿七日關白宣下事今日延引舊院聖忌強不可好用歟之由爲寂慮

之間延引申但後日先皇聖忌宣下例有之云々但不依例之有無聖忌之日好用之樣御不審之由有

仰之故也

〔愚昧記〕安元三年正月八日己酉今日故女院○近衛后九條院藤原皇御月忌也可參御齋會之故着



毎月御忌日、前夜より當日御精進夜に入、御精進解御年忌御稱忌日は前夜より當日夜中迄御精進。

〔重矩常行記〕故内膳殿重昌氏○三十三年忌ニ寛文九年重矩鞍馬江御參詣ニ市原といふ在所御通

候處三丁程水の流を渡る、彼在所は勿論鞍馬の奥より京都江薪柴持て往來の男女彼川を渡る、

重矩寒氣之節、往來の者辛苦を御察し、爲御追廻、近郷の者ニ道を付替、外ニ害ニ成候哉否を御尋

之處ニ、何之痛無之、御附替被遊候ハ、難有可奉存候爲渡世京江出、寒氣之節、辛苦仕候仍而賀茂

村之田地を御調べ、川筋の道を除山手の方江被成御附替候、彼在所之者往來之者大ニ悦、重矩御

卒去之後、彼在所之者、右之御恩を爲報、附如意山補陀落寺真言宗北山市原村にあり、重矩之御位牌

を建、御忌月御年忌には彼寺に集り、大念佛を執行す、

○按ズルニ、此他藤原鎌足ノ忌日ニ興福寺維摩會アリ、内麻呂ノ忌日ニ興福寺法華會アリ、サ

レド此等ハ皆釋教部法會篇ニ詳ナレバ、此ニ略ス、

〔書言字考節用集二〕月忌イナチ忌日 命日イナチ忌日

〔山槐記〕安元三年四月八日丁丑今日院白河後御堂供養也、○中御堂供養了、有御月忌事、於例寢殿有

此事、予志親原以下候之、取布施即退出了、

〔明月記〕建久十年二月二日、參入條殿、鳥羽院保元元年七月二日崩御月忌、自今月於此御所可被行由聞之所

參也、今日依日次憚、自三日可被行云々此年來於安樂院被行也

〔勤仲記〕弘安五年十一月十七日癸酉、早旦參龜山殿、故院後醍醐天皇御月忌當番也、勘解由次

官爲後奉行、多年顯家奉行、自九月辭申云々、予參之程、無人數寂寞也、範譽法印參會、所談雜事也、小

時兩院草龜山御幸、以宗親朝臣具敷之由被尋奉行人大略具之由申之、兩院入御御聽聞所、公卿中御門大納言、大藏卿、邦經、藤宰相、賴親、各布着堂前座、僧靜明法印已下七口着座、兩方御導師忠源法

精進讀經計也、不修作善、無念之至、世上依物廢路次之儀、不叶故也、

〔宜胤卿記〕文明十二年十月三日己酉、故一位殿○中御門明尊、長祿三年十月三日薨、正忌也、追善如例、引小布施海住

山亞相、綾小路黃門入道、一條前黃門、西川前相公、二條前相公、樂邦院橋本羽林等來、各被食精進飯、可參詣墳墓之處、甚雨之上、件土一揆、去夜又蜂起云々、旁停止了、詣誓願寺真如堂、

〔宜胤卿記〕文明十三年二月六日辛亥、祖父大納言殿○中御門後轉、正忌也、令招請了、永享十一年二月六日

薨給、當年四十三年也、

〔親長卿記〕文明十九年八月廿八日、今日亡母正忌也、自去十五日精進念佛也、依窮困不及別作善、當年廿九年也、

〔親長卿記〕明應五年六月廿三日亡父○甘露寺房長、永享四年六月二十三日卒、遠忌如形、

〔宜胤卿記〕文龜元年十月三日戊申、先考○中御門明尊、長祿三年十月三日薨、御正忌日也、請僧小布施物等、如例年、家

幸朝臣、則康等、齋食招引攝席、其外近所之詰衆等來、食後參詣真如堂并墳墓○直垂、備涙、當年四十

三年也、如昨夢、

〔宜胤卿記〕永正元年八月四日壬戌、義祖三條右相府○藤原定方、承平二年八月四日薨、今日御正忌也、余爲一家之長

者、經供養、於勸修寺可遂行之處、亂來退轉、無再興之力、尤遺恨、

〔二水記〕永正十七年十月九日、養父正忌、請僧了、午時參內、有御楊弓○正忌日參內、事可斟酌也、

〔將軍德川家禮典附錄二十六〕將軍德川家御歷代御忌日

大奥向安政度之留記

征夷大將軍太政大臣家康公

東照宮贈正一位

元和二年四月十七日薨御

依御神事無御聽聞御導師房檢律師題名僧二口良兼律師今一口不見知說法了給御布施予○原兼  
仲取御導師被物顯相取同裏物時方賴奏輪轉取之予兩反取之四位家司業行朝臣雖祇候不取之

〔勘仲記〕弘安七年四月廿七日乙巳先妣御遠忌也供養佛經寶篋印陀羅尼供一卷予手自書寫功能甚深依有所思供養也房勝內供爲唱導僅往事之悲淚外無他事也

〔康富記〕應永廿九年五月二日戊午等持寺御八講始也來六日爲鹿苑院殿○足利義滿應永十御月忌之間爲御佛事每年武家御沙汰也

〔康富記〕應永廿九年十二月二日乙卯自今日等持寺御八講始日五箇如五月自南都北嶺參會也着座公卿殿上人濟々被參云々來七日故寶篋院殿將軍義詮○貞治六御忌日也爲彼御佛事自今年每年可被行之由自室町殿被仰候者也

〔親長卿記〕文明十三年六月廿四日等持寺御八講自今日始行云々勸修寺大納言教務申沙汰也但依所勞參仕事不叶每日語勸修寺中納言經茂參仕云々行事辨元長自兼日承仰參仕室町殿并御臺等有御聽聞仍待彼御出行遲々未刻許元長已刻許參仕衆與有渡御室町殿御與御臺朝夕座了有還御朝座了有行香公卿七人元長加行香云々

前藤大納言實世菊亭大納言公興園前中納言基有昨日來行香之教務代勸修寺中納言經茂中御門中納言宜胤西川藤宰相房任二條前宰相實冬等也行香之時通賴秀綱所立公卿列在輪火舍六位藏人兼致直取之綱所不傳之兩條不審事也予先々參仕之時綱所不列立火舍綱所傳六位如何人々無案內歟但綱所有列公卿事歟

廿六日元長參等持寺如昨日第三參仕公卿通賴秀廿七日元長參等持寺如昨日第三參仕公卿通賴秀廿七日御八講依布施米下行無參仕之僧衆終日相待之處入夜延引之由自勸修寺示送迷惑了希代事歟

〔後知足院記〕應仁元年六月二十九日故禪閣○藤原忠朝享德三御正忌日也自去二十三日至今日

矢合ト定テ、東西ノ城戸ヨリ、兄弟○源範賴大將軍トシテ、攻ベキニゾ有ケル、抑源氏ハ、入道ノ忌日ニ、芳心情アリ、

○按、ズルニ、清盛ハ、治承五年養和元年閏二月四日薨ズ、今年方ニ、第四年ニ當レリ、

〔吉記〕元暦元年十一月十日、今日、先考○藤原經房父光房、仁平四年十一月十一日卒遠忌也、念佛丁奉仕御佛經阿彌陀經一部□

以寶慈律師爲導師、布施一裏三般四事供養、飲食米、穀、衣、服、衣、臥具、一枚醫藥以錢用念佛衆六口、四事

同前也、云々、温室事、左右獄施行、清水坂温室、已例事也、

〔續後撰和歌集十卷〕天台大師の忌日によみ侍けス

そのかみのいもゐの庭にあまれりし草の筈も今日やしくらん

大僧正慈惠

〔袋草紙四〕慈惠僧正

そのかみの雲井のにはにあまれりし草のむしろもけふやまくらん

右樹下集、天台大師ノ忌日ニ詠之、千僧贖一之意也、

〔西山上人傳報恩抄三〕十四日光明大師の忌辰、二十五日黒谷上人の月忌には、觀經講説の法席を

のべ、往生淨土の要義を談じて、和漢の祖師の報恩に資して、道俗見聞の安心をす、め給ひけり、

〔吾妻鏡二十七〕安貞三年七月十一日、當于故禪定二品源賴朝妻政子、嘉祥元年七月十一日薨御月忌於勝長壽院被

行一切經會、相州北條時房武州北條時義被參、

〔明月記〕寛喜二年四月四日乙丑、月輪殿藤原基實、承元元年四月五日薨八講、先々爲四五兩日、今年爲五六兩日高家

行奉 九日庚午、去五日、月輪殿八講、九條大納言殿、中納言賴資、參議伊平家光、三位範宗、基定、殿上人

四人、

〔吉續記〕文永四年六月九日、依爲亡父之遠忌不出仕、

〔勘仲記〕弘安五年十一月廿一日丁丑、參大宮殿、殿下藤原基平御母儀御忌日也、被行御佛事、時方奉行、



女院、關白、其室并三箇所也。今日余不修也。次說法、神也。又妙也。誠是富瑠之再誕歟。抑又當世之一物也。滿座動心、精衆人驚耳目。次論義、同覺長僧部問答。次布施、關白已下取之。關白手長二位中將取之手長女院五位判官代也。余於西廣次加布施兩度。關白室及二位中次撤布施。次僧侶退下。此間賜馬鹿取之。自餘公卿於中門應取之。一匹於證誠覺珍僧正。於中門外給之。不引出馬一匹。賜余。其儀同前云々。余前近次公卿起座。余及關白、參女院御前頃之余退出。抑自第二日也。初以山階寺權別當教緣法師被加證義者覺珍法印訴曰。教緣覺智共是公家御入講之證誠也。而抽一人被召加之。覺智獨勤乎講師之條爲身爲道大耻辱也。何況覺智自故禪閣御時、殿中奉公敢無比肩之者。縱雖非據事於殿中之事者。一度可施面目也。至于此時顯耻當時貽例於後代。早賜身假欲免列座云々。而關白被示云。所申可然。但十口之入講證誠三人可謂過分。就中元永之例。口御八講也。與福寺兩別當爲證義者。今度偏欲逐彼例。強勿懷愁辭者。覺智猶不耐忿怒之思。勘十口之入講證誠三人四人之例。重以訴申之。元永之例可然。但彼時講師之中雖有。如覺智者。不被召證誠者。尤可被准據。不然者更不可似其例。就被仰下。彌得覺智之理者也云々。然而遂無承引之間。欲逐電。而女院被誘仰。仍愁參勤云々。後日覺智來語云。此事兼日皆申證事也。而臨期有如此之事。彌悲歎之。膺難休云々。

○按ズルニ、忠通ハ長寛二年二月十九日薨ズ。今三月ニ法會アルハ、延引セシナラン。  
〔千載和歌集九〕大納言公實身まかりてのちかの遠忌の日よみ侍ける、

花園左大臣有仁の室

かぞふればむかしがたりに成にけりわかればいまのこゝちすれども

〔源平盛衰記三十〕福原忌日事

二月元暦三日、源氏ハ一谷ヘ向ベシトテ、勢汰ノ評定アリケルニ、明日ノ四日ハ、故太政入道平盛ノ忌日ト聞ユ、佛事ヲ妨ルコト罪深シ、延引スベシ。五日ハ西塞リ、六日ハ惡日也。七日ノ卯刻ノ

佛普賢一編爲持佛經大集經第二帙手自端三行奉書并外題等也書之布施供養存例○中雖爲陪  
膳番依遠忌不可參內之由先日示藏人衆光畢七日壬午今日先妣御遠忌也仍午刻向觀音寺堂  
修小佛事以一幅馬頭觀音美麗奉圖先妣平生之時圖六觀音像賜六口聖人每日有所作被祈御苦  
提之事雖御沒後于今無怠而作馬頭像於持聖人之許燒失仍殊爲不令違彼御意趣仰同佛師奉圖  
上表紙有不動種子下表紙有觀音利生文件字等源空園梨書之仍一筆令書之件人近年在高野御  
山去二日專青島去夕歸來者也供養了賜聖人畢經摺寫大文字法花經爲法華儀法之讀經也事々  
有所存也二年九月一日庚午今日先考遠忌也送佛經法花曼荼羅三帖於觀音寺依有病者不參向也

七日丙子今日先妣御忌日也送佛正觀音經法花於觀音寺堂依有病者不參向

〔玉海〕承安四年二月十四日辛未關白八講初日可有通經由有其告是奉爲故殿○基房兼實御八講  
云々三月四日辛卯源納言示送云今日參殿御八講初日教緣覺智互論義珍重云々七日甲午

自女院○忠通女弟德后被仰云明日結願必可參云々五卷日不行向願有遺恨云々八日乙未午

刻着直衣半部車隨身向關白第此日八講結願也人々七八人許在上達部座余同着此座頃之奉行

人光長來觸下官仰鐘即搥之次主人直着座以東座南次余以下着南階以西座次殿上人重方朝臣

以下着座次從僧等外自中門座盤香爐所作人々香爐次證誠已下經同道着座次講師已講道

顯講師權少僧都觀智等着禮盤禮佛之後登高座次此間堂童子着座今日二八女院殿次分花簀

次散花主對揚次勸請次說法第八次論義問者覺憲律師二重之後證義者覺珍曰論義講答共以

優美也如此嚴重御願之時先例或及三重仍今一重引聲可難申者仍覺憲加疑難講答之後證誠被

仰聲重無加難事疑三重之時先例如此歟次僧侶大略退下公卿不起座次光長參公卿座末氣色于

余退歸仰鐘次從僧等置香爐如朝座次僧侶參上次講讀師就禮盤初禮講師座次誦誦師次誦誦師次誦誦師

誦誦師次誦誦師次誦誦師次誦誦師次誦誦師次誦誦師次誦誦師次誦誦師次誦誦師次誦誦師

可尋先例次召家司被仰鐘次殿下左內兩府右大將殿近衛中納言予二位宰相平顯六條三位清家次第着座講演之儀如例朝座有行香大臣以上自座前進寄大納言以下自座後實參進如例行香了左府令退出給次夕聖始如常事了殿下御退出人々降立此後次第退出于時夜半也

〔執政所抄上〕二月宇治殿藤原賴通延久二年二月二日御忌日布施役人事

件役人召家司職事見參合御點被仰下之間當時奉行人召仰所司所司催之但行事并臨時大事之時君達等參仕奉行人以消息令催之也

〔永左記〕承曆四年二月一日乙未今日春日祭使立右近權中將基忠朝臣云々但代官云々博陸藤原師實不被立神馬使明日當宇治殿藤原賴通御忌日之故也奉幣本社被申其由云々使左衛門權佐行家

朝臣云々式部大輔實綱朝臣作告文云々予令廣綱申博陸云明日氏神御祭也雖御忌日令向宇治給之事可有憚歟如何御返事故騰司殿藤原道長妻倫子御忌日者六月十一日也後日神今食也而故殿賴通彼日參御堂給然者於于二親之忌日者無其憚歟者

〔中右記〕嘉保元年二月二日今日故宇治殿藤原賴通遠忌仍殿下藤原師實左府後房內府藤原師通御坐宇

治平等院講筵了後入夜令歸花洛給也

〔勘仲記〕弘安五年二月二日癸巳宇治殿藤原賴通御忌日御佛事如例御布施取家司經親諸大夫清康朝臣下向云々

〔中右記〕永久六年元年元永

九月廿二日辛丑今日日野入道之遠忌年來法界寺八講初日也件八講料

捧物等皆悉送了今年依關息所行也晚頭從院退出則着束帶參法勝寺常行堂御念佛

○按ズルニ日野入道ハ日野資業ナリ公卿諸家傳ニ據ルニ資業ハ後日野ト號シ延久二年九月二十四日薨ズ

〔山槐記〕永曆元年九月一日丙子次向觀音寺堂今日先考藤原忠親父忠宗是御遠忌也仍修小養

云、十二月一日丙辰、今夕御堂堅義、堅者東大寺義曉、探題法印玄覺、一間禪仁已講云々、法印初精義優妙之由、人々所談也、二日丁巳欠、御八講五卷日也、申時許參御堂、右兵衛督被參朝座事了、問者成祐兩師下高座、後諸僧實覺僧都以下、廿人許引列昇兩師登高座、唱實覺僧都、堂童子分花筵、衆僧行道、薪持衛府從佛後相加上達部殿上人實光一人、諸大夫不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>民部<sub>一</sub>、大<sub>二</sub>五位<sub>一</sub>取袈裟三匝、置佛前、堂童子收花筵、講經事了、問者嚴意、

今日夕座、先年例不引列、然而初後今日夕座、必可引列之由、去々年靜算所申也、其後必所引列也、

三日、御堂堅者三井寺範覺、探題忠尋僧都、有所勞不參、精義一間、真源已講、辭退之替、雖凡僧以真源一間令勤仕之、次真源精義云々、殊先例不見事、歟天台堅義、殊此事不見歟、四日、晚景參御堂、予只獨也、朝座問者、夕座諸僧引列昇、法印玄覺以下、僧十餘人僧多兩師登高座、唱師發聲、堂童子分花筵、御誦經文付導師表白、御堂預御經一部分諸僧、是依爲本願聖靈藤原道長、御忌日也、導師供養之、次講普賢經、問者兩師下高座、後呪願法印三禮已講、覺譽行香于殿上人左中辨實光一人、諸大夫六人立加次諸僧阿彌陀經、事了着本座、諸大夫取布施、入夜各々分散、

御堂成寺法事七八年、逐年陵遲、誠可歎也、但天之令然、何事之爲哉、藤氏繁昌、御堂御時許歟、其後帝

王不生、此家給是、可然事歟、已講講師之間、五箇日無風雨、難誠欣感爲入道大相國後胤之僧、勤仕此講師、希有之例也、

〔平戶記〕仁治元年十一月卅日己未、入夜、着束帶、先參左府藤原實、暫見參、御出之後、參法成寺、御八講始也、頻有譴責之間、所參也、予在龔座、內府藤原家綱已下在堂中、仍殿下藤原經、御參之間、奉降逢之儀遲々、內府走伏、大臣以上有此儀、太見苦事也、殿下令着龔座給、人々昇着家禮人々、於御前踞居如例、此間左府令參給家禮輩同勸座藤原長、次召行事家司實定、被尋仰事具否、先一獻仲國朝臣持參盃、五位諸大夫取杓、仲國朝臣取續杓大臣二人、次居汁物、二位宰相申上、內府申云、只末座人可申歟云々、



〔年中行事秘抄十二月〕四日法成寺御八講終事

自去月晦日行之此日入道○藤原道長萬壽四年十二月四日薨御忌日二日上官參入彼寺講師一人聽衆卅人

第二日今月一日第三日二日第四日三日第五日四日法花聖義

〔執政所抄十二月〕三日法成寺御八講五卷

殿上饗廿前 知家事

諸大夫廿前 案主

四日同御八講結願

殿上饗廿前 知家事

諸大夫廿前 案主

件御八講兼日被定申僧名但聖義請別被仰下之每日殿下參御上達部殿上人家司職事皆參行事所司每日進見參又二日有御誦經布百段行事下家司以舊例文召諸國有御誦經文申上臈家司判

案修理所 小筵年預

同催之 仕丁同之

〔左經記〕長元二年十一月卅日甲申參法成寺依十講始也始從今日奉爲放散藤原道長所被行也十二月四日戊子參御堂御十講了次念佛次給諸僧布施入夜退出

〔中右記〕大治二年十一月廿九日乙卯御堂御八講始也仍申時參御堂右兵衛督被參殿下○藤原無御行間早始事實覺僧都以下引列昇講師已講覺晴隆覺律師讀師就禮盤禮佛登高座唱實覺僧都堂童子二人分花今二人不參是講師讀表白文次講經問者三井寺勝譽僧綱不講師下高座次呪願實覺僧都三禮已講信水行香予右兵衛督伊通左中辨實光以下諸大夫民部大夫篤昌等八人云

先考忌日之永絕下則患賢兄宿願之欲廢夙夜思之展轉反側即得一謀施于不朽祖父長岡府庫原有永田若干町貽厥孫承前之例以此應輸分其孫今見存者不過七八人又猶多其餘然則割其遺餘充此會料是計之上者也先訪於左丞相丞相同謀乃名僧學徒見聞隨喜仍分鹿田庄之地子永宛長講會之施供其色目在別紙中略件長講會料米百五十石以鹿田庄地子所用也

昌泰三年歲次庚申六月廿六日

從二位致仕左大臣藤原朝臣良世

〔年中行事秘抄〕十月十七日吉祥院御八講事

元慶四年八月卅日辛亥參議刑部卿善六是善九終之夕言曰命絕恨不及孟冬悔過之期今日雖死生彼月爲吾修功德延曆以來十月修吉祥院悔過父清公十月十七日薨五年十月廿二日丁酉官家奉供養吉祥院給

〔小右記〕天元五年五月十八日己酉故殿○藤原實賴天長元年五月十八日薨御忌日身代以壽慶令齋食已時許參東

北院令修諷誦音鳥入禮人四位一人五位八人六位一人

〔執政所抄〕六月廿七日法興院御八講始事大月時廿八日始○中略

行事下家司書御誦經文申家司判付預布施被物等任目錄請取納殿付御堂後戶所司共合點之

〔法成寺攝政記〕寛弘二年六月廿八日甲辰初法興院○藤原兼家御八講依物忌不參卅日丙午依法興

院御八講五卷日參彼寺事了參內入夜罷出女房同之七月二日戊申法興院御八講結願有障事

不參

○按ズルニ藤原兼家ハ永祚二年七月二日薨ズ六月二十七日ハ御八講ノ初日ニシテ七月二

日結願ノ日即チ正忌日ニ當レリ

〔小右記〕長元元年十一月廿九日己未修諷誦廣隆寺前尾張守則理母法事於世尊寺修之遺滑前送

文折數十二枚代米十石大破子三  
文寄代信濃布十五端米三十石

當今皇女、被行御經供養、御導師光什法印公卿前權中納言公策甘露寺中納言、御布施取殿上人爲學朝臣等參仕云々、年々於伏見般舟三昧院被行之處、土一投等路次之物、於京所被行也。

〔台記〕久安二年正月二十五日乙未、未刻參轉輪院先見右大將依贈后○堀河后藤原茂子、康和忌日也、贈后法皇上卿右大將實能、依疾不參余頼長行事、兩相公忠雅、參入、自餘卿不參、殿上人縫四

〔宜胤卿記〕永正三年七月廿日、今日贈皇后宮當今後柏原母后○後土御門后御忌日○非二時年忌也、於般舟三昧院被行御經供養、奉行頭中將公條朝臣、當日公卿中納言參仕、早旦出行、康親朝臣相伴、於近所小庵着衣冠云々、中下刻歸、相語云、御導師光什法印題名僧一口、公卿一人之間、被物兩度勤仕云云、御布施取殿上人康親朝臣一人之間、被物重役云々、六位藏人不參、御布施出納置寶子、中納言取之、六位不參故也、御布施導師二重一裏、題名僧一裏許也、公卿殿上人於寺有朝飯云々、

〔年中行事七月〕廿四日興福寺長講始事冬、嗣大臣忌日○天良二年七月二十四日薨

〔興福寺緣起〕長講會

右承和十三年歲次丙寅、故太政大臣贈正一位美濃忠仁公○藤原房奉爲先考先妣忌日、於興福寺始修長講會也、首尾卅箇日焉、先考贈太政大臣正一位開院相府冬、嗣藤原天長三年七月廿七日遷化也、先妣尚侍正二位、同年九月四日卽世也、其初講涅槃經一部云、此會甚希有、只講一經、恐滯於弘道顯依此良緣、講一切經論、諸宗義轉大法輪、如環无端、愜越卽隨、衆望開修年久、遂轉法輪之一故事也、嘉祥三年以來、太皇太后依先考之忌辰、助講會費用、凡厥供施、莫不周給、貞觀十四年九月二日、忠仁公薨、自後太皇太后宮專一決於堂講、而今年五月廿二日、長樂昇遐焉、此會無人承行、與時欲絕、弟子其世、開院台府之遺體、忠仁上公之末弟、位登二品、官歷三事、行年七十有八、懸車衡門、待命且暮、上則悲

承安三年三月、盛方朝臣、依父卿遠忌辭申、然而勘准據例、勤之、

遠忌日從神事例

天仁元年十月廿一日、大嘗會御禊也、修理大夫藤原顯季卿雖當忌日、猶以供奉、

〔玉海〕承安五年二月九日辛酉、宣命辭別事終日無音、仍尋遣光雅之許曰、宣命辭別有無如何、若明日可被仰者、聊有相憚事、明日當遠忌、故入日忌日不從神事、不從佛事云々、然者明然者明後日參內之次可宣下、

〔玉海〕建久二年六月十一日戊子、此日月次祭神今食等也、中少納言平信清稱遠忌之由、先例依不

忌神事、仰可參之、由猶法家申不可然之由云々、仰可勘進本文之由、而不注申、依先例、仰可參之、由、參議各稱障不參、凡下之輩、自由對捍云々、

〔季連宿禰記〕貞享四年九月一日丙子、卯刻已前行水、於文庫誦祓、內侍所御鈴如、每朔、父母正忌日、自正忌日也、每朔、父母正忌日、自正忌日也、

〔殿曆〕天永三年七月十九日甲戌、今日堀河院御忌日也、仍參、紺泥法華經一日、令書寫、於彼院、令書之、余須早參、而女房不例、仍不能早參、酉刻許、參堀河院、例講之後、余供養御經御等身佛、圖繪導師山階寺權別當永緣、例講師永清、律師事了余退出、余直衣參會公卿、皇后宮權大夫新藤中納言、大宮權大夫、左大辨、大藏卿等也、

○按ズルニ、天皇皇后ノ御忌日ハ國忌篇國忌例ノ條ニアリ、參看スベシ、

〔玉海〕仁安三年二月十九日壬子、今日有御讓位、六事○註余實藤原出仕事、頗有其憚、依爲忌日也、猶可有出仕之儀云々、仍尋申攝政藤原房之處、返報云、今度諸事別儀也、早可出仕、又可立昇殿、勅授等拜云々、仍所出仕也、

〔宜胤卿記〕文龜四年元正九月廿八日乙卯、今日後土御門院月二十明應九年九聖忌、於安禪寺寺住持持



假一日、逮事祖父母者准此、蓋猶沿古制也、

〔榮花物語十五〕いづれの人もあるは先祖のたて給へる堂にてこそ忌日もし、說經說法をもし給めれ、

〔滋草拾露二十七〕閏月亡輩遠忌日事

以父母并夫終焉日爲遠忌日、一年各一日忌之、改嫁女非此限閏月亡輩遠忌日、又廻逢于同月之閏月事

久安元年十月十二日、明法博士坂上明兼勘答兩月共可忌之由分明也、但如永久五年七月明法博士之答信貞勘答者可忌閏月也、

〔外宮禰宜常行記〕仁平三年十二月十四日、今日者無閏月之事者、官長重房母遠忌日也、何者彼人母閏十二月死去、今有閏十二月、如此閏月來會之年、可忌其日之由、依有明判、不忌也、

〔爲房卿記〕應德二年十二月八日、今日遠忌也、然而有限公事承行之上、傍儀事、兩亞相不被沙汰、巨細

仍早旦、囑明胤間梨供養佛經之後、參內尤治曆年中供養法成寺十月十八日也、先人之遠忌、然而依三條大納言經長治部卿降後、讀無申、案內被參仕了、仍

○按ズルニ、藤原爲房ノ父隆方、承暦二年十二月十一日卒ス、或ハ此人ノ遠忌歟、

〔拾芥抄下末〕忌日人出仕例

水工抄云、寛治五年四月十六日、内藏助賴季、申忌日之由、其替以諸事受領可任哉、又以賴季妻父伊勢守義濟可爲代哉云々、雖有其沙汰、依忌日不實、猶以賴季可令催勤、又外記勸申云、懷忠卿勸大原野祭給云々、但稱遠例不被免、寛治七年八月日陣定、民部卿、左兵衛督參陣、依召也、仰云神事猶有例、況仗儀哉、或有勤神社祭例、又右少辨有信、依召參殿下云々、

〔年中行事秘抄三月〕石清水臨時祭事

遠忌人陪從例

〔類聚名物考 四事〕正日

思ふに今はたれも、正忌日といひて、其月其日にあたれるをいふ、毎月のその日をも、忌日といふにむかへて、月も其月なれば、正忌日といふが、

〔真俗佛事編三〕祥月問毎年ノ忌日ヲ祥月ト云フハ如何答曰、禮記ニ、諫ニ、親亡シテ、十三年ノ月

忌ヲ祥ト云ニ因テ、此ヨリ以後毎年ノ忌日ハ、毎月アレドモ、今ハ正當月ト云觀ナリ、可此ハ書ナリト問

儀禮ノ大小祥ノ祥ノ字ヲ取ル本阿ルカ書曰、釋門正統曰、若百

〔禮記 檀弓上〕子思曰、喪三日而殯、凡附於身者、必誠必信、勿之有侮焉耳矣、三月而葬、凡附於棺者、必

誠必信、勿之有侮焉耳矣、喪三年以爲極、亡則弗之忘矣、故君子有終身之憂而無一朝之患、故忌日不樂。

〔禮記 祭義〕君子生則敬養、死則敬享、思終身弗辱也、君子有終身之喪、忌日之謂也、忌日不用、非不祥也、言夫日志有所至而不敢盡其私也、

〔釋氏要覽下〕忌日二月十五日、佛涅槃日、天下僧俗、有僧會供養、即忌日之事也、俗禮、君子有終身之喪、釋氏無忌諱故、

〔陳餘叢考 三十二〕忌日忌月  
禮記、君子有終身之喪、忌日之謂也、蓋每遇父母歿之日、必素服撤樂、哀慕終日、六朝以來更有忌日

請假之制、沈約答庾光祿書云、忌日請假、應是晉宋之間、其事未久、封氏聞見記、則以爲古制、忌日止是不飲酒、不作樂、至於後世、請假閉門、不見客、則禮之過、而引晉書、會稽王世子、忌日送客、至新亭主人作樂、王便起去、持彈彈鳥、桓元忌日、與賓客遊宴、惟至時一哭、以爲古無忌日、不見客之例、其不見客者、實由不能悲愴、故轉自藏晦耳、此言雖欲矯弊、然遇忌日、仍宴賓見客、如平時、行之既久、此禮將遂廢、是適便於背死忘親者之爲、則與其過而去之、毋寧過而存之、文昌雜錄記、宋元豐、令諸私忌給

僧正

〔東寺執行日記〕應永十五年五月六日、北山殿○足利義滿御事○中略

一自六月廿一日、金剛界後加行始之。

一七僧法會事

八月十六日、爲鹿苑院殿御百箇日御追善、被行七僧法會、道場北山蓮院殿、奉行清閑寺石大辨家俊也、八月九日、依先例、總在廳、隆紹以鑑取三門ニ啓案内、即寺家許定可五人出仕之由衆議了、仍注僧名、鑑取ニ遣之。但此内一口、清淨光院大僧部、臨闕寺ノ分ニ出仕、

〔永享十二年曼荼羅供雜記〕正長元年、勝定院殿○足利義持之百箇日、等持院於八講堂、被行庭儀曼荼羅供、職衆卅口。

〔親長卿記〕文明五年九月廿一日、攝取院貫性房、百箇日也、請野僧、去六月、於越州河去庄寺領死去。

千日忌

〔類聚名物考内事〕千日忌 二千日忌

むかしは、千日の忌をとぶらひて法事せし事、古き物に見えたり、今の世にはなし、たゞ四十九日、百箇日等をいふのみ、又二千日忌をも追善供養せしにや、

〔西山上人傳報恩抄三〕この塔婆をば、慈鎮和尚の一千日の御忌に當りて、寛喜二年に供養をとげられけり、導師は安居院聖覺法印とぞ聞えし、

一千日トハ、座主記ニヨルニ、二千日ナルベシ、慈圓嘉祿元年九月廿五日ノ入滅ナレバ、寛喜二年迄、其間六年ニシテ、凡ソ二千百六十日餘ナレバナリ、

〔明月記〕寛喜二年四月卅日辛卯、明日西園寺故亡室、千日追善、一日經下部并弟姫君被出家云々、

〔書言字考節用集二時候〕忌レ日下學集非以死爲不嫌、忌連此日極於念亡人、諱日惣二古事諱避其名、

〔書言字考節用集二時候〕正忌レ又云、月正日、向、

忌日

御承仕

五十匹

此外

御本尊新圖

百匹

御經料紙

百匹

已上

七日、今日舊院御百箇日也、雖相當百箇日無殊事、依兼日日次也、九日、後花園院、百箇日聖忌、一日正  
也、五種行結願也、○中

抑今度御諷誦事、於百箇日聖忌者無之沙汰、雖然於永享例者、五種行聖道門沙汰也、仍每日有御經供養、昨日一卷書寫供養重不及御經供養沙汰、無諷誦願文、於周忌者有諷誦願文、今度黑衣御法事之間、以彼是之儀例、諷誦許、予相計了、

〔扶桑殘葉集〕後光明院百箇日御法事參泉涌寺記

烏丸資慶卿

十二月十四日、先帝○後光明百箇日逮夜の御わざ、泉涌寺にておこなはる、此比の雪げのあらし、例よりもはげしくて、道のはごも、いごものうく、かゝる山路の雪ふみ分ぬべき事こそ、ゆめにだにかげざりしことの、やうかはりておぼゆれば袖もぬれぬ、御寺にまうでぬれば、佛殿の中央に先帝の御影かゝれり、近臣通稱、うつしとめたてまつれるなり、今日は御影供おこなはれぬるとなん、資慶も着座にまゐり、御わざいまだはじまらざりければ、御山にまゐり、御墓に石の塔あたらしくたてたるを、香を焼おがみ奉る、今朝の雪はれて吹おろす山風いと寒し、西行法師に、いつならひける君がすみかどぞ詠せしことに、たゞかくこそはとおもひあはせられて、  
わすられぬ君がみかげを山かげの雪のまどねに見るぞかなしき

〔吾妻鏡〕二十六元仁貞應三年元仁八月廿二日、故奥州禪室○北條義時百箇日御佛事、今日被修之導師辨



御局へ

四日、五種行第二日也。早旦早懺法錫杖供御膳之時、讀經半齋、次有講論、次未刻許、有聲明懺法并錫杖、次初夜、又有早懺法錫杖等、於書寫之儀者不斷也。人々助筆爲助筆、祇候之輩、

日野大納言資綱

中院大納言通秀

予 菅宰相顯長

右大辨右房朝臣

秦仲朝臣等也

六日、五種行第四日也。○中略

可下行元應寺之分注一紙、

後花園院御百箇日御法事下行事

七箇日御靈供

七十匹

長老御布施

五百匹

僧衆十人

各貳百匹

僧衆十一人食料

七百七十匹

行塔

力者

七箇日油

以上

御經供養方注文

御導師

千匹

題名僧三口

各貳百匹

佛性燈油葩

七十匹

預

百匹

堂莊嚴事、自今日可沙汰之由、雖令仰、自三日晚頭、可有始行之間、明旦可沙汰之由、仰改了。○中

次自廣橋大納言許、可參內、可參會云々、仍下委參內、御法事用脚事談合、御料所方五百匹、又他足三百匹在之、可下行、志方々返答心得之由申、

次御寄進常照寺、打敷裏書御影銘等、可書之由廣命之、仍書了、

御寄進丹波國山國庄內常照寺常住

後花園院御服

文明二年庚十二月廿七日

後花園院御影文明二年十月廿七日御影銘此趣也、

次參安禪寺殿御供具事、先明日事可被仰付、於用脚事者、明旦可下行之由申了、次歸了、

三日、御本尊普賢像出來之由、土佐彈正入道申之、仍百匹下行了、永享六十匹也、但五旬之間御本尊、

悉爲百匹之間、不及沙汰下行了、於御本尊者、自願許、可送申許之由申之間、付廳云々、

次奏聞云文案

御法事けふより、まづ始行せられ候はんする、めでたくおぼへさせをはしまし候、さて御經供養の公卿、帥○藤原は、ことのほか窮困さんざんのしきに、候はごに、近日は出仕など候べき體も候はぬほどに、叶候まじきよし申、右大將公○藤原も、僮僕以下、更に行候はぬほどに、故障のよし申候、永享にも、周忌の御經供養、公卿三人にて候しはごに、ことかけ候はぬ事、左候へば、ただ三人のおんにて候べきやらん、又他の御點を下され候べきか、御心へ候て御ひろう可被下候、かしく、

ちかなが

勾當内侍どの、

爾時佛法初入明帝即用其教耶開元禮卒哭篇注有古之制在卒哭今之百日也二語此可爲唐用百日之據及致李習之去佛齋說深誣佛家七々之說則知唐人固多用七々百日以爲治喪之節矣按田義華玉笑零音云人之初生以七日爲臘死以七日爲忌一臘而一魄成故七々四十九日而七魄具矣一忌而一魂散故七々四十九日而七魂泯矣明會典公卿亡故以次遣官致祭十五壇闋喪入殮首七至終七下葬百日新冬周年二周除服至此而七々百日竟著之于典禮

〔續日本紀文武〕大寶三年四月癸巳日○二奉爲太上天皇○持統大寶二年十月二十二日崩設百日齋於御在所

〔普明國師語錄〕天龍多寶院御忌經散

夢破鈞天知幾年者回不願上昇偃轡王刹海微塵裏須轉法輪於大千

就等持寺恭爲光嚴院

此香群有大祖萬物根源金枝玉葉覆蔭乾坤恭惟尊儀天地之量日月之明處清淨無爲之宗行皇極大中之道濟世塗炭立傳萬國之歡聲施惠孤寡常恐一夫之不獲仁心推在民腹睿智元稟天寶海內仰何言之行天下向無私之化○中

承勅恭爲光嚴院一百箇日

破有法王乘願力佛心天子比丘身萬年佳運龜山寺一念追回驚嶺春汲潤銅瓶應寶器飛空瓦鉢是金輪桑門聲價從茲重教外流通更復新大寂雲深檀特定升遐幾日鼎湖因睿襟猶見羹牆慕送御香來□□□

〔親長卿記〕文明三年四月二日經師良世法橋來御經料紙出來可進何方哉云々可持來此亭之由仰了次預盛賢法橋來堂莊嚴事自今日可沙汰佛性等永享松小七箇日用意但今度御經供養可爲只一度於御本尊者自明日可被懸之間明日并結願兩度用意可然歟之由返答了種々指圖見之○中

略

り、俗に云龍の天上の事有て、僧俗大に恐れをなしけるとなん、是全く追福の善根、都卒城に告るならんと人々許せり、追福詩歌、夏懷舊と云御題也、聞けるまゝ、こゝにあぐ、

世の中のさかの唐橋蟬は啼はたるは燃てむかしこふらし

千種有功略下

〔東寺文書〕來午年、弘法大師、千年忌、於東寺、准御齋會可被修行法會、豫相觸門徒中、都鄙諸寺、宜一心併力、抽無貳懸志、自然於有疎略之輩者、可及放門之沙汰者、天氣如此、以此旨、可令申入長者前、大僧正御房、給仍執達如件、

天保二年十月十九日

左中將重基

謹上大納言僧都御房

〔東寺文書〕來午年、弘法大師、千年忌、於東寺、准御齋會可被修行法會、報恩謝德事、豫被仰下、都鄙門徒等畢、因茲宜衆徒戮力者、可爲神妙之由、天氣所候也、悉之以狀、

天保二年十月十九日

左中將判

東寺諸門徒中

百日齋

〔日本書紀三十〕十二月乙酉○天武元年、奉爲天冷中原、瀛真人天皇○天武、設無遮大會於五寺、大宮、飛鳥川原、小聖田、豐浦、坂田、

○按ズルニ、天武天皇ハ、此歲九月丙戌ニ崩ズ、十二月乙酉ハ、其百箇日ニ當ルナリ、

〔通俗編二十〕七々百日、北齊書、孫靈暉傳、南陽王綽死、每至七日、至百日、靈暉恒爲請僧設齋行道、

南史、齊宗室傳、魚復侯子響、既自縊、上心悔恨、百日于華林作齋、上自行香、北史、胡國珍傳、詔自始薨、

至七々、皆爲設千人齋、百日設萬人齋、王元威傳、獻文百日、元威自竭家財、設四百人齋、略中吹劔錄、

戴溫公語曰、世俗信浮屠、以初死七日、至七々日、百日小祥、大祥、必作道場功德、則滅罪生天、否則入

地獄、略中萬斯同群經雜說、漢明帝、營壽陵之詔有云、過百日、惟四時設奠、百日之說、始見于史、意者



〔月堂見聞集二十八〕享保十九年

一三月二十日二十一日、東寺弘法大師、九百年忌ニ付、

勅會舞樂法事

十九日ハ習禮有之

大師堂ノ東ノ方塙を取除て、大日堂藥師堂は、堂上公卿、并ニ總出家衆ノ溜り場となり、是處より竹にて、二重ニ大師堂迄で矢來を結び其内を五大堂より大師堂迄で練行、大師堂の前の三鉦松を取除け、舞臺建つ、二間半其の北の方左右ニ樂屋建つ、二間四其北の方ニ樂人溜り場、長サ十間、幅五間舞臺は禁裏の御舞臺、此寺に法事あれば、借り用ゆる事舊例也、

九百五十年忌

〔公卿補任光格〕

文化十年二月十四日慈覺大師、九百五十回忌、於延暦寺被行法會、奉行經則、

〔公卿補任仁孝〕

天保十一年八月廿九日、於國城寺被行曼荼羅供、智證大師、九百五十回忌奉行恭光、

千年忌

〔草山續集冬〕

南山寺道宣明一千  
年忌拈香詩并叙略中

寛文丙午年六

多十月初三、正當南山一千年忌、唯空比丘捨淨財、設僧供於草山阿練兒、予謂凡

愚聞之、乃毀皆而言、一乘之宗、四分之祖、道既不同、施與受皆非也、中庸則讚美而言、無我無私耳、上賢者、點而不容詞矣、嗚呼、知我罪我、復奚辭焉、因點海岸於爐中、而代香語以詩云、

知宗用妙立毗尼、不許人呼大乘師、今日千年重應世、南山何必事波離、

〔月堂見聞集十五〕

享保八年三月朔日、於禁裏今度柿本人麻呂千年忌ニ付、宣下柿本大明神正二位、

勅使吉田二位殿、御息侍從兼雄朝臣、上卿中院大納言通躬卿、今度御入用現米二百石、從關東被下

知、當三月十八日、石見國ニテ被執行候筈、宣命之寫、別本在之、

〔嘉永雜談一之中〕

守敏一千年忌

洛西唐橋村は、千種家の知行所也、此所に西寺の趾、草庵と成て殘れり、今年天保十二年丑守敏僧都の一千年忌とて、千種殿より法會修行有けるに、俄に風雨烈しく起りて、草庵の傍なる小河よ

義國公○龜川氏祖、久壽二年六月二十日没六百五十回御忌ニ而、爲御供養料、白銀貳拾枚被下候間、其段足利鐙阿寺江可被申渡候、被下銀者御納戸頭相談可被請取候、且又御贈官之義者不被及御沙汰候間、其段も可被申渡候、

七百年忌

〔梵舜日記〕慶長十三年七月六日、上醍醐開山聖寶七百年忌、爲山上執行云々、俗人道具已下、豐國ヨリ申付了、

〔續史愚抄元〕天和四年正月三日庚午、慈惠大師三條元七百回忌、因行法會於延曆寺、

〔官家文藻〕狩野典信にたまふ

爲村卿

寶曆十三年十一月九日は元祖御子左民部卿入道殿○藤原長家の七百回御忌なりし、松樹契千年といふ題を出して、高貴の御詠を申うけ門弟公卿雲客の人々に歌す、むるたにさくの泥繪を、狩野法眼榮川典信にあつらふ、和歌の門弟子なればなり、手向ゆるなくとけて、のこりたる短冊あれば、それをつぎて彼が家にも殘さんがための心ざしを書えりし、典信におくる、

八百年忌

〔續史愚抄東山〕寶永五年七月六日庚辰、依理源大師八百回忌、行曼茶羅供於三寶院非勅會儀、導師東寺

八百五十年忌

長者前大僧正房演三寶公卿油小路前大納言隆興已下三人着座、

〔續史愚抄中勅〕享保十二年正月口口口於山科元慶寺、行僧正遍昭八百五十回法會云、

〔續史愚抄元〕天和四年三月二十日甲戌、明二十一日、弘法大師八百五十回忌、因被行曼茶羅供於東寺勅會、有舞樂、大阿闍梨長者前大僧正有雅報恩、公卿權大納言經慶已下三人着座或作日野中納言實賴已下、御誦經使右中將定經朝臣奉行藏人頭右大辨照定朝臣、

九百年忌

〔宗建卿記〕享保十九年三月廿日、明日弘法大師九百年忌也、仍今日於東寺、被准御齋會、被行曼茶羅供、爲着座中略、昇北階石階二級也、兼日新大納言云、伴階石也、且石二級也、於然者沓脫歟云云、仍新大納言、被用沓脫也、予依爲下臈、從上首所爲、至沓脫下揖、

五百年忌

れども不被及御沙汰候間、右兩寺江可被違候、

〔續史愚抄〕

中御門

寶永八年正月十八日丁未來二十五日圓光大師上源空五百回忌、因故加賜東漸號

者、件勅書少納言時春朝臣實向知恩院、自今日到二十五日、行法會於當寺、

〔續史愚抄〕

桃園

寶曆九年四月二十八日戊寅於大坂東本願寺、行親鸞上人五百回引來々年當年忌、而

月爲十一月、法會云、日行、之云

五百五十年忌

〔續史愚抄〕

桃園

寶曆十一年正月十八日戊午、自今日至二十五日、於知恩院行圓光東漸大師五百五

十回法會

忌日二

亦金戒光明寺、鳳谷知恩寺、百萬清淨華院等同修法事云、

〔天保集成絲綸錄三十四〕寬政七年十月

寺社奉行江

義季公

○德川氏親

寬元四五百五十回忌ニ付、御供養料、白銀貳拾枚被下候間、其段可被申渡候、被

下銀者、御納戸頭相談可被請取候、且又御贈官御贈號之儀者、不被及御沙汰候間、其段可被申渡候、

六百年忌

〔野史光緒〕

寬政三年三月十三日丁亥、修曼陀羅供於蓮華王院、薦後白河天皇六百年壽忌冥福、

〔大江俊矩極簡要用日記〕文化八年正月廿二日

一圓光大師六百回忌、知恩院勅會執蓋、

兼被物

卯刻助功參役、

〔大江俊矩記〕

文化八年正月廿二日、圓光東漸惠成弘覺大師○源空六百回忌、自去十九日至來廿五日、

一七箇日、於知恩院大法會有之、今日一箇日、於同院被行勅會、知恩院宮御導師也、當今御養子、去年御得度、御歳十有

圓川宮御實子也、

六百五十年忌

〔天保集成絲綸錄四十〕文化元年七月

寺社奉行江

於此  
堂代  
歟

〔扶桑拾葉集二十八〕後鳥羽天皇四百年御忌御廟參詣記

藤原氏成

隱岐の國後鳥羽太上皇の御遺跡いかにいますらんと見たてまつるべきこゝろをみちとして、  
ちさとをいであつあしもとにめぐらし、かちよりしふねよりしてまいりつきぬうち見るよ  
り、うみやまはるゝと世はなれて、晝にもかゝまほしくいはんかたなし、やがてちかくさぶら  
ふ僧にあないして御はかをおがみ奉る、しばらく法施して、としつきのほいかなひぬと落る涙  
なに、つゝまむともなし、まかあれば今上より御いのりのため御大刀御馬進御あり、院の御門  
の御製をはめ、いづれも奉納し侍し、院の御製をば、あまた、びかうじたてまつる、されば延應  
元年の後、ごしは百年四かへりにおよび、代はたつぎあまりになむなりぬるいかなる因縁に  
か、御たまのありかに、まぼろしならでも尋來り侍る事も、久かたのあめをきはめしも、きなる泉  
までにして、からうじて蓬がしま、もどめけんも、ひとつこゝろにやとおぼえし、よろこびにたへ  
ず、なをおろかなることの葉をさへ、みじかき筆にとゞめ侍るらむ、うらおそろしくこそ、

○按ズルニ、後鳥羽天皇ハ、延應元年二月二十二日崩ズ、今第四百年ハ、寛永十五年ナリ、

〔續史愚抄中御〕

寶永八年三月二十八日丁巳、爲親鸞上人四百回忌、結耳爲初會公卿等向之初日十九日、中廿三日也、公卿三條大納言公統已下七人着座、奉行某、東本願寺亦同前、公卿園前

大納言基勝已下六人着座、奉行某、

〔天保集成林繪錄三十三〕寛政五、丑年二月

寺社奉行江

當四月、芳樹院殿、

○德川親氏、應仁元年四月二十日没、

四百回御忌、御相當之旨ニ付、三州大樹寺并高月院より、御法

事願之儀差出候付、先達而被申聞候、然處御逝去之年月等、此節御糾之儀有之ニ付、先此度者、いづ



仍加增之國師號勅書頂戴之事滿山衆徒等所奉願也於蒙勅許者禪苑再同少林春宣奉祈寶祚長久此等越御奏違奉迎焉

二月一日

紹要 宗仍 紹益 宗的 宗信 右各加判

傳奏

執事閣下

〔百一錄〕元祿四年閏八月十三日於妙覺寺日藏三百五十年遠忌結願也一七日法事修行云々

〔泰平年表三〕寶永四年四月二十九日洛北等持院に於て將軍尊氏三百五十年忌法事執行

〔天保集成絲綸錄 四十〕文化六巳年十月

寺社奉行 江

三州岩津  
妙心寺

來年四月廿七日眞淨院殿○家康祖信光  
寬正二年卒三百五十回御忌同年十一月朔日妙心院殿三百五十回

御忌相當ニ付白銀三十枚被下候間得其意可被申渡候

十月

〔天保集成絲綸錄 五十四〕天保七申年十月

寺社奉行 江

來酉年七月廿二日崇岳院殿○德川信光長享二  
年七月二十二日没三百五十回忌相當ニ付於三州信光明寺自坊御

法事執行可仕旨可被申渡候爲御供養料銀貳拾枚被下候間其段も可被申渡候被下銀者御納戸

頭相談可被請取候

十月

四百年忌

〔續史愚抄 後編 成〕天正十九年二月三十日丙寅有被白河院四百回聖忌按御忌三月十三  
日也被引上三 御佛事云

國寺裏者、各拙丹、采、溪、毛、度、備、薄、奠、臨、齋、誦、大、佛、頂、萬、行、白、傘、蓋、神、呪、特、法、孫、比、丘、不、肖、子、禪、珠、蘇、却、一、瓣、之、青、桂、於、金、博、山、頭、以、奉、酬、法、乳、恩、

〔天保集成絲綸錄 五十二〕文政十三 寅 年三月

寺社奉行 江

安栖院殿、○德川信忠、享祿四年七月二十七日没、三百回忌ニ付、御法事之儀者、於大樹寺、自坊執行可仕、旨可被申渡候、爲御供養料銀二十枚被下候間、其段茂可被申渡候、被下銀者、御納戸頭相談可被請取候、

三百五十年忌

〔寒松稿 八〕建長開山三百五十年忌拈香

末運克昌開法筵、涉三百五十華年、西來直指嵩山桂、吹起香風世界千、

沙阿世界南閩浮提扶桑國、相模州巨福山、建長興國禪寺山門、今茲寬永四稔歲次丁卯、今月今日、伏

值開山祖師大和尚○道隆、弘安元年七月二十四日没、三百五十遠忌之辰、於是乎當寺末派瀾關、以東諸刹之義禪、十

方同聚、自他不隔毫釐、各々自采蘋藻、若藻於潤溪沼、洎以薦其忱、臨齋誦經之次、不肖子禪珠老頭陀、

蘇向這一瓣兜樓婆於鐘中、以奉酬慈蔭於戲師之道、陶德冶、蓋天蓋地、只是杜撰摸索、不著雖然如是

當仁不敢讓、曲順人情、胡說亂道、滿面慚惶、

〔國師日記 四十〕寬永六年己巳十月廿五日、高臺寺小春十六日之狀、竹西堂迄來ル、東福寺ヨリ小

春十一日之連署來ル、聖一三百五十年忌香典遣候禮狀也、十一月十四日、南禪寺ヨリ飛脚又兵

衛下ル、久右衛門、十一月五日之狀來ル、曆下ル、東福寺開山三百五十年諱○金銀子五枚來ルヲ受

取置由、

〔基量卿記〕貞享三年七月二十八日、入夜爲宿參內之、勸修寺亞相申、大德寺開山、加増國師號勅書作進備事可窺申處、可爲高辻由仰也、則明日可申渡由仰也、先例記左、

開山興禪大燈高照正灯國師三百五十年忌、來十二月廿二日正當也、雖然有職而九月令執行之、

當四月、東照宮二百五十回忌ニ付、於日光山、勅會萬部御執行ニ付、攝家門跡方初ノ堂上方、例幣使參向ニ付、途中爲警衛、歸京ノ節、迄附添候様、尤三月上旬ニハ、京地著ノ積リ可被相心得候、追テ御暇ノ節、拜領物等夫々ニ有之、

四月十七日

東照宮二百五十回忌法會ヲ日光山ニ行フ

三百年忌

〔幻雲稿〕建仁開山祖師三百年忌辰化齋疏有序

儒典曰、非其鬼而祭之謂也、又曰、神不歆非類、民不祀非族、蓋謂所非祖考而求福也、凡祖師門下、忌日設齋何哉、報其法恩也、耽源爲南陽設、南陽爲馬祖設、道吾也、洞山也、爲樂山雲岩設焉、一間一答、載諸錄中、巴陵鑑多口、唯爲雲門舉三轉語耳、是皆表父子授受不虛也、然百年忌辰、設其齋者、未嘗聞之、何況二、三百年乎、吾朝屢當百年、二百年、大修善事、可謂勤矣、吾建仁開山千光祖師四、戴化子建保元年七月單五、僕指來歲卽三百年也、吾雲彥師曰、却後三百年、有袈衣功德主、大作佛事、唐裴中明膺其懸議、宋晏圓通臨滅曰、三百年後、當興佛事、何人膺圓通識、光祖有言、我設五十年禪宗大興於世、然後東福西來兩祖出于文應弘長之間、董蒞吾山、振起吾宗、懸識可徵焉、今當三百年、誰能大興佛事、吾山陵替、不勝慨矣、從今以往、吾朝吾宗、值三百年忌辰、設齋會者、必盥觴吾山乎、雖然、比年寺產豪奪、佛供不修、僧食不給、大殿上漏、長廊半傾、以故設齋之備、不知所出、於是寺之耆宿相議曰、群材支厦、衆力壯鼎、冀製僂語以募諸檀上、自王侯下至士庶、無細無素、慨然樂施、則人々證入華嚴無盡法門、以得佛富貴也、或曰、施者、恐有非類、非族、非其鬼之疑者、宿笑曰、吾祖日本佛心宗第一祖也、不分自家他家、不論同派異派、越祖庭者、誰不敢薦蘋蘩、猶若儒家者各祭文宣王、何必拘孔氏子孫也哉、

〔寒松稿〕六中峯和尚三百年忌拈香略○中

今茲元和八稔壬戌八月十有四日、伏值普應國師大和尚三百回遠忌之辰、其門中之耆徒、纔寓居與

被存其趣可被書出候此度者格別之御法會候條少々重咎之者ニ而も吟味之上可被相伺候以上

三月

〔天保集成絲繪錄 三十九〕享和元 四年七月

寺社奉行 江

當八月廿九日傳通院樣○龜川家康母水野氏慶長七年八月二十九日没二百回御忌ニ付御法事料白銀拾五枚傳通院 江

被下候此外公儀より御構無之候間其段可被申渡候御當日爲御名代御奏者番可被遣候被下銀之儀者御勘定奉行可被談候

七月

〔天保集成絲繪錄 五十二〕天保元 寅 年十二月

大目付 江

來正月台德院樣○龜川 秀忠二百回御忌御法事御執行付而御法事中爲伺御機嫌松平加賀守溜詰在

江戸之分所司代大坂御城代より御干菓子御水菓子之内一度可被差上候御精進明之御着者不及獻上候

一右之外在府萬石以上之分不及獻上物候御法事相濟御精進明之御着も不及差上候

右之通可被相觸候

十二月

二百五十年忌

〔嘉永明治年間錄 十四〕慶應元年正月廿八日

日光法會勅使下向ニ就テ警衛ヲ諸士ニ命ズ

和泉守殿申渡 大番頭御書院番頭御小性組番頭御持頭御先手御徒頭小十人頭右組頭組中共其外御目付御使番其外小役ノ者



尾張中納言殿

水戸宰相殿

水戸中將殿

右一同被出席御對顔老中披露御能見物之御禮老中言上之<sup>○中</sup>

一近衛殿其外公家衆退座休息被在之御饗應之席へ被相越

御白書院 近衛左大臣殿

右御饗應<sup>七五三</sup>老中大久保加賀守出席及挨拶二獻過て、盃臺出之此節御使老中加賀守出席

高家侍座畢て膳部撤之茶并餅菓子出之重て吸物出之二獻にて撤之殿上間へ被退座<sup>○中</sup>

一明後七日蹴鞠見物被在之候様被仰出候ニ付水戸殿水戸中將殿供之家老を以御禮被申上之

於御躰間謁老中<sup>○中</sup>

同月十三日

一今度於日光山權現様二百回御忌御法事御執行相濟候付而御能被仰付尾張中納言殿水戸宰相殿水戸中將殿始諸大名并布衣以上之御役人法印法眼之醫師其外御法事御用相勤候面々見物依被仰付右登城出御以前何<sup>萬</sup>見物之席へ着座<sup>○中</sup>

開口

夫松の葉の千代かけてあまねく照らす日の光名におふ山に跡たれし惠の露の玉くしげふた百とせの神わざはめでたかりける時とかや

〔天保集成絲綸錄<sup>三十</sup>〕文化十二年三月

御勘定奉行 江

今度於日光山權現様二百回御忌御法事御執行ニ付而被行赦候輕罪之輩可致赦免旨被仰出候

日野中納言

四辻中納言

飛鳥井宰相

萬里小路左大辨宰相

殿上人

梅溪中將略○中

〔將軍德川家禮典附錄十四下〕東照宮二百回御忌勅會萬部御法事之記下

文化十二乙亥年

同月○五四日

一今度於日光山權現様二百回御忌御法事御執行相濟付而彼地へ參向之公卿殿上人御馳走之御能依被仰付登城且尾張中納言殿水戸宰相殿水戸中將殿始溜詰御譜代大名高家雁之間詰御奏者番菊之間縁頼詰右父子共布衣以上之御役人法印法眼之醫師登營御表出御以前何も見物之席へ着座

但所司代大久保加賀守大坂御城代松平右京大夫詰合ニ付登城

一大廣間

公方様 大納言様 出御御長務

御先立

公方様

御刀

大納言様

御刀

御下段

御着座

老中

御小性

西九御小性

一御導師御門跡、行列ニ而御上社、此節備前守ハ、切目縁迄、高家始役々ハ、御濱廊下迄、爲御出迎罷出、

御經一卷畢而、御導師御退出、備前守始、最前御出迎之席迄、送之、

一御經二卷目之内、寺社奉行阿部備中守、御作事奉行村垣淡路守、御目付初鹿野傳右衛門、巡堂執當年行事相從ふ、

一御經三卷目之内、御目付初鹿野傳右衛門先導にて、備前守巡堂、寺社奉行松平右京亮、大目付伊藤河内守、御勘定奉行柳生主膳正、奥御右筆組頭秋山内記、奥御右筆青木忠右衛門、布施藏之丞相從ふ、西廻廊より、後廻廊通東廻廊、陽明御門へ出、直に休息所相越、

一勤番之外、一同休息所へ引退、

一御經四卷目畢頃、備前守始、如最前出席、

一四卷目畢而、中休有之、備前守始、一同控所へ退く、

一御經中休之内、衆僧へ強飯被下之、

一中休畢而、備前守始、如最前出席、

一御經五卷目之内、拜禮有之、○中略

於日光山、東照宮、二百回御忌、勅會御法事ニ付、参向之面々、

近衛左大臣殿

六條前大納言

山科前大納言

甘露寺大納言

德大寺中納言

當八月五日、高嚴院○德川家綱妻、伏見宮貞清親王女、延寶四年八月五日没、百五十回御忌ニ付於東叡山、三百部之御法事御執行有之候、此段上野執當江可被達候、

六月

二百早忌

〔北野拾葉學堂藏宗祇法印畫圖〕興善院法印良勝筆 詠歌發句、近衛右大臣家照公御筆 此

一軸者、貴師宗祇公爲二百早忌追福令千句連歌興行、依仰口此影像者也、元祿十一寅歲七月廿九日 修竹齋能順花押、學堂什物、

〔將軍德川家禮典附錄十四上〕文化十一甲戌年三月十七日

老中牧野  
備前守

來亥年四月、權現様、二百回御忌ニ付於日光山、勅會萬部御法事御執行ニ付、總奉行被仰付之、右御直ニ被仰含之、

御使備前守  
日光御門跡

右來亥年四月、權現様、二百回御忌ニ付於日光山、勅會萬部御法事御執行可被遊旨、被仰遣之、

〔將軍德川家禮典附錄十三〕東照宮二百回御忌於日光山、勅會萬部御法事御執行之記

文化十二乙亥年

同月○四月七日

一御法事初日ニ付、辰上刻、備前守上社、萬家寺社奉行、大目付、御勘定奉行、御作事奉行、日光奉行、御目附、御徒頭、小十人頭、御勘定吟味役、其外且勤番大名等、先達而御宮へ相揃罷在、

一辰下刻、萬部讀經開闢備前守、寺社奉行、大目付、御勘定奉行、御作事奉行、日光奉行、各東之假張順ニ着座、日光奉行替ニ相詰、

但日光奉行支配組頭一人、末席相詰、○中略



次被物儀畢、同廊衆僧退出、

次外座内衆僧退出

次誠證退出

次公卿退出

次兩御名代拜

次奉幣畢、入御幣殿、神酒頂戴退出、

輪王寺宮、於御拜殿會釋有之、

次輪王寺宮退出

次武家退出

○按ズルニ、十九日本地堂曼陀羅供次第アリ、今之ヲ略ス、

〔淺明院殿御實紀四十四〕天明元年正月廿日、台德院殿秀忠、川○百五十年周忌の御法會、三緣山にて

行はる、導師は増上寺大僧正隆善つかふまつり、衆僧して佛經千部をよましむ、よて水野出羽守

忠友、代參す、

〔天保集成縁繪錄三十九〕享和元西年十一月

寺社奉行江

來月二日、於東叡山、寶樹院、○德川家綱母増山氏、承元百五十回御忌ニ付、三百部御法事御執行有之、

候、依之御法事中、壹人充見廻り可被申候、諸事前々三百部御法事之格ニ可被心得候、

十一月

〔天保集成縁繪錄四十九〕文政八西年六月

寺社奉行江

次揚輦簾時樂人參奏一曲此時賜祿坊官役之

次伶倫奏音樂先進衆僧入樂屋

次導師供奉行列執綱蓋殿上人役之到唐門下放蓋供奉人止

次衆僧踰路着座

次導師着座衆僧平伏

次威儀師跪唱總禮

次衆僧禮拜誠證禮拜無之

次伶倫奏樂

次導師登高座

次堂達鳴磬

吹唄此間著薩伏摩

次賦華龍殿上人役之外座僧武家諸大夫役之

次散華

次賦新御寫經

次法則

次御願文誦誦從靈山持導師

次回向

次導師下高座

次撤御經并華籠

次舞樂三番此間取雜物

百五十年忌

〔實久卿記〕弘化二年十月九日丁酉、明正院、百五十回聖忌也。今明日於兩寺有御法事、參仕公卿殿上人略之于爲詰參兩寺。申刻計歸來、

〔天明集成絲綸錄〕明和二年三月

今度於日光山權現様、百五十回御忌御法事御執行ニ付而、赦被行候輕罪之輩、可致赦免、旨被仰出候、其趣被存、可被書出候、此度者格別之御法會候條、少々重咎之者ニ而、吟味之上、可被相伺候以上、

三月

〔翁草百五十二〕明和二年四月十八日、東照宮百五十回神忌於日光山御本社、御經供養、并御本地堂曼荼羅供次第、

御經供養當日、諸家束帶  
法中鈍色納袈裟

四月十八日巳刻

先至刻限鳴行事鐘、圖書寮官人役之

次樂人入樂屋

次回廊衆僧着座

次公卿着座

次誠證兩官着座

次兩御名代着座

次內座衆僧轡前列立、以轉方爲上首、

次伶倫參向

次導師輪王寺宮、行啓于轡、

令無量衆、見聞歡喜乃至第一百年、獻論堅固、國王大臣、不生淨信、令正法滅、今台靈寔後一百年、蓋將自其變者觀之、則吾佛第一百年、獻論堅固之末劫也、自其不變者而觀之、則即是第一百年、聖法堅固之時分也、況復大功德主、營辦法事、與彼國王、於一百年後、供養舍利者、同一信心哉、

〔翰林胡蘆集〕來年永正十三年太歲丙子二月十四日、鎮山上大雲山興源開山圓明證智禪師松嶺和尚一百年遠忌之辰、諸徒胥議預於今年今月今日、就塔院設忌齋、因使余作燒香一偈、○下略

〔百一錄〕寶永三年七月十一日、強盜長石川五右衛門百箇年也、大佛門前餅屋修行遠忌云々、雖非五右衛門餘資往年投金子百兩於餅屋、幸爲吾修年忌、定議予滅後無弔亡之人、仍以付與之、許諾了、故年來每忌節、供養於僧侶、述其志云爾、今百年之後、猶未除厥惡名、誠可畏、尤可口善事也、

〔有章院殿御實紀<sup>十</sup>〕正德五年四月八日、東照宮百回の御忌をもて、昨日より日光山にて、萬部の御法會行はる、開白は青連院門跡つかふまつられ、日光妙法の兩門主、出座せらる、旨注進あり、

十八日、日光山の御法會はてしをもて、群臣出仕し、宿老に謁し、三家の方々、松平加賀守綱紀、若狹守吉徳、并に留詰は、御座所に出て拜謁す、

〔月堂見聞集<sup>八</sup>〕正德五年四月十五六日、大佛智積院三井寺等に、男女ともに御參詣をゆるす、是權現様<sup>○維川</sup>の百回忌法事故也、此外智恩院并に五山杯に法事あり、南禪寺金地院御廟へ參詣人をゆるす、京都牢獄のもの十一人赦有之、

〔天保集成絲綸錄<sup>四</sup>〕文化元<sup>子</sup>年五月

御勤定奉行江

來月廿二日、桂昌院様<sup>○維川</sup>永<sup>二年</sup>六月二十二日、寶百回御忌ニ付、於増上寺大方丈、三百部之御法事御執行有之候、依之御法事中、一人宛見廻可被申候諸事五十回御忌之節、通可被心得候、

五月



〔康富記〕寶德二年九月三十日辛未是日夢窓國師百年忌也彼入滅崇光院御宇歟種々有作善諸五山之內彼門派者先之今月中連々於寺々修其儀嵯峨之佛事昨日有轉經臨川寺兼天龍寺間數町假懸渡廊下於其上有行道云々今日有陞座景南和尚被勤之拈香南卿寺前藍田和尚勤之云云自公家有度者使歟尋之可記之藏人頭右大辨藤原勝光朝臣東御樂與車雲々由兩室町殿無御聽聞管領畠山金吾禪門已下諸大名不被參之昨今大名有誓固許也可尋注之○又見東寺行日記

〔康富記〕寶德三年七月五日辛丑細川奧州經持曾祖父顯氏之百年忌今日被修作善云々

〔宣胤卿記〕永正四年四月十七日遣狀於頭辨左案在此中以狀可申由二被相觸之故也諸家悉如此

鹿苑院殿○足利義滿御百年忌御香奠進上事知行所々守護押領窮困過法式候殊又先規非進上之人數ハ可然之樣可得御意候謹言

四月十七日

宣胤

頭辨殿

五月六日今日鹿苑院殿百年忌也於鹿苑院爲黑衣沙汰有法事許也御經供養用脚不事行之間不被行云々百年忌事於公家無沙汰事也今度等持院殿尊氏百年忌發例也其時者於等持寺五箇日八講當日曼陀羅供結緣灌頂等有之予參仕如夢觀以前也及四十餘年歟

〔翰林胡蘆集〕鹿苑院殿百年忌陞座○中散說

大日本國永正肆年太歲乙卯五月初陸日茲迎勝建本寺大檀越鹿苑院殿准三后大相國一品天山大禪定門○足利義滿一百年遠忌之辰京城居住人功德主源朝臣義澄就于當院營辦大法事夫百年忌之設起于本朝表有終身之喪也而吾禪林之徒專行之是無他惟性之靈然不昧者不特生而存不僧老而亡百年一日祭之如在吾徒既如斯世俗誦中稱孝孫者豈忽之哉且考之釋典不爲無所據也佛臨涅槃記法住經曰時薄伽梵告阿難曰我涅槃後第一百年聖法堅固有大國王供養吾身所留舍利

次開幕

次武家退出

次大衆伶人退散

〔好色五人女〕木屑の杉やうじ一寸先の命

来る十六日に無菜の御齋申上度候御來駕においては、かたじけなく奉存候町衆次第不同麴屋長左衛門中の年の年月の立事夢まぼろしはやすぎゆかれし親仁五十年忌になりぬ我ながらへて是迄弔ふ事うれし古人の申傳へしは五十年忌になれば朝は精進して暮は魚類になして諸酒もり其後はどはぬ事と申せし是がをさめなればすこし物入もいとはずばんじその用意すれば近所の出入のかゝども集り椀家具壺平るすちやつ迄取さばき手毎にふきて膳棚にかさねける

六十年忌

〔齋藤親基日記〕應仁元年五月鹿苑院殿○足利義満御年忌六十年忌也

〔嘉良喜隨筆〕延寶三年四月十七日ハ東照宮六十年忌也尤死者五十年忌ニテ法事ハ無事ナレドモ生人ニ四十ヨリ百歳迄ノ賀アレバ名將杯ノコトハ跡ヲ慕フ心ニテ百年忌迄ハ十年十年ニテ少シヅハノ法事ハ有ベキ也ト久世大和守殿ノ了簡ト云

百年忌

〔南方紀傳〕貞治六年三月十三日北帝光嚴長講堂へ行幸コレ後白河法皇百年忌ノ御追善ノ爲也コトシ百十七年也世上ウチツバキ兵亂ニヨリイマハデ御延引

〔絶海錄〕復曰大日本國山城州正覺山妙光禪寺住持比丘明麟等應永四年冬十月十三日伏値本寺開山始祖法燈圓明國師大和尚一百年示寂之辰先庚若干日轉閱毘盧法寶大藏經文七藏溫尋大乘五部真詮各十部正當今晨就于本寺營辦忌齋專致追慕之忱備香華燈燭茶菓珍羞之儀以伸供養

次御經一卷畢而御導師御下高座御供所江御退去

御名代御待合

次御名代御參堂樂奏武家參迎

御名代先於總御奉行之宿坊御待合御經一之卷之內啓御案内御參堂准后宮御出會

御名代御拜禮畢而御退出武家御送

次御導師從御唐門御退出武家御送御會釋有之

次武家復座

次御手替凌雲院大僧正從正面上堂樂奏登高座第二卷始之二之卷之間總御奉行并寺社御奉行等

拜禮

次第四卷畢而御手替下高座樂閉御供所江退去

次武家退座

次大衆中休

次擊大鼓備三讀經時刻見計

次大衆伶人着座

次武家出席

次伶人奏樂

次開幕

次御手替登高座第五卷始之

次第八卷畢而回向樂附

次回向之內新宮從內謹口於御內陣御燒香畢而直從正面御退出武家御送御會釋有之

導師

覺樹王院

光明供

准后宮

錫杖

青龍院

同月六日 寅刻

一番鐘 八時半  
二番鐘 七時半

後夜

導師

五佛院

證誠

准后宮

凌明院樣五十回御忌

千部讀經之次第

九月四日 辰刻

一番鐘 六時半  
二番鐘 五時半

御經開闢

一番鐘大衆俗人參堂

二番鐘武家參堂

次御導師准后宮供奉行列御上堂俗人奏樂武家參迎御會釋有之

次開幕

次御導師御着疊

次武家復座正樂

次總禮附樂

次御導師御登高座

次御法則



九月三日 申刻

二番鐘 八時半

初夜開闢

導師

唯識院權僧正

光明供

新宮

錫杖

圓珠院

同月四日 寅刻

二番鐘 八時半

後夜開闢

導師

宗光寺權僧正

證誠

准后宮

同日 申刻

二番鐘 八時半

初夜

導師

自證院

光明供

新宮

錫杖

勤善院

同月五日 寅刻

二番鐘 八時半

後夜

導師

護法院

證誠

新宮

同日 申刻

二番鐘 八時半

初夜

二番鐘 七時半

刀目録進薦するにより、石川若狹守總良これにのぞみ、目附土岐十左衛門頼親をも遣はさる、囚獄四十三人を放たる、日光山にては、此七日より十六日まで萬部行はれ、昨日奉幣使けふ祭禮行はる。

〔嚴有院殿御實紀<sup>三十</sup>〕寛文五年七月十三日、家門諸大名をめされ、歴朝相承て、昌平すでに久く上下款處す、かつ神祖五十年の御法會も行はる、をもて、今より諸家の證人をゆるしある旨仰出さる。

〔天明集成絲綸錄<sup>九</sup>〕寶曆十二年九月

三奉行<sup>江</sup>

來月廿四日、深德院様<sup>○</sup><sub>家重母</sub>五十回御忌ニ付、御取越、當月廿四日、於池上本門寺、御法事御執行有之候、右之節、輕罪之者赦被仰付候間、遂吟味可被書出候。

九月

〔天明集成絲綸錄<sup>十一</sup>〕明和六<sup>丑</sup>年九月

寺社奉行<sup>江</sup>

明廿日、光現院様<sup>○</sup><sub>女前田吉治妻</sub>五十回御忌ニ付、傳通院<sup>江</sup>御名代被仰付候間、何<sup>茂</sup>之内申合、可被相動候、御香奠白銀貳拾枚被遣候、支度御納戶<sup>江</sup>申渡候、御目附<sup>茂</sup>壹人罷越候條、申談可被動候。

九月十九日

〔將軍德川家禮典附錄<sup>十六</sup>〕天保六乙未年

淺明院様<sup>○</sup><sub>家治</sub>五十回御忌、於東叡山千部御法會御執行ニ付、上野執當より差出候次第書。

淺明院様五十回御忌

初後夜勤行之次第

之敷地上建神社、毎月備神供、并毎夜之灯明、無退轉、可捧也、尊神、當家繁昌、可加護之、依御遺言、舍兄從二位兼見卿、被勸請申、每日社參、不忘御崇敬異他也、于時慶長第九度卅三回忌、兼見卿、被逢大齋之善事畢、然者御社一圓、令新造替、今社壇是也、去年又、御社之上葺之修理申付、來年正月十日、五十年忌正當日也、然而今年元和八年十一月十日、取越御忌日、恐身七十歲、經營少齋、追善數年、廣大御恩德、偏念孝子之道、淺志願望、此時相叶乎哉、満足満足、大慶大慶、萬々歲謹言、

元和八年十一月十日

神龍院老比丘梵舜敬白

〔寒松稿〕昌純考妣五十年忌拈香

此香戒寔慧解脫解脫知見之所薰結作金色之相散作黃雲之煙、威力廣大、德用無邊、茲者日本國武藏州足立郡芝郷大智山東畔居住菩薩戒弟子一翁昌純居士閑暇之日、屈指則來歲癸酉七月廿有四日、正當先考立金昌、本沙彌五十年忌、同乙亥六月十有五日、正當先妣明派妙鏡大姉五十年忌、以劬勞之罔極、憶慈恩之難報、預爲資助考妣遺忌之冥福、借手於六和之清衆、書寫法華二部之金文、以終漸々功矣、惟寬永四年丁卯九月廿有四日、莊嚴私第、延請禪徒、以薦伊蒲之香潔、於初夜修禮圓通一座之妙懺、於早晨看藏金剛六喻之般若、特臨食時、使建長老祐齋向此燭柴片於爐中、以奉供養、眞如實際常住三寶本師釋迦文大覺世尊、西方無量壽佛、東方瑠璃光如來大慈悲父、觀自在菩薩、延命地藏願王等諸大薩埵、及十方三世聖賢衆、冥府界內十殿慈王曹僚吏部等衆、凡於善事縮年月者、蓋取乎頓證菩提之義也、如上件々勝事至矣、

〔嚴有院殿御實紀 三十一〕寬文五年正月十五日、この四月、日光山にて、東照宮五十回の勅會行はる、

により、井伊玄蕃頭直澄攝祭せしめらるれば、三月中參府すべきむね奉書をつかはさる、四月十七日、紅葉山御宮御參、御衣冠なり、○中萬石以上は、東叡山御宮に參拜するにより、目附宮崎助右衛門憑仲、歩行頭神尾内膳元清をして守らしむ、四品以下萬石以上の輩は、寛永寺に使して大

# 古事類苑

## 禮式部三十五

### 佛祭下

中陰圖

五十年忌

〔公卿補任<sup>仁孝</sup>〕文政十一年九月九日、奉爲後桃園院五十回聖忌、於洞院被行曼陀羅供、但七日常行三昧八日法華三昧等、調聲二品承眞法親王、傳奏坊城大納言、奉行光暉、

〔梵舞日記〕元和八年十一月十日壬寅、唯神院殿<sup>〇卜部</sup>、五十年忌、予一身之御齋申付也、數年御恩德、

忝々満足也、當所地下南北之家、并隱居衆悉召寄、女房衆迄三百六十人計也、御齋也、當日燒香萩原殿本所香奠百疋、淨勝院殿香奠百疋、備尊前、當朝半齋高野衆僧兩人、予瑛藏主、啓請瑛藏主始之、尊前<sup>十二合</sup>佛前釋迦之三尊二合、於當庵、勸之齋衆御酒已下、入念申付也、大慶忝也、次此一書捧尊神申畢、次御社神供捧之、神人鏡後申付也、

謹奉拜夫唯神院殿者、當家從二位卜部兼右公、五代爲羅祖、故兼滿卿爲養父、一家相續之家、督繼十一歲、經神祇道之管領長上行、事等不殘相傳數度々執行、神力神通、神變奇瑞、不可勝計、殊神代之神書明經、明法書籍悉御自筆、明鏡歷然也、神道深奧、勤學爲越數代、遂名給事、揭焉依之、自禁裏、日本書紀神代講釋之義、被仰出、御請申上令參內、神代講義卅一歲、當家以來始誠一家譽天下之面目、然哉、尊神光榮仰彌萬伏、惟忽焉在後、其外諸學講談及度々五岳尊老、並席聽筵之次、諸藝道概之給朋友談訪來事、无寸暇、凡諸社之神官敬來、而神道裁許之受相傳畢、當家門弟算不非違、抑御院號等之事、唯神院關叟宗一見存之御時尊號、元龜四年正月十日、御歲五十八、御終焉之砌、當所內新長谷寺



八百年忌	八七三
八百五十年忌	同
九百年忌	同
九百五十年忌	八七四
千年忌	同
百日齋	八七五
千日忌	八八〇
忌日	同
月忌命日	八九四
忌月	八九八
附中陰	
名稱	九〇一
帝室中陰	九〇三
臣庶中陰	九二〇
雜載	九三七

古事類苑

禮式部三十五

佛祭下 中陰圖

五十年忌  
六十年忌  
百年忌  
百五十年忌  
二百年忌  
二百五十年忌  
三百年忌  
三百五十年忌  
四百年忌  
五百年忌  
五百五十年忌  
六百年忌  
六百五十年忌  
七百年忌

八五一  
八五七  
同  
八六〇  
八六三  
八六七  
八六八  
八六九  
八七〇  
八七二  
同  
同  
同  
八七三

一十九日未刻於御堂逮夜御法事

風折直垂供之者布衣襦袴

一廿日巳刻於御堂御經供養

束帶着供之者布衣襦袴

〔鹽尻七〕庚寅〇寶永五月十四日は大樹殿下〇徳川家宣の實考前宰相中將家綱正三位三卿三十三回の御忌

なり増上講寺にして勅會をおこなはれ侍る

智恩院の門主二品尊統法親王かねて下らせ給ひ院家覺了院の僧正なご事を行なはる大僧正

の御坊増上寺のを始諸檀林の能化出仕して八日の曉より十二日に至り一萬部讀經内藤能登

守三朽木民部少輔總門松平備前守表板倉伊豫守本堂後門等非常を禁じ溝口伯耆守松平隼人正大田

原飛騨守等は響應の事を沙汰せらる十四日勅使内府通誠公

〔天保集成絲綸錄三十三〕寛政五丑年六月

立花出雲守江

増上寺惇信院様〇徳川家重三十三回御忌御法事ニ付此度方丈并役者其外御別當并其以下裝束之

儀相願候處都而御法事之節被下物等之儀古來之御振合ニ見合候而者向々次第ニ御手重ニ相

成候筋も有之候間追々御省略茂被仰出候依之御先例ニ不拘此度御法事ニ付相願候品々之内

ニ茂御省略有之候ニ付裝束類之儀も是迄之儀ニ不拘別紙割合之通方丈始夫々裝束料銀被下

候間右之趣役者江可被申渡候

勅會之法事、依其品有宣命、仍准之令參向、歟於今者、臨時奉幣之時、宣命ニ付參向、○中略

副使

宣旨ニ付有此號、是近日之名目也、舊儀兩局、稱覽宮持宣旨持參之時、召具之其人品者、召使也、即直裾取沓者也、○中略

置

一禁裏仙洞大樹御捧物可被靈神前事

一大行道御自身被遊例有之、式御着座ニ而、大行道不被遊例之事、

一御名代行道者無之事

以上

覺

一四日辰刻於御堂御法事、

長袴着、供之者上下、

一四日晚戌刻御入佛、

風折直垂着、供之者、布衣襖襦

一五日巳刻於御堂大曼陀羅供御法事、

束帶着、供之者、布衣襖襦

一九日ヨリ十九日迄於三佛堂萬部御經讀誦、

長袴着、供之者上下、

一十日十三日十八日於御堂御法事、

風折直垂、供之者、布衣襖襦



日朝夕精進也。

〔二水記〕永正十八年十二月七日今日於相國寺陸座拈香有之奉爲慈照院○足利義政卅三回追善明爲

正月七日、今月被修也。爲見物罷向頭裏彼寺同道衆數輩也午前拈香始是老可尋、是老汝雪云々陸座長老建仁寺月舟住應月

舟直參大慈院御所南有御經供養勅願也御導師定法寺僧正公助仲僧三口妙願院蓮光院不動院公卿中山中

納言甘露寺中納言殿上人左中將雅綱朝臣藤兵衛佐永家朝臣六位中務丞源諸仲奉行頭中將重

親朝臣今日月卿雲客各束帶月卿不帶御寄、著座之後持槍願

〔權大納言言繼卿集〕永祿五事秋十二天松峯尊靈の三十三回をむかへ寸志を勵さむとするに家

貧ければその懇情を徒になし小僧を請せむとすれども世亂かはしくてなを經營の求を

空すよりて僅に法華八軸心經四紙真文等を書寫し泣筆を涙痕に浸し六字の名號を句の

上に置て野語を綴り牌前に奉備といふ事まかなり、特進都督郎藤言繼

ながらへてあるもかひなしたらちねの跡とふべくも事たらぬみは○下略

〔三十三回御神忌留經路禪典章〕慶安元年四月十七日東照宮様卅三回忌之御時法華廿八品合卅

五卷之御料紙被仰付仕立指上申候次第

一序品 青蓮院御門跡 紙數十一枚半 方便品 二條殿前攝政 同 十三枚

二警噺品 圓滿院御門跡 同 十八枚 信解品 高倉大納言 同 十枚○中略

出居座事

辨少納言 外記 史着之

但今此座依無沙汰各不着之、

凡諸法會被准勅會之時必有此座稱勅會者以准御齋會之故也有宣下外記所承也○中略

少内記

侍る。○中略も今年寶篋院殿。○足利三十三年にあたらせ給ふほどに、此供養もその御ために、かねてよりの御心あてがひとぞきこえし、孝行の御心ざしも、げにいかでか佛天の感にも通せざるべきとおぼえたり。

〔親長卿記〕文明五年六月十八日、妙法院僧正申、經豪律師事、季音除服事奏聞、自今日於普廣院。○足利新造度被始御作善普廣院殿。○足利御三十三回也、廿三日有轉經、○足利明日普廣院殿御僧衆五百五十餘人、

以外無人歟、自賀茂被召一切經了、

〔親長卿記〕延德三年八月廿八日、亡母廣大寺殿三十三回也、去年去々年、如形致其沙汰了、予至今存命之間、法花經一部、血盆經七卷、自筆書寫、稱名念佛百萬反、光明真言千反等、今日供養二尊院僧衆六人、真乘院、般舟院、統惠定意、惠弘等也、先有經供養、導師真乘院上人、次招請、樂林軒。○足利四辻前中納言、○足利源中納言、○足利元長卿、○足利山科宰相、○足利園宰相、○足利庭田重經朝臣、

地下藏

景兼、○足利景口、○足利景範、已上、○足利季音、○足利集

有、舍利講、般舟院、統惠上人爲導師、

今日時粥也、如形遂其節、自愛了、覺勝院僧正有合方、○足利子弟

及晚參、淨蓮華院墓所

〔親長卿記〕延德四年四月廿一日、常樂庵僧、并康欣等七人、有施餓鬼、女房母堂廿九年也、雖然引上三十三回了、

〔實隆公記〕永正元年十月十四日辛未、先妣卅三回忌也、二尊院長老壽觀上人來臨、僧衆八人獻粥、調經了、有供養、唱散花如例、其後梵網經讀誦、有伽陀、半齋、誦經了、各分散小施物事等申付之、及晚詣志乃坂墳墓、寫經等奉納、燒香料、賜歸宅、自去八日、斷酒一食、持齋也、凡四十八日、朝精進、不淫戒也、自朔

請他門長老充之既定矣、浩首座又告余、以二佛事并院御幸等事、且約來日參府而口云々、九月晦日、先國師三十三年諱、先一日、天龍寺供養供養及年忌佛事儀式、詳見于三會雲居兩塔法記也、今不必多載之。

〔和久良半の御法〕是は明徳はじめのごし卯月二十日あまりの事にや、都にまねなる聴聞侍りて、嵯峨仁和寺醍醐勸修寺のかたはどりよりも、見聞の裏頭あやしのきぬかづきに至るまで、一條邊二條のあたりなご、さながら布を引たるのごとし、まかあれば是はいかなる御佛事にてましますやらんと、世におぼつかなかりしかば、たれもなく、行來の人にむかひつゝ、うはの空にたづね侍りしかば、ある人の申やう、是こそ等持院殿足利氏三十三回の遠忌を、この晦におくりむかへさせ給ふ、その御ため顯密の外まで、色々の御佛事どもを修せらるゝ中にも、御八講をむねとせさせ給ひて、四箇大寺の碩學をめされつゝ、よろづ長元一〇條の例にまかせ、すでにけふより始行せられ侍り、かの證議に、大乘院の僧正、くはゝらせ給なれば、嚴儀の體は、中々申に及ざる事にて侍るべきなり、このたび證義五人の例を捨られ、講聽各別にして二十口、其外にそへ問者侍る。○中略

抑三十三年の尺尊、切利天にして、摩耶の御ために、安居九旬の間、報恩經を説玉ひし、是ぞおこりにて侍るべきにや、ゆへをいかにと思へば、摩耶夫人は、佛誕生の後、七日ありて入滅し給ぬ、扱報恩經を説玉ふ事は、三十成道の後、三させになりての御事なれば、これ則三十三回忌にあたるなり、夫は佛土にして先妣の御爲、これは穢土にして祖父の御爲、月氏日域、こと異なりといへども、ともに安居に相當りて、かやうに法の花ぶさをちらしめますも、ふしぎにたふごくおぼえ侍る。

〔相國寺塔供養記〕扱も相國寺の御塔供養、此月○應永六年九月十五日一定とて、天の下ひゞきの、しり

〔普明國師語錄〕爲相州太守天臺鑑公禪定門三十三周忌辰請平氏高時

此香諸佛道樹列祖傳芳生長怨親平等區域敷榮物我一如覺場大日本國山城州京師居住奉三寶弟子征夷大將軍亞相源某甲○足利今月二十二日伏值前朝相州太守天臺鑑公禪定門及戰陣亡歿諸位覺靈三十三周遠忌之辰特畫家財開法場嚴備香華燈燭等妙供拜請本寺堂頭和尚陸座說法且復奉請名利諸大尊宿同共證明之次借手天龍住持比丘某甲藉此寶香供養云々恭惟覺靈顯布幕下蹤第八葉効周亞夫治三十霜物理終始非凡庸可測世道通塞實曆數所當遂見陵遷成谷何怪海枯變桑此時相公甫四歲不令武威振八荒天授人與回風淳素時至德建佐政君王仁化能救塗炭利濟無有限量爰當三十三周遠忌書寫六萬餘言金章供佛濟僧資冥福陸座說法提宗綱果知令真黨徹實際更有何妄業成夢鄉今日修善巾解結積劫無明雪投湯著著無不轉身一路塵塵助發本有靈光且以何爲驗水晶熊動微風起滿架薔薇一院香

〔新後拾遺和歌集十七〕祖父國助が卅三廻の佛事さたするとて父國冬がこと思出て

津守國夏

たらちねぞ更にかなしき親のおやを我とふべしと思ひやはせし

〔空華日工集〕應安三年三月十五日上杉中書請爲先考古岩淳居士三十三忌拈香蓋中書自信州陣辨供時製金襴袈裟以爲施以古岩舊戰袍一片零碎者爲帕子包袈裟

〔空華日工集〕永德三年七月十六日浩相二首座傳國師命來令余過安聖院白于府君○足利國師爲

來九月三十三忌探伺鈎意宜奉府命吾恐府君與國師相忤方便婉詞以成就之浩相乃喜曰幸矣

十九日赴天龍方丈會議九月佛事之式國師本意寺既重興自任座讚導師諸老兄弟竊議以爲不可

蓋是專爲先師三十三忌也陸座拈香宜請他門尊宿若以當寺供養而爲本似非先師佛事衆議不與

國師意合余先是讚與浩首座和會席罷浩溫相首座令納諫柱乃懇啓國師師意於是解矣陸座拈香



ては又親王もいかでか簾中にわたらせ給べきとてにはかに御座をかまへらる。親王は右方、准后は左の方につかせたまふ。このうへは又御簾をまかるべしとて、院も出御あり、攝政殿はからひ申され侍しにや、嚴重の儀式かゝる事なしとぞ。物みる人々、目をおどろかし侍し、元亨の頃かどよ、後醍醐院、西園寺へ行幸ありて、中務親王、二條の大殿など、候はせ給て、御倚子上にて、秘曲の御所作ありしぞ。近頃のありがたきためしにて侍し、其後はかやうに嚴重の御所作はうけ給り侍らぬと、ふるき人も申されし、いどめでたき事なり、舞はじまるほど、所作人ども大ゆかに着座す、地下の伶人は、階下にさぶらふ。略○中同廿八日、けふは陸座拈香などなり、いづれも國師一人して申させらるゝとかや、事の儀いとたふとし、准后はかねてより寺にさぶらはせ給ふ、親王攝政殿、准后など、みな院の御さじきへまいらせ給、御願文よみあげられ侍し、たふとく涙をさへがたし、准后かやうに申させさせ給事のめでたさ、いにしへにも例あるまじきまで、故陽祿門院の御くはほうのいみじさ、後の御名までもかやうにありがたきためしなれば、草のかげまでも、さこそうれしときかせ給らめ。

〔國太曆〕貞和三年九月二十五日、今日竹林院入道左大臣公藤原三十三回忌辰也、因茲廣義門院公衛女後伏見就于西園寺無量光院壇場被修佛事件。期月佛事先規未詳云々。且取于教内更無所見云々。然而或又有營此事之人歟。予先妣此忌辰有相營事所詮幽靈之追福、遠近盡懇志之條、可叶孝子之道歟。

〔師夏記〕貞治四年五月十八日、今日相模守平高時故大方三十三回忌辰也、仍大樹義經於常在光院被行曼陀羅供、導師山岡崎僧正桓覺廿二日、今日先代故入道相模守平高時、相嘗三十三回忌辰之間、大樹被修佛事於大炊御門西洞院、大光明寺、右結緣灌頂導師口口、於等持寺有施餓鬼云々、鎌倉大納言有願文。

しく見えさせ給、中々をろかなることばはおよび侍らず、攝政殿をそしどて、たび／＼たづね申  
さる、さうなく御前へまいらせたまはで、まばしやすらひ給程に、攝政殿まいらせ給、これも御  
ぼしなをしなり、庭田殿に、かやうに准后御わたりありて、せめ申されて、やがて御所へつれ申さ  
れて御まいりあり、杉殿とかやに入せ給ふ、御すのうちの事は、いたく見をよばねども、院のうへ  
出御なりて女房たち、三位殿をはじめとして廿人ばかり、御まへにさぶらひ給ふ、御酒たび／＼  
まいりて、夜なかすぐるほどまで、まかうせさせ給、こまかなることは承り給りをよび侍らず、そ  
の、ち准后は、指月庵へいらせたまふ、僧たちみなまいりつどひたるにや、○中廿七日、○中又宮  
の御方、○崇光皇子  
榮仁親王御輿にて寺へならせ給ふ、やがて一切經の轉經の事あり、はこをばきやくで  
んの右の方につみをかる、院出させ給、准后同御着座あり、攝政殿は、内々上様にて、簾中に祇候す  
べきよし申されしかども、御着座ありて、結縁し給ふべきよし頻に申され侍りしかば、これも座  
につかせ給ふ、國師以下、五山十刹諸山僧達、四五百人列をひきてたちたり、又所役の僧達まいり  
て、御經のはこを一づゝとりいだして、院の上准后に、いたゝかせまいらす、攝政殿も別勅にてお  
なじくいたゝかせ給ふ、とりつぎは播侍者とかやとぞうけ給はりし、先國師第一のはこをとり、  
あゆみ出給ふほど、樂人舞人一けいろうを打ちて、さきにまいる、いとおもしろくたふとく、まこ  
とに佛の御國もかくこそと、涙もどゞまらず侍し、松風にひゞきあひて、物の音も所から、ことに  
もてはやされて、たうとく、身にしむ心地ぞし侍し、御經はみな佛殿にはこびをかる、一切經のは  
こは數百合なれば、時もうつり侍しやらん、其後院佛殿へ御幸あり、攝政殿准后も、やがて御棧じ  
きへまいらせ給、左右の廻廊を、みなさじきにしつらひて、物見る人、どころせきまでいりこみ、た  
り、左の方の棧鋪には、國師以下の僧たちさぶらひ給けふは、簾中の御所作にて、親王も准后も、大  
ゆかに御着座もあるまじきに、てありしに、物へだゝりては、難治のよし准后申され侍しかば、さ

殿西面有法事讃事高座頓惠上人顯智法師以下九人<sup>○中</sup>是今年相當卅三年<sup>○後堀河皇女室町  
三日月</sup>之故朕修此佛事卅三年之善本說不分明然而近年爲習俗仍内々修之凡故女院以念佛爲宗之故也一念聲明輩參仕仙洞雖不可然後嵯峨院以來爲流例之間如此頓惠辨說如涌尤能說也法事讃了有一晝夜念佛

元弘二年五月三日卅三年佛事近年世俗多以修之未勘舊例後嵯峨院以後代々都無此事仍不審之間相尋由緒并先例於忠性憲守等忠性申不分明但若依觀音利生之儀歟云々憲守申雖不分明釋尊卅三歲之時上切利天爲摩耶夫人說法其口經三十三天是等之由緒歟云々今日開題之比說法云人間三十三年相當冥道之千日之旨委算勘之尤有其典凡於通世間人能說之僧也但強記宏才音聲殊勝之上得其骨之故歟

〔陽祿門院三十三回忌の記〕むかし喜撰がすみける都のたつみにあそをしめて年月ををくり侍る翁ありけり年はむそじにあまりて朝の露にことならず身のいとなみにふか草伏見の里にかよひて松の落葉を爪木にたのみ柴舟につみてかのわがいほにかよひ侍けりこの神な月廿六日にれいのやうに伏見のささにかよひて侍しに院の御所のあたりむま事たちこみ物さる人など所せきまでみえ侍しかば人なみに立よりてかたへの山がつに尋侍しかばことし<sup>○至</sup>故陽祿門院<sup>○光嚴后  
藤原秀子</sup>三そちみこせの御法事院<sup>○樂</sup>のうへむたちけいめいし給ほどに攝政殿<sup>○二條  
良基</sup>准后<sup>○足利義満</sup>その外の大臣公卿家々のいと竹にたづさはる人々けふよりまいりつごひてあすは舞樂なべてならぬ見ごにて侍べしとかたりしかばめうもんの松の影に立よりていはによりふしてここのやうをおがみたてまつりしに國師以下五山の長老たちをはじめて三四百人みなくちきに大光明寺にまいらせ玉ふうち見るよりまづたうどく涙もつかぶばかりなりさるのこくに准后まいらせ給ふ御名ばしなをしなり公卿殿上人車をつらねび

冷泉民部卿

阿野宰相中將

散花殿上人

豐岡右兵衛佐

倉橋民部少輔

小森丹藏人

奉行

葉室辨

寺門傳奏

勸修寺辨

武家傳奏

德大寺右大將

庭田前大納言

參勤

鷲尾大納言

石井右衛門督

石野宰相

〔公卿補任〕

光格

文化八年十月、自五日至九日、五箇日、奉爲後桃園院三十三回聖忌、於清涼殿被行御

儀式、調聲天台座主承真法親王、傳奏日野中納言、奉行隆純朝臣、

〔光嚴院御記〕元弘二年

○正慶元年

五月三日辛未、午刻御幸持明院殿、御月忌如例、貞海爲導師、其後於寢



可進一通候其間且可有御存知也恐々謹言、

十一月二日

守光

水本僧正御房

〔二水記〕享祿五年九月廿八日癸酉今日奉爲後土御門院卅三回忌於般舟三昧院被行曼陀羅供南界阿闍梨大僧正尊海真光院誦經導師實助僧正理證此外讚衆九口仁和寺衆五口石山衆四口公卿帥大納言甘露寺中納言雲客布施取範久朝臣度者使隆重朝臣堂童子資雅町口口菅原在忠同賦花宮午時始行申刻許果行云々委細凡可尋記敷今日傳奏頭辨兼秀朝臣奉行右少辨惟房兩人供不合期不參城南云々

〔二水記〕大永六年九月廿八日傳聞於般舟三昧院有御經供養如例奉行後土御門院御正忌云々至御三十三年迄ハ被修之云々

〔京都御役所向大概覺書〕後西院尊儀三十三回御忌於泉涌寺般舟院御法事之事、

泉涌寺

享保二丁酉年二月

當日 廿二日 午刻

法華懺法 衆僧十八口

御導師 貫道長老

呪願 宗絮西堂

我濁句 蒙山西堂

御法會奉行 太啓維那

看座

西園寺大納言

〔親元日記〕寛正六年八月四日己卯、飯左大方ヨリ奉書、

後小松院三十三年忌御佛事料、禁裏御料所、美濃國伊自良段錢事、一段別拾匹宛、令支配之、今月中可被懸進之、若有難澁、緩怠之後者、堅可被處罪科之、由所被仰下也、仍執達如件、

寛正六八三

散位 飯尾左衛門大夫 之種

下野守 布 下野守 貞基

即披露申候畢

〔實隆公記〕文龜二年十二月十九日戊午、於安禪寺、奉爲後花園院卅三廻聖忌、被行曼荼羅供、阿闍梨

賢深僧正、

座調水本、故定親卿息、七十歳、一昨日補、東寺一長者、讚衆十口、十弟子兩人、堂上之儀也、八千疋供料給之、參勤云々、

奉行職事守光朝臣、傳奏中山中納言也、依兼日催參仕、

〔曼荼羅供記〕文龜二年壬戌十二月十九日戊午、角宿迎、火曜逐、後花園院三十三廻聖諱、曼荼羅供被行之、堂

色衆十口、抑於御國忌者、十二月廿七日也、依爲月追被點用也、日歟、

施主御事

禁裏樣柏原

奉行事

傳奏中山中納言宣親卿

職事廣橋左中辨守光朝臣

大阿闍梨報恩院大僧正賢故中山亞相定親卿御息

轉大辨一長者法務、昨日十八宣下、

十一月二日、從頭辨內狀在之、其狀云、

奉爲後花園院卅三廻聖忌、可被行曼荼羅供、阿闍梨、可令參勤給由、被仰下候、日次未定之事候、重

法印前左中將爲之朝臣束帶不帶冠、置秀藝僧都前慈覺僧都左上面依、侍從行豐朝臣冠衣、置良圓僧都前、

左少辨資親後衣冠任辨官也、置宗賀僧都前、侍從益長冠衣、置快藝僧都前、左少將隆遠冠衣、置房仙律師前、則

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

留調子、次總禮樂樂明、此間調聲、慈藝僧都着禮盤、次快藝僧都出伽陀、次三敬禮如禮、次供養文、次樂

也 尤可被懸御簾歟件東第一間垂御簾爲女房候所東庇及南庇東一間西面皆垂御簾爲御聽聞所  
出御之後被簾北一間 母屋東第二間 當階中央立佛臺懸本寶金襴表衣赤地 其前立高机一脚作紫  
御簾半許被押張也 其前立禮盤一脚在錦緣  
鋪中帖席 其東方立磐臺有磬 禮盤兩方立經机一脚置錫杖副東方御簾自母屋南  
間及南  
持寺被流云々 供五色佛供置佛具供香花其左右立燈臺供燈明高机其前立經机一脚置手香爐

其前立禮盤一脚在錦緣  
鋪中帖席 其東方立磐臺有磬 禮盤兩方立經机一脚置錫杖副東方御簾自母屋南  
間及南

底敷小文高麗帖二枚依爲兼宜  
繩一位敷可尋 爲其行公卿座副北障子東第二間以西敷小文高麗

帖三枚其末折南敷之爲僧衆座此座敷機又近例也本國副西方可敷也僧衆南上四  
而可着也今度東上南面來方東面北上着由依仰也 幡花幔如常但

母屋不懸也如何階間以東簀子敷小文高麗帖三枚爲所作公卿座階間以西敷同帖其末一帖折北

敷之爲同座其末南北行敷紫緣帖一枚爲同殿上人座階東西構假庇敷假板敷其上敷紫緣布 帖一

枚二爲地下所作人座無僧集會所仍參集殿上下侍邊

未終刻上皇後小松御直衣  
御奴袴被上 御簾中次內大臣直衣 自中門廊方經簀子入正面間着其行座次一位兼  
常大納言也直衣如

座次園前中納言冠下衣  
冠下衣 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人

座常大納言也直衣如 自東方經簀子入正面間着同座北面 次權大納言冠下衣  
冠下衣 自東方着東方所作人





上良雄僧正院林滿濟僧正院實忠慶僧正良親法印良藝法印仲承僧都公眞僧都慈藝律師秀藝律師也散花役宗量朝臣豐房朝臣敦興朝臣經良朝臣隆躬朝臣定顯朝臣實秀朝臣有光朝臣家俊定光清房知興也樂人堂上右大臣冠花山院大納言冠宗量朝臣冠信俊朝臣冠經良朝臣冠隆躬朝臣冠孝繼冠地下景房冠定秋冠藤秋冠景秀冠氏秋冠爲秋冠大豐原家秋冠大神景親冠同景清冠豐原幸秋冠安倍秀英冠亥刻被始行宸儀○松後御簾中衆僧入道場准三后御着座洞院大納言中山宰相同着座次堂上地下樂人着座右大臣宸儀被上御簾半言調子此間散花之殿上人賦花宮次宗明樂次調聲僧正登高座總禮敬禮段次蘇合序五拍于次六根段二段畢同三帖又二段訖同破急六段畢輪臺青海波次經段宸儀御行道院大納言准三后以下同行道此間右大臣次廻向訖千秋樂殘り樂蘇合急笙花山笛信俊朝臣琵琶右大臣箏簾中益井青海波笙宗量朝臣笛隆躬朝臣琵琶右大臣事訖廳早懺法被始初夜准三后御調聲云々其後御祇候御前酒宴數盃云々天明御退出二月五日未初點右大臣參內酉半刻准三后參內先早懺法二座被行此間准三后祇候休所右大臣以藤中納言自御休所御出之時可候御簾之由被伺申雖無御返事時宜無子細歟之間應參候暫御難談云々御出之時御簾之役勤了則供奉右大臣日野大納言洞院大納言花山院大納言藤中納言中山宰相同供奉着御道場之座樂人堂上地下着座右大臣敬禮段次萬秋樂破次六根段三段畢白柱此間准三后立座退出被除常御所云々仍主上六段訖輪臺青海波次經段准三后無御行道次廻向千秋樂殘樂白柱笙花山笛信俊朝臣琵琶右大臣箏簾中青海波笙花山笛隆躬朝臣琵琶孝繼殘樂孝繼散々引損樂人聽衆驚耳云々當道耻辱不可說事也事訖樂人衆僧退出准三后祇候常御所日野大納言藤中納言同祇候酒宴令入與給爲部曲信俊朝臣俄被遣召經良朝臣同應召信俊朝臣已休息之處有御使仰天馳參廳被召御前可明詠仕之由准三

して、たゞ硯をならす、未來いかゞあらん、彼下の句のかなをかみにならべて、二七の畢詞をつゝる、使につけて靈前にさゞげ、照覽をこふ、その門弟にしもあらぬ身のなまじひの手向は見ゆるし給うて、一心稱念平等利益により、たゞ當道の繁榮をまもりたまへ、爲村廻向敬禮々々、南無阿彌陀佛、

二十七年忌

〔天明集成絲綸錄<sup>十七</sup>〕天明七<sup>未</sup>年五月

大目付江

當六月惇信院様、<sup>○鎌川</sup>二十七回御忌御法事御執行ニ付、御法事中爲、伺御機嫌、松平加賀守、溜詰在江戸之分、松平越前守、所司代、大坂御城代より、卸干菓子、御水菓子之内、一度可被差上候御精進明之御看者、不及獻上候、

一右之外、在府萬石以上之分、不及獻上物候、御法事相濟、御精進明之御看<sup>茂</sup>、不及差上候、右之通可被相觸候

五月

三十三年忌

〔後光嚴院三十三回聖忌記〕應永十三年丙戌正月廿九日、後光嚴院三十三回之聖忌也、仍自廿九日七箇日於禁裏有御懺法、被逐應安康曆之例云々奉行職事頭左中辨豐房朝臣也、堂上所作人御點云々、今出川右大臣<sup>公行</sup>、花山院大納言<sup>志定</sup>、頭中將宗量朝臣、敦興朝臣、隆躬朝臣等也、信俊朝臣、不入御點之間、令所望之處、無子細被召加了、經良朝臣、孝繼、同被追加、爭折節無其人之間、闕如無念之處、臨期被仰益井云々、廿六日、今日於菊亭有習禮、廿九日、秉燭之時、分右槐<sup>○藤原</sup>、參内、直衣<sup>下</sup>、結布衣、諸大夫一人<sup>興衛</sup>、召具小難色、四人、行粧堅固内々也、戊刻准三后<sup>○足利</sup>、御參内、御行粧別而不刷、歟坊官兩三人云々、日野大納言<sup>重光直</sup>、藤中納言<sup>兼實、衣</sup>、帥中納言<sup>實隆、衣</sup>、候御共、令入御休所、二對給以清涼殿被擬道場室禮之儀、相尋可記、御懺法衆、准三后洞院大納言<sup>實信、直</sup>、中山宰相<sup>冠親</sup>、

〔蔭涼軒日錄〕永享九年七月十三日、洪恩院殿廿五年忌、於等持寺佛事、自公方以三百貫被賜、

〔康富記〕寶德三年七月四日庚子、故山名金吾禪門、常照廿五年忌是日也、於花界院有、如法念佛、

〔臥雲日件錄〕寛正五年四月廿八日、南禪雲臥菴竺華來、因出示來月十五日一色素雲居士二十五年

忌陸座、略中又散說中論、二十五年忌、特設佛事、出於近時之事、

〔親長卿記〕文明十五年八月廿八日、招請佛陀寺長老衆僧四人、亡母尊靈廿五回也、無廿五回追善事、

雖然予至卅三回存在不可叶之間、如形沙汰之、

〔梵舜日記〕慶長二年正月九日、唯神院殿廿五年忌、依爲正忌、予當日佛事執行了、爲音信如此也、萩原

民部少輔唐腐廿丁、大東院、樽五十盃也、圓空、樽廿盃、芋一箕、昆布十本、小七母、樽廿盃、唐腐五丁與三

郎、唐腐十丁、喜三郎、唐腐廿丁、略中右衆ヨリ悉音信也、誠尊靈御恩德也、

〔今古殘葉三十六〕超嶽院儀同三司廿五回忌、手向之文并和歌 冷泉爲村

今年長月末の日は、超嶽院儀同三司武者小の遠忌、五々の秋さかぞへあつ、公のむかしを、つく

づくおもへば、いはけなきよりつかへて、敷島の道をふかく信じ、御代の恵の波をかけつ、和歌

の浦におりたち、習練をこゝろにそめ、修行を身につめて、つひに灌頂の源をきはめ、二代の御師

範たり、春花に芳雪の吟高くのこり、秋葉に紅錦の譽廣く聞えたり、さかのみならず、常にうか

はれし詠歌ども、御氣色にかなひたるが多きなかに、すぐれて寂慮をよせられしは、享保十六の

としのはる、洞裏の御會に、月似古てふことを、ものかはり星移ることも、えらですむ月はむかしの

秋もおぼえて、ごいへる金玉なり、此ときよりぞ、二反よみあげ、る事にはなりたれ、丞相親王の

外きはめて反をかさねらるゝはめづらしき事にて、有徳の君臣、ともにあひあふ時にてぞあり

し、此事をしれる人さへなくなり、年去年來て歌の沙汰、いつとなく微々になり行さまを覺ゆ、往

事をおもへば、懷舊いよく切にして、かたるに友をうしなひ、現當をなげ、ば、述懷ますく、多



二月

〔天明集成絲綸錄十六〕天明三卯年五月

大目付江

當六月惇信院樣○繪川二十三回御忌御法事中爲伺御機嫌侍從以上御檜重一組宛四品拾萬石

以上者御干菓子一箱宛其外者御精進物類一種宛尤在府之分計一度宛可被差上候在國在邑之分者可爲無用候御暇ニ而黃於在江戸者可差上候

但所司代大坂城代者差上候様可被致候

右之通可被相觸候御精進明之御看者不及差上候

五月

二十五年忌

〔親長卿記〕明應三年十月廿七日依召參長橋局仰云舊院○繪川當年廿五年也可有御佛事歟否事予

申云廿五年忌事私様猶以可然御方不致沙汰於公儀御作善事當座不覺悟之由申入了然者黒衣

方許可有其沙汰之由有仰

〔東叡山開山慈眼大師緣起上〕院のみかど○後は先帝正親町院二十五の御遠忌なれば御經か、せ給

ひ釋迦佛彫刻なりけるに海師の上り待ちうけさせ給ひいとうれしとの給ひ院中にして御法

事おこなはせ給ふに海師を御だうしにせうじ給ひて大僧正に任じたまひける

〔續史愚抄中御門〕享保五年十月九日壬寅依明正院二十五聖忌遠夜來月御忌也而被引上被行御佛事於兩寺

般舟三昧院導師某泉涌寺導師某俱無公卿者座又自法皇被行同御佛事於泉涌寺法華經也此導

師照山長老公卿前平大納言時成已下三人參仕奉行院司迄藏人左少辨兼榮

〔公卿補任光緒〕享和三年自十月五日至九日五箇日奉爲後桃園院二十五回聖忌於清涼殿被行御

懺法講

走人、御目付、其外如例出迎、導師手替圖覺院勤之、御門跡讀經被發音、八卷畢而法則を被誦、總禮  
回向ハ一乘院勤之、已中刻讀經畢、

一結願ニ付、佐渡守、高家、寺社奉行所々勤番之面々、諸役人拜禮、

〔天明集成絲綸錄十〕明和五<sub>子</sub>年正月

寺社奉行<sub>江</sub>

來月至心院様<sub>○德川家治</sub>母梅溪氏二十一回御忌御法事ニ付、敎被行候、依之死罪歟、又者遠島可成程之者、  
其外前々御法事之敎ニ書出候類、輕罪之者をも相交致了簡可被書出候、

正月

〔天明集成絲綸錄十一〕明和八<sub>卯</sub>年六月

大目付<sub>江</sub>

當月有德院様<sub>○德川吉宗</sub>二十一回御忌御法事御執行ニ付、御法事中、爲伺御機嫌、松平時次郎、松平越

前守、溜詰在江戸之分、所司代、大坂御城代より、御干菓子、御水菓子之内、一度可被差上候、御精進明  
之御肴者、不及獻上候、

一右之外、在府萬石以上之分、不及獻上物候、御法事相濟、御精進明之御肴<sub>茂</sub>、不及差上候、  
右之通可被相觸候、

六月

〔天明集成絲綸錄九〕寶曆十三<sub>未</sub>年二月

御勘定奉行<sub>江</sub>

當月天英院様<sub>○德川家繼</sub>母近衛照子二十三回御忌ニ付、於増上寺御法事中、壹人宛見廻可被申候、諸事十七  
回御忌之節、通可被心得候、

一同斷ニ付、京南都天王寺并日光山樂人、都合六拾人、外ニ菩薩役之者四人、被召下之、

但十七回御忌之節者、舞樂無之候得共、今度日光御門跡より被相願ニ付、如右、○中略

同月○元祿十三年四月十六日

一寅刻後夜之勤行有之、妙法院御門跡被參堂、導師世尊院勤之佐渡守初出座、每度如斯、

一中堂勅額門より階下迄、兼而假ニ廊下を掛、且筵道ニ地布を敷、導師參堂以後撤之、每度如斯、

一萬部讀經之初日ニ付、卯刻より衆僧千百人并俗人、中堂ニ勤侍、

一辰刻萬部讀經開闢證誠妙法院御門跡、竹内御門跡被參堂西之疊ニ被着座、僧正院家及衆僧、東西ニ列居、佐渡守ハ埋闕之内、東之方ニ着座、高家寺社奉行ハ、縁通左右ニ着座、御勘定奉行ハ、西之方ニ侍座、

一日光御門跡今日之導師被相勤ニ付、行列ニ而被參堂、勅額門之外ニ而下與子、時俗人、堂内縁通南之方ニ列居、音樂を奏す、佐渡守縁通中程迄、高家寺社奉行、御勘定奉行、御目付、階下迄出迎、僧正院家圓覺院住心院、願王院、勅額門之邊迄出迎、御門跡堂内東方之疊ニ被着座、林廣院、總禮之聲明を發音し、衆僧唱畢而導師日光御門跡座を被立、禮盤之前ニ而三拜、禮盤ニ上り法則被誦之、讀經被發音、衆僧誦之、一卷畢而日光御門跡、妙法院御門跡、竹内御門跡、被退去、二卷目より、導師之手替り、凌雲院大僧正參拜、禮盤ニ上り勤之、一品畢而、毎々役僧大鼓を打一卷畢度ニ磬を打、四品畢而、中休有之、午刻八卷畢而、回向之聲明なり、

一八卷畢而、三御門跡爲焼香、被出座、拜禮畢而退出、每度如是、○中略

同月○五十六日

一今日萬部結願ニ付、初夜後夜之勤行無之、

一卯後刻萬部讀經初導師妙法院御門跡、行列ニ而被參堂、佐渡守、高家寺社奉行、御勘定奉行、御馳

〔季連宿禰記〕天和二年壬戌年七月廿七日壬申

一明日<sup>廿八</sup>後淨明珠院<sup>二條故太閤御所康通公</sup>十七回忌也於嵯峨二尊院有御佛事云々予可參詣之處公用繁多之間不及參御香奠百匹付使遣二尊院了今夜御對夜也

〔季連宿禰記〕元祿九年四月廿一日丙午來五月八日嚴有院殿<sup>征夷大將軍家綱公</sup>令當十七回忌給依之關

東御佛事勅使院使以下人々今曉發足被下向江府云々三條轉法輪前內大臣<sup>實治公</sup>醍醐大納言冬

基卿中院源中納言通躬卿藤谷宰相爲茂卿殿上人三人野宮左中將定基朝臣富小路兵部大輔員

維朝臣藏人六位藤原相尙<sup>入江式部大丞橘部</sup>

〔續諸門跡譜〕曼殊院

傳教大師八代是<sup>阿闍梨三十代</sup>良恕入道親王<sup>中略</sup>寬永九年四月關東參向<sup>東照宮十七回忌御導師</sup>同十三年四月同<sup>同二〇一〇</sup>

〔遠碧軒記<sup>佛下</sup>〕近年天台宗の執行にて大猷院殿<sup>家光</sup>廿一年忌あり尤此以前東照宮廿一年の

遷宮に大法事ありそれより初りての事也大社廿一年改替の儀に准じての事なりとぞ天海僧

正作意なり

〔將軍德川家禮典附錄<sup>十五</sup>〕來年<sup>元祿十三年</sup>五月嚴有院様<sup>家綱</sup>二十一回御忌萬部御法事御執行可

被遊旨日光御門跡<sup>江</sup>御使佐渡守を以被仰遣妙法院御門跡竹内御門跡三御門主ニ而御法會可

被執行旨御治定被仰出之

十一月十七日

寺社奉行

松平志摩守

阿部飛驒守

戶川備前守<sup>中略</sup>

一御法事ニ付執役之殿上人如先例<sup>江</sup>被召下之



〔宣胤卿記〕永正十四年四月十二日、今日北堂十七回正忌也、此年忌事、雖非本式、依卅三回群遠沙汰、世以普通儀也、殊老後不期來日、雖無世之例、涯分可勵微力之由、豫插心中之處、不慮之新造已及七千匹、予沙汰之失餘力之條、所存之外也、於余一字施餓鬼行之、佛陀寺長老以下十人請之、先粥次施餓鬼、次半齋爲總聞、冷泉亞相禪門覺曉新亞相甘露寺元長卿四條宰相隆頭辨伊皇朝臣略其外者依半作屋無其席不招之、難々之衆及五十人云々、

〔二水記〕永正十六年十二月十四日、金譽十七回也、明年正月也、雖然年始依不辨取越了、

〔續惺窩文集〕文祿甲午四月初日、乃三品相公冷泉爲純、惺窩父、十七年之正諱也、偶在逆旅、不耐震悼涕慕

之至、欽書小詞三章、其一者、嘆客中不能設祭奠、其二、假古人冷泉驚鵲之句、別寓意、其三、有

兒孫非幹盡之器、空吾翁一生之本志、失吾家萬代之道統、是可忍哉、聊漏哀情之曼乙、類冀靈威

十七年來憂更憂、異鄉異客泣啾啾、薦新禮典無因備、槐影夏纔麥已穠、

逝者若斯曾不留、死生元是自浮休、冷泉泉下乾坤闕、中有玉人關似鷗、

吾翁常戒道長存、不墜家聲以報恩、手澤猶新書帙散、生憎愚妄惡兒孫、

〔梵舜日記〕慶長二年二月十日、宗喜母十七年忌佛事ニ非時寺内衆ニアリ、

〔大猷院殿御實紀〕二十、寛永九年四月十七日、東照宮十七周御神忌の祭行はる、御喪制により、○此年正

月二十四日、秀忠薨、御參宮なし、井伊掃部頭直孝をして、拜せしめられ、土井大炊頭利勝御祭事を總督命

せられ登山す、三卿も各家司をして代拜せしむ、今市御旅館に、三卿をまねかれ精饌を饗せらる、

こたび大僧正天海より、御喪制の間、日光山御宮へ代參を立らるべからず、御使はあるべきか、さ

らば奉幣あるべし、神馬は三匹す、め玉ひ、御大刀はさ、げらるべからず、尾紀水三卿九十日の

間は、御宮參あるべからざる旨を聞え奉る、是より先山中の齋戒は、大僧正天海、山王服忌令を用

ひしが、今より後仰により、神祇道服忌令を用ひしめられ、永制になさる、

之人子之心豈不感乎哉夫年忌之云我國史所不有而他三教之書亦無之但十三廻忌國俗之說見師練釋書其曰迎先支寓追慕者聊有以也於是乎踰延寶八年七月七日垂加翁山崎嘉敬義  
〔大猷院殿御實紀十〕寛永五年四月八日ことし神祖十三回御忌によりて勅使三條大納言實條卿中院中納言通村卿岩倉木工頭具堯參向あり主上親王より御大刀中宮女院より黃金勾當内侍より十帖一卷進らす

〔季達宿禰記〕元祿五年四月廿一日庚子來月八日最有院殿贈大相國故征夷大將家綱公令當十三回正忌

給依之勅使大炊御門右大臣公經仙洞御使清水谷大納言實業本院御所御使小川坊城一位後廣

御所傳女院御使池尻宰相勝房并御佛事殿上人公韶朝臣四辻左泰福朝臣土御門兵部藏人六位

藤原相尙部大丞等下向江戸也今日各京發足云々以上依風聞所記也重而可尋記於御佛事者於

江戸東叡山有之勅使以下之輩御佛事着座被相兼歟殿上人者散花之料歟

〔有德院殿御實紀十一〕享保五年九月廿七日げふ申の刻より東叡山根本中堂にて常憲院殿川綱

吉十三周忌の御法會始あり廿八日山にては辰の刻萬部の讀經開白あり公寛法親王道仁法

親王青蓮院門跡尊祐法親王出座せらる十月四日寅の刻後夜の勤行青門出座讀經導師また

おなじ公寛法親王拈香あり又申の刻初夜光明供も執行せらる八日山にて卯の刻讀經導師

青門已の刻萬部結願す導師は上におなじ三門跡各焼香せらる九日巳の刻金胎曼陀羅供行

はる導師梶門證誠日青兩門其他公卿の參堂あり

〔公卿補任光孝〕寛政七年自十月五日到九日五箇日於清涼殿奉爲後桃園院十七回聖忌被行御懺

法講調聲前大僧正良胤傳奏權中納言奉行胤定朝臣

〔康富記〕寶德二年六月九日辛巳是日故日野中納言義資卿十七年忌也依之贈位贈官事被申請之

昨日被宣下但月次祭御神事中也可爲何様哉

十七年忌

之所至悲而有餘者也午終刻詣中山御墓

〔看聞日記〕永享五年六月十一日今出河故左府

○公

來十三日十三回也壽量品一篇續遺書布施三

百匹

慈雲院送遺殊悅喜被申三條宰相中將正月參之時折紙千疋被進于今未到來也今日被進計

會折節殊爲悅

〔康富記〕文安元年十月廿三日戊辰故清少納言入道殿俗名其賢眞今年十三回之遠忌今月廿九日

也自今日七箇日於大外史文第有作善晝夜不斷光明眞言唱滿之十二時結番引之予分戌刻也外

史於環翠密々有談合事其故者常宗贈位事也醫陰之輩近例上階事有御免安倍氏者有世卿初也

賀家者在弘卿初也諸社神主又被免之上者清家未雖無其例可有何事哉

〔實隆公記〕文明十六年十月十四日戊辰後夜時勤行如例粥諷經阿彌陀經誦之已刻有經供養八齋

之師長老小施願鬼  
作注同□三□□□

導師善空上人 唄臨盛大德 散花伽陀等統圓律師

諷誦予草之同清書之未練之儀□□不可說只述惡志之萬一者也仍注大凡今日說相殊勝催感淚

者也大納言頭辨等爲燒香入來之間小齋相伴入江殿御寮入來按察卿齋後爲燒香入來大納言僧

衆齋後之餅惠之

今日施物

長老貳百匹

臨盛統惠

○惠前  
文作圓

各百匹

自餘僧衆五人各貳拾匹

及晚向大原野墓所燒香日沒時分歸宅凡十三回如一夜夢更滴愁淚戀恩顏者也七日作善雖爲如

形無爲結願自愛先妣納受得脫無疑而已

〔垂加文集中〕藤兼良公十三回忌法樂倭歌○中

後成恩寺殿兼良公十三回忌法樂倭歌作者二十二人詠孝經懷舊各二首都四十四首咏歎之流淚

の枝を折立てゑるしとして、開山の儀を表せられまし、かども、いまだ土木の功をなすにおよばずして入滅し給ひしかば、まづ此地に塔頭をひらき、淨土院と號し、日夜の勤行、朝暮の禮奠、更に怠る事なし、十三回忌にもなりしかば、平生の素意に任せて、廟塔の南に、小佛殿を起立して、淨満寺と號す、

〔新後拾遺和歌集<sup>十七</sup>〕前大納言爲定十三回に一品經す、め侍しついでに懷舊を

雄舜法師

かぞふれば我も八十のおなじ身に残りてけふの跡をとふ哉

〔絶海錄<sup>上</sup>〕復曰、<sup>○</sup>結 娑婆世界南瞻部洲大日本國山城州瑞龍山太平興國南禪寺慈氏院守塔比丘周亨等、應永七年四月初四日、伏值先師前住當山義堂和尚大禪師一十三白示寂之辰、謹就本院莊嚴道場大開無邊勝會、於是大檀越台旂入山、爲法作證、鐘梵交響、龍象臨筵、蓋山林盛事、法門光輝者也、

者也、

〔看聞日記〕應永廿八年二月十八日、抑三方入道、有書狀、故鹿苑院殿<sup>○</sup>足利義滿 御十三回之間、爲御佛事、

殺生禁斷事、被仰出當所獵師ニ可存知之由、可有御下知云々、其旨可仰付之由返事了、四月三日、

抑三方入道、以狀申、殺生禁斷事、自今月五日、至來月中旬、洛中諸國、悉被停止、若被制法者、被懸領主、

可有御沙汰之由、嚴密御教書侍所ニ被成之、其案文進之當所獵師、可書告文之由、可有御下知、彼等

交名等、可注賜之由申之、急可加下知之由返事畢、則召禪啓、可下知之由仰之、五日、三位<sup>○</sup>黃 歸參、

殺生禁斷事、以外嚴密御沙汰之由、三方申、當所事、相構能々可有御下知之由申云々、來廿一日、仙洞

可有御儀法講云々、是北山殿十三回御佛事也、樂人散花殿上人等、被出御點云々、自是も室町殿へ、

御經被進之者可然之由、面々有意見、布施等旁以計會也、

〔薩戒記〕永享五年四月廿五日戊申、今日先考<sup>○</sup>中山定十三回御遠忌也、法事如形、每事違本意、貧困



相當故入道太政大臣經○公十三年遠忌故也、

〔吉續記〕文永五年六月九日、今日故殿長父○吉田經十三年周忌也、權尙書兄經長於淨蓮華院放大釋也、

行入講、僧名八口也、予長○經着束帶爲聽聞、行向僧皆參之後、帥中納言直衣○爲着座人々悉雖不來、

集始云々、權尙書予等、應都督之命着座、勾勘定藤内着座、頃之堀川宰相東帶親忠朝臣、實多朝臣、公

實朝臣、親朝、光朝、高朝、雅藤等入來、此外都督子息、俊氏、俊定、權尙書子息爲方等也、依座狹悉不着座、

上首人々被着座、勾勘定藤依爲殿下基平○藤原執事、不可取布施之間、早出此子細示予、夕座講演了、人

人起座、引布施云々、在中門前乎、手長五人、五位一人、徘徊中門邊、院廳年預資俊并臨官季重等、三四

輩行事、先經供養、導師聖憲法印布施、都督取之、院執權人無五位傳之、次第取之、一口別被物一重生

衣一領、裏物一淺黃五卷納之、經供養、導師布施、一重一裏予、雖爲侍中、依爲父事、取布施、父母事無憚之

由、葉室神門諷諫也、予數返取之、殿上人侍傳之、及晚事了、予退出、入夜向舊墳懷舊之淚、流年之悲、一

時計會、佐入道於小林修甚深作善、予雖可向彼所拜趨之、身不接入講座之條、背時儀之間、慙接此座、

如布施、少々被沙汰、

〔太平記二十五〕藤井寺合戰事

楠帶刀正行ハ、父正成ガ先年湊川ヘ下リシ時、思樣アレバ、今度ノ合戰ニ、我ハ必ズ打死スベシ、汝

ハ河内ヘ歸テ、君ノ何ニモ成セ給ハ、ンズル御樣ヲ見ハテ進セヨト申含メシカバ、其庭訓ヲ不忘、

此十餘年、我身ノ長ヲ待、討死セシ郎從共ノ子孫ヲ扶持シテ、何ニモシテ父ノ敵ヲ滅シ、君ノ御憤

ヲ休メ奉ント、明暮肺肝ヲ苦シメテゾ思ヒケル、光陰過安ケレバ、年積デ正行已ニ廿三、今年○正三

年ハ、殊更父ガ十三年ノ遠忌ニ當リシカバ、供佛施僧ノ作善、如所存致シテ、今ハ命惜トモ不思ケ

レバ、其勢五百餘騎ヲ率シ、時々住吉天王寺邊ヘ打出々々○下

〔西山上人傳報恩抄六〕去年○貞和八月、先師○示身づから此山に入テ、一寺草創の願を發シ、木

○按ズルニ信西平治元年十二月九日卒ス故ニ其十三年忌ハ承安元年ナリ、

〔元亨釋書懸五〕釋明遍藤給事通憲之季子也才氣貫諸哥給事死已十三年一家緇素欲相會修八講蓋國俗逢亡者十三廻之歲登追薦者十二支終而始迎先支而寓追慕也給事多子皆英特也緇林尤茂所謂靜賢澄憲勝覺覺憲及遍也諸子相議以覺爲啓白師充遍散道師

○按ズルニ春記長曆三年十月十九日丙子ニ今日故三州還日也トアリ三州ハ源經相雅實親王曾孫ニテ此月七日甲子ニ卒セリ還日ハ第十三日ニテ卒日ト同支ナルヲ云フニ似タリ蓋シ十三回忌ノ本ヅク所歟錄シテ以テ考ニ備フ

〔山槐記〕治承四年十二月廿二日庚子今日故女房遠忌也仍向東山堂修佛事奉圖正觀音像寫法華經又書寫四卷經第一予○藤原忠親第二少將兼宗第三侍從忠孝第四安房守定長有續子義所奉書也一說沒後當十三年之時殊善云々仍致此勤也

○按ズルニ信西ノ十三年忌アリシ歲即チ承安元年ヨリ今治承四年ニ至ルマデ其間十年ナリ

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年十二月廿五日勝長壽院新造塔供養也已刻將軍家○藤原經御出御布衣御臺所同車相州武州以下數輩供奉布衣騎馬午一點有供養之儀是故右大臣家○源朝原十三年御追善也行西奉行之正日雖爲明年正月廿七日有沙汰被引上之導師當院別當卿法印良信願文文章博士菅原公良朝臣草之酉一刻御佛事訖還御

〔吾妻鏡四十四〕建長六年六月十五日乙酉今日迎前武州禪室○北條經時十三年忌景被供養彼墳墓青船之御塔導師信濃僧正禪真言供養也請僧之中中納言律師定圓光俊朝臣偏中已講經幸藏人阿闍梨長信等<sub>在之</sub>爲此御追福行八講自京都熊所被招請也

〔百練抄十七〕康元元年八月廿日戊寅前太政大臣○藤原實氏天王寺安井邊建立一堂被遂供養今年

施紅唐織物二衣、被重慶明予參進取之置導師前、即退出復座。自前次右大辨宰相取裏物、大臣取時參議取裏物、例也次源大納言右衛門督右大辨等同取被物公卿四條大納言依内之乳父不取之、仍公世朝臣取今一重也、次懸子三。等也、補布殿上人等次第取之、題名僧被物裏物等、已上信行朝臣實業朝臣、有

顯朝臣、康忠等、次第取之、次從僧等撤布施僧退出。御導師即加次公卿自下薨退也、予立退出歸京也、兩上皇還御、女院今夜御逗、明曉可還御云々、彼顯親門院者、山科入道左相府。實御息女也、京極玄

輝門、此女院、三所被奉生天子、希代之光華也、然而現世之間、非國母之儀、以廣義門院。後伏見妃爲准母。後伏見院御嫡仍閑寂頗顰眉之體也、而先公遺恨於此事、先朝正中比、申沙汰、准后院號如形及

其沙汰畢、予生前奉遇此追、眞本懷滿了、仍故障雖非一事、盡筋力營參者也、〔季連宿禰記〕元祿三年六月十四日癸酉、明日東福門院。仙洞、〔靈元〕御養母、後水尾后、德川和子御十三回正忌也、自今日

於仙洞御所、被行御懺法云々、奉行藏人右中辨輔長也、着座并導師等可尋記、於般舟三昧院并泉涌寺、又有御追善云々、

〔御湯との、上の日記〕慶長三年七月八日、じゆごうやうかういん太上法皇。後關成御父、誠仁親王の御十三

年の御ほうじ御さたあり、廿四日を御どりこされて、こよひよりあり、大がく寺殿御導師なり、〔叡岳要記〕上大師本傳云。尊敬記文、意如此大師。○最實龜十年、爲父母十三年遠忌修八講也、

○按ズルニ、最澄父母ノ爲ニ十三年忌ヲ修スルコト頗ル疑フベシ、〔砂石集九上〕俗士之遁世門事

故少納言入道信西ノ十三年ノ佛事、其子孫名僧上綱達ヨリ合テ一門、八講ト名テ、ユ、シキ佛事、

醍醐ニテ行ハル、事有ケリ、開白ハ聖覺法印、結願ハ明遍僧都ト定テ、覺憲僧正、證憲僧正、澄憲法

印、靜憲法印等、使者ヲ高野ヘツカハシテ此ヨシ申サル、ニ遁世ノ身ニテ侍レバ、エマキラジト、  
明遍僧都返事セラレタリケル、○下





たまさかの御願、かへりてあひなくくちおしかるべきを、とて、わざとかうやうにつづめおこなはれ侍るにや、誠に末の世となりては、いよ／＼尺魔のさまたげ、寸陰のまも、おそれつゝ、しむべき事に侍れば、尤いたりふかき御はからひこそ申あへりし。略○中うち／＼の御をこなひのさま、ことしは月々七日づゝの御さうじんにて、法花の四要品、淨土のあみだ經など、かたじけなく宸筆をそめられ、又部諫上人をめされて、觀念法門淨土の曼陀羅の儀等、講尺日をかさねて、さぶらふ人々も、隨喜の信心をおこし侍り、伏見の御寺にては、八月の彼岸のほど、善空上人、あみだ經をさきて、そのあたりの、あやしの山がつなごまで、結縁たぐひなき御願なり、おなじ御寺にて、より三十七日の不斷念佛、淨土三部經の頓寫、施餓鬼など、月々さま／＼のをこなひごも有し中に、十月廿七日には、往生講をこなはる、式善空上人是をよむ宮の御かた、式部卿の宮、左のおごゝをはじめて、堂上地下の樂人ごも、みなまうで、樂などいと嚴重の儀式なり、すべて淨土門の事、弘導和尚、師資の御心ざしあさからざりしにあひつぎて、いまの三人も、御歸依、他にこごなるによりて、此御寺の事も、こご／＼くかれにおほせあづけられて侍れば、かやうの御法ごもたえず、去年も今年の御ためとて、曼陀羅供も、此上人うけたまはりて、前七日の勤行已下、ごりおこなはれ侍き、又おなじころ、安禪寺の佛殿にて、清和院の僧衆をめして、法事讃あり、これも樂にたづさはる人々は、うち／＼の聽聞にこごつけて、付物などさたして、いごたうごし、是は人の夢に、此講演をこなはれたきよしを、故院の御かごあふせらるゝごみたてまつりたるをきこしめして、こごさらにをこなはれ侍るごぞうけたまはりし、この外雲龍院、常照寺、大徳寺、智恵寺、ご、かしこの寺々、はご／＼につけて、やぶしわかぬ御心ざしのいたりふかさは、くはのさぼる、苦の袂にあまるばかりの御めぐみごぞあふぎたてまつりし、かくて當日には、御經供養あり。略○中安樂光院は、一ごせの廻祿の後、いまだはかばかりしき造營にもおよばず、長講堂は、こごの外に破壊したれ

みゆく、宸儀あひしたがはせまします御なをし例に替りて、ひきあはせられたるに、紅の御はか  
まの色あひ、ことにけさやかにみゆ、かねの花筥に、水さうの御すゝのひかりあひたるなどは、よ  
のつねの事のやうなれどもいはず、見なれぬまでありがたくおがみたてまつる、經段はて、  
入御の儀、出御の時におなじ、御座さだまるほごに、調聲禮盤にかへりのぼりて、三禮通戒の偈等  
を誦すおり、樂輪臺、青海波、殘樂、兵部卿左のおとゞ、景益、安信、季音なり、次に伽陀二ありて、廻向の  
樂、千秋樂はて、所作の人々、下臈より次第に座をたちてしりぞき入る、次に頭辨すゝ、みまいる、  
中納言たちて、御前の花筥をとりてつたへたぶ、六位藏人中務丞源富仲、神祇少副卜部兼致、左近  
將監菅原長胤等、佛前よりはじめて、おのゝゝの花筥を撤す、次に良淵大法師、座をおき渡す、此度御  
錫杖をとりて、宗藝法印がまへにをく、則錫杖をはじめ、此間に又夕座の花筥をおき渡す、此度御  
前の花筥、頭右中辨元長朝臣もちてまいる、つたへたてまつる作法など、さきのごとし、自餘の役  
人替ことなし、錫杖おはりて、宗藝法印高座にのぼりて、早懺法をよむ、三寶敬禮の段のはじめ三  
行まで、起居禮の作法、今朝のごとし、のちゝ僧衆は、座の上にたちながら是をよむ、奉行の座は、  
御前ちかきにや、久しくたちて有べき事猶はゝかるべくやとて、永享のたび、故武者小路入道内  
府尹大納言定親卿など参りたりしとき、申合てひざまづきてよみ侍し、その儀よろしかるべき  
とて、此たびの兩人も、かの所爲にぞしたがひ侍りける、經段出御はなし、奉行の衆ばかり行道に  
くはゝる、是又先例也、一座おはりて、承順法印調聲をつとめて早懺法あり、花筥はさきのを通用  
す、其外次第一々にさきのごとし、花筥ごも撤しおはりて後頭辨すゝ、み参りて御座の間御簾を  
たる、次眞俗ことゝくまかで歸る、略中七日御懺法第三日結願なり、おほよそ禁中御懺法の儀  
おほくは七ヶ日なるを、この比九かさねのうちは、あらしの風もしづかなるものながら、猶四の  
うみ、たつしならなみはたえざる聞しもあれば、日をかさねたらんに、いかなるさほりも出来なん、

てこれをおく、夜のまの雪のはれそめたるひかり、あしたの日影にきら／＼として、おこゝのうへ、御まへの木すゑなど、いとゑんに見どころおほかり、巳のときばかりに、御聴聞所に出御なりぬとて、奉行頭右大辨政顯朝臣、人々をあひもよほす、まづ按察使、堂中の埴につく、次に侍從中納言、おなじく着鷹次に公承僧正宗藝法印、良秀法印、承順法印、宗秀律師、慶憲律師、行存大法師、良淵大法師、あひつらねて座につく、次に所作の上達部、左大臣延喜、中院一位延喜、極位の人たるによりて、其座大臣と絶席なし。略中各つきおはりて、頭辨御座のまの前にす、みまいりて、御簾を半にまきて、をしはりてしりぞき入る、次に主上後土御門、盤沙調の調子を吹いださしめまします、笛の調子つきかへすほどに、言國朝臣、花筥をもちてまいりて佛前におく、散花をいだす、所びむぎにつきて、北のひさし、みまのひんがしより、中の内侍、是をいださる、すゝしのはかま、薄衣唐衣をかさね、小こしはかけすとなん、次に頭辨御まへの花筥をもちて、御座の間のたつみの方にひざまづきてさぶらふ、侍從中納言、座をたちてす、みまいりて、是をとりて御まへにおきて、もどのごとく座にかへる。略中こと／＼置おはりて、後調子を吹こゝむ、次に總禮の樂、宗明樂の只拍子なり、次に良淵大法師、伽陀をいだす、次に良秀法印、禮盤にのぼりて、調聲三寶禮をいだす、おの／＼禮拜あり、供養文はて、樂探桑老なり、次に敬禮の段、禮拜あり、次の樂蘇合三帖也、次に眼耳鼻三段はて、同急殘樂三反、笙は御所作、琵琶式部卿のみこ、横笛俊量朝臣、竽、筑安信季繼なり、すのうちよりたえ／＼にのこりてもれ出たる物の音ごもいひしらすたくひなく聞ゆ、次に舌身意根四悔、あひつぎて、又樂白柱殘樂、中院一位、園前中納言、元長朝臣、二條前宰相也、次經段行道にた、せおはしますべしとて、僧俗座のまへにくだりゐる、此あひだ侍從中納言す、みまいりて、御座の間の御簾をたかくまきあぐすなはちす、み出た、せまします、御簾もどのごとく半にをしはりて、我座の前にかへりて、花筥をとりてたつほど、調聲十方念佛をいだしてす、

〔よろづの御のり〕ことし十四年文明〇故院〇後の御かど十。せあまりみこ。せの夢も、いまさらおごろ  
かれぬるに、かの御國忌の當日〇後花園〇文明二年〇は、年の餘波もほごなきころなれば、僧俗のま  
いりまかでも、なにさなく心あはたゞしくやとて、十二月の五日より、内にて御懺法をはじめを  
こなはる。道場は清涼殿なり、おほくは議定所などにて有しを、應永十三年のたびより、この御威  
にてをこなはる、事に成て侍にや、まことにたよりもよろしく侍り、その儀ひんがし西五間を  
とりはらひて、御ちやうなどは別殿にうつさる、もやのすだれを撤し、日さしの御簾をまきて、間  
ごとに、はた華鬘うるはしくかけわたして、母屋の中央に佛臺を立て、普賢菩薩の像をかけた  
り、つくゑ一脚をたて、まへづくゑはなし、永享十一年の儀、かくのごとし、禮盤〇磬臺〇など常のご  
とし、北のかた西の第二の間を御聴聞所にかまふ、其東の簾中に、親王〇後〇柏原〇の御かた式部卿宮な  
ど、さぶらはせ給ふなるべし、西のかた北の間一間みすをかけて、女院御ちやうもんあり、北のにし  
のきは、仁和寺宮、梶井の宮など、うち御ちやうもん〇藤原〇の御かたのわたらせ給方  
のひんがしのあはひに、屏風をたてへだて、關白〇藤原〇政家〇前のうちのおほひまうち君など、うち  
うち初日には聴聞あり、結願の日は、左大將〇藤原〇冬真〇山の座主なども、此所にさぶらはれ侍けるこ  
かや、南の方西二間、あんせん寺の宮をはじめて、黒衣の御方々ちやうもんあり、鬼間のあづかり  
のつばねにかまへたり、本尊のうしろの方四間は、おほひみす是をかけず、大納言殿、一位局など  
はちやうもんにまいらせ給へと、あんない申されしかども、さはる御事ありとて、まいり給はず  
とぞ聞えし、西の方北の第二の間に、高麗のた、み一疊を敷て、奉行の公卿の座とす、北上東面な  
り、東の方南の第一間西むきに、僧正の座をし、南の方東上北面に、衆僧の座をし、階の南の方  
より簀子に疊をしきて、俗人の公卿の座、北を上とす、殿上人の座、ながはしの方へおれて、圓座を  
しく、地下の俗僧階の左右に、かりびさしをかまへて、うちいたをしきてさぶらふ樂器ども、かね



長綱朝臣

基秀朝臣

經房

隆家

忠光

雅冬

六位

藤原親尹

源仲名

菅原長益

橘以清

抑今日有免者、別當參內、候殿奉仰、召官人於無名門下知云々、是免者本儀也、

十日、今日御入講結願也、

〔曼荼羅供雜記〕永享十二年七月廿日、舊院稱光院

御十三回御法事、於安樂光院被行之、奉行頭辨明

豐朝臣、傳奏中山宰相中將定親卿、

大阿闍梨前大僧正宗觀、號理性院、

一職衆十二口○中略

御布施用途事 皆料萬匹、阿闍梨方下行之、職衆布施各三百匹衆同之、十弟子二人、各貳百匹、以上四

千匹、

道場方貳百五十匹、承仕方下行之、此內檀敷絹代百三十匹、佛布施二萬代三十匹、油代二十匹、雜香

代十四、此外遣花代五十匹於東寺用意之、葩代百二十匹、強杉原代十五匹、

一阿闍梨、行粧方下行事

中童子裝束一具代百五十匹、大童子如木一人百匹、列二人各三十匹此內一人力者衣代百六十

匹一具十、同直垂代百五十餘匹、中間直垂五具代六十四匹、同烏帽子代五十匹、酒肴百二十匹、總中

道之、

法印權大僧都

三位奉行  
玄圓 呪願

法印

左衛門督  
實鑒 唄

法印權大僧都

宮內卿  
慈遍 唱禮  
左大臣  
慈能 誦行等師  
左大臣  
慈靜 散花

權大僧都

宰相  
源範 護頌

權少僧都

刑部卿  
朝教 饒  
大納言  
朝教 右方列

擬 講

大納言  
慈俊 鉢達

曼荼羅供

公卿

公卿卿  
竹林院大納言

陸奥卿  
四條大納言

通相卿  
中院大納言

宗經卿  
平中納言

忠季卿  
右衛門督

藤長卿  
右大辨宰相

堂童子

左方  
隆家

御布施取殿上人

實音朝臣

長定卿  
花山院大納言

公名卿  
大宮大納言

實繼卿  
春宮大夫

別當  
大炊御門宰相中將

隆家卿  
隆持

石方  
忠光

教言朝臣

汰如此隆蔭卿不取布施云々以實夏可令取第三布施也時宜歟次僧正以下布施二條前中納言以下取之歟次各退下

僧正及申刻入來此亭曼陀羅供自蓬門可參也以寢殿西面爲休處裏頭大衆數百人爲見訪來招引子方聊勸酒饌及酉刻事已云々仍參院益取綱掌以下入來追前於門前駕手與慈靜法印注服紫屨

從其外大童子中童子以下盡善盡美頗違犯於嚴制也如何

曼茶羅供儀載次第了事丁子刻退出其後被始御入講先以顯宗御入講可被行歟然而御入講今日開白也堂壯嚴儀可相替歟仍先被修密法了春宮大夫曼茶羅供着座取御布施早出依窮屈不候御入講云々○中略

院應

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右奉仰俯

先皇聖靈建武丙子年炎帝之初月奉歸六日○後伏見建武三年即延元元年四月六日崩靈昇九乾以來迎今日御忌勸

香花軌儀所開揚者金胎兩部之曼茶羅所開題者玉偶數部之貫華也彼曇雲之爲真人十三回後終格於仙天矣先皇之窮大聖十三年今常住於性空焉天仙卽如來性空卽佛位也稱讚無貳證得有憑準卽周編鄭抱之清黃將賁赫日座月之妙相請此餘薰普及群類者奉仰所修如件敬白

貞和四年四月六日

別當從一位藤原朝臣奉

曼陀羅供僧名

御導師

前大僧正慈嚴

讚衆八口

〔天明集成絲綸錄〕明和四年六月

當月倅信院○德川家重七回御忌御法事中爲伺御機嫌侍從以上者御檜重一組宛四品拾萬石以上

者御干菓子一箱宛其外者御精進物一種宛尤在府之分計一度宛可被差上候在國在邑之分者可

爲無用候御暇ニ而茂於在江戸者可差上候

但松平加賀守所司代大坂御城代者差上候様可被致候

右之通可被相觸候御精進明之御看者不及差上候

六月

十三年忌

〔法然上人行狀繪圖〕後白河法皇の十三年の御遠忌にあたりて土御門院元久元年三月に御佛

事を修せられけるに上人蓮華王院にして淨土の三部經を書寫せられ能聲をえらびて六時禮

讃を勤行してねんごろに御菩提をぞ訪申されける

〔増鏡三内野の雲〕十月元元十一月はつちみかどの院の御十三年とて大やけより御法事おこな

はる、もいじめでたし金原にて御八講有べければ承明門院○土御門母もかねてよりわたら

せ給ふ上達部殿上人まわりつごふさまもこよなし

〔鳩嶺雜事記〕永和二年六月四日於伏見殿御所被行結緣灌頂上皇○後之御願也光嚴法皇御十三

年之御追善云々御正忌七月七日也被引上了於禁裏有御行追可注之

〔國太曆〕貞和四年四月六日今日後伏見院十三回御忌辰也仍種々御佛事等被行之先朝間五種行

結座御懺法次諸僧改着裝束歸參解訖澄後法印爲御導師也御願文在成卿草之清書行忠卿歟此

妙行者廣義門院○後伏見后御願上皇御供行也誠希代御行也事了被引布施導師三重一裏水精

念珠被懸枝各被懸題名僧僧正以下一重一裏二品親王被預布施云々導師被物公秀實明實夏等



夫圓通懺摩者、吾朝禪林、有法事必修之、其所修者、慈雲懺主所撰也、諸大老宿隨而各舉修懺得益無餘蘊矣、山野復摘其法儀、與今所修相似者一二事、以爲口談耳。○中  
 復水陸會者、其施設之儀、或金銀寶盆、盛滿百一飲食者在焉、或汲灌盆器、盡甘美者在焉、又華施食須知及瑜伽密經、有佛說施甘露水呪、出寶叉譯、右取水一掬、呪之七遍、散於空中、其水一掃、變成十斛甘露、一切餓鬼飲之、皆悉飽滿。

齋僧之次、仍命衆、同音諷楞嚴四百二十七句禪呪、此大唐日本禪徒法事之常儀也。○中

記得李都尉○政遣使邀慈明禪師、師至京師、李公臨終、畫一圓相、作偈獻師、師曰、如何是本來佛性、公

云、今日熱如昨日、隨聲便問、師臨行一句作麼生、師曰、本來無罣礙、隨處任方圓、公云、晚年困倦、更不答話、師曰、無佛處作佛、公於是泊然而逝。

〔塞松稿三〕林清院殿節庵存忠居士七年忌拈香宿思以前來而求香語故吟案未了

昔年風雪已臨喪、今日七周在異鄉、霖雨蕭々梅子熟、本根猶固果何傷。

索阿世界南剎浮提、樽桑國關東道下野州、足利郡東光山善得禪寺、維時慶長歲次壬子五月廿有六日、伏值林清院殿節庵存忠居士周忌之辰、夫此居士者、堀越州太守左兵衛佐忠俊之先考、前左衛門督豐臣朝臣秀治也、不幸短命、與顏同、其年而逝矣、愈曰、如摧芳園於早年、定惜哉、諒陰已終而未經幾年月、蝸角爭紛然起、而國分崩離折、當乎此時、太守偶然爲客、終留跡於當國、誰不敢嗟嘆乎、生計雖似南枝之越鳥、聊效孝子之風、預於前月就于本寺、延請禪侶、設伊蒲精饌、經之營之、專事供養、現座道場東方醫王善逝、當忌教主阿闍無上士、過現未來塵沙諸佛、冥府界內十殿慈王諸冥官等、以資助先考之冥福矣。

〔泰平年表〕享保七年四月此月有章院殿○德川七回御忌勅會、萬部の御法會の處御辭退有て、千

部の御法會と成、是より後御代々御法會、皆此例な被用、

亡父入道中納言雅緣卿七回忌也、仍勸進云々、凡一品經事、堯孝僧都致沙汰、人々有勵志事等、仍予  
○中山 定觀 一品之關料沙汰遣了、

〔建內記〕嘉吉元年六月十三日戊寅、故三寶院准后滿濟備正、被號、七回也、予○萬里小自一昨日、三箇  
日誦經念佛、廻向之報、平生芳情也、先日於京坊曼陀羅供、今日於醍醐坊結緣灌頂、前大僧正御房、  
賢令執行給云々、大阿闍梨可尋記、

室町殿○足利萬御、施入龍樹寺、祇園大澤、崇崇和尚、於彼寺有御作善云々、

〔宜胤卿記〕永正四年四月十二日、今日北堂尊靈七回忌也、於真如堂盛壽院修善一堂、皆請僧廿三口  
也、其外僧比丘尼悉也、付二百匹、其外佛布施尊靈前各別十匹、置之、道每月僧并納所僧住持遺扇、  
十四匹、雖存懇志、亂後之爲體無力所存外也、余一身一七箇日百萬反念佛、今日唱滿伴僧等參墳墓讀  
經、今夕中納言來、御堂通夜、

〔翰林胡蘆集〕散說

大日本國文龜二年太歲壬戌、孟夏二十五日、茲迎松泉院殿從三品無等雲公大居士、○泰松政則七周忌  
之辰、播州居住大功德主道祖松、就于赤松山寶林禪寺寶所禪庵、命緇侶嚴設道場、彫造阿闍尊像、頓  
書一乘妙經、修禮水月出、施設甘露會、而禪誦七晝夜、都無怠矣、美作守則宗傳命入洛拜請雲頂堂上  
大和尚拈香法語、副命南芳少比丘周麟、陞座舉唱宗乘、夫陞座普說者、野後生長老不敢離堅辭之請  
而不止、以故至此、是今日法會意趣也、○中略

抑命工所造阿闍如來、言其尊形則左手取袈裟、二角當臍下、右手申覆右膝、相好圓滿、今日造此像、以  
爲教主者、有所以乎、教家者曰、自初七日至第三年、現諸佛垂跡十大冥王忿怒之身、以懲亡靈三業、造  
惡之過罪、至七年遠忌之辰、則彼幽靈餘業已盡、而冥王等忿怒呵責之形相亦隨而滅矣、真以佛身微  
妙相好、教化引導焉、此央庠之臆說、雖不足爲實効、而敗鼓之皮俱收者、醫師之應病也、故舉之、○中略

薩埵及微塵刹界一切三寶所哀善利併周回施尊儀冥祐餘薰被法界含情恭惟台靈乘大願力來還歸一實際去々無所至月落不離天來々無所從水流元在海其輔君也煉五色以補天漏其降敵也提三尺以致太平握斷乾坤三十年終無喜愠之色掃蕩煙塵六十國遠播忠孝之風建造塔婆表示衆生本有書寫大藏點開諸佛妙門日繪地藏尊容念々濟度諸趣曾參達磨玄旨步步蹈斷毗盧是實是權不可得測內秘外現誰敢窺之今當七周忌辰特書大乘妙典一字猶超三千價直七喻況宜六萬微言賢嗣孝心足以貫古今通天地台靈報地當知融淨穢空怨親更有難思句諸人還會麼華香云 看々遍界香飄菡萏風

〔空華日工集〕應安二年八月十五日覺園朴艾律師七年忌拈香其略曰去佛漸遠禪教律之徒相矛盾蓋禪佛意也教佛口也律佛身也身口意一體也而今不和合可惜也云々

〔空華日工集〕應安六年四月廿六日先君基氏玉岩七年忌佛事件々如法幼府君入山余引君而就于先師石真前表師資之儀蓋府君將入殿余先爲府君講拜塔之禮且令頂戴衣孟也廿九日參府賀佛事并伸拜塔之慶府君自書法名見賜法名道全應安六年卯月二十六日氏滿書

〔後深心院關白記〕應安六年十月五日癸酉今日亡母七回之忌辰也於三福寺佛先々供養經一日頓度予疎原基平書之供養并法事議等如例

〔滿濟准后日記〕應永卅二年五月十三日自今日三七日間光明真言護摩并地藏供開白不用手代老母七廻忌來四日追修ノ爲也廿五日三日九時結願金剛理性院僧正結願作法在之頓寫經一部開題仍前方便以後金二丁如例舉經題名過去尊靈出離生死爲一切飄誦ト金一丁次心經金一丁次五悔出之神分暫開之以下法則如常次後供養關伽之後金一丁結願詞等表白詞劇之次神分金數多次後鈴等如常

〔薩戒記〕永享六年九月十四日飛鳥井中納言雅世以使者送一品經歌題勅持品一箇書是來月一日彼

高島は、武家奉公者也、以使者遣此狀之處、申異議、

〔李連宿禰記〕元祿四年二月廿二日、癸寅今日後西院御七回聖忌也、昨今於仙洞御追善有之云々、作

御佛事御懺法云々、官外記無其儀、仍不隨知、可尋記、後聞昨日遠夜、普座三人、九條左大將殿補實、正

日普座三人、大炊御門右大臣經光、公清水谷大納言實業、中山中納言萬親、

傳奏中御門帷大納言資熙、奉行藏人右中辨輔長、昨今共吾樂無之云々、

〔親長卿記〕明應三年正月廿四日、今日有勅問事、故女院○後土御門母后嘉七回御作善事也、雖爲來

四月廿八日、有被思食之子細、來月於山上、一日八講、可被行歟之由、被申合座主、就其可有願文歟、又

可被遣行事辨歟、如何予申云、一日八講、於山上、可被遂行事、爲勸願者、被立行事辨已下、可爲大儀、被

定、施主御願文等事、可候歟、次先年已被行凶事、七回御佛事、無勸願御佛事者、可有相違、不知先規、可

爲、叙慮之由申入了、重有女房奉書、就御佛事、可被仰談、可參云々、已爲隱遁身、應勸喚事、不相應、但隨

叙慮、可參之由申入了、暫參內、下妻勸修寺前大納言同被候、黒戸南面御庭、出御端御座、仰云、已前御

佛事之儀、予申分叶道理了、所詮如去延徳二年、於此御所、可被行御八講、總用事如何、大概如已前二

萬匹許、可入由申入了、此外條々申合、依事繁不注、

〔普明國師語錄〕下爲等持院殿仁山大居士○足利七周忌辰請

去來不動一真空、誰把三車論、異同大樹蔭、涼千百載、孫枝子葉起清風、大日本國山城州京師居住奉

三寶弟子征夷大將軍亞相源朝臣某甲、今月二十九日、伏值故大樹贈一品等持院殿仁山大居士七

周忌辰、自於今月二十一日、依止等持禪寺齋戒十日、自書寫法華、看經誦呪、燒香展拜、日夜無懈、又敦

請南北二京名師、頌德講經論義五日、勸修五種抄行七日、以伸十種供養、修念佛三昧行、一夜啓秘密

灌頂會、一日造立塔婆八萬四千基、以至行大赦施貧乏、凡所作勝業、不遑枚舉、今日常周備之辰、平等

捨財、入于五山禪刹、設供佛齋僧拈香、諷經會之次、就于本寺、特命清衆、書寫大乘妙法蓮華經、又借山

僧手、藉此寶香、供養周遍法界摩訶毗盧遮那如來千百億化身釋迦牟尼大覺世尊、文殊普賢等諸大



働未<sub>レ</sub>曾得止誰不敢助哀乎今茲寛永元年六月初二日正當亡兒大祥忌之辰延禪侶於私第設伊蒲之淨膳經之營之修禮圓通一座之妙懺看讀有爲六驗之般若

〔天保集成絲綸錄<sub>三十一</sub>〕天明八<sub>申</sub>年八月

寺社奉行<sub>江</sub>

淺明院様<sub>〇德川家治</sub>三回御忌ニ付於増上寺本堂三百部之御法事御執行被仰付候間御法事中壹人宛見廻リ可被申候諸事去年之通可被心得候

八月

御勘定奉行<sub>江</sub>

當九月於東叡山淺明院様御法事ニ付而赦被行候依之死罪歟又者遠島に可成程之者其外前々御法事之赦に書出し候類輕罪之ものをも相交致了簡可被書出候

八月

〔鳩嶺雜事記〕應安三年七月七日光嚴院法皇御七年忌也於禁中被行宸筆八講四日御德日故七月三日ヨリ被行之四日八講云々

〔雲井の御法〕ことし<sub>〇康暦二年</sub>舊院<sub>〇後光</sub>御七めぐりにておほきなる御佛事ごもありことさらどり

わきげふ正月二十九日より御殿にて法花せんぼうを七日おこなはる

〔宜胤卿記〕永正三年八月廿二日

來月廿八日舊院様<sub>〇後土御門</sub>御七回御佛事料朝倉彈正左衛門尉進上事自禁裏如此被仰下候早進納候て可然候由能々可有御入魂候殊國靜謐事被加勅言旨可得御意候恐々謹言

八月廿三日

高島殿

九日甲申、御精進解略中、赤松葉山入道同息三郎、赤松本郷、赤松廣岡以上四人、有御免今朝出仕、仍各大刀金持參之。

〔平陶稿〕古岩大祥忌

胡蝶夢中眞故郷、回頭幸木已三霜。大千沙界梅花葉、今日拈成一瓣香。

大日本國山城州京師居住某、文明十一年十月日、伏值先考古岩玄石禪定門二十五日之大祥、特就私第、勤修諸般白業、宛似寶坊、今當散筵、集六和淨侶、演白傘蓋神呪之次、茲周興藉此一瓣唐供、養十方常住三寶、果海寶聖、今日敎主彌陀覺皇等、所冀靈位依此薰力、頓超往行、向地以成正覺、普令胎卵濕化、共除罪殃者也。

〔惺窩文集和歌五〕大祥忌。

塚の草枯ては生る三かへりのそれならぬ世のうき年ぞふる

をくれゐていやさをぞかる年月のけふをいつまでなかむとすらん

〔梵舜日記〕慶長十三年七月六日、宗喜大姉三年忌、雖爲來月、當月取越、少齋佛事、營當院吉田被宮神龍院。

共、宗喜姉白川宗音、宗右兵衛壽等、念佛衆來也。

〔台德院殿御實紀四十八〕元和四年四月十七日、日光山御祭禮、本多上野介正純代參す、紅葉山昨夜遷宮ありければ、御束帶にて御參拜、法會行はれ、勅使はじめ公卿參堂、大僧正天海導師つかふまつり、散花被物等の作法、去年日光山遷宮の法會におなじ、在府諸大名、おのゝ束帶にて豫參、並に行列にまゐる。

〔寒松稿七〕綠筠昌珩居士三年忌拈香

鮮潔明水絕比倫、炎天梅發更精神、前村無頼奏花落、滿目三年笛裏人。

須彌南畔刻部提、洲樽桑國武藏州、大智山下居住菩薩戒弟子昌純、往歲喪愛子、寔惜哉、有其慈母、哀

しと仰つかはさる。關東の郡代伊奈兵右衛門忠易、増上寺御法會の事奉る。萬石以上のの人々、御けしきうかゝひ、甲府中將綱豐卿并に三家よりは使者を奉らる。

〔源平盛衰記 三十九〕重衡酒宴附千壽伊王事

二人相共ニ、佐殿源朝ニ參テ、故三位中將殿平重衡ニ、去年ヨリ奉相馴、其面影忘奉ラズ、後世ヲ助ベ

キ者ナシト歎キ仰候キ、見參ニ入侍ケルモ、可然事ニコソ候ナレバ、暇ヲ給リ、様ヲ替テ、菩提ヲ助

奉ラント申ケレドモ、其敎シナケレバ、厄ニハナラザリケレ共、戒ヲ持テ、念佛唱ヘテ、常ハ事弔ケ

リ、中將第三年ノ遠忌ニ當ケルニハ、強テ暇ヲ申ツ、千手二十三、伊王二十二、縁ノ髪ヲ落シ、墨ノ

衣ニ裁替テ、一所ニ庵室ヲ結、九品ニ往生ヲ祈ケリ、

〔法然上人行狀繪圖 十七〕上人の第三年の御忌にあたりて、御追善のために、建保二年正月に、法印

覺聖真如堂にして、七箇日のあひだ、道俗をあつめて、融通念佛をすゝめられるに、中法印追

福の心ざしあらはれて、諸人の隨喜はなほだしくぞありける、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年六月十三日丙申、右京兆北條時義第三年忌辰、依之大慈寺釋迦堂被供養之、導

師求佛房施主武州也、

〔管見記〕永享五年十月九日、今日、慶壽院殿寺實水三回忌也、無程迎三周之夢、愁歎罔極、潸然拭雙淚

而已、有施餓鬼予子公名持齋參法金剛院墳墓、

〔康富記〕嘉吉三年六月廿四日戊申、是日普廣院贈大相國足利義教第三回御正忌日也、於諸寺被修御

追善爲御燒香、室町殿足利義隆渡御普廣院云々、

〔親元日記〕寛正六年八月二日丁丑、御成三鹿苑院自今日一七箇日、轉實院殿足利義隆七日壬午、

御成三相國寺ヨリ轉經鹿苑院宿憶法無御聽聞云々、而々御祇候、八日癸未、御成一鹿苑

院轉實院殿御佛事持座大面々御祇候、門役所司代多賀於殿中御經供養御導師花園御祇候

後聞夕座無御行道云々、七日戊申、御懺法中日也、可早參之由兼有催、已刻參内、前殿下<sup>○藤原依</sup>  
御遲參、刻限押移了、午終刻各參進、其儀一如昨日、八日己酉、御懺法結願日也、殊可早參之由有催、  
仍已初刻參内、雖然未事具、午刻各可參進之、由奉行告之、其行日不參<sup>内大臣今</sup>、僧衆等參進以下如昨日、  
〔公卿補任<sup>元</sup>〕天和二年八月十七日、於清涼殿、五箇日被行懺法講、依後水尾院三回聖忌、傳奏日野  
中納言、奉行隆貞朝臣、

〔延徳御八講記〕延徳二年卯月下の八日は、國母仙院<sup>○後土御門</sup>、<sup>樂門院藤原信子</sup>、<sup>母后嘉</sup>の三回の聖忌にて、廿六日

より五箇日、御八講をおこなはる、禁中にてのおこりは、村上天皇、天曆九年正月、皇太后穩子の御  
ために、八軸に宸筆をくだし、九禁に梵筵をひらきておこなはれるより、この度までの儀、いま  
だ十箇度にもみちざるにや、天曆長保安元、元曆、みな母后の御追善なれば、先蹤も後鑑も、いどあ  
はれにかたじけなき事なりや、<sup>略</sup>○中抑禁中御八講は、毎度四ヶ日なるを、この度は五日十座の御

願にて、中日を聖忌の當日にあてられけるも、かしこき御はからひにぞ、天下諒闇の事も、母后の  
御時は、いにしへも毎度の儀にあらざるをや、ことさら元應に、該天門院<sup>○後宇多后</sup>、<sup>藤原忠子</sup>の御後、百五

十餘年は、母后の御ために諒闇なる事は、一向に斷絶せるにや、その期御傍のよしにて、萬事省略  
のしきは、まことになさけおくれたるやうなれど、今の世にくらべては、安全豐饒の天下なりし

いにしへだに、たえて久しきことをおこされて、諒闇の儀、次第をみだらず、倚廬の御所をかまへ、  
みす几帳までも、あらぬさまにやつしおこなはれる孝行の宸襟こそ、あはれにもかたじけな

くも侍れ、その御心ざしどほりぬればにや、五旬一回、ことし第三回の聖忌までも、般舟三昧院以  
下、所々御佛事、一事の障礙もなく、ことにこの度御願は、ふるきにはちぬさまにぞ申あひぬる、

〔常憲院殿御實紀〕延寶八年六月三日、東福門院の御方、<sup>台德院殿御女</sup>、<sup>後水尾院中宮</sup>三回御忌にて、京般舟院、  
泉涌寺に、米百石つかはさる、禁裏より此御法會行給へば、兩寺に米三百石、銀十貫目、布施あるべ





被修平座佛經供養釋一都律御導師忠性僧正依僧正拜任南都上首繼訴依被止顯宗公請兩年今日雖非顯宗方用公請云々公卿御獻四條前大納言右衛門督

花園院第三回聖忌御佛事於蘇原殿被行之道場庭仙洞御沙汰新女院在

御佛 釋迦圖畫座像

御經 摺寫真言三部經大日經金剛頂經色經新女院御方御分也

法華四要品以先院御遺書被爲料紙紙黃被染之金界金字以四品被一帖二行折也內題新女院御葉其外仙洞宸筆云々但初四五行缺替御筆其外全分等功也

御導師忠性密供養之儀也

題名僧定意僧都堯忠僧都忠濟律師已上三日悉御布施御導師十重一裹色代三千二百匹云々

題名僧各一重一裹口別四百七十四匹云々

以上四千六百十匹播州檢住用途云々大藏卿沙汰也但二千五百匹下行以之令配分了

御加布施皆水精御念珠被懸松折枝

〔普明國師語錄〕光嚴院大祥御忌

關轉清商金氣秋葉開七葉越三周神遊夢冷鈞天月何事羹牆暮未休恭惟尊儀德包二儀明歷兩曜示尊國位居清淨無爲之宗借路闊洋行皇極大中之道實是佛心天子得非菩薩意生救像季闡諍之時則蒼生忽含昭蘇氣降甘澤枯渴之日則緇林亦逢萌動春一入空門永貴無相瓦鉢底開香積玉體上覆片雲不効梁武遐蹊直追世尊高躋靈山付囑聲價彌重世間少室單傳真風遠振日域爰遇大祥御忌大開甘露施門非只尊儀莊嚴寂場亦得幽冥頓出牢獄以何爲驗御爐一炷香煙影作雨作霖潤大千

〔絕海錄〕復曰枯大日本國山城州萬年山相國承天禪寺雲頂禪院守塔比丘某明德四年六月十

九日伏值先師前住當山太清和尚大禪師大祥之忌預於斯日就于本院營備忌齋延請輩下大小刹

佛供料之内を以、取計候様可仕候、  
右之趣、増上寺江可被達候、

九月

〔將軍徳川家禮典附錄<sup>十六</sup>〕文恭院殿<sup>〇</sup>徳川家齊 一回御忌於東叡山千部御法會御執行之記  
天保十二辛丑年

十二月八日

一御座間御上段御着座、老中御目見、此節大炊頭、來正月、文恭院様一回御忌御法事總奉行被仰付旨、上意有之、御禮申上之退去、

御使大炊頭  
日光准后

來正月、文恭院様一回御忌ニ付、於東叡山千部御法會御執行可被遊旨被仰遣之、

上使寺社奉行  
増上寺大僧正

來正月、文恭院様一回御忌ニ付、於増上寺三百部之御法事致執行候様被仰出之、

同月十五日

寺社奉行  
戸田日向守  
御勘定奉行  
跡部能登守

三年忌

〔太平記三十九〕法皇御葬禮事

御國忌ノ日ゴトニ種々ノ御作善、積功累徳セラル、殊更ニ第三回ニ當リケル時ハ、繼體ノ天子、今上皇帝<sup>〇</sup>後<sup>光</sup>御手自一字三禮ノ紺紙金泥ノ法華經ヲアソバサレテ、五日八講十種供養アリ、

〔禮記三年<sup>同</sup>〕三年之喪、二十五月而畢、哀痛未盡、思慕未忘、然而服以是斷之者、豈不送死有已、復生有節也哉、

〔國太曆〕觀應元年十一月十一日壬戌、抑今日、花園院第三回御忌也、徽安門院<sup>〇</sup>光嚴后<sup>子</sup>於萩原殿、

祭禮は、巳刻を以て始行はる、

〔大猷院殿御實紀 二十〕寛永十年正月十五日、三緣山靈廟に御參拜あり、先代○德川小祥○の御法會。昨夜より、二十四日まで萬部讀經行はる、

〔草山集 三十〕薦宗喜信士小祥忌塔婆銘并序

信女妙理值父宗喜小祥忌爲瑞光蘭若新齋筵若干疊、且刻小偷婆樹寶塔寺○下

〔憲教類典 御佛事 一之二十〕天和元年辛酉年四月

嚴有院様○德川御一周忌御香奠獻上之覺

一銀參拾枚 六拾萬石以上

一同貳拾枚 參拾萬石、五拾九萬九千石迄

一同拾枚 拾五萬石、廿九萬九千石迄

一同五枚 拾萬石、拾四萬九千石迄

一同參枚 五萬石、九萬九千石迄

一同貳枚 壹萬石、四萬九千石迄

一同五枚 參拾萬石以上之嫡子

一同壹枚或貳枚 壹萬石以上之諸役人

延寶九酉年○天和四月

〔天保集成絲綸錄 四十三〕文化八年九月

寺社奉行 江

來月二日俊岳院殿○德川家寶第九子虎千代 第一回御忌ニ付、御法事執行被仰付候御法事料銀貳拾枚、女中參詣之節持參可有之候、尤三回御忌迄者、右御同様相心得、七回御忌より者、被遺物有之間敷候間、御



頭殿千匹進上、折紙并當院院主并寺管請取奉懸于御目也、蓋此旨爲舊例也。○中蓋來八日、御點心料諸大名國役、可被出此半分也、五日、伊勢守獻二千匹、同請取奉懸于御目也、十五日、前八日、勝智院殿一周忌御佛事錢進上、以普廣院殿○足利一周忌古帳、以其半分支配之、則可乎之由、伊勢守并飯尾左衛門大夫共許之觸之、然皆有不足、重書立之可相觸也、凡三箇國衆者五千匹、二箇國者三千匹、一箇國者千匹、半國者又千匹被定、仍不足、即今被責之、以不足所書之、書立渡于飯左也、飯左蓋今度御佛事奉行也、

〔二水記〕永正十七年十月五日、早旦詣菊亭、今日是吾院○菊亭一廻也、五六許輩有齋相伴、於佛事者、於東山邊被修之云々、

〔宣胤卿記〕文龜二年四月十二日甲寅、今日北堂一回正忌也、於真如堂、以僧十二口修百萬反念佛、其外請一堂付三百匹、余又一身唱百萬反、至今日終功、又每日請僧別行等布施、雖存懇志、所不及力也、宰相來、於堂有飯、晚參詣墳墓催淚、

一回程なき月のみじか夜に去年みし夢の殘る面影

〔惺窩文集和五〕期年の正忌なりしに墓に宿草ありて哭せずといふなるためしを思ひて、さても

いかになみださへぞ、今よりはかぎりあるべきこゝちの玄侍りて、

今年しもかぎりあればや限なきなみだの雨のふるづかのくさ

夢とのみおどろくほどや二とせのけふぞまことのなみだをばしる

〔台徳院殿御實紀四十五〕元和三年四月十七日、御宮○日光にて小祥の御祭あり、御束帶にて詣給ふ、御鞍の御籠は、高倉右衛門佐永慶、御大刀吉良左兵衛督義彌、御刀は酒井下總守忠正、御裾は永井信濃守尙政役し、大澤兵部大輔基有奉幣す、土井大炊頭利勝、太田攝津守資宗等供奉す、尾張宰相義直卿駿河宰相頼宣卿水戸少將頼房朝臣藤堂和泉守高虎、其外諸大名、ことごとく參列す、御

色疾言曰春秋不云乎定十五年秋九月丁巳葬我君定公雨不克葬戊午日下昃乃克葬如之者豈改乎孝能免冠謝

〔台記〕天養元年八月二十四日癸卯今日故大內記令明一周正日導師律師道覺已講忠胤來云々未聞事也忠胤遂怒出云々供養五部大乘經云々敦任明○令一周不女犯魚食書法華涅槃般雨經至孝如曾子者論者稱之或人夢令明爲冥官云々今案多才正直之令然歟

〔吾妻鏡十六〕正治二年正月十三日庚子故幕下將軍源賴朝周關御忌景於彼法華堂被修佛事北條殿以下諸大名群參成市佛繪像釋迦三尊一鋪阿字一鋪以即畫所御除經金字法華經六部摺寫五部大乘經

導師葉上房律師榮西諸僧十二口○中此外有百僧供又伊豆國顯成就院北隣者幽靈在世御亭也而今爲北條殿沙汰被定佛閣令事安置阿彌陀三尊并不動地鎮等形像給云云凡駿河伊豆相模武藏等國中佛寺各修追善於海道十五箇國內可然靈或堂舍或營修善云云

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年七月十一日甲子故禪定二位家子○政周關御佛事於勝長壽院被修之一切經有供養之儀奏舞樂大藏卿法印良信爲導師此經日來聖人勸進也相州武州○北條時已下人々群集竹御所○藤原賴經御出云々又相州立塔婆被供養導師莊嚴房律師行勇云々

〔吾妻鏡五十二〕文永二年五月三日庚子日中五大尊合行法被結願今日爲故武州禪門○北條朝直日卒忌景於泉谷新造堂佛事導師若宮僧正隆辨

〔薩戒記〕永享五年九月廿五日明日先妣周忌正日也仍三々日神事不可叶者

〔薩涼軒日錄〕寬正五年甲申七月廿八日來八月八日勝智院殿○足利義政母重子一周忌御佛事錢一國守護各千匹宛可被獻之事伊勢守命子細川右馬頭義孝告子管領可被觸于諸大名之由飯尾左衛門大夫可致披露之由申之八月四日來八日勝智院殿御佛事錢折紙日野殿二千匹○是發品細川右馬

入道殿各百段、御乳母大納言殿五十段、次唱禮供養法了、導師退下着座、次布施導師被物五重、二、絹三、布施二裏、各絹廿五

下四〇

〔性靈集〕右將軍良納言○西原安世爲開府儀同三司左僕射○藤原冬嗣、天長三、七月二十四日薨、設大詳齋、願文

伏惟故左僕射贈開府儀同三司藤原朝臣累代台鼎文武佐時○中略蒼々何忍奪我阿衡哀哉苦哉弟

子同衾易感在原難抑携提我之比天割亭我之同地言思其德答以歸佛謹以天長四年孟秋季旬奉

爲先左僕射大詳奉寫金字金剛般若經一十二紙延之龍象衍之涌泉方丈草堂香法界而靈芥華山

松林變寶樹而利說梵曲魚山錦華龍淵金剛句句斷結證解玉振字々除障得滅伏願揭斯惠日頓朗

昏夜遊心飛聞賞神翔樓當有法界稱覺尊王哀中一分必歸貫三

〔性靈集〕藤大使爲亡兒願文

竊聞三叟自性不因他造一同本覺何待緣起雲敷四印雨足三密水喻舌卷燈談手絕三賢非分十地

難窺是故回頭引有讚歸藏左腋推無談道經東稚猶渴推功西聖難信能信不嘗醍醐毒醉何解願念

亡子心淳負米業茂締構膈手之疾命也難愈碎玉之哀幾損眼明天公何忍奪我鍾愛空事傷悼無益

存沒所以敬爲亡息周忌聊設法筵禮供三尊諷音遠徹摧仗馬頭香氣遙薰奉仰象王安雲襄性空覺

月朗心秋執香自覆洗衣脚淨福延現衆不怕鼠侵無疆福履天長地久鱗衫羽袍蹄鵲角冠誰無佛性

早見實相

〔後拾遺和歌集〕成順におくれはべりてまたの年、はてのわざしはべりけるに、

伊勢大輔

わかれにしその日ばかりはめぐりきていきも歸らぬ人ぞ戀しき

〔台記〕康治元年十二月二十日戌寅光覺來談云先金吾入道基俊今年正月辛子息等忌年始今月二

十四日執行法事余○藤原賴長云未聞諸親喪以正月行之孫孝能○父能仲早卒、以續孫、喪事云々曰喪事不改日余作

丹藏人殿

新藏人殿

〔兵範記〕久安五年十一月十一日己丑今日被行故姬宮○鳥羽皇女周閱御法事於土御門殿堂有其

儀早且奉仕堂莊嚴本佛壇下四面也立並黑漆佛臺一雙奉懸兩昇曼陀羅各一鋪胎藏南金剛其前

四中央奉居等身大日如來像一體其南居三尺阿彌陀佛一體大日北奉居詞彌勒像一體三尊前各

花机一脚排批香花蓮花佛供佛布施各一裏等如常立燈臺四本在打供燈當中尊前立黑漆大壇四

面引美絹壇敷居供養法具佛供等四角立燈臺供燈在打壇前之禮盤其左右立掖机佛布施一裏塗

香灑水器等居左机金泥法華經一卷數一帙御佛經目錄等安右机正面北掖間迴西柱敷高麗端坐一

枚南北爲大阿闍梨布施座正面南間敷同帖一枚其南東西行敷同帖五枚佛後又敷四枚并十枚爲

讚衆廿口座其座前立經机廿前各並安色紙法華經書寫一部金泥御經第二卷以下分安之佛後座

末立磬木佛三尊前供香花燈明供佛供各二盃飯每間懸幡花萬代如例北御所懸黑御簾出淺鈍色

黃御几帳爲入道不懸几帳依西寶子當正面立散花机二脚安花宮廿枚在本地南弘庇敷高麗端帖

三枚爲公卿座其東敷紫帖一枚爲右方堂童子座西面北角敷左方座西中門內南樹下立御誦經帳

西中門北廊二行對座敷帖十枚爲讚衆座其北敷二枚爲大阿闍梨座東廊南北行引幔六帖御堂南

廊鈞鐘寢殿南面并東渡殿南面等下同也未刻僧參集公卿侍臣參會入道殿出御簾中御座女院觀

子內親王母藤原泰子同前此間大阿闍梨法印世豪自近宿所參入今朝遣法觀先是打集會鐘次公卿參着

堂前座已上宿衛候殿上座下官依入道殿仰召之次敷筵道之筵召同寮次導師牽讚衆廿口自

中門廊內下庭列立幔南庭筵道唱讚打鈸鉢預二人持鉢又二人次大阿闍梨六弟子在後衆僧經南

庭依中門內儀無執蓋儀自御堂南面階正而四面無階上堂經公卿座上列西面正面入堂無言行道

導師着禮盤讚衆着座次唄堂童子着座左方伊豫泰重散花行道次導師表白御經題名次御誦經院



文行本條近代亦進左依天氣殿下令御點下給予候御前令申子細原免者百二十七人所殘觸神社

物放火強竊二盜承伏者賊返給予予下給大夫尉經仲道分官人於左獄門次又令奏事山了時中申刻

事訖殿下渡御大炊御門殿以件亭有講演奉懸三幅兩界曼陀羅二鎮講師權少僧都慶朝平盛題名

僧二十口之中心僧綱四口多事戴崩御記次結願日者所被修之御讀經六僧本宮布施之外殿下給布

施各十匹被物一重又右府給布施凡此間御善根無量無邊也公家於諸山被轉六萬部

〔玉海〕養和二年○壽永十二月五日辛丑此日故院○崇德后藤原聖子御正日也依大治例無別法會

之儀導師覺智僧正也雅賴定能等卿參入依爲密事不觸他卿等也殿上人已下衣冠公卿直衣也雅

部轉讀事已訖例時結願又賜小布施細細錄示之直衣有故障缺若必可參先布衣如何不

〔親長卿記〕長享三年四月廿五日今日亮間畢來廿八日嘉樂門院信于藤原御正日也雖然依無日次今

日御裝束已下被改歟傳奏中御門大納言申沙汰也廿八日今日嘉樂門院一周忌也御作善傳奏

事予存也巨細有別記兩冊

〔大江俊矩公用往來〕文政七年三月廿八日

就來月三日前新皇嘉門院○仁孝后御一周忌當日御所々々窺御機嫌參入且獻物之事昨年御

葬送翌日之通可令心得候事

就來月四日成不動院宮御二十五回忌當日御所々々御機嫌窺參入且獻物之事文化十三年御

十七回忌之通可令心得候事

右兩條德大寺大納言被申渡候旨權辨被示越候各御覺悟可有之候○中

三月廿八日

差次藏人殿

俊常

御導師尊勝院公什僧正也題名僧三人可尋爲武家近江○忌御香典萬匹昨日被進禁裏了奇特之  
由人皆稱之此御香典之內遠近臣下窮困之輩各百匹被下了御憐愍之至也

着座公卿北座第一民部卿西園寺第二上等南座勸修寺第三權中右衛督山科中院上等云々北座疊二帖敷也南  
座三帖敷也云々千匹被付泉涌寺云々御佛事可尋矣一周忌御佛事可爲勸願哉否事種々被尋

仰了民部卿元長言上之趣文龜元年父卿申沙汰也其時非勸願爲舊臣執行之儀也其外此御兩三  
代皆以勸願云々逍遙院被申趣近代事縱雖非勸願先規悉以爲勸願其儀尤可然歟舊例多端不及

不審云々兩段可否如何可尋矣今度之儀可爲勸願之由仰之仍爲勸願之旨被載御願文云々

〔續日本紀四十〕延曆九年十一月戊寅勅曰中宮仁祖武御母光后高野新笠周忌當來月二十八日禮制乍畢新歲

須及忌景俄臨彌切罔悔之痛元正肇啓何受惟新之歎興言永悲不能自忍賀正之禮宜從停止焉

〔爲房卿記〕應德二年九月十五日丙午早旦參法成寺依可被行先宮○白河后御法事也○去年九月

忌即周殿下○藤原兼以渡御次爲勸使參仁和寺禪定之宮○白河后次歸參法成寺次爲御使參內次

更歸參法成寺御法事之事子細見別御記七僧○正真真僧百僧御佛○迎三尊御經○金泥一部本宮布施

之外殿下給布施公家遣勸使被行諷誦兼給度者○宮司御誦經使○左少將度者使○家朝臣本宮導

師布施春宮大夫僧綱中納言以下導師布施民部卿自餘殿上諸大夫取之二十二日癸丑今日前

宮御正日也先於法成寺公家被行曼陀羅供從去正月每月被供養之九體丈六彌陀像中尊今日被

供養也以權僧正良真爲導師讀衆三十口○律師二十四口阿闍午刻事始衆僧就集會經○參上道講師

乘輿參上○駕丁召諸衛五位讀衆行列如例供養儀同前左右兩府○源俊房以下公卿侍臣祇候濟々

焉公家給度者○勸使左少將事了賜布施○藤大納言人所給之絹二裏并律師四人布施宰相取

之凡僧殿上人諸大夫取之供養布施召用伊與重任功物導師○百四十讚衆律師十五匹凡僧十五匹

先是以予殿下被奏赦令事○夜前天氣驟行大較者煥可勅云多可被赦放未斷囚者仰道官人令成勸文○時成顯

一方頭百僧從之 法橋行慈

奉行 主計允行政 堀藤太○下

〔普明國師語錄下〕卒哭辰

恭遇光嚴院小祥御忌大光明寺佛殿開堂奉安三聖者箇如輪王鐵無明窟宅悉皆摧破如將軍令煩惱魔軍莫不降伏如師子絃衆音永絕和如龍王雨一味普隨根如千鈞弩不爲誘鼠發機如三摩定無心善應無方如苦海船筏能度生死流轉如寶幢摩尼施與涅槃安樂大日本國山城州梵王山大光明寺住持傳法沙門某恭遇本寺大功德主先皇光嚴院小祥御忌伏承聖命新造立聖廟落成大佛寶殿奉安本師釋迦如來文殊大士普賢菩薩自於今月初一日仍命合山清衆看閱某經今當滿散謹藉此香供養云恭惟尊儀曾在靈山受佛勅示生澆世力治國萬乘至尊仰北辰十善所薰見宿殖果救百姓濟淳風亦化天下以皇極海內煙塵不待掃龍襟恩濕難可測民免塗炭懷聲傳人學思孝恐不得子茲脫屣寶位榮永爲提獎迷倒惑却嫌梁武泥有爲只貴達磨斥無德肩上雲披無相衣鉢中香盛禪悅食慙念三界枉輪迴嗟嘆六道徒匍匐去年忽躡西歸蹤今日寂場空嚴飾是權是實天不知示來云去三昧力寶殿新成觀史宮萬行圓備出自剎但願諸佛諸菩薩龍天八部同贊胡塵令刹々建法幢長裕開妙莊嚴城衛護龍子并龍孫榮棣萬歲聯春色

〔二水記〕大永七年四月七日今日先皇○後御一周忌也於般舟三昧院一七箇日隨行念佛今朝曼陀羅供羅衣衆修行也有之云々午後詣誓願寺如水軒北殿姉小路等令同道了曉頭少納言從城南歸宅相語云今日御供養如常着座公卿七人此部卿元長勳修寺大納言四國寺大納言實權中納言實殿上人範久朝臣言繼諸仲橘以緒等奉行職事右中辨兼秀參仕云々被物一重民部卿取之授御導師次西園寺大納言取之同前次範久朝臣卷絹置之次言繼諸仲橘以緒等次第題名僧之前今日伴僧三口也云々後聞東洞院殿御施物一重有之勸修寺大納言置之御導師卷絹之以前歟可尋之

人、教通、賴宗參了、賴定、左兵衛督實成者、大嘗會行事也、今日不可參入歟如何、

〔小右記〕寬仁二年五月九日庚午、今日三條院御周忌御法事、於本院被修云々、一昨日、主典代信理來、申可參之、由依物忌不參入、中將兼經、昨今無音、仍以將曹正方問、遺案内、今日計也、參院御法事歟、仰明且可示由訖、兼經所爲、極不便云々、

〔中右記〕嘉承三年○天仁元年五月廿一日庚午、未時許、頭爲房送消息云、今日先帝河周忌御齋會事可

被定也、上卿可勤仕、但諸司内々催廻者、申承了、由西時許參内、○中權辨日時勘文持來、披見之處、六月十八日

七月七日乙卯許云々、下吉書之上、又乞巧奠節日也、可有用心也、但前々月被忌例、寬德二年十二月、

正月○正月也又天曆八年十二月○正月也是先々月被行吉例也、者仍所用六月十八日也、廿四日癸酉、午

時許參仗座、是御齋會僧名定也、○中參堀川院、今日又本院周閏御法事定也、六月十三日晚頭參、

仗座是依可補御齋會闕請也、十五日甲午、今日參尊勝寺來、十八日御齋會御裝束始也、行事左少

辨雅兼權辨爲、降故降爲、史定政行向彼寺始之、從行事所、時也十七日丙申、明旦欲申度緣請印之處、外記祐隆來

云、從本被請印、度緣百餘枚、作者早明旦可用之、由仰含了、仍不可行別請印也、從御齋會行事所製、裝

料絹持來、令忿縫送之、明日三僧料明日御齋會事等具了、由官外記所申上也、諸司可早參之、由重又

仰下了、十八日丁酉、今日公家奉爲先帝、於尊勝寺被修周忌御齋會、

〔吾妻鏡十三〕建久四年三月十三日庚辰、迎舊院白河後御一廻忌辰、被修御佛事、千僧供養也、御布施口

別、布二端藍摺一端、摩牙一袋也、武藏守義信爲行事、其儀被定、宿老僧十人所爲、頭也、仍各相具百人

點、便宜道場爲沙汰饗祿等、每百口被相副二人奉行云々、

一方頭百僧從之若宮別當法眼

奉行 大和守重廣 大夫屬入道善信

禮式部三十四 佛祭上 七九三



住着座末、但絕席、東廊懸簾、左大臣并院司給素服之人、近習卿相等在簾中、饗饌未下箸之間、打鐘、食了、右大臣分着堂前座、次諸僧入、自南大門南門外立、東北相分入堂、威儀師二人各相分立、僧前引導

諸僧着座、堂童子着座

地下五位、舊人等

、大行道法用等作法云々、如常、七僧權僧正慶圓或順、前大僧都院源

講師、前大僧都濟信

三禮

大僧都隆圓讀師、少僧都清壽讀、法橋扶公散花、內供慶命、堂達以上給法服、

百僧之中

有

御佛兩界曼陀羅、御經、心經、尊勝陀羅尼法花經一部十卷

已上

納螺鈿簀

經机行香

机并雜具等新調、不具記、御存生問、御願金泥大般若經末書了、然而先書端之、今日奉供養云々、御願

文、中納言忠輔作御諷誦十五ヶ度本院內事

三條

皇太后宮

一條后藤原

右大臣內方、右大臣內大臣、承香殿女

御、一條女御藤原元子

弘徽殿女御

一條女御藤原義子

前御匣殿

一條女御藤原

女御別當

春宮大夫齊信

別當皇太后

大夫俊賢、中宮大夫道綱、當衰日、不修祓、內大臣更起堂前座、向左相府

道藤原宿願、小時復座、甚無便

宜、行香了、右大臣起座、同向左府廳、諸卿悉向彼所追從之、甚就中兩丞相更不可向廳中、有院別當及

近習素服人々等云々、所謂大納言道綱齊信

自來有熱物、仍早退出

中納言俊賢、隆家行成、忠輔或云不參、依中不見、參

議兼隆正光等也、堂前諸卿悉詣左府所、予

實

一人不參

罷出

自漸迫

今日參入、右大臣、大納言公

任、中納言賴通、時光參議經房實成、賴定、三位三人、教通、賴宗、憲定、不參、參議懷平、通任、百僧、僧綱已下

布施絹

凡僧二匹、一匹、裏絹

置各前度緣一枚、故院御願度者云々、米若干云々

凡三石七僧布施云々

來月

御周忌月、而今月所被縮行、未得其意、就中彼月廿二日御周忌

條

一日也、其程太遠、廿餘日間、無吉

日歟

〔小右記〕寬弘九年六月廿二日戊午、今日一條院御周忌日、仍精進於本院、被修佛事、緣大嘗會行事、不

參入也、其由便以資平、令觸頭辨、衝黑資平來云、一條院御周忌御法事云々、本院所奉修御念佛不斷

御讀經等僧布施、本院行之、亦皇太后宮殊給云々、僧等賜度緣云々、是故院御時被成置歟、今日參入

諸卿、右大臣、大納言齊信、中納言俊賢、隆家行成、時光、忠輔參了、懷平、兼隆、正光經房實成、三位中將二

塔院被修先帝御法會

〔榮花物語見四〕

はてぬ夢正曆三年になりぬ

衰れにはかなき世になむ二月には故院〇圖の御はて

有べければ天下急ぎたり御はてなどせさせ給ひつ

〔枕草子七〕

えんゆうゐんの御はての年みな人御服ぬぎなどしてあはれる事を、おほやけより

はじめて院の人も花の衣になどいひけむ世の御事など思ひ出るに雨いたうふる日藤三位の

つぼねに、みのむしのやうなるわらはのおほきなる木のしろきに、たて文をつけて、これ奉らん

といひければ、いづこよりぞ、けふあす御物いみなれば、御しどももまゐらぬぞとて、しもはたて

たるし、しどものかみよりざりいれて、さななどは、きかせたてまつらず物いみなれば、え見すどて、

かみについさしておきたるを、つとめて手あらひて、其巻數とこひて、ふしをがみてあけたれば、

くるみいろといふしきのあつごえたるを、あやしと見てあけてゆけば、老ほうしのいみじ

げなるが手にて、これをだにかたみとおもふ都には、葉がへやしつるしいし、ばの袖とかきたり、あさましくお

たかりけるわざかな〇又見後拾遺和歌集〔枕草子春曙抄七〕えんゆうゐんの御はての圓融院、一條院の御父帝也、正曆二年二月十三日

に崩三十三御はてとは、一周忌の事也、正曆三年二月の事也

〔類聚名物考凶事〕はてのわざ

これは服にこもりし人の、なき人の四十九日、一周忌、三年忌、千日などをとぶらひて、その服

ぬぐにとりて、かくいへり

〔小右記〕寛弘九年〇長和元年五月廿七日甲午、今日故院〇冷泉御周忌法事、於圓教寺被修之、七僧僧前一

具調進高坏十二木、加打數、大石、午刻許參圓教寺、右大臣〇藤原公季及之、次着西廊饗座、舊

めり。○中略又一周忌をいへり源氏に。

君こふる涙はきほなきものを今日をば何のはてといふらん

〔續日本紀二十〕天平寶字元年五月己酉日。○二太上天皇武。聖周忌也。請僧千五百餘人於東大寺設齋焉。

〔續日本紀三十三〕寶龜四年七月庚子。賜供奉周忌御齋會尼及女孺二百六十九人。雜色人一千四十九人物各有差。

○按ズルニ、本書寶龜二年八月丁巳日。ニ設高野天皇元年八月四日崩。忌齋於西大寺トアリ。周忌御齋會トハ、或ハ之ヲ指セルカ。

〔續日本紀三十七〕延暦元年十二月壬子。勅太上天皇仁。光周忌御齋。當今月二十三日。宣令天下諸國國分二寺見僧尼。奉爲誦經焉。辛未。是日太上天皇周忌也。於大安寺設齋焉。百官參會各供其事。

〔續日本後紀十三〕承和十年七月辛丑。修嵯峨太上天皇周忌齋會。先是有司奏言。周忌齋日。的在七月十五日壬寅。伏按朝章。至行凶事。三宮本命之月。猶且忌避。而況重于太皇太后及聖上御本命乎。伏請齋會之期。却取十四日辛丑也。有司所奏。僉以爲宜。太皇太后亦許之。而中納言源朝臣信。參議源朝臣弘等執奏言。臣等奉遵顧命。期不違失。今如斯議乖。遺詰何者。遺詰曰。勿拘俗事。然則何須拘忌。又曰。送葬勿過三日。縱當彼時。三日之內有寅者。避之耶。又後年周忌。或有寅日。亦猶避之耶。上因熟發不能面議。勅令大納言藤原良房朝臣與諸公卿議定。奏曰。本命之日。不舉凶事。負古之蹤。非無所據。謹按遺詔。勿拘俗事。蓋謂鄉曲所忌碎事。非指朝家行來舊章。又當彼時。三日之內。如有可避。則避之無疑。夫周忌齋會。臣子積素。凡厥舉動。總是不詳。是以忌之耳。後年國忌。豈可與同乎。偏守一隅。不是通論。源朝臣等無復駁議。仍停壬寅。一取茲辛丑焉。

〔日本紀略二〕承平元年九月十六日庚子。奉爲先帝。○皇修周忌御齋會。中宮○皇。原賴朝子。居於天台山西。

〔真俗佛事編〕三年忌追福一問、周人忌、三年忌、乃至三十三等ノ事ハ未考、是本據アリヤ、答曰、是經已軌

其本古龜兔今佛經依太理源時其外日古軒在年今在月甲其之義第七日第二俱古牲乃至今第七食依佛源神

一國、而子亡、則孫代、第七十三年、第八十年、第九十三年、從天子、迄九年、癸一、同、及子孫、曾孫、孫、第一、百、年、迄、第、百、十

遙諸王、第百六十年已下、唯天子修之、私曰、已上ハ或人ノ引テ見テ寫スモ、ナリ、此書ヲ求メテ

尋ハ上條ニ引ク釋門正統ノ文ヲ可出。

本紀大成經

三、古くはありし業にせし後、又、爲者ニシテ、公に、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

印板を焼しめられたりける、疑ふべくもあらぬ爲書をもて、曾旦山諦忍のなき、眞學のなき

えある法師どもの、まことしげに引證して、世人をあざむくわざのいどにくるやかし、

類聚名物考 四事 同忌

古も古もことなることなし、一周忌ともいふ、これ小祥忌なり、俗には一回忌といふも、そのこと

わたりたがはず。

【禮記問傳】斬衰三升，既虞卒哭，受以成布六升，冠七升，爲母疏衰四升，受以成布七升，冠八升，去麻服。

又期而大祥素縞麻衣中

子而居廟而緇無所不備

○ ○

八月辛亥丁酉年正月臨成恭奉皇太后周忌有司奏至尊奉年應改服詔曰君親名教之重也

前編二十四

〔はてのひ〕はてのひ 竟の日也、日本紀には國忌日をよみ、三代實錄には四十九日をよ



チ、五年ヅ、ニテ營會アルハ、年ヒサシクナレバ、只滿數ヲ取ナルベシ、當年六月四日、我根本傳教大師八百五十年忌アリ、今歲ノ年號ハ、前ニシルスガ如シ、

〔道碧軒記<sup>下儀</sup>〕人の年忌の事、佛書に、しかども見えす、元享釋書に、十三年忌の事あり、やがて日本の俗禮とみゆ、十二年は、一紀ゆゑに十三年目に弔か、又廿五年忌は兩紀廿四年の翌年ゆゑに弔か、これは一理あり、廿三年を用ゆることは、曾不知據、

〔皇都午睡<sup>三篇</sup>〕上方と替りしことは、百回忌、五十回忌などは、馴染の人なきゆゑ、上方のように張込す、死去の當座の方馳走をする也、茶の子にても、一周忌より三回忌は軽く、七年十三年と段に先はど心易くして、當座を叮嚀に勤め、成たけ張込處なり、火早き處故、近遊の附合にても三年七年たつ時は、變り易きゆゑなるべし、是らは京攝より江戸の方、能き差路なりと思はる、也、

〔類聚名物考<sup>凶事</sup>〕年忌

今世になす年忌の事、西土にも我國にも、曾て古へなき事なり、藏經の中にも、佛說經論に見えず、儒教にも、只小祥大祥有のみ、又國史にも曾て見えす、中古已來、百日、千日、十三回忌の事は見えた

り、

〔座添堪囊抄<sup>二</sup>〕周忌事

周忌ヲ周関トモカクハ如何、イヅレモ共ニ、コレヲ用ユ、周忌ハ一メグリノ忌也、周関トカクハ、一メグリノヲハリナリ、関字ヲバヲハルトヨム也、

○按ズルニ、周関、或ハ周関ニ作ル、當ニ周関ヲ以テ正ト爲スベシ、此書ニ、関字ヲバ、ヲハルトヨム也トアルニテモ、知ルベシ、即チ周関ノ関ハ、服関ノ関ニテ、其音ハ缺ナレドモ、古人ハ癸ト同音ニ呼ビシニ由リ、其字ノ義ヲ用ケルノミナラズ、其音ヲモ借リテ、周忌ヲ周関ト云ヒシニテモアルベシ、又癸ノ字ヲ、古人ハ多ク关ト書セルニ由リ、関ヲモ関ニ作り、關ノ俗字ナル関ト混

此年忌はなきことなり、然るに此わざやう／＼にひろがりて、今は佛の諸宗にもあまねく、其祖師などのためにも遠忌とて、三百年、五百年、千年などまで、はるかにかぞへ出て、いかめしくおこなふことゝぞなれりける。そも／＼此年忌といふわざも、月毎の忌日と同じたぐひにしあれば、古になかりしわざならんからに、ずつべきにもあらず、何わざも古に異なるをば、ひたぶるにはおきすてむとするは、よろしからぬさかしら也、そこなひだになくば、時世のならひにそむかざらむこそよからめ、又事が中には、古よりも今のしわざのまされるもなごなからむ。

〔東見記下〕佛者年忌ノ事、本無之、一切經ノ内ニモ無之、少納言信西十三年忌ヲ、櫻町中納言成欲修之、其弟僧高野明遍不同之、此兩人ハ信西ガ子也、佛者四十九日ニシテ而止、其後儒者ノ祭法ヲ假テ、年忌ト云コトヲ始ム云々、京都相國寺僧瑞溪考一切經曰、此經之内忌年服紀之事皆無之、故佛者借儒道而用之云々、

〔梨宗隨筆一〕七年忌ヨリ已後ハ、ミナ日本ノ風俗ナリ、七年、十七年、廿七年ハ、タマ中陰ノ七日ヅニ、生死ノ理アルニ表スルナルベシ、十三年、廿五年ハ、十二支ノメグリニシタガフナリ、タトヘバ子ノ年ニ死シタレバ、又十三年、廿五年ガ子ノ年ナルユエナリ、正忌日、元享釋書卷五釋明遍傳云、國俗逢亡者十三廻之歳、營追薦者、十二支終而始迎先支、而寓追慕也、トイヘリ、コレ本朝ヨリハジマレルノ證文ナリ、又廿三年、三十三年ハ、前ノ三年、十三年アルニ例セルナルベシ、又廿一年忌ハ、昔尊氏將軍等ヲ弔シニ例シテ、大猷院殿尊儀ヲモ、今歳寛文十一辛亥ノ年、日光山ニ於テ御法事アリ、善覺僧都マノアタリ、一品法親王御門跡ヨリ引接シタマヒテ、日光ニ詣シ、カノ御法事ニアヘリ、今按ニ、廿一年ニテ、ブルキヲアラタムルコトアリ、例セバ、天照大神宮、春日大神宮、談峯等、ミナ廿一年ニテ社ヲタテカヘタマフト、神道ノ説ニ、廿一年ヲモチフルコトハ、廿一年ヲヒトムカシトスルノ理ハ、昔ノ字ヲ、廿一日トカクニヨルトイヘリ、タシカナルコトヲシラズ、サテツノ、

聖德法王帝説ニ、歲在辛巳、明年二月二十二日甲戌、夜半太子崩、トアルニ據レバ、天王寺祭ハ其  
薨逝ノ月日ニ當ルナリ、其餘歷朝ノ國忌ノ如キ、皆其崩御ノ月日ヲ以テシ、維摩會ノ如キモ亦  
藤原氏ノ祖先ナル、鎌足薨去ノ月日ヲ以テ之ヲ行ヘリ、安齋隨筆ノ説ハ、誤リナルニ似タリ、

## 〔玉勝間〕忌日祥月年忌の事

今の世に、親先祖のうせぬる日を忌日といふは、月毎の其日にて、その月のをば、殊に祥月とぞい  
ふなる、此祥字は、もろこしの小祥大祥よりうつれるなるべし、されど古は、今いふ祥月をこそ忌  
日とほしけれ、月ごとの忌日といふは、こゝにも、もろこしなどにもなかりしかば、祥月といふこ  
とも、もごよりなかりしなり、むかしは、忌月とて、其月の内は、すべてよろづをつゝしみて、その日  
をば、殊に正日といふことは、有きかし、されば、今祥月といふも、正日の例にて、正月なるべきを、然  
書きては、月次の正月にまざる、故に、祥の字は、書にもあらむか、さて、月毎の忌日は、もろこしに  
なきことなるを以て、今儒者などは、あるまじき事として、親も先祖も、月毎には死なず、死し日は  
たゞ一日こそあれなどいふめるは、一わたりは、ことわり聞えたれども、もし然いはんには、年毎  
にも死にはせざれば、年ごとの忌日もあるまじきこと、やいはまし、すでに年毎の忌日あるう  
へは、月毎にせむも、何かあしからむ、これはいにしへよりもまさりて、ねもごろなるしわざにし  
あれば、今の世のならひにしたがはんこそ、まさりてはあらめ、又忌日たび／＼にては、おのづか  
らまことの忌日のなほざりになるかたありともいふべけれど、そは、今も祥月とて、又ことにす  
れば、これはたかくることはなきぞかし、さて又近き世には、年忌といふわざ有て、一周忌三年忌、  
七年忌、十三年忌、十七年忌、二十五年忌、三十三年忌、百年忌と、又殊にねもごろに物する、これは  
た古はかつてなかりしわざにて、皇國にては、昔は一周忌を、はてといひて、殊に物し、もろこしに  
ては、一周忌を小祥といひ、服のはての三年を、大祥といへるのみこそありけれ、其外佛の道にも、

謂余曰、僧周鳳夢語集載、遠忌之事曰、大藏經五千餘函、無遠忌之事、則震旦天竺、其不修之、本朝古書亦無之、及中葉而藤信西諸子爲其父信西修十三回忌事、見元亨僧史明遍傳、蓋是權輿乎、雖無典故、然孝子永慕之情、年々々々、雖修之亦可也、況於隔其年乎、故闔國無上下有此事也、然則信西以來、到今既五百年、習俗既久、難改革之者、宜哉、余見修遠忌之人、其意或薄於追遠、而以其身得壽爲幸、或變哀悼之情、以擬慶賀、或與僧獻酬、滿座歌謠、然庸人不悟之、具眼者爲之擯、周其中或有曰、三十三年後報恩既足、則雖忌日不及齋戒者、如此則所謂終身之喪、何在哉、可以捧腹、可以嘲笑也、近時或有欲廢每月忌日及遠忌者、其意雖似慕儒禮、然其實傾於齋戒而薄於追慕、則雖欲改習俗、亦不可得也、是知雖志於儒學者、不能行三年之喪、則國俗不可變也、唯供佛施僧可禁之、此事先年詳議之、載在泣血餘瀋、今茲六月十六日、余乃祖林入齋三十三回忌也、先考雖被養於理齋、然東舟無後、今其孫子存者、我唯獨也、故先是既安神主於祠堂、今朝設忌日之祭、且豫諭告洛宅處守者、呼親戚故舊、猶存者勸素食、以著不忘遠之志、是亦我終身之喪也、何必拘三十三年俗說哉、

〔安齋隨筆 後編二〕一忌日を祭る

世俗先祖の祭に忌日を用ゐる人あり、今按するに非也、祭は吉

禮也、忌日は悲患の日凶也、用べからず、神武天皇春三月甲午ノ朔甲辰崩、日本長曆を以て考之、月之十一日也、下鴨祭は中ノ酉日也、神功皇后四月辛酉朔丁丑崩、月之十七日也、伏見御香ノ祭ハ九月九日也、應神天皇春二月甲午ノ朔戊申崩、月之十五日也、八幡祭ハ二月初卯也、自朔日至十二日之間也、又三月中旬日、又八月十五日也、上宮太子二月五日薨、天王寺祭ハ二月廿二日也、舍人親王、天平七年十一月乙丑薨、月之十四日也、藤森祭ハ五月五日也、菅家延喜三年二月後五日薨、宰府祭八月廿二日ヨリ廿四日ニ至る也、北野祭ハ八月四日也、近代忌日を用て先祖の祭日とす、誤甚し、詳に瓊矛拾遺に見えたり、

○按ズルニ、右ノ文中、上宮太子、二月五日薨、天王寺祭ハ二月二十二日云々トアリ、サレド、上宮



忌等アリ、二十一年忌ハ、僧天海ガ、大社ガ二十一年ゴトニ造營スルコトアルニ由リ、其制ニ依リテ防メシ所ナリト云フ、或ハ足利氏ノ時ニ起リシモノトモ云ヘド、未ダ其信否ヲ知ラズ、又百年忌以上ハ、多クハ高僧偉人ノ爲メニ修スル所ニシテ、足利氏ノ比ニ濫觴シ、大抵五十年毎ニ之ヲ行フモノ、如シ、而シテ年忌ニハ之ヲ前年、若クハ數年前ニ引上ゲテ行フコトアリ、

百日齋ハ、支那六朝ノ比ヨリ起リ、我が國ニテモ、持統天皇ノ時既ニ天武天皇ノ百日齋ヲ行ヒシコト史ニ見エタリ、

年忌百日齋ノ外ニ、忌日アリ、忌月アリ、忌日ハ、死亡ノ正當ノ月日ヲ云ヒテ、後世之ヲ祥月トモ云フ、月忌ハ、命日トモ云ヒテ、毎月ノ忌日ヲ云フ、忌月ハ、死亡セシ月ノ一月ヲ云フナリ、而シテ忌日忌月ハ、支那ノ風ニ倣ヒシモノナレド、我邦ニテハ、多ク佛事ヲ以テ之ヲ行フガ故ニ、國風儒教ニ據レルモノト外ハ、之ヲ此ニ載セタリ、又忌日ノ中ニ於テ、一宗ノ祖師、一寺ノ開基ニ係レルモノハ、之ヲ釋教部ニ收メテ、此篇ニ略シヌ、

〔尺素往來〕凡三十五日謂之小練忌、四十九日謂之大練忌、望百ケ日號卒哭忌、一周忌謂之小祥忌、三周忌謂之大祥忌耳、

〔鷲峯文集十八〕遠忌日說

吾儒小祥大祥忌後、每歲有忌日之喪、所謂終身之喪是也、然本朝國俗三年忌後、有七年忌、有十三年忌、有十七年忌、有二十五年忌、有三十三年忌、是流例也、或二十五年有故障不能行之、則有修二十七年忌者、或以十七年與二十五年其隙爲久遠故、有修二十三年忌者、或有幼喪父母、而其身得壽、則修五十年忌者、或有爲高僧祖修百年忌者、且每月忌日、供佛施僧、於貴賤各有其分、而於遠忌、則其施用無不盡其力也、於追遠之情、不忘者可謂厚矣、然尋其所由、則浮屠掠攘越之貪、貪達順之金也、先考曾

# 古事類苑

## 禮式部三十四

### 佛祭上

佛家ノ式ヲ以テ祭奠ヲ行フニ、年忌アリ、百日齋アリ、年忌ハ、支那ノ風ノ移リシモノト、我が國ニテ新ニ創メシモノトノ二種アリ、而シテ其最モ早ク史ニ見エシモノヲ一周忌トス、一周忌ハ、父母等ノ喪ノ一年、卽チ十三月ノ服闋ニ本ヅキシモノ、如シ之ヲ周忌ト云フハ、支那人ノ語ニ本ヅキシモノニテ、周トハ一年ヲ云フナリ、

三年忌ハ、支那ノ三年ノ喪ヨリ出デシモノナラム、古書一周忌ヲ大祥ト云フハ、我邦ノ一年ノ喪ハ、支那ノ三年ノ喪ニ當レルニ由リテ言ヘルモノニテ、一周忌ヲ小祥ト云ヒ、三年忌ヲ大祥ト云フハ、全ク支那ノ語ヲ取レルナリ、

七年忌以下ハ、皆漸次我邦ニテ創メシモノニテ、中ニモ十三年忌ハ、十二支ノ一周ヲ期トシテ佛事ヲ營ムノ意ニシテ、光仁天皇ノ寶龜年中、既ニ十三年忌ノ事見エタリ、次ニ三十三年忌ハ、鎌倉幕府ノ末造ニ始レリ、次ニ起リシモノヲ、七年忌、十七年忌、二十五年忌トス、七年忌ハ、室町幕府ノ始ニ起リ、十七年忌、二十五年忌ハ、其末葉ノ比ヨリ起レリ、而シテ十七年、二十年ハ、俱ニ三十三年ノ預修ナルガ如シ、又二十五年忌ハ、十二支再會ノ年ヲ以テ修善スルノ意ナリト云フ、又五十年忌、六十年忌モ、相尋デ起リシモノ、如ク、而シテ通常世ニ五十年忌ヲ以テ、年忌ノ終結トナス、徳川氏ノ比ニ至リテ、又二十一年、二十三年、二十七年、三十七年



古事類苑

禮式部三十四

佛祭上

總裁

周忌

三年忌

七年忌

十三年忌

十七年忌

二十一年忌

二十三年忌

二十五年忌

二十七年忌

三十三年忌

七八四

七八八

八〇二

八〇八

八一三

八二七

八二九

八三一

八三二

八三四

同



淺而志之傳也。余謂此議固當然。祠堂祭高祖考妣以下四世。每月有八忌日。而并朔望俗節四時祭。則或其繁煩乎。然則至遠祖及傍親。則唯用一年一忌日。而如考妣則可存月忌。況其大祥忌前者。猶是三年喪中也。既隨國俗。而不能守古禮。則亦隨國俗。而可存月忌之祭。浮屠者貪其嘏金。我輩唯欲與孝志。

略○下

但シ此日ハ肉味ヲソナヘズ、精進ニスベシ、祭文曰、

維年號幾年歲次干支幾月干支朔越幾日干支孝子名乘、敢昭告于顯祖考某氏某字君、歲序流易、諱日復臨、追遠感時、昊天罔極、謹以清酌庶羞、用伸奠獻、尙饗、

父母外ハ、追遠感時、昊天罔極之八字ヲ改テ、諱日復臨、不勝感愴ト書ベシ、

〔爲峯文集六十六〕先考忌日告詞

維寬文三年歲次癸卯正月庚午朔越二十三日壬辰孝子春齋林恕敢昭告于顯考文敏先生羅山林君、歲序流易、諱日復臨、追遠感時、昊天罔極、就告是月十八日、顯考全集新刻本百五十五卷、澤副執事大和守源廣之、謹獻營中翌日幸備台覽、辱聞徽音、且元老執事皆褒賞之、誠是英靈之顯德、文華之餘烈、不墜於地、猶生之日、放光於闔國、流芳於後世者也、不肖孤永慕之寸丹、非筆舌之可盡、爰逢忌日、謹呈副執事傳命之狀於靈前、謹以齋饌、用伸奠獻、尙饗、

〔爲峯文集六十五〕顯祖正忌日祝文

維明曆四年歲次戊戌六月丁卯朔越十六日壬午、孝孫春齋林恕敢昭告于顯祖林入齋之靈、歲序流易、諱日復臨、恭惟余幼時在京師、蒙顯祖之愛撫者有年矣、永訣以來、既三十年、東來二十餘年、雖不忘於心、然祭祀有虧、今神主奉安於祠堂、追遠感時、不勝永慕、謹以齋膳清酌茶菓庶品、用伸奠獻、尙饗、

〔爲峯文集七十四〕泣血餘涕

四月〇明曆二日、當一周月忌、〇此年三月二日、當一周年忌、拜神主獻齋膳、按古禮所稱忌日者、一年一度也、往年家

君奉鈞命、與朝鮮聘使筆談及忌日之事、彼亦謂一歲唯一度也、蓋其傳習中華之法者乎、本朝舊記所稱國忌、亦一年唯一日也、然則月忌之說者、出於中古以來流俗者歟、然追遠不忘之情、誠是孝道之一事也、不廢之而可乎、春德謂三年之喪、本朝古來不能行之、而父母喪服以一年爲限、故遭親喪者一年解官辭職、近世唯以五旬爲限、謂之忌中而已、偶有月忌之稱者、存之而可也、若倣古禮而除之、則情之

忌日ハ終日ノ喪ナリ、孝子ノ哀情ニ因テ喪服ヲ服シ、其情ノ盡クベキニ非レドモ、時月ノ限アレバ、喪服ヲバ除クト雖ドモ、其思慕ノ情ハ盡ザル故古ハ忌日ニハ素服シテ日ヲ終ルナリ、然レバ其日ハ居喪ノ時ノ如ク、雜事ヲ捨テ、弔賀ヲ停テ、哀慕ノミ專トスベシ、

〔喪祭式〕祭禮略節

忌日ノ祭ハ、三世ヲ祭ル者、始祖ト祖禰ヲ時祭ノ如クシ、二世ヲ祭ル者ハ祖禰、一世ヲ祭ル者ハ禰ヲ時祭ノ如クシ、其外ヲ略スルコト何レモ前ノ例ニ准ズ、五世以上ト附位ノ喪服アルハ、朔望ニ准ジテ輕キモノヲ薦ムベシ小家ハ略スルコト心ニ任スベシ

〔通祭小記〕忌日

其前日ヨリ浴潔齋戒シ、座敷ノ正面ニ神主ノ机ヲ設ケ、香器物等如例出シナラベ、其明、主人イツモノ如ク晨謁シ、退テ其儘淺黄上下ヲ着シ、祠堂ニ至リ、其當日神主ノ前ニ至リ告テ曰、今日忌日ニ御座候間、謹テ神主ヲ楨□□□主人奉之、祠堂ヨリ出、座敷ノ神机ノ上ニ安置シ、乘坐ス、凡テ花美ノ衣服等不用、

啓積

以下皆如春賀、但不用熨斗、昆布、吸物、大盡、冷物、三獻目ノ酒ヲ其儘オク、膳部皆スエナラベタル時、兼半俯ス、主人告曰、今日別而存念難忘奉、存心バカリニ能請ヲアゲ申候、尙クハ聞食候、卽拜ス、餘ハ皆同前、

送坐

同子秋賀、主人奉主

此日不飲酒、不食肉、不聽樂、淺黄ノ服ニテヲリ、非不得已、則不出、如喪、夕ベニ不入、寢略ト

〔喪禮儀略〕忌日ノ祭ハ、親ノ死タル月日也、主人ハ前一日ヨリ酒ヲ飲ズ、肉ヲ食ハズ、歌舞ノ座ニマジハラズ、親ノ初テ死タル時ノ如クカナシム、其朝ニ至テ、素服シテ祭ル、其儀ハ四時ノ祭ニ同ジ、

古人曰、君子有終身之喪、忌日之謂也。古之所謂忌日者、一歲之中、唯有一日而已。本朝古記所稱國忌、亦一歲唯一日而已矣。今世本邦稱月忌者、出于中葉之流俗、而非古禮之正也。蓋古人於親喪既盡、其禮者無所不至、故執喪三年之後、唯於其死日致其哀、則人子之情亦自安矣。本朝之古法、假寧令喪葬令所載、有期喪而無三年之喪、後世之流俗、又併期喪而廢之、唯有五旬之忌、暇而已。然則今世人子欲行喪而勢力不能者、或幼而不執喪、長而知其非者、姑從國俗、而存月忌亦可也。今人不行期年之、且併月忌而廢之、乃薄親之至也。不啻駭俗聽、且於天理人情、亦豈得爲安乎。夫我國俗中葉以來、既無喪禮、而特有月忌、則爲人子者、尙可以是以爲幸、而豈忍廢之乎。記云、禮雖先王未之有、可以義起也。是謂正禮也。如月忌者、固非古禮、且雖非可以義起之正禮、然人子之情、亦豈不得因此而少舒乎。學者採朱子答張敬夫節祠之說、而一觀之、則知月忌之可存、而我說之不安。蓋月忌與節祠雖不同、是亦正禮之外、各因鄉土之舊、以其所尙之時也。朱子答張敬夫節祠之說、出平朱子文集三十卷及朱子書節要三卷。

〔兼燭〕忌日ノ事

忌日ノ事、中華ニハ專ラ甲子ヲ用ユ、四月己丑、孔子卒ト云時ハ、己丑ノ日ゴトニ忌日ナリ、一年ノ内、大凡六度アリ。禮ノ喪大記ニ云、父母之喪、既練而歸、朔日忌日、則歸哭于宗室ト、一年只一度ナラバ、練ヨリ大祥マデ忌日ナシ、練ト云ハ、ムカハリノ事也。後世ハ一年只一日ナリ、家禮儀節大祥ノ下ニ註シテ云、第二忌日也、シカレバ、ムカハリヲ第一ノ忌トシ、第三年ヲ二ノ忌日トスルコトアキラカナリ、毎月ヲ忌日トスルコト、本國近代ノ禮俗ナリ、イヅレノ比ヨリ始ルト云コトヲシラズ、先年越前福井侯ノ老臣蘆田圖書氏、コノコトヲタバシテ、先人へ書東ノ通路アリ、モトヨリ文集ニノレリ、杜氏通典ニ、晉博士荀爽ガ言ヲ引テ云、今代所忌、更以周年日數ト、ソノカミヨリ一年一忌ナルコトミルベシ。

〔喪祭式〕喪祭大意



閭里之俟、號饒待斃、起爲盜賊蟻聚蜂萃、三都之市、白晝閉肆、官吏來捕、罵詈不忌、曰欲啖汝肉、事汝之畏、有大於汝、來與吾對、吾雖童心、恟懼不寐、况天下之心、如以敗船坐海、洪波逆風、不知所底、已而聞有越公者、出躬宗親之懿、任付託之密、宣其實罰、變凶爲吉、每一令發、人之望之、如暝暗夜而覩日月也、其聽之也、如將潰之卒、得良將而聞其呵喝也、其或畏忌而謗訕之也、如狡奴黠僕之不、便家宰之聰察也、七年之中、百弊盡撤、乞骸骨於方壯之年、而含權勢於得意之日、消經世濟民之精於集古玩物之末濟、我君事願、息吾肩政、如畫一、吾建吾觀才、如茅茹代、吾輔君、以身繫安危、三十有九年、老而分終於公就安、而天下之所爲患也、吾生何與已、關抑自幼及強、聞公立海內、望公如在天際、忽微潛夫之一畫、蓋去今之四歲、懼其煤漬、乃辱嘉誨、汝之紀事適繁簡、論舉見兆會、後之論者云何、吾知其大矣、一言之重、於九鼎足以取信於百世、自顧孤寒、舉世所背、而何以獨得公之愛乎、抱感激之異衆、而悼報答之無期、爰遇忌辰、聊盡吾私、嗚呼哀哉、而不敢望其饗

〔拙堂文集<sup>六</sup>〕祭忠烈藤堂君文

維嘉永三年夏四月三日、國校督學齋藤正謙、謹以清酌庶羞之奠、祭故騎士隊將藤堂忠烈君之靈、曰、

忠以孝公、仁以撫士、文武其材、英烈其志、君在焉、何患外侮、君亡矣、民將安恃、嗚呼哀哉、尙饗

〔葬祭辨論〕忌日の祭は、いかゞしたる事にて候や、曰忌日は父母死し給ふ其月の其日をいふ也、佛者のいへる毎月の其日をいふにあらず、古人の曰君子に終身の喪あり、忌日の謂なりとて、此日は父母死し給ふその月にてその日にあたりぬれば、孝子たる人、此日にあたりて、幾年前の此日此日に親にはなる、と思ふ哀みの情さながら喪の中に居心のごとく、物ごと樂み思ふこともなく、心にかなしみえたる情あるゆゑに、其哀みの情より、此日其思ふ人を父にても母にても祭るなり、

〔自娛集<sup>四</sup>〕月忌論

日國家或得子而用之視死如歸赴水火而不辭當使儒夫立敵愾之志不俾古人專踏海之奇嗚呼晝夜之道死生亦大矣太山鴻毛輕重各有其時善惡之義根於天性今行道餓夫亦猶不屑來食之嗟唯豪傑之士能有忍而成大謀今出袴取履之辱皆爲之而不疑惟子羈旅備嘗險阻艱難今千辛萬苦其語誰聽鹿島之行筑州之寓豈有屈節以拂亂心思情夫不能以身殉君父之急空伏劍鋒以與施焦之徒同歸臨絕從容謝天下之人兮萬里聞之令我心悲英魂招而不返兮仰彼白雲而神馳耿々寤寐之間今猶見其雄偉之氣與魁岸之姿吾既不欲作兒女子態而弔子兮隨風悵然猶不覺涕淚之相隨感念疇昔寄哀一奠之詞惟子有知髣髴來舉此卮尙享

〔春水遺稿〕祭西山士雅文

維寬政十年歲次戊午十一月日藝落教授賴惟完聞亡友吉備隱士西山君士雅大葬有期謹遣价奠具於柩前東望拜哭起而言曰嗚呼我交道非不廣以道義相許幾許人兄祛我蔽兄剖我悃切偲之訓我知交道之真我釋褐本藩叨職儒臣顧晦始殊情況不均兄不以我藐藐誨我品我諄諄兄學日就而德月將義至高而徒寔繁言之所發吾道之存行之所制吾道之尊衛道之警相爲聲援廿年猶一日千里實比肩其將如之何一疾之不痊皇天無親奪兄之遺兄之存沒道之泰否保焉嗚乎開羅學之蒞結狹兒之舌一言不假凜然古名士之風而今而後將誰使繼其烈一介不苟卓爾古高士之槩而今而後將誰使同其潔嗚乎吾道之窮也我恐風教或萎茶已矣矣矣惟脩洛閩之舊學以終犬馬之餘齡雖無望于一世庶不負于幽冥我欲往哭聊移是藁走价緘詞以告兄靈靈乎不亡鑒此哀誠尙享

〔山陽遺稿〕祭樂翁公文

歲在庚寅<sup>○天保元年</sup>夏五月十有八日爲故少將樂翁公周忌之辰布衣賴襄私用宋民祭司馬溫公之例焚香遙拜不敢月清酌庶羞之奠而用文祭之曰人有貴賤之相懸如天地之隔而知遇之無間出意念之外者況昔之所目仰而今之神契焉昔在吾童穉天明之季寬政之始聞信岳之發火灰被七道之二

處士之靈曰嗚呼吾與子別一日三秋豈圖不幸自遭大憂孤虛泣血再期末周側聞處士暴死西州如夢如覺驚歎不休每一思之令人病悸喪既除服閱月凡四乃始取酒祭哭爲泣嗚呼子奚以而暴死邪豈誠有不能得而已邪將得已而巳邪獨不聞夫先哲守身之義邪假使不啓衾易質以全歸何爲乎割腹屠腸以就死西海與東海風馬莫及傳聞之紛紛曷免異議人非堯舜誰能盡善嗚呼子乎吾悲其處變惟子供養王母兮侍湯藥而不倦服喪廬家三年兮實今世之所鮮兄弟之異撰兮奈人心之如面既無棣萼之聯芳兮嘆鵲鴒之在原其於祖妣孝敬斯至豈獨同胞友愛莫存噫彼小人好成人之惡兮愛羅鄉議之愈喧遊四方欲償志桑弧兮宅一區事終身田園嗚呼子有類乎匡章自痛吾質之非孟軻禮貌交接欲雪他日之冤獨行異調固非時俗之所能和況乃生死之殊路千秋邈乎隔山河昔子從師宦學於江都始得與子傾蓋而晤言久想像倜儻之高節忽激昂奇偉之盛論吾何以辱大兒忘年之交獨愧彌衡之假養疾則僂藥歸送行子之東又顧余門上堂拜親已數歲音容在目弗可護嗚呼子夙懷高尚之質兮有慕乎魯仲連之爲人排難解紛雖非戰國之策士輕世肆志庶爲太平之逸民能知尊王而賤霸豈嘗當年之不帝秦囊中之裝無一錢而彈劍縱以問津書纔足以記名姓而劍有餘乎防身非有爵位於國不任而乃心朝廷開赤狄之蠶食北陸而窺塞神州兮恐其後世爲害天下蒼生上下宴安方耽鴆毒兮子獨慷慨不受命以私行陽爲浪客而漂遊山水兮陰欲爲國家偵探虜情期使衣冠禮樂之文物不變於被髮左袵之羶腥豈云封侯萬里之外以取一身富貴之榮杞人憂天地而寧不恤絲不知者譴以狂名一別之後杳無消息或傳其由北海直入帝京豈關防嚴禁不能得其要領邪抑點版潛謀未有狡計之見其形志士憂世贈言百里有識慮之深長偷情自喜取快一時乃愚人之常爾後三年果有使北之事叩關款塞而請互市權場既已甘言重幣以誘我加之虛聲恫喝以誘其富弼彼將還玩我國於股掌之上以得其志何我國勢陵遲而威武不張不伏中行說而箝其背兮遂使醜虜輕視我東方廟豈乏獻策請纓之士徒使草莽之人投筆而心傷當是時子其何在倚劍而望子於長天之一涯他



謂我成器天不憖遺世既以異今我來思永言歎嗟厥澤已斬不見克嗣往問九原宿草蔓地著作存編足觀其志爰薦輪祭聊展吾意嗚呼尙鑒

〔栗山文集祭石丈山文〕

進而厲義勇於三軍退激高風於百代其生而軒昂嶢嶢百鍊不碎其死豈其霧散電滅漸盡而水逝乎意其高潔昭々者不騎星辰入天門並日月而永存則將其英毅剛果之氣發爲山岳含爲洞壑發爲雷霆風雨攝百鬼役彪虎以威福于此土乎不然其文采煥散絢紵醴郁爲霜露爲煙霞爲風水之聲爲草木之英華徘徊眷戀乎此土而不去以娛遊者日與之盤桓婆娑乎雖其英靈變化不可得而知也然其可知者方寸千載旦暮相照雖以彥等之庸陋抑亦吟風嘯月不可謂不涉其流者也恐在所不外矣敬香酒烈神尙勞髡乎其來鑒

〔春水遺稿祭清水督學文〕

於乎吾子其逝耶子之存沒學之隆替繫焉苟在學職者得不爲之潛然落涕哉子之出也官在學制看詳其舊立革其弊學令儒職俱爲一體看舊革弊猶爲末技吾聞雅言識其本志學與人事岐而爲二誰能一之仰天自失致育子弟成其德器風動士民振其綱紀子之在官日夕樂易樞人恐嚇賤如充耳僚屬一善如有子己子弟駭々吏人自致非惟志大細務不遺其計如廷莫不利薦人不誤黜人不黜勉陳力在奉德意嗚乎吾子其逝耶五十之歲尙在散位居官五年一疾不起屈者何久伸者其幾子之治家有恩有義雍和之風觀者稱美用之領宮改觀如彼用之一藩其亦何似吾哀其志之無遂吾恐其業之無繼子有遺制人守弗墜子有遺澤人慕弗置精爽有知庶其有慰上墓一哭非私子子我告吾誠情思無已於乎哀哉

〔幽谷遺稿祭高山處士文〕

維寬政六年歲次甲寅三月戊子朔越十一日戊戌水戶藤田一正謹以清酌庶羞之奠告于上野高山



惟承應三年甲午七月十九日洛陽山崎柯聞友人小倉三省丈之訃海南百里以親喪而不能爲奔以家貧不能遣人依便次奉香燭奠于吾友之靈前乃哭曰嗚呼三省好儒惡佛事君不容悅事親不苟從善撫弟妹善惠隸僕茲歲四月遭父喪哀毀致疾今月十五日永逝痛哉痛哉不圖三省而遽至此也交通之情同志之樂已矣已矣哀哉哀哉

〔補遺鳩巢文集十一〕祭岡崎叔敬文

嗚呼叔敬始吾學於京師聞子名有素子亦過聽願與交遇自度吾材無取幸子見顧屬世事之驅迫恨嘉會之遲暮何圖前言未踐卒而聞訃國人洵洵親友來慰曰子事主職在言路比年數諫以直見惡近復抗疏逢彼之怒思子平生此言信而不誤去歲子居母喪悲泣哀慕儼然衰經動合禮數曾未期月會此變故豈其心恐貽親憂乃有待而作耶嗚呼哀哉如子之篤學懿行宜其實諸侯觀光於國乃仕大夫之家久沈淪乎幽側蹈由雍之高闕何必慕夫遺直明哲保身子之所識以道獨善亦足自得子復何心好犯禍機以招顛覆蓋以仕有言責不忍錯口喑默豈效下小丈夫捨細故事告訐以此自塞所患讎言之難合固知朝入而夕跽與其違志而苟生寧歸死於其職噫心事之明白斷々乎其無惑嗚呼天乎命乎夫何斯人而至此極彼小人而得勢譬之虎狼而翼殘害忠良如鬼如蜮何獨善類之害抑亦邦家之賊矧子孑々孤立彼固將逞其力宜其有道而遭橫逆之禍無罪而爲亂刑之殛使吾始而聞之遽然歔歔而嘆息繼之憤悶鬱結以至廢寢與食雖然比于剖心忠臣之則千載之下民稱其德今通國之士聞子死莫不相謂面惻惻子素無利澤及人豈謂以私相憶固忠義之感人無論乎識與不識在當時猶如斯至後世其易抑自古民皆有死惟子沒而有異聊以此言慰子不知淚之沾臆嗚呼哀哉尙饗

〔北禪文草三〕祭雨森芳洲文

嗚呼先生抱流伊洛窮源洙泗覃思研精學優而仕仕斯海邦厥材以肆事上接下必本仁義外交鷄林恩信所寄季路一言孰有疑焉乃若之人邦家經紀嗟我曩時萬里修刺未見君子遙指風致論我諄々

哉噫先生之魂豈與醴雞甕裏者同乎哉將沿東海兮浮遊八極乎抑攀富山兮御氣排空也必其爲列星爲明神後天後地以欲親造物人鬼之所窮焉顧彼塵世之利名禍福兮野馬杯水曾何足掛齒牙也然則重遠等區區奉觴恣嗟悲泣兮寧莫爲先生所嘲侮也耶嗚呼哀哉尙饗

栗山文集

祭芝山先生文

維天明二年四月廿一日教下生阿波國儒員柴邦彥聞故致仕讀岐文學芝山藤先生之赴明日乃能力疾率同學菊池繩武山田嶽新名□□等謹奉清酌時羞之奠敢昭告于先生之靈曰嗚呼哀哉先生而福與壽止于此乎豈弟君子福祿所將以先生之寬裕溫柔愛物利人其宜當天休以贊無疆之福壽優遊永年矣如何不弔罹此凶毒嗚呼哀哉嗚呼哀哉邦彥鈍頑孤貧羈宦內無所告外無所倚提而喻之撫而養之以致有今日皆先生之賜也義敦師友恩埒父兄中間離索遠負杖屨思有報之萬分未能庶幾乎書問相慰以怡養暮年豈念一朝奄忽聞此凶問嗚呼哀哉豈特邦彥等倚慕之私哉凡此邦人大夫君子小子後生行何所於式疑何所質問人之云亡其傷如何嗚呼哀哉三世通家吉凶共之雖先生苟逝矣其與令男諸郎從事豈不如兄如弟相勉以奉遺緒乎嗚呼哀哉膺臆迷亂言無次第攀號一奠永訣終天嗚呼哀哉尙饗

綱齋文集

祭近藤得菴文

維寶永甲申

元

十一月廿一日漫見安正率諸生故舊以酒饌薦近藤大作得菴之靈曰嗚呼爾既有

忠信之資而更篤好學之志負笈遠遊于華門而忽歷三春秋儉謹樸素始終如一奄罹困病一臥不起醫鍼無効永訣事畢德業未克而斃而後已者則不自愧焉吁彼學京下而患養資不優者固不幸而斃親給喪本心者往々皆是也爾乃鄉黨不乏而躬自執儉安素其行立如此而不克見其後日之所成齋志以沒嗚呼可惜哉薄酌一觴以奠尙饗安正敬白

垂加文集

祭小倉三省文

祭朋友

不得去顧平生而怵怩方逢再期之周絨詞千里寄哀一奠不自知涕淚之交顧尙饗

〔泰山集〕

祭文

祭澁川先生文

乙未正月十九日卒七十九歲

嗚呼哀哉先生之於天兮我國開闢以來其一人歟何其割符離合日月指掌低昂星辰也邪神代伊尹  
 諾尊立春秋以分表<sup>ハカ</sup>中底之天人世神武天皇興曆法乃成十二月之年神聖之靈微乎淵矣爾來千載  
 斯道莫傳真野鷹名乎曆術兮左祖徐昂知其學之疎暗明也妙乎天象兮推步之策則不免闕如夫星  
 宿之在天如城邑之列地有古存而今亡者有古隱而今示者先生皆能識別而字之日月之會同在天  
 有定期淳風虛進徒爲參差郭氏乘除猶未明備先生創行差之術兩曜正合乎天矣日月之盈縮限以  
 冬夏至入氣之忒先生始試南斗之初東井之四古今交食毫釐不貳歲旦奏七曜曆至元亨無廢絕干  
 戈侵尋推步減裂貞和三星之變當時猶有恠而記之降而至于近世莫識其光芒之勢驕先生之明毫  
 分縷別張子信積候郭守敬細行游刃於肯綮<sup>ニ</sup>五緯得其列偉哉貞享朝儀復式其他日月地之近遠陰  
 陽曆之強弱前乎千歲之古曆後乎千歲之改曆言之拆乎絲髮莫不爬梳抉剔著書數千言一一合符  
 契蓋自非星辰降而化人何以如此之明白也哉嗚呼哀哉吾神道之統遠出乎天伊弉諾尊以是傳之  
 天照大神天照大神以是傳之瓊瓊杵尊列聖相承未嘗失隕兒屋太玉猿田彥內外相守如一身中古  
 以來其道分崩下部伊勢各自立家難佛混儒伐異黨同如此凡數百載學者無所折衷近時垂加社出  
 障百川而東之風水風葉之作似續藤森之功然而一時門人亦未有升其堂懿哉先生圯上取履到底  
 根究旁及百氏盡見乎天柱國柱之卓晚登乎神籬磐境之巋蓋先生之於垂加門牆也實青於藍而塞  
 於水者矣嗚呼哀哉重遠事先生二十歲于茲於先生家學庶乎不慊然晚以禁錮廢講問日日馳想東  
 海天<sup>ニ</sup>天曆妙籌神道秘奧北斗仰望胤子之賢惟天難謀胤子先逝先生老病悲淚懸泉未滿七月先生  
 亦沒既無庶孽亦無孫遺傳忽雲散東岱前後煙不知何世有楊子雲嗚呼哀哉重遠錄天名壬癸傳神  
 號鹽土師說萬一以謀不廣奈何天南海北猶未及乞鄧<sup>ニ</sup>符舉一世莫可質訂此恨縣縣微千古嗚呼哀



幸反蘇不知誰救有天之靈不然天祐斷然立志不敢事口躬行實踐宋服無負願先生助予不使此心朽殺身爲仁固予所懋清明如在靈鑑何咎嗚呼格思享予祭祀

〔補遺鳩巢文集〕祭恭靖先生文

維元祿十三年歲次庚辰十二月二十三日賀陽儒臣室直清謹以清酌庶羞之奠致祭于吾師恭靖先

生○水

下之靈嗚呼先生德業之崇文章之懿不獨天資之使然亦由學術之自致故其行之篤也在家

則事親而孝事兄而弟以及室家宗族之類恩義之厚無所不至在國則事君以忠雖身服勞不避待衆以誠雖人欺已不疑見人之善樂而稱之惟恐其不得爲善之利聞人之惡深以爲憂亦終身絕口而不議此雖古之君子猶有難能者而先生於是庶乎不愧焉然其望道猶有不及日夜孜孜必以聖賢自治雖燕居獨處之間亦不敢輟業自恣其恭儉之德踴厲之志至老不衰死而後已其學之博也天下之書無所不讀古今之言無所不記若天文曆數禮樂名器爾雅訓詁之說職方人物之志世之學者得其一二焉猶可以見異而先生乃俱收並蓄以待天下之用而無遺故學士大夫游其門者始而目眩膽落恍若自失終則各自得其所欲以爲有餘莫不厭足克滿欣躍而出今先生沒矣國家有疑奚所諮詢學者無師奚所稱述鄉閭無所尊禮薦紳無所矜式而說客辨士無以爲口實此天下之人所以悵然而失望同然而共悲者豈獨二三門人私哭於其室也哉至其晚節厭博反約欲華歸實稍悔已往之似支離大懼末流之或衍溢將與二三門人益講道學之旨且著書立言之有日不幸其志未就而遭此弗與之災可勝惜哉此二三門人所以爲無窮之悲者亦非天下之人所追卹也嗚呼哀哉吾始學于京師先生感其弱而無知教誨誘掖猶父之慈其後東征北役無年不隨屬先生被召幕府留住東都吾亦舉家北遷始與分離賴公家朝聘之會備員藩邸之臣獨能源々而來奉辭色之怡々意氣懇款有加舊時及吾以不才屏居於家一違几杖三年於茲尙先生之強健冀再會之有期就謂先生遽棄其徒奄忽一逝而莫之追使吾孱々孤立徒抱志業彷徨獨闕而無所依焉嗚呼哀哉嚮聞先生之喪義當日夜奔馳乃囿於官



言奠祭薄儀尙饗焉。

祝畢再拜各々亞獻山本養頌奉着執事終獻志村周彌正用奉着執事闔門執事啓門執事獻茶執事獻菓執事鞠躬再拜辭神各々焚祝志村周介可敦撤饌執事送主小川丈夫。

執事役人三郎右衛門重右衛門新七忠左衛門金七各々禮服つく。

〔洗心洞詩文〕祭陽明先生文

維大日本文政十一歲次戊子十一月二十有九日浪花市民大鹽後素謹以清酌庶羞之奠昭祭于明新建侯陽明王先生之靈嗚呼先生豪傑而聖賢武略而文章征誅寇賊開導衆生當代孔孟後世伊美伏以自從南宋迄元明際闢濂洛學明一快雖然不知歸宿何在於是紫陽末派蔽固難敗知行分裂聖教破壞出二氏下學者不悔訓詁羅葛六經埋殺碩學鴻儒茫猶涉海况夫中人以下碌々學究區々小輩嗚呼先生亦陷其杙曰挺身奮出括人心良再明精一高明之徒返轍悟失巨鐘回夢始瞻中天且如嚮無觸奄瑾怒楚朴濱死託言江溺陷虎穴裡領神人教甘龍場吏魍魎蟲毒與之坐起乃鑽石柳歷千百惴焉以中夜所得起涿酒之傳乃如此哉嗚呼先生廊廟之器台輔之材置諸帝傍明祚豈賴自古陰邪惡陽剛來所以不能一日安位鸞臺建功棚外青史明哉闔廣大盜良善中壽廣水桶岡殺及牛犢三湘所煽莫不野哭其時守令怯皆側目孰敢運籌摧敵如破竹嗚呼先生一起圖南陷路在腹次第施之僅費箭鏃巢穴掃盡蟲鼠口伏脅從所有渠魁就戮爾後告喻民蒙仁育宸濠何人天子之叔上下所畏叛則爲賊人不知義豈亦欲逐嗚呼先生默決獨知不須龜卜擅西域盧終亦縛東人稱其功謂其學非不知功業皆出良知惜哉良知之說絕響幾時考索其由決不在師曰仁蚤天緒山才遲龍谿過高原靜好奇東廓南野具體而微劉死黃刑學脈斷絲道之不行其在斯歟嗚呼惜哉予生異域數百歲後難討要領默々株守不能出頭庶乎猿狖夢寤之間有人相授所授果何聽誠意講學偶講全書讀一二句忽知心非又識學謬專誠研磨鑒心肺炎欲死再三藥效不奏祖母病卒外祖終壽悲哀刺骨病勢益厚何

位紀朝臣。○長谷雄於公有師資之因在當時而繼芳塵三品式部大輔兼大學頭菅原朝臣。○文於神叙祖孫之親克其家以絕等倫今以二君從祀尙饗

〔雲峯文集真傳七十九〕西風淚露下

去年○寬文五年二月二十五日當昔相正忌日此日館中休暇也與汝及僚屬胥議掛菅相畫像而書紀

長谷雄菅文時官位姓名於紙牌以爲配位供棄盛酌酒三獻聊准釋菜作祭文各賦二月梅花詩號

曰菅祭一會。○下略

〔梅花無盡藏〕祭蘇雪堂大安之大化妙興之慶雨戊戌七月廿八日蘇蘇公之忌辰國畫畫就余辨祭儀

八百年之間李耳十三世以上鄒陽梅花并作東坡一海外殘僧亦莫湯老于井都爲坡前自見書滿紀聞是時余講坡詩故化南二

丈有此辨也

祭東坡先生余講學坡集二十五卷始丁酉終壬寅春海主風梅心齋會諸度設新宴祭其靈作詩席上又作祭文會饌船市隱老讀焉畫一時之美談也祭文并市隱者語見天下白末

余作坡抄二十卷發號天下白

春夢玉堂花昨非大鵬背上著鞭歸今朝三拜舉頭看雲舞蓬萊及第衣

〔梅花無盡藏三上〕祭山谷先生余讀谷集全部其功成就之遠以祭山谷先生爲風春軒梅心齋會諸度猶如坡時例

畫殿春風絕代粧御花吹黛滿香無端望帝一聲後夢破宜陽燿髮黃

〔藤樹先生百五十年祭記〕祭祀

奉主志村周介可敦序立各々鞠躬再拜參神各々降神小川丈夫進饌安原藤次郎侑食中村新右

衛門初獻小川四郎次郎奉看執事俯伏讀祝志村周介可敦男志村周次郎世顯此時敦賀遊樂大被二出席二流あり

維時寬政九年丁巳秋八月己酉越丁酉朔二十有五日辛酉門下同志後裔等敢昭告于藤樹先生

之靈恭惟歲時代謝于茲一百有五十年名聲赫薰上聞于天朝聞者右府藤原忠良公含勅書藤樹

書院額曰德本堂賜之而後先生學則今聞彌偉哉然則吾曹荷餘風者不啻謹以清酌庶羞并及此

觴從之以淚魂兮彷彿其歸爾位嗚呼哀哉尙饗

祭先賢

〔本朝續文粹<sup>十二</sup>〕白居易祭文

維保延四年歲次戊子二月丁巳朔十日丙寅兵部大輔正五位下兼行參河守藤原朝臣顯長謹以清酌庶羞之奠敬祭于大唐贈右僕射白樂天之靈惟公天地淳粹嶽瀆精神德輝之照世也臺彩早入學詞華之軼人也風騷更比高誠是一代之詩伯萬葉之文匠也夫合志則殊方之客自親義則異代之交無隔幽玄之境遙雖閉蹤後素之切新以圖像縱遊大原之故鄉縱往靈山之淨土魂而有靈享斯薄奠嗟乎昔在平生辭人才子稱其華蕙今臨祭奠末學頑質慕其文章彼一時也此一時也伏乞鑒此肅贈之佳趣授以風骨之英材尙饗

〔龜峯文集<sup>六十四</sup>〕祭皆神文

維寬文五年乙巳二月戊午朔越二十五日壬午弘文院學士林恕致祭於贈大相國一品普原公影前曰惟公卓爾其才儼然其容繼奕世之箕業爲闡國之文宗諒經侍筵漱芳六藝聚類成編讀史三冬內外之任歷試文武之官登庸貞觀攀桂朱榜顯著昌泰升槐袞職補縫總百司整紳笏象大將帶重彤仰之彌高天上台星威而不猛人中雄龍握四海之政于雲霧萬卷之書于胸名溢中華如白居易再出聲動北蕃與裴大使偶逢獻納其憤屢陳忠言諫損有餘頻辭爵封嗚呼進則排清涼殿之衣退則聞觀音寺之鐘飛德香於東風千里梅威靈祥於北野一夜松天曆崇祀神威現右近之場正曆榮贈勅使尋西府之蹤貝錦之冤忽散忽消幣帛之奠以薦以供七百有年無可比並六十餘州無不敬恭盛哉神也偉哉神也恕乏主器之才修歷史之闕下筆而休揚言如訥省身慚愧考事恍惚似丘垤之望泰山如行潦之向溟渤默數則日既累而歲亦越唯恐其功未成而力早竭然官命之重盛舉之發何不吹燭火之光豈不磨寸刃之蝕爰迎春之仲月正當神之忌辰躬着深衣頭蒙幅巾盛采薦酒摘采采蘋聊設小祭以薦靈神時維一枝梅晚照餘香猶勻滿堂詩成慕其文之純仰望靈魂之返俯拜威德之新中納言從三

安然靈光巍然則文考不天膝閣高臨則子安猶存汝之遺藁永傳後世則不謂不得其壽乎與其長生而耻孰若早沒而寧也汝既沒而寧余猶存而悲何日忘焉汝長於敦夫之齡浚學海之源水猶恨波瀾之不瀾汝未逮李賀之歲登天上之玉樓空仰不可階而及焉嗚呼才不才亦各言其子程太中之後於明道今竊比焉朱文公之哭受之亡嗣之憂相似哀哉痛哉汝之存也一刻不見則胸襟不安今永訣之後既經三句聞於無聲視於無形臥則現於夢寐之裏醒則親於几案之前語默之間追憶不休憧憬往來無不咸抃膊股肱輔頰舌嗚呼我家棟樑一厦難支我書車斃萬卷軸碎噫天喪子奈斯家業何汝之存也世皆以我爲得福汝之沒也忽作無福之身汝有靈否何不鑒之哉果其有靈幸護二弟莫使家道墜於地自汝之沒筆硯久拋至哀無文泣涕漣如悵然以告尙饗

〔補遺鳩巢文集〕

祭大地氏妹文

維寶永八年歲次辛卯三月三日大地氏妹以疾卒于家越八日寡兄室直清適有東都之召不得以服自逸將發以清酌之奠告于吾妹之靈曰嗚呼吾觀化源權輿陰陽乾坤女兩儀以章粵自中葉世道交喪陽德日衰柔道自昌賢明之譏卓立之量求之丈夫鮮克相當矧夫婦人生長閨房君子之道又焉可望哀哀吾妹生有異質孝悌之行自其在室好學慕古禮義自律紛華之習不接心術釋老之說平生所黜淫聲邪色惡之如疾寒素澹泊甘之如蜜既適夫家和調琴瑟及初事姑秉心慄慄不敢暇佚下撫婢僕正訓子姪好施賑窮人憂是恤始嫁至死始終如一凡此數者君子所宜誰謂吾妹婦人能之陽明之氣鍾於閭帷古今幾數曠世一期相值之難宜其數奇忽焉云逝亦何足疑嗚呼哀哉自始得疾寒暑三除漸染歲月精竭神虛病勢已殆幽深自居氣息將絕志意安徐兒女在傍言笑自如洞視死生有如居諸使人欽尙嗟嘆有餘嗚呼哀哉既曰吾妹知命不二吾復何心多悲爲累但所不忍天倫情至慨念平昔有恍夢寐謫乎其容猶目斯視顧兄不德處世有愧吾妹惓惓相勉以誼同心一體誰知此意幸茲合處何樂可比方且往以償吾志何圖遽爾中道相棄居如有忘行如有闕哀戀之情曷能自己致誠一



仁也。夏之日秋之夜，念之廢亡也。無時無處，淚不沾巾也。汝幼在兒輩中，異群倫也。庶乎佛之篤孝之純也。忽欲踏酒上之遺塵也。而辨醇疵於孟荀也。惟其勤學之諄諄也。所期逢掖之無若新也。今茲汝歲殆及程子之初讀魯論也。加旃追風乎闕閭也。明窓淨几。五經紛綸也。忠信篤敬。書諸紳也。常思須爲席上之珍也。豈意不幸而早殞厥身也。而今而後。使誰之子。莖夷此心之芽。此道之機也。獨悲我家之少一人也。嗟嗟死生之理。傳火於薪也。是爲物之精。無方之神也。縱不得金環于羊家隣也。只願如願非熊之再有生辰也。惟一氣之幹旋洪鈞也。焉知其死而不亡者爲真也。中心惻怛。號泣于蒼昊也。予以薦凋毛與白蘋也。魂而有靈。當識父子有親也。汝母之哀與我心均也。嗚呼悲哉。尙享。

【露峯文集

卷六十六

祭姪女菊松娘文

維寬文四年甲辰正月二十七日。當中殤姪女菊松娘周月忌。伯父向陽林子。滴淚焚香。祭其靈曰。嗚呼昔汝之生也。愛於顯祖。授之以其幼名。不幸喪母。依祖妣而長成。如何不淑。王父王母易簣。乃父亦入佳城。一妹一弟。共爲孤悽。其間之深。四書小學在房棚。其園之幽。形管影牋對陶泓。吟哦弄花。唔咿答露。乃喜女中之秀。才華漸萌。有待良人之聘。并歲可迎。豈想秘藥之劑。不能治二豎。雖假呪禁之術。不能禳三彭。窈窕之姿。與積雪共消沈。病之身。隨殘臘長征。嗚呼人生之變。一夢堪驚。駒隙之急。周月已盈。哀哉空枕之傍。猶有衣裳之掛桁。痛哉早春之庭。唯見草木之向榮。汝之魂兮在天。爲弟妹保前程。汝之魂兮歸地。使其家成安貞。若其有靈。享我丹誠。

【露峯文集

卷六十六

祭亡嗣子文

嗚呼亡嗣子愬。生於寬永癸未八月十一日。終於寬文丙午九月朔。齡僅二十四。哀哉痛哉。十月朔。愬遺老父弘文學士。懇陳葵盛酒菓等庶品。祭其墓曰。嗚呼汝之幼也。教於顯祖。愛於祖妣。育於我。抱於母。日待其成長。顯祖手書祿壽名三字。以祝汝也。汝之既長。學業漸進。文章彰聞。余喜得其名。汝出入營門。而預官事。賜屋宅受年俸。則余喜得其祿。何得其二。而不得其一。而早世。哀哉痛哉。汝齡倖于文考。少於子

之并爲田五反スヘム御入ニフキ賤女後重矩子孫、如今可爲祭事、又爲破損如此、祭事九月十有一日、以強飯醇酒可祭之、必哉誣枉而勿汚神、冀勿恃僧尼、可使古楨子孫、今日謹以強飯醇酒、冀靈前以伸野情、又古臣之者、欲報勳功、而予不得志、忠烈之者、左記、並以敢告于鬼神、

### 古楨與三右衛門重矩

此者父者八左衛門、有忠有義、其長理左衛門、及變重君臣之義、不仕二君、其次子次郎八重固、主君之會變、又哀死殉死、實勇壯哉、舉世有爲殉死者、自本同日而不可語、可使鬼泣、代々忠臣於此、使位神主之右、古楨與三右衛門重矩、續父兄之志、事我如祖父、始見之我、慮忠臣之爲家、而語祖廟事、曰、吾自素無百錢之儲、先人愛所之有、重器以之、造祖廟、曰、諸始終不懈、一人司之、成巧、予雖思祖先、不倚重矩者、如何成就之、古今多爲官祿仕者、貧窮之時、愛主君者、吾於古楨之家、見之忠哉、○中

### 野村與三右衛門

父野村甚兵衛重正子也、其重正人品異他、先人所撰舉之士也、其氣象剛毅正直、守雪霜之操者、於重正見之矣、終於配所、病死痛哉、與三右衛門續父之志、結榮菴之時、如志、又到造祖廟之時、呈志、

婉雖爲女子之身、所事鬼神、豈有隔、尙饗、

### 〔栗山文集四〕祭劔岳先生文

維壬辰○安永元年十二月辛酉朔、越十七日丁丑、姪阿波國儒學邦彦、敢具清酌時羞之奠、謹祭亡伯父劔

岳先生之靈、嗚呼、祖先之積善、宜延慶福、伯父之盛德、宜享康壽榮達、而遽至乎斯乎、嗚呼、哀哉、病不待藥、葬不執紼、背恩違義、行負神明、聞赴一慟、永訣終天、音容恍惚、若臨其前、哀迷摧裂、錯辭無次、尊靈不亡、鑒茲衷誠、嗚呼、哀哉、尙饗、

祭子形

### 〔羅山文集四十〕祭叔勝文

維寬永六年歲舍己巳、冬十月壬子朔、道春祭叔勝之靈、曰、嗟嗟我子叔勝、逝既十旬也、何忘天性之慈、

行人嗚呼易簣之高齡龍門遺歌登耳若其引壽于今日嶺山老年差肩憶昔鯉對趨庭之時猶如昨日柴也泣血之後又過三年悲哉去春哭同胞獨痛大業難繼幸然舊臘進品級深感積善有餘物換星移逢忌景而追遠花開烏嘯懷往事以驚心維斯別莊庭柯手栽遺愛由來林家枝葉種類分根胎厥孫謀二男一姪從我不忘師道數輩諸生同行心喪既除追尋子實廬於家哀詞短些欲做宋玉招波魂謬衣素服拜墳前雨灑淚滴炷香清酒奠碑畔雲升露浮尚饗主寅寬文二年正月二十三日

【慈峯文集

卷六十六

祭東舟先生文

嗚呼叔父官遊之壯馳東舟於晴嵐繁務之暇扁輅收于圓庵少則勤學之思有覃仕而隴訴之斷同參濂洛之源可探山柿之風亦談在世之不老半百僅加四歸泉之既久三拾而及三蓋胎孫謀早喪嗣男禮祭傍親舊章其存姪安神主追憶不堪煙烟繞而升清酒灑以甘尚饗

【野中婉女祭文】謹而奉告配所四十年伯兄仲兄叔兄沒季弟每語吾曰先人所成之神主吾命終無可倚如何若有野中氏族可倚其時訴安東氏吾對勿言汝有幸而得赦子孫可有續祭事若天亡者無所遁不知道不知義者豈倚之癸未六月二十有九日季弟死其時老母曰仰天臥地流淚生無益可共死吾對共死安然季弟一世不幸生不充五月遷配所平生樊籠身今沒共死有誰隱尸清死跡乎又神主之事如何暫期時而聽其命天與吾生者必可得赦然移他所而期其時造祖廟矣九月十有四日夜得赦其時既爲詔古臣行井口氏家則得志井口氏通書悅老人三十里不遠來既去宿毛時貧乏家欲其去者女子三人及貧窮期不忘恩誠可言有義矣正運院雖處變溫而順朴直而寬到卑女如自生子家內者見正運院如父母慕之焉乳母壯年之時伯兄欲嫁之乳母流淚不從四十年不改女子身居穢不劣丈夫者也我於朝倉聞扶助米事吾流淚曰豈受或人恕曰有老母有乳母必莫辭此時紛紜不得辭焉時寶永五年戊子九月二十有二日婉志之祖廟成就使神主安置向來古模重矩者土州吾我美郡之內住山田村重矩有家地東北之間四方三間以價永代買求之重矩自家當長祖廟一間四面造營

事のさとしにやといふかりながら起いで侍りしに、都の文とてさし出たるをどみにひらきたるに、いにし十八日の巳の刻に亮御ありて、廿一日酉の刻に、相國寺のうち大通院へ御葬送、あらかじめ圓實照院とつかせたまふとかきたるを、よみをはらで、むねうちさわざ、手あしのおき所にまよひ中をなみだも、いづちにけんぞおほえ侍し、あ、かなしいかな尊容ををがみたてまつらぬ事いくばく年ぞや、あさごに手あらひ口すゝぎて、大王萬壽ごいのりしも、今より後は、よしなしかひなし、あ、かなしきかな、爲章が父兄をも、長松軒の御後ごあはれませたまひて、ほど／＼に官位をも申なさせ給ふあまり爲章いときびはなるより、めしまつはさせて、人よりことに、てならひ學問をもすゝめさせたまひ、花のあしたの詩酒、月のゆふべの糸竹のむしろにも、かならずおまへさらず侍しも、おもへば一むかしの夢となりぬ、こたみ御不豫のうちの御藥餌をもなめこゝろみ、かぎりの御おくりに、もしたがり奉らましかば、せめての心はるけも侍らんものを、さほくあづまのおくに、て、かく聞なし奉らんとは、露おもひかけきや、あ、いかゞせましや、いかゞせましや、たゞ大空をあふぎて長吁するのみ、ごとははかぎりありて、心はつくしがたし、あ、かなしきかな、今やつゝし、みうやゝしくすゝめたてまつるくさゝ／＼のそなへ物を、こひねがはくはうけさせたまへ。

養父母近親

〔爲峯文集七十〕先考大祥忌記事

己亥○馬治二年正月二十三日正當先考○林道春大祥忌辰也、祠堂奠供如例、祝文倣家禮之式、靖也來相信

也常也陪仕、長好及清隆預事、禮畢詣別墅拜墳、墓今日門生等詣墳、墓歸來拜祠堂、喫晚齋而去。○下略

〔爲峯文集六十六〕先考六回忌辰祭文

羅浮夢長、墓梅香兮魂不返、江東雲暮、春樹榮兮文猶存、軸軸金玉遺聲、鶯吟千里、簇簇錦繡餘色、霞彩萬重、光神六十州、昭回草木、間出五百歲、罕見鳳麟、日域儒宗、合併彼四道博士、東海耆老、推稱於三韓



度漸舉安亦復舊職恩遇有加本月十五日大將軍以安善文學特命執贊謁見大城我二公咸喜以安列番頭之班更增祿秩以答幕府盛意嗚呼君以廉耻名節磨勵子弟未嘗及禍福榮辱之談安之純孝精忠君既知之則其幸不幸固似不足以告者抑正學之興廢闡斯文之盛衰君子之窮通係國家之汗隆則今日之舉君而有知必爲斯文慶焉又必爲國家賀焉乃敢恭薦薄蘋以伸虔告尙饗

藤原爲章

〔千年山集〕式部卿親王を祭る文

藤原爲章

これ元祿七かへり六月十日藤原の爲章つゝしん下清酌庶羞の奠をそなへて九拜頓首して、あへてあきらかに故の二品式部卿親王伏見宮貞の尊靈を祭れてまつる、うや／＼しくおもひ見るに親王は觀應の帝光より十世の御むまごにして乾德院親王の御子なりしが乾德院ひざしくなやみわづらはせたまへば御祖父後妙莊嚴院貞清の御嗣のよしにて、くれたけのふし見殿を御さうぞくまし／＼ける、たゞし御代々々の例をおひて、後水尾のみかどの御猶子たり、御むまれつきささくあきらかにして、學問をこのませたまひしかば、搢紳のともがらをはじめ、都のうちにほまれある儒生をめして、講釋義論おこたらず、四庫のふみ、をさ／＼のこるまじう、ものせさせたまふ、筆法は懷素がもうこしのあとをまねさせ、音樂には堂上地下に名あるいへいへまゐられたり、有職歌學神書なにくれど、さぶらふ人々、これにいさまなう、時ををしみ日をたらずぞおぼえ侍し、しかあるに爲章いにしころより水戸侯の藩邸にまゐりて、宮のうちを白雲のあなたにのぞみて、をりふしごとの御安否をき、たてまつるのみに、心をなぐさめ過し侍しに、ごとの春より、なにさなくおもものまゐらず、御やせ／＼のよし傳へうけたまはりて、いかにものばりまうで、ご催しながら、さしておどろ／＼しくはおはせぬよしの心だのみにうちそへて、水戸侯のえらばせたまふ、禮儀類典の課にいさまなく過し侍るに、五月廿五日のあかつき、爲章まだめさめ侍らざりし窓の枕に、狐の一こゑ、いとたかやかにおどろかし侍りしかば、なに

酒藥用伸虔告謹告

告賜金祝文

維明曆四年歲次戊戌四月戊辰朔越十二日己卯孝子春齋林恕敢昭告於顯考文敏先生羅山林君恭惟顯考弱冠以來道學講論之暇聚著本朝舊記數百千卷以充棟宇去歲悉羅翻攷痛哉哀哉方今忝蒙鈞命許借官本且賜黃金五百兩以爲繕寫之料則三四年間可以補其大半歎朴之甚何以加之不肖孤素無尺寸之勞功自非顯考之餘光何以有如此之恩賚哉定知可感動英靈也欽以棄盛清酌之奠謹告尙鑒

〔幽谷遺稿下〕告文恭朱先生文代立原先生作

維享和元年歲次辛酉六月口口朔越五日遺史臣立原敢昭告于文恭朱先生曩者我大將軍開吾先君義公嘗有志於建學宮謗訪先生以明國制度先生暗記默識細大不遺口講指畫以誨梓人摸倣本式約而小之殿堂廟廡莫不悉具其所刻本樣藏在水城府庫有旨求觀乃敢呈覽適會其命有司更新昌平坂孔廟專據先生遺式造大成殿亡幾土木竣功輪煥可觀於是大將軍枉駕徬徨喜制度之始備嘆義公之用心執政傳旨用相褒諭是則斯文之大慶非獨弊邑之私幸伏惟先生學德之隆名節之全實爲吾先君師其所以使先君日進於高明光大之域者啓沃薰陶蓋亦有道至如博物巧思特其緒餘耳雖然先生既去西土而踏東海固不求聞達於當世而與學設教國家大典深有望於本邦則今日之事亦先生之所樂聞爰陳羞酌敢伸虔告尙鑒

〔東湖遺稿三〕告幽谷藤田君文

維安政二年八月口口朔越二十一日口口不肖彪敢昭告於先考幽谷藤田君靈伏惟君夙慨斯文之湮晦發憤講學欲闡明神聖之大道不幸天不假年中道捐館距今實三十年親炙其教尤深且舊者獨有會澤安存焉我太公嘗懼安爲教職之長亡幾時屬多難安因阮流離僅脫一死今公繼大公之志百

君顯妣順淑孺人荒川氏先是假奉置神主於寢奧方今祠堂新成謹奉移於堂之室中仰冀神其安居於此嗚呼歲序流易時維仲春追感歲時不勝永慕謹以祭饌清酌庶品祇薦歲事亡兄敬吉實是我家之嫡不幸早世長殤無後痛恨有餘故今附食尚饗

同日告辭代祝文

維明曆四年歲次戊戌二月戊辰朔越二十一日戊子春齋林恕敢昭告于顯伯祖理齋林君顯伯祖母小篠氏伏惟顯考文敏先生自幼被養於顯伯祖父母以至成長而繼其家以親則爲伯姪以恩則爲父子今爲考妣新營祠堂故奉安顯伯祖父母之神主於此然古禮有封爵顯名者爲祖顯考德爵祿名大興其家故奉安考妣於室中然庇蔭之所由何爲忽諸是以擬祧主以隔板於室之左房奉安之時維仲春謹伸奠獻尚饗

祠堂冬至告詞

維萬治元年歲次戊戌十一月甲子越甲午朔二十九日壬戌節當冬至孝子春齋林恕敢昭告于顯考文敏先生羅山林君顯妣順淑孺人荒川氏曰方今恒式祭奠既畢就告春信頃日罹痘疹遂日平易漸既還元伏以顯考顯妣愛彼教彼慈育之恩訓誨之諭其高如山其深如海想夫今般勞英靈乎早遇此吉慶神其安心恭伸奠獻謹告

【爲峯文集六十五】告闕官本祝文

今註三月十一日有合會闕官庫順本及禮本朝舊記之料是由去歲家藏之書多編大災也於是同月晦日與官庫總司同入庫擇官本之內有兩通者余所未藏之六十部拜獻以歸可謂幸甚也家禮曰有事則告故翌日設奠供以告之

維明曆四年歲次戊戌四月戊辰朔孝子春齋林恕敢昭告顯考文敏先生羅山林君曰不肖孤以昨三月晦蒙恩辱賜官本六十部先既奉承先訓獲舊祿位今亦如此可以補去年所罹災也餘慶所及不勝感慕且顯考往年與梓人所約新板杜詩集註初成昨日呈來彌增追感俯惟尊體雖沒英靈如在謹以

一忌日に父母は右の如くに薦むべし祖父母以上は、品數を減じてすゝむべし、節句などの如くに

〔喪祭式〕喪祭大意

祭ハ敬ヲ本トス、孝子ノ心、死ニ事ルコト生ニ事ルガ如シ、生時ニハ、日夜朝暮ニ孝養ヲ盡セシニ、没後ニ至テハ、父母ヲ享スルモ、一年ノ中、僅ニ四度ノ祭ノミナレバ、幾重ニモ大切ニシテ、父母其所ニ在スガ如クニ思ヒ、聊疎略ナキヤウニスルハ敬ナリ、敬スレバ親ヲ思フノ心誠ニナル故、神モ其誠ニ感ジテ祭ヲ享クト云ヘリ、祭ハ器物ヲ陳テ、拜禮ヲスルノミニ非ズ、誠敬ナゲレバ、祭ラザルニ同ジ、故ニ祭ノ時ハ、存生ノ父母ニ給仕ラシテ、膝下ニ歎ヲ盡スガ如クニ思ヒ、其誠敬ヲ盡シテ、鬼神ト交ルベキナリ。

祭ハ孝心ノ默止シ難キ人情ヨリ出ルナリ、孝子ハ身ヲ終ルマデ、孝養ヲ盡サント思フナレバ、其親死シタリトモ、其孝心ノ已ムベキニ非ズ、因テ其魂氣ヲ留メ置テ、毎日ニモ祭ント欲スレドモ、數々スレバ潰ル、故、時日ヲ以テ祭ルナリ、四時ノ移リ變ル毎ニ、時物ニ感ズルハ人情ナレバ、父母ノ平生ヲ追思シテ、哀慕ノ情、中心ヨリ發ス、是ニ因テ春夏秋冬ニ祭テ、孝養ノ心ヲ伸ブ、是ヲ時祭ト云ナリ。

〔日本歳時記<sup>三</sup>〕祭日、一年に五日あり、四時と忌日なり、四時の祭は仲月を用ゆべし、春分夏至秋分冬至なり、春秋二時まつるも可なり、忌日は死日なり、一年に只一日なり、和俗これを群月といふ、毎月の月忌は古禮にあらず、日本にて中頃よりおこれり、然れども厚きに從て素食するは可なり、春秋の祭と忌日の祭にはあらかじめ齋戒し、平生齋を設るがごとく、早朝饌具を備ふべし、日本に居てもろこしの簞簋籩豆の類の器を用ゆべからず、

〔鷲峯文集<sup>六十五</sup>〕春分祠堂祝文

維明曆四年歲次戊戌二月戊辰朔越二十一日戊子孝子春齋林恕敢昭告于顯考文敏先生羅山林



ヲ盃ニウケテ、小茅沙ノ上ニ少シシタミテ、神主ノ前ニソナフ、是ヲ初獻ト云、此時祝文ヲ讀シム、讀ヲハリテ主人拜ス、飯ヲ替汁ヲ替テ、初獻ノ酒ヲ器物ニシタミ、亦初獻ノ如ク酒ヲ盃ニ受テ、少シ小茅沙ニシタミ、神主ノ前ニソナフ、是ヲ亞獻ト云、此次ニ吸物ニテモソナヘ、又前ノ如ク亞獻ノ酒ヲ別ノ器物ニシタミ、亦初獻亞獻ノ如ク酒ヲ受テ供ヲ終獻ト云、三獻ヲハリテ箸ヲトリ、箸ノ旨ヲ神主前ノ右ノ方ニ傾ケテ飯ノ上ニ立ル、主人神主前ヲ立退ク、少時シテ後亦出テ湯ヲ進テ、膳ヲ撤テ茶ヲソナヘ、菓子ヲ進メテ拜シテ、飲福受酢トテ、神主ヘ備ヘタル酒ト飯ト并ニ何ニテモ肴ヲイタハキ食フ、茶菓子アゲ、神主ヲ楨ニヲサメ、祭文ヲヤク、祭文ニ曰、

維年號幾年歲次干支幾月干支朔越幾日干支孝子名某、敢昭告于顯妣某氏、某字君、歲序流易、時維仲秋、夏、追感歲時、不勝永慕、謹以清酌庶羞、祇薦歲事、尙饗、

高祖曾祖ヲ祭ル祝文ナラバ、顯高祖顯祖ト書替、孝玄孫孝曾孫孝孫ト書改ムベシ、其外ノ文ハ同ジ、墓祭ノ祭文等モ是ニナラフベシ、

# 〔喪祭式附錄〕鄉中喪祭大概

一二月八月、父母の位牌へ料理の饌を薦むべし、

但春分秋分の日をよしとす、此外の日にてても、時宜次第なるべし、

備物は一饌五品俗に膳切といふ、飯汁香の物と、坪平鱸煮魚等の内にて一品、都合五品なり、引落しなし、

但五品より少きは苦しからず

一看一皿に盛りたるのみ也

但肴を別にす、めざるも苦しからず

酒は一獻なるべし、菓子茶を薦る事、心にまかすべし、祖父以上を總て束ねにして一饌を薦むることも、又は父母と同一に束ねにするとも、宜きに從ふべし、

タル酒ヲモトノ器ニモドシ、總々ナガシイタバクベシ、主人有母則母ヨリ始ムベシ、總ジテ祭ノ撤膳ハ、其祭ニアヅカリタル人ニ分チアタフベシ、主人ハ食フベカラズ、喪ノ中ノ膳ハ、主人同前ニ、重服ノ子弟モイタバクベカラズ、但シ喪ノ中、及忌日ノ外ハ、主人以下蔬食ト云コトナシ、吉祭ナレバ相應ニ祝ヒテ、酒肉共ニ食スベシ、祠堂ノ撤膳ヲバ、スグニ主人不可食、凡祭ハ皆身相應ナルベキ程ニシテヨシ、只誠敬バカリ、上下貧富ニ拘リナケレバ、各自盡可也、誠アラザレバ七五三ヲ備テモ益ナシ、誠ガアレバ一酒一茶、土器ニテス、メ、肴ナクテモ、鬼神ノ享ク理リ著シ、前後倣之、

### 秋祭

九月ニ一日、日ヲ擇ビ、是ハ福バカリ、父母共ニ神主ナレバ、父母共ニ座敷ヘ請ズ、前日ヨリ亦齋戒等、イツモノ如クシテ祠堂ニイタリ、考妣之主ノ前ニ跪キ、香ヲ焚告曰、明日吉日ニテ御座候間、龜膳ヲ上ゲ申度奉、存候先告ゲ申候ト、則座敷ノ正面ニ神主ノ机ヲ設、香案ヲナホシ、其明夙ニ興、吉服シテ祠堂ニ至リ、焚香晨謁、スグニ進テ考妣ノ前ニ至リ、跪キ告曰、只今座敷ヘ請ジ申候、則主人主婦兩主ヲ、懐ト共ニ奉ジテ、祠堂ヲ出シテ座敷ノ神机ヘ安置申ス、乘坐ス、

### 啓積

以下皆如  
春禮儀

### 送主

祭畢テ、又主人主婦兩主ヲ、衆隨ヒ祠堂  
ヘ送り入レ申、至香案前拜シテ過ク

### 禮畢

〔喪禮儀略 获生祖傳〕

四ノ祭ハ、春分、

二月

夏至、

五月

秋分、

八月

冬至、

十一月

一年ニ此度ノ祭ヲスベシ、

主人ハ祭ノ前從一月別火ヲシ、服忌ノ人ライム、祭ル時吉服ニテ、常ノ肩衣袴ヲ着スベシ、其朝座敷ヲカマヘテ、神主ヲ、懐ヨリ出シ、神主ノ前ニ大茅沙小茅沙ヲオキ、焼香シ拜シテ、降神トテ、主人盃ニ酒ヲ受テ、咸ク大茅沙ノ上ニシタミ、其後肉味ノ膳ヲ進メ、但五辛ノ初獻ノ酒ヲ進ム、主人酒

筭羹

燒物 人申テ曰、羹ヲ宜、之、膳部皆ス、エ、ヲ、ハ、主

初獻 主人、有、之、

肴 同

吸物 主人、下、

二獻 主、初、獻、之、酒、

肴 同

三獻 主、二、獻、之、酒、

大羹 三、獻、之、酒、ヲ、以、一、獻、ニ、移、シ、主、人、

肴 長、物、

衆復坐拜

出門 闔門 食、ノ、頃、ホ、有、ヘ、シ、門、外、若、地、ニ、狹、ク、ハ、不、可、出、結、園、ニ、中、門、ニ、復、座、食、頃、主、人、以、下、皆、入、ル、

開門

進飯 湯 主人、申、テ、曰、湯、シ、其、饌、ニ、飯、湯、ヲ、則、飯、饌、ノ、飯、

衆復座半饔 主人、詣、主、前、申、テ、曰、饌、

撤膳 膳、ヲ、ア、ゲ、初、テ、餘、ヲ、持、テ、弟、ヲ、レ、取、リ、主、人、主、婦、木、

菓子 主人、以、下、

辭神 主人、以、下、衆、

蓋積 主人、主、

禮畢 祭畢、ヲ、膳、ヲ、撤、ゲ、ル、上、ヘ、其、家、ノ、庭、敷、ニ、テ、主、人、ヨ、リ、始、テ、神、酒、ヲ、藏、ク、ベ、シ、則、神、前、ヘ、ア、ゲ、

顯始祖考

顯始祖妣

顯祖考

顯祖妣

顯考

顯妣歲序流易時維仲春、夏、秋、冬追感歲時不勝永慕謹以養酌祇薦歲事尙

饗

二世ヲ祭ル者ハ始祖考妣ヲ除キ一世ヲ祭ルモノハ祖考妣ヲモ除キ孝子ト稱ス、

〔通祭小記淺見安正〕春饗

春二月或三月ニ一日口ヲ擇ビ祠室ヲ前日ニ掃潔シ主人齋戒シ祠室ニ至リ焚香曰明日吉日ニ

御座候間祇テ危膳ヲ饗シ申上度奉存候其明夙興主人以下吉服至祠室乘坐スルコト如例、

啓楨

神主分皆啓ク主人主婦長子餘祭ヨリモ啓置、

焚香主人

衆伏拜良久之

熨斗昆布主人、畫ニ載、香案ノ上ニ持出テオキ、言テ曰、御祝儀ニ上、

膳膳部出ルト、主人其儘祠堂、

本膳膳至告曰膳部當ク御座候、

二膳膳主兄弟等、カハルニスエテ、餘ハ衆婦女子等、カハ

香物



弔ハズ、

陳器 前日ニ至テ祭器ヲ出シ、滌ギ清メ置ク、

具饌 酒飯肴菓等ノ用意ヲナス

啓壇出主 祭ノ日、三世二世一世、各其祭ル所ノ神主神位ヲ出シ、蓋ヲ去リ一拜シテ、今日祭ヲ致

スコトヲ告グ、

降神 參神

進饌

初獻

亞獻

終獻

侑食 主婦以下  
上香拜

闔戸 シ、 啓戸 湯ヲ進メ饌ヲ撤シ、菓子茶ヲ進ム、以上何レモ陳器ノ式ニ同ジ、但シ分獻スベキ牌  
位アケバ初獻ノ後ニ子弟ヲ分獻セシムベ

受酢 主人香案ノ前ニ跪キ、執事盃ト神ヘ供シタル酒飯トヲ進ム、主人受テ飯ヲ嘗メ酒ヲ飲ム、

終テ執事茶菓子ヲ撤シ、禮成ヲ告グ、

辭神 主人上香一拜、終テ執事祝文ヲ焚キ、茅砂ヲ引、

納主 主人神主ヲ納メ、一拜シテ戸ヲ閉ヅ、略中

時祭

維

〇〇〇年歲次 千支 〇〇月 千支 〇〇朔越 〇日 千支 〇〇孝孫 子或 〇〇氏 〇〇名 敢昭告于

斷ナ 分家ノ祖トナリタル者ヨリ以下ハ、各分家ノ方ニテ祭ルベシ、祠堂ノ制、堂中ニ三室ヲ設ケ、  
中ノ一室ヲ少シ廣クス中ノ室ニ始祖ノ主ヲ藏メ、其左右ニ高祖曾祖考妣四位ヲ昭穆ヲ以テ列シ、東室ヲ昭  
トシ、西室ヲ穆トス、其家ノ元祖、始テ仕テ士大夫トナルモノヲ始祖トシ、其千ヲ昭トシ、孫父昭ニ  
トシ、穆トス、是ヨリ以下一代ハ昭、一代ハ穆ト、代々替此例ニテ推スベシ父昭ニ  
當レバ父東祖西ナリ、父穆ナレバ父西祖東ナリ、三室トモニ千石以上ハ、布ノ帳アリ、簾ナシ、戸ハ  
彫物等用ユベカラズ、兩楹ナシ、神主ノ楨櫛アリ、櫛ノ屏ニ格ニテ用ヒズ、兩扉ニ孔ヲ穿ツ、附位ハ  
ズ、カヲ覆衣、箱ナシ、祠堂ノ兩旁ニ遺物祭器ヲ藏ル所アルベシ千石以下ハ、帳、櫛ナシ、若シ祠堂ヲ  
略制ニスル者ハ、三室ヲ設ケズ、棚ヲ設ケテ室ニ代フベシ、帳、唐戸ヲ用ヒズ、祠堂ナキモノハ、正寢  
ニ書院等表棚ヲ設ケ、一世一世ノ間ヲバ、藩板ニ作リ、連隔スベシ祭器遺物ハ棚ノ下ニ藏ムベシ、其制作ハ祿ノ厚  
薄家ノ有無ニ從フベシ、小祿賣家ナド堂狭キ、棚上ニテ祭ルコト能ハザル者ハ、神位ヲ藏ルハ  
位ヲ出シテ、机上ナドニ設スルモ、又箱ニ納メ置、祭ノ時其儘机上ニ載スルモ、又箱ニ從フベシ

祭ノ禮、時祭ヲ重シトス、春夏秋冬ノ仲月ヲ用ユベシ、其日ハ春分夏至  
秋分冬至ニテモ、又別ニ日ヲ擇コトモ可ナリ三世ヲ祭ル者ハ、始祖ト祖  
廟ノ神、廟ノ神主ヲ開キ、降神、參神、進饌、三獻、脩食、闔門、啓門、受祚、辭神、納主等何レモ式ノ如シ、高曾  
ハ進饌ノ時ニ一獻一拜シ、茶菓ヲ進ル時一拜シテ、脩食等ナシ、其外ノ附位ハ、主人ニ喪服アル子  
弟ヲシテ、分獻セシムベシ、酒ハカニ獻ズ二世ヲ祭ル者ハ、祖廟ヲバ式ノ如クニ祭リ、高曾ハ禮ヲ略シ、附  
位ニ分獻スルコト前ノ如シ、始祖ノ室ハ開カズ、一世ヲ祭ル者ハ、廟ハ式ノ如クシ、祖ハ前ニ准ジ  
テ略シ、高曾ハ祖ヨリモ略ス、其ノ他ハ右ニ同ジ、何レモ其品味器皿ハ、祿ノ厚薄、家ノ有無ニ從テ  
斟酌スベシ、

### 喪祭儀節

#### 時祭

齋戒 三日以前ヨリ、潔齋シ、男ハ外ニ居、女ハ内ニ居テ、酒ヲ飲マズ、葷ヲ食ハズ、病ヲ問ハズ、喪ヲ

## 儒祭

儒祭トハ、儒禮ヲ以テ其祖先等ヲ祭ルヲ云フ、而シテ其式ハ朱熹ノ家禮ニ據リ、少シク我邦ノ風習ヲ折衷シテ制定シタルモノナリ、凡ソ此式ヲ用キルモノハ、多クハ儒者ノ輩ニシテ、水戸會津等ノ諸侯モ亦此式ニ遵ヘリ、又年期ヲ定メテ祭ルコトハ、後世佛者ノ創意ニ係リ、固ヨリ儒禮ニ非ザルヲ以テ之ヲ排斥シタルモノアリ、或ハ俗習ニ從フモ亦可ナリトシテ、年忌ヲ修スルモノモアリテ、一樣ナラズ、祭日ハ春夏秋冬ノ仲月ヲ用キ、或ハ家事ノ繁閑ニ依リテ、春分秋分ノ二日ニノミ行フコトアリ、又忌日祭アリ、其儀大略前ニ同ジ、

## 祭式

## 〔喪祭式〕祭禮略節

祭祀ノ儀節、其人ニ隨テ斟酌スベキコト、喪禮ニ同ジ、

家祭ハ、布衣以上ハ、始祖ト祖禰ト三世ヲ祭リ、始テ仕テ士トナリ、大夫父ヲ云ナリ、高祖曾祖ハ、始祖ノ室ニ藏メ置キ、禮ヲ略シテ祭リ、器風ノ數ヲ裁ウ、一器ニ數品ヲ盛ナリ、又忌日ノ祭モ是ニ准ジテ、祖禰ヨリ一等輕クスベシ、物頭ハ、祖ト祖禰ト二世ヲ祭リ、始祖ヲ祭ラズ、始テ祖ノ室アル者モ、祭ルハ、高曾二祖ハ、右ニ准ジテ略ス、平士ハ、禰一世ヲ祭リ、祖ハ禮ヲ略シ、高曾ハ祖ヨリモ一等略スベシ、何レモ五世以上ハ、神主ヲ箱ニ納メ置キ、忌日ノミ輕キ品ヲ進ムルコト、酒ノ類ハ、主人ノ心ニ任スベシ、其外ノ旁親ト、兄弟姉妹伯叔父禰トハ、古禮ニハ、十九ヨリ十六マ、アチ長禰トシ、十五ヲ下、臨トス、今世ハ男子未ダ元服セザルノ類トス、女子未ダ嫁セザル者、此昭穆ノ序ヲ以テ、其祖ノ室ニ三禰ニ當ルベシ、八歳以下ヲ無服ノ屬トス、今ノ七歳未満是ニ當ル、昭穆ノ序ヲ以テ、其祖ノ室ニ附ス、室中族クシテ、附シ離キモノハ、箱親屬遠クシテ、主人ニ喪服ナキモノハ、附スルニ及バズ、箱納メ置キ、忌日ニ拜スベシ、

先祖ノ祭ヲスルハ、其本家ニ限り、分家ノ者ハ、其祭日ニ本家ニ往テ祭ヲ助クベシ、本家職ヲ分家貴シト雖モ同家

堂ノ後ニ夥ク位牌有、故ヲ尋ルニ、答位牌ヲ寺ニ上ゲ神ニ祭ル也ト、又墓所ニモ捨ル、不殘寺ヘ上ルナラバ、置所モ有マジト話也、

村々ニ、オンザキト云神アリ、屋上ニタナヲ結、注連幣ヲカザリ祭ル、十二月晦日、鏡餅洗米神酒ヲ供シ、大夫來テ幣ヲ切替ル也、オンザキノ大祭アリ、人一代ニ一度也、二度トハ得祭ラズ、其祭方ハ、初尾米錢ヲ數十年増長サセ、能程ニナリタル時、神酒ヲ造リ、大夫數人招テ、クラヘト云コトヲスル、此祭ニハ、遠クテモ同姓ハ無殘、外姓近類、并ニ村長隣家ヲ案内シテ、飯酒ヲ用賑フコト也、扱持集メタル米錢、右入目遺殘リハ、マタ年々増長サセ、時節ヲ以祭ル也、

ミコ神ト祭ルコト、垂生郷ニモ口ノ村ニハナシ、奥ノ村ニハ有、槇野山ニ取分多シ、此郷モ近年、寺ヨリ大夫ノ家ハ格別、外ノ家ハ成ラズト云ヨシ、サレドモ位牌ヲ捨ルコトハ止メヌ也、



ル、肴ハ生豆腐也、此事濟、是ヨリ御子神ヘ神樂ヲ奏ラスルトテ、嫡子ヨリ初、次第々々ニ神樂鏡ヲ上ゲ、一人々々ノ神樂ヲ舞イタゞキ、大ニ悦ブコト也、

神子神、神名ト云コトモツケズ、其者子ノ年ナレバ、子ノ歳ノミコ神ト唱ヘ、丑ノ歳ナレバ、丑ノ歳ノミコ神ト唱フ也、扱如斯神ニ祭リテハ、勿論年忌、佛事、盆彼岸ニモ祭コトナシ、氏神ノ神事毎ニ、ミコ神ヘ神樂ヲ奏ラスルトテ、子孫ノ心々、作初穂、又ハ神樂出シテ舞頂ク也、居合ノ人々、兒童ニ至マデ、親父ノ神ニナラセタ、祖父様ノ神ニナラシヤツタト勇ミ悦ブ也、扱宅ニカヘリテハ、隣家ヲ初、傍輩共悦ニ奏ル、又ハ案内シテ神酒ヲ弘メ、ウタヒ踊リ賑フ事也、

ミコ神、神樂ヲ舞、祭文ヲ承ル云、一ガ方ノミコ神サンジヨ、二ガ方ノミコ神サンジヨ、アキシゲモリ、デウエンボウ、センゾウ殿、八マンシセンノダイオンザキ、戌ノ歳ミコ神サンジヨヘ、チヨノミカグラマキラスル云々ト讀テ、白米二粒五粒計ヘギニツマミ置テ、舞終テ神樂出シ候者ヘ戴スル也、幾人ニテモ一人々々如斯舞也、

一ガ方トハ、父方ヲ云、二ガ方トハ、母方ヲ云、アキハ安藝、秋、秋、名字、秋、シゲモリ、重盛ニテ、實名歟、デウエンボウハ、定圓坊、センゾウ、仙藏、歟、山伏也ト云傳フ、ハチマンシセンノダイオンザキハ、古キミコ神、段々位ニノボリタルヲ云ト也、定圓坊、仙藏、存在ニハ、佛道ニ入、法名ヲ付シ者ナレドモ、死テハ子孫トシテハ、神ニセチバナラスコトニテ歟、法名ヲ神名トシテ祭ル、存生ノ時、其人ノ心ト、死テ後子孫ノ扱トハ、黑白ノ違ナリ、

家ニヨリ所ニヨリ、氏神祭ノ時、神樂ヲ舞ト云コトセズ、極月晦日ニ、其嫡家ヘ子孫集リ、鏡餅洗米神酒杯供シテ、是ヲミコ神ノ神事也ト云傳モ有、

横野山ノ奥、岡ノ内村葛橋ヨリ三里程上ノ岡谷ナリナドニハ、家毎大カタ神ニ祭ルヨシ、尤是ハ二十五年、三十年忌寺ニテ、勤夫ヨリ祭リ初モアリ、五十年忌ニシテ祭リ初モアリト云、禪宗誓渡寺有リ、本尊

當時其譯不斷者ハ、三年或ハ七年忌法事ノ節此者先例ヲ以、今日ヨリ神ニ祭リ候間、過去帳ノ法名御消シ可被下ト斷置、位牌ヲ墓所ニ捨ルナリ、注名ヲ消シ位牌ヲ捨ザル夫ヨリ十一月氏神祭ノ日、其外ノ神祭日ニハ神事濟テ、是ヨリ今日ハ何右衛門ヲ神ニ祭ルトテ、其子孫同姓ノコラズ外姓モ近キ類ハ皆々集リ、并ニ其村ノ長タル人ヲ招キ座上ニナホシ、大夫二三、又ハ四五人、本主大夫、神前ニ向ヒ、微音ニ何ヤラ讀テ念ジ、本主ノ大夫神幣トテ白幣ヲ頂ニサシ、布大夫ノ類ヲ類ノ大夫引張リ、其下ニフマトテ、白米ヲ器ニ入レ、神歌ヲヨミテ幣ヲ振リタテ、食ヘト云コトヲスル也、其事終テフマヲ見云、早速神ノ座ニ直リタベ、サレド禮クラヘ、今一ツクラヘトテ、又右メ通リシテ、扱休ミ、此人存生ノ中、正直第一ニテ惡事ヲ巧マス故、カク早速神座ヘ直リ給フト云、又人ニヨリ、一トクラヘ、二タクラヘニテモ神座ヘ得直ラズ、是ハ存生ノ時、不正直謀計多ク、常ニ惡事ヲ巧ケル故、神ニエナラヌトテ、五反七反モクラヘ云、樣得度、神座ニ直ラチドモ、先是ヨトテオクモアル也、夫ヨリ本主ノ大夫ヘ神ヲノリウツストテ、何ヤラヨミテ舞々シテ託宣有曰、是ヨリウチハ、木ノ葉ノ下タノオボレ神ニテ有シガ、大小氏子、心ヲ揃ヘ、今日伊勢ノミコガ瀧ヘ請ジラレ、ホウメンヲサマシテ、ヤアラウレシヤト云、答、大小氏子、心ヲソロヘ、ホウメンヲサマシマス、大小氏子小ノ氏子、惡事災難來リ候トモ、拂ヒノケテチカヒ守ラセ玉ヘト云、ヤアラウレシヤト云ヒテ、舞々シ、大音ニテ、サラバ是ヨリ氏子揃ヘフマヤルト云、神歌歟氏子云ハ、揃ヘヤフマ、ユツル、何反モ云テ舞フ、劔ノ向キニ、白米ヲノセ差出セバ、嫡子ヲ初メ段々居合ス、族、紙ヲ出シ、フマヲウケイタバク也、ウハヅ、ホウハ何ヤラ、ナカヅ、ホウハ何ヤラ、ソコヅ、ホウハ何ヤラ、其コト濟テ、神ヲ上ルトテ、又大夫集リ、何ヤラ讀テ、舞々神前ヘ行、神上リタマフトテ、元ノ座ヘ戻リ休息シヌレバ、ゾノ嫡子ヲ初メ禮ヲノベ、座上ノ長サヘ、亡父何右衛門、早速神座ヘ直リ位ニツキ、氏子一同、本望大悅ト云、夫ハ一段目出度ト次第々々ニ挨拶、扱神酒ヲ弘メ申ニ至

## 〔喪祭小錄〕祭禮小錄

每朔望

前一日掃灑其明夙興神酒ヲ供ヘ、新物有バ、土器折敷ニ盛テ供フ、主人稱賀シテ曰、今日某月朔日ノ祝儀ヲ申上ト、卽土器ニ酒ヲ酌、主婦茶ヲ供ヘ、拍手再拜、望日ハ神酒ヲ略スルモ苦カラズ、佳節

正旦夙興盛服盥嗽シテ序座、進一揖

開扉衆平伏、主人稱賀曰、今日年號幾年某支干正月元日某支干、年始賀儀申上候、進大福

茶、主人 饅糕 主人 雜煮 主婦 汁物鹽或ハ貝 主人 初獻 肴メスル 主人、或

母有バ母行之、二獻 肴ノコズ 主婦 三獻 肴アフン 長子 衆復座、拍手再拜、

次主人以下起座、各暫側ニ退、衆復座拜シテ撒ス 二日三日 如元日、但大福茶饅糕不

供、七日 七種粥 十一日 小豆雜煮 十五日 小豆粥 上巳 草餅 桃酒

端午 粽糕 菖蒲酒 嘉祥 饅頭 七夕 瓜西瓜茄子豇豆ノ類 中元 索麵

速飯 鯖 田物 新米飯 仲秋 蒸餅 芋 重陽 栗 菊酒 九月十三日

青豆 芋ヅキカ 玄猪 五色餅略スレバ赤白カ 冬至 粥 煤拂 飯 羹 鮓 除

夕 同前 節分 煎豆

右中秋十三夜除夕節分ノ如キハ、主人或主婦入テ燈ヲ點ジ、且供物ヲシテ、其後家内ニ燈ヲトボスベシ、神事ニハ臘ヲ不用、油火燈、紙燭、松明ヲ用ベシ、

其他新物有テ、朔日ニ不及シテ得之、則臨時ニ薦之、

〔御子神記事〕先祖ヲミコ神ト祭ルハ、神職ノ家外ニモ、從先規祭リ來ル家筋アリ、沒セシ時旦那寺ヘ斷ケルハ、亡父何右衛門、先例ヲ以後年神ニ祭リ候間、過去帳ニ御記被下マジクト申オク由、又

一忌日ニ備ヘタル物ハ心アルベシ但四季ノ祭ハ吉禮ナリ忌日ノ祭ハ凶禮ナレバナリ。  
一四季ノ祭ニハ魚鳥ヲ以テ祭ル吉禮ナレバナリ忌日ノ祭ニハ野菜ヲ以テ代フ凶禮ナレバナ  
リ。

〔喪儀略〕凡忌日は終身の喪なれば神事に關らず前日より齋戒獨宿して身を慎み酒肉をやめ、音  
樂をなさず出行せず酒饌蔬菜を供へてまつれ。忌日ニ云ハ一年に一日のみ今俗忌を違  
誤日といヘリ毎月の忌日は義理なし。

〔泰山集甲乙錄〕伊勢父忌日謂遠閼日其儀如新忌閉門不交人。

遠閼日一位一饌遙拜之饌可也卜部家中古以遠閼爲祭日大誤。

〔卜部家傳竹溪翁口授留書〕庶人祭禮ノ事

一元日雜煮上巳蓬餅端午粽七夕索麴重陽栗ナドヲ薦テ拜スベシ其餘ノ俗節モ節物ヲ進ムベ

シ凡山野ノ初ヲ出ルモノヲ備フベシ。

一節句ニハ都テ前宵ヨリ齋スベシ。

一朔ニハ酒茶ヲ獻ジテ拜スベシ。

一望ニハ茶ヲ獻ズベシ。

一廿八日ノ禮古來ナシトイヘドモ今ノ世行ハルレバ望ニ准ジテ茶ヲ獻ジテ可也。

〔神道葬祭家禮〕百ヶ日過テハ毎月朔日十五日餅昆布熨斗鮑神酒ヲ三方ニ載テ供フベシ正月元  
日ハ鏡餅ヲ供ヘ十日以後吉日ヲ選テ鏡餅ヲ開キ拜シテ一家之者はヲ喰ベシ彌生ハ草餅五月  
ハ粽七月ハ索麵八朔重陽ハ蒸飯玄猪節分ハ餅ヲ供フベシ己并子孫ノ生日ハ餅昆布熨斗鮑神  
酒ヲ供フベシ一家ノ賀儀アル時ハ生日ノ如クニ供フベシ二月五月八月十一月日ヲ定メテ祭  
ルベシ人ニヨリテ四季ニ祭ルコトナラザル者ハ二月十一月ニ祭ルベシ。

正徳乙未臘月日

跡部光海翁源良顯識



有事而告

文久二年戊十二月二十四日

美濃守從五位下源朝臣躬行

〔卜部家傳竹溪翁口授留書〕庶人祭禮ノ事

一吉凶ノ事有時、酒茶ヲ獻ジテ其由ヲ申スベシ、

一他ヘ出入ノ時ハ、靈屋ノ邊リヘ至テ揖スベシ、

但他ヘ行ニ、日ヲ歷テ歸ルベキニハ、酒茶ヲ獻ジテ其由ヲ申テ拜スベシ、

〔喪祭小錄〕祭禮小錄

生子則見

三十日ノ後ニ見ユ、如朔日儀、但主婦抱子テ就座、主人告辭シテ曰、某男子ヲマウケ候、名ヲ某ト名ヅケ申候、女子ナラバ女子ト告、宗領ナレバ宗領ト云、二男ナレバ次男ト云、以下同事也、宗子庶子ニカギラズ、主人ヨリ行之、

有事則告

昏事元服仕祿ノ類、如朔日儀告辭其事ヲ或ハ別ニ書シテ以讀之、然シ凶事ハ憚有ベキ歟、

凡人所惠皆告

主人ヨリ賜ハ勿論、人ヨリノ所惠與、御師ヨリノ賜曆ナドノ類、皆持往テ其由ヲ告、器物ノ類、亦前ニ並ベテ告云、某人ヨリ賜候、若名迄ニ不及ハ、並テ拜スルノミ也、

新服成ハ、先服シテ拜スベシ、

〔卜部家傳竹溪翁口授留書〕庶人祭禮ノ事

一忌日ノ祭有、古來ハ正忌日ノミヲ祭ルトイヘドモ、中古ヨリ月々ノ忌日ヲ公武トモニ行ハレテ、靈モ生涯ニ知之バ、月々ノ祭ヲ行フモ害ナカラシ歟、

一正忌日ニハ、前一日齋スベシ、

忌日

不爲朝廷不申氏渠等乃隨言通商波更也和親託爲許可波最毛口惜支事奈里無間又別國毛

次爾參來平執事屬猶相混利相口會氏追攘平者體不思在皆爲許可可氏交易疾久錯其方氏

不規在髮物產爲闕耗上下最困弊利夷賊等者所得而立進退平大稜威平凌辱輕侮米奉事乃多在

髮立切齒毛憤怒塞胸毛無言詞平朝廷者素與夷狄平欲遂放乃御心平捷不動支就中心猛支壯士

輩山行者草生尸海行者水浸尸大王乃御爲死思定氏大御心平爲心而勤勞平或波蒙罪或自

殺氏死王事人自安政五年間至今爾幾百人在其或者三月雪爾吟行比或者正月望爾契友比類遇

忠士輩其於朝廷毛哀爾最惜美思食在波此人等乃武久清久雄久明支御靈平同社爾鎮齋國忠爾

報伊皇基乃鎮護毛欲爲斗同志諸人毛疾久思立波躬行件殿下爾此事平爲建白毛未事成月日經

乎思詫而今日乃生日爾足日爾同志人々平集會氏先爲靈祭米靈魂爾此由毛告申氏斯物爲古

曾請忠義諸君乃和魂荒魂知毛不知毛無洩事無脫事此祭庭爾天驅理來會坐氏同志諸人酒飯山

海乃多米都物平捧而歡仰狀平平久安久開給比和魂朝廷平守幸爾諸司百官忠誠爾國郡領主等

邪穢心不令在荒魂暨行橫濱在留夷賊波更也若軍艦乃寄來波討罰米千里乃波濤爾逐沈米魂幸

布神祇鎔造之此大八洲國其如本義高貴宇宙爾徹底留強國斗成給爾同志諸人鵜如匍匐回畏美

畏美申須

辭別而白久禍福如蠅斗諺事如自夷狄紛擾國々所令領主皇城爾集來氏奏事平朝威毛漸爾榮

坐留景狀南喜悅毛詔者新也斯在爾取波大御國毛波之以神事氏爲先給布大御風法平年久爾

神祇官乃廢絕波大開典乃憂苦事乃限在波先此官平欲興立而躬行雖情弱東乃都爾參上氏殿

下爾建言之某國守乃執權等毛事計登未事整古心憂介抑忠節士乃靈魂伊吾願事爾靈合而如思

疾久此事平令成就與祈請平歌久其

南幾多麻毛阿波連登於茂閉玖爾適當米和賀億布介那久都句須巨巨露乎

彌の房にて、やよひのなぬかの日になむ、人々つゞへて物せられける、その日は、こどにうらく  
 さ霞わたりにて、櫻ばな、ときおそきにはひかはして、いと興ありしことなりきとか、こゝらの人  
 の歌のまどぬのみならず、ぬでの屋に入來る人々のひめおかれたる、翁の筆のあとをつゞへて  
 かけわたし、そのついでにとて、契沖あざりこなたの、此みちに名ある人々のをもかけそへたれ  
 ば、目もあやにて、むかしまのばしき心も、今一しほ深くこそはありけめ、○中略

嘉永三とせといふとし五月

もとをりの内違

〔津和野藩舊記〕文久二年十二月二十四日、京師參集の正義士、靈山の靈明舎に相會して、報國忠士  
 の靈魂祭禮有之、其祭事を執行せし者、及び當日參集の人名、左の通り、

祭主

古川美濃守源躬行 江戸

會頭

福羽文三郎源美靜 津和野

世良孫槌世利貞 長州

西川善六平吉輔 江州八幡

長尾郁三郎平武雄 京

來會人名

木村數馬 京○以下六十一名略

祭文

言欲毛畏、天下大政、食鳥啼吾嬌、大城、爾執申賜、此諸蠻舶等御國、乃海邊近久寄來、叙連疾久逐  
 遣比擊碎、久定在、平此二十年許前、爾其寄來、幸舶乃事情、平問訊、氏古討毛逐、茂爲斗讓、氏鹽沫、乃凝  
 留遠域、爾此乃事、平自告遣以來、去嘉永六年、水溜、留阿米利加國、乃夷舶通商、平欲乞、氏斗犯禁、氏江戸  
 品川海、爾乘入、平執事等、西洋夷族、毛波之、火技、爾優、留奴由、爾甚久聞、天杲惑、乍失途、方不法、平咎、毛

次送神

文政元年戊寅九月二十日、於濱松驛梅谷市左衛門義品家執行、

中村齋宮藤原乘高

催主

鈴木越前清原重年

石塚安右衛門藤原龍麻呂

夏目萩園源慶麻呂

高林舍人藤原方朗

中山豊後守藤原吉道

補助

關大和藤原武雄

小栗直輔平廣伴

松島良司茂國

石川爲藏源依平

藤田繁吉武輔

〔鈴屋大人五十回雲祭歌〕花ぐはし櫻のめでは、こどもでにまされるを、身にしてみておぼゆとて、わが家のおほぢ鈴屋の翁はし、みづから後の名を秋津彦美豆櫻根靈とつきて、さだめおかれたるまに、身うせられし長月を忌月とまつり來れりしに、こごしは、はやくいそぢのめぐりになむなれりける、かねてより、そのかたのうへに物せられたる、やまと心を人とは、の歌によりて、朝花といふ題をまうけて、その世忍ばむ人々の歌どもをつどへむとせしに、みさと人大はしの長廣とく思ひおこして、同じくはその花のころにとて、名だゝる花の都の東山なる圓山の正阿



次迎神

次供物備進

同

同

同

次捧玉串定妙

同和妙

同竹玉

同竹玉

次祝詞

同

次總拜

手次

同

同

同

鈴木越前清原重年

岡部大和賀茂政英

高林舍人藤原方朗

平尾出羽石川知久

山崎石見弓削久麻呂

大林外記眞樹

岩崎帶刀藤原岑雄

六角内藏源秀平

増田長門源芳雄

朝比奈主計藤原秀茂

中山豊後守藤原吉植

桑原石見藤原貞恒

關大和藤原武雄

杉浦大學藤原葛麻呂

森隼人藤原壽治

内山彌兵衛藤原眞龍

梅谷市左衛門義品

岡部與三郎賀茂政胤

催主已下集會人

大人乃命姓波加茂乃縣主爾坐氏遠祖神魂命乃孫鴨武津見命掛毛畏支畝火乃白樞原乃大宮爾  
初國知志食志天皇神乃武大倭乃國爾將入坐止半爲給比氣時八咫鳥止成利道引奉志大神乃御末爾  
氏山城國相樂郡岡田乃鴨神社齋奉留神主毛爾奈有留文永十一年止云年爾大命加々布利氏遠江  
國敷智郡濱松乃岡部乃鄉留奈加茂乃新宮齋奉氏代々此神社乃神主多利又永祿天正止云年乃頃  
東照神祖命此乃禮濱松乃御城爾坐々氣時仕奉氏引馬野乃御軍爾有功氏御大刀奈賜支故大人命  
波其家由生出坐氏寬保乃三年止云年大江戶爾出給氏畏支哉天下乃太政申賜布遠朝廷乃御親  
族乃君爾坐田安乃殿爾仕奉氏專古學乃道平始米給比起志給比遠祖八咫鳥乃大神乃天皇御軍  
平道引坐志事乃如久此乃古學乃道平普久教悟志道引給比明和六年止云年乃十月晦日乃武  
藏國荏原郡品川鄉千萬乃松立築留由東乃海津寺留奈少林院乃山下津石根爾石隱禮坐氏五十年  
毛奈經留氣故是以其御惠平忝美其御功平仰奉氏今年文政乃元年乃九月乃廿日平生日乃足日  
止定奉氏梅谷義品賀家平祓清氏奧乃小床爾神離刺立燒鎌乃敏鎌以氏引馬野邊乃龜草平伊豆  
乃真草止茹蕒伊豆乃席止茹敷氏伊豆乃石境止定氏實物者明妙照妙和妙荒妙御酒波越閑高知  
越乃腹滿並氏山野乃物者甘榮辛菜青海原乃物者鰯乃廣物鰯乃狹物與津藻菜邊津藻菜爾至氏  
難々乃物乎如橫山益高成氏太玉申爾隱侍氏稱辭竟奉形平平久安久所聞食氏從今去前古學乃  
道平彌獎米獎米彌助爾助茂志八枝乃如久立築延志八十麻賀郡日乃麻賀事不令在神直日大直  
日爾見直志閑直志坐氏夜乃守日乃守爾守幸爾給比惠幸給比閉朝日乃豐榮登爾教子等諸左男鹿  
如須膝折伏世鵜自物頸根銜拔氏恐美恐美申給久申

靈祭式并交名

先各列座總拜

次祓

藤原朝臣<sub>爾</sub>藤原朝臣<sub>爾</sub>頭等<sub>止</sub>善<sub>友</sub>志<sub>爾</sub>同意<sub>爾</sub>古學<sub>乃</sub>業<sub>毛</sub>伊曾志<sub>美</sub>給<sub>比</sub>氣<sub>爾</sub>享保<sub>乃</sub>十八年<sub>止</sub>云年京都<sub>爾</sub>參登<sub>氏</sub>山城國伏見<sub>乃</sub>鄉<sub>奈</sub>稻荷神社<sub>乃</sub>宮人荷田<sub>乃</sub>宿禰<sub>乃</sub>命<sub>乃</sub>敦<sub>平</sub>受給<sub>氏</sub>櫛<sub>乃</sub>實<sub>乃</sub>奴氣出<sub>多</sub>事<sub>乃</sub>如久唯獨拔出坐<sub>氏</sub>古學<sub>乃</sub>道<sub>乎</sub>起<sub>志</sub>給<sub>比</sub>廣米<sub>給</sub>比<sub>千</sub>年五百年<sub>乃</sub>間漢國乃道<sub>爾</sub>迷<sub>比</sub>佛國<sub>乃</sub>教<sub>爾</sub>奈豆米留事<sub>其</sub>憂<sub>比</sub>坐<sub>氏</sub>伊加傳上津代<sub>乃</sub>誠<sub>乃</sub>道<sub>乎</sub>教悟<sub>志</sub>給<sub>波</sub>李<sub>止</sub>思志坐<sub>氏</sub>先豆萬葉集<sub>乎</sub>始<sub>止</sub>志<sub>言</sub>業<sub>乃</sub>重久尊久<sub>言</sub>玉<sub>乃</sub>幸<sub>比</sub>依<sub>氏</sub>天地<sub>乃</sub>初判<sub>乃</sub>時從神<sub>乃</sub>御代御代<sub>乃</sub>古事<sub>乎</sub>真委曲<sub>爾</sub>云繼<sub>志</sub>許<sub>由</sub>麻<sub>支</sub>解<sub>支</sub>佐止志教給<sub>賀</sub>故<sub>爾</sub>漢意<sub>乎</sub>清久離<sub>乃</sub>古<sub>乃</sub>意詞<sub>乎</sub>尋知<sub>爾</sub>御學<sub>乃</sub>道<sub>會</sub>起<sub>禮</sub>利<sub>此</sub>乃學<sub>乃</sub>業<sub>伊</sub>末多起<sub>志</sub>給<sub>波</sub>保止波歌詠<sub>爾</sub>古今集<sub>利</sub>此方<sub>爾</sub>止利萬葉集<sub>波</sub>人皆意<sub>毛</sub>不及<sub>志</sub>毛<sub>止</sub>開<sub>支</sub>見<sub>爾</sub>人<sub>毛</sub>乎佐乎佐無<sub>加</sub>利<sub>今</sub>其古<sub>信</sub>言<sub>乎</sub>己<sub>賀</sub>物<sub>止</sub>古風<sub>乃</sub>歌詠文章等書和邪說專大人<sub>乃</sub>功<sub>爾</sub>奈有<sub>留</sub>氣<sub>又</sub>古事記日本紀<sub>乎</sub>始<sub>止</sub>志<sub>古</sub>典<sub>乎</sub>窺<sub>比</sub>知<sub>毛</sub>留<sub>爾</sub>漢意<sub>爾</sub>迷波佐禮受<sub>志</sub>古<sub>信</sub>詞乎明<sub>米</sub>古意<sub>爾</sub>人皆奈禮<sub>也</sub>萬葉集<sub>乎</sub>委曲<sub>爾</sub>教悟<sub>志</sub>給<sub>比</sub>恩賴<sub>毛</sub>奈依氣良受哉故是以古學<sub>乃</sub>道國內許止許止滿<sub>知</sub>廣<sub>氏</sub>國<sub>止</sub>爾其御教<sub>乎</sub>加々布良奴人<sub>毛</sub>奈其御悟<sub>乎</sub>仰奴者<sub>毛</sub>無久彌益<sub>爾</sub>國毛勢<sub>爾</sub>廣米給<sub>比</sub>開<sub>支</sub>給<sub>比</sub>明和六年<sub>止</sub>云年乃十月晦日<sub>乃</sub>日御年七十三<sub>爾</sub>坐<sub>氏</sub>石隱坐<sub>氏</sub>今年五十年<sub>毛</sub>奈須岐給<sub>禮</sub>氣<sub>乎</sub>知無<sub>支</sub>葛麻呂等<sub>賀</sub>友賀良<sub>爾</sub>至<sub>麻</sub>教給<sub>比</sub>廣<sub>支</sub>厚支御惠<sub>乎</sub>忝<sub>美</sub>御功<sub>乎</sub>仰奉<sub>氏</sub>今日<sub>乃</sub>生日<sub>乃</sub>足日<sub>乎</sub>撰定<sub>氏</sub>梅谷<sub>乃</sub>義品<sub>賀</sub>家<sub>乃</sub>奧<sub>乃</sub>小床<sub>乎</sub>祓清<sub>氏</sub>伊豆<sub>乃</sub>石境<sub>止</sub>定<sub>氏</sub>和幣取置忌瓮居並生<sub>乃</sub>子<sub>爾</sub>生<sub>乃</sub>子伊都支弟子<sub>爾</sub>弟子伊都伎或歌詠或文章書稱辭竟奉<sub>留</sub>大人命御魂天翔依來坐<sub>氏</sub>漏落<sub>平</sub>事<sub>其</sub>神直日大直日<sub>爾</sub>見直<sub>志</sub>聞直<sub>志</sub>坐<sub>氏</sub>平久安久所聞食<sub>氏</sub>今<sub>毛</sub>去前<sub>毛</sub>古學<sub>乃</sub>道<sub>乎</sub>彌助<sub>爾</sub>助彌獎<sub>爾</sub>獎八十禍津日<sub>乃</sub>禍事在<sub>其</sub>世夜<sub>乃</sub>守日<sub>乃</sub>守<sub>爾</sub>守幸給<sub>止</sub>弟子等諸共開<sub>爾</sub>鵜自物頸根銜拔<sub>氏</sub>恐<sub>美</sub>恐<sub>美</sub>申給<sub>止</sub>久申

御靈祭祝詞

縣居乃大人乃命乃御靈乃御前<sub>爾</sub>五社神社神主藤原朝臣壽治恐<sub>美</sub>恐<sub>美</sub>申給<sub>止</sub>久申

部御代乃御代御代乃天津日嗣乃御次手平始氏世間有登有雜々之故事平漏流事無久落流  
 事無久委曲爾撰比給比記志給氏天地之共彌遠長爾天皇朝廷乃大御寶登遺志給比傳閉給布廣  
 佐厚佐大御惠爾依志千年五百年乃後乃世爾遠運奈久拙佐某等我友賀良爾至爾遙佐神代乃  
 有流形平字迦々比尋爾明佐貴佐御代乃意平百箇一母悟知事得志有流恩賴平二乃御書讀奉  
 流度每爾頂爾捧持氏畏美宇禮斯母奈思給布故是以今年乃某月乃某日平生乃足日登擇定氏  
 某之宅乃奧乃小床平伊豆乃磐境登掃比清氏奧山乃小柴之枝平打折持來氏伊豆乃真坂樹登二  
 所刺分波夜志齋比奉氏和幣取置佐忌食居並爾海山乃多米都物平負奈負奈机代登貢奉氏恐  
 美恐母申久二柱命乃御靈等今如是刺立齋奉流神離爾唯暫時之間天翔依來坐氏漏落平事波神  
 直毘大直毘爾見直志聞直志坐氏貢奉流物平神隨平久爾所聞看氏今毛去前母某等之學乃  
 業平彌助爾助給比彌獎爾獎給比八十禍津日乃禍事有受夜乃守日乃守爾守幸閉給開某等諸共  
 爾杜鹿成膝折伏世鶴自物頸根衝拔氏恐美恐母申給流久申

〔手向草〕此さうしは去年の冬神な月つごもりの日の夜こ岡部の大人爾のなきあとをぶ手  
 むけにどものせし吾ともがらの言の葉さるはこのうしかゝれ給ひて十三年同じうしのとし  
 になんめぐりあひければよの人のたゞにはすぐさぬならひにもよほされていさしくかな  
 しさもさらがへりつゝその世のこゝちのしければなん今やうながら例の人々よびあつめい  
 さゝかなるわざして過にしみたまをまつるとてのまわざどもになん有ける略○中天明二年む  
 月の十六日もとをりの宜長

〔賀茂大人靈祭式〕御靈祭祝詞

縣居乃大人命乃御靈乃御前爾諏訪神社大祝藤原朝臣葛麻呂恐美恐毛申  
 縣居乃大人乃命波元祿乃十年止云年爾乃禮濱松乃鄉爾生出坐氏稚久坐爾從時五社神社神主



乃破戸平推開使尊御道乃片端毛平手取行氏比正道乃正直奈趣横佐乃道乃横佐奈趣毛窺比知  
事登奈成留自今後彌益奈此學乃榮行久御世止成奈事乃甚久志歎奈就氏春登奈基恩賴  
爾報奉志留氏世乃御祖能御祭殊爾仕奉久思比立流時奈合氏近使鄉乃常母陸相留神主  
等毛同樣爾其御祖等乃恩賴平蒙禮各毛互爾其家奈廻理御祭相助部仕奉登言布語合  
氏今日平生日乃足日登定氏米姓名我奧津小床奈伊豆乃磐境登掃清免奧山乃寶木乃枝平打折  
持來氏伊豆乃眞坂樹登二所爾刺立時乃花平取添氏神籬成波夜志齋比立奉氏姓名我弱肩爾太  
繩取掛氏持齋麻波持清麻波造理仕爾奉禮一夜酒登我波安良受石多々須常世爾在須久斯乃神  
少御神乃釀志御酒平白木黑木登變免萬知里豐腹居並倍百杵乃八百杵爾杵突使仕奉爾餅乃鏡  
時自久乃香能菓種乃爾栗實柿實梨實洗米赤飯堅鹽御毛比大野原爾生留物波甘菜辛菜平始米  
種々乃物青海原爾住物波乃廣物乃狹物大海爾生留物波廣和布荒和布若和布乃奧津藻葉  
邊津藻葉爾至留麻氏爾今日能禮代御饗乃物登各毛持寄滿並倍立奉氏恐美恐美中佐遠津御祖  
代々乃御祖親族乃御靈等今如此久刺立齋比奉流神乃小床爾天翔來坐此獻奉流多米都物平御  
心母和親爾平久安真那安幣乃足幣登所聞食氏姓名我家毛身爾枉事有受夜乃守日乃守爾  
守幸爾字豆那比給比子孫乃八十相續使無窮爾相母基呂爾吾御社爾勤美仕奉志學問乃道物書  
久業平勤志米家名毛平貶志佐遠長爾御祭善志仕奉志給爾今日乃御祭爾相集爾神主等諸共爾鶉成  
並居字自物頸銜拔氏平手打上耶拜美恐美恐美申給波久白須

祭先哲

〔鈴屋文集六〕二御靈祭告刀詞

掛卷毛久畏使崇道盡敬皇帝命人乃○會王大御靈享樂大朝乃民部卿太朝臣命乃○安御靈二柱乃御靈  
乃大前爾姓名等恐美恐美申給波久申須皇帝命波日本書紀平撰比給比朝臣命波古事記平記志  
給比天地乃判志時與神乃御代乃御代御代乃七御代乃御代御代五御代乃御代御代天皇命乃遠

久彌榮爾令榮給比己我乖々爲志米手蹟足蹟在志米此乃領地年穩爾百姓乃家々毛平久安久幸  
開給止白爾事乃趣乎走出留駒乃耳彌高仁閑看志清景能御靈母此進留物乎相嘗爾受給波御祖  
等乃御前遇事乎能久執申志賜止言依志賜布我君乃任能隨爾今日乃生日能足日乎吉日止  
定氏源定年鹿自物膝折伏世賴自物頂突拔氏畏美畏母稱辭竟奉留言乃由乎平久安久閑看止白  
須

〔古學諄辭集〕同○上國長神職等祭先祖詞

謹美敬比遠津御祖乃御靈代々乃御祖親族諸御靈等乃御前爾子孫姓名近使鄉々乃大神等爾仕  
奉留神主等諸共爾鹿自物膝折伏世賴自物頂根突奴伎氏恐美恐美白須天避留鄙乃中毛此乃上  
津總國伊隅長柄乃邊毛烏我鳴吾嬌國乃東乃極美朝日乃直指須海原近使鄉々乃上津代波鄉人  
等生出留隨爾表裏乃心逆志真心有事無久清使赤使真澄鏡乃曇奈伎心爾奈有爾禮一向爾皇美麻  
命乃大御面向爾順比奉里種々乃取行布和射毛總氏古事乃例爾倣比勤美行比來流連三粟乃中  
津代爾至里蟹我行橫佐乃道乃參渡里內日刺都平始米四方八方乃鄉里野乃底山乃底氏弘氏基里  
皇大御國乃古事廢爾大神等乃御稜威毛彌隱里隱比行使宮人等我仕奉留神業波歲爾異爾卑志米  
貶佐延伊武勢伎布勢廬爾屈氏美居禮佐賀無使人等波橫佐乃道乃時米久毛智鳥乃拘比泥美其方  
爾相麻自古理相口會氏己我仕奉留御社己我家毛乎退使去理永久其迹乎斷爾人毛多留辱久雄  
雄志久吾家乃御靈等與當昔次々乃荒廢平之痛久忍志仕奉留御社其家乃子孫乃嗣々彌遠長  
爾守里保知今爾傳閉給流事波最毛尊使辱使恩賴爾奈有爾如此久尊使恩賴爾依氏奈今毛玉幸  
波大神等乃御心登古學乃字麻志大人等次々爾世爾出坐氏神代乃故實見之明里顯事幽事萬乃  
由緒毛詳爾說明志世爾教悟志給比日爾月爾惟神奈御道乎慕比學夫徒澤爾出來氏大神等乃御  
稜威波漸爾古昔爾立復里照顯使宮人等毛大神等乃稜威乃御光乎蒙理牟具良繁留布勢廬乃柴

第九座

第十座

第十一座

第十二座

福宜 敦寬子 御山平馬

〔古學諄辭集〕井伊家御祖等三前平祠奉留詞

越後國三島郡與板邑乃此所遇底津石根爾宮柱太敷立氏我親御祖備中守共保君從五位下侍從

兵部大輔直政君四品右京大夫直朗君三柱乃御靈平鎮座志奉里御跡繼留御胤子從五位下右京

亮直經家子乃長止繼氏仕留松下志摩源定年爲氏令申事平平久郭安里聞看止世申須直經我前代平

繼在志從五位下直陣世爾在志間仁此居所悉久成竟多良時爾三柱乃神靈平此乃所仁祠比奉里

仕奉止議里定志米氏其意平繼氏今斯如此御祠造里仕奉里從三位神祇權大副卜部良長朝臣

請志氏三座平合氏井伊家幸靈社止云布社號平立奉利定年仁其事等執行比我手爾代里事過遷

祀比奉里又汝我遠祖松下豐前守源清景波我家仁殊留奈由緒有氏家長止仕在志世乃古支例乃隨

爾御祖乃神等能御前乃事執留神止其下座爾祠比鎮止米與事令負氏月我中仁月乎擇比日我中爾

日乎撰比朝日能豐榮昇爾其事行比始氏大御前爾今日乃禮代止手自奉留物者與山乃五百枝貴

木乎根掘爾持來氏青和幣白和幣八咫鏡平取著氏荒布和布止立奉里八取之機爾置備爾奉留物

者御饌堅鹽鏡餅餠鯉御酒者甕戶高知甕腹滿並氏大海原爾住物波乃廣物止鯛魚乃狹物止

雜魚海底仁生波物者與津藻葉邊津藻葉野山爾翔留物者雉子大野原爾生留物波甘菜辛菜爾至

氏橫山乃如久打積置氏進奉里漏落李事波平見直志聞直坐氏如此進留字豆乃幣帛平平久郭安里

安幣帛乃足幣帛止聞看志受賜比此乃居所爾八十柱神乃禍事在世四方四隅爾荒備陳備來平物

乎掃比退賜氏御子孫乃繼々伊加斯彌久波枝乃如久令榮賜比堅石爾常石爾壽命長在志賜比武

運長久志天地止共爾極無久又荒振敵有氏射向波平時者身方一人爾百人取志給比達爾令平給比

又如此寄氏仕留家子乃劔佩久伴緒粉負布伴緒伴緒乃八十氏人等我子孫乃次々毛彌遠長爾長

之大城爾天下之政申玉布今之大樹公之命任乃隨々誰之能奴毛曾武貴奉留者無久天下波千  
 萬代之後麻傳毛茂志彌生爾守利幸邊坐氏大命之雄々敷忠成御心爾已士信子孫八十續鞅髓  
 令玉比天間宮之家乃是乃宮柱刀並爾動久無代大將軍之君爾令奉仕玉比又百姓之取作留與津  
 御年乎始氏作利將作物乎荒支風荒支水爾層高那絆旨米不給彌榮令榮玉比於通毛於通毛  
 樂久世乎令經玉邊乞祈申周詞別而申久今御前今世俗麻爾麻爾之神樂刀云布事乎奉奏乎  
 神隨面向美見備爲氏聞食氏集侍諸人等我犯穢事在波神直日爾見直志坐天見許之坐而乞吞  
 申奉留事乃漏落武事神直里大直日開召直志天彌高爾彌廣爾彌厚支御惠乃無漏事無落事  
 夜之守利日之護斗護惠比麻幸比坐天神隨千代常磐爾安久其平久其鎮利坐刀今日之賀乎九代  
 末裔今乃間宮庄五郎源生信主我申州事乎入紐之同國乃空敷布意富日皇大御神爾奉都惠留  
 從五位下上總介守兼大宮司富朝臣直利我下司神主高橋齋宮尾治連邦彥畏美畏毛宣文化十  
 一甲戌歲五月七日生日足日吉時不讀年號以下其將讀畢也燈人進祭主後二人南北相向坐續燈焚續  
 松待讀畢而後焚祝辭於座上畢則退餘灰塵撤御食樂起撤舉樂止衆官再拜祭主進到神前賜神  
 酒禮畢

御神事をはりて後、名主彦右衛門をはじめ、廣前の縁のもとにかはるゝす、みて神酒を賜は  
 りける、やがて邦彦をはじめ、神主は山を下りぬ、別當正福寺信淨法印、御神前にす、みて、供物器爾  
 を盛て、那爾の花などをそなへて、法樂をつとめ行ふ、伊豆守敦寛彌宜、そこばくをひきゐて、道す  
 がら神樂を奏しつゝ、廣前にいたれり、

- |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 第一座 | 第二座 | 第三座 | 第四座 |
| 第五座 | 第六座 | 第七座 | 第八座 |
- 湯立神樂  
 神主伊豆守敦寛



並同祝讀祝辭曰幣仁立留下總國秋風乃千葉之郡薦枕高津邑爾鎮利坐周高秀命乃御社之  
 御前仁恐毛味申州大命伊我大將軍之君能遠津神御祖乃命爾仕坐而赤久忠成御心仁益良  
 建男乃雄々芝貴御志爾海行變水豆九尸山行變草武周尸斗一向仁君乎畏美仕坐大御代能名  
 元和登云布年之始乃年之五月之月乃七日之日爾盧我散留難波乃鄉氏如五月蠅荒振留者  
 乎幾許打亡志切散里大丈夫之香具者之貴其名霜萬代爾語利都久金益鏡手本爾爲刀御身  
 州良爾終浪速之浦爾立霧之麻我比爾消天戰死坐志故其御功乎大將軍之君深美留乃深久感  
 愛給比三百石餘利米遺下更爾增賜見子孫八十續岐間宮賀家乃橫柱不動在刀禮畏毛命宣志此  
 二御代乃稱平正德登云布年之四年爾當統年之四月乃十日餘里三日之日卜部乃兼敬卿仁乞  
 申氏神斗齋比奉始利玉葛絕留事無久都我能木之彌免伎鬼伎二大命之御德二用會利隱呂比  
 幾許之年平經氏乎智無士信左右手不輕殿人之並二君爾奉仕妻子字加樂等毛養育風吹雪降  
 夜母平蒸衾左哉具賀下爾安寢志樂久過佐來將留汝命之御身乎苦米給比爾恩賴爾楚在氣疏  
 登甚毛畏美尊味面而向味故此恩平奉報刀其武思比玉珠幾間今年波也元和之年從二百年爾  
 奈毛也二多禮染百爾千毛畏麻里遠將申斗奉立幣波至此初讀祝辭也祭主拜稽顙至是起進至  
 神前一人進執玉玉代也以竹作授祭主唱曰玩物祭主拜拍手受置神前唱曰玉一拜次鏡鏡次  
 杖以口作之次寶劍及木劍寶劍納劍制劍木次弓矢弓矢并代次馬束草授之獻之並如初儀鏡  
 授唱曰見明物獻曰鏡杖授唱曰都幾多津物獻曰杖寶劍木劍授唱曰字知太都物同代獻曰劍同  
 代弓矢授唱曰射放物獻曰弓矢馬授唱曰馳津流物獻曰馬獻畢祭主少退俛伏稽首祝讀祝辭  
 曰和栲荒妙之禮代竹玉口統御杖爾劍之大刀爾大刀代會惠而二振利弓矢馬酒波白酒黑缶規  
 閉高知規之腹滿備天今之家續留子問宮庄五郎源士信我禮代刀持齋麻波里持淨麻波理波捧奉  
 留幣乎安幣之足幣刀安其氣平其氣聞食天背安久常警爾鎮利居坐底天皇命之遠之御門刀是

戊 五月四日

間宮庄五郎中

五日卯の半發駕、酉の刻高津へつく、七日天氣いとよし、今日御式は儀注をつくりたれば、左に  
あるせり、

神主四人

高橋齋宮越智邦彦

土屋藏人源清道

高昌式部介藤原近方

福島男依疊臣直福

伶人二人 秦清大夫門人

神事儀注

午時衆神官備御食以下、各列殿上待祭主至、祭主奉神體至山下、使宮守源左衛門授之神官、神官受安  
之神座、畢降階下、祭主將登山小拜、陟階一揖、脫履就位一揖坐、南面西上一揖、衆官皆同揖、氣少時  
衆官再拜、誦身會貴三過、次三種祓亦三過、閱時祭主以下拍手再拜、海鹽內人近方起座、盤南北面、灌  
潮祭主既畢、以辨于衆官、祭主及衆官小拜起至殿下、一揖而升各就位、西面北上揖而坐、一揖氣少  
時衆官再拜、大祓三種祓拍手再拜並如初儀、衆神官歌神樂歌、曲既閱祭主揖起、逼神前坐、再拜開  
扉、少退座、俛伏稽首久之、薦御食樂起、神官起持臺子、白木三方、安土器各五箇、逐次各授祭主、祭主受而安之神  
前几上、先中央、次北、次南、次北、次南、次北、千次瓶子、北清酌、南濁醴、各薦如初儀、供畢祭主退還位  
樂止、神官進執幣授之祭主、奉幣帶制長三尺、紐以紙、奉幣式跪受、幣兩手奉之、尙左起振之、左右  
二之、其及三也將拜拍手拜、亦久之、畢又起振跪拜如初儀、畢授幣於神官、神官受植之神前單手、祭主應響單手併爲一拜、玉串內  
人授玉串於祭主、次辨于衆官、既畢祭主進插之玉串囊、囊、開紙作之、掛本社柱、小退跪拍手一拜、畢復位衆官

り御神號授け給ひしときけり、まかのみならず近郷は今もかの伊豆守がまめしたといひて神事あれば、かならずかの人のほからひによれば、それをおきて他の神主の進退に出んには、ことおこらむといふ、さればこそさきに御社の御祭事には、いづれの神主のはからひによるぞといひしに、定まれる神主はなきむねを申にぞ、上總介にははかれるなり、さもあらばあれ、かへりて伊豆守が心をひきみよとて、猶その餘御祭の用意など、こま／＼いひつたへてやりぬ、十七日、高津村より組頭久左衛門來れり、この頃御山伊豆守と調儀せしことも、彦右衛門より消息おこせたり、其あらましは、船橋よりも神主をまねき、また伊豆守をも請じて神樂奏せしめば、かたみにうらみなかるべしとなり、十九日、舉之して船橋へいたり、上總介にふた、び御神事の事をはからしむ、その、ち御食奉る式は、船橋よりの進退により、後の湯立は御山のはからひとぞさだめける、舉之かへりて神田なる敦寛が旅宿に行むかひて、その事を調じ合せしは、廿二日の頃なりき、廿五日、定禮主より、御廟參願の狀、今朝對馬守朝臣とりつぎて、左兵衛佐殿有馬へささげ給ひしよし、いひおこせ給ふ。略○中又船橋より兩御宮の雜掌高畠式部介近方來れり、大宮司上總介がことをのべていふ、養母のやまういとすみやかにして、おすさへ期すべからず、もし事あらんには、御神事の妨となるべしとなり、猶舉之して、其事を議し申べしとてかへしぬ、廿六日、おなじ朝、近方が柳原の富松町なる扇稻荷の神主のもとに、土屋藏人とともに、旅館ささだめたる所へ、舉之をつかはして、御祭の事を議せしむ、もし大宮司さ、はる事ありとも、下司等は、その事にあづからずして、御祭のたすけすべしと、うけひきけるといへり、五月四日、つとめて定禮ぬしへ行て、かごでの期及び留守心づくべきもの、交名をえるして呈せり、

私儀先祖爲廟參下總國千葉郡高津村江、明朝六ツ時、江戸表出立仕候、依之此段御届申上候以上、

予及兩民部秦氏玄節未白等皆拍手再拜退座定出進食饌一汁五種酒無量肴五種計有小膳是垂加先祖之祭也卒後於下御靈行事正親町中納言公通卿必臨祭奉幣往々梅枝着短冊奉納因以社頭題有詩歌至貞享三年予見之其後予每年奉納年魚近年奉納社頭松歌曰松加枝乃仰波高之神垣也八乃社爾八千代經蔭垂加神體鎮齋之時移祭先祖火儒法之神主其他兄弟等可祭者一幅紙書之中爲尊座兩方書姓名他人不知之或時秦氏與予問祭法翁張床子示之予亦効之以保井祖滿員爲中左右列配祭四代之祖用二月九日祖効新嘗之故實焉重遠謂先祖或兄弟書幅紙祭之此非定說更詳之

〔泰山集甲乙錄〕

二鳴祭先祖五代供物如生時於庭上祭之無主空位也

古人祭先祖世代無限供物極輕中古駟奢漸甚故舍人親王用小坏手坏供物以小微爲善此藤森神主所傳垂加也忌日不祭春秋祭自前夜一家親族童孺相集用歌舞樂神慮爲故實餅醴自大神宮供來用之無害

〔間宮氏追遠記事上〕

ことし十一年文化

五月の七日の日はわがどほつおや高秀靈神のなにはの合戦

にうたれさせ給ひてより二百とせにめぐりあへば御祭修し侍らむとかねてはかり侍り心の及ぶべき限はえこそ及ばざめれど力のつきむほどはものし侍らんと去年よりさゝげものにすべき寶劔一口鍛工主税助守秀にあつらへてつくらしめぬやよひ十日の朝源弘賢がもごに行て件の劔に彫るべき文字うつしてよどあらかじめその日をさだめぬ四月朔日三島の政行とともにかつしかの郡船橋のうまや意富比の御社へまうで、神主上總介富直利がもとへ立よりつゝ御神事の事をはかれり直利うなづきて社家そこばくをかし御祭禮を行ひ近きよに行ふ湯立神樂といふことをつとめめむなごいへり同三日高津の名主彦右衛門來れり御神樂の事語りけるにがれがいふやう靈神の鎮座まします事は近郷御山といふ所の神主伊豆守敦寛がどほつおやのはからひにより神田明神の神主そのことを都へ啓して卜部兼敬卿よ



御菓子 橘栗榎柿梨栗伏兔之類

凡神供大要如此然ニ貴賤貧富ノ品々有バ、皆相應ニナルベキ程ニシテヨシ、添御膳ヲ略スレバ、御飯燒鹽御肴各一杯、甘菜藻菜ヲ一土器ニ盛ベシ、御菓子モ一種ニス其次ハ打麴昆布鹽御飯タルベシ、又ハ御飯鹽田作、或ハ乾魚ニテモ、兎角事少ニ、子孫長久ニ、年々ナル様ニス、只清淨ニスルコト第一タルベシ、○中

此一冊爲林忠甫藏書有故而被贈予予受而珍之耳、

天保十二年辛丑夏於美濃寓居

藤原宣隆

祭祖先

〔喪儀略〕祖先をまつらば、仲春仲冬十一月は新嘗の意にて、新嘗一歳に兩次其家の吉日をさりて行へ、但喪を祭らず、吉日とは先祖の誕日、または雲、散齋三日、凡散齋之内、諸用理事如舊と神祇式に見え、を起し、或は、官位俸祿を賜れる日などな云、散齋三日、凡散齋之内、諸用理事如舊と神祇式に見え、音楽を不作、穢惡の事に不預、これを六種忌といふ、沐浴して禮服を着、妻妾は不同、林こゝに六種忌を述べし、また令に致し、前後、飯爲、散齋亦其致齋者、皆在、散齋限内とあれば、其三日の齋は、前一日散齋し、本日致齋すべし、致齋一日、致齋くすべし、然れども、餘暇なき祭事は、前一日を齋成して、神靈上に在す後一日散齋すべし、致齋一日、致齋くすべし、然れども、餘暇なき祭事は、前一日を齋成して、神靈上に在す修治め、魚蔬、藻菜を具備して、先祖また四等親の靈璽をむかへ、考妣、祖父、母、曾祖、父母、高祖、父母、是へ、本日致齋しつべし、して、先祖また四等親の靈璽をむかへ、考妣、祖父、母、曾祖、父母、高祖、父母、是を、一座とし、及傍親、家族の靈を、附て一座とし、家人の祭、酒饌、魚鳥、菜蔬、海藻、果實等、生しきを供たまたるものあらば、また其靈を一座とし、配享るべし、酒饌、魚鳥、菜蔬、海藻、果實等、生しきを供へ、祭祀畢らば、饌を撤し、料理して直會をなし、親戚知友、飲て歡娛を盡せ、凡祭事は、謹嚴に清潔して、祭餘の物といふことも、殘穢ツツひ褻慢カガしむる事勿れ、但祖靈祭日は、神祇を不拜、但其祭式は別にあり、

〔日本書紀神武〕四年二月甲申、詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕躬、今諸虜已平、海内無事、可以郊

祀天神、用申大幸者也、乃立靈時於鳥見山中、其地號曰、上小野棧原、下小野棧原、用祭皇祖天神焉、

〔秦山集甲乙錄〕祭始乎祭冊、尊神代卷曰、祭此神之魂者、花時亦以花祭、又用鼓吹幡旗、歌舞而祭矣、

庶人祭先祖亦當從延喜式極減省之、

垂加靈社之鎮齋、卒前七八年二月廿二日也、此祭每年見招、晝蒸飯酒肴、用田作等三種、晚供御饌、終

神前ニ進膝行平伏シテ、祭禮終由ヲ申ス、此時一族列拜、萬歳ヲ祝フ、

次閉扉 此時各平伏

次祭主再拜退出

鳥居代ヲ出、神前ノ方ニ向ヒ、立ナガラ一揖、

次一族退出 神前ニ向一揖

次祭主一族直會

祭畢テ、其家ノ座敷ニテ、主人ヨリ初テ、神酒御飯、少許ヲスクヒ取テ戴ベシ、夫ヨリ一族モ戴キ、神酒ヲ元ノ器ヘモドシ、總々ヘ流ヲ戴ス、酒肉ハ盆ニ入、壺等ニ頒テテ親友ヘモ贈リ、又祭肉神酒等ヲ用テ、會セシ一族ヘノ饗ニス、不足ハ他ノ酒饌ヲモマジヘ、賑々シク饗スベシ、一族主人ト獻酬ニモ、家内繁昌子孫ノ榮行、猶壽命長久、幾久シク目出度旨ナド挨拶有ベシ、詩歌ヲ詠ズルニモ、積善ノ餘慶ナルコト、メデ度申述ベシ、

神供圖

御膳

添御膳

鯖狹物 <small>魚小</small>	羹 <small>平</small>
燒鹽 <small>鹽小</small>	御箸 <small>耳土器</small>
鯖廣物 <small>魚大</small>	御飯 <small>盛高</small>

瀛津藻菜 <small>昆布滑藻菜類</small>	甘菜辛菜
邊津藻菜 <small>青苔海苔</small>	

米ヲ以禱、次神ヲ以御戸前ヲ禱

開扉 此時一族以下イヅレモ平伏スベシ 次ニ祭主座ニ歸リ、再拜兩段、一族モ神前ニ進拜、訖

テ神供ヲ獻ズ、

御膳別錄  
于後

主人初テ供フ、手長役送、一族ノ輩、カハルト、祭ヲ助ベシ、

添御膳同

主婦初テ供フ、衆婦女子、カハルト、祭ヲ助、無婦長子行之、次ニ祭主執ニ着拍手、此時一族已下

平伏ス、次ニ神酒ヲ供ズ、

初獻同

主人有母、則母行之、御肴打 同 二獻 主婦 御肴搦 同 三獻 長子 御

肴且 同 手長役送、一族祭ヲ助ク、祭主執ニ着拍手、此時各平伏ス、

御菓子 主人 御茶 主婦 小豆餅 長子

祭主再拜讀祝文、

祝詞曰、某氏乃遠祖近久代々乃祖神靈乃御前爾志親孫某、恐禮惶古美申天、春秋波替止、世

乃事乃憂毛無、今日乃此日仁至禮、信信悉久皆是先魂乃厚恩乃爲所奈猶行末毛諸有災道解除子

乃子孫乃孫八十連續天、安穩仁育幸給倍、恐禮惶美申天、須須ト讀訖テ、笏或扇ニ添テ再拜、此

間各平伏、次祭主已下起座

各暫ク側ニ退ク、食ノ頃ホド有ベシ、家狹ハ次間ニ出、

次祭主復進着弌再拜 一族手長始ノ座ニ着

撤神供 先小豆餅、次ニ御茶、次ニ御菓子、次ニ神酒、次ニ御膳、役送、次第ニ撤、

次祭主再拜兩段

ニモ一族ニモ事ユエ無ウテ揃ヒ節饗ヲカケ、愛出度賑々シク祭ベシ、

### 散齋七日致齋三日

世務多キ人、散齋モ前日沐浴シテ、家内ヲ掃ヒ清メ、火ヲ改門戸ニ注連ヲ張、神枝ニ木綿ヲ付テ立夫モ不能ハ、此心ヲモテ、我居間ニ成トモ注連ヲ引散齋ノ内六色ノ禁忌ヲ慎守ル、六色禁忌ハ、

不得弔喪問疾、食、食、不判、刑殺文書、不決罰罪人、不作音樂、不預穢惡之事、

致齋ハ前夜ヨリ沐浴シテ、家内ヲ拂清メ、專神事ノミ行フ、務多人ナリトモ、此意ヲ合點シテ、前夜ヨリハ他出セズ、表居間ニ寢テ身ヲ清メ、穢有婦人ナド居ヲ同ウセシメズ、

### 靈舍裝束

靈舍ヲ祓清メ、上ニ注連ヲ引、神ノ枝木綿ヲ付テ柱ニサス、神座前ニ葉薦ヲ敷、八足案ヲ設、神供ヲノス、カ爲ナリ、左右ニ燈臺燈臺ヲ設ク、祝机ヲ設ケ、切麻散米ヲ土器ニ盛、大麻ヲ置、其前ニ帙ヲ敷、祭主座トス、上ノ間ノ入口ヲ鳥居代トス、次間ニ注連ヲ引、葉薦ヲ敷、案ヲ設、神供神酒幣物、神枝ニ木綿ヲ付、警蹕ノ神也、祝文等ヲ設、便宜ノ所、盥嗽ノ具ヲ設ク、靈舍無棚ニ安置スル者、當日床ノ上ヘ請ジテ祭モ不苦也、卑賤ノ人ハ、祝机帙様ノ具ハ略ス、但切麻散米ヲ土器ニ盛置也、當日夙興沐浴盛服

官有モノハ、鳥帽子淨衣指貫笏杵無官ノ人ハ、肩衣袴下服等、分限ニ隨テ服ス、婦人モ盛服ス、分限ニ隨テ掛ス、髪ノ髻等、或下ゲ髪等、分限ニ隨ベシ、手長役送マデモ其意得有ベシ、

祭主以下着座 皆盥嗽シテ座ニ着如常例

### 祭主着帙

笏或ハ扇ニ神枝ヲ取添、鳥居代ヲ入、立ナガラ一掛ス、帙ニ着テ一掛、次ニ拍手、祓ヲシテ切麻散



ノ如クニ、薨卒ノ年序ヲ知ル過去帳ヤウノモノモナケレバ、コレニ記ツケテ、年ニ一度コヽニ掛テ、兒女子ニモコレヲ知シメン爲ナリ、強テ神主位牌ノモテナシニモアラズ、此外ニモ經見卿ノ肖像ヲ大夫人ノツクラセ置タマフアリ、又大祖ヨリ曾祖父經晨マデノ家系ヲ、祖父卿ノ筆ニ記タマフ一軸アリ、コレニ先考ノ像ヲ從兄武依神主ニ畫カシメ、家系ト對軸ニナシ置タレドモ、秘藏セルマデニテ、コレヲ用ルコトナシ、是等ハ一家限ノ事ニテ、他ノ例ニハ用ヒガタシ、又靈社等ノ祭ハ潔齋シテ祭レドモ、此魂祭ハ喪祭ノ如ク別火ニシテ、浮屠家ノ靈供ノ取扱ニモカハルコトナシ、此祭ニハ、新ニ捐館ノ靈ヲモ一ツニマツル故、此ノゴトシトゾ、

正忌日ニモ如在ノ禮ヲ盡シ、新物其外、存世ノトキノ好物ヲモ供ス、忌日ヲ直ニ靈社ノ祭日ニ用フル家モアリ、

又春秋ノ中月ニ祭ルモアリ、年始歳末ニ饅餅ヲ供スルモアリ、吾家ニハ新餅トテ、正月十五日過ニ餅ヲツキテ先祖ニ供スルナリ、

墓祭、コレモ俗ニシタガヒテ、七月十二日十三日ナリ、七日ニ家僕等墓所ニ參リ、草棘ヲ掃除ス、墓參ノ時ハ米神ヲ供ス、忌日ニモ參ルモコレニ准ズ、凡墓所ニ參レバ、當日憚アル故、吾家ニテハ、男タルモノハ七月十三日ノ朝、其外父母ノ忌日ノ外ニハ猥リニ參ラズ、

右依外宮七福宜度會言彦神主之尋、四福宜荒木田經高神主所被答也、

安永四年十一月以經高神主所被記書寫之

荒木田神主經雅

〔喪祭小錄〕祭禮小錄

四時祭式

凡テ中月ヲ用ヒ、日ヲ擇テ一日ヅ、祭春分夏至秋分冬至杯ヲ用ユ、然ニ世務多人、四時ニ祭コト不能ハ、春秋二分計ニ祭、或ハ彼岸中日ヲモ用ユ、夫モ不能ハ、春秋秋秋年ニ一祭スベシ、家内

モヨト十年忌日ニ式ヲ隔ヘテ祭レ、其祭皆右ノ小祥ノ式ニ准ジテ祭ルベシ、其子孫ニ至リテモ、九  
ニ祭ルベシ、十ハ數ノ極ナレバ、十年ヨリ百年マア祭レヨ、百年ヲ過シナバ、百五十年マアモ忌日  
十年ヲ節ニ祭ルベシ、如此子孫ニ百傳ヘ、法式ニ定メマホシケレ、是レシナバ、百五十年マアモ忌日  
ノ厚キニ歸スルヲザナルベシ、十年ゴトノ忌日ノ祭ヲミニ非ズ、年々々々、其月ノ忌日ニハ、子  
ル者孫タル者、考妣祖考祖妣ヲバ祭ルベシ、祭ハ内々々々、祠堂ニ於テ祭之、  
秋冬ノ祭ハ、考祖ヨリ遠祖マデ合祭スレバ、祠堂ニ於テスベシ、  
○中

明和六年己丑歲冬十二月

遠江磐田郡見附國府天神神官菅原信幸謹撰

〔吉祭次第〕凡靈社ノ祭ハ、二季ニ行フベシ、大略氏神祭ニ效ヒテ取行ヒ然ルベキ歟、吾家ノ靈社祭  
ハ、四月十一月廿五日、供物ハ洗米酒水干鯛鯉節長飽鹽、土器ニ盛、各凡案ノ上ニ備ヘテ、酒三獻、主  
人以下拜禮ヲ致ス、餘ノ月ニモ廿五日ニハ、家ニ於テ件ノ供物ヲ床ニ備ヘテ祭ナリ、年中ノ佳節、  
其外臨時ノ祝日ニモ、靈神等ノソナヘ物ノ通リヲ土器ニ盛リテ床ニ供ス、又昏冠其外家ノ吉事  
ヲモコヽニ告ゲ、患疾其外家ノ難儀ヲモコヽニ祈ルナリ、但大事ハ靈社ニ參リテ告グ祈ルナリ、  
出行ニモ同ジ、神事參籠ニモ、進退トモニ拜禮ヲ致ス、又毎日ノ拜禮ハ靈牀ニテ致シ、毎朔拜祭日  
等ニハ靈社ニ參ル、又他ニ止宿ノ時モ、心中ニ敬ヲ致ス、但神事參籠ノ時ハ然ラズ、

七月靈祭ハ、俗ニシタガヒテ取行ヒ來レリ、多分ハ家ニ久シキ老嫗ナドニ任セオキテ、主人タル  
モノハ其コトヲ不知、但吾家ニテハ、大夫人ノ遺訓アリテ、主婦自取行ヒ來レリ、其儀喪祭ノ通り、  
廂ノ前ニ靈棚ヲ設ク、棚ハ五重也、白木ニテ作りオキ、年々コレヲ用ユ、コレモ大夫人ノ指圖ニテ  
造ラセオキ給フヲ近年マデ用ヒシニ、破損ニ及ビ、其制ヲ摸シテ新ニ替替タリ、棚ノ先ヘ櫛一本  
ヲタテ、上ノ棚ニハ始祖ノ膳ヲスエ、其脇ニ素麴餅瓜柿、其外新熟ノモノヲソナヘ、酒瓶子ニ、其次  
四重ニハ、一重ニ十膳ヅヽ何レモ膳ニハ柏ノ葉ヲ敷盛器ハカハラケ、箸ハ麻ガラ也、此四重ハ四  
代ノ祖考ニ付タル神靈ノ膳也、棚ノ下ニハ蒔筵ヲシキ、棚ノワキニハ切燈臺ヲタテ、夜ハ火ヲ點  
ズ、サテ吾家ニテハ、此棚ノ先ヘ先祖代々ノ名字藁卒ノ年月日ヲ記タル褱具ヲ掛ル、是ハ浮屠家

次祭主復進底 軾仁 着再拜一族手長 神供於 撤久 先御幣次菓子 次御膳次菓子 手長役送於 介久

次祭主假仁 御戸於 閉再拜志 退久 一族從者各退出

申刻祭主已下神前仁 進朝如

次祭主軾仁 着拜揖拍手朝如

次御戸開朝如

次夕御膳於 獻手長役送一族祭 助朝久 如

次祭主軾仁 着拍手八平 各平伏朝如

次神酒三獻御看於 供朝如

次軾仁 着拍手八平 各平伏朝如

次神樂拍子 大倭舞朝如

次御燈庭燎

次神供於 撤久 手長役送朝如

次祭主庭上底 再拜兩段神前仁 進膝行平伏 祭禮終由於 申寸 此時一族庭上仁 列拜萬歲 祝布

次御戸閉此時平伏

次祭主再拜退出島居代 出神前 方仁

次一族退出島居代 出神前 方仁

次祭主一族直會

翌日壇於 鎮女解齋

享保十一年丙午五月

玉木正英謹書

〔弊里神官慎終記〕期祭十三月メノ三年祭二十五月ノ十年祭二十年祭ト段々十年メゴトニシ死年七

酒瓶一雙

御菓子朝仁

納戸役人幣帛木綿紙等調進○中

祭次第

早朝祭主先庭上乃床子仁着從者皆進、

次一族庭上乃床子仁着、

次祭主盥嗽取御幣鳥居代利與入正寫神殿仁進一揖立着一揖、

次拍手二大麻於取中臣祓一三科祓反大祓反一切麻散供於散石左大麻於以祓石右、

次一族盥嗽鳥居代利與入立一庭上仁引立右、

次祭主神取神前仁進御戸前於祓左右御戸開此時一族從者已下平伏、

次祭主座仁歸利再拜兩段一族神前仁進再拜兩段拜終座大床仁進座右仁着

次神供於獻手長役送一族祭於助久、

次祭主軾仁着拍手八平此時一族已下平伏、

次神酒於獻初獻御看打二獻酒白御看三獻酒清御看見手長役送一族祭於助久祭主軾仁着拍手八平此時各平伏、

次幣使御幣於進幸祭主捧幣再拜兩段幣幣使御幣於頒奉留此間各座仁着、

次手長祝文於進幸祭主祝文於笏仁添再拜志讀讀終氏笏仁添再拜此間各平伏、

次神樂拍子大倭舞、

次神馬於牽

次祭主已下起座提如各暫側仁退、



瀛津藻菜昆布類

甘菜辛菜

邊津藻菜海藻類

神酒

初獻黑酒平

御肴獻打

二獻白酒平

御肴獻打

三獻清酒平

御肴布具

酒瓶一雙

御菓子各盛高杯

橘、栗、榎、柿、棗、梨、伏兔フトウネコメ、興米、小豆餅、乃類

夕御膳

海老盛舟

羹

燒鹽小盛

鳥盛羽

御飯盛高

誼御膳

蛤

鯉魚物一

鹽鮎切目盛

鯉魚節

神酒

三獻朝仁

御肴三種海干鼠肴類

モ、今ハ佛法ニ導シテ其儀ナシ、

〔祖神祭〕橘重信家禮

散齋七日、致齋一日、

散齋前夜沐浴志、家內於拂清女、火於改女、門戶仁注連於張神木立留、散齋乃內、六色禁忌於慎守留、○

致齋前夜沐浴家內於拂清女、致齋、專神事而已行布、

神殿於祓清女、四面仁注連於引、大幔於張、四隅仁神木立留、廣前仁葉薦於敷、葉薦乃上仁案八足木

數脚立、神供及幣物於置案止、爲案乃左右仁燈臺燈臺於設久、案乃前仁祓机於設久、机乃上仁切麻

散供器米、土、大麻於置其前仁祓敷祭主之庭上仁半幔二帖左右仁張同久神木立底、鳥居代止爲

左幔乃外仁床子於設祭主乃床止、爲右幔乃外仁床子於設一族乃床止、爲神座乃次乃間仁注連於

引葉薦於敷、案於立底、神供神酒幣物神枝神木結付神木、誓、祝文等於設置、庭上便宜所仁盥嗽乃具於設、

當日鷄鳴沐浴盛服

祭主烏帽子淨衣指貫笏沓手長素袍袴、從者長上下、諸士半上下於着、

膳夫、神供、神酒菓子等於調進、

神供神木白木三力、供物各土器仁盛、  
數輪有膳數者、厨座之數也、

朝御膳

鰯狹物小魚、  
藥平切目魚

燒鹽小、  
御箸耳土

鰯廣物大魚、  
御飯高

添御膳

一二分二至ニハ、前二日潔齋スベシ、譬バ祭ノ當日三日ナレバ、朔ノ夕ヨリ齋スベシ、

一四季ノ祭ハ二分二至也、前日書院ヲ掃除シ、當朝未明ニ燈臺花瓶ヲ設ケ、明水陶器カ茶碗ニ入ル、水ハ井花水ヲ

用、菓子其時ノ木實ニテモ、又麩菜ニテモ、三方或ハ高坏ニ盛テ備置、

一先祠堂ニ至テ、揖シテ扉ヲ開キ、譬バ夏至ナルニ依テ、書院へ請ジテ祭奉ランコトヲ告テ、靈璽

ヲ案ニノセテ書院ニ出シ奉ル、但書院へ出シ難ケレバ、靈屋ニテ其儘ニモ祭ナリ、

一神座ノ前ニテ香ヲ焚ク、香ハ沈香ノ類三度、香ハ上古ナシトイヘドモ、中古ヨリ有テ、父祖モ是

ヲ知レリ、如在ノ禮奠ノ義ヲ以焚之、靈ヲ降シ奉ルベシ、次ニ再拜拍手シ俯伏シテ、譬バ夏至ナ

ルニ依テ祭リ奉ル由ヲツブヤキテ退キ、次ニ御膳ヲス、ム料理ハ一汁三菜、二汁五菜、其分限

ニ順ヒ、海山川里ノ物ヲ供フベシ、皆極熟セシメテ奉ル、尤鹽梅スベカラズ、次ニ箸ヲ取テ、飯ノ

上ヲ少許取テ、器ノ蓋カ又膳ノ中間ニ置テ、穀神ニス、メ奉ルベシ、次ニ其箸ヲ飯ノ中ニ立ル

也、是ヲ佑ト云リ、但箸ノ上ヲ少靈ノ右ニナス、次ニ三度酒ヲ獻ズ、次ニ茶ヲ獻ズ、葉茶抹茶何レ

ニテモ用ベシ、次ニ祝詞ヲ讀テ、後ニ或ハ屏風ヲ引カ、幕ヲ下スカナドシテ、靈前ノ見エヌヤウ

ニシテ退ク、靈屋ナレバ閉ナリ、食頃ノ間ホドシテ、靈前へ出テ揖シ、御膳ヲ撤スベキ由ヲ申テ、

膳具悉ク下シテ、手ヲ拍テ再拜シ揖シ、靈屋へ歸シ奉ランコトヲツブヤキ、形代ヲ案ニノセ奉

リ靈屋へ安置シ、揖シテ退ク、次ニ奉リタル物、并ニ祭ノ餘リヲ一家敬テ戴ク也、

### 〔三〕禮次第 各垣守 神供

一親ヲ祭ル事、度々祭レバ、オロソカニシテケガス故ニ、一年ニ二度祭ル者也、春ハ二月、秋ハ八月、

其死シタル日ノエトヲ考ヘ、其干支ニ當ル日ヲ用フ、略中

其時水ヲサ、グル事有リ、其水ヲツボニ入レ、又ノ祭リ迄神ダナニ置イテ、又ノ祭リノ前ニ、隨

分清キ川へ流シ、新水ヲ汲テ祭ル也、是ハ永同法トテ、末代不易可成由、上代ヨリノ勅定ナレド

# 古事類苑

## 禮式部三十三

### 神祭

祖先等ノ靈ヲ祭ルニ、國風ノ式ヲ以テスルモノ、之ヲ神祭ト爲ス、此神祭式ハ、往古ニ在リテ、其詳ナルヲ知ラズト雖モ、近世ニ至リテハ、多クハ神學者流ノ朱熹ノ家禮ニ據リ、或ハ普通ノ神祭式ヲ折衷シテ制定シタルモノナリ、而シテ年期ヲ定メテ之ヲ祭ルコトハ、俗習ニ從ヒ、專ラ佛氏ノ所爲ニ倣ヘルナラン、

祭式

〔神祇提要十一祭服忌〕祭神法、自前日潔齋沐浴、而着淨衣、避不淨止忿怒、及祭日着齋服、無齋服者、新衣裳、燒香拜而讀祝詞、讀了拜以告奉膳之由、而退以供之、常祭器之外、別設一案供靈供、靈供、穀菜餅酒魚果實凡山野海川等之衆味、得求得爲者、皆以供之、決不用獸類、設此膳、置幣之前大案之後、

碗皆用土器或茶碗、皆以<sup>ツグモ</sup>捲爲臺、盛菓者用高坏、

昆布、打鮑、搗栗、必用之、

右祭之略法、而多是貧賤家之用也、若富貴家、則用全膳、

〔卜部家傳竹溪翁口授留書〕庶人祭禮ノ事

一高祖父ヨリ以下ヲ二分二至ニ祭ル、若分至ノ日ニ無據障アレバ、丁ノ日カ、亥ノ日カニ替ヘテ祭ルベシ、



祭主君

七六二

祭父母近親

七六三

祭子弟

七六五

祭先哲

七六八

祭師弟

七七一

祭朋友

七七三

忌日

七七八

古事類苑

禮式部三十三

神祭

祭式

七一九

祭祖先

七三〇

祭先哲

七三八

祭師

七三九

祭殉難者

七四四

有事而告

七四六

忌日

同

節日

七四七

雜載

七四八

儒祭

祭式

七五二

時祭

七五九

有事而告

七六〇



○按ズルニ光仁天皇皇子早良親王、延暦四年十月七日薨ズ、謚シテ崇道天皇ト稱ス、

〔薩戒記〕應永卅年十月七日乙卯、國忌廢務、崇道天皇公家不知行淨金剛院御入講始、

〔勸仲記〕永仁二年五月十四日甲子、今日參北白河殿、後高倉法皇二年後堀河御父、貞應、御國忌、被行御

入講神林寺殿也、親氏朝臣奉行公卿吉田前中納言子兼仲原三位重經子重直衣、着座、十座講論了、有仰

經供養、次給御布施、公卿各一反取之、自餘親氏朝臣取之、小時退出、

〔小右記〕長和二年正月八日庚子、今日御齋會始參入省中刻許、右大臣、內大臣、大納言公任、中納言俊

賢、賴通參議、經房先參、子參入略中、諸僧自大極殿東西壇上參講、讀師亦同、無音樂、蓋是御國忌月歟、

天曆九年以後例歟、可尋見矣、



經阿彌陀佛同繪御佛同繪布施專一題名僧殿上人取之事未終源納言歸洛予同軒

〔長秋記〕大治四年正月廿五日甲辰皇后宮呪師是今日轉輪院御國忌也○子莫不可然事也凡近代全

無如此之沙汰著束帶先參皇后宮次參轉輪院御導師隆覺律師別當新中納言左兵衛督幸相中將

下官師時等頭辨以下侍臣十餘人參會式部大輔敦光朝臣爲御誦經使

〔年中行事秘抄八月〕廿二日仁和寺御八講事法皇

○按ズルニ鳥羽后待賢門院藤原璋子久安元年八月二十二日崩ズ次ノ二條ニヨルニ此御八講ハ待賢門院ノ爲メニ行ヒシモノナラン而シテ法皇トハ蓋シ鳥羽法皇ノコトニテ其下脫文アルベシ

〔台記〕久安三年八月廿二日癸丑未刻詣寶金剛院依故待賢門院忌日也先之上皇德○崇及前齋院渡

御法皇爲羽羽右大將參入後被始事法眼俊智爲導師上皇自筆涅槃經十卷相加被供養及暗參詣

〔玉海〕安元三年八月廿二日己丑法皇白河幸仁和寺依待賢門院御國忌也

〔薩戒記〕應永卅年十一月廿三日美福門院崇德母后藤原得子永曆御國忌安樂壽院理趣三昧

〔年中行事秘抄六月〕廿四日國忌事順德母后藤原得子永曆御國忌安樂壽院理趣三昧

〔實躬卿記〕正安四年八月九日庚午昨今前京極院文永元年八月九日崩御八講也於太多勝院被

行仍上皇宇多御幸龜山殿

〔續日本紀三〕慶雲四年四月庚辰三日以並知皇子命文武御父草壁皇子持統天皇三年四月十三日薨薨日始入國忌

〔續日本紀三〕實龜二年五月甲寅始設田原天皇光仁御父八月九日忌齋於川原寺

○按ズルニ施基親王國忌ハ上文廣置條ニ收ムル所ノ江次第抄ニ光仁時田原トアルモノ是

ナリ

〔年中行事秘抄十月〕七日國忌事順德母后藤原得子永曆御國忌安樂壽院理趣三昧

下公卿取僧侶布施晚頭事了退出

〔中右記〕天永二年八月七日午刻許、依權參六條殿、東帶是故郁芳門院御忌也、

〔年中行事秘抄〕正月廿五日國忌事藤原氏、顯皇太后、子、東寺、○鳥羽、母后、

是日於轉輪院有御國忌事、

〔公事根源〕正月國忌

廿五日

是は鳥羽院の母后女御、苅子の御忌日也、天仁元年に正月四日の御國忌を捨て、この廿五日の國忌をもちゐらる、異朝にも天子七廟の内、太祖と昭統穆統とをのぞきて、其外の廟をば時にまたがひて、毀廟とてやぶり捨る事の侍にやけふの御佛事は、東寺にて行はる、さしたる事なし、大かたかやうの御國忌などの日は、御門御あそびなどをとめさせ給き、されば禮記に、忌日には樂せずといへり、我朝の律の文にも、國忌の日樂をなす者は杖八十とあり、國忌などに、音樂をなすともがらは罪科におこなはれ侍しにや、又廢朝廢務といふ事あり、廢務は諸司政をせずといへり、是は一日をかざりて、天下諸司の政をとめらる、是數日に及びては、萬機の政を捨おかれては、かなふべからざる故に、一日をかざりて廢務日とは申也、今この廿五日の御國忌も、廢務日にて侍べし、廢朝と申は、諸司の政はよのつねにかはらず、ごり行侍れども、天子みづから朝にのぞみて政をきこしめさぬ也、これをば、廢朝ともいふ、廢朝は數日にもおよぶべし、諸司は政事をとどめざるゆゑなり、

〔中右記〕元永二年正月廿五日、轉輪院御國忌也、○右衛門督宰相中將、右兵衛督殿上人五六人參入云々、講師法印永縁、

〔永昌記〕大治元年正月廿五日辛卯、今日轉輪院御國忌、○仍着東帶參入、源中納言、新中納言、皇后宮權大夫、右兵衛督殿上人實光、行宗等朝臣以下、十餘輩參會、御導師、證觀、大僧都、題名僧等座定、御

又出御御裝束如例但御冠櫻柏夾也此事有兩說也此如衣如常例也

〔日本紀略花山〕寛和元年四月三日丁丑於東寺始修贈皇太后花山母后藤原實子國忌

〔日本紀略一條〕長徳二年四月三日癸酉今日國忌○依當神事付寺家

〔年中行事秘抄十二月〕十九日慈徳寺御八講始事

若有閏月其月修之云々

長保四年十二月廿二日辛未於一條院奉爲東三條院○一條后藤原詮子長保始之寛弘已後

於此寺行之自今日四箇日也執柄家行之家司以下參向行事

〔執政所抄十二月〕四日慈徳寺御八講事

件御八講自十九日被始之請僧十六口以舊僧名十日比申上之間定僧名被下之時句案主成上

諸書申御判放遣之但月迫之比請僧各以辭退歟頻被請之布施絹卅六疋疋下通經料廿六納殿

行事出納請之

家司下家司出納等參勤之

〔年中行事秘抄六月〕廿一日國忌事藤原康平五年六月二十一日崩

〔爲房卿記〕承暦二年六月廿一日戊午於東寺被修國忌○如例但無御國忌儀

〔台記〕久安六年六月二十一日丙寅今日右大臣○藤原行仰明日可有立后○近衛后藤原呈子之狀於外記今日

是國忌○茂非無其憚

〔年中行事秘抄九月〕廿二日中宮御崩日事賢子○堀河母后聖德元年九月二十二日崩

〔年中行事秘抄八月〕七日都芳門院堀河准母八月七日崩王御國忌事公卿參六條院院司以下殿上人參入行之

〔中右記〕天仁元年八月七日甲申今日都芳門院御國忌也依有催未刻許奏六條御堂左衛門督皇后

宮權大夫宰相中將能被參仕僧侶廿口先有僧前次講筵以增珍僧都爲導師御經供養左衛門督以

正月四日は村上天皇の母后子の御國忌也、天曆九年正月に、御門宸筆を染られ、法華經を遊して弘徽殿にて御八講の儀侍き、其後法性寺にて、毎年に御八講は行はるゝに、さしたる事なし、

〔日本紀略村上〕天德元年正月四日壬辰、國忌子。

〔小野宮年中行事四月〕廿九日國忌事安寺、贈太后、○冷泉、四融、母后、藤原、安子、康保元年、四月二十九日崩。

〔小右記〕天元五年四月廿九日庚寅、刻限參内、今日御國忌子。安未時許供御齋食如恒、下官實資原供

給膳權律師稔算候齋、參議伊勢候御前御齋食撤了後、左大將參入、

〔親信卿記〕天延元年四月廿九日、今日御國忌也子。安依例差侍臣及彼從藏人所雜色以下、遣法性寺、

令設御諷誦事案、内藏。供御浴午一刻供御裝束、其儀下母屋御簾但南第二間暫不下、供御膳了後、下撤、之、又南御簾、依御物忌本白不上。

查御座、鋪小筵二枚、其上敷圓座爲御座案、攝部、當南第一間二柱東西妻、敷疊一枚爲僧座、下或鋪圓座、

可冷敷、公卿座如例、南廊鋪疊四枚爲侍臣座案、相對、午二刻供御齋食、東廂南第三間、迫御簾立御臺盤、

二脚、無臺、供内膳司御膳案、南北妻立之、供御膳、御案并御汁物二種、次御厨子所御膳、衝重廿合案、供之、

數在折。次内藏寮賜僧供案、三脚、北面、次麗景殿女御、供臨時御膳、仍侍臣經孫、廂簀子敷、渡從殿北方傳、

取、當御前孫廂立之案、高杯、掛木在折敷、案、記或云、立額間、又供之、次第在侍臣、供、次、藏人頭惟正朝臣、

爲陪膳案、三度膳、一身供、率、但其座、依御物忌、候、御、次敷食巾、公卿侍臣賜饌案、以公卿食巾、次宸儀出御、次

僧參上案、僧少僧、都寬靜、案、舊記、出御之後、公卿侍、次公卿内大臣、四位一人、水口又從内供之但、不詳、

侍臣、或說云、陪膳召人、藏人參入陪膳目之、藏人退出、取折敷箸土器等參進來、取一兩種、始從僧至子

侍臣、次供御漿、次給僧、次侍臣賜黑湯案、中、次入御、次僧并臣下退出、次撤御厨子所御膳、給女房、次

撤裝束等、供常御座如例、上母屋御簾但、例下、案舊記云、撤御膳、次第一内膳、次御厨子所、次臨時、

次僧前、次侍臣云々、於此例未詳、



〔三代實錄四十六〕元慶八年六月十九日戊申、勅贈皇太后、○光孝母后、承和六年六月晦日崩、依太政

官、今月十七日論奏、省八月九日田原天皇國忌、以六月晦日、設國忌齋會於東大寺、○續延喜式江次

東寺、願下百官及五畿七道諸國、諒、

〔九條年中行事六月〕晦日國忌事、東寺○宇多后藤原胤子、

〔日本紀略三十七〕天曆元年六月卅日癸未、國忌、○胤廢務、

〔小右記〕天元五年六月廿九日己丑、○小今日國忌、○胤而昨日東寺、言上從去七日有死穢之由、依穢

被行之例、已無所見、尋問西寺及外記、已無其例、付寺家被行、

〔日本紀略八〕寬和元年四月二日丙子、除六月晦日贈皇后、○胤國忌論奏事、被仰下之、

〔小野宮年中行事正月〕同日、○四太皇太后、○村上天曆八年正月四日崩、國忌事、東寺

〔江次第抄三〕政事要略

太政官符式部治部兩省

定太皇太后、○釋國忌事

去年正月四日崩

御齋會設東寺、

右左大臣宣奉勅如件者、省宜承知、依例行之、符到奉行、右少辨菅原朝臣、

左大夫阿蘇宿禰

天曆九年十二月廿五日

〔北山抄正月〕四日國忌事、東寺○

參議遲明到寺南門、先問上官參否、年來依無中門廊等、不着中門、直着堂前、然猶依舊例、入自南門耳、

〔公事根源正月〕御國忌

朝廷御忌日ニ重罪者勿論輕罪之もの仕置申付間敷旨被仰出候ニ付右御日柄左之通可被相心得候

光格天皇御忌日  
十一月廿九日

新清和院○光格后欣御忌日  
六月廿日

新待賢門院○仁孝后正御忌日  
七月六日

右御日限御仕置申付間敷候尤右者御忌月計相憚可申候

一仁孝天皇新朔平門院御忌日之儀者兼而被仰出候通例月相憚可申候

一今上御誕辰之儀も被仰出之通相心得可申候

右之通相觸候間可被得其意候

慶應三丁卯年三月

朝廷御忌日除刑日御書付

三奉行江

朝廷御忌日向後除刑日左之通

仁孝天皇御忌日  
二月六日

新朔平門院御忌日  
十月十三日

右御稱忌日而已御仕置申付間敷候

孝明天皇御忌日  
十二月廿九日

右御日限例月相憚可申候

〔日本紀略三上〕天曆二年三月十日己未興福寺國忌○平城嵯峨母后藤原乙未

世僉唱昇平、握七政於掌中、國悉事運送、方今眇身、叨登旋極之祚、元偏荷鍾愛之恩、內省猶耻慈訓之淺、每察仰訴追慕之深、因茲奉摺、寫妙法蓮華經一部八卷、并無量義經觀普賢經各一卷、適命前大僧正位慶算爲唱導師、學究諸宗、行越群侶、獨立丁々如松柏、誇雪寔是應世之材、可謂凌雲之器、然則尊儀鏡智輝光、忽示白毫相好、乃至法界無數含靈、平等拔濟、敬白。

貞享二年八月十九日

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右先院聖雲迎六廻忌辰、恭設一乘妙典、開結二經之供養、奉備惠炬之白善、乃至上界下界、沈魂滯魄、頓成正覺、仍所修如件、敬白。

貞享二年八月十九日

十九日、於般若舟院、被修後水尾院御忌御法事、奉行頭中將基勝朝臣、看座公卿散花殿上人等、昨今參入云々、導師法曼院前大僧正也、御導師之事、日嚴院、法曼院、隔年勤仕、是二三年來之事也、此外無人云々。

〔元治紀事〕元治元甲子年五月十一日、於席々、演達之。○中

一仁孝天皇御忌日 六日

新朔平門院○仁孝后御忌日 十三日

右例月其心得可有之、海內布告之事、

〔德川禁令考後聚六〕訓禁布令元治元子年六月廿四日

朝廷御誕辰及御忌日、除刑日御書付

こも復古せしめ給ふこと許多なり、實に山事轉革、再策の偉功、天恩の餘慶と謂つべし、予今先帝  
○後の奉爲に御國忌を修し、○延元四年八月十六日崩、又護摩新學の供僧、相繼て勳行するは、咸その遺烈な  
り、

〔高野春秋十八〕正徳四年八月十八日、執行御國忌、曼供於大塔、是雖爲十六日恒例、諸役人天野下著  
故也、後醍醐天皇崩、已來、每八月十日爲期、恒不及記、有變則記、

〔大乘院寺社雜事記〕寛正六年十月廿日、自今日於仙洞法花八講始行、今日則後小松院御國忌也、永  
享五年十月二十日崩

〔宣胤卿記〕永正四年九月廿八日、今日後土御門院御忌、今年八月、每。年。臘。也。○明。於。安。禪。寺。被。行。御。經。供。養。○中。近。日。程。遼。遠。爲。諸。人。不。便。之。間。以。天。憐。於。近。所。被。行。云。々。安。禪。寺。ハ。土。御。門。町。也。故。院。皇。女。比。禪。尼。爲。御。住。持。依。其。便。被。行。也。元。者。公。家。御。法。事。於。安。樂。光。院。被。行。也。亂。後。如。形。有。其。寺。尤。於。彼。寺。可。被。行。事。歟。但。猶。近。所。便。宜。可。然。之。謂。歟。

〔二水記〕大永七年九月廿八日、晚頭參詣、今日後土御門院御正忌也、至去年迄、有御經供養、從當年千  
疋被付寺家御法事、可爲黑衣之沙汰之由相定了、

〔基量卿記〕貞享二年八月十六日、參内、頭中將近口來十九日、後水尾院御忌日、○延寶八年八月十九日崩御法事

諷誦願文、大内記草進清書事、窺之、先年之義、去々年曼殊院宮清書去年妙門へ被仰出之處、手痛御  
理也、今年何へ可被仰出哉、窺之處、妙門へ可申由也、則申渡頭中將、妙法院宮へ申入處、又御手痛御  
理也、曼殊院宮へ可申入由申渡了、

一諷誦御願文章記之、

夫立極執中、八荒共歸、大化之發、體元居正、萬代皆知、至德之周、聖澤無疆之基、最出於此者乎、伏惟後  
水尾尊儀、與三皇業兼五帝才、行合坤儀、紹永祚於北宸矣、體垂乾象、正上位於南面焉、謀萬機於胸次、



雄朝臣實躬朝臣基兼朝臣實連朝臣北面五位行廣六位五六輩御隨身久良等供奉今日可有御一宿云々代始御即位以前無免者之由奉行職事俊光相語

〔實躬卿記〕正安四年乾元元年二月十七日壬午午後嵯峨院御入講結願也仍御所御所御幸龜山

殿公秀朝臣可參院御幸之間已刻着布衣參集之間也予先參西郊御所入道殿父公實躬御祇候殿上之間於彼所改着束帶祇候先法皇臨幸御

與云々御共入々二條前宰相爲雄高倉宰相五辻前宰相後雅生茂實朝臣二條方布

上北面仲良次上皇御幸花山院新中納言師信誦文抄白櫻實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

實藤朝臣生薄物白基藤浮線綾櫻公秀忠藤二藍時衣紫經宣生薄物加公秀基定稱前白衣

にはさまれたるすがた、たえたるあとをおこされたり、これにてもいにしへにたちかへるにや、  
○中 新院○後 草 後のこのほど御同宿ある、その御方の上臈の御隨身はじめをはりの日、野矢をおひ、毛  
脊をはきて、砌の下に候、このすがた、ちだちにはめづらしき事なるに、初日の公家の御誦經、結  
願の日の度者、御方の御加布施、よの常なる事なれば、これをしるさす、

〔勤仲記〕弘安五年十月十一日丁酉、早旦着東帶參龜山殿、今日被行土御門御國忌、院司右少辨爲方  
奉行於淨金剛院被行之、公卿權中納言一人着座、御導師寛圓法印已下七八口、予○藤原 勤堂童子、  
事了給御布施、權中納言取御導師被物、予取同裏物、殿上人知嗣朝臣、○布衣 追參奉行、予兩人外無人、  
數反取之、入夜歸了、

〔薩戒記〕應永卅年十月十一日己未、土御門院○御國忌

〔勤仲記〕建治二年八月六日戊辰、今日後堀川院御入講也、○天福二年八月六日崩 於安樂光院被行之、予○藤原 兼仲  
所申沙汰也、

〔花園院御記〕元亨二年八月六日辛未、今日後堀河院御忌辰也、仍就安樂光院道場供養阿彌陀一尊、  
妙法華一部、憲守律師爲導師、申刻出御、予親王同乘車、自中至安樂光院、佛經供養如例、前大納言、○光俊  
取布施資明朝臣取裏物、導師被物三重裏物一題名僧二口一裏也、今日資明奉行也、今日御佛事、每  
年爲入講、而龜山院御分御領、朕却以無沙汰、仍止入講爲佛經供養、冥慮可恐事歟、

〔花園院御記〕正中二年八月六日癸未、今日有後堀川院御入講一日八座也、去年室町院○後堀河皇女 臨幸、  
王御遺領等有違亂、仍不行之、今年所興行也、玄智已下八人、公卿顯實卿一人着座上皇○伏見 有御幸、

永福門院○伏見 有御幸、  
〔勤仲記〕弘安十一年二月十七日壬申、參猪隈殿、○大政御座 新院○龜山 御幸龜山殿、先皇○後 御忌辰也、

予○藤原 兼仲 不慮見物、雖爲内々儀殊被刷供奉人、懸總楸、公卿皇后宮權大夫連軒殿上人實永朝臣、爲

〔年中行事秘抄<sup>正月</sup>〕十四日高倉院御國忌事

御八講事

治承五年有此事<sup>○正月</sup>養和二年正月十四日於最勝光院有御經供養其後每月如此、

壽永二年正月十九日於彼道場始行御八講公卿參入辨官行事上官參入講問各八人四日八講

一如尊勝寺僧名於陣定之明年以後以逝忌可爲式日、

〔國太曆〕延慶四年二月廿二日大將殿<sup>○藤原公實</sup>參大覺寺殿長絹御小直衣御與布衣上結諸大夫

侍各一人被召具之賴定來云今日後鳥羽院御國忌可有免者上卿及關如爲之如何予<sup>○藤原公實</sup>云真

實御事關者雖何箇度可存知之條勿論而今日伴院御八講結願三條中納言參云々可被仰彼卿乎

又云參西郊及窮屈歟仍不及觸催必可存知云々又云大將參西郊了退出定及深更歟不可苦者可

存知之爲悅云々即賴定歸了、

○按ズルニ後鳥羽天皇延應元年二月廿二日崩ズ百練抄ニ遺詔ニ依リテ國忌ヲ置カズトア

レド後世其御忌日ヲ稱シテ國忌ト爲シ齋會ヲ設ケシナラン、

〔後嵯峨院宸筆御八講之記〕文永七年十月七日先院<sup>○土御門寬喜三</sup>の國忌をむかへて龜山の洞

戸をおしひらき厩戸の太子の金銅六重のかたをうつし嵯峨の上皇の宸筆八軸の妙典のあと

をおひ給ふ卅一口の頌徳をめして五ヶ日の法筵をのべらる道儀まことに嚴重なり奇特なり

機感すでに相應す佛天さだめて納受し給らむ就中證義重難をうる事はまゝ前蹤あれども僧

綱聽衆をつとむることすでに新儀なるをやひとへに御願の慇懃なる事におこりさだめて増

進の良緣ならんものか大宮院准三宮の女房きぬのあつまをみすのしたよりうちいでたり

弘長の制符もをりによるべきことにや母屋のみすは大臣家の春の響の装束を摸せられてた

かくぬはれたり見聞のともがらに御塔をあまねく瞻仰せしめむためなるべし名香を文さし

保元三年十二月十四日庚子、自今日四々日、於最勝寺被始御入講、七月二日御國忌也、而初平治元年六月廿八日庚辰、於最勝寺被始修御入講、自今、年、以、日、被、定、式、日、

〔吉記〕壽永二年七月二日甲子、今日鳥羽院御國忌也、可參入之、由自八條院依有其儀、已刻出蓬門參

安樂壽院、可爲直衣之由、腰有其儀、著東豐大辨、常束帶之事、依爲道所具侍一人、于時無人題名僧等皆參御導師未奏頃之御導師澄

憲僧都參入、著、題名僧十九口、著、袈裟、及未刻上皇、出御、昨日參御賀茂、今日依爲御道僧徒、蒙

着座、公卿自本在寶子座、無他座之故也、

〔寶簡集四〕金剛峯寺所司等誠惶誠恐謹言

請被殊蒙天恩、因准先例、榜例免除造內裏壓殺狀、中

右謹考舊實、當山者、東扶第一之名地、神秀無雙之奧區也、中茲少納言入道、繼意造內裏之時、既

通其役、全無其煩、今度支配何時例哉、荒川者、美福門院、鳥羽后被寄進當山一切經藏以降、供燈

之外、敢無臨時難事之公役等、所課之役、只管鳥羽聖靈之御國忌者也、是以日前宮免除宜旨、僞官

使亂入庄內、引率衆多眷屬、國使等責費供給、冤陵百姓之由、所訴申也、縱雖可勤仕、自院廳可被催、

又可遣使者也、何不蒙院宣、狼狽入御領、哉、且停止其實、且可返與損亡物也云々、

元久元年七月日

都維那法師隆源

寺主大法師祐源

上座大法師實勝

〔年中行事秘抄七月〕廿三日近衛院御國忌事、於延壽寺行之、上卿卿等參入、

〔葉黃記〕寬元四年三月十三日壬寅、後白河院御國忌、○建久三年三月十三日崩、任例可有免者、歟、而無之、御卽位

以後三箇日中、無骨之由、大外記師兼申上之故也、是非如何、

〔年中行事秘抄七月〕廿八日二條院御國忌事、於香隆寺御堂行之、公家不知行、



代延喜天曆之君也、御子孫帝王、連々于今不絶、其政之餘慶、于今相傳也、仍仰彼聖化、奉祈其菩提、

〔年中行事秘抄 七月〕三日法勝寺御八講始事

天承元年七月三日丁酉、自今日、於法勝寺阿彌陀堂、奉爲白川院○大治四年七月七日崩、被始修御八講、

〔兵範記〕仁平三年八月七日甲子、六條院御國忌也、依儀已刻參入、東帶此間左衛門督、左兵衛督出

新中納言經已下、殿上人諸大夫等、同以參食、次請僧廿口着座、法眼頃之導師法印權大僧都、有觀參

入、直始御講、說法了布施四位殿上人以下取之、公卿不取之、次僧俗分散、當院年預縫殿頭爲兼於佛

後邊行事、舊日女房侍等、子孫相傳祇候者、又召□□住院者、併以參集歟、

○按ズルニ、六條院ハ、即チ白河天皇ナリ、大治四年七月七日崩ズ、今コレヲ八月七日トセシハ、

蓋シ節日ヲ忌ミシモノ歟、或ハ最愛ノ皇女、郁芳門院ノ崩日ヲ用キシニテモアルベシ、

〔年中行事秘抄 七月〕十九日尊勝寺御八講始事嘉承二年七月十九日有御事、〇堀河

天仁二年七月十六日己未、自今日四ケ日、於尊勝寺被始修御八講、於陣定、備名、盛實、堀河、兼、御、爲、隱奉、行、殿、下、令、參、寺、家、給、

天永元年七月十九日庚辰、尊勝寺御八講始也、依改元始日、自今日被始行式日、

件八講、自天永元年改今日、元十六日、

堀川院御國忌同日、不斷念佛始之、

〔中右記〕元永元年七月十九日堀川院御國忌也、於尊勝寺被行御八講、御念佛子宗忠、藤原勢二禁之間

不參仕、一年一度之事、不參之條、誠遺恨耳、尊勝寺御八講、今申刻許、右大臣右大將以下、上達部殿上

人參仕之由、後所聞已、公卿源大納言、行事左中辨爲隆朝臣、

〔年中行事秘抄 七月〕二日鳥羽院御國忌事

於最勝寺行之、又於鳥羽安樂壽院、有御佛事等、今日有最勝寺御八講結願、

〔年中行事秘抄 六月〕廿九日最勝寺御八講事四日、小月、廿八日、始之、

念佛了給布施了次各退出了、八日甲午、晚頭依參彼寺源中納言、左京大夫、左大辨被候、夕講之間也、事了行香、次退出之次參殿音黑

〔中右記〕天永二年五月三日、晚頭貫首尙書送消息云、圓宗寺御入講、上卿可勤仕、是院宣者、申承了由、件僧名早申定院下知、本寺可廻請旨下知、右少辨了、是件行事也、上卿不定申只隨院御氣色所請定來也、五日、從今日、圓宗寺御入講始也、可勤上卿之由、有院宣、但依違忌、今日許可催他上卿之由、示頭辨了、先堂童子、圖書官人等、任例可催之由、昨日示大外記、講了、

後聞皇后宮權大夫○源參圓宗寺行御入講、

六日、未時許參圓宗寺、先參常行堂、次參講堂、右少辨實光、申萬事具之由、朝座講師定圓律師問者嚴勝、夕座講師定退已、講聞者良賀申時、事了歸洛、

七日、未時許參圓宗寺、先着講堂座、令打鐘、朝座始講師權律師經尋、問者珍源、夕座講師已講長舉問者明遲、其圓宗寺之人如何、今日問者良賀也、而昨日已仰其役、今日不參也、依事可闕以同寺人令勤仕、頗奇怪歟、院御誦經使木工頭俊賴朝臣、申刻許事了、參常行堂、御念佛結願、入夜事了、御導師信譽、右少辨取被物給也、抑今日、堂童子、催明後日奉幣使也、猶以他人可催之由、召仰外記了、

今日は、是後三條院御國忌也、仍中宮○堀河后馬子內親王前齋院○佳子前齋宮並後三條皇女於法華堂、各

有御經供養者、八日、已時許參圓宗寺、僧侶遲參、右少辨又未參、午時許人々參入、朝座講師已講兼禪問者覺譽、夕座講師已講經賢問者滿秀、呪願三禮已、講定退也、僧綱遲參之間、以已講二人令勤也、予以下上官等合八人、權都維那師班輪、圖書官人取火蛇相從、堂童子入從北戶給布施、事了未時歸洛、

〔中右記〕長承四年五月五日、圓宗寺御入講始、七日、後三條院御國忌也、圓宗寺御入講五卷日也、近代上達部殿上人、不參、只纔上卿辨參入云々、今朝修小念誦、奉祈後三條院御菩提、我朝聖主明王、未

者、晚頭頭中將菅拾遺源侍中等來臨、頭中將被示曰、公卿分配書手、參議右大辨爲重服、被定新年月次已下上卿、若可相憚哉、可尋問官外記之消息、案可注賜者、則書遣之。

〔年中行事秘抄二月〕十二日圓融院御八講事

四日講僧八人件日圓融院御國忌也○

○按ズルニ、圓融天皇ハ、日本紀略ニ遺詔ニヨリテ國忌ヲ停ムトアレド、後其御忌日ヲ國忌ト稱シテ八講ヲ修セシナラン、

〔小野宮年中行事六月〕廿二日圓教寺御八講始

長和二年六月、廿二日壬午始之、去寛弘八年六月廿二日御事也。○一條

〔年中行事秘抄四月〕十七日後一條院御國忌事月長元九年四月十七日崩

〔年中行事秘抄正月〕十五日圓教寺御八講始事四々日

講間共八人十八日、後朱雀院御國忌也

後朱雀院、去寛德二年正月十八日有御事、

永承二年正月十六日辛卯凶會自今日四々日於圓教寺、奉爲故院、被行御八講後年自十五

〔年中行事秘抄五月〕七日國忌事後三條院圓宗寺、○延久四年五月七日崩

依遺詔不被置廢務、不被立山陵使、仍上官不休日也、

〔經信卿記〕永保元年五月七日癸巳、去一日、殿下師實原宣云、七日欲參圓宗寺、又何日可參乎、予令申

云、七日可參候。○中皇后宮侍來云、今日御國忌也。○三條院可參者、申刻許着直衣、先向大町、招宮侍相尋

云、御國忌如何、又非束帶可參乎、歸來云々、參圓宗寺僧等歸國忌如何、又參可被始也、非束帶參、何事

之有乎、然間隆尊聞梨來談、又宮侍季良來向、次參宮令申、案內云、被待參圓宗寺僧者、及深更歟、只使

參入僧侶被始如何、仰云、有請令近隣殊圓聞梨且就御堂始講。大、夫違備清外、宮司不候、以教真爲講師講了有御

〔九條年中行事八月〕廿六日國忌事西寺○光孝、仁和三年八月二十六日崩。

〔年中行事秘抄八月〕廿六日國忌事廢務、光孝天皇、西寺。

國史云、西寺小松天皇、仁和三年八月廿六日崩、諡號「光孝」。

〔本朝世紀〕天慶四年八月廿六日癸丑、今日光孝天皇國忌也、仍諸司廢務、

〔小右記〕長元四年八月廿三日戊辰、早朝、大外記文義來申云、廿六日國忌○光孝、而廿五日伊勢使可立、

依在散齋內、可被付寺之由、可申關白○藤原賴通、或還御內裏之三日、或當神事之時、被付寺家者、參內中

納言同車着陣之後、間時刻、辰一刻者○中余實實藤原、目大辨、大辨起座出、敷政門、經溫明殿○兩儀、向

結政所、令請印官符了歸、參自化德門、頭辨傳仰伊勢宣命趣、是先日內々所承也、下給廿五日伊勢使

發遣陰陽寮日時勘文西時、已給同辨結申、余云、御幣請印奏、不可持來之由、可仰行事藏人、便受取可宜

下之由、令頭辨、但令書目錄可送也、辨傳仰云、廿六日國忌、在廿五日奉幣齋、可付寺者、便仰同辨、召大

外記文義仰之、

〔中右記〕長承二年八月廿六日國忌○光孝、仍奉幣後、齋付寺被行、是先例、

〔九條年中行事九月〕廿九日國忌事西寺○藤原、延長八年九月二十九日崩。

〔年中行事秘抄九月〕廿九日國忌事廢務、延長八年九月二十九日崩。

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、延長九年○承平元年九月廿九日、使藤原玄高以調布廿段、參醍醐寺、而修觀

誦、御國忌也、○醍醐

〔日本紀略五〕康保四年九月廿九日甲寅、國忌○醍醐

〔台記〕久壽元年九月廿九日己卯、參議師長參國忌○醍醐云々、國忌日競馬有憚之由、先日奏、法皇○鳥羽

法皇不從、諫、

〔薩戒記〕應永卅三年九月廿九日己未、今日國忌○醍醐廢務也、宣下事不可然、以昨日日付、可被下知也



之用意、講衆者三面僧坊衆也、先達者一寺成業者、卽爲談義、殊囑二人之明匠爲彼役、出四條之問題、其外先達三四輩、守臚次巡請之間、答花詞、精談拂底、講讀者五部大乘經也、每一季一經講之、承仕一口、

世俗者、清澄藥園兩庄內、以相傳私領寄進彼料、有小捧物、聖守卽送之、爲恒例不退之勤行、更不可有相違而已、

〔年中行事秘抄〕十二月廿三日國忌事廢務、光仁天皇、東寺、○天歷元年十二月二十三日崩

元慶七十二月廿三日、此日國忌也、荷前之禮避忌々忍衍多端、今日之外、更無吉日、故用此日、

〔中右記〕元永三年十二月二十三日、今日國忌也、仁光音樂可行哉否之條、問大外記師遠之處、申云、於

散所事者、恒例之樂不可停、於禁中事者、所不舉也、依師遠說、所行音樂也、

〔年中行事秘抄〕三月十七日國忌事廢務、桓武天皇、四寺、○延暦二十五年三月十七日崩

〔日本紀略〕上、天曆三年三月十七日庚申、國忌、武祖

〔台記〕仁平元年三月十六日丁亥、入夜外記師尙來曰、明日國忌、武祖上左宰相中將經宗申曰、依近例不

參入、見參者仰可參之由、又申曰、廿日伊勢幣、廿一日國忌、當散齋、先例當神齋日、有勅付寺行之仰、明

日可奏之由、十七日戊子、使藏人左衛門佐忠親奏、廿一日國忌、可付寺之由、歸來、仰聞食由、召師尙

仰此由了、今日國忌、左宰相中將申、障不參、仍左大辨參入行之、僧七口參入云々、十年以來、國忌上不

參云々、

〔類聚國史〕七十三、天長三年六月己亥、改七月七日相撲定十六日、避國忌也、○平城、天長元年七月七日崩

〔年中行事秘抄〕三月廿一日國忌事廢務、仁明天皇、東寺、○嘉祥三年三月二十一日崩

〔日本紀略〕一、延長元年三月廿一日乙未、國忌、明仁

〔日本紀略〕十一、寬弘七年三月廿一日庚子、國忌、明仁

天智天皇の御國忌なり、崇福寺にて行はる。朱鳥二年よりはじまる。○中略中興の主にておはしますによりて國忌は、どきに左たがひてあらたまれ共、是はながくかはらぬ事と成にき。太祖廟とも申すべきにや。

〔日本後紀<sup>二十一</sup>〕弘仁二年十二月癸酉<sup>日</sup>、○三始令諸司史生參國忌齋會。○天智

〔日本紀略<sup>三</sup>〕天曆元年十二月三日癸未、天智天皇國忌、仍廢務。

〔續日本紀<sup>二</sup>〕大寶二年十二月甲午、勅曰、九月九日<sup>日</sup>、○天武十二月三日<sup>日</sup>、○天智先帝忌日也。司常

是日、宜爲廢務焉。

〔大乘院寺社雜事記〕明應三年五月二日

一聖武國忌也、於眉間寺入講在之。東大寺兩宗參勤之。

○按ズルニ、聖武天皇、天平勝寶八年五月二日崩ズ、然レドモ此國忌ハ當時久シク廢セラレタルバ、是ハ寺ニ於テ私ニ修スル所ナルベシ、今ハ國忌ノ名アルヲ以テ姑ク此ニ收ム。

〔東大寺續要錄<sup>二</sup>〕佛法四聖講始行事

正嘉元年五月二日、相當本願聖武皇帝聖忌、奉圖繪四聖御影<sup>聖武、真德、善德、行基</sup>、展供養了、三幅御影、奉安三面室。

導師權律師賴覺<sup>三</sup>、論宗

講師律師東圓<sup>花嚴宗</sup>

問者二人、初問已講畢、願次問聖禪大法師、

講衆十人、僧<sup>五</sup>名、先達五人、僧闍已講成、榮寺次給之。

抑弟子禮一十六丈黃金之靈像、拜九間四面殊勝之大殿、是偏四大菩薩之御力也、依之且爲報謝四聖之恩德、且爲令興隆一寺之佛法、每迎四聖之忌日、令修二問之講行、問者者當座之探、講師者兼日

付大外記敦頼奏遺詔可止山陵國忌素服舉哀者、

〔玉海〕安元三年八月廿五日壬辰、入夜藤中納言資長來、○中語云、○中奉爲讚岐院今德院被修四日

八講、講師聽衆各八人、無證誠、初日依無人數、無行香、資長依爲彼寺上卿、四々日之間參入行之、辨重方也、今日結願如形有行香、上官等參入云々、抑彼院御忌、明日廿六日也、而強自廿二日被始行、今日結願甚以不當也、凡事奇異也云々、廿八日乙未、未刻大外記頼業來召前召仰雜事、奉爲讚岐院、

結願甚以不當也、凡事奇異也云々、廿八日乙未、未刻大外記頼業來召前召仰雜事、奉爲讚岐院、今德院可被置國忌山陵、由候由人々被申候、前大相國左而彼定十陵之後、未無加增之例、廢何陵可、加之哉、至于崇道天皇例者、追被置國忌彼時未被定置十陵、加之桓武天皇御備危急之時有此沙汰、

雖然遂以崩御、其例不相似、何況彼者廢坊之人是有天皇之號、又被置山陵是尤足爲榮耀、是者本爲太上天皇、雖置國忌山陵、何有尊崇之儀哉、旁可有思慮之由、經言上、仍忽停止了云々、

〔百練抄十五〕仁治三年七月八日戊子、被立山陵使、隱岐法皇改顯德院爲後鳥羽院、依御遺誠不被

置山陵國忌之由被申畢、

〔季連宿禰記〕元祿九年十一月廿五日戊寅遺詔之詞、何樣欺不知之、○此月十日明正廟音奏警蹕之事、尋申頭左中辨之處、今度無此仰詞云々、

山陵國忌任葬司素服舉哀停止之事、欺申詞追可尋記、

〔九條年中行事十二月〕三日國忌事崇福寺○天智、十年十二月三日崩

〔小野宮年中行事十二月〕三日國忌事崇福寺、天智、天龜、藤原、葛城、

弘仁治部式云、國忌者云々、其崇福寺唯圖書治部玄蕃六位已下官人二人、史生一人向之、

〔年中行事秘抄十二月〕三日國忌事廢務、天智、天龜、藤原、寺、

自餘國忌隨時廢之、此國忌長不廢云々、但參議以下不參、付寺家行之、

〔公事根源十二月〕國忌

〔續日本後紀九〕仁明承和七年五月辛巳，後太上天皇願命皇太子曰：○略中國忌者雖義在追遠而糾苦有司，又歲竟分祿號曰荷前論之幽明有煩無益，並須停狀必達朝家。丁酉，勅後太上天皇和○淳崩後國忌荷前陵戶等事，宜遵遺制以停奉行焉。

〔類聚符宣抄四〕

先中宮皇太夫人藤原氏，今年六月八日崩。○字多后溫子。

左大臣宣奉勅件宮，宜依遺令勿奉入國忌荷前者。

延喜七年十二月十三日

大外記阿刀宿禰春正奉

〔北山抄四〕雜穢事

天曆六年八月十五日，上皇○朱崩，十七日被定行難事，院別當朝忠朝臣參陣外，依遺詔不任喪司，不行御喪料，不置山陵國忌，不列荷前，自餘難事，總可從停止之，由傳宣外記。

〔小野宮年中行事五月〕廿五日，邑上先皇崩日依遺詔不置國忌。○康保四年五月二十五日崩。

〔年中行事秘抄五月〕廿五日，村上天皇崩事。

官中謂之有無日，雖非廢務，無政并結政。

〔中右記〕嘉承三年五月廿五日，今日官中號有無日，強無結政，或又有急事者，可行行政，依隨體稱有無。

是官中故實也，是村上先帝御忌日也，本雖不置國忌，我朝聖主後人戀遺德，依強不行行政，歟明主仁風，遠及後代，歟。史定政來，御齋會難事申上之次，問云：今日結政有無如何，申上云：無結政是及今存古風歟。

〔日本紀略九〕正曆二年二月十九日庚申，葬太上天法皇○融於圓融寺北原，置御骨於村上山陵傍，依遺詔停素服，舉哀國忌山陵，但天下亮間，天皇及侍臣侍女着素服。

〔日本紀略十一〕寬弘八年七月八日己卯，右大臣○光顯着使座，先皇○一院司內藏頭公信朝臣參陣外。

〔日本紀略十一〕寬弘八年七月八日己卯，右大臣○光顯着使座，先皇○一院司內藏頭公信朝臣參陣外。

〔日本紀略十一〕寬弘八年七月八日己卯，右大臣○光顯着使座，先皇○一院司內藏頭公信朝臣參陣外。

〔日本紀略十一〕寬弘八年七月八日己卯，右大臣○光顯着使座，先皇○一院司內藏頭公信朝臣參陣外。

〔日本紀略十一〕寬弘八年七月八日己卯，右大臣○光顯着使座，先皇○一院司內藏頭公信朝臣參陣外。



之沙汰被行仗議論奏事被宣下也依此例如此口口口如何仰云鬼問議定何事在哉之由入道殿有御計也云々其條縱於彼所雖有密々議定不被行仗議者不可及論奏之宣下者此事未令勘見先例給之間如此令存給歟如何

〔百練抄後十五〕仁治三年七月十一日辛卯今日故參議通宗朝臣贈左大臣正一位母儀源氏門后源

于通贈皇后被定山陵國忌云々

〔葉黃記〕寛元四年七月十五日辛未上皇後奉爲贈后子通於坊城殿御弟也被行御八講行事院司土御門中納言補別當一日右少辨顯雅也僧十口今日有御經供養一座講師法印啓白布施及諸僧前々強不然事歟上皇有御幸入葉御車密儀攝政殿實經以下公卿濟々十八日甲戌贈后御國忌有御經供養云々五年元治七月十八日己巳於坊城殿今日奉爲贈后被始行御八講去年今日以爲

日行事院司中院大納言左少辨等也今日被供養金泥御經早旦有御幸

〔實隆公記〕永正元年七月九日丁酉可被置國忌山陵哉之事任古今例今度尤可有廢置之沙汰之條

勿論歟○中

從是可染筆之由思企候之處青鳥飛來尤爲本意候此題來廿五日可詠進候抑昨日贈后以下誠可然事候歟兼日勅問子細候間愚存之趣申入候了仍山陵廢置事先規如然之上は今度可有沙汰事候哉任仁治例被戴詔書候歟上古遵行之樣不審候被成官符宜候哉如何如此事被召外記勘例隨其趣廣可經御沙汰事歟今度可廢何陵哉保元三十二廿九廢安子皇后陵置贈皇太后懿子河後白陵云々嘉承二十二十三廢穩子加母后苴子云々然者仁治度可廢茂子之巡義候今度廢苴子可入新國忌歟可勘決事候使參議閣如誠無念候延長康保度山陵使九墓使雲客由申所に候其外荷前使二陵殿上人々若可相催歟尙期面候也謹言

七月十九日

花押○藤原

正月四日，太后經于朱蜜院村上母后，小松  
茂子法，皇母后，八月廿六日，光孝  
九月廿九日，應酬  
十二月三日，下諱司不行，向廿三日，光仁  
四月廿九日，皇后安子冷殿，皇后安子冷殿  
六月廿一日，后后

此外崇道天皇<sup>景行</sup>雖廢國忌猶預前仍今有十陵也。穆子安子茂子皆木幡陵稱宇治三所是也。今日依被置母后國忌又可被廢皇后國忌三后之中猶被廢遠事法條所指也仍所令定申也。

〔平戸記〕仁治三年五月七日戊子未刻許自殿下○藤原有召宮內卿藤原兩三日聊有相勞事不出仕  
仍明日申可參入之由了、

後聞帥大藏卿有召參入贈后土御門贈官通宗事明日可被宣下云々而顯德院御祖父土

御門院等國忌山陵不被奏遺詔之間可被停止之由無宣下然者彼兩代國忌山陵可被置而贈后

故宰相將通宗廟大臣正一位國忌山陵事有沙汰者件二代事無沙汰者此宣下如何之由沙汰

出來、何樣可被進止哉之由被仰合云々、官外記又被召、有種々評定云々、官外記詳不申、兩卿申云

雖何樣二代國忌山陵沙汰之後可有左右獻之由乞申云々而又此事已被定日次猶可涉凶事者

兩度之沙汰如何之由有豫議被申合入道殿云々件事強不可涉凶事歟沙汰落居之後可被左右

歟之由被申仍以藏人次官顯雅被奏其由於內裏云々

日己丑，早旦令參殿下之處，大藏卿來示，昨日沙汰之趣，即參殿被仰昨日沙汰之趣，彼二代山陵有

汰者十陵之內可有廢置山陵然者可被廢三陵母后者即又可廢以往之母后陵然者可有論奏歟

廢二陵可置十一陵哉漢朝有十二陵之故也此沙汰未不落居然間山門使者參入被問答大禮卜

國造作事，諸卿請文，安樂光院御八講事等內覽無依，日景已黃昏退出。十一日壬辰，巳刻許參殿。

之處大藏卿入來仍暫言談謝遣之後參殿贈后贈官之間事并山陵事等有沙汰十二日癸巳爲

山陵間事。參殿下之處。已御參內之。乘御車給之間也。仍參進其所申云。案此事。必可有仗議事也。中

嘉承二年受禪羽鳥之後十二月以吉日被行條事定請河三内々國條司事申之由所見也其翌年有贈后國忌

〔中右記〕嘉承三年

元天仁年

六月廿四日癸卯戌刻許參內依可有仗議也左大臣民部卿源大納言左衛

門督別當源中納言下官

宗藤原忠

左宰相中將忠右大辨藤宰相參集是山陵廢置之中可定申者爰

左大臣召大外記師遠令進勸文則進勸文入令頭爲房朝臣奏聞返給云可定申內下令參一一見下

左大辨讀上大略廢置又被加例也左大臣命云二帝母后國忌不可廢置由大略見天曆御記若何樣

被量哉發語藤宰相顯賀申云如此事廢置用近先例多存者左大辨重寶申云稔子多字安子上村兩

后之間被廢置何事之有哉但可隨勅定左宰相中將忠敬同之治部卿基綱定申云可被廢置贈后河后

藤原國忌者宇治山陵三所之中可被廢置也

上皇河白母后茂子六月十一日國忌可被廢置歟但法王萬歲之間頗可有其儀者下官申云山陵國

忌廢置多者依遠近是先例也三后之國忌中被廢正月四日稔子太后國忌何難之有哉是三后之國

忌中依其程遠也但被廢二帝母后國忌例已在今度勸文中平城嵯峨母后國忌被廢事天曆八年之

例也被用彼例強不可有難歟抑上皇母后陵被廢置事全不可有之由定申了源中納言別當能左

衛門督雅同下官源中納言俊民部卿俊雖近猶被廢安子何難之有哉至稔子者明主二帝村上母

后有憚廢置左大臣被申云廢置入近先例多存者爰付頭爲房以詞奏聞先例此事歸來仰云村上母

后被廢置何事之有哉但如此明主母后被廢置例重可申上人々申云先延喜昭母后嵯峨母后皆

以被廢置也仰云停正月四日稔子可入正月廿五日今上羽母后國忌者左大臣召左少辨實光可

作論奏之由被仰下了實光儒者辨也奏論奏事後日也次左大臣左大辨有施米定此間人々或以退出

治部卿被定申云院母后國忌入廢置議條大奇恠也不足言也法皇已在昭穆在近全不可思懸事

也未聞見存之君之母后國忌被廢置例

又左大辨可隨勅定由定申之旨頗無其謂如此事只思定可申可否也隨勅定議可依事歟

近代國忌

九朱雀時

胤子 六月廿日忌  
天智世十 光仁世八

桓武世七 乙牟漏世七

仁明祖高 澤子祖高

延長八歲 文德 光孝祖會

胤子

九村上時

天智世十 光仁世八 桓武世七  
醍醐九交 九月廿九日忌

乙牟漏世七

仁明祖高

天曆八歲 澤子祖高

光孝祖會

胤子祖

醍

九華山時

天智世十二 光仁世十  
冷泉子 子祖 懷子母

桓武世九

乙牟漏世九

仁明世七

光孝世六

醍醐祖會

穆子祖會

安

九一條時

天智世十二 光仁世十  
冷泉子 子祖 懷子母

桓武世九

仁明世七

光孝世六

醍醐祖會

穆子祖會

安子

懷子

九三條時

天智世十二 光仁世十  
冷泉子 子祖 懷子母

桓武世九

仁明世七

光孝世六

醍醐祖會

穆子祖會

安子

趙子母

九冷泉時

天智世十一 光仁世九  
村上下子 子祖 安子母

桓武世八

乙牟漏世八

仁明世六

光孝祖高

胤子祖會

醍醐祖

穆

九後冷泉時

天智世十四 光仁世十二  
一條孫 子祖 安子母

桓武世十一

仁明世九

光孝世八

醍醐世六

穆子世六

安子

九白川時

天智世十五 光仁世十三  
一條曾孫 子祖 懷子母

桓武世十二

仁明世十

光孝世九

醍醐世七

穆子世七

安子

九鳥羽時

天智世十七 光仁世十五  
白川孫 子祖 懷子母

桓武世十四

仁明世十二

光孝世十一

醍醐世九

穆子世九

安

後嵯峨時

天智 光仁 桓武 仁明 光孝 醍醐 安子 茂子 苺子 通子 安

土御門子

後嵯峨時

○按ズルニ本文冷泉時ハ當ニ村上時ノ次ニアルベシ而シテ今三條時ノ次ニ在ルハ蓋シ錯簡ナラン、



江次第所載者、白川院御在位時國忌也、今以歷代國忌廢置列左、

五光仁時 天智祖 田原父 紀氏母 聖武 光明子

七桓武時 光仁子 十二月三日忌 天智祖 田原祖 紀氏祖 聖武 光明子 光仁 高野氏母

八平城時 桓武子 十二月三日忌 天智祖 田原祖 紀氏祖 聖武 光明子 光仁 高野氏祖

桓武父 乙牟漏母 帶子 平城在儲之妃、  
三月十七忌 三月三十忌 乙牟漏母 帶子 百川女贈皇后、

七嵯峨時 天智祖 田原祖 紀氏祖 光仁祖 高野氏祖 桓武父 乙牟漏母 帶子 弘仁

八淳和時 天智祖 田原祖 紀氏祖 光仁祖 高野氏祖 桓武父 乙牟漏母 旅子母

九仁明時 嵯峨子 天智祖 田原祖 紀氏祖 光仁祖 高野氏祖 桓武祖 乙牟漏祖 旅子 嵯

八文德時 仁明子 天智祖 田原祖 紀氏祖 光仁祖 高野氏祖 桓武祖 乙牟漏祖 旅子 天安

八清和時 文德子 天智祖 田原祖 紀氏祖 光仁祖 高野氏祖 桓武祖 乙牟漏祖 嵯峨祖 仁明祖 文八

八陽成時 清和子 天智祖 田原祖 光仁祖 桓武祖 乙牟漏祖 嵯峨祖 仁明祖 文德祖

九光孝時 仁明子 天智祖 田原祖 光仁祖 桓武祖 乙牟漏祖 嵯峨祖 仁明父 文德 澤子

九宇多時 光孝子 天智祖 田原祖 光仁祖 桓武祖 乙牟漏祖 嵯峨祖 仁明祖 澤子 文德 八月廿六忌

九醍醐時 宇多子 天智祖 田原祖 光仁祖 桓武祖 乙牟漏祖 嵯峨祖 仁明祖 澤子 文德 光孝祖

六月晦忌

延喜治部式所定也

光孝祖

光孝祖

皇太后宮藤原順子東寺國忌○九月廿九日國忌於西寺

〔江次第抄〕政事要略

太政官符式部治部五畿內七道諸國司省除國忌事

六月卅日東寺

贈皇太后于○澤

右太政官今月十六日論奏稱謹檢禮典先王之制七廟是存捨故諱新有沿有革由此言之上件國忌代漸遠而親自隔時已變而義亦疎准諸故實宜從省除謹錄事狀伏聽天裁者查聞既訖兩省五畿內七道諸國承知依件之符到奉行右中辨藤原朝臣左大史阿蘇宿禰

天曆八年十二月廿五日

〔江家次第〕國忌

當時國忌

天智天皇  
十二月三日 崇福寺  
山階 近例諸司不參

桓武天皇  
三月十七日 四寺

柏原

光孝天皇

八月二十六日 四寺

後田邑

崇道天皇

十月七日 大安寺欽 藤原寺不參

八島

中后安子

四月二十九日 四寺

後宇治

當時國忌

〔江次第抄〕國忌一年國忌始於正月四日弘徽殿太后上母后權子即國忌故此出凡例也當時此國忌然而白川御宇未歷之○略

光仁天皇  
十二月二十三日 東寺

後田原

仁明天皇

三月二十一日 東寺

深草

應德天皇

九月二十九日 西寺

後山階

太后權子

正月四日 東寺

院母后茂子

六月二十二日 東寺欽

今宇治

追贈皇后藤原氏○平城之國忌奏可、

〔三代實錄清和〕天安二年十二月八日乙未、公卿奏請省案五月七日贈皇后○淳和后志內親王高忌云謹檢往

事後太上皇○淳和德崇謙光不存國忌而獨留皇后之忌日、勘之禮經義乖相配伏請一准舊典式從停

廢奏可、

〔三代實錄清和〕貞觀十四年十二月十三日己酉、先是天安二年十二月九日、定十陵四墓獻年給荷

前幣是日十陵除贈太皇太后高野氏○桓武母后大枝山陵如太皇太后藤原氏○文德母后藤原順

日二十八後山階山陵以足其數、二十八日甲子、公卿奏請國忌日、謹勘禮經前件國忌親盡之義既著

捨故之理斯存、准諸舊典宜從省除謹錄事狀伏聽天裁奏可、

〔三代實錄光孝〕元慶八年六月十七日丙午、太政大臣從一位藤原朝臣基經○中略參議正四位下源

朝臣是忠等奏言、謹檢舍故諱新禮經攸著親盡造毀彝典斯存、由是言之、八月九日、田原天皇○光仁施

王基經國忌、昭穆之義漸疎、宗親之理既遠、酌諸故實、宜從除者、謹錄事狀伏聽天裁奏可、

〔日本紀略應和〕寬平九年十二月八日己酉、太政官論奏、請省除太皇太后宮○順九月廿八日東寺國

忌、勅許之、置贈皇太后○藤原母后六月卅日國忌、

〔延喜式治部〕國忌

天智天皇忌十二月三日  
天宗高紹天皇忌十二月廿三日

桓武天皇忌四月十七日  
皇太后修三月十日忌若有四月乙丑漏

仁明天皇忌三月廿一日  
文德天皇忌八月廿七日

贈皇太后○六月多后順子寺  
光孝天皇忌八月廿六日

贈皇太后○六月明后順子寺

〔日本紀略應和〕延長八年十二月九日、公卿上奏、請省除文德天皇八月廿七日國忌、勅許之、勅省除太

又案履脫爲上皇則不置國忌隨又有遺詔

〔續日本紀<sup>二十三</sup>〕天平實字四年十二月戊辰勅太皇太后宮<sup>○聖武母后</sup>藤原宮子<sup>皇太后</sup>藤原安宿媛<sup>○孝謙母后</sup>御墓者自今已後並稱山陵其忌日者亦入國忌例設齋如式

〔類聚三代格<sup>十五</sup>〕勅

京南田州町<sup>○船續日本紀作世</sup>

右奉爲藤原皇太后<sup>○安</sup>每年忌日講說梵網經料永入山階寺

京南田十町

右奉爲藤原皇太后於法華寺淨土院自忌日初逮于七日每年請屈淨行僧十人禮拜阿彌陀佛料永入法華寺

天平實字五年六月八日<sup>○又見續日本紀<sup>三</sup></sup>

〔續日本紀<sup>三十一</sup>〕寶龜二年十二月丁卯勅先妣紀氏<sup>○光仁朝母</sup>未追尊號自今以後宜奉稱皇太后御墓者稱山陵其忌日者亦入國忌例設齋如式

〔日本後紀<sup>十二</sup>〕延曆廿四年四月甲辰<sup>○五</sup>令諸國奉爲崇道天皇建小倉納正稅冊束并預國忌及奉幣之列附怨靈也

〔江次第抄<sup>三</sup>〕政事要略

太政官符式部治部兩省

定太皇太后國忌事<sup>○中</sup>

崇道天皇<sup>○中</sup>

今案崇道天皇爲謝其怨靈准國忌非廢務之列故公家固不知之也

〔日本紀略<sup>略</sup>〕弘仁八年五月己酉參議從三位行宮內卿兼河內守藤原朝臣緒嗣請除五月廿七日



創業之君特起其上世之微、又無功德以備祖宗、故其初皆不能立七廟。唐武德元年始立四廟。○中武氏亂敗、中宗神龍元年已復京太廟、又立太廟于東都、議立始祖爲七廟、而議者欲以涼武昭王爲始祖、太常博士張齊賢議以爲不可、因曰、古者有天下者、事七世而始封之、君謂之太祖、太祖之廟、百世不遷、至祫祭則毀廟、皆以昭穆合食于太祖、商祖立王周祖后稷、其世數遠而遷廟之主皆出太祖後、故合食之序、尊卑不差、漢以高皇帝爲太祖、而太上皇不在合食之列、爲其尊於太祖故也、魏以武帝爲太祖、晉以宣帝爲太祖、武宣而上、廟室皆不合食于祫、至隋亦然、唐受天命、景皇帝始封之君、太祖也、以其世近、而在三昭三穆之內、而光皇帝以上皆以屬尊、不列合食、今宜以景皇帝爲太祖、復祫宣皇帝爲七廟、而太祖以上四室皆不合食于祫、博士劉承慶尹知章議曰、三昭三穆與太祖爲七廟者、禮也、而王迹有淺深、太祖有遠近、太祖以功建、昭穆以親崇、有功者不遷、親盡者則毀、今以太祖近而廟數不備、乃欲於昭穆之外遠立當遷之主、以足七廟、而乖迭毀之義、不可、天子下其議、大臣禮部尙書祝欽明兩用其言、於是以景皇帝爲始祖、而不祫宣皇帝、已而以孝敬皇帝爲義宗、祫于廟、由是爲七室、而京廟亦七室。

## 〔江次第抄三〕國忌

今案天子七廟或有九廟之說、故陽成天皇以前或八廟、或七廟、其數不定、然光孝以來定爲九廟、其中以天智爲太祖廟、蓋天武、天智皆舒明之子、然文武至廢帝、天武之裔卽位、天智之流如絕、爰光仁天皇爲田原之皇子、而因群臣推戴得登帝祚、於是天智之流勃興、加之天智天皇始制法令、謂之近江朝廷之令、天下百世因准之、爾來至今皆天智之一流、而爲太祖不遷之廟、豈不可乎、又光仁已爲中興之主、故爲第二世、桓武創平安京、故爲三世、光仁、桓武、比肩之七廟、文世室、武世室、所謂劉子駿九廟之說也、其餘隨世互有廢置、然而仁明、光孝醍醐其德蓋天下、不忍毀去、是以後世聖君遺詔不立山陵、國忌、其意者不可過七廟故也、但三女主猶可得毀之、鳥羽、苺子、毀穆子之國忌、寬元通子、去安子之國忌者也、

用途

〔延喜式<sup>二十一</sup>〕凡國忌日<sup>略</sup>○中其布施物三寶絲掛約<sup>略</sup>十裹料調布九尺木綿三分、衆僧唐布一百六

段、並自大藏省下充之事、畢錄見僧并奉讀經數、付內侍奏。

〔延喜式<sup>二十一</sup>〕凡東西二寺、國忌御齋會座料、兩面端齒七枚、黃端齒四枚、黃端狹帖三枚、折薦帖廿枚、

長帖廿枚、席十五枚、長席廿枚、簀十五枚、並以各寺官家功德分物造備供之。

〔三代實錄<sup>四十六</sup>〕元慶八年九月廿九日丙戌、先是國忌御齋會布施依式、充用官家功德分封物、是日

廢置

勅自今以後、停用彼封物、以官庫物充之。

〔續日本紀<sup>四十四</sup>〕延曆十年三月癸未、太政官奏言、謹案禮記曰、天子七廟、三昭三穆與太祖之廟而七、又

曰、舍故而諱新、注曰、舍親盡之祖、而諱新死者、今國忌稍多、親世亦盡、一日萬機、行事多滯、請親盡之忌

一從省除、奏可之。

〔古京遺文〕勝寶威神聖武皇帝銅板詔書○中

施  
封五千戶  
水田一万町

以前捧上件物。○中誓其後代、有不道之主、邪賊之臣、若犯若破障而不行者、○中十方一切諸天梵

天、護塔大善神王、及普天率土有勢威力、天神地祇七廟、尊靈并佐命立功大臣將軍靈共起、大禍永

滅、子孫若不犯觸、敬勸行者、世々累福、終隆子孫、共出塵域、早登覺岸。

天平勝寶元年

平城宮御宇太上天皇法名勝滿

右刻在前詔背

〔唐書<sup>禮樂志</sup>〕自禮記王制祭法禮器、大儒荀卿劉歆班固王肅之徒、以爲七廟者多、蓋自漢魏以來、

延喜廿二年三月九日

少外記笠治道奉

散位紀朝臣實之

右大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣清實宣奉勅件人依有所預事不參今月十日國忌宜免彼不參之責者

延喜廿一年三月十一日

大外記兼讚岐權掾伴宿禰久永奉

〔西宮記正月〕四日國忌

諸司皆參少納言付內侍進國忌奏先一日自天曆口年於法性寺有御入講後院若一院行事諸卿

殿上人侍從藏人所參入云々

參議已下向西寺入自南門近外記中代宣着中門近代兼堂前打鐘上卿着堂前衆僧入所司立前曳手水法用如常

了左右行香式部丞取見參進藏人所治部丞取僧名卷數付內侍所

天延三年十七西寺國忌也參議以上皆有障不參爰申事由於太政大臣依去天祿三年八月國忌

例外記早可行者少外記巨勢舒節進參彼寺行事云々

〔小右記〕長元四年三月十九日丙寅諸祭國忌等供奉諸司事仰大外記文義但式部式供奉國忌諸司其數太多又不供奉之諸司并衛府官在同式其司不幾而已

〔勸仲記〕正應六年六月二日丁亥不出仕公卿分配副宣旨持來加一見返之

右大臣宣奉勅祭禮國忌者是公家之所重也崇神敬親之儀既存禮經之故也而諸卿勸稱故障不勸分配奉公之道豈可然哉自今以後若故障不明兩役空闕者依永延三年五月七日宣旨一季封戶半分停之但神今食新嘗祭小忌職掌令神祇官近期卜之須臨彼時各隨其催論言殊重不得疎略者

正應六年五月廿七日

大外記兼大隅守中原朝臣師顯奉

弘仁太政官式云國忌者治部省預錄其日申官前一日少納言奏聞諸司就寺供齋會事但東西寺參議已上及辨史參之

同式部式云散位五位以上無故三度不向者勿預節會

貞觀同式云東西兩寺關二度已上者十二月兩度與福寺關一度並不預六位已下關職掌者每季祿布二端

同式云參平城國忌官人已下并散五位以上給上日五個日

〔享祿本類聚三代格〕太政官符

定宮內省官人參國忌御齋會事

右得宮內省解僭案假事令云在京諸司每六日並給休假一日中務宮內供奉諸司及五衛別給假五日不依百官之例者今檢令文此省之政恐於百官口誤請准中務省令參主典已上一人者被大納言正一位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣稱奉勅依請

弘仁十年十一月十二日

〔類聚符宜抄〕國忌

右大臣宜東西兩寺國忌之日廳外記等不列式部直入着座立爲恒例者

仁和二年六月廿八日

少外記紀有世奉

即仰式部大錄香山弘行了

〔類聚符宜抄〕國忌

散位紀朝臣貫之

右大納言正三位兼行皇太子傳民部卿藤原朝臣清貫宣奉勅件人有所預事不可令參今月十日國忌者



凡大極殿正月御齋會始終日并東西兩寺國忌之日外記史等不列式部直入着座、

〔延喜式<sup>十八</sup>〕凡國忌齋會者諸司五位已上一人六位已下一人但東西二寺六位已下三分之二參香宮坊三月十七日廿一日八月二日參香

諸寮已上史生一人向寺供事但中務藏殿民部主計準人大藏宮內左右京等并五位若六位一人參

其散位五位已上无故不向者勿預節會即東西二寺間二位已上與福寺間參議已下并中宮內藏陰陽內匠主稅織部大膳木工大炊主殿掃部內膳造酒采女主水彈正勘解由及諸武官不在此限文官亦

其崇福寺唯圖書治部玄蕃六位已下官二人史生一人向之

凡與藥寮不參與福寺國忌、

凡參國忌五位已上待會事訖乃歸却若不然者同不參例其六位已下闕職掌者參季祿布二端

凡參與福寺國忌官人已下并散位五位已上給上日五箇日○中但待太政官所下名簿乃給之

凡諸司五位已上十二月國忌不參者停預節會散位五位已上亦同

凡參藥師寺最勝會王氏五位以上死三月十日國忌不參

凡參與福寺國忌御齋會藤原氏六位已下不論有職無職聽着堂前之座

凡可參藥師寺最勝會與福寺國忌并維摩會王氏藤原氏若不參者五位已上不預新嘗會節六位已

下官參季祿其參不者待太政官所下簿知之

〔延喜式<sup>二十</sup>〕凡國忌日各諸當寺僧一百口轉經禮佛輔丞錄各一人玄蕃寮五位一人六位已下官

二人皆詣寺以供事事見式部式

〔延喜式<sup>二十</sup>〕凡國忌者前忌三日具狀申送辨官其應供齋會省輔丞錄及寮五位并允屬各一人歷

名亦同申送

〔小野宮年中行事<sup>正月</sup>〕同日○四太皇太后國忌事東寺

貞觀治部式云國忌日各諸當寺僧一百口轉經禮佛事了錄見僧并奉讀經數附內侍奏

外記以見參文制白木覽參議參議見了返給外記付之式部省云付內侍所

治部丞取僧名卷數付內侍所不參諸司可有其責被停參會諸司

典藥寮修理職已上寬平二年十二月二十日能有綱宣

彈正近例不參云云

當神事例  
正曆二年四月三日當平野祭停諸司參會由仰諸司及寺家云云

無日上行例

天曆四年十二月二十九日

永平七年八月二十六日

西寺燒亡間付東寺

永祚二年二月燒亡

崇福寺燒亡間付梵釋寺行之

〔北山抄〕申國忌上事

國忌前日有政者申文史退去間外記相代進外立史床子坤角申云明日乃國忌乃御拜乃上云云上卿以下一一稱障由外記每度稱唯最末參議雖有故障先承諾之退觸障由耳

〔延喜式〕太政官十一凡國忌者治部省預錄其日并省立蕃應行事官人名申官前一日少納言奏聞諸司就

寺供齋會事治部等式但東西兩寺參議已上及辨外記史各一人太政官史生官掌各一人參

〔延喜式〕太政官十一凡興福寺國忌并維摩會者藤原氏行事大夫點定氏中無障之輩即附外記外記申大

臣令參事畢之後錄見參歷名奏聞若有不參者下式兵二省五位已上不預節會六位以下官人奪季

祿

等故雖刑獄亦不決斷謂之不合釐務者此也今在京百官唯雙忌作假以其拜跪多又晝漏已數刻若單忌獨三省歸休耳百司坐曹決獄與常日亡異視古誼為不同元微之詩云綽遺推因名御史狼籍囚徒滿田地明日不推緣國忌又可證也

儀式  
〔延喜式〕<sup>十九</sup>國忌齋會

每至其日諸司各向其寺省差輔丞錄史生省掌令向之三綱依例辨備於佛殿前又設輔以下座於廊下味旦輔以下就座省掌置版位五位以上就版且命職掌六位以下着到於省掌所史生且依着到分配職掌上抄已訖錄執簿唱示諸司官人稱唯各向其所其職掌者左右堂童子各五位四人六位以下六人左右執行水各六位以下八人左右衆僧前各五位二人六位以下二人<sup>在油部主書</sup>撤版輔以下就堂前座衆僧就座禮佛散花行香呪願訖衆僧退出群官散去省依諸司見參造奏文<sup>五位已下但載物數付內侍分奏</sup>

〔江家次第〕<sup>三</sup>國忌<sup>東寺儀但依四寺國忌於東寺行之依四寺院也</sup>

參議入自南大門就中門內座<sup>北面外記申代官近例</sup>

外記史式部諸司及散位大夫等就東西廊下座<sup>近例依無處著金</sup>

大藏省置布施<sup>調布四</sup>於堂前中取上<sup>近例早且付寺家</sup>

參議召外記問諸司具不召史問僧并布施物具不次仰史令擊鐘

治部立著率衆僧入自東西廊戶到會庭中<sup>近例自堂左右</sup>各北折昇堂着座

兩師昇諸司退

次所司行手水<sup>近代</sup>次禮佛着次法用

次圖書給花筵次講經

次左方行香<sup>外記史式部民部治部兵部等悉錄立皆有不足者或召使立夏務解舞圖書取火蛇</sup>

皆不廢務

六代祖太祖景皇帝九月十八日

景烈皇后五月六日

五代祖代祖元皇帝四月廿四日

元真皇后三月六日

孝敬皇帝四月二十五日

哀皇后十二月二十日

皆不廢務京城一日設齋凡國忌日南京定大觀寺各二散齋諸道士女道士及僧尼皆集于齋所京文武五品以上與清官七品以上皆集行香以退若外州亦各定一觀一寺以散齋州縣官行香應設齋者蓋八十有一州焉

〔年中行事秘抄三月〕律雜云國忌日作樂者杖八十

〔江次第抄〕御忌月時唯奏歌云云禮記檀弓曰忌日不樂律曰凡國忌日作樂者杖八十初先皇崩日令廢務者

〔唐律疏議二十六〕諸國忌廢務日作樂者杖一百私忌減二等

疏議曰國忌謂在令廢務日若輒有作樂者杖一百私家忌日作樂者減二等合杖八十

〔唐書五十四〕裴漼絳州聞喜人也○中漼從祖弟寬○中舉河南丞再轉爲長安尉時宇文融爲侍御史

括天下田戶使奏差爲江南東道勾當租庸地稅兼覆田判官轉太常博士禮部擬國忌之辰享廟用樂下太常寬深達禮節特建新意以爲廟尊忌卑則登歌廟卑忌尊則去籥中書令張說謂寬明識舉而行之

〔容齋隨筆三〕國忌休務

刑統載唐大和七年勅准令國忌日唯禁飲酒事樂至於科罰人吏都無明文但緣其日不合釐務官曹卽不得決斷刑獄其小小咎責在禮律固無所妨起今以後縱有此類臺府更不要舉奏舊唐書載此事因御史臺奏均王傳王堪男國忌日於私第科決作人故降此詔蓋唐世國忌休務正與私忌義



定ムル所ノ寺ニ遣シテ、齋會ヲ行ハシムルナリ、尙ホ國忌ノ事ハ、帝王部山陵篇ノ荷前、及ビ定陵墓數ト關係スルモノアリ、參看スベシ、又歷代天皇ノ忌日ハ、帝王部帝王通觀篇ニ詳ナリ、是亦參照ヲ要ス、

名稱

初見

制度

〔伊呂波字類抄〕古事類聚國忌本朝事始云、高天原廣野經天皇（神武）二年戊午、自今以後、當以近代天皇崩日爲國忌。  
〔日本書紀〕持統元年九月庚午、日九設國忌、九年九月去天武崩、齋於京師諸寺、二年二月乙巳、昭曰、自今以後、每取國忌日、要須齋也、

〔令義解〕六條制凡○中國忌日、略前天皇崩日、依別式、令齋者、略○中皇帝皆不視事一日、

〔令集解〕二十八條制穴云、張云、天子七代之祖死日、爲國忌者、於律可有別式、略○中釋云、國忌日謂七崩忌日也、

〔唐六典〕四禮部

高祖神堯皇帝五月六日

文穆皇后五月一日

太宗文武聖皇帝五月廿六日

文德聖皇后六月廿一日

高宗天皇大帝十二月四日

大聖天后十一月廿六日

中宗孝和皇帝六月二日

和思皇后四月七日

睿宗大聖眞皇帝六月十日

昭成皇后正月二日

皆廢務

凡廢務之忌、若中宗已上、京城七日行道、外州三日行道、徽宗及昭成皇后之忌、京城二七日行道、

外州七日行道、

八代祖獻祖宣皇帝十二月二十三日

宣莊皇后六月三日

七代祖懿祖光皇帝九月八日

光懿皇后八月九日

# 古事類苑

## 禮式部三十二

### 國忌

國忌ハ皇考皇祖及ビ母后等ノ忌日ニシテ、忌日トハ世ニ云フ所ノ祥月ナリ、此國忌ハ、持統天皇ノ紀ニ創見シ、文武天皇ノ朝ニ之ヲ律令ニ掲ゲタリ、是ヨリ以來、支那ノ七廟九廟ノ制ニ仿ヒ、或ハ七國忌ト爲シ、或ハ九國忌ト爲シ、天祚ノ代謝スル毎ニ、疏ヲ除キ親ヲ加ヘ、沿革スル所アリシガ、村上天皇以後ハ、天皇ノ國忌ハ、天智光仁桓武文德光孝醍醐ノ六帝ニ限レリ、母后ノ國忌モ、久シク存セシモノアリテ、村上天皇ノ御母藤原穩子ノ國忌ハ、鳥羽天皇ノ朝ニ至リテ、始テ之ヲ除キ、冷泉圓融二帝ノ御母藤原安子ノ國忌ハ、後嵯峨天皇ノ朝ニ、御母源通子ヲ加フルニ至リ、乃チ之ヲ廢セリ、是ヲ國忌加除ノ終結トス、六帝國忌ノ說ハ、藤原兼良ノ江次第抄ノ文ヲ按ジテ言フ所ナレド、更ニ當時ノ書ニ就キテ之ヲ考フレバ、此外ニモ國忌ニ預リ給ヒシモノ多キガ如シ然レドモ其中ニハ、或ハ汎ク御忌ノ日ヲ指シテ、國忌ト云ヘルモアルベシ、

國忌ニハ、古來遺詔ニ由リテ置カザルコト多シ、村上天皇モ、亦遺詔ヲ以テ置カシメ給ハザリシニ、其忌日ニハ、至急ヲ要スル事ノ外ハ、廢務スルヲ以テ例ト爲シタリ、蓋シ後人其遺德ヲ愛慕シ奉リシニ起レリト云フ、

國忌ノ日ハ、音樂ヲ作スヲ禁ジ、又廢務スルコトニテ、天皇政事ヲ視給ハズ、而シテ所司ヲ其



古事類苑

禮式部三十二

國忌

名稱  
初見  
制度  
儀式  
職員  
用途  
府置  
不置國忌  
國忌例  
雜載

六八〇

同

同

六八二

六八三

六八七

同

六九七

六九八

七一七



征夷大將軍從一位行權大納言源朝臣義尙義尙改

右三十一字をつゞり、五十首につらねてかの廟院に奉るむねおほきに似たりといへども、文道にをきて其名たかく、武藝に至て其譽おほひならむことをおもふ、此願に過ざるべし、おほよそ水の尾和清のすめるながれを請て、桃園貞純親王の跡かうばしく、第六孫王王于經基親の餘裔をつゞい、また天の下のかたき守りとして、柳營のかげ盛なる無雙重器の元祖となれり、されば多田の鳴動をもて、四海の安危をかゝむ、中略神のちかい萬代まであふがむことをおもひ、吾道二心なく守りまさんことをねがふにいたるまで、をのづからは神を感せしむる道にかなはず、國家をたすくる力をくはへたまふべしとなり。

〔台記〕久安六年九月廿六日己亥無動寺律師實寬語曰去比多武峯廟木主自裂申長者無所驚怖先例有此惟時必有祈禱今無其事遂有此凶或曰件木主去々々年裂

〔多田院古文書〕慈照院義政公祝詞

維文明四年歲次壬辰七月丙申朔十一日丙午吉日良辰乎擇定氏掛毛畏幾多田院乃御廟乃廣前  
仁征夷大將軍准三后從一位源朝臣義政恐美恐美申久夫尊靈波累葉乃元祖天止之跡於塵仁垂大  
樹乃宗氏天止之德於天下仁施須効驗日新天之萬代守護權現利愛去三日戌時靈場俄震動氏之其  
聲日於連數占文乃所差謹慎不輕凡當院乃御本誓波兼天天地波妖恠於知見氏還氏國家溫安全  
於擁護賜布因茲專一溫丹祈於抽氏無貳溫精誠於凝天之廟塔乃噴於奉鎮者利此等乃越正四位上  
行神祇權大副兼侍從卜部朝臣兼俱仁仰天神祇溫齋場仁於所令啓白天理加之銀劔於奉獻之龍  
踏於引立氏廟前仁奉送者天又追天一事溫法味於執行之報養乃使於可令發遣乃由深久心底仁  
插者利存一天靜謐八絃衛護運命長久溫冥助於加賜陪別波天恩息災消安天穩仁之壽算波松竹利與久具  
身體波金石毛與利堅久保女之賜陪義政尊廟乃加護於奉憑事若天毛與利高久濱海毛與利深之此狀於平  
久安久開食天夜乃守日乃守仁護幸賜陪申  
辭別天申久恩息壽命長遠除病息災乃為仁別天靈劔乎奉獻者利奈  
〔親長卿記〕文明四年七月十日參內下天自廣橋大納言許可參之由申送之故也命云多田廟所滿諸臣  
廟堂今月兩三度有鳴動鳴動事及度々今度之儀超過先蹤云々八月十七日今日有多田廟所  
放正四位下贈位宣下并親王宣下等事略中  
源滿仲朝臣  
一御廟所用意之事

御廟前可立案可為其前可數小文壘一枚勅使座料  
机也  
〇下略

〔常德院殿御集〕夏日陪多田院廟前詠五十首和歌略歌

御宮 紅葉山

正月十七日 五月十七日 九月十七日 四月十七日

御靈屋 紅葉山 正月

御證月御忌日 七月十四日

一東叡山増上寺、年中一度宛御證月之無差別、何つにても可有御參詣候、此節天英院様○鎌川家宣近衛

氏淨圓院様、御靈前御拜有之候事、

二月廿八日 御名代

大御所様附若年寄

毎月九日 御名代

右之通候間、可被得其意候、

九月

靈異

〔多武峯略記怪異〕尊像破裂

右爲氏爲處、欲示怪異之時、有御面鎌足像原破裂之事、爰寺家言上事由、即發遣御使、令讀告文、拜謝事

畢之後、靈像復本、靈異揭焉、誠是大權之變作、極聖之示現歟、善妙檢按記云、永承元年丙戌正月二十四

日酉時、宮仕法師久聖告云、聖靈右御面四寸餘、令破裂給云々、次日進上於寺拜、同二十八日、召三綱

中一人、仍二月一日、寺主賴春上洛了、二日參着、以近江守藤原隆佐言上子綱、仰云、住持近參、委述子

綱申之、始自明日、六十箇日、仁王經講筵、大般若讀經、可勤行也、今夜之中、可還着寺家者、即賜御馬一

匹、仕丁三人、并兵士三人、戌時出京、次日午刻歸山、即勵御祈禱、十五日周防前司賴祐爲幣使矣、告文

禮契相具下向、拜謝事了、十六日歸洛、十七日米二十斛、燈油三斗、被下之、于時長者宇治關白太政大

臣賴通公、檢按春禪矣、

一 雁之間詰四品以上豫參勅額門之外ニ而御目見之事、  
一 高家兩人供奉行列可被罷出事

以上

九月

〔寶曆集成絲綸錄<sup>十三</sup>〕延享二<sup>丑</sup>年九月

上様御參詣之事

御宮<sup>家</sup>○<sup>德川</sup>

台德院様<sup>勢</sup>○<sup>德川</sup>

大猷院様<sup>家</sup>○<sup>德川</sup>

嚴有院様<sup>家</sup>○<sup>德川</sup>

常憲院様<sup>綱</sup>○<sup>德川</sup>

文昭院様<sup>家</sup>○<sup>德川</sup>

有章院様<sup>家</sup>○<sup>德川</sup>

右何も紅葉山東叡山増上寺大御所様<sup>吉</sup>○<sup>德川</sup>

唯今迄御參詣之通但天英院様<sup>家</sup>○<sup>德川</sup>宣淨園

院様<sup>母</sup>○<sup>德川</sup>吉宗

御靈前江は東叡山増上寺御參詣之節年中一度宛御拜可有之候

御名代之事

御參詣無之月

毎月十七日紅葉山

五月廿四日 九月廿四日 正月廿日 五月廿日 九月廿日 正月八日 九月八日 五月

十日 九月十日 正月十四日 五月十四日 九月十四日

清楊院様<sup>宣</sup>○<sup>德川</sup>家綱重御靈屋江は御名代奏者番

御參詣無之月

毎月晦日 二月廿八日 六月九日 十月三日

右何も東叡山増上寺江老中相勤候事

一 深徳院様<sup>家</sup>○<sup>德川</sup>重母御忌日御名代は只今迄之通大御所様御參詣之事



一 來月日光御參詣之節、御供并勤番之面々、御宮御靈屋拜禮可有之候、御供之面々は、御參詣當日還御以後、勝手次第拜禮可被致候、勤番之面々は、日光御發鍋以後、彼地發足被致候迄之内、勝手次第拜禮可有之候。○中略

一 御靈屋江獻上物

銀五枚 拾萬石以上

同三枚 五萬石以上

同壹枚 壹萬石以上

但萬石以下は、不及獻上物候、

右之通可被相觸候以上

三月

〔寶曆集成絲綸錄<sup>八</sup>〕延享元<sup>子</sup>年九月

於増上寺御法事

十月 十月初日 十一日中日 十二日結願日

覺

當十月増上寺御靈屋御參詣

一 國持四品以上并御譜代四品以上之面々、衣冠<sup>下</sup><sub>無之</sub>、十月十四日増上寺江可有豫參候、但部屋住之面々は、父不出分計可被豫參候事、

覺

一 供奉行列諸大夫計

一 國持四品以上并御譜代四品以上豫參、御唐門外之外ニ而御目見之事

〔吾妻鏡〕<sup>十</sup>文治六年元久十月廿五日丙午、以尾張國御家人須細治部大夫爲基爲案内者、到于當

國野間庄、拜故左典膳廟堂平治有事奉葬、給此墳墓被掩荆蕪、不拂薛蘿、敷之由日來者、於關東遙令

遣、懷給之處、佛閣排扉、莊嚴之粧、遮眼、僧衆構座、轉經之聲、滿耳也、二品怪之、爲解疑水被尋、濫觴之處、

前廷尉康賴入道、守于國之時、令寄附水田三十町、以降、立一伽藍、奉祈三菩提云云、

〔桃源遺事〕<sup>上</sup>同女寛三年癸卯、西山公光國御家督後、始て水戸へ御下向の節、御城へ御つき候や

いなや、御身を御きよめ、御衣冠にて御廟御拜なされ、威公父、光國御逝去の砌のごとく、殊の外御

落涙あそばし候、御供に參候者ども、此御様子見奉り、皆々落涙仕候、

〔水戸歲時記〕正月元日 御規式以上ノ人ハ、直ニ登城シテ奉賀ス、中 玄關ニ至ラザルマヘ、大廟

ニ至リ拜謁ス、

〔享保集成絲綸錄〕<sup>十</sup>正徳三己年九月

當十月於増上寺、文昭院様、川一回御忌御法事御執行ニ付而、左之書付渡之、中

覺

一前々御參詣之節、豫參有之四品以上之面々、此度は十月十四日御法事過束、帶ニ而御靈屋江可

有參詣事、

一豫參無之四品以上、且又諸大夫布衣の面々は、十五日御禮過侍從、は直垂、四品諸大夫は狩衣、布

衣も其裝束に而、御靈屋江可有參詣事、

一無官之面々は、十六日長袴或半袴にて、御靈屋江可致參詣事、

以上

〔享保集成絲綸錄〕<sup>十四</sup>享保十三申年三月

覺

東<sup>略</sup>中 其左に二十人の位牌を安置す、みな貞山公殉死の輩、右に十七人の位牌、みな義山公殉死の輩也。

〔見聞雜錄<sup>三</sup>〕近藤重藏、菩提所墓地に、自身甲冑之石像を建置候儀ニ付、寺社奉行松平伯耆守<sup>江</sup>差出候書付、

私墓地構之内、洞穴<sup>江</sup>差置候甲冑を着候石像之儀は、<sup>略</sup>中 太平二百年之御時節に當り、御奉公筋に而拾箇年之間、再度甲冑着用仕、異國境、又は外寇之虎口<sup>江</sup>罷出且は漫々たる水海風波之難を凌渺々たる砂漠に霜雪を拂<sup>略</sup>中 夷船にて晝夜風波を不厭押切、其外千辛萬苦、屈指に不遑候、畢竟國境之地相糺可申ため、人跡無之深山幽谷<sup>江</sup>踏入古來往還無之離島<sup>江</sup>押渡り、御要害之筋專要に取調、私一人之微力を以、東夷西戎を折衝可仕と、意外に右様人不知艱難に出逢、<sup>略</sup>中 候儀ニ御座候は併於武門、無比類勤方と奉存候得バ、弓矢之面目不可過之、御威光之程難有、資而ハ子孫<sup>江</sup>武功之程をも相傳へ、彌忠勤を爲勵可申と、右様其節之肖像を彫刻仕、没後は棺中<sup>江</sup>埋候心得に而御座候然處、私小官微祿に乍罷在身の分限をも不顧古之名將勇士之武功を慕候、逆不相應なる重御用向をも相勤、<sup>略</sup>中 寛政九巳年、文化元子年兩度、松平伊豆守殿、戸田采女正殿<sup>江</sup>東西蝦夷地御仕置之儀、私存寄之趣申上、再應御尋之上、御取用相成、則右御用被仰出、松前上地、同所奉行を被仰付、右御用先におゐて、現在甲冑をも相用候程之烈敷御用、無滯相勤候儀ニ御座候、<sup>略</sup>中 然ば右子孫<sup>江</sup>武功之形見を殘し、彌忠勤之志を爲起候端とも可相成哉と建置候寸志之石像も、是亦不相應など申御事に候は、<sup>略</sup>中 右石像は筏<sup>江</sup>乘、東海<sup>江</sup>爲浮候而も不苦候、右石像、所謂鹿之角之前建物ニ事寄候筋ニハ、無之、輪貫之前建物ニ、私家校鹿之抱角之金紋打候譯、前書之次第ニ御座候、右御尊御座候趣ニ付、此段申上候、以上、

午十二月<sup>略</sup>中 文政五年

小普請組大田内藏頭支配

近藤重藏

和歌之仙、真性于天、其才卓爾、其鋒森然、三十一字、詞華露鮮、四百餘歲、來葉風傳、斯道宗匠、我朝先賢、  
湮而無緇、續之彌堅、鳳毛少彙、麟角猶尊、既謂獨步、誰敢比肩、○又見三朝野詳說

〔東野州聞書〕人丸之影の事、兼房朝臣申云、諸道祖師を仰事、皆有然共道、○和には其儀見す、人丸は此道の祖師なり、此影寫とゞめざる事、遺恨千萬也、とて、切々彼尊體をこひ奉られけるに、或夜の夢中に現じてみえられける尊體、今の世に有影供是也、櫻花散ける體是也、其後寶藏にこめられけるを、顯季卿申出し、兼房のかゝせられける畫工を召てかゝせて、影供と云事、其後相續有て、後後基俊此供を執行せられける程に、影供領とて、所をよせられけるなり、信實は爲家同時の人也と云々、

〔筑紫道記〕此地○赤關のやどりは、阿彌陀寺といへり、○中安徳天皇の御影堂を見侍れば、○中平家の人々の影あり、新中納言知盛、修理大夫經盛、内藏頭信基、宰相教盛、中將資盛、能登守教經等なり、女房には大納言のすけの局をはじめて四五人あり、

〔空華日工集〕應安元年閏六月二日、上杉霜臺○應北征賊、賊退後歸自武城、今日特入山中、故府君足

利基氏影前炷香、

〔肥後國志三〕肥後國田郡中里村本妙寺安置加藤清正像、清正公影像二軀、御靈屋像勇壯、方丈像柔和、

〔尊像傳記〕益城郡肥後國坂本村慶傳差出云、清正公御影像ハ、慶長十四年ニ命ゼラレ、御在世ノ内、先祖播磨彫刻於御城作之、明和八年、即御靈屋方丈兩所ノ影像、共ニ京師ノ佛工ニ命ゼラル、ト雖ドモ、御氣ニ合ハズ、遍ク國中ニ求メ、播磨ニ命アリ、播磨モ亦靈現ヲ感ジテ、玉眼ハ高麗ヨリ持來ノ水精ノ皿ヲ用ユベキ旨ノ命アリ、而レドモ播磨之レヲ製スルニ堪ヘズ、皿忽然トシテ二ツニ破裂ス、即チ玉眼ニ用ユ、彩色等奇異多シ、

〔松島圖誌〕瑞岩寺、○中佛殿、堅貳拾壹間、横拾貳間、正面に先太守貞山公○伊達の尊像、甲冑の御裝



亭主 修理大夫顯季卿

記者 式部大輔敦光朝臣

會者 八條大相國 中院右相府等

永久六年戊戌四月三日乙卯改元永永六月十六日丁卯雨降申刻向修理大夫亭六條東洞院今日柿本大夫人九供也件人九影新所被圖繪也一幅長三尺許著烏帽于直衣左手探紙右手握筆年齡六旬餘之人也其上書讚兼日之語予光〇教作讚前兵衛佐顯仲朝臣書之其前立机花足也居飯一坏并菓子種々魚鳥等但以他物造之非實物其器如唐合子案箸以水牛角作之云々于時會者伊豫守長實朝臣近江守經忠朝臣前木工頭俊賴朝臣加賀守顯輔朝臣前兵衛佐顯仲朝臣予少納言宗兼前和泉守道經安藝守爲忠等也次居饗膳次柿本初獻侍人等持鸚鵡盃并小饒子等祇候實子數亭主被讚云初獻者和歌宗匠可破動仕滿座謂前木工頭當仁木工不能固辭起座進影前矣加州依幕閣之義執鸚鵡盃授進人九前泉州依深嗜此道執小饒子酒入鸚鵡盃置机上各還座其間儀式尤以神妙也次座客一獻次居汁次二獻次式部少輔行盛來加座次三獻次居菓子次居熱汁次右近中將雅定朝臣來加座左次又有盃酌次徹饗次右兵衛督被光儀次亭主被讚云人九讚可講也和歌前獻和歌後獻衆議各以不同亭主云猶以讚可爲先影前置文臺敷圓座件讚以白唐紙二枚書之內記大夫忠遠清書之以李部爲講師武衛相公被讚被置文臺讚頌之後撤之次講和歌題云水風晚來予爲序者講師少卿顯師右武衛相公秀逸詞爲耳目之玩〇下略

〔本朝續文粹十〕柿下朝臣人麿畫讚并序

敦光朝臣

大夫姓柿下名人麿蓋上世之歌人也仕侍統文武之兩朝遇新田高市之皇子吉野山之春風從仙駕而獻壽明石浦之秋霧思扁舟而歷詞誠是六義之秀逸萬代之美談者歟方今爲重幽玄之古篇聊傳後素之新機因有所感乃作讚焉其辭曰

一御位牌事

新亮 鹿苑院准三宮從一位大禪定門 尊靈位○足利義滿

〔看聞日記〕應永廿四年二月廿九日、抑大通院○聖仁親王御位牌、至百箇日、安置常御所畢、御佛事畢之間、

御持佛堂ニ御位牌今日奉渡之、

〔扶桑略記推四〕卅四年五月廿日、大臣蘇我宿禰馬子薨七十六歲也遺言、畫聖德太子像自跪其像前之繪、

張吾墓前云々、

〔多武峯略記下〕第三疊靈院繪皮葺一間一面○

安置大織冠聖靈尊像一軀

荷西記云、大臣安留靈像、造師近江國高男丸也矣、後記云、聖靈尊像一軀、安置聖靈院、右爲榮耀藤門、

護持當山、檢校千滿法師所奉造也、造工沙門延祚矣、古老相傳云、以高男丸所造之靈像、奉龍千滿所

造靈像中矣、承安炎上之時、兼日奉遷、同四年正月廿八日御遷宮也、

〔扶桑略記拔萃〕延曆十六年四月丙子日、僧正善珠卒、年七十五、皇太子○平城圖其形像、置秋篠寺、

法師俗姓安都宿禰京兆人也、

〔扶桑略記村上〕天曆九年六月九日、大僧都禪喜入滅○中略、延長年中、步三會庭、帝威才傑、遂任綱維、

母逝去後、彫其形容、安於居傍、茶菓齋飯、先獻上分、然後自喫、

〔扶桑略記白河〕承曆五年○永保元年三月五日壬辰、興福寺大衆數千人、引率兵軍行向多武峯、燒亡山脚

人屋三百餘家已了、先是多武峯僧徒凌辱山階寺下部僧故事發也、興福寺兵衆引率昇向峯上、時大

織冠聖靈木像腹中奉納三尺本影、長請僧良増開腹中、其像荷負通山頂了、具注子細奏聞公家、廿

八日乙卯、可移居御影像於本座之狀仰遣已了、

〔柿本人麻呂影供記〕

影像

家寺號已下事者、如此候、其上官位模樣、可爲何樣候哉、可被示下候也。○中 恐々謹言、

六月四日

圓忠判

進之候

條々申入候了。○中 位牌事被任僧家之外、不可有子細候、但日本樣儀一紙被注出候、若可被用唐名者、可爲御心得、傍被注付候也。○中 恐々謹言、

六月四日

妙悟

贈左大臣從一位長壽寺殿仁山義公尊

左府如何 已下僧家之樣  
官位上下可爲何樣 候哉寺號道號注名抄義

故征夷大將軍從一位行左大臣

唐名左僕射或左丞相

五日、今日贈左府五七日佛事云々、位牌事、昨日就問返答之、而圓忠注出分不叶、愚意之由有傍難之由、去夕有示告人、仍今日以使者、道圖忠示所存了、所詮故征夷大將軍贈從一位行左大臣源朝臣山仁義公足尊位、可宜歟、將亦贈左大臣從一位歟、此條々可在賢慮之旨示了、六日、今日圓忠法師送狀、彼位牌事、落居之篇注送之、故令申之條本意之由報了、

〔空華日工集〕康曆三年十二月廿三日、管領玉堂殿求書先君位牌曰、故從一位儀同三司靜山寂公禪定門尊儀、余○儒堂雖拙于書、切迫貴命、不能辭、使者出羽左衛門尉、

〔普明國師語錄下佛事〕仁木左京兆春山永公居士持地院入壽牌

名詮自性、性何所詮、春山不動雲寂月圓、恭惟某人精神如鐵、意氣衝天、國家雄將、朝廷英賢、忽了浮生虛幻、知有物義、不遷累代、欲留名身後、今日預安牌生前、生而不生、坤六斷滅而不滅、乾三連、乾三連、坤六斷、鶴自白鳥元玄、更有物我一如句、虛空齊壽、福無邊、安牌云、巍巍坐斷金剛座、現蔭兒孫千萬年、

〔鹿苑院殿堯葬記〕一同五〇歷永五月十日御茶毘等事

養申上候儀は法中之心次第可仕候、勿論公儀より御構無之候、

一御七歳未滿に而も若君様と申上候御方は、最迄通候、

一御代々様之御子様方は、其節々思召を以御位牌御安置、御佛供料御寄附之事候間、尤是迄之通候、

右之通被仰出候間、日光御門跡<sup>江</sup>申上候様、上野執當<sup>江</sup>可被達候、且又増上寺凌雲院<sup>江</sup>も可被達候、

八月

〔太平記<sup>三十五</sup>〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

西明寺ノ時頼禪門、密ニ貌ヲ簪シテ、六十餘州ヲ修行シ給ニ、或時攝津國難波ノ浦ニ行到ス、<sup>略</sup>中

既ニ日昏ケレバ、<sup>略</sup>宿ヲ借給ケルニ、<sup>略</sup>主ノ尼公、手ヅカラ飯匙取音シテ、椎ノ葉折敷タル上

ニ、餉盛ヲ持出來タリ、甲斐々々敷ハ見エナガラ、カゝル態ナンドニ、馴タル人共見エテバ、不審ク

覺テ、ナドヤ御内ニ被召仕人ハ候ハヌヤラント問給ヘバ、尼公泣々、サ候ヘバ、コソ我ハ親ノ讓ヲ

得テ、此所ノ一分ノ領主ニテ候シガ、夫ニモ後レ、子ニモ別テ、便ナキ身ト成ハテ候シ、後總領某ト

申者、關東奉公ノ權威ヲ以テ重代相傳ノ所帶ヲ押取テ候ヘドモ、京鎌倉ニ參テ、可訴訟申代官モ

候ハテバ、<sup>略</sup>朝食ノ烟ノ心細サ、只推量リ給ヘト委ク是ヲ語テ、涙ニノミゾ咽ビケル、斗數ノ聖

熟々ト是ヲ聞テ、餘ニ哀ニ覺テ、笈ノ中ヨリ小硯取出シ、卓ノ上ニ立タリケル位牌ノ裏ニ、一首ノ

歌ヲゾ被書ケル、

難波瀉鹽干ニ遠キ月影ノ又元ノ江ニスマザラメヤハ、禪門諸國斗數畢テ鎌倉ニ歸給フ、均

ク、此位牌ヲ召出シ、押領セシ地頭ガ所帶ヲ沒收シテ、尼公ガ本領ノ上ニ副テゾ是ヲ給タリケル、

〔圖太曆〕延文三年六月四日、圓忠送狀位牌書様、<sup>略</sup>中 去夜既到來了、位牌と申候物、如此可書改候、借



名□□名乗あるものは如<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>認め、名□□父子□□子父□□年□□年□□千□□月□□日没□歳葬

□□墓所と書べし、

一家の主に成りたる者の妻其外目上の者、

□□妻の苗字の氏牌位

裏書前の例にて書べし

一子弟并に其外目下のもの

苗字俗名□□□□牌位

一娘并其外目下の女子

苗字名□□□□女牌位

裏書いづれも前の例なり

〔徳川禁令考<sub>三十</sub>〕寛政十一未年八月三日

御幼稚ニ而逝去之御方々様御位牌御安置御回向等之儀ニ付御書付

寺社奉行江

御幼稚ニ而御逝去之御方々様御位牌御安置御回向等之品、只今迄ハ御定も無之候得共、御代重り候ハ、御位牌相増可申事ニ而無<sub>レ</sub>際限儀思召候、享保年中御代々之御靈屋も御相殿被仰出、御法事之品をも御省略有之事候得ば、御幼稚之御方にも御制度可被<sub>レ</sub>定置事ニ而七歳未満之御方ハ、御忌服も不被<sub>レ</sub>爲在、御成長之御方とは御同様可被<sub>レ</sub>成置事には無之候間、御位牌永々御安置は被<sub>レ</sub>仰付間敷候、百箇日之御供養過候以後者御膳供不及相備候、御忌日には御茶御菓子相備可申候、御一周忌過候は、御偏物相止、御位牌は御一所江納置可申候、

一右之通相成候以後も、盆中又者御年同等其寺院に而何方江成共假に御位牌を遷座致し御供

ドモ位牌ニハ必ズ物ヲ用ト云説アリ其故アル歟但シ位牌ト云事禪家ニ好用ル儀歟正道ノ古所ニ无事也ト云ヘリ先代ノ中比ヨリ早アリケルニヤ

〔倭訓栞前編四十三〕

のはい

位牌の字朱子語類に見えたり天竺の制法にもなく神主の古式に

もあらず今いふ所の位牌の形は宮殿又はほこらの體を摸せし物にて神道の靈臺と號する物なりともいへりかればもとは白木成べし或は明の會典に雲首の式あれば儒制に据たりともいへりされば聖祝牌より事起りたるにや紙牌齊家寶要に見えたり我邦中世以來牌子の薦享あれども當時の如く家内に位牌を安せし事はなかりき又祠堂の祭祀は儒法なれば神主もいかゞ覺え侍る神道家に神體招麟の事あれど家内に置事とも見えす一説に位牌は牌位ともいふもと公家の位ふだにてへんといふ是也佛家に此名を借りて亡者の神主に名くる也ともいへり

〔百丈清規下〕

大衆亡僧

抄衣鉢

○中

維那提督著衣入龕置延壽堂中鋪設椅車位牌牌上書云新圓寂某甲上座覺靈或

某禪師之靈餘  
隨稱呼之

〔空華日工集〕應安四年十二月三十日初更禪鐘罷姑出堂而坐爐邊未赴定坐之堂與圓亨諸弟話曰

○申位牌古無有也自宋以來有之

〔喪祭式附錄〕位牌

一其家の主になりたる人死去の節其外目上の者も是に同じ

俗名苗字  
□□□□翁牌位

老人は翁と舊壯年は子又は生と書べし

裏へ

顯考顯妣士庶人曰先考先妣男在官者曰府君不仕者曰處士無官無學者曰郎

〔垂加草<sup>三</sup>〕<sub>禮</sub>山崎家譜

慶安三年庚寅秋作先祖神主九月二十二日癸酉始之晦日成二十五旦父君語嘉曰前夜夢神謂吾曰自今而後以忠平呼汝也嘉嘆其孝成二十七夜嘉夢幽都明都幽明室七字神主之奉用家禮行之扁曰著存家君日參嘉亦侍焉

〔爲峯文集<sup>七十四</sup>哀悼〕<sub>哀悼</sub>明曆二年丙申三月二日辛巳申酉之交余<sup>○</sup>嘉<sup>○</sup>母荒川氏<sup>○</sup>終於寢五日甲申<sup>○</sup>

略既到葬地置凳子於墳邊而安靈柩於其上<sup>○</sup>中春德進出神主於墳內使粘晴書之春常持祝文到余前余讀之不<sup>○</sup>必讀<sup>○</sup>之其詞云

維

明曆二年歲次丙申三月庚辰朔越癸未日哀子春齋林惣敢昭告子

先妣荒川孺人形歸窆旁

神返室堂

神主既成伏惟

尊靈舍舊從新是憑是依

讀了春齋春德春信春常等拜神主而後納之於墳

〔下學集<sup>下</sup>〕<sub>器時</sub>位牌

〔和爾雅<sup>五</sup>〕<sub>器用</sub>靈牌<sup>位牌也</sup>

〔訓蒙圖彙<sup>器用</sup>〕<sub>十一</sub>靈牌<sup>位牌也</sup>

〔塵添璫囊抄<sup>十六</sup>〕<sub>位牌事</sub>

過去ノ人名ヲ書クイハキト云ハ何ノ字ゾ位牌ト書也位牌ノ上物故ト書ニ付テ物沒同ト云ヘ

四分ヨリ少シ短キモノナリ。○此下有圖

座蓋○有圖ハ神主ヲ入ル箱也。薄板ニテ作ル。座ハ後ト兩方ト三方ニテ。前トヤチト無シ。高サ神

主ヲ入テ。神主ヨリ少シ高キ程ニ。廣サ深サハ神主ノ跽ノ四邊。少シ寛キホドニス。蓋ハ四方ニシ

テ。ヤチヨリ只前面ニ一竅アリ。座ノ上ヌキスル也。座蓋トモニ漆ニテ黒クスベシ。

新喪ノ時ハ。事多クシテ能制。リガタシ。先神主ヲ制リ。薄キ板ニテカリニ神主ノ箱ヲコシラヘ。

葬禮ヲハリテ後。座蓋ヲ作ルベシ。別ニ横井ニ箱。梅ナドノ制法有。今座蓋ハ制法ノタヤスキニ

從フ。心アル者ハ家禮ヲ考テ制法スベシ。

### 〔家禮四〕治葬

作主主五寸。厚二寸。分。之。四。分。居。前。八。分。居。後。八。分。居。中。長。六。寸。廣。一。寸。深。四。分。合

之。楮。於。跌。下。齊。其。旁。以。通。中。四。程。四。分。居。三。寸。六。分。之。下。距。跌。面。七。寸。二。分。以。粉。塗。其。前。面。司。馬

溫。公。曰。府。君。夫。人。共。當。一。機。按。古。者。諸。主。用。桑。特。練。而。後。易。之。以。栗。今。於。此。便。作。栗。主。以。從。簡。便。或。無

栗。止。用。水。之。堅。者。機。用。黑。漆。且。容。一。主。夫。婦。俱。入。祠。堂。乃。用。司。馬。氏。之。制。

〔通典四十八〕天子皇后及諸侯神主

五經異義曰。主者神象也。孝子既葬。心無所依。所以虞而立主。以事之。唯天子諸侯有主。卿大夫無主。

尊卑之差也。卿大夫無主者。依神以几筵。故少牢之祭。但有尸無主。三王之代。小祥以前。主用桑者。始

死。尙質。故不相變。既練。易之。遂藏於廟。以爲祭主。凡虞主用桑。○註練主夏后氏以松。殷人以栢。周人

以栗。○註春秋左氏傳曰。凡君薨。卒哭而祔。祔而作主。特祀於主。○註桑。當祔於廟主之制。四方穿中

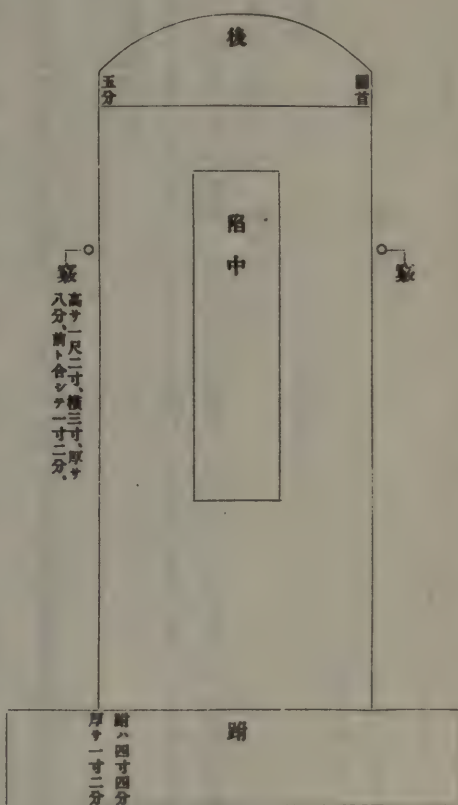
央。達四方。天子長尺二寸。諸侯一尺。皆刻蠶於背。

〔舜水朱氏談綺〕神主

凡有官爵者皆書之。婦人一品曰一品夫人。二品曰夫人。三品曰淑人。四品曰恭人。五品曰宜人。六品

曰安人。七品曰孺人。八品九品散官共用孺人。庶人妻曰媼或嫗。女曰姑或姐。粉面屬稱。有官爵者曰。





上ノ兩角、周尺ノ五分ヲ削テ首ヲ圓クス、一寸ノ下横ニアリニシテ、粉面ノ頸ヲ入ルトコロヨリ  
 下判ヲ二枚ニス、其一分ハ前ノ粉面ニテ、二分ハ後ノ陷中ノ方也、然ラバ粉面ノ厚サ四分ニシテ、  
 陷中ノ方ノ厚サ八分也、前後ヲ合テ、踏ニタツレバ、踏ヨリ上ノ高サ一尺八分、踏ノ高サヲ入テ一  
 尺二寸也、面ハ胡粉ニテスル粉面ト云、陷中ハ後ノ厚サ八分ノ方ノ真中ニ、陷カニホル、長サ或ハ  
 六寸一尺<sup>或ハ</sup>横一寸、深サ四分也、其兩旁下ヨリ七寸二分、是ニ竅ヲホリ中ニ通ス、竅ノ廣サ四分マワ  
 リニホルベシ、若シ世カハリテ後、孫ノ世ニナラバ粉面ノ顯考ノ字ト、奉祀ノ者ノ名トヲアラヒ  
 落シ、顯祖ト書カヘ、誰奉祀ト書改ムベシ、高祖曾祖モ同例也、但シ陷中ハ書改ルコトナシ、  
 神主ハ周尺ニテ制ルベシ、其外ノ喪具ハ、今尺ニテ書ス、今尺トハ木匠尺也、周尺ハカ子尺ノ六寸

神主神位ナキ者ハ薄板ニ神位ノ如ニ書シ、裏ニ諱ハ某誰ノ子、年月日没年幾ト書キテ納メ置クベシ、

〔葬禮儀略〕葬地ニ至テ、塋ノ前ニ席ヲシキ、其上ニ首ヲ北ノ方ニシテ棺ヲスエオク、棺ノ前ニ卓子ヲオク、其上ニ酒菓子ヲオキ、香爐香合燭臺硯宮神主ノ箱ヲオク、○中略其後卓子ノ上ノ神主ノ箱ヨリ神主ヲ取出シ、死人ノ姓名書付ベシ、先陷中ニ書シ、後ニ粉面ニ書ス、

陷中  
 父ニハ  
 女某氏  
 書諱某  
 老字神  
 タル主  
 女ハト  
 媼奇母  
 ト書ニ  
 書其ハ  
 其下某  
 ノ氏  
 左録  
 ノ姓  
 方神主  
 ニト書  
 孝子女  
 某媼  
 諱奉ト  
 祀ハ、  
 ト書、  
 力キ

粉面父ニハ、通願考人某字ノ位神主アル分ニハ歴々顯妣ハ、彌某氏人安ト書、

神主書ヲハリテ、陷中粉面ヲ一ニ合セ、**跌ニタテ、卓子ノ真中ニ盤キ、焼香シ拜シテ、祝文ヲ讀シム**

維

年號幾年歲次干支、呪月干支朔、越呪日干支、氏名乘敢昭告于某氏某字君、形歸寢寥室、堂神主既成、伏惟

尊靈舍舊從新，是憑是依，

父者孤子孝子ト書ベシ、父存生ノ内母ノ喪ニ逢ヘバ、孝子ヲ哀子ト書ベシ、凡神主祭文等官位アル人ナラバ、其官職位階ヲ委廻ニ書ベシ、或ハ稱號アル人ナラバ、其號ヲモ書ベシ、讀終リテ各拜喪主立テ神主ヲ箱ニヲサメ持カヘル。○中略

神主圖式

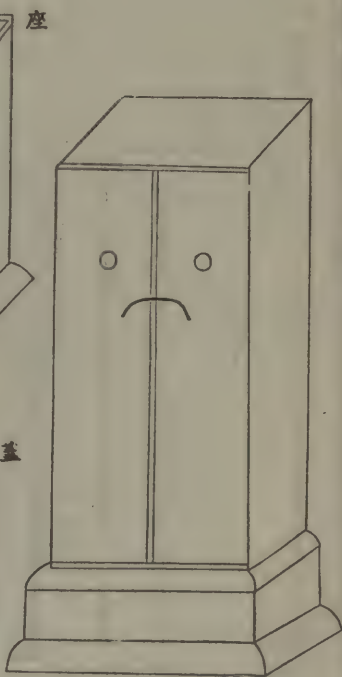
前

粉面

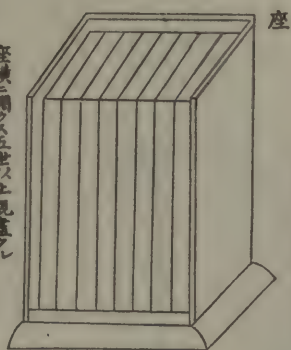
卜一丁巳

高サ周尺ニテ一尺一寸、横三寸、厚サ四分、後口合セテ一寸二分、

積

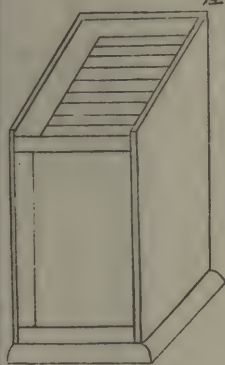


藏主圖

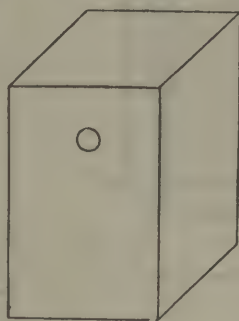


座

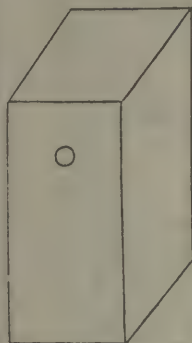
座横ニ潤クス五世以上親蓋タル  
神主ヲ幾世ニテモ納メ置クナリ



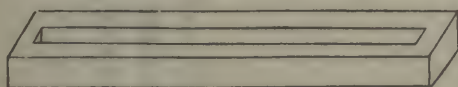
蓋



蓋



附

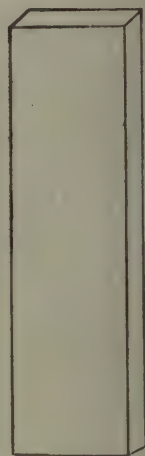
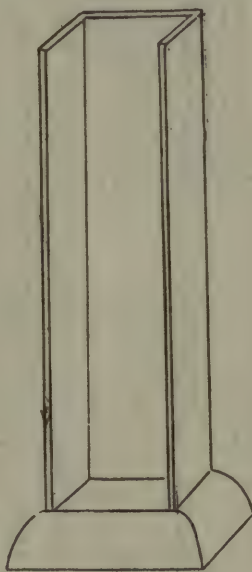
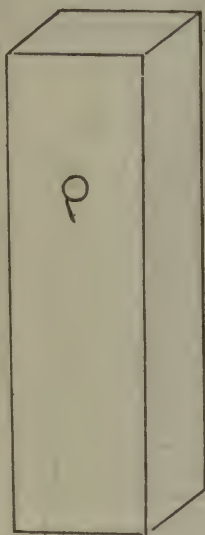


藏牌圖

蓋

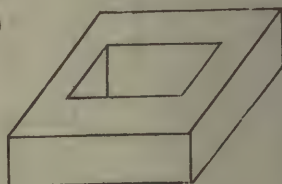
座

面粉



長六寸九分

附

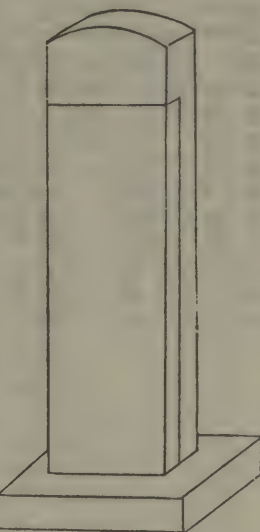


橫二寸六分  
堅同厚八分

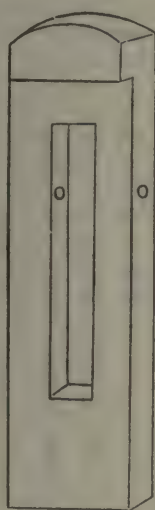


□□氏神牌  
□□氏神座牌  
□□氏神座牌  
□□氏神座牌  
□□氏神座牌  
□□氏神座牌  
□□氏神座牌  
□□氏神座牌  
□□氏神座牌  
□□氏神座牌

神主



陷中



栗櫓等ノ木ヲ以テ製ス、長七寸五分、横一寸九分、頭ノ厚サ八分、頭ヨリ穴マデ二寸五分、穴ノ徑二分五厘、陷中、鑿四寸八分、横六分二厘、深サ三分、陷中ヨリ下二寸一分、

隱居名ハ號□□ト書粉面ヘハ官ノ下ヘ□□號□□氏府君ト書キ位ヲ省クモ可ナリ、  
神主ノ背□□<sub>俗ノ</sub>君諱□□<sub>父ノ</sub>第□子年月日<sub>本</sub>ト書、又略制ニテ陷中ナキモノハ右ノ  
如ク書キテ、死者ノ諱ヲモ書ベシ、此以下皆同ジ、

陷中 故執政老□□<sub>俗</sub> 府君諱□□字□□號□□神主

粉面 故執政老□□<sub>俗</sub> 府君神主

陷中 故執政老□□<sub>俗</sub> 府君諱□□字□□號□□神主

粉面 故執政老□□<sub>俗</sub> 府君神主

陷中 □□<sub>俗</sub> 君諱□□字□□神主

粉面 □□<sub>俗</sub> 君神主

陷中 □□<sub>俗</sub> 氏妻氏諱□□神主

粉面 □□<sub>俗</sub> 氏神主

陷中 □□<sub>俗</sub> 氏妻氏諱□□神主

粉面 □□<sub>俗</sub> 氏神主

陷中 □□<sub>俗</sub> 氏神主

粉面 □□<sub>俗</sub> 氏神主

陷中 □□<sub>俗</sub> 氏神主

粉面 □□<sub>俗</sub> 氏神主

陷中 □□<sub>俗</sub> 氏神主

粉面 □□<sub>俗</sub> 氏神主

陷中 □□<sub>俗</sub> 氏神主

ひるい

〔藤垣内翁略年譜〕九月○天保四年十一日の晩かたに、つひにうせ給ふ、後の名を國足八十言靈大人と稱し、普通の法號を、和心院意富必樂居士とまをす、奥墓は若山湊吹上寺にあり、鈴屋翁とひとしく笏のかたちしたるを靈牌として、影像をもて、大人の家には祭り給ふ、此肖像は今年の三月、丹波人長谷川後素といへる畫工、來居てかきたるにて、いとよく似たり、上にみづからかき給へる歌は、

眞直なるやまと心にまなびては神のまことの道は得てまし、こは倭意三百首のどぢめに出来るを、のちにいさゝか引直し給へるなり、

神主

〔和爾雅五用〕神主也 積積主也

〔喪祭式〕祭禮略節

神主ノ制式ノ如シ、祠堂ナキ者ハ略制ニシテ、神位トスルコト、其人ノ心次第ナルベシ、五世以上其親盡タルハ、附ヲ去テ箱ニ納メ置クベシ、出シテ附ノ上ニ立テ、拜スベシ、旁親兄弟伯叔父姑卑幼孫子姪男等ハ、神主神位ヲ作ラズ、薄板ニ姓名ヲ書シテ箱ニ藏メ置、忌日ニハ出シテ拜ス、輕ク酒食ヲ薦ルコト、人々ノ好ニ任スベシ、其長子元服シタル者死スル時ハ、家ノ分限ニヨリテ、神主神位ヲ製シテ可ナリ、以前ヨリ神主ナクシテ、今新ニ作ル者ハ、父母ハ式ノ如クニ作ルベシ、祖父以上ハ薄板ニ書シテ藏置ベシナリ、忌日ニハ其箱ノ中ニテ、外面ニ表出シテ拜スベシ、

神主

陷中 故□□守從五位下□□姓 府君諱□□字□□號□□神主

粉面 故□□守從五位下□□姓 府君神主

位署ノ式前ニ同ジ

ズ、養萬代ノ末孫迄モ、同ク合セ祭ルコト也、此後ハ神靈ヲ樹、或其人ノ所持ノ物ニ遷シ、同ジ靈  
社ヘ齊祭ベシ、

### 靈箱

金尺五寸四方、高八寸、但シ外法、蓋ハ打付蓋、櫓ノ三分板ニテイ

### 磐座

方六寸五分、高二寸ノ二重座也、

### 外箱

金尺外法八寸四方、高一尺二寸、櫓板厚三分、蓋ハ落シ蓋也、蓋ノ上ヨリ三寸五分下ヲ、圓キ穴  
ヲアケ、圓ノ徑八分、

靈箱外箱ノ寸法、蓋テ右ノ寸法ニ泥ベカラズ、大小心ニ任スベシ、神體及靈舍小クハ相應ニ  
カラテ作ベシ、外箱ハ略シテモ可ナリ、

苗ハ白平絹、或ハ白綾ヲ用ユ、

覆衣ハ、白キ生絹ニテモ、練ノ絹ニテモ、縫合シテ覆ベシ、

〔鈴屋翁略年譜〕大人宣○本居の證を秋津彦美豆櫻根大人と稱ヘ申す、平常に手馴し給ひける櫻木  
にて造りたる笏の形したるものを靈牌として、證を書つけて、家に祀り參らす、

〔玉手權九〕大人宣○本居の後の證を、秋津彦美豆櫻根大人と稱ヘ申す、櫻木にて造りて、平常に手な

らし給ひける笏の形したる物を靈牌として、證字かき、付て家に祀り參らす、物ハ、同本の形して、自  
ら三つ造り置給へるが、後て大平の御旨に、我ハなき後の名は、いま此物に書つけよ、蓋ひ違  
給へりしは、自らの家に祀る靈牌と定め、其時を、往ひたる寛政六年十月に、別におの華書、の紙に、御證を  
て、今一つは有る笏の形なる物に、添て、鑑め置れしを、文政六年十月に、別におの華書、の紙に、御證を  
云むすべし、大平翁事に、あひたりし時より、三つ造り置たまへりしは、幽契ありし事に、やまざりしは、



ユテモ、裏ハ白絹ニテモ布ニテモ見計、誠ニ大切ノ品トハ此事也、女儀ナレバ笏ノゴトク拵ル也、  
〔喪祭小鏡〕祭禮小鏡

## 置封式

神體ヲ封ズルコト、神體勸請ノ傳ヲ知ザレバ封ズルコト不能、然ニ勸請ノ傳ハ、神道ノ大事ニ  
シテ、易ク知レル人モ希也、其傳ヲ得タル人ニ頼ミ封ジテモラウベシ、然ニ有志人ノ爲ニ大略  
ヲ記ス、主人服モ除キ、家内ニ汚穢モ無ナリテ、日ヲ擇ミ、前日ヨリ火ヲ改沐浴齋戒シテ、夜子ノ  
刻ニ勸請ス、床ノ上ヲ就ヒ清メ、注連ヲ張、灯臺ニ土器ヲ載セ、油火ヲ燈ス、白木机ヲ置、神體トス  
ル物ヲ白平絹或布ニ包、置箱ニ入テ机上ニ置、蓋井ニ絹トモニ開キ置、盛服シテ覆面手纏ヲシ  
テ、座ノ回リニ屏風ヲ圍ミ、人ヲ拂、物音セザル様ニ、随分靜ニシテ心ヲ謹安座シテ、就ヲシ、先ニ  
神靈ヲ遷セシ、神ヲ取、拍手シテ、長ク此内ニ鎮リ玉ヘ、定リ玉ヘト祈念シテ、絹ニテ打被セ、神ト  
モニ入、蓋ヲシメ、其上ヲ赤地金入ノ紋有、錦ニテ張表ニ金銅或木札ニテモ、神號靈璽或ハ某ノ  
靈神ト彫付、或ハ書テ箱表ニ打付、簪座ニ載セ、外箱ニ入、神枝ニ木綿ヲ付、四方ニ立、外箱ニ鎮繩  
ヲ引、木綿神ヲ付、机上ニ安置シテ、拍手再拜、遷座ノ由ヲ申ス、

## 遷座

家内悉ク燈ヲ消シ、從者一人神枝ヲ持御先ヲ拂フ、祭主御箱ヲ戴テ靈舍ニ鎮座ス、其後燈ヲト  
ボス、祭主座ニ着、祝詞ヲ讀、但云、某ノ神、此舍ニ常磐堅磐ニ平ク安ク鎮リ定リ給ヘト申訖テ、神  
寶等ヲ興、次ニ神供神酒ヲ獻ジ、拍手再拜、家族拜シ、撤膳御扉ヲ閉ヅ、四時ノ祭式ノ如シ、

凡神體ハ、男女ニ不限、平生大事ニ持レシ品ヲ以テス、劍鏡笏扇、神手書ノモノ、神札ナド、穢ハシカ  
ラザル物、總テ神體トス、猶傳授ノ侍ルコトノヨシ也、

一度ク様ニシテ祭レバ、父母ヨリ上、代々ノ祖神モ是ヲ合セ祭ル、此後子々孫々迄、別ニハ祭ラ

ト、テ、下御靈庚申相殿ニシ玉ヘリ、

御璽ニト部家ノ土封ニセザルコトハ、唯授一人ノ傳ユエ、萩原殿モ惟足ヘ傳授ナキユエ、垂加翁ヘモ銅ニテ箱ヲサセラレシ也、是ヲ垂加翁ノ作意ト云ハ非也、正利先年、奥州岩城ヘ往シ、時神主飯野伊賀守ハ、岩城平ノ鎮守八幡宮社領四百石ノ祭主ニテ、予ガ門弟成シ故、神璽ノ事ヲ尋テシニ、先年惟足翁ヲ頼ミ改直シ候トテ、銅ニテ八寸四方程、前ニ八幡宮ト彫付、屋根モ銅ニテ四方軒ニシテ、上ニ寶珠ヲ置タリ、然レバ垂加翁御璽モ、惟足相傳ト見エタリ、澁川春海翁モ同ジク銅ナリ、

〔瓊矛拾遺〕凡士庶人者、以先有功人、齋神靈體箱一、而子々孫々末苗、悉皆歸其體箱也、所謂天生萬物、分萬象而萬物一歸於天也、人別不可造神靈體、應其位度、其分少不可越其位、以質朴爲本、則此神道之遺法也、若有先祖所秘用之器者、則以之爲靈、若無則極清淨之石爲之靈實、則子裔繁昌之義也、

略中

書姓名、建之有祭先者、此似異方之風、其異方上古者、空處祭之、立神主者、宋以來相似、天竺之風者也、位牌者、其象顯而觸事穢、又無體則無守也、我朝風、世々子々孫々八十聯綿之先祖、以有功者崇靈通例也、用玉石爲靈、以藏之于箱、無功者一々勿建靈體、于今於遠國邊土者、邑有氏神、村人群會於社前、爲祭謠舞、是歸于一之義、古之遺風也、

〔泰山集雜著〕垂加翁齋吾靈、以土爲神體、是固有傳來、然不若銳如玉、然則庶幾乎或有嗣續也、雖是天運而傳來、亦不無遺恨也、

〔伊勢早懸略記〕代々家ニ祭奉御璽、代當人平生神拜ニ用ラレタル筈ヲ其儘、實名位階ヲ書用ユルナリ、裏ニ姓氏生歲月日卒月日ヲ記入、棺前認メ、當人ノ前ヘ持行、御璽ヲ是ニ止メ給ヘト申、口傳臺ヲ一重二重ニテモ付サセ清メ、眞袋ヲ縫、スツホリトカブセ祭ナリ、袋ハ大和錦ノ類、又赤色綾

靈

寄附する所なり。

〔神風記〕吉田家葬祭式

歸家之行事

先調靈札

寸法有作法、座八角、以檜作之、以笏立其前、笏記靈號、笏後之板記姓氏名字位階年月日時、○中略

靈札之事

靈號

預人々者靈神止、闕、未被授靈神號人者、官位姓名、書祭或實名魂、調者也、

〔中臣祓集說下附錄〕

靈聖大人以下至庶人皆川之

木靈聖以檜作之、以笏立其前、笏記靈號、笏後板記姓氏名字位階年月日時、靈號之下、書或靈社或真

靈或神位或靈聖等之字、

紙靈聖、如揭物之形、表記靈號、裏記姓氏名字等、

〔垂加流神道葬祭禮式〕垂加翁

○山崎御聖ハ、惟足川吉翁ト相談ニテ、存生ニ出雲路民部ニ封ジテ

セ、自身勸請シ、先祖ヲモ封ジ込玉フト也、銅ノ箱五寸四方、高サ八寸、蓋ハ二三分程下ヘシヅメ、銅

ニサンヲシテ、下ヘ落入ヤウニス、底モ三四分上ゲ、中ニ穴ヲアケ置、枅ヲ五分ニケヅリ、中ニ立

植、土ニテ廻リヲツメ、柱ヨゴレル故ニ、別ニ一本拵置、木口ニ心ヲ書、上ハ蓋一盃ニシ、底ノ穴ノ處

ハ細クシテ、外ヘ三分ホド出シ、センヲ指シ、初ノ柱ハ拔替ル、枅蓋ヲシテ、銅ノ縁ヲ内ヘタ、キ伏

セ、重子テアケヌ様ニスル也、扉ニ直ニ垂加靈社ト彫付テアリ、上家ハ四角ニシテ二枚扉、屋根ハ

四方軒ニシテ上ニ寶形アリ、前ニ三四寸ノ丸鏡、裏形ニ鳥居ノ中ニ、淨衣鳥帽子着タル老人、梅花

ヲ指出シ、下ニ女姓跪ツキタル處也、是誕生ノ時、母ニ夢想ノ體也、鳥井ハ日吉社也、鏡ノ上ヲ惟足

翁ヨリ來ル靈社號ノ紙ニテ包アリ、初ハ宿ニ有シガ、後ニ下御靈社内ニ社ヲ建置レシニ、新社ト

テ公儀ヨリ咎ラレ、兩宮近江守殿ヘ民部參リ、申分立テ別儀ナシ、然レドモ垂加翁別社入ザルコ

一 御懸盤

五膳

一 御吳器

七ツ入附御風十五  
鉢同板子御箸一膳

右御紋桐、金銀金具有之、總梨地、

一 銀子百三十五枚

八木五百石充

右田地五十石買得之事、百三十石者、總見院殿每日朝暮御靈供田之事、附本膳御菜五ツ御汁

一ツ、二之御膳御汁一ツ、御菜三ツ、但御命日朝ハ五之膳、晚ハ三之膳可被備事、

一 一日之下行八木九枳充、内三枳朝暮之御膳方、殘六枳有之、衆僧朝暮一人四合ツ、然者三十日

衆僧十五人之飯米有之、合八木二石七斗、

右總見院殿御膳長老齋非時、總並十二箇月八木卅二石四斗也、

一 八木廿石

是ハ總見院所、御修理方之用、

一 一萬貫殘錢

千四百貫文

總見院殿方丈繪并疊、其外萬入用之用、江可被相立候、

右渡申所如件

天正十年壬子十月十七日

總見院

羽紫氣前守  
秀吉花押

〔總見院殿追善記〕御佛事囑金難用の爲に、鵜目一萬貫不動國行の御劔を相添渡之、又位牌所とし  
て一字の精舎を建立し、總見院と號し、并に卵塔一箇立べき作事料として、銀子一千三十枚渡之、  
又寺領五十石、後代まで相違なき様に遠慮を加へ、八木五百石渡し、寺家の計として、買得せしめ



勝定院 安義持公牌 同 勝定院道詮

長德院 安義量公牌 同 長德院道基

普廣院 安義教公牌 同 普廣院道惠

慶雲院 安義勝公牌 同 慶雲院道春

慈照院 安義政公牌 同 慈照院道成

常德院 安義尙公牌 同 常德院道怡

大智院 安義視公牌 同 大智院道存

法住院 安義澄公牌 同 法住院道舜

萬松院 安義晴公牌 同 萬松院道照

光源院 安義輝公碑 同 光源院道圓

靈陽院 安義昭公牌 同 靈陽院道桂

林光院 安義嗣公牌 同 林光院道純

〔改選諸家系譜後略〕元龜二年六月十四日、元就朝臣、卒於蘇州吉田郡山城子、時歲七十五歲、葬于大

通院、法名十州、太守前陸奥守日額洞春大居士、位牌、今在字、輝元中納言寬永二年四月廿七日、歿於

長州萩城、時七十二歲、法名天樹院前黃門雲巖宗瑞大居士、牌所妙麓山天樹院、

〔大德寺塔頭總見院所藏文書〕爲總見院殿贈大相國一品兼嚴大居士信長田御位牌所建立寄進物

渡申分之事

一御大刀一腰不動國行

一銀子千枚

一銀子廿五枚

總見院殿永代可爲御校勘事

總見院御作事方

總見院御卵塔之用

最後述懐云云、西阿者專修念佛者也、勸請諸衆、爲傾一佛淨土之因、行法事讃、廻向之光村爲調聲云云、

〔江戸名所圖會〕松本山廣福寺 昔は稻毛山と號したりといふ、菅村の内、府中往來の道より右の方四町ばかりにあり、○中略

觀音堂 此堂中、重成の背像なり、下に重成以下の位牌を置たり。

稻毛三郎平重成禪門法名道全

元久二乙丑年六月廿四日

其餘重成の父小山田別當平有重法名寂照、同舍弟機谷四郎平重精法名歸悟、同甥の機谷太郎平重秀法名蓮風、同小次郎平重秀法名如月、一千小澤次郎平重政法名眞悟等、以上五人の靈牌あり、いづれも元久二年乙丑六月二十三日とあり、○中略

一室圖如大禪定尼

萬久六乙卯年七月上旬四日

かく注せし靈牌もあり、寺僧も其人を知らずといへり、東鑑に因て考るに、即稻毛三郎重成の室なる事明けし。

〔新編相模國風土記稿〕八十卷 圓覺寺

佛日庵 北條家ノ祠堂ナリ、○中略 檀那塔 小堂ヲ構へ、中央正觀音ヲ安ズ、○注 右ニ北條時宗

ノ像ヲ安ジ、同牌ヲ置ク、法光寺殿大禪定門弘安七、其傍ニ時宗室ノ牌アリ、潮音院殿覺山志道大

殿ト、左ニ貞時高時ノ二像ヲ安ズ、各牌アリ、貞時牌曰、最勝園寺殿宗流大禪定門、應長元年弘三年五

月廿二、其傍ニ高時ガ三子ノ牌及ビ像ヲ置ク、○注 各遺骨ヲ石櫃ニ藏メ、堂下ニ湮埋スト云フ、

〔山州名跡志 二十一〕萬年山相國承天禪寺

足利家塔所

鹿苑院 安義滿公牌 法號 鹿苑院道義

のあとには堂をたて、御墓堂と號して、念佛を修す、いまの光明寺これなり、

〔明月記〕寛喜元年六月廿九日乙丑朝心寂房來談嵯峨故入道内府御墓所、蓮渡六條坊城寢殿、立三

味堂公卿法眼以公覺法眼○註可令住居之由、大相被約束、禪左府○大覺當時領知大覺寺○註依

其領之内、公覺居住之事、將來可無骨由、澁給兩相門不和、遂推而押領所、今背命、現行、彼實宜卿領、

又同大覺寺領之内也、近年張權勢行要事之間、又與禪左府不和、□□□事彌難澁云々、事變時移、

人心顛越、是又世之習歟、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年十月廿五日、戌刻相州公文所燒亡○中右大將家○源并右京兆法華堂、同

御本尊等爲灰燼、廿七日相州武州參評定所給○中法華堂并本尊災事、縱雖爲理運火災於關東

尤可怖畏思食之由各進意見、同造營事、被經評定處、如師員行西康運、墳墓堂等炎上之時、無再興例

之由、依申之有御助成、可仰寺家之旨議定云云、十一月十八日、今日右大將家法華堂上棟也、此事

被付寺家云云、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年○寶治元年六月五日丙戌、今曉雞鳴以後、鎌倉中彌物惣○中萬年馬入道馳參

左親衛南庭、乍令騎馬申云、毛利入道殿被加敵陣訖、於今者世大事必然歟、左親衛聞此事、午刻參御

所、被申將軍御前○藤原賴朝重被廻奇謀折節北風變南之間、放火於秦村南鄰之人屋、風頻扇煙、彼館秦

村并伴黨咽煙遁出館參籠于故右大將軍○源賴朝法華堂舍弟能登守光村者、在永福寺總門内、從兵八

十餘騎張陣、遣使者於兄秦村之許云、當寺爲殊勝城郭、於此一、所相共可被待討手云云、秦村答曰、縱

雖有鐵壁城郭、定令不得遁歟、同者於故將軍御影御前欲取終早可來會此處云云、專使互難爲一兩

度、猝火急之間、光村出寺門、向法華堂、於其途中、一時合戰、甲斐前司泰秀家人并出羽前司行儀、和泉

前司行方等、依相支之也、兩方從軍多被疵云云、光村終參伴堂、然後西阿、秦村光村、家村、資村并大隅

前司重隆、美作前司時綱、甲斐前司實章、關左衛門尉政泰以下、列候于繪像御影御前、或談往事、或及

〔吾妻鏡<sup>四</sup>〕元曆二年<sup>○文治元年</sup>四月廿九日壬午、今日以備中國妹尾郷、被付崇徳院法華堂、是爲沒官領、武衛<sup>○源賴朝</sup>所令拜領給也、

〔吾妻鏡<sup>十六</sup>〕正治二年正月十三日庚子、迎故幕下將軍<sup>○源賴朝</sup>周閔御忌景、於彼法華堂、被修佛事、北條殿以下諸大名群參成市、

〔新編相模國風土記稿<sup>九十二</sup>〕東鑑ヲ考究スルニ法華堂ト稱スルハ、皆墳墓ノ堂名ナリ、實朝政子義時、共ニ其卒後、葬地ノ堂ヲ稱シテ、法華堂ト云フ<sup>○中略</sup>元仁元年ノ條ニ、故奥州禪室義時墳墓供養ナリト記シ、分注シテ、新法華堂ト號スト載ス、是其證トスベシ、又直ニ墳墓堂トモ記セシアリ、建長二年ノ條ニ曰、奥州相州令順禮右大將家、右大臣家、二位家、右京兆等御墳墓堂給ト見ユ、是卽法華堂ヲ云フナリ、

〔古事談<sup>四十七</sup>〕熊野別當湛増之許、桂林房上座覺朝ト云者、有武勇之器量、勝等倫之間、至湛順快實等之時、相傳難去之者也、然五旬以後、深信念佛、棄弓箭、不斷稱彌陀名號、然間去承元三年比、於湛増之墓堂、勸進近里、七箇日修別時念佛間<sup>○下略</sup>、

〔吾妻鏡<sup>十七</sup>〕建仁二年六月一日甲戌、遣州<sup>○北條時政</sup>令<sup>下</sup>向伊豆國北條、給依有夢想告爲訪亡息北條三郎宗時之菩提給也、彼墳墓堂在當國桑原郷之故也、

〔吾妻鏡<sup>十九</sup>〕承元五年<sup>○建曆元年</sup>十月十三日辛卯、鴨社氏<sup>○氏字下</sup>菊大夫長明入道<sup>○中略</sup>今日當子幕下將軍御忌月、參彼法華堂、念誦讀經之間、懷舊之淚頻相催、註一首和歌於堂柱、

草モ木モ麻シ秋ノ霜消テ空キ苦ヲ拂フ山風

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年四月四日戊子、如法經御奉納、右大將、右府將軍、二品、三箇之法華堂各一部也、〔法然上人行狀畫圖<sup>四十二</sup>〕翌年<sup>○安貞二年</sup>正月廿五日の曉、更に西山の粟生野の幸阿彌陀佛のもとにわたしたてまつりて茶毗をなすに紫雲そらにみち、異香もともはなはだし<sup>○中略</sup>かの茶毘所



ありけるとぞ、秀衡の棺の内より、枕一ツ、大刀一振出し置と有、

如此有之候、唯今迄風説にも不承事に御座候、若似寄たる事も有之候や、左候は、其様子承度候件之處は、仙臺領之内に無御座候哉之事、

或覺書に有之、奥州光堂の事、秀衡死骸、泉三郎が棺の事等、委細被成其愚候、御書付之趣、承知仕候、光堂は仙臺領之内に御座候ニ付、品々御書付に向、左之通申上候○中、秀衡棺をあばき死骸一覽之事、先年三人之死骸、一山之老僧共之内見申候、損も無之と申傳候、元祿年中、光堂修葺申候節、三人之棺、假屋江移置申候、其時分別當金色院一覽仕候處に、秀衡が棺、釘朽候故、歟四方江放れ開き、板厚一寸ほどにて、内外共に漆にて塗、金箔にて濃之申候、棺一重に御座候、死骸不損、皮肉は骨江乾付、色薄黒髪は白毛一寸程生候様見へ、丈は中人程にも見へ申候、年齢は見分り不申、棺中稗般之様成物にて詰候儀は相見へ不申候、右二つ之棺は、木地を金箔にて濃之申候、和泉三郎棺は無御座候、秀衡棺之側に、和泉三郎首桶有之、絹一端程にて首を巻置候處、晒頭に御座候、口金之内、住僧見届不申由御座候○中、右之通中尊寺住僧、古人共承届從國元申爲登候以上、松平陸奥守内遠藤文七郎

〔長秋詠藻下〕保延元年のこごなるべし、七月九日、故人故中納言の忌日に、ごりべの、墓所の堂にまいりて、懺法にあひて、夜更て歸るに、草の露まげかりければ、

分きつる袖の雫かごりべの、なくく歸るみちまばの露

〔百練抄八〕嘉應二年五月十七日、二條院御骨、自香隆寺本堂渡三昧堂、件堂以二條皇居崩御殿、左

大臣○藤原渡造之、

〔山槐記〕治承五年○養和正月十四日辛酉、新院○高已崩御○中、今夜渡御、邦綱卿清閑寺小堂、抑是

六條院御墓所堂云々、

寛弘二年乙未十月十九日甲午

左大臣○又見政事要略、榮花物語

〔法成寺攝政記〕寛弘二年十月十九日甲午、淨妙寺供養○中人々退出、後始三昧、以院源僧都令申

事由、此前打火可付香者余余○藤原道長取火打白佛言、此願非爲現世榮耀壽命福祿只坐此山先考先

妣及奉始昭宣公○藤原基經諸亡靈爲無上菩提、從今後來々、一門人々爲引導極樂也、

〔中右記〕寛治八年○嘉保元年三月二日癸酉、殿下○藤原師實令參詣木幡山陵給○中午刻着御淨妙寺南

門前廊、先撤御劔暫給長盛令向山陵前給○中先令洗御手給後御拜山陵之前敷牢○北面兩殿、殿前也此間人々暫徘徊南門前、少時自山陵下還御、次入御淨妙寺中、暫御三昧堂南庇、有御飄

誦事○下略

〔平泉舊蹟志〕金色堂○世俗是云

天仁二年、清衡建立す、堂三間四面、中の間七尺二寸、兩脇の間五尺五寸、柱高さ一丈九尺、内外上下

四壁悉く龜布をかけ、其上を黒漆を以て厚く塗、金箔を貼て金色となせり、長押の地紋に螺鈿珠

玉をちりばめたり、内三壇有何も螺鈿を以飾れり、中央本尊阿彌陀○中佛像の下壇中、清衡の棺

あり、東北の隅の壇上の佛像、中壇に同じ、壇下に基衡の棺あり、西北の隅の佛像も中壇の數に同

じ壇下に秀衡朝臣の棺あり、棺の傍に首一ツ首桶に入、泉三郎忠衡の首とも云、又泉冠者泰衡の

首とも云り、此三棺昔より開き見る事をゆるさず、見る時は怪異有と云、

〔寓簡〕元文三年七月、從江戶御間合御答書

或覺書に、六七年以前、奥州光堂の佛の眼に入たる金を、人の盗みし事、在、僉議するごとて、秀衡が棺

をあばきたり、棺五重計、外の板は塗たり、内の棺一重は桐の白木なり、秀衡が死骸生たるがごと

し、年の頃五十餘り、たけは中人より少し低き也、髪三寸計り生たり、裨敷のやう成ものにて棺を

詰たり、五百年計なるに、形の不損は、此者の徳にや、傍に泉三郎が棺是は、また、かなる晒頭一ツ

弟子大日本國左大臣正二位藤原朝臣某<sup>○</sup>道前白靈山淨土釋迦尊言<sup>○</sup>中昔弱冠着緋之時從先考大相國<sup>○</sup>藤原屢詣木幡墓所仰三重瞻四域古塚杳々幽蹊寂々佛儀不見只見春花秋月法音不

聞只聞溪鳥嶺猿爾時不覺淚下竊作此念我若向後至大位心事相諧者爭於茲山脚造一堂修三昧福助過去恢弘方來思以涉歲不敢語人<sup>○</sup>中

方今時々詣墳墓爲建寺指點形勝向彼松下則感二恩父母之廟塋問此處頭亦瘞同胞兄弟之芳骨雖至孝鍾愛之子孫不能晨昏雖近習舊勞之僕妾不能陪侍山嵐朝歸庭溪月夜舉燭而已仍自長保六年三月一日結花構償初心不材之所企造普賢而爲刻木拜貌之志匪石之所思書妙法而代立碑旌德之文是以勵拙掌而馳筆區以信爲嘉手倩明首而加意匠移孝禮尊顏今日擇曜宿始法華三昧刻十月定星之期廻萬代不朽之計于時蒙霧開愛日暖可謂天地和合風雨不違祖考感應垂冥助之令然也別亦奉書法華經百部千軸般若心經百卷<sup>○</sup>百餘口賢聖衆以香花梵唄洪鐘浮磬寶蓋幡幢名衣上服七珍百味供養之演說之青苔鋪設自展七淨瑠璃之茵紅葉亂飛暗成千花錦繡之帳玉軸星羅見崑山之積玉金言流布知提河之有金夫寺廟者如來之墳墓也實相者法身之舍利也丹誠獨勝有便於弘一乘王舍不遠無煩於牽群僚丹丘青塚忽具如來之真色萬籟百泉皆唱妙法之梵音疑是靈鷲山之乘五色雲以飛來歟將亦法龍池之驚六種動以涌出歟視耳未曾視聽目未曾聽彼端木者魯之賢士也移家於孔子之墓傍王劭者晉之重臣也築寺於祖父之廟北崇龍象以弘智峯識羊大傳之絕後風伴槐林以高法棟擬王丞相之拜先塋黑白衣之雲集豈唯三州五郡之淺契内外咸之影從抑亦見佛聞法之大緣功德遍于法界利益及于衆生我願既滿衆望亦足以此一善廻向四恩天下安穩萬民快樂敬禮釋迦多寶妙法大乘妙光法師普賢薩埵入此道場證明功德天神地祇及茲山幽靈善神等被如來之衣著菩薩之座仰願三寶增益一念嗟呼煖寒木於大智之日淚髮蒼栢之煙霏朽壤於甘露之泉手播白蓮之種劫石雖磷願主之印不刻芥城縱盡不退之輪長轉願共諸衆生上征兜率西遇彌陀弟子某歸命稽首敬白

享保十四年歲次己酉春三月乙卯，祠堂上梁，永言配命，多求多福。伏願上梁之後，神安其宅，永無震驚之虞。人揭其靈，恒供蘋藻之奠，闔門穆々，克永先猷。奕葉總々，式弘道訓，長胤謹書。

〔先哲叢談續編七〕松崎白圭

篠山侯信庸，奉崇儒術，祭祀宗廟，悉遵禮制。及世子襲封就國，又謀議廟社之制度，時藩執政藤井某謂：「儒員松崎祐之曰：『先君好儒術之故，廟制甚大，諸件稱之，今不必須其制，但如習俗之所爲而制之可矣。』祐之訪之白圭，白圭正色曰：『先公信而好古，廟祭有謨，周旋不失舊斯爲之美。況今世子未有此意乎？得失是非，豈待問人？』」於是廟制祭法，皆得不變更。○中白圭在篠山時，依朱子家禮新制祠堂，自是以降，雖遷移不一，輒亦必造營之，奉先之禮務盡力之所及，念父母平時所甘旨以供祀，雖家甚貧，至其忌辰未嘗一日不奉酒食也。

〔吉事略儀〕拾御骨

各取箸上首人來上大長骨，先拾骨。○中其後各拾盡之也。此所可被立御塔若御堂者，少々殘御骨爲墓，不然之時，大略可拾取。

〔多武峯緣起〕和尚題定樂躋談峯奉遷御骨

○續原

其上起塔款言，材瓦不備，所願何遂。漸及十二重，款

息無惜，夜半雷電霹靂，大雨大風，忽然天明，朝見之，材瓦積重，形色無異，知飛來也。和尚感然，伏地見聞奇異，經年之後，塔南建三間四面堂，號妙樂寺。此乃定慧和尚所建也。今講堂是也，以之爲多武峯寺之草創耳。

堂東大樹邊，異光時々現，和尚點此處造方三丈御殿。○今聖靈院安置大臣靈像。

〔三代實錄十三〕貞觀八年九月廿二日甲子，從五位上行肥後守紀朝臣夏井，配土佐國。○中數年母亡，

夏井至孝，冥發居喪過禮，建立草堂安置骸骨。晨昏之禮，無異生時。本自崇信佛理，至是於草堂前每日

讀大般若經五十卷，以終三年之喪。

〔本朝文粹十三〕爲左大臣供養淨妙寺願文

江匡衡



虛位、以擬室之有房、而寓徽旨也、其傍庫厨亦備焉、此地境佳、山水周遭、可以安神位、可以遊魂輿、誰不感太守追遠之孝哉、太守襲封既有年、當其在府之時、手自圖祠堂之樣、示余、余感其慕儒風而有報先之志、告曰、夫祭稱家之有無、則其豐儉宜有裨益、至如在之誠敬、則富貧何擇焉、嗚呼、神果如在乎、孔子曰、之死而致死之不仁、之死而致生之不智、故曰、如在、不曰、在乎、唯其孝子孝孫之意、齋戒清潔、一存誠敬、聽於無聲、視於無形、祖考之體既遺之於我、則祖考精神是我精神、一辨之香、一爵之酒、昭明肅蒿、神其不泯乎、肅然於其上、其左右哉、豈無形之可視乎、無聲之可聽乎、維神德之盛、體物而不可遺也、苟秉此心、則不可以爲不仁、不可以爲不智、而如在之聖言、豈其忽諸、是以古人視諸羹饌、視諸墳墓、猶然、況於祠神位哉、其心誠於中、其敬形於外、則神其可感享必矣、神其感、則天亦祐之、神感天神、則一家盛、而子孫保之、然則祠堂之營、可謂能知本而立其大也、又從而歌曰、仰彼雲山、臨此水澗、維神精爽、升降其間、乙卯之冬

〔桃源遺事〕上同○元四年辛未九月、久慈郡小野平村、旌櫻寺に祠堂を御建、賴義義家の神主御安置

被成候○中神主御脇書、遠孫光國奉祀と御自筆にて被遊候、神主御入堂の節は、御規式嚴重に被

仰付、御自も御烏帽子御道服にて御着座被成、導師は増井村久慈郡正宗寺の雷啓和尚是をつとめ

らる○中昔賴義義家奥州より歸陣の時、爰に暫座をとめ、櫻の木の旌樟を御插候得ば、活櫻葉

を生と云、其櫻今にあり、四方にはびこれり、花白く葉中より、普賢象といふ櫻のごとく、一葩ひね

り出せり、是を旌に比して、旌さくらと云、此いはれを以て、此所に祠堂を御建被成候、

〔桃源遺事〕上同○元八年己亥正月、西山公御歸府なされ候、此年舜水先生の碑を瑞龍山の麓に御

建なされ、御自筆にて明徹君子朱子墓とあそばされ候○中これよりさき、舜水卒去の砌、武州江

戸駒込の御別荘に祠堂を御造り、神主を御安置被成、毎年忌日に自御祭なされ候、

〔紹述文集〕上九 〔祠堂上〕梁文

於本土祭祖先古人所謂信美者不在茲乎太守祠堂之營於其孝有所見焉苟移此心於忠義而事上之道不懈則永世其祿子孫受之祖先亦久血食於此堂可至無窮也甲寅嘉平吉辰

〔東遊記四〕藤樹先生

此度よき序なれば墓にも謁し講堂をも一見せばやとおもひて略中其となり志村周助といふ  
醫者の許へ案内して略中余講堂を拜見し神主をも拜し度由乞へば周助奥へ入り禮服を着て  
講堂の盤を手に持ていざ來り給へと引連て行く扱講堂を開きたるに堂はかやぶきにて間數四  
間あり略中押入の内に深衣を着せる繪像あり釋菜の時の圖と云其前に厨子あり其内に神主  
あり上箱に先生姓中江諱原字惟命號頤軒稱藤樹先生慶安元年戊子八月廿五日卒葬邑東玉林  
寺の三十八字あり箱の内の神主常法のごとし

〔雍州府志十〕林家祠堂 在二瀬林道春本朝博學廣材之人也諸儒多出自斯門略中二瀬代々之  
傳領也

〔鷲峯文集八〕丹後國瀧上谷祠堂記

夫惟家事之本無大於祭祖廟故凡營宅地則先立祠堂者常也然本朝久染夷狄之風無貴無賤皆委  
於浮屠不得自祭者久矣有志者豈不痛恨哉丹後國宮津城主土佐權太宰大江君尙長未及壯齡有  
變俗之意相攸於封內瀧上谷新營祠堂四間蓋倣朱文公之制也其曾祖總州古河城主從五品右近  
大夫直勝者奉仕東照大神君或嘗泉界信樂之難凌勢海風浪之危或從軍於小牧山臨長久手之陣  
手縱池田勝入歷仕台德公秀忠西赴藝陽收福島氏國郡北使羽州放本多正純此是殊顯著者也  
其餘勤勞許多增祿高門開一家之基以是爲始祖置第一位顯祖山州淀城主從四品信濃權守尙政  
奉仕台德公執國政歷仕大猷公光進位加封益揚家聲以是爲第二位顯考從五品尙征受直勝  
之號稱右近大夫蒙今大君綱川之命移封宮津膏腴之地不隕守成之名以是爲第三位其第四間

以考於古，可以施於今，實是不易之通禮也。唯以胡敦流轉之久，人皆染俗習，而祖先之薦供，悉委浮屠，以營祠堂於其家者，幾希。方今一柳山城權太守直治新營祠堂於豫州周敷郡采地網附山下，其向儒風之志，不亦善乎？其家譜曰：一柳氏之先出自越智姓豫州河野之支流也。移居濃州，稱一柳氏。太守高祖直高產州之厚見郡，知西野邑。其配者稻葉一鐵姪女也。曾祖直末稱伊豆守，仕豐臣秀吉公，屢勲戰功，賜字縣真木島城。移江州勢多城，轉領濃州大垣城，既而改大垣治同州，賀留美河田邑。凡所食六萬石。天正十八年之春，小田原之役，列先鋒戰死於山中城。享年四十八。時三月廿九日也。其耦黑田如水妹也。無子。直末弟直盛繼家號監物，賜尾州黑田城，領三萬五千石。叙從五位下。慶長五年之秋，東照大神君東征與州，直盛發黑田、胥岐、岨之嶮，到上野國高崎，遇井伊直政奉屬台施辱名，劒之。賜既而石田氏反於上方，直盛返軍加前驅，濟岐岨川，討賊，斬首數百級。此行闔國一統，依軍功改賜勢州神戶城，增其食邑。甲寅乙卯大坂兩陣，奉從廳下，復加采邑。豫州周敷新居宇麻三郎及播州賀東郡都六萬八千六百石。以寬永十三年八月十九日病終於攝州，享年七十三。乃是太守之祖考也。其對者藤原氏女也。直盛有三男：長子丹後權守直重，領新居宇麻三萬石。次美作權守直家分，知宇麻之內，并播州之內，二萬八千石。其季藏人直賴分領周敷新居之內一萬石。直賴正保二年四月廿八日宿衛江府易資，享年四十四。乃是太守之顯考也。於乎三家同源，一株之柳，連枝累葉，豈可忘傳世之本根乎？祠堂之營，可謂祀而不忽諸家事之大，何以加焉？太守寄譜并圖，請記其趣。譜既如右，展閱其圖，則堂傍室而南，面有外門，通出入。其東有茂林並之，登而南，則顯考之墓在焉。仰望則網附石隄二山連而勢高，其西東麓臥絹川古壘相對，北臨則蒼海渺茫，雲煙遶負，縱目於讚備藝之層浪，遠想於千萬里之風帆，自然佳境魂升魄降，以招其遊乎？以慰其歸乎？當其薰炷香灌饗饌，薦黍稷，供肴蔬，則畏敬奉承，聽於無聲，視於無形，神之格思，洋洋肅然，所謂祭如在，而其左右上下恍惚彷彿，孝子之心，於此可知焉。况夫豫州者，越智之本土也，其種類雖分在他邦，精靈何不歸其所出哉？然則河野氏族傍親，亦各來可饗太守之祭乎？幸受封

〔和漢三才圖會八十一〕祠堂今云太靈堂末代

祠祠音廟也家禮云君子將營宮室先立祠堂於正寢之東

按儒家以考妣及先祖神主祭之所亦稱祠堂其神主之式圖器財部殺之釋氏稱尊靈屋即祠堂也

〔喪祭式〕祭禮略節

祠堂ノ制堂中ニ三室ヲ設ケ中ノ一室ヲ少廣ク中ノ室ニ始祖ノ主ヲ藏メ其左右ニ高祖曾祖考妣四位ヲ昭穆ヲ以テ列シ東室ヲ昭トシ西室ヲ穆トス其家ノ元祖始ヲ仕テ士大夫トナルモノヲ始祖ハ昭一代ハ穆ト代々皆此例ニテ推スベシ父昭ニ當レバ父東祖西ナリ父穆ナレバ父西祖東ナリ三室トモニ千石以上ハ布ノ帳アリ簾ナシ戸ハ彫物等用ユベカラズ兩楹ナシ神主ノ楹櫺ナリ櫺ノ兩側ニ格子ヲ用フ附用ヒザルコト若シカラズ覆衣箱ナシ祠堂ノ兩旁ニ遺物祭器ヲ藏ル所アルベシ千石以下ハ帳櫺櫺ナシ若シ祠堂ヲ略制ニスル者ハ三室ヲ設ケズ櫺ヲ設ケテ室ニ代フベシ帳唐戸ヲ用ヒズ祠堂ナキモノハ正寢ニ舊院等表座敷表榻ヲ設ケテ一世ノ間ヲバ蒲板ニ祭器遺物ハ櫺ノ下ニ藏ムベシ其制作ハ祿ノ厚薄家ノ有無ニ從フベシ小條實家ナド室蓋狹ク櫺上ニテ祭ルコトヘテ祭ルモ又ハ箱ニ納メ置キ祭ノ時其儘机上ニ載スルモ各其便ニ從フベシ

〔新編相模國風土記八十八〕圓覺寺

佛日庵 北條家ノ祠堂ナリ鹿山略記曰本寺大檀那北條相模守平時宗同相模守平貞時同相模守平貞時同相模守平貞時室之名也而餘之良時高時之靈屋者分處而在黃梅續燈之二院而靈屋之名貞時曰無長殿高時曰同光堂垂子中古安子常院爲檀那塔近年穿壞燈庵客殿之下得一石類是則移置于當院之跡也云云

〔鸞峯文集七〕一柳家祠堂記

禮曰營宮室先立祠堂凡祭祀者事之大也尊祖者傳世之本也其先立之良有以也古者祭法依人有差其制見載記然世變時移於今則有難遵行者故朱文公作家禮篇首載祠堂之制其儀節之簡整可



板垣前ノ方ニ鳥居門アリ、社内ニハ神座ヲ設テ、三卿ノ神體ヲ安置シ、自餘ノ神靈ハ空位ニ祭ル、然レドモ靈社ハ住宅ヨリ隔リタル故ニ、朝暮ノ拜趨便宜ナラズ、仍正寢ニモ床ヲ設ケ、空位ニテ祭ル、但靈社ヲ建ザル家ニハ、床ニ神體ヲ安置スルモアリ、凡喪祭ノ間ハ、假ニ靈棚ヲ設テ祭リ、其子弟タルモノ服限闋リテ、先祖ノ神靈ト併祭ル事ナリ、吾家田氏ニテモ經兒卿ノ薨日ハ十一月十六日ナリ、靈社ノ祭祝ハ、先考養父ノ服限闋リテ、翌年四月ニ事ヲ行ヒ玉フ、先考ノ薨日ハ四月二日ナリ、祭祝ハ予等重服闋リテ、翌年五月ニ事ヲ行ヒ侍リシ也、勿論日時ヲ撰ンデ行フベシ、

〔伊勢參宮名所圖會附六〕守武神主俳諧の事

大永天文のころ、内宮蘭田長官荒木田守武神主あり、中守武連歌の家にして歌道に通じたり、

中寶曆年中、宇治岩井田山に彼靈廟を建たり、所以有て山田の祠官千賀良珍俳諧發起して、

實は宇治の郷に、此道を好めるものと、守武の末葉の人建るなり、前に記するが如し、

〔喪祭小錄〕祭禮小錄

靈舍

家屋ヲ營造スルニ、先祠ヲ立、然ニ領地宅地定テ有タザレバ、祠立ガタシ、只靈舍ヲ建テ神靈ヲ安置スベシ、平生ノ家室ヲ離レズ、建ツバケ廊ヅタヒニ通フ様ニス、大小ハ地ノ廣狹ニシタガヒ、大ナレバ二タ間ニモス、小ナレバ一間ニモス、一間ヲモ定コト不能者ハ、本宅ヲ取シキリテモスル、夫モ不能ハ、或ハ棚ヲツリテ其内ニモ安置ス、家ノ有無ニ從ベシ、入口闔ノ有處ヲ鳥居代ト意得ベシ、東面、南面タルベシ、北面ニスベカラズ、木ハ檜ヲ用、檜ヲ用ベカラズ、屋根ハ瓦葺ニスベカラズ、

〔増補下學集上〕祠堂

〔和爾雅二〕祠堂

廿三日戊辰、唯神院殿爲居緒土ニヌル也。廿六日辛未、唯神院殿御社へ、御簾并棟札御幣（神物下）付筑後ニ申付納之。次棟札書付、唯神院奉御社造替、神龍院梵舜申付也。大工三條源左衛門尉、慶長九甲辰十二月廿六日梵舜（略）如此書納申了。廿八日癸酉、唯神院殿御社材木料銀子ニテ八九貫目五分相渡、則大工請取次爲祝義壹貫遣了。

〔龜峯文集（四）見禰山廟記〕

山在會津封域之中、故通議大夫虎賁中郎將兼行肥後權守源公（正）保科久鎮會津、曾登此山、爲靈

區定壽藏之兆、寬文十二年壬子十二月十八日、公卽世於江府箕田第、依其遺命棺槨之具、倣用儒禮、護送靈輿而到會津、葬於見禰山深奥之處、築墳立石、懷乃是公所豫定也。公素敬神道、潛心於其書、究卜部家者流之秘蘊、良嗣拾遺兼筑前權守正經、孝思之餘、不堪哀慕、而議證號土津神營、構新社於墳前二百三十步之地、以敬崇之、而拜禮之座中外三門、瑞籬回磴、長廊華表、皆備矣。其社城北限上山澤、斜至湯澤之東、西界大澤、南極見禰麓、所謂有伯夷奕奕者不在茲乎。良嗣猶有慮於心、達執政而命家臣、促役夫八萬人、北尋檜原、河流循山穿巖、西通數十里、注磨上原、新聖畎畝以爲封戶也、可謂至孝之志、爲後世思之深也、非李悝白圭爲利其國、盡地力行水路之謂也。（略）下

〔環矛拾遺（中）舍人親王墓者、在山城國深草山麓、藤原稻荷社前、樓門與鳥居之間也、少築土、近年社人、建小社乎墓上、卜部家傳來也、而今建墓上乎小社、此甚誤也、舍人社則藤森大明神也、去墓所南八町、抑上古中古之陵墓、皆如右假山轅形、而其上無會物社者、咸在別處、山科神社雖近陵邊、隔數百丈、在神社於異所也、

〔吉祭次第〕祭祀ノ事

吾黨先祖ヲ祭ルニハ、或敷地ヲトシテ祠ヲ建、或ハ家内ニ床ヲ設ケテ祭ルナリ、吾家ニハ御裳濯河ノ東、岩井田郷西行谷ノ邊ニ六間四方ノ地ヲ定メテ、小祠一字ヲ建テ、其廻リニハ九尺四方ノ

ニ又現西塔ノ性救僧都形○中乍驚行向彼房テ示案内○中房主臥内ニ招入聲救夢ノヤウヲ被語ケルニ性救泪ヲ流テ云ク極樂兜卒ノ望共以可難遂只成御廟眷屬菩提早自近歟發此願祈請年久宿願已成就歟云々仍性救逝去ノ後埋御廟近邊云々又惠心僧都請兩祈誓ノ時遣弟子ヲ御廟令轉讀大般若經我ハ於本房奉讀最勝王經被祈讀其時小蛇在御廟石疊上往入性救僧都幕所之後自其所小烟立テ天ニ昇リ漸充滿テ成大雲滿天雷電豪雨潤天下云々

〔叙岳要記下〕慈惠大師眞源號三御廟大師

〔折たく柴の記下〕九月○正徳廿八日に文昭廟○德川家宣の御鐘銘を撰み參らす是仰によりてなり

銘をば高立岱とぞ書ける深見新右衛門

〔幕朝故事談〕對山様御簾中様は憲廟○德川綱吉の御姫君なり瑞春院様の御腹なり失火の節○德川宗吉

鶴姫様の御駕籠を御かき被遊候事龍飛の後瑞春院様を三の丸様と申し奉しに度々御賞

し被遊候となり○中略

淺廟○德川家治初厄と四十二の御厄の時帝鑑の間大名申合せ芝崎宮内方にて御祈禱仕候事御札

は不差上跡にて宮内より寺社奉行迄御届なり

〔瓊矛拾遺下〕於卜部家死人贈社號生人賜靈社號此無勛許猥有社號者越位專一者也有志神道鑑

我朝之教者舊事古事日本三紀能々相考而入諸家可尋問故實惟一家流爲可則有大過伊勢賀茂

吉田所謂有同有異諸國大社亦十而二三古風遺普知之則無大過者乎

〔梵舜日記〕慶長九年十二月十五日庚申唯神院殿○卜部築右御社依出來御遷宮左兵衛督參勤也御神

供已下拙僧申付今度御社依舊予御年忌之弔ヲ聞御社造替申付也大工三條而源左衛門申付也誠

神恩冥加一身之滿足喜悅々々次遷宮作法案脚二ツ二合ニ立新宮柱脚四本兩方ニ立次於假殿

遷宮呪有テ新宮ヲ大麻ヲ以テ祓テ御神體ヲ遷被申也次神供次宣命次包物火ニ焼拍手次退出

〔多武峯略記〕第五章創

荷西記云、定慧和尚天智天皇治天下丁卯生、年二十三入唐、天武天皇治天下戊寅歸朝、謁弟右大臣  
不比等問云、大織冠御墓處何地哉、答曰、畿津國島下郡阿威山也、於是和尚具語先公父、定慧契約、即  
引率二十五人、參阿威山墓所、掘取遺骸、手自懸頸、即落淚言、吾是天萬豐日天皇德太子智宿世  
之契、爲陶家子云々、故役人荷土、共登談岑、安置遺骸於十三重塔之底矣、後記千滿云、或說云中天

智九年庚午年閏九月六日、改大織冠聖廟、移倉橋山多武峯云々、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年三月十四日戊子、於東大寺設無遮大會、供養毗盧舍那大佛中、先是詔從

四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善、作呪願文曰中、憑斯功德奉資感神武聖之山陵以

此勝因奉酬田邑德文之靈廟、

〔左經記〕長元八年六月廿五日丁丑、及晚景參前齋院、戊刻出自北門中、註亥刻許到達臺廟件所御故

〔古事談五神社〕天喜二年九月廿日、聖德太子御廟近邊方爲立石塔、引地之間地中有似菖石中下

〔親長卿記〕文明四年八月十七日、今日有多田所、放正四位下贈位宣下、

〔宜胤卿記〕文龜四年七月十一日己亥、爲玉蘭盆、今日參墳墓七代列祖悉備靈供中、次參淨蓮華院

本願御廟吉田經口法名相

〔本朝續文粹八〕聖廟

七言秋日陪安樂寺聖廟同賦神德契週年詩一首

從二位行權中納言兼都督大江朝臣匡房

夫涉獵於酒水漆園之道、歷覽於玉牒石記之文、神仙聖賢之蹤、不若我聖廟聖廟昔是萬乘之賢、今

則四海之尊神也中下

〔古事談三〕行〕花山僧都嚴敎祈念云、欲奉見御廟中、慈本地屢祈、聞湧雲、中ニ現神龍顏其雲中



附り山城守役者へ御咄被成候由、總而武家いづこなく物毎結構過、本意ニ不思召候ニ付、然る上に將軍家などは、猶恐情有之事、御自身之上ならば、御位牌ばかりの思召之旨御嘶候由、増上寺方丈へは、御城へ被爲召候て被仰付候、

大御所様御靈屋之儀、享保五年、大御所様思召被仰出候趣ニ付、此度東叡山御靈屋御造立ニ不及、常憲院様御靈屋御相殿ニ御靈牌御安置候様ニ被仰出候、御法塔ハ御代々御格之通、御造立可有之候、

右之通被仰出候間、無口度向々へ可被相達候、

〔溫恭院様薨御一件〕安政五戊午年八月八日間部下總守御渡御書付寫九通之中

公方様○鎌川家定御不例、御養生不被爲叶今已下刻薨御被遊候、此段今日出仕無之面々へ可被遊候、

八月八日

松平和泉守殿御渡御書付之寫

大目付

御目付

公方様薨去ニ付、東叡山へ御入棺御葬送被遊候、且又御靈屋御造立ニ不及、常憲院様、有德院様、孝恭院様御靈屋へ御相殿御靈牌御安置候様被仰出候、御法塔之儀ハ御代々御格式之通、御造立可有之候、

右之通被仰出候間、無口度寄々可被達候、

八月

〔續日本紀二十〕天平寶字三年八月己亥、還太宰帥三品船親王於香椎廟、奏應伐新羅之狀、

○按ズルニ、神社ヲ廟ト稱スル事ハ、神祇部社格篇ニ詳ナリ、

もて江戸に往時の權門松平美濃侯によりて廟の來由を記し聞之。○中 己卯十月有司來り廟社より門廡に至るまで一般に結構す。○中 水戸黃門光圀卿も手狀を賜ふ。

六孫王御墳墓年久廢頽之處今度新被加御修覆之由珍重之事存候誠源家氏神御孫々迄御繁榮御事過之御事御座有間鋪興皆人一同奉存候事ニ候唯今迄ハ義家一人被致信仰候とて無益之八幡を源家之衆用來候多田滿仲者源家と申計ニ而御正統にても無之をさへ多田院なご御取立被成候今度ハ各別之儀如我等愚老も數十年來積鬱一時ニ伸披望天不堪霍亂歎朴之至ニ候爲今度御禮滿山代僧遍照心院內多聞院南谷法印下向之處兼々愚老此儀致苦勞候段御聞及候とて早速足下迄御申聞候由事多之處思召出過分ニ存候終不致書中候故以謝狀不申入候段足下幾重にも宜御申聞可給候頓首

七月六日

光圀

法眼立庵醫伯

不違廟

〔柳營水無月記〕大御所様○德川吉宗 御養生不被爲叶今朝卯刻薨御被遊候旨信濃守被申渡。○中 享保五年庚子九月三日御使戸田山城守上野御門主へ被仰達候覺

一御代々御靈屋之儀御代も次第に重なり候處御銘々御靈屋可被立事には有之間敷義兼々被思召候此以後輕き御修覆は格別御造替不被遊御靈屋之數を可被減候思召ニ候事

一今度東叡山大猷院様○德川家光 御靈屋焼失ニ付御再興被成間敷候嚴有院様○德川家綱 御靈屋へ御移可被成と思召候事

一御位牌料ハ前々之通可被付置候間御常勤行之儀御位牌前之指支無之様ニ指略可有之事右之通り思召候故御自身之上御位牌殿御建候などは不及申其外御法事迄格別減少可被仰付候條此段兼テ御聞置候様ニ被思召候事

大納言<sup>忠房忠忠</sup>殿が指揮にて、其靈屋を特に莊美に御造築ありたるより、台徳院様の御靈屋を造るに及び、御臺様の比例あれば大造なるものを御建相成候に至りたることなり、然らば其御靈屋の花美は、全く駿河大納言殿にきざせしものなりと云べきよし、御作事方に古來より申傳し越、土岐丹波守或時某<sup>○川路</sup>に語りたり、

〔郡林泉名勝圖會<sup>四</sup>〕正法山妙心寺

麟祥院<sup>妙心寺門前、東、水社村にあり、寛永十一年建立、檀越、賴業、丹後守、侯、當院は賴業春日局の菩提所にして、御廟會は、後水尾院の約殿をここに移されしといふ、内に、總繪は狩野古、右京の筆なり、</sup>

〔桃源遺事<sup>上</sup>〕寛文元年辛丑七月廿九日、威公<sup>○水戸</sup>御逝去<sup>十九歲</sup>五、あそばされ候<sup>○中</sup>御葬の御

規式等儒法にあそばされ、瑞龍山<sup>常州久基郡瑞龍山は、水より北方也、行程六里、</sup>に御葬あそばされ、御廟を水戸の御城内に御建御神主を御安置なされ、四仲井に御忌日、御墓祭等これあり、まかのみならず毎月朔望、又は臨時初物等の御をなへもの、今に至る迄たえず、尤武州江戸の御屋形にも御神主御安置なされ、其時々、に御拜あそばされ候、

〔嚴有院殿贈大相國公御葬送日錄〕延寶八年庚申五月六日、征夷大將軍右大臣源家綱公御病重クナラセタマヒテ、御世ヲ大納言綱吉公ニ讓ラセ給フ、都鄙マデモ驚キサワゲド甲斐ナク、ツヒニ八日未ノ刻ニ薨ジサセ給フ、<sup>○中</sup>十一日、東叡山御廟所御普請ノ手傳、阿部美作守ニ仰付ラル、東叡山ニテ元光院津梁院圓珠院寺地、今度御廟所御用地ニ召上ラル、十三日、阿部美作守今日ヨリ御廟所御普請ヲ始ム、

〔續近世略人傳<sup>四</sup>〕僧南谷

源廟<sup>經基王の</sup>廟なり、の興復をもて志とし給へども、故ありて院<sup>○通照</sup>を辭し、<sup>○中</sup>元祿丙子のとし、滿山の衆徒、師の宿志により、興復のため再住をこふこと頻なれば、又多聞院にうつり、總代の任を

御普請出來仕候也、同九年正月二十四日、台徳院様御他界被遊候節、御靈屋御普請等之儀、崇源院様之御たま屋より見増り候様に仕立可申旨、上意に付、只今の如くなる御佛殿には出來仕候也、此佛殿と見合候得者、日光山に御建被遊たる東照宮の御社は、殊外手淺く相見え候に付、御宮御建直しとは無御座、御修覆と有之趣にて、總奉行之儀は秋元但馬守江被仰付候刻、御宮御修覆に付ての御入用には御いとひ無御座候間、随分と手を込め、台徳院様之靈屋に見増り候様にとの被仰出に有之候と也、去に依て右御修覆に付ての御入用七十萬兩之由也、

右之次第に有之候得ば、御代々御靈屋之結構に有之其始りは、駿河大納言殿御物數寄より起りたる事之由、

〔台徳院殿御實紀四十二〕元和二年四月、この月江戸増上寺にも靈廟○徳川家康を營造せられ、僧徒法益を奉りて、安國院殿徳蓮社崇譽道和大居士と稱し奉る、

〔大猷院殿御實紀十九〕寛永九年正月廿四日、亥刻大御所○徳川秀忠大漸に及ばせ給ふ、廿五日、御遺

命には、御葬禮御法會儉約を旨とし、靈牌一の外、何も新に製する事あるべからずとなり、本城に天海大僧正、金地院崇傳をめし、御葬式の内儀あり、深夜密々に幽宮へ納め奉るべしと定らる、○中

略松平右衛門大夫正綱に、靈廟構造の事命せられ、増上寺に赴く、廿七日、亥刻大御所の靈柩を

西城より増上寺のかりの御ましにうつしまいらせ、土井大炊頭利勝并に近臣十人ばかり供奉す、○中靈廟諸門瑞垣等は、土井大炊頭利勝總督して、關東所領の諸大名助役し、使番庄田小左衛

門安照、黒川八左衛門盛至、書院番市岡多左衛門定次、山角藤兵衛勝成、是を沙汰す、

〔鹽尻二〕大臣家御所内室作り、内室とは天井なく、屋根裏の儘に造る事とぞ、○中按、東都増上寺、台徳公の御靈屋内室造也、といふ、

〔游藝園隨筆抄〕台徳院様○徳川秀忠御靈屋の御莊殿は、御上洛御留守中、御臺様御逝去ありしに、駿河



戸内翠簾縁緞子檜皮、同外環珞滅金菊花蓮花翠簾内水引緞子、地紅梅、紋蔓藤、折形金襴中ニ紅華  
 盤結ヲ繫ル、厨子左右共ニ同、戸裏蒔繪東ノ厨子左戸、櫃ノ立樹、右菊上ニ梧、答ノ紋アリ、西ノ厨子  
 松竹、畫大様扉ニ滿、

東厨子所安 秀吉公影座唐冠白袍袴薄紫平緒持笈、像之尺五寸許、座厚壹、

西厨子所安 政所公影座法體花帽子、別以絹、紗、之、衣、薄紫、袈裟、金紋、地、前、美、小袖、紺紫、白表、紋、下、白、衣、立、右、膝、持、金、珠、繩、紅、

右此殿政所公館ニアリ、後此所ニ移サル、

〔都林泉名勝圖會〕四、正法山妙心寺

祥雲院殿魂舍同所、開山堂の四、藥君像、長一尺五寸許、白衣を着し、船に乘するの像を安置す、中略、公の御會兄也

〔駿河土産〕五、櫃現様駿府に於て御不例之砌板倉内膳正江被仰渡候趣之事

櫃現様駿府に御座被成候節、御不例之砌板倉内膳正江御身後之義共を被仰出候とて、我等廟所  
 を將軍より被申付於ては、始祖之廟なればとの義を以定而作事等を結構に可被申付候得共、そ  
 れは無用之事に候、我等子孫に至り、代々ともに始祖の廟に増らぬ様にとある勘辨の爲にも有  
 之間、其心得を以、輕き宮居に致し置候様にとの上意に付、御他界以後江戸に於て將軍様へ其段  
 内膳正被申上候處、御尤成る仰には有之候得共、餘り輕き御宮居と有はいかゞなれば、大底結構  
 成御宮居と相見え候ごとく御普請懸りの衆中江申談候様に、被仰出、最前の御宮御建立出來  
 候と也、其後寛永三年に至り、御父子様共に御上洛被遊、御留守に於て、御臺様御病氣被爲附候段  
 京都へ相聞候に付、駿河大納言忠長公御看病之爲御暇ニ而御下向之所終に御快然無御座、九月  
 十五日御薨去被遊候に付、増上寺に於て御法事等之義も、忠長公御差圖被遊候内に、御父子様共  
 還御被遊、御廟前の靈屋等御普請之義共に忠長公之御請懸りと罷成候に付、思召之儘に結構に

魄舍、寶形造屋、<sup>トナリ</sup>棟、梁東西三間半、南北四間、東西二方縁、欄干擬寶珠、金具減金、南面段階、階ノ上唐  
 破風、飾彫物二重、桶金具減金、唐戸二枚、金具同、唐戸口幅二間半、其左右各一間、此所及東西戸、外重  
 算黒塗、内金張、地取置上金雲、繪梅櫻牡丹芍藥石竹石榴菊山茶花等折枝、長五六寸許ナルヲ散シ、  
 其間飛鳥アリ、青白ノ唐鳥、長三寸尾五寸許、狩野古右京筆、天井○<sup>略</sup>如此、算堅二本横一本、四方縁  
 共黒漆、毬杖面、金具同前、地板紙張、淺黄金切雲、莖無金蓮花、莖無八重菊ヲ散ス、菊金或ハ彩色、長押  
 ノ上板屏、模様前ニ同、間内柱長押上下敷居皆黒塗、長押上ニ三十六歌仙像ヲ掲ル、堅九寸横七寸  
 許、土佐光信筆、和歌ハ八條智仁親王筆、<sup>臨光院第</sup><sub>五御子</sub>北間上壇長押上、三間半ヲ三間ニ分、板屏、<sup>スレテ</sup>網  
 彩色、縁青又三間毎ニ網ノ中央ニ金菊三ヲ居ル、亘五寸許、雙ビ如此、<sup>略</sup>下二ツノ間二尺許、翠簾  
 ヲ繫、正面ノ縁、檜皮綴子、上横縁幅七寸許、堅常ノ如同左右口、縁地憲法、<sup>フナ</sup>織紋八重菊、縁糸淺黄桃色、  
 葉萌黄、翠簾ノ内水引、劔先ノ風帶ヲツクル、地白萌黄ノ今織始メ繫ハ、<sup>カサレ</sup>地平絹桃色、紋亂菱、金ノ摺  
 箔ナリ、戸張ノ内口深五尺許、板敷、其北上壇高サ三尺、正面段階四段、欄干擬寶珠、金具減金、同左右  
 壇高一尺九寸、壇縁段階等黒漆、蒔繪、欄干畫<sup>地カスリ</sup>散紋樂器階及瑱縁櫻川花笈階、左右壇下金  
 張付、畫海邊松原、天井白木組、天井與正面及左右金張付、畫海邊又平沙松原、松長一尺二三寸許、上  
 ハ木ナシ、山、古右京筆、正面ノ壁ニ、尤柱二本ヲ立ル、其間七尺許、柱黒漆、蒔繪、地紋カスリ、散形樂器、  
 正面壇上深サ五尺許、板敷、黒漆、上ニ翠簾ヲ繫ル、縁綴子、檜皮、翠簾ノ外減金ノ環路ヲ繫ル、菊花蓮  
 花ヲ作ル、其中大ナルモノ亘リ二寸許、小ハ一寸七八分、此所中臺ニ厨子ヲ置<sup>長三尺許、横二尺四寸</sup>、開戸四  
 枚、内彩色紺地、空ハ雲、下ニ佛說經ノ相ヲ畫ク、中ニ横一尺許ノ青蓮華ノ花臺アリ、其上見臺ノ如  
 ク、堅一尺横八寸許ノ板面ニ、小像ノ地藏菩薩千體ヲ造ル、中尊三寸許、座下四隅ニ四天王ヲ安ス、  
<sup>長五寸許、白木金具減金</sup>又座ノ前ニ舍利塔ヲ安ス、水晶玉持蓮花、長サ五寸許、<sup>正面上左右ニ黒漆有厨子如此、略</sup>堅五尺許、横四尺五寸、深三尺許、開戸二枚、長押ノウヘマヘ、及左右地板金黒塗、筋算角違二本宛、

めりて、帥殿いそがせ給、鳥への、南のかたに二丁ばかりさりて、たまやといふ物をつくりて、ついひちなどつきて、こにおはしませんとせさせ給、よろづいと、ころせき御よそほしさに、おはしませば事ども、おのづからなべてにあらすおぼしおきてさせ給へり、

〔仁和寺御傳〕宇多法皇 承平元年辛卯年七月十九日甲辰、崩仁和寺、亥時奉移大内山魂殿。

〔日蓮聖人註畫讃〕收取遺骨第三十一

以火開毗、火滅已後、收取遺骨、略踏道命、遂身延山、中二十五日、弘安五年十月入身延山、同二十九日、

日法刻眞影四十九日遷影堂、一百箇日起、廟納骨、弘安六年癸未正月、於久遠寺定年中定番、

〔信長公阿彌陀寺由緒之記〕人皇百八代後、陽成院、嵯峨、嵯見院と遊され候勅額あり、當寺寶物の内第一の重寶なり、此勅額の子細は、昔當寺總門の内左の方に、嵯見院殿の御靈舎ありけり、前に記し候信忠公御束帶の木像の尊影并御位牌等、此佛前にありて、晨昏の香華御供養等申候所に、六十年以前の大火に類焼の節、御佛殿も焼失申、漸く御像御位牌を取出し候、御靈舎造建之儀、申に及び申さず候、今に於て御像は方丈佛壇に安置し奉、御位牌は塔頭歸白院に安置しあり、彼額はその節の御佛殿の額也、火事の節にござり除今に現存す、

御佛殿并木像等造立、施主は青木加賀法印建立の由、類焼前の御佛殿に書これあり、是に依て、太閤秀吉公の木像もげん在す、御墓所石燈籠にも、春木加賀右衛門尉寄附と彫付あり、

但右石燈籠には、天正十三年と彫付あり、御佛殿建立は、慶長十一年と見えて、前の靈舎に書付有之候、

〔山州名跡志〕鷲峯山、又岩崎山高臺寺、秀吉公并政所公、在祖堂東山上臥龍、祖堂ヨリ、

舎ニ至ル廊ヲ云、額臥龍、雪月堂筆、魄舎、南面、外南西築垣、東ハ山、北ハ番僧ノ居所ノ門、南面小門

開戸、金具滅金、門前上壇、上ルニ切石ノ階アリ、

人の云ひし教なるや、近世の儒者は、聖人の道をば守らず、唯文辭を賣り物にするゆゑ、道に背きたる徒多し。

〔日本書紀<sup>二十四</sup>〕元年十二月甲辰、是歲蘇我大臣蝦蟇立己祖廟於葛城高宮、而爲八伯之饗。

〔古事記傳<sup>二十</sup>〕蘇我、蝦蟇、大臣の己が祖廟を建て、八伯之饗を爲しつとあるは、漢國王のまねせしなるべし。

〔山門堂舍記〕淨土院

昔檜皮方丈廟堂一字<sup>庭</sup>、<sup>四面有、</sup>傳教大師所定置矣、弘仁十三年六月四日辰刻、大師於中道院<sup>東本</sup>

遷化之後、以其遺骸、瘞彼廟堂、齊衡元年七月十六日、慈覺大師<sup>寺主</sup>移大唐五臺山竹林寺之風、始

修淨土院廟供、以密瓜爲供具。

〔高野山案内記〕御廟<sup>三間</sup>、<sup>向、瑞巖の内に在り、</sup>大塔より三十七町、三山鼎立の中心に在り、承和元年九月

一日、大師<sup>海空</sup>自から勘定して後、永く定身を留め給ひし所なり、同二年三月廿一日寅刻、中院に

於て結跏趺座し、大日の定印を結び、奄然として入定し給ふ、其閉目して言語なきを以て入定と

いふ、すべて生身の如し、五十日を経て、六高弟御輿を昇きて此地に供奉し、石壇を疊み、五輪卒都

婆を安置し、其上に寶塔を建立す、此靈廟即ち是なり。

〔榮花物語<sup>七</sup>〕<sup>鳥邊野</sup>みや<sup>藤原</sup>一<sup>條后</sup>は、御手ならひをせさせ給て、御丁のひもにむすびつけさせ給へ

りけるを、いまぞ帥殿<sup>伊藤</sup>御かたゝなどとりて見給て、このたびはかぎりのたびぞ、其のち

すべきやうなごか、せ給へり、いみじうあはれなる御手ならひごもの、うちわたりの御らんじ

きこしめすやうなごやとおぼしけるにやごぞみゆる<sup>略</sup>。○中

けふりとも雲ともならぬ身なりとも草ばのつゆをそれながめよ、などあはれなることゝ

もおほくか、せ給へり、此御ことのやうにては、れいのさほうにてはあらでと覺しめしけるな



置レケルハ、凡ソ天子ハ七廟諸侯ハ五廟、大夫ハ三廟ト禮ニアリ、然ルニ御當家既ニ上野并ニ増上寺ノ廟所七廟有テ、天子ノ如シ、是武家ノ法ニ過テ、聖人禮記ノ心ニ叶ハズ、然レ其有來タルヲ毀テ仕廻シ様モナシ、唯當時我邦ノ禮義華美ニ成テ眞實ニ叶ハズ予○德川吉宗今ニモ相果ナバ、東叡山ノ常憲公○德川綱吉ノ御靈屋ト相殿ニスベシト、上意遊サレシト見エタリ、是ヨリ同殿ノ制起リ、今日ニ至レリ、元來七廟ノコトハ思召ニ叶ハセラレザルコトナガラ、御譲讓ノ美意ニテ、祓毀ニモ及バセラレズ、權宜ノ制ヲ以テ、同殿ノ定ヲ創メラレ、其以來是ヲ遵奉セサセ給フモ、寔ニ餘義ナキ御事成ベシ、然ナガラ萬代無疆ノ内ニ同殿モ終ニハ塞ガリ、タトヒ三主四主同殿ト成トモ、時有テ數モ滿ツベシ、況ヤ幾十代モ同ジ様ニ奉祀有ンコトハ、天子ノ制ニモナキコトナルヲヤ、今日モハヤ十代ニ及バセラレタル時ナレバ、祓毀ノ制ハ立給ハズシテ叶ハザルコト成ベシ、四親廟ノ上ヲ次第ニ祓スルハ、少シモ不敬ニ非ズ、少シモ不順ニアラズ、是聖人ノ中制ニシテ、天理ノ當然ナレバ、後代ノ模範ヲ垂ルト云者ニテ、聊モ擬議ヲ容ルベキニ非ズカレ、

〔享保集成絲綸錄<sup>十</sup>〕正徳三<sup>己</sup>年九月

只今迄御佛殿御堂と申來候を、向後御靈屋と相唱、御廟と申來候を、御寶塔と唱可申候、以上、

九月

〔安齋隨筆<sup>後編十</sup>〕一寺院號 物を知らぬ儒者は、將軍家の御追號を文に書に、大猷院を大猷君、

或は猷廟と書き、常憲院を常憲君、或は憲廟と書く類あり、御追號は勅號也、何ぞ私に院字を削り云へるや、上を蔑如するの罪輕からず、其文異國の風に似て宜きがごどくなれども、此國の禮に背けり、禮を知らざるは儒の道に非ず、儒者は唯、文辭を異國風に作ることをのみを好て、此國の風に違ひ禮に背く事は必づかず、愚と謂べし、吾國を賤しめて他國を貴べよとは、何の聖

官師一廟、曰考廟、王考無廟而祭之、去王考爲鬼、庶士庶人無廟、死曰鬼。

〔江次第抄〕國忌

今案天子七廟、或有九廟之說、故陽成天皇以前、或八廟、或七廟、其數不定、然光孝以來、定爲九廟、其中以天智爲太祖廟、蓋天武、天智皆舒明之子、然文武至廢帝、天武之裔卽位、天智之流如絶、爰光仁天皇爲田原之皇子、而因群臣推戴、得登帝祚、於是天智之流勃興、加之天智天皇始制法令、謂之近江朝廷之令、天下百世因准之、示來至今、皆天智之一流、而爲太祖不遷之廟、豈不可乎、亦光仁已爲中興之主、故爲第二世、桓武創平安京、故爲三世、光仁桓武比周之七廟、文世室武世室、所謂劉子駿九廟之說也、其餘隨世、互有廢置、然而仁明光孝醍醐其德蓋天下、不忍毀去、是以後世聖君遺詔、不立山陵國忌、其意者、不可過七廟故也。

〔草茅危言〕宗廟ノ事

我邦ハ王室ニテモ、古來只陵園ノ式、備リタルノミニテ、廟制ノ定メハ聞ズ、令條ナドニモ絶テナシ、中葉以來ハ、山陵モ唯佛寺ニ寄寓シテ、別ノ設ケハナクナリ、今ハ泉涌寺ニ數十代ノ塋域壘々トシテ列シ給ヒ、其寄寓ノ寺ヲ指テ廟所トシ給フ様ニ見ユ、レドモ、四親廟祧廟ノ差別有ニ非ズ、武門モ是ニ准ジテ一向指定リタル制度ヲ聞ズ、鎌倉ハ一再傳ニテ亡ビタル故、モトリ論ズルニ及バズ、室町ハ等持院中ニ今一字有テ、十三代ノ塑像ヲ安置シ、別ニ祖廟ノ設ケモナク、昔ハ一廟一主ナリシヤ、又ハヤハリ今ノ如ク同殿ナリシヤ、何分迭毀ノ制ハナカリシト見ユ、十世ヲ過テモ盡ク祀ルト云ハ天子ノ制ニモナキコト也、當御代ハ祖廟ノ御設ケ尤モ顯嚴ヲ致サセ給ヒ、奕世ノ廟制モ備リタル御事ナガラ、廟制ハ未ダ行ハレズ、是ハ當初ハ御入用ノナキコト故、後世子孫ノ建議ニ托シ給フ成ベシ、萬世無疆ノ御事ナレバ、何レ此御定メナカルベカラズシテ、今日ナドハ最早其時成ベシ、明君享保錄ニ、享保御代始メノ上意ニ兼テ仰セ

〔伊呂波字類抄〕太儀廟 タマ

〔字鏡集二十〕  
 廣二 廟同、イシノイシヲ  
 シノイシヲホトケシノ  
 タハヤフ

倭調菜前編十四 たまや 築花物語に見ゆ、魂屋の義今も御廟をおたまやといへり、源氏に、たま

ごのといへるも同義なるべし、葬禮記式に殯殿をよめり、

〔玉勝間 十一〕靈屋

榮花物語鳥邊野卷に、一條天皇の皇后宮のかくれさせ給へるを、をさめ奉る事をいへるどころに、どりべ野の南の方に二町ばかりさりて、たまやといふものをつくりて、ついひちなどつきて、こゝにおはしまさせむとせさせ給ふとあり、今の世に御靈屋といふ名、此たまやなり、然れどもかのたまやといへる物今の御靈屋と全く同じとは聞えず、いさゝか事かはりてぞきこゆる。

〔古事記傳二十〕漢國俗には、王も臣も墓の外に廟といふ物を建て祖をまつる、皇國には陵墓を祭り坐て、外に廟はなし、

〔段註說文解字〕廟，尊先祖鬼也。尊其先祖而以是祖鬼之故曰宗廟。諸書皆曰：宗廟，古者所廟以祀先鬼。凡祭注云廟，始三代以後，廟居之與朝廷同。尊者爲會，羣曰社。小麥曰二部。廟古文見禮經十七篇，凡十七。

〔禮記〕祭法凡生於天地之間者皆曰命其萬物死皆曰折人死曰鬼此五代之所不變也七代之所更立者禘郊祖宗其餘不變也天下有王分地建國置都立邑設廟祫壇而祭之乃爲親疎多少之數是故立七廟一壇一墀曰考廟曰王考廟曰皇考廟曰顯考廟曰祖考廟皆月祭之遠廟爲祧有二祧享嘗乃止去祧爲壇去壇爲墀壇有禘焉祭之無禘乃止去墀曰鬼諸侯立五廟一壇一墀曰考廟曰王考廟曰皇考廟皆月祭之顯考廟祖考廟享嘗乃止去祖爲壇去壇爲墀壇有禘焉祭之無禘乃止去壇爲墀大夫立三廟二壇曰考廟曰王考廟曰皇考廟享嘗乃止顯考廟無廟有禘焉爲壇祭之去壇爲鬼適士二廟一壇曰考廟曰王考廟享嘗乃止顯考無廟有禘焉爲壇祭之去壇爲鬼

漢土ノ帝王ニ擬シテ之ヲ造リシナルベシ、又神社及ビ墳墓ヲ廟ト稱スルコトアリ、其實ハ廟ニアラズ、

靈社ハ、私ニ社殿ヲ設ケテ、靈璽ヲ安置スル所ヲ云フ、土津靈社、垂加靈社ノ類是ナリ、靈舍ハ、別ニ社殿ヲ設ケズ、家屋ノ一室ヲ以テ之ニ充テタルヲ云ヒ、祠堂トハ、朱熹ノ家禮ニ倣ヒ、多少損益シテ構造シ、神主ヲ安置スル所ヲ云フ、林羅山、中江藤樹ノ祠堂ノ類是ナリ、佛教ニモ祠堂アレド、此條ニハ主トシテ支那風ニ倣ゼルヲ收ム、墳墓堂ハ、墳墓ノ地ニ建テタル堂舍ヲ云フ、墳墓堂ニハ、法華堂或ハ三昧堂ト稱スルモアリ、法華堂ハ、具ニハ法華三昧堂ト云フ、三昧トハ、一心專念ノ義ニシテ、僧ヲ其堂ニ置キ、常ニ法華三昧ヲ修シ、亡者ノ爲メニ、滅罪ノ資ニ供スルヲ云フ、多武峯ノ妙樂寺、木幡ノ淨妙寺ノ類是ナリ、法華堂ノ事ハ、帝王部山陵篇ニモ見エタリ、參考スベシ、靈牌所ハ、位牌ヲ安置スル所ニシテ或ハ一人一家ノ爲メニ建ツルモノアリ、或ハ衆人相共ニ寺院ニ設クルモアリ、

靈璽ハ國風ニ隨ヒテ造レル、靈位ノ靈符ニシテミタマシロト云フ、多クハ鏡、劔、玉ノ類ヲ用キ、或ハ木ヲ以テ造レルモアリ、木ニテ作レルハ神主ト相似タリ、或ハ笏ノ形ニ作レルモアリ、神主ハ専ラ朱熹ノ家禮ニ據リ、少シク損益ヲ加ヘテ造レルモノ多シ、靈牌ハ、位牌トモ云フ、専ラ佛教上ヨリ用キル所ナレドモ、佛教固有ノ制法ニアラズシテ、或ハ宮殿ノ體ヲ模セリトモ、或ハ儒ノ神主ノ制ニ據レリトモ云フ、其始詳ナラザレドモ、北條氏ノ頃ニハ、既ニ世ニ行ハレタルガ如シ、影像ハ、其人ノ容貌、風采ヲ倣シタルモノニテ、畫像、木像等ノ別アリ、何レモ古クヨリ世ニ行レタリ、又佛寺ニハ、概テ祖師堂アリテ、祖師ノ影像ヲ安置ス事ハ釋教部ニ詳ナリ、

名稱

〔類聚名義抄七〕廟、厝、召、召、ヤ、シ、ロ、

厝、並、正



といへり、是れ里人のいふ所なれど、理誠にまかるべし、夫れを傳へて、城市近き寺院にもまきみをさして置きたるが、今は香花の供養の心にて、追善になるとおもふ輩は多し、またまきみに櫛の字を書たるも甚しき謬なり。○中櫛は奇南香にて、俗にいふ伽羅なり。○中今まきみに香氣もあり、抹香にもする故に、香花の供養の心にて、かくは誤りし也、又法華經方便品等に、栴檀及沈水、栴并餘材、これすべて香木の類をいふときは、木櫛といふも奇南香の事なるを、好事なる疎漏の愆、此等の處よりやあやまりけん、

〔萬葉集三〕挽歌 十一年己卯○天夏六月大伴宿禰家持悲傷亡妻作歌。○中悲緒未息更作歌、昔許曾外爾毛見之加、吾妹子之奥柳常念者、波之吉佐實山、

〔萬葉集九〕挽歌 詠勝鹿真間娘子歌

鶏鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登、至今不絶言來、勝杜鹿乃真間、乃手兒奈我麻衣爾、青衿着其佐麻乎、裳者縷服而髮、谷母撫者不旋履乎、谷不着難行、錦織之中丹裏有齋兒毛、妹爾將及哉、望月之滿有而輪二花如咲、而立有者夏蟲乃入火之如水門入爾、船已具如久歸、香具禮人乃言時幾時毛不生、物乎何爲跡歟、身乎田名知而浪音乃、驟湊之奥津城爾妹之臥勢流、遠代爾有家類事乎、昨日霜將見我其登毛所念可聞、

# 反歌

勝杜鹿之真間之井見者、立平之水挹家牟手兒名之所念、

## 附廟

廟ハタマヤト云フ、タマヤハ靈屋ノ義ナリ、我邦上古ハ墳墓ヲ以テ直チニ在靈ノ地トシ、其地ニテ歳時ノ祭祀ヲ行ヒ、漢土ノ如ク、別ニ廟ヲ設クルコト無カリシガ、推古天皇ノ御宇、蘇我入鹿祖廟ヲ造リテ八伯ノ憐ヲ爲セリ、是廟ノ史籍ニ見エタル始ナリ、蓋シ入鹿僧上ノ極

〔今昔物語 三十一〕兄弟二人殖萱草紫苑語第二十七

今昔□□ノ國□□ノ郡ニ住ム人有ケリ、男子二人有ケルガ、其ノ父失ニケレバ、其ノ二人ノ子共、戀ヒ悲フ事、年ヲ經レドモ忘ル事無カリケリ、昔ハ失ヌル人ヲバ墓ニ納メケレバ、此ヲモ納メテ、子共祖ノ戀シキ時ニハ、打具シテ彼ノ墓ニ行テ、涙ヲ流シテ我ガ身ニ有ル憂ヘヲモ歎ヲモ、生タル祖ナドニ向テ云ハム様ニ云ツ、ゾ返ケル、而ル間漸ク年月積テ、此ノ子共公ケニ仕ヘ、私ヲ顧ルニ難堪キ事共有ケレバ、兄ガ思ケル様、我レ只ニテハ思ヒ可□□キ様无シ、萱草ト云フ草コソ、其レヲ見ル人、思ヲバ忘ルナレ、然レバ彼ノ萱草ヲ墓ノ邊ニ殖テ見ムト思テ殖テケリ、其ノ後弟常ニ行テ、例ノ御墓ヘヤ參リ給フト兄ニ問ケレバ、兄障ガチニノミ成テ、不具ズノミ成ニケリ、然レバ弟、兄ヲ糸心疎シト思テ、我等二人シテ祖ヲ戀ツルニ懸リテゴソ、日ヲ暗シ夜ヲ暗シツレ、兄ハ既ニ思ヒ忘レヌレドモ、我ハ更ニ祖ヲ戀ル心不忘ジト思テ、紫苑ト云フ草コソ、其ヲ見ル人、心ニ思ユル事ハ不忘ザナレトテ、紫苑ヲ墓ノ邊ニ殖テ、常ニ行ツ、見ケレバ、彌ヨ忘ル、事無カリケリ、

〔倭名類聚抄<sup>二十</sup>〕萱草

愛名苑云、萱草一名忘憂萱音喧、眞語抄云、和名忘久佐、俗音如、眞語抄云、和名忘久佐、

〔羅戒記〕應永卅三年七月十三日乙巳、普門院僧都予定我來談、〇中

覆屋如何、僧都云、此事或説不可覆云々、有子細歟、抑故如住院入道右府通定公墳墓構覆是故大將

卿也、所爲歟、而無遺跡相續之仁、已今他人繼家、可謂不吉歟如何、

〔骨董雜談<sup>中</sup>〕墳墓ヘまきみを挿す事

本邦の俗墳墓ヘしきみを立る事は、唐にはなき事なり、博覽の僧徒に問ふに、佛書にいまだ見えすといふ、然るに山家の者の話に、山近き野外の葬地の墓ある所に新葬のものあれば、夜中狼出て墓を穿ち、屍體を食ふ事あり、その屍を埋る所にまきみをさす時は、狼之を嫌ひ來ることなし

もなく、只の石なり、是和尙の遺言なり、

〔江戸名所圖會〕<sup>四</sup>萬松山東海禪寺

開山澤庵和尚廟の<sup>方丈</sup>の<sup>西北</sup>の<sup>隅</sup>丘の上にあり、開山和尚の遺志により、石塔を建てず、たゞ自然

遺命不建碑塔

〔先哲叢談〕<sup>續編三</sup>松下見林

以元祿十六年癸未十二月七日歿、歳六十七、葬於内野大雄寺、遺言曰、謹勿建墓碣、吾所期於後人、有著述在、足以不朽百世矣、

〔先哲叢談〕<sup>續編四</sup>稻若水

若水以正徳五年乙未七月五日、舊患瘧疾、没于平安北小路家、歳六十一、葬於洛東迎稱寺門人松岡恕菴津島如蘭等、悉從其遺囑、相議不敢爲碑碣、墓表題若水稻彰信之墓七字耳、

〔爲親記卿人傳〕僧元政 遷化の前一日、父母の墓に大に法華の首題を書し給ふ、<sup>○中</sup>遺骸を稱則冠而屈にはふむり、竹兩三竿を植ふるのみにして塔をたてず、遺命によるぞ、

〔學山錄〕<sup>三</sup>不建碑銘

隋秦王俊薨、勅送終之具、務從儉約、以爲後世法、王府僚佐請立碑文、帝曰、欲求名、一卷史書足矣、何用碑爲、若子孫不能保家、徒與人作鎮石耳、唐張文昌北邙山篇云、朝々暮々人送葬洛陽城中人更多、千金立碑高百尺、終作人間柱下石、豈謂不然乎、又唐盧承慶拜刑部尚書、以金紫光祿大夫致仕卒、臨終誡其子曰、死生至理、猶朝有葬、吾死歛以常服棺而不棹、墳高可識、碑志著官號年號、無用虛文、李夷簡亦將終、戒毋厚葬、毋事浮屠、毋碑神道、唯識墓則已、余謂此最可法者也、大凡世之士大夫於其父母之死、多建碑銘之、雖無言行之可記者、亦還虛文而不已、實可謂浮薄之風爾、唯記其生卒年月官階而足耳、

〔垂加流神道葬禮式〕墓ニ櫛ヲ植ルハ非也、清淨ノ木ナレバ、穢ノ場ニハ有ベカラズ、若植バ、被木然ルベシ、今京都ニ七月六道參リトテ、諸人被ヲ持行テ立ル、是等ガ墓標ニ被ヲ植タル遺風歟、  
〔雍州府志改事〕平康頼入道塔 在高臺寺北雙林寺略○中 今大德寺山門西南、一堆墳上之松、亦是康頼之跡也、

〔和漢三才圖會七十四〕矢田部郡

忠度塚 在駒之林村西一町許自兵庫四

薩摩守忠度塚上植大木松

通盛塚 在兵庫西柳原門口之西半里許

越前三位平通盛塚上植松三株

重章塚 在右同處池中、塚上植柳一株、

〔梅花無盡藏二〕都鳥隅田之故事也、河邊有柳樹、蓋吉田之子、梅若丸墓處也、其母北白川人也、

佛像爲墓標

〔空華日工集〕應安二年七月十四日、新造地藏小像、穴所坐岩背爲收亡母遺骨、訖炷香禮拜、仍對新像讀地藏本願經、其事終如在、

〔續近世畸人傳附錄〕北山友松子

開田子云、壽安の墓、大坂天王寺町くちなは坂太平禪寺にあり、去年案内の人ありて、はじめて知れり、碑、碣にあらずして、等身の不動の石像、左右に金加羅世伊多加の脇士をも具す、地には石を疊み、石の燈籠等魏々たり、其不動の背に錄て云、

等身石像、爾生前是誰、吾死後是誰、截斷死和生、爾吾空也耳、

北山友松子並題

此像の背の火炎、風に吹れたるごころなれば、世に風吹の不動といひはやして、壽安の墓なる事はとらず、詣る人多きよし也、

〔江戸砂子五品〕萬松山東海寺 開山廟所 大なる石をむまれのまゝにして、三つかさねて、銘文

自然石爲墓標



〔紀伊國名所圖會三編六〕奥院

一番石塔同上

此五輪は崇源院殿○鎌川秀忠の御石碑にして、駿河亞槐○鎌川忠長御母公御追福の爲に建させ給ふ所なり、高さ三丈、趺石二間四方に亘り、石の玉垣を繞したり、山上億兆の碑碣に魁たるをもて、俗壹番石塔といふ、

〔紀伊國名所圖會三編六〕燔死群靈の碑

爲江戸燔死群靈頓成菩提碑

文政十二年己丑三月廿一日、江戸神田郷佐久間街失火、西北風烈、火所延燒東界墨水、西暨外隄、南至芝口、其間第宅市廛、舉爲焦土、男女燔死凡四千有餘人、其他避火溺水、或逃亡無蹤者、不可勝數也、豈可不傷悼哀憫哉、於是開法筵於當山、追福作善、以爲燔死群靈往生佛刹之資矣、因勒小碑、以標其事云、

○按ズルニ、塔ノ事ハ、釋教都ニ詳ナリ、

植樹木爲墓標

〔類聚名物考四事四〕塚に樹を植る事

亡人のなき跡のゑるしに、塚墓に木を植る事、その來るや久し、論語に出たり、今猶玄かり、彼は社より出たれども、塚も同じ事也、

論語、哀公問社於宰我、宰我对曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗、使民戰栗、子聞之曰、成事不說、遂事不諫、既往不咎、

〔葬里神官慎終記〕墓木此云部可能使、又云、

根コジニシテ持行ナリ、賢木カ何レノ木ナリトモ、其時ノ宜キニ隨フベシ、爾シナガラ多年ヲ經テモ、大木ニナラヌヲ撰ビ用キヨ、

〔長明無名抄〕上 一人九のはかは、大和國にあり、はつせへ参る道也ひとまろのはかといひて尋るには、まれる人もなし、かの所には、うたづかこぞいふなる。

〔柿本朝臣人麻呂勸文〕墓所事

考萬葉、人九於石見國死去了。○中而清輔語云、下向大和國之時、彼國古老民云、添上郡石上寺傍有

杜、稱春道杜、其杜中有寺、稱柿本寺、是人九之堂也、其前田中有小塚、稱人九墓、其塚靈所而常鳴云々、

清輔聞之、祝以行向之處、春道杜者有鳥居、柿本寺者只有礎計、人九墓者、四尺許之小塚也、無木而薄

生、仍爲後代建卒都婆、其銘書柿本朝臣人九墓、其裏書佛菩薩名號、經教要文、又書予姓名、其下註付

和歌、歸洛之後、彼村成夢云、正衣冠之士三人出來拜此卒都婆而去云々、其夢風聞南都、知人九墓決

定由云々、

私按人九於石州、雖死亡、移其屍於和州、歟、其例惟多、彼惟仲帥者、於宰府、雖薨逝、移其屍於花洛、東白

川邊而葬之云々、

爲追福建塔婆

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年七月十一日甲子、故禪定二位家○源賴朝周閔御佛事、於勝長壽院被修之、○中

相州○北條時房立塔婆、被供養、導師莊嚴房律師行勇云云、

〔紀伊國名所圖會三編六〕朝鮮役士之碑、長七尺、幅二尺二寸、厚三寸、重七斤、

慶長二年八月十五日、於全羅道南原表、大明國軍兵數千騎被討捕之内、至當手前、四百二十人伐

果畢、同十月朔日、於慶尙道泗川表、大明人八萬餘兵擊亡畢、

爲高麗國在陣之間、敵味方闕死軍兵、皆令入佛道也

右於度々戰場、味方士卒、當弓箭刀仗、被討者三千餘人、海陸之間、橫死病死之輩、具難記矣、

薩州島津兵庫頭藤原朝臣義弘建之

慶長第四己亥六月上藩

同子息忠恆

後薪をつみてはふりて、上に石の卒都婆を立たりけり、くだんの卒都婆、今にかの谷に有となん。  
 〔慈惠大僧正御遺告〕天祿三年五月三日初記没後事

拾骨所○中略

右卒都婆、生前欲作運若未運之前、命終者、且立假卒都婆、其下堀穴、除三四尺許、置骨於穴底、上可滿土、冊九日內、作石卒都婆、可立替之、是爲遺弟等時々來禮之標示也、卒都婆中安置、隨求大僧頂尊勝光明五字阿彌陀等眞言、生前欲書儲若未書入滅者、良照道朝慶有等、同法可書之、

〔玉海〕養和元年十二月五日丁未、入御自最勝金剛院西面○中略、令進御墓所○中略、漸奉沈穴底○中略、且

立廻釘拔、其上立石卒都婆○崇徳后聖子御葬

〔雍州府志十墓〕平族一家塔、在鳴澤北梅畑蓮華谷、曾壽永年中、平家奉帝○安徳、出京、終沒西海、其妻

女爲尼、多羅斯地善妙尼寺、而爲亡夫築塔於斯地、尼衆亦葬此谷、其外源家人亦所歸、依明惠上人之徒、多建塔於茲、今石塔婆多存、然文字漫滅而不見惜哉、

〔空華日工集〕嘉慶二年二月廿六日、意藏主至、先叙寒暄、問京事畢、乃面囑曰、余歸京必其逝矣、余不欲

閑維、但作掩土之備、汝到京、宜與季藏主等和會之、遂命工造木籠、廿七日、梵意將歸京、余自修書寄

季、大槩說掩土之儀曰○中略、投籠於窖中、覆以石蓋、亦粉其罅、掩土而深埋、立石浮圖、而爲表云々、四

月四日、師問侍僧曰、時刻何刻、僧曰、四更禪罷、而五更鐘鳴、師乃端坐、閉靜板、未鳴、泊然而寂○中略、及皮

時、門人以遺命、移籠于塔所、坎而藏焉、以土掩之、安石浮圖於其上、

〔清輔朝臣集〕やまどの國いそのかみと云所にかきのもとと寺と云所のまへに、人九がはかありと

いふをきゝて、そとばをたてたり、かきのもとの人九墓とあるしつけて、かたはらに此うた

をなんかきつけける、

世を経ても逢べかりけるちぎりこそ吾の下にもくちせざりけれ

清着給フ其邊ノ者ニ故大納言入道殿父○成經ノ御坐ケン所ハ何ノ所ゾト尋給ヘバ○中御墓ハ何所ヤラント問給ヘバ有木別所ト云山寺ナリト申○中彼別所ニテ何所ノ程ゾト尋レバアレニ侍一村松ノ程ト申ケレバ少將ハ萌出ル若草ヲ分入テ見給ヘ共其驗モナケレバ卒都婆一本モ見エズ實ニ誰カハ立ベキナレバ只一村ノ松ノ本ニ八重ノ葎引塞リ苔深ク繁テ土ノ少シ高カリケル所ヲゾ其驗トモ思ハレケル○中泣々舊苔ヲ打拂ツ墓ヲ築テ釘貫シ廻シテ道ズカラ造ラレタリケル卒都婆墓ノ中ニ立給ヒヌ

〔源平盛衰記十〕有王俊寛問答事

茶毘事終テケレバ骨ヲ拾テ額ニ掛涙ニ咽テ遙々ト都ヘ歸上ニケリ○中有王モ其ヨリ高野山ニ登リ奥院ニ主○後ノ骨ヲ納メ卒都婆ヲ立即出家入道シテ同ク後世ヲ弔ヒケリ

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十七日甲戌清衡已下三代造立堂舍事源忠已講心蓮大法師等注獻之○中寺塔已下注文曰衆徒注申之

一關山中尊寺事

寺塔四十餘宇、禪坊三百餘宇也、清衡管領六郡之最初草創之、先自白河關至于外濱、廿餘箇日行程也、其路一町別立笠率都婆其面圖繪金色阿彌陀像計當國中心於山頂上立一墓塔、

〔大塔軍記〕義大塔無墓、跡白骨新種重塚有卒都婆問之常葉之墓驗云○中只草茫々而露森々、

〔宗祇終焉記〕八月○文三日のまだ明ばのに、門前のすこし引入たる所水ながれて清し、杉あり、

梅櫻あり、こゝにをりをりさめて松をゑるしになど、常にありしを思ひ出て、一もとをうゑて塔婆をたて、あらがきをして○下

〔古今著聞集二〕淨藏法師は、やんごとなき行者也、かつらき山におこなひける頃、金剛山の谷に、大なる死人のかばねありけり、かしら手足つゞきてふしたり、苔青く生て、石を枕にせり○中其



載國史旌表用旗書孝子之門四大字并孝子父母像舊藏國分寺距今八十餘年寺罹火而燼當時所除租稅五十石其田亘今國分瀧川二村孝子子孫每歲以八月朔獻新穀於朝天子嘉之更賜氏八月朔日讀爲穗摘苗胤綿延經數十世不絕近時家道益落漸喪田宅今現存者曰助七郎孤弱草單儲保僅活翁又閔之也將建請以與其家而力未能焉乃謀建碑於萱野以昭遺蹟囑畫工某模孝子像請飭肥侯伊東公題勅辭其篆額則大納言日野公賜旂於是四方聞而義之者捐金以濟其志中翁踵自房請余書碑陰因采其語而記之

本墓  
石塔

〔徒然草上〕からはけうとき山の中にをさめてさるべき日はかりまうでつ、見れば程なく辛都婆も苦むし木の葉ふりうづみて夕の嵐よるの月のみぞ事とふすがなりける思ひ出て忍ぶ人あらん程こそあらめそもまた程なくうせて聞傳ふるばかりの末々はあはれとやはおもふさはは跡とふわざも絶ぬればいづれの人と名をだに來らずとしんの春の草のみぞ心有ん人はあはれと見るべきをばては嵐にむせびし松もちこせをまたで薪にくだかれふるきつかはすかれて田となりぬそのかたゝになくなりぬるぞかなしき

〔元亨釋書傳一〕釋空海世姓佐伯氏讃州多度郡人

略○中

承和二年海在金剛峯寺三月二十一日結跏

趺坐作毘盧印泊然入定先七日共諸弟子念彌勒寶號至此日瞑目氣絕略○中經五旬諸徒剃髮整衣

歛全身疊石造墳立卒兜波其上

〔今昔物語二十七〕於播磨國印南野殺野猪語第三十六

多ノ人集リ立並テ皆葬畢テツ其後亦鋤鐵ナド持タル下衆共數不知出來テ墓ヲ只築テ其上ニ卒都婆ヲ持來テ起ツ略下

〔源平盛衰記十〕丹波少將上洛事

治承三年正月十日比丹羽少將

略○成

ハ鹿瀬庄ヲ出テ上洛

略○中

二月十日頃ニ備前兒島ト云處ニ

爲孝子烈女  
詩

〔近世畸人傳〕若狹綱子

若狹の國小濱の府下に、病狼あれたることありしに、某士のうちに使るゝ小女十四五歳にて、綱といへるが、主の幼兒を背に負て、そのわたりに遊びける時、彼狼不意に走來てどびつきけるを、綱は急に己が裾をまくりて、背の子をおほひ、うつぶしになりたる時、狼は綱女が尻へ喰付ぬ、さる間に人々聞つけて集りしかば、狼は即走さりたり、さて彼女を物にのせたるまでは、尙詞たしかに、主の子の故なきよしを告しが、道にて息絶たり、やがて其親のもとへ昇入たるに、主の妻も聞てかけり來れるに、綱が母幼兒をわたりて、血にはまみれ給へど、つゆばかりあやまちせさせ奉らざりしを悦びはべるといへり、此母もたゞものにはあらざりけり、此ことを國の守聞し召て、二なく憐がり給ひ、大なる碁をたて、忠烈綱女の墓とまゐらし、銘は儒臣小野忠次郎に命じて、かかせ給ひ、三日大佛事をおこなはれ、遠近の人々も詣、詩歌の作、こゝろ／＼に手向ぬと聞えし、

〔岩陰存稿〕津孝子碑陰記

房之國分村有原、曰、蒼野、有古墳、曰、孝子塚、荆榛蒙翳、爲狐狸黽踴之藪、士人莫知、爲誰氏墓、武由石翁者、州之宇土人也、以鑿石爲業、深悲其失傳也、百方周咨、久而獲之、乃仁明帝時所座伴孝子家主也、事

夏金 主殿 石火 土刃 信士 行年十六	龜藏 氏源 氏源 刃 信士 行年三十四	正殿 氏源 日鑑 刃 信士 行年四十八	政村 氏源 水速 刃 信士 行年四十四	正殿 氏源 植植 刃 信士 行年三十四	光政 氏源 道互 刃 信士 行年五十一	風行 氏源 道普 刃 信士 行年四十六	色秀 氏源 回逸 刃 信士 行年二十四	女信 氏源 世石 刃 信士 行年五十四	忠政 氏源 無一 刃 信士 行年三十一
------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------







前に彼碑を建て、塀を廻らし、邊りに櫻紅葉など植わたして、風流の境となせり。

〔天元文章碑〕前哲林子平碑 嗚呼士之不幸、雖曰天命、抑亦非人事耶。子平禁錮而死之、五十年、追賜敕始得封其墓。後又二十餘年、今公特感子平志、追贈前哲二字、大修其墓焉。夫子平之不幸於生前、而幸於死後、如此天耶人耶。

爲忠臣義士墓碑

〔桃源遺事上〕同錄○元五年壬申八月、攝州湊川江、佐々介三郎良峯宗淳をつかはされ、楠正成の墓を御修覆被成、碑をたて、右を疊み、墳をなさせ給ふ。其高さ五尺、其徑一丈、碑面には西山公○湊川國維御自筆にて、嗚呼忠臣楠子之墓とある。され、碑陰には舜水先生兼て撰置れ候議を御彫せ、且又碑亭をも御作らせ候。元は墓印に梅の古木、これ有候ひしを、その梅をば、碑を御建候節、將王山廣巖法勝寺の本堂のかたはらへ御うつし被成候。

〔年山打聞上〕建碑弔正成

元祿五年の秋にてぞ侍りし楠正成は、忠義始終もつはらにして、王事に死したる人ながら、墓表のあらざるを、西山公念なきことにおぼして、佐々助三郎宗淳を攝津國湊川につかはされて、碑をたて、田地を其近邊にもごめて廣巖寺に寄附せられ、永く冥福を修し侍るべきよし命じ給ひぬ。其碑表の八字は、うすき紙に御みづから筆を染てつかはされけり。

碑石、堅三尺九寸、横一尺六寸、厚一尺、前石也。中、坦堅二尺五寸、横五尺、下、坦堅五尺、横一丈、共白石也。碑而、嗚呼忠臣楠子之墓之八字、水戸宮門光園公親筆、八分字也。

碑陰には、曾て舜水先生のかゝれし、正成畫像の讃辭を刻まれたり、いはく、

忠孝著乎天下、日月麗乎天、天地無日月、則晦蒙否塞、人心廢忠孝、則亂賊相尋、乾坤反覆、余聞楠公諱正成者、忠勇節烈、國士無雙、覓其行事、不可概見、大抵公之用兵、審強弱之勢於難先、決成敗之機於呼吸、知人善任、體士推誠、是以謀無不中、而戰無不克、誓心天地、金石不渝、不爲利回、不爲害怵、故能興復王宅、還於舊都、諺曰、前門拒狼、後門進虎、廟謨不臧、元兇接踵、構殺國儲、願移鐘虡、功垂成而震主策雖

門人敦賀吉田寛謹書 在洛東真如堂

〔天元文章碑略〕趙陶齋自誌銘略

○中

生質魯鈍、不得成文、又無可稱之事、若死則以此文字、可刻墓陰、

癸卯○天明十一月卅日夜燈下、

○按ズルニ、陶齋ハ、天明六年泉州界ニ於テ沒セリ、

爲古人傳碑

〔全讀史古六下〕佐藤嗣信墓本○三

郡

在王墓東下、舊在池之内、正保二年、築陂池時移于此地、墓內有大刀、

藏之志度寺云、寛永二十年、英公○松平立碑於墳浦、

〔續史愚抄中御〕享保八年十二月、今月勅修寺黨議、新建石碑于三條右大臣定方墳墓、有勅修寺達、不隨歟、

不隨歟、

〔岩陰存稿八〕德本翁碑

距今三百載、甲信間有百歲翁德本、姓長田氏、參河人、學醫於羽人殘夢、後從玉鼎者、受月湖道人方訣、

月湖本明杭州人、歸化居鎌倉、有良醫稱、玉鼎其三傳弟子云、翁既授名家方法、又鑽研古今醫籍、貫穿

融渙、咀精嚼英、有所獨詣十九方、以應萬症、皆隨手解脫、○中

略

年百十八歲、以寛永七年二月十四日沒、

有歲貝天錫者、參之大濱人也、爲予說翁爲我鄉人、世傳以爲甲人、若信人者、以其久居甲州、後終於信

之爲湖也、鷺湖傍有東堀村、翁墓在其林樾中、當忌辰遠邇來賓、有病者撮墓上石礫去、或摩挲患所、或

水煎服之、屢輒倍原數、寔以故塚上石礫、磊砢成堆、驗諸他書、天錫之言有徵、天錫市藥、依翁遺方、以

調劑利人、溥矣、欲報之德、請予○聖谷文、以植碑、廼爲之銘、○下

略

〔尾張名所圖會後篇四〕陶祖加藤春慶碑銘 近き比當所○春日井、陶工加藤景登が發起にて建

郡瀬戸

る所にして、陶器もて六角に製し、銘は其頃の督學阿部伯孝に乞ふ、さて慶應三寅年の秋、伯孝自

筆のまゝを彫刻せしめ、焼立てけるに、元祖の御靈やさきはへけん、一點の疵もなく、成就せしは、

前代未聞の大功末代の奇品といふべし、かくて禪長庵の山上、春慶が墓といひ傳ふる古五輪の

死に來てそのきさらぎの花の陰

野盤子

〔うけらがはな二篇五〕東海寺少林院碑銘

縣居于志名眞淵氏者賀茂縣主遠津祖者山城國愛宕郡賀茂大神乃美也都古賀茂成助縣主也○

元祿乃十年登云爾岡部爾氏阿禮出給比氏草保乃十末里八年京爾上利氏荷田宿禰東滿翁乃

數乎受給比寛保乃三年此江戸乃大城能下爾參來給比之乎延享乃三年田安乃殿爾米左解良禮

氏古乃書乃道能博士登之氏殊爾免泥左勢給閉里伎○中明和乃六年病給比氏十月晦日乃日爾

奈母七十末利三乃齡爾氏身罷給氣留豫能多末比置都留麻々爾江戸乃南荏原郡品川乃東海寺

奈留少林院乃山上爾葬奴仰皇御國乃古學乃道彌開爾開氣之波荷田翁難波乃契沖阿開梨我以

當豆岐毛阿禮杆歌乃調乎古爾引返多流波此于志乎許會始登波會倍計禮著給留書種々世爾行

波禮氏人皆志例々婆茲爾言波儒千蔭○加若可里之與利教受都流美多麻殖布由爾報奉良牟登

氏人々登共爾謀氏石夫美建留爾奈母有計留○下

此碑は大人の三十三年の忌享和元年に建べかりしを故ありて文化三年九月になん建ける

自作碑文

〔栗山文集四〕自撰墓誌

柴爲姓邦彦爲名智不周翠餅志存蒼生道不行妻子業任遺經壽於顏淵富于原憲歛有虞氏棺葬君

子國野雖不得大葬不死於道路文化四年冬十二月柴邦彦自誌

〔天元文革碑〕自題翠軒居士碑陰

居士名萬字伯時稱甚五郎父祖世仕水戸祖先事跡見水戸

六段田村六藏寺墳墓碑文○中在世八十年慣々無事可傳焉只此江戸海藏寺裏一片石石面所頽

爲子孫拜展之望破則改之不改亦無煩茫々天地神遊無不之嗚呼已矣翠軒自題○時在駒込海藏寺

〔山城現存墓碑誌銘全集醫〕

五猪飼敬所先生碑文○中沒年八十五遺言俾勸墓碑其言曰

嗚呼余不才無能唯能讀書折中古今無偏無執辨妄糾繆不假借知我罪我已有人猶俟後君子

れて、難波の浦に世を見はてけむ、其比は神無月の中の二日なりけり、さるを潮水のはざりにその魂をこめて、かの木曾寺の苔の下に千歳の名は朽ざらまし、東華坊こゝに此碑をつくる事は、頼阿西行に法縁をむすびて、遍に七字の心を傳ふべきと也、

其銘

あづさ弓 武さしの國の 名にしあふ 世に墨染の さきにたつ 人にあらずに ありし世の 言の葉はみな 聲ありて その玉川の みなかみの 水のこゝろぞ くみてゑる六すし五すし たてよこに 流てすえは ふか川や 此世を露の をきてねて その陰たのむ その葉だに いづ秋風の やぶりけむ その名ばかりに ござしをきぬ 春をかゝみの 人も見ぬ 身をなにはづの 花とさく 花のかゝみの 夢ぞさめぬる

碑陰

維石不言  
碑文以傳

狂云此碑ハ洛東ノ雙林寺ニ在リテ、頼阿西行ノ墓ニナラベリ、但シ本朝ニ假名ノ碑ノ始ナラシカ、其年ハ寶永庚寅ノ春ナリ、去レバ此銘ハ三十一句アリテ、起結ニ假名ノ韻ヲ用ルニ、中間ノ廿二句ハ、七字ノ謎ニシテ、其二句ニモ首尾ノ韻アリ、

〔本朝文鑑九文〕圖司墓誌并序

野盤子

出羽の國羽黒の麓に、圖司なにがしといふもの、都のかたをゆかしがりて、葉月の中比より旅だちて、中む月の末より、やみつき侍りて、何のあつかふほどもあらで、春もきさらぎの二日なるに、終に身まかり侍し也、中彼が廟前の香華をさゝぐるに、おのゝ短尺に名を題して、墓誌の情をそなふ、

常歸よりあはれは、塚のすみれ草

芭蕉庵

鴈一羽いなでみやこの土の下

洒落堂



僧録司右講經普福天台教寺前住持富春沙門守仁篆額

〔臥雲日伴錄〕文安五年三月十五日、今日間古邦開山碑銘今在何處、古邦曰、在勝定院云々、應永十二年、此銘自大明來將刻以建之、宗壽祖塔塔主觀中和尙先命中頼侍者寫之、頼因循不果、後郭隱居鹿苑時、咨于勝定院殿○足利、欲刻之於石、因命如拙、行四判求碑石、石難致、勝定相公聞其費則拙曰、不役萬人、則不可得、勝定相公恐煩國民而止矣、

〔桃源遺事〕上同元、八年己亥正月、西山公○水戸、御歸府なされ候、此年舜水先生の碑を瑞龍山の麓に御建なされ、御自筆にて明徴、君子朱子墓とあそばされ候、碑陰をば安積覺兵衛に仰付られ候、覺兵衛承てこれを誌申候、仍御自御祭なされ候、

〔先哲叢談〕五源君美

淺草報恩寺○今東本願寺城內、有白石墓焉、石方僅尺餘、正面題新井源公之墓、左側惟記筑後守從五位下諱君美、年六十九、享保十年五月十九日卒二十四字而已、

〔先哲叢談〕六物茂卿

芝三田長松寺、祖徠墓在焉、菊間侯撰其碑文、葛島石書之、工始竣、遠近傳、來摸寫之者日甚多矣、近時東藍田、併春臺撰誌、更刊木爲一冊子、以潤之、長松寺號壽命山、自葬祖徠後一號祖徠山、

〔本朝文鑑〕九芭蕉翁石碑銘并序

東華坊

我師が伊賀の國に生れて、承應の比より藤堂の家につかふ、その先は桃地の黨とかや、今の氏は松尾なりけり、年まだ四十の老をまたず、武陵の深川に世をのがれて、世に芭蕉庵の翁とは、人のもてはやしたる名なるべし、道はつとめて今日の變化をしり、俳諧はあそびて行脚の便を求むといふべし、されば松島は明ほの、花に笑ひ、象潟はゆふべの雨に泣き、こそ富士よし野の名に對して吾に一字の作なしとは、古をはかり今をおしふるの詞にぞ、漂泊すでに廿三の秋く

所作海雲之歌也亭西有石鐘塔乃大監禪師骨石旁有木碑乃東陵所作之大鑑塔銘銘見有字乃石室所書也師蓋福州三山連江劉氏子也余炷香三拜覽碑文一遍而退

〔空華日工集〕貞治五年六月一日津侍者號要關告別將游江南余草先國師○夢行狀而付之曰蓋聞大明之朝有文人宋景濂者呈此以求碑文并銘詞

〔空華日工集〕永和三年十二月廿五日晚赴如意菴○中可字久菴語及南遊事余問曰嘗作先師塔碑而付絕海公知之否久菴曰吾知之絕海屬之於勤無逸逸命宋景濂而令作銘銘將出偶有事變而停矣想其文必成未審今在何處

〔空華日工集〕嘉慶二年四月四日

日本天龍禪寺開山夢窓正覺心宗普濟國師碑銘

恭惟大明皇帝執金輪以御萬曆教所被與如來化境相爲遠邇乃洪武八年秋七月日本國遣使者來貢方物考功監丞華克勤奏曰日本有高行僧夢應禪師其入滅已若干年而白塔未有勒銘其弟子中津法孫中巽有墓中華文物之懿特因使者而求之然人臣無外交非奉勅旨不敢遽從所請敢拜手稽首以聞皇上欣然可其奏特詔詞臣宋濂爲之文○中銘曰

達磨之學傳至真丹一華五葉其文實繁臨濟名宗昭於佛鑑有子如龍乘桴東汎

○中孰爲佛乘孰爲衆生縱有言說皆是強名勒此塔銘龜趺螭首焯德叙功以

示不朽

洪武九年二月口口翰林學士承旨嘉議大夫知制誥兼脩國史兼太子贊善大夫金華宋濂奉勅撰

洪武十六年蒼龍癸亥春二月朔日乙亥僧錄司右善世天界善世禪寺前住持天台沙門釋宗滿書丹

政己未尾張秦鼎識源遠書中島淑刻

〔松島圖誌〕賴賢碑 雄島の内、西南の方にあり、世の人は是を雄島の碑といふ、碑總高さ一丈貳尺臺石の外壹丈、幅三尺六寸五分より四尺三寸迄、厚七寸あり、徳治三年丁未の春、觀鏡房賴賢といふ僧の弟子、匡心孤運等、其師賴賢の徳行を傳んとて立たるなり、鎌倉建長寺の住僧一山、一事の文并書なり、草體を難てかけり、見事なる書なり、文は甚長しといへども、典雅とするにたらず、

〔金石私誌〕<sup>三</sup>海内碑碣此<sup>○</sup>爲最大<sup>○</sup>中書全出集聖教序清逸可愛、文亦能記賢師及見佛上人行事、而如云、御島の稱出於鳥羽帝御賜之故、亦可以補入風土記矣、

〔尙古年表〕<sup>三</sup>高野山秋田城介願文碑

二史文選之古典者、萬代不朽之重寶也、而忝憐寸陰之好學、幸及恩下之拜領、意端之喜懼未休、感外之登遐、忽摧<sup>○</sup>嗟吁兼披玉卷、探訓業於先儒之詞、兼開細帙、灑淚華於故人之夕、是以爲奉謝其御勅志、爲奉訪彼御菩提、占高野之興院、建石塔之洪基、<sup>○</sup>中略文永十年癸酉二月十七日、弟子從五位上行秋田城介藤原朝臣泰盛敬白、

〔金石私誌〕<sup>四</sup>武藏比企大聖寺碑

右迎所天聖靈十三廻之御忌、煩舊僕衆庶無二心之發露、其合微力、互致造立、以□□始北陸使君禪儀所志過去御尊靈等□□増法雲之位、各々添疊月之光、功德之□□于六趣敬白、

康永三年<sup>甲</sup>十月十八日一結衆等敬白

碑稱北陸使君者、蓋指越後守仲時也、正慶癸酉、六波羅之敗、仲時奔於近江而死、下距康永甲申一十三年、故舊僕等爲立此石、以追冥福也、

〔空華日工集〕應安八年三月四日、早發熱海、取路走湯山西北、踰長坂下村、則抵于土肥成願寺矣、時值主人雲林不在、其令子清丁清睦者、引余於方丈後、數百步攀峭磴西上、乃見海雲二子有歌板、乃東陵

自性身、而猶尊重彌陀、景仰觀音、汝曹宜抽五帑藏衣物、奉造阿彌陀淨土、又云、吾生在此之日、普爲四恩、奉造、如意輪菩薩像、而情願更造八大菩薩像、列坐其像、而無常行追其事、不諸汝曹不忘、曷宜共相助、畢功、弟子等奉遵遺旨、備飾八像、而感梁木之既摧、備德音之永闕、所以炳發神功、崇茂範、莫若存妙像於當今、傳遺影於後葉、乃造成形像、雖英智茂範、其其人既往、而美質風器、與嚴像而如在、愛命諒才、爲像贊、○中略

神護景雲四年四月二十一日

故婆羅門僧正入室弟子傳燈住位僧修梵

○按ズルニ、此文題シテ南天竺婆羅門僧正碑并序トス、然レドモ今全文ヲ通覽スルニ、碑文ニ似ズ、恐ラクハ如意輪等菩薩ノ像贊并序ナラン、姑ク錄シテ疑ヲ存ス、

〔尙古年表〕洛西二尊院二世正信房滿空行狀碑

建長五年七月云々、大宋國慶元府打石梁成貴刊世俗以此碑爲源空上人、之碑、者其誤甚

〔群書一覽二帖〕大應國師塔銘

尾張國中島郡妙興寺に在ところの塔銘也、建長寺の大應國師、諱は紹明字南浦、駿州安部縣の人也、隸額に云、勅證圓通大應國師塔銘以上十字六行に書す、塔銘のはじめに云、大日本關東道相州巨福山建長興國禪寺勅證圓通大應國師塔銘有序、杭州路中天竺天曆萬寺永祚禪寺住持廷俊撰、慶元路金鵝山真相禪寺住持沙門釋密詣書、資善大夫江浙等處行中書省左丞周伯琦篆、撰刻本漢文の跋に云、大應國師の塔銘、本州中島郡妙興寺に在者、蓋元人の刻するところなり、はじめ師沒する時、其徒走て碑銘を元朝の賢豪に乞、凡三たび海に航して、これを得て歸るといふ、去年余源子開と往て師の塔を拜し、すなはち合掌讚歎して曰、四絶の觀、二なく亦三なし、佛を學ぶものは、法燈の高きを仰ぎ、文を好むものは、銘字の美を玩び、士君子はすなはち外國の人の我大邦を欽することを愛す、其これあるもの總て是師德云々、商隱禪師と謀り、撰刻して布施す、寛



り、其形扁石をくぼめて、笠の如く碑の上にかぶらせたり。○中此碑天和のはじめまでは、草むらの中に倒れふして知る人なし、故に草苴わらは等、あやまりて腰うち掛、または其あたりに尿なごすれば、たちまちに物狂となり、或は大熱を發して、さまぐの事ども口ばしりけるごぞ、然るに其頃奥州岩城の頭陀僧圓順と云者ありて、其よしを同郡武茂庄小口郷梅嶺平の里正大金久左衛門重貞と云者に語る。天和三年癸亥六月廿七日、水戸黃門光圀卿、武茂庄馬頭村へ下向の節に、重貞右の始末を言上す。貞享四年丁卯九月廿四日、馬頭村へ再び下向有て、儒臣佐々助三郎宗淳に命じて、まづ彼所に遣し、碑文を印打せしめて見せなはし、則宗淳によましめ給ひ、古を慕ひ給ふ御志深くましませば、元祿四年辛未二月、有司并に重貞に計りて、湯津上村は、御代官所并に坂本内記殿、安藤九郎右衛門殿の知行と入會の地なれば、替代の地を加へ給ひて、碑の在所凡二反歩許を水戸の封境となし給ひ、豎八間横七間の塚を新たに築かせ、其上に寶形造りの堂を建て、其中に彼碑を安置す。

〔鵜羅門僧正碑文〕南天竺婆羅門僧正碑并序

夫佛日西流、遺風東扇、十地開士住、菩提而播形、八輩應真、遍機緣而演化、是以真如奧旨、殊五天而共融、實相圓音、同八部而俱顯、若乃深達法相、洞了宗極、研尋七覺、空有兩亡、遊戲六通、真假雙照者、僧也。僧正諱菩提優那、姓婆羅遲、婆羅門種也。一十六國景慕其高義、九十五種讚仰其英徽、但以區域相隔、史傳闕然、本鄉風範難可續言。僧正神情湛寂、風宇明敏、靈臺可仰、而不可窺、智海可注、而不可竭、於是追支識之英範、逐世高之逸軌、跨雪峯而進影、泛雲海而飛儀、冒險經遠、遂到大唐、唐國道俗、仰其徽猷、崇敬甚厚、于時聖朝通好、發使唐國、使人丹治比真人廣成、學問僧理鏡、仰其芳譽、要請東歸、僧正感其懇志、無所辭請。○中以天平寶字四年歲次庚子二月二十五日夜半、合掌向西辭色不亂、如入禪樂、奄爾遷化、即以同年三月二日、開維於登美山右僕射林、春秋五十七、臨終告諸弟子云、吾常觀清性直嚴

不改其語銘夏堯心澄神照乾六月童子意香助地作徒之大合言喻字故無翼長飛无根更固

碑在下野國那須郡湯津上村俗稱等石舊在荆棘中土人觸犯者必蒙殃患有僧圖顛以是事語梅平村人大金重貞者梅平在水府封內重貞以義公光顯好古聞之實貞享四年之秋也公即命臣佐佐宗淳就揭之元祿四年三月更命有司封築安碑於其上建亭以護之雖然存于今者公之賜也蒙齋曰永昌元年當作朱鳥四年蓋係洗者改作今審觀之字樣不類其說似可信朱鳥四年五年六年七年見萬葉集朱鳥七年見靈異記不得據史斷言朱鳥之號僅一年也飛鳥淨御原宮天武天皇所營帝崩持統天皇嗣御是宮至八年朱鳥九年始遷都藤原故碑謂持統天皇之時猶稱淨御原大宮也猪名大村墓志所云後清原聖朝即是也追大壹天武天皇所制爵位四十八階之第三十三等那須直姓也所謂胙之士而命之氏者姓氏錄不載其祖不詳韋提名也佐々氏釋文作那須宣事提非是評督官名猶後世郡領也既於妙心寺鐘跋詳之白石新井先生云評督是都督之誤亦不知古時有評督之職也康子即庚子係文武天皇之四年庚作康又見伊福吉部氏墓版唯未見西土人以庚作康者耳弥故猶言病死也佐々氏釋作弥故疑爲物故之訛並非是弥字旁从夕下文殞字同漢李翊夫人碑殞字作殞與此同法愚訓志奴布思墓其人之義萬葉集多用之蓋是間會意字非詩所謂美且偲之偲白石先生釋爲德字亦非棟樑即棟梁淮南子主術訓魏崔浩沈法會文北魏文帝弔比干文唐虞世南書破邪論皆用此字蓋連上字增木傍者猶鳳皇作鳳凰琅邪作琅瑯之類也無翼長飛無根更固蓋本于管子式篇無翼而飛者聲也無根而固者情也之語唐高宗三藏聖教記亦云名無翼而長飛道無根永固然銘文多不可讀諸家往々強作解事不可據信今姑從佐々氏所釋蒙齋以是碑爲持統天皇時物則誤矣

下野國誌 十二 那須國造碑

那須郡湯津上村にあり黒羽城下より南の方にて一里許なり近郷の俗は笠石と呼ならはした

墓也。此雷惡忿而鳴落，踣踐於碑文柱，彼之折間雷橋所捕，天皇聞之，放雷不死，愷七日七夜留在天皇勅使樹碑文柱，標言生之死之捕雷，輕之墓，謂古京時名為雷岡，語本是也。

〔日本書紀〕二十七、八年十月辛酉，藤原內大臣足○錄墓，日本世記曰：內大臣，春秋五十歲，子私○其遷○遷於山南，天河不漲，不感遺書，嗚呼哀哉，碑曰：春○五十○有六○而葬○而。

〔藤原家傳〕上內大臣諱鎌足，○中即位二年，○天冬十月，○中十六日辛酉，葬于淡海之第，時年五十有六，○中百濟人小紫沙陀昭明才思穎拔，文章冠世，傷令名不傳，賢德空沒，仍製碑文。

〔古京遺文〕采女氏瑩域碑，飛鳥淨原大朝庭，○天大弁官直大貳采女竹良卿所請造墓所，形浦山地四千代，他人墓上毀木犯穢傍地也。

己丑年十二月廿五日，古庭與廷通用，○中弁亦辨字，建多胡郡辨官符碑亦用之，國策齋貌辨，呂覽作剽貌辨，古今人表作昆辨，元和姓纂作昆弁，則知辨辨弁古通用也，○中采女氏，姓氏錄載在右京及和泉陸神別並云神饒速日命之後古事記所云亦同，竹良天武天皇紀作竹羅云，直大肆，此云大弁官直大貳皆可補史闕，形浦山蒙齋云，在河內國石河郡春日村，土俗說云，稚子山碑今移在同村妙見寺，代者古人量地之法，見類聚三代格，上宮聖德法王帝說，法隆寺資財帳等書，萬葉集歌所謂五百代小田亦是，○中己丑，持統天皇三年也。

〔古京遺文〕那須直韋提碑，永昌元年己丑四月，飛鳥淨御原大宮，○天那須國造，追大壹那須直韋提，評督被賜，歲次庚子年正月二壬子日辰節，○中殊○殊意斯麻呂等立碑銘，偲云爾，仰惟頒公廣氏尊胤，國家棟樑，一世之中，重被貳照，一命之期，連見再甦，碎骨飛髓，豈報前恩，是以曾子之家，无有嬌子，仲尼之門，无有罵者，行孝之子，

貳照，一命之期，連見再甦，碎骨飛髓，豈報前恩，是以曾子之家，无有嬌子，仲尼之門，无有罵者，行孝之子，

墓碣明會典云五品以上許用碑六品以下許用碣庶人止用碣誌公侯及一品碑螭首龜趺二品碑蓋用麒麟三品碑蓋用天祿辟邪並龜趺四品以下並圓首方趺其高低各有度詳見本書右項碑說古制之亦有可識者焉因記而示之耳

〔舜水朱氏談綺〕碑式

碑首及跗有三官尊者螭首最屬踞次者雲日首方跗下者方首方跗碑中書故某官某贈及勳階某號某府君之碑或神道碑其妻無別立一碑之理惟釋子撤人則有之或者卒於他所不附葬則有之然近古以來無有不附葬之理

子不寫或者其子別賜姓則書之

碑陰書先考諱某某年歲次某甲子某月日時生於某所歷仕某君某年甲子某月日時卒於某所享年若干娶某氏小字某某年月日時生於某所享年若干生幾子長某次某女某適某或末字

孝男某泣血稽顙記

右據朱舜水答賀州人中村子知問碑式書之

〔日本靈異記〕捉雷緣第一

小子都栖輕者泊瀬朝倉宮廿三年治天下雄略天皇即大泊瀬之隨身肺肺侍者矣天皇磐余宮之時天皇與后髮大安殿婚合之時栖輕不知而參入也天皇耻輟當於時而空雷鳴即天皇勅栖輕而詔汝鳴雷奉請之耶答曰將請天皇詔曰爾汝奉請栖輕奉勅從宮罷出徘徊着額攀赤幡柝乘馬從阿都山田之道與豐浦寺之路走往至于輕諸越之衢躡請言天鳴雷神天皇奉請呼云々然而自此還馬走言雖雷神而何所不聞天皇之請耶走罷時豐浦寺與飯岡間鳴雷落在栖輕見之即呼神司人入輿籠而持向於大宮奏天皇言雷神奉請時雷放光明炫天皇見之恐偉進幣帛令還落處其落處今呼雷岡京小治然後時栖輕卒也天皇勅留七日七夜詠彼忠信雷落同處作彼墓收立碑文柱言取雷栖輕之



ト稱ス、タトヘ幾代ノ孫タリトモ、喪祭ノ詞エハ、唯孝曾孫孝玄孫ナド、云自ラハ孝子孝孫ト稱スレドモ、他人ヨリ其人ヲ稱スルニ、孝子孝孫ト稱スルト云コト無シ、繼祀ヨリシテ自ラ稱スル詞ナレバナリ、故ニ諸侯トテモ、喪祭ノコトニカ、リテハ、ヤハ、自ラ稱シテ孝子孝孫ト稱ス、又凡ソ父子ニ限ラズ、夫婦兄弟ノ類ノ重キ喪服ヲウクルコトヲ、掛孝トモ、帶孝トモ、重孝トモ、穿重孝トモ云、喪服ヲヌグコトヲ、除孝ト云、是ハ皆喪服ヲ指テ孝ト云ナリ、ナマコシヤクナルモノ、左様ノ類ヲ見テ左スレバ孝子ト云モ、喪ヲツトムル子ト云コトナリト心得テ、子ニテサヘアレバ孝子ト稱シ、孫デサヘアレバ孝孫ト稱シ、テモヨキ詞ナリト思フハ、是亦大ナル謬リナリ、凡ソ孝子孝孫トハ、某家ノ宗子バカリニ限リテ稱スル詞ナリ、宗子ニ非ラザル庶子ハ、決シテ孝子孝孫トハ稱スベカラズ、庶子ハ唯子トバカリ稱シ、孫ハ唯孫トバカリ稱スベシ、庶子有爵、或ハ介子介孫ト稱ス、決シテ孝ノ字ハ稱スベカラズ、禮記ノ曾子問ニ、宗子死稱名不言孝ト云ヘル即チ其事ナリ、

〔學山錄〕墳封 碑制

周禮春官冢人職云、以爵等爲丘封之度、與其樹數、鄭康成註、王公曰丘、諸臣曰封、漢律曰、列侯墳高四尺、關內侯以下至庶人各有差、賈公彥疏引春秋緯云、天子墳高三仞、樹以松、諸侯半之、樹以柏、大夫八尺、樹以藥草、士四尺、樹以槐、庶人無墳、樹以楊柳、按班固白虎通所說、亦同此古制也、董觀其封則知祿秩之高卑、觀其樹則知命數之多寡、誠非以爲觀美也、又唐制杜氏通典載、一品墳先高丈八尺、減至丈六尺、二品墳先高丈六尺、今減至丈三尺、三品先丈四尺、減丈二尺、四品先丈二尺、減丈一尺、五品先丈一尺、減至九尺六品以高八尺、減至七尺、庶人高四尺、隋志云、梁天監六年申明葬制、凡墓不得造石獸、唯聽作石柱記、名位而已、唐六典云、五品以上立碑、螭首龜趺、趺上高不過九尺、七品以上立碑、圭首方趺、趺上不過四尺、若隱淪道素孝義著聞、雖不仕亦立碑、金石例、三品以上神道碑、五品以下不銘碑、謂之

〔日本諸手船〕墓地建碑

尋檢令文、上古之碑、惟記其官位姓名耳矣。今世歷間、搢紳大夫墓碑、所題官位上、冒故字、其說云、以別幽明也。天下靡然、以爲準則、不知何有此議也。元祿享保間、有壺井氏者、著位署式私考曰、墓碑之位、署不論官位、相當不相當、惟記官位姓尸、名之墓、而不用行守字。若有兼官者、雖先高者、次卑者、亦不用兼字者、是所令條之定也。然當其官之上、加故字、是稱死者之詞、而文章說話用之者、國史文章之中、不暇枚舉矣。如不然者、何分生者死者乎、

故某官某位姓尸名卿之墓有官死者如、此、公卿之時、加、卿、

故某位姓尸名卿之墓無官死者、如、此、卿字同上、

故某官某位姓尸名之墓四位此下、

按此說、體認中葉以來之例、云爾歟。特至謂雖一官攝他官、於碑則不書兼守行、是令條所定、乃非無可疑者。何者、索搜諸令、其事不見。果所謂令者、指何書也。就考韓柳文集、館墓誌及碑文若干通、其中高官權臣官署上、冒故字、有書不書、意者當時刻碑之文樣、亦復然邪。察見謾聞、難以置辨、猶以愚慮推之、做今書可、又將舊古不書、弗爲未可也、

〔過庭紀談〕四世上ノ墓表ヲ見ルニ、孝子某建ト書クベキ所ヲ、孝子ノ二字ヲ憚リテ、嗣子某建ト書キシ墓イクラモ有リ、是レ大ナル非禮ナリ、ヤハリ孝子某建ト書クベシ、禮ニ大夫士之子、不敢自稱曰嗣子某ト云ヘリ、凡ソノコトニ自ラ嗣子ト稱スルハ、諸侯ノ稱スル詞ニテ、士大夫ノ稱スベキ詞ニ非ズ、俗語ニハ養子ノコトヲ脇ヨリ稱シテ、嗣子ト稱スルコトアリ、是ハ格別ナリ、其上タトヒ右ノ曲禮ノ明文無シトモ、墓ニ題スルニ、嗣子ト書クベギイハレナシ、嗣トハ家督ニカ、ル詞、喪祭ニカ、ル詞ニ非ラズ、孝子トハ喪祭ニカ、リテ、繼祀ノ稱ニテ、子ナレバ孝子ト稱シ、孫ナレバ孝孫ト稱ス、クハシク云ヘバ、虞祭ヨリ以前ハ哀子、哀孫ト稱シ、虞祭ヨリ以後ハ孝子、孝孫

片書に

□□村町は□□町と書すべし此一行小字に書べし

□□□翁墓此一行は大書に書べし

少壯は子と書す

名□□名乗あるもの如し此名□□父名但し父名乗子□□年□□年□□支□□月□□日没□□歳と書す

但村名町名の下へ年寄大山守横目庄屋組頭十人組頭小山守江守等役名を書べし、退役のものは役名の上へ前と書べし、

一家の主の妻其外人の妻となりたるもの

□□村又は□□町但小字

□□夫の妻□□苗字苗字の氏墓但大字

一子弟并に其外目下の者

□□村又は□□町但小字

苗字俗名□□墓但大字

一娘妹并に其外目下の女子

□□村又は□□町但小字

□□父の氏□□名女墓但大字

何れも裏書前の例なり

〔喪祭私説〕立碑泉州青石爲石上大小狹闊稱宜圓首而刻其面云某諱若號某姓先生之墓乃述其  
第非老曰女下廟男曰兒女曰女兒孫高尺許一層或兩層墳上爲中立之  
女但曰女下廟男曰兒女曰女兒孫高尺許一層或兩層墳上爲中立之

□□氏墓

亡妻先室等ノ字ヲ加ルモ可ナリ

□□氏母□□氏墓

先妣母或□□氏墓祖母ハ王母等ノ

□□家婦□□氏墓婦ノ外ハ庶

亡女□□氏墓

亡父氏氏父女墓

亡妹□□氏墓

先姑□□氏墓父ノ姉妹ナリ祖父ノ姉妹

孫女□□氏墓

諸士以下

□□俗稱□□氏墓又ハ別ニ號隱居名等書

□□氏俗稱墓其子ハ知此

□□俗稱□□氏墓

□□別居名號翁□□氏俗稱墓

□□氏婦□□氏墓婦ニトモ妻トモ

先母□□氏墓

□□氏名女墓女子ハ知此

〔喪祭式附録〕墓碑碑石は二尺以下一壇院號等書ベカラズ

一家の主になりたるもの其外目上の者



□ 女妻ハ父諱□□母□□氏□□□□□ 年號月日 □ 沒年□□

故□□守從五位下□□姓 府君墓

故□□守□□□□ 府君墓

故□□守□□□□ 府君墓

故□□□□ 府君墓

故□□□□ 府君墓

故□□□□ 府君墓

故□□□□ 府君墓

故□□□□ 府君墓

子弟

□□□□□□ 俗墓

亡男長仲少男長仲季子嫡男孫男仲弟季弟亡弟姪男亡姪等ノ字ヲ加ルモ可ナリ

□□□□□□ 俗墓

□□□□□□ 俗墓

□□□□□□ 俗墓

□□□□□□ 俗墓

□□□□□□ 俗墓

□□□□□□ 俗墓

□□□□□□ 俗墓

□□□□□□ 俗墓

ノ制ヲ用テ我好ム所ニシタガフ、

〔桃源遺事〕下西山公○水戸縣稻木村の久昌寺へ、十七箇條の律儀御書出し、法式御改正被遊候○中

一墓上石誌、前刻法華首題及法名、後刻姓名年月、若墳墓碑石、縱雖爲儒法、可隨其檀越之求、然禁祭之以酒肉、○中

一近世富人死、則不論其門地下賤、妄費財物、高大其石誌、莊飾其牌位、而無士庶人之別、向後石誌牌位、共可堅守所定之制量、

〔天保集成絲綸錄八十一〕天保二卯年四月

大目付江

近來百姓町人共、身分不相應、大造之葬送いたし、又は墓所江壯大之石碑建、院號居士號等付候趣に相聞、如何之事に候、自今已後、百姓町人共、○中墓碑之儀も高サ臺石共四尺を限、戒名江院號居士號等、決而附申間敷候、尤是迄有來候石碑者、其儘差置、追而修復等之節、院號居士號等相除、石碑取縮候様可致候、

右之趣、御料私領寺社領共、不洩様可觸知者也、

四月

右之通可被相觸候

〔喪祭式〕墓碑

墓ノ字上之ノ字有無、心次第ナルベシ、碑陰ニ父名母氏名字履歷及ビ死スル年月日年齡等ヲ書ベシ、

君諱□□稱□□父諱□□母□□氏□□年號年爲□□□□役名年號月日沒年□□□娶□□氏生□男

〔字鏡集石〕碑セ・ル・ス

〔和爾雅〕地一理一石碑

〔倭訓栞〕中編二 いしふみ 碑をいふ、石文の義、壺碑の類也、

〔文體明辨〕五十五 墓碑文 按古者葬有豐碑以木爲之、樹于柳之前後、穿其中爲鹿盧、而貫緯以窆者也、檀弓所載公室視豐碑是已、漢以來始刻死者功業于其上、稍改用石、則劉勰所謂自廟而祖墳者也、晉宋間始稱神道碑、蓋堪輿家以東南爲神、道碑立其地、因名焉、唐碑製龜趺螭首、五品以上官用之、而近世高廣各有等差、則制之密也、蓋葬者既爲誌以藏諸幽、又爲碑碣表、以揭於外、皆孝子慈孫不忍蔽先德之心也、

〔文體明辨〕五十六 墓碣文 按潘尼作潘黃門碣、則碣之作自晉始也、唐碣制方趺圓首、五品以下官用之、○中 古者碑之與碣本相通用、後世乃以官階之故而別其名、其實無大異也、

墓表 按墓表自東漢始、安帝元初元年立謁者景君墓表、厥後因之、其文體與碑碣同、有官無官皆可用、非若碑碣之有等級限制也、以其樹于神道、故又稱神道表、

〔文體明辨〕四十九 碑陰文 凡碑面曰陽、背曰陰、碑陰文者爲文而刻之、碑背也、亦謂之記、古無此體、至唐始有之、或他人爲碑文、而題其後、或自爲碑文、而發其未盡之意、皆是也、

〔令義解〕九 葬 凡墓皆立碑、謂碑者刻石銘文也記其官姓名之墓、

〔唐六典〕四 禮部 碑碣之制、五品已上立碑、螭首龜趺、首上高不過九尺、七品已上立碑、螭首圭首、方趺、上上不過四尺、若隱淪道素孝義著聞、雖不仕亦立碣、凡石人石獸之類、三品已上用六、五品已上用四、

〔好古日錄〕本 碑

國朝墳墓葬埋ノ制、孝德帝御宇以前定法ナシ、或ハ石室石人石馬ヲ設ケ、或ハ碑ヲ立ツ、皆西土

譽葬愛知郡古井邑德興山建中寺

右名誌深田正室作之實得誌體

〔伊豫〕吉田御家系譜村芳公若狹守宮内少輔

文政三年八月十七日御卒去實十三日ナリ同月廿一日奉葬東

禪寺

御法號積善院殿前朝散大夫工部南嶽德翁大居士

右御墓誌東禪寺ノハ備前儒職井上觀太、大乘寺ノハ嵩代 君公誌  
伊達南嶽公之墓誌

御法號 積、い、い、い、大居士 此御法號計御自否

このはかあはれみてあばくこゝをやめたまへ、

下ノ方 尊考南嶽公諱村芳字子潤其先仙臺黃門諱政宗、慶長十九年甲寅冬、黃門長子義山公諱秀宗、封伊豫字和島、明暦三年丁酉秋、義山公分封吾祖考鎮山公于伊豫吉田、公諱宗純、義山公五子也、公致職、法性公諱宗重立、公卒大淵公諱村豐立、公卒環中公諱村信立、公致職、大雲公諱村賢立、以至尊考、凡六世、尊考父大雲公母村田氏、以安永七年戊戌春三月八日生、尊考於江戸邸、長子諱村高、有病不立、尊考命爲世子、寛政二年庚戌春、值王考寢疾卒、尊考乃立、乙卯秋娶關宿侯女爲夫人、生女一人、名敬、又有侍妾、生男二人、女七人、夫人養其女二人爲己子、一曰八智、二曰千萬、妻八智於關宿侯、千萬於曰杵侯、男二人、女一人、先天、女四人皆嫁、是以義山公後遠州太守村壽子宗輪、義嗣、長女敬爲配、文化十三年丙子冬、尊考稱病致職、宗輪乃立、文政三年庚辰秋、尊考罹疾卒、實八月十三日也、春秋四十有三、葬于江戸東禪寺之先塋、葬其遺髮于吉田大乘寺之先塋、

〔類聚名義抄六〕碑破音シルス

碑 碣音鳩持立石口ケ又音湯、又島葛反、

從五位下紀伊守藤原朝臣 宗輪撰



氏次天次適小島氏厥明辛未葬于村之天馬山柚木墳上家貧不能襄事越明年某月甲子墳築寔成伯仲事公有事乎四方季男重遠在子不肖號慕隕絕無復知識而覆幽有期不得已敢刻姓系以納諸壙昊天罔極嗚呼痛哉

〔紹述文集十四墓誌〕恒軒先生稻生君墓誌銘

君諱正治字見茂攝津州大坂人其先源氏之族也居波々伯部城因以爲氏略○中慶長十五年某月某日生子大坂外祖母稻生氏以其父美濃守宗貞無後以君冒稻生氏略○中八年實○延正月丁巳卒享年七十有一遺言送終之儀略倣古禮煩鄙不經之儀一切不用是月己未葬于大坂天龍院略○中元祿九年丙子三月十日改葬于洛東迎稱佛寺宣義屬其友伊藤長胤誌其世系行事錄繪勒詞貯以石函藏諸幽室銘曰

武辨之裔爰業青囊遍救民瘼厥績維彰英聲茂著敦聘造門舊仕澧城又隨宮津玉機是刪鑫斯有草篤信聖賢晚彌好道其嗣維賢鴻業式紹令德無窮觀此宅辰

〔鹽尻古尾公墓誌〕前中納言從三位尾州太守源綱誠卿父從二位前大納言源光友卿母征夷大將軍從一位贈正一位太政大臣大猷院殿源家光公女靈仙院元祿六年癸酉夏四月襲父之封同十二年己卯夏六月五日享年四十八薨于武州江戸市買之邸同月廿四日葬于尾州愛知郡古井邑德興山建中寺

元祿十二年己卯六月日

尾州詞臣並河子建百拜誌

蓋尾陽侯二品前亞相源正公之墓

從二位行前權大納言源朝臣光友父故從三位權大納言義直嫡母淺野氏高原院夫人實母吉田氏歟喜院寬永二年乙丑七月二十日生於尾州那古屋城二十六歲襲封元祿六年癸酉致仕十三年戊辰十月十六日薨于春日井郡山田庄大曾根別墅壽七十六歲蓋正公法諱瑞龍院天運社順

補任履仲天皇時執政臣有蘇我滿智宿禰蓋是石川宿禰之子其子韓子其子高麗其子稻目其子  
馬子其子雄正子其子連子其子安麻呂其子石足其子年足故曰十世之孫也年足卿官銜薨日  
皆與史合乎成宮卽平城宮所謂奈良宮卽此按毛詩無俾城墉漢書諸侯王表作母俾成墉左傳王  
子成父管子作城父又勃海高城河間阜城漢魯峻碑皆作成隨漕藏寺碑成臬作城署涪州南和縣  
澄水石橋記成都作城都並可證古通用城成字也倭名類聚抄上郡有眞上鄉無白髮鄉按續日  
本紀延暦四年五月詔曰臣子之禮必避君諱比者先帝御名及朕之諱公私觸犯猶不忍聞自今以  
後宜並改避於是改姓白髮部爲眞髮部山部爲山然則白髮鄉之爲眞上亦係延暦所改是志在詔  
前二十四年猶不避也常陸國眞髮郡本名白髮郡見風土記改爲眞髮亦蓋在是時也酒垂山當卽今荒神山儀形卽儀型餘見余  
所纂刻本誌跋尾

〔金石私誌三〕伊豆大仁村善願上人舍利瓶記

天明中豆州大仁村農夫掘地得古銅瓶腹有記文首云極樂寺第三代長老善願上人舍利瓶記文  
凡一百十九字蠅頭小楷道逸有致頗得褚河南度人經意態但惜鏤手疎拙點畫之間稍失筆意亦  
不爲少也余所收金石文字蠅頭書唯是已深足珍愛

〔垂加流神道葬禮式墓誌ハ瓦ニやまざきかゑもんつかトボリ付焼セ棺ノ上ヘ入〕

〔泰山集四十卷〕先考谷處士城記

先考神兵衛重元姓大神氏谷長岡郡江村鄉豐岡村人五世祖曰左近高祖考曰帶刀妣德弘氏曾祖  
祖考皆名神右衛門祖妣福富氏妣中井氏世々仕長宗我部主有顯名俸田數處而在此秦泉寺村者  
亦多秦主旣喪祖以下皆不復仕先考生於寛永元年三月癸未天資孝友樂易開口見心遇事勇敢面  
無怯色視財如土未嘗言及焉槩其平生實落々男子人也以元祿元年十一月庚午卒於土左郡秦泉  
寺村年六十有五娶島崎氏子男三人伯彌太郎重正仲又次郎重次季丹三郎重遠女三人長適江口

享保十三戊申ノ秋和州宇知郡ノ内大澤村ノ農家平右衛門ノ家ニ四五升程も入ル壺一ツ并ニ瓦十二枚ヲ掘出ス其内一枚文字ヲ彫付朱ヲ入有瓦ノ厚サ一寸八分ハバ一尺七寸長サ一尺九寸也其文ニ從五位上守右衛士督兼行中宮亮下道朝臣眞備葬亡妣楊貴氏之墓天平十一年八月十二日記歲次己卯ト凡四十三字七字ヅ一行ニアリ此ハ上ノ墓ト同ク吉備大臣ノ母氏也上ノハ祖母ナリ此ハ母義ナリ同ク近年ニ掘出スコト誠ニ希代ノ事ナリ

〔古京遺文〕楊貴氏墓志

右墓誌用瓦造刻字填以朱砂享保十三年大和國宇智郡大野村民源八者掘地得之置之村中逆華寺其地近時連不收或曰楊貴氏爲祟村老相議埋之舊處新井鳴門豹近在同郡五條里親見其事爲余語如此

〔石川年足朝臣墓誌銘石搦〕武内宿禰命子宗我石川宿禰命十世孫從三位行左大辨石川石足朝臣長子御史大夫正三位兼行神祇伯年足朝臣當平成宮御宇天皇之世天平寶字六年歲次壬寅九月丙子朔乙巳春秋七十有五薨于京宅以十二月乙巳朔壬申葬于攝津國島上郡白髮鄉酒垂山墓禮也儀形百代冠蓋千年夜臺荒寂松柏含口嗚呼哀哉

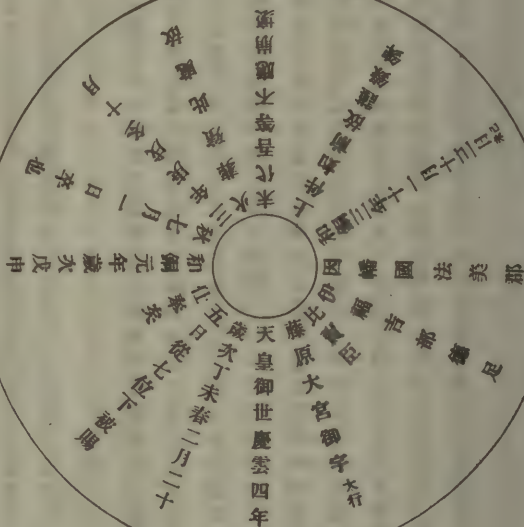
〔觀智院僧都住寶より塙保已一がもとへ贈りし書翰〕當正月<sup>○文政三年</sup>中津國島上郡眞上郷の農

六右衛門とやらん申者所持之田畠中に俗五兵衛家と呼古墳有之是を穿候て天平寶字中所埋石川年足金の牌一面を得候此六右衛門なる者六孫王の祠中多聞院と申舊里にて此僧金牌を携歸り夫より都下好事之徒相傳へ愛翫弊俗も携來候人有之一覽之處甚古色殊勝之物故侍坐之徒へ命爲摺寫候尤不工候得共一紙進覽候墓紙每行經界有之候得共摺寫不相成候

〔古京遺文〕石川朝臣年足墓志

右墓志文政三年正月攝津國島上郡眞上光德寺村民德右衛門鑿其宅後荒神山而獲之按公卿

〔輶軒小錄〕和州古碑之事





朔廿一日乙卯歸葬於大倭國葛木下郡山君里狛井山崗天濱疏派若木分枝標英啓啓舊載德形儀惟卿降誕除慶在斯吐納參贊啓沃陳規位由道進榮以禮隨製錦蕃維令望攸屬鳴絃露冕安民靜俗懷服來蘇遙荒企足輔仁無驗連城見折玉空對泉門長悲風樹

右誌鑄於銅合子蓋上蓋大村真人在越後卒焚尸盛骨歸葬也天明中大和國葛木下郡馬場村農夫壜而獲之今藏四天王寺口口院

〔古京遺文〕補下道國勝國依母墓誌

昔和銅元年戊申十一月廿七日乙酉成銘下道國勝弟國依朝臣右二人母夫人骨藏器故知後人明不可移破

〔輅軒小錄〕備中古墓ノ事

備中國某郡ニ恵良村ト云處アリ二里程東ニ八田村連アリ其處ニ吉備大臣ノ廟アリ二十年バカリ前ニ八田村ヨリ一里西ニ東三成村ト云處アリ其村ノ百姓古キ塚ヲホリ鐵器ヲ出シ其名ニ下道氏國勝國頼母夫人骨和銅元年トアリ其器ハ處ノ地藏院ニ安置セリ領主伊藤伊豆守國勝ノ社建立ノ心ニテ地藏院ヲ改メ國勝寺ト被號骨器ノ銘マサニ廿字餘モアル由中國筋ヨリ書付來ル國勝ト云ハ吉備大臣ノ御親父也

〔好古小錄〕乾伊福吉部德足比賣臣墓誌誌文、横三、縱二、骨、銅器、蓋上、銅器、高七寸、四、徑九寸、厚一分五釐、高

氏ヲ給ヒ朝臣ト云牌丁丑ノ年ニ造ル時ハ、白鳳六年也、朝臣ヲ賜ヒシヨリ前八年ナリ、シカルニ小野朝臣ト書スハ何ゾヤ亦續日本紀ニ、小錦中毛人ト書ケリ、然ルニ牌ニ大錦上トアリ、此二ツイブカシ、凡テ中國ノ史傳、碑碣ヲ掘出シ、姓名等差異アルコト其例多キ也、又思ニ白鳳ノ年代、今ヲ去コト千年ニ近シ、一片ノ銅牌ニ依テ、官位姓名具ニ顯ハル、孝子慈孫ノ其親ヲ不朽ニセント思フ者、ソノ仕方ヲ知ラザルベキヤ、國史ニ墓記トイフ物アリテ、家々ニ記シ置クト、彼銅牌ハ墓記ト云物ニヤ、

〔古京遺文〕小野朝臣毛人墓志

愚謂小野臣等、賜姓朝臣、在天武天皇十三年、此志六年所造、而云朝臣者、獨毛人先是而賜、與同姓諸人不同也、史所載是類不遑枚舉、但大錦上可以糾史謬、

〔古京遺文〕文忌寸禰麻呂墓版

壬申年將軍左衛士府督正四位上、文禰麻呂忌寸、慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒、

墓版用銅造、長八寸五分、廣一寸四分、天保二年九月、大和國宇陀郡八瀧村農夫於田圃掘得之、

〔古京遺文〕小納言正五位下威奈卿墓誌銘并序

卿諱大村、檜前五百野宮御宇天皇

化○宣之四世、後岡本聖朝

明○齊紫冠威奈鏡公之第三子也、卿溫良

在性恭儉、爲懷簡而廉隅、柔而成立、後清原聖朝

統○持

初授務廣肆、藤原聖朝武○文小納言、關於是高門

貴胄、各望備員、天皇特擢卿、除小納言、授勳廣肆、居無幾、進位直廣肆、以大寶元年律令初定、更授從五位下、仍兼侍從、卿對揚宸展、參贊絲綸之密、朝夕帷帳、深陳獻替之規、四年正月、進爵從五位上、慶雲二年、命兼太政官左小辨、越後疆衝、接蝦夷、柔懷鎮撫、允屬其人、同歲十一月十六日、命卿除越後城司、四年二月、進爵正五位下、卿臨之以德澤、扇之以仁風、化洽刑清、令行禁止、所冀享茲景祐、錫以長齡、豈謂一朝遽成千古、以慶雲四年歲在丁未四月廿四日、寢疾終於越城、時年卅六、粵以其年冬十一月乙未

表文

長二尺許

飛鳥淨御原宮治天下天皇御朝任太政官兼刑部大卿位大錦上

幅二寸許

裏文

小野毛人朝臣之墓 營造歲次丁丑年十二月上旬卽葬

〔輅軒小錄〕小野毛人墓之事

比叡山ノ薨薨ニ高野ト云村アリ又小野トモ云其山頂ヲフメバ鏗然トシテ音有處アリ、殿長ノ比、蓋有テ此ヲアバク、開見レバ古キ石槨也、其中ニ銅牌アリ、長一尺九寸九分、ハ一一寸九分、文字有テ間入ス、其表ニ云飛鳥淨御原宮治天下天皇御朝、任太政官兼刑部大卿位大錦上、其裏ニ刻云、小野毛人朝臣之墓、營造歲次丁丑年十二月上旬卽葬ト、凡四十八字、筆法道美ニシテ、唐人ノ風度アリ、別ニ白川石ノ如クナル石函アリテ此ヲ納ム、其處ノ寶幢寺ト云寺ニ安置ス、先子仁伊藤ノ門人、西谷道空ト云老人有テ、高野ノ邑ニ隱居ス、吾東伊藤運十二三歳ノ時ニ、先子ニ侍シテ彼老人ヲ訪ヒ、テナミニ銅牌ヲ見ル、其後三十年後、長準長堅ナド携行ク、銅牌ノコトヲ尋レバ、牌ヲ掘出シテヨリ、後、邑衰弊スルニ依リ、本ノ處ニ納メ置ト云リ、其形木ニ造リ寺ニアリ、淨御原ハ天武帝也、北村氏ナド、日本書紀ヲ考ルニ、其人顯レズト云リ、其後續日本紀ヲ見レバ、和銅七年ノ下ニ云、夏四月辛未、中納言從三位兼中務卿勳三等小野朝臣毛野莚、小治田朝大德冠妹子之孫、小錦中毛人の子也、小治田朝ハ推古帝也、妹子ハ隋ノ時、華ニ使而蘇、因高ト云人也、然レバ毛人ハ妹子ノ子ニテ、當時ノ顯人也、依テ思フ、此中疑ベキコト二ツアリ、天武帝十三年ニ、小野ノ臣等五十三氏ニ

〔好古小錄〕船氏墓誌〔乾〕銅牌長九寸七分、闊二寸二分、厚五厘、而背鑄之。

面

惟船氏故王後首者是船氏中祖王智仁首兒 那沛故首之子也生於乎娑陁宮治天下 天皇之世奉仕於等由羅宮 治天下 天皇之朝至於阿須迦宮治天下 天皇之朝 天皇照見知其才異仕功勳 勅賜官位大仁品爲第

背

三殞亡於阿須迦 天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅故戊辰年十二月殞葬於松岳山上共婦安理故能刀自同墓其大兄刀羅古首之墓並作墓也卽爲安保萬代之靈基牢固永劫之寶地也

〔古京遺文〕船首王後墓版○中

右銅版墓志藏河內國古市郡古市村西琳寺王後推古天皇紀作船史王乎王智仁卽欽明天皇紀王辰爾也姓氏錄作智仁君與此版同

〔山城名勝志十二卷〕小野毛人墓小野氏系圖云、毛人、敏達天皇曾孫、妹子孫、毛野男、

高野川北有崇道天皇之社其山上一町許人踏之則有成響之地土人怪之年舊矣慶長十八年癸丑十二月土人高村政重掘之得石棺內有金牌一枚其表裏文如左





# 古事類苑

## 禮式部三十一

### 冢墓下 廟號

墓誌

〔和爾雅〕地埋墓誌

〔釋氏要覽〕

送終誌石杜氏云精義曰准禮無文自魏司徒掾改遷父母遂刻石以誌又宋元嘉十一

前漢杜公明終作文命刻石埋於墓前厥後悉因此矣白氏六帖云孔子之喪公西赤爲義其子張之喪公明儀爲識先祖無美而稱之是誣也其有美而不稱不明也知而不傳不仁也三銘之義稱美不稱惡先祖無美而稱之是誣也其有美而不稱不明也知而不傳不仁也三銘之義稱美不稱惡先祖無美而稱之是誣也其有美而不稱不明也知而不傳不仁也三

〔過庭紀談〕凡墓誌銘ト云ト墓碑銘ト云トハ各別ノ事ナルヲ一ツニ覺エシ人アリ是等モア

マリシキ惜懂ユエニ辨ズルニモ及バスコトナレドモ近世梓行ノ文集ノ内ニ墓碑銘ノコトヲ

墓誌銘ト題セシ書アリ又碑文ノ題ニ某ノ墓誌ト題セシ類アリ尤未校正ノ韓文ノ原本ナドノ

中ニ碑銘ト云部中ニ墓誌ノ二ツ三ツ混集セシ本モ有レドモソレハ未校正ノ本ユエナリ校正

ノ韓文ニハ左様ノコト無シ凡ソ墓誌トハ土中ヘ埋ム誌石ノ文銘ノコトニテ碑碣ニ記ス文銘

ノコトニハ非ズ墓誌ハ墓誌碑文ハ碑文碣文ハ碣文其事オノノ別ナリ其名題ヲ混ズベカラ

ズ本邦ニテ近世ニ至リ誌石ヲ埋ム葬リ有リト云ヘドモ皆僅カ一二尺バカリノ石ニ其州里官

爵姓名生卒年月ノ大概ヲシルスパカリニテ山崎闇齋ナドハソレサヘモシミトハシルサ

ズシテ此下に某ノ棺ありあはれみてほる事なかれトバカリ書付シヨシ左様ノ類バカリニテ

アノ方ノ諸家ノ文集ニノセシ墓誌ノ如ク長ガトシタル文ヲシルスコト稀ナル故ニ淺學

雜載

六二一

彌廟

名稱

六二三

造廟

六二七

不造廟

六三三

神社稱廟

六三四

墳墓稱廟

六三五

指人稱廟

同

靈社

六三六

祠堂

六三八

墳墓堂

六四三

靈牌所

六四九

靈璽

六五二

神主

六五六

靈牌

六六四

影像

六六九

謁廟

六七三

變異

六七六

古事類苑

禮式部三十一

冢墓下 廟圖

墓誌  
碑碣  
國文碑  
自作碑文  
爲古人建碑  
爲忠臣義士建碑  
爲孝子烈女建碑  
卒塔婆石塔  
爲古人建塔婆  
爲追福建塔婆  
植樹木爲墓標  
佛像爲墓標  
自然石爲墓標  
遺命不建碑塔

五八一  
五九一  
六〇六  
六〇八  
六〇九  
六一〇  
六一三  
六一四  
六一六  
六一七  
六一八  
六一九  
同  
六二〇



忠川秀 御在世の程は其御遠忌の度々御法會も執行れし事の奉書等敬通あり是御繼子の御契有しが故なるべしいかに其御墓田等をよせらるゝ事もなかりしにやととふにかくれさせ給ひし時に畿内にある所の御料の地よせらるべしとありしを住持の僧望み請ひて金千兩を御施入あるべしと申ければ其請ふ所に任せられしと云なり心得ぬ事に思ひて後に南禪寺の長老に此事をいひ出しゝに其代には猶戰亂の時をさる事遠からず諸寺の領地軍勢の爲に押妨られし事ども尋常なるにならひてかくては望みしとこそ聞えたれと答へられけり京より歸來りし時に此事に及びて神祖多くの御子おはしまし其御母も少なからねど正しく御臺所と申參らせしは南明院殿のみおはしましき<sup>略</sup>○中 然るを都の内に捨おかれて其御跡とはせ給ふと云事もなくわづかに小院の僧の齋飯を分ちて其御供に參らせん事いかにやはさふらふべきと申たりければ御形改めさせ給ひて申す所理り至極せり去ながら今に至て其故なくかの御事に及びなば代々の御誤りを顯しまゐらすに似たり神祖百年の御忌も程近し其時に及ばん比計ふべきやうこそあれと仰られしかばかくれさせ給ふ御時に此事仰置れしとぞ聞えて此度この御事に及ばれしなりける

元旦嘉節朝儀備舉、必先以展塋墳爲恒、

〔吾妻鏡〕文治二年閏七月廿二日癸卯前廷尉平尉康賴法師浴恩澤、可爲阿波國麻殖保保司元平氏家

位人數之旨所被仰也、故左典厩義朝墳墓在尾張國野間庄、無人于奉訪、沒後、只荊棘之所掩也、而此康

賴任中赴其國時寄附水田三十町、建小堂、令六口僧修不斷念佛云云、仍爲被酬件功如此云云、

〔靈峯文集四〕見彌山廟記

良嗣正經保科察公正之保科之衷曲、且以孔懷情深、故於封域之中、疏寒川之水、於院內邑、開竹林瀟原之

新地以爲田、以其所產充正賴正純及親戚墓料也、

〔桃源遺事上〕貞享元年甲子、御伯父住吉殿御小名万の御母秋山夫人の御墓所去れ申さるる處に、

西山公御穿鑿なされ候へば、下總國小金村本六寺にこれあり候、依之碑を御建中、且田畑を御

寄進なされ、自御祭なされ候、此時御とし五十七

〔桃源遺事上〕元祿五年壬申八月、攝州湊川へ、佐々介三郎良峯宗淳をつかはされ、楠正成の墓を御

修葺中、其側にて田畑御調へ、廣庭寺の僧千巖に附して、永く香華の料になされ候、此時御藏六

十五、

〔折たく柴の記下〕此年十一月正德四年南明院殿御供米田寄附の事あり、五十神祖百年の御忌にあ

たらん時、此事おはしますべき由、前代家宣の御遺志有りしによられしところなり、我白石○新井

在京の時、東福寺に遊びし日、南明院に行向ひて、神祖と御臺所の御畫像おはしますを拜せし事

あり、神祖の御像は京にも南都にもおはしますを拜み參らせたりき、御臺所の御像は、此所より

外に渡らせ給ふべきにもあらず、太閤秀吉の御妹君にて、神祖の御臺所にておはしませしが、其

代の御榮は申にも及ばず、今は朝夕の御供をだには、かゝしく參らすべき使もなき小院の内

に、其御像のみ残らせ給ひし御事、いと悲しく覺えて、おぼえず涙をぞ催したりける、台徳院殿德

ひ給につけておそくまゐる人、さはり申人などをば、いへやきこぼちなどせられけり、ならに濟圓僧都と聞えし名僧の公請にさはり申ければ、京の宿房こぼちけるに、山に忠胤僧都と聞えしまたはぶれがたきにて、みめろむじてもろどもにわれこそおになごいひつゝ、歌よみかはしけるに、忠いんこれを聞て、濟圓がりいひつかはしける。

まことにや君がつかやをこぼつなるよにはまされるこゝめありけりかへし

やぶられてたちまのおべき方ぞなき君をぞたのむかくれみのかせ

とぞきこえ侍りける

〔古今著聞集十六興自利已〕前大和守時賢が墓所は、長谷といふ所にあり、その留守する男くゝりをかけて鹿を取る程に、○下

〔勸仲記〕弘安二年八月十八日癸巳、參殿下、○藤原多武峯十禪師御墓守等訴申、平田庄内疋田御執行政所、獨取御墓守、令着駄事、爲辯訴所群參御所也、予尋聞所存、重々所申入也、廿三日戊戌參殿下、大宮多武峯十禪師御墓守等群參平田庄疋田郷政所事、被召問兩方政所、獨取御墓守條、大略無處披陳、歟仍可被罪科政所之由被治定、爲被尊崇、崇寺也、神威異他、可貴可貴、仲兼承此由、可被申合、近衛殿并一乘院僧証御房云々、依此事終日奔走、及深更退出、

〔師守記〕貞治二年六月六日丙午、今日先考幽靈還忌也、○十九年中略未刻伺雨間、家君子密々參靈山殿、音博士師興宗左衛門入道顯惠和泉左衛門尉國尙、彈正忠延兼大炊允國隆于青侍等、被召具於先考御墓有一時小同又於先妣御墓、阿彌陀經念佛有之、於觀心聖靈墓念佛有其後歸墓、墓守法師酒直廿文了、

〔會澤先生行實〕文化元年考、○會澤以病沒於大坂官舎、○中每忌日、謝客齋戒悲裏、如新免於喪者、而

小野墓原朝臣太政大臣正一位藤

後小野墓原朝臣正一位宮

又宇治墓原朝臣正一位藤原

〔三代實錄十和〕貞觀七年五月廿六日丙午、勅沙門賢基、修行年久、居住多武峯墓邊寺、宜令大和國以

正稅稻日給米一升二合、充其供料、兼令賢基率沙彌等檢彼墓四至之內、

〔定家朝臣記〕康平五年八月廿九日癸卯、殿下藤原賴通令參木藤原賴通繕給、中先入御山中、中御隨身五人

扈從、召山守、被問先公大相國藤原道長御墓所、敷園座有奉拜、

〔今昔物語十九〕西京仕鷹者見夢出家語第八

今昔西京ニ鷹ヲ仕ヲ以テ役トセル者有ケリ、名ヲバ□□ト云ケリ、男子數有ケリ、其等ニモ此ノ鷹仕ヲ事ヲナム業ト傳ヘ敷ヘケル、心ニ懸テ夜ル晝ル好ケル事ナレバ、寝テモ寤テモ此ノ鷹ノ事ヨリ外ノ事ヲ不思リケリ、常ニ夜ハ鷹ヲ手ニ居ヘテ居明シ、晝ハ野ニ出テ雉ヲ狩テ日暮ラス、家ニ鷹七八ヲ木居ヘ並タリ、狗十疋ヲ繫テ飼ケリ、鷹ノ夏飼ノ程ハ多ノ生者ヲ殺ス事、其ノ員ヲ不知ズ、冬ニ成ヌレバ日ヲ經テ野ニ出テ雉ヲ捕ル、春ハ鳴鳥ヲ合スト云テ曉ニ野ニ出テ、雉ノ鳴ク音ヲ聞テ此レヲ捕ル、如此ク爲ル間、此ノ人年漸ク老ニ臨ヌ、而ル間風發テ心地惡クテ夜ル不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>寝リケルニ、曉方ニ成ル程ニ寢入タリケル夢ニ、嵯峨野ニ大ナル墓屋有リ、其ノ墓屋ニ我レ年來住テ妻子共引列テ有ト思フニ、冬極テ寒クシテ過ル程ニ、春ノ節ニ成テ日ウラハカニテ日ナタ誇モセム、若菜モ摘ナムト思テ、夫妻子共引列テ墓屋ノ外ニ出ヌ、燠ニヨキマ、散々ニ或ハ若菜ヲ摘ミ、或ハ遊ナムドシテ各墓屋ノ邊ヲモ遠ク離レヌ、子供モ妻モ此ク散々ニ遊ビ去ヌ、〔續世繼五〕左のおさ藤原は御みのもよくおはし、御身のさえもひろき人になん聞え給し、中おはやけわたくしにつけて何事もいみじくさびしき人にぞおはせし、中公事行



龍田清水墓（前）人女王（中）墓

龍田菟部墓（前）王女（中）墓

多武岑墓（前）太政大臣（中）墓

後阿陀墓（前）太政大臣（中）墓

相樂墓（前）太政大臣（中）墓

後相樂墓（前）太政大臣（中）墓

巨幡墓（前）一品（中）墓

加勢山墓（前）太政大臣（中）墓

小山墓（前）守戶（中）墓

後宇治墓（前）太政大臣（中）墓

次宇治墓（前）天孫（中）墓

愛宕墓（前）守戶（中）墓

大岡墓（前）武天皇夫人（中）墓

後愛宕墓（前）太政大臣（中）墓

深草墓（前）守戶（中）墓

高白田墓（前）太政大臣（中）墓

河島墓（前）守戶（中）墓

八坂墓（前）守戶（中）墓

拜志墓（前）守戶（中）墓

次宇治墓（前）守戶（中）墓

竈山墓（中） 守月三（中）

磯長原墓（中） 守月三（中）

息長墓（中） 守月三（中）

成相墓（中） 守月五（中）

押坂墓（中） 守月五（中）

宇度墓（中） 守月二（中）

宇治墓（中） 守月三（中）

押坂內墓（中） 守月三（中）

片岡華田墓（中） 守月三（中）

檜隈墓（中） 守月三（中）

磯長墓（中） 守月三（中）

押坂墓（中） 守月三（中）

三立岡墓（中） 守月三（中）

平城坂上墓（中） 守月三（中）

淡路墓（中） 守月三（中）

牧野墓（中） 守月三（中）

大野墓（中） 守月三（中）

阿陀墓（中） 守月三（中）

村國墓（中） 守月三（中）

平群郡北岡墓（中） 守月三（中）

じる力なくてはいく百千の墓をあばきて、いく千よろづの古き器をえたりも、何事をかは考  
 いでん、いとやくなき事なり、そもくもろこし人は、はじめよりよからの事と去りながら、世の  
 たづきなさま、にうゑしなんよりはとて、しいづるわざなれば、猶ゆるさるゝ方もあるを、これ  
 は好事しきすさみばかりにかゝる罪をかして、猶ことよげにいひをるなど、まことにいはん方  
 なし、あなゆゝ、しく、

守

〔延喜式二十一〕有功臣墓者置墓戶三煙其非陵墓戶差點分守者先取近陵墓戶充之

〔續日本紀三十四〕寶龜八年十二月乙巳改葬井上內親王其墳稱御墓置守冢一烟

〔續日本後紀仁明〕天長十年三月乙卯勅山城國相樂郡并山○權河內國交野郡小山○友並宜

✓ 盤守冢一烟

三代實錄二和貞觀元年五月十五日庚午下知山城國充贈正一位源朝臣深姬○真房妻墓守家一戶

三代實錄十三和貞觀八年十月廿三日甲午，贈太政大臣藤原朝臣墓。冬，在大和國宇智郡阿陀鄉，

置守冢徭丁十二人

三代實錄三十卷元慶三年四月十六日乙亥故太政大臣忠仁公墓置守冢一烟

仁和元年十月八日己未是日勅皇妣贈皇太后山陵置守冢五戶外祖父贈太政大

臣正一位藤原朝臣繼繼外祖母贈正一位藤原朝臣數子墓各一戶一陵二墓並在山城國愛宕郡

〔延喜式  
諸二  
陵十  
一〕

能哀野幕  
略日守本  
武三尊  
烟(中

埴口墓飯守豐尸三女中

古市高屋墓春日山田皇女

衣田墓  
山手白  
邊香皇  
勾女中  
圓上略  
陵戸無  
塚守守  
守月令

さまでも深紅なるが手にてさわれれば、てうのごとく手につくとなん、大刀は二尺ばかり、つばは、もかうのなりにて三まいつばなり、柄は玄くの糸にてまきて中ひしなり、さめににしきをさせたり、柄かしらは、ひきとほしなりといふ、さひつきてぬけすこかたりし、奇怪の物語なり、

〔下野國誌〕<sup>十二</sup>車塚

同所○津上村

郡の中川の西岸にあり、但し二所ありて、一所は國造の碑在る

所より五町許東南の方なり、高二丈餘りにして、南北廿間許、東西廿五間許、前の方に堤の如き築出し十五間許あり、一所はそれより一町許、猶南の方にありて、高三丈餘り、南北三十間許、東西廿八間許、前の築出し廿一間許あり、北の方にあるを下と唱び、南の方にあるを上と呼ぶ、都の方よりついでを云にや○中件<sup>中</sup>の上下車塚を、元祿五年壬申六月廿三日、水戸賣門光國卿下向ありて、堀うがたせ見給ひけるに、右の如の器物○中出けるを、畫工におほせて其圖をうつさせ、また元の如く封じて藏め給へり、是則那須國造の墓所なるべし、

〔年年隨筆〕<sup>四</sup>古き家を發く事、もろこしには、はやくより多かる事にて、心ある人は、中々厚葬をいみじき物にいひおもふ也、さるはたゞ世渡の爲にて、山賊海賊などもおなじものなれば、中々論なし、皇國には、ちかき世までさることほなかりしを、此ごろなん、事好むともから、勾玉鏡などやうのくさゝの古き物をいみじうもてはやしあつかふほどにいかでさるものえまほしくて、古き墓ども、あばく事きこゆなる、いとゆゝ、しう心うきわざ也、その墓よ、そのかみいかなる貴人を瘞めたるも、まゐるべからず、又おのれが幾世の遠祖あるは、同氏同統の人ならむも、いかでかまらむ、さらぬ凡人にても、枯たる骨をかきあらはされて、そこそくらめしき物によみの國よりおもひおこすらめとおしはかれて、身の毛たち、そゝろ寒きこゝちす、さるまれのゝくせに物しりだちて古を考るたよりになどぞいふめる、さばかりあしきわざせずは、考えがたき事ならば、それまらずともなでふ事かあらむいにしへを考へむとならば、書をやはみぬ、書を見あきら



所納之重寶等去畢、雖追奔之、不知其行方、思此事之始去比狐疑之由見出時也云云、

〔太平記二十六〕執事兄弟奢侈事

越後守師泰ガ惡行ヲ傳聞コソ不思議ナレ、東山ノ枝橋ト云所ニ山莊ヲ造ラントテ、此地ノ主ヲ誰ゾト問ニ、北野長者菅宰相在登卿ノ領知ナリト申ケレバ、懸テ使者ヲ立、此所ヲ賜ベキ由ヲ所望シケルニ、菅三位使ニ對面シテ、枝橋ノ事、御山莊ノ爲ニ承候上ハ、仔細アルマジキニテ候、但當家ノ父祖代々、此地ニ墳墓ヲシメテ、五輪ヲ立、御經ヲ奉納シタル地ニテ候ヘバ、彼墓ジルシテ他所ヘ移シ候ハン程ハ御待候ベシトゾ返事ヲシタリケル、師泰是ヲ聞テ、何條其人惜マンズル爲ニゾ、左様ノ返事ヲバ申ラン、只其墓共堀崩シテ捨ヨトテ、懸テ人夫ヲ五六百人遣シテ、山ヲ崩シ木ヲ伐棄テ、地ヲヒクニ、繁々タル五輪ノ下ニ、苔ニ朽タル尸モアリ、或ハ芋々タル斷碑ノ上ニ、雨ニ消タル名モアリ、青塚忽ニ破テ、白楊既ニ枯ヌレバ、旅魂幽靈何クニカ吟フラント哀ナリ、是ヲ見テ、如何ナルシレ者カシタリケン、一首ノ歌ヲ書テ引土ノ上ニゾ立タリケル、

ナキ人ノシルシノ卒都婆堀リ棄テハカナカリケル家ツタリカナ

〔南留別志二〕荒木氏何某といふ人、御使に奥州に下りしに、其少し前に、光堂の佛の目に、いたる金を人の盜し事あるを食議するさて、秀衡が棺をあばきたり、棺五重ばかり、外の棺はぬりたり、内の棺一重は桐のまらきなり、秀衡が死骸いけるがごとし、年のほご五十あまり、たけは中人のすこしひき、なり、髪は二寸ばかりおひたり、ひえがらのやうなる物にて棺をつめたり、五百年ばかりなるに形のそんせざるは、此物の徳にや、かたはらに泉の三郎が棺は、また、かななるまやれかうべひとつ有けるとぞ、秀衡が棺の内より、まくら一ツ、大刀一ふり出しおきて、國主の者ども、荒木何某に見せたるなり、荒木氏は馬をよくのりたれば、それを習ふとて、若藤奎右衛門といふ人、奥州まで来たがひ行て見たりとて、茂卿が幼き時かたりき枕はつねのく、り枕なり、ふ

太子視之與飲食、卽脫衣裳、覆飢者而言安臥也。辛未、皇太子遣使令視飢者、使者還來之曰、飢者既死、愛皇太子太慈之、則因以葬埋於當所、墓固封也、數日之後、皇太子召近習先者謂之曰、先日臥于道、飢者其非凡人、爲必真人也、遣使令視、於是使者還來之曰、到於墓所而視之、封埋勿動、乃開以見、屍骨既空、唯衣服疊置棺上、於是皇太子復返、使者令取其衣、如常且服矣、時人大異之曰、聖之知聖其實哉、  
逾愼

〔日本靈異記〕<sup>上</sup>聖德皇太子示表緣第四

片岡村之路側、有乞乞人得病而太子見之、從與下俱語之間、訊脫所着衣、覆於病人、而言安臥也、遊觀既訖、返與幸行、脫覆之衣、挂于木枝、无彼乞乞人、<sup>○中</sup>彼乞乞人他處而死、太子聞之、遣使以殯、岡本村法林寺東北角有守部山作墓而收、名曰人木墓也、後遣使看墓、曰不聞无乞乞人、唯作歌書以立墓戶、

〔保元物語〕<sup>三</sup>左大臣殿ノ御死骸實檢ノ事

去程ニ廿一日<sup>○保元元年七月</sup>午ノ刻計ニ、瀬口三人、官使一人、南都へ赴キ、左府<sup>○藤原賴長</sup>ノ死骸ヲ實檢ス、

瀬口ハ資俊師光能盛ナリ、官使ハ左史生中原師信也、其所ハ大和ノ國添上郡河上村般若野ノ五三昧也、道ヨリ東ヘ一町計入リテ、實成得業ガ墓ノ東ニ、新シキ墓アリケルヲ掘起シテ見レバ、骨ハ未相連リテ、肉少シアリケレドモ、其形トモ見エ分カズ、其備道ノ邊ニゾ打捨テ、歸リニケル、

〔源平盛衰記〕<sup>三十一</sup>貞能參小松殿墓附小松大臣如法經事

貞能ハ<sup>○中</sup>餘リニ京ノ戀シク候ヘバ、歸上テ敵アラバ討死シテ、同ハ骸ヲ都ニサ、ラシ侍ベシ敵ナクバ又コソ歸參ラメトテ、只一人都ヘ歸上リツ、<sup>○中</sup>小松殿ノ御墓ニ參テ、夜深ルマデハ忍音ニ念佛申<sup>○中</sup>、其後墓堀起シ、水ニ流スベキヲ賀茂河ニ入持スベキヲ持セテ、甲斐々々敷ハ云タリケレ共、泣々福原ヘコン下リケレ、

〔吾妻鏡〕<sup>八</sup>文治四年十一月廿七日丙辰、景能父景宗墳墓、在相模國豐田庄、而群盜就來掘塚、盜取

等<sup>之</sup>爲此御追福行入講自京都熊所被招請也

〔管見記〕弘安六年九月十一日女院○後嵯峨后大如法經十種供養也堂法水一部奉納當所先公藤氏實之御墳墓仍先有御幸

變異

〔玉海〕承安三年七月十日辛丑或人云去六日多武峯御墓鳴動又武智麻呂墓同時動云

〔百練抄十四條〕文曆元年十月廿六日辛卯今夕戌刻當異方有鳴動事○中後日宇治殿御墓所震動之由申上云々

〔葉黃記〕寛元四年閏四月九日丁酉多武峯御陵去月廿九日鳴動云々今日於藏人所可被行御占也

而初度惟異事有憚仍以狀內々被問之良光晴繼占申云惟異口舌在盛申云無咎初度無殊事之時申此由爲故實云々但內々御物忌日次依仰注進之高雅道御占形於峯可祈謝之由下長者宜了

○按ズルニ多武峯ノ墓鳴動ノコトハ神祇部談山神社篇ニ詳ナリ

發塚

〔律疏賊盜〕凡發塚者徒三年發掘即坐已開棺槨者遠流槨有槨者必須棺發而未撤者徒二年

發塚而未至棺槨者其塚先穿及未殯而盜屍柩者徒一年半其塚先穿而先自穿窬者當(當字恐衍)除欠者及無惡心或欲詐代人屍或欲別處改葬之類此文既無未藏明上文發塚而發亦是依律發塚者徒三年既不自願尊卑貴賤者若尊長卑幼之墳不可重於殺罪若發尊長塚據法止同凡人律云發塚者徒三年在於凡人便減殺罪二等若發卑幼之塚減本殺二等科之已開棺槨者遠流即減已殺一等發而未撤徒二年計凡人之冢或死四等卑幼之色亦於本殺上減四等而科若盜屍柩者依減玉等之例其於尊長盜衣服者減一等器物者以盜論

〔日本書紀仁德〕五十五年蝦夷叛之遣田道令襲則爲蝦夷所敗以死子伊寺水門時有從者取得田道

之手纏與其妻乃抱手纏而經死時人聞之流涕矣是後蝦夷亦襲之略人民因以掘田道墓則有大蛇

發瞋目自墓出以昨蝦夷悉被蛇毒而多死亡唯一二人得免耳故時人云田道雖既亡遂報讎何死人

之無知耶

〔日本書紀推古〕廿一年十二月庚午朔皇太子○敏遊行於片岡時飢者臥道垂仍問姓名而不言皇

三月五日、勅使清少納言參向于墳墓、追贈左大臣、官賜榮葬。

〔續日本紀孝十九〕天平勝寶七年十月丙午、勅曰、比日之間、太上天皇武、聖、枕席不安、寢膳乖宜略、遣使

於山科、大内東西南安、眞弓、奈保山、山東西元正、等山陵、及太政大臣墓不此等奉幣以祈請焉、

〔田邑麻呂傳記〕弘仁二年五月二十三日薨略、同二十七日葬於山城國宇治郡栗栖村今俗呼爲三馬背坂、于

時有勅、調備甲冑、兵仗、劍、鉞、弓、箭、櫛、鹽、令合葬、向城東立寢、即勅監臨行事、其後若可有國家非常事、則件塚墓、宛如打鼓、或如雷電、爾來蒙將軍號、而向凶徒時、先詣此墓、習祈、

〔扶桑略記二十三〕寬平十年六月廿二日庚申、是日差宣命使於藤原夫人乙、桓武后墳墓在富野、

依天下疫御占之處、西方女墓、有穢物崇之由、即遣左右看督長、尋認其地、今日遣使、

〔台記〕久安六年二月十九日丙寅、今日七箇日略、源、清、夜、前、林、浴、後、服、於不動尊銀三寸像件像去十、

仁供養、前略、所請七箇日之內廿五日、到可蒙立后宣旨之由、略、使朝猷字治、詣故宇治殿原藤、

御非所祈請同事、使資心住僧、詣醍醐山陵祈請同事、

〔三長記〕建永元年九月六日甲申、今日大僧正略、於故殿藤原、御墓所令供養、如法經給、即被奉埋、

御墓傍、仍參小松寺導師聖覺僧都、

〔拾玉集〕九月略、建永、七日故殿藤原、の小松谷の墓所にて、五部大乘經供養さき、て、法服のさう

ぞくをおくり奉るついでに、前攝政の御もとへ、

あとふりて袖さびわたる小松原けふや身にしむ秋の谷風

〔古事談四〕熊野別當滿増之許ニ、桂林房上座覺朝ト云者アリ、略、中承元三年ノ頃、於滿増之墓堂、

勸進鄰里、七箇日修別時念佛問、略、下

〔吾妻鏡四十四〕建長六年六月十五日乙酉、今日迎前武州禪室十三年忌景、被供養彼墳墓、青船御塔、

導師信濃僧正道禪、眞言供養也、請僧之中、中納言律師定圓光俊朝、備中已講經幸、藏人阿園梨長信



告事

廟知足先考先妣 已上在所 次諸神略 已上各兩段再拜、

〔宣胤卿記〕文明十二年正月一日壬午、向北稱、屬星名號七遍、略 中 次拜列祖廟二拜、

〔賴日本後紀八〕明、承和六年九月癸未、中使就故贈二品伊豫親王墓、詔曰、早捐柩館長椿泉臺、悼福祿

之不融、悲倚伏之難測、雖既追榮於前詔、逾欲增飾於當年、宜贈榮班、以賞幽密、可贈一品、又詔曰、親王

母故無位藤原朝臣吉子、屬遇轉軻、墜失爵位、時移事異、追悼養喪、宜贈本班、照之寵宥、可贈從三位、

〔三代實錄清和〕天安二年十一月廿六日癸未、贈故正三位源朝臣潔姬貞房妻 正一位、遣從四位上行

越中守源朝臣啓於神樂岡、冥告以贈位、

〔定家朝臣記〕天喜六年元平三月卅日、殿下藤原 以左中辨爲使、被告法成寺火事於木幡先公道

長御墓所有告文於中、

〔益長卿記〕文安元年五月六日乙卯、是日贈官位宜下也、御外祖父綾小路少將經有去應永十九年五

月十五日逝去、今年今月相當三十三年遠忌之間、被贈左大臣從一位者也、國母准后後花園 之

御父也、庭田中將重賢朝臣之祖父也、上卿權中納言藤原定繼卿、職事藏人右中辨同資重行奉 少納言

菅原繼長朝臣、權少外記中原康顯右大史高橋員職等參陣也、略 中 次上卿召少納言於、賦給宜命位

記少納言、少納言翌日宣命位記等相具向墓所、伏見

〔康富記〕文安元年十月廿三日戊辰、故清少納言入道殿俗名良實 今年十三回之遠忌、今月廿九日

也、廿九日甲戌、常宗禪門十三回之正忌日也、相國寺僧達、請招有半齋、查向嵯峨塔頭、實 昨日安

口口口奉拜、其後詣墳、墓被贈位之口宣案、今朝到來、外史懷中之、於御影前被讀申之、又於墳墓前同

被讀申之由也、

〔山城現存墓碑誌銘全集公卿〕正二位贈左大臣藤原朝臣實光公墓誌  
正二位前權大納言藤原朝臣正者、文化十四年十一月二十二日薨、以爲帝事 之外祖、嘉永三年

住持僧

〔千載和歌集<sup>九</sup>〕仁和寺法親王、蓮花王院にてかくれ侍ける後、月忌の日、かの墓所にまかりける

に、山に雲かゝりて心ほそく侍ければ讀る、

覺蓮法師

山のはにたなびく雲や行へなくなりし煙のかたみなるらん

〔千載和歌集<sup>十</sup>〕春の比、久我にまかれりけるついでに、父のおこゝ<sup>○</sup>權の墓所のあたりの花ち

りけるを見て、むかし花をしみ侍ける心ざしなど思ひ出てよみ侍ける、

權中納言通親

ちりつもる苔の下にも櫻花をしむ心やなほのこるらん

〔新古今和歌集<sup>八</sup>〕法輪寺にまうで侍とて、嵯峨野に大納言忠家<sup>○</sup>後が墓の侍けるもごにまか

權中納言俊忠

りて讀侍ける、

さらでだに露けささかの野べにきてむかしのあとに志をれぬるかな

兵部卿有教

〔續後撰和歌集<sup>十</sup>〕父の墓所にまかりて

くちぬ名を尋ても猶かなしきは苦ふりにける跡の松風

〔江家次第<sup>一</sup>〕正月、四方拜事

庶人儀<sup>座時前座</sup> 北向拜、屬星、向乾拜天、向坤拜地、次四方<sup>自子至酉</sup>、次氏神<sup>再拜段</sup>、竈神、可加先垂先師<sup>再拜</sup>、墳墓<sup>再拜</sup>

〔權記〕長保三年正月朔日癸酉、鶴鳴拜、屬星、天地四方二親墳墓并氏神、

〔玉海〕文治三年正月一日癸卯、未明拜、天地四方依飛雪、儲座於中門<sup>略</sup>、次考妣陵<sup>共興</sup>、次大神宮<sup>略</sup>

〔中〕次總社<sup>南</sup>、已上陵已下、南段再拜也、

〔玉葉〕承久二年正月一日壬辰卯、廻着東帶、四方拜事<sup>南庭設座無隨</sup>、先向、北稱、屬星名號、再拜<sup>○</sup>、中諸

遙拜墓

敷テ各鬢髮ヲ切テ、佛殿ニ投入、其日吉野ヲ打出テ、敵陣ヘトゾ向ケル、

〔薩戒記〕應永卅三年七月十四日丙午、已終剋、詣中山御墓所、哀傷今更也、抑此地者、在真如堂西去觀

音堂良二町餘、歟、是中山内大臣殿祖○定親、道親御舊跡也、御屋敷分、至于今所領也、至故大納言殿親○滿

御墓、石塔有七基、八代之内何御墓紛失哉、不知其由、可悲之、中比以伴地、被押領他人事有之云々、如

然之時、及違亂、歟、實篋卵塔者、祖父大納言殿親○雅御墓也、其南先考親○滿御墓也、同西方石塔有五基、

是不知其人、樂天詩浮心、然而已在此一所、定一門之輩、歟、仍供燈明等了、

〔康富記〕享徳三年七月十四日甲子、予代々墳墓、在五條坊門猪熊圓福寺、而六月末、近衛禪閣忠○藤原

墓御也、三福寺長老、被參、龍御中陰了、圓福寺御非送參會、仍彼寺爲乙種、今年不得參彼墳墓之間、例

式ニテ、今夕送進圓福寺了、

〔親長卿記〕文明四年七月八日、早旦參大原真體安福寺殿御參之間、奉相從、右衛門督普宰相以量等

同道於大原普賢堂、改衣裳着直垂參墓所、

〔宜胤卿記〕文龜四年元○永正七月十一日己亥、爲五箇盆、今日參墳墓、七代列祖悉備靈供居○重、并瓜茄

等種々菓子菓○新、請僧讀經、布施如例、北堂及母方同前、次參淨蓮華院本願御廟古田亞相、次詣

真如堂、稱名移剋、次參長譽禪尼伯母、是妙禪尼乳母、墓、真如堂上山也、

〔實隆公記〕永正元年十月十四日辛未、先妣卅三回忌也、中及晚詣志乃坂墳墓、寫經等奉納、燒香料

賜歸宅、

〔宜胤卿記〕永正十四年七月十二日、參河東墳墓、中元祖及二親并理法、墓前等也、列祖七代廟前備

飯菓子等、中墓所神龍院内也、

代々のあさを殘す林の陰なればこの山もさはすむもなつかし

〔駿府政事録〕慶長十七年正月廿六日、大樹寺御參詣、德川是御祖父清御善提所、銀五百兩賜、

曾我の里へうつり候ふなり、わらはにも子どもにも、遠き守りとなり給へ、身はいづちに侍るども、後世をばとふらひ奉るべしと、くどきたて泣きければ、五歳になりし一万成も、楓のやうなる手を合せ、祖父御前伊藤親の仰せによりて、母御前の御供仕、曾我の里へまゐり候ふ、御敵宮藤一郎助經を討たんまでは、息災に守らせ給へとなくくどきければ、きく人みる人袖をしぼらぬはなかりけり。

〔一逼上人六條縁起〕弘安三年、善光寺より奥州へおもむき給。中奥州江刺の郡にいたりて、祖父通信が墳墓を尋たまふに、人常の生なく、家常の居なければ、只白楊の秋風に東岱の煙跡をのこし、青塚の暮の雨に北芒の露涙をあらそふ、仍て荆棘をはらひて、追孝報恩の勤をいたし、墳墓をめぐりて、轉經念佛の功をつみたまふ、誠に一子出家すれば、七世の恩所得脱する理なれば、亡魂さだめて、懷土望郷の昔の夢をあらためて、華池寶閣の常樂に移りぬらむと、ことにたのもしくこそおぼえ侍れ。

〔一逼上人六條縁起〕和泉國へ移りたまひける。中さて太子中御墓に参りて、三七日參籠し給ふ、第三日中の後御廟を拜し給時、奇瑞ありければ、他阿彌陀佛一人に示して、かさねて日中の禮讃を勤行し給。

〔太平記二十六〕正行參吉野事

正行、正時、和田新發、意舍弟、新兵衛、同紀六左衛門、子息二人、野田四郎、子息二人、楠將監西河子息、關地良圓以下、今度ノ軍ニ一足モ不引、一處ニテ討死セント約束シタリケル兵百四十三人、先皇後御廟ニ參テ、今度ノ軍難義ナラバ討死ベキ暇ヲ申テ、如意輪堂ノ壁板ニ各名字ヲ過去帳ニ書連テ、其奥ニ、

返ラジト兼テ思ヘバ、梓弓ナキ數ニイル名ヲゾトバムル、ト一首ノ歌ヲ書留メ、逆修ノ爲ト覺



リケレ、

〔源平盛衰記 三十二〕福原管絃講事

二位殿○平時盛 又人々ニ仰ラレケルハ、此福原ハ、故入道大相國○清ノ、サシモ愛シ給シ所也、魂

魄モ定テ愛ニコソ住給フラメ、今夜計ノ遺也、西海ニ出ナン後ニハ、再ビ愛ヲ見シ事モ有ガタシ、

亡魂モ如何計カハ哀ニ思召ラン、且ハ最後ノ別也、且ハ最後ノ弔也、入道ノ爲ニ、管絃講行給テ、後

生ヲ弔給ヘト仰ラレケレバ、大臣殿○清盛尤然ルベシトテ、先故福門ノ墓所ヘ參ラレ、手自ラ花

香ソナヘテ念佛申、廻向シテ涙ヲ流シ給ケレバ、一門ノ人々モ皆袂ラジボリケル、其中ニ薩摩

守忠度角ゾ思ツッケ給

ナキ人ニ手向ル花ノ下枝ハタラレル袖ノシホレケル哉、ト御所ニ歸、佛懸奉ナドシテ、管絃講

ヲ始ラレケリ、

〔玉海〕元暦元年十一月卅日乙卯、法印大將中將等來、申刻相伴此人々○藤原、先詣故殿○藤原、御墓所、

余○藤原、原○藤原、寬○藤原、兼○藤原、手○藤原、與○藤原、念佛念誦等之後、參女院○藤原、墓○藤原、子○藤原、忠○藤原、通○藤原、女○藤原、御墓、又所作少々畢、秉燭之後、歸宿所、

年來雖有參詣之志、自然不遂之、今日參詣、其期至歟、

〔吾妻鏡〕文治六年○建久正月廿日乙亥、及晚自二所御歸着鎌倉、於向後御參詣者、先有御奉幣三

島宮根等、自伊豆山可有御下向之由、今度被定之、日來先御參伊豆權現處、於路次石橋山、覽佐奈田

與一、豐三等墳墓、御落涙及數行、是伴兩人、治承合戰之時、爲御敵被奪命訖、今更被思食出其哀傷之

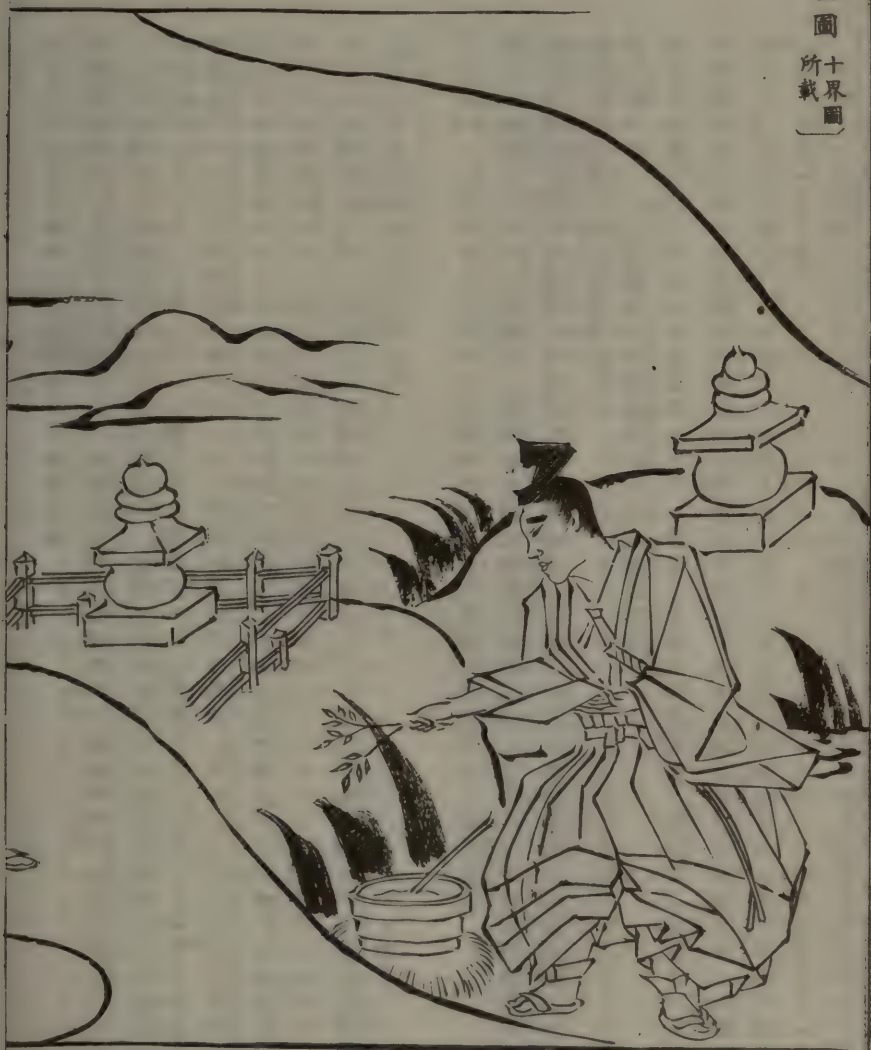
故也、此事於御參道、殊可憐之由、御先達申行間如此云云、

〔異本會我物語〕河津の女房、あさましくはおもひながらも、今はいなまん力なく、既にいでたち

給ひける、まづ河津殿○祐義の墓へ詣で、まゐるしの五輪にとりつきて、いごま申すよ河津殿、わらははまゝ、人に見えんとはおもはねども、殿の父うへ伊藤どの○祐の御はからひに力およばず、



〔謁墓圖〕  
十界圖  
所載



徒便持宋之答及海釋如墓讀祭時人曰海骨放光

〔榮花物語五〕

浦々の別かくてこの日もくれぬれば内大臣殿伊藤原故殿藤原こよひぞそひてゐ

て出させ給へとおぼし念せさせ給ふ御あるしにや、そこらの人さばかりいひのゝまゐりつれど、

夜中ばかりにいみじう寝入たれば御をちの明順ばかりと御供に人二三人してぬすまれ出さ

せ給ふ。略中それより木幡に参り給へるに、月あかけれど、此處はいみじうこぐられければ其程ぞ

かしとおぼしはかりおはしまいつるに、かの山近にては、おりさせ給ひて、くれゝと分入らせ

給ふに、木の間よりも出たる月をえるべにて、卒都婆釘ぬきいと多かる中に、これは去年のこ

のころの事ぞかし、されば少し白う見ゆれど、その折から人々あまた物し給しかば、何れにかぞ、

よろづたづね参りよらせ給へり、そこにてよろづをいひつゝ、けふしまろびなかせ給ふけはひ

におごろきて。略下

〔百練抄四〕

寛仁元年二月廿七日、攝政藤原道長、参木幡墳墓、公卿騎馬、上官爲御前。

〔保元三年記〕

八月十一日戊戌、今日於觀音寺、納言殿令修先妣周忌法事給。略中予申刻許参御骨御

堂聊修諷誦。一五段布施越布三段也、經頼卿記云、参墓所不對正面云々、依候傍方、今日始所参上也、日

來連々故障、于今遅引不慮事也。

〔源平盛衰記 三十一〕貞能参小松殿墓附小松大臣如法經事

貞能、小松殿重盛御墓ニ参テ、夜深ルマデハ忍音ニ念佛申、頓證菩提ト同向シテ後申ケルハ、君

ハ加様ノ事ヲ兼テ被知召テ熊野權現ニ御祈誓候テ、トク失サセ給ケルニヤ、此世中イカニ成立

候ベキ、賢人ノ大臣トコソ、君モ臣モ思奉シ事ニ侍シカ、草ノ陰マデモ遠キ守トナラセ給テ、御一

門今一度都へ返入給ヘトテ生タル人ニ物云様ニ、涙ヲ流シテ申ケリ。略中其後墓堀起シ、水ニ流

スベキヲバ加茂河ニ入持スベキヲバ持セテ、甲斐々々シクハ云タリケレ共、泣々福原ヘコソ下



〔日次紀事<sup>七月</sup>〕朔日 墓參 自今日至十四日、良賤各詣祖考之墳、慕俗謂墓參、正同中華清明日、上墳祭掃之禮也。

十四日 燈籠 今日先祖の廟にさんけいし、灯籠をどばし、みづからの家にも當月中灯籠をどばし、燈籠をどばすこと後堀川院御宇寛喜のころ前後に始りしよし、定家卿の明月記に見えたり。

○按ズルニ、謁墓ノコトハ、歲時部孟蘭盆篇ニモアリ參看スベシ。

〔東都歲事記<sup>三</sup>〕七月十三日 精靈祭 今日より十六日にいたる迄、人家聖靈棚を飾け、件々の供物をさゝげ先祖をまつる。<sup>略</sup>○中この内を俗盆中といふ、諸人先祖の墳墓に詣づ。

〔水戸歲時記〕七月十五日 墓祭アリ、朝服シテ拜ス、家内皆々行、町ニテセン香マツ香花ナドヲウル、蓮花ニコハメシヲノセ、竹ヲワリテ、コレヲノスルゴトク作リテノセテ備、墓ニボンボリヲツル。

〔喪祭式附錄〕天保年中、鄉中達之略

一時々墓所掃除いたし候儀は勿論、六月晦日には必そうじいたし、前後兩三日之内、墓參可致候、但七月孟蘭盆其外家々にて佛事修行不可致候。

〔扶桑略記<sup>推古</sup>〕卅一年七月、新羅任那使等並來朝、眞佛像金塔舍利大小幡等、又大唐學問者惠濟、惠光、惠日、福因等來、二國使并僧等聞太子<sup>○聖</sup>去年薨、各向墓門、舉哀大哭、相語曰、非王之本意、何處獻佛像舍利等。

〔元亨釋書<sup>五</sup>〕釋安海、學睿山興良、尤精台教。<sup>略</sup>○中當時源信覺蓮、爲台門兩輪、海常曰、懸心淺廣、揭厲可渡、檀那深狹、不過踰跨、信法師作二十七疑問、宋之知禮法師、海見問目曰、是等虜義、豈須遠問、乃作上中下三答曰、宋國答釋不出我三種而已、及禮答來海已死、台徒曰、禮之決釋多海之中下幾也、海之

〔蒲生君平遺稿<sup>中</sup>〕祭先墳文

嗚乎自古家之興滅猶夜旦之相代懷祖業之昔隆傷吾宗之長廢祝言澄乎近江顧山川以感慨歲云暮寒正厲日沈々雪飄々尋先世之城郭祭古墳乎草萊草凝霜墳籍苔所逢皆感心肺況餘孽之如余無僕從之後在際何以連車駟帶陸離之寶佩口先后之射獵宜村犬之怪吠感苗冑之如此希家祚之能再尙饗

〔西遊記〕魂祭

七月の玉祭りは何れの地にてもあるが中に長崎は殊にすぐれて仰山也長崎の地の墓所は皆四方の山の半腹にありて町よりもよく望み見ゆるに盆中は各挑灯をともす事なりはか晝つにてうちん二三つ富るものは墓毎に二十のてうちんをどもせり元來數千萬の墓有るに又數雙倍のてうちんなれば幾千萬といふ數を知らず夜に入れば四方の山皆火と成て其見事なる事浪華の天神祭りよりも勝れり扱十五日十六日家ごとに墓参りさて人々あらそひて美々敷酒肴を携へて墓の前に至り先祖への馳走也と稱して終日終夜酒宴をもうく魚類は元より三味線尺八のたぐひを携へ行て舞ひうたふ又隣の墓所にも此通なれば京地杯にて花見杯に行しごとく隣家の人と打混じてたがひに酒を送り魚を取かはして大に酒興に入る事也他國の魂祭りのごとく愁傷の體はさらになし珍らしといふべし

湯墓

〔山田落穂〕墓参の事

今の制は堂上方は平生にても御墓参あり内々の姿にても時服上下を着し給ふ尤その日は参内を憚らる侍分のものも墓参の日は主人の家に仕出せず神祇官は平生墓参なし正忌日にも墓参を禁せらるゝ家もあり又禁せられざる家もあるなも京都にては兩親ある人墓参のごと一切なし

獻

〔淇園文集〕初編二祭王仁吉師墓文

伏惟天覆地載之間，陽施陰化，茲民以生。天地之中，神明之德，莫不洋洋，莫不皇皇。實維是充塞衆生，資焉乃成。性情維昔，在上古，尙是茫茫，言則無紀，物則無至。伊孔聖神立象制器，德寓於名，義存乎辭。象器名辭，神名攸存，又有大知博愛衆言，克類厥物，或聳而思，或咨而議，或鑒而建，或察而理。於創經藝，能成聖士，殷之末周之盛德，蓋成厥功。姬之將末也，天命我父，宣令提其之墜，脩列六業，有秩有叙。君臣之所致，五服之所親，夫婦之所別，長幼之所叙，朋友之所信，懿乎維德以揭之，竟居昔天造我東方之民，艸昧未除，含其榮矣。苞其實矣，天肆命我雀皇，稟彼聖作用建之爲，是邦之儀刑。天實命公，實自韓國，謫于海通達皇極，以漸懿教于其土。大哉至乎，殆禹之功，維予鯀生常磨吾明，由彼群籍，以尙遍觀古人之規則，嗟乎文武之道，代天之工，禮樂象數變闢之明，苟行此道，上下神祇，其靡不以惠順悅豫而降嘉祥，何爲民智探其小，而弗收其大，食其皮而弗飽其肉，伏惟公之靈終古迄季世，靡所不在哉。東方之民，胡迄茲今，未能大闢邪，伏冀公尙自發揚爾昭明，而有成于昔業，是黎民億兆之福之卑也。予醵生，伏願賴於大庇，謹以清酌明饔，敢奠祭，敢昭告以祈，伏惟尙鑒。

〔蒙齋文集別錄〕卷一夢編二十七日

○文化三年四月三

登瑞龍山，山勢面東，松柏蔚蔥，土白而塹，實土之良爲府公。

○永戶

葬地龜趺圭頭碑碣相列，支封之侯，亦陪葬焉。問義公。

○德川

墳，展拜致敬，旁有明人朱魯璵墓。

嘗聞其操行之儼，哀其客死，跪以薦溪水祭之，文曰：嗚呼先生，遇中夏之亂離兮，蹈蒼海之茫々，經南國以問關兮，乍入我域以彷徨，夫省庵之耿介兮，顧祿半以充其養，豈有名聲之素慕兮，俄見德輝而煌々，維義公之好學兮，求賢達而遑々，聞先生之盛德兮，驅蒲輪以遙迎，待先生以賓師兮，來子弟講論常，嗚呼先生有懷復中夏之志兮，卒埋客骨於常山之陽，非先生之忠烈兮，胡使人垂涕以沾裳，雖無酒饌之致奠兮，聊薦溪流以揖降，美尙鑒，祭畢去。

就天之言、俯無以酬、不同蹈地之義、他日苟徒抱耻而死、亦何面目以見我公於地下乎、由是臣等相議、誓以死報、自始謀此事來、棄妻子、離親戚、奔走東西、不遑事處、衝冒雨雪、并日而食、一以間視仇家、不失機會、爲務而衰老之臣、若多病者、恐不及事、渣先朝、冀則相勸、急於死者屢矣、然又恐輕舉輒敗、重爲世笑、以貼我公之辱、是以曠日持久、而不敢發、有待焉耳、遂以前夜四更、往攻吉良氏、賴天之明君之靈、果得仇人、以首來獻、自今以往、某等有以復公、而死無憾矣、此匕首昔公在時、割所愛以賜良、雄者今謹還上公、有靈、請以此甘心仇人、以快當日之怨、臣良雄等再拜稽首、謹告、讀畢、起取盤上首、以匕首擊之三、乃復焚香拜退、衆亦如此、

〔類聚名物考 神祇十二〕頭をもて墓を祭る事

今の世にも復讐の人、その敵の首を墓所に置て祭をして、その冤魂をまつめなどむる事をなすこと、已に漢の時より見ゆ、戰國にも、伍子胥が事などもその類ひなり、後漢書 五十七 何顒傳、友人虞偉高有父讐、未報而篤病將終、願往候之、偉高泣而訴、顒感其義、爲復讐以頭從其墓、

〔鹽尻七〕琉球人弔故墳。琉球人於駿州清見寺弔故君墳塚文

維時寶永七年庚寅冬十二月二十三日、琉球國中山王使美里王子尙紀、豐見城王子尙祐等遣使贊官喜平州尙希、前川尙克、徒於清見寺、李弔故貝志頭王子尙宏法號求王院大洋尙公大居士之靈、嗚呼先王傳聞、故君中山王尙事公之愛弟、而尙懿公第二之王子也、爲其人也、孝弟而好忠信、就尙事王、慮從薩州之太守而至駿州、不幸遇病時也、慶長十五年庚戌秋八月二十四日、辭世於驛亭、時人卜築于茲、星霜荏苒、至今一百一年、吾國俗稱駿河王子者是也、嗚呼痛哉、天涯殞身、不得回卿、子孫雖多、隔絕遐方、經百歲無求焚香、但有清見關月訪夢寐、三保松風問荒涼而已、吾輩歷此地、堪感激、謹陳菲禮、以表寸忱之微、先王有靈鑑之、尙享、

按神君年譜曰、慶長十五年八月六日、島津家久牽琉球王駿府、八日琉球王見公云々、此時ノ尙宏





春神馬手肉留花流散驅人之聲。昔思布夫木集光使神祭花時雨也。成以驅牛。玉木翁曰此土俗之祭儀而非國家之例典。雖然亦可謂墓祭之始也。○今按文武紀曰。國靈廟命高祖使祭之。令義解曰。諸陵司正一人。掌祭陵墓。謂十二月。奉幣前帶是也。類聚國史曰。天安二年十二月。詔定十陵。四墓。獻年終荷前之幣。○中。贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足多武峯墓。在大和國十市郡。後贈太政大臣正一位藤原朝臣多嗣宇治墓。在山城國宇治郡。尙侍贈正一位藤原朝臣美都子嗣。○冬。次宇治墓。在山城國宇治郡。贈正一位源朝臣東姬。○藤原受宕墓。在山城國愛宕郡。

墓

〔續日本紀〕十式。天平二年九月丙子。遣使以渤海信物令獻山陵六所并祭故太政大臣藤原朝臣。○不

〔三代實錄〕清和。天安二年十二月九日丙申。詔定十陵四墓。獻年終荷前之幣。○中。贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足多武峯墓。在大和國十市郡。後贈太政大臣正一位藤原朝臣多嗣宇治墓。在山城國宇治郡。尙侍贈正一位藤原朝臣美都子嗣。○冬。次宇治墓。在山城國宇治郡。贈正一位源朝臣東姬。○藤原受宕墓。在山城國愛宕郡。

○按ズルニ、外戚ノ墓ヲ祭ルコトハ、帝王御山陵舊荷前條、及ビ外戚舊家墓條ニアリ、

〔重峯文集〕六十。先考忌日墳墓祭文

禮曰春雨霈既。濡屋之必有悚惕之心。夫爲子者於父。猶萬物之於天。時維孟春。草木萌動。無不受雨露之恩。豈不無感乎此哉。况於臨墳墓以對宿草而掃碑苦乎。嗚呼。顯考定歛以來。既七年。無日無時無不追憶。况於逢忌日乎。嗚呼。古者生而有才德之譽者。沒而有官爵之贈。然近世其例聞希。僕不肖。非力之所及。何以成追榮之美哉。頃聞憑副執事和州牧源廣之之執啓。而獻遺文百五十餘卷。以得歷台覽其事。載在傳命之狀。沒後之榮。聊可以換焚黃文乎。僕今晨祭祠堂。以一瓣之香。告在天之魂。而又詣墓前。以一滴之酒。告歸泉之魄。尙冀寬文三年癸卯正月二十三日孝子春齋林恕謹告。

時伏臘晦望二十四氣等ノ祭ヲナシ、日々ニ食ヲ上リシニヨリテ、士大夫モ皆多ク墓所ニ祠堂建テ、祭リシヨリ、後ハ衆庶民間マデモ自カラ墓祭ト云事ヲスルコトニナリ來レリ、シカシ古ヘモ家ニ廟無ク神主無ケレバ、不得已墓ニテ祭ルコトハアリ、禮ノ曾子問ニ、宗子去在、他國、庶子無爵而居者、望墓而爲壇、以時祭、若宗子死、告於墓而後祭於家ノ文アリ、是ハ凡ソ庶子ノ家ニテハ、神主ヲ作ルコトヲ得ザル法ナル處ニ、其宗領家他國ヘ引越シテ、神主ヲ持テ往シ跡ニテ祭ルベキ様ナキ故ニ、已ムコトヲ得ズシテ墓ニテ時祭セルナリ、故ニ古ヘハ極テ家ニテ祭ル墓祭ト云コトナシ家廟ニテモ祭リ、墓ニテモ祭ルコトニナリシハ、秦漢以後ノコトナリ、又唐ノ元和十四年、武元衡ガ議ニ曰、韓阜引漢官儀、古不墓祭、臣據周禮家人之職、凡祭墓則爲之尸、古亦墓祭、但與漢家陵寢不同耳、安得謂之無哉、ト文獻通考卷九十七ニ見エタリ、

〔喪禮儀略〕墓祭ハ三月上旬ニ祭ル、墳ノ内外ヲ掃除シ、生魚ノ一獻燒ヲソナエ、酒ヲ進メ、燒香シテ拜ス、其外既米餅菓子等其心ニマカスベシ、ソナヘ物ハ土器ニモルベシ、祭文曰、

闕

年號幾年歲次干支三月干支朔越梵干支孝子名乘取照告于顯考妣某氏君之墓歲序流易、雨霽既霽、晴掃封塋、不勝感慕、謹伸奠供、祇薦歲事、尙

鑒玉ヘ

〔日本書紀神代〕一書曰伊弉冊尊、生火神時、被灼而神退去矣、故葬於紀伊國熊野之有馬村焉、土俗祭此神之魂者、花時亦以花祭、又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣、

〔日本書紀通證三〕那智三卷書曰、有馬村有產田宮、今按、問之新宮神人、合、乃伊弉冊尊神退之地、而其東有隱窟亦曰、產立窟亦曰、花窟、花窟見增基、所葬伊弉冊尊岩窟也、今按、去宮三里許、海、每歲暮春、以繩作花及幡旗、今按、撰實木葉爲、繩、繞於窟、歌舞祭之、蓋往古遺俗也、大正、本國也、有馬村、



堂行之、唯三月上旬、一度祭於墓而已、厚於神主如此、薄於墓如此、非無疑焉、昔聞朝鮮國俗、每年祭墓者四度、蓋過於厚乎、孝慕之情、不薄之所致乎、答曰、先儒有說曰、墓祭非古禮、唯人情之所不忍、而於義理亦無妨也、墓者體魄所安、而祠堂者神魂所聚也、孝子追慕其親者兩端而已、其魂者氣也、魄者質也、葬之日、送質至墓爲子者、不忍見其親之亡、故深藏之、欲其體之久安也、所謂魄者歸於地也、其死時魂氣升歸於天、臨葬移精於主、迎之祭於家、歸於天者其氣感通、有享祭之理、所謂祖者精神我精神是也、猶草木枯而遺其種而又生、杏仁自生、杏桃仁自生、桃乃知枝葉盡而精氣不滅、故祭神主、則祖先魂氣在天者、豈不感享乎、體魄藏地者、無感享之理、是以古者祭墓者必立尸行之、尸者用亡者之孫、是亦所以欲聚彼精神而感享於此也、由是觀之、則墓祭者非所以有體魄感享之理、只是孝子不忍之情而已、文公定家禮以義理行之、非厚於祠堂薄於墓也、若夫朝鮮墓祭之數者、其俗之所習、然擊蒙要訣論之、以爲四度過矣、再斯猶可矣、且祠堂在家、則定祭之外、有事必告、出入必告之禮、不可失期也、墳墓之地、遠近不可量、則欲往亦有公務、則不可任心、不可任心、則失禮之端也、文公以墓祭定爲一年一度、其慮將來深遠也、文公丁親之喪、結廬於墓畔、當祭之日、則歸家行奠於神主、謹體魄感魂氣兩端之孝備矣、其身之所行家禮之所言、後學者不可不著意也、

〔壹鈔錄〕<sup>一</sup>、教家要略、引夢餘錄云、儒者多執古不墓祭之說、雖朱子亦謂神主在廟、而墓所藏形骸爾、故不宜祭、然周禮已有家人之官、凡祭墓則以爲尸、蓋此禮始於周公、豈得謂之非古也耶、且孝子於故衾遺履、尙當起敬、形骸所在、拜而祀之、禮不爲過、縱使上古所無、當以義起、矧周公之文明甚、而可棄之以自陷於薄哉、此說最是、余謂是墓祭不特設之周禮、孟子中已有明據、東郭乞墻、唯言其可鄙耳、未嘗謂之禮之末失也、當時墓祭之盛可想也、

〔過庭紀談〕<sup>四</sup>、凡ソ墓祭ト云コトハ、三代ノ古ヘハ無カリシコトナリシニ、秦ニ至リテ始テ山陵ニ園寢ヲ設ケ建テシヨリ、陵寢ノ祠リ起レリ、漢亦秦ノ制ニ因リテ、山陵ニ必ズ園寢アリテ、歲



祭墓

ぐちりばひなんは、かたじけなし、まかじ今愛をさきて淨地に收め、文塚の誌を留んか。○下  
 【倭訓栞】前編二十四はかまつり 神代紀に、花時亦以花祭と見えたるは、墓祭の始なるべし、墓祭

は荒魂の享也、熊野有馬村の遺風、仰ぐべき事にこそ。○中今も祖先の墓に、櫻花を手向て祭る事ありともいへり、花つみといふ事も是より出たるにや、中山傳信錄にも、折花供墓前と見え、臨朝樂事に、二月朔日、城中士女、已有出郭、青掃墓、設奠者、と見ゆ、墓は棲神の宅にあらすといへども、孟子にも、東郭墦間の事見えたれば、西土も同じ風俗なるべし、今肥前長崎の港に、清明と中元と其墳塋を祭る、されど諸民墓所に集り、各自に醺飲を事とし、歌聲喧擾たり、五雜俎に、南人借祭墓爲諸青遊戲之具、紙錢未灰、窮履相錯、日暮墦間主客無不頽然醉矣と見えたり、程子外書に、拜墓則十月一日拜之、感霜露也と見えたり、

【垂加流神道葬禮式】墓參モ神靈ナケレバ拜スルニ不及、然レドモ先祖ノ古御殿ヲ納置タル處ナレバ、子孫ノ情カラハ忍ガタキ、故折々見廻ル也、墓祭ト云コトハナシ、三月花祭ト云モ、本法デハナイゾ、墓參モ一日ノ禮也、

【墓相小言】墓は參詣る人おほく、にぎはへるをよしとす、精靈を慰めて必繁昌すべし、神代紀にも、花時は花もて祭り、菓時は菓もて祭り、また鼓うち笛ふき、幡たて歌舞して祭ることもあり、子孫の墓參し祭るはさらにもいはず、他人の參詣もおほからしめんがために、墓所の奇賞を構べし、或は花紅葉をめで、或は景地をめで、或は碑銘をめで、或は墓相をめで、來集るものも、其靈を跪拜せざるはなし、和漢大廟に參詣人を禁ぜざるはこのゆゑなり、

【鷲峯文集】四十八墓祭議

戊午季春上旬、依例行墓祭、其儀守家禮也、畢事有問者曰、墓者藏骸之地也、累累數尺之下、形體全備、爲子爲孫者、祭其魄之安、問其眠之長、良有以也、然朱文公定家禮而分至朔望俗節忌日之祭、皆於祠

入海中御子者所遺之政遂應覆奏<sup>○中</sup>故七日之後其後御櫛俵于海邊乃取其櫛作御陵而治置也  
〔孔雀樓文集補遺〕遺愛冢銘并序

子友勝彦龍埋其父了貞翁所愛棋具於西雲寺之墳域中樹石爲表求銘於子嗚呼是果棋之冢乎可  
謂勝家遺愛之冢矣<sup>○下</sup>

〔孔雀樓文集補遺〕海樓先生筆塚銘并序

明和壬辰冬十月原任長槍總管致仕淺見君置良病卒葬于城西本妙寺君夙以善書聞其所用退筆  
永豐不翅嗣子寔建筆冢於其埋玉之上求銘於子嗚呼是果銘其筆乎銘其墓乎<sup>○下</sup>

〔先哲叢談續篇十〕山兼山

南總西瀨高柳葛間二村兼山之徒屢往來此間鄉向學尊信兼山文化十四年丁丑八月葛蔭岡<sup>○鳥</sup>  
以兼山之手澤本古文孝經一卷瘞之高柳樹碑記事

〔山城現存墓碑誌銘全集續編五〕慈濟院行藏由仙居士遺愛碑<sup>○續</sup>  
今茲文化十五年五月相謀同門藏瘞遺物建碑以表永哀之情

〔天元文革碑編三〕迷庵市野先生碣銘

丙戌歲吾友迷庵先生市野君終於神田柳原肆宅墳僧以其法火化擯葬其骨於淺艸本願寺眞福寺  
祖塋塔內地陝不可碣後五年嗣子光壽函其遺稿瘞之其所以銘見屬夫君之骸既化於火而遺稿乃  
其心血所出瘞而碣之又無於禮之禮也

〔關田文革四〕兒島尙善<sup>○續</sup>母氏文塚碑誌

慈法尼元の名は柏兒島尙善ぬしの母刀自也ぬし若くて京にもものまなびせし時贈りたまへる  
文ふたもゝにもあまりぬるが<sup>○中</sup>身まかり給ふけるのちは此文をのみなき形見にて手も  
はなれず涙のひるまなきに又思へらく我こそあれ我もまたうせなん後心にもあらではかな

墓の造りやうとは大にちがひ、山の半腹を穿ち、むかふは石垣のごさく臺あば、中を平にして石の机あり、石の門あり、石の宮あり、四方の垣も皆石を彫りて、種々の花鳥を細密にほりたり、石の柱石の門皆鳥獸草木をほり付、或は文字を彫たり、色々の道具皆石にて作れり、其構へ廣く、其細工精密にして、筆に書つくすべきにあらず、はじめて作り立たりし時に、銀五十貫目かゝれりといふ、其後猶心にあきたらず、二三十年が程は、つねに石工をやとひ墓普請せしとぞ、それ故長崎の諺に、手間入りて埒の明ざる事を、東海の墓普請といふ、此人唐土明朝の亂をさけて、日本長崎に渡れる人也、大福有の人也、今に於て其子孫東海徳十郎と名乗て、唐人通事也、長崎に遊ぶ人、必此墓をみるべし、目を驚す事也、又近き比まで京にありて、明樂の師範せし鉦鹿氏（イナカ）の先祖の墓も、長崎西山といふ所にあり、其體東海氏の墓の如し、されども是は大におそれり、石の碑のわきに、明故伯統顧魏公六府君故考双侯魏公九府君墓道と彫り付たり、前の石階に、行瑞東南の四字を大字にゑりたり、又其一段下に、椿林鐘秀の四字横にゑり付たり、此墓小なりといへども、日本の墓にくらべては、大國の君の墓所といへども及ぶ所にあらず、其外も唐人の墓は大かた大にして美麗なり、

煙邊物墓家

〔先代舊事本紀天孫本紀〕饒速日命、既神殞去坐矣、中饒速日尊以夢教於妻御炊屋姫云、汝子如吾形見物、即授天璽瑞寶矣、亦天羽々弓、天羽々矢、復神衣、帶、手貫、三物葬、欲於登美白庭邑、以此爲墓者也、

〔播磨風土記賀古郡〕此岡、中有比禮墓、生神大御津國命所以號沼墓者、昔大帶日子命中、誂印南

別嬢之、中有年別嬢薨於此宮、即作墓於日岡而葬之、舉其尸、度印南川之時、大鰐自川下來、纏入其

尸於川中、求南不得、但得匣與沼、即以此二物葬於其墓、故號沼墓、  
〔古事記中〕渡走水海之時、其渡神與浪廻船、不得進渡、爾其后名弟橘比賣命白之、妻易御子中、而

泉州府 乾隆盛次辛卯年

大清 添官黃公之墓

同安縣 八月十一日卒去

海

大清乾隆五十七年六月廿二日辰時享年

皇清待贈蘇回公之墓

澄

李男大觀奉祀

阿蘭陀人の墓

阿蘭陀人の墓は長崎稻佐邑悟真寺にあり、昔時カビタン、舟中にて死たるを、砂糖漬にして持來り此寺に葬る、其墓あり、もつともカビタン以下、黒すまたろす杯の類は、墓といふ事もなく、犬馬の死たるに齊しく、其儘埋置事也、もし舟中にて死たるは海中に捨るごなん、或は其カビタンの墓も、香花を手向るといふ事もなく、たゞその恩厚に預りたる責婦など參詣するのみごなん、もつとも墓に文字を彫と云事もなく、墓のまへに三ツ石を立たり、是は寺僧より事のよしを記したる石なり、爰をもつて漢字にて彫たり、ごかし是もみな磨滅して見えざるなり、墓の形は左に圖す、○■

東海の墓

東海の墓は春徳寺にあり、昔時東海某は、唐人の子孫にて、長崎の譯官なり、此人墓を好める辯ありて生涯墓の修理を怠たるをもつて、諺語にも東海の墓普請とて名高き墓好きなり、今も其子孫あるなり、予行てその墓を見るに、すべて石を彫り、種々に工をつくしたるなり、昔時は金銀なごをも交て飾りたるごなん、今は盜人のために皆取られたり、ごかれごも其細巧、猶賞するに足れり、ご、に其大略を圖す、○■

〔一話一言〕東海氏墓

長崎春徳寺の山上に、東海氏の墓あり、其廣大美麗なる事、日本第一といふべし、其墓の體、日本の



慶長第二曆秋之仲、大相國、命本邦諸將、再往伐朝鮮國、於是大明皇帝、運唇亡齒、寒遠謀出、數萬甲兵救之、本朝銳士、攻城略地、而擊殺無數、將士雖可上首功、以江海遼遠、剿之備大相國高賢、相國不爲怨讎、思却深慈愍心、仍命五山清衆、設水陸妙供、以充怨親平等供養、爲彼築墳、名之以鼻塚、況又造立木塔婆一基、看々此塔婆、喚作殺人刀、也得拈做活人劔、也得喝一喝、清風明月、本同天、子時龍集丁酉秋九月二十又八日敬白、

〔義演准后日記〕慶長二年九月十二日、傳聞從高麗耳鼻十五桶上云々、則大佛近所ニ築塚埋之、廿七日、傳聞今日高麗人ノ耳鼻、大佛西中門ノ融ニ埋之、爲彼弔五山禪衆、我鬼行也云々、

〔豊臣秀吉詣下〕頃年朝鮮在陣諸將、報進其斬獲之數、或人以首級之重故、剿之、則之而遺于京師、秀吉大喜賞之、自此之後、諸將皆效之、不可勝計也、其獻軍實于秀吉、必曰鼻若干耳若干、秀吉並埋之于洛畔大佛殿邊、號耳塚、其後朝鮮人來、實之時、到塚下、請祭文、而用之、哭泣曰、此輩是輸死報國者也、

〔京羽二重大全八〕耳塚、在大佛殿門前、由來舊の知所也、實は鼻塚也、慶長二年七月、如頼朝正小四、長於朝鮮國所、斬取也、二大將の勢、二十萬騎にして、朝鮮人の鼻三宛にぐりに、被國において目付の實檢に入、隨漢にして來れり、中略、始は塚のめ、ぐりに、被國において目付の實檢に入、隨漢にして來れり、中略、始は塚のめ、

外國人墓

〔長崎聞見錄二〕唐人の墓

唐人の墓は、宗福寺與福寺福齋寺等に多くあり、墓の後、棺を埋たる所に皆大きな石を置たり、其形は爰に圖する通也、○圖略

閏 乾隆貳年

清徵仕郎敬宗謝君墓

邑 孟春吉旦立

長 乾隆丙辰年

清待贈孝祖陳公之墓

柄 桂月吉旦立

三 癸丑正月穀旦

先考國學生高遠林公之墓

山 陽關男繼立

いたづら事にや、石を置て其上に骨のあるをば大將の首なりなどいふなり、但しむかしよりのまゝなるもえらす、粉の如くに碎し、其中にありのまゝなるもあり、又すぐれて大きくあつき骨なるもあり、めづらしき事也といふ、

〔新編相模風土記 三浦郡七〕五輪塔一基 社明神ノ背後ニアリ、大介ノ首塚ト云フ、是ヲ奥院ト稱ス、

〔伊豫國順道記 水見組〕西泉村

右備後守子金の塚より十四間東に、石積あげ櫻木生ひ、首塚とも亦千人塚とも呼習はし、一堆方

二十尺ばかりに築あげ、石佛を安置したる處あり、是は天正の戰に、小早川隆景爰にて首を實驗し、それを埋たる塚なりと云、

〔元延實記〕同年八本多上野介正純佐守正信は行跡不平和、極者無仁

譬無物根來足輕有罪、百人を一日之内百箇所に遣し、時刻を定て誅戮し、其首を取集め、領内宇都宮に首塚を築く、

耳鼻塚

〔古事談五〕六條坊門北西洞院西有堂、號ミノツ堂、件堂ハ伊豫入道賴義、奥州俘囚討夷之後

所建立也、中十二年之間、戰場死亡之者片耳ヲ切アツメテ、ホシテ皮籠二合ニ入テ、持テ上タリ

ケルヲ、件堂ノ土壇下ニ埋云々、仍耳納堂ト云也、ミノツ堂ト云辭事也、

〔承兌日用集〕慶長二年九月廿五日、早朝出浴、來廿六日、善光寺前、大施食之儀相延云々、予蓬木食上

人、總摸樣、則今日爲大明朝鮮聞死群靈所築之塚尤小也、縱橫廣小而其後施食可也云々、太閤臣〇

吉今日御上洛、予亦待太閤、太閤即御出洛見予、問用所施食之儀、白之、太閤御意趣者、先讀施食明春

可令塚廣大之由也、故與木食、廿八日施食可施行之旨談之、廿八日、日出喫齋、赴善光寺前、先齋卒

都婆卒都婆文曰、中

平生所剪爪髮塔于南禪之龍華相國之大智建長之龍興

〔山城現存墓碑誌銘全集女流源朝臣永子遺髮塚碑文

嗚呼惟吾煩源朝臣永子遺愛之塚也已以遺言葬汝柩于大德寺龍光院於是實繫于小棺瘞於黑谷

先塋之側 天明二年九月六日 夫權大納言藤原伊光誌 在洛東黑谷

〔三綠山志六宗院大超院執政從四位下行侍從勇山君之碑

此先考執政館林侯從四位侍從松平君瘞其齒髮所也略中先君嘗與芝増上寺別院隆崇院智海善

且慮陵谷之變遂至九月以齒髮瘞其院內地乃勒其事於石而立之

孝子館林朝散大夫主計頭源武寛

〔先哲叢談八井通照

嘗瘞齒于牛島牛女祠畔立石表之使金峨作記東江書冊

〔伊田御家系譜村芳公若狹守宮内少輔 文政三年八月十七日御卒去實十三日ナ

右墓誌東禪寺ノハ備前儒職井上觀太 大乘寺ノハ當代君公誌略中

尊考南嶽公諱村芳字潤略中 文政三年庚辰秋尊考罹疾卒實八月十三日也春秋四十有三葬于江

戶東禪寺之先塋瘞其遺髮于吉田大乘寺之先塋

從五位下紀伊守藤原朝臣宗輪撰

首家

〔泉州松尾寺記〕元曆初平氏族略中死者如亂麻乃戴首級三大盤送葬其上略中俗曰首堂

〔神書八谷長右衛門いふ和泉國丹羽谷松尾寺といふを土俗かうべ堂といふ也和州法隆寺の大

工など來りて見に其時は昔のまゝにてあるが故也傳に平家の一谷敗れ一族の首どもを埋め

し堂也といふ三間四面ばかりなるがかつこうより榎の高き也榎の下はここんく國體也

むかしは板屋なるを後に銅瓦にしたりと見えたり外縁は後にこしらへしと見ゆなにももの

傳聞こゝに初妙心寺に住せし樹下庵祖芳といふ僧あり、此人彼卿の古墳を尋んとて、北岩倉のほとりを逍遙するに、路の側に藤房卿髮塚といふ小き標札あり、即林中に入て見るに、荆棘あたりに蔓り、若苔露なめらか也、閑にこれを剣て見れども文字もなし、此標札を建し人こそ便なるべしとて、あたりの人に尋ねれども、曾てある人もあらず。○中 第三日に當る日、法體の老人帶刀し、黒き羽織を着して出來り古塚を禮拜する事最殊勝也。○中 これこそ萬里小路藤房卿の髮塚にて、此地は不二房の舊蹟也、某は當山岩倉實相院宮の候人上河原氏といふ、これぞ藤房の舊蹟といふ事、御殿の舊記に像見えたり、然るに今より三十年前、暴風烈しき時、此塔の下へ根の蔓る大木の松倒れけり、其時塔も俱に轉びけるに、臺石より二重目の石空虛にて、其中に銅の筒長五寸、亘四寸許なるが、出て筒中に髮筋とおぼしき物あり、故に髮塚といふ事、舊記に符合して明白なれば、近年我標札を建置しと語られける。○中

表碑 萬里小路中納言藤房卿髮塔 十二字 記百八十字

### 記曰

山城州北巖倉大雲教寺封境、不二房舊址有一基石浮圖、傳言藤房卿髮塔、往昔建武甲戌之冬、藤房掛冠、遁蹤岩倉、禮於不二房法一雄、髮自爾、鍍彩、鎔光、居無定處、此塔久歷星霜、古貌巋然、髮銅筒、安塔之中央、竊惟法一、追感藤房賢德、建之乎、藤房東脩、南棟、後登洛西正法山、受關山國師衣法、遂爲妙心禪寺第二世、諱宗弼、字授翁、勅證神光寂照禪師是也、今恐荆榛荒涼、不可識、彫刻片石、記其概、略以爲後標、

寛政二年庚戌三月廿八日

祖芳焚香謹識

〔普明國師語錄下行樂實錄〕嘉慶二年戊辰秋八月十二日、暮夜師○妙語侍僧曰、吾世緣既盡、當與若等永別。○中 黎明怡然而逝、世壽七十八、僧臘六十有四、卽日午時、奉全身空鹿王之塔、萬衆如喪考妣、分



延文三年六月廿九日

義詮印

多田院長老

〔多田院古文書〕寶篋院殿○足利義詮御遺骨一分事、就往年之由緒所被奉納當寺也、宜被致不朽之勤行之狀、依仰執達如件、

貞治七年二月廿九日

右馬頭印

多田院長老

〔空華日工集〕應安元年三月十八日、赴淨妙寺、迎京先府君○足利基氏遺骨、本府幼主○足利氏滿郊迎而將之入寺、○中古岩西堂捧遺骨兩班引入光明院、首座按骨安于塔前、○中大休長壽大統諸寺院、求頒遺骨、以無公命不允、惟瑞泉黃梅兩塔處、以公命班賜、

〔千葉系譜〕故左金吾兼野州太守平公墳記

應永三十三年、公○東常氏年五十、師氏卒、○中經紀喪事、其營痛慟之誠、丁其十三回、長瀧寺將建塔婆、因

需公助緣、輒命工彫大日像、施一百餘緡、懿哉爲孝、輕財固可尙矣、而後塔遂不成、今同州有一十三重

塔、購以爲尊主是也、○中公永和二年丙辰生嘉吉元年辛酉卒、○中長子氏數遣使收骨、東遷分之爲

二、其一瘞于京之先隴靈泉、其一藏澁之故里木蛇、各刻石浮圖、以旌其所、

〔帝王編年記二十四〕貞應二年、今年法印貞曉和朝三男、高野山中建寂靜院、本尊阿彌陀三尊、又造

丈六堂、本尊御身奉納、右大將家朝朝鬘髮云々、

〔身延記行〕池上○本寺へ行て、こゝろしづかに法文など尋て、いたうふけて、書院なる所に臥ぬ、○中

其朝こく起て、遙に御骨堂をおがむ、肉づきの御齒も此内にあり、此齒のあらん所は、我生身常にありと思へとなんのたまへる、いざたうとし、

〔郡林泉名勝圖會四〕藤房卿髮塚北岩倉大盛寺觀音堂に登る石階の東麓町許、林の中に石塔あり、これないふ高五尺餘、

此碑酒井讃岐守爲尊敬法親王紹价求之固辭不肯強請不止故不能默以作之

〔松島國誌〕骨塔 賴賢の碑の側にあり五輪石塔高一丈一尺三寸圓滿國師はじめて建之洞水和尙再建といふ其下に深き城あり人々の毛髮齒骨などををさむ

分骨所

〔山城名勝志〕十五長清寺

東遊續集云公叔阿州大守小笠原源公長清居士力項錄源 小笠原源公長清者乃清和帝第十一世孫也○中 建久六年南京

東大寺大像成四天像未成長清捨家財造持國像在洛之東山清水坂舉功俗呼其地曰四天十字

字者小巷也蓋此巷造持國之謂也長清收餘材創佛宇於其側扁曰長清取自名也○中 臨終告諸子

曰我死必被堅執銳以葬此地各奉遺命作石棺盛屍瘞觀音殿之下應仁戊子八月一日毀于兵火蕩

無一瓦時長照從軍都下見之不忍至則石棺存耳灰燼中拾遺骨歸遂三分其骨龍之一塔濃州多藝

庄有寺曰莊福莊福有軒曰長惠實家廟也長照安塔於此一分以還洛之長清復其寺一分以贈信之

開善立其祠

○按ズルニ龜山天皇ノ御骨ヲ淨金剛院南禪寺金剛峯寺ノ三所ニ分納シ其他後光嚴天皇後

土御門天皇等ノ御骨ヲ數所ニ分骨セルコト帝王部山陵篇分骨所條ニ在リ

〔親鸞上人繪詞傳〕二十八日弘長二年十一月午刻に至りて頭北面西右脇に臥たまひ稱名の聲と共に

御息とまりぬ○中 十二月六日東山吉水の禪坊の隣大谷に納めて石碑をたつ五旬の中陰はみ

なみな京に留りて是をつとむ總計二十五粒の齒骨の内九粒と總骨を大谷に納め外十六粒は

桐の筒に收て顯智上人これを持下り高田に御墓を築て九粒これに納め其餘の七粒は顯智上

人の許に持給へり

〔多田院古文書〕先公足利遺骨一分事任堀越申請旨所令奉納當寺也宜令致不朽之勤行專祈幽

靈之證果之狀如件

剛三昧院奉行城入道大連盛長子、本尊正觀世音御身被誦寶朝公遺骨云々、

〔萬松院殿穴太記〕御收骨の事あり。略中御骨は攝津國多田院と高野山へと分てこめられ侍り、高

野へは千本の楊明坊請取て籠奉るとかや

〔御條目類留帖四〕高野山學僧在番

寶龜院

多聞院略中

山中石塔場、近年甚廣、無用之至也、古來之石塔卒都婆、狠不可致紛失、向後縱雖爲國持大名其地形

不可過二間四方事。略中

慶安二年九月廿一日

大藏院略中 御朱印

〔倭窩文集五和歌〕骨堂に骨のおほきを見てよめる

塵の身のたれつもればや高野山名を埋つ、ほねはうづまぬ

〔吾妻鏡三〕治承五年元和中閏二月四日庚戌、戌刻入道平相國盛、略中遺言云、三箇日以後可有

葬之儀、於遺骨者、納播磨國山田法華堂、

〔羅山文集四十三碑誌〕憾給淵納骨堂碑

日光山中有淵潭、世稱不動明王來現處也、故採其種字號憾給淵、誠是勝地靈區也、先是東照宮背後、深奥之處有納骨堂、慈眼大師海、略中天爲畏神威毀除之、既而大師遺教曰、我沒後宜再建此堂、未暇相攸、

漸歷數輩、方今尊敬法親王、有可以營堂於憾給淵幽處之旨、且大師之衆徒等爲過去萬靈爲自己善

提彫石地藏若干軀、造立淵畔、淵畔有巨石方八尺許、鑿開之以納新舊之骨、乃立碑於此石上、以記其

所由、願以此功德、骨化爲水精乎、爲寶石乎、爲珠石乎、與不動地藏分其骨乎、抑果與佛舍利相共同乎、

骨已如此、則其群靈或上天、或成佛、以可證之乎、法親王繼大師之志、受大師之緒、以爲此舉、以納萬骨、

不亦宜乎、若夫葬枯骨、則聖王之德也、掩骼埋胔、則孟春之政令也、是雖非今之談、聊併言之而已、

がらうせさせおはしにけるごぞうけ給はりし、かねて高野の御山に、しのびて御たうたてさせ給て、それにぞ御まやりをばおくりまゐらせ給けるとなむ、かの御ともには、さもあるべき人々、おのゝ御さはりありて、贈左大臣の末の子、ときみちの備後守とかきこえし、のちには法師になられたりけるに、年ごろもちぎりおかせ給へりけるとて、その人ばかりぞくびにかけまゐらせて、たゞ一人まゐられければ、わ、かさのかみにて、たかのおと申て、むげにさしわかき人、をさなくよりなれつかうまつりて、御なごりのまのびがたさに、ことにのぞみてしたひまゐりけるに、御山へいらせ給ふ日、雪いたくふりければよみ侍りける、

誰かまたけふのみゆきをおくりおかんわれさへかくておもひきえなば

〔藤原隆信朝臣集上〕美福門院かくれさせ給ひて、御まやりは、かうやの御山へわたしたてまつ

りし御ともにて、くさつこいふところより、舟にのりてこぎ出る、あけぼの、空のけしき、なみのをさまでも、をりしりがほに、かなしくきこえ侍しかば、

朝ぼらけこぎ行あどにきゆるあわの哀まことにうきよなりけり

〔古事談二〕賢子中宮○白廣壽聖人上也後身云々件聖人云順次雖可遂往生此御山○高野二

無依怙、仍生於貴人、可沙汰依怙ト云入滅、其年件后所生給也、中宮薨給之後、被上御骨於彼山、被建立圓光院、被寄越前國牛原庄等云々、

〔吉事略儀拾御骨〕○中

有由緒僧綱若凡僧奉願之、參高野新御堂、暫奉昇退御佛、放板敷奉納之、如元夢居御佛、

母屋佛壇下深掘穴、底并四面疊大石、奉安之、其上覆石、可塗石灰、非常大事、若出來之時、不可露顯、不可損壞之故也、

〔帝王編年記二十四〕承久三年、今年鎌倉二品禪尼賴朝母後室、賴爲故右大臣○實高野山内建立金



かく見えなれば、高祖草創の名刹を望む人は、巨益空しからざるが中にも、眼のあたり入定留身の地の尊きを知べし、されば世舉て亡者の爲に、歸依の院々へ日牌月牌を置いて長く其法號を此山内に留め五十六億下生の曉まで、晨夕の回向にあづかる功德莫大なるべし。

〔高野山案内記〕骨堂方六尺、寶形作、貴職の置らし來る所の遺骨及び遺髪等を納むる所なり、堂内地を掘ること數尺、甃を疊みたる石室にして、工作嚴密なり、崇徳天皇皇后の創建し給ふ所にして、古今遺骨等を納むるもの、連綿絶ゆることなし、故に瑞臨の外別に支提所を設け、夜々淨人をして、納めし所の遺骨遺髪を移して殮葬す、

〔保元三年記〕八月十一日戊戌、今日於觀音寺、納言殿令修先妣周忌法事給。○中、佛大目也、此佛建立堂於高野山、可奉安置之、其内可奉安御骨云々、廿一日戊申、今晚奉渡先妣御骨於高野、是爲納言御沙汰、御建立一間四面堂於彼山、正日供養大日如來安置之、其中被奉、龍御骨也、抑御骨者、御非禮之時、左兵衛尉橘正清、依爲緣人、奉懸之、仍今度同被懸、然公事指合、膝下向、行眞供奉奉懸也、行眞又爲女房子之故也、是大北政所御骨、大宮亮師國朝臣奉懸之、其後又奉渡他所之時、彼朝臣補家司畢、依輔以近親僧奉渡云々、且尋彼例、納言殿令計沙汰也、來廿三日可奉置云々、

〔山槐記〕永曆元年十二月六日庚戌、宮内卿師綱朝臣語曰、美福門院○鳥羽御骨、奉渡高野御山、依御遺言也、而鳥羽東殿故院羽令起立御塔二基御、一基被納故院御骨、今一基此女院御料也、然而可置高野之由有御意趣云々、而彼御塔三味僧天台六口、并故院御塔三味僧六口、合力奉留御骨、訴中仍遣重方被仰子細之處申云、然者可分置御骨於兩所、此儀又以外事也、御骨雖不御坐、御塔三味僧者不怠之由能々被仰含、仍去二日遂奉渡高野了云々、

〔續世繼むしのれ〕此御門○近の御母、贈左大臣長實中納言の娘也、得子皇后宮ときこえ給美福門院と申き應保元年十一月廿三日にかくれさせおはしましにき、むらさきの雲たちて、ひな

本ニ九品ノ淨土アル中ニ上品ノ上生ニ當レリ、是清涼山ノ文殊ノ示現也、然レバ勝タル靈廟ナル故ニ、專ラ此ニ置歟、又寛治年中ニヤ、東寺ノ定額僧正勝實ト云シ人、讃州善通寺ノ別當ニ被補テ下向シタリケルガ、於彼寺御筆ノ一紙ヲ感得ス、文云、

ト居於高野樹下、遊神於兜率雲上、不闕日々之影嚮、檢知處々之遺跡、

ト侍ベリ、サレバ高祖草創ノ砌、望マン人ハ巨益空シカルベカラザル中ニ、殊ニ彼ノ山ハ、親タリ入定留身地也、彼ニ身骨ヲ納メシ輩、爭カ有縁ノ益ニ不預哉、加之大師ノ御記文ニ云、

結舍那之秘印、秘先身、雖留身於樹下、意者有兜率內院、雖然爲加持遺跡、不闕日々之影嚮、至有信者、其身授幸、不信者可恨、先業、但我山所遂置亡者之舍利、我每日以三密加持力、先送安養寶剎、當來我山、可爲慈尊說法之聽衆菩薩云々、

此御記文、寶性院ノ經藏ニアリト云也、依加様子細取別高野山亂置者也、

〔紀伊國名所圖會三編六〕高野山御廟の右壇下にあり、八角造の堂なり、今ある所骨堂は元和年中、松下河内守元綱朝臣の遺立なり、所

天下の縋素、其遺骨を所々の靈區に置といへども、此堂にをさむる事尤多きは、古くよりの例にして、即大師の御記にも、我山に贈る所の亡者の舍利は、我毎日三密の加持力をもつて、先安養寶剎に送り、當來はかならず我山に慈尊説法の聽衆の菩薩たるべしと書したまひ、東福寺虎關が、元享釋書にも、國俗亡人の骨を以て高野山に定むるは、弘法大師の龍花三會の大定に伴むとは見えたり、抑當山は日本に九品の淨土あるが中に、上品の上生にあたり、勝れたる靈廟なれば、爰に身骨ををさめむ輩、いかでか有縁の益にあづからざらむ、寛治年中に、東寺の定額僧正勝實といひしが、讃州善通寺の別當になりて下向ありし時、彼寺に於て、御筆の一紙を感得せし文に、

ト居於高野樹下、遊神於兜率雲上、不闕日々之影嚮、檢知處々之遺跡、

去程ニ明レバ十二日、左大臣、イマダメノハタラキ給ケレバ、略○中十四日ニ、ナラヘイレ申ケレ共、略○中ツヒニ其日ノ午ノコクバカリニ御事キレニケリ、其夜ヤガテハンニヤノ五三マイニオサメタラマツル、

〔保元物語二〕爲義カウサンノ事

去程ニ六條ノ判官、略○中十七日西塔ノ北谷クロタニトイフ所ニ、二十五三マイオコナフ所ニ行

テ出家ヲトグ、法名ヲ義ホウボウトゾツカレケル、

〔保元物語三〕北方身ヲ投給フ事

サラバ舟岡ヘトテ、桂河ヲ上リニ、北山ヲ差シテ行程ニ、五條ガ末ノ程ニ、岸高ク水深ゲナル所ニテ、與ヲ立テサセ、石ニテ塔ヲ組ミ、入道○源爲義ヨリ始四人ノ君達ノ爲ト廻向シテ、懷袂ニ石ヲ入レ、サラヌ體ニモテナシ、略○中岸ヨリ下ヘ身ヲ投ゲテ、終ニハカナク成給フ、乳母ノ女房是ヲ見テ、續テ河ヘゾ入ニケル、供ノ者共是ヲ見テ、周章騷、走入ツテ尋レドモ、石ヲ多ク挾ニ入給ケル故ニヤ、繼テ沈テ見エ給ヘズ、程經テ遙ノ下ヨリ取上テ、二人ナガラ、卽其夜鳥部山ノ烟トナシ奉リテ、遺骨ヲバ圓覺寺ニゾ收メケル、

〔吾妻鏡二〕治承五年○養和元年十二月十一日癸丑、帥公日慧入滅、日來煩腹中、今夜則葬于山内邊、武衛

御哀傷之餘、自令向其茶毗所給、

〔親鸞上人繪詞傳三〕二十八日午刻に至りて、頭北面西右脇に臥たまひ、稱名の聲と共に御息とまり給ひぬ、時惟人皇八十九代龜山院御宇、弘長第二壬戌十一月、聖人○親鸞満九十歳也、略○中翌廿九日送葬し奉る、略○中鳥邊野の南、延仁寺の三昧に送て火葬し奉る、

納骨所

〔塵添壇藁抄十六〕骨專納高野事

諸人取骨、必ズ高野ニ納ルハ何ノ由緒ゾ、凡ソ不限南山、所々ノ靈區ニ置之、歟、就中高野山ハ、是日

龜堂 同所 五三昧 當所 千駄谷 桐谷 澁谷 炮錄新田

〔續江戸砂子<sup>四</sup>〕小塚原龜堂御坊寺 皆本寺アリ

正保慶安の比迄は淺草下谷の寺院皆境内に龜堂ありし、一とせ東叡山御成のみざり、臭氣東風にさそはれ御山にうつる、常に此臭煙靈場にかゝる事をわづらはしく思しめさせられ、煙を避べき地へ引べしと鈎命あり、よりて今の所方一町の地を賜り、淺草下谷邊の諸寺、五箇寺、七箇寺一ツに統て、其寺々の葬場とせり、其時下火の寺二十餘箇寺、それかれの末寺とす、其後破壊して今十八寺あり、今は晝中に葬事を禁じ、日没にえらせの喚鐘をつきて一統に點す、

〔大鏡<sup>二</sup>太政大臣基經〕おとこ、うせ給ひて、深草の山にをさめ奉る夜、勝延僧都のよみ給へる、

うつせみはからをみつゝもなぐさめつ深くさの山煙だにたて○又見古  
今和歌集

〔中右記〕元永三年<sup>○保安元年</sup>九月廿六日甲子、今夕西御方御葬送也、日野南廿五三昧地爲其口○依生時

入奉此廿五三昧也、仍無地鋪、予先騎馬行向彼所沙汰、依爲山寺省路諸事、導師呪願、本寺僧永嚴、東大寺定助、得業、申時雨頗止、終

夜時々小雨、曉更事了、晚頭先供養佛經、龍僧六人、長壽寺、嚴定助、大奧阿彌陀堂廊爲其所、

〔法然上人行狀畫圖<sup>四十三</sup>〕嵯峨の二尊院は上人草庵をむすびてかよひ給ひし地なり、その跡かうばしくして居をこゝにえめ、寺院を興隆し、楞嚴雲林兩院の法則をうつして、二十五三昧を勤行し、上人の墳墓をたてゝ、もはらかの遺徳をぞ戀慕し給ける、

〔圓光大師行狀翼賛<sup>四十三</sup>〕二十五三昧トハ、或住山者云、此三昧者、本出涅槃經聖行品、玄義第四、

止觀第二通釋、本朝永祿年中、妙空上人、依惠心僧都勸美始修焉、時造丈六彌陀、此堂在、安華臺院、橫川、

率谷、曾亡、今鶴足院、其舊地也、其後惠心修于此堂、又移修于大原、良祐阿闍黎預此會之衆、稱三昧阿闍黎者、卽斯

謂也、其軌則今時不傳、講式一卷流于世也、

〔保元物語<sup>二</sup>〕左府御サイゴ附大相國御ナゲキノ事



をたて、御自筆にて梅里先生の墓とあそばされ候御碑陰并銘

先生常州水戸産也。略中元祿庚午之冬、累乞骸骨致仕、初養兄之子爲嗣、遂立之以襲封先生之宿志

於是乎足矣、既而還郷、卽日相攸於瑞龍山先塋之側、瘞歷任之衣冠魚帶、載封載碑、自題曰梅里先生

墓、先生之靈永在於此矣、嗚呼骨肉委天命所終之處、水則施魚鱉、山則飽禽獸、何用劉伶之鍾乎哉、其

銘曰、月、雖隱瑞龍雲、光暫留西山峯、建碑勒銘者、誰、源光國字子龍、

〔瀬田問答〕青木敦書〇見壽藏銘

享保二十年、青木敦書蒙命種甘藟、因人呼予曰甘藟先生、甘藟流傳天下、無饑人是予願也、今作壽塚

曰甘藟先生墓

〔鈴屋翁略年譜〕今年〇寛政十二年伊勢國飯高郡山室の妙樂寺の山に、豫て墓所を點て、櫟の石を建置た

まふ、その時よみたまへる歌

山むろに千年の春のやごしめて風にまられぬ花をこそ見め

九月〇享和元年十八日よりこゝちわづらひ給ひけるが、やうやくにあつしくなりて、廿九日の曉身

まかり給ひぬ十二月二日、かねて定置給ひつる山室山の嶺の墓所に葬りまゐらす、塚の上に櫻

を植て、碑に本居宣長の奥墓と銘せり、此文字は、みづから書おきたまへりさぞ

〔候訓墓也中編二十七〕やきば 化人場をいふ、焼尸場も同じ、

〔類聚名物考内事四〕五三昧 ごさんまい 尸陀林

京都洛外の無常所五箇所を云 東寺四塚 三條河原 千本 東 中山 延年寺 是等の所を

云

〔江戸砂子〕千住

御仕置場 小づかはらの内也 傍に回向院の別院あり

契りおく花とならびのをかのべにあはれいく世のはるをすぐさん

〔空華日工集〕應安元年二月十六日圓覺不聞和尚相攸於白雲之上建壽塔名曰幽石故取二字於寒山詩白雲抱幽石是日肇基余與照東谷掘其土是蓋遺骸於師友而已矣

〔あしたの雲〕こゝに左京のかみにてあまたの國領したるなにかしの朝臣政弘内おはしけり中

長月四年明座の中の入日の夜つひにむなしくみなし侍りぬ中かざりあればやがてその曉

まばなにかしのてらまで出し侍るに中さてをさめ侍る事は廿二日の明がたなるべしかの寺のうしろの山に此春の比よりつひのすみかをおめおき道などつけておかれるとなりか

かるべしとかねてさとり給へるいたりふかきふしぎ成べし

〔本妙寺記〕清正公如往日善藏ノ地ヲ今ノ所ニトシ荆棘ヲ伐傍示ヲ定メ因テ全身ヲ收藏シ廟

殿ヲ建、面ヲ熊城ニ對ス、層級最頂等ヲ高下ナシ、廟額淨池院三字、朝鮮國松雲禪師書左右ノ塔殉

死、左ハ大木土佐守注名道右ハ金官注名法圓日融○本妙寺、

〔山城現存墓碑誌銘全集〕武家一圓德院殿半湖休庵居士壽塔銘

木下氏工部員外郎豐臣朝臣利房公者豐國大明神秀吉相公在子昂州賜口氏外戚骨肉之親也中

高臺境内別造立一院號圓德祇園之南大佛之北中者黃金完一院者乎早晤百年之後命石匠而

□□利房與藤中共並立壽塔會得本來之面目者乎中在洛東高臺寺中圓德院

〔垂加草二十七〕土津靈神碑

土津者東照大權現之孫源中將正之保科之靈號也靈神諱正之小字幸松台德院秀忠公之子大猷院

家光公之弟中六十一蒙土津靈社之號壬子十二年之夏行于會津卜壽藏於磐梯南麓見禰山鉢

俵歌以賦其事董仁以爲己任生無所息望族則知所息者歟

〔桃源遺事上〕同年三年御審察を中注瑞龍山御先塋の御側に御造り、歷任の御衣冠を御埋み、石

〔書紀集解<sup>七十一</sup>〕按、舊城之制始于此、

〔山陵志〕蓋書藏自此始矣

〔釋日本紀<sup>十三</sup>〕筑後國風土記曰、上妻縣縣南二里有筑紫君磐井之墓墳、○中古老傳云、○中當雄大迹天皇<sup>體</sup>之世、筑紫君磐井豪強暴虐、不優皇風、生平之時、預造此墓、

〔孝德太子傳<sup>下</sup>〕推古天皇廿六年<sup>庚戌</sup>冬十二月、太子命駕科長墓處、暨造墓者、直入墓內、四望、謂左右曰、此處必斷彼處必切、欲令應絕子孫之後、墓工隨命、可絕者絕、可切者切、太子大悅、即夕旋駕、嘆謂妃曰、遙憶過去、因果相校、吾未棄耳、禍及子孫、子孫不續、豈云大咎、孔子遺教、無後嗣者爲不孝矣、吾爲釋迦大聖弟子、豈爲孔子小賢弟子乎、廿七年<sup>己卯</sup>春正月、即召科長墓工、命曰、吾以已年春、必至彼處、宜汝早造、墓工士師連名啓曰、墓已造畢、未開、擬道太子答命曰、勿開、擬道但墓內設二床矣、

〔徒然草<sup>上</sup>〕聖德太子的御墓をかねてつかせ給ひける時も、こゝをきれかしこをたて、子孫あらせじと思ふなりと侍りけるこかや、

〔日本書紀<sup>二十四</sup>〕元年、是歲蘇我大臣蝦蟇立己祖廟於葛城高宮、○中又並發舉國之民并百八十部曲、預造雙墓、今來一曰大陵爲大臣墓、一曰小陵爲入鹿臣<sup>蝦蟇</sup>墓、望死之後、勿使勞人、更悉聚上宮乳部之民、<sup>乳部此美文</sup>役使營兆所、

〔山陵志〕崇峻爲賊臣所虐、即日葬之、是不成葬也、意其陵不應比他、而今檢之、因其以石爲玄室、呼曰

巖屋山、一名赤坂山、頗高壯、蓋非一朝所治、治壽藏當時既成俗、乃若聖德太子磯長墓、蘇我蝦夷父

子新漢大陵小陵是也、

〔三代實錄<sup>十五</sup>〕貞觀十年閏十二月廿八日丁巳、左大臣正二位源朝臣信茂、○中遣命薄葬殯歿之日、

人多不知、平生於北山嶺下造立一屋、中置一床、居棺其上、固閉四壁、令人害不違犯之、

〔兼好法師集〕ならびのをかに無常所まうけて、かたはしにさくらをうゑさすとして、

谷權丞勇敢強力、殺傷甚衆、卒奮激戰死、乃七人爲一塚、澁谷爲一塚、云、蓋今在西者此也歟、

〔雍州府志卷十〕畜生塚 在三條橋西瑞泉寺、豐臣秀次公略於紀州高野山而自裁、置其首於三條

橋下、而使幼息并三十四人侍女等拜之、遂斬之、於茲秀次之首、并幼息遺骸、悉納斯處、高築墳、依秀吉公之命、世稱畜生塚、

〔元延實記〕同廿三日、○明曆三町奉行より與力同心に下知して、燒死する者共之死骸を聚其數を

記す、穢多之棟梁團左衛門に申付、車善七に申付、數百之人夫を出し、所々之死骸を集ル處に、五三日之間に、六萬三千四百三十拾餘人也、則是ヲ船ニ積て、江戸牛島と云處に送り、其地に大成る穴を堀、屍を隠し埋たり、○中

同廿七日には、燒亡之亡靈幽魂弔之爲ニ、増上寺ニ被仰付、死骸ヲ埋みし其地に、一寺を建立して供養すべしと被仰付、故に今日事始有り、同二月七日、牛島之寺院大略出來し、大石塔を建ル、燒死之者共ヲ可弔之旨被仰付、金三百兩被下之、依之増上寺彼地ニ參向シ、百僧ヲ以て讀經有り、貴賤男女參詣して、悲涙ヲ拭、則諸宗山回向院無緣寺と號す、毎月十八日十九日には、僧俗男女貴賤共ニ參詣し、燒亡之親子兄弟、一族縁者之菩提ヲ訴ル、見る人みな袖を浸ス、

生墳

〔類聚名物考四〕毒陵

生日に陵墓を作る事古へ此事なし、今俗に逆修といふ、是はむかし漢の景帝の時、陽陵邑を作れし事有、黃晨曉が古今原始にも是を引て、此後世豫作毒陵之始也といへる、さも有べし、

〔日本書紀十〕六十七年十月甲申、率河内石津原、以定陵地、丁酉、始築陵、是日有鹿忽起野中、走入役民之中而仆死、時異其忽死、以探其瘞、即百舌鳥自耳出之、飛去、因視耳中、悉咋割劍、故號其處曰、百舌鳥耳原者、其是之緣也、

〔日本書紀通證十六〕定陵地、城是跡也



かまえばしおびなどをいれて、ゆみやなくひたちなどいれてぞうづみける今ひごりは、をろかなるおやにやありけん、さもせず有ける、かのつかのなをば、をどめづかざぞいひける、あるたび人、このつかのもとにやざりたりけるに、人のいさかひするおとのまければ、あやしと思てみせけれど、さることもしといひければ、あやしとおもふ、ねぶりたるに、ちにまみれたるをどこまへにきてひざまづきて、我かたきにせめられて、わびにて侍り、御はかしまばしかし給へらん、ねたきもの、むくいし侍らんといふに、おそろしとおもへど、かしてけり、中あしたにみれば、つかのもとにちなどなんがれたりける、たちにもちづきてなん有ける、

〔古事談二〕中院右府禪閣○源定與左馬權頭顯定、源常會合、多年無隔心、禪閣契約云、雖薨後、所願並墓談話無變云々、依之顯定逝去之刻、禪閣墓所我久傍掘埋、顯定云々、仍于今雨夜深更ナドニハ、物語シテ被笑之聲、人多聞之云々、

〔浪合記〕時ハ應永三十一年八月十五日、信濃國大河原ニテ、尹良親王御生害ナリ、宮ノ御腹ナサレシ所トテ、世話ニ宮ノ原ト云ナリ、討死ノ死骸ヲ埋テ一堆塚トス、是ヲ千人塚ト云ナリ、石塔ハ信濃國浪合ノ聖光寺ニ有トナン、

〔碧山日錄〕寛正二年二月晦日辛丑、以事入京、自四條坊橋上見其上流、流屍無數如塊石磊落、塞其腐臭不可當也、東去西來爲之流涕寒心、或曰自正月至是月、城中死者八萬二千人也、余曰以何知此乎、曰城北有一僧以小片木造八萬四千率堵、一々置之於尸骸上、今餘二千云、大概以此記焉也、雖城中所不及見、又郭外原野溝壑之屍、不得置之云、三月三日甲辰、清水寺有淨僧、是日於五條橋下、聚死尸作冢、其數一千二百餘人云、

〔泰山集時〕大平墓

在積善寺、○土永祿丙寅閏月六日大平權頭爲秦氏所攻、到此寺自殺、時年十六矣、殉者八人、就中流

葦屋之宇奈比處女之與柳乎往來跡見者哭耳之所泣、  
墓上之木枝應有如聞陳勞壯士爾之依信家良信母、

〔萬葉集九〕過葦屋處女墓時作歌

古之益荒丁子各競妻問爲祁牟葦屋乃菟名日處女乃奧城矣吾立見者永世乃語爾爲乍後人、  
世武等玉梓乃道邊近霜構作冢矣天雲乃退部乃限此道矣去人每行因射立嘆日惑人者啼爾毛哭  
乍語爾、  
傳繼來處女等賀奧城所吾并見者悲雲古思者、

反歌

古乃小竹田丁子乃妻問石菟會處女乃奧城叙此

〔大和物語〕むかしつの國にすむ女有けり、それをよばふ男二人なん有ける、ひざりはそのくに  
にすむ男、姓はむばらになんありける、いまひざりは和泉國の人になん有ける、姓はちぬとなん  
いひける、  
中 女おもひわづらひて、

住わびぬわがみなげてんつの國のいくたの川はなのみなりけり、どよみて、此ひらばりは、か  
はにのぞきてしたりければ、つぶりとおちいりぬ、おやあわてさわざの、しるほどに、このよば  
ふ男ふたりやがておなじ所におちいりぬ、ひざりはあしをさらへ、いまひざりは手をさらへて  
まにむり、そのかみおやいみじくさわざで、どりあげてなきの、しりてはよりす男どものおや  
もきにけり、この女の塚のかたはらに、又つかども作りてほりうづむどきにつのくにのをどこ  
のおやのいふやう、おなじくにのをどこそ、おなじどころにはせめ、こどくにの人の、いかに  
この國のつちをば、をかすべきといひてさまたぐるどきに、いづみのかたのおや、和泉國のつち  
をふねにはこびて、こにもてきてなん終にうづみてける、されば女のはかをば中にて左右に  
なんをどこのつかどもいままあなる、  
中 きて此男はくれ竹のよふかきをきりて、かりぎぬは

迎升纂大業廣求御骨莫能知者詔舉與皇太子億計○仁泣哭憤惋不能自勝是月召聚舊賓天皇親歷問有一老嫗進曰臣目知御骨埋處請以奉示○億目老嫗名也近江國狹狹城山君於是天皇與皇太子億計將老嫗婦幸近江國來田綿蚊屋野中掘出而見果如婦語臨穴哀號言深更慟自古以來莫如斯酷仲子之尸交橫御骨○顯宗仁賢皇考莫能別者爰有磐坂皇子之乳母奏曰仲子者上齒墮落以斯可別於是雖由乳母相別獨體而竟難別四支諸骨由是仍於蚊屋野中造起雙陵相似如一非儀無異

〔日本書紀二十〕物部守屋大連賁人捕鳥都萬○中以刀子刺頸死焉河內國司以萬死狀牒上朝廷朝廷下符僞斬之八段散鳥八國○中爰有萬養白犬俯仰嗥吠於其屍側遂嘯舉頭收置古冢橫臥枕側飢死於前○中朝廷哀不殯聽下符稱曰此犬世所希聞可觀於後須使萬族作墓而葬由是萬族雙起墓於有真香邑葬萬與犬焉

〔萬葉集九〕見苑原處女墓歌

葦屋之苑名負處女之八年兒之片生乃時從小放爾髮多久麻庭爾並居家爾毛不見盧木綿乃牽而牽在者見而爾香踏恒憤時之垣處成人之誦時智奴壯士宇奈比壯士乃廬八燈須須師就相結婚爲家類時者燒大刀乃手預押福利白檀弓初取負而入水火爾毛將入跡立向就時爾吾妹之母爾語久倭文手纏腰吾之故丈夫之荒爭見者雖生應合有哉共申呂黃泉爾將待跡隱沼乃下延置而打款妹之去者血沼壯士其夜夢見取次寸進去邪禮婆後有苑原壯士仰天叫於良姬跪他牙喚建怒而如己男爾負而者不有跡懸佩之小劍取佩多菰指都良尋去邪禮婆親族共射歸集永代爾標將爲跡退代爾語將繼常處女墓中爾造置壯士墓此方彼方二造置有故緣聞而雖不知新喪之如毛哭泣

待遠ナルラン、疾々トテ、三人ノ死體ノ中ヘ分入テ西ニ向念佛三十遍許申サレケレバ、首ハ前ヘ  
ヅ落ニケル、○中此首ドモ渡スニ及バズ、アマリニ父ヲ戀シガリケレバトテ、圓覺寺ヘ送テ、入道  
義○爲ノ墓ノソバニヅ埋ケル、

〔日光山志〕空印○酒井墓碑 二王御門内○總川御手洗屋の側にあり、碑石高さ僅に二尺許、外  
に文字も見えず、正面に空印の二字のみ、近年此塔に石もて覆ひを造り、高三尺餘、四面二尺程宛  
にして、石塔の入べき程に内を鑿て、正面の二字の見ゆるように窓の如く彫あけ、右石塔の覆と  
なせり、○中或説に、空印常に嫡子并近臣のものに申けるは、我歿せしならば、軀を日光山の御靈  
屋御溝ヘの内ヘ捨よといひしと云々、斯る名譽の人ゆヘに、上にも御許有て、御構ヘ内ヘ埋葬せ  
し事、其家の規模とや云はん、

〔日光山志〕五妙道院 原町にあり、○中殉死墓碑銘

玄性院心隱宗ト大居士 堀田加賀守紀朝臣正盛

芳松院全巖淨心大居士 阿部對馬守藤原重次

理明院光德徹宗大居士 内田信濃守藤原正信

靜心院一無了性大居士 三枝土佐守源守口

眞證院理哲玄勇居士 奥山茂左衛門藤原安重

右碑石皆同慶安四辛卯年四月廿日ト刻セリ

# 墓家

〔播磨風土記〕飾磨郡貽和里船丘北邊、有馬墓池、昔大長谷天皇○雄御世、尾治連等上祖長日子、有善

婢與馬並合之意、於是長日子將死之時、謂其子曰、吾死以後、皆葬准吾、即爲之作墓、第一爲長日子墓、

第二爲婢墓、第三爲馬墓、併有三、後上生石大夫爲國司有之時、筑墓邊池、故因名爲馬墓池、

〔日本書紀〕十五元年二月壬寅、詔曰、先王○顯宗父市遭押錦皇子、遭離多難、殞命荒郊、朕在幼年、亡逃自匿、狼遇求



〔江戸名所圖會〕萬松山泉岳寺 海道の右にあり。○中當寺は淺野家の香花院にして、其家累代の兆域あり、又淺野内匠頭長矩、及び義士四十七人の石塔あり、方丈より南の丘の半腹にあり、傍に當寺住僧建る所の石碑あり、其旨趣を注す、二月三日の四日、及び正月七月の十六日等には、英名を追慕してこゝに集ふ人少からず、

## 招魂墓

〔拙堂文集五〕高山彦九郎招魂墓銘

嗚呼此高山彦九郎之墓也。○中

仲繩死於西海、人不知其安魄處、有志之士、以爲憾焉、下總間中禰卿

亦慷慨之士也、平生有慕於仲繩、軫其魂魄、無所依倚、謀建墓碣、且欲使都人士有所瞻仰焉、以其與君

平○滿生

爲一雙士、

下地於臨江寺。○東京

招魂以葬、與君平墓相並、以擬睢陽雙廟、來乞文於余、余亦

平生奇仲繩之爲人、且臨江寺爲吾祖先墳塋所在、既幸葬君平於其域、今又得仲繩焉、夫一要離之墓、

志士猶願葬於其側、况得雙烈士與之隣近、吾祖先之喜何如哉、而余之喜亦可知也、故不敢拒、願卿之

請焉、

## 陪塚

〔日本書紀十五〕元年十月辛丑、葬大泊瀬天皇。○中

于丹比高鷲原陵、于時、隼人晝夜哀號、陵側與食不

喫、七日而死、有司造墓、陵北以禮葬之、

〔日本後紀二十四〕弘仁六年六月丙寅、播磨守贈正四位下賀陽朝臣豐年卒。○中

今上惜其宏材、任播

磨守、令得終身、在任三年、移病入京、臥于宇治之別業、昔仁德天皇與宇治稚郎相讓之事、具著國典、故

老亦語風俗、病裡聞之、追感不已、託左大臣○藤原

墓爲地下之臣、卒日有勅許葬陵下、

〔保元物語三〕義朝幼少ノ弟悉ウシナハルハ事

乙若○源爲子

延景ニ向テ、我ラコソ先ニト思ヘドモ、アレラガオサナキ心ニ、ヲテ恐レンモ無慚也、

又云ベキ事モ侍レバ、彼等ヲ先ニ立パヤト宣ケレバ、

秦野次郎大刀ヲ拔テ、後ヘ廻リケレバ、乳母

ドモ、御目ヲ塞ガセ給ヘト申テ、皆ノキニケリ、即三人○乙

若第ノ首前ニゾ落ニケル、○中今ハ此等ガ

代々之塔多在新廣。

〔空華日工集〕應安元年八月五日、赴愛甲三州春之夫人之葬事、於郡之寶積寺、寺乃愛甲世廟也。

〔薩戒記〕應永卅二年七月十二日己酉、今日相伴伯二位實忠、中御門宰相宗繼等詣東山泉涌寺、彼寺

者、律宗也、開山俊祐法師、興建仁寺、開山之僧正同時渡唐時、歸朝立禪律二宗、共以子、今不衰、泉涌寺

者、爲公家御寺、後光嚴後圓融兩代御陵在此寺中、又有御影略中、次參雲龍院奉拜兩代之御影名、

着御小直衣御雲龍院者、爲公家御塔中、而燒失年久、此兩三年院主全安上人奉院仰修造尤美麗也。

○按ズルニ、四條天皇以後泉涌寺ニ奉葬ノコトハ帝王部山陵篇ニ在リ。

〔康富記〕享德三年七月十四日甲子、予代々墳墓在五條坊門猪熊圖福寺、

〔臥雲日伴錄〕長祿二年閏正月廿五日、前日竺華話次曰略中、木島去密藏院可一町、此院源三位略政

墳院也云々。

〔應仁記〕武衛家騒動之事附畠山之事

然開上意惡ノ由以ノ外也ケレバ、義就若氣故ニ京都ニタマリカテ伊賀國ヘ下向ス、父左衛門

督入道德本近年病氣ニテ建仁寺ノ西來院ハ、德本ノ塔頭ナレバ、此寺ニ陰居セラレケルヲ、尾張

守ハ爲上意伯父德本ヲ請テ、家督相續ノ儀可申定ノタメニ、畠山阿波守入道ヲ迎ニ被進ケリ、

〔三河國二葉松古境〕鳴田村田郡

大樹寺御先祖御廟、親忠公及廣忠公迄、五世之御墳、及八代御石塔、當寺ハ文明七年二月廿三日、

親忠公ノ御建立也、御廟ハ在同所野、墳、驗有松、

〔普應大滿國師徹田和尚行狀〕師諱宗九字徹田、江州志賀郡人、大江氏略中、天文五祀丙申十月十八

日、行年五十七、而奉詔出世於大德、後營作一墓於本寺大德寺、西南、扁院曰瑞峯、大友氏宗麟寄一庄

而爲累代之墳寺。

設墓於寺邊

君諱夢書、字原甫、源姓青木氏、號昆陽、元祿十一年戊寅五月十二日生、明和六年己丑十月十二日終、壽七十二、葬于下目黒村別墅南。

〔西大寺文書〕神護景雲三年九月四日、崩于西宮寢殿。○稱春秋五十三、即築山陵於西大寺之東北。

○按ズルニ三年九月ハ、四年八月ノ誤ナリ、西大寺ハ稱徳天皇ノ創建ニ係ルヲ以テ、同寺ノ地

内ニ葬リ奉レルモノナラン、

〔日本紀略淳和〕天長三年五月丙子、葬恒世親王於山城國愛宕郡鳥部寺以南。

〔日本紀略淳和〕天長三年六月甲辰、俊子内親王薨、丙午、葬山城國愛宕郡愛宕寺以南山。

〔帝王編年記字多〕承平元年七月十九日崩。○字多御年六十五、同八月五日庚申、火葬葛野郡大内山陵。

仁和寺奥  
池尾山

〔日本紀略醍醐〕延長八年十月十日庚子、葬大行皇帝。○醍醐於山城國宇治郡山科陵、醍醐寺北、笠取

山西小野寺下、

〔日本紀略村三〕天曆三年八月十四日乙酉戌時、太政大臣藤原朝臣忠平、薨、小一條第、十五日丙戌、

今夕奉、移太政大臣於法性寺、十八日己丑戌時、葬太政大臣於法性寺外良地。

〔後拾遺往生傳上〕堀川天皇中宮篤子者、後三條院之四女也。○中兼占雲林院之洞、令作柏城之墳、同

二年永久十月一日、待其造畢、忽爾崩御。○御五即日戌時、葬遷雲林院、其翌日、戌時奉、安置御墓。

〔保元物語二〕爲義最後ノ事

去程ニ爲義法師ガ首ヲ刎ベキ由、左馬頭義朝源ニ宣下セラレケレバ、○中終ニ斬ラレ給ヒケリ、首

實檢ノ後、義朝ニ賜ハリテ、孝養スベキ由、仰下サレケレバ、正清次郎源田是ヲ請取テ、面覺寺ニ納メ、

墓ヲ建テ、垣ヲ築キ、率郡婆ナドヲ造立セラレテ、様々ノ孝養ヲゾ致サレケル、

〔雍州府志十〕舟橋清家塔、下嵯峨天龍寺末寺寶珠庵中、有清原真人賴業社、今稱櫻宮、自註清家

とせり、以下岡田氏尾藤氏の墓所も此所にあり、抱地とせるも寛政八年なるべし、古賀氏の墓地もこゝにあり、

〔源平盛衰記<sup>十九</sup>〕文覺發心附東歸節女之事

遠藤武者モ入道シテ、在俗ノ時ノ盛遠ノ盛ヲトリ、盛阿彌陀佛ト云ケリ、失ニシ女<sup>妻</sup>、<sup>盛遠ノ</sup>骨ヲ拾後國ニ墓ヲ築、第三年ノ間ハ、行道念佛シテ斜ナラズ、弔ケルトゾ承ル、去バニヤ、夢ニ墓所ノ上ニ蓮花開テ、袈裟聖靈、其上ニ坐セリト見テ、サメテ後歎喜ノ涙ヲ流シケリ、

〔泰山集<sup>甲乙錄</sup>四〕葬法、皇都儒葬多矣、江戸決不許也、林大學頭下屋敷有葬所、吉川惟足宅地有葬所、此等各少伸其志耳、蓋有采地人可也、其他不得不從時俗也、

〔寛峯文集<sup>八</sup>〕致仕國老故大中大夫羽林次將前若狹國主酒井叟諱并序

大夫姓源氏諱忠勝、其先參州酒井郷人也、<sup>略</sup>中寛文二年壬寅之夏、更罹疾病、端座不臥、不求醫藥、然

依鈞命以治療之、官使屢至、元老執政日訪之、來問者輿馬絡繹、皆有威容、逮秋彌留、辱賜親筆御書、憐其舊勳、勸其頤養、七月十二之夜、遂捐館舍、春秋七十六、遺言葬於別業之內某處、

〔大猷院殿御實紀附錄<sup>三</sup>〕酒井讃岐守忠勝が牛籠の山庄にはじめて成せられしは、寛永十二年八月の事にて、その後もまば／＼渡御あり、その度ごとにさま／＼の御遊ごもあり、恩資もまたかす／＼なり、十五年二月成せられし時、忠勝こひ奉りて、一字の梵刹をその園中にまうぐ、あるとき庭前の花あまねく見そなはし玉ひ、御氣色のあまり、けふは一日看盡長安花といへる古人の句に似たり、かの道場は長安寺と號すべしと仰られ、僧澤庵も扈從してければ、山號を付べしとの命にて延命山と號す、此寺台命により創建ありしかば、無本寺にて、他よりあづかる事を得ざるよしにぞ、

〔瀬田問答〕青木敦書壽藏銘<sup>〇中</sup>



右の御はか、山下地とも、此ぶんにて候べし、後のため注して參らせ候、

かうあん二年八月五日

淨如判

古文書云、俊成卿墳墓事、自月見殿可相計之由承候之際、申付當院候、殊濕掃墓、守護竹木、可被訪、彼亡魂、菩提給候也、恐々謹言、

八月廿七日

祖禪判

永明院衆僧御中

〔太平記〕鎌倉兵火事附長崎父子武勇事

ナル程ニ、餘烟四方ヨリ吹懸テ、相模入道殿○北時ノ屋形近ク火懸リケレバ、相模入道殿、千餘騎

ニテ、葛西ガ谷ニ引籠リ給ケレバ、諸大將ノ兵共ハ、東勝寺ニ充滿タリ、是ハ父祖代々ノ墳墓ノ地ナレバ、爰ニテ兵共ニ防矢射サセテ、心閑ニ自害セン爲ナリ、

〔尾張名所圖會後篇四〕

國祖君御廟

○春日井郡香嶺定光寺山、中略

二品前亞相尾陽侯源教公

○鎌川義直

墓ごあり、

石面命を奉じて陳元資書す、四方欄結まはし、西南のかたに檜皮御門あり、獅子御門といふ、此道

左の方に龍吟水あり、此御門を入て、や、登り行ば、御唐門に至る、是より内の結構はいとく、か

しければこゝにもらせり、

〔垂加流神道葬祭禮式〕垂加翁墓所ハ、黒谷塔ノ西、廿間計ニアリ、宿坊ヲ上雲院ト云、墳地二間ニ三

間計廻リニ石ノ玉垣アリ、其内ニ父母兄弟ノ塚九アリ、○有

〔小石川志料五〕

室氏墳墓地

護國寺の裏手、大塚にあり、墓地となりし年歴知らず、四方口間許、

室鳩巢男勿軒、及配等の碑、合せて四基、○中

鳩巢室先生之墓、室新助の墓也、碑面此一行を刻し、卒年を彫らず、銘文なし、

柴野氏墳墓地、柴野久四郎家の墳墓地、是も護國寺の後手、室氏墓地の側にあり、寛政八年抱地

臣奉懸誓奉置故重任堂是依被遊大將軍方忌明年許安置件堂者

京極殿從誕生昔被養故山井大納言信家卿雖被用藤氏猶付本生可被置彼源氏人々骨墓所邊者仍不被奉渡木幡也

〔中右記〕元永三年元保九月廿七日早旦奉送木幡墓所定助得業奉懸骨也是依爲親人也年來依有養母命所沙汰也又無可見讓人且令申聞件旨了故也

〔源平盛衰記七〕笠島道祖神事

實方馬ニ乗ナガラ彼道祖神ノ前ヲ通ラントシケルニ人諫テ云ケルハ此神ハ効驗無雙ノ靈神賞罰分明也下馬シテ再拜シテ過給ヘト云略○實方サテハ此神下品ノ女神ニヤ我下馬ニ及バズトテ馬ヲ打テ通ケルニ神明怒ヲ成テ馬ヲモ主ヲモ罰シ殺シ給ケリ其墓彼社ノ傍ニ今ニ是有トイヘリ

〔東野州聞書〕一或人の話し俊成卿の墓南禪寺の永明院のおくの山にありと申せし也此永明院の地の主にておはします間毎月廿九日今も弔ひ奉るごかや

〔山城名勝志十六〕俊成卿墓今在東福南明院永明院一代分建南明院故此事入

法性寺俊成の卿御墓山林の事

合

一ひがしは上のいなりのかへりざかびさもん堂谷へゆき道のごほり南へのたにをかざりてなり

一南は西東へのたにこいけの上下南の山ぎはをかざりてなり

一西は山だのにしきた南へのぼりをかざりてなり

一北はいなりのかへりざかの道をかざりてなり

長大如衣紐、則驚之叫啼、時大神有耻、忽化人形、謂其妻曰、汝不忍令養吾、吾還令養汝、仍歸大虛、登于御諸山、爰倭迹迹姬命仰見而悔之、急居急居此云、則著撞臨而薨、乃葬於大市、故時人號其墓謂著墓也、是墓者、日也、人作夜也、神作故、運大板山石而造、則自山至于墓、人民相踵、以手遞傳而運焉、時人歌之曰、飲朋佐介、理苑藝、適煩例、屢伊辭、務運墳、多觀辭、珥固佐、廢固辭、介底務、介茂。

〔日本書紀十〕四年三月、紀小弓宿禰等即入新羅。中大將軍紀小弓宿禰值病而薨。中於是采女大海、從小弓宿禰喪到來日本、遂憂諸於大伴室屋大連曰、妾不知葬所、願占良地、大連即爲奏之、天皇勅大連曰、大將軍紀小弓宿禰龍驤虎視、旁眺八維、掩討逆節、折衝四海、然則身勞萬里、命墜三韓、宜致哀於宛視喪者、又汝大伴卿與紀卿等同國近隣之人、由來尙矣、於是大連奉勅使士師連小島作家墓於田身輪邑而葬之也。

〔三代實錄五〕仁和三年五月十六日己丑、是日勅以山城國愛宕郡島部鄉榛原村地五町賜施藥院、其四至東限德仙寺、西限谷井公田、南限內藏寮支子園、并谷北限山陵井公田施藥院、使等喪院所領之山元在被村、即是藤原氏之葬地也、依元慶八年十二月十六日詔、被占入中尾山陵之內、由是氏人送葬之事、既失其便、請賜此地、依舊行事、許之。

〔小右記〕寬仁二年六月十六日丁未、大納言道書云、一日源大納言良書云、故宮子孫不御坐、仁和寺親王御骨爲紛失了、其被可爲善、不可必奉移木幡者、此事如何者、答對云、仁和寺例、非一門事、先祖占木幡山爲藤氏墓所、仍奉置一門骨於彼山、專不惡也、藤氏繁昌、帝王國母、于今不絕、抑有御道命有何事乎、無指事不可被背前跡哉、抑可在高慮歟。

〔榮花物語十五〕木幡さいふころは、太政大臣基經のおとゝのちの御諱昭宜公なり、そのおとゝのてんじおかせ給へりしところなり、藤氏の御はかとおぼしおきてたりける。

〔中右記〕永久二年四月廿二日丁卯、今夕京極殿實藤原子有御葬送事。中御骨中宮大進重仲衣朝

濱墓所 同郡濱村源光寺ノ東ニアリ、行基菩薩開基ノ墓所、自ラ地藏尊ノ石像ヲ彫刻シテ所築之舊墓也、

梅田墓所 同郡浦江村ノ東ニアリ、此墓始ハ會根崎村ノ田圃ニアリ、大坂市店ニ近ク、火葬ノ餘

煙其穢ヲ忌デ、貞享年中地ヲ此處ニ引カシム、開キテ基菩薩、○中

竹屋墓所 川邊郡尼崎ニアリ、○中

千僧墓所 同郡昆陽寺ノ邊千僧村并ニ矢田郡郡兵庫和田崎兩所ニアリ、○中

一野邊墓所 同郡南野村ニアリ、行基菩薩昆陽寺建立ノ時始テ此墓所ヲ造ラシメテ、自ラ供養

スル所也、土俗墓所第一トスルヲ以テ、三昧一野邊ト稱ス、此外村々郷々墓所多シト云トモ死ヲ葬スル耳、因テ略之、

〔桃源遺事〕<sup>上</sup>同○寛六年丙午四月、諸士ノ墓所を常州水戸常盤と坂戸の兩所に被仰付、且文公家

禮により、喪祭儀略といふ書を御えらび、諸士に下され候、

〔藝備國郡志〕<sup>山川</sup>己斐山 在今府治<sup>山</sup>之西佐西郡

己斐葬地 古葬人厚棺槨猶恐速朽、故以石灰炭末埋棺傍、以避水濕、中古以來佛敎盛行乎世、愚民信之、或火葬、或水葬、其不仁之甚、莫大於斯、今從流俗、令國民火葬于此也、

〔日本書紀〕<sup>三</sup>神武戊午年五月癸酉、軍至茅渚山城、水門<sup>亦名山井水門</sup>、時五瀬命、矢瘡痛甚、乃撫劒而雄

語之曰<sup>雄語、此云部能</sup>慨哉、大丈夫<sup>慨哉、此云子</sup>被傷於虜手、將不報而死耶、時人因號其處曰雄

水門、進到于紀伊國龍山、而五瀬命薨于軍、因葬龍山、

〔日本書紀〕<sup>五</sup>神武十年九月壬子、倭迹迹日百襲姬命、爲大物主神之妻、然其神常晝不見而夜來矣、倭迹迹姬命語夫曰、君常晝不見者、分明不得視其尊顏、願暫留之、明旦仰欲覩美麗之威儀、大神對曰、言理灼然、吾明旦入汝櫛笥而居、願無驚吾形、爰倭迹迹姬命、心裏密異之、待明以見櫛笥、遂有美麗小蛇、其



〔京都御役所向大概覺書〕洛外五箇所無縁墓地之事

一七條高瀬川之側ニ壹箇所字白蓮寺、

一清水境内成就院支配所壹箇所字南無地藏、

一真如堂山壹箇所字中山、

一西之藪土居外、三條ア上ル所、山之内村西院村兩村之無縁墓地壹箇所、

一同西之京領下立賣通紙屋川之側壹箇所字宿寺、

右之墓地古來より除地に而<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之、

外ニ

三條通土居之内座拾場ニ壹箇所有<sub>レ</sub>之、是ハ向後相止支配致來候おん坊作場に申付、

右之通元祿十二卯四月申付ル於洛中洛外無縁之者非人等行倒候得者高野川原賀茂川筋埋

置、不埒ニ付向後無縁之倒もの等、右五箇所之墓所<sub>江</sub>取片付候様ニ悲田院年寄共ニ申付、墓所

支配支配<sub>江</sub>も申付置候、

〔攝陽群談<sub>九</sub>墓所〕蔦田墓所 東生郡今ノ蔦田ノ地ニアリ、四天王寺并ニ近里ノ諸人死ヲ葬ルノ所

也、

高卒都婆墓所 同郡同所東ニアリ、有縁無縁一切衆生供養ノ卒都婆ニ因テ題之ト云リ、

内院墓所 同所ニアリ、都率内院ノ表シテ造ルヲ以テ號之ト云リ、

小橋墓所 同郡小橋村ノ地ニアリ、世俗此處ヲ指テ墓谷ト稱ス、

道頓堀墓所 西成郡道頓堀ニアリ、大坂ノ市中ヨリ死ヲ葬ルノ處也、毎年七月朔日ヨリ晦日マ

デ、無縁堂ニ於テ念佛ヲ執ス、

吉原墓所 同郡天滿池田町ノ北ニアリ

〔鹽尻九〕俗間に、さひの川原とて冥途の事を云、石塔を積み水そ、ぎなどして靈魂に薦るは、經説にありやと問人侍りし、答曰、山城國紀伊郡に佐比の里あり、津島河原三代實錄貞觀十三年閏八月、創して百姓葬送の地を定め給ひし事、有中に下佐比の里上佐比の里あり、勅して曰、件の河原は百姓葬送の地と、又佐比寺延喜式所謂七ヶ寺之一也九原葬送之輩、更留柩於橋頭、なんど可<sub>レ</sub>見、昔人亡人を送る所なる故、さいの河原地藏尊と呼しより、末々は幽冥の事とし侍るやらん、

〔源氏物語桐一〕「<sub>一</sub>」かざりあれば、れいのさほうにをさめたてまつるを、<sub>〇</sub>桐一は、北のかた、おなじけふりにものぼり、なんとなきこがれ給て、御おくりの女房のくるまにしたひのり給ひて、おたぎといふ所に、いとかめしう、そのさほうしたるに、おはしつきたるこ、ちいかばかりかはありけん、

〔河海抄桐一〕

「おたぎといふところにいかめしう、そのさほうえたるに」

愛宕基

桓武天皇、平安城に遷都の時、此地を諸人の葬所に定らる、見延喜式、彼に珍皇寺とい

ふ寺あり、

〔源氏物語湖月抄桐一〕

「おたぎといふ所、細今の六道これ也、昔の葬所なり、

〔雍州府志寺四〕

珍皇寺、在建仁寺之南、弘法大師之開基而元爲葬場、小堂安地藏并小野篁像、庭

多石地藏、此處世稱六道傳言是處有通冥途之路、故小野篁自此處親行六道而歸也、依之每年七

月孟蘭盆會前九日、男女參詣、撞鐘而買棋枝、歸家置靈前、俗傳聖靈乘槩而來也、是依草附木之

謂乎、是謂迎聖靈、略中三代實錄第十卷、天安二年四月庚子、是夜寶皇寺火、金堂禮堂盡爲灰燼、註

云寶皇寺俗名烏戶寺、依之寶皇寺、後改珍皇寺者乎、此寺今屬東山、建仁寺大昌院、

〔雍州府志山凡〕

飯岡山、倭俗山之中所稱臺、此所亦謂飯岡臺、行基所置葬場在此麓、今有寺號西方

寺、

墓地

奉、刎首コト、流石カハユクヤ思ケン、不知シテ奉失トテ、深キ磯ノ底ニ、箆ヲ植テ、突落シテ、ゾ殺シケル、只一度ニ、刎首タラバ、尋常ノ習ニテ有ベキニ、心ウクモ計ヒタリケリト、無情コソ云ケレ、其ヨリ取舉テ、備前備中ノ境ナル有木ノ別所ト云所ニ、送捨、形ノ如穴ヲ掘、石ヲ疊テ、奉納、

〔類聚名物考 凶事 四〕葬所 總墓

古ヘ京都にては、今の如くに寺々のうちに葬る事はなくて、葬所といふ有て、そこにすべて葬せし也、そこを鳥部山鳥ベ野などとはいへり、今は田舎にてはかゝる所あれども、すべて江戸も都會の所には、この風やみたるぞよからの事にはあるぞかし、愛宕郡に有し故に、すなはちその事源氏物語にも見えたり、

〔類聚三代格 十六〕太政官符

定葬送并放牧地事

山城國葛野郡一處、在五條院木西里、六條久受原里、

四至、東限西京橋大路、西南限大河、北限上件兩里北畔、

紀伊郡一處、在十條下石原西外里十一條、下佐比里十二條上佐比里、

四至、東限路井古河流末、西限地限大河、北限京南大路西末、并悲田院南沼、

右被右大臣宣稱、奉勅件等河原、是百姓葬送之地、放牧之處也、而今有聞愚暗之輩、不顧其由、說好古營、專失人便、仍遣勅使、隨地檢察所定、如件者、事須國司屢加巡檢、一切勿令耕營、若寄事王臣家、強作者、禁身言上、百姓者、國司任理勘決、但葛野郡島田河原、今日以往、加功耕作、爲熱地、及紀伊郡上佐比里、百姓本自居住宅地、人別二段已下者、不在制限、其四至之外、若有葬歛者、尋所山札、責勸檢按、不得疎略、

〔日本紀略經〕弘仁四年十二月癸巳、勅在大和國添上郡隅山村贈太政大臣正一位藤原朝臣墓地、東西八町、南北二町、勿令百姓侵伐、

〔三代實錄清和〕貞觀五年二月七日庚子、下知大和國、禁藤原氏先祖贈太政大臣足、多武峯墓四履之內、部內百姓伐樹放牧、

〔延喜式十一〕太政官凡親王及大臣薨、卽任裝束司及山○作司○、或任主行所及山○作所○、經

〔吉事略儀〕山作所行事、壞實所荒垣、鳥居等、分御近邊無緣寺之採鋤、覆土其後築墓、立石率都築、立廻釘貫植松、四面堀溝、

〔日本書紀二十〕三、以三十六年三月天皇古、崩、九月葬禮畢之嗣位未定○、中、適是時、蘇我氏諸族等、

悉集爲島大臣造墓、而次于墓所、

〔古今著聞集十三〕法興院入道殿○藤原家○かくれさせ給て御葬送の夜、山○作所○にて萬人騒動の事ありけり、

〔平行親卿記〕長曆元年八月九日、今夜主殿內方葬送船岡西方○王方○於山○作所○側行片禮、

〔定家朝臣記〕天喜元年六月十一日、應司殿令薨給、廿二日有御葬送○、中、其路自東洞院北行、至土御門西折、自一條大路西行、經西京御山○作所、

〔中右記〕永久二年四月廿二日、丁卯、今夕京極殿○藤原實妻○有御葬送事○、中、山○作所○行事、長門守能遠朝臣、

〔長秋記〕元永二年十二月五日酉刻、今日御葬送○、轉○仁、乘燭人々參會、美濃權守忠宗爲山○作所○行事、

歸來申省關具之由、件所觀音寺北邊云々、

〔源平盛衰記八〕大納言入道薨去事

大納言入道○藤原○成親○ヲバ、急ギ可失ト、六波羅ヨリ、難波ガ許へ被下知タリケレバ、直ニ足手ヲキリ、



略 其寄語有要帳占无要者事覺之日必處重科

大同元年閏六月八日

〔類聚三代格<sup>十六</sup>〕太政官符

合四箇條事

一氏氏祖墓及百姓栽樹爲林等事

右件案太政官今年閏六月八日下五畿內七道諸國符<sup>備</sup>氏氏祖墓及百姓宅邊栽樹爲林等所許步數具存明文者去慶雲三年三月十四日詔旨<sup>備</sup><sup>略</sup>○中又去延曆十七年十二月八日格<sup>備</sup>元來相傳加功成林非民要地者量主貴賤五町已下作差許之墓地牧地不在制限但牧无馬者亦從收還若以島爲牧者除草之外勿妨民業又入公并聽許等地數具錄申官者斯則官符所謂明文更无有

疑○中

以前得七道觀察使解<sup>備</sup><sup>略</sup>○中謹請處分者右大臣宣依請

大同元年八月廿五日

〔日本後紀<sup>八</sup>〕延曆十八年二月乙未贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂<sup>○中</sup>

呂<sup>○中</sup>清麻呂之先出自垂仁天皇皇子鐸石別命三世孫弟彥王從神功皇后征新羅凱旋明年忍

熊別皇子有逆謀皇后遣弟彥王於針間吉備界山誅之以從軍功封藤原縣因家焉今分爲美作備前

兩國也高祖父佐波良曾祖父波伎豆祖宿奈父乎麻呂墳墓在本鄉者拱樹成林清麻呂投竄之日爲

人所伐除歸來上疏陳狀詔以佐波良等四人并清麻呂爲美作備前兩國國造

〔日本後紀<sup>八</sup>〕延曆十八年三月丁巳正四位下行左大辨兼右衛土督皇太子學士伊勢守菅野朝臣

真道等言已等先祖爲井船津三氏墓地<sup>在河內國丹比郡野中寺以南名曰寺山</sup>子孫相守累世不侵而今樵夫成市採伐冢樹先祖幽魂永失所歸伏請依舊令禁許之

阿陀墓（外祖父、在大和國宇智郡、光城東四十五町、南北十五町、平

多武岑墓（大和國太政大臣正一位淡海公藤原朝臣不比等、在

後阿陀墓（大和國太政大臣正一位藤原朝臣武智麻呂、在大

後宇治墓（大和國太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣、文德天皇外祖

○按ズルニ、上古墓城ノ廣大ナリシコトハ、此諸陵式ヲ始メ、其他ノ諸書ニテ明ナリ、今諸陵式

ニ就キ、特ニ廣大ナルモノ三四ヲ抄ス、

〔今昔物語 三十一〕元明天皇陵點定惠和尚語第三十五

吉野ノ郡藏橋山ノ峯多武ノ峯岸重レルガ後ニ峯有リ、○中然テ峯ニハ大纈冠淡海公モ御墓ヲ

シタル也、其ノ御骨ヲバ春節テ薨テケリ、然レバ馬牛ニ不踏セジトテ、廻ニハ逆ヲ遠クシテ敢テ

人不寄ズ、

〔續日本紀 三〕慶雲三年三月丁巳、詔曰、○中氏氏祖墓及百姓宅邊、栽樹爲林、并周二三十許步、不在

禁限、

〔類聚三代格 十六〕太政官符

應盡收入公勅旨并寺王臣百姓等所占山川海島濱野林原等事

右件檢案內、從乙亥年暨于延曆廿年、一百廿七歲之間、或頒詔旨、或下格符、數禁占兼、頻斷獨利、加以

氏々祖墓及百姓宅邊、栽樹爲林等、所許步數、具在明文、又五位以上六位以下、及僧尼神主等、違犯之

類、復立科法、今山陽道觀察使正四位下守皇太子傳兼行宮內卿勳五等藤原朝臣團人解倫、山海之

利、公私可共、而勢家專點、絕百姓活、愚吏阿容、不敢諫止、頑民之亡、莫過此甚、伏請依慶雲三年詔旨、一

切停止、謹請處分者、右大臣宜奉勅、今如所申、則知、徒設憲章、曾無遵行、率由所司、阿縱而令百姓有妨、

宜一切收入公私共之、若有犯者、依延曆十七年十二月八日格行之、一無所宥、自今以後、立爲恒例、○中

禮式部三十

家墓上

五一五

壞者令守戸修理專當官人巡加檢校

〔日本書紀<sup>十</sup>三<sup>九</sup>〕五年七月己丑地震先是命葛城襲津彥之孫玉田宿禰主璫曲別天皇<sup>正</sup>之殯則當

地震夕遣尾張連吾襲察殯宮之消息時諸人悉聚無闕唯玉田宿禰無之也吾襲奏言殯宮大夫玉田

宿禰非見殯所則亦遣吾襲於葛城令視玉田宿禰是日玉田宿禰方集男女而酒宴焉吾襲舉狀具告

玉田宿禰宿禰則畏有事以馬一匹授吾襲爲禮幣乃密遮吾襲而殺于道路因以逃隱武內宿禰之墓

域

〔日本後紀<sup>五</sup>〕延曆十六年二月丁巳朔巡幸京中賜山城國相樂郡田二町六段爲贈右大臣從二位

藤原朝臣百川墓地

〔日本後紀<sup>二十一</sup>〕弘仁二年十月戊寅賜山城國宇治郡地三町爲故大納言贈從二位坂上大宿禰田

村麻呂之墓地

〔續日本後紀<sup>十</sup>〕承和八年二月己酉以山城國相樂郡山四町爲贈太政大臣正一位橘朝臣清友墓

地

〔三代實錄<sup>七</sup>〕貞觀五年三月十五日丁丑帝外祖母源氏<sup>全</sup>墓在山城國愛宕郡詔以兆域地四町

爲四履之限

〔三代實錄<sup>十六</sup>〕元慶八年十二月廿五日辛亥勅以山城國愛宕郡烏戶鄉地四町爲贈正一位藤原

朝臣總繼墓地以同郡八坂鄉地十町爲贈正一位藤原朝臣數子墓地

〔延喜式<sup>二十一</sup>〕

古市高屋墓<sup>春日山田皇女在河內國古市</sup>

袋田墓<sup>手白香皇女在大和國山邊</sup>

宇治墓<sup>光城東四十二町南城北十二町</sup>

光岩寺といふめる禪林、○中うしろの方にめぐりて見れば、是も南に向きていし。ひろあり、けふ大窪なるをここにいかめしと思ひしに、猶まざりてなん石のさま類ひなし、この東の方一町あまり隔りて、また高き所の上に、觀世音の御堂あり、其下に是も南にむきて同じやうなる有り、  
【世事百談】おこつへいの窟

越後國會津領、新發田領入合の山に、字をおこつへいといへる地あり、文政七年の夏のころ、戸倉村の樵夫七人いひあはせ、山深く尋ね入りたるに、往來の道より二十五町ほど入りこみ、廣きところにて、凡そ人數三十人ばかりも住むべきほどの窟あり、その窟の深さ五十間も行きたりとおもふどころ、打ちひらけ、人の六七十人も住むべきほどの所あり、いづくより明りのさし入るにか暗からず、それよりおくのかたはいくらばかりともその深さ知りがたし、この所より奥へ行べき穴の口に、鐵の格子ありて、いかほど押したりとも開くことなし、をりから何となく物すごくおぼえて、おの／＼立ちかへりしとかや、その七人のうち、三人はかへるこそそのまゝ、發熱して、やがて身まかりぬといへり、こは過ぎしころ、友人柳庵のはなしなり、この類ひの窟諸國にまあることにて、予○山崎が曾て聞るは、常陸國關本郷に隱里ひんりといふ所あり、これも越後のおこつへいの窟に似たり、猶隱里といふ所信濃にもあり、つちがみ壤鍾といふ地志に見えたり、大井平の洞穴の圖説は、予が耽奇漫錄に載せ、下野都賀郡の洞穴のことは、隨掃篇に載るしたれば、こゝにもらしつ、それが中に、或はあがれる世の廟穴の、野人の爲にほり穿たるゝもまゝ、なきにあらず、菅笠日記に、安倍文珠の岩屋は、高さもひろさも七尺ばかり、奥へ三丈四五尺もあらん、これもみないといふあがれる世にたかき人をはふりし墓とこそおもはるれといへり、また陸奥志に、倭姫命の御墓のあらはれたるを、土人の字に隱石窟といふよしも見えたり、

〔延喜式二諸陵一〕凡諸陵墓者、毎年二月十日、差遣官人巡檢、仍常月一日、錄名申省、其兆域垣溝、若有損



レハ此鬼ニモ非ズ、此ノ穴ハ昔シ此ノ所ニ聖人有テ、此ノ西ノ峯ノ上ニ辛都婆ヲ建テ、法華經ヲ籠メ奉レリキ、其後多ノ年積テ辛都婆モ經モ皆朽失セ給ヒニキ、只最初ノ妙ノ一字許殘リ留テ在マス、其妙ノ一字ト云フハ如此ク云フ我レ也、我レ此ノ所ニ有テ此ノ鬼ノ爲ニ被嗽ムト爲ル人九百九十九人ヲ助ケタリ、今汝ヲ加ヘテ千人ニ滿ス、汝デ遠ニ此ヲ出テ家ヘ本<sup>○</sup>作<sup>○</sup>ニ可<sup>○</sup>至<sup>○</sup>シ、汝尙努々佛ヲ念ジ奉リ、法華經ヲ受持讀誦シ可奉シト宜テ、端正ノ童子一人ヲ副ヘテ家ニ送ル、書生泣々ク禮拜シテ、童ニ隨テ家ニ返ル事ヲ得タリ、<sup>○</sup>下

〔今昔物語 二十八〕近江國篠原入墓穴男語第四十四

今昔美濃ノ國ノ方ヘ行ケル下衆男ノ、近江ノ國ノ篠原ト云フ所ヲ通ケル程ニ、空暗ク雨降ケレバ、立宿リヌベキ所ヤ有ルト見廻シケルニ、人氣遠キ野中ナレバ、可立寄キ所无カリケルニ、墓穴ノ有ケルヲ見付テ、其レニ道入テ、暫ク有ケル程ニ、日モ暮テ暗ク成ニケリ、雨ハ不止ニ降ケレバ、今夜計ハ此墓穴ニテ夜ヲ明サント思テ、奥様ヲ見ルニ廣カリケレバ、糸吉ク打息テ寄居タルニ、<sup>○</sup>下

〔山吹日記〕島田川をわたる、是入間比企兩郡の境なり、高坂惡戸萬袋を越れば、また石川あり、<sup>○</sup>中石橋村にかゝりて山口の右の方の本立の繁みに小き社あり、其下に大なる石室あり、入口は方四尺もやあらむ、奥へ二間餘り、よこ九尺あまりにて、大なる平石もて疊みたる也、此邊には懸る物多し、<sup>○</sup>中菅谷村<sup>○</sup>武藏大里郡<sup>○</sup>中略小高き稻荷社の下に石室あり、廣さ七尺ばかり、大なる石もてたためり、入口崩れて上ぎまの石傾けり、口は南になん向へる、是らみにしへの墓穴なるべし、<sup>○</sup>中大窪にかゝりてゆく<sup>○</sup>上野郡<sup>○</sup>中略那波郡<sup>○</sup>中略家居のうしろの山際にいしむろあり、南に向ひて入口の高さ五尺餘り、横三尺あまり、うちにいりて見れば、高さ七尺餘り、深さ五間ばかり、横九尺ばかりもや有らん、うへもめぐりも、きはなき石もてたゝめる也、<sup>○</sup>中總社町にいづ、よきいへる多かり、

成ルヲ聞テ、女ノ云ク、耶々暫ク待テトテ出來ル女ヲ見返テ見レバ、長ハ屋ノ檐ト等クシテ眼ノ  
光ヲ見ユレバ、然レバコソ我レハ鬼ノ家ニ來リニケリト思テ、鞭ヲ打テ逃グル時ニ、女ノ云ク、汝  
ハ何シテ逃グ○ケナムト爲ルゾ、遠ニ罷リ留レト云フ音ヲ聞クニ、怖シト云モ愚也ヤ、肝碎ケ心  
迷テ見レバ、長ハ一丈許ノ者ノ目口ヨリ火ヲ出シテ電光ノ如クシテ大口ヲ開キテ手ヲ打チツ  
ツ追テ來レバ、見ルニ魂失セテ馬ヨリ落ヌベキヲ□□打テ迷ケルニ、觀音助ケ給ヘ、我が今日ノ  
命救ヒ給ヘト念ジ奉テ逃ルニ、乘レル馬走り倒ヌ、書生ハ拔ケテ馬ノ前ニ落ヌ、今ゾ被捕テ被噉  
ヌト思フ間ニ、墓穴ノ有ルニ我レニモ非ズ走リ入ヌ、鬼其ノ跡ニ來テ云ク、何ラ、此ニ有ツレ奴ハ  
ト、鬼來ヌト聞ク程ニ、我ヲバ不求ズシテ先ヅ馬ヲ噉ヌ、書生此レヲ聞クニ馬ヲ噉ヒ畢ナバ我が  
身ヲ噉ハム事ハ疑无シ、此ノ穴ニ入テ有ヲバ不知ニヤ有ルラムト思テ、只觀音助ケ給ヘト念ジ  
奉ル事无限シ、而ルニ此ノ鬼馬ヲ噉ヒ畢テ、此ノ穴ノ許ニ寄來テ云ク、此レ今日ノ我が食ニ當レ  
ル者也、而ルヲ何ゾ召シ取テ不給ザル、如此ク非道ナル事ヲ常ニ至サセ給フ、我レ歎キ愁フト、此  
ノ音ヲ聞クニ隠レ得タリト思フ穴ヲモ知ニケリト書生思フ程ニ、穴ノ内ニ音有テ云ク、此レハ  
我が今日ノ食ニ當レリ、然レバ、不可與ズ、汝ハ噉ヒツル馬ニテ有リナムト、書生此ヲ聞クニ何様  
ニテモ我が命ハ不可遁ヌ事ニコソ有ツレ、鬼ヲコソ无限ク怖ロシト思ヒツルニ、此ノ穴ノ内ニ  
ハ増サル鬼ノ有テ我ヲ噉○テナムト爲ルニコソ有ケレト思フニ、悲キ事无限シ、我レ觀音ヲ  
念ジ奉ルト云ヘドモ、只今命終ナムトス、此レ前生ノ宿報也ト思フ、而ル間外ノ鬼度々噉ニ訴フ  
ト云ヘドモ、内ノ音不許ズシテ外ノ鬼乍歎ラ返ヌト聞テ、今ヤ我レヲ引キ寄セテ噉フト思フ程  
ニ、此ノ穴ノ内ノ音ノ云ク、汝ガ今日此ノ鬼ノ爲ニ食ト可成カリツルニ、汝デ噉ニ觀音ヲ念ジ奉  
ルニ依テ、此ノ難ヲ既ニ免ル事ヲ得タリ、汝デ此ヨリ後心ヲ至シテ佛ヲ念ジ奉リ、法華經ヲ受持  
讀誦シ可奉シ、抑如此ク云フ我レヲバ汝デ知レリヤ否ヤト、書生不知ザル由ヲ答フ音ノ云ク、我

遺命あつて、其碑を滿仲とならべて建さしめ給ふ、且その碑の大きさも、公にこえさせ給はずと  
なむ、

〔新篇會津風土記會津郡七〕筑前守正經科保氏墓 院内村北ニアリ、墓山ノ入口ノ左ニ番所ヲ設ケ、  
右ニ盥水ヲ設ケ、又府ヨリ殺生伐木、及ビ枝ヲ折、下草ヲ刈ルコトヲ禁ズル制札アリ、此ヨリ東ニ  
升リ左ニ分レ、正經墓ニ至ル、四方ニ柵木ヲ線ラシ門ヲ設ケ、其奥ニ三間半ニ二間ノ拜殿アリ、拜  
殿ノ北ヲ墓トス、石塔南面、竿石四尺二寸、四面、高五尺七寸、笠石八尺五寸、四方、三重ノ座石アリ、鳳  
翔院殿ト階書ニテ題ス、四面ニ石ノ玉垣アリ、周十四間餘、没後佛道ノ法式ニ從<sup>ヒ</sup>、靈屋ハ北青木  
村建福寺ニアリ、石塔ノ東南ニ碑石ヲ建ツ、竿石三尺五寸、四面、高一丈八寸、笠石六尺四寸、四面、高五尺、  
座石九尺六寸、四面、高二尺六寸、楷書ニテ碑文ヲ彫メリ、〇下

〔今昔物語 十二〕肥後國書生免羅利難語第廿八

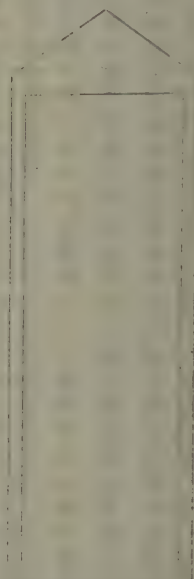
今昔肥後ノ國ニ一人ノ書生有ケリ、朝暮ニ館ニ參テ公事ヲ勤テ年來ヲ經ル間ニ、急事有テ早朝  
ニ家ヲ出テ館ニ參ケルニ、從者无クシテ只我レ一人馬ニ乘テ行ク、書生ガ家ヨリ館ノ間十餘町  
ノ程ナレバ、例ハ程モ无ク行キ着クニ、今日ハ行クニ隨テ遠ク成テ、行キ着ク事ヲ不得ズシテ、道  
ニ迷テ何トモ不思ズ、廣キ野ニ出ニケリ、如此クシテ終日行クニ既ニ日晚レヌ、可<sup>レ</sup>行宿キ所无ク  
シテ只野ニ有リ、然レバ歎キ悲ムデ人里ニ出ナム事ヲ願フ間ニ、尾崎ノ有ル上ヨリ吉ク造タル  
屋ノ妻僅ニ見ユ、人里ノ近ク成ニケル事ト思フニ喜テ、忿テ其家ニ打寄テ見レバ人氣无シ、打廻  
テ云ク、此家ニ人ヤ在マス、出給ヘ、此ノ里ヲバ何トカ云フト、家ノ内ニ女音ヲ以テ答テ曰ク、此レ  
誰カ宜ヘルゾ、速ニ可<sup>レ</sup>入來給シト、書生此ノ音ヲ聞クニ極テ怖シ、然レドモ書生ノ云ク、我ハ此レ  
道ニ迷ヘル人也、忿ガシキ事有ルニ依テ不可<sup>レ</sup>入ズ、只道ヲ教ヘ給ヘト、女ノ云ク、然ラバ暫ク立給  
ベシ、出デ、道ヲ教ヘムト云テ女ノ出來ムト爲ルニ、極テ怖シク思エテ、馬ヲ取テ返シテ逃走ニ

前填上廣一尺三寸許今尺八寸餘

橫二尺四寸四方今尺一尺五寸四方

趺高九寸三分半今尺六寸

小石碑圖



高四尺今尺二尺五寸五分餘

厚七寸九分今尺五寸一分

闊一尺一寸八分今尺七寸六分

碑趺下鋪一盤石廣於趺方一寸今尺填上植芝草爲使不虧不崩也填并碑之前後左右共敷青小石其周圍並敷片石以爲基趾其上竊建栗柱五十株許以爲垣牆高六尺許今尺其前向碑而設門而左右開闔有闌木有鐵鏤其前之堅橫又並敷片石以爲拜禮之所垣外繞栽杉樹等若干其傍置小石甕盤今按周禮疏引春秋緯謂墓樹天子植松諸侯松柏中大夫藥草士槐庶人楊柳云々然後世不必用此制唯栽宜土之木耳

〔瓊矛拾遺〕多田滿仲之墓者不過四尺也然紀伊大納言源賴宣卿見之感之賴宣墓半之作二尺也

〔紀伊國名所圖會三編六〕奥院

多田滿仲公碑 此側に南龍院殿○維川をはじめ奉りて御代々の尊碑あり南龍院殿曾て御



膳擬虞祭略○中祭畢赴葬地使清隆築墳墓其前立小石碑經旬而成墳崇四尺隨防墓之例而用周尺形如臥簪前高後下旁殺刃上而長上狹而難登所謂馬聚封是也據檀弓而參攷鄭玄孫毓說詳見禮記其整橫之尺寸未聞古法故據其崇隨宜恰好似棺并灰隔而稍廣碑高四尺跌高尺許闊尺以上其厚居三之二皆據家禮而用周尺碑首如圭形刻其面曰頤淑孺人荒川氏龜媼之墓其陰右傍刻曰明曆二年丙申季春孝子春齋林恕立之隨古禮而欲刻行實於碑左邊右然其內以可刻家君姓名而有忌諱後世知爲余之母也刻於右傍者存刻于其左轉及後右而開焉之法也又碑而古例不必刻其諱今如龜媼二字者雖似有悞然其生時之稱諱人所獨知也爲使顯著之故如此古禮損益非無先例恐可無其妨歟先世系言行履歷不可不使我子孫知之故別作事實一卷以代碑而陰傍刻書使門生坂伯元筆之彫刻而後塗墨又加漆爲欲使風雨塵埃不泯滅也頃日門生島道慶來監彫刻之事助余煩勞

前高後卑  
上狹下廣  
墳墓圖 皆周尺  
高四尺

長一丈三尺今尺八尺五寸許

橫六尺三寸今尺四尺廿

後

前

橫八尺今尺五尺計

御妃 芹摘妃或稱膳妃 聖德皇稱定慧契女

芹摘ノ妃ト稱スル事ハ和州天香久山ノ邊ニ度四五尺バカリノ小川アリテ南ヨリ北流スコ  
ノ所ニテ芹摘玉ヲ御事アリシ御舊跡トゾ御詳見月廿二日御爺嬢之尊ノ御事ハ如聖德皇本傳  
右尊號之稱謂等ハ叡福密寺聖光明院現住立勝口述ノ通奉啓白

御廟窟中寶器之事

一 三骨御棺前 紫金ノ狛犬兩區在左右

御窟内乾之隅有井一口水清潔味如甘露同所有寶鏡一面掛乾隅崖石

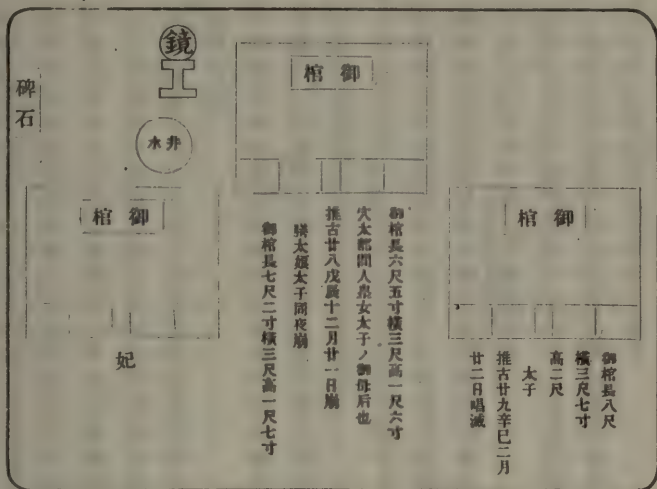
一 弘法大師之記文聖德太子ノ事ヲ載セラレタルハ遍照金剛空海上宮聖靈ノ御廟ニ參詣スル  
コト一百日云々空海見佛聞法ノ事ヲ證ス右一切ノ文ニ相續キタル記文ノ中ニ御廟窟内ノ  
三骨御棺并ニ寶器等ノ圖有之空海和尚遍照金剛ノ圖畫シタマフ處ナリト河州柏原驛純達  
寺ニ有之由住僧ヨリ承之

〔景川和尚語錄行狀〕師諱宗隆號景川佛日禪師第一之神足也姓平氏本貫伊陽人略明應九年師  
年七十六歲春示微疾藥劑不效三月朔旦自執筆遺囑略中喝兩唱擲筆示寂諸徒依遺命藏全身  
於華園西南之隅爲縛一庵號龍泉築方墳扁大龜法弟特芳書額蓋師之願命也

〔羅山文集四十三〕林左門墓誌銘

叔勝屢見我既而不言日將午乃瞑於乎悲哉叔勝年纔十七歲時寬永六年己巳夏六月十九日也於  
乎痛哉命矣哉我哭而慟歛畢僦管下海禪寺内一小丘以葬之略中於是命工削石築方墳高三尺徑  
五尺五寸環龜而堆立碣于其上以表之象圓首方趺也其焚用粟柱六十株立而貫列銳其末且鑽鑰  
其所出入焉

〔登峯文集七十四〕明曆二年丙申三月六日乙酉早朝余及春德等沐浴而上香供花略註拜神主獻齋



弘法大師記錄

棺中敷錦茵其茵不朽損也不變有異香其上有御骨不散三連尊皆如是

又云皇女臺上左右有黃金獅子眼光赫々タリ始見之爲畏又井底並敷白石澄如鏡飲之其味如甘露深入手浸肩又有寶鏡其徑尺餘也又立石面有記文總廟窟廣丈間三間許也

窟中三棺前紫金狛犬兩頭在左右乾之隅有井一口水清涼如甘露同所有寶鏡一面掛乾隅崖石

爲墳以磚甃音爲妙近土則棺速朽音

朱舜水答佐藤盛辰問曰立一小石碑於墳前高四尺闊尺以上厚七八寸圭首而刻其面曰某人之墓略述其世系名字行實而刻於其左轉及後與右而周焉

與安東省庵書曰碑身僅一方石耳厚七八寸以至尺四五而止兩頭作柱以納上下牝中碑陰或磨礪或粗質皆有之長短視碑文之多寡無定數無可圖也四週各勒二道相去二三寸小者餘中勳花

卉大約纏枝牡丹纏枝蓮爲多韓文公平淮西碑碑高三丈字如手除去螭首及最廣則碑身亦不下於一丈七八尺大明碑之極小者連首及趺亦必一丈四五尺其廣大略三尺至五尺而止長短闊狹

貴於宜適

大明俗吉禮用偶數凶禮用奇數故卜葬日必用單日言一三五七九凡銘旌石碑等文書其官爵屬稱若會

偶數言二四六八十則加之字足以爲奇如之樞之類也唯神主從吉用偶數若會奇則亦加之字大明

俗凡修造墳墓必用十二月他月不用

〔諸陵周垣成就記後附〕河內石川郡礪長聖德太子御廟窟內之圖

右寬政壬戌秋吾先法主乘如上人御廟參之時使供奉僧楷定坊筆錄親見云自後住了覺楷定坊筆錄

展轉而得寫之享和癸亥秋八月光久寺慶海

文化二乙丑五月若州小濱東本願寺派妙立寺實傳轉寫

同年上洛之日竊聞廟窟中不許凡人入拜先法主有故而入窟中御棺四面有石垣其中不使人容

足法主以鏡而照之晰然得審自四面而竊使楷定坊錄之口口圖有石垣之形也云

聖德皇御廟窟礪長山叡福寺之事實

三骨一廟御稱號之事

御母后 間人穴 太部皇女敏達帝皇女 年曆千支在子皇太子本傳



神主は、佛家にいはゆる位牌なり、さて武士には盃といふものなかりければ、その神主には道號法名をゑるせり、其中には梵字或は蓮華など彫りたるもあるは、全く浮屠の工夫を加へたるなり、

是より後庶士以上の墓には、卒塔婆を建てたると、神主を安せるものと兩様になれりされど猶塔婆を建つる者多しとす、又庶人の墓には、佛龕のさまなる外に又一種あり、夫は自然なる一片の石にて法名をきりつけ左右に年月を記せるのみにて、外に文飾を加へざるものこれなり、略上にいへる神主に類せるもの、又佛龕の形狀なるもの、則今の石碑の起源なり、さて其墓の形狀は圓壘を築きて、碑を建て、松樹を植うべし、廻りには石にても木にても垣を作るべし、中にも石にて作るをよしとす、

但墓前には垣に門あるべし、鳥居の形にてもよし、是は人々の意に任すべきなり、中四面に溝をはることは、山陵に限れる如くなりたればなすべからず、松樹あるは、因幡國なる德足比賣臣が古墳にも、大なる松ありしといふ、旁古法なるをゑるべし、

墳塋の大小は、成人のひと、小兒とはおのづから分別あるべし、

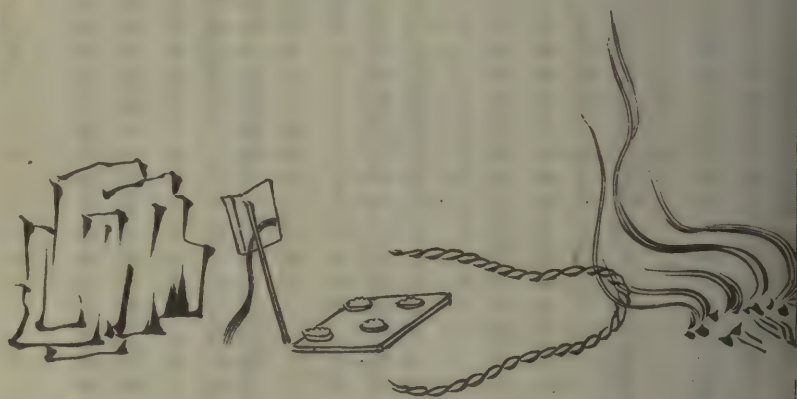
庶人は塚をつくるべからず、碑面にも法名を彫刻して、俗姓名は記すべからず、全く今の俗にならふべきなり、水戸侯の封内にては、庶士以上の外は、俗姓名をきざむことをゆるさず、相傳へて義公の定められし所なりといふ、准據の一つとなすべきにや、

〔魏志三十傳倭人〕倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑、中其死有棺、無槨、封土作冢、

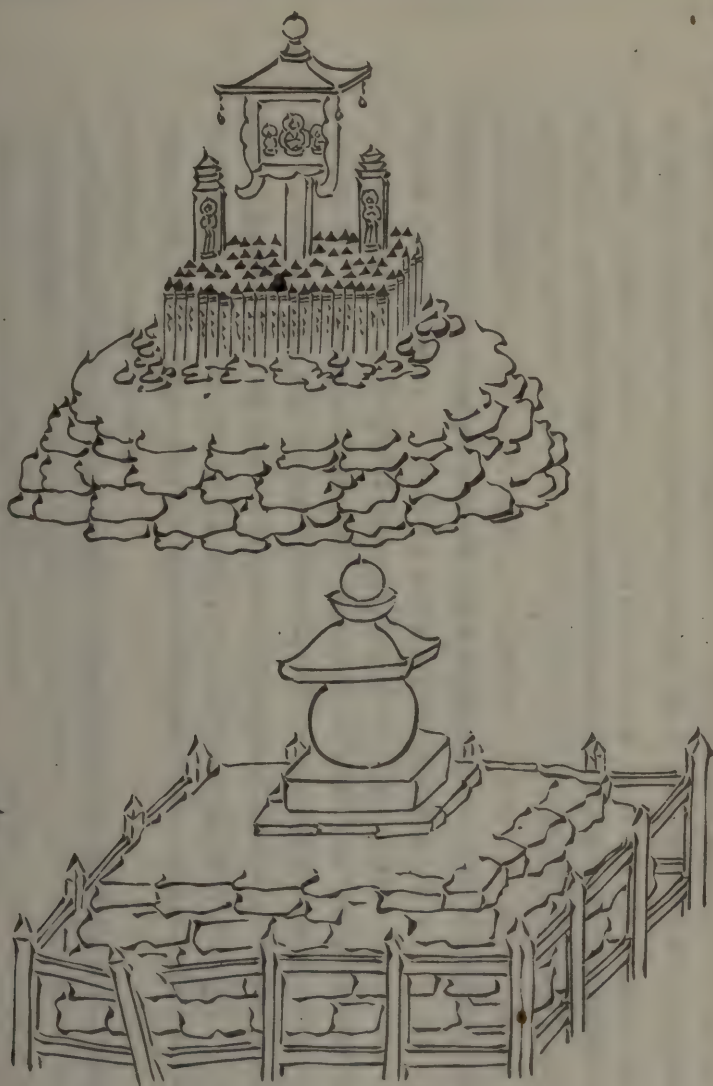
〔葬水朱氏談綺上〕墳

墳高四尺、圍牆如其墳之高、牆端高二尺餘、自右肩漸漸低亞而至於牆端、左肩亦如之、圍牆之外環植楸檜柏以蔭其墓、前而不植、欲其開闢也、墳製圓近來三四百年間並無馬鬣封之制矣、穿地直下

〔春日權現驗記〕



〔餓鬼草紙〕



さてその卒塔婆には、供養の年月、亡者の法號、建立施主の名などをきりつけたるもあり、梵文或は經文を彫めたるもあり、その體一樣ならず、

#### 庶人墳墓の事

上古の法、皆圓壘なり、碑を建つる事を得ざるよしは、前に云ひたるが如し、又溝をめぐらす、埴輪を用ひず、墓誌ををさむる事なし、

但庶人の墓と見ゆるものにも、車塚に築けるかたは溝をめぐらし埴輪をも埋めたるがあり、

これは一所の貴領、もしくは一門の統領などいふものにて、凡民の例にあらず、○中略

其葬穴の制、石を以て上下四方をたゝむ、たま〜大石を穿ちて棺とせるもあり、實に石の唐櫃ともいふべきなり、其上に土を覆ひて塚とす、大小一にあらず、或は小石を墳中に築き入れたるもあり、○中略いま諸國なる驛家の古跡に、長者が塚といふ往々存せり、或は長者夫婦が塚な

どいふもあり、皆圓丘なり、いはゆる長者は、驛亭の長者にして、庶人の富豪なるものなり、これを以て、粗庶人墳墓の制を見つべし、中頃士大夫以上は、大かた石卒塔婆を建つること、なりて後、民庶は大かた片石をもて、佛龕の形狀を作り、石面に佛像を彫りなし、其傍に法名年月などきりつけたるを礎上にたつるならひとなれり、又は自然片石に、法名年月のみ彫りたるをも建つるがあり、○中略

かくのごとくなるは、大かた庶人の墓に建てたるが多し、思ふに塔婆を作るには、雜費多くして、小家の堪へざる所なればなるべし、これも亦亡者追福の爲に建立せるものにて、墓表の義にあらず、然れども年久しきならひとなりては、全く墳墓の標のごとく思ひなりければにや、當今世俗の石碑には、此形狀なるがまゝ存せるあり、さて又鎌倉將軍家の時、禪宗渡來して、彼徒専ら埋葬を司どりしより、士大夫の墓には、石の神主を作りて建つる者、まゝいできたり、○中略



スモアリ、又別ニ石牌ヲ立ルモアル也、

忌部家ニ、墳ノ上ニ社ヲ立ル、神海靈社惟足翁モ社ヲ立タリ、○中垂加翁ノ舍人親王ノ墓ノ上ニ社ヲ建玉フコトハ、薨後千年ニ及、墓モ崩レテ知人モナキヲ悲ミテ、驗ノ爲ニ建ラレタリ、依之諸人、親王ノ墓ト云コトヲ知レリ、

〔秦山集雜著〕

「我國之葬法墓上非惟不建社、碑石亦無之、畿内諸陵多遺可見、然土葬垂加之墓、皆

雜用儒法、立碑石、大非舊式、可歎之甚也、重遠謂此說、川春海同然、然承平百年、葬埋師比、不立碑墓、下殿士、不能尊有、兆域有不得已耳、

〔弊里神官慎終記〕墓ノ高サ四尺餘、尤中高ナルベシ、廣サ六尺、バカリナルベシ、○中信原ガ顯妣ヲ

葬シトキ、此法ヲ用キヤ、

〔墳墓考〕國司守護人等の墓古今差別の事

なべて國司たる輩も、三位以下は碑を立つることなければ、圓壘をいさなみしのみなるべし、○註略さて中頃佛教我國に流布してより、尊卑の別なく、墳上に石の卒塔婆を建つることいできたれり、もど卒塔婆を建立せるは其人追福の爲にする業にして、墓碑の例にあらざれば、三位以上以下の分別なく、庶士大夫も、皆卒塔婆を建つるを以て常とせり、○註又諸國の守護人は、鎌倉右大將家の時に始めて置かれし者なれば、是も卒塔婆を建つるをならひととして、別に墳墓の制あることなし、

今洛中洛外に、公卿大夫列侯群牧の古墓多く存せり、大方石の塔婆を建てたり、又江州番場の蓮華寺に、北條仲時以下、大名諸士の墓數十あり、何れも塔婆を置けり、又薩州島津庄に、島津家の始祖忠久の父、八文字民部大輔廣言及其妻丹後局の墓に、従者數人の墓ありて、何れも塔婆を建てたりと云ふ、常陸の府中にも、常陸大掾家數代の墓ありて、悉く塔婆あり、○中

里長移埋、遷者皆甘、不告而移、應失、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁制墳墳墓事

右被內大臣魚名藤原宣解奉勅如聞、造寺悉壞墳墓、採用其石、非唯及苦鬼神、實亦致憂子孫、宣布告天下、盡令禁制、自今以後、莫令更然、

寶龜十一年十二月四日日〇又見、

〔續日本紀三十八〕延曆三年十二月庚辰詔曰、中諸氏冢墓者、一依舊界、不得新損、

〔類聚國史政七十九〕延曆十一年八月丙戌、禁葬山背國紀伊郡深草山、西面緣近京城也、

〔類聚國史政七十九〕延曆十二年八月丙辰、禁葬癰京下諸山、及伐樹木、

〔類聚國史政七十九〕延曆十六年正月壬子、勅山城國愛宕葛野郡人、每有死者、便葬家側、積習爲常、令接

近京師、凶穢可避、宣告國郡、嚴加禁斷、若有犯違、移貫外國、

〔類聚國史政七十九〕大同三年正月庚戌、禁葬埋於河內國交野雄德山、以探造供御器之土也、

〔知恩寺文書〕於京中諸寺、新儀葬送事、堅壁被停止之、至當寺境內者、更非新例、檀方土葬之儀、任寺法

可被專結緣之由、所被仰下也、仍執達如件、

永祿三年八月廿日

對馬守

備前守

智恩寺雜掌

〔羅山文集續六十〕喪禮

古有陵有墓、皆墳埋以封樹、且立石以誌焉、遠浮屠事、或茶毘、或掩土、皆非古禮也、

〔垂加流神道葬祭禮式〕墳ハ上ニ石ヲ立テ、假名ヲ彫付ル、宮ヲ立レバ前ニ石ヲ立、碑銘ヲモ直ニ記

形狀

陵尚存也自用明至于文武凡十陵特變是制但圖造之穿治玄室於其內而築之以壘覆之以巨石石棺在其內南面故其戶南向而累石爲之義道其制嚴密既已如是是以不復環之以溝也斑鳩太子

德治壽藏于河內穢長卽是制也當時太子自負聰明有才藝居作者之聖於舊章多所變替乃若山

陵蓋亦然歟○註迄于南都更復舊制惟其所仍正南面而已矣

〔令義解九〕凡皇都謂天子所居也及道路謂公行之道皆不得葬埋

〔魏書百十四〕白脚師太延中臨終於八角寺齊潔端坐僧徒滿側凝泊而絕停屍十餘日坐既不改容

色如一舉世神異之遂瘞寺內至真君六年制城內不得留瘞乃葬於南郊之外

〔令義解九〕凡三位以上及別祖氏宗謂別祖者別族之始祖也氏宗者氏中之宗長卽繼嗣令並得營墓謂墓之言墓也言家墓之地孝子所

思慕以外不合雖得營墓若欲大藏者聽

〔令義解四十〕古記云並得營墓謂高下長廣皆從別式也○中古記云以外不合謂諸王諸臣四位以

下皆不得營墓今行事監作耳○中古記云若欲大藏者聽謂全以骨除散也若以骨置墓亦任其意

也

〔周禮註疏十七〕家人○中註家封土爲丘壠象冢而爲之墓大夫○中註墓家葬之地孝子所

思慕之處

〔律疏賊盜〕凡穿地得死人不更埋及於塚墓燹狐貉而燒棺槨者杖一百謂因穿地而得死人其屍不埋

之他人塚墓而燹狐貉燒屍者徒一年五等以上尊長加二等卑幼依凡人減一等若子孫於祖父父母

家人奴婢於主燹狐貉者徒一年燒棺槨者徒二年燒屍者徒三年謂子孫奴婢等因燹狐

凡○中盜他人墓塋內樹者杖七十若其非盜唯止斬伐者准盜論

〔政事要略二十九〕戶婚律云盜耕人墓地杖六十傷墳者杖一百謂盜耕人所葬之墓土爲

笞五十墓地加一等謂將屍柩盜葬他人地中者等五十若葬他人墓地中者加一等若不識盜葬者告

梵語三昧華言正定二十五三昧破二十五有者約理對治隨義以立名也蓋欲色無色三界雖苦樂不同然實有生死執着故以此無垢等三昧之法一一破之令諸衆生出於諸有也

〔皇大神宮儀式帳〕天照坐皇大神宮儀式并神宮院行事

倭姬內親王大神手頂奉氏願給國求奉時中略種々乃事忌定給支墓平土村止云下

〔延喜式五〕凡忌詞中墓稱墳式亦同

〔日本書紀二十五〕大化二年三月甲申詔曰中葬者藏也欲人之不得見也適者我民貧絕專由營墓

爰陳其制尊卑使別夫王以上之墓者其內長九尺闊各三字五尺其外域方九尋高五尋役一千

人七日使訖中上臣之墓者其內長闊及高及高二皆准於上其外域方七尋高三尋役五百人五

日使訖中下臣之墓者其內長闊及高及高二皆准於上其外域方五尋高二尋半役二百五十人

三日使訖中大仁小仁之墓者其內長九尺高闊各四尺不封使平役一百人一日使訖大

禮以下小智以上之墓者皆准大仁役五十人一日使訖凡王以下小智以上之墓者宜用小石中庶

人亡時收埋於地中一日莫停凡王以下及至庶民不得營殯凡自畿內及諸國等宜定一所而使收

埋不得汙穢散埋處處

〔山陵志〕上古大朴山陵之制未備瓊杵氏炎見氏彥波瀲武氏邈矣日向國自太祖至平孝元猶就

丘隴而起墳焉自開化其後蓋寢有制及垂仁始備下至于敏達凡二十有三陵制略同焉凡其營陵

因山從其形勢所向無方大小高卑長短無定其爲制也必象宮車而使前方後圓爲墳三成且環以

溝延曆十一年以三縣太子早其爲樂助衛之其塚下置道勿使蓋墳夫其圓而高者如張蓋也頂爲一

封即其所葬方而平者如盤衡也其上隆起如梁輶也前後相接其間稍卑而左右有圓丘倚其下墳

如兩輪也及至後世民賭之而莫能識焉猶號曰車塚蓋亦以是也凡陵園之地必有三丘塚乃視

之而以其非史及諸陵式之所載其爲何物疑是皇后皇子若重臣別勅所許或帝王改葬而其故



あはれにぞいひし契をたがへじとつかのうへまでたちをかける

〔史記三十一〕季札の初使北過徐君徐君好季札劍口弗敢言季札心知之爲使上國未獻還至

徐徐君已死於是乃解其寶劍繫之徐君冢樹而去從者曰徐君已死尙誰予乎季子曰不然始吾心

已許之豈以死倍吾心哉

〔倭訓栞前編四十五〕おくつき 日本紀に丘墓を訓せり萬葉集に奥城奥郡に作る其義也神代紀に奥津葉戸といへる同義成べし

〔古事記傳二十五〕奥津城は萬葉に多く見えて人を葬せる處を云天智紀に丘墓とあり奥とは地下を云なり

〔萬葉集三〕過勝鹿眞間娘子墓時山部宿禰赤人作歌

古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻間爲家武勝杜鹿乃眞間之手兒名之與○柳○乎此間登波聞杼眞木葉哉茂有良武松之根也遠久寸言耳毛名耳母吾者不所忘

反歌

吾毛見津人爾毛將告勝杜鹿之間間能手兒名之與○津城○處

〔萬葉集十八〕賀陸奥國出金詔書歌

大伴能等保追可牟於夜能於久都奇波之流久之米多氏比等能之流倍久

〔書言字考節用集二〕三昧場本朝俗所云解四域

〔翻譯名義集三〕尸陀正云尸陀法顯傳名尸摩除那漢言死人墓田四分名恐長林多論名安陀林亦名畫

林暗

〔倭訓栞中編九〕さんまい 俗に墓所をいふ佛家の三昧より出たり

〔大藏法數六十五〕二十五三昧破二十五有法華義

掲升庵外集七方言、凡葬無墳者謂之墓、有墳者謂之撫棺弓、古者墓而不墳也、邯鄲淳曹娥碑、丘墓起墳、蓋言丘其平墓而爲高墳也、後世以墳墓混爲一、遂疑其重複、改爲立墓、起墳非也、曾見上虞謝豹齋爲予言此、

〔倭訓栞前編二十四〕はか 陵もはかといへる事、萬葉集に見ゆ、菅萬葉には、葬所をよめり、墓をよ

むは、跡はかもなく、そこはかどなくなどいふ意にて、その跡のみ遺れるよりの名なるべし、徒然草にも、古き墓はすかれて田となりぬ、そのかただになく成ぬるぞかなしきといへり、文選古詩に、古墓犂爲田、松柏摧爲薪と見えたり、晉世之陵墓、假山轅形之上、無加物、近代墓所に社を建る者あり、およそ墓は穢所也、墓所に上れば一日のけがれとす、はかのうへにうゑし松は、五枝松とて五材うへる故實なり、

〔倭訓栞前編二十四〕はかはら 墓原の義、墓は土を封せざるをいふ、孟軻之母、其舍近墓といひ、西

土の俗稱に、亂葬岡など見えたり、一所に定めて葬埋するの制は、日本紀三代實錄令などに見えたり、俗にむまよといふは、墓所の轉音也、さんまいとよぶは、佛家の三昧によれる也、大藏一覽に、如來胸中三昧之火、隨聲而發、迸出棺外、漸々茶毗と見えたり、

〔山陵志〕凡墓者以其築成曰都賀、以其外藏曰芳賀、

〔倭訓栞前編十六〕つか 塚をよむは、築の義なるべし、墳は塚の高き也、平曰墓、封曰塚、高曰墳と見

ゆ、葬所ならず、小高き所をもつかといへり、

〔源氏物語竹四十四〕つかのうへにもかかけ給べき、御心の程と思ひたまへましかば、ひたみちにもい

そがれ侍らましをなどあるに、うたてもいらへをしてけるかな、かきかへでやりつらんよとく、るしげに疊して、物ものたまはずなりぬ、

〔夫木和歌抄三十二〕大刀

大納言典侍







ノ頃ヨリノ事ナランカ、サレド當時ハタゞ便宜ニ任セテ葬リシノミニテ制裁スル所ナカリシガ、徳川氏ニ至リ、耶蘇宗門改ノ事起リテヨリ、多クハ寺地ニ葬ルコトナレリ、サレド水戸ノ徳川氏、會津ノ保科氏ノ如キハ、猶ホ寺地ニ葬ラズシテ、別ニ墓地ヲ設ケタリキ。

家墓ハ遺骸ヲ葬ルヲ常トスレドモ、遺骸ノ葬ルベキ無ク、已ムコトヲ得ズ、靈魂ヲ其地ニ招キテ墓ヲ築キ、又ハ遺物ヲ納メテ墓ヲ築キタルモノアリ、其他特ニ主君ノ墓側ニ陪葬シ、又夫婦或ハ朋友等、相雙ベテ埋葬シ、或ハ衆人ノ遺骸ヲ一處ニ葬レルモノアリ、生城ハ一ニ壽藏ト云ヒ、生前ニ造レル家墓ヲ云フ、仁徳天皇六十七年、天皇河内國石津原ニ行幸アリテ、陵ヲ築カシメ給ヘリ、是レヲ我邦生城ノ始トス、

火葬ノ風俗起リシヨリ、高野身延ヲ始メ、其他ノ諸寺諸山ニ遺骨ヲ納ムルモノ頗多ク、就中高野山ハ最盛ニシテ、高貴ノ人ハ各自ニ石塔ヲ建テ、遺骨或ハ爪髮等ヲ納ムルモノ、其幾萬ナルヲ知ラズ、

我邦ニテハ、古來墓地ヲ以テ死者棲神ノ地トシ、歲時ニ參詣シ、事有レバ之ヲ告ゲ、祈ルアレバ則チ祈ル、而シテ朝家外戚ノ墳墓ハ、山陵ト其ニ、毎年荷前ノ頒幣ニ預ルモノアリ、墓田ヲ附シ守戸ヲ置クモノアリ、其荷前奉幣、墓守墓戸等ノ事ハ、帝王部山及ハ外戚篇ニ詳ナルヲ以テ、宜シク彼篇ヲ參考スベシ、

墓誌トハ、陵谷ノ變ニ備ヘ、發掘ノ患ヲ防ガンガ爲メニ、死者ノ官位姓名等ヲ、金銅或ハ瓦石等ノ牌板ニ書シテ、墓壇ニ納ムルヲ云フ、碑碣ニハ單ニ死者ノ官位姓名等ヲ記シテ、墓地ニ建テ、以テ某氏ノ墓所タルコトヲ標示スルモノアリ、或ハ功業事蹟ヲ詳記シテ、墓地又ハ墓地ノ外ニ建ツルモノアリ、其文往古ハ、皆漢文ヲ用キタリシガ、近世國學ノ勃興以來、賀茂眞淵ノ碑ヲ始メ、其他國文ヲ以テ記シタルモノ往々コレ有リ、碑碣ハ多クハ、子孫ノ父祖ノ爲

# 古事類苑

## 禮式部三十

### 冢墓上

冢墓ハ、ハカト云ヒ、亦ツカトモ、オクツキトモ云フ、上古營墓ノ制、高貴ノ人ニ在リテハ、殆ンド山陵ト異ナル所無ク、皆高大ニシテ、其狀恰モ丘陵ノ如クニシテ、四面ニ池ヲ環ラシタリ、孝德天皇大化二年ニ至リ詔シテ、諸王諸臣墳墓ノ制ヲ定メ、王以上ノ墓ハ、其内長サ九尺闊サ五尺、其外城方九尋、高サ五尋、役夫一千人、七日ニ造リ訖ラシメ、上臣以下順次ニ減殺シ、大仁以下、有冠ノ人ハ役夫差アリ、封セズ平ナラシメ、庶人ハ單ニ地ニ收埋セシム、文武天皇大寶ノ制三位以上及ビ別祖ノ氏宗ニ限リ墓ヲ營ムコトヲ許シ、四位以下ハ造ルコトヲ得ザラシム、サレド其高闊等ハ今之ヲ知ルニ由ナシ、

上古ハ一定ノ墓地無ク、各自適宜ノ地ヲ擇ビテ葬リシガ、大化二年、詔シテ畿内ヨリ諸國ニ至ルマデ、一定ノ地ヲ限リ、處々ニ散埋スルコトヲ禁ジ、大寶ニ至リ更ニ皇都及ビ道路ノ附近ニ埋葬スルコトヲ禁ジ給ヘリ、當時ハ後世ノ如ク寺地ニ葬ルコトナク、多クハ山野ニ就キテ適宜ノ地ヲ擇ビ、同姓ノ人ハ累世其地ニ葬リ、他姓他族ノ人ヲ混ズルコト無カリキ、即チ永久二年四月、藤原師實ノ妻、源麗子ノ薨ズルキ、麗子ハ幼ヨリ藤原信家ニ養ハレテ、一旦藤原氏ヲ冒シタレドモ、尙ホ藤原氏ノ墓地ニ葬ラズシテ、源氏ノ墓所ニ葬リシガ如キ是ナリ、寺地ニ墳墓ヲ設クルコトハ、何時ノ頃ヨリノコトナルカ詳ナラザレドモ、蓋シ宇多醍醐

生城

五三三

火葬所

五三六

納骨所

五三八

分骨所

五四三

齒髮爪冢

五四四

首冢

五四六

耳鼻冢

五四七

外國人墓

五四八

埋遺物築冢

五五〇

祭墓

五五二

謁墓

五五九

遙拜墓

五六七

告事

五六八

祈請

五六九

修佛事

同

變異

五七〇

發冢

同

守冢

五七四

墓田

五七九

古事類苑

禮式部三十

冢墓上

名稱	四九三
墓制	四九七
形狀	四九九
兆域	五一三
墓陞	五一五
墓樹	同
築墓	五一七
墓地	五一八
設墓於宅地	五二五
設墓於寺邊	五二六
招魂墓	五二八
陪冢	同
雙冢	五二九
叢冢	五三二





〔梵舜日記〕元和四年八月廿五日辛巳、今度諒闇之終清祓ニ、主上○之御袍御裝束事、毎度當家被下處ニ、山科内藏頭ヨリ訴訴申御裝束已下、山科方へ取可申之由被申依テ當家ヨリ先例之舊記ヲ一審記申上了、廿九日乙酉、後陽成院諒闇之終清祓、清涼殿於東庭有之○、御裝束已下、悉當家へ相渡了、

〔古今和歌集十〕真ほりかはのおほきおほいまうち君○藤原基身まかりにける時に、ふか草の山にをさめてける後によめる、  
かむつけのみねを

深草の野べの櫻しこゝろあらば今年ばかりは墨染にさけ

〔古今和歌集十〕真ち、が思ひにてよめる

たゞみね

藤衣はつる、絲はわび人のなみだの玉の緒とぞなりける

〔後撰和歌集二十〕真法皇○字の御おくなりける時に、びいろのさいでにかきて、人におくり侍ける、

京極御息所

墨染のこきもうすきも見る時はかさねて物ぞかなしかりける

〔拾遺和歌集二十〕真朱雀院の御四十九日の法事に、かの院の池のおもに霧の立わたたりて侍けるを

見て、

權中納言敦忠

君なくて立つあさざりは藤衣池さへきるぞ悲しかりける

ひけり、めづらしかりける素服也。おもかげおしはかられてをかしくこそ侍れ。

〔増鏡〕十一日の日略又のとし二年嘉元はるのころより、東二條院后公深草御なやみ日々におもひ給

ひて、いまはと見えさせ給へば、伏見殿へいでさせ給ひて、つひにうせさせ給ひぬ中法皇深草

も其御なげきの後、をさくものきこしめさすなどありしを初にて、打つゝき心よからず、御わ

らはやみと聞ゆるほどに、七月十六日、二條富小路殿にてかくれさせ給ひぬ中後深草院とぞ

きこゆめる、御日數のほどは、伏見殿に宮達游義門院后深草皇女於于後宇多后などおはします、秋さへふか

くなりゆくによとともの御なみだひるまなくおぼしまどふ、游義門院中

春きてしかすみのころもほさぬまに心もくもる本作る一秋ぎりのそら

〔増鏡〕十二日廿五日年八月徳治二ねのときばかりにはてさせ給ひぬ中院號ありて後二條院とぞ

きこゆる、堀川右大將具守御車よせらる、心のうちいかばかりかおはしけん、大將になり給へる

も、この御門の西花門院后深草むつましうもつかふまつり給へるに、いとほしき御事なり、

御素服をき給はざりしをぞ思はずなる事に世の人もいひさたしける、

〔山賤記〕都なる人に、ふみのついでに申おくりし、

藤ごろも君もろどもにやつれなでよそのたもごになにおもふらん中應仁元年に、世の中

亂出來て中九月十九日にや、にはかに御もとゆひきらせ給ひし事ぞ、あさましき一ふしには

べる中

ありしだにあさましかりし墨染のころもうき世のいろになりぬる中後花園、文明二年、

〔和長卿記〕明應九年十一月十一日壬戌今夜御葬禮也中後土御

抑中御門宰相、濟繼朝臣兩人、着夏袍令供奉、尤不得其意、先行幸分也、又有如在之禮、何用自由之

儀哉、參仕之輩、爲歷々上者於事不具者不參、有何事哉中下

へ。○中略

あさごどに霞のころもきてみればはこやの山ぞあれまさりける○中略 御おくぬぐべきよし、せんじくだるを見て、

いろふかきかたみのころもぬぎすて、何をか君がなごりともせん○中略 はじめてうちへまゐるさてりやうあんの衣をまはしぬぎかふるもむかしの御かたみ、あさくなるやうにて、

まひしばの衣にうへはかくすともふちのたもとのいろはかはらじ○中略 壁紙のかたにまかりしに、ほうこんがうゐんの花のちるを見やりて、

山櫻ふちのころもにまほれすはちる木のもをよそに見ましや

〔吾妻鏡〕元暦二年○文治元年八月卅日庚辰二品○源朝御素意偏以孝爲本之處未盡水菽之酬而平治

有事嚴閣父義朝天亡給之後以毎日轉讀法華經被備沒後追福而今極榮貴給之故今被企一伽藍

作事可安先考御廟於其地之由存念御之間潛被伺奏此由法皇白河後亦歎感動功之餘去十二日仰

判官於東獄門邊被尋出故左典廐朝義首相副正清諡諱田二江判官公朝爲勅使被下之今日公

朝下着仍二品爲令奉迎之參向自稻瀬河邊給御遣骨者文覺上人門弟僧等奉懸頸二品自奉請取

之還向于時改以前御裝束水練干色着素服給云々

〔古今著聞集〕十六あるなま藏人の妻のいと物ねたみする女ありけり○中略 男いふやうは、せ

んするところかやうの口舌の絶ぬも是故にこそとて○中略 ふところ持たる龜の首をなげ出

したりけり血みごろなる物の三四寸ばかりなれば其物に違はざりけり○中略 さて月ごろへて

女つれなりけるにはぬひといふ物をしてうすくまり居たりけるを見ればまたの程に黒

きぬのを引まどひたりけり男あやしみ思ひてそれなる黒きものは何ぞとてへば○中略 さはき

りて捨給ひしこびとが爲にいかでかはこゝに素服させざらんとてよく着せたるぞかしとい



〔源平盛衰記十二〕小松殿夢同熊野詣事

同年<sup>○</sup>三月<sup>○</sup>五月ニ小松大臣<sup>○</sup>平宿願也トテ、公達引具シ奉リ、熊野參詣アリ<sup>○</sup>中 岩田川ニ着給

テ、夏ノ事也ケレバ河ノ端ニ涼ミ給フ、權亮少將<sup>○</sup>重盛 已下公達二三、人河ノ水ニ浴戯レテ上リ

給ヘリ、薄アマノ帷ヲ下ニ着給ヘルガ淨衣ニ透過テ、諒闇ノ色ノ如クニ見エケレバ、眞能是ヲ見

得テ、公達ノ召レタル御帷、淨衣ニ移テ、ナドヤ怠々敷覺候、召替タルベシト申ケル<sup>○</sup>中 大臣打戻

グミ給テ、重盛權現ニ申入旨有キ、御納受有ニコソ、其淨衣脱改可ラズトテ、是ヨリ又悅ノ奉幣ア

リ、

〔高倉院升退記〕おぼろ月よのかきくもり、御心のうち、あさぎりのはれぬやまひに日數つもりつ

つ、よもぎがしまのくすりは、たゞ名をのみ聞て、葛稚が方もそのゑるしもなく、治承五の年の

春のはじめ、十四日のあかつき、ねざめの御枕をきたになして、たまの御ありかもにしにうつさ

せ給ひしかば、雲とやなり、雨とやならせ給ぬらん<sup>○</sup>中 も、しき<sup>○</sup>安 にはいざけなくおはしま

すあををたづねて、わたごのにうつらせ給ふ、あしのすだれもなには江の、なにとぞ知らせ給は

ず世は、まひし<sup>○</sup>ばに。はなのたもとをぬぎかへて、時さりこどかはりて、にはひつきひゝきたえ

にしかば、ふるきみやにかすみなびき、花の色もむかしにかはり<sup>○</sup>中 日ごとに法華堂へ参る

も、なぐさめがたければ、

あさごにまげるなげきをかきわけて露けさまる藤ごろもかな、御よくはいつきるぞと、

たづぬる人はべりしにも、はれぬまぐれのこ、ちして、

おもひやれふちのころもをたちきても涙にぬる、袖のしづくを<sup>○</sup>中 なげきひまなくかさ

なりて、

こゝろざしふかく染てし墨ぞめのころものいろぞ猶まさりける<sup>○</sup>中 そちの大納言のもこ

くるみいろさふまきしのあつこえたるを、あやしと見てあけもてゆけば、老ほうしのいみじげなるが手にて、

これをだにかたみとおもふに都には葉がへや去つるまひしばの袖さかきたり

〔左經記〕長元七年九月十七日癸卯、今日之外、无可奉假文日、仍令案内右府邊云、今日外廿一日以前、無可奉假文之日、仍今日奉假文、并欲着服、而非送以前奉假文、如何御報云、非送以前奉假文、是恒例也者、隨命召陰陽師、令勘日時、以酉刻着服奉假文。政所等出之或者云、騰司殿上藤原重衡給、仍關白殿通藤原教道令參候給云々、依假并服衣不調不參、

〔中右記〕永久二年四月三日戊申、夜半許、兵部少輔知信、爲殿下藤原忠實御使來云、子剋許、京極殿大北政所藤原實母遂薨給了、廿一日、早旦參殿下、被仰萬事之次、御服之事、被問前大納言并明

法博士信貞之處、猶付養母祖母儀、可有五月服也、強不可及濃色、但雖然於素服者、令着給可宜者、本云服者是素服也、仍不論重輕服、可着素服者、殿下令信其事給也、但被談仰云、從少日養育之恩、不可報盡、仍及一年、可着重服之由、雖存心中、院御氣色有限之上、人々皆有不許氣然者、然可着輕服并素服也、五月廿二日丙申、末時許、參京極殿、是故大北政所御卅九日也。中殿下、右兵衛督忠教卿、家隆朝臣、隆通、依爲素服人、簾中、

〔保元物語三〕左府君達附謀反人各違流事

八月保元元年○保元二年二月、左大臣殿藤原長息、右大將兼長ヲ始トシテ、四人南都ヲ出テ、山城國稻八間ト云所ヘ移リテ、是ヨリ各配所ヘ赴カル、死罪ヲ宥ラレテ、遠流ニ成ヌルハ、悅ナレドモ、猶行末モ覺束ナカリケリ、檢非違使惟繁資能二人、追立ノ使ニテ、兄弟四人、各重服ノ裝束ニテ、御馬ヲ下部取テケレバ、押取ニシタル鞍ナレ共ウタテゲナルニ、ゾ乘給ヒケル、見ル人目モ當ラレザリケリ、

切上緒繩纓冠古以龜牛角帶黑造劔白革赤沓主袍四位五位本位色薄人之養子爲實父若養父隨親疎着服之時用輕服無文冠位袍黑表衣袴襪例沓未知舊例近代所見也○中

昇殿上官儀式官隨本官役服位衣着黑標者或下製尻□

無心喪家司職事者四十九日間布衣上長前尻着卷纓冠齋會日着素服

〔大日本史禮樂五〕諸臣凶服重服用錫紵輕服鈍色衣政事要略近制重服繩纓冠黑標衣牛角帶黑漆劍

赤袴輕服無文冠位袍黑表袴襪除重服後一月着輕服心喪無文冠若綾冠青朽葉綾袍青鈍袴上

殿童子重服用黑標縫腋西宮記初應和以往輕服通用赤練下襲青鈍表袴一條帝時輕重俱用鈍色

識者非之政事要略

〔日本書紀二十八〕元年三月己酉遣內小七位阿曇連稻敷於筑紫告天皇○天喪於郭務棕等於是郭

務棕等咸着喪服三遍舉哀向東稽首

〔榮花物語見四〕圓融院の御さうそう、むらさきのにてせさせ給ふ○中其頃さくらのをか

しき枝を人にやるとて、實方中將

墨染のころもうき世の花ざかりおも○おも新古今わすれてもをりてけるかな、これもをか

しうきこえき、

〔枕草子七〕るんゆうゐんの御はての年、みな人御服ぬぎなどして、あはれなる事を、おほやけより

はじめて院の人も、花の衣になどいひけむ世の御事など思ひ出るに、雨いたうふる日藤三位の

つぼねに、みのむしのやうなるわらはのおほきなる木のまろきに、たて文をつけて、これ奉らん

といひければ、いづこよりぞ、けふあす御物いみなれば、御まごみもまゐらぬぞとて、まもはたて

たる、まごみのかみよりごりいて、ききかたてまつらす物いみなれば、え見すどて、

かみについさしておきたるを、つとめて手あらひて、其卷數ごこひてふしをがみてあけたれば、

〔中右記〕永久四年六月十二日、晚頭殿下忠實、令參院給有議網代御車懸青下簾倭作車道江守基、輕服人々、先々無別之車儀、故大殿承保關白初而輕服之程、只全用尋常御車給也、以之思之輕服之人無別之車儀者、

〔中右記〕大治四年閏七月廿日丙寅、今日故院河白御法事也、午時許着心裏裝束垂、相具宰相中將宗參入法勝寺、檳榔毛車、心裏之時、青簾下簾也、而假不可出、

〔玉海〕安元二年十一月廿二日癸亥、已刻少納言信季來申、元三之間事、此次申云、諒闇之間、此年七月十八日、六條檳榔毛簾用、無文青草五、而內府師長藤原以鈍色緒爲綠七、隨身壹胡篋丸緒、只如尋常、而左右

大將用鈍色緒是二、已上事等、兵部卿可伺松容之由所申也、則是二位中將元三出立料云々、且者與余作法可一同之由被示云々、答云、車簾事、內府所爲非今案歟、宇治左府藤原喪記之中、有所見

云々、能加斟酌所被申量云々、尤足爲證據、但去永萬度、故中殿并當時博陸基房藤原及余實藤原皆所

用、無文青草五也、是則保元故殿御例云々、然者於此一家不可有異議歟、壺丸緒事以同前也、廿七日戊辰、少納言信季來語云中略、諒闇年檳榔車簾大臣外不替之由人々云、隨又不替之、而保元度故

殿大納言拜賀之時、用青簾之由記置之、以之思之、二位中將元三出仕之時、可用青簾歟、信範內々令

不重申云々、余云、理須用毛車之人、豈改哉、大臣以上可專禮儀、其以下每事用略儀、不可替簾事、若此謂歟、然者此一家之習、自三品之初、相具前庭又用毛車、敢不略禮儀、以之思之、其簾尤可改也、何況於有保元之例哉、但此事不知誰說者、

〔愚昧記〕安元三年元治承三月廿三日癸亥、未刻許參院河後白宗盛卿夏裝束也、不更衣也、從公事之

時、雖着諒闇服、參本所之時如此、隨身諒闇也、抑乘息侍從清宗車如何、是平文車也、故殿保元度令用、盛經車給也、是八葉也、重服人乘平文車不可然歟、

〔西宮記〕臨時服者裝束服者不新制、見手板緒



法喪車張筵云々、久安宇治左府○藤原調之歟略中

諒闇鞍事 保元元二十七日○此年七月二日鳥羽崩御方違行幸或秘記曰鞍縁螺鈿或沃草鹿切付淺黃手綱

無文革大滑等云々、然而余今夜付事安用移、嘉承或人記又注、且非無所據、又夜陰不及沙汰、悉不能調儲、右少將實國朝臣又駕移、左○公諷諫云々、已叶愚案、或多只駕普通鞍、雖然又夜陰不及沙汰哉、

及沙汰哉、

藻壁門院○後堀河諒闇中、日中法勝寺御入講御幸、面々人々所爲不同、或借用大夫尉騎馬鞍赤

手綱壺鍔等云々、或縁螺鈿或普通鞍云々、

嘉保二四十七江記曰、美作守、自此宅出立、鞍、右大將○雅被借、橋并鍔并鏡也、小文驍豹、其轡又鏡

也、只水付散物也、手綱○蘇芳談、私儲之、泥陳新義之、

〔源氏物語十〕くろき御車のうちにて、ふちの御袂にやつれ給へれば、○源ことに見え給はねど、ほ

のかなる御ありまを、世になく思きこゆべかめり○先是源氏父帝崩

〔小右記〕長徳元年五月七日壬子、權大納言道賴使扶範朝臣示送云、故關白○藤原道隆御服裝束以故殿

敏○齊例可爲其規模者、申達彼間事等、又云、可用檳榔毛車否、修理權大夫安親云、以檳榔染鈍色、着用

古弊檳榔毛車者、余答云、染檳毛甚無便宜、雖用古弊、又以相同檳榔毛法、條々無所見、被用筵張如何、

重服筵張上塗墨、雖不塗亦用筵張宜歟、何若報云、所示送最上計也者、

〔左經記〕長元元年正月廿二日戊午、子刻院宮殿上同車、○藤原賴通御服車也、黑筵張、黑下底、藤原氏懸綱等也、云々、令遷御西殿

給、廿四日庚申、從宮參關白殿○中仰云、重服時移鞍先例如何、申不知之由、○中人々移鞍雖御服

時、令申不改替之由、又御手水打敷并御車雨皮等皆不改替云々、入夜歸宅、

〔殿曆〕永久二年六月十二日乙卯、今日申剋許參院、隨身乘移馬、日來輕服人車等事不得尋、仍令申之

處、人車を常用、青下簾を可用者、仍其定にて參仕也、余直衣隨身如常、

長 火色下襲を着し給ふ由見えたり。

〔小右記〕長和三年十月十四日丁卯早旦大納言公任卿先日云、遭喪之人、夏時出仕時着夏服、冬時不改、冬時着服、又夏不改、仍遭喪、夏時也。出仕可及冬季、此間有思慮、而今日着時服、問案內被答云、先日左府云、上達部猶辨時服、不改時服之事是口爲事也。先年左大臣雅任說也、仍重服口時辨時服口今就此說、思往古事如此說、小野宮薨給之時、三條殿故督殿辨着時服之樣所覺也。

〔左經記〕長元元年五月廿二日丁巳早旦參關白殿請假後參御前有次申云、中重服人不可衣替之。

由有傳聞之事、先日大外記賴隆真人不可替正服重服之由、勘送本文、而夏御裝束等可令着用御坐之。

由云々、依何例哉者、仰云、日者所用是鶴喰衣也、非位袍、於位袍者、雖重服人皆相替夏冬衣、是恒例也。

就中故殿藤原相替之由有仰并殿、入道殿時故關白二條大臣近則入道大納言、依故殿御說更衣之。

由一日有消息、又案內右府邊可替之由有命、仍可替之由、彼此大納言違議定、則明日御讀經結願、着夏裝束欲參入者、申云、遠則不可、尋本唐兩朝例、故殿已令着替給者、敢不可申云々。

〔愚昧記〕安元三年治承元年三月廿三日癸亥、未刻許參院白河後中御門大納言成親、前治部卿光隆、中御

門中納言宗家直衣、右大將宗盛重服、花山中納言兼雅、左兵衛督成範、按察使資賢、六角宰相家通、左京

大夫脩範等參會、宗盛卿夏裝束也、不更衣也、從公事之時、雖着諒闇服、參本所之時如此、隨身諒闇也。

〔西宮記臨時四〕喪服

重服公卿乘黑筵車

〔飾抄下〕毛車 諒闇普通之儀、无相違少々用、無文藍草青、簾淺木末濃下簾、今度諒闇後堀河、後堀河

保元二正一、或秘記曰、公卿以下車如恒、殿下通忠并亞相、毛車懸青簾、无文青草緒等也。中

重服車 保元二十、廿八、或秘記曰、車八葉、黑轍、借請督殿令新調給、通方案、近代多用八葉、歟、如

〔萬葉集〕<sup>十</sup>三挂纏毛文恐藤原王都志彌美爾人下滿雖有君下大坐常往向年緒長仕來者之御門乎如天仰而見乍<sup>略</sup>中萬歲如是霜欲得常大船之憑有時爾淚言日鳴迷大殿矣振放見者白細布飾奉而內日刺宮舍人方<sup>一</sup>云雪穗麻衣服者夢鳴現前鳴跡雲入夜之迷間朝雲吉城於道從角障經石村乎見乍<sup>略</sup>神葬奉者往道之田付叫不知<sup>略</sup>○下

夏衣

〔西宮記〕<sup>四</sup>喪服

冬遺喪者一周間服冬裝束夏遺喪者又一周用夏衣當朝元無夏冬衣依滋野相公<sup>主</sup>貞起請夏冬更衣重服者尙依舊制歟

〔源氏物語〕<sup>九</sup>殿のうち人すくなにしめやかなるほごにはかにれいの御むねをせきあげて、いそいたうまごひ給ふうちに御せうそこきこえ給ふほごもなくたえいり給ひぬ<sup>中略</sup>○<sup>略</sup>上かひなきて日ごろになればいかゞはせんとて鳥邊野にゐてたてまつる程いみじげなる事おほかり<sup>略</sup>○<sup>中</sup>世をへてうごくはづかしきものに思ひて過はて給ぬるなごくやしきことおほくおぼしつゞけらるれどかひなしにばめる御ぞたてまつれるも夢のこゝちしてわれさきだ、ましかばふかくそめ給はましとおぼすさへ

かぎりあればうす墨衣あさけれど泪ぞ袖をふちどなしける、とてねんすし給へるさまなまめかし<sup>中略</sup>○<sup>中</sup>まぐれ打してもの哀なるくれつかた中將の君<sup>上</sup>○<sup>外</sup>にび色のなほしさしぬきうすらかに衣がへしてをしくあざやかに心はづかしき様してまいり給へり<sup>中略</sup>○<sup>中</sup>ちかうつゐる給へればまごけなう打みだれ給へるさまながらひもばかりをさしなほし給ふこれは今すこしこまやかなる夏の御なほしにくれなるのつや、かなるひきかさねてやつれ給へるしも見てもあかぬ心地ぞする

〔花鳥餘情〕<sup>八</sup>輕服に紅の衣を用る事は長保三年二月一日定子皇后<sup>中略</sup>○<sup>后</sup>心喪に御堂關白<sup>中略</sup>○<sup>源</sup>道隆

〔萬葉集二歌〕高市皇子尊城上殘宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

〔萬葉集二歌〕高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

掛文忌之伎暇カマケノヒマ計カケ云カモ由遊カモ惠カモ言久母カモ綾爾畏カモ伎明日カモ香乃カモ眞神カモ之原カモ爾久堅カモ能カモ天津御門カモ乎カモ懼母カモ定賜カモ而カモ

神佐扶跡磐隱坐カムサフツイハガレス中ナカ 吾大王皇子之御門ワガオホキミイコノカド乎ナニ云イハレ刺竹ササキ皇ミコ神宮爾裝束カミヤニヨニマツリナゲハヘ而遣便ニカノヒト御門之人毛ミカドノモノノモ白妙シロタマシ乃ナニ

麻衣着埴姿乃御門之原爾亦根刺日之盡鹿自物伊波比伏管烏玉能暮爾至者大殿乎振放見乍下

〔萬葉集三〕七年○天乙亥大伴坂上郎女悲歎尼理願死去作歌

塔角乃新羅國從人事吉跡所聞而問放流親族兄弟無國爾渡來坐而○  
 中  
 荒玉乃年緒長久住乍

坐之物乎生者死云事爾不免物爾之有者感有之人乃盡草枕客有問爾佐保川乎朝川渡春日野乎

背向爾見乍足永木乃山邊乎指而晚間跡隱去禮將言爲便將爲須敵不知爾徘徊直獨而白細之

衣袖不干 洗濯○下

萬葉集三  
卷十六  
甲申春二月  
安積皇子  
薨之時  
內舍人大  
伴官  
爾家  
詩作歌  
六首  
今錄三

カマツトモ提督、一カレシイハ、  
母愛阿公之言、長志支可勿、王即子乃命、高七爾全、國麻思、大日卡入、國乃京者、可斷、等

持来日新而  
言来耳我思  
可也百物君  
三教二帝存  
存何術食其  
用服是二日  
不遠乃其未  
持思者

去知所望山邊沙有野鳥旦泥滑雨泥年飢子獨走彌日羸身聞爾道言之狂言聖力問白結實

人參束而和豆山衛興立之而外堅乃天所始如題略

掛菟毛文爾忍之吾王皇子之命略  
世間者如此耳奈良之大夫之心振起劍刀腰爾取佩梓弓韞

負而天地與彌遠長爾萬代爾如此毛欲得跡憑有之皇子乃御門乃五月蠅成騷騷舍人者白袴爾服

取着而常有之、唉比振麻比、彌日異、更經見者、悲呂可毛



色別不可違日來候歟黒染淺黃着替之儀未存知之由申候也恐々謹言

六月四日

妙悟

〔薩戒記〕永享五年十一月四日癸未午一刻少納言益長朝臣入來談云唯今所□□也尋申鈍色柑子色椽等事被示云鈍色□□也以付花付色云々柑子色者萱草色同事也椽者夏冬共不可有裏又不  
可更衣者云鈍色事女工所有所見云々其色以不志金銀之聊入花云々如何

〔二禮儀略三〕成服

服ノ事五等ノ服アルコト儀禮家禮ニ詳ナリ上ニアル人志アラバ古ニ復スル何ノ難キコトカ  
 コレアララン今服制ナクシテ天下通ジテ服セザレバ私ニ古服ヲモ製シガタシ朱子曰今人吉服  
 皆已變古獨喪服必欲從古恐不相稱又云一人自在下面倣不濟事須是朝廷理會一齊與整頓過又  
 曰駭俗猶些少事但恐考之未必是耳若果考得是用之亦無害我國ニモ古輕服重服ノ二等アリテ  
 藤衣ト名ヅケ古キ物語歌等ニ見エタリ藤皮ナドニテ織タル龜布ノ稱ナリ其色ハ黻素ナルヨ  
 シ其制モ考フベシトハイヘドモ今通行ノ衣服ト常服ヨリシテ異ナレバ行ヒガタシトス漢土  
 ノ喪服常服ト其形大ナル差異ハナシ此方ハ衣裳ノ形製全體大ニ異ナレバ考得テ是ナリトモ  
 カレコレニツキ俄ニ服スルコト疑ナキニアラズ幸ニ今ノ俗月白鈍色ノ上下衣ヲ製シテコレ  
 ヲ倚廬ト名ヅケテコレヲ服ス今姑クコレヲノ製ニナラヒテ服センコト可ナリ五等ノ差ナケ  
 レバ服トモ名ヅケ難ケレドモ今姑ク擬シテ服ト稱スルノミ先輩サイミノ粗布ヲ以テ襜褕ヲ  
 アラク製シテ服スルノ說アレドモ仕フル者ハ斷然トシテ服シガタクシテ其純色月白ノ上下  
 衣ト大ナル差異ナキトキハ何ゾ異ヲ人ニ取ンヤ服ハモト練ラザル布ニテスルコトナレバ其  
 素質ノ色ニテ染テカザルコトナキハズナリ然ルニ我邦ハ古ヨリ染色ヲ用ユ漢土ニテモ晉ノ  
 襄公喪服ヲ涅ニセシコトアレドモ是ハ戰場ヘ向フユエノコトニテタマノコトナリ宋朝

〔圖太曆〕文和二年九月廿三日、關白○藤原基被談重喪間不審條之事、

御忌中條々

一御素服事

ふし力子染ヒキノリ、御帶同、御大帷、若花色哉、又白候也、

一内々御小直衣事

平絹白御指貫小直衣、不着袖結歟、猪熊殿御記ニ、爲花色、由被注置候、但近代不奉見及候、大略白候歟之由存候、

一此色々被調事

皆可爲同日候哉、又次第連々雖被調、不可有口候哉、○中略

以上染色裁縫着御等、被向吉時被調之、可有看御也、

一内々御小直衣御袖不可有話勿論也

無定式、平絹白小直衣、同指貫、近代常見及之、鈍色、又有看御所見者、不可有子細、但御指貫其時鈍色歟、何事候哉、或黒染小直衣、古人着之、其時用黒指貫歟、所詮守先規可有沙汰歟、

〔圖太曆〕延文三年六月四日辛未、圓忠送狀、位牌書様并羽林着服等條々、○中略明日已後、羽林○足利義詮

着服事、至明日黒染直垂にて候、明日已後者、可爲淺黄候哉、是は内々儀候、勅使など來臨之時、直垂不可然候間、可爲布衣候、其色可爲何様候哉、同可被示下之由、内々申入候、可得御意候、恐謹言、

六月四日

圓忠判

進之候○中略

御裝束事、如勅使御對面之時、最前御着用黒染御狩衣可然候、服者龜絹狩衣平絹白指貫、着用事候、是は細々出仕之人、就簡略五句已後など用候、五句中、黒狩衣勿論之由存候、但又可爲御直垂者、其

ければ、おごろき思召て、馬に一鞭をすゝめて、いそぎおはしたり、むなしきまがひにいたきつかせ給ひて。中いかなるおやのなげき、子のわかれといふども、是にはすぎじとかなしみ給ふ事かぎりなし、たゞ義經が運の極むる所とて、さしもにたけき御心をひきかへて、ふかくぞなげき給ひける、かめわり山にてうまれさせ給へるわか君も、判官殿と同じやうに白き衣をめて野邊のおくりをしたまへり、

〔平戸記〕仁治三年二月一日癸丑、夜半自入道殿下

○藤原經

被仰下云、御装束之事、長元寛徳所見分明

候之間、可爲輕服鈍色之由、思食定候也。

○此年正月八日四條崩

御杵裏事、淺黄白色、先例不同、然而大治有沙汰

被改白色者、實尤可被用白色候歟之由、内々所候也、禮紙狀云、御帶同可爲鈍色之由、被思食候如何

兼又淺鼠色鈍色事、舊記沙兩端、願御不審候、公仕之時可有御沙汰之由也。

○此解由次官願狀也

是今朝自此

付顯雅言上之御返事也、彼狀云、御装束事何様定哉、又御杵裏、大治御服所初度調進薄淺黄云々、以

之、最前御院參之日被用了、而後日被改白平絹了、仍以此旨注進左大臣殿了、此事非御尋之内、然而

今度沙汰候趣、依不審内々尋申之由、送書札於顯雅許也、而依難熟事、夜前籠居云々、以其狀進入立

而就、彼今被仰其由也、今懸紙狀尋仰御帶事、仰旨無相違之由、令申了、驚眠披見之由、獻請文之後、又

獻言

〔増鏡

十一日の

日陸嘉元も三年になりぬ、萬里小路どの、法皇

○龜山

又御なやみとて、龜山どのへう

つらせ給ふ、いろ／＼に御修法やなにくれ、御新ごもこちたくせさせ給へるも、まゐるしなくて、九

月十五日の明ぼのにつひにかくれさせ給ひぬ。

○中

廿八日

○月

院のうへ、○後御そよく奉る、お

はします殿には、くろき糸にてあみたる簾をかけらる、あさきへりの御座に、うへの御ぞくろく、

うへの御はかま、うらははかんじいろ、御またがさねくろし、おなじひつへき、あさぎの御ひあふぎ、

御だいまるも、みなくろき御てうどやもなり、

服時、候從着、鈍色之由云々、御隨身袴袴、鈍色宜敷○下

〔左經記〕長元九年五月十三日庚寅、此日內府○藤原權大納言、新大納言、民部卿、右衛門督、權中納言、

定右大辨等、參會關白○藤原賴道、御直廬、被定雜事○中

一新帝○後御心喪間御服色事

人々被申云、可依勅定、敷關白命云、先議可有之樣、欲奉行也、仍尋先例、延喜廿三年、主上○依先

坊御事、御心喪之間、御服鈍色云々、又天曆六年、依朱雀院御事、御心喪間、同鈍色云々、彼時臣下、皆

雖奏不可然之由、起自叙、慮着給云々、抑彼間皆無指事、但於當時、依爲代初、連々可被行神事、令着

鈍色給、尤可有其憚、歟如何、彼此申云、可然矣、

十、壬辰、及午後、右大臣被參院關白相府於殿上、言談之次、今上御心喪間御服色有定、大略雖有

延喜天曆之例、於此度者、俄可爲代始、可有鈍色憚之由也、

〔春記〕永承七年七月七日、醫師雅忠重服者也、仍着赤衣、如此之所忌、赤物云々、仍着鶴喰之袍、可參候

之由、被下宣旨云々、已如雲上客云々、

〔殿曆〕嘉承三年○天仁八月廿三日庚子、予○藤原着輕服、如諫闊○去年七月十日堀河殿裝束ニて、色極而薄、

余鼠色頗薄ニて着之、是依有所思也、抑先朝御恩不可盡、而有限者、不給素服、是先例也、仍廻恩案、他

卿より濃染シ也、

〔永昌記〕大治四年七月十五日辛卯、參新院○鳥羽御方○中新中納言○定來仰云、御葬禮事、河○白偏不

知食事也○中於御隨身裝束者、御束帶日許着鈍色袴、歟者、予又令奏云、隨身裝束何限、御束帶日、雖

何日須用鈍色、歟、歸來仰云、尤可然者退出、了、

〔義經記〕ハひで平しきよの事

十二月○文治廿一日のあけぼのにつひにはかなくなりぬ○藤原判官殿○義經へ此由申され



日許皆可着鈍色云々此事似無所據亦可取案內大外記敦賴朝臣注送朱雀院御時殿上侍臣上

都着服等間日記天曆六年九月廿五日件日記依左府命今朝奉寫者頃之敦賴朝臣來云今朝件日

記於相府子細見給被仰云右大臣光內大臣公余實皇太后宮大夫公彈正尹光右衛門

督平左兵衛督實不可着鈍色只可着心裏服鈍色將云々者中故院舊臣裝束事案內頭辨其報

狀云今日奉左府命云御傍親并院司素服人々之外不可着鈍色猶着心裏裝束可參大內及院者

廿二日癸巳內大臣左兵衛督不可着鈍色色定內而皆着鈍色就中內大臣着深鈍色若是依裏裝束

敷衣直八月一日壬寅四條大納言告送云頭辨示送明日御法事可着鈍色者爲之如何云々依先日

定着綾表衣青朽葉下襲青鈍色表袴而忽有斯告至今何爲左府定臨時變改非設二襲之人難從反

掌定者也資平令參內并院爲令聞裝束之案內民部大輔爲任以與光朝臣有示送事等一昨日頭馬

頭以與光朝臣告以同旨有慮外天恩之氣云々資平從內退出云明日參院之人可着鈍色有左府氣

色雖然只今何爲哉二日癸卯源宰相告送云可着鈍色之事彼是案內左府被命云御傍親并院司

外可任意者又既有先日定當日何有定乎大奇事也中頭辨道方藏人少納言能信日來着青朽葉

而今依左府命着青鈍色當時職事人變日來裝束忽着鈍色如何人々傾耳左少將忠經侍從兼綱右

少將雅通御爲院無禮仍左府仰云忠經兼綱可謂御傍親然而不可着鈍色者仍着青朽葉參入雅通

無禮中着也又內殿上人青鈍色勤堂童子役此間事如亂絲御傍親及不蒙內殿上之者皆着鈍色但

東宮宮司殿上人等着青鈍色下襲左大辨說孝和泉守經賴非內及宮司殿上人而着青朽葉又左馬

頭相尹左中辨朝經權左中辨經通侍從資平大和守輔尹公成等着青朽葉存先日定敷雖心裏人悉

卷纓院御位之時經藏人之大夫等着鈍色勤上達部養雜役依左府定敷左少將定賴依左府氣色不

宜敷

〔小右記〕萬壽四年十二月廿五日辛卯昨日中將來傳關白御消息云重服人隨身裝束如何中着重

略

ひたるをもてなしたすけつ、さぶらはす、君はいさ、かひまありておぼさる、時はめし出てつかひなごし給へば程なくまじらひつきたり、ふくいごころうして、かたちなどよからねど、かたはに見ぐるしからぬわかうとなり。

〔源氏物語

角七十七

〕七日々々の事ども、大君いさたうとくせさせ給ひつ、おろかならずけうじ

給へど、素かざりあれば、御ぞの色のかはらぬを、かの御方のこ、ろよせわきたりし人々の、大君從

者いごころう着かへたるをほの見給も、

くれなぬにおつるなみだもかひなきはかたみの色をそめぬなりけり

〔小右記〕寛弘八年七月十四日乙酉、四條大納言任公告送云、昨參院謁左丞相雜事次云、諸卿侍臣、不忌

御穢悉以着座、御卅九日間不着鈍衣、候院可無便宜、至今着鈍色可參入之由被定丁者、但參内之時、

可着心喪裝束云々、事分兩端、似無所據、左右之間只在彼定、此定彼未着鈍色、不可參院、日來下臈上

達部及殿上人、連日參圓成寺云々、奉訪御骨軼、不得其心、此平六月二日一條崩十五日丙戌、早旦以資平

令觸依、未着鈍色、不參院之由、於近習卿相、隨骨資平等來云、觸春宮大夫信了、返事云、可然事也、但

朱雀院例、一周忌之間、卿相侍臣、節會行幸神事等外着鈍色、須依彼例、略定如之者、亦不候御葬送御

共之事、一日以委旨、談春宮大夫、即達相府、有和順氣之由、有示送也、資平侍從相共參圓成寺、乍立退

歸云々、十六日丁亥、參内、陳頭無人、座席不煖退出、卿相侍臣、有可着鈍色之議云々、然而未承指定、

仍今日着心喪服所參入、昨日若左府内府所定、歟、大外記敦賴朝臣云、昨日左兵衛督云、御周忌間、上

達部可着鈍色乎否、先例如何、若有所見哉、可勘申者、無據勘之方、朱雀院御周忌間、文書等可口事由

者、十七日戊子、資平自院告送云、頭辨云、左府道長命云、御傍親并院司及給素服之人外、不可着

鈍色、如初定着心喪裝束、可參院及内裏者、件定日々變改、宛如反掌、近日着心喪衣服、不可改斯儀歟、

但朝定夕變、猶難一定、於吉事可無改、况凶事乎、晚景資平來云、舊臣着服事、如初申送、但或云、御法事

凡位色皆五方之色、或正方色、或間色也。椽袍其實黑色也。黑色者紫之本色、夫於物或有本卑末貴、或有源狹流廣、此紫色本色卑、間色貴、仍爲卑下之色、着用得其義也。唐令云、凶服不入公門云々、在朝雖可着本色之淺、今按朝令除淺色兩字、只注位色、便知偏可着本色也、而着本色之淺、是依唐令、不好美色、歟、就中殿上辨官重服之間、雖着椽袍、有政之日、更着位袍、而後入內、猶着位袍、淺知着椽袍、非若位袍、理也、但諒闇之年、殿上侍臣、隨着黑椽袍、辨官從政之日、亦着位袍、雖所先例未得其意、依私喪若之人、縱收用位色、依公定着之、則何更用位色乎、若椽從政、白以含理、抑如是稱例之事、宜歸衆人之定、偏存道理、不可偏執、若無辨應之情、難達訪

問、諒闇之間、上達部平絹表衣、付鈍色裏、可然乎、答、彈正式云、大臣帶二位者、朝服着深紫、諸臣二位三位、並着中紫、儀制令云、凶服不入公門、其遺喪被起之時、已服凶服、須着位衣、況至輕服、只除帛衣、仍雖用平絹之袍、不改本階之色也、但世俗之體衣裳之間、依其深淺各稱表裏、未有以他色爲裏色之法矣、今屬諒闇之年、恣着鈍色之裏、无有正文、似素葬倫、又問、輕服人着鈍色、有所見乎、答、喪葬令云、天皇爲本服二等以上親喪、服錫紵爲三等以下及諸臣之喪、除帛衣外、通用雜色、義解云、錫紵者細布、卽淺墨染也、帛謂白練衣、舊說云、此令者除重服外、親是服錫紵、其重服者素服一年、又云、通用雜色、謂紫蘇芳等色、皆用色者、雖奉爲帝王先置此文、而亦於臣下可准件法、輕服之者着鈍色之衣也、又紫蘇芳等共入雜色、隨則應和以往、下襲赤練、抑表袴青鈍、通用件色也、而近代之例、偏着鈍色、人之遠越、世之說誤也。

長保四年正月廿七日

允亮

〔榮花物語一〕五月四年康保廿五日にうせ給ひぬ。中略、村上、宮々御方々の墨染ども、あはれにかなし、同じ諒闇なれど、これはいこゝおごろゝしければ、只一天下の人からすのやうなり、よも山の椎柴のこらじと見ゆるもあはれになん、

〔源氏物語四〕くるしき御心地にも源氏の右近を願侍女めしよせて、つぼねなど近く給はりてさぶらはせ給ふ、これみつ心地もさわざまごへど、おもひのどめて、この人のたづきなしと思

ヲ云テ、ニビ色トアルモ赤色ヲ帶ル意アリ、大抵今ノ藍鼠ノ色ニ赤色ヲ帶タル色歟ト覺ユ、桃花  
藥葉ノ比ヨリ其色審ナラザル歟、定論ナケレバ今ニ至テ如何トモスベカラズ、サレドモ喪服ノ  
色ハ、椽ト鈍色計ニテ、鼠ト云モニビ色ノ薄ヲ云、黒服ト云フハ椽ヲサスナラン、大抵袍直衣等ノ  
色ニ椽ヲ用ルコト、前ニ引處ノ諸抄ニアリ、但名目抄鈍色ノ注ニ、亮闇ノ時直衣此色也、指貫勿論  
トアリテ、同條椽ノ注、亮闇ノ時殿上人四位以下着袍染色也トアレバ、二色此亮闇ノ時人臣ノ服  
色也、サレドモ椽ニハ四位以下ト云ヒ鈍色ニハ直衣ト云ヘル處、如何ナル子細ニヤ、此注ニヨレ  
バ四位以上ハ鈍色ノ直衣ヲ服シ、四位以下ハ椽ノ袍ヲ着ル歟、サレドモ前ニ出ス如ク、天子椽染  
ヲ服シ玉フコトアレバ、四位以下ニカギル袍ノ色トモ覺エズ、然レドモ古今制異ナルコト時代  
ニヨツテ異ナレバ、續日本後紀ノ比ハ、天子以下通テ椽染ヲ服シテ、鈍色ハ未有後世ニ至リ鈍色  
有テ、四位以上ハ鈍色ヲ用ヒ、以下ハ椽ヲ用ヒシニヤ、イヅレニモ喪服ハ黒色ト心得テ誤ナシ、上  
代ノ制ハ、位階アル人衣服ノ制モ、今ノ士庶ノ服ト異リ、故ニ考得テモ行フベカラズ、其色モ大抵  
ワカレテ大ニ異ルコトナケレバヨシ、故ニ黒色也ト心得テ大ナル違ナシ、

〔西宮記<sup>臨時</sup>四〕喪服

帝王雖隨以日易月之制、一周間依不臨朝、不服位袍服、黒椽衣、神事日着紅色、即位日者曾禮服、周康  
順命也、侍臣等依宜旨衣黒椽辨少納言式部兵部等輔丞候殿上輩隨本官役之時用位袍、

一院殿上六位有着黒椽者、未爲可、黒椽不必重服者衣、大學生或着之、  
〔令集解<sup>四十七</sup>〕問服色有限以不、答不限布、魚細、白色布服耳、

〔政事要略<sup>六十七</sup>〕今之行事昇殿之輩、重喪之者、四位五位六位、皆着黒椽袍、可謂非也、儀制令云、其遭  
喪被起者、朝參處亦依位色、義解云、入公門及朝參處、並依位色者、位色各異、不可妄輒着、已下有罪何  
无所憚、猶四位五位共着本色之淺、六位下又着本色之淺、是合法意、但三位以上着黒椽袍、頗有所違、



月廿八日、或秘記云、今日初出仕、裝束重服、亦沓、裏鈍色鼠色（持衣下）、今用ユルガ如ク、凶服ノ襟ニ同  
 ジク淺黒色ナルベシ、又或裝束抄曰、素服ノ表袴、平絹鼠色、或ハ鈍色裏柑子色云々、名目抄喪服篇  
 曰、柑子色、女房ノ袴及表袴裏、此色歟云々、然レバ鼠色ノ袴ハ、裏ヲ柑子色ニスルコトモ、定式ト見  
 エタリ、薄鼠色（直）、右ノ色ノ猶薄キヲ云フナルベシ、鈍色（直衣、袴袴衣、袴下、袴、大袴袴、名目抄曰）  
 鈍色、花田染色云々、薩戒記曰、鈍色裏淺黃色也云々、桃花藥葉曰、鈍色移花ニテ染ルナリ、又云花田  
 染也、又或云青花ニ墨ヲ入ル也云々、逍遙院裝束抄同藥葉、又曰、又蘇芳ニドウサヲ入テ染ト云々、  
 服假事曰、着服者、可用鼠色、其色以墨染之、或入移花於墨云々、或裝束抄曰、鈍色、花田ノコキ色ヲ云  
 也、此說々ノ中、花田染ト云ヒ、移花ニテ染ルト云ハ、此其色ノ淺キナルベケレバ、淺黃ト云ト同ク、  
 式ニ所謂淺縹ナリ、直衣指貫等常ニ淺葱ナレバ、凶服是ト同ジカルベキニハアラズ、又蘇芳ニド  
 ウサヲ入テ染ト云、假字裝束抄ニ所謂赤衾ノ染様ヲ鈍色ニ心得違テ云ル說ナルベシ、鈍色ト橡  
 トハ同カラズ、西宮記喪服ノ條ヲ熟考フル時ハ、其差別アルコト略見エタリ、又名目抄ニモ別テ  
 テ之ヲ注セリ、右ノ三說並ニ信用シ難シ、タゞ青花ニ墨ヲ入ト云、說然ルベキ事ナリ、此青花ハ薄  
 青色ト見エタリ、此ニ淺墨ヲ入タラバ、實ニ鈍色ト名ヅクベキ色ナルベシ、又花田ノコキ色ヲ云  
 トイヘルハ、青鈍ト混ジテ誤ル說ナルベシ、青鈍（下、袴袴衣、袴下、袴、大袴袴、名目抄曰）  
 ノコキ色也云々、案ズルニ、此文兩抄共ニ鈍色ノ注ニ加ヘタリ、然レバ淺縹ト云義ニハ非ズシテ、  
 鈍色ニ用ル淺縹ヨリハ、青鈍ニ用ユル縹ノ色ハ濃トノ義ナルベシ、右ノ鈍色ニ準ズルニ是モ亦  
 墨ヲ入ルベシ、直ニ縹ニテハアルベカラズ、色染ノ此諸說據アルニ似タリ、サレドモ鈍色ノ說墨  
 ヲ入ル、青染ニ從フコト必ズ是ナリトモ覺エズ、予ガ前ニ云ヘル如ク、常ノ鈍色ハ亦花田、或ハ  
 墨ヲサシタリトモ、赤色ヲ帶ルナラン、青鈍ハ赤花田染ニ青ミノカチタル也、サレドモ鈍色イヅ  
 レモ黒色ヲ帶ルナラン、又赤色モ帶ブベシ、薄雲ノ卷ニ、夕日ノウツリタル處ニ雲ノワタル氣色

日易月之制、一周間依不臨朝、不服位袍服黑橡衣云々、是上ニ示タル凶服橡ヲシテ、續日本後紀ニ  
 所謂除素服者橡染御衣ト云ト義同、橡染本ヨリ黒ケレドモ、白橡ト云アルガ故ニ、是ニ對シテ黒  
 橡ト云ナルベシ、別ニ色アルベカラズ、又同書下、錫部、錫紵、喪葬令曰、錫紵、義解曰、錫紵者細布、即用  
 淺墨色染也、集解釋曰、唐令錫縗者、僅禮喪服傳無事其縗、有事其布曰錫、此令錫紵者、錫色紵服耳、縗  
 黒曰錫、然則黒染淺色耳云々、本朝ノ錫紵ハ、淺黒クシテ錫ノ色ノ如シ、故ニ錫紵ト云、異朝ノ錫ハ、  
 地合ノ名ニシテ色ノ名ニ非ズト見エタリ、然レドモ異朝ノ錫モ純白ニハ非ル歟、辭案アリト雖、  
 此ニ拘ラザレバ之ヲ略ス、又素部、素服、素ハ白キ義ニ非ズ、質素ノ義也、故ニ素服ノ字ヲ、アサノキ  
 スヲキルト訓ジ來レリ、錫紵等ノ凶服、麻ヲ以テセルヲ云、其色ハ鈍色橡等ト見エタリ、此色葉ノ  
 論、甚ダ精密據ニ足レリ、サレドモ鈍色ノコトハ、源氏物語薄雲ノ卷ニ、殿上人ナド、ナベテヒトワ  
 色ニクロミワタリテ、モノハエナキ春ノクレ也、二條院ノ御マヘノ櫻ヲ御覽ジテ、花ノ裏ノ折  
 カヲナドオボシ出ヅ、今歲計リハトヒトリゴチ玉ヒテ、人ノ見トガメツベケレバ、御チンズ堂ニ  
 コモリ居玉テ、日ヒトヒナキクラシ玉フ、夕日ハナヤカニサシテ、山ギハノ木ズエアラハナルニ、  
 雲ノウスクワタレルゾニビ色ナルヲ、何ゴトモ御目トマラヌ比ナレド、イト物哀ニオボサル、  
 此物語ノ詞ニヨレバ、ニビ色ハ赤色ヲ帶タルガ是ニ似タリ、又榮花物語月ノエンニ、廉保四年村  
 上天皇五月二十五日ニウセ玉ヒシ處ニ、宮々御方々ノ墨染ドモ、アハレニカナシ、同ジ諒間ナレ  
 ド、コレハイトオドロクシケレバ、タマ一天下ノ人、烏ノヤウナリ、四方山ノ稚柴ノコラジト見  
 ユルモアハレニナン、又安和二年冷泉院ノ崩ジ玉ヒシ處ニ、去年ハ世中人墨染ニテクレニシ  
 ガ、コトシゾ御禊大嘗會ナドノ、シルメレバ、サマノニメデタキゴト、ヲカシキコト、アハレニ  
 カナシキコトオホカナリ、此物語ニ云ヘル二ヶ條ハ、桃花葉葉ノ黒服ニテ、色葉ニ論ズル處、橡等  
 ノ色ナリ、又裝束色葉難名、重服平緒、飾抄曰、重服平緒鈍色絹帖之、同查、重服ノ查ノ事、保元二年十一

リ其黒クヌルニハ墨ヲ用ル歟又同書橡部橡袍衣服令曰家人奴婢橡義解謂橡櫟木實也以橡染  
絹俗云縹橡衣也云々縫殿寮式曰橡綾一匹搗橡二斗五升茜大二斤灰七升薪二百二十斤帛一匹  
搗橡一斗五升茜大二斤灰五升薪二百二十斤云々は令ニ載タル家人奴婢ノ橡ノ袍ノ色ナルベ  
シ橡大袖小袖飾抄曰袍四位以上橡云々四位以上トアレバ上ニ出セル濃紫ノ轉ジタル色ナリ薩  
戒記ニモ五倍子鐵漿ニテ染ル由見エタリ然レバ中古以來ノ濃紫ト名ハ異ニシテ實ハ同ジ此  
袍橡ニテ染ルニハ非レドモ家人奴婢ノ着ル橡ト其色略同キガ故ニ橡袍ト稱スル歟直續  
日本後紀曰承和七年五月戊戌天皇除素服着堅絹御冠橡染御衣云々此ヨリ前五月癸未淳和天  
皇崩ジ同甲申ヨリ仁明天皇素服ヲ着御アリテ此日ニ至リテ素服ヲ除テ橡染ヲ着御セラル是  
猶一周ノ間ノ凶服也其證ハ後紀ノ七年五月ヨリ八年六月マデノ文及西宮記裝束部ヲ參考ス  
ル時ハ明ナリ事煩キガ故ニ此ニ略ス夫中古以來ハ萬物名正シカラズシテ附子金染ヲ橡ト稱  
シ或ハ深紫ト稱スル類多ケレドモ續日本後紀ノ比ハ然ラズ彼紀ノ比ヨリ橡染ト稱スルナラ  
バ正シク橡ニテ染ルト見エタリ且天曆御記曰西宮記天曆八年正月廿二日侍臣女房等出修明  
門外除紫服着皂衣云々此皂衣ト云ルモ橡衣ナリ橡ハ爾雅ニ據ニ桐ト同字書ニ桐實爲皂斗實  
外有房可以染皂トアリ皂必橡染ナリ故ニ家人奴婢ノ橡ノ衣ヲモ日本書紀持統天皇七年紀ニ  
詔令天下百姓服黃色衣奴皂衣トアリ如此ナレバ凶服ノ橡モ奴婢ノ橡ト同ク橡ヲ以テ染ル歟  
然レドモ奴婢橡令式ニ行ハレ其令式ノ中間ナル承和ノ比ニ同色ヲ以乘輿ノ凶服トスルコト  
穆ナラズ蓋和歌ニ藤衣ト賦シ來リ又凶服ノ鈍色ト混タル說ナドノ有ルヲ以テ察スレバ凶服  
ノ橡ハ色淺キナルベシ凡凶服ハ錫紵モ薄墨染鈍色モ青黒ク又鼠色ナド云モ有テ多ハ淺黒也  
然レバ橡ニ茜ヲ加ヘテ深ク染ルヲ奴婢ノ橡トシ茜ヲ加ヘズシテ淺ク染ルヲ凶服ノ橡トスル  
ナラン歟袍ニ限ラズ總テ凶服ニ橡ト云ハ皆此色ナルベシ黒橡袍西宮記衣服條曰帝王雖隨以





〔三年間記〕令曰、凡天皇爲本服二等以上親服、錫紵○中コレ天皇傍非ヲ絶トイヘドモ、其近親祖父母伯叔父姑ノ如キ、心喪錫紵ヲ着ルナラン、錫紵ハホソキ麻布ノ淺色ノ黒染ニテ、今ノコキ鼠色ノ類カ、三等以下ノ爲ニハ雜色ヲ服シテ、雜色中ノ白練衣ヲ服セズ、白練衣ハ國ノ尙ブ色故也、然ルニコレ天子ノコトヲ云、士庶人ノコトニアラズ、サレドモ錫紵ノ淺黒色ナルコトハ同ジ、桃花藥葉、指貫ノ頭書ニ、花田淺黃色也、鈍色赤花田也、ウツシ、此トホリ同條ニアゲタレバ、鈍色ト花田ハ別ノ色ニテ、花田ハ淺黃色、鈍色ハ淺黄ニ赤ノカヽリタル色ト見エタリ、又同書ニ名目抄喪服篇ヲ引テ云フ處ニ、錫紵天子黒服、或黒裝束、直衣皆在之、素服サイミ、綴纓冠直喪之、亮闇之時、天子外不用之、類燕尾也、赤漆沓同、無文扇表裏花田、鈍色花田染也、亮闇之時、殿上人四位以下、役時不着之、此說ニテハ錫紵ハ天子計リノ喪服ニテ、黒服ハ上下通用ノ喪服ナリ、用處ノ料モ、或ハ絹或ハ布ニテ、心々ニ制クルト見ユ、サレドモ此通用ノ喪服ナリ、素服ハサイミ綴着之物也トアレバ、初喪ノ時計リ用テ、後ハ服セザル歟、重服二字此處ニ干カラヌコトノヤウ也、此レ服ノ輕重ヲ云フ計ナレバ、服色ノコトニテナシ、繩纓冠ハ父母夫主君ノ爲計リニ用ルナリ、否モ同コト也、扇モ花田ナレバ、淺黃色ニテ無文ナルノミ、鈍色ハ花田染也トイヘルハ、前指貫ノ釐頭ニ云フ處ト異也、指貫ノ處ニテ見レバ、赤花田色也、椶ハ黒色也、染色延喜式ニ見エタリ、桃花藥葉卷末、衣色事トイフ條ニモ、又曰淺黄青鈍花田淺花田、鈍色師說ウツシ花ニテ染也、東山左府又云、花田ニコキ色也、アサニビハ花田、此處ニテハ色々ヲ一處並說タレバ、紛レヤスシ淺黄ハ一トホリノ淺黄色ナルベシ、青鈍ハ赤花田ノ藍カチニ染タルナラン、花田ノ下ニ濃薄ト注アレバ、一色ナラザル花田ヲ云フ故別ニアゲタルナラン、花田淺黄トアルハ、尋常ノ花田染ニテ淺黄ト同色ナラン、此處ノ鈍色、ウツシ花ニテ染ルトイフハ、淺黄ニ紅花ヲカケタルニヤ、赤花田色也、東山左府名目抄ノ說ニテハ常ノ花田ニテ淺黄色也、或ノ說ナレバ、藍ニ墨ヲ入テ染ルト云ヘバ、青黒キ色ナ

云は、今の世に民家の葬送に、麻の肩衣袴を薄藍に染て、あさぎ上下とて着る事あるも、其薄墨の類にて、昔の青鈍の遺風なり。

〔貞丈雜記<sup>内事</sup>十六〕一忌服と云事、忌は人の死たるけがれを神事に忌憚る也、服は衣服の服にて、きものなり、人死したる時かなしみの間喪服とて、うれへの時着る衣服を着する也、その色はうす墨色とて、ねすみ色の布の衣服を用る也、常に用まじき色也。

〔安齋隨筆<sup>前編</sup>十三〕一錫紵 シヤクヂヨとよむ、天子の凶服の名也、錫はスベとよみて、鉛に似たるカチ也、紵は玉簫に麻屬とあり、此凶服は、麻布を錫色に染るゆる錫紵と云也、此色は薄黒色ビズミイロ也、<sup>ウ</sup>スに染て、薄く藍に染れば、錫のサビたる色になる也、是を青ニビ色と云、凡凶服ハ鈍色<sup>イロ</sup>ニビ青鈍色<sup>ビイロ</sup>のニツ也、常には忌む色也。

一椶衣 ツル<sup>バ</sup>ミノキ<sup>ミ</sup>とよむ、椶は櫟樹<sup>イチヒノ木</sup>也、俗の實也、ツル<sup>バ</sup>ミ<sup>ミ</sup>と云、俗此椶を搗き碎きて煎じ染むれば黒くなる也、濃く黒く染たるは下賤の庶民の常服也、薄黒く<sup>ウ</sup>スミ<sup>ミ</sup>染たるは凶服也、天子も錫紵を脱たまひて常の吉服には移らず、暫く黒袍とて、椶の濃黒く染たる御袍をめす也、其後吉服也。

一ウツフシ色 是も凶服の色、即ちニビ色也、是は五倍子に少し鐵<sup>カ</sup>葉<sup>チ</sup>アロを加へて染れば薄黒くなる也、染草は替れども、色はニビ色になる也、白膠木<sup>ツノキ</sup>と云、又<sup>カ</sup>の枝に五倍子生する也、五倍子をフシと云也、フシは皮の中に何もなく空虚也、中のウツロなる故、ウツフシと云也、スルデをフシ柴と云も、五倍子の生するゆへ也。

一藤衣 是も凶服の異名也、藤の蔓の筋を取て、糸にして織たる布を藤布と云、是下民の麻衣と並べ用る常服也、位ある人も凶事には美服を着せず、麻布藤布などをニビ色に染て着する也、哀傷の歌、藤衣をよめり。

〔類聚名物考<sup>凶事</sup>〕椎柴染衣 しひしばぞめのきぬ

喪服の鈍色は椎柴にて染る故榮花物語にも、人々多くかくれ給ひし時は、今年、は山々の椎柴の枝も折盡されんと云し事見ゆ、是即ち、椽染にして、櫨<sup>なぐ</sup>の木の葉にて、その實をつるばみのかさといふ物にても染る也、鼠色の凶服也、よりて是を歌にも、椎柴の袖ともよめり、

〔筆のみたま<sup>後五十四</sup>〕中昔は總て喪には黒き色の物を用ひたる事なり、<sup>略</sup>中其黒き色を喪の服の色とする事は、漢土の風の移れる事なれども、黒き色は色の盡きたる者なれば、何國にても大方は尊ばぬ色なり、日暮れば物の色も見えず、くらみたるにても、其色の盡たるなる事は知るべし、魯西亞國の事どもを環海異聞に記して、夫に別れたるものは多くは、黒装束を成し云々、尼寺へ入るなり云々、こゝに居る僧尼皆黒衣なりと云ふ事もあり、僧の墨の衣きるも意は同じ、さて右の世繼物語の文につるばみといへるは、櫨の實なり、それにて黒く染るなり、天皇の御袍に麴塵あり、そを青白の椽といふ、染法も共に延喜式にあれども、それは黒くするつるばみとは殊なり、伊勢氏の説につるばみとは連食<sup>れんじき</sup>にて、他色を兼たるなるべく云はれたり、喪の服のつるばみと別なれば心得置べし、猶喪の時、天皇も其めせる、錫紵を脱せ給ひて、後常の御服をばめさず、黒袍とて、椽の濃くて黒色なる御袍をめすなり、其後に又常の如くは改め給ふ事なり、錫紵といふ紵は、字書に麻屬とある物にて、錫はすゝなり、紵にて製り、錫のさびたる色に染るよしなり、それゝがてにび色なり、其に青き色の加へるを青鈍といふ、其二色は喪服の色なる故に、常に忌む事なり、又調度などをも喪の色にては黒くしたる事も物語書に見えたり、<sup>略</sup>中さて又中昔には喪の服を黒くしたれど、猶古き世の如くする事絶はてたるにもあらず、又其後には白きを喪の服として用たるなり、海人藻芥に<sup>略</sup>中鎌倉ニハ、白布ニ墨ヲチト入テ、薄墨ニ染也、尤以道理ニ叶者也ともあり、其薄墨染なるは、古き方の風の廢れすて有しにて、都の手ふりは已く變れるなり、猶

ズ、衣服令ニ家人奴婢ハ椶ノ衣ト、義解ニ椶ハ櫟木ノ實也、以椶染縮トアリ、コノ義解ハ唐韻ヨリ  
 出タリ、抄ニアリ、爾雅ニ據レバ、椶ハ桐ト同ジウシテ、櫟ト同ジカラズ、桐實ヲ爲皂斗ト、實ノ外ニ  
 有房、可以染皂ト字書ニ見エタリ、和漢皂ヲ以テ卑賤冠服ノ色トスル事、其例少カラザレバ、凶服  
 ニハ非ズ、アレドモ、一條禪閣令ノ地、及攝摩裝束抄ニ、椶ノ衣ハ、櫟及藟灰ヲ以テ染ト、彈正式ニ、公私ノ奴  
 婢及女從、椶ヲ上ニ出タル白着ルヨシ見エタルモ、令ニ謂ヘル椶ニ同ジ、中古以來家人奴婢ノ名  
 絶タレバ、此衣モ從ヒテ絶タリ、又西宮記喪服ノ條ニ、帝王一周ノ間着黒椶衣、侍臣等依宜旨衣之  
 ヲシ見エタリ、玉海養和元年、壽永元年等、諒闇ノ時ニ、兼實公椶ノ直衣ニテ出仕シ、名目抄ニ椶諒  
 闇ノ時、殿上人四位以上着之トアリ、此外椶ヲ以テ凶服トセル事故、擧スベカラズ、然レドモ未其  
 染式ヲ見ズ、蓋和歌ニ藤衣ト詠ジ來レルヲ以テ察スレバ、錫紵ノ色ニ類シテ淺黒色ナルベキ歟  
 且椶ト鈍色トヲ混ジタル説モアリ、夫錫紵ハ布ニテ作り、鈍色ニハ移シ花ヲ加ヘテ、各椶トハ異  
 ナレドモ、同ジク諒闇ノ服ナレバ、三品共ニ大ニ異ナルベキニハ非ズ、然レバ家人奴婢ノ着ル椶  
 ニハアラデ、一ツノ凶服ノ名ナリ、又薩戒記ニ椶色ハ五、倍子鐵漿ヲ以テ染ル由載セ、飾抄ニ四位  
 以上ハ椶ト云ヒ、續世繼物語ニ椶ノ衣ト稱セルハ、並ニ當世ノ四位以上ノ袍ノ色ノ事ナリ、抑延  
 喜式ノ服色ノ制、一位及二位ノ大臣ハ深紫、三位ハ中紫、四位ハ深緋ナリシニ、一條ノ院ノコロ  
 ヲリ、四位以上其色一同ナル由小右記ト見ユ、但此時ハ猶紫ニ染タルナルベシ、此後白椶ニテ此  
下恐有  
 脱文有 二三位五、倍子鐵漿ニテ染、又ハ下ヲ蘇芳ニテ染テ、上ヲ藤ノ枝、又ハ柘榴ノ皮ニテ染ル由  
 桃花藥葉ニ見エタリ、終ニ紫ヲ轉ジテ、黒トシタレドモ、椶ヲ以テ染ザレバ、家人奴婢ノ椶トハ色  
 異ナルベシ、其色紫トハ稱シ難ク、而モ名ナキガ故ニ、薩戒記等ニ椶ト稱セルナルベシ、但椶ハ卑  
 服凶服ノ名ナルヲ、高位ノ色ノ名トセルハ誤ナリト云傳フル事然ルベシ、故ニ一條禪閣逍遙院  
 等ハ都テ椶ト稱セラレタルヲ見ズ、如此ナレバ三色差別アルベシ、



無文引青花於兩面六骨也六骨事不齊主上御門御服御扇黑骨散薄其上引青花以字林所見致沙汰云々はこまなし又非細骨

〔重豊朝臣記〕元文二年四月十八日參院○此月十一日御門廟於洞中對談略中

一扇夏の扇にても末廣ニテモ黒骨ホリナシ又ハ地紙ハ紫白地淺黃此中ニテモ實ハ常ノ扇ノ繪ヲ掛タル物ナレバ地紙ハ何色ニテモ不苦ナリ骨モ黒骨ナラデホリ有テモ用來事トゾ此度于白地常ノ黒ク染ズホリ無キヲ用ユ尤無繪

〔有徳院殿葬送記〕御葬送之節○中末廣ハ黒骨白骨之無差別勝手次第之事

〔西三條裝束抄〕衣色

青鈍花田濃色也鈍色ウツシ花ニテ染之又云花田染也又蘇芳ニドクサヲ入テ染ト云青花ニ用色ト云鈍色黒ミヲ入ルトモ云諒闇之時直衣指貫勿論表袴表ノ袍此色ナリト云云諒闇之時殿上人以下着之袍染色也從本官之時不着之必着位袍

〔衣服次第〕ねすみ色の衣服はいま／＼しき色なり着すべからず鼠色は白きに少黒みさしたる色なり本名はにび色鈍色と云て服者の衣服の色なりの服者とは父母兄弟など死しての素服を着する人を云鼠色は素服の色なり一名はうす墨色ともいふなり常には此色をかりそめにも用べからず凶事と吉事をわくは禮の道なり

〔古事記傳十〕鈍色は移花にて染と云は黒染はあまり見ぐるしき色なる故に少しにほひあらせんとて後に青みを加へたる物なり故に青鈍こじなど云名もあり又青花に墨を入て染むと云るも同じこれらはみな後のことにて本はたゞ墨染なり服假間事と云物に着服者可用鼠色其色或墨許染之或墨入移花といへり

〔羽倉考二〕椽ノ衣君臣吉凶分別之事

椽ノ衣ノ中ニ赤白ノ椽青白ノ椽白ノ椽等ノ品アリ○中上ノ三色ハ並ニ吉服ナル事明ナリ唯椽ト稱スルハ古今吉凶共ニ此名アリテ明ニハ決シ難シ略愚意ヲ回ラスニ極メテ一色ニハ非

〔重豊朝臣記〕元文二年四月十八日、參院於洞中對談、

一沓ハ墨染之所、雖略儀用中塗漆のツヤトリテ用也。○此月十一日中御門十一

〔名目抄表〕無文扇表裏花田、不重文、

〔飾抄上〕一扇

重服首書扇保元二十一廿八、或秘記曰、重服之後初出仕、扇鈍色、至于扇者、夏冬改之、諒闇扇事冬扇如尋

常、但不置文云々、兩度諒闇藻壁門院。○後細河后後堀川院、或置文、夏扇槿花色、薄香、村濃香、村濃或

壯人散薄云々、

〔南嶺子三〕神前へ白扇を忌む事。○中喪中につかふは鈍色の扇子也、

〔安齋隨筆後編十三〕一扇骨白黒之事

貞丈云、公家にては凶事にて素服を着する時には、無文の黒色の物を用ゆ。○中されば扇も黒は

ねを用也、吉事には必ず白骨を用也。○中公家に凶事に黒を用るは、右武家には吉事に白ほねを忌み、

公家には吉事に黒ほねを忌む、是は公家武家にて裏表の違也、

〔薩戒記〕正長元年八月○日有二十七日御佛供養。○此年七月二十日參入公卿。○中

殿上人

少納言長政朝臣。○中

右兵衛權佐明豊。○中

已上兩人。○中扇黒骨不影、只細骨也、用淺黃紙。重

〔建内記〕嘉吉三年三月十八日甲戌、今日向門前、訪子息藏人左少辨資重。○中

資重凶服。○中扇ハ淺黃花田色ナリノ紙ナリ、骨ハ何トアリシヤラム、

〔親長卿記〕長享二年六月廿五日、月次御連歌也。○中源富仲裝束。○中扇、

〔平月記〕仁治三年二月二日甲寅、入夜相扶、堅根所勞、參左相府、數刻申、承難事。略中  
御束帶之時、御帶事

申云如何、仰云、未辨是非、重申云、可被申入道殿、其故者、素服人、用烏犀、輕服人、用斑犀、是正儀歟、而輕服公卿、猶有用烏犀角之說、爲之如何、大治中、右記有不審、可召覽正本於宗平卿、歟之由申之、

〔名目抄〕喪服赤漆アリ赤重喪之時皆之、亮闇漆時天子之外不用之查時天子之外不用之

〔西宮記〕臨時服者裝束

赤查王公黑查黑草〔深窓秘抄〕華旋有服、查亦查、鈍色裏也、諒闇查、无文章、綠靴、淺黃平絹也、

〔飾抄〕諒闇靴查保元元或秘記曰、靴、无文章、綠色目、靴帶不插、靴底淺黃絹、

重服查事保元二十一年八月廿八、或秘記曰、今日始出仕、裝束重服、赤查裏鈍色、

〔殿曆〕天仁二年三月廿六日庚午、予服假也。略中故關白殿藤原通時、不着重服、えいを卷着、黑查、

〔中右記〕大治二年八月十五日壬申。此月十四日太未時許、廣親爲大殿、使入來云、略中御服如重服、

欲令着給事、申云、如此事、御志也、何事候哉、但赤御查者、不可用歟、是一條殿御故也、

〔三長記〕建永元年六月廿日庚午、入夜、左大將殿藤原家實、令參院給重服布衣。略中從西洞院而四足參

給、先是以經示送云、故殿。藤原其經、此年三月七日薨御時、康和知足院殿內覽之後、御拜賀之時、令用黑查給之、由

予。藤原長銀申之樣覺悟、仍申事、由於入道殿之處、不御覽及可隨長兼申狀、此事慥不覺之由、答了、自御

車下御之間、以經云、御查朱黑共相具、可從汝計、予答云、康和之例、樣事有樣覺悟、然而猶不審也、答云、

故殿御時、申此由之條者、一定也、然者、可用黑查之由、答了、仍着御黑查、

〔明月記〕建永元年六月廿日酉刻許、參九條殿、大將殿御裝束了、令參女院御方給。略中今夜以經、於

此御門奉黑御查、知息院殿內覽時、例云々、予按之猶無此、如何、又用塗者、出御之時同、可、用一度、御出二查、甚奇、以經沙汰也、但強不問答、披露無由之故也、

御大刀秀吉持之彼不動國行也雨綿に相連者三千餘人皆烏帽子藤衣を着す

〔西宮記〕臨時四服者裝束

牛角帶帶玉用烏犀角

〔飾抄〕中一帯 牛角帶玉用烏犀角 重服之人用之諒闇之時用之但近代公卿以下多用犀角帶也

〔桃華藥葉〕斑犀帶通天公卿諒闇等凶服着用之

〔左經記〕長元元年二月十一日丙子結政了余追着座頃之右衛門督實權中納言經朝左兵衛督經通輕

依女院別當也宰相中將資平服依爲故皇太后宮大夫也件兩今日輕服人々烏犀丸袴

〔中内記〕康治元年六月十三日仰云重服帶は用藥輕服時帶は用布なり

〔台記〕久安四年十二月廿四日戊寅兩位今麻呂着帶兼長朝臣着輕服并帶具在別記

〔台記別記〕久安四年十二月廿四日戊寅三位娘着故尼公服唯着帶不卷衣除服以前着無文白衣雖元三

此

〔玉海〕養和元年十二月五日丁未御入棺事高倉后平尊忠僧都基輔朝臣并女房四人陶院殿別當

侍已上各以紙結爲服帶結之參 十八日庚申今日第二七日也中今日酉刻余及大將着御服侍居也

師有觀先共濃色也余先於家中着直衣樣無其鏡出外乙方向同方着素服重服帶也歸

日進勳文入之後大將於同所着之先是於家中着布衣依余例輕服帶麻布布卷紙也其色雖黑用輕服帶四條

宮後冷泉后御時知足院殿忠實原例也

〔心記〕建久三年四月四日三七日也此年三月十三日今日素服人々皆橡衣冠予如此右大將如日來

位袍但平絹黑染也中講筵之間人々皆着素服右府右大將不被着只被置前右大將云素服着之

時不必帶云々見或記予不帶也只着初日許おびをして七々御佛事之時者只素服許着而帶者前

二置也



〔重豊朝臣記〕元文二年四月十八日、參院於洞中對談、

一冠は飾りを拂ひて、羅はこめおりの事なれども、是も常の冠のふちなどをつやをとりて、飾をとりて用るなり、尤略儀也、于此度用之。○此月十一日中御門十一 綱も文をとりて、常の古きを用う、卷纒は高倉へ頼覺悟なり、

〔言成卿記〕慶應三年正月五日、陽明御門流、軒別順達廻文、家公可寫置依、仰書寫、自踐祚之日上。○今垂 纒、舊主明孝御前參之節卷纒、

但誓固固關之儀訖比ヨリ、開關解陳儀訖之比迄、六府之人々、卷纒老懸具野劔公卿者他所并路頭垂纒、於禁中卷纒可具野劔、但老懸者可任所意、

御入棺之日卷纒

一清涼殿江被爲成後清涼殿江參上之時、於葛杉戶外卷纒、

烏帽子

〔假服事〕壽永元年正月十四日、參故皇嘉門院○崇徳御堂崩御日參上之後、今日所參入也、前和泉守

季長朝臣出來申參入之由、於右府被命之、雖風病更發、相扶可見參者、於佛前取謁、被着重服裝束、立

帽子黒綾練單、袍同色如恒、

〔建内記〕嘉吉三年三月十八日甲戌、故日野大納言忠秀事、其後日次不宜候間、自然不相弔、今日向門

前訪子息藏人左少辨資重、資重於蓬門下調了、

資重凶服○中烏帽子ハ、ムクノミ色、

〔萬松院殿穴太記〕七日○天文十八年五月中、けふ穴太の御所○足利義へは、所々より香奠を參らせらる、細

川右京大夫晴元○たがね百貫文を持參す、佐佐木左京兆義賢は、烏帽子上下にて、三百貫を持參

す

〔總見院殿追善記〕御輿の前壁は池田小新、後壁は羽柴御次九兄之御位牌は相公第八男御長麻呂、

所存、以柏夾爲凶事、然者諒闇之間、爲凶事卷纓、可爲柏夾、由相存、攝家以下如此、依之種々ノ卷纓之體、卷樣夾樣等各以今案甚異樣也、此度種々舊記引勘處、柏夾全非凶事、勿論御輿振燒亡之時、雖令柏夾可謂非常、不可謂凶事、已春日祭使、公卿勅使等、爲柏夾之由、見通方卿飾抄、春日使、公卿勅使、何可言凶事哉、其人神齋堅固爲吉事、只纓ノ短ク成樣ニ令柏夾也、是燒亡御輿振等、急劇之刻、又ハ春日使、或公卿勅使等者、爲長途之間、爲進退自由、非卷纓令柏夾歟、卷纓ヨリ柏夾ハ、柏夾甚以短也、其體卷纓ノ少キ物也、柏夾之體舊記引勘委細加思案、此度令覺悟了、然者卷纓事諒闇記中右記以來、諸家名記引勘處、卷纓垂纓義ハ委細ニ記之、柏夾ト記置タル事、一箇度も無所見、大永記大永六年纓ノ卷樣只內方ヘ卷之也、或說吉凶有差別、凶事時外樣ヘ卷云々、此說薩戒記ニ不審之間、予今度內方ヘ卷也、多分此定也、尤於隆康者爲指、雖非職達之仁、逍遙院以下、可然人現在之間、各爲此定者、定而可有由處歟、又引勘薩戒記處、正長元年八月二七日御法事、爲所役參入之殿上人之中、右兵衛權佐明豐兼服今無文冠卷纓先垂纓示合云々、臨期卷之如常、由者、常之卷纓勿論歟、於高倉家卷纓吉凶差別、曾以無見所、又柏夾爲凶事之例、無所見、延寶七八年、打返シテ被卷タルハ、故永敦卿今案之間、其儘六年之所爲、可爲本說之由、令覺悟之間、今日此定調法了、其體、

如此



挾左方

左右義分明之所見、無之、何方ニテモ無苦歟、白木柳木、委細如延寶六年記也、  
二條殿、日野辨等、同前ニ相讀、今日遣了、

權大納言卷纓如此常

ノ纓ヲ左前ニ卷テ柏

挾兩方ハスニ切り左

方ニトデテ白木柏挾

ナリ

圖羽林中國羽林今日

如此柏挾黑塗内方へ

卷之有日蔭糸



前

權辨卷纓如此柏挾白

木ハスニソガズ後愚

昧記ノ說ナリ基爲左

閏八月廿四日、花山院前大納言、中院前大納言等、着諒闇服參内、中院裝束青鈍鼠色へ少青色也、指

貫花田、花山院大納言、鼠色裝束、指貫同前、扇花田黒骨、卷纓内方へ卷之、柏挾右黒塗、

〔基量卿記〕元祿九年十一月廿三日、小笠原左土守參本所諸事、此月十日申沙汰傳奏等、可參會、由之

間參入了云々、

一今度御卷纓可令奉仕、無紋不御纓、塗漆自評定衆被下給了、抑卷纓事、吉凶有之由、先年延寶六年

諒闇時種々有沙汰、人々卷纓之體區々焉難決、向永敦卿之處、於卷纓吉凶傳受、又舊記無之、唯如

常卷纓可然也、於本者白或墨塗、卷纓之時、相交之間、於此度者爲早速之間、白木可然由被命然者

諒闇延寶七年主上御卷纓永敦卿奉仕之時、裏ヲ表ヘ打返シテ、如卷纓被卷、是凶事之卷纓之由也、此

義尤可然由秘說歟之由相存之間、同八年後水尾院諒闇時、主上御纓、并清閑寺故一位子、高倉民

部等、其通令沙汰了、然者此度も可爲其通由存候處、延寶六年、故亞相永敦卿所存尤也、同八年之

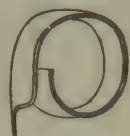
度ハ、人々色々凶事卷纓之義令沙汰之間、以今案打返シテ被卷歟、第一延寶凶事之刻以來、人々

十日、今日彈正少弼始卷纒出仕、其體不普通、左相府御命云々、  
則圖左



如此也小輪どもに  
外方へ卷之、揆木墨  
塗也

〔後中内記〕延寶八年八月十九日寅刻許法皇水〇後御惱危急、遂以崩御、廿日、篤親朝臣定經朝臣、道  
經朝臣等、今日卷纒參内、



内方へ卷之、纒拔又柏挾黒塗、如此右方へ插之、日蔭糸其儘、三人共如此、廿三日、今日權大納言權  
右少辨卷纒伺候、昨夜自御入棺卷之、



藪其外一兩人

庭田卷樣

是次將要抄之說可  
然歟猶可尋也

勸大納言如此也云々  
御葬禮供奉之節如此  
也云々  
坊亞相物語也



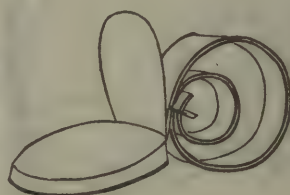
卷樣如高倉白木挾  
左方

外方へ卷末ヲ巾子  
ニ付左方ヲ挾也

云、此說薩戒記不審之間、予今度内方へ卷也、多分此定也、  
 〔基量卿記〕延寶六年七月二日、抑今度卷纒事、○後水尾后人々所存不同、醍醐少將、中山中將等、從崩  
 御日卷纒、松木今城等、從廿一日卷纒、大藏卿持明院等、從廿六日卷纒、其外皆悉廿七日以後也、不卷  
 纒、雲客有數輩、不甘心事也、

山科卷纒仕樣

此類十餘人



如此有小輪挾左方  
 木墨ニテ塗

高倉流

此類數輩予用此說  
 了



右方挾也白木無小  
 輪

將<sup>李保</sup>、黑染平絹袍、平絹張指<sup>其色薄</sup>、於袍、無文冠卷纓、御件冠只以較張也、是諒闇冠也、於素冠、千將者、先例平絹也、如何、凡近代常冠、皆無文羅也、甚不可、然冠師失故實也、此人、今日始著御服也、種宰相中將<sup>其定、此人又今日等祇候、始著御服如亞相、公卿直衣冠卷纓所爲也</sup>、

〔後成恩寺關白諒闇記〕殿上人卷纓兩說也、安元松殿<sup>基房原</sup>所爲、下御簾之剋於雲客者、可卷纓云々、

建久山槐記<sup>明月記同前</sup>殿上人皆卷纓云々、御御葬日卷纓、其後垂纓不可然、一說亡者在<sup>御入棺所役事之時</sup>家之時卷纓、葬後垂也、

雖有一說不甘心事也、自初垂纓者亮闇服以前猶可垂之歟、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今晚丑刻許、自局有使者云、主上<sup>如門後土</sup>漸可有御事之樣也云、

云、仍着衣冠馳參、既有御事也、<sup>略</sup>仍今夜祇候、自然之先規也、<sup>略</sup>但裝束者、今晚馳參時之體也、別

不相着卷纓者、有御事以後各卷纓卷纓之事吉、時之時者、外方へ卷凶事之時者、內方へ卷、是諸家多

分之說也、<sup>寺流者、依家、用卷纓也云々、勸修</sup>予今度內方へ卷了、<sup>方ヲ云フナリ</sup>山槐記云、吉事凶事共內方

へ卷也、當家近代受中山家之說之間如此、今日卷纓人數侍從大納言四辻中納言、正親町前中納言、

山科中納言、源宰相中將、予等也、帥卿、勸修寺中納言、守光朝臣等、不卷纓也、子細見前、侍從亞相息子

公條朝臣、雖卷纓猶不掃眉、尤不審之事也、侍從公音同隆康等同前、於新藏人諸仲者、予加意見、令掃

眉畢、人々所存尤不審、凡東山左府所存等者、有御事皆參申之時、掃眉可卷纓云々、以此說文明度後

花園院崩御之日、即時馳參之人數、內前權中納言公兼卿侍從大納言實隆卿、于時皆爲頭中將、亂中

警固之間、卷纓者日比之沙汰也、於眉即拭之參仕、是則依正親町故一品之諷諫也云々、今度侍從亞

相所存如何哉、不甘心之由有演說之人、

〔二水記〕大永六年五月三日凶事條々、<sup>略</sup>中

一卷纓事、崩御後則卷纓、但今度<sup>此年四月七日、後柏原崩</sup>一兩人不然、參記錄所之時卷之、候本殿之時不卷之、

如何、自餘皆卷纓也、從踐祚之日各垂纓也、但衛府官人、依警固卷之、御倚廬之間不卷之、但一兩人

有卷之仁、此儀可否如何可尋決纓ノ卷樣、只內方へ卷之也、或說吉凶有差別、凶事時外樣へ卷云

分、先日注進候了、自里第卷纓事、用自崩御日卷纓之說之輩事候歟、小野宮一族并德大寺日野等之家、自崩御日、不論御葬前後卷纓、參內并舊院候用、彼說之輩賜素服之日、自里第卷纓候當家說、亡者御坐之程卷纓、御葬禮已後垂纓候、仍賜素服之時、臨期卷纓、雖未着諒闇服、猶至除服日卷之、御倚廬之間、着諒闇裝束若吉服候事者、私推着用之分也、於素服者、以日易月、十三箇日間、公私着重服之儀候間、不依私服之吉凶、可爲着素服之由候歟、延久江記意、十三箇日之間、着件素服、夙夜可祇候爲本儀、然而依難堪、推着私服、須用無文云々、然者不可依私服吉凶之條勿論歟、若中間垂纓候者、私除素服歟之由、可有疑候歟、且與不賜素服之人不可有差別候哉、又雖賜素服之人、還御本殿已後者、依未着諒闇服、垂纓尤可有理候歟、以建久記意、廻料簡候、此外更無才覺候、不足御信用候哉、依貴命及委細候、其憚不少候也、誠恐謹言、

十一月八日

定親○中

秉燭之程、着布衣吉服、薄青、顯文、紗生單袴衣、參舊院、萬里小路大納言時房、吉服、直衣、卷纓也、此事疏、示合予之旨、若破、題、予意、見、右、凡、彼、所、存、以、垂、纓、被、庶、幾、然、而、猶、卷、纓、見、歟、○中略、少納言益長朝臣談云、自昨夜賜素服之殿上、人九人十人之內、高經、不出仕、結番、每夜三人可祇候倚廬殿上之由、所被催也者、今夜我參入之、彼朝臣問可卷纓歟之由、答可卷之由了、又藏人重仲中略、丞兼、言長所爲爲可、九日戊子、辰刻、着直衣卷纓、依、替、同、也、即、倚、廬、之、間、武、官、不、帶、弓、箭、并、纓、之、例、也、然、而、纓、者、猶、卷、之、例、也、、參內、午刻、人々參集、葉室中、納言宗豐、衣冠、卷纓、藏人、權、右、少、辨、長、淳、來、帶、卷、纓、賜、治、部、少、輔、知、定、衣冠、藏人、中、務、丞、源、重、仲、兼、左、近、將、監、也、衣冠、不、懸、纓、是、依、賜、素、服、御、倚、廬、之、間、不、可、帶、衛、府、具、之、故、也、○中略、今朝左兵衛佐永基朝臣參上相談云、御冠只六位細燕尾冠也、巾子佐波佐須如何、年少比見及凶服冠、繩纓之體ヨリアハセタル體物也、更不似今度御冠云々、○中略

秉燭後參舊院吉服、直衣、于時垂纓、於禁中、若依替、葉室中納言、宗豐、吉服、衣冠、卷纓、如常、四辻宰相中略



明所見人臣口口垂纓說有之歟、又非常儀大祓卽垂纓御祓以前垂纓、雖有例非歟、

〔薩戒記〕永享五年十一月三日壬午、無文卷纓冠、件冠上以穀張也、是諒闇冠也、於素服冠者先例平絹

也、此年十月二日  
十日後小松崩 四日癸未

建久三年三月十八日記曰、藏人左京權大夫光綱來云、自今日欲出仕、纓可卷歟、可垂歟、壽永度、依

予諷諫、民部卿<sup>經房</sup>、<sup>子時</sup>光綱不卷者、答彼時不可被卷之由申了、今度不可有相違、又云明日雖可

賜內裏素服、依衰日不可着之、其後雖爲御坐倚廬之間、猶着綾裝束、可垂纓、答云、可然者、依日憚不

着之、仍不可卷纓歟、無憚之人、雖未着諒闇裝束、已着素服了、卷纓可宜歟、又云來月二日、可還御本

殿、其後以吉日、可着諒闇裝束而更衣之條如何、答云、可着吉服、夏裝束歟、但不可着白襲歟、

如此記者、着素服之後、着吉服出仕、無子細者歟、

今案、日次無憚之人、雖未着諒闇裝束、已着素服了、卷纓可宜歟云々、着素服之後、着吉服出仕、無

子細者歟、

八日丁亥、萬里小路大納言、<sup>時房</sup>送書狀云、

一昨夜素服之儀、於門外臨期令卷纓候了、今日參內番之時、直衣垂纓之由存候、或說自里第卷纓

候者、除服以前、每出仕之度、同可卷之候、於門外臨期卷纓候者、除服以前も、卷垂兩樣可爲其人之

所爲云々、此說叶先例候哉、猶不審候、羣祖所爲も無覺束候、不及勘得候、仰御處分候、彼是勘預候

者、恐悅候、諒闇中吉服之時、當家多以垂纓候、除服以前も吉服之上者、垂纓例候者同く大切候、い

か、被御覽及候らん、每事期參會候、恐々謹言、

十一月一日

時房

返報云

貴札之旨、委細拜閱候了、着素服之後、雖未着諒闇裝束、已着素服之上者、可卷纓之由、建久所存之

是關白被候余問卷縵事被答云向喪家之所人謂亡者卷縵事不如然又於殿上人者垂御簾之則卷縵於公卿者何可然哉只諒闇之時一度卷之可宜歟云々藤大納言實國參入卷縵也八月一日癸酉午刻許大夫史陸職來余召簾前仰雜事略○中又語云永萬度諒闇以前師元朝臣不卷縵而今度師尙卷縵萬人傾奇云々陸職賴幸共垂縵云々於陸職者有所存延久孝信宿稱參喪家之時尙不卷之又嘉承成仲保元師經共以不上縵家例不揚之云々二日甲戌申刻中御門中納言被來風病不快隔簾謁之件卿所存亡者在家之間可卷縵葬禮以後可垂縵云々

〔明月記〕建久三年三月十三日未明雜人云院白河後已崩御略○中此間殿上人等皆卷縵頭亮殿上人皆

可卷縵由示合下官治承垂縵了暫猶豫之間參御前之次殿下藤原仰云殿上人皆可卷縵也者仍卷之了略○中今夜參內之人皆卷縵就經辨參入忠季朝臣一人垂縵宗國朝臣直衣垂縵頗無似宜歟

〔後中記〕仁治三年正月十一日甲午凡今度儀略○四非短慮之所覃昨日有北首之儀云々前右府實高倉大納言實持已卷縵參上云々十二日乙未今日着束帶參一條殿畢其次參閑院乘燭之後於鬼

間有評定事殿下直衣垂縵左相府同前右府直衣卷縵前內府同右大將同予實賴吉田中納言已上垂縵帶劍北山羽林意亡者在室之時於門外散御雲々尤可散之歟但具元土御門右府記也縵不可差別就中今度ノ儀供奉御覽之時更可垂縵於所變之所爲不可然仍有所思不卷縵也爲所之儀頗似存子細歟

〔迎陽記〕貞治三年七月八日法皇光昇霞御事今日未刻前權大納言忠季示送仍家君實原余實原秀馳參殿中乘燭之間右衛門督忠光參仕亮間事有沙汰略○中入夜殿下藤原御參內冠上結家君御直余衣冠可然之由見代々記仍殿下御計問卷之

〔後光嚴院御記〕垂縵事或入御之後於簾中被垂之或御襖即座被垂先規兩樣歟但文永記御襖召頭中將被垂御縵之由有體所見兩樣可爲何樣哉之由關白相尋朕以此所見各之近例分明之上事儀見建久月輪關白記於簾中入御之後令垂給之樣有所見之由關白所相語也其外舊記所載未得分

天曆六年八月十五日、上皇○朱崩○中略此度初七日當御衰日、仍三度○三度二被修之舊臣各着御服、公家定除之、不候院殿上之、上卿只按察一人也、被行神事之時彼若有障爲之如何、仍所被定行也、但依不着美服之制卷、纓皆如輕服、

〔玉海〕安元二年九月十四日丙辰、戊刻藏人中宮大進平基親來、依念誦之間不相逢、以光經傳云、高松院○二條后姝子此六條院七月十八日崩○此年崩御之後、遣令錫紵等之間事、所被問人々也、○中略其子細注折紙持來、兩明法博士勘文六條院御外記勘例二通兩方共等相副也。○中略外記申曰在別文

天曆八年正月、皇太后○藤原經子崩八月廿九日伊勢齋宮雅子○此年四月十一日薨九月五日薨、奏着御錫紵先敘間之問也件天曆御記云、此般不供冠、依期年心喪着重服冠也。○中略

〔左經記〕長元九年五月五日壬午、參院之時卷、纓不帶劍不把笏矣。○此年四月十一日又近來參內公卿以下裝束如常○中略入夜殿下參中宮次參內。○註但於殿御宿所院參諸大夫不卷纓。

〔中右記〕大治四年閏七月四日、參院今日依爲四七日。○此年七月七日攝政殿以下出仕、公卿皆參○中略裏書云、

右兵衛督伊通獨卷纓今日參入也、是本雖可然、近代此議絕畢、而獨存古風、強事歟、只付衆人作法、可有事也、隨俗之儀可宜也、日者又垂纓今日初被卷纓、強作法歟、

〔玉海〕安元二年七月九日壬子、今日不出仕、開見代々諒闇記、關白被參院云々、直衣垂纓云々、如西宮及雜類略說者、亡者在家之間、向其所之人可卷纓、葬禮以後可垂之歟、而於天下諒闇者已別儀也、彼記等所是人臣之儀也、然者不論葬禮了前後總以可卷纓之由有令執之輩云々、又凡於諒闇以前者、不謂亡者有無、可垂纓之由有令存之人等云々、則關白被執此說歟、或云此一家之人可垂之云々、十日癸丑、此日前建春門院○後白河御葬禮也○中略及晚參內、先欲參院之間、門前物忿仍直參內、先

立門外、闕了、彼朝臣凶服也、布直垂、淺墨ニ染之、彼父卿在世、逢父中納言後光喪之時、直垂唯白色、不淺墨、今如此如何、當時大炊御門前內府信宗宗氏着故內府服時、直垂淺墨也、其時故甘露寺一品兼長只可爲白色、歟之由有背語也、

〔親長卿記〕文明三年二月十七日、今日素服事有餘服、宣下云々〇去年十二月二日仍申、剋許參內、  
先日以輕風、尊申一條太閤云、中時內々直垂事可爲如何哉、  
御答云、爲內議之同例、或淺黃直垂爲帽子等不可若云々

〔名目抄〕喪服、細纓冠、天子之時着之、諒闇

〔儀禮註疏〕十一、斬衰裳、五經杖、紼帶冠、細纓、菅屨者、傳曰、〇中、紼帶者、細帶也、冠、細纓、條屬右縫冠、六

升、外畢、鍛而勿灰、衰三升、菅屨者、菅非也、外納、註、屬、勸着也、通風一條、細爲式、垂下爲細、着之冠也、布八十條爲升、

〔論語抄〕九、升ハヨミゾ

〔西宮記〕臨時、服者裝束

切上緒、細纓冠、古以三

〔蛙抄〕細纓冠、重服ノ時着之スル冠之纓也、細纓之時之冠ハ、必ズ佐波ミ巾子也、佐波ミ巾子ドハ、

巾子ノ地ヲ、キラヲアラセズ塗タル也、諒闇ノ時モ、雖着佐波ミ巾子、非細纓喪親ノ外ニハ不用故ナリ、

〔冠帽圖會〕冠帽圖會目錄

凶事卷、纓、服素服之時、卷細ス布張也、卷、機異、  
常儀、心喪、或卷細也、卷、機如尋常、  
細纓冠、天皇服、錫紵時着御、臣下モ亦電喪着之、  
細纓二筋、一筋ハ葉、纓一筋ハ黑布、纓也、

〔深窓秘抄〕卷纓、老懸之時用之、吉禮凶禮共有之、老懸三ノ習有、

〔令集解〕四十、問、要帶漆沓何、答不得、但冠者不制、又白冠者不聽也、

〔北山抄〕四、上皇皇后崩事、付ヒ子萬事



少納言長政朝臣黑布衣着烏帽子

右衛門佐範景鼠色布衣、持衣袴、着烏帽子、左股立、此持衣有光色

〔薩戒記〕永享五年十一月四日癸未、入夜參舊院○此年十月二日、後小松崩、候時座、萬里小路大納言、時、按察

大納言公保園中納言基房、重服布衣、生單、平期、不志、金、染、指貫、練、其色、薄、於、持衣、既短、如何、兩、母、

無二親人切之藤中納言、忠秀、未、內藏頭持俊朝臣、鼠色布、裝束、兄、長、治部卿資宗朝臣、依、無、日、次、未、著、

御服等祇候、一時許祇候云々、唱真言燒香退出、

〔言繼卿記〕天文四年正月廿三日乙酉、今夜女院○後柏原后、豐御非禮伏見般舟院ニテ有之云々、各

被下候供奉帥大納言淺黃紗袴、萬里小路中納言、衣、上、話、持、右大辨宰相、上、話、衣、隆重朝臣、白布衣、松

云、長淳朝臣未、綾持衣、盆、取、次、衣

〔海人藻芥〕僧俗重服事

俗人之服衣者、白直垂也、袖ノ露ヲ令略、トテ糸モナシ紐計也、紐ヲモ略スル說アリ、可爲所意也、烏

帽子モ、コユヒヲ略スル也、○中鎌倉ニハ白布ニ墨ヲチト入テ薄墨ニ染也、尤以道理ニ叶者也、

〔師守記〕貞治三年六月十一日癸卯、師豐凶服直垂、雖可遺陰陽師許之處、下品口道間令略了、

〔師夏記〕貞治四年五月十日、今日大方禪殿○足利義隆、母平登子、略初七日、○中大樹○義被着黑染布直垂折烏

帽子云々、六月廿一日、今日於等持寺名僧等有法事、○中鎌倉大納言、薄墨直垂被着折烏帽子、

〔薩戒記〕永享六年十月四日、未明參內、依神輿入浴之由有風聞也、予○藤原着直垂密々候、和歌所傍

是諒闇裝束、○去年十月二日、後小松崩、其體頗見苦、且非常之儀、衛府官須帶弓箭、然而予未設諒闇弓箭、野劍等

於弓箭者、可用隨身時、○初、也、予未、用、意、之、也、之故也、可謂無念、末代之法、無力事也、但爲用意、如形之物、所相儲和歌所邊也、

隨事之體密々可着、用也、

〔建內記〕永享十一年二月十八日丙申、今日弔、右中辨明豐朝臣父喪、自門外示之、出逢門內、予○藤原

著素服也。○此年十一月十一日花圖崩。

〔國太曆〕貞和五年四月卅日及晚甘露寺中納言藤長入來今日傳奏之後初參故來之由示之長絹狩衣平絹指貫下紙也母喪間也勅喚尤面目歟。

〔薩戒記〕正長元年八月○日有二十七日御佛供養○此年七月二十

殿上人

少納言長政朝臣素服之云。

無文冠卷綴依可取布施着冠之時着烏冠子祿候也布狩衣袴其色如濃墨染似僧衣非津留波美又非鼠色之由有歟可謂物裾長或又稱長剛權也有一人見存之人如常時衣切之云々入尻於左股立中取布施時引

裾此事有不審之人予引助之治承五年正月廿三日高倉院御佛供養大納言隆季卿尻長着座之時引之由見御記然者取布施之時引之可然也

右兵衛權佐明豐素服之

無文冠卷綴依可取布施着冠之時着烏冠子祿候也布狩衣袴鼠色其色事之外薄如何諸長入臨期卷之如常入尻於左取布施之時引裾

已上兩人狩衣袴縫裁之體如淨衣縫越手本各用布下袴略儀歟白大帷如常扇黑骨不影只用

淺黃紙不畫

素服殿上人常時着烏帽子布衣祗候爲事之日取布施之時着冠於狩衣袴者通用也於公卿者

不然衣冠布衣各別也但於指貫者通用也○中

主典代一人十六七歲男院主典代定直沙汰立之歟未知其名

着御服鼠色有光色如花歟如殿上人但裾短如半尻有二親者尻短也但事外短如何此男冠垂纓如何

七日丁亥晚頭着布衣吉服立烏帽子上結持夏具參安樂光院例時程也有寫經參入輩助筆予宿直參入人々○中

略

殿上人

〔兵範記〕仁安元年八月五日、若君○藤原基通着給素服日次○此年七月二十六日基通父基實薨今日丙子云々、即召勘文、大申、油小路殿了、卯時調始戌時可着給、可向戌亥方云々、其色法布、尻長狩衣、同袴、鈍色單、甘子色下袴、令注了、九月十七日丁巳、參西林寺、終日祇候、侍從俊光并對馬守俊成參入下官○平信能布裝束未改、但切狩衣、尻了、廿四日甲子○中略下官初着絹裝束、狩衣生絹、指貫練面、自本依着練指貫、夏服、猶用練面也、鈍色衣單、

〔玉海〕治承五年○養和元年十二月十八日庚申、今日第二十七日也、○此月五日崇德后薨今日二位中將參入、被着鼠色練狩衣、無信範入道來、大將狩衣可切尻○依非役余履可黑之由所令申也、

〔心記〕建久三年三月十九日辛卯、入夜後子着服、○此月十三日白河崩子裝束、生ノ絹之狩衣、練指貫狩衣、尻短是永曆美福門院御中陰、故中御門大納言○宗如此、雖有說々、用此說了、有二親人、尻短之由故入道內大臣殿仰云々、五月十五日丙戌、恒例御供花也、子參入、用黑布衣、左大辨○長同、但日者尻長中陰以後切之也、又親能絹布衣、練指貫生狩衣、右少辨責實、猶用布布衣、中陰以後、可着絹布衣、○中略右府仰不審、叶愚意歟、民部卿經房、如左大辨切尻、棟範朝臣又如中將、絹黑裝束也、親信泰經等卿、猶尻長之由、所傳聞也、

〔三長記〕建永元年六月廿日庚午、入夜、左大將殿○藤原實家令參院給、重服布衣、○狩衣、被入左腰立、此事尻於左、仍重凶服者可入右云々、平家說云、父重服入尻、於左、母入右、主君即可依男女云々、然而入左常事歟、

〔明月記〕建永元年六月廿日酉時計、參九條殿、大將殿御裝束了、令參女院御方給、○直○服○布○衣○〔明月記〕建曆二年十月九日、近日幸人忠綱○父忌着例狩衣、○指出仕云々、自去年喪父、着白生狩衣、○不指

尋常奴袴出仕、至于忌月、着尋常布衣、

〔圓太曆〕貞和四年十二月十五日、歲末也、仍參二尊院、狩衣直衣用、與也、先參萩原殿、申入女院御方於東面御車、寄有御對面、委細心底申承了、成經卿○平綱黑袴、○同下袴、黑帶等也、息實黑朝臣○同布淨衣、尻





るほどの有さま、此文よむ人もあわてにたり。○中中納言もわれにもあらぬ様にて、うすにびの御なほし。さしぬきなど着給ひて、あさましくて居給へれば、人々畏まりて、かうもえまゐりよらぬに、此のあやしのものごも入みだれて、去えたるけしきごもぞ淺ましういみじきまであけたれども。○中御くるまみかどのもにてかきおろして、内大臣殿おりさせ給ひぬ。○中うすにびの御衣のなよ、かなる三ばかり、おなじ色の御ひとへの御なほし。さしぬき同じ様なり、御身のさえもかたちも、此世の上達部には、あまり給へるご聞ゆるぞかし。

○按ズルニ、伊周隆家ノ父、道隆ノ薨ハ、長徳元年四月大鏡榮花物語、保十、日、ニシテ、此左遷ハ二年四月二十四日ナレバ、三月マデ十二ヶ月重服ヲ著シ、四月ハ十三ヶ月目ニテ、輕服一ヶ月著セシナリ、

〔源氏物語三十〕藤うすきにび色の御ぞなつかしき程にやつれて、れいにかはりたる色あひにしもかたちはいと花やかに、もてはやされておはするを御前なる人々は打ゑみて見奉るに、宰相の中將○タおなじいろの今すこしこまやかなるなほし。すがたにて、えいまき給へるしも。○外またいとなまめかしう、きよらにておはしたり。

〔中右記〕嘉承二年八月廿三日今日攝政。○藤初令着輕服給。先於河原爲二條女子曾服帶、則令解除之後、着御簾、御直衣、○此年七月十九日堀河崩

〔永昌記〕大治四年七月廿二日戊戌、今日關白殿。○藤依故院河○白御事、令着輕服給、申、則渡御鴨院、陰陽頭家榮朝臣、勘申日時、左中辨實元朝臣申之、酉、刻着御无文御冠。○藤鈍色絹御直衣同奴持、即以還御近衛殿、御隨身裝束如本云々、閏七月二日戊申、參院、長實卿、毎日御佛三丈、經文本、院御經供、養導師覺基律師、關白。○藤鈍色、御直衣、御輕服也。  
〔台記〕久壽二年十二月廿三日丙申、申、則民部卿來談、酉、刻後家司有成朝臣、覽奏、觀勘申着輕服之

柄箱卷糸、鈍色又ハ黒糸ナルベシ、  
佩緒 鈍色又ハ黒ノ打組緒、無文、

扇 淺木地、白地ノ中、無文、黒骨、透シ影（猫間ノ無之、ルイ）

但淺木地ト云ハ、鈍色ノコトナリ、黒骨ト云ハ、クロ煮ボチ、又ハ澁ヌリヲ用ユベシ、

帖紙 鈍色或ハ白無地ノ料紙

淺沓 沓敷鈍色或ハ白ニテモ不苦、并ニ緒太ヲ用ルモ尋常ノ如クナリ、

以上ノ如クナルベシ、淺木トアルハ鈍色ノ事ナリ、仍テ淺木トシテモ、又鈍色トシテモ、名目ハ異ナレドモ、其儀ハ一ナリ、黒ヌリト云モ、墨ヌリ又澁等ニテヌリタルニテ、漆ヲ用ヒザルノ名目ナリ、

御法事之度裝束（御新葬以後ノ法事ナリ）

衣冠着用ノ具冠（カケ緒侍從以上ハ紫クミ）垂纓（如常ノコトナリ）袍指貫野大刀（又鞘卷モ）末廣帖紙沓等、都テ尋常用ルノ具ナルベシ、

但末廣帖紙等ノ文、色合等、花榮ナルヲ用ヒズ、質素ナルベキ事、人々ノ意ニアルベシ、

直垂狩衣大紋等モ亦尋常ノ如クナルベシ、尤侍從以上ノ懸緒紫組ナリ、但末廣ニ爪紅ナドハ用拾スベキ事ナリ、（中略）

天明六年九月廿七日

直衣

〔榮花物語（五浦々）の別〕かゝる程に、かくみだりがはしき者の中ごもをかきわけて、さる方にうるは

しくさうぞきたる者、みなみおもてにたゞ参りに参る、こは何しにかと思ふ程に、宣命といふものよむなりけり、（中略）内大臣（藤原伊周）をつくしのそちになして、ながしつかはす、又中納言（藤原隆家）を出雲權守になして、流し遣はすといふ事をよみのゝしるに、宮のうち上下こゑをとよみ、泣た

革緒、縹ノ無文、帶取、露革モ同ジ、

扇

編蝠トモ稱ス

鈍色無文、黒橋透シ影ナシ、黒要、尋常ニハ末廣トモ稱スレドモ、凶事ニハ扇ト計カ、又

ハ編蝠トモ稱ス、畢竟凶事ノ末廣キト云フヲ忌憚ルノ事ナリ、

帖紙 鈍色或ハ白

沓 クツシキ鈍色

杖 紫竹ヲ用ヒラル

以上喪服衣冠ノ具ナリ、此外束帶直衣等ノ品、又恩義ノ淺深ニテ替レル品々數多アリ、裝束鈔ヲ考フベシ、畢竟武家ノ凶服ニ引キ合スベキ事ナキユエ不記之、

武家凶服衣冠之具

冠 文ヲ拔キ取り、日蔭糸ヲモヌキ、無文トスル也、結緒ヲ切ラズ、心葉ヲ撤セズ、墨スリニセザルナリ、

但墨スリニセズ、心葉ヲ撤セズ、アゲ緒ヲ切ザルハ、此度ニ綱用セズ、有來レルモノヲ用ユル故ニ略セルモノナリ、別ノ子細ナキ事ト知ルベシ、

卷纓 夾木墨スリ

卷纓、兩家山科高倉ノ定ノ如シ、口傳但文ヲ拔去ルベシ、

懸緒 紙搓

但尋常ハ侍從以上、紫ノ組カケヲ用ユト云ヘドモ、今日ハ其義ナク、紙捻リノ事ナリ、

袍 尋常ノ位袍ナリ

鈍色無文ヲ用ヒザルノ子細ハ、具ニ別ニ口授アリ、故ニ不注之、

單 不着用若着用アラバ、鈍色平絹ナルベシ、

大刀 鞘卷帶取ノ革、縹又ハ柑子革ナルベシ、

凡喪服ニ次第アリ、諒闇服、凶服、素服、心喪服等ナリ、今武家ニテ大樹亮御ノ後、御新葬ト稱セラレルノ度ハ、件ノ品々ノ喪服ノ中、凶服ニ相當セリ、又其品々ノ喪服ニモ束帶アリ、衣冠アリ、直衣アリ、其餘狩衣、直垂、素襖等アリテ、古式制度モ又種々ナリ、今武家ニテ着用ノ義アルハ、衣冠并布衣直垂等ナリ、然シテ其ノ本儀ヲ辨ヘザレバ、式ニ合フヤ、又略シ用ルヤノ事不詳故ニアマタノ喪服ノ中、凶服衣冠ノ事ヲ杜シテ、其本式ヲ辨知リテ後、武家御新葬ノ服ノ着具ノ事ヲ明ニセシガ爲ニ、爰ニ先凶服衣冠ノ具ヲ舉ルナリ、

#### 凶服衣冠之具

冠 無文墨塗、切結緒、日蔭糸、心葉等ヲ省ク、

卷纓 夾木墨スリ

懸緒 紙ヨリ

假令尋常紫ノ組懸ヲ用ル人ニテモ、今日ハ紙ヨリヲ用ルナリ、

袍 鈍色平絹、或ハ布ノ鈍色ナリ、此差別ハ恩義ノ淺深ニヨル事ナリ、又重服ノ人、黒服トテ橡ノ

無文袍ヲ着ス事アリ、是モ亦平絹ト布トノ二様アリ、

單 鈍色平絹、是ハ袍ハ鈍色ニテモ、黒服ニテモ、又布ニテモ、平絹ニテモ、其レニ拘ラズ、鈍色ノ平

絹ナリ、

差貫 鈍色平絹、又布ノ鈍色、各袍ニ從フ、但シ黒服ノ時モ鈍色ナリ、

大刀 黒漆無文、黒漆トハ柄モ鞘モ金具トモニ黒ク塗タルムナリ、如斯凶事ハ、兼テ期セザル事

ユエ、臨期ノ義ニテ右ノ如クナル故實ナリ、又六位ノ帶スル大刀ヲモ、黒漆ト云フ、是ハ柄ハ鮫或ハ鏡子ニテ、鞘黒スリ、金具銀ニテ、尋常ニ用ルナリ、其名目ハ一ニシテ、品ハ異ナリ、混ジ誤ル事ナカルベシ、



被仰出候御書付之寫

覺

御葬送之節、無襲衣冠卷纏、稍卷之天刀を佩、末廣持候事、

但冠之緒は、こよりがけに可仕候末廣は黒骨白骨之無差別、可爲勝手次第候、

右之通り向々江可被申達候

右之如クナレバ、前段ノ如クニ着服アリテ、聊子細無キ事ナリ、

御法事之節衣冠

冠 垂纒常ノ如シ、懸緒四位五位紙ヨリ常ノ如シ、侍從以上紫タミカケ如常、

袍奴袴并調度ノ品、悉ク尋常ノ如シ、

此條尋常ノ儀故不注之ナリ

私に云、凶服の衣冠の用意は、前段に注したるが如くなるべしといへども、譬へば冠を無文にせず、卷纏を故もなくさま／＼に巻きたわめ、夾木も己が心々にいろ／＼に制し用ひ、或は白或は黒になし、扇も白地勝にして、骨には猫間のすかしあるを用ひ、色重ねの疊紙を持人も間間多し、かゝる時節、強て改め訝る人も無きゆゑ、夫にて事足れりとする人、十に七八なり、是全く其主人達の知しめきぬ事にて、衣文に參る人の不覺悟よりの事なり、高倉家山科家の流々、各々其習ひあれば、其事を業とする事、尋常に覺悟あらんには、かゝる時己が主人に僻事のふるまひはあるまじきもの也、予此故を以、今度の考へたる趣きを注する也、事済に及んでは火中すべし、

安永八年三月十二日

嘉樹

〔大塚嘉樹隨筆 三十五〕御新葬衣冠之事

ノ前ノ方ヘカケタル糸アリ、夫ヲモ省ク事ナリ、又心葉ト云モノアレドモ、夫ハ羅ノ中ヘ張入  
テアレバ、聊有メ置ベシ、

纓ノ卷ヤウ、且夾木ノ寸法等、各別ニ雛形アリ、故ニ爰ニ其大抵ヲ注ス、

纓ノマキヤウ并夾木ノチシヤウノ圖

略○圖

夾木寸法、長サ二寸三分、ハバ二分半、厚サ一分半ナリ、

略○圖

右料ノ木、何ト云定メナシ、今案ヲ以テ用ル所、柳ノ木ハ、チバクシテ用ルニ宜シ、且黒スリト云  
テ、墨ニテ塗ルナリ、綴糸麻糸ヲ用ユ、トダツケテ後、墨ニテヌリ汚スベシ、

但凶服ノ卷纓ニハ綾ナシ

袍 四位五位、共ニ尋常ノ位袍ナリ、

奴袴 亦常ノ如シ

大刀 鞘卷

啄木

但シ心シテ用ベクバ、鈍色或ハ縹ノ打組ヲ用ユベキナリ、

蝙蝠 鈍色無地

但今淺黃地ト云フ是ナ、黒骨、墨ニテヌリ、夫ヲ縫ハニテ留メタルガ宜シ、然ラザレ  
ニモ、縹間等、黒要、又ハ白地無文ニテモ難ナシ、

帖紙 鈍色

是又淺木色ナリ、或ハ白ニテ、  
モ意ニ任スベシ、聊チ細ナシ、

大抵右ノ如シ、本式ハ冠墨塗無文ノ羅、并ニ口カゲ糸、心葉ナシ、袍ハ素服、鈍色ノ指貫モ亦同ジ、

尤卷纓ニシテ、夾木家々ノ故實ニテ用ヒ、蝙蝠鈍色無文骨墨ヌリ、黒要目、大刀ハ黒漆ナルベシ、

去レドモ、關東ニテハ、臨期其用意ニ煩アルヲ以テ、右ノ如クニテ事ヲ補フナリ、尤兼テ御沙汰

ノ義、左ノ如クアレバ、本式ナリトテ、袍サシヌキ共ニ、素服ハ難用カラシモノカ、是時宜ニヨル

ノ謂ナリ、

のたびの行幸には、左大臣、右大臣、前内大臣、按察使、大宮、大納言、高倉、大納言、萬里小路、大納言、帥、大宮中納言、中御門二位、侍從、宰相、右宰相、中將、右兵衛督、六條三位以下、侍臣數輩、衣冠に纓をまきて、わら沓をはきて供奉有し、目も當られざりし事なり、當御時、藏人を經たる諸大夫六人、おなじく衣冠に纓をまきて、火をこもして、おんくるまの左右につかうまつりき、

〔舊戒記〕永享五年十一月十六日乙未、今日可有四七日御經供養、○此年十月二日、後小松崩、可參入之由有備、

初臣且今日御法事、可爲女院御沙汰、予爲彼院司、尤可參入之由、答申了、抑明日相當四七日、然而依

日次被縮行之、且有例云々、午刻着衣冠、○須着直衣也、然而安元、建春門院、御初日、并治承五年、高倉院御初日、等内大臣、殿令着衣冠、給仍予去月卅日、着衣冠、

又同日、參舊院、○中右衛門督、歷歲、黑染衣冠、即今度人々、黑染、等參入、

〔大塚嘉樹隨筆 三十六〕凶服ノ差別

凡凶服ニハ卷纓シテ綏セズ、素服ヲ着シテ位袍ヲ用ヒズ、下襲以下笏帖紙ニ至ルマデ、各吉服ト異ナリ、又諒闇ノ服モ差別アリテ、垂纓ノ冠ニ鈍色ノ服ヲ着セラルハナリ、凡テ喪服ト諒闇ト心喪服等ノ事、素服ノ義尋常ニ異ナリ、其次第差別ハ、諸々ノ裝束鈔ニ詳カナリ、然レドモ書毎ニ聊ノ異同アリテ、其分別區々ナレバ、熟々舊記ニヨリテ思惟シ、先縱ヲ考ヘテ、能々異見ヲ考ヘ分ツベキナリ、抑凶服ヲ用ル事ハ、非常ノ事ニテ、臨期ノ恩義ニ任セテ、借古實ニ背カザル様ニ用意アルベシ、然シテ頃日、惇信院殿家宣新ニ薨ジ玉ヘルニヨリテ、御新葬ノ度ノ凶服、爾來同キ御法會ノ服色等、并ニ調度ノ色品、朦朧トシテ僅ニ見聞セシ形狀ヲ注シテ、右ヘニ不差ヤ過チアルヤ、其可否ヲ尋問シ、爲ニ筆シ殘スナリ、聊後昆ノ證トスルニ非ズ、

### 御新葬ノ衣冠

冠懸結紙 文ノ糸ヲ省ク、是今ノ冠ノ文、巾子ノ前ノ方ニ一ケ所、纓ノ末ノ所ニ一ケ所、合セテ二

ツノ文アリ、其様如此、二縫入レタル物也、又巾子ニ日蔭ノ糸ト云ヘルモノアリ、如斯巾子

〔永昌記〕大治四年七月十五日辛卯、予○藤原經堂上參前院河○白御方○中新相公長實、衣冠上着素服、

〔兵範記〕久壽三年正月廿一日癸亥、高陽院○鳥羽第五七日也、已刻着衣冠、參白川殿○中殿上人衣冠○中服者着衣冠、又着素服在簾中、布殿東廿三日乙丑、着衣冠、參白川殿、有一院御佛事、二月十六日戊子、依高陽院御月忌、參白河殿殿上人

〔源平盛衰記〕新帝御即位同崩御、附郭公并兩禁獄事

永萬元年七月○中二十八日○二、新院○二隱サセ給ニケリ○中同八月七日御葬送ア、扈從ノ公卿、衣冠ニ纓ヲ卷テ各步行セリ、

〔玉海〕安元二年七月十四日丁巳、此日前建春門院○後白河御喪家初七日也、余依所勞不參、後聞參入公卿裝束不同云々、源大納言中御門中納言、華山中納言、衣冠垂纓三條大納言直衣吉服卷纓、藤

中納言直衣吉服垂纓、又殿上人皆卷纓吉服、雖不兼內殿上人猶卷纓云々、又經家朝臣來語、一昨日倚廬之間事、晚頭關白吉服參內吉服布衣前關白、吉服只密々儀也、戊刻左大臣垂纓已下素服公卿右大將、藤原藤原

藤原藤原中納言右宰相中將、已上素服卷纓、

〔後中記〕建久三年五月二日癸酉、例講素服人々裝束○此年三月十右府予、○藤原坊門中納言、信實高

三位基右京大夫能季已上橡袍、已上之人衣冠之時、橡袍也、右大將實氏部卿房季左大辨長定已上生黑染

袍、此三人之内、烏帽冠等之時、猶用此袍、民部卿左大辨は、衣冠之時着橡袍、右中辨棟範、右少將敦成朝臣等、如右少將等生袍也、右少辨資實橡袍也、此三人皆內殿上人也、橡袍可然歟、生袍可尋、

〔古今著聞集十三〕ちかくまのあたりかなしかりしは、四條院の御事なり、玉體ここに恙なくて、御

みゆもたぐひなくわたらせおはしまし、に仁治三年正月六日、俄に御不豫の事有て○中九日

寅刻に、御年僅に十二にて、かくれさせ給にし事、たごへをさるにためしなき事なり○中かぎり



悟、但鈍色若白、歟、儘無所見、先度所爲、不覺悟、隨身等定相存歟、可被尋問、束帶、和白色也。重服之人、尙可用白之由、知足院殿有仰云々、何況於諒闇哉、勿論者、

〔玉海〕建久三年三月十七日己丑、入夜爲方違向九條、先是以忠季朝臣、條々事問遣内大臣○藤原忠親、許其中主上○鳥羽、内藏寮御衣色事問遣之、○此月十三日、後白河崩、先々多黑色也、而保元内府記、注鈍色之由、有

兩說者、今度尤可從輕也、保元、儘爲鈍色歟、凡御束帶皆雖爲黑色、於御相大口者、鈍色也、御衣又可同歟、如何者、余向九條之後、忠季來傳返報云、保元度、依衰日不出仕、然而彼時委細尋問所注置也、定無謬事歟、如仰鈍色尤可、宜歟云々、仍卽此旨仰宗賴朝臣了、

〔薩戒記〕正長元年八月十七日丁酉、今日被行稱光院、五、七日御法事、○中略、已刻着束帶、○不帶、御衣、依爲之、登、堂上時可、撤之也、然而有事煩、又近來也、八、講堂、儀、自里第、不帶之、今日又人々所爲如此、不可有

御所爲、御要家之時、束帶、公卿、或帶、或撤之、家々所爲不同、當家說帶、御持符也、今日先到、殿上、帶之、登、堂上時可、撤之也、然而有事煩、又近來也、八、講堂、儀、自里第、不帶之、今日又人々所爲如此、不可有  
日、皇宮門院七、御法事、起、錄、許、中、陰儀之例、選、近、代、記、文、不、得、所、見、儀、應、永、元、年、正、月、十、八、日、先、候、殿、上、皆、撤、御、衣、戶、部、儀、沙、獨、持、符、雖、堂、舍、至、于、無、御、衣、之、故、之、由、見、深、山、御、記、是、御、不、甘、心、事、歟、御、今、日、公、卿、裝、束、事、第、日、有、沙、法、束、帶、衣、冠、直、衣、者、可、在、推、意、云々、先、日、教、豐、禰、示、令、予、答、束、帶、可、宜、之、由、了、今、日、見、之、人々皆悉束帶也、兼可着直衣之由、有自稱、意、云々、不、然、如、何、又、或、人、曰、今、日、三、條、大、納、言、雖、有、行、香、之、時、必、可、着、束、帶、云々、此、事、不、分、明、直、衣、人、列、行、香、例、常、事、也、者、○中略

抵候聽聞所方不着座、又不取布施、不束帶故歟、

〔國師日記〕寛永九年七月十九日、午刻從御城被爲召登城上、○通川、御テブト氣ニ而、今日ハ誰ニも無御對面、雅樂殿大炊殿對談被仰聞ハ、當月廿三日夜御入佛、○中略、廿四日辰之刻、住持増上寺

堂へ出仕也、○中略、御裝束ハ、御束帶歟、御衣冠歟、御袴肩衣歟、御神前ハ、日光御參詣ニ度々御束帶也、佛前ハ如何可有之候哉、思案仕可申上、由大炊殿雅樂殿被仰渡、明後廿一日登城候様ニ、時分之儀ハ雅樂殿より御左右可有之由ニて退出、廿一日午時與へ被爲召御對面、今度増上寺御成之式作法御尋に隨、略言上、中にも御束帶歟、御衣冠歟、如何可有之ト上意候、神事佛事ニ、正略之差別ハ

無御座候、台德院様○家光、父秀忠之義、御孝行之上ハ、何程も結構ニ飽ハ無御座候、御束帶可然候、○下略

古事類苑

禮式部二十九

凶服下

束帶

〔小右記〕萬壽四年正月十八日庚申賭射不參左方膝痛進退非例昨日示頭中將爲令洩奏中將云府生柴田弘近重服者也。在射手內其裝束如何。今朝注送丁故殿御記云應和四年三月十四日賭射云云。左近府生佐伯眞茂重服奉仕射手大將曰依中的者少數令奏事由令奉仕之云々其裝束尋常朝服淺鈍色半臂柳色汗衫染鈍色表袴襪等也。

〔長秋記〕大治四年八月廿八日束帶參尊勝寺。○中今日予着心喪束帶。○此年七月

〔兵範記〕久壽三年○保元正月廿四日丙寅

顯親朝臣服束帶色法

黑平絹袍裏付淺黃張絹 黑平絹下襲 黑表袴 鈍色相平衣 無文冠

〔兵範記〕仁安元年九月七日丁未御法事也。○去年七月二十日二條廟中略下官着束帶

無文卷纓冠 無文位袍 平絹鼠色半臂下襲 鈍色單衣 白汗取 甘子色大口 鼠色表袴裏相表

色子 糖如例 牛角帶 例杏押鈍色裏 笏如例

〔玉海〕安元二年十一月廿二日癸亥已刻少納言信季來申元三之間事此次申云諒闇之間。○中束帶

相單鈍色歟白色歟。是三隨身用濃打其重相單色如何。是四已上事等兵部卿可伺招客之由所申也

則是二位中將元三出立料云々且者與余作法可一同之由被示云々答云。○中隨身相單色忽不覺



古事類苑

禮式部二十九

凶服下

束帶

四三三

衣冠

四三五

直衣

四四一

狩衣

四四三

直垂

四四六

冠

四四七

烏帽子

四五八

帶

四五九

沓

四六〇

扇

四六一

服色

四六二

更衣

四八〇

車及馬具

四八一

雜載

四八三





十日ト云モノ此ニ合フ、單物ヲウス鼠ニスベシ、服ヲ除クコトハ杖期ノ例ニテ推スベシ、大功ハ  
今忌十日服三十日ト云所也、麻上下ハ今都下ノ商賈喪ニ用ル無紋ノ淺黃也、コレ鈍色ニテハナ  
ケレドモ、鈍色ニ似カヽリタルトモ云ベシ、殊ニ時人ノ用フルコトナレバコレヲ服シ、單物ハ服  
セズトモヨシ、モシ木綿ノ單物ヲ服セントナラバ、ウス鼠色ニスベシ、小功總麻ハ、今ノ忌三日服  
七日ト云モノニテ、此ハ別ニ麻上下ヲ制スニモ及バズ、常ノ麻上下ニ常用ノ衣服ニテヨシ、若又  
常々別ニ弔祭ノ服ヲ制シ貯ル人ナラバ、此弔服ヲ用ベシ、此ハ制ノ正キニハアラナドモ、權宜ノ  
制誰カ非トセン、弔服ハ別ニ制置ヲ可ナリトス、麻上下ハ、藍鼠ノ小紋小袖ニテモ帷子ニテモ、藍  
鼠色紋付ナルベシ、又ハ麻上下計ニテ、下ハ常用衣服ニテモヨシ、今人夏ハ白帷子ヲ用ル者アレ  
ドモ、此ハ時ニ於テ喪家及送葬ノ服ナレバ、染帷子ヲヨシトスル也、又時宜ヲ斟酌シテ私ニ定ム  
ルノ服ノミ、必ズ士君子通行ノ定制ニハアラズ、必ズシモ拘泥スルコトナカレ、

ドモ、當時ニ於テハ天下ニ希ナルユエ、斯ル所ハ最貴アルベキナリ、  
〔年年隨筆〕<sup>五</sup>東國にて親の死たる時は、ふりのわざするに、其子いろ、といふ物をきる、絹にて頭をつゝみて、左右へたれたり、猿樂の狂言のゆほうしといふ物に似たり、こは人にあひてもみえざらん料の物にて、意須比<sup>ユスヒ</sup>のたぐひならむかし、いろ、といふは、天子の御服のころおはします御所の名よりいで、服する物にうつれるなるべし、

尾張のなごやにて、人の死たる時子は、白小袖淺黄の上下をきる、これは諸國にわたたりたる風俗なれば、室町殿のころよりの事なるべし、弟姪などは、茶色の上下をきる、萱草色のうつれるなるべし、

〔三年間記〕今五服ヲ別ントスルニハ、色ノ淺深、麻布ノ精粗ニテワカツベケレドモ、ソレモ三日ノ間ニ染出來テ、麻上下ニ制センコト容易カラズ、大意ヲ失ハチバ必シモ深クキワムルコトニアラズ、此ハ自ラノ心得ニテ制スル服ニテ、國家通用ノ定制ナラザレバ、大抵差等アレバヨシトス、故ニ父母ノ爲ニハ、斬衰齊衰ノワカチナク、今世人婚禮ニ用フル、カチンノ麻上下ニ、黒木綿ノ單物ヲ制シ、常服ノ上ニ此表着ニシテ、五十日ヲ終リ、五十日過テハ、麻上下ヲ止テ、單物計ヲ常ニ服スベシ、サレドモ此服ニテ途中ヲ行ベキニアラズ、故ニ喪事ノ爲ニ出ルコトアラバ、麻上下ハコレヲ服シ、下ニハ常ノ小袖ヲ服スベシ、五十日過テハ、人事ニ接ラバ常ノ衣服ヲ服スベシ、サレドモ服中ナレバ、己ガ家ニテハ、黒木綿ノ單物ヲ服スベシ、女モ男ニ準ジテ、黒木綿ノ單物ヲ制シ服スベシ、

杖期不杖期、日本ニテハ各別ノカワリナシ、三十日ノ忌、百五十日ノ服ヲ杖期トス、此服制ハ上ニ云ヘル如ク、カチンノ麻上下ハ異ナルコトナシ、下ニコキ鼠色ノ木綿ノ單物ヲ服シテ、三十日ヲ終リ、三十日過テハ、單物計常ニ服スベシ、不杖期モ衣服、杖期同様ニスベシ、但今ノ忌、二十日、服九

同五郎、同六郎并三浦駿河二郎、及宿老祗候人、少々着服。供奉。其外御家人等參會成群、各傷嗟溺淚云云。

〔池藁屑後十士御門〕院後花園、文明二年十二月二十七日崩の御事は、ごかくして睦月三年廿日餘りに、悲田院といへるに送り奉る、かゝる亂れの折なればとて、道の程は武士ども數多して守り奉れり、何れも體直垂などいへる物の上に、素服を着たるもさすがに物あはれなり、君達なども多からず、忍びたる御さまなり、義政の大臣利足も歩にて御送りし給ふ、

〔鳩巢手簡〕服の義被仰聞候、其初私も常服にて罷在候儀、安堵不仕候、總麻の服申付候半と存候へ共、思案仕候へば、五服の私親とは早替申義ニ候、是は天下へ掛申候義ニ候、既ニ御宗室を始服無之候處、私共御爲に麻を付申事、借禮と奉存候て止申候、彌思案仕候處、是は只今不成義に候、漢土にては、短喪之已後ニ國恤の時は有司服制を議して、間々貴賤ニ依て違申候と見え申候、夫共に初喪の時、葬送の時迄、杯と見申候、三代の時分、斬衰三年と申候、定て大臣貴戚の類にて可有之候、群臣一統に斬衰三年と申義にては、決而有之間敷奉存候、兎角是は當時之制次第ニ御座候、制ニ無之義を、私に服仕候義には不及候、夫を五服の私親と同事の心得にて、自分に服を着申事可爲、非禮増上寺參詣御位牌へ參詣仕候節、一統ニ製斗目長袴にて候、御位牌へは箇様ニ仕候て私家にて麻を着申事、不埒成事にも御座候、略下

庶人服

〔漫錄〕錫紵略中庶人ニハ素服ト云、布ヲチズミイロニ染テ着ス、是喪服也、此服ヲ着スル間ヲ服假ト云、假ハ暇ナリ、今忌服ト云、服ハ右ノ素服ヲ着スル事ナリ、

〔天明錄天〕服忌輕重

我邦モ古ハ、公卿皆素服ヲ着テ倚廬ニ居レリ、略中近年仁孝天皇倚廬ニ居リ、帶經シ給ヘリ、今西海ノ侯國ニハ、父母ノ喪ニハ、五十日麻布ヲ着ル所モ有リ、是モ實ハ定服ノ日數ニハ非ズトイヘ



らんすれ、其もいま／＼しかるまじきにても不候歟と存候如何、凡いまはしき許にて、今案よりは本儀は宜覺候、併申口候、

昨日口口口縱雖童形候、着喪服候程にては、爭不着黒服候哉、然ば如仰布上下、可相叶永萬儀候、信範等識者、併事計申候はしと存候、着袴以前またを不入候事、本説不重候、古來如此用來候之條無、子細候歟、竝心口院宮黒半尻、太不得意候、凶服は極以長裾なる物にて候に、半尻尤不相應候、此段之辭事と存候、仰旨一々愚存同前候、只以口分可申候、由相存候、猶又他人にもやの仰談候らん不存候、治定口上可申候也、

〔親長卿記〕文明八年六月十七日、自勸修寺大納言許送使者云、童形萬里小路申除服宜下否、予覺悟分可示云々、返答云、舊院御代、廣幡大納言光弟、阿婦丸、喪父之時、不申除服、五旬之後出仕、阿庭丸

盛子喪母之時、不申除服、五旬之後出仕畢、可爲例歟、

〔基量卿記〕貞享二年二月廿四日、今夜戌刻、密々有御入棺事、此月二十二日 後四院崩中略此次滑開寺大納言窺

申中略

八條殿十五御供儀、并御着用御衣服事、仰云、尤可爲供奉、衣服之儀は、可有有栖川宮例、於有栖川宮例爲素服、は於八條殿も可爲素服之、童裝束由也、

〔實久卿記〕天保十一年十二月廿日丙子、故院孝今日御葬禮也、中略亦列外有供奉、小兒藤丸着黒布半尻、御車傍供奉、

武人服

〔吾妻鏡十六〕建久十年元正治六月卅日庚寅、午刻、姫君三遷化、同年十四今夜戌刻、姫君奉葬、子親能

龜谷堂傍也、江馬殿、兵庫頭、小山左衛門尉、三浦介、結城七郎、八田右衛門尉、畠山次郎、足立左衛門尉、梶原平三、宇都宮彌三郎最末著佐佐木小三郎、藤民部丞等供奉、各素服云云、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年元仁六月十八日戌刻、前奥州禪門葬送、中略式部大夫駿河守、陸奥四郎、

察卿送狀常盤井宮親王、故金仁可被着服、而爲童體之間、先規希有也、其間事自彼宮可計申之由、所示給也、可爲何様哉、御意之分可計奉云々、予答云、文永九年、奉宮于時六歲、童體之時、母皇后崩御、重有沙汰、爲御着服之儀、依爲童體、每事非如法之儀歟、且禮記此委細御報悅存了、

抑七歲以後、人雖童體着服、法之先規、誠勿論歟、就之服色事、既着服之上は、黒染不可有、子細候哉、何様にも永萬記、尤可爲准的候歟、但其も定着袴以後候歟、雖不足今之比量候、於凡儀は、雖幼年存孝行之儀、何可叶先哲之格言候歟、其上着袴などは、少事にも以凶服非可用着袴候、一期以後實可有其沙汰らんは、於恩意可然歟と存候如何、若宮御着服之體、無袴候條口いかと存候、僻案之至候歟、但如此事、用近例之餘、世々所定候歟、先規難勘得候間、無正體候、此意見恩存之分、不可有後難候歟、爲之如何、恐々、

八月七日

判略○中

度々申承候、本望恐悅候、此事恩意未一決之様々相構被廻、實慮可計承候也、一儀未落居候間未被遂其節候、所詮可爲着服候條々、先以治定候歟、黒服不審にて、着袴以前被着加指貫之條もいまいまし、淨衣袴などの様候はんも、可爲同事候哉、半尻は堅固髣髴物候、是を黒染に成候條、さる體あるべしとも不存候、雖有例々不庶幾候、其儘ひとへ口只白き半尻を更に納候て、袖端を略候はば、着用其上、喪服を令着候由にて候は、中々可然候、是ぞやがて折中とも可申候、但一向令案之儀候、着袴不可有、昔永萬准據も不可有、子細歟と存候、如何風に用本事候、何とやらんも能く不存知候歟、凶事に古來有沙汰事、管見才學非無斟酌爲之如何、  
同八日、又遣之、

黒染雖着袴以前、雖其憚有之、孝者以恩勸之儀候、布の黒染上下、またを入候は、被用之條、同事候哉、之由恩意相存候、白き半尻、同袴も非着服之儀は、尋常時た可被用候哉、將黒染許にてこそあ

候殿上童子重服時着黒椽縫腋、

〔源氏物語若菜〕君は年十歳許、御ぞにまごはれてふし給へるを、まひておこして、中御心につくべき事どもをし給ふやうく、おき出て見給ふに、びいろうのこまやかなるが、打なえたるごもを着給ひて、下

〔河海抄三〕鈍色なり、紫上、祖母の服を着する也、中こまやかなるは、濃の字なり、色のこき也、但

今の祖母の服さまでふかゝるべきにあらず、或又色をはめたる心にも多いへり、然は其心歟、

〔源氏物語九〕くればはてぬれば、おほとなぶら近くとりよせ給て、さるべき限の人々、上侍女放おまへにて物語などせさせ給ふ、中とりわきてらうたくま給ひしちひさきわらはの、おや共もなく、いと心ぼそげに思へる、ことわりに見給ひて、あてきは、今はわれをこそ思ふべき人なめれど、給へば、いみじくなく、程なきあこめ、人よりはくろくそめて、くろきかざみ、くわざうい。ろのはかまなごきたるも、をかしき姿なり、

〔十訓抄十二〕基綱卿、年たけて後、帥に成て下されける時、白河院、年高くなりて、遂に趣く、心ぼそくおぼしめす、琵琶の秘事など、誰にか傳へおかれける、聞召おくべき事也と仰られければ、時俊重通などに、かたのごとく傳へ置侍れ共、其器にたらず侍れば、孫にて候小女に、秘事の底を拂て教へおきて侍りし、もし聞召べき事あらば、かれを召べしと申て下にけり、その後つくしにてかくれ給ければ、法皇かしこくぞ尋置けると思召出て、彼小女を召て、琵琶を開召事有けり、いまだいろなりければ、かうじ色の袴着て、にふいろのきぬどもきて、かき合より三曲まで、敷をつくしてひきたりける、いとゞめでたかりけり、どしは十三にて、いとちひさかりければ、琵琶引の昔がたりおもひやられて、あはれなりけり、

〔後愚昧記〕貞治六年七月十九日、今日申刻、入道中務卿親王、全仁、故式部卿、薨逝云々、八月七日、按

一衣生絹二領

一袴生絹

女房諒開服三人分

一單生絹三領

一裳生絹三領

〔言成卿記〕慶應三年正月十八日、靜寬院宮和宮云々大行天皇明○孝御妹依之御輕服御心喪服等着御ニ付調進、

御輕服

御小褂生絹兩條

御袴生絹兩面

以上裏美濃續紙云々

假箱淺黃鋪

同御心喪御服

御小褂生絹兩面

御袴生絹兩面

以上裏美濃續紙云々

御ボンボリ黒鋪

假箱淺黃鋪

以上高田悉皆受合云々於箱ハ木具新云々

出來、家公內藏頭右馬允以下令點檢、予所勞不爲拜見、廿日迄可出來、野宮黃門內藏頭應對云々、出來之事以家來申入之處、御箱寸法可申入被示申入云々、上箱合本箱寸法於所司代相整、廿日三關東江差立、六七日程にて可相屈、來月四日後被撰日次着御云々、桂御所敏宮孝明皇御輕服之事、調進無御沙汰云々、於御本家被調歟、禁中於口向調達歟、

〔西宮記臨時四〕服者裝束

童子服



得還二人袴色鈍衣生

昨日內藏頭より來

已上以表使進上了

〔隆量朝臣記〕寶曆十二年八月廿一日、諒闇圖○桃服、典侍內侍各一人前、

一唐衣鈍青

一袴薙草色

命婦一人前

一唐衣鈍青

一袴薙草色

得還二人分

一衣白

一袴鈍青略○

〔忠言卿記〕安永八年十二月九日己未午刻參內○中、准后御素服已下附橋本前大納言調進○此年

十九日後  
桃圖崩

諒闇服

女房衣典侍、掌侍、命婦、各一人分、單、柑子色、平絹、唐衣、生、平絹、白、襷、於、裳、白、生、平絹、掛帶同、袴、薙草色、大腰

御素服

御小褂准御服、面、黑、襷、被、准御服、右、襟、也、御袴襷、面、高、柑子色、

心裏御服

御小褂鈍色、生、平絹、面、同、御袴、薙草色、裏、同、御扇青、鈍色、黑、骨、水、御扇也、

〔仁孝天皇御凶事記〕弘化三年二月、女房諒闇服三人分○此年正月二十六日、仁孝崩

一唐衣典侍、內侍、料、生、絹、白、襷、二、領、命婦、料、同、青、鈍、一、領、二、

得還二人分

也。

女房素服不見之可尋只公卿之類歟如形之儀歟衣之樣大方見之生平絹一重薄墨色也袴ハ、  
ン。ザ。ウ。ノ。色。ノ。如。シ。其。外。白。色。ア。リ。何。物。哉。女。房。ノ。衣。ハ。鈍。色。也。單。袴。等。ハ。  
橡。此。色。ハ。薄。黑。キ。色。也。フ。シ。金。ニ。テ。ウ。ス。ク。染。云。々。柑。子。色。是。ハ。黃。ナル。色。也。鈍。色。此。色。ハ。ア。サ。ギ。ノ。如  
シ。付。花。ニ。テ。チ。ト。墨。ヲ。入。テ。染。云。々。

〔基量卿記〕延寶六年七月五日從內藏頭先日亮關水尾后德川和子崩後御服以下來續左。○中

典侍前掌侍同

一辛衣平絹深 一單平絹柑 一袴萱草色柑子色 一懸帶平絹深 一裳白生絹

命婦

一辛衣平絹青鈍黑青 一單同典 一袴同典 一懸帶平絹青鈍 一裳白生

得還

一白生絹單衣 一袴青鈍色仕立

〔後中內記〕延寶八年八月廿一日候內女中三人素服着用之儀。○此月十九日昨日御治定之由以勅使告勾當局素服人可認散狀由殿下右府被命之。○中

臣下女中素服十八人前也布鼠色。○略

此內女中素服五人前以阿茶奧へ進了。

閏八月廿日

一女中服

單衣柑子 袴萱草 帶鈍色掛 薄衣鈍色

右三人前

着御衣一領必可被染墨色歟、

〔長秋記〕大治四年八月九日、今夜女院后鳥羽着御服給、中黑御裳唐衣、同黑御衣一領、同甘子色御

袴御服所調進、予云、先例、小褂、歟、唐衣、是素服也、

〔玉海〕文治四年三月四日庚子、此日余及女房着內府其通藤原服、共鼠色也、是康和例也、先於別棟屋着

冠、無文直衣等、其後降庭上着麻帶、是例女房只着服衣不着帶也、

〔増鏡三衣〕まことや其とし三〇寛喜十一月十一日、あはの院土かくれさせ給ぬ、中家隆の二位

のむすめ、小宰相ときこえしは、おのづからけちかく御らんじなれけるにや、人よりごに思ひ

まづみて、御ぶくなどくろくそめける、

うしと見しありし別れは藤ごろもやがてきるべき門出なりけり

〔親長卿記〕文明三年三月十五日、依召參内下、室以勾當内侍上者、白綾小袖、白草色袴也、去年十二月二十

七日後被仰下云、〇下

〔和長卿記〕明應九年十二月十一日辛卯、今夜倚簾渡御也、八日後柏原、此年九月二十女房於北陣、各着

素服給、皆練貫ヲカヅキナガラ同練貫之上、着之給、臺所女官、同自出納手取之奉着之、局女房在

傍介錯之、此間源諸仲指脂燭令着畢、於對屋傍即脫之給、後預給出納畢、

〔管別記〕大永六年五月八日庚寅、女房被參倚簾、〇此年四月七日、自今夜諒闇服也、青鈍唐衣、柑子色袴

也、素服三人計着之、先三人被參、其後自上薦以下之女中衆令參給、次御膳也、女官同青鈍單、柑子色

袴、

〔二水記〕大永六年五月八日、今夜可有渡御倚簾也、〇後奈良、此年四月七日、此間典侍掌侍命婦等、於北陣

御膳從臺所備之、御厨子所之沙汰歟、得選女官各一人素服也、單許事也、薄墨色染之也、後日見之

其路敷着素服、即脫了被堂上、〇註此後供御膳、御陪膳女中也、此儀了、非素服女房被參候歟、心付、花染

どろくてもおはします。

〔源氏物語推四十六〕先ひとり立出て、中入宮木丁よりさじのぞきて、此御どもの人々のぞかう行ちがひすゞみあへるを見給なりけり。こきにびいろのひとへに、くわさうのはかまのもてはやし。たる中々さまかはりて、花やかなりと見ゆるは、きなし給へる人がらなめり、おびはかなげにゑなして、すゝ引かくしてもたまへり、いどそびやかに、やうだいをかしげなる人のかみうちきにすこしたえぬ程ならんと見えて、末までちりのまよひなく、つや／＼どこちたうつくしげなり。略中くろきあはせ。一かさね、おなじやうなる色あひをき給へれど。大入宮これはなつかしうなまめきて、哀げに心ぐるしうおぼゆ。

〔源氏物語寄四十〕女御夏ころもの、けにわづらひ給ひて、いとはかなくうせ給ぬ、いふがひなく口をしき事を、うちにもおぼしなげく。略中宮藤生女二宮所はましてわかき御こ、ちに、心ほそかなしくおぼしいるたるをきこしめして、心ぐるしくあはれにおぼしめさるれば、御四十九日過るまゝに、忍びて参らせ給へり、日々にわたらせ給つゝ、見奉らせ給くろき御ぞにやつれておはするさま、いどらうたげにあてなるけしきまさり給へり。

〔左經記〕長元九年五月十七日甲午、書出可給素服之男女給行事所。略中又中宮藤生女一後并一品宮藤生女内親王院一條同可令着給者又奉於女院上。東門院彰子者只可令着御帶給之由有議矣。七日後一條四月十

〔中右記〕大治四年八月七日壬午、依昨日召着直衣參院、又關白殿令參給治部卿東依召被參於新院。鳥殿上聊有被食議來九日女院。后璋子可令着御服給也。七日白河崩日者依御產事延引也。一年御服定可思食也。然者可着素服給、又御帳等御裝束御膳物具等、何様可被沙汰哉。可量申由以左衛門督實行卿被仰也。人々一同相議申云、御卅九日兩院不可着御素服也、只常御衣墨色可被用、打



婦人

不及言上予内々右之趣可達叙開由被仰也畏了之由申入歸了、

〔後成恩寺關白諒闇記〕女房裝束理髮如常白絹唐衣白掛單（花田衣、不着打衣）

〔榮花物語二十六〕楚王の夢御さもの女房車（向侍藤原館子藤原）おほくもあらずふたつぞつかうまつりたる、それもからぎぬうるはしきがうへにまた藤の衣を着て、それも涙にしぼるばかりなり、

〔榮花物語二十七〕衣の珠まことかの左兵衛督公（藤原信）の北の方正月三年（萬壽）廿餘日のほごになくなり給にければ、（略）中この姫君、くろき御ぞのほころびたるを見て、

かたみとてめたるいろのころもさへおつるなみだにくちぬべきかな

〔榮花物語三十三〕（略）は倍しと歎く女見四月九年（長元）十七日の夕かたうせさせ給ぬれば、（略）後一御おく

になる夜女院の兵衛内侍、

かたみとてきればなみだの藤衣しぼりもあへず袖のみぞひづ、（略）中一品宮（後一條皇女は、

十一におはします御ぐし御たけにたすこしぞたらせ給はざりける、女院上（一條后）見奉らせ

給はんどきこえさせ給へば八月つごもりがたにわたらせ給くろき御ひさへがさねにくろき

御こうちぎたてまつりて二どころ（京子内親王、及母妹御子内親王、同）ながらおはします、けふぞ大宮后（後一條

もすこしおきあがらせ給て見奉らせ給ふ、（略）中女院にはまちつけきこえさせ給ひて、いどゞし

きもよほしなり、（略）中御年のほごよりも御ぐしはながううつくしうて、くろき御ぞたてまつり

つ、おはします、いみじうあはれなり、

〔榮花物語三十四〕（略）院上東門院后の西のたいのみなみにしかけて、一品宮内親王（中）おはします、きたひ

がしかけて齋院内親王はおはします、いどゞうつくしげにて、いろの御ぞすきなるに、いど

くろき御ぞかかねて奉りてわたらせ給へる、いどあはれなり、（略）中四月は故院一（後一條）の御はてに

て、いどゞけさなく聲におごろかせ給ふ、御心のうちごもいふかたなし、九月までは宮達なほい

只如主上着御明後日可除御者大藏卿爲房沙汰件事

〔中右記〕大治四年七月十三日當故院河○白初七日然而未被始例時也、十五日辛卯初七日佛供養、權少僧都實覺爲講師、諸僧喪衣甲袈裟指貫裝束也、

〔中右記〕長承元年九月十二日殿下忠通○藤原仰云、僧者輕服不着、用明法博士明兼勘云、輕服俗家之作

法也、於僧者無其文者、然者奈良法師參春日御幸は如何乎宗忠○藤原申云、僧輕服者、不候之由所承也、近代內御修法僧輕服出來之時被改定也、然者可在院初○鳥御定歟、

〔台記〕久壽二年十二月廿九日壬寅高陽院二七日中○僧侶鈍色裝束甲袈裟導師若

〔續世繼はらのみのきの院の皇子は、それも仁和寺の宮性の覺におはしますなる、法

印元にならせ給へるごぞ聞えさせ給ふ略○中さぬきの法皇、かくれさせ給へりけるころ長寛

御ふくは、いつかたてまつるご、御むろ性の覺よりたづね申させ給へりければ、

うきながらその松山のかたみにはこよひぞふちの衣をばきる

ごよませ給へりける

〔滿濟准后日記〕正長元年二月十九日、當御所足利義教、此年正月十八日兄義持薨、重服輕服之間、可被着何乎事、經興卿奉行トシテ關白二條○右付一○兩家へ被尋申中予意見ニ云、所詮今度可被着御輕服、

條旁叶其理、又可宜存者也、且ハ周ク諸家へモ可被尋仰歟ト云々、此儀尤由則御同心、今日被着輕

服布御道服法體○義教初爲僧、至是還俗故稱法體、着輕服事、知足院忠實○藤原例云々、爲執柄計申了、

〔基量卿記〕延寶八年閏八月七日、及晚有召參妙門、今度門跡方妙門可着用素服也、○此年七月後四院女御明子

從表向、

言上者素服等宣下可有之事、先例也、當時衣服之體分明ニ難知、唯以了見可有、着用其體黑麻衣、凡僧黑衣體之物也、袈裟同前、蛇結等以紙捻結之也、分明ニ雖難存知爲古義、着用候依之從表向、

僧徒服

〔常十〕參禪尼御前賜一盞了。八月一日壬子早旦進習俗禮物。○中依凶服雖不參付奉行伊勢七郎左衛門尉。四日丙辰天明之時分蒙之歸來於道場着凶服。直垂折烏托子

〔海人藻芥〕僧俗重服事。僧ハ灌頂之師匠也。俗僧者衣袈裟ヲフシ金ニ染帶モ同染ヲ令着用珠數モ

桐ノ木也。扇ハ無紋ノ淺黃地也。不如法時者袈裟ニテモ帶ニテモ一色フシガ子ニ染ル也。法流相續ノ仁ハ一廻着服自餘ハ五十ヶ日以後令除服也。但其モ可爲所意也。

〔釋氏要覽〕這終服制。五杉云。師服者皆同法服。但用布稍愈純染黃褐增輝云。但染蒼黻之色稍異。

於常制有人呼墨野衣爲衰服蓋昧之也。言衰者衰音世或作穢俗禮喪服傳云衣上之物則有袷袂衰燕尾

衣帶下尺負版等同名衰服者其衰之制用布長六寸象六腑薄四寸象四時綴於衣左襟廣袤當心

言衰者摧也象孝子心思親摧傷也故稱斬衰齊衰齊音齊焉衣本不名衰蓋從此布以名也。

〔三中口傳〕一中陰間事

中陰間裝束用布是准俗家所申也。扇冬ノハ濃夏ノハ無薄也。

自四月着生奴袴テ冬ニナレドモ不練自九月ハ着練奴袴夏ニナレドモ不用生是着始タル物ヲ

一周忌之間不改儀也。關白口入粗有先規歟。

衣并奴袴可用平絹。

儀法次行恒例御佛供養日中陰修臨時佛事是定事也。着素服者群居籠中不露頭重服時上齒固之

外云強飯云節供事不違例又吉事猶可行又不可乘新車着服人元三出仕雖無先例只不可指出歟

又元三裝束吉暇不可有巨難又彼事役人勤御陪膳事尤可被除之雖除服猶月忌等ニハ着墨色先

例不可勝計。

〔中右記〕永久二年十月七日戊申仰云。○白院雖出家後可着御錫紵歟。此月明河明法申云可着御

者仰云御衣體如何民部卿被申云布御衣可宜歟。中今日戊刻法皇令着御錫紵布御衣一領云々

心喪服

冠袍大口帶襪沓扇

以上如恒

劔沃懸

下重透黃或青朽葉平絹

半臂同上

表袴面鈍色裏紅

單白帷同上直衣平絹云々

四年六月廿日、按察卿實職問原○中積鬱無極之處、恩向候間爲悅候、光嚴院殿七月崩○去年御事誠天下

之大歎、無申限候、輕服近來不着之條、流例候歟、而祖父母養父母者、着心喪服事等歟、竹園中事無才

學候、正慶九條入道關白忠薨逝之時、故三會院入道關白子時大將歟、着心喪服之由注置之嘉曆故

入道相國之時ハ、無其沙汰候、但五ヶ月之間ハ、不及出仕候也、代々嚴親現子之間、於祖父者不及着

依旨、八條相國薨去之時、三條左府着心喪候云々、不及出仕、如内々着用裝束者、不注置之間無正體

候、他事期後信謹言、

判

〔親長卿記〕文明三年正月七日、候御寺雖非番各邸候也○去年十月廿七日後花園崩生、同色、可給素服、日次第未定、已前着用如何有例歟、人々稱此旨、且迷惑不及脫、先例有無可尋知、殊

今日爲惡日云々、

〔延喜式〕伊勢大神宮凡禰宜大内人雜色物忌父小内人、遭親喪、不敢觸穢及着素服、卅九日之後、祓清

復任、其服閑之間、侍候外院不預供祭物、亦不參入内院傍觀服中亦同

〔神祇道服紀令秘抄〕一服トハ、二親ハ十三ヶ月、親昵ノ服日數ホド、墨染ノ衣ヲ服シテ、神事ニ不出

仕、故ニ服ト云也、今ハ平人ハ墨染ノ衣ヲ服スル事ノ稀也、

〔吉田家日次記〕應永九年五月三日乙酉、既ニ御事切レケリ○吉田ト人々告之丁、十八日庚子、着

服○吉田口則除之、其儀行水之後降庭上、向王方着之帶也、青侍清種持來贖物陰陽師大藏少輔某

等居折敷、起限迄之、不及下行祿物吉服之時可、并大麻取之、懸口則帶手時清種、自後來取帶也、大麻

給之也、此陰陽師臨水祖母之時、先人被服、付之、

賜之、大麻贖物帶等流棄河原主方、此後子堂上、着佐比烏帽子白直垂紐以白糸結之、縫、等、花田扇如



亮陰時賜素服臣下於蒞麻凶服之五旬以後依宣下雖除之御一廻中懸志之舊臣猶着黑染是依心喪通用儀也此條且貞應亮陰之時野宮左府所記分明歟然者御重喪御着始之儀依難被沙汰然着御黑染心喪御服之條於先規者雖不覺悟爲臨時勅新着御只可在時宣哉次五旬以後着御事是又先規雖不詳御一廻十三ヶ月中也難被略者是又臨時沙汰可有訖應歟且輕服重雖服日數過猶着除有其例歟五旬已後着御聊似有准據乎但如此服着御裁縫大略爲同日歟遠遠境難義歟女工所參彼境之非其沙汰候條可爲啖止此條々可被仰人々

〔國太曆〕延文二年十一月十四日先日一條前關白

藤原經通

進狀之返報了次有被尋事是心喪服菱形

文袍不審云々仍引勘推量分一紙注獻之頗有入興之返事

菱形文袍不審之處御了見趣誠可爲如此候歟次違文尤其興候以事次可尋申之由相存候之處連連忘却候つ心喪裝束中菱形文袍と申候物者いかなる物にて候やらん欲示預候

〔國太曆〕安元二年十一月一日

經房卿記云參院中宮大夫

藤原季隆

被參入依招引於公卿座懸懃申其次尋

申喪服間事

略中

命云心喪色說々非一或違文袍折下襲謂之心喪又近代淺黃奴袴其色既青鈍色

也縫殿寮式染淺黃用新安然者淺黃者黃色近代淺黃者青鈍也可然之人不着之夏間多着之甚無

謂之由中院右府公雅定常被談之吉事之時不着淺黃是其色爲鈍色用心喪之故也云々

心喪菱形文袍事不得所見而此記文違文袍定非常轡唐草歟然者以如裏菱文綾用之歟聊有違

迹矣

〔後愚昧記〕貞治三年七月廿六日戊子四條三位隆鄉卿問題

不審條々

一心喪服與諒闇服同物歟束帶直衣布衣等委可被注下候

心喪服與諒闇色目相違流例也

之由所思召也此條又如何又心喪直衣如何申云御心喪事可依御志歟此事近代雖絕着御可爲正儀歟御直衣事先例樣々歟但長元公記注此事是素服之人除服之後可着心喪裝束之沙汰也其記之趣叶道理之由存之彼記云除服以後可着心喪云々可用無文裝束神事之時參舊院及殿上人々可用綾家中之時可用鈍色直衣若參內之時可用薄色直衣青鈍奴袴云々彼時之定尤有由且是其時殿下被定歟可依此例哉但彼時經賴卿記除服之日卽仕出用綾冠同袍之由所見也同時之人裝束猶以相違尤有不審御問答及數十遍然而其詮只如右但仰云此條二條殿御所爲又同尤可然之說也云云

〔吉黃記〕正嘉元年七月十四日丙寅今日院後令除錫紵御着御心喪御服五日後鳥羽後源在子此月睦後睦御祖母五ヶ月可被召云々當日依新右少辨可注入之

〔國太曆〕貞和四年十一月十八日辛亥一昨日被仰合條々今日以春宮大夫申入之中

一御心喪御服御袍

如法儀皆悉平相勿論也但或下着物用有文之條存兩說歟可在時宜哉

〔國太曆〕文和二年正月十六日新院御方就陽祿門院御事崇光母后藤原季子去御着服事可

申沙汰候旨自南方御所被仰下而奉行廳官以下太難催出候由申子細之處於錫紵儀者可被略心

裏御服黑染御裝束已下可着御今月十七日以前可有沙汰候由思食相構其以前可沙汰之旨雖仰

下十五日中不及沙汰五旬候者十七日又已廻來所詮雖過後日於着御者不可被開歟之由被仰下

然已過五旬着御可爲何機哉又爲心喪着御黑染不可有子細歟且內々御談申候可然之人之由也

被仰下候間所申談也云々者此御服以日易月之儀十三ヶ月可着御云々

予公藤原返答云

新院御服心喪被用黑染之條不可有子細歟稱重裝凶服者尚麻服也黑染者細々服心喪通用物也

喪服今納言所爲可謂得禮余欲着此服今日已刻自字治○藤原賴朝被仰云可着吉服因之不着心喪  
服悲哉從父命失敬君禮矣余以下皆不帶劔不取笏三位中將忠雅帶劔取笏祖父左大臣例云々

廿九日壬申今日前待賢門院御法事也○中今日人々裝束同五七日但左大臣有仁着心喪服異土

御門大納言鈍色平絹半臂下重表袴鈍色自餘同土御門大納言後日以此事申字治被仰云左大臣

所爲未聞事也後日左間被示云令染青鈍之處所染誤也

〔台記〕久壽二年十二月四日丁丑民部卿○藤原宗輔中納言中將參御堂云々五ヶ日間皇后宮宮司着輕

服參御堂俊通師光亦同先帝(近)盛憲服心喪服藤原除放尼上喪服期年用此服

〔平戶記〕仁治三年正月廿四日吉田中納言送消息間云舊院日此月八御事口入之仁云々而於素服

者有子細不召入人數云々然者只可着吉服歟任嘉承之例若可着心喪歟之由相存但心喪近來已

絕了中々可有傍難哉可計仰給口入之者一向吉服着之條可有其難哉進退未思得難蒙處分他事

期見參云々

心喪誠可然而近來絕了雖不被着何事在哉所詮可在實慮歟之由答了公基卿着心喪云々

後聞參閑院之人纓事不伺云々

殿下 左右兩府 前內府 帥 吉田中納言 右兵衛督  
已上垂之

前右府 大炊御門前內府 右大將 高倉大納言實持

已上

雲客大略垂之云々定嗣朝臣在此中忠氏伊長朝臣等卷之

伊長朝臣他所參之時猶卷之云々不可然事也

二月七日己未未後參一條殿以良被仰云右大臣殿○藤原實經令除素服給之後可令着心喪給

今日殿下以下人々、解劔不取笏也、先々於本所被行法事時、公卿帶劔持笏云々、今日殿下不令帶劔給也、仍人々隨殿下御作法不取笏也、然而源中納言顯雅、左大辨爲隆持笏被候也、着素服上達部三人、能後具實經忠依、廣中不持笏也

殿下示給云、後朱雀院御法事、於本所被行之日、依宇治殿仰諸卿解劔置笏也、昔時光卿心喪時、着黃朽葉下襲者、

故土御門右府消息云、寬弘之度卷纓垂纓相交云々、又經長卿治曆之時、雖着心喪裝束、依爲老者不卷纓云々、是兼日示合人々垂纓者、以是知老者強不可卷纓歟、

廿日丙寅、今日故院御法事也、午時許着心喪裝束、垂纓相具宰相中將參入法勝寺、略○中皇后宮權大夫

能實予、二人治部卿、能後新中納言、藤宰相、左宰相中將、宗輔皇后宮權大夫、略○中皇后宮權大夫

伊通大貳、經忠人々皆心喪垂纓御誦經、在東中島十五所御誦先御誦經、使右少將公教朝臣、心喪

入公卿座前敷圓座一枚、着此座、漸及事欲給度者、使右中將實衡朝臣參入、二藍下襲垂纓兩院殿上

人取布施、或心喪、或例裝束、垂纓卷纓相加

〔長秋記〕大治五年六月廿一日辛卯、自內相府有仁、源有御消息召御日記、長元九年後一條院御法事、諸

卿皆柳色下襲、內大臣○藤原敦通獨着無文下襲云々、此儀可着無文、歟將可着尋常服歟、次冬柳色夏可

改何色哉、申云、尤可令着心喪服給也、御身先朝恩尤深、不可知食餘人、心喪服有兩說、可令付略給歟、

重御返事云、然者尋常の表衣ニ、半臂下襲は、唐衣の青朽葉、表袴ハ只絹を青鈍ニ染天、白單衣を可

着、柳紅裝何日ニ可着乎、廿四日御塔供養可着否、又申云、廿四日不可令着御法事并御正日可令着

給也、

〔台記〕天養二年○久安元年九月廿六日己巳、前待賢門院○島子五七日也、略○中土御門大納言宗輔、着心

喪服、冠表衣有文、機杵如常、青朽葉半臂下重青鈍衣袴、已上文玉帶垂纓上皇有期年之喪、群臣皆可着心

喪服、冠表衣有文、機杵如常、青朽葉半臂下重青鈍衣袴、已上文玉帶垂纓上皇有期年之喪、群臣皆可着心



心喪月人々着薄鈍色給歟、且今所思給者、元日御錫紵了後着御鈍色如何、又依非指御服、可有四方拜、其間不可着鈍色歟、然者猶聞食藥酒之時、着給御生氣御衣、其間事如何、縱雖無文御冠、聞食御酒之時、隨宜令垂纓給如何、至御衣色最薄色歟、至應和例、可令着青鈍給之、由指以難申、三箇日間、着御鈍色事、可在御定、應和例、非元正如如何、亦如應和例者、可服御鈍色也、唯又々可從勅定、由重以示之、還參內可仰御衣色事、其後參關白可申案內者、又々四方拜者、可出御也者、從內頭中將送書云、四方拜并三箇日間例御衣云々、御心喪任意事也者、端書云、過元三日之後、本服程可着御鈍色云々、

〔飾抄上〕橡袍

治曆治曆○後土御門○師

此事、着遠文歟、可尋、

〔知信記〕大治四年七月廿五日辛丑、關白殿、

○藤原忠通着心喪服、○此月七令參院給、冠文御

〔中右記〕大治四年閏七月十日明日五七日御法事、

河人々可着心喪、○此月七束、由有風聞、尤可然事也、

十一日丁巳、今日五七日也、新院、

羽令修御佛事御也、仍午時許、初着心喪裝束、參入、冠表衣如常、下

青鈍色露口大口紅單衣、白、無文、玉、但垂纓也、今日人々多卷纓也、予老屈之上垂纓、又有先例之故也、衆人有難氣、○中

人々裝束、藤大納言經實源中納言顯雅已上二人例裝束、蘇芳下襲垂纓、大納言爲本院、○白可被

着心喪裝束歟、不然如何、心喪人々、予、院司右衛門督實行、院司新中納言雅定、左兵衛督實能、左宰相

中將宗輔、皇后宮權大夫師時、左大辨爲隆、此中予宰相中將、左大辨垂纓、人々不具劔笏也、殿上人頭

中將忠宗、頭辨雅兼、如常蘇芳下襲垂纓、此外殿上人除素服之外、多々常裝束也、但依志着重服人多、

着常裝束、帶卷纓、○忠基朝臣、憲尋先例處、非諒闇時、如此大事例、左大辨示送云、寬弘重服、心喪吉服

相交、長元皆心喪、治曆相交也、心喪垂纓、古來卷纓、近代不然也、就中先人應德之比垂纓之由注也、

仍爲隆可垂纓候、是隨近例之由記置也、○中

裏書云

う思ひの外なる身のうさとなきしづみ給へる御さまどもいと心ぐるしげなり月ごろくろ。う。ならはし給へる御すがた。う。す。に。び。に。て。い。となまめかしうて、なかのきみは、げにいとさかりにて、うつくしげなる匂ひまさり給へり、

○按ズルニ月ごろくろうトハ、濃キ鈍色ノ重服ヲ著タルヲ云ヒ、うすにびにて云々トハ即チ心喪服ニ更ヘタルナリ、

〔小右記〕寛弘八年七月十七日戊子、右大臣、内大臣、余、○藤原實資皇太后宮大夫、彈正尹、右衛門督、○藤原實資左兵衛督、實資不可着鈍色、只可着心喪服、實資鈍色者、○此年六月二日一條

〔小右記〕長和四年四月二日辛亥、右衛門督女御實資殿藤原實資卒去、三日壬子、資平爲余子、仍非服喪、然而實亦資平妹也、今日午四點着服、六月十二日除服、是同吉平所勸也、資平參内之日迄、無吉貞、僅無忌日相當神事、但三ヶ月可令着心喪裝束、表衣外須用平絹下重、無文冠、青鈍裝袴、然而頭藏人可有用意、仍可用綾冠、白表袴之由相示了、

〔小右記〕萬壽四年十二月四日庚午、巳時許式光來云、禪閣○藤原實資昨日入滅、卅日丙申、頭中將顯基來、傳勸語云、實資主上○後一條可着給御心喪御衣、敕人々說無一定、下官實資早可來示者、余申云、可依永祚例、彼間有慮外事罷居、亦爲宰相之間、不知雲上事、但應和中宮崩時、御心喪月三ヶ月、卷纓令着薄鈍色、給由見故、殿彼年六月十九日御記是官奏御裝束也、今廻思慮、只輕重可在御定、元正御裝束鈍色等如何、無文御冠、青鈍御服宜乎、又依彼皇后例、先當時非無忌憚、尤可依執柄定敕、又々御心喪間、四方拜有何事乎、唯尋前例、有所見者可告之由相示了、頭中將歸來云、執柄御返事云、承之應和例、或書云、着給壞色者、今示着薄鈍色、由事已分明、如此消息、可着御鈍色也、而可難申、可着給青鈍之由、此間亦可依下官定、更不可來、隨彼示可、召仰御服色者、余答云、此事一定大難申、可在叙慮并關白御定、中將云、御衣色尙可隨定申者、余答口色上聖主、中宮御心喪間、着給鈍色、此御服間三月也、御

又勘解由次官平行親藏人タリシ時、伯耆守道行朝臣卒去之時、コノ裝束ヲキル、伴道行朝臣ハ、行親伯父ナリ、シカルヲ惟仲卿、ヤウシタルニヨリテ着服ヲセズ、心喪ノ裝束ヲモチキルカ、コレヲオトバ先例ヲタヅヌルニ、但アラニビノ表袴ヲキテハ、心喪ノ人ニカギラズ、ソライロト號シテ、トキハ、キル也、凡ソテ袴ハ、シカルベキ時キル也、ビシナキ時着用スルバウナンアルコトナリ、上古年齡ヤウヤクカタブク人、アラニビノサシヌキヲキル、近代シカラズ、

〔飾抄〕<sup>中</sup>一薄塵地 心喪服用此劔云々 承保元十廿六土御曰、着心喪服<sup>上東門院</sup>御帶也 帶薄塵地劔無

文紫革裝束、紺地無文平緒、

一平緒 紺地、<sup>略中</sup>心喪平緒無續云々、

〔北山抄〕<sup>四</sup>上皇皇后崩事<sup>付太子喪事</sup>

同喜<sup>○</sup>延長三年<sup>元</sup>三月廿一日、皇太子<sup>明</sup>薨有謚號、宣命使、親王公卿各一人也、御心喪三月之

間、主上着鈍色御衣、坊官近臣着服并年、但帶朝官者、過卅日可從事云々、

〔北山抄〕<sup>九</sup>天曆六年十月十一日、御心喪之間、<sup>○</sup>此年八月十日、依太后御體、行幸於主殿寮<sup>○</sup>村之日、

無警蹕鈴奏等、公卿稱名如常云々、而今日無名謁、可尋愿從人皆鈍色裝束、五位已上或緣螺鈿或黑

鞍、胡錄用黑腹六位或移鞍并黑鞍等、尻稍皆如常、

〔西宮記〕<sup>略時四</sup>喪服

天曆八年九月四日丙子、奏雅子內親王<sup>○</sup>村上薨狀、卽下御簾、西刻着錫紵、此般不候<sup>○</sup>候一本、冠依

并年心喪着重服冠也、七日除錫紵、此日復日也、

〔源氏物語〕<sup>四十七</sup>御はて<sup>○</sup>八宮のこゝいそがせ給ふ、大かたのあるべかしき事どもは、中納言殿、

阿閼梨なごぞ、つかうまつり給ひける、<sup>○</sup>中御ぶくなごはて、ぬぎすて給へるにつけても、か

た時も、おくれ奉らんものと思はざりしを、はかなくすぎにける月日のほごをおぼすに、いみじ

冠敷或羅縵無文、紙捻

橡夏平絹無裏、冬通用

關腋同上

下裳平絹、純色、裏同、夏無裏

單平絹

表袴平絹、純色、裏紅、ナ

赤大口常如

烏犀帶丸柄、紐白、顯糸同

大刀黑漆、銀造

平緒純色、紐

笏常如

槍扇無裏、同

帖紙純白、紐

檣常如

小袖平絹、裏

沓沓或數平絹、或純色

深沓藍革

靴靴帶不調、靴底淺黃、絹

廷尉

袍冬練、夏生平絹、紺子色、裏如、冬

其餘如前

烏帽子無裏、後、紺色

狩衣生平絹、純色、無裏、袖括同色、當、帶同色、ナ、無、夏冬通用

指貫平絹、純色、裏同

指袴同上

末廣純白、或薄紫、無透地、紙青、無、形如、常

夏扇同上

別紙之通從內府、公示給候、御子孫御傳聲、早々御廻覽、可返給候也、

正月五日

公續

山科殿成言

心喪服

〔西宮記臨時〕心喪裝束、綾冠綾袍青朽葉青鈍袴等也、或用元文冠除重服之後、一月着輕服、

〔春記〕天喜二年六月二日、今日着御吉御裝束云々、五月後冷泉后寛子、去年母源經子薨先日有此定也、除服後一

ケ月着鈍色、或又有不着之、

〔助無智秘抄〕青色ヲキザル事

有心喪人、アヲニビノ織物表袴綾ノ柳色ノ下重ヲキル、夏ノ時ハ、アヲニビヲキルベシ、アヤノキ、マ、マシヘテコレヲ用キル、參河權守平範國、藏人タリシアヒダ、式部卿宮薨之時、コノ裝束ヲキル、



公卿侍臣女房得選等素服十六人前櫛晒黑

諒闇服

殿上人六人分袍黑縹生自餘公卿同但五位六位藏人領各一人分表袴青鈍生平絹大帷子白櫛晒白

各落手之後本所參御燒香了酉刻退出

〔仁孝天皇御凶事記〕弘化三年二月臣下諒闇服〇此年正月二日仁孝崩大色生絹壹二腰公卿諒闇服表袴

平絹鈍色裏紅赤大口〇如殿上人諒闇服表袴平絹鈍色裏紅赤大口

〔言成卿記〕慶應三年正月五日陽明御門流軒別順達廻文家公可寫置依仰書寫

一諒闇服去弘化之度之通土御門吉田不及着用永無瀬着用於御宮

公卿諒闇服

冠殺或羅無文紙拾凶卷櫛位袍綾或平絹裏鈍色裏生無裏鈍

下襲平絹鈍色裏同單白平絹

赤大口〇如烏犀帶丸柄紐白

平緒鈍色笏〇如

帖紙白檀襪〇如

沓沓數平絹白或鈍色深沓藍草

烏帽子無裏鈍色後直衣平絹鈍色裏同夏

狩衣帶平絹鈍色冬通〇如

指袴〇如末廣鈍白或薄或黑無邊地紙青

殿上人諒闇服

椽袍右兩第櫛所

表袴平絹鈍色裏紅赤大口

劔〇如

檜扇無裏物

小袖平絹

靴鹿帶不絹

指貫平絹圓

夏扇〇如

章辨領如例。

一袍黑綾其色深黑也。黑茶ト云物之由也。常之冠無文殺先年ハ以黑布縫之。是素服也。今度被改

一縷冠其色深黑也。黑茶ト云物之由也。常之冠無文殺先年ハ以黑布縫之。是素服也。今度被改

一奴袴青綾其色アサギニ、スミ少入敷。明有黒色去々々。一單白生絹於去年者

今度調進之內、公卿分各直衣也、於予者、直衣勅許不存之間、如此之由也、不可說々々々、

〔丹波賴庸記〕寶永七年正月廿日、參攝政殿近衛、可用意諒闇之服哉否之事、所窺御氣色去年十月十七

日東職事着用勿論之事也、併當沈倫之身上、於難成用意者、卷縷耳而可然歟、猶可問貫首之所意之

旨也、廿一日、今日對面頭辨尙房朝臣、所問諒闇服之事、難了簡之間、可任所在、猶問合先規可然歟

云々、廿二日、爲令對面藤井戸部參舊院、於非藏人部屋對面、問諒闇服之事、先例先年兼充極薦之

時給諒闇之服、次座之藏人、吉服卷縷之旨也、仍參攝政殿、令言上先日尙房朝臣之返答、今日兼充返

答之趣、仰云吉服卷縷不可苦垂縷之事、世間之風不可然、可卷縷給旨也、六月十三日、已刻參着泉

涌寺宿坊來迎院、着座內大臣諒闇服烏圓大納言諒闇服奉行烏丸辨服諒闇十一月十二日、爲大床

子御膳役送所參勤、俄被改清涼殿裏盤所、諒闇之御裝束、大床子之御膳、有催而不被供、明日恐恐

催之可供云々、十二月十八日、今日諒闇之御裝束、密々被改之、極薦奉仕云々、

〔公明卿記〕寶曆十三年正月元日己未、早旦手水着衣冠吉服垂縷、設座於前庭、神拜如例、其后改着諒

闇服縷袍色袴去見鏡供藥如恒例也、

〔忠言卿記〕安永八年十二月九日己未、午刻參內、御服以下調進中、

諒闇御服九日後桃圖扇、

御引直衣生絹黑縷御袴生絹面裏御肩青純地堀箔御小袖平絹白御袷白縷御湯帷子白

劍璽御覆二平調進也此度無御沙汰今日調進順不當也、

正二位行權大納言藤原朝臣照房

宣奉勅諒闇、殿上侍臣、

宜聽着椽袍者

延寶六年七月九日

大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師庸奉

〔後中内記〕延寶八年閏八月九日、今日内藏頭御錫紵諒闇御裝束等持參、○此年八月十九日、後水尾崩、中略、

諒闇御引直衣、鼠色、少濃色也、御袴柑子、寸尺不見之、

十九日、内藏頭調進之分、悉具之、由被投書狀、則取遣了、

一臣下服 袍直衣、指貫淺黃冠羅ヲ張、漆ツ、纓同、襪一重、羽二重、單生、末廣黑骨、地花、田濃色也、

右五人分也

一袍鈍色、如冠纓同、石帶紐白シ、表袴也、仕立、樣如常、大口、塗草、白襲、

右職事六位三人前

一冠纓前袍鈍色、指貫同、單同、末廣同

右殿上人五人分也

悉取可被越由申遣令渡了

九月二日、向葉室大納言亭、令同道右府○一條へ參、申云、消息宣下事、音奏警蹕可爲同日哉之事、窺

之、勿論之、由被仰、○中略、勘文以三條大納言令獻上、并上卿小倉大納言へ可被仰下哉之由、窺之處、可

申由被仰出是吉服之人也、先日殿下右府吉服人可然由被仰主上○靈にも彼卿吉服人哉之由有

御尋也、於中納言者、柳原末着諒闇服、然共重服以後未嘗陣、吉書御覽以前、私之着陣如何、若依是御

理可有之歟、其外大中納言不殘着諒闇服也、

〔基量卿記〕延寶八年閏八月十九日、今日從頭中將諒闇之裝束被渡之、是内藏頭調進也、今度素服之

從內藏頭先日亮間御服以下來續左

一御引直衣加賀絹黑茶色、左へ也、如常襟云々

一御袴加賀于色平絹、如常

一御衣鼠色御給一ツ、平絹、御緒入一ツ、中略

一御末廣無紋、花田染、無紋、影、○中略

十日、今日始着諒間服

冠無紋、同、無文、無漆、袍生絹黑橡、深鼠色也、大帷、布鼠色、單平絹、同色、裾、平絹下、雙同、表袴、平絹、鼠色、主上冠、綵、無文、無漆、袍生絹黑橡、深鼠色也、大帷、布鼠色、單平絹、同色、裾、平絹下、雙同、表袴、平絹、鼠色、裏、紺、下袴、平絹、草色、右各左紐、石帶、水、牛也、機、平絹

公卿

袍黑染如茶、黑指貫同上、單同前、襪平絹冠纓等同、扇、無文、花、茶、黑

右何も公卿同前、雲客各黑橡指貫同色單等同前、極薦闕腋袍、其外同前無綵

右之趣自內藏頭調進也、各拜領也、今度素服御人數、諒間服拜領之先例諒間服者、下賜之義雖無

之當時困窮諸家定而諒間服用意不合期之間、多分不可着然時、如何之間素服人數ハ、各可賜

由攝家中申沙汰也、仍如此、爲散不審書付了、

十一日、今日素服之人數十一人、同道參般舟三昧院、爲御燒香也、極薦昨日令參了、坊亞相同道之由

也、各着諒間服予等職事束帶之體如何之間、借乞石井右衛門佐指貫着衣冠令參了、卷纓也、廿三

日、今日平拾遺參會着諒間服鼠色、指貫、淡黃、紐、付、機、如、常、右、へ也、左府右府、松木羽林、中山羽林、今城、上冷泉等羽林、

被着諒間裝束、先日より見及也、日次失念了、

八月二日、豫宣旨案、

禮式部二十八 凶服上



也御袴

〔親長卿記〕長享二年六月廿五日、早旦參内吉服直衣不參、簾月次御達歌也、諫閣中御會不實、簾

○事有比簾、源富仲之外、悉吉服也、

源富仲裝束冠如常、生平絹金染婦志袍、同表袴草火石帶如常、○中主上御服、繩纒御冠外見之分、只六

平絹單不志御引直衣同色御袴水草白御服引色御扇黑骨、散瀾其上、引背花、れ

〔管別記〕大永六年五月八日庚寅、今夜可有渡御倚座也、○此年四月七日柏原崩、中略、

賜素服人數蘇閣服袍黑、棕色也、直衣ハ鈍色也、差貫ハ有、嘉練絹也、

七年四月廿日丁卯、傳聞今日諫閣終之日也、○中行事、藏人以諸諫閣御服樣御袍納弘蓋、自御所

方持來、此蓋臨期之義也、居大御所、可被出幸也、弘蓋今度始也、

〔基量卿記〕延寶六年六月十八日、攝家中へ窺條々、○中

一本所之素服公卿雲客も、亮闇裝束可着、用哉事勿論同前、可着、用由也、則内藏頭下知

十九日、亮闇方裝束事、依仰山科へ尋遣、返事云、

追申於職事輩者、裾表袴等調候也、

臣下諫閣服之事、先々衣冠調進申候間、其通令用意候也、恐惶謹言、

六月十八日

持言

頭中將殿

廿一日、今日從殿下房輔原有召、則參入、御次第作進、○中還御御次第、殿上侍臣可聽着黑橡之由

有之、廿二日、今日御次第持參、○中宣下之上は、橡袍殿上侍臣分必可着、歟若困窮輩、橡袍用意難

成輩は、格別候間可爲其通先可着、用事也、若相尋候は、其通可申付由也、廿四日、入夜、今城中將

定○藤原中山中將入來、橡袍可着、用哉之事被談、予曰、必可被着用由、昨日之趣略申談了、七月五日、

始之日來廿四日云々親宣朝臣所相計也兩條間日次是先例也廿四日己丑今夜始着諒闇裝束

鈍色絹狩衣直衣白帷鈍色平絹指貫等也但無如常之物

〔後成恩寺關白諒闇記〕着素服事於舊院者先着凶服參入其上着素服於內裏儀者吉服上着之之

時着女房又同前五旬之後除服事宣下其凶服事袍冬練張如模鼠色下襲同表袴子色白帷

諒闇中主上御袴柑子色女房は常紅袴也白袴依人可着也諒闇中拜賀

建久宣陽門院院御女着白袴云々

殿上人橡袍自倚廬還御後被宣下之者不及宣下幼主之時橡袍以模染之トチノ事也フッ表袴鈍

紅高威柑下襲鈍殿上人橡袍殿上役之時着之本宮役時可爲位袍之由見月輪殿御記爲隆卿者結

政之外不可着位袍之由執之所詮可隨舞祖所爲事略

諒闇直衣無女冠冬練有衣鈍色平絹直衣同色指貫白衣下合袴以上平絹色ハ常ノ袍ノ如シ平絹本練也

大口黑漆鞘銀裝細劍無女冠冬練有衣鈍色平絹張面表袴赤同色張平絹下襲下襲重張鈍色表平絹白相單赤

文重淺黃末濃下簾隨身湯衣濃張單鈍色袴玉簾鈍色ハウツシ花ニ染也色淺深ハ志ニルナリ花川ノヨリ也云々

〔親長卿記〕文明三年二月十五日今夜御燒香并多羅尼經候人々去年十二月二十日源中納言諒闇

中菅原在數諒闇十七日今日素服事有除服宜下云々仍申剋許參內去年十二月二十日源中納言諒闇

行不出來珠於素服之後可着何裝束後本儀可爲諒闇裝束但先日以便服事申意之間先可着吉服之條

院素服之單除服之後可着何裝束後本儀可爲諒闇裝束但先日以便服事申意之間先可着吉服之條

苦云々右衛門督光菅宰相泰仲朝臣已上各被召御前有御對面主上御門土御服御冠

繩細御服御冠御服上下二被召之水享放廣下小路內府記主上御花樹出御衣御袴色草也種々

御寺事等仰之後退出三月廿日早旦參內諒闇中依着亮間也依召參御前花田色御服服火草色

諒闇御裝束吉時無諒文乘燭後殿下原御參內始着諒闇御裝束給御袍黑染鈍色御指貫下袴  
東二御一香等不改御裝束東御袍工調遣之依無其人子奉着之廿一日壬子今日言長着諒闇裝束日次事相尋清宣朝臣  
畢裝束袍線色調表袴面平絹深鈍色裏下襲衣上下鉤大帷白布半臂絹冠無襪平絹白只  
今着始許也不及出仕

〔後愚昧記〕心喪諒闇服之事

按察卿問 貞治四六廿

昨日御札到來境節沐浴事候之間即不申盡報候き彼日數如夢候無申限候還御本殿時儀未得才  
覺候聊敷承候爲悅候此日內裏素服人吉服事強不可爲巨難之由先達所答も所見候然而還御日  
着吉服條不得分明所見候管窺之至歟凡は今度專被用延久建久等例候なる上は下ざまご迄彼  
例之條先可宜候彼兩度者人々着諒闇歟文永者公卿吉服にて候けるに候其故者三月十二日還  
御本殿件日諒闇宜下候仍未着諒闇候歟由推量候是者不足今度准據候哉次着吉服之人某々等  
用諒闇事非常例候歟元應左大將冬氏拜賀日冠袍下重劔者諒闇云々彼時も如法沙汰候ける由  
押小路内府記置候凡者諒闇服にて□□□吉ハ今少有用などの風情も有ぬべく候歟如何短慮  
迷惑比興候如前宰相御返事之如法有深奥之儀けりゆかしく候

委細御報喜存候き椽袍事安元記勿論候而建久又依或仁問返答之宜下以後可着用之雜袍者不  
限下椽如令條之其色多之椽□其内也然而不用事其來尙矣諒闇之時者宜旨以後可着云々兩度  
相違不審候然而自安元内裏建久儀は道理候歟御存候如何次素服之人還御本殿以前吉服背理  
候哉然而其例等多候歟所詮諒闇宜下之上者可着之候へども素服ハ重諒闇ハ輕之問除素服以  
前不着候歟之由存候全今案推量候へども比興候歟

〔後深心院關白記〕應安七年三月十七日壬午今日調始諒闇裝束此年正月二十日依日次□也可着

御隨身狩衣白袴臺番長白襖袴、但右府生武成、左番長師武、依私服武正着鈍色襖狩袴。

十四日丙寅今夜左大臣殿、令着四條院御服給、於冷泉殿南廊弘庇、着鈍色御直衣平、奴袴白掛食例。

無文弓纓冠給、其後乘御車令退出給、向吉方着御帶中、即返給、政所不可紛失之由、殊被召假車召。

右馬頭季盛朝臣久壽治部大、即又令參舊院給、御香用白平箱、大治用鈍。

〔徒然草上〕諒闇の年ばかり哀なる事はあらじ、○中 皆人のさうぞく大刀平緒まで、こ。こ。やうなる。

ぞ。ゆ。い。しき。

〔後愚昧記〕貞治三年七月廿六日、四條三位隆郷卿問題。

不審條々

一 父母服中遭諒闇時服制事

官人遭父母之喪之時、解官之上者、舉哀而不可出仕候條勿論、然而不得已有可出仕事者、服色可爲何樣哉、禮記云、曾子問曰、父母之喪、既引及途、聞君薨、如之何、孔子曰、遂既封、改服而往、注曰、封亦當爲寔、改服括髮徒跣、布深衣、扱上衽、不以私喪包、至尊云々、如此文者、改父母喪服、可着亮陰服歟、

云、先規云、其法委可注預候、

重喪之人、雖違法意、令復任之條、已爲流例、帶官職候上者、除宴會之外、可朝參候條勿論歟、就中

如令條者、凶服不入公門、凶服者、練麻云々、又云、其遭喪被起者、朝參所者依位色、在家依其服制、

云々、諒闇宣下以後、雖停綾羅用、危絹、於位色者不易之、朝參之日、着諒闇服、於私門依服制、但諒

闇中、重服人出仕、先規未勸得、仍着黑染、歟、用諒闇歟、兩樣之間、所見不分明矣、爰建久野宮左府

間中、重服人出仕、先規未勸得、仍着黑染、歟、用諒闇歟、兩樣之間、所見不分明矣、爰建久野宮左府

〔迎陽記〕貞治三年八月九日庚子、今夜還御本殿日也、白渡御日至今日十三、家君○菅原召具言長、

自去々御參候禁中、傳聞早旦藏人右中辨嗣房、諒闇御裝束、於藏人所召陰陽頭、滑周朝臣、問可參仕



等着候、右大辨藏人頭亮等未着之、殿下女房云、亮間御裝束等、兼日被調儲、私不吉時、一日之内調之於公事者不然云々、八日、今日始着諒闇布衣、着生指貫持野郎、入道殿御命云祭茂、以前着冬指貫、但今年無祭、入夏之後、初着諒闇、何可調冬指貫哉、即調給生指貫、仍着之、但去三日行房着之諸人嘲之云々、

〔増鏡三藤衣〕又の年二〇貞應五月のころ、法皇〇後高倉院かくれさせ給ぬれば、天下みなくろみわたりぬ、〔平戸記〕仁治三年二月十一日癸亥、參左大臣殿入見參、每事申承、又御着服、來十四日云々、〇此年正月八日四

崩條其間事久壽之例、着御之次第、委注進、

彼例

戌刻於御出居西弘庇令着給

鈍色平絹直衣 同色生奴袴

無文局纓冠 紫紙無薄御扇

御帷合符如常 向巽召之

次駕御車治部大輔出北門、於鳥丸面向巽召御帶政所調之、中子、卷紙如三

伊賀守信時供之、着了返給良給、政所不可紛失之由、殊被召仰爲御除服、即令參近衛殿給了、

御束帶之時、色目

位袍鈍色、半比下重、同色張面上袴裏、同色張單、白汗取、柑子色大口、

犀角帶裏、白冬扇、御沓如例裏、白

御劔平緒、御笏不被具、

檳榔毛車青腰押、無文青、革、淺黃末、瀧下、裏

鞆榻如例

緒其裏純色唐綾純色唐綾黑漆鞘銀作劍無文青革裝束白機等也無文卷縷冠也隨身褐衣鈍色袴

余隨身布衣鈍色也車如恒也網代去比關白被參院之日隨身吉服云々是不足諸司三分何可着諒闇

哉由被案云々然而隨身着之已爲流例仍更又被着云々

十二月三日甲戌申刻頭辨長方來余着冠直衣關諒出逢五日丙子此日京官除目也○中略

今日余裝束

無文冠卷縷無文位袍鈍色平絹下襲真中倍同色表袴鈍色白平絹相一重紅大口例白機如

黑漆鞘銀造劍裝束無文鈍色平緒班犀帶嘉承知是院殿令用烏單給是依重堀川院御事給不似

替御服給同令用烏單給而保元諒闇度令用從單給以之思之香裏押白生絹例無所見而中院右

輕服之時用烏單諒闇之時可帶班犀帶因之今度用從單

府被褥可押生之由云々又申合關白親云々尙嫌白絹可宜嫌前驅諒闇吉服相交須着亮闇也而各稱無裝束之由如此方不及人々前驅皆以如此

隨身裝束如恒但狩袴鈍色也壺胡錄丸緒如例

左右大將用鈍色然而依保元永萬故殿御例不改之關白又如此云々

車檣榔如例但用青簾無文青革五緒淺黃末濃下簾

十四日乙酉戊刻頭中將定能朝臣爲拜賀來○中抑諒闇中補藏人頭之人拜賀日皆着橡袍是流例

也更無異議而成親卿着吉服是花山院前相國○諒原諷諫云々未曾有例也今日定能着橡袍也

〔明月記〕建久三年三月十四日丙戌午時許參院人々多參入法皇御尊號後白河院云々○此月十日

宰相中將公繼諒闇物具事等少々尋申隨身壺丸緒鈍色口狩袴同之大刀以下裝束無文藍革口身

物具同之壺用諒可身壺無口但只弓黑漆卷隨本府役時着位袍殿上役着鶴波美行幸之時着位袍關

腋平胡錄黑漆口口借最勝講出居或着橡人多但下官着位袍丁者即退出廿八日今日日次宜仍

密々先着諒闇帶許也戊時向坤着之兩所見參以後歸家脫之四月六日參宮御方頭亮藏人佐

臂下襲同面表袴

赤斑犀丸袴帶

黑綾革力ハサス

笏據沓等如例、

除重服、即着諒闇云々、

〔玉海〕安元二年七月廿一日甲子、今日建春門院

○後白河

第二七日云々、申刻藤中納言資長來、余相

逢、參院自其所來也云々、關白被參

鈍色直衣卷纏

其外未着諒闇之人等、或衣冠、或直衣、或卷纏、或垂纓、人々

所爲不同、資長卿、即直衣、即垂纓也云々、又語云、移御倚廬之日、給素服之輩、其後尙着吉服、伺候、所謂

頭辨及光雅基親等云々、此事可驚奇、爭給素服之人、更着吉服哉、但稱先例云々、縱有先規、縱有秘說、

至于此事、不可據用、勿論云々、又納言云、兼光一人、着心衷服云々、此次余可着諒闇之服哉、否、示合

之、是此穢以前、依奉行神宮訴事也、答云、觸穢之上、何更有神事哉、已是解穢也、中陰以後、更被仰可奉

行之由、之時、脫諒闇服、可付吉也、一切不着諒闇之條、不叶物義歟云々、隨又資長、保元之度、爲初齋宮

行事、辨雖爲揖期之神事、猶着諒闇服、其以後更奉行之時、付吉了、是雖不可爲例、彼時申合人々所爲

也云々、

廿三日丙寅、此日依爲吉日、初着諒闇裝束

鈍色直衣平絹也、指實無文卷纏冠等也

廿四日丁卯、今日着諒闇

之後、始出仕、未刻鈍色直衣、參七條殿

注皇御座

今日院臨時有御佛供養、是中陰之間、初度也、余先候上達

部座、先是實房卿已下公卿六七人許伺候、或吉服、或諒闇、或直衣、或束帶、布衣、人不見吉服之人、卷纏

垂纓、不一同、多分垂之、實房實家兩人卷之、小時行事親宗

布黑染時衣袴、但着冠

氣色余即余已下參候御前、簀

子敷

索有

右大將參加着座、束帶也、今日依可還御自倚廬、可參候之故、束帶云々、帶劔取笏、此事有說

之事也、如寬德記者、不可持歟、尙可尋見

○中略

今日雖可參內、今夕可還御本殿、仍不參御倚廬之間、不

賜內裏素服之人、不可參內之由、見寬德公記、仍不參內、但彼記意若限不着諒闇之人、不可參歟、將雖

着其服之人、總以素服之外人、不可參歟、聊有疑殆、仍申合博陸、返答云、此事未決、但不如有疑者、不參

云々、其理可然、仍不參也、

今日右大將裝束、無文薄物、繪裏鈍色半臂、下襲

平絹

白張單汗取、鈍色表袴

紅大

笏藤如恒、鈍色組平

〔榮花物語根合十六〕十八日のゆふさり。〇寛維二にはかにうせさせ給ぬれば。〇後いふにもおろかならずいみじ。〇中内わたり御ふくにおはしませばみすなごいとおそろし、上達部殿上人な

ども、さながらつるばみを着給へり。

〔源氏物語十九〕〇もし火などのきえいるやうにてはて給ぬれば。〇薄雲いふかひなくかなしき

事をおぼしなげく。〇中殿上人などなべてひとつ色にくろみわたりて、物のほえなき春の暮なり。〇中夕日はなやかにさして、山ぎはの梢あらはなるに雲のうすくわたれるがにび色なるを、

何事も御目とまらぬ比なれど、いと物あはれにおぼさる。

入日さす峯にたなびくうす雲は物おもふ袖にいろやまがへる

人きかぬ所なればかひなし

〔中右記〕嘉承二年十月十二日甲子、今夕頭并藏人二人初参云々、爲房并有兼着鶴喰袍依本昇殿人

也、説定着位袍也、皆以諒闇月。〇此年七裝束也、廿一日癸酉新中將昇殿之後被初参、但無文位袍被

着也。〇鶴喰袍ハ准直衣、宣旨之後可着用也、宣

〔殿曆〕嘉承二年十二月廿八日乙酉、今日中將。〇藤原忠通慶申也、酉時許中將着束帶。〇中即口口東脱

了着諒闇裝束月。〇此年七表衣無文。〇鈍色表袴下襲等皆口鈍色也、大口許着例表袴、裏紅色、劔黑鞆、平

緒鈍色、無文冠、纒卷之、

〔中右記〕天仁元年二月十一日列見也。〇中上卿以下皆諒闇裝束。〇此年七但角丸共帶、靴、袴、鈍色、金物、黒

三人、是失也。〇去年七月堀河、

〔兵範記〕保元二年二月六日丙寅、今日大納言殿可令申正二位御慶賀給、左中將同被申、加級慶賀、諒

闇月。〇去年七裝束如恒。〇恒四月一日、未刻参内。〇諒闇束帶、無文位五月六日庚午、今日權中納言朝

隆卿参入、母重服去月除了、今日初出仕云々、諒闇色法裝束如常、同無文卷纒冠、無文位袍、鈍色絹半



冠かけ、烏帽子かけのぐども、鈍色なるべきか、只かみひねりも子細なし。

〔衣服知新集〕御喪服事

一御冠 繩纒

一御內衣 平絹鈍色

一御袍 夏冬共に布の一重、色様、但し御首紙御左につく、

一御下襲 布橡裏

一御表袴 布表橡裏柑色

一御赤大口 表裏共ニ柑色

一御笏 蘇芳木

右諒闇之時、倚簾御所へ入御之時着御之、

〔三時抄〕諒闇

晝云、不可違出仕之法、彼識者に訪べし、出仕する人々は、猶まゝら烏帽子を着也、麻品絹狩衣、平絹指貫、生白帶、香は黒赤可隨時、後烏羽院御時、故相公并故刑部卿宗長卿共ニ黒香也、範茂卿相公之弟子也、朱漆の香のうへを口口口口ぬりかへして着之、續は故相公無文盤革也、宗長卿は、或うらがへし、或又有文を用に、有文をば相公難ありけり、革菊に見たり、束帶直衣衣冠等、只如出仕之法、冠は纒を卷也、重服の時纒をぬひて如六位之纒する也、諒闇の時はたゞの巻纒也、此作法尋常の人不可知、平家の人々に訪て可存事也、且又可守先規也、爲不吉事之間、每人委不沙汰也、冠懸淺黃單可然、扇淺黃也、凡此不吉作法は、普通の人は不可知、其識者の人々に尋訪べし、

〔榮花物語〕十 略の十 月八 年弘 廿四日冷泉院うせさせ給ひぬ、略 中世の中みな諒闇になりぬ、殿上人のつるばみのうへのきぬのありさまども、からすなどのやうに見えて、あはれなり、

橡の袍てはたをひねる、御引直衣におなじ。

夏冬通之、下具は公卿に同、更衣あるべし、

六位細纒の冠は、此時も細纒なるべし、

地下四位五位六位袍、公卿ニ同、

直衣事 公卿殿上人吉、若皆同物也、

鈍色平絹冬は鈍色表、夏は生、草色冬に同、夏

下具冬は白絹、白練、皆平絹、夏は白絹、夏冬通之、

鈍色指貫冬は鈍色表、夏は生、草色冬に同、夏

白下袴

腰次 白布

帶鈍色平絹、冬は生、夏は生也、

扇冬は白絹、東帯の紙、くろき竹骨也、夏は鈍色無文の紙、くろき竹骨也、

廷尉彈正は、六はね、木をくろうぬりて用之、

紙はつねのあさぎ、又は香色、

狩衣事 小直衣同之、

鈍色生平絹袖のくわい、一寸前へぬひこす、

烏帽子烏帽子より、宿老人のうすわりの

夏冬通用、下具は直衣に同、つねは帷子しつぎばかり用之、わかくをさなき人も、又白装束

着する程の宿老も、みな鈍色なるべし、禁色非職も差別なし、

小本結の組 鈍色

無文冠提奉

位袍冬練平絹ふしにぬえ、高平絹鈍色たねる、張也。

半臂冬練平絹ふしにぬえ、高平絹鈍色たねる、張也。

下襲夏は生平絹鈍色を練鈍色、表同じ、張也。

相白練平絹、うら着之。

單冬練平絹、夏引は都木、張也。

白大帷用之。

表袴面鈍色平絹、裏柑子色平絹、うら、裏同、冬同。

大口の生平絹色。

斑犀石帶丸柄、速方、事にしたがひ用、吉服の時に同じ。

檜扇箆つたの、白也、但置檜物なし、糸二筋、如しの。

襦平絹

淺沓つての、知なし、但白平絹、うら、知なし。

大刀黒漆の、細銀、縁、東、無紋、表、色。

鈍色平絹或香用之。

廷尉佐以下赤衣事

位袍冬練平絹、柑子色、裏色、黄、つねの、吉服の、知なし、夏は生平絹、色、冬に同じ。

此外下具こと、さきに同。

殿上四位五位六位服事、まご言は服の如也、つき

橡の御引直衣にはるがれ染平絹をねりて、さらさら引のり

鈍色の御衣うらな平絹の鏡、うすあまぎなれて着御あり、な

鈍色の生御單あ平絹、夏はこれよりかき更えて着御

萱草色生御袴花紅のちさけ黄も入したる色也、くわん草の

同色生御大口げなしも

御帶御引直衣に同じ

短御直衣鈍色平絹、冬は裏表ともに同色、夏す

これは夏冬御更衣あり、内々御大口に凡人の様に引あけてまはして、御はこえ引いだして御こ

おびをつけて着御あり、御下具はなし、御寸法御たけは御袍におなじき也、

御扇御槍、馬になの糸色同、夏は鈍色紙、輪なし、竹のくるぼれ、鈍

白平絹御宿衣色御宿衣、間、鈍

正月御薬出御も、只橡御引直衣、鈍色御衣、萱草色生御袴ばかり也、御ものぐなし、又御一廻の正の

御月に吉日を撰て御色を御ぬぎあり、御引直衣以下の御色は、つねの御吉服に同、皆無文平絹を

着御あり、次の月一日より有文、つねの御吉服の御引直衣以下を着御なり、

繩御纓御冠は、倚廬出御の日より、御一廻の御色なほしまで着御あり、

橡御直衣は、倚廬より還御日めしをめて、御一廻まで着御也、倚廬御座候間、鈍色御衣、夏御萱草色

御はかまばかり着御あるなり、

公卿服事公方御服、各日大を撰て替之、有所違は

束帶公方御素服は、うちきの様になるも

のなり、それは吉服のうへに着御、

束帶



平絹白褐 單 赤大口

黒漆鞘銀裝細劔無文藍 鈍色平緒

斑犀帶也。織。絹平。 櫛扇常如。

無文卷纓冠玉。沓。真白。

毛車恒如。 青簾藍。無文。 淺黃末濃下簾

隨身 褐衣濃張單鈍色袴

番長 白狩袴白單濃打

近衛 白單自餘如例

心喪裝束

椽袍以椽。同。平絹。織。張。真。 表袴紅。鈍色。 下襲鈍色。

薄鼠色平絹直衣 指貫色各有同。

鈍色衣一重普通。足院。諒。間。白。衣。也。而。嘉。承。知。

〔雜事抄〕涼間裝束事 御一廻まで如此

禁裏御服

御錫紵布。御束帶也。鼠色。織。或。御單。表袴等。鈍色。是。は。倚。廬。御所へ出。御日。此。所。に。て。着。御ありて。や。

がて御ぬぎありて、又還御日着御ありて、御ぬぎ御て後、河原へ御祓にそへてつかはされる、陰陽

師賜之歟、倚廬御所へ出御までは御吉服也、此着御之様、御束帶に同、但なはの御帶御わきより引

廻して御前に結之、

御冠無文。無文。御。左。な。は。さ。き。を。く。り。返。ほ。そ。纏。の。ご。さ。し。御。錫。紵。着。御。の。時。う。ち。し。き。の。布。を。み。へ。に。た。

色。の。紙。也。

〔諒闇和抄〕本殿還御の事

亮陰の御装束を着御<sup>内藏</sup>なり。椽の御袍、鈍色の御袍、同色御單、柑子色の御袴等なり。御冠は繩纒の御冠を渡御の日めしたるを一周のあひだあらためられず着御なり。これ代々の例也。<sup>重帝の御時</sup>

冠の沙汰なし。○中略

解陣以下の事

職事又賦につきて、亮陰のあひだ、殿上の侍臣、椽袍聽着べきよしを仰す。上卿外記を召て、此事を仰て後まかり出、そもく、亮闇のあひだ、殿上の侍臣、椽をゆるさるゝ事は、つるばみは重服の人着するものにて、臣下も父母の喪に素服をぬぎては、一葦の間、公卿殿上人ともに椽を着す、まかればゆるされずとも着すべきものなれども、主上御錫紵をのぞき給て、一周のあひだ、重服の人の着する椽の御衣をめす。臣下は公卿以下、亮陰の服を着すべければ、殿上人には別に勅を下して、椽の袍を着しめよとの事也。上の着御と同物ゆゑ、別てゆるべきよし勅を下さるゝ也。公卿は椽を着せず、亮闇の服を着する也。<sup>但中御門本家の一家に、公卿た、此事元慶四年十二月四日清和天皇御事、七日上清和天皇、錫紵を着御、十二日除御まし、く椽御袍を着御、近臣又椽を着せしむるよし國史にのせたり、これらにてみるべし。</sup>

〔撰座装束抄〕諒闇服<sup>見類聚</sup>

冠<sup>無文</sup> 直衣<sup>鈍色</sup> 指貫<sup>同色</sup> 白衣 合袴

同束帶

無文位袍<sup>本儀綾也、平絹略儀也、云、鈍色張裏、鈍色張面、</sup>

表袴<sup>柑子色赤、裏、紅可然也、</sup>

同色張下襲<sup>下襲、裏張鈍色、表袴ナメウ、カ、サズ、中倍アリ、袴鈍色ナリ、</sup>

帖之、自普通平緒ハ三許分狹帖之、無總并續、

香 諒闇之時用之、而貞應度諒闇、故通具卿用香平緒、人々傾奇、仍今度諒闇藥壁門院、後堀川、左

金吾并置、予通用之、後日披見中山内府記之處、保元久我大臣殿、令用給劔裝束、無文紫革云々、

甚有興事也、今度予劔裝束又如此、自然相叶先祖所爲、誠是愚者之一得也、

一弓箭

諒闇瓶 保元元或秘記曰、黒漆瓶、無文、青革裝束、箭多波禰以鈍色絹押之、普通押、鑑所也

諒闇箭波須事 保元元或秘記曰、角波須、

諒闇箭羽事 保元元或秘記曰、所存龜尾羽、

一笏 重服之人笏如常、保元或秘記曰、但不登云々、

〔桃華葉〕一平緒色々事

鈍色平緒 凶服用之、諒闇時着之、

〔或人問一條太閤所答條々〕

一諒闇の服は心喪を表したる事にて候、それに若年人、ころもがへけまやうなどはかざりにて候程に、事心と相違したる歟とおぼしく候、さりながら神事などにまたがひて候はゞ、吉服を着し候はゞ、それ一日などの事は、ぐるしからじとおぼしめし候、日のはじめに巻纏にて候、其後つるばみの宜下候はゞ、何とも候へ、小わ口口に候とも垂纏にあらじ、たるべき事はおぼつかなく候、はじめより垂纏にて、其つるばみを若きも巻纏にさたし候べきにて候、

一大中納言以下巻纏の鈍色の諒闇の直衣束帶を着候、關白三公いしくもみな巻纏たるべく候、公事にもまたがひ候はずば内々ふさたのぶんにて候、素服にて候はゞ、垂纏も子細候まじなごおぼしめし候、去ながら家々の所存、さだめてかはり候べきと口を例にて候、

一冠九頭

右清閑寺辨へ持遣冠纓末廣等前攝政分、此方ニ留置、亮間服等一所ニ可遣也。

廿九日、本所素服事、今度從內藏頭調進、從本所奉行被相渡、由也、此事不可然、先例廳官申沙汰也云、此事則相渡了由申入了、無是非由被仰也。

〔後中内記〕延寶八年八月十九日、寅刻許、法皇<sup>水尾</sup>御體危急、遂以崩御也、廿日、巳刻許、令參内倚廬

御殿、可被用何御殿哉、窺之、素服人數、殿下右府從命、先假書付備天覽、三條大納言、民部卿、今出川中納言、宰相中將基量朝臣、宗顯公起朝臣、雅永朝臣、季任朝臣、基勝朝臣、照定、基淳、卜部兼允等と治定了、素服女中、典侍、掌侍、命婦、各上首一人、得還二人、去々年如此、今度可爲同前之由哉、窺之、被仰定了、悉内藏頭申含了、本所素服人數、前攝政、芝山中納言、池尻前中納言、梅小路前中納言、風早前宰相、東久世三位、左兵衛督、三位中將實業、勝房、共方、有尙、季豐、忠能等朝臣、利直、博意、國久、季起、公寬、兼供、兼量、長時、輝長等云々、此素服凶事傳奏奉行内藏頭令申含、

〔後中内記〕享保九年二月廿七日、廣橋前亞相<sup>○兼出棺</sup>廣橋侍從着素服被參云々、

〔助無智秘抄〕天皇御服之時事<sup>天下諒聞是也</sup>

殿上侍臣、四位五位六位ミナ櫛ノ袍、タッシ表袴下重等鈍色ナリ、宿裝束ハ差貫掛等ミナ鈍色、但掛ハ黃色花田ミナマシヘキル也、

〔飾抄中〕諒間劔尻箱事 保元元或秘記云、水豹尻箱、無文青草裝束、左右衛門權佐<sup>惟方</sup>、尻箱虎皮、

一黒漆 諒間帶之、金具等、拔替吉服劔具也、裝束無文紫或藍草云々、劔柄白佐女如常、重服同黒箱、

金物黒漆、白革裝束柄、黒佐女云々、

一平結

鈍色 諒間之時用之、重服之人同用之、但無總敷、保元二十一廿八、中山記曰、重服平結、鈍色絹



一本所素服人々、五旬中可着素服其後可着亮間服由萬里太清閑大被談也。此此月十五日後水尾后德川和子崩  
 一召寄極薦内々申含條々廿七日可有渡御倚處可令申沙汰由仰之了、太之由申之、又公卿素服并貫首素服等ハ極薦令着之、非色殿上人ハ出納令着了、是大永度如此、貫首守光朝臣委細見管別記、

廿六日、今日内藏頭御錫紵以下御服等持參、

臣素服

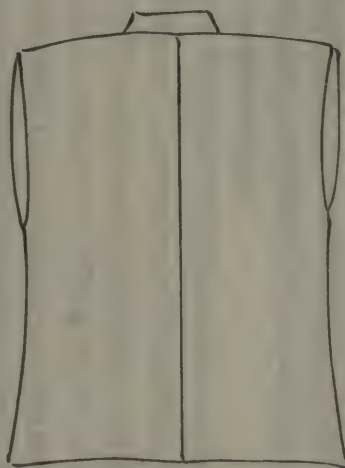
一大形大帷ノ袖ナキ物也、布漉鼠色

不縫

前



後



一素服人々本所十人前、前攝政以下、

一扇九本花田骨墨

一纓九枚

十一月八日

定親

〔建内記〕嘉吉三年三月十八日甲戌故日野大納言忠秀事其後日次不宜候間自然不相弔今日向門前訪子息藏人左少辨資重資重於蓬門下謁了

資重凶服絹練ナリ練タルヲフシガ子ニ染テクビカミアリ如半尻尻短無裏之物ナリ袴ハ指貫歟指貫候様ナリソレモ練ノ平絹ヲフシガ子ニ染テ着用セリ結ハ上タルト見タリ鳥帽子ハムクノミ色扇ハ淺黃花田色紙ナリ骨ハ何トアリシヤラム

〔親長卿記〕文明三年正月十五日早旦着素服去年十二月二日後花園崩先是去九日宣下雖然依私日次不快不着其色目裝束生衣染金不指貫練裏面金不志染大帷腰次白如雖可用下袴依不合期省略上結袖ノ結不入ヨリ糸袖之下バカリ結付紙捻付物忌柿木ナキ奉部變形ニ削テ唐鳥帽子左方今度素服色并物忌事等人々説々有其沙汰雖然素服色事ハ以或仁説染之畢

〔和長卿記〕明應九年十一月廿八日己卯今日於般舟院見伏爲三七日御法事後土御門中略今日日本家之衆

右衛門督季經只兩人也尤無人之體也右衛門督某服卷纏袍平絹指貫同袍無裏尤不審濟繼朝臣某服卷纏袍平絹指貫同袍無裏尤不審凡公卿殿上人素服之機尤不審也公卿者着有裏袍雲客者着一重袍者尤可宜歟但猶可勘尋之總而凶服内三色分之歟先本家衆服倚廬服素服也諒闇服練袍也等也能勘先例可分別事也

十二月十一日辛卯今夜倚廬渡御也中次素服公卿聞御錫紵着御之由起殿上本殿之上向北陣中

略次公卿兩人着倚廬殿上後於傍則脫素服於倚廬中門代外脫之依内儀六位不役今度公卿素服出納調進之布也雲客者内藏寮年預調進之今夜只用白布也成不審之處火事以後墨難得之間

不染云々尤不無沙汰之儀歟雖然無咎言之人不可然歟素服機長半服而有衿如無袖物也故裝束上打懸之也

〔基量卿記〕延寶六年六月廿日

職事等之失也。八日丁亥四辻宰相中將○藤原保季送消息云賜故院素服之人着御服參內之例可注給者即注遣之。

着舊院御服之人中陰間參內例

山崎記

保元元年七月二日禪定仙院○鳥羽御入滅今夜御葬送也太政大臣實內大臣實左大將公教右衛

門督公能修理大夫忠能新宰相光賴着素服御車後是賜素服人々也同八月一日未廻參內小

時右衛門督公能着衣冠生龜同指實已上平絹黑染是故院御被參頃之于參殿下已下

但可被問當時職者之由示之了○中

抑賜素服之人者御倚廬之間十三箇日着素服夙夜可祇候也還御本殿之後除素服之後又着諒

闇裝束可參也然而中古已來素服依難着用之物假或者吉服上或者諒闇裝束上也

中古已來實不着件素服或者吉服上或早以着諒闇裝束其上着件素服之由也於近來者着除之

日之外者不及着候哉故於着素服之間者私服之吉凶不可及沙汰歟

中古已來者實不着用件素服只着除日許假着私服上即脫之也仍其間或猶用吉服或早以着諒

闇裝束是共略儀也然而件上着素服可祇候之由也

予重送狀云先度申承候恐悅候聊物忘事候之間恐報定無正體候歟所詮賜素服之人者御倚廬之間夙夜着

素服重服也可祇候候還御本殿之後除服之後更着諒闇裝束輕服也可參候也然而中古已來實着件

素服事不叶于物候之間着除兩日假着私服上即脫之祇候仍其間或用吉服或早以着諒闇裝束

參入候於御倚廬之間者吉服諒闇服共以略儀候故仍着素服卷纓之上者不可依內々服之吉凶

候歟於還御本殿已後者與不賜素服之人不可有差異候歟之由存候先度恐報不審之間重令啓

候荒涼至恐憚存候御報必可勘承候也誠恐謹言





路筵道等如恒。○中其後公卿殿上人相引向東車寄門南上東西列立各着素服。布袍東帶之上着之

公卿還着陣座殿上人還着殿上其後分散云々。廿六日素服人々每七日裝束之上着素服。食布

〔平戸記〕仁治三年二月十四日丙寅今日五七日也。○此年正月八日西條崩中略右大臣殿着位袍其上令着素服給

云々外素服人袍黑染單ナル袍也然而或又用位袍先例也件事自入道殿一日度々蒙仰注進了大

治信範卿記如此注之而近來位袍事不見長元土御門右大臣治曆二條殿如此云々

〔國太曆〕文和二年九月廿三日前關白○藤原基被談重喪間不審之事。○去年十一月光

御忌中條々

一御素服事

ふし力子染ヒキノリ御帶同御大帷若花色候哉又白候哉。○中略

御不審條々

一御素服事

今御問答之趣若參着歟稱素服者緩麻白色也不染之如直衣調物也。相具是ハ如政所下家司調

進也凡不限主人御一身兄弟姊妹并家僕男女分皆同日調之被分賦也。○中略

一件御服等被調事

素服并黑直衣具。素服日用物等者同日可有沙汰之歟內々如御小直衣者各別御沙汰不可有憚乎

一着御所事。渡殿廊弘庇等常用之不用母屋歟○中略

至素服者於便宜砌着之當家等沙汰來之條如此公家諒闇之時素服大臣以下着之又庭上着之

歟攝家之沙汰事無才學未勘先例也

〔迎陽記〕貞治三年七月廿六日戊子今日渡御倚廬也。○此月七日光豐崩中略素服公卿皆參各起本殿上相率殿

上人等向北陣。○中略次着素服公卿花山院大納言。此時卷細○三條中納言○藤原藤中納言之土

歟。已時參院。左近中將公信朝臣。今朝參內裏。令大外記敦賴朝臣。令傳申遺詔。旨於右大臣。○願光遺

詔之趣。先素服舉哀。并國忌山陵等事。一切可止也。○中亥時人々着素服。○公卿行成。兵部卿。藤原忠實。余

右宰相中將。藤原家隆等。之。他侍臣。不。當。身。是。坐。着。之。但。左。大臣。春。宮。大夫。藤。原。齊。信。藤。原。仲。實。藤。原。家。等。者。雖。觀。候。不。被。着。左。大臣。者。朝。廷。公。事。有。限。其。中。必。可。被。執。行。神。事。等。可。有。其。數。仍。不。被。着。春。宮。大夫。等。俟。爲。坊。官。不。着。天。曆。六。年。小。一。條。左。大臣。雖。被。坊。官。依。院。司。執。行。御。事。已。着。素。服。國。時。之。義。自。相。異。也。藤。原。中。納。言。者。依。表。日。不。着。敷。但。丞。相。大。臣。雖。被。坊。官。依。院。司。執。行。御。事。已。着。素。服。國。時。之。義。自。相。異。料。各。差。使。事。送。云々。行。事。中。宮。亮。八。月。二。日。癸。卯。院。○一。御。法。事。也。○中。未。刻。許。參。院。到。御。飯。宿。脫。宿

清。通。朝。臣。依。爲。後。院。司。執。行。也。衣。着。表。袴。相。等。次。着。素。服。件。服。御。所。今。日。令。從。者。請。出。着。之。也。候。中。殿。西。北。渡。殿。左。大臣。東。帶。春。宮。大夫。宿。衣。源

將。內。藏。頭。公。信。朝。臣。左。京。大。夫。明。理。朝。臣。服。衣。兵。部。不。脫。表。衣。其。上。服。此。服。自。餘。脫。表。衣。下。露。等。服。公。亦。判。官。代。藏。人。等。同。着。之。但。雁。任。不。着。素。服。依。可。持。大。舍。也。前。例。素。服。者。不。脫。之。從。雜。役。亦。藤。原。中。納。言。公。任。左。衛。門。督。藤。原。賴。通。中。納。言。不。着。公。卿。座。同。立。此。座。源。相。公。重。服。之。內。亦。觀。候。人。也。然。而。亦。在。公。卿。座。也。

〔左經記〕長元九年五月十九日丙申戊一刻式部丞源重成率出納小舍人等於東對北方分行素服當

色等於一條院殿。刻限持來。○先中宮并宮々御素服衣各唐御。納折敷折櫃各一合高坏等令持小舍

人等加出納一人令獻中宮次內府以下令家人等受之同四刻於東門外申方被着之須具商布表衣

生絹下襲等而只有如狩衣之物并商布表袴不具下襲仍不脫袍其上着之又內府藤大納言權大納

言依有各忌雖被受不被着又齋院○後一條皇女依御衰日後日可令着賜云々六月六日癸丑依

當七七日御忌○中今日素服公卿有議不脫位袍其上着素服矣

〔玉海〕治承五年元美和二月十日丁亥故院月十四日期正結緣誦經物事被苑催舊臣之受領等之間

棟範示基輔之許云々是依先日余返答之趣有沙汰者爰知嘉承之例人々委不存歟傳聞實國實守

等雖非素服之例着御服其色黑陸季卿雖不賜素服着鼠色云々是依近習之親疎有服色之淺深歟

〔心記〕建久三年三月十九日入夜後予着服○中先是遣侍於廳請取素服來日後白河向王方着之

帶有其體實布身二乃有精

〔明月記〕建久三年三月廿四日藏人範孝語云入御倚座之儀日此月十三例御直衣出御東向妻戶御

〔三代實錄清和〕天安二年九月四日壬戌、東宮和○成服、群臣百寮從之、命五畿七道、始着素服、舉哀成禮。中喪服之限、以日易月、十三日而釋之、其違所者、以詔到日爲期。此年八月二日

〔三代實錄陽成三十八〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻、太上天皇和○崩於圓覺寺、七日丙戌、帝

素服、太政大臣及殿上近臣、清和院上下諸人、皆縞素、百官不須依遺詔也。

〔西宮記臨時四〕喪服

天曆八年正月四日、太后原○薨、于於昭陽舍崩、其後移住清涼殿北近廊。中十日亥刻、坐倚座、或曰

日可修件座、四即着素服、純色、實布、衣袴等也、同刻左大臣及殿上侍臣女房等於修明門外、皆着素服、四夜坐不可然也、布頭、巾帶等也。

〔榮花物語浦五の別〕神無月の廿日餘りのほごに、二年長鎌京には北方道、藤原うせ給中、但馬道

隆家には夜を晝にて人まゐりたれば、泣々御ぞなごめさせ給ふ、筑紫子、伊周隆にも人まゐりし

かど、いかでかはごみにまゐり着くべきにもあらず。中筑紫のはい、十餘日といふにぞ参り

つきたりける、哀れされば、よくこそ見え奉りにけれと今ぞ思されける、おんぶくなど奉るごと、

其をりにきてましものを藤衣やがてそれこそわかれなりけれ

こそ獨ごち給ひける

〔源氏物語十〕おどろくまきさまにもおはしまさで、かくれさせ給帝、綱あしをそらに思ひ

まごふ人おほかり。中中宮宣、藤大將殿源氏、源などは、ましてすぐれて、ものも思しわかれずのち

のちの御わざなど、けうじつかうまつり給さまも、そこらのみこたちの御中にすぐれ給へるを、

ことわりながら、いとあはれに世の人もみたてまつる、ふちの御ぞにやつれ給へるにつけても、

かざりなくきよらに心ぐるしげなり、

〔權記〕寛弘八年七月八日己卯、今日御葬送也。一寅四點地鎮、大炊頭光榮朝臣奉仕云々、山作所事、

左衛門權佐朝臣、但馬守國舉朝臣、後殿上人、別常戴人所出納高橋國忠行之、不着素服、當色、依中宮大進

服通用蒔麻、公除已後用黑染、卽黑橡衣也、又義解云、錫紵細布淺黑染衣也、然則橡衣、錫紵、蓋一物也、

〔羽倉考〕續日本後紀所謂橡染ノ御衣猶可爲凶服之事

續日本後紀ニ、承和七年五月戊戌、天皇除素服、着堅絹御冠、橡染御衣、以臨朝也トアレバ、此橡ハ吉服ナルニ似タレドモ、愚意オモヘラク、是布ヲ除キテ絹ニ改メタルバカリニテ、ナホ凶服ナルベシ、其證五ツアリ、先づ素服ヲ除キテ尋常ノ吉服ニ移リ給ハハ、其吉服ノ品ヲ舉ルニ及ブベカラズ、是一ツ、又令式ニ據ニ五位以上スラ羅ノ頭巾ヲ用ヒテ絹ヲ用ヒズ、況天皇ヲヤ然ルニ絹ノ冠ヲ用ヒ給フハ、是猶文飾ニ非ザル素服ノ類ナリ、此冠ト同ジク用ヒラル、衣、吉服ナルベカラズ、是二ツ、又衰帛黃、檣青色赤色等ノ外、橡ナド云乘輿ノ御吉服他ノ書ニ見エズ、是三ツ、又天曆ノ御記ニ引テ西宮記裏書ニアリ天曆八年正月廿二日、除素服村上天皇、其皇太后爲ニ若御有シ也、二月廿二日、修法會、服黑橡ノ袍、鈍色ノ下襲、同ジキ表ノ袴、烏犀ノ帶、着重服ノ冠トアリ、侍臣女房等モ、正月廿二日、除素服、着皂衣ト見エタリ、西宮記ニ據リテモ、素服ノ限ハ、日ヲ以テ月ニ易ヘ、猶一周ノ間ハ、橡ノ衣ヲ着御スベシ、是禮記ニ父母之喪ニハ衰冠繩纓ス、十三月ニシテ而練冠ス、三年ニシテ而祥スト云類ニテ、段々ニ素服ヲ去テ吉ニ移ルナリ、是四ツ、又續日本後紀、上ノ文ノ後ニ、屏風之縁ニハ、並ニ用黑染細布、但御座者、施簀於砥礪之上、不立御榻トアリ、並ビニ諒闇非常ノ體ナリ、是五ツ、如此ナレバ、縱朝ニ臨ミ給フトモ吉服ニハ非ズ、且續日本後紀ノ印本文字ノ脱誤甚多ケレバ、以不臨朝也トイフノ不ノ字ヲ脱セルナルベシ、彼ノ紀ノ見ル所、承和七年五月、淳和天皇崩ジタヨリ、同八年五月マデ、遂ニ臨朝ノ文ナク、七年ノ重陽、八年ノ朝賀、並ニ諒闇ナリトテ廢セラレ、八年五月丙申、後ノ太上天皇之服ヲ除クトテ、諸司ヲ會ヘテ大祓シ、六月朔ニ、初メテ紫宸殿ニ御シ給ヘリ、是西宮記ニ謂ヘル、一周ノ間、依不臨朝服黑橡衣ト云ト符合セリ、



天豐財重日足姬天皇四年、讓位於天萬豐日天皇。○孝立天皇○天爲皇太子、天萬豐日天皇後五年十月崩、明年皇祖母尊明、即天皇位、七年七月丁巳崩、皇太子素服稱制。

〔續日本紀聖十〕神龜五年九月丙午、皇太子薨。壬子、葬於那富山。時年二、天皇甚悼惜焉、爲之廢朝三日、爲太子幼弱、不具喪禮、但在京官人以下、及畿內百姓、素服三日、諸國郡司、各於當郡舉哀三日。

〔續日本紀聖十七〕天平二十年四月庚申、太上天皇正元崩於寢殿。丁卯、勅天下悉素服、是日火葬太上天皇於佐保山陵。

〔續日本紀孝十〕天平勝寶二年十月癸酉、太上天皇正元改葬於奈保山陵、天下素服舉哀。

〔續日本紀孝十九〕天平勝寶八歲五月乙卯、是日太上天皇武聖崩於寢殿。己未、文武百官始素服於內院、南門外朝夕舉哀。

〔日本後紀仁武十三〕大同元年三月辛巳、天皇武祖崩於正寢、春秋七十。癸未、是日上城○平着服、服用遠江、貫布、頭巾、用皂、厚絹百官總素服。

〔續日本後紀仁武九〕承和七年五月癸未、後太上天皇和淳崩于淳和院。○中令五畿內七道諸國、始自九日申○甲未四刻、國郡官司着素服於廳前舉哀三日、每日三度。甲申、天皇於清涼殿着素服。以遠江貫布、奉着御

壬辰、右大臣從二位藤原朝臣三守已下十一人奏言、臣聞天下大器、群生重寄、一日萬機、不可暫曠、是以周營牧野、猶抑荼毒之心、漢聽德陽、復緩斬綏之慟、伏惟陛下至孝過禮、痛深衣冠、泣血攀號、不

莅朝、位臣等謹見遺制、曰葬舉葬、莫煩國人者、伏願釋凶服而垂冕旒、制哀襟而褫鞋纓、則上遵遺詔、下叶舊章、豫承給旨、宣告內外、不任懇情之至、謹詣闕奉表以聞。戊戌、天皇除素服、着堅細御冠、橡染

御衣、以臨朝也、御簾及屏風之緣、並用墨染細布、但御座者、施簾於砥礪之上、不立御榻。

〔大日本史禮樂五〕按西宮記曰、期年之際、不臨朝、故不服位袍服、黑橡衣、又按令義解云、天皇爲考妣、令條無文、依式處分、圖太曆引野宮左府記云、重喪服用商麻、心喪用黑染、黑染細布服也、據此則素

一廻服事 大臣服

白生平絹小直衣單、袖なし。 白大帷

白平絹指貫綫、面。

白腰次

白生帶淨衣の帶。

烏帽子うす

扇楸弓は、紙無文、くろき竹骨。

大中納言以下諸大夫までの服事

白生平絹狩衣單、袖なし。 此外下具以下は、さきの大臣の服の小直衣に同、四十九日がすぎて

はこのそばつゝ、きにても又かり衣にても着し、仙洞以下の諸第へは參る也、夏冬通用也、禁裏へ

は一廻の程は參せず、但吉服出仕事別勅にて仰せらるゝ人は、一廻の中も吉服を着して參内也、

當家は御用ある間、大略服假中吉服出仕也、永康卿は、重服中なれども、着服せねば子細なしとて、

法家勸文にまかせて、給旨を下されて、神事御服に參、眉目の事也、

又内々は生白平絹ひた、れ、袖の紐はかりなし、白。

又白布のひた、れ、袖の紐はかりなし、白。

或無文のあさぎのひた、れは着用する也、白小袖なるべし、

輕服の裝束當時は着せず、いごまの程籠居其已後は、除服の宜下ありて、吉服にて出仕する也、

〔日本書紀仁孝〕大鸕鷀天皇仁孝 譽田天皇神 之第四子也、中 四十一年春二月、譽田天皇崩時太

子菟道稚郎子、讓位于大鸕鷀尊、略 未即帝位、中 太子曰、我知不可、奪兄王之志、豈久生之煩天下乎、乃

自死焉、略 於是大鸕鷀尊、略 素服爲之發哀、哭之甚慟、仍葬於菟道山上、

〔日本書紀九〕四十二年正月戊子、天皇崩時年若干、於是新羅王、聞天皇既崩、驚愁之、貢上調船八十

艘及種々樂人八十、是泊對馬而大哭、到筑紫亦大哭、泊于難波津、則皆素服之、悉捧御調、且張種々樂

器、自難波至子京、或哭泣、或歌舞、遂參會於殯宮也、

〔日本書紀二十〕天命開別天皇、天 息長足日廣額天皇、舒 太子也、母曰天豐財重日足姬天皇、皇

〔雜事抄〕舊院素服事公方素服は、うちかけのやうなる物也、此これなまづかる也、是も私の服は、みな日次に着て着之。

公卿服事 束帶

色目吉服に同、皆平絹鼠色れいしき、裏表同色、夏は生の單也、表袴うらの色紺子ばかりかはる也、平絹冠きんぎょきて付、但當時は只紙也。

衣冠事

袍平絹鼠色、白大帷 指貫鼠色平絹の、腰次袴、白下 帶黒色、扇夏冬ともに

狩衣事 小直衣同之

生平絹狩衣黒色、袖のくいりなし、夏冬同、秋は一寸前へぬひこす、帯おなじに、烏帽子うす

下具、衣冠に同、この素服は夏着すれば、そのまゝ、冬も同物を着す、又冬着しぬれば、そのまゝ、夏も同物を用也、いづれも更衣なし、

四位五位殿上人北面等素服事

黒布上下ふしひやう染、袖のくいりなし、身を入るい也、白大帷、白下袴身を入るい也、黒帶生、烏帽子うす

御中陰の七日七日の御經供養の時は、この素服に平絹冠きんぎょを付る也、物忌ものいを着して、殿上人等御布施を取也、馬副の装束のごとし、御中陰の間は物忌を付、本儀は木を一寸ながさ二三寸にけづりてかきて付也、つけ様あり、又た紙にても書て付るなり、

私服事 素服

黒布上下、さきにしるすが如し、これは大臣より諸大夫まで此ぶん通用なり、但攝家大臣は、黒生平絹の小直衣、同色練平絹指貫、又大臣以前、大中納言の時は、黒生平絹かり衣、同色練の指貫等着する人もあり、家々例不同也、夏冬通用也、この素服、黒淨衣にても、黒かりぎぬにても、裾を左のものだちのうちへおし入なり、此外の着様はつねの如し、

素服。郊次。鄉師而哭曰。孤違蹇叔以辱二三子。孤之罪也。不替孟明。孤之過也。大夫何罪。且吾不以一青掩大德。

〔漢書高帝〕三年三月。三老董公。遮說漢王曰。臣聞順德者昌。逆德者亡。兵出無名。事故不成。故曰。明其爲賊。敵乃可服。項羽爲無道。放殺其主。天下之賊也。夫仁不以勇。義不以力。三軍之衆。爲之素服。以告之。諸侯爲此東伐。四海之內莫不仰德。此三王之舉也。漢王曰。善。非夫子無所聞。於是漢王爲義帝發喪。祖而大哭。哀臨三日。發使告諸侯曰。天下共立義帝。北面事之。今項羽放殺義帝。江南大逆。無道。寡人親爲發喪。兵皆結素。悉發關中兵。收三河士。南浮江漢以下。順從諸侯王。擊楚之殺義帝者。〔白虎通卷四〕禮。庶人國君服齊衰三月。王者崩。京師之民喪三月。何。民賤而王貴。故三月而已。天子七月而葬。諸侯五月而葬者。則民始哭。素服。

〔杜氏通典卷百三十八〕初終

齊練以下。丈夫素冠。婦人去首飾。謂齊練也。內外皆素服。素服。謂有服者白布十五升。無服者不服。列練。則常所素衣。

### 成服

三日成服。○註。內外皆哭。盡哀。內外俱降。就次着練服。無服者仍素服。

○按ズルニ。列練ハ五方ノ正色。即チ青黃赤白黑ノ五色ナリ。禮記喪大記ニ。凡陳衣不訓。非列采不入ノ註ニ。列采謂正服之色也ト云ヒ。疏ニ。列采謂五方正氣之采。非列采謂雜色也ト云ヘルガ如シ。

### 〔諒闇和抄〕倚廬渡御の事

素服をつくるに。公卿は六位藏人。殿上人は出納。これをきする也。素服は黒き布にて。わたりのこと。おの／＼つけをはりて。上臈より次第にかへり入て。倚廬の殿上につく。殿上人便りの所にさぶらふ。女房素服をつけてかへり参る。



通用雜色令義貞觀因之北山抄引凡錫紵用細布淺黑色令義

近制喪冠繩纓袍用闊腋黑布索帶

布袴右記西宮紀中通謂之素服西宮紀中玉海國太其輕服用無文冠西宮玉勝間

〔玉勝間〕人のうせたる後のわざ

書紀の仁德天皇の御卷に素服といふ字など見えたれど例の漢文のかざりにこそあれ、そのかみさる事有しにあらず、仲哀天皇崩りましゝて、いくほどもなく、神功皇后の重き御神わざの有しにても、服なかりけむこととせられたり、

〔貞丈雜記凶事〕

素服といふは、父母妻子等の死したる時、かなしみの時に着る装束也、則喪の服也、

是をふぢごろもと云也、本は藤かづらを水にひたして打ひしぎ、その皮の糸にておりたる藤布を用る也、後に麻布を用る事になりたり、うすすみ色とて、うす黒く染る也、かなしみの時なる故、あらゝ敷衣服を着る也、薄墨色もうるはしからぬ色也、素の字は、シロシども、スナホともよむ字也、素服は、シロキ心にてはなし、すなほなる心にて、どりかざりなき心也、忌服の服も、此衣服を着する事を云也、うすすみ色は鼠色也、にび色とも云也、少し青みのさしたるを青にびと云也、鼠色の衣服はいまゝしき也、常に着べからず、

〔年年隨筆〕

服は素服、鈍色に染たる布の衣なり、親戚のおもひにをる日數のかざり此衣をきる、

歌に藤衣とよむもこれなり、鈍色は今鼠色といふ色にて、その人の親きうときによりて、其色のこきうすき意をらひある事なるべし、親戚のおもひにて、美服するこゝろもなき人情をねざしにて定たる制なり、此服をきたるほどは、猶かなしびおもひをる姿なり、假の日數だにたてば、服者といへども、事に去たがひて、素服ながら内裏へも曹司廳へも參入せし事なり、中ごろよりは、父母喪にも除服を仰らるゝ事となりしかば、今においては、公家さまといへども、服を着ながら出ありく事はなし、まして下さまには、服きる事は跡たえて、名の義をもしらざめり、

〔春秋左氏傳第七〕

三十三年夏四月辛巳、敗秦師于殽、獲百里孟明視、西乞術、白乙、以歸、○中 秦伯

三月五日、戌刻着御錫紵、殿下作進之、次第如左、  
奉行頭右大辨資時朝臣

錫紵着御御次第

奉行藏人、役錫紵具御座等、○中略

剃限出御

次着御錫紵今、向吉給

次撤御冠着御無文御冠、  
今度無御冠、等之儀

次脫御錫紵乍、着御御冠入御

次藏人、撤御裝束具置便所、

七日、申刻參内、今夜錫紵脫御、

〔陸量朝臣記〕實曆十二年八月廿一日、從山科家錫紵○此年七月二日桃圖廟以下云々、内藏頭持參、

一 黒袍 三領

〔忠言卿記〕安永八年十二月九日己未、午刻參内御服以下調進、諒開傳奏奉行江相渡了、○此年十月後

錫紵御衣

御夾形平緒花田染 御總角花田染 御腰御袍之、今度攝政殿、依、後、左、調進、爲、右、撥、御半臂、同、無、御、下、襲、同、御、單、  
同表御袴面、黒、横、裏、柑子、染、之、御、大口、柑子、染、面、裏、御、拾、扇、花、田、染、金、目、赤、銅、布、御、帶、黒、横、如、御、常、繩、御、帶、御、襪、無、裏、白、御、服、裏、白、生、已、上、居、柳、宮、土、高、坏、於、御、具、別、御、之、

〔名目抄〕素服着、之、物、也、

〔大日本史〕禮樂五天子凶服大賻制、天皇本服二等已上親喪服錫紵三等已下及諸臣之喪、除帛衣、

素服

廿日、候、倚廬番右府令參給葉室大予○中御門宗顯申云、御錫紵、藏人頭持參之事有御次第、度々記同之、御倚廬之內、御錫紵可有之候哉、明晚如御次第持參、御錫紵之事、雖有度々記不審之由申之、一段尤二思召由也、則被窺兼大役御座由也、仰了畏入了、

〔基量卿記〕貞享二年三月七日、御錫紵御裝束○此年二月二十二日、從內藏頭調進予請取之渡頭辨了、後西院卿中略、御錫紵之御服、略其體、如延寶六并八年等調進之儀同前也、但相違之分、諒闇旨御心喪之差異也、殿下被命調進之、仍記之、

相違之分

一御下襲御單等於諒闇者麻也、此度平絹、一御袍於諒闇者關腋、於此度縫腋也、一御冠於諒闇者以布張之、此度常之羅無紋也、一御纓於諒闇者索纓也、此度常之御纓無紋無御卷纓、一索御帶無之總而御服於諒闇は左紐、此右紐也、其外之儀、染色仕立樣等、先年同前之間、略之不記、

〔丹波賴庸記〕寶永七年正月十二日、申刻參內、今夜倚廬出御○中御門去年十二月御直衣紋小裏紅

御張袴、頭右大辨候御襦○中略、看御帳臺之前之御座、爲奉仕御裝束、次儲錫紵、廿四日、早旦奉仕諒

闇之御裝束之事、極臍令參勤云々、酉下刻、密々出御倚廬、素服之公卿殿上人、於非藏人部屋密々着

素服、着倚廬之殿上公卿座也、殿上人不着、次職事告可除素服之由、次公卿殿上人出北陣脫素服○中略、

藏人頭持參錫紵○註、次着御錫紵、次令脫錫紵、

〔丹波賴庸記〕享保五年二月廿八日、自右大臣殿○近衛久、今夕方可參旨被仰下、從頭右大辨○日野被附、一

通來月五日可有遺令奏○東山后幸子女、此月十日、可令申沙汰之旨也、別口上可爲面談之間、只今可向彼亭

旨也、早速向右大辨許口對面來月五日午刻遣令奏使右衛門佐忠量朝臣、上卿廣橋大納言云々、刻

限午刻也、可催已半刻旨也、同日戌刻錫紵着御、七日戌刻、錫紵脫御云々、廿九日、已刻參太閤御對

面○中略、辰刻出納入來對面、錫紵着御五日戌刻脫御七日戌刻、雖然申刻必可參集之旨令下知畢、





事近例也。倘應十二日之間御引直衣櫛布御大口白布可被召候事也。近來依之略如此也。

〔墓量卿記〕延寶六年六月廿一日、晚向高亞相亭錫紵御前裝束奉仕事令傳受。此月十五日、後水今

度依無其人予可奉仕故也。廿二日、今日御次第持參。略中

撤御錫紵事藏人、御次第ニ有之候、五位六位如何事、同前ニ可爲六位事。略中

御次第、御錫紵下宮主時、六位藏人、置布類留絹類由有之如何事、左右府仰云、大永比零落之間如此、

今度悉皆可下候由也。

廿六日、今日、內藏頭、御錫紵以下御服等持參。

御錫紵

一御冠無漆類、無羅二代布也、

一御繩纒細纒也、黑布、纒一筋、同又一筋ヲ細纒也、

一御小本結色九尺、鼠也、

一御冠柳宮高六寸、長八寸、

一高土器高五寸、大四寸、四方、其體

一乘御衣柳宮橫一尺二寸、長一尺五寸、

一同高土器高四寸五分、四方、大

一御表袴布表、襠鼠、大方、黑、色、裏、紺、子、色、正、色、茶、色、少、黃、色、ト、ケ、縹、鼠、色、縹、也、結、樣、如、例、

一御下袴同、色、大、形、如、常、左、マ、ヘ、也、

一御袍缺、膝、地、實、布、同、表、袴、一、重、無、裏、絳、左、襠、也、

一御下襪同、前、無、別、重、

一御單同、色、上、等、

次持參內藏寮御裝束置御座傍

鈍色綿御衣一重、柑子色御袴一腰、入白生平裏置衣篋、錫紵御裝束外、內藏寮御衣別置之例也々

次着御錫紵、御裝束師參進奉仕之

向吉方着之

御裝束畢御座

次撤本御冠、奉加服御冠

次取貫布、奉結之

臨期藏人持參御櫛髮搔等居柳御裝束師、如形奉理御鬢畢、即返給藏人

次主上向其御廟方爲報酬着錫紵之由有叙念度々例也

自倚廬還御次第初作進回前

當日早旦、行事藏人、令內匠寮奉仕諒闇御裝束近代行事藏人奉仕之○中略

次奉行職事、召儲陰陽師於藏人所、令勸可除御錫紵日時、職事奏聞、勘文留御所○中

次藏人頭持參錫紵御裝束居柳宮如先度

次御裝束師參進奉仕之○中

次令脫錫紵給

御裝束師如元帖之持出之授藏人、藏人授內藏寮官人給之置宮主前薦上、置布類留絹類

次着御諒闇御裝束

內藏寮付女房內々進之、御冠自元爲服御冠、不召改之○中

次宮主內藏寮官人等、相具御錫紵并臣下素服等、向河原切棄之

〔言繼卿記〕天文四年二月九日庚子、諒闇御服ハ、○後奈良御母藤原藤子、此年正月十一日薨、倚廬終二根本參候、今日參候

下○藤原殿下與敬慮同仍俄常御草鞋求出畢兼日諒開傳奏可有沙汰事也出納給下行調遣之間  
還幸御用之由傳○藤原於常御所御服御引直衣也永家朝臣奉仕範遠朝臣御前裝束自臺盤所妻戶出御  
其時關白出妻戶朝餉簀子邊佇立給先劍將源宰相中將○中持弓鏑劍細劍但入臺盤所妻戶自內侍

手取御劍出妻戶立簀子次關白被候御簾頭辨獻御草鞋即乘脂燭前行先是左中辨乘脂燭踰殿及  
出御前行○中夜職事無人只次中院宰相中將○中持弓鏑劍細劍但入臺盤所妻戶自內侍

主上依御引直次六位藏人橘以緒管原在忠○中持弓鏑劍細劍但入臺盤所妻戶自內侍  
衣不及御○中先繩纓御冠柳宮上敷御幘其上居御冠居柳宮柳宮居高坏御錫紵具一令取重居柳宮同

居高坏先置御錫紵藏人取之授頭辨頭辨取之置御前○中居間爲規式帖上可添置無之由頭辨所存也  
冠○中可置也相違歟次御冠置之藏人又渡頭辨頭辨持參御錫紵相副置之○中右方凡此等之物自寮官

手藏人直取之也今度山科宰相○藤原在傍此等取調出之也○中御錫紵着御綾御冠召替○中冠也  
範遠朝臣可奉仕之由永家朝臣相命着御後永家朝臣更進寄奉結御幘○中結巾也疊折退去此後裝束

師退去此後殿下退去此後御廟方報酬之儀此後御錫紵脫去○中御下袴計着御也  
渡御倚廬次第

當日未明奉行職事召儲陰陽師於藏人所令勸日時  
造始倚廬裁縫素服

渡御倚廬着御御錫紵○中  
次主上着御御帳前平敷御座○中

次藏人頭持參御冠置御前  
次藏人頭持參御錫紵御裝束置御前○中

布黑染闊腋御袍同半臂下重表袴平絹鈍色御相單柑子色大口繩御帶置柳宮居土高坏  
次藏人頭持參御錫紵御裝束置御前○中御草不審凡人之所云  
布黑染闊腋御袍同半臂下重表袴平絹鈍色御相單柑子色大口繩御帶置柳宮居土高坏

也○中

府、次御

中納言

被着御

哉之由

問、○  
註

元略

決不決

去之

進殿上

卿列末

內令着

女官一

又令焚

座、御縣

御冠不

八管別記

出納所

服之儀



行職事行事藏人等檢知之、次信愛朝臣取御冠藏人之人參入、置御座前弘筵上、白土高坏上置柳筥、

柳筥上置貨布三尺計、帖置之其上置無文御冠藏人次隆仲朝臣持參御裝束、當御冠西同置之、同高坏上置

大柳筥、柳筥上置御裝束、

御機藏人御大口紺子御單衣純色表御袴以藏三筋、御平緒藏人御扇純色無

次信愛朝臣持參內藏寮御服置御裝束西純色帖置之以上藏白生手妻居衣藏人次御裝束人隆廣朝臣、

立御前於弓者立外置之隆廣朝臣一身奉仕不可叶候間、密々永季自閑所參仕奉仕之藏人次着御御裝束、

直衣藏人向吉方着御之御裝束畢居御撤御冠吉御冠上奉加服御冠次取貨布縱三重押帖御冠

額引廻奉結之御本結不改之藏人此間御櫛二枚御髮搔等居柳筥行事所言長持參之隆廣朝臣取

之、如形奉理御髮則返賜言長次御裝束人撤御裝束如元帖之置柳筥召藏人賜之御冠留御所

置御帳御枕上方八月九日庚子今夜還御本殿日也自渡御日至今日十三日內藏寮官人進御錫

紵藏人隆仲朝臣持參之隆廣朝臣依召奉仕御裝束即令脫給隆廣朝臣帖之持出之行事言長分

之於御袍御下重半臂御表袴索御帶者藏人入柳筥居之高坏授內藏寮官人官人置宮主座前薦上

至御大口御相御機御扇等者言長進女房官長年少之謂大

〔山賤記〕さてもすぎにしゑはすの廿七日二年文明いとくみやこよりとみの事とてふみのあり

しに此夜半に法皇花關後の御方御中風にやにはかに御ことそこなはれぬるいそぎ參るべきよ

し侍りしかば中くればはてぬ程に參りつきてきしに、はや此明ぼのに御事きれ侍るよし申

けれど心まよひにはさだかにしもおもひさだめず中正月十六日內裏後土には御錫紵め

し倚廬の御すまゐなごうけ給はる中山がつ後花關王も素服さるべきにて侍れどよろづ

かきこもる身にしあれば思ふにかひなき事どもにて下

〔和長卿記〕明應九年十二月十一日辛卯今夜倚廬渡御也八日後柏原、此年九月二十武家用脚依遲々

昨日御札恐悅候キ、四條納言勅答、如何令申候ラン、昨日御問題、若アシク了簡仕候シヤラントテ染筆之、於御素服者可令依本所御計給事候素服不給トテ自本所被調進候歟、心喪者上下依志之淺深着之候、御佛事ナド常儀ニ被行候者、着御彼御裝束御參、二代御例不可有相違候、若御佛事ナド常儀被行、公卿參仕ナド不參候、無御參本所歟、御參内ナド許ニ心喪御裝束ハ、無所據ヤト存候、但其モ就御懸志令着給候條ハ、不能左右候、強不可有巨難候歟之由存候也、昨日狀今少不申述候ヤラン、馳申候謹言、

後七月廿六日

公寶

昨日仰旨喜承了、四條大納言奉書如此候、御一見之後可返給候、於素服者一向停止之上者、不能左右候、心喪事所存之分、一紙注進仕候條々、委細被注付候者可恐悅候、猶々懸志之至不淺候也、每事近日可參申入候、實俊恐惶謹言、

後七月廿七日

實俊

心喪事、親呢一人不着用候、無謂無念之上、當家女院此御事許之間、其志不淺、但先々本所御佛事候ハテト存ニテ、每事無沙汰勿論之由存之由候、此條不審候處、正應御記分明候得者、御參内許ハ、無詮ヤト覺候、所詮心喪服者、該圖ニ着用而無、如若座者、只可爲參内等許、如此先例不可候歟、然而所詮不可有苦者可着用不觸穢裝束候、仍近來人々イタラ不着ケニ候、然而本所御佛事ナド候者、着用勿論候也、着用之條勿論歟、但正應五年十月廿三日入道左府記云、後聞今日大臣殿御參内云々、令着吉服給、於此御所者、所召心喪也、先例又如此云々、案之心喪裝束參内可擬酌歟、正應御例ニ不、先例如此ニテ候得ハ、不可及別御不審御沙汰之條可、然候歟、

令着用者不審條々

一於冬裝束、存知之至、夏體不審、冠有文ハ、只普通冠候歟、扇於冬ハ、無置物、夏扇如何、又先々御佛細々御出仕ナドニテ後々ハ、口トモ初度被略下格、不可然候歟、不可有論、無文花田紙用之候歟、事着座下袴參内許可上給之條、不可有難歟、略中

後七月廿六日

隆蔭

〔迎陽記〕貞治三年七月廿六日戊子、今日渡御倚廬也、○後光嚴此月七日、此間内藏寮儲御錫紵、東方奉

喪籠并着服事、以行光談申之處、兩樣尤可望申歟之由示預訖、仍此趣付四條前大納言○藤原所  
 伺申也、但正應竹中入道左府嘉元菊亭入道右府喪家事依申沙汰令着素服歟、然者今度以正  
 應後西園寺入道相國○藤原實家嘉元竹中入道左府之例、可着心喪服之條可宜歟、於此服者不及伺  
 申時儀、可着用哉、將又喪家事、強難不申沙汰之素服事、猶可申入歟、宜隨御計、委細可示預乎、  
 正應五年九月九日、大宮院○後醍醐崩御、同十月九日、後西園寺入道相國令着心喪服御佛事出  
 仕、竹中入道左府爲彼院別當喪家事、口入令着素服、

嘉元二年正月廿一日、東二條院○後深草崩御、竹中入道左府令着心喪直衣御佛事參仕、菊亭入  
 道右府○時中喪家事申沙汰之着御素服、

御札之旨承了、禁裏錫紵事、於此條者、勿論不能左右候歟、至御進退者、不可依公家錫紵候哉、宜就  
 本所儀、可有御用意候歟之旨存候、二代御例拜見了、此條不及不審候、而今度者、偏異門僧申御沙  
 汰候歟、就中兩上皇○光明、非尋常御法體之上、此間御所體、御喪家禮モ定不可被用、先々規式候  
 哉、然者今度不及本所御沙汰、不令着御素服給候者、每年無沙汰勿論候歟、由存候、但已被伺申候  
 者、隨勅定、可有御進退候哉、異門黑衣御事、曾無先規候之上者、被仰臨時之勅斷之外、不可有子細  
 候歟、愚意了簡大概令啓候、不可被指南候哉、謹言、

後七月廿五日

廿六日、女院御忌中儀以下、每事不審之間、按察卿先日參入、定有才覺歟、不審條々尋之、有返答○中  
 一、公家御錫紵、是ハ勿論候歟、正應大宮院御例ナドヲコソ被模候ラメナ、  
 一本所素服御沙汰ナド候ヤラム、就其上下人數ナド御沙汰モ如何間食候ラム、○中

後七月廿六日

公賢

西園寺大納言素服以下儀問答事

紵者、先着御心喪、長短納被仰合、如法家云々、所詮寂慮者、法皇御養父、難被聞、可有五ヶ月心喪之由、歟、而後伏見院○光嚴御事時、已着御重喪了、重又着養父御服、不存先規也、只御叔父之義、不可有子

細哉之旨、予頻申入之事、親顯朝臣奉行云々、

十二月奉行人親朝臣記  
二日甲子、着束帶參仙洞、御錫紵事爲申沙汰也、亥刻幸新殿、兼日相尋日、次於在實朝臣畢、先覽日

時、勘文、入宮蓋於東向妻戸、就即下廳、次中門廊立廻屏風、二帖召渡大宋屏風之所、破損損之間、自御所申出之、其內敷差筵

二枚、其上敷綠疊向中方爲御、其左置御冠、右置錫紵具、各居柳宮、置土高坏御屏風、外兩方供掌燈、

高燈蓋、次親明置唐匣蓋被入御殿、次入御御屏風內、惟清同參爲御裝束也、次着御無文御冠并錫

紵、即脫御、還御常御所不被放無、次親明取有文御冠入唐匣蓋、付女房進入、次御錫紵并御帶被預

應六位長次撤御裝束、

十四日、入夜廢人次官時、經爲勅使入來、謁之、傳勅定云、年內日數相迫、諸公事計會之上、公家錫紵廢朝事可有之、常儀可爲五ヶ日歟、件日十七日廿日之外無吉日、十七日者御幸始日也、公家仙洞雖相異、同日可有憚歟、將又廢朝三ヶ日可爲何樣哉、可申所存云々、先申云、廢朝三ヶ日常事也、但太上天皇御事之時、大略五ヶ日歟、猶可被尋例哉、公家仙洞雖異、事御幸始御祝着日、錫紵可被相計歟、旨申入了、

〔國太曆〕文和元年十二月廿八日、後聞今日主上○後光嚴着御錫紵云々、此後光嚴御母藤原秀子、但內藏

司御服仍先着御、其後召錫紵云々、

〔國太曆〕延文二年閏七月廿五日、西國寺大納言○實昨日同題事、重被談合、問答續左也、

禁裏○後光嚴御錫紵事○此月二十二日被尋日次之由承候、實俊進退不存定候、當家先例、并恩意

之趣注進候、委細可注給候哉、實俊恐惶謹言、

後七月廿五日

實俊



錫紵者、卅日辛未、主上三歲召錫紵、遷御別殿此弘御所北、幼主七歲以前無倚廬儀、又不召錫紵也、然而依憚、永萬養和例、聊被相違也、

〔明月記〕天福元年九月卅日辛未、及日入參宿院○後略、今度事、偏以新儀被行、嘉承永萬治承御倚廬代、無御錫紵、無公卿已下素服、今度有沙汰、故不用彼例、又依七歲已前不用例儀、以新儀可被行、由被定了、同御いゝ代、調進御錫紵但無者御着、猶可有公卿已下素服云々、而今月於院御所參入人々、又有成不審旨、不御いゝ、殿上公卿着素服、可着いゝ、殿上無其所進退如何者、然者不着殿上直可着陣歟、將可着例殿上歟、又藏人着素服不着例殿上、日給簡封如何、藏人一人不着而可行歟、將雖給素服、又着吉服、可行簡封等歟、兩卿已下不詳定申、依新儀大略兩舌歟、度々雖往反無聞公事、非其仁者不及委聞、但給素服、更着吉行事故、入道殿深被歎仰事也、今被仰其由事、尤以不審心中思而聞之許也、

〔百練抄十四條〕天福元年十月十二日癸未、主上除錫紵○此月六日、自別殿遷御本殿、宮主兼躬奉仕御

文曆元年○天福二年八月十一日丁丑、故院凶禮也、主上召錫紵御別殿、廿二日戊子、今夜主上除御錫紵、還御本殿、

〔圖太曆〕貞和四年十一月十八日辛亥、一昨日被仰合條々、今日以春宮大夫申入了、○中略  
一內藏寮御服事

件御服事、未得委才覺、○中略內藏寮御服事、別有沙汰候條、先規不詳之上者、不及沙汰可有錫紵歟之旨、有勅定、○光嚴御叔父花園、此子○藤原猶尋究之處、久壽爲錫紵着御先被經沙汰、當日着御後御服、○內藏頭無其仁候間、其後着錫紵云々、此上勿論、如然可有沙汰之由勅定畢、十二月二日、抑今日上皇○光着御故法皇錫紵云々、此間被經御沙汰了、其儀猶未一決歟、然而於錫

擇申可着御錫紵日時

今月十五日辛卯 時戌可向御乾方

大治四年七月十五日

陰陽頭家榮

刑部大輔朝隆奉

擇申可被除御錫紵日時

今月廿七日癸卯 時戌可向御巽方

大治四年七月廿七日

陰陽頭家榮

朝隆奉之進勘文之後、更着御之後、依仰於東南壺動仕御祓畢、

御裝束 御袍 腋間 半臂 下襲 表袴皆太布染黑色等也、但中不被除御冠沓等候也、兼有

其儀云々此定候也、此外御裝束は依爲心裏不被除云々、

〔續世繼志〕六賀の御禮、女宮は、皇女一品宮とておはしまし、は、禰子の内親王とて、賀茂のいつき

にたち給へりし、御なやみにて、ほどなくいで給ひにき、長承二年十月十一日、御とし十二にてかくれさせ給にき、略中みかど、德樂は御いもうとにおはしませば、御ぶくたてまつりなごしけり、

もんもなき御かぶり、なはいないなごきこえて、年中行事の障子のもとにてぞたてまつりける、みかどは日かすを月なみのかはりにせさせ給なれば、三日御ぶくこぞきこえける、

〔玉海〕建久三年三月十九日辛卯、此日主上、鳥羽後避正殿御子倚廬也、此月十三日、宗頼朝臣持參御

裝束、布黑染、同膝御袍、同半臂、依緒一筋也、同下襲、同布、表置御前、布冠、次實明朝臣持參、內藏寮御

衣、鈍色、綿御衣一領、御袴一腰、白生、平裏、置、御座、南傍、

〔百練抄〕四天福元年九月廿四日乙丑、右中辨光俊朝臣爲退令使參陣、固關警固事被宣下、又諒聞

儀也、但主上錫紵事有豫議、此○母后藤原子、嘉承之度、即位以前、御別殿、當今已成人之禮也、仍可召

諸上皇河○白着御裝束但令着布長實着束帶奉仕其事丁

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯今夜新院初○爲着御錫紵此月七是如主上御錫紵云々東北廊

自木板敷口也仍御件廊准倚廬也欲下板敷之處已去夜依渡御女院御所當王相方也御裝束色如凡人重服也

〔永昌記〕大治四年七月十五日辛卯早旦參新院中略○鳥羽仰云御重服之條諸卿口口道勘文或可令就

祖父儀給之由有口申文無御承引只就御定可計申也依殿下令申給一人之服錫紵給錫紵一年未

聞其例納言云須御倚廬折中以大盤所方落板敷爲御所中○又申云或雖新儀爲御重服儀者尤可

然又仰云於何口口錫紵哉臣下於砌下着之如何申云后宮於正寢便宜廊舍立廻御屏風有此事砌

下之儀不可候公家御于南廊宮道前庭中○申斜歸參初冠北先參新院御方御重服事猶以不便仍

前院例小野皇太后宮御繼母陽明門院祖母崩給日服錫紵以日易月其例在近仍重以難申歸來云

聞合了者但事猶不甘心御云々戌刻服御錫紵陰陽頭家榮勘申日時榮申云以日易月之時勘申

何樣可候哉院宜件御衣御服所口口本行事判官代朝隆也而今夕御與并素服非禮行列謹摩等行

事共爲戌刻事難兼行之由來故上示合凶事不違刻限早可辭申一方之由答之御錫紵行事藏人頭

進奉之日時奏人遣召判官代時通者中主上崇無御錫紵承保上東門院例也者曾祖父母有三

月之本服於法皇河○白養育義厚久主一天仰崇惟重承保大嘗會御禊沙汰之間偏就說者之文勘申

歟今度尤可召法家及諸道勘文之時也況不及食議僕爲藤原爲通六邪之誦度々雖令執奏遂以如

此殆同座伯山莫言々々廿七日癸卯此日太上天皇初○鳥令除錫紵以日易月滿十三ケ日也家榮

朝臣勘日時判官代朝隆奏勘文於土殿代初令着給所令除給云々此事如何樣雖有除御御儀不遺

御本殿不改重服御裝束事々已非前例不能委記

〔中右記〕大治四年七月廿七日癸卯裏書此月七御錫紵事相尋陰陽家榮之處示送云

○中 御裝束儀如昨日錫紵盛柳宮居高坏置御座南頭御前等也給其傍立士高坏其上置柳宮是可被

置御冠料云々除御冠強不可脫置物歟然而頭辦相尋左大辨臣朝臣剋限主上出御管無文於今夜今立件高坏又令撤却遂令立了已及再三此事如何

御座中令着錫紵給即以脫御又脫御服御冠被置御座頭不令着例御冠給持參入御即撤御裝束

〔中右記〕永久二年十月一日壬寅申時許從院河○白有召急事者仍馳參略○中仰云今日未刻中宮河后

子萬已崩給了略○中主上羽○鳥御服有無早可量申者略○中主上御服之事明法博士信貞申云可有三ヶ

日御錫紵者申旨頗有不審事等略○中於主上御服有無者追心閑憶引合本文等可沙汰歟今日朔日

也追可有一定者入夜陰人々退出大略寬平多○字中宮温子延喜七年六月八日崩略○六彼例可相叶

歟是今上略○中繼母皇后崩例者但温子后ハ養延木帝云々此中宮ハ只雖繼母不養今上如何延喜

七年御記云中宮崩依繼母雖可有一日服依有志三ヶ日着錫紵者然者彼三ヶ日ハ依御志也今度

ハ只一日御服歟先々於一日錫紵者主上不着御云々此事今日未有一定也七日戊申依召參院

○中 是中宮崩後雜事主上御錫紵有無日數等事也略○中仰云一日錫紵ハ不可服由見延喜御記也

然又故匡房卿昔年都芳門院子○崩給時勘申云雅明親王延喜七年十月薨主上略○中服錫紵一日

中除御天德四年四月理子內親王薨主上上○村服錫紵一日中除御雖一日先例有御錫紵也依彼卿

申永長元年八月上皇河○白服錫紵一日中除御也温子中宮時依養帶三ヶ日錫紵只今光平又申云舊勘文中孺子

內親王寬弘五年五月廿五日薨九歲主上條○一服錫紵一日中除御也如此例雖一日着御者人々被

申云然者一日着御錫紵則除御何事候哉但延喜温子皇后ハ依養母志三日錫紵之由見御記也於

此中宮者奉於今上無所養儀只任法嫡母繼母之儀也仍可有一月服之故一日御錫紵可然歟仰云

然者今夜着御除御可宜者略○中今夜主上於西南廊着御錫紵則除御行事藏人責兼者

〔長秋記〕元永二年十二月廿四日伊與守語云去廿二日召明法博士被問御服日數宮御服也○輔仁親王此年十一月

八日天子以日易月文勘申依仰應儲御神具士高坏上居折損其中麻布御帶一筋上卷鈍色御衣布



筵二枚其上鋪半疊爲御座其前錫紵御冠各入御首時刻出御令脫御冠直衣等給尋常御衣上令着物件等給女藏人持埋髮具御髮也即令脫錫紵給入御藏人如本取具令候便所清涼殿時二御冠入宮候御所供燈主殿女孺自此前仰陰陽寮獻日時勘文後藏人仰內藏寮手作布二段絹一疋令獻即遣縫殿寮令染鈍色同裁縫布絹紵料其體如御直衣御冠無文卷纓件事等尋舊記所被行也但先例之口不聞如何々々

延喜十九年記云此間神祇官女官每日供御贖物

擇申御錫紵日時

看御

今月十九日丙申

時戌四點

可向御申方寅與卯間

除御

廿一日戌戌

時戌四點

可向御同方

長元九年五月十九日

陰陽頭巨勢朝巨孝秀

〔百練抄四後冷泉〕

天壽元年六月十一日從一位源倫子堯

天皇外祖母左大臣藤原賴通母號靈司殿

廢朝三箇日主上着錫紵

紵

〔爲房卿記〕應德二年十一月廿八日戊午殿下早旦召頭辨被仰可令勘錫紵日時之由

此月八日白河皇弟實仁親王

王略藏人季綱爲行事召布一端絹一疋於內藏寮渡允刀自令裁縫有鈍色御袍帶生絹御下裏戊

剋召被尋仰錫紵之儀奏之西宮記着無文御冠垂纓出御着錫紵卷纓入御天德二年四月致忠殿上

日記不着御冠出御於屏風內召無文御冠者近年着有文御冠出御於御座召替無文御冠者以此說

可用之由有勅定同二點着例御冠出御白河位后宮權大夫公實於御座改着御冠本有文御冠女

着御錫紵即脫置御座之邊入御入御云次撤御裝束御衣類給出納

廿九日己未今日戌四點除御錫紵

神不覺可然之樣可申行貞信公○藤原忠平御葬家子大臣冠敷直衣敷如何可示案内者余報云因永祚

例一々可被行唯先有固關其後有薨奏次第違濫有不靜云々先有警固固關等由被問云々猶先可

被行薨奏只明日服着錫紵除給之日當重日尋前跡可被行敷可被縮日敷敷將可被延敷臨歲末遣

固關使有事煩敷被屬猶國可宜乎○中略入夜頭辨來傳關白消息云可被行警固事御錫紵日敷不滿

限日事頗可疑敷○中略又廢朝日敷有過御錫紵日敷之例敷此間事能令可申行者仰大外記賴隆令

勘申前例次定勘文明且令見下官可計行者但案内之故者夜間有可被尋覽之文書檢知前跡明日

可承置事由不待返事退去了明且可報件返事等七日癸酉早朝中將來參御堂者○中略仍早參相

待之間辨來以賴隆傳關白消息云外記勘文如此可計行者○中略御錫紵除給日敷事可定申心神不

覺不能具申者余報云々○中略今日着御錫紵第四日除可宜敷外記勘申云天慶元年十一月十二日

記云四品勳子內親王今月五日薨○主上御筆去九日薨奏同日服御錫紵同十一日滿三箇日可除錫紵也

而當御衰日仍及四箇日所除也者如件勘文延一日例分明也天曆八年九月廿日重明親王薨奏服

錫紵廿三日除給已及四箇日件例注出又御衰日除給例康保三年十二月廿二日○壬午中務卿式明親

王薨奏服錫紵廿四日○甲申御衰日除給避復日給也亦重日除給例延喜十年二月廿五日○乙酉均子內親

王薨奏服喪服廿七日○亥丁除給同注出付頭辨御衰日重日例不宜前太政大臣御事能避事忌可被注

也亦日限不滿之例側所覺也而未尋出抑日敷減例與延行例且可在御定者也事々大概以賴隆相

傳外記勘文一見了返授又辨云可然之樣相定可仰下者依重事所申達也○中略關白被報云以頭辨

令問畢今如此消息今日薨奏服御錫紵事警固固關可行也錫紵四箇日除給有兩度例尤可從事也

依彼等例及四箇日除給也十日丙子中將來云卯時令除錫紵給云々

〔左經記〕長元九年五月十九日丙申藏人頭良賴朝臣參御宿所申云以戊四刻於中方可有御錫紵事

○此年四月十七日後一於崩中略天皇○後朱雀戊戌四點令着錫紵給其儀○舍北庭掃部寮大宋御屏風二帖立廻其中敷小

庸日期之喪達乎諸侯三年之喪達乎天子卿大夫降禮重公正也、

〔西宮記臨時四〕喪服

延喜五年九月二十六日、右大將奏源惟時卒狀、西四翹服錫紵、令云、凡天皇爲本服二等以上親喪服、錫紵云々、而年來不行、只不開朝三日而已、此度爲存令條、始行此服、傳聞前代不必行之

〔北山抄四〕上皇皇后崩事、付太子薨事

延喜七年六月、七條中宮字多后崩廢朝五日、服錫紵三日、異繼母例、以諸道勘文、取捨彼此之文、於

議所被定行、

〔日本紀略臨時一〕延喜七年十月十七日辛酉、從三位宮道朝臣列子薨、帝之外祖母也、有薨奏、廿六日

庚午、詔贈從三位宮道列子正二位、殊賜絹布等、天皇服錫紵、

〔西宮記臨時四〕喪服

應和四年四月七日、民部卿藤原朝臣衛申云、當時親王着服事、依令爲嫡母繼母、可着一月服、抑爲

皇后所服如何、仰云、須依令文着之、但延喜七年六月、先帝顯爲七條中宮、着給錫紵三箇日、是異繼

母之例、藤原朝臣令申云、貞觀十三年太皇太后崩、此天皇和清祖母也、而被定心喪五日、服制三日、此

與令文不相合、以諸道勘文、取捨彼此之文、被定行也、又延喜七年例如此、左右只可隨勘文、仰云、此兩

度例爲朝家服制、被儀定也、至于親王等、猶依令文及尋常之例着之、可宜也、

〔小右記〕萬壽四年十二月四日庚午、巳時許、式光來云、禪閣藤原道長昨日入滅、而昨夜有搖動氣云々、

六日壬申、頭中將顯基問薨奏、并着御錫紵事等、以師重相傳左兵衛督藤原經示送云、女院別當藤原資

平依御重服、院司可着服給者、件事見、邑上天德四年御記、九條丞相藤原師輔薨時、中宮職司等不可着

服、口在明法勘狀、不可着、由被下宣旨了、見遺御記了、明年節會等事、欲聞案內、付中將令達、口歸來云、

藤宰相廣業、關白藤原賴通被報云、具承口、但明日可行葬送事、同日可有薨奏、御錫紵誓固固關口、默心

り、御冠布をもちてはる、繩の類也、御冠にのせ、御錫紵、純色、御襦袢、御袴、御半臂、腰、口は平絹、柑子色なり、御帶、御履、御櫛、御簪、御髪、御手、御足、御指、御爪、御口、御鼻、御目、御耳、御舌、御喉、御咽、御嚥、御膈、御胃、御脾、御肺、御肝、御胆、御心、御腎、御膀、御腰、御膝、御股、御脚、御足、御趾、御爪、御口、御鼻、御目、御耳、御舌、御喉、御咽、御嚥、御膈、御胃、御脾、御肺、御肝、御胆、御心、御腎、御膀、御腰、御膝、御股、御脚、御足、御趾、御爪上柳宮にのせて大高杯にすまひ、大内藏察御装束を又藏人もてまゐる、衣以下は御密次執柄装束師をめす、次御錫紵を着御家の密々まゐりめさせまゐらせす、次居り御す繩纒の御冠をめす、御縫角を結あらためたるべし、但し装束師の人御髪の具を持參して、かたのごとく御髪をおさめまゐらす、

〔侍中群要九〕錫紵事見日記

有素服并錫紵之時、盛通宮供之、亦說盛柳宮居高坏供之、

〔續日本紀四十四〕延暦八年十二月乙未、皇太后野新笠崩、丙申、天皇服錫紵、避正殿御西廂、率皇太

子及群臣舉哀、

〔三代實錄二和〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、太皇太后后順子崩、十月五日丁未、天皇服錫紵、近臣

皆素服略中、是時、天皇爲祖母太皇太后喪、服有疑未決、於是令諸儒議之、略中、民部少輔兼東宮學士

從五位下橘朝臣廣相議曰、天皇爲太皇太后可服錫紵五月、所以服錫紵者、據喪葬令也、所以喪期五

月者、據儀禮喪服經略中、或人疑曰、儀制令皇帝二等已上親喪、皇帝不視事三日、又喪葬令義解曰、天

子服絕傍非、唯爲考妣依式處分者、然則皇帝除考妣之外、不應有服、但應不視事三日、服錫紵耳、今釋

之曰、服絕傍非者、是戴德喪服變除及白虎通之文也、說此文者、即云不降其祖父母曾祖父母也、而作

義解者、只舉考妣不及祖父母者、蓋以爲令文條爲二等已上親也、服錫紵者、錫紵是君弔臣喪之服、而

非喪服也、唐天子喪服用斬衰齊衰、而國家制令、殊以錫紵爲喪服、至于爲考妣服、此則恐甚輕、故云爲

考妣依式處分者、是則謂喪服所服之衣色也、非謂喪服日月之數也、儀制令不視事三日者、是只謂不

視事之日數也、非謂喪制之日數也、略中、喪葬令只說喪服之衣色也、略下

〔白虎通四〕喪服經曰、諸侯爲天子斬衰三年、天子爲諸侯絕期何、示同愛百姓、明不獨親也、故禮中



[illegible]

十五升抽其半，無事其縷，有事其布。曰：錫，謂之錫者，治其布使之滑易也。錫者不治其縷，哀在內也。

〔夕拜備急至要抄下〕一御錫紵儀  
日時撰殿上文杖覽之件勘文無禮紙

申御錫紵日時

今月廿六日 着御戌時 除御子時

中門簾第二間自北第  
二間也不敷筵道立大宋御屏風二帖金鱗  
子其內敷小筵二枚其上敷半帖一枚漢黃錄  
御錫錄

向御下藝片燭云々  
乙方名本國也  
之數之

御裝束并御冠御座前置之各區  
柳篋居土高坪御冠無文垂纓入巾紙着御  
之時可爲柏夾云々御袍布鈍色缺腋無張尻長  
八尺五寸前長五尺御襲同色  
麁絹

也才注與各疊之以件用召內藏察仰避殿察令調之裁縫日時不勤之進時勤之是例也

常燈一本。有打數。膠外供之。主殿寮立明。

出御有一文冠御引直衣自西面着御御錫紵御座自彼方入御也彼藏人頭入御屏風內取御帶獻之

五位藏人送御動役之御錫紵裝束御衣給宮主筆小舍人相共向川原流之

次事仕御禊座南弘座第左右間敷弘座上二枚其主上半疊一  
出御直御衣引御贖物陪膳頭役送宮藏主人

〔六諒闇和抄〕倚廬渡御の事

藏人頭御錫紵を持參、御錫紵とは御素服也、天子の御素服は錫紵と申なり、仙洞も錫紵と申、中女院以下、たゞ御服と申な



呼之義也、凶服不收入公門者、明尊朝廷吉凶不相干、故周官曰、凶服不入公門、

〔唐六典四〕凡凶服不入公門、

遭喪被起在朝者、各依本品着淺色純縵、周已下慘者、朝參起居亦依品色、無金玉之飾、起復者朝會不預、周喪未練、大功未葬、則亦准此例、

〔儀式十〕舉哀儀

國有不諱諸司着凶服

〔撰塵裝束抄〕凶服見三類

袍黑染平絹夏生 下重風色、裏 表袴同上

〔名目抄〕冬練服如模 錫紵服也

〔羽倉考二〕和漢錫紵ノ制作之事

異朝ニハ錫紵ノ字ナシ、只錫ト云ヒ、又ハ錫衰ト云フ、禮記ニ朝服十五升去其半而總ス、加灰錫也トアリ、然レバ朝服ハ一幅ニ一千二百縷、此半ヲ去レバ、總六百縷ナリ、此布ニ灰ヲ加ヘテ治メタルヲ錫ト云フ、禮ノ間傳ニ據ルニ、凡斬衰齊衰、大功、小功、總麻、皆縷ノ疎密ヲ以テ等ヲ定ム、其裁縫ハ、斬衰ハ腋ヨリ下ヲ縫ハズ、齊衰以下ハ皆之ヲ縫フ、文公家禮ナドニ詳ナリ、異朝ノ制略此ノゴトシ、本朝喪葬令ニ、凡天皇爲本服二等以上親喪服、錫紵義解ニ、錫紵者細布、即用淺墨染也ト、釋ニ唐令ノ錫縵者儀禮ノ喪服傳ニ、無事其縵有事其布曰錫、此令ノ錫紵者、錫色ノ紵服耳、縵ノ黑キヲ曰錫ト、然レバ則黑染ノ淺色ノミト見エタリ、此釋ノ意ヲ察ルニ、異朝ノ錫ハ、色ノ名ニ非ズシテ布ノ名ナリ、故ニ錫紵ト字ヲ重テズシテ元ヨリ色ナク、本朝ノ錫ハ、布ノ名ニ非ズシテ色ノ名ナリ、故ニ錫紵ト稱シテ淺黑色ナリトノ意ナルベシ、此說ニ據レバ和漢ノ錫相同ジカラザルガ如シ、然レドモ異朝凶服ニ錫ノ名アリテ、本朝モ亦此名アルニ、各別ノ義ヲ

万葉卷二に、天武崩し、大后の御せうした後、荒妙乃、衣之袖者、乾時文無卷五に、魚妙能、布衣遠佗、伎世難爾、此類

れど、異るこさ略こは、魚き布の衣といふのみ、さてあらとは、魚く悪きをいふ。○中右の、大后の、  
れば、奮く、○中略こは、魚き布の衣といふのみ、さてあらとは、魚く悪きをいふ。○中右の、大后の、  
御歌も、御喪に麻の衣奉るによりて、あらたへの衣の袖とよませ給ひ。○中藤原藤井は、藤布の、  
意にてつゞけしなり、

頭註 藤布は甚魚し、略○中 古今集に喪の衣を藤衣とよめるは、事を甚しくいふのみ、古へ君も臣も喪には白き麻布なる事紀万葉集解などに見ゆ、藤布はたゞ賤のみ着し事見え、今もしかなり、

〔運步色葉集伊〕喪衣伊  
時中陰之  
着也

〔書言字考節用集六食〕素喪所也縗白衣也 喪衣 緣衣

〔名目抄〕喪服 黒服フク 之或絹布裝束、直衣、袴、各々、皆在

〔令義解儀制〕凡凶服。不入公門。謂凶服者。緣麻也。公門者。宮城門及諸司曹司。其遺喪被起者。朝參處亦

依位色謂入公門及朝參處並依位色也在家依其服制

〔令集解二十〕凡凶服不入公門釋云凶服者衰服也。不入公門者市門倉庫門邸古記云不入公門稱公門。但國都廳院市司廳院門者是爲公門耳。

凡公門不在宮門之內。以午後鐘放。自餘國曹司院爲公門。倉庫國部公府院諸家等縣門皆公門也。又公門不入公門者。假五月服卅日也。而則其遺喪被起者。情從起。與也。謂被喪起。謂解官停柩。被起。謂上召起。卽日不入公門耳。不願本五月也。而則其遺喪被起者。情從起。與也。謂被喪起。謂解官停柩。被起。謂上召起。也。世是朝參處亦依位色。問亦上知何答上。文函服者。文函服。不可服。位色。起者。亦依位色。故稱亦字。耳。

出入朝參服亦依此色爲不合凶服起也。亦有且因服不入公門遭喪也。歸已切謂內服之人臨時自出。入者必令著朝服故遺棄襪召起人亦依此色朱注云凡遇喪里者爲在

〔白虎通喪服〕春秋傳曰大夫以君命出聞喪徐行不反諸侯朝而有私喪得還何凶服不入公門君不



レド、吾邦ニテハ是亦一ノ凶服ノ名トシタリ、而シテ此服ハ後世ニ至リ、諒闇ノ服ト同物ナリト云フ説モアリテ、其別モ明ナラザルモノナリ、

凶服ヲ著スルニ就テ大ニ異ナルモノハ神官僧徒ノ喪ニ遺フナリ、神官ハ初ヨリ凶服ヲ著ザルモアリ、著テ即チ脱スルモアリ、僧徒ハ重服ノ外ハ服セザルヲ以テ例トス、又婦人ノ服ハ男子ニ似タルモノナレド、或ハ凶服ノ帶ノミヲ用キテ服ニ代フルコトアリ、

凶服ハ總ベテ飾ヲ去ルヲ以テ主トシ、束帶衣冠等ノ類、饒鈍青鈍等ノ色ヲ用キ、其濃淡ヲ以テ喪ノ輕重ヲ表シ、冠ハ無文ヲ用キテ、或ハ纒ヲ以テ纒ト爲シ、或ハ纒ヲ卷キ、狩衣ノ尻ハ長ク垂ルヽヲ以テ例トス、其餘牛角ノ帶、黑骨ノ扇ナド、都テ華美ヲ避クルコトニテ、乘車及ビ鞍馬具ニ至ルマデ皆然ラザルハナシ。

凶服ハ古來漸ク變ジタルモノニテ、其說モ多端ナレバ、隨テ明ナラザルモノ多シ、後世ニ至リテハ、主トシテ之ヲ用キシモノハ中陰等ノ法事ニ在リトス、

倭名類聚抄

葬十  
送四  
具一

襖衣

唐韻云、隸

名不固知反古與路毛同和喪服也

〔箋註倭名〕

類聚抄

送

緞衣・唐

韻云、緣、倉知回、古反、與、路、毛、見、同、不

上卷、橋姬卷、榮花語、楚王夢卷、玉飾、喪衣也、廣韻同下、猶有若干韻字、那波本、服、名、緣、指、玉也、官、緣、指、服也、就文、藏、服、直、心、

〔伊呂波字類〕

抄  
雜  
不  
物

者也

〔字鏡集〕

線  
フ  
チ  
ヨ

〔增補下學集〕

布二藤衣

〔易林本節用〕

集不藤衣

ノ衣  
衣ト  
ト云  
云又

〔書言字考節〕

用集  
服六  
食

哀傷衣

藤衣

# 古事類苑

## 禮式部二十八

### 凶服上

凶服ハ喪服ナリ、喪ニ居ル間之ヲ著ルガ故ニ喪服ト云ヒ、其事ノ人生ノ大凶ナルガ故ニ凶服ト云フ、國語ニ之ヲフデヤロモト云フハ、原ハ藤葛ヲ以テ織リシガ故ノ名ナルベク、イロト云フハ常服ト色ヲ異ニスルガ故ノ名ナルベシ、

凶服ニハ錫紵アリ、素服アリ、諒闇ノ服アリ、心喪ノ服アリ、錫紵ハ天皇ノ用キ給フ所ニシテ、二等以上ノ親屬ノ爲ニ著シ給フ、錫ハ布ヲ治メテ滑ラカナラシムルヲ云ヒテ弔服ナルヲ、吾邦ニテハ淺黒色ノ名トシ、淺黒ノ細布ニテ製シタル關腋ノ御袍ヲ錫紵ト云ヒテ、是ヲ喪服ト爲シ、之ヲ尋常ノ御衣ノ上ニ襲ヒ、即時ニ之ヲ脱シ給フナリ、素服ハ、凶服ノ汎稱ニシテ、上古ハ白布ヲ用キシガ如シ、而シテ諒闇ノ時ニ、天下素服ト云ヘルハ、列采<sup>五方</sup>正色ノ衣ヲ去ルノミニテ、令ニ天皇本服三等以下、及ビ諸臣ノ喪ノ爲ニ帛衣ヲ除ク外、雜色ヲ通用スト云ヘル類カ、素服、後ニハ黒布ヲ用キ、更ニ轉ジテ衿アリ袖ナキ短衣ト爲リ、之ヲ吉服ニ襲ヒ、或ハ之ヲ諒闇ノ服ニ掩ヒ、纁ニ著シテ、即チ之ヲ除クニ至ル、諒闇ノ服ハ、即チ諒闇ニ用キル所ニシテ、天皇ハ錫紵ヲ脱シテ侍臣ト共ニ之ヲ著シ給フ、其袍ハ椶袍ニテ亦關腋ナリ、臣下ハ或ハ鈍色ヲ用キル、心喪ノ服ハ、諒闇ノ服ヲ脱シ、一周ノ間著スル所ニシテ、椶色ノ纁ノ冠纁ノ袍ヲ用キル、心喪トハ心ニ哀戚ヲ懷キテ、凶服ヲ著ケズ、唯弔服ニ麻經麻帶ヲ加フルコトナ



古事類苑

禮式部二十八

凶服上

名稱	錫紵	素服	諒闇服	心喪服	神官服	僧徒服	婦人服	童子服	武人服	庶人服
----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

三五二	三五四	三七五	三八九	四〇九	四一七	四一八	四二〇	四二五	四二八	四二九
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----



書付差出なり、御門番構無之御成之節は、相番人御成還御之御機嫌伺不勤候、御成之節屋敷懸  
け戸仕り、手桶提灯不出候、忌明之前日、御年寄へ使者を以、今日迄忌、明朝より忌明申候、罷出可  
申哉、御内意奉伺之、任御差圖、忌明候朝、月代剃、御用番へ罷越候、外之御老中へ罷越も可なり、  
一三節句献上物は、忌中故、差上不申候旨、御用番迄御断申上候、例月之献上物は、断無之差扣、忌明  
候て献上す、

堅申故也、仍基起卿病氣、大切之間、資廉卿、頭基量朝臣、誠光朝臣等、爲看病罷、向彼家由令言上、若於事切者、別勅人々三人治定旨言上了、基量朝臣神宮奉行辭退之事、豫辭之由言上了、大概御推察之歟、不便之由被仰、有御愁之色、諸人又有愁色、雖然先無別事、

〔基量卿記〕元祿九年十一月廿三日

一大炊御門右大臣、

光

經伯母之輕服、至廿六日假濟也、然者御中陰、此月十之間着座事、除服以前

出現如何、又其身觸穢之間、御中陰之御法事之事、除服宜下雖無之、出仕不可有苦歟、其身爲穢中之間、除服申上事先例如何、觀應國太例、可被准用歟之事、

一一條前關白申詞、大炊御門前右大臣、爲御中陰御法事之間、除服宜下雖無之、其身爲觸穢之間、爲

着座出現事當時着輕服衣人雖無之、輕服衣之制、古來定法也、然者着輕服人、除服宜下無之、爲自

分改吉服出仕之事如何、又着輕服着座之事も、本所之輩と可相混、尤此度右大臣家照醍醐大納

言等、輕服候へども、是ハ可爲各別明正院御甥也、依公又觸穢之輩別勅之義、先例有間敷候、自院

別勅宜下事是又不可有之所詮、被止大炊御門事、右大臣一人着座參勤可然歟、尤所勞候ハ、菊

亭前右大臣、三條前內府雖何時被仰付可然候、於觀應例別勅之例難准用候、

〔兼胤卿記〕寶曆三年七月廿九日、押小路左衛門佐、所勞危急之由相聞、被及事候ハ、清水谷前宰相

同侍從、弟叔父之儀ニ候間、父子假服相屆候ハ、如何可被取計候哉、當時父塾居、子被止出仕之人

人ニ候間、普通之取計も可爲如何哉、攝政殿一條へ申入候處、命云、屆無之候而も可相濟儀若被

屆候ハ、是ハ格別之儀、可爲普通之通被命、

〔官中秘策二十三〕忘中斷之事

一誰死去忌幾日何月幾日、服幾日何月何日迄と書付、御用番へ使者を以御斷申上候、御年寄へも爲念爲御知申上出仕日前晚、忘中登城不仕候旨、同所へ御斷申上候、妾腹之親類死去續之様子

〔殿曆〕康和二年二月十日丁未、今日依爲重服、不立奉幣、雖然如例、潔齋三箇日也、凡自春日祭以前者、雖服不相會僧尼、凡諸社祭者、雖服潔齋如例、

〔殿曆〕康和四年二月二日丁亥、今月齋月也、雖然忌月上爲身重服、仍不念珠、雖然不會僧尼服者、又祭日、不可念珠、其間事等、皆民部卿に示合也、非服時不可念珠、縱雖總月、非服時者可有憚歟、

〔明月記〕建曆二年十月九日、近日幸人忠綱父忌月、着例狩衣出仕云々、自去年喪父、看白生狩衣、不指結尋常奴袴出仕、至于忌月、着尋常布衣、兄家綱月來着例重服、今月不出仕、是例人之儀歟、權中納言局、定輔卿妹、不入母喪家、不着服云々、近代之儀、如斯爲後鑒記云々、

〔基熙公記〕延寶七年二月廿四日己丑、辰刻參內妙門主被談言、葉川三位基起卿帝靈元、今朝辛、日比重病、無是非次第也、依之親族輩各爲近習、只今之時節多退出、無覺束相存、可爲何樣哉、仍武家傳奏等令內談之處、先談伯二位白川、可有決定歟之由申之、仍伯卿談合之處、別勅及多人數、條不匪幾、雖然今日園前大納言基起卿、園光院基起卿、品宮余蜜基起卿、此人々暫退出、難叶其謂者、晝夜御看病偏在此人々間、雖別勅何難有哉、於園光院者、假三日、園亞相廿日、品宮十日也、於此人々者、天氣追日御快然之後、諸人成安塗思之日、雖爲一日、可有服歟、各存此旨、聞此三人可爲別勅上決定了、且又關

白房、右府內房、等內々令相談之處、各尤相存、其上別勅必不可限一人事歟、當座舊例雖不覺悟、不能左右之由被返答、則以此趣妙門主被窺、法皇御氣之處、猶以無別儀之由被仰、依之彌三人分被決定了、柳原中納言實隆、誠光朝臣共基起卿母方ノヲヒ也、基量朝臣又父方ノヲヒ也、此三人日々雖令近習、別勅爲多人數之間退出了、此中基量朝臣爲神宮奉行、依之辭退之由也、但基起卿卒條未達、天聽可爲何樣哉之由、柳原前亞相、神宮上卿今出川中納言等、相談之間、如此時傍頭ニ被仰出何事有哉、雖神宮事、此時節不及窺、天氣歟之間、早重條朝臣、可爲神宮奉行之由、可有下知歟、於天氣者、計時宜可有言上、旨加愚案了、基起卿卒事未達、敬聞、子細御惱之中、御愁傷甚不可然、由醫師等

右殿下之思召承候上、松平右京大夫江相談ニ可遣候哉之事、

廿六日松平右京大夫所司代より申越、籠中安産御祈千反樂、六七月之中被行御供米、可被遣之事、思召次第被行候様ニ示越書付、關白殿江申入、先此越御沙汰可被成候、乍然被行候儀ハ、去廿一日追而申達、服中ニ而も無指構由申來之上、令沙汰可然候差懸リ候事故、右之返答有之、無指構趣ニ候ハ、翌日ニ而も早速被行候様ニ、兩人心得を以、四辻江可申談置、被命右京書狀 廿九日、兩人詣關白殿申云、西九籠中安産御祈千反樂、被行御供米、被遣事、雖服中於御所表御指構無之候得者、猶以於關東差構有間敷由、右京大夫より返書指越候段申入、返書入御披見了、尙明日可有御沙汰之由、返書被御留了、

〔吉田家日次記〕應永九年十一月十四日癸巳、夕方左衛門督重光卿以書札招引、則行向之、日本書紀第一讀合也、是多年々有増也、一巻終功、少々講釋也、御服假中相授事、無子細祖父具令記之、給見家抄不相授于服假人也、讀合事了有一獻及數廻、

〔大江俊矩記〕文政三年四月十九日甲辰、諸大夫來書、前左府公近衛基前御容體至今朝甚御大切之御様子ニ被爲有處、終御養生不被爲叶、今十九日未卒刻被薨由爲御知也、略中北小路家、重代蒙鴻恩、格別御親厚大切之御家也、依之同姓故、俊幹寛政十一年度申合置通、今度亦其通一分相慣、今日以後、左之通堅固相守也、

精進之事

十九日ヨリ廿三日マテ、五ヶ日之間精進事、宮中其外於他所ニモ、無何、肉食、於家内者、一被食用停止之、

神拜之事

於今日度爲御神事後、其間三ヶ日、神拜供止之、

家禮之事

節朔朔望之類也、五ヶ日後、如常、

嘉儀之事

冠婚之大禮者、如論、雖小體之祝儀、五旬之間可深慎之、又供相向、他席儀、五ヶ日精進中、稱所勞、可辭之、其餘五旬之間、可隨時宜也、

遊興之事

五ヶ日精進中者、勿論、五旬之間、爲遊興、參會可停止、無被儀者可隨時宜也、於音曲、類者、内外談參會可深慎之、



之御沙汰ニ而相憚可然、獻上物ハ僧尼重服ハ翌日輕服ハ當日午刻後、獻上候様ニ可相觸之由被<sub>レ</sub>命。

阿部飛驒守○京都所司代未輕服中ニ候、享保十八年度、牧野河内守○京都所司代被召參内候右之通之御沙汰

ニ候ハ、參候而も不苦哉、相伺候處、參候儀如何ニ候被召候儀ハ如先格被召、飛驒守相憚候而不參可然候、獻上物ハ當日午刻後可差上候右之通ニ而ハ申恐、悅候事拔候間、翌日參賀候様ニ可取計被<sub>レ</sub>命了。

〔繼座記〕文保二年正月十七日己酉、八條宰相實次朝臣、以盛久示送云、明後日十九日可申拜賀、而新

院衣笠殿爲御所、彼御所伏見院御中陰之地也、可參之有無訪人々之處、洞院前右府云、不可參之由稱之、三條前内府者、如此御憚之時、雖略拜必可參之由被答了、可付請乎云々、予答、衣笠殿者爲御喪

家、予今裝黑染御裝束地也、爲拜賀參上、愚意之所爲不可然、又於拜者可略、且又其身雖被仰吉服、既重服之身也、旁參上不可然、且者正應五年九月、前大宮院崩御之時、二條宰相入道爲雄卿上時殿遣

母喪、然而被仰吉服之間、爲御布施取參龜山殿故、深草院以經賴卿被申含龜山院又被仰前右大將、公衛卿共以雖被仰吉服、參上不可然之由有沙汰、不臨御中陰道場方、只祇候深草院御方、其條尙不

可然之由存也、人々傾奇、參入不叶、道理之由答了、廿日壬子、今夜八條宰相實次卿申慶賀、雖被仰吉服爲重服之間、不參衣笠殿當時爲新院御所

〔兼胤卿記〕寶曆六年六月廿一日、兩人詣關白殿○一條道香、構見參候處、御所勞之由不出給、仍以一封申

入、御加筆返給、

西丸簾中○鎌川東重妻比宮安産之御祈、千反樂御供米被遣候儀、格宮逝去ニ付、簾中忌服有之候得共、差

懸リ候儀故、關東ニ指構無之候ハ、可被遣候哉、但簾中忌服候ヘバ難被遣儀ニ候はん哉、若又格宮之事、簾中聽ニ不達候得者、被苦問敷哉之事、御供米ハ重服ニても安産祈禱ヘ不苦候故、此度も無子細存候近例之故如此候。

〔基熙公記〕元祿十三年三月五日戊戌、左府○釐司諸大夫、不知來修理亮長之宅、傳左府命條々、可承異見旨也、

一非常之時、可被守護賢所旨、日比雖被相定、當時爲服者間、可候宮中内存也、可爲何樣哉事、

右斟酌尤思給間、以件子細、可被示議奏中歟之旨答之、

〔西宮記臨時一裏書〕延喜十七年二月廿七日、右大將口得業生惟舟、去年遭喪、未有貢人舉文、公廉臨

終、有難在喪中、可果之遺書、令問先例、菅原是善、在母喪對策、而博士以近年無此事、由候氣色、可貢舉、

仰云、以爲遭喪者、可無自進、至于博士舉有何妨、已有先例、宜令舉、

康保三年十二月廿五日御記云、仰民部卿藤原信正王申親喪內登省事、可准例宜令勘申、同廿二日

仰左大臣實賴學生信正平美信、令登明日省事、信正王依致平中務卿親王喪假未滿、令勘先例、忽

無所見、而准半減假限、依召參入之例、令仰下之、

〔兵範記〕仁安二年十月廿四日戊午、朝方卿申出雲守朝時、可獻五節舞姬、而依留長亮有廿日假、三月

服彼國司已雖非親昵、爲養子、獻此五節沙汰服身恐不可、不奏、可被改定由申上事也、攝政○藤原基房令

申給云、國司他人也、非昵親、依養父陸強、不可有憚、歟加之保安三年、顯隆卿獻五節之時、室家服假出

來、依白川院宣、被尋問人々、不可有憚、由有議定、獻畢、可被准據歟、但又被尋問他人々、可在勅定云々、

仍奉重仰、尋申左府○藤原經宗又被申、不可有憚、由此申狀等具奏院畢、

〔權記〕寬弘五年九月九日丙寅、夜半許、中宮○一條后藤原彰子御產氣色云々、卽參有氣色、丑刻立白木御帳、鋪

設、依輕服有事憚、未明退出、

〔爲房卿記〕承曆三年六月十三日庚戌、今日參大內宿侍、今月中宮○白河后藤原賢子爲御當月○產仍服者參

入有憚之由、殿下○藤原師實有御氣色者、不參宮也、

〔兼胤卿記〕明和五年八月三日、攝政殿○近衛前被仰御元服○後桃園當日僧尼重服、可憚輕服所存次第と

五歲也、去年隣郷ヨリ妻ヲ迎ヘテ男子ヲ産セリ、其子二歲ノ時、父忠五郎癩病ヲ受、而體次第ニ腐爛シテ臭氣堪難シ、兩親サヘ是ヲ疎ミ嫌フニ、此妻少シモ厭ハズ、晝夜心ヲ盡シテ介抱セリ、○中夫ヨリ次第ニ重ル病ノ床ニ二日ヲ經テゾ身マカリヌ、父母妻子ノ歎キ譬ヘン方ナシ、サテシモ有テバ、亡骸ヲ野邊ニ送り、夫ヨリ妻ハ幼子ヲ抱キ、日々ニ墓ヘ參リ、朝夕念佛怠ラズ、略下

〔殿曆〕康和四年正月五日辛酉申刻許着直衣、密々ニ參内、須參着束帶也、雖然年始服者頗有憚、依參密々、其儀先以職事奏案内、參是依服憚先奏也、職事爲隆還來早可參、則參内參御前成刻許下宿所、則着束帶參御前、則召其間、余着殿上、

〔季連宿禰記〕貞享元年十月廿三日乙卯伊豫御局之事、重服之中參内□□有不相叶之處、以別勅近日可參内之由、今日被仰出也、此事自長橋局以內々消息、今日被示、伊與凡如此之事、天恩異其他候也、廿五日丁巳伊豫局來、廿九日可參内之由、今日被仰出、自長橋局以內々狀被示伊豫局也、廿九日辛酉、今日伊豫御局參内、雖重服依別勅也、卅日壬戌、一昨日除服勅許之事、且今度伊豫局依別勅參内之事、今日參禁裏長橋局謝申了、

〔槐記〕享保十六年正月廿四日參候、色々ノ御咄ノ序デニ、○中先年千種正三位、○有ハ、器量アル人ナリシガ、○此間恐有脱文、火ノ段々ニハビコリ、禁院中モ危カリケル故、御前ニモ御參内ノ折カラ、アチコチト御徘徊ナサレケルニ、□□ノ間ノ下土座ニ一人伏シケルモノアリ、誰ヤラント地下ノ官人ドモニコソト、一二度ハ見過シテ御通有ケレドモ、何トヤラン御見知リナサレタルヤウニ有シホドニ、誰ゾト御尋アリケレバ、千種ニテ候、重服ノモノニ候ヘ、ハ由父ノ喪昇殿ノコト憚リ有リ、是マデ伺候致シ候、モシモノトキハ御用アランカト相待ニテ、コソ候ヘ、漸ク火モシヅマリ候ヘバ、退去イタスベキニテ候トテ、ヤガテ御門ヲ出ザマニ、目出タキ御事ニコソ候ヘト會釋シテ歸ラレケレドモ知ル人一人モナシト也、

元年丙辰唐津侯利實卒同三年戊午伯兄端齋歿延享元年甲子唐津侯利延卒寬延元年戊辰妹歿  
寶曆六年丙子妻武井氏歿前後皆服其喪寶曆十年庚辰叔兄圓齋歿身以在病牀不執喪其餘皆能  
從禮制矣

〔先哲叢談 續編七〕松崎觀海

觀海遭父之喪哀瘠殊甚喪期既闋不忍就職候以職事不可闕之故勢不得已奪情起復觀海亦不得  
固拒強出視事然康素嗜粥不食酒肉三年矣

〔續日本後紀<sup>十六</sup>〕承和十三年八月辛巳散位正三位藤原朝臣吉野葵<sup>略中</sup>七年<sup>○承和</sup>五月後上天

皇<sup>○淳和</sup>宮車晏駕并年之內絕而不官上表辭職至于再三不見聽許中使頻徵強刷朝端

〔類聚國史<sup>五十四</sup>〕天長元年十一月戊午下野國人三村部吉成女叙位二級終身免其戶田租旌節行  
也吉成女者故主帳外大初位上勳八等輕部豐益妻也夫死之後常掃墳墓操志貞潔無心再嫁量彼  
志行可謂節婦者

〔類聚國史<sup>五十四</sup>〕天長五年三月甲申筑前國人難波部安良賣叙位二階免戶田租安良賣父母共沒  
常拜塚塋朝夕齋哀

〔續日本後紀<sup>十</sup>〕承和八年三月癸酉右京人孝子衣縫造金繼女居住河內國志紀郡年十二歲始失

親父泣血過人服闋之後親母許嫁而竊出往於父墓旦夕哀慟母不復謂嫁事其後還來定省每父忌  
日齋食讀經累年不息<sup>略中</sup>母年八十而死哀聲不絕常守墳墓深信佛法焚香送終勸叙三階終身免

戶內租旌表門閭令衆庶知

〔三代實錄<sup>清和</sup>〕貞觀六年二月五日壬戌攝津國武庫郡節婦日下部連氏成賣年十六適右京人文室

真人武庫麻呂歷二十七年武庫麻呂死氏成賣居喪有禮事死如生日不再食遂不改醮

〔明良洪範<sup>二十五</sup>〕出羽國置賜郡中和田村ト云所ニ忠右衛門ト云富ル農夫アリ其子忠五郎年廿



兄弟之内出家ニ罷成、師匠之寺住職仕候得共、養子と違ひ、服忌定式と奉存候。

書面之通ニ而候。

弟寺院住職之上、相果候時之事、文化六巳年六月十五日、織田左衛門佐家來村上平膳より伊藤河内守へ開合、

先達而八幡豐藏坊後住ニ差遣候、左衛門佐弟當豐藏坊儀、死去仕候節、寺院へ差遣候儀故、左衛門佐儀は、弟定式之忌服受之、隱居豐前守儀は、定式末子之忌服受候儀と奉存候得共、右後住遣申候ニ付、忌服差別ニ而も御座候哉、

書面之通は、左衛門佐弟定式之忌服受之、豐前守方は末子之忌服忌ニ而候、

〔實久卿記〕天保三年七月十七日辛酉、予次男八幡關御非坊孝實、自去十三日所勞之處、十五日午後、以外之由告來、仍直以家僕訪之處以外也、昨夜遷化之由告來、依之予十日假三十日着服、侍從廿日假九十日着服之事、武傳兩卿院傳兩卿等申示了、

雜載

〔稽德編十七西山公○水戸〕若き御時より、御親類の御中に御卒去の御方有て、御忌かゝり候節は、月日の光りに御當りなされまじき爲め、御一室の外は、晝夜共御庭へも御出不被成候、且御

喪中、或は御精進之時分は、御近臣ども及儒臣等三四人相詰、會て世上の雜談不被成候、

〔桃溪雜話七〕蕭公○水戸、薨御遊サレケレバ、成公○綱條、無紋鼠色ノ御長袴ヲ召サセラレ、御自

身御配膳アリ、是ヨリ後御入棺濟セラレ、又御自身御配膳ナシ給フ、御出棺ノ後御牌子、御座の間一ノ間御床へ御自身置セラレ、此後御忌中朝夕御膳御自身御配膳遊バサレ、御酒御菓子御茶、每度御供へ被遊レシナリ、此時御年十四、

〔先哲叢談續五〕稻葉迂齋

迂齋居喪能盡、其禮寶永四年丁亥母氏歿、享保四年己亥師佐藤直方歿、同五年庚子父正則歿、元文

去之時傍親着服之條勿論也予覺悟無相違分申之、三后者唯臣下令着服給之條無異論也而五日民部卿書狀到來、

今日之儀珍重候昨日參申畏入候仍彼服假事舊院御代一向御無沙汰候又宮御方も後崇光院時も不及御沙汰候上はとて不可有御服之分に御治定候爲御心得申入候由可被申候恐恐謹言、

五月五日

忠富

〔季連宿禰記〕元祿七年十二月十七日庚戌辰終許壬生寺地藏院普岳入滅、○中普岳者故忠利宿禰男大輔御局弟爲予兄爲伊與局伯父共廿日九十日服假也、不混地穢、

〔服忌令撰註分釋〕天和五子年八月八日

松平隱岐守方より服忌聞合付下ケ札を以て挨拶候、

覺

鎌倉英勝寺儀病氣之處養生不相叶一昨六日之曉被致卒去候就夫英勝寺儀は隱岐守伯母ニ而御座候處此度被致卒去候英勝寺儀は先英勝寺附弟ニ御座候間元英勝寺俗縁ニ付而隱岐守從弟之順ニ可有御座哉俗縁之儀ニ御座候間養女と申譯ニも御座有間敷候ニ付從弟と申順ニは相成申間敷哉若右之續ニも相成候得ば服忌之儀御達被申儀ニ御座候間御様子相伺候上在所表へ申遣度奉存候依之服忌之儀御聞合申候以上、

八月八日

松平隱岐守家來  
梁原宗左衛門

右は大井伊勢守方へ差出候付掛り達相談及挨拶候、

書面之通は養女と申譯ニも無之候得共從弟之續と難申候間服忌不及沙汰候、

〔服忌令撰註分釋〕兄弟出家ニ成候時之事元文元辰年一柳兵部少輔家來より服忌掛へ問合、

實○藤原宣命使中納言忠雅卿、關白○藤原不觸室家穢參入諸人、驚目云々、或曰、明法博士業倫勘申、雖妻出家人、無服之由云々、此事未曾聞之、法皇○鳥羽爲故待賢門院○鳥羽着服、禪開爲故尼上着服、業倫所申、不知何書、文何時例、

〔假服事〕文永八年五月廿八日、辰刻大外記良季持來、予除服出仕、宣旨予坐寢殿西面簾中、召藤外謁之、○中去廿二日、恐息小僧明空入滅、依爲院御如口經中暫不披露、○中良季云、夜前宣旨到來、而爲復日之間、相憚不持參者也云々、本儀假日數了、○藤原服一月、○藤原敷十、可被宣下、○藤原敷、

〔吉田家日次記〕應永八年四月四日癸亥、殿下○藤原經嗣、御書到來、

此間又旁觀々、難畫紙面事等、今明中相構可被參候、○中抄衆子服假ハ、其父假十日、服三十日候、歟、但於僧尼者、若可有差異候哉、藤三位息律僧、去月廿日他界之間、此間賀茂祭神事中、先可加斟酌之由申之、歟、依僧尼可有服假之條勿論、委細被申、亦本念候也、

治部卿どのへ

御文書被仰下旨、跪以承候、○中藤三位息僧事、不便驚存候、於庶子者、三十日輕服、此內假十日候、僧尼有差哉否事、於法意者、僧尼着二親喪、不受傍親服之旨所見候、雖然神事猶相憚之例候、但此條ハ其身僧尼他界之時、件傍親受服假事之間、彼卿可有憚候、就者參仕此御所事、於假者已馳過之上者、被仰除服、賀茂并吉田祭致齋以前參候、不可有子細歟之由存候、得此御意、可令披露給候哉、恐恐謹言、

四月四日

圖少將殿

兼敦

〔資益王記〕文明十四年五月四日、民部卿○源來、真乘寺殿御事切云々、仍禁裏并親王御方御服之事、談合予申云、以日易月勿論之由申、不審候間、至要抄披見之處、僧尼傍親死去之時者、不着服、僧尼死

屬 薨去重服之中也然而太元法服中修行有例之由自本坊申行之云々以上奉行藏人少辨尙房於後七日法者一長者服中之時者用手替加任其料數例也於太元者不知故實可博勘記

〔兼胤卿記〕寶曆四年七月廿四日兵部卿宮○貞緒薨去ニ付勸修寺宮假服之屆書被附法中假服之屆無之事故不令沙汰兩人方ニ可願置哉之由兩人詣攝政殿○一條道香申入可爲其通被命青蓮院宮

ハ御養子之宮故被稱所勞被償不及假服之沙汰候由殿下御物語也

〔法曹至要抄下但〕一父母僧尼傍親僧尼各死去之時服假可如本法事議云問父母僧尼其身死去可有服哉答無可疑親屬奴婢又可服也

案之父母僧尼傍親僧尼死去之時服假各可如本法也矣

〔喪服議例抄〕雜事

親類之内出家ニ成師匠之寺住職讓リ請候共養子トハ譯違候故其續之通服忌請之右兄弟之内出家之例有之

實方之親類之内出家ニ相成候得ば其續實方半減之服忌請之右實方之伯父出家之例有之

親類之内僧尼死去之時其續之通服忌請候儀相替候事無之

親類之内僧尼ニ而一ヶ寺住職致候而其寺を弟子ニ讓リ候共法縁ニ而は養子と申筋無之右伯母尼ニ而其附弟從弟女之續ニは不相成例有之

〔殿曆〕天仁二年三月十日甲寅今日山使還來子刻許山座主○仁源忠實伯叔父死去仍予○藤原忠實退出了廿

六日庚午予服假也雖然依仰雖不着除參入先參院次參内密々儀也中將○忠實姫君着除但件人無服假雖然故大僧正覺圓○師實兄弟死去時予故殿○藤原實御子定にて着輕服了仍予故殿御服重

服定着之故關白殿○藤原通時不着重服えいを卷着黒沓仍此座主中將のをちの定にて令着除也

〔台記〕久壽二年九月廿三日丁卯今上○後白河第一皇子○二先被下親王宣旨次立爲太子内辨内大臣



相云、或人云、出家遁世之人者、無服假之沙汰、於官僧者有服假云々、此事可考、十二月十五日癸卯、依使者、入夜參中御門權大納言黃照稱亭、權大納言於門外被相逢、被命云、去八月十一日所令言上、僧中服假之事、彼例之與、僧中除服宜下有無例、無所見之子細所存之旨、可書載之、加名可進之云々、申承之由了、十七日乙巳、一昨十五日中御門權大納言所被命、法中除服宜下有無之例、記所存加、官名、今夜令持向中御門權大納言亭之處、亞相參內之由、青侍申之間付彼侍歸了、件例去八月六日所被尋也、同十一日無所見之旨申之、又服假之僧、御修法等勤否之例被尋之間、書進之件例文等各書一紙、載官名、今夜所進也、此例爲勅定被尋下之故、載官名之條勿論也、件一紙書續紙也、記奧俗中之人、一并之間不出仕之故、蒙除服宜旨、出仕事也、於輕服者無除服之事、

一僧中除服宜下有無之事

右引考之處、先例不得所見候、但雖僧尼、既有着服之法、上者、除服宜下、定而可有例乎、又僧尼不着

傍親服云々、御修法阿闍梨服假出來之時、俄辭阿闍梨事、是專奉祈天長地久之故、歟、所謂東寺御

影供執事、不憚服假之條、出東實記、所詮僧俗服假之法、粹異之故、除服宜下有無、管見之至、難令言

上者也、○中

右勘進如件

十二月十七日

左大史小槻季連上

十九日丁未、四位大外記師庸朝臣來臨、僧中除服宜下例、權大納言黃照稱記所存可、言上之由、被命

之故、只今折紙進之云々、凡俗中往昔者、重服之人、一非之間、不出仕、蒙除服宜旨、出仕之條、往昔無之

事也、俗除服宜下例、漸文明以來之例繁多也、僧中除服宜下例、一向無所見云々、是大外記所被語也、

〔季連宿禰記〕元祿十三年正月八日壬寅、自今夜於南殿被始行後七日、法阿闍梨東寺一長者覺勝院

前大僧正了海云々、太元法於醍醐理性院坊被行之、理性院僧正堯觀被修之、此僧舊冬依圓儀同基

忠教卿記云、長承元年十二月十八日甲辰、參院白川殿顯賴卿語云、法印定海、勤修愛染王法之處、去比姉妹御殿死去、仍以手替勤之、已上自修法要抄抄出之、

一服假人灌頂會大阿闍梨勤否事付後七日法仁平三年十二月六日、二品法親王高野莫御仍寬

遍僧正于時一長者服假之間、元海加任長者、令勤東寺灌頂大阿闍梨十二月廿九日行之

壽永二年十二月廿九日、東寺灌頂大阿闍梨一長者定遍權僧正勤之、去十月一日、師匠禪喜前大

僧正入滅了、

同三年改元曆後七日御修法、同僧正勤之、此時長者二人、一長者定遍僧正、二長者覺成法印也、

寶治元年十二月廿九日、東寺灌頂、定親法印行之、去十一月廿九日、舍兄土御門前內大臣莫、禁忌

中也、○中略

長德四年六月十二日、寬朝大僧正入滅、灌頂弟子雅慶僧都于時一長者、翌年長保元年正月、真言院御

修法勤仕之了、

久安四年正月五日、民部卿顯賴莫、一長者寬信法務舍兄也、寬信依服假辭、真言院御修法、仍二長

者寬遍勤仕了、

仁平三年正月六日、一長者寬遍姨母逝去之間、長者依服假後七日御修法、俄被仰寬信法務、即參

勤之間、十四日轉叙法印、仍寬遍退爲二長者云々、已上自東實記抄出之、

寬文九年正月、後七日法、一長者依重服、第二權僧正永愿勤仕之、

同十三年正月十一日、一長者前大僧正性演今日舍兄服假出來、後七日法不及辭退、

修法要抄抄出一紙、東實記抄出一紙、寬文勘例一紙、以上折紙三通也、

亞相資照卿被命云、僧中除服宜下之事、內々令尋醍醐僧之處、服者之僧勤仕御修法等之時、申除服歟之由存之、追而可勘見之由被示之云々、於勘進者、密々可示預之由申亞相了、必可示聞旨有約亞

日丙寅後七日法服者勤仕哉否之事引考記折紙令付右少辨之許

東寶記久安四年正月五日民部卿顯賴莫一長者寬信法務舍弟也寬信依服辭真言院御修法仍二長者

寬遍勤仕了

仁平三年正月六日一長者寬遍母逝去之間長者依服假後七日御修法俄被仰寬信法務即參勤之

右折紙一枚二書之

寬文九年正月後七日法一長者依重服第二權僧正永愿勤仕之

同十三年正月十一日一長者前大僧正性演今日舍兄服假出來後七日法不及辭退

〔季連宿禰記〕元祿八年八月六日乙未依使者晚景參權大納言中御門實照卿亞相被相逢被命云僧中除服

宣下之例并僧中重輕服之中不出仕事歟或御修法中俄依重服出來退出之事等有之哉密々可勤

進大外記之由也召遣大外記之處依所勢不出來之間季連向大外記許可傳仰又季連尙可引勘云

云申承之由候次向大外記之許雖所勢以異體可相逢云々即被出達示件旨之處所勞麗物云々仍

難向他所文書有他所之故當座難引勘之間件趣可預意得云々十一日庚子去六日所承僧中除

服宜下例引勘之處所見無之仍服假之時御修法等勤否之例引勘今日令持向中御門權大納言亨

亞相被出達申承雜事了例文三通各折紙也記左

依輕服召替阿闍梨事付假間用手替事

時範記云寬治四年九月廿一日壬午今日爲殿御使參院令申云法橋覺欲候于長日如意輪法依

外祖母服辭退申替可召權律師範慶權少僧都良意申姑喪假由尊勝御修法勤否之條如何依御

物忌於門外以行實令申事由御返報云覺欲替可召範慶良意假間以手替令勤修何事在哉

輕服間用手替事

〔滿濟准后日記〕永享三年九月十五日、一重服事、二親并灌頂師匠勿論也、此外一坊一流等令附屬仁體ハ、雖非傳法灌頂師匠、可爲重服條勿論也、且寺例歟、但臨期爲師匠不可有重服條、由至申置者、不可有重服條、又通滿寺例、當時古今連綿也、予又其儀也、今度實快法印、雖不受灌頂、一流一院家真俗悉故僧正悉附了、於重服者勿論歟、然者重服者既止住處ニテ五旬内、同火同座不憚之條、又不審第一也、此等子細重申處、不及分明返答寺例トシテ多年覺悟、又自他見及儀計<sub>於</sub>注進仕也、以次宜樣可被計置云々、

〔竹窓三筆〕弟子爲師服

其說有三、一六祖壇經、一釋氏要覽、一百丈清規、三各差殊、今辨如左、一壇經云、吾滅度後、莫作世情悲泣、雨淚受人弔問、身者孝服、非我弟子、亦非正法、二要覽云、考涅槃諸經、並無服制、惟增輝記引禮三服、其三降服、白虎通云、師恩同父母、宜降釋氏、喪儀云、師恩同父母、宜三年服、五杉云、師服皆從法服、但布稍粗、純染黃褐、增輝云、但染蒼皴色、稍異於常耳、三清規云、小師麻布綴兩序苧綴、主喪等生絹綴、衆舉哀三聲、小師幙下哀泣、如上所說、據壇經則無服、據增輝等則有服、無泣而服、不用麻、但用色黃蒼而已、據清規則服泣雙行、宛同世俗、夫爲僧者、雖應宗法六祖、但今弟子不忍師亡、多爲之服、乃上欽祖訓、下順人情、委曲酌中、依增輝作青黃色服之可也、古云、禮可以義起、更俟高明正焉、

〔滿濟准后日記〕永享六年九月廿九日、自今日於禁中、爲御不豫御祈地藏院藥師小法勤仕、<sub>增登</sub>○重服五ヶ月中於禁中修法勤仕例、先例可尋、但百ヶ月中重服阿闍梨、修法勤仕一兩度例在之歟、一ケ度ハ此阿闍梨師匠聖快僧正母重服百ヶ月中於北山殿月次壇所北斗法勤仕了、今一ケ度寺門其例在之歟、

〔季連宿禰記〕貞享四年十二月廿一日乙丑、晚景自藏人右少辨宣定使者云、來年後七日阿闍梨東寺一長者爲服者、二長者可被勤仕後七日哉、先例如何云々、予所勞之間答申追而可考進之由、廿二



永祿至于大治總十二ケ度、山階寺別當必以參候寛治御幸、又以同前、而今度臨幸、別當玄覺依爲假日數之中、不可參入、然者雖無先例、可有御參詣歟、兼又玄覺服假之間、令沙汰御幸雜事之條、可有憚哉否、可令計申給者、依御氣色言上如件、雖申左右、又正別當服假之間、令沙汰御幸雜事、又有其憚、然者今度延引、追被途可宜歟、十六日、及深更從宇治被仰云、來廿五日春日御幸、猶延引、依寺家別當法印玄覺服假之中也。

〔續世繼〕八らゝのゝみこ、さぬきの院○崇の皇子○附は、それも仁和寺の宮子○鳥羽皇性○性は、それもおはしますなる。○中さぬきの法皇かくれさせ給へりけるころ、御ふくはいつかたてまつるご、御むろ○性よりたづね申させ給へりければ、

うきながらその松山のかたみにはこよひぞふちの衣をばきる

とよませ給へりける

〔玉海〕承安三年八月十日庚午、午刻許、自女院御方被仰云、皇后宮日來御不豫、只今已危急。○中然之間、頗落居給、仍忽無此議、圓實法眼奉祈、被居物付有驗云々、件法眼雖爲重服、不被憚云々、

〔玉海〕安元二年十一月十五日丙辰、尊勝念誦如恒、實嚴閑梨參勤、雖重服不憚也、

〔玉海〕文治二年五月廿三日庚子、未刻藏人辨親經來申、條々事、依物忌在門外。○以國行令申事等。○中一覺辨律師申服假之由如何

仰云、神事之時、輕服者有從、神事之例、況佛事哉、就中者雖有重服之儀、輕服之條不致沙汰云々、早猶可參之、由可仰遣者、且又一旦可問綱所歟、但此條勿論事也、

〔玉海〕建久二年二月十九日戊戌、長房來申云、○中最勝會式日今日也、而講師賢國有輕服事事可有憚哉否事、問例於綱所之處、注申延引例。○昨日之余○藤原仰云、天曆并後三條院御記憶、付尼無傍親服之由有所見、但不憚之例可勘申之、由仰之、今日服綱所奉行御願之例、勘申之、仰可奏之由了、

案之僧尼遭二親喪者、可着服也。於傍親喪者、所見不詳、然者不可有服假之沙汰、又俗人雖出家、猶父母之外、餘親之服假不可有之者也矣。

〔拾芥抄服下〕僧尼服事

僧侶爲二親有服、爲傍親不着服也、是常爲輕服之故也。

僧無傍親服事

水工鈔云、寛治八年十一月日返事云、僧無傍親服、見天曆御記天德元年閏三月廿七日、有明親王醍醐天皇、寛忠

法師明親天皇兄弟、召預於仁王讀經也、專不可有其憚、但又不可觸彼穢。

〔神祇道服紀令秘抄〕一僧尼ハ二親ニハ服アリ、傍親ニハ着服セズトイヘリ、又假ニ於テハ、僧尼ト云トモ忌ベシトモ古來云リ、近代御修法ヲ勤ル僧假ノコトアレバ、憚之也、但法家申云、近代ノ法

也不可有服假、又出家スルノ日、令離本質之故也云々、此分タレドモ近代ハ僧尼ヲモ服假ヲ憚ル

也、其教ハ若ヘ伯父姑舅尼ノ人死去ノ時、其親類ノ俗ヘ服假ノ日限ヲ受也。

〔憲法類編 二十二〕僧尼服忌并死葬ニ預ル者心得ノ事

壬申五年○明治 六月十二日第百七十六號御布告

僧尼服忌之儀ハ、是迄御制度モ無シ、候處、自今人民一般之服忌ヲ可受事、

〔殿曆〕嘉承元年七月九日戊戌、五壇法之中、軍多利法、阿闍梨懷譽、依服假令、召勝豪、

〔中右記〕天承二年九月十一日從殿下藤原道長、被仰云、度々春日行幸、長者春日詣、權別當不參事、兩三

度有例、執行長吏不參事、未有其例、然者廿五日春日御幸、可延引口口何申云々、奏此例延否、可候御

定之由、可令奏給歟、十二日、殿下仰云、僧昔輕服不着用、明法博士明兼勘云、輕服俗家之作法也、於

僧者無其文者、然者奈良法印、春日御幸、歟如何、予申云、僧輕服昔不候之由、所承也、近代內御修法、

僧輕服出來之時、被改定也、然者可在院御定歟、中略右兵衛督顯賴傳院宣送消息云、春日行幸、始自

限あれば我とはそめの藤衣なみだの色にまかせてぞきる○きる一本作みる

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應補齋院司舍人遺喪之替事

右得彼司解稱依太政官去承和五年二月廿二日符旨充補舍人四人而遺喪之徒毎年不絶至于神事無人差使凡司家之風尤忌穢惡重服之輩何得出仕仍移送遺喪之由而式部省固稱無例曾不補替望請不待至考隨闕被補謹請官裁者右大臣○源常宣奉勅依請

承和八年十二月廿二日

僧尼服忌

〔令義解二尼一〕凡僧尼有犯苦使者○中其有事故須聽許者並須審其事情知實然後依請謂事故者身

之

〔令義解假四十〕朱云凡於親服僧尼无別者類不同而私不知何

〔令義解喪四十〕古記云爾雅釋親云父爲考母爲妣○中僧子亦服解

〔釋氏要覽送下〕服制 釋氏之喪服讀涅槃經并諸律並無其制今準增輝記引禮云服有三一正服

二義服三降服白虎通曰弟子於師有君臣父子朋友之道故生則尊敬而親之死則哀痛之恩深義

重故爲降服釋氏喪儀云若受業和尚同於父母訓育恩深例皆三年服若依止師實法訓次於和

尚隨喪服○中杖有二種一喪父曰斬衰言斬者喪父也直杖○中二齊衰齊音咨也齊者刻也練也

尚隨喪服○中杖有二種一喪父曰斬衰言斬者喪父也直杖○中二齊衰齊音咨也齊者刻也練也

〔法曹至要抄下〕僧尼爲父母着服爲傍親不可着服事

喪非令云服紀者爲父母一年說者云問父母僧尼其身死去可有着服哉答無可疑假事令說者云問

僧尼遺父母及餘親喪何處分答於僧尼不見給假法於父母無疑矣穴云僧尼者沙彌沙彌尼皆僧尼

耳

〔兼胤卿記〕明和七年二月二日、八幡神主紀美濃守母、病氣大切ニ付、若及大變候ヘバ、當時神官一人も無之紀四幡守入、就、風、神役之手替無之、次職大綱宜相勤先例も無之、新規ニ申付候ヘバ可及違亂候、左近儀、假日數相濟、服中ニ候間、爲致除服、從神役候儀致度、尤神官ニ是迄例ハ無之候ヘ共、小廟宜與村主殿、放生會神輿飾無人ニ付、一社より爲致除服、奉仕之例も有之間、左近爲致除服之事、相願候由、檢校信濃書付、攝政殿近衛内前○近衛ヘ相窺例も有之間、左近爲致除服、可從神役被命、抑安藝守檢校ヘ申渡了七日初卯神樂美濃守無別條從神事了

〔兼胤卿記〕安永三年七月廿九日、下御靈神主出雲路攝津守兼胤迄内々相尋、寶曆十一年五月十一日、外祖母死去ニ付、假服之事、一社一人之事故、於社格者、兩親之外、假服無之候ヘ共、如何可致哉、兩人迄相伺之處、社法之通、假服不可受候由、於姉小路家被申渡候、此度兄弟之中、大切之病人有之、御旅中之儀、差懸難澀候間、兼而内々相尋候由ニ付、關白殿ヘ相伺候處、寶曆十一年有沙汰、無假服御申渡有之儀、此度更不及伺、不可受忌服之由被命攝津守ヘ、願大膳申渡了

〔泰山集甲錄乙錄四〕出雲國造无服忌、謂天穗日命之靈直凝乎吾、其間數世、皆器古而新之耳、此傳限於大社、他決不可用也、諸社或服中給仕祭事、大非禮也、

〔松屋文集下〕しのぶくさ

はづきつゝいたちの日よりは、御ゆをだにつゆばかりまゐらす○關中吉備津彦神社、○關中吉備津彦神、みすくなくなりまさりて、四日の申のときばかりに、ものゝかれ行やうにきえはてたまひぬ○中略、いみもはてぬ、かぎりあれば、こもりてのみもゐられず、ゆゝしき身なれば、御やしゝにこそまゐらね、事おこなふ所へは出ぬ、

〔續拾遺和歌集十八〕父充仲、身まかりにける比、社○吉日のならひにて、着服せぬことを歎てよめる、

祝部成茂



一家相續爲之養ハ、本親之服着候モ、又十三ヶ月服着申、尤之由被申候故、其通ニ存候<sub>レ</sub>去仰次第之由御返事申上、別ニ取沙汰無之哉之御尋也、不爲由申、八月四日、神宮傳奏久我大將より、可參由人來、予參、仰旨奉行資照令同道二條關白殿<sub>○</sub>光<sub>○</sub>參處、御參內故、禁中へ被參也、關白殿前攝政殿へ申上、自其奏聞申處ニ、如此先例幣使之事、先年祭主定長所勞之時、宮司精長使也、今度宮司尤之由仰也、兼長祭主望事、二年服過<sub>テ</sub>、左右方披露尤之由也、<sub>○</sub>中<sub>○</sub>廣通卿覺書被調、被見故申請書之、

略○中

一兼長祭主職申上候事、依爲前祭主定長養子、假卅日、服百五十日、去四月明之由申候へ共、兼長爲家督相續祭主職相望上ハ、可准實子存、依之卒爾披露難成致延慮候、前傳奏公理卿之時、服明候ト申、經二三ヶ月候得共、不被披露意趣相望候處、廣通所爲同前云々、雖然寂慮難測、祭主職之儀も頻ニ相望候條、重輕服差異右之旨委申上、可得御內意候哉、其上ニ而可致披露之由被仰下候ハ、兼長精長兩方共ニ彌加吟味、可致披露之事、<sub>○</sub>中<sub>○</sub>廣通、尤

之由仰也、<sub>○</sub>中<sub>○</sub>廣通、尤

明曆三年八月四日

神宮傳奏久我右大將覺書條々也、關白殿前攝政殿へ被得御意、神宮奉行兩人奏聞有之、勅許之由被仰、點之分相濟由傳奏被仰故、則申請書之旨、去十九日ニ、宮司方へ遺狀之返事重々故、又相等ニ狀遣、五日、神宮奉行中御門頭右大辨へ參、仰云、當年例幣使之事、宮司精長へ可申付由仰也、猶當月末ニ御下知可有由仰、先年之下知案文、被見有度由也、兼長祭主職之事、精長祭主職之事、兼長二年、服明<sub>テ</sub>、左大方奏聞之義可有仰也、本職以下之事元和年中、任例官務早々可加下知由被仰退出、伊勢へ飛脚大介遣、<sub>○</sub>中<sub>○</sub>神祇少副兼長より口上覺書一通、兩宮長官狀共六ッ來、養子假卅日、服百五十日過申事之文體也、予返之、今日神宮奉行中御門頭右大辨被仰渡、兼長重服、十二ヶ月之服之由仰旨如此、然者此書物返也、

例又如、此而乍置在京上臈二人、催下臈無謂云々、但爲季有所勞不能勤仕、清定尤可下向云々、仍問伯仲資王之處、本官在京之次差申了、難被改云々、

服者被發遣例先規無所見候、於服者不被發遣例古來連綿事候、

九月三日

左大史忠利上

又祭主友忠、正保二年正月八日、去年十一月十二日、親種忠相果申、當年正月二日ニ明申也、除服申上度由也、神宮奉行葉室頭右大辨賴業朝臣へ、除服之義申、同廿日ニ賴業仰云、祭主服之内、奏事始調例有之哉可尋由ニテ、奉行予向兩使尋申處ニ、先例無之由申、同廿一日除服勅許也、其後神宮傳奏德大寺大納言公信卿、祭主ニ被尋處ニ、祭主除服申て者、奏事始取次申候由可存候由仰被下、同廿四日奏事始也、祭主言上、忠利取次第奏聞、慶安三年九月二日、神宮傳奏姉小路中納言公景卿入來仰云、中臣使友忠母服中也、發遣之例、内々勘可申由被仰、同七日神宮奉行油小路頭中將隆貞朝臣へ參會、祭主服者故勘例體仰上申處也、其沙汰如何候哉尋申入仰云、昨日今日傳奏院中へ被參沙汰有、祭主立使申義也、予申云、定而祭主例御座候哉申處、勘例之沙汰無之由被仰、如此義神宮奉行中御門頭辨資照朝臣申入也、傳奏へ此由可被仰入候由也、三年四月十五日、神宮傳奏四辻大納言へ參、神宮奉行予參會四辻仰云、兼長、服之儀相尋候處ニ、養親服百五十日ニ而清成、申も有又二親之服十三ヶ月着テ、又養親の服十三ヶ月着も有、今度前祭主定長服、一家そうぞくの養子兼長、百五十日ニテ明可申との子細無分別由被申故四辻兼長申込、祭主職之義延引可有之由被仰、奉行資照予申云、如何様共仰次第、予武家傳奏へも御談合尤之由申、夕食有又兼長内の高田喜兵衛、戸田半左衛門、兼長にかはりて、官司非分之條ニ言上之然處ニ、兼長ニ書付改令言上、様々依被仰是を取て歸、六月六日、兼長養父服之事、神宮狀言上則神宮奉行へ傳二條殿へ參、神宮傳奏四辻へ參、仰云、一昨日前攝政殿より、隱岐河内被下、仰云、兼長義、祭主職披露義御尋也、白川被申通、

り書付半左衛門持參、祭主忌中ニ付御尋之事、

一養子之親之父母、服モ忌モ無御座候、一家ニ居有候得者、穢者御座候祭主母之儀者、伊勢ニ而六月廿七日ニ相果候故、私義京都ニ罷有候得者、少モ障無御座候、就者祭主兼役ヲ仕、例幣使可奉勤仕ニ存從、朔日御神事ニ入罷有て、此等之趣御傳奏御奉行迄得御意被爲成可被下候恐惶謹言、

九月三日

神祇少副

兼長判

四位史殿

四日、夜入中御門頭辨殿より、神宮傳奏御出也、可參由申來、仰云、昨日言上、兼長書付披見之處、兼長無服之儀計、書上可申由、則戸田半左衛門ニ申付、又祭主友忠服中ニ相從儀可勘由被仰、五日、兼長言上之書付半左衛門持參、

祭主定長養子神祇少副兼長、定長母忌者、養子之孫ニハ服モ忌モ無御座候、以上、

九月三日

神祇少副

兼長判

四位史殿

如此言上、則中御門頭辨へ持參尤之由被仰、予ニ祭主服中ニ神役勤申例之事被尋、先年慶安三年九月三日、神宮傳奏姉小路中納言公景卿言上之通、書付懸御目、

中臣使雖爲重服、可被發遣哉否之例

保安元年三月四日新年祭也、使祭主親定卿、有大產穢、仍神祇權大副大中臣輔清勤使、長寛二年二月七日新年祭也、使祭主師親言上云、今月五日遣從父兄弟之喪、仍以男定、

建久二年九月十一日例幣也、上卿藤大納言實家卿、中臣使祭主能隆可參勤之處、依服假神祇官以、大祐永兼載差文、而上隨爲季清定等訴申云、例幣月次祭等使、祭主有故障之時、上臈可勤仕、其

保以後之伯補任可注給云々予○兼答云此上者不可有子細可注進之由申了

〔吉田家日次記〕應永五年三月十五日壬戌今日祭主清世朝臣送使者伯官之名字等不審可注預云云去年本官補任之分注遺了不截位階也又云舍弟輔世望申權大副喪父以後予今不復任兼少副

先可申置復任歟可然之樣可相計云々答云故忠直卿權少副時喪父不及復任任權大副了但不打任事也尤先可申置復任事也可申沙汰之旨返答了

〔吉田家日次記〕應永八年二月一日庚申兼世宿禰依當番參平野社及晚退出談云兼右去月以來依輕服不參至正月全服去月猶不參自中旬又輕服云々去々年四月兼口事着服以後去年正月喪母之間自去月清淨可參社之處無其儀然間中旬又禁忌出來云々抑依閏月存斟酌歟將亦滿限以後之閏月無其忌事若不存知歟如何

〔吉田家日次記〕應永九年五月廿八日庚戌戌刻兼富兼勝等着服○此月三日兼其際如先日但日次事不及尋陰陽師予兼相計之除疑日了以巫女祕密々沙汰了抑兼成依爲予猶子不着凶服愛雖

不受服假實父母之時不從神事定例也於養父者不着服之度勸神態是先規也情案之今般雖不着服於神事者不可叶又予時全受服者徒隨居神慮殊爲恐但依之今度受服着色者先人之素意似巨

測元來兼敦實子出來者以實子可相續之趣先人遺命剩被染置一筆即存日子不存知也如事以是後拜見之連々嚴命符合了是祖父堅被示置子細等有之故也其段先々記置了所詮今度兼成在服身不着色此條無先規歟不有

物真定可有傍難歟用長相直垂同系凡此條相似存知歟但真實之儀恐神慮頗素意折中之思慮偏

仰哀慈者也於予滅後之追福者不異實父喪懇志五句之間可令罷居於服假者可爲九十日輕服九十日全滿限者則令參社可尋頻繫之禮莫此條敬神至孝之最也若違背此意趣者匪管違愚父之處分忽可蒙靈神之冥罰

〔忠利宿禰記〕明曆二年七月廿四日祭主母儀去六月廿七日相果山中定長母也 九月三日兼長よ



未補之間、執行此役者、爰召問神主伊房之處、勸申先例云、神主有隙之時、以代官令備進御供、預專無執行之、近則伊房妹死去之時、以代官令勤仕御供者、以伊房申旨召問他司等之處、申云、所訴申不當也、近則實俊御供當番故障出來之時、以代官令勤仕此益神主無勤其代、以之推之、神主有憚之時、何以預令勤其代哉者、實俊訴申旨不當之由仰下了云々者、有政故障之時、奉隆奉行專非例歟、是前攝政之時事云々、先日尋本社之處、不注申保安例、尤不足言也、仍改先日下知、以達忠代官以補頭結忠爲代官云々、可令備進御供之由可仰下旨仰親雅畢、

〔仲資王記〕承元五年○建曆元年五月廿九日庚辰、自去廿五日祭主能隆卿三十日輕服云々、月次祭使可被催、他人之由觸年預茂平云々、六月十一日辛卯、月次祭、依本宮禮延引云々、祭主能隆卿輕服卅ケ日歟、

〔百練抄四十四條〕嘉禎元年十月十四日癸卯、行幸官廳來廿日御禊○大會之間、爲出御所也、今日祭主隆通朝臣輕服事、可被改補哉否有詳議、十一月廿一日庚辰、神祇權大副隆繼朝臣奏天神壽詞、祭主隆通朝臣輕服之間、隆繼奉仕此役未曾有事也、

〔國太曆〕貞和二年十二月十八日藏人治部少輔兼親爲勅使入來、鴨社遷宮服假社務奉行事勅問也、申詞書之、少々直了、鴨社造營服假社務令奉行哉否事、祠官衞々記錄故者、不可構今案歟、然者所注進之天曆十年禰宜正秀父信秀承德元年禰宜惟季母服等、兩度奉行之先蹤云、史局之勅奏云、祠官之記錄就彼是加了簡所申頗無相違哉、祐重雖申不得所見之由、不實之條不備支證、然者日來沙汰懸候上者、以代官恐致造營之沙汰、明年服假以後、不日可奉、遂遷宮之由、嚴密被召置請文、如元被仰奉行於祐光之條有何事哉、

〔吉田家日次記〕貞治五年七月卅日庚戌、予方々出行、今日洞院前黃門公定以常成爲成朝臣弟、口書札云、神祇官補任事有伯望之志、當時重服也、服假中補之例不定之由、白川中將顯邦朝臣申云、文

文所令進於齋宮御也。因之豐受大神宮<sup>仁</sup>御參宮如恒。又大神宮御遷宮之勤如恒。

〔大神宮諸雜事記〕<sup>二</sup>康平六年五月廿六日、齋內親王御兄、修學院阿闍梨入滅了、然而齋宮齋院祖父

母及兄弟<sup>乃</sup>忌服不御坐之例也。以日易月之前例所謂服五月五日、服三月三日、服一月一日、是承前

之例也。仍其間御匣殿御坐<sup>天</sup>、內膳炊部司等<sup>乃</sup>御膳物不供<sup>天</sup>、只進物所<sup>與</sup>御飯御菜等進了、但本服

五月也、仍五箇日所下坐也、同六月祭使神祇少祐輔長參下、齋內親王參宮了、但去晦日御禊以今

月十日奉仕<sup>天</sup>令供奉給也、依以日易月之例也。

〔中右記〕天永三年正月廿四日壬午、今夕以津守俊長被補住吉神主、是重服者也如何。

〔玉海〕治承二年十二月七日丙申、申刻藏人中宮大進基親來、余<sup>○藤原</sup>着烏帽直衣、謁之、基親仰云、伊

勢大神宮宮司公俊遭父喪而去年待下重任、宜旨了、檢先例、或有復任之例、或有改任之例、今度何樣

可被行哉、<sup>所被制下官勅例一通、并宮司所望之者注文一通、</sup>

〔玉海〕文治二年四月十日丁巳、此日右中辨基親來、申初齋宮之間雜事、齋王祖母<sup>春日局</sup>重服之間內々

事無人于沙汰、仍御禊可延引哉否之由問本宮、全不延引、不可依祖母之重服之由被申之、抑件女房

初爲教良子而兵庫頭重俊爲養子、仍着養父服不着教良服、然間刑部卿賴輔又爲我子、其後存賴輔

子之由云々、然間賴輔去比卒了爲重服、但不觸積云々、然而內々事不可離彼口入、仍猶神事有恐爲

之如何、<sup>已上基親申狀</sup>仰曰、若雖可延引非一兩月事、可及明年夏卜定之後、徒過一年之例、已以未曾有所詮

齋王御身非服於祖母之服者、殊可被忌之、他女房等奉行雜事宜歟、且又可奏事由者、

〔玉海〕建久二年十一月十日乙卯、右大辨親雅來、申條々事、其中春日正預遠忠沙汰之分、御供依其身

重喪、以代官可勤仕歟、可被付神主歟、尋先例之處、有政故障之時、泰隆備進了、以代官勤仕之例、無所

見之由社家言上、仍先日付遠忠可勤仕之由仰下了、而勘故殿御記之處、保安二年閏五月廿九日御

記云、左少辨實光來云、春日預實俊訴申云、神主伊房輕服之間、執行此役之所、欲備進御供、先例神主

〔二〕所大神宮例文大宮司次第

第廿 中臣久世主祭主清麻呂曾孫天長三年九月任在任三年同六年正月父喪解任

第卅 有範貞觀十年戊子八月十四日任在任七

第五 中理康保四年六月依母喪解安和元年八月復任

〔大神宮諸雜事記〕長久三年閏九月十二日大宮司兼任遺母喪服解抑件兼任者任彼宜旨服解之

間以任用宮司等令推行天復任之後可遂件重任也而依競望輩之訴被尋神祇官之處勘申云件宮

司上代三人服解之後永不復任中間三人服解之後既復任具也者爰陣定云件復任宮司之時天下

不靜之例等多者依件定天兼任朝臣復任停任之由公卿會議既了但以重任官將來所望歟仍以同

四年二月廿二日被補任從五位下大中臣朝臣明輔已了

〔大神宮諸雜事記〕永承四年九月十三日依宜旨天左少辨近江守藤原朝臣泰憲右大史中原朝臣

實定并史生官掌使部等齋宮到着天以使部大司美任許遣內案之狀云以去六月天齋王參宮之間

禰宜等成亂行天者爲被件事糾問依察解所被差下早催具禰宜等宮司共參向可申件沙汰也者

宮司申云舊妻死去輕服之間不堪沙汰云々禰宜等申云御祭以後過廿五日祭主宮司神主共可申

沙汰也云々

〔大神宮諸雜事記〕天喜二年七月日齋內親王乃〇數平親王女敬子女王王御內戚伯父前式部卿入道宮〇數平親王

入滅給了爰齋內親王齋院皆是以日易月例云々今依此天八月御禊九月御祭參宮給已了其間免

無事也

〔大神宮諸雜事記〕天喜五年九月十四日抑齋王御外戚伯母以去八月下旬入滅已了仍八月御禊

二、九月四日於南門被奉仕已了御參宮之條者祭主可定申之旨從關白殿〇藤原賴通被仰下之日齋

宮齋院如此傍觀乃御忌服之條以日易月乃例也者任先例可令參宮給之由進上請文了仍以件請

任滿限者、今右大臣○藤原宣奉、勅神主服限事、一同宮司服闋復任、豈可異例、自今以後宜同復任。○中

大同二年八月十一日

〔續日本紀十七〕天平勝寶元年閏五月甲辰、是日伊勢齋王○輕女王爲遺二親喪、自齋宮退出、

○按ズルニ、齋宮ノ親喪ニ遭ヒテ解職スル例ハ、神祇部大神宮齋宮篇ニ在リ、

〔日本紀略祖武〕延暦十一年閏十一月乙酉、多治比子姉卒、參議大、中臣諸魚母也、先是諸魚進家譜云、中臣朝臣任神祇伯○時諸魚者、是天照大神神主也、累世相承、遺喪不解者、勅雖不躬喪紀、不可供神事、宜令修其服、

〔日本後紀五〕延暦十六年二月丁丑、參議左大辨近衛大將兼神祇伯正四位上大中臣朝臣諸魚卒。○中諸魚性好琴歌、無他才能、雖在哀制、乘輿忘口、貪冒財貨、營求產業、時議以此鄙之、

〔西宮記四月〕賀茂祭事

延喜九年三月廿二日御記云、高階朝臣申云、齋院供奉祭日、日記進止如何、○輕仰外記、令勘先例、外記春正申云、國史日記等無所見、案令式文親王有服云々、然則齋王不可參祭也、又召神祇大少副藏人所問之、申云、齋宮不忌輕服、准此則可參祭、又令公卿等定申云々、准齋宮例參祭、無妨云々、依公卿定、可參祭事、仰高階朝臣畢、

承平七年四月一日貞公御記云、賀茂齋內親王、遭兄弟喪、參祭否之由、令公卿定申、民部卿令申云、今日公卿少數、須明日朝可令定申、三日齋宮齋院着輕服否之由、令問彼宮宮不着者、齋院可參祭之事、○中務卿親王去定了、○月廿九日頓減

〔日本紀略一〕延喜十五年五月四日甲子、賀茂齋院恭子內親王、依母喪出本院、遷座葛井宮、

○按ズルニ、齋院ノ喪ニ遭ヒテ解職スル例ハ、神祇部賀茂神社齋院條ニ在リ



一甥姪 服七日 假三日 但姉妹ノ子無服

一異父兄弟姉妹 服三十日 假十日

父各別而同腹之事也

一繼父 服三十日 假十日

但同居セズ恩恵ヲ蒙ル事ナキ時ハ無服

母方

一外祖父母 服九十日 假二十日

一舅姨 服三十日 假十日 自餘ノ親屬皆無服

一七歳未満之幼稚二親之服ヲ不着上ハ六屬悉無服也件之小生死去ノ時モ又六親無服也八歳

ヨリハ自他之服有之

〔康富記〕享德四年七月廿三日丙申或説曰○中略平岡八幡社服紀令紛失云々

〔翁草百七十三〕塵塚の塵

賀茂の社司は國法の服忌令と違ひ實系を重んじ養系を次にす最神前實肉の穢を憚る所は去事ながらそれは祭祀の事にこそあれ常の人道をもていはゞいさへ養實の親疎法令の通に行難き物なるを加茂のごとく養家を輕んずる様にては人間の僻情得たりとして大に正路を損ずべし是神靈の御心にいかで協ふべけむや返すくもあしき社風なりけらし

〔類聚三代格〕太政官符

神主遺喪解任服闋復任事

右檢案内太政官去延暦十九年十二月廿二日下神祇官符仰諸國神宮司等並限以六年補替之事先立例訖右大臣○神主宣件神宮司未滿限年若有服解不得補替仍令神主并祝等行事服闋之日復

一夫 服一年十三箇月 假三十日

一妻 服九十日 假二十日

一舅我夫之父 服九十日 假二十日

一嫡子 服九十日 假二十日男子第一也

女子ハ最初ニ出生ストモ末子ニ准ズ

一末子 服三十日 假十日

一養子 服假末子ニ准ズ、但遺跡ト名付時ハ、嫡子之服假可受也、

一妾 服無之 假二十日

一祖父母 服百五十日 假三十日

一伯父父之兄 叔父父之弟 服九十日 假二十日

一姑父ノ姉妹 服假同前

一兄弟姊妹 服九十日 假二十日

別腹タリト云共、服假差別無之、父各別而嗣腹兄弟姊妹見于左、

一曾祖父 服九十日 假二十日

一高祖父母 服三十日 假十日

一嫡孫 服三十日 假十日男子之第一也

一末孫 服七日 假三日

女子ハ最初ニ生タリト云共、末孫ニ准ズ、

一從父兄弟 服七日 假三日

伯叔父子男女共服假同前姑ノ子無服

一むこよめにいみなし

一まごひこやしはこいみなし○傍注、本記ニハ、嫡孫服一ヶ月、是

輕服とは神にまいらず別火にはせず○中

一法師之僧尼ニハ、二親之忌之外ニハ忌服なし、天台宗皆如此、他所之法例ハ、此方ニ不用之○中

一おとこの忌卅日 女の忌廿日

きやうぶく百日 輕服五十日

一いみつきの事 二親にはいみつきなし

父母之外、たとへば十日いみを十日めにき、付たらば、其日一日いみつきてあくべし、皆々如此、卅日忌ヲ廿九日めニ聞付たらば、只二日忌て卅日めをあく也、廿日忌皆々如此、又忌皆過てき、付たらば、半分忌也、十日忌ハ五日忌、皆以同前也、輕服モ忌付也、輕服之日數過たらば、いみ付なし、是ハ輕服之事也、忌ハ半分也、

〔諸社通用神祇服紀令大成〕神祇道之神事者、一朝之法令也、君臣遵之、諸社例之神事者、一社之新式也、故其社人守之、

服假

一父母 服一年但十月 假五十日俗云

遠國他境ニテ逝去年月ヲ經告來時、聞付日ヨリ更ニ五旬ヲ始、其月ヨリ一廻十三着服也、此儀

二親限也、

一養父母 服百五十日 假三十日

遺跡相續時、本親ノ如ク一廻十三着服、此時ハ本姓二親ノ服不受也、但用捨其身

一嫡母我母ヨリ 繼母繼母ヨリ 服廿日 假十日

一僧尼ノ弟子忠孝之事師匠死去之時忌五十日、但繼其寺庵弟子之事也、不及輕服之沙汰、又弟子死去之時ハ、師匠之身ニ無忌親之忌、同前如師也、

一祖父祖母父方忌卅日輕服百五十日

一祖父祖母母方忌廿日輕服百日

一父方母方ひおうちひうば忌服なし

一嫡子忌廿日輕服百日

一そしの子共忌十日服五十日

一兄與弟姉與妹忌廿日輕服百日、

あねといもうごに輕重なし同前也

一腹がはり兄弟は同父にて母のかはる事也、いみぶく同前事、

一たねがはりの兄弟は同母にて父のかはる也、忌十日服五十日也、

ゆきあひおとゝいはいみぶくなし

一おちおば父方忌廿日輕服百日

一おちおば母方忌十日輕服五十日

一ま、ち、同家の時は忌十日或七日

別家之時は中々不及忌

一ま、は、同家之時は可忌之、別家は不忌、

一ま、午忌なし

一おひ服七ケ日忌三日

一まうとまうとめいみなし但本記ニハ嫡子ノ妻ニハ忌有リ忌十日服三ケ月也、



一 おくはなくて、いとあるは、何にても物ならふまじやう三日なり、たゞしかみをそりたる物はなし。

一 七さいよりうち、人し、たらばほんおく三月には七日、一月には三日、七日のおくには一日なり。

一 かいさうとてはかなどをうつしかへたるは、一年のおくに廿日、五月のおくに十日、三月のおくに七日、一月のおくに三日、七日のおくに一日なり。

〔日吉社物忌令〕父母親類事

條々

一 父母忌五十日服一年、爲限十三ヶ月、有閏月年者、加之十四ヶ月也。

夫十三ヶ月之次第、一周忌之月晦日可爲別火、其月朔日以唐崎清淨之水則淨身體、脫袷服、衣着新衣、翌月朔日神社參詣事。

五十日忌中之輩、出頭之刻可着笠、是恐天鑑怖神明之上覽故也、當今崩御御時、太子諸親王御國忌、御新造竹之柱萱茅垣等云々、無御出座之事。

父母爲他行出違國死去之事、經年月於聞付之、其日ヨリ忌五十日ナリ、其月ヨリ服十三ヶ月也、忌服如本式、歟、有異儀忌ツキト云事、無之、近來ハ替ル也。○中

一 養父母ハ、其家相續之猶子ハ、知行分并資財等於領納者、忌四十九日也、無服衣、五十日過テ、以唐崎之水淨身體、神社參向之事。

若以私之我意可有服衣者、背物忌令社法之條、非正義也。

一 雖成人之養子、本體之父母之忌服不可有略儀也、如載記錄大法、養父母之儀ハ、以其家々恩徳可有相當孝養也。

一 卅日のふく十日のいどまの事

ひ、おほぢひ、うば、ひおほぢのち おぢおば、ち、のほんのつま、ほんそは、ま、は、ま、ち、  
ふくいさまなれば、は、かたのおぢおば、あにむすこのこ、おばむすこもやしなひこ、やくそく  
ては、ふくい  
さまなし、

一 七日のふく三日のいどま

まごの中にそしのこ、ちやくしのそくしども、ち、かたのいどこ、なんにまおなじ おひ、おご  
りな

一 ふくいさまもなきしんるいの事

おほをぢおば、いどこおぢおば、いやいどこ、なんにまおなじ いどこおいめ、おいめい、おいま  
ご、めいまご、

右ち、かたは、かたおなじくなり

一 ふこうの子、しするとき、ち、は、ならびにしんるい、ふくいさまあるべし、ち、は、ならびに  
しんるいしするとき、ふかうのこ、ふくいさまあるべし、ほん／＼のごとし、

一 ち、は、よそにてしするとき、き、つくるをはじめにて、四十九日十二月、ほん／＼のごとし、

一 おほぢうばいげ、しんるい、ふくすぐるとき、き、つけば、しだいにいみつくべし、いどまはきく  
日より、はんぶんにもちぬべし、

一 おつと、つまりべつの、ち、こありども、たがひにふくいさまなし、

一 おつとし、てのち、おつとあらば、ふくいさまなし、

一 七さいまでは、しすれども、ち、は、しんるい、ふくなし、ち、は、しするとき、七さいまでは、こ  
は、ふくいさまなし、八さいよりあるべし、

一 あらはた七十五日、あらはた百日、

一 祖母祖父忌卅五日服三月、母方は忌十日服廿日、

一 伯父伯母父方は忌卅日服二月、母方は忌十日服廿日、

一 孫子の忌七日服七日、子は十日、

一 甥姪忌十日服廿日○中

嘉吉二年十月廿日注之

〔加茂服紀〕

一 一年のふくは、ち、は、おつぞ、まゆう、ふだいの事くわんあれなし、いみは四十九日なり、おどはたゞ卅日なり、そは女房もおなじくけがる、なり、甲のゑとて、ほんのゑ也、行人はおつのゑとて、又卅日のゑなり、おつのゑは、行人は又卅日のゑなり、是は人をばけがさず、たゞしゑんしのうちへははかり給べし、

一 三七日のほうじとて、ほんゑのところ、卅日ののちはいりての人は、三日のけがれなり、これはひじ也、

一 ほんまやうのち、は、もおなじ、やしなひおやは、いとまぶくすくなし、但ほんおやのてをはなれば、やしなひおやをほんどすべし、

一 一百五十日のふく卅日のいとまの事これよりおちふ、き

おほちうば、やしなひおやこれこれよくいさまなし、

一九十日ふく廿日のいとまの事

ひおほちうばは、かたのおほちうばたまふ、いて、かたおちおばたまふ、つまたまふ、しうしう、ばあにあにおと、あねいもど、ちやくし、おつとのち、は、しやうしやう、のの、つつ、まま、いい、けけ、これこれ、おつおつ、なな、どど、や

一叔祖父母假卅日服九十日

一伯祖父母假廿日服七十日

一叔父叔母假廿日服七十日

一甥姪假三日服四日從父同之

〔新羅社服忌令〕

父母服一年

養父母服五箇月假廿日

妻同上服假

祖父母服五箇月

內戚外戚之伯叔父母及兄弟等服三箇月

當社正社司二親之忌全無之權社司輕服可之

〔日光山服忌令〕

一父母は忌五十日服一年、閏月數不入時過聞は、如前從其日始之、

一養父母も如眞親、讓を不取は忌十日服廿日、

一夫妻の忌廿日服卅日、但無子七日也、

一系ぼし親の忌十日服廿日、有讓は忌五十日服五月、

一師匠忌五十日服五月

一嫡子忌卅五日服三月

一兄弟の忌廿一日服三月

一末子忌服共に廿日

君主同上、但無私忌

夫假服一年

嫡子服三箇月假廿日

繼父母相具、無服、假

○中



一養父母 服五箇月  
但服三十日

一祖母 服同之  
外祖母同之

一曾祖母 服同前

一高祖母 服同前

一繼母 服同前  
繼母之父母

一繼父 服同前  
繼父之父母

一妻 服同前  
但服三十日

一子 服同前  
但服三十日

一兄弟 服同前  
但服三十日

一伯父 服同前  
但服三十日

一姑 服同前  
但服三十日

一夫之母 服同前

一異父弟 服同前

一異父妹 服同前

一衆孫 服同前  
但服三十日

一從父弟 服同前  
但服三十日

一從父妹 服同前  
但服三十日

一舅 服同前  
但服三十日

〔稻荷社家服忌令〕  
一二親假五十日服十三箇月

一祖父 服同前  
但服三十日

一曾祖父 服同前  
但服三十日

一高祖父 服同前  
但服三十日

一嫡母 服同前

一繼父 服同前

一夫 服同前

一子 服同前

一養子 服同前

一姊妹 服同前

一叔父 服同前

一夫之父 服同前

一異父兄 服同前

一異父姊 服同前

一嫡孫 服同前

一從父兄 服同前

一從父姊 服同前

一兄弟子 服同前

一姨 服同前

ま禮三十日也。○中

一やしないち、は、のいまれ百五十日也

一父かたごしのいとこは七日は、かたのはいまれなし。○中

一しうさしうごめのいまれ九十日、よめはおふべし、むこはいまれなし、

一一ふく一しやうのきやうだいのめいをいのいまれ、をちをばは七日づ、おうべし、

一ま、は、のいまれ三十日なり。○中

右しやうじんの條々如件

應仁二子戊年七月十八日書之

〔服忌令集成〕三寶曆二年十二月自宮政所告知于權任中京都折紙之寫

一假服之事可相守令條事

一養子之服忌者、雖違令條、遺跡相續之上者、如本生父母着一年服事、

一於一社者、古來定法之通可相守事、

但於朝廷者、不被用社法事、

一正權禰宜忌服之節、假服日巨細注、早々可言上事、

十二月廿七日

養子忌服之事、當所方は百五十日、京都に而者一年憚り候様に有之候間、彼是混雜之事も可有之

候に付、舊格之趣を以て御断申上候處、當宮之儀は、格別に候間、彌古法之通り可致由被仰渡候、

假服之事、先達而申入候通、彌無油断、届可被申候、時々御注進申事に候、

〔八幡社服忌令〕八幡宮社制

一父母行服十三箇月、不計四月、即、五十箇日、同六、百箇日、  
其疎同之、行期人、其疎同之、日數又同之、



問假令甲者夫之母也乙者子之妻也而乙之夫丙已死去其服未畢間彼姑又以死去件婦不改嫁之故可受甲之服假哉否又件乙夫之服過畢之後雖經多年尙守亡夫之志寡居而在本家之間亡夫之父母死去有假服哉如何嘉保二年十月廿一日問也答令云爲夫之父母服三月假廿日又云爲夫服一年假卅日者案之夫之父母并夫雖死去猶守志寡居之時其義不變之故共可遂其服假之限者也左衛門少志中原範政又父入道死去繼母出家爲尼獨遺室及七ヶ年爰彼繼母尼死去父之子繼母服尙可受之由同年同月同日範政判具也祖父長官妾出家之後死去之時爲繼母故二嗣宜貞鄉神主并貞棟神主等被受忌服也但近年夫他界之刻成比丘尼之輩稱放俗塵不受夫之父母服假之族少々有之歟爲向後可訪法家哉只父逝去之後繼母與夫死亡之後夫之父母者其意可爲同前也甲夫乙妻爲夫妻經年序之間甲死去之後乙妻剃髮成尼偏願菩提而經三四年若十餘年夫甲父母死去之時乙尼可受被假服哉甲之妻妾丙所生男女乙死亡之時可有其忌服歟答剃髮入道之後夫婦之義已絕畢夫甲父母雖死去不可着舅姨之服又乙雖死去丙之所生男女不可有服是出家之後繼母之義絕之故乙雖死去有此所見誰人問誰人答哉不知之如此答者乙雖死去甲之所生男女不可有服之由也背嘉保二年兩通勘答狀者也此事神宮之法不通着服仍注于上次主服一年家人奴婢所着也師喪假三日受業師死時不着服給件假也此兩條於神宮不及沙汰

半減假并服減

隔堺不知死亡假服日限過終得告者假半減服無之次服減假令卅日假日數之內得告者十五日以前者計日得減十五日以後不得減也自餘准可知但三日假者減一日忌二ヶ日服者追日悉得減故計殘日忌之但父母并夫假服雖經年月無減矣

夫假不減半事父母并夫假服雖經年月無減之由既載此目六上者不能左右者也以副注、替廿日假、爲十日假也、所註自中以酌、聞者減以後可增也○中略



爲繼妻不可看服云々不受妻假事又同日勘狀并永久五年九月五日大判事三善信貞勘答等分明是者相並妻妾之時事也見問狀

次父一腹兄弟子不受服假是異姓之故也

次父存生時於令死亡繼母假者雖爲數多受之父逝去之後妾等雖有數輩受父假繼母三人之外卒去之時不受假也

次嫡妻雖令離別未改嫁死亡之時夫可有其假服事見天永元年九月廿六日宣旨假殿沙汰文內也祭主親定卿嫡妻死去時事也離別之後義已絕更無其服假之由見承應三年三月三日明法博士中原範政勘答之上又永久四年并大治元年勘答具歟

養子事<sup>○中</sup>治承二年八月日明法博士中原基廣答云必不依處分之有無甲乙共不絕收養之義者爲乙丙可有服五月假卅日者也自餘略之又小兒三歲以下及養女子之外者不聽收養縱違而雖乳

育不得養子之號仍不可有服假矣<sup>○中</sup>

養子之妻受夫之養父母服假事就天仁三年六月四日問狀明法博士中原資清勘答具也

養祖父母并養孫互不可有服假事就元曆二年七月日問狀右衛門少尉明兼明法博士中原基廣等勘答云爲養祖父母并養孫不見服假之文云々

養子與實子互無服假事見應德二年正月并永觀二年六月法家勘答等具也

次夫之父母服假之假廿日服九十日以此趣受忌服之處於服假之中夫與手書離別離別之上者可止服假歟既受服假之上者可忌通歟此條不審也但令改嫁之妻雖忘志夫假猶受通之若依其儀者可受通也但義相替歟宜依先例此事可尋法家

私云亡父判者此事與手書令離別之後者不可有假服云々

次繼母假雖父逝去不改嫁者受之也夫之父母假夫雖逝去不改嫁者同受之也兩條先例分明也隨

〔殿曆〕永久二年七月七日庚申、今日不出行、依物忌也、巧祭停止、是先例也、女房料節供如常、余○  
實節供不分明、仍尋人々、輕服不被憚、而今度雖輕服儀、又同重服儀、仍所致沙汰也、余節供今日止之、

〔台記〕久安六年七月七日辛巳、皇后宮○近衛后及余○藤原乞巧奠、雖假行之、依先例也、  
 〔有德院殿御實紀二十三〕享保十一年七月七日、御喪次○此年六月、德川吉宗、生母巨勢氏卒なれば、外殿に出給はす、  
 星夕によて、出仕の輩、老臣に謁して退く、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡福宜大内人難色、物忌父、小内人、遺親喪、不敢觸穢及着素服、卅九日之後、祓清復任、其服闋之間、侍候外院不預供祭物、亦不參入內院傍觀服中亦同、但物忌父死者、其子解任、子死者父亦解任、並非復任之限、

〔文保記〕一内外親族假服付中減假、并服減、因月禁忌、改父母、假廿日、但五十日、祖父父母養父母、假廿日、百五十日也、曾祖父母、伯叔父姑兄弟姊妹、嫡子、夫之父母、月假廿日、服三、高祖父母、庶子、嫡孫、養子、月假十日、服也、  
 從父兄弟姊妹、姪女、庶孫、服七日、

外祖父母、月假十日、服三、繼父母、舅、姨、外戚、異父兄弟姊妹、月假十日、服一、但繼父不同居者無禁忌、凡服者

目假初日計也、男之女子者、皆庶孫內也、服七日、喪葬令云、衆孫七日云々、謂嫡孫者、嫡子之嫡子一人

也、自餘皆庶孫也、雖無男子於女子者、無嫡號、次以次男、嫡子之時、生得嫡子服假事、可有三月服廿

日假、歟之由、貞治二年三月、大判事明宗、勘答分明也、就之案之、立嫡子之次男假事、可爲十ヶ月歟、但

曾孫、一福宜重房神主、以次男忠成立嫡子、彼忠成卒去之時、假廿日受之、

次假令於七歲未滿男子逝去時、假三ヶ月受之、後又立次男於嫡子、彼服假者、假廿日服三ヶ月受之、

也、但永萬二年八月、明法博士兼俊勘答、不可受之、由雖載之、近代神宮之法受之、

次爲母嫡子假事、元德三年七月日、明成章香章敦等勘答不同、但神宮者、先例假廿日服九十日也、

次不依子所生有無、受妻假事、就康和三年七月廿二日問、明法博士中原範政答云、不依息子之有無、

〔兵範記〕久壽三年正月一日癸卯、關白殿○藤原忠通無四方拜、依高陽院○鳥羽后藤原泰子、去年十二月崩、忠通御服日數

也、已刻殿下有御手水事、爲基朝臣爲陪膳、此間大外記師業持參叙位勸文爲基朝臣衣冠、依仰傳覽

云々、下官信範雖爲御手水番、聊有款樂事遲參也、今日殿下無御出仕、無拜禮、客享無別御裝束、不立、不敷、不施、土敷、四座等、二行敷高麗綠疊如尋常儀、近衛院并北政所閏年、又高陽院御事、旁指令、仍元三儀違例

款、

〔玉海〕治承二年正月一日丙申、依輕服日數未滿、無四方拜、

〔殿曆〕康和四年正月四日庚申、依服間不會人○中略、但親人○中略には、於内出居對面、

〔玉海〕養和二○壽永元年正月一日壬申、例講師忠玄、律師依爲喪家之内、不見鏡、不服藥、依長元元年經

類記也、雖備進齒堅不取出前也、用精進手水節供、共以停止、但政所供菓物如例、

〔玉海〕建久五年正月一日癸亥、已刻手水陪膳文章博士業實朝臣歸入見鏡如例、女房於別屋着白櫛

見之、雖重服人無憚之由、見保安二年故殿御記、

〔最有院殿御實紀〕承應二年正月元日、慶會あり、いまだ御喪制○去年十二月二日、川家綱生母青木氏卒、はてざるに

より、御盃の獻酬なき旨を、酒井讃岐守忠勝、酒井雅樂頭忠清つたふ、諸大名も時服のみかづけら

れ、御盃は下されず、旗本の輩には例のごとく御流を給ふ、又明日諸曲始の式をも停廢し給ふ、

〔實久卿記〕文化十五年正月一日己亥、天明四海萬歲春珍重珍重家門繁榮幸甚幸甚、予故殿○橋本實誠

御一忌重服之間無家祝、世傳固吉書、每如例年、今日稱款樂不出仕、

〔玉海〕養和二年○壽永元年三月三日癸酉、今日依重喪停節供、五七九等月、皆同先例也、

〔玉海〕文治四年五月五日庚子、此日余○藤原兼實及女房不供節供、着服之身、有憚之故也、但先例重服憚

之、輕服不憚云々、然而如此事、偏依款之淺深、有忌之差別、隨所着之服、非常輕服、其色頗濃、又悲歎之

痛、超百千之重喪仍止之、

〔兼胤卿記〕明和五年六月九日、所司代輕服半減之忌相濟之後、殘日數之間事、大概一昨日御附離演說、自口之儀攝政殿○近衛傳定書付御附へ相渡了、

所司代輕服半減之忌相濟之後、殘日數之間之事

一 參內可被憚事、并家來參入是又可被憚事、

一 御用往來書狀常之通之事

一 使者傳奏役宅へ出入不苦事

一 火之廻御門外之儀故、被差出不苦事、

一 非常之節御門外迄參被扣居、其段可被申聞候、其節可及挨拶事、

別ニ演達云、若一分ニ被別火候へ、家來ハ清火ニ候間、御附へ之對談等ニ參候儀不苦候、但右之通ニ而も飛驒守使ニ而ハ不相成候、此段も可被達示之、御附承伏、

〔兼胤卿記〕安永二年五月五日、土井大炊頭養子遠江守、去月晦日死去ニ付、大炊頭儀來十九日迄廿日之假、七月晦日迄九十日着服之由届ニ付、關白殿○近衛へ以書狀申入、且忌中之間之御用向取計分之事等、是迄寢ニ箇條無之間、左之通書付、關白殿へ相與、

一 忌中之間御用向書狀如先格、御附迄可差越事、

一 不致面談候ハ、不叶御用、差懸有之候ハ、穢無之儀ニ候間、隔闕可致對談事、

一 御幸之節、風廻御附組可差出事、

一 非常之節、施藥院迄可相詰人數例之通可差出、但御門内江入候儀ハ、其節可致差圖事、

右之通可申達被命了

〔桃華藥葉〕一可覺悟條々監所見

輕服日數之間不四方拜

服者通節、日



式部大輔淳高卿

參議左大辨經光卿

文章博士經範朝臣○中

御代始改元勤者輕服之例無所見候

右注進如件

七月廿一日

左大史小槻季連上

大外記中原師唐二字外記署也

〔兼胤卿記〕寶曆六年十二月四日、所司代服中、御神樂警固出候例、高屋遠江守へ申付御臺所日記拔萃指越之、

貞享三年二月土屋相模守

右母儀死去之事

同年十二月十四日御神樂警固出ル

〔兼胤卿記〕寶曆七年九月十五日、松平右京大夫○京都所司代實方之伯父長惠、去四日死去之段、十三日申來、半減之服忌、十三日一日ニ而相濟候由、御附迄申來、御附より相達ニ付、關東表ハ格別、於御所表ハ、

實方之伯父廿日之忌ニ候間、其心得可有之申達候處、關東向右之通ニ而相濟事故、只今於御所表ハ、右之日數ニ而不相濟候段申達候事も難致何とぞ兩人宜取計賴候由、右京申候由、昨夜御附より申越ニ付、一通り御附へ相達、傳達ニ而相濟事ハ、先頃伯母死去忌中之通ニ可取扱候差懸り候御用、直往來不致候而ハ難相濟事ハ、直達可致候、且又面會致候事も、其品ニより差掛候事ハ、随分無指支様可取計候、若殘ル十日之間、御幸等有之候ハ、風廻り常之通組之者可被差出候、此段右京大夫へ可被達置候由、御附へ示含了、

言良敎卿奉行

康永四十廿一改元定上卿左大臣公實先着陣輕服之故云々

永長二改元博士敦基朝臣承久三改元博士長倫朝臣正嘉三改元前權中納言經光卿以上依輕

服不進勘文

年號字勘者并仗議公卿輕服例

正嘉三年三月廿六日改元定元正

位次公卿前中納言經光卿參陣輕服也

文和五年三月廿八日改元定元延

右大將通相卿參陣輕服中也

應安八年二月廿七日改元定元永

洞院大納言公定卿參陣輕服中也

康曆三年二月廿八日改元定元永

藤中納言仲光卿參陣輕服中也又進年號勘文

嘉慶三年二月九日改元定元康

日野中納言資敎卿參陣輕服中也又進年號勘文日野前大納

言資康卿輕服中也進同勘文文章博士資國輕服中也進同勘文

左大史小槻雅久

〔季連宿禰記〕真享五年元○元藤

七月廿日依召參攝政殿一條被召御前被仰出云後深草院伏見院

後圓融院後花園院後陽成院後水尾院延寶度已上七ヶ度御代始改元勘者可勘進又當時文章博

士一人輕服也就夫御代始改元輕服人進年號勘文例先規可勘進大外記師庸朝臣依所勞今日不

祇候之間自官可示傳云々廿二日壬辰一昨日被仰出勘例示合大外記予令清實遣大外記師庸

朝臣許令加署令持參攝政殿了在御對面大外記依所勞不參勘例記左折紙也

御代始改元勘者例

後深草院

寶治度

四位史殿

改元定の事、十九日被定候はんする哉らん○中 勘者式部大輔、きやう○服候例兩様候、なほたづね候て、申入可被爲參候、○中

のぶ胤

勾當内侍ごのへ

年號字勘者并仗議公卿輕服例

一 勘者輕服例

貞永元

權中納言家光卿

永徳三

權中納言仲光卿

嘉慶三

前權大納言資康卿 權中納言資教卿 文章博士資國

一 公卿輕服例

康元二

權大納言冬忠卿 權中納言顯朝卿

正中元

左大臣後圓光院

康永四

左大臣公賢公

嘉慶

權中納言資教卿

此外先例多存之

大外記中原師富上

長寛三六五改元定、左大臣松殿○藤原基房 雖爲奉行依輕服被辭申、仍右大臣經宗 參行散木大辨雅賴

卿、依輕服除服參入、爲大辨令勘文讀之、

建長八十五改元定、左大臣通良 雖爲奉行、依輕服不參、右大臣公相公 奉行之處、又輕服、仍權大納

但當日事、內大臣師房爲下臈行之、

永治元年

中納言伊口

永萬元年

參議雅賴

康元元年

權大納言冬忠

權中納言顯朝

貞永元年

權中納言家光

元應元年

權大納言公賢

正中元年

左大臣後園光院

輕服人被憚例

承德元年

左大辨季仲卿依妻妻不參

永萬元年

左大臣菩提院關白

康元元年

左大臣道真 右大臣公相 依輕服不參

改元定事、御參不可有子細者、廿一日なご可宜候歟、

〔國太曆〕貞和二年二月七日

釋奠輕服人參仕勿論候於廟拜者、相憚不立候然而寮官引聰明之時強不除輕服人より之上者翌日昨役送藏人輕服不可及沙汰取之由存候、以此等趣可令計奏聞給候、口誠恐頓首謹言上、

二月七日

左大臣藤原公實

頭辨殿

〔宣秀卿記〕延德四年七月

改元年號字勘者、并仗議公卿輕服例、可注申之由其沙汰候也、

大外記殿



去夕有相勞事之上、如此事度々被免書狀故也、左府被答云、帥乳母、其憚輕服也、除服之者、從其役有、何事哉、是神事御禊陪膳、輕服人雖日數之中、勤仕之故也、不然者、他典侍可奉抱歟者、而他典侍皆有、障云々、仍帥典侍奉抱之、

〔假服事〕壽永元年五月廿七日、有改元定改養和二年、爲壽永元年也、去廿五日、藏人左少辨光長、奉院宣示送曰、改元日必可參陣、若未除服者、早除服可出仕者、去月有婦錄服也申可參陣之由了、但改元者吉事也、永承度詔書覆奏曰、猶輕服人起座、況定日如何、近古事其忌雖相異、一旦觸子細於左少辨、口口此條先無御成敗、但中古輕服人着其色、近代不然、強不可及沙汰歟者、

文永六年十月十一日、權大納言基具卿以事狀問答如此、

輕服人御着袴日出現、若其憚候歟、先例不審候、近代彌可猶豫候歟、如部類記未見及之間、事々暗然也、

返報云

御着袴日輕服人可參哉否事、其例只今不覺悟候、但冷泉院御着袴日、式部卿親王、依九條大臣命、不改心喪服、參入花山院御着袴日、枇杷大納言雖重服之間、依爲宮大夫有召參入云々、上古例粗如此、可被相淮候、然而近來事、可被伺時宜候哉、

〔園太曆〕康永四年

○貞和元年

十月九日、今日未刻許、自南都使者到來、去丑刻、覺源法印入滅云々、哀傷至、

難畫筆端

○中略

作法印者故入道大相國御末子、于○藤原公賢叔父也、改元定奉行事、可被仰他之間、再三

勅定之旨、勘者事已宣下了、而依覺源法印事、予三ヶ月輕服也、而先例或憚之或不被憚、且勘者輕服多、先例仍注進先規、可隨勅定旨、付女房申入了、勅答并重請文案等續左、

改元輕服人參仕例

治曆元年

右大臣 京極關白

〔長秋記〕大治四年正月廿日己亥，行幸院。○中略於本宮宗輔卿，令奏服日數內取劔履事，可有憚之由所承也，而今般可有憚否，攝政○藤原忠通宣不可憚云々，仍預此役云々。

〔台記〕康治三年○天養元年正月廿一日癸酉，未始參內，○中略依賭弓也。○中略先是左大將已下參候，○左大將雅定、初

取美、著大色下重、雖結女房假日、飲內、除服可參由有仰、仍參仕、

〔兵範記〕嘉應元年六月十三日戊戌，早旦參院。○白河後申法勝寺御八講僧名事，去夕入御新熊野御精進屋於門外奏聞了。

左衛門佐信基服日數也，不可有憚由，御先達權僧正被申行，仍參仕御共此條頗不審，然而御定之上先達說不能左右事也。

〔假服事〕治承二年七月十五日，今朝前右大將○宗盛室逝去，中宮大夫○時忠右大將室家兄也，服假之間，奉行御產間事，可有其憚否，勸先例後日故中院，依有准據例不可被憚之云々。

### 假內從公事例

仁和四年十月十九日，右大臣源光義同廿五日式部卿親王○本廣、右大臣弟以下諸卿五位以上，依件裏請假者，可供奉來廿八日大嘗會御禊之由被下宣旨。

長德元年六月十六日，月次神今食也，權中納言藤原公季卿依宣旨雖服假內預件祭事。

永久三年十二月五日，遷宮後政始也，參議左大辨長忠朝臣雖服假內○尹入道基且依院宣參入。

保元二年十月八日，自高松皇居遷幸新內裏，右大史小槻宿禰永業雖兄師經假內，可爲造宮行事之由被宣下。

〔吉記〕治承五年○養和元年六月廿九日甲戌，今日節折如例，但主上○安徳着御吉御服，依延久諒闇例子○藤原

房經所申行也。○中略出御之時，帥乳母奉抱之件典侍夫之母○時忠卿之母堂事之輕服日數之內也，而今一大

納言乳母重服也。○耶事入何樣可被進退哉之由女房示之，予以舊狀尋申左大臣。○藤原經宗雖須參向，自

及問人重服身不參、可叶時宜者歟、

〔滋草拾露〕服假以下葬候賀表重輕服人不加署事

元祿十二年朔旦冬至賀表

從二位行權中納言隆真卿依重服不加署從二位行權中納言隆慶卿依輕服不加署參議正三位爲茂卿依輕服不加署

享保三年朔旦冬至賀表

參議正三位左近衛權中將通條卿依重服未拜賀不加署

〔實久卿記〕文化十四年五月十四日丁巳、今日仙洞御庭御田植也、予爲重服之間不參、十八日辛酉、

今日仙洞御讓位後和歌御會始也、御題寄菖蒲祝、予爲重服之間不詠進內裏和歌御人數讀師正親

町大納言實講師經定朝臣發聲前源大納言重題者冷泉前大納言爲奉行左衛門督雅云々、十九

日壬戌、今日仙洞御庭御田植也、予不出仕、

〔北山抄〕八月七日牽甲妻勅旨御馬事

重服次將取例者天德四年八月七日、眞衣野御馬於仁壽殿令分取、左中將伊尹令申云、重服者不從此役、加以私鞍具被察御馬於事无恨、被免迎役轉供分取事、仰依讀

〔小野宮年中行事〕正月一日皇后宮及東宮拜賀事

故殿御日記云、延長二年正月二日、昨日依節會着吉服、今日裝束獨身難定、仍令賜氣色、報命云、今日

猶可着輕服、

應和三年正月二日、欲着東宮撰、依輕服頗無便宜、又東宮御物忌者、朔日可有拜我云々、仍不參入、

〔神祇道服紀令秘抄〕一服中ニ除目ノ申文ヲ進事、文明十二三廿九除目、勸修寺大納言致季卿重服

中進申文、又重服人或執筆ヲツトメ、或ハ任官ノ例アット云、明應二二廿一見家記、此義如何答如

〔此事ハ〕局中并法曹ノ輩勘進ヲモテ本トスル也、然上其分タルベシ、

〔中右記〕寛治四年正月六日、叙位儀也、昨日依御衰日延引也、執筆右大辨通俊雖重服所勤仕也、

無出御儀并服者參否事尋申一條殿御返事在左令條文遣重服者終服不賀不預宴云々  
宴是節會也所存分無相違歟今度不可有出御事ハ依御即位以前也服者參節會例并無出御儀等  
所見一紙注進候可足准據候哉如令條文者遣重服者終服不弔不賀不預宴云々然者參勤不打任  
事候哉但於有其例者勿論候哉愚拙長享度當職中遣重喪不參節會候執政異于他之上依其例不  
詳如此令進退候於凡人者有其例之上爲別勅被參之條可有何事候哉然者吉服可被撤飾御候歟  
猶期見參次候也

御判○中

服者就吉參例

此兩度之例者有所持本仍稱述其例  
之由被了不帶飾無者可爲帶御歟

承平二年正月一日

參議橋公賴法皇喪  
就吉不服飾御

寬德二年正月一日

左兵衛督經任卿  
關白命云雖元日不可停恒例也

〔基量卿記〕真享二年正月廿四日今宵和歌御會始如例讀師之儀烏丸大納言雄光被仰出處御請

也然處烏丸輕服中也可有如何哉之旨奉行日野中納言窺申之仰云所詮服中參勤又者不勤事先

例不分明上者先此度は可被指置也其通可申由仰也則仰日黃門ハ了讀師今出川大納言伊參

勤了

〔季連宿禰記〕元祿十一年七月廿九日辛丑入夜依有使者參柳原家之處大外記出納將監等同參之

以兩家雜掌

堀内

被命云今度東叡山

○中堂  
供養

參向之輩重輕服之人參向不相叶之間此旨可存云々

是白所司代記  
伊守中來云々

申承之由諸司之分明日相改書付可進之由申了出納二人豐州重服將監祖父爲輕

服之條代官之事可申上之由將監所申也兼日參向用意之處忽不相叶條定而可爲寒心

〔基熙公記〕元祿十二年十月卅日甲午藏人左中辨兼廉來云明日冬至賀表奏可早參之旨奉行基長

朝臣示聞但爲重服身可爲何樣哉答服者強而不憚之歟但計時宜不參不可有難歟兼廉諾了凡不



三月八日

大史小槻有家

追上言上

季御讀經定輕服人參行例、壽永元年七月廿二日定、行事右中辨光雅朝臣輕服承元元年三月十

六日定、上卿權大納言藤原卿八條左府外叔父等是也、神宮仗議、同日被發遣山陵使例、不分明候、可被問

外記候歟、恐々謹言、

〔看聞御記〕永享四年七月十八日、今度○任大臣重輕服之人被除、西園寺大納言、中御門中納言、中山宰

相中將、重輕服也、御遊之所作中御門宗廟定親中山卿當雖望申、依服假無御免、仍右衛門督卿隆盛四辻宰

相中將等、被召加畢、不慮之幸運也、

〔宜胤卿記〕文龜元年十二月廿二日丙寅、元日節會內辨事御問答、內府公藤公故障、定余可存知之由、

甘黃門內々告送之間、先於佐次郎故障狀遣之、

元日節會參仕事可然之由、內々早示承候、祝着候、但去年火事裝束類、沓冠劔平緒以下、悉燒失候、

各可有御方便候哉、抑當年元日平座參仕事、自違所分令奔彼存知了、未役人參候者、可然候哉、其

上重服中、元日參事可有子細候哉、於列者雖述其所見候、此段者可爲勅定候、凡服以後、遂着陣覽

吉書之通法候、雖爲外辨之上首、不可着仗座候歟、所詮條々不具、難事行候、被催免候様可得御意

候、二月仗儀致傳奏、自山居日々往反、無爲申沙汰、殊又右大辨宰相致參役了、九月伏見御經供養

參仕無緩怠儀、自然御次仰芳言候、恐々謹言、

十二月廿二日

宜胤

甘露寺殿

大臣內辨之時位、次上首中納言例、先年及御尋候き、其例度々事二候、又改元仗儀、憚服者候歟、  
況節會哉之由存候如何、

可計申云々、粗雖勘先例、只今所見不詳、但緯已吉事上、除服以前不從公事、然者御署可有猶豫哉、覆奏強不限日數事也、除服宣下之後、被加御署、可宜之由計申畢、

〔假服事〕文永十年三月六日、予輕服之間、祭主罪名仗議、今月中被行之者、可有猶豫歟、○中又季御讀經定可奉行之由、藏人右近示之、輕服假間奉行之例、尋大外記良業之處、不分明、仍同申了、

良季所勘申兩事例如此

季御讀經定上卿輕服不分明候、但永承六年三月十三日、權大納言源卿師房參議經長卿參入、被定申春季御讀經日時、僧名經長卿輕服也、而有宜旨所被參入也、可被相准候歟、兼又仁王會輕服人參仕例、長元元年三月五日、於大極殿被修臨時仁王會、今日輕服人多參入從事、文治五年三月十三日、春季仁王會也、檢按參議親宗卿、雖輕服未被下、除服宜旨、依職事書狀參入云々、如此候、以此旨可然之樣、可有御披露候歟、良季誠恐謹言、

三月六日

大外記清原良季 請文

八日藏人右近經賴示送云

季御讀經定上卿輕服人參陣事、於外記所見不分明之由申之間、相尋官候之處、如此申候、此上者何事候哉、爲御計歟、內々申入候也、且領狀之仁も不候、御參候ハ、可爲公平候歟、以此旨可令洩申給、經賴恐惶謹言、

三月八日

經賴狀

輕服人申、行季御讀經定例、加一見返、就之所詮、於有例者可、隨被仰下候、但假中者、雖參行歟來十日、假之日數滿候、爲被日以後者、隨重仰可、存知候狀如件、

三月八日

在判

山陵使定可爲明日、九日上卿已刻可被參之由、謹承候了、早可加下知候、仍言上如件、

天曆九年參議雅信朝臣依號喪請假不參

〔本朝世紀〕康和元年十月廿日戊午左大臣後房已下參入被定行善子內親王伊勢親王子內親王准三

宮勅書事左大將忠實依重服無內覽事勅書奏下了

〔殿曆〕康和三年五月十八日戊寅依仁王會辰刻許退出依爲重服也事了入夜還參御宿猶御宿也

〔永昌記〕嘉承元年七月廿六日乙卯參殿下忠實來廿九日可有御上表而勅答可草大內記敦光依

敦基喪有憚依先例文章博士可勤仕歟將進士內記辨官等可奉仕歟勅報云延日有上表如何者

廿八日乙巳依召參殿下明日御上表不延引如何文章博士勤仕勅答其例雖違凡諸家爲吉例重可

奏定者聞食之由有仰廿九日戊午今日殿下有御上表事辭關白初度表也大學頭敦宗朝臣草也

知實書之文章博士實義朝臣草勅答依大內記敦光服假也昭宣公基經表勅答文章博士安倍與

行草之例也

〔長秋記〕天永二年二月十一日春日行幸略中左宰相中將家政取劔置置御與服日數內次人役之歟

〔中右記〕大治四年正月一日庚辰今日天皇德御元服七日丙戌及申時賀表元服權右中辨顯賴

朝臣於里亭清書口云々略中件表左中辨實光朝臣依殿下忠通仰作也大納言民部卿忠教卿近

日遣母喪卅九日之中未復任而不書入表又輕服宰相三人師範宗時雖書入今日不參不加判也

〔假服事〕保元三年五月十一日於法勝寺被行千僧御讀經仁王經可獻之由先日小舍人催來答云是

爲息災御願重服之者尤有憚者左金吾後日申此由之處同申此趣旨被仰也十三日小舍人稱修

理亮藏人命尊星王法之間不可參內之由示之服者依有憚也

〔明月記〕建永二年元承十一月廿九日略中寄御輿吉新三位中將定通開簾戶宰相忠信依輕服

不動服日數之人出御如例

〔後中記〕仁治三年二月十九日辛未自右府實經有被仰合事着素服人關白詔加署事可有憚哉否

發了、一歟於參宮日者、雖可爲清淨輕服、口數相應之中進發、不可叶之旨、雖加制止、不承引、いかにも今日之風儀、國阿彌說歟云々、莫言莫言、迷惑之外無他、神慮如何、

〔鹽尻〕五條天神社解卜部家私說 五條天神社解曰、當社者高野大師之草創云々、延文五年五月十日藤原國定

狀解天文九年十二月廿九日、荒川又次郎爲父重服、件ノ社ノセウノ餅調へ遣スベキ旨、可有如何之旨、尋來ノ間、五句以後、不苦之旨、返答シ可然云々、

是卜部家ノ私ナリ、嗚呼神ヲ瀆シ人ニ詔フモノナリ、

〔基量卿記〕延寶八年十二月十七日、節分也、例年參内侍所、雖然當年予爲素服、人數之由、○此年八月後水尾崩公用之外ハ神社參詣可憚之由、伯二品被命之間、不參、衣體ニテ參御庭了、

〔基量公記〕元祿十四年五月二日戊子、柳大乘院僧正信覺故前關白房補公、去年正月十一日薨末子也、去々年補寺務、○興寺以謀計不慮被補寺務、子細去々年五月日記委注之去年正月喪親、仍社邊之事自遲々、然而當正月重服

中、強而被參社、○春去年正月心經會、依父喪公事延引、當年正月以來、猿澤池水變色、去月改水澄了、是此恠歟、又去正月以後、其身所勞三月已後、任京病體、日々行水十七八度云々、去一日行水之間、絶入、既遷化云々、此去正月參社之咎之由、都鄙稱之、

〔兼胤卿記〕安永二年五月十四日、土御門陰陽頭被示母儀死去ニ付、長日御祈以下、朔望巳日名越等之御祈禱、以代官執行、正五九月御撫物取替、今宮祇園御靈等祭日之御物品ハ、朔之御禮代官取計、神役之者を以、如例奏者所へ獻上、先例父子假服中ニ而も、恒例之御用向差支無之由書付、大典侍へ申入了、院へも可被申上之由示了、關白殿○近衛前衛へ昨日申入了、

服者遇公事

〔禁秘御抄上〕寶劔神璽

凡重輕服人不觸手

〔北山抄十二月〕荷前事



〔吉記〕治承五年六月廿九日甲戌中宮節折事相尋權大進光綱之處示云依長元元年例可被行之由雖有議定保安二年中宮御待賀門院○鳥羽后藤原璋子雖獻撫物返給無節折并六月祓事云々は依御重服也仍今度任彼吉例被停上之了

〔玉海〕養和二年○壽永元年六月廿九日戊辰抑余○藤原兼實依重喪無六月祓但女房姫君等有之○諸家司

勅之大將少將等方各有之

〔嚴有院殿御實紀〕五十六延寶六年六月廿九日土御門極簡奏福例のごとく名越のはらひ奉る御

服○此月十五日後水尾后德川和子崩により儒官林弘文院春勝をめして古例なしと申にて停廢あり

〔台記〕久壽二年十二月十四日丁亥北野往年重服參詣近年雖禁重服聽輕服至于菅氏者重服亦聽云々准知忌日無憚亥刻詣北野奉幣通夜

〔台記〕久壽二年十二月十六日己丑戊剋高陽院崩羽后藤原泰子○鳥依無輕服忌亥刻詣北野奉幣通夜

縱有輕服可遂參詣之由

〔玉海〕文治三年八月四日壬申此日北野奉幣十列如常陪膳資奏朝臣陰陽師縫殿頭賀茂宜平行事職事信光使雅樂助忠賴但件男有輕服事雖除服猶爲假日數之內而北野社服假之人不憚參入云云仍使闕如之間約出件男之處服假有實猶依不參問遣在茂○菅家之處申云假日數過了者除服了輕服之人供奉神事當社例也仍以奉行職事令爲幣使只相具乘尻令行列許也社頭又有憚大略無用之使也然而都闕如不便之間依无他人隨宜所行歟

〔滋草拾露〕服假以下○藤原故殿○滋野御記享保十年五月一日巳刻許沐浴詣聖廟○北予雖爲輕服

於當社者不苦之由先例云々且又社僧能吟所語也九月廿四日沐浴詣聖廟○一社之法云々重輕

服不憚之由社僧能吟所語也末社等願拜

〔吉田家日次記〕應永十年十月三日丁未抑今朝於北小路亭伯卿實忠參會談云アコノ局爲參宮進

四月廿一日、依召祭主隆蔭卿率二宮福宜等參院前藤宰相傳奏、但請印文書、以他人奏之云々、此卿自去月一日、有三ヶ月故蔭、雖然令傳奏云々、

返報云

悅承候了、以便宜一夕旁可述心事候、抑輕服中神宮事傳奏事、於先例者雖分明候、可異餘社之由示給之間、存其旨候了、請印奏狀并役夫工米方之外、於總事者猶可申沙汰候、委細之旨承悅候、期而候也、恐恐謹言、

後十月十日

俊任

〔甚景卿記〕延寶八年十一月五日、今日春日祭也、雖諒開年被行之先例也、上卿今出川中納言伊季卿辨俊方諸司以下參向如例、上卿伊季卿、禁裏賜素服人也、雖然隨神事事、勅語格別故歟、舊例度々有之、去々年春日祭、葉室大納言、雖本所素服猶勤之中右記、宗忠公雅實公等雖本所素服人、神事上卿勤仕之例有之、如此之例故勅問一同分明也云々、

〔實久卿記〕天保十四年二月廿六日己亥、今度西天替星頗有白氣、依之過日兩陰陽道勘文進上、今日伊勢、石清水、賀茂下上社延曆寺、園城寺、東寺等、御祈被仰出予奉之、富壽卿仰御祈奉行藏人辨了、亦陰陽頭雖重服中、以略式三萬六千神祭允以下勤修之事、同予奉之、仰晴雄朝臣各從來廿八日被祈了、

〔水左記〕承曆五年

元水保

六月卅日、今日祓事、依輕服間可行否之由遣問有行道言等許之處、各答云、

何憚候哉、仍如例修之了、故殿

源房

延久六年六月晦日、依服間不被修祓之、由所被注也、是依道平朝

臣申云々、然而今日依陰陽師等申予

源房修之、

〔殿曆〕永久二年六月三十日癸酉余

忠實

今夜無祓事、是依服也、三年六月廿九日丁卯、依物忌不

出行余服日數內也、仍今日祓事尋之處、故殿

通師

除服之後、雖日數內皆有此祓、仍余內府行之、

何事有之乎、但古與今有差之條、遮而可申出之由存之處、被示之趣符合之此條、亦難計申者、亞相云、兩輩返答大樣不審、且祠官之例、不爲例之由相存了、承之趣符合、又文永例分明先散蒙了、但古今之間、可有差之條、深恐怖、且俊任爲役夫工行事辨之時、家中如關諍相續、朝夕有懸意事等、近年傳奏以後、亦恐怖多端、可申沙汰之由、被仰下之時、固辭之處、依何事申子細哉之由、及御沙汰了、於神事者、無殊儀之由、萬里小路前入道內府、并勘解由小路一位入道等、雖令申之、請印文書以下、午令隨身、不口神事之條、背物宜之旨存之、依懸意存合事等、在之周章、但近日無可申入之題目、別令出來者、先可申入事子細云々、次平野社造營申沙汰事、於遷宮儀者、嚴重不可被混神料、但於神服御裝束者、已被充下料足之間、無可有沙汰之篇、所殘之殿舍造營事許也、然者被沙汰懸事也、何事有之哉、貞和度中御門故大納言宣明稱子時前宰相爲重服吉田社事傳奏、但如造營非殊神事、縱令如神領土民等違背社命等事、書出勅裁許也、日來令沙汰之上、重事出來者可被仰他卿、至神領以下事者、爲服身內々傳奏不可有相違歟之由、祖父依計申入可有申沙汰之由、被仰了者、亞相云、條々擊蒙、所令咸悅也、閏十月十日甲申、早旦予獻一封於坊城前亞相云、

其後不言上、何等御事令見給候哉、伺機嫌可參申入候、抑輕服人、神宮傳奏例事、文永蹤跡、先日粗申入候、猶引勘之處、於請印文書者、他人傳奏之由、註置候、一紙進覽候、於今者御日數不幾候歟、然而先日蒙仰、又令啓上之間、管見之分注進仕候、每事可差上候、兼敦恐惶謹言、

後十月十日

兼敦上

坊城殿

文永二年三月三日、前藤宰相顯雅卿被示云、役夫工間事傳奏也、而妹尼他界、輕服假內可有憚哉者、

返答云、假日數中可有其憚者、

卿雖朝服內依宜旨輕服參行之、今間所見如斯候、此外稱輕服仁、奉行神宮宜旨并神事例、不可勝計候、且可被得此意給候哉、仍言上如件、

七月廿五日 酉刻

左大史小槻兼治

〔吉田家日次記〕應永十年十月五日己酉、昨日坊城前亞相後任一封到來、輕服中神社日所作、可爲何

樣哉者、答云、可有憚、但於宮寺者、八幡町、北野町假以後於社猶不可憚、況於祈念哉者、六日庚戌、今日向坊

城前亞相爲弔悲歎事也、彼宿所不穢之由傳聞了、其上卅ヶ日限三日歟、仍入門內、招出青侍於庭上

示入之處、於喪家者他所也、神宮文書等、在之、仍不事切以前出他所了、不苦者可令謁云々、仍予堂上

着公卿座、則出對、此事雖驚承參宮之時分不及令申、上洛以後亦例幣齋相續之由謝申也、老體前後

相違之愁歎、可察之由被示之、催哀慟了、被示云、神宮傳奏事、假以後可爲何樣哉之旨、相尋祭主清世

卿并通直朝臣等之處、不可有子細之由示之、且戴狀云々、則起座被取出兩通、予一見之、各廿日以後

不可有子細之由也、○中又被示云、神宮傳奏事は、清世卿通直朝臣以口狀示云、輕服之祠官、假以後

到外院參候、况於傳奏哉之由申之云々、予申云、凡於傳奏并奉行職事、祿人方者、堅忌穢惡不淨外無

殊神事之條先規也、但雖爲假以後、正輕服日數中、申沙汰之條可有豫儀歟、尤可被經沙汰哉、文永二

年被召二宮、福宜於仙洞、予時前藤宰相顯雅卿爲輕服、假以後傳奏、兼日有沙汰、雖輕服申次之由記

置之、先規分明、殊更福宜等參仕、可謂殊儀、雖然如仰近日傳奏者、預置請印文書、每事一身申沙汰、可

有謹慎事也、清世卿通直朝臣不注進先規、暗計申之條聊荒涼歟、且祠官之例、曾不足准據、所以如何、

神宮之法、福宜以下重喪之輩不觸穢氣、五旬以後候、外院十三ヶ月以後、從神事定例也、但近年之儀、

若不守株哉、其條ハ不存知、又於吉田社、正預者雖輕服日數中候、外院奉行神事先規也、然而祖父以

來猶加斟酌也、旁至祠官進退者、各別不足准的歟、凡如此事、或憚之、或不憚之、先規共以存之、神宮事

重事也、臨時之勅斷者、各別先能々可被尋先規歟、於愚存者、文永之例明白、雖邂逅非無舊蹤之上者、



勞事候之間、文書之開闔不叶候、正和度、故冷泉中納言和定爲南曹辨輕服中令供奉事不記置候、若遠忌日にて候けるやらん、遠忌日人供奉事、先々沙汰候き、曆應にか一品依遠忌日不被供奉候、輕服人事、暗不案得仕候、廣可有御尋候哉、兼恐恐謹言、

廿五日乙巳、今日爲藏人左少辨奉行、被下給旨云、亡妻死去九十日輕服中、奉行神宮事有先例哉云、

予請文云、不可叶之由委細申入畢、

後聞一條大副、同不可叶之由申畢、仍今日延引、

亡妻忌陰九十日之中、奉行神宮事可有憚哉、先規今間可被注進之由被仰下也、仍執達如件、

七月廿五日

左少辨仲光

冷泉權大副殿

亡妻輕服九十日中、大神宮遷宮神寶行事所始以下日時定上卿可有憚哉否、可注進之由被仰下旨謹奉了、輕服日數中可相憚候、參入神事所、猶以古今其憚候之故也、可得御意候、恐恐謹言、

七月廿五日

縫殿頭

廿七日丁未、今日予方々出行、次向大夫史兼治許對面、故匡遠宿禰量實他界之後未向之間參向了、副名並實同對面了、兼治云、重服中神宮行事官等入來可爲何樣哉、予答云、除蟠日旬日公事、日々白地出入不可有子細歟、兼治又云、此趣尋申一條大副殿之處、御返事之趣同體候云々、又云、輕服人奉行神宮事之條、被尋下候之間注進了、爲如何樣哉云々、予答云、昨日勅問候間、不可叶之由申切畢、因玆上卿違亂之間、延引之由傳奉了、請文可一見之由令申之間、即取出仍予書寫畢、

亡妻輕服九十日、奉行神宮事有先例哉否、可注進之由謹奉候了、即引勘候之處、正暦元年九月十一日例幣、大納言朝光卿除叔父服行之、長徳元年六月十六日、月次神今食、延引中納言藤原公季

右近大將源通相 父 襄内

一同人叙位例

正安元年四月十二日除目、被任祭供奉宣、

從四位上賀茂定口 父 襄内 地下

正中二年四月五日除目、被任祭供奉宣、

從二位藤原氏忠 父 襄内

十四日戊申、今日三條新大納言實音卿尋申云、其後何等事候哉、朝參之次、可被立寄給候哉、云何、面展大切候、抑祭御神事中、服假之輩、官位間有沙汰事、先々若先例被尋事候けるやうに聊不審事候、若先規候者、少々示賜候哉、今夜除目由奉候之間、可申一級之由存候、きこ不審候間、令申候、他事は後時、今狀如件、

四月十四日

判

四位大外記殿

被答曰、跪奉候了、指事不候候間、乍存驚高聽恐存候、以便宜可參入言上候、抑祭除目、重服人任官叙位例一通注進候、此外猶其例多候歟、師茂誠恐頓首謹言、

四月十四日

師茂

〔吉田家日次記〕貞治五年七月廿二日壬寅、右衛門督忠光被尋云、

神木歸座、輕服假已後供奉例若所見候者、可注給候、正和南曹辨頼貞卿輕服候、當日供奉事不定候、相尋外記候之處、所見不詳之由、申候、恐々謹言、

七月廿二日

忠光

謹奉了、神木歸座、輕服假日數以後人供奉事、只今不勘得候、委可引勘候之處、兼照一兩日、重舌所

長寬二年四月廿五日賀茂祭、近衛使右中將家延朝臣爲輕服、然而兼日被向、先例被誅法家重服、猶以別勅、除服從神事、何況輕服不可有其憚候歟、計候間勤仕候也、

輕服辨參向春日祭例事、今間引勘候處不詳候、但天永二年二月十一日春日行幸、內大臣、大納言雅俊、參議顯雅等卿、雖輕服供奉、大外記師遠輕服日數內、依仰參社頭、大治三年四月廿七日同行幸、參議宗輔輕服日數內也、永仁五年十一月八日平野祭、右中辨藤原爲行朝臣輕服也、然而參向之所見如此候歟、凡例幣月次、神今食、石清水放生會、賀茂祭、同臨時祭、諸社奉幣、以下神事、假服仁參役古今之例、連綿事候、不能注進候、可被得御意給哉、仍言上如件、

正月廿三日申刻

左大史小槻匡遠

〔師守記〕貞治二年二月四日甲辰、是日宣旨到來、今日祈年祭延引事也、上卿左大將實夏卿也、家君至、今日輕服也、仍今日祈年祭奉行兼日被辭申之間、師連奉行候而延引宣旨、就局務被宣下歟、伊勢事、輕服人奉行存例之間、於宣旨者奉行之任雖被成置宣旨、不及施行先例也、

〔師守記〕貞治三年四月十一日己巳

一祭除目重服人任官例

仁安元年四月六日除目、被任齋院司以下祭供奉官、

右兵衛督藤原成範 去正月喪母

元弘二年四月十五日除目、被任祭供奉官、

參議藤原資明 母喪內

康永四年四月十六日除目、被任祭供奉官、

大外記中原師茂 父喪內

文和三年四月十五日除目、被任祭供奉官、

臨時祭庭座、輕服之仁參仕、先例何樣候哉、可令注進給之由、自九條前殿下○道、內々被仰下候、恐惶謹言、

十一月十八日

頼爲

大炊頭殿

十八日御教書今日到來、相似請文懈怠候、恐存候、

臨時祭庭座、輕服人參仕例、粗引勘候之處、正治元年正月十四日、石清水臨時祭也、別當頭預權大夫奏宜命、左大將殿猪、雖令參依御服假別當行宜命事、是先例也、殿下令參御所給、公卿着壁下座、左大將殿以下着之給、次二獻、左大將令着垣下座、居衝重插頭花之時、大將起座令退出給依服假、不令取插頭花給之故云々、建治三年三月廿九日、石清水臨時祭也、重土器役四位殿上人闕如之間、俄右中將藤公宗朝由雖爲輕服、庭座不可有憚之由、有時議參勤云々、近則元弘元年十二月廿六日、賀茂臨時祭也、庭座公卿內參議宗經朝臣宮內參仕、件卿雖爲輕服之人、依時議參入歟云々、所見只今如此候、凡臨時祭事、外記方不知行候之間、定遺漏事候歟、恐存候、可令得其意給候哉、恐惶謹言、

十一月廿一日

師守奉

〔國太曆〕延文五年正月廿六日、輕服辨參向春日祭例、雖引勘候、所見只今不詳候、但文永四年二月九日大原野祭、上卿中納言藤原公藤卿參行、于時爲輕服歟、昨日伯父實村卿薨、此外文和三年八月十五日放生會、右辨忠光參向于時、輕服所見如此、可被因准哉否、宜依時議候、可被得其意給候哉、仍言上如件、

正月廿六日

大外記師茂

文永大原野祭例、師茂注進、而實村薨去、不聞參行之儀、聞此事、無力事歟之旨、圓明寺關白記有所見之由、一條前關白被仰之由、兼豐宿禰來語了、



用者今夜六位供奉云二位中將爲供奉

〔圓太曆〕康永四年

貞和元年

十月十一日未刻參院

中略參評定所

註先賀茂社造營事可有沙汰云々

而前相國并予

公藤原

輕服也仍可爲退座之處當參人只四人也二人議奏可爲難儀之由有沙汰仍

予申云恒例退座勿論也但依別勅輕服人隨神事有例歟然者若以別勅猶可被議奏歟可在時宜之

由申入了尤可然不可退座可議奏之旨有勅定相國于即賀茂社事有沙汰

中略

輕服人依別勅從神事之條存例之由覺悟之間申入候而一定何年何事之由不分明仍追引勸之處

從神事之上議奏有其例仍續左是又注進仙洞畢

輕服人參神事議奏例

康和五年四月六日陣定

伊勢公卿新平殿奉幣事

并中納言俊實卿參仕

依姑服被下除服宜旨參仕

壽永二年八月十四日於院評定

神說何屋不御事

權中納言長方雖姑母服候其座

建久三年八月十四日陣定

宇佐關新守金堂燒失其八幡宮修理并齋院廢用途事

參議兼忠朝臣雖輕服參入

輕服人從神事例

正曆元年九月十一日例幣也大納言藤原朝光卿雖輕服依宜旨行事

長德元年六月十六日月次神今食也中納言藤原卿

仁義公

依宜旨假內被行件祭事

長元二年七月十五日權中納言道方卿鹿島使官符請印事

子服時

嘉承二年四月十四日齋院御禊次第司右馬允藤原友宗雖假內勤仕之

天仁二年四月十四日齋院御禊也參議源顯雅卿雖爲輕服勤仕御前

天永二年二月十一日春日行幸也內大臣權大納言雅俊卿參議顯雅卿雖輕服內各供奉

〔師守記〕康永四年

貞和元年

十一月廿一日辛丑今日自九條殿藏人民部權大輔賴爲奉書尋申仍注

左

例者、輕服人參入可、無何妨、大嘗會并齋王向伊勢月、同一月齋之故也、即作勘文奉藏人了、

〔日本紀略村上〕天曆三年九月十九日己未、齋宮寮召名給二省并寮頭位紀請印兵部丞源長、遣姨妻而齋王參內從役、

〔日本紀略十一條〕長德元年六月十六日辛卯、月次祭神今食、中納言公季勤之、雖爲觸喪不被許仍行之、

〔玉海〕嘉應二年十月八日甲寅、今朝外記祐職來申云、除服可出仕由一昨日被宣下、而依日次不宜、今

日可申事由之旨、類業真人所申也者、職事光能申依之答、今可出仕之由了、兼燭着束帶參內吉書事

了兼光於途中攝政基房被送書札云、明日伊勢幣、今日參內如何、可依先例云々、相尋類業之許之處、

申云、輕服人除服之後、當日尙不憚、何況於前後之齋哉、更以不可憚、先例不可勝計者、仍參內、

〔玉海〕安元三年元○油承二月廿二日壬辰、晚頭參內略○中先是關白基房被候、數刻言談略○中余又問

申云、於女房若小兒者、參詣神社不可憚、歟如何、被答云、勿論事也、其身不着亮闇又以有何憚哉云々、

廿五日乙未、此日姬君五歲始參春日御社略○中今日不入神吉、仍明曉可參社也、須明日可出京而

明後日京洛當太白方爲避、被今日出京明日參社也、去年各檢先例不避之、然而彼者宿願有限、又無

殘日事、無止之故、強所尋先例也是、不可爲常途之例、仍今度所避之也、抑諒聞中公家雖有奉幣、臣下

不奉幣、又不參神社是例也、但古例不必然、九條殿不憚行給、然而近代例如此、是其身着諒闇服之故

也、於女人者敢不可憚、因之所參入也、加之有可忿參之夢想之故也、女房同相具所參也、

〔玉海〕文治四年六月十三日丁丑、棟範又申云、五位藏人近衛次將必可供奉內侍所、而於次將者、雖辭

被責出了、五位藏人定經宗隆共稱病定經病病昨自院雖被譴責、敢不引身、棟範爲輕服日數之中間、

例於外記之處、服假之人供奉之例、所見不詳、輕服之人奉行神事之例、粗有之、但五位故障之時、六位

供奉其例不可勝計、天永以來、數度所勘申也者、即刺建賴予○藤原仰云、神社行幸、觸穢服假之人供

奉、其例多存、又神事奉行何不難哉、但正供奉神事之例已不詳、至于六位供奉者、指而勘其例、最足據

就東宮御方賀茂祭御神事御輕服可爲何樣哉事本生所養用捨彼是沙汰不同歟隨而承保二年四月廿四日賀茂祭中宮賀子○雖外祖父中納言隆俊卿三月十四日服內被立使御神事勿論歟是就所之例也用本生將又長寬元年四月廿五日賀茂祭右近中將藤原家通朝臣伴朝臣者中納言忠基卿養不守季通重通卿卒去伯父服內殊義結沙汰了勸使是守本生不用雖后位凡人異事此祭先規兩樣如此所詮爲時宜被計行不可有子細哉而尋常之時者被用所養之禮條神事有本生之斟酌之條者無左右難計申皇憲與神道所被定用不可有私之故也愚意所存大概如斯矣重喪人五旬已後百ヶ日以前參入禁裏仙洞例引勸候之處彼例只今不詳候但參議藤原時平寬平三年三月九日着座今案去正月十三日遭父喪加之九條大相國被任右大將事重服中也即被申慶賀云々今案承保二年九月廿五日服解十二月十五日兼右大將同十九日被慶賀雖重服人依先例云々得此御意內々可令披露給候恐恐謹言

三月十三日

師言

四月廿一日庚子東宮今日先有御除服事其後吉田祭有御禊

〔孝亮宿禰記〕慶長十四年二月十六日戊辰依召參關白殿○九條榮春日祭無之事有御尋大膳職依母

喪調進方難調出之故被付社家之由申之

〔北山抄五〕大嘗會御禊事

天慶九年右衛門督高明卿雖輕服任次第司長官仁和例也仁和四年十月十六日右大臣多實王卿多有服製而依宣旨供奉廿五日御禊

〔本朝世紀〕天慶元年九月一日乙巳中納言藤原實賴卿參議源是茂朝臣聽政有申文今日藏人右少辨源朝臣相職仰大外記三統公忠云今月依齋王可向伊勢已爲齋月若始此齋月輕服者出入宮中例在先年哉云々公忠申云去仁和四年十月十七日右大臣源多卿薨依彼喪請廿日假親王公卿諸大夫依召皆參入即奉仕十月大嘗會御禊十一月齋中被輕服諸卿皆參入聽政在左近陣座若准此

三月十口日

神祇權大副兼員 謹文

春宮御方賀茂祭幣使事御前齋相當御輕服滿限日可爲何樣哉由被仰下之旨謹承了此條神祇式云祈年賀茂月次神嘗新嘗等祭前後齋日僧尼及重服奪情從公之輩不得參入內裏雖輕服人致齋前散齋齋日不得參入義解云稱齋者皆散齋也唯於一日齋更無散齋其致齋者皆有散齋限內云々就此等文廻短慮之商量件祭爲御日限外之上者自御散齋日僧尼重輕服月水之人被停止參入御用火口當日朝若前夜有御沐浴可被發遣候歟之由存候重服者正忌日以後尙經其月候之上又閏月不計入於輕服者加閏月有限之日數候之故也重案准據之傍例延喜五年九月十一日例幣也御前齋雖爲傍親源連子錫紵限被行之但不御八省於南殿有御拜同十九年九月十一日例幣內裏穢雖及前齋之日行幸八省元應二年十一月十六日新嘗祭前齋十五日依當談天門院○後字多后一藤原忠子周御忌日可被停止否事諸道勘奏同年九月廿八日被行仗議依不當祭日被遂行彼祭候畢三度之例其中祀也其前齋也今度之御不審賀茂祭即中祀即御前齋之豫議也加之坊中有穢之時若者御不例之時尙以使宮主向河原被發遣之例繁多存之彼是宜被准據候歟次天下擾亂之時或被授諸神位階或於諸社被施種々聖德者天慶以後之流例也賀茂祭國家重事幸相續穢限以後也默而難止候歟雖然被停止例若可爲至要候者延喜十五年十一月廿三日新嘗祭事去十日大納言源明卿召大外記眞明仰云去月廿二日穢滿三十ヶ日雖爲穢外相當致齋之前齋也可停止件祭之由召仰諸司新穀御飯來月十一日神今食可供之由可仰大炊寮云々兩樣可在時宜候次御輕服事付實之義不可依此以神事可有御着服之由法家申入候之趣兼員所存無相違候若然者今月中先急可有御除服御祓候歟可得此等御意候之由可令申入給候恐恐謹言

三月十二日

神祇權大副卜部兼豐 謹文

此事愚意所存可注進旨被仰下之間後日四月注進了、檀紙折紙



東宮御輕服間、東宮鎮魂如例、天慶七十廿四

中宮御輕服間、中宮御鎮魂祭如例、承平六十十七

〔日本紀略四上〕應和二年十一月十日甲子、中宮○村上后輕服之間、鎮魂祭例被勘之、依先例、可行之由被仰了。

〔明月記〕元久二年四月卅日、今年私神祭、雖重服修之云々、陰陽師說不憚云々、

〔國太曆〕觀應二年三月十三日

春宮○直仁、花御輕服間事

右被仰下僭、御輕服日限四月十七日也、賀茂祭者十八日也、春宮使御神事可有憚哉、又御輕服之儀可限、御神事哉云々、謹檢喪葬令云、三后及皇太子不得絕傍并神祇令云、散齋一月、致齋三日、又條云、致齋前後兼爲散齋、說者云、散齋者荒忌、致齋者真忌、神祇式云、祈年月次神舊新嘗賀茂等祭爲中祀、又條云三日齋爲中祀者、

如斯等之文者、三后皇太子不絕傍并、仍可有本服之由、說者之文又以分明也、御憚服日限三日、齋中所謂散齋者荒忌、致齋者真忌也、仍致齋前後猶以可爲散齋、何況致齋之內一日、爲御輕服日限之上者、被行賀茂祭神事之條、尤可有其憚哉、且雖非御神事、可有御輕服之儀歟、仍言上如件、

大判事坂上大宿禰明成

前豐前守坂上大宿禰明清

春宮御輕服可有哉否事、法家注進無相違、候歟、賀茂祭所載式文、中祀三々日齋候、且禁中之儀、朔日以後、僧尼重輕服人不可參內云々、御輕服日數、御致齋中候、難被立使候哉、治承元年十一月十日、后宮七々日御輕服出來、同十七日大原野祭使、雖爲御日數以後、依爲御輕服以前不被立之由記置候、可被准據候歟、以此旨可有御披露候恐謹言、

重服者准彼神人歟、但六條八幡宮同廊ノ棟ヲ限テ、外方マデハ社參無子細、内方ヘハ一回以後可參條、不限神人繩素此儀也、當寺ハ曾無差異、七十五日以後拜殿出仕也、此條若以寺役爲本故歟、尙以非無不賽、但可任寺例歟、

〔季連宿禰記〕元祿四年二月十日丙寅、大藏省申云、大藏省弘之依、祖母之服假出來、仍春日祭不參向、調進物等以名代相勤、是依度々例如此之由申之、

〔兼胤卿記〕寶曆二年六月廿五日、依招兩人詣攝政殿、

道香 一條

御亭謁申、命云、藤波二位○和伯父景英、

病氣大切及事候ヘバ、藤波并大宮司父子着服候間、例幣中臣使可勤人體無之、先年景忠卿輕服之時、例幣御延引之例も有之間、御延引有るべき歟、息男季忠非神祇官、中臣使難勤父存在之間、祭主神祇大副讓候例無之、由二位訴申ニ付、如何可有御計哉、兩人可述所存之由也、藤波父子、大宮司父子、各服者云々者、任先例御延引も可有之歟、季忠無服忌之間、推任御延引も可有如何候哉、父卿神祇大副暫辭退歟、兼雄卿神祇權大副暫辭退、季忠江拜任被仰付、例幣使相勤候後辭退、又元江被返任候儀可然歟、尙可在御計之由申入攝政殿許諾給、

〔玉手纏六〕家の神棚は、

○中略

其身其家既に穢る、時は神棚にも穢の及ばむ事、こは何とも止べからざる事なり、然れば予○平田が家にては、父母の喪なれば五十日、祖父母の喪には三十日の遠慮として、假の日數のみ神拜を止めて、忌明には身滌祓をなして、其より拜禮する事なり、

〔竈神祭考〕忌服と汚穢とは差別ある事の論

服中家内の神は拜み奉るべし、神社に參詣する事はならずなど、こざかしくいひしろふあり、これいたく誤り也、家内の神棚の神も、外々の神も、神は同じ、家内の神をば拜み、神社に參詣する事はならずといふ理あらんや、ともに忌憚り奉るべきことにこそ、

〔江家次第〕鎮魂祭

之例承久二年正月、中宮御輕服、禁裏伊勢御神事中、御同宿事有勅問、御別殿不可有憚、又女房往復御神事御所、不可有子細、但同火于供御之人可奉憚云々、寛元二年春宮御方御神事之間、中宮依御輕服可有御坐他殿、御方於女房按察局者、依輕服被退出、建長二年二月、皇后宮御輕服、內裏御神事中、被用御別殿之由、有其沙汰、但今度御別殿事、尙可爲難義候者、被用棟各別之御所、不可有巨難候、歟伊勢公卿勅使并役夫工、初齋宮已下上卿辨、以棟別之屋被構齋屋之例繁多候也、就此等之例、破左右、且又廣可破經御沙汰候說、以此旨可有洩御披露候恐々謹言、

六月十五日

散位卜部兼豐 請文

〔師守記〕貞治元年十二月十五日丙戌、今日輕服人御神事中參記錄所例、若所見候者可注賜候由、被示口大夫史量實之處、載返狀少々注申候、元享二年八月廿四日、口口口沙汰亡祖宿禰輕服參仕、今日雖爲御神事日、伺中入之處、非口口御神事之上、記錄所者如地下也、不可在憚之由、被仰之間祇候之同年十一月十一日議定、前左府實泰公輕服雖爲御神事中、被參仕、除服事昨日被宣下、嘉祥三年十一月七日議定、大判事章房輕服假中雖爲御神事中參仕之、除服事於當座被宣下候、清外史賴元奉之、此外今間不勘得云々、今日召次有末、持來記錄所廻文、明日庭中式日之上、可有沙汰事云々、家君輕服之間、御神事中難參仕之由、被載散狀、伺散狀同封也、

〔花營三代記〕上應安六年十二月廿七日、山門神輿造替沙汰、被執行之、總奉行入高秀親父道譽、去八月廿五日他界之間、依爲重服延引、然而依被下高秀除服之宜旨被始行之、

〔滿濟准后日記〕永享三年正月十六日、八幡神事無爲云々、樂人中二服者一人、百ヶ日内隨其役了、先規無之、希代事云々、百日以後限廻廊棟外方隨役事ハ先規勿論也、百日内曾無先例云々、九月十五日、一重服者七十五日以後拜殿出仕無子細於高座役者、五ヶ月以後云々、重服者七十五日以後、社參無子細條、法例在之歟、六條八幡宮於神人者、七十五日以後社參不憚之、自餘百日以後也、當寺

彼御方成服其後朝有御行水被行御拜事不有憚雖齋月御同宿長承四年六月神今食建保六年十一月新嘗會齋中猶不被憚云々文永六年八月五日仰云皇后宮御輕服中大神寶御神事御同宿如何依保安二年例御同宿不可有憚之由申上之同十八日宇佐使召仰廿三日大神寶發遣宇佐使御殿等也春宮御口御同宿事以此等之例可被准據歟之由内々得御意可有御披露候恐々謹言

六月廿日

兼員

宮内權大輔殿

徽安門院御方御重服事春宮御方御神事可爲何樣哉云先例云所存可注進由被仰下旨謹奉候畢此條神祇式曰月次新嘗會前後散齋之日重服奪情從公之輩不得參入内裏雖輕服人致齋之日不得參入自餘皆同此例云々據考此文御神事御散齋之間女院御方可被止御同座御同火候謹案先規鳥羽天皇保安二年八月廿九日被立公卿勅使于時中宮雖御重服御坐中宮於妻后者待賢門院云々は天喜元年六月後冷泉院二條院爲后宮不出御之例歟寬元二年八月廿九日西園寺入道太政大臣家有御事中宮猶御坐内裏事重々有其沙汰之處中古以往大内之時御退出諸司歟近代雖齋月有御同宿之例長承四年六月神今食之間猶御于禁中建保六年十一月新嘗祭齋中不被憚之故也云々文永十年閏五月卅日春宮後字多院歟行啓二條准后御所是内裏御神事之間出御同六月十五日還御内裏弘長三年三月皇后宮御輕服禁裏御同宿事重々有其沙汰先例不同或御退出或無御退出爰寬元二年大宮院中御時無御退出被用此例云々先朝御代中宮御重服之時御齋月之前每度有行啓達知門院御所被止御同宿畢古今之例不同候所詮今度之儀仙洞御同所之上者春宮御方御神事之時被用御別殿又女院御方被停止御同座并御同火候之條可相協時宜候歟此條宣光門院御方可爲御同篇其一年之御服候之故也重考御別殿



賴卿雖服日數內參入依先例也

承安四年四月卅日左大臣

輕服日數內也而依先例該下除服宜參內

權大納言藤原卿實定服日數內權大納言隆季卿藤原

卿實房伏

已下着伏座被定申伊勢大神宮司公俊豐受宮宮尼修造遲息事并依豐受大神宮正殿實

子狂人昇居可造替哉事并右少將泰通朝臣豐受大神宮宜慶章等相論越前國泉北御厨事等

九日乘燭後大外記良季持來除服出仕宜旨入宮蓋以家司

正二位行中納言藤原朝臣伊賴

宜奉勅宜令除服從事者

文永十年三月九日

大外記兼豐前守清原真人良季奉

留宣旨旨返給宮蓋其次祭主定世朝臣罪名兩博士勘文下給之以六位外記可遣頭中將許之由仰了依輕服辭申此仗議奉行之故也

〔師守記〕曆應三年三月廿五日戊寅今日石清水臨時祭試樂并御神樂云々臨時祭舞人輕服人勤仕

例雖引勘候所見不詳候且弘安六年三月十五日石清水臨時祭也使左近中將藤原資行朝臣勤仕

之輕服人勤仕例兼雖有沙汰依無先例被改任了德治二年三月卅日同臨時祭使左近中將藤原實

秀俄輕服事出來之間延引之由所見候可令得此御意給候歟師守謹言

三月廿五日

師守上

柳原殿政所

〔圓太曆〕貞和五年六月十三日

徽安門院

○光嚴后子內親王

御重服春宮御神事中御同宿何樣可有沙汰哉事雖御神事中別殿御坐不

可有其仰候歟先例間相存候所謂保安二年八月廿九日被發遣伊勢公卿勅使之時中宮雖御重

服御坐別殿云々寬元二年八月中宮御輕服事出來九月十七日御問云中宮御輕服日數之間於

例也、口仁建久依假内被憚之、二條前關白相國禪門可被憚之由被申、一條前攝政天仁有沙汰被憚之所詮可在、敬慮之由被申之、德大寺相國不可被憚之由被申之、女御代者不可憚之由被定仰下云云、

〔吾妻鏡<sup>五十</sup>〕文應二年六月廿七日丁巳、新相模三郎時村辭放生會隨兵是去廿三日、兄阿闍梨入滅

輕服故也、依之小侍所司平岡左衛門尉實俊、相觸和泉前司行方間有沙汰、兄弟輕服日數爲五十日、八月十五日者、猶日數内也、可有憚否、可尋間宮寺者、行方相尋先規於鶴岡別當僧正隆辨之處、於隨兵者、候廟庭外之間、先例不憚之由報申、仍無殊寄、

〔假服事〕文永十年三月六日、予輕服之間、祭主罪名仗議、今日中被行之者、可有猶豫歟、仍付頭中將申了、有勅許仍可返上文書也、在例不書之間、相事大外紀其集之處、神宮仗議、良季所勘申兩事例如此、輕服人參陣有例於奉行不所見不詳、○中略

略○中禮紙云、

追言上

輕服人奉行神宮仗議例未勘得候、同人參仗議例、謹注進候、正曆元年九月十一日例幣、大納言親光卿、除人道前太政大臣服、參八省行事、長德元年六月十六日、月次神今食也、中納言藤原卿、依錫裏雖請三ヶ日假、依宣旨參行云々、可被准據候歟、得此御意、可令申入給候、良季恐惶謹言、

輕服人參伊勢仗議例

康和五年四月六日、内大臣已下着仗座、被定申神祇權大副輔弘大神宮前禰宜宣綱等罪科勘文、依伊勢離宮院放火并所々落書事也、中納言俊實卿、依姑服雖獻廿日假文、昨日被下除服宣旨所被參入也、

保延二年七月五日、右大臣以下着仗座、被定申伊勢大神宮禰宜等訴申卅餘ヶ條事、權大納言師

尋中關白○藤原基房之處報狀如此。

除服以前不候山祓候事也。除服以後雖日數內可被修候也。神事之條如常可候也。尤可被忌服者歟。謹言。

在判

或人云。同服之人不忌云。依問申之處被答旨如此。依忌之今日雖非祭當日。恒例發遣幣帛之日也。仍神事也。但行山祓之時。明日給云也。然而又今日尙神事也。十一月一日丙申。此日春日祭也。依爲除服以前不修由祓然而於神事者如常也。

〔百練抄十四條〕嘉禎元年十一月廿日己卯。今夜大嘗會也。○中攝政道基依輕服事不被參入於昭訓門廊代輕被行之長元例也。但有別勅被參廻立殿云々。

〔岡屋關白記〕建長三年八月廿八日丙辰。今日祈年穀奉幣也。右大臣○藤原忠家參行之先定申日時。使右少辨宗雅持參日時假定文。不被見依爲輕服日數中也。宗雅云。右相被示云。宣命內覽如何。余○藤原兼經

答云。先例雖持參之輕服之時不被見往還。有復不可持參。亦執柄雖輕服諸祭當日猶參內。如御禊候之間候直廡事了參上有例。廿九日丁巳。參院內今日太上皇○嵯峨仰云。○中四條大納言雖爲輕服。御神事中參內執柄之外敢無此事。驚耳目。彼卿自稱云。依後鳥羽院仰無傍親服云々。天子猶有錫紵儀。況於凡人乎。言語道斷事也。不可參之由令仰了者。余申之。兩條誠驚承者。

〔吉黃記〕建長八年四月廿四日。今日賀茂祭也。依爲奉行已刻參內。○中頃之殿下○藤原兼平御參御輕服之間也。然而臨時祭庭座輕服之人參仕。准彼例御參之由被仰下之。

〔吉黃記〕文應元年九月十八日癸未。參院大嘗會御禊節下內府○藤原基平申領狀之由經業申之。大將代又可爲誰人哉之由奏聞之。仰云。節下聞食了。大將代可爲催通賴卿。又冷泉中納言富小路三位中將等。雖輕服路次供奉何事有哉之由可仰。○中左右府共輕服一日。大納言三位○入道息女死去云々。仍節下并女御代○右府女輕服之間可憚哉否。被問人々云々。長元女御代不被憚之。節下又長元承保之。

以可被改也。強尋用服假供奉例不穩便。歟事不可闕者。猶假內之人。不供奉可宜。歟天下大神事。不可過斯之故也。殿下仰人々供奉有例者何事之有哉。但至節下次第司長官者。猶可被改歟。服假同事。歟將又有輕重歟。被問明法博士二人。資清申云。假重服輕。信貞申云。大略同事也。但假輕歟。件二人召儲也。于申云。服之中假猶重之故也。至假者全不出仕。信貞申旨。甚無其理者。人々申旨。令藏人辨顯隆奏院已及夜陰歸來申云。以此旨被問帥卿匡房也。大略同人々被申旨也。院仰云。仁和例已爲往古事。頗不叶。今世作法。假內人々供奉御親條。不甘心思食也。是非遊興臨幸第一之神事也。藤中納言申旨。尤可然也。強尋上古希代例。不可用歟。明法博士信貞申旨。服重假輕之條。甚以奇恠也。服是輕事也。且至節下者。大納言吉例多。民部卿可動仕。次第司長官止。左衛門督可用。右衛門督宗通卿也。主基國司密々可被仰也。大略國替儀歟。至行事辨。左中辨長忠。右中辨顯隆間。可動仕服假之人々。皆不可供奉。行幸之日。人數少條。不可有難。猶服假人々其數供奉頗所憚思食也者。藤中納言申旨。已叶御案也者。又左兵衛督代家定朝臣服假之替。可催明賢朝臣也。又右兵衛督代家保朝臣。申難治由。不可被免。愷可責催者。其後各々分散。下官量申之條。已叶天意也。

〔殿曆〕永久三年六月十五日癸丑。今日不出行。今日祇園奉幣。不立由祓也。但如例於彼社頭修大散供。是服日數內。不可有憚由彼御社僧申故也。昔重服人參彼社云々。近來不參歟。

〔台記〕久安三年四月一日甲午。去月廿八日夜。新院女房備中死。是余○藤原之媛也。自有十日假一月服依恥之出仕之先々外戚之喪如此。然而自今日禁中散齋○雖非禮近代之例。除服以前有忌。故不參內勘。故京極殿御記。

是定後以吉日行公事之由不見。因之今度不擇日。京極殿治曆元年十二月廿三日爲是。定見二條關白記不見。京極殿御記。

〔玉海〕嘉應二年十一月廿日丙申。不出行。此日日吉祭也。尙依爲服日數之內。雖除服不奉幣。又無由祓事。但神事如恒。不念誦。

〔玉海〕治承元年十月廿九日乙未。今日神事也。服假之後除服。依不行。由祓然而神齋如例。此事依不定。



也、而何樣可被行哉、大略可議定申者、凡此外一家人々、公卿殿上人有其數如何、先被問、大外記師遠之處、大略勘申云、

服假中供奉大嘗會御禊例

仁和四年右大臣源多十月十七日薨

其年大嘗會御禊、一家人々雖假中、有指仰皆以供奉、

服日數中供奉御禊例

長元九年九月六日中宮威子○後一崩

其年御禊、御堂○威子交藤原道長子族皆供奉、

內大臣二條殿藤原教通勤仕節下、

承保元年十月三日上東門院○一條后藤原彰子崩、給其月卅日御禊、一家人々依仰除服供奉也、

又次第司裝束司長官并行事辨、依服假多被改替也、

悠紀主基國司服假之例全不見、但忽卒去之時、早被成其替也者、

依件例何樣可被量行哉、民部卿、宰相中將、左大辨、被申云、依仁和例、服假之人供奉御禊、何事之有哉、

就中長元九年、承保元年、又以如此也、節下大臣次第司長官不可被改、是齋院御禊穢氣之人供奉常

例也可、准據、歟、至丹波國司者、被相轉他國、可宜歟、空不可解官之故也、行事辨又可被改替也、但縱雖

上臈辨主基行事、於今者何事之有哉、下官宗忠藤原申云、服假之人々供奉御禊之條、頗不隱便、先仁和

之例雖有舊跡、往古如此之事、強不避忌、近代其忌頗重、延喜天曆以後例、近來被用也、長元承保之例

非假之中、是服日數之內也、假重服輕、何不可爲例、猶節下大臣次第司長官被改、可宜歟、就中大納言

爲節下大臣代官、其例甚多、元慶元年大納言源多寬平九年大納言時平承平二年大納言仲平天祿元年大納言明以上皆

納言、如此吉例甚多、左內府假中也、被用大納言可宜歟、主基國司相轉之條、同入々被申、行事辨又

也七歲以前雖無服其父三ケ日不隨神事云々神祇式文也

〔日本紀略<sup>三</sup>村上〕天曆二年七月五日壬子今日可立住吉海神祭使重輕服喪<sup>三</sup>人等不可參內召仰諸

陣

〔小右記〕長元五年八月廿日己未今日可定申出雲<sup>○</sup>社事依不輕修誦誦於三ケ寺<sup>○</sup>今日定

申事最可令議<sup>○</sup>中納言兼隆重服人也大納言齊信卿云今日定神事重服人無便僉議乎兼隆云

口關白<sup>○</sup>藤原賴通令申案內命云可無事忌歟然而今有斯難仍退出後聞左宰相中將顯基輕服聞此事

在關白宿所不預僉議云々

〔範圍記〕長元九年九月十一日依召參右府<sup>宿衣</sup>○藤原實實被仰大嘗會御稷間雜事今年雖指合宮御事<sup>此</sup>

月六日後一條專不可有其妨天慶九年九月故殿御記云右衛門督<sup>高明</sup>有服親之假供奉御禊如何

被尋先例之處仁和四年右大臣多卿十月十七日薨上達部已下多在三等之親然而有宣旨同廿八

日御禊就吉所供奉也者尋被例所行歟當時議雖有三ヶ月內已爲御假日數之外先口問存可無憚

供奉歟就中輕服皆有等差隨宣旨或減日數已承前例也廿六日參殿次參內次參府許被申云官

人等多有故障無散用大夫尉季任朝臣奉仕左佐代藏人尉可供奉藏人方基親宮御服惟方祖父服

者殿下<sup>○</sup>藤原賴通仰云輕服人々多就吉其中件服漸少其殘必雖不滿月數早除棄有何事乎十一月

十三日依召參內仰云大嘗會神座<sup>方角</sup>值無所見詣右府<sup>○</sup>藤原實資可經案內者被申返事云除服事尤

可有疑慮神事之中大嘗會已不可推他就中立七ヶ條起請置忌詞誠雖無除服之文尙可有其憚但

令隨先例給

〔中右記〕天仁元年十月十一日辰刻許參殿下<sup>○</sup>中御門東洞院藤原忠實民部卿左宰相中將<sup>○</sup>左大辨<sup>○</sup>重被參會

源大納言治部卿藤原相繼有召有降不參被仰云院<sup>○</sup>白河仰云依土御門尼上入滅事左大臣<sup>○</sup>源俊房內大臣<sup>○</sup>源雅實御禊

前次第司長官左衛門督雅俊卿主基國司丹波守季房朝臣同行事左少辨雅兼等已三月服廿日假

〔玉海〕承安二年閏十二月十二日丙子明法博士範貞來依昨日召也尋問事等○中

一輕服人除服之後日數之內可從神事哉否先日被尋問之時尙可有憚由令申而允亮勸文云除凶服之

後可無妨神事者隨又先例不被相憚例太多如何申云先儒之說雖非乖申之儀尙日數之內不可

憚之由更以不存知之仍神事之間尙尤可被忌避之者

〔玉海〕承安五年六月十三日壬戌今日明法博士中原基廣參來依召各相尋事等○中

一輕服人除服之後可憚神事哉否事問式文曰祈年月次神嘗新嘗等祭前後散齋之日僧尼及重服

奪情從公之輩不得參入內裏雖輕服人致齋并散齋之日不得參入者如文者輕服之人非除服後

齋不憚之以之思之除其服之後雖日數之內何妨神事哉如何謂前齋及致齋也

申云日數之內除服之條非法令之所指是臨時之權議也雖然日數之內除服之條其行來尙突然

者除服之輩可憚神事否宜在御定法家難定申是非歟

覆問云於日數之內除服者如令申不是式文然而其儀已世之所行也更非可改除凶服之後尙可

憚神事歟分明可令申者申云猶除服之條非一門甘心法家難申左右於別勅者勿論也只隨公家

被用之趣可有御進止也抑輕服之者不憚後齋之條一切不可然

重問云如式文者後齋輕服不可憚之條已以炳焉也何以謂不可乎

申云猶不可然事也文意雖然專不可用之所申未知其理事也但古來例如斯歟

〔上卿故實〕御神事

輕服者除服之後參內更無憚今案近代之風可猶僅歟但於神事者不可奉行之觸內穢者不可參內明法博士章

參禱雖不憚他人齋限之間者尙可相憚之由先賢之訓也云々

〔桃華藥葉〕一可覺悟條隨所見

七歲以前雖無服其父三ヶ日不隨神事云々文永八六廿愚曆云自今日止春日百ヶ日拜依小兒事

〔續古今和歌集十六〕大中臣能宣朝臣、身まかりて四十九日の内に、輔親○能かうぶり給りて侍ける、願文つくらせけるおくに書付侍ける、  
大江匡衡朝臣

色々におもひこそやれ墨染のたもとあけになれる涙を

〔律疏職制〕凡大祀在散齋而弔喪問疾、判署刑殺文書及決罰食、○註致齋者、各加二等、

〔令義解神祇〕凡散齋之内諸司理事如舊、不得弔喪問病、○謂有重親喪病者、食、

〔延喜式三臨時祭〕凡新年賀茂月次神嘗新嘗等祭、前後散齋之日、僧尼及重服誓情從公之輩、不得參入

内裏、雖輕服人、致齋并散齋之日不得參入、自餘諸祭齋日、皆同此例、

〔北山抄四〕遭親喪未請假間有召參入行事例、○仲平例新書會

正曆年中、懷忠卿依公家定參大原野祭、若此例歟、無服瘍假、雖被召從事、不可預祭之由、已有所見、

又案事理奇怪事也、

〔日本紀略十一〕長德元年四月十一日丁亥、子刻入道關白藤原朝臣道隆薨南院、十八日甲午、賀茂

齋王○子還、禊也、上卿權中納言源伊勢卿、依傍親服不參、參議藤原實資卿行之、今日前驅等觸關白家

穢之、由雖令申無許之、齋王興過堀河之間雷電霹靂、時人云、穢氣人供奉之所致也、頃時晴畢、齋王還

御之後降雹大如栗、廿一日丁酉賀茂祭也、太皇太后宮○冷泉皇子皇后宮○圓融后中宮○一條后藤原定子、

女、東宮○三等、依穢不被立使、近衛使依中穢由、以右兵衛佐藤原義理勅之、

〔玉海〕承安二年九月十六日壬午、今日神祇權大副卜部兼康來、依昨日遣召也、神事之趣條々尋問之、

略○中

一輕服之人除服之後服日數内可憚哉否事

尤可憚、不可依除服、但於除服以前者、消息尚可憚歟、但是齋月旬日之時事也、○中略



御重服之中、大臣御轉任之例、

香閣院殿下○藤原師忠

文永八年三月廿七日轉右大臣去年十一月廿九日、普光園院殿下○藤原實寬有御事、今年二月八日御復任、

報恩院殿下○藤原忠教

建治元年八月十六日任大臣兼宣旨

同月廿二日任右大臣

去六月九日、一音院殿下○藤原忠家有御事、

光明照院殿下○藤原兼基

正應四年十二月廿五日轉右大臣

同日大將還宣旨

同日官次宣下

去九月十三日、母堂有御事、同十一月卅日御復任、

後報恩院殿下○藤原經教

貞和五年九月十三日轉左大臣

同日官次宣下

去七月六日、三緣院殿下○藤原道教有御事、

大染金剛院殿下○藤原房房

文安三年四月廿九日任右大臣

同日官次宣下

去年十一月三日、後福照院殿下○藤原持基有御事、

建保六年十一月十一日遭父喪養父左大臣

同年十二月九日任權大納言元備中納言未復任

小槻統良

永仁六年十一月十一日遭父喪

同年十二月十三日任左大史主殿任未復任

一同人叙位例

源通具卿

建仁二年十月廿一日遭父喪

同年十月廿九日叙從三位于時參議未復任

土御門內大臣公定通

建仁二年十月廿一日遭父喪

同年十月廿九日叙從三位藏人頭右中將未復任

〔葉黃記〕實治元年五月廿一日癸酉蒙利遭母喪五旬之中也然而可爲左將曹之由被仰下畢、

〔宜秀卿記〕上卿 山科中納言

明應二年正月廿二日 宣旨

從五位下藤原尙顯勳修寺中納言政顯細息、今元服十七歲母服中也、

宜任右兵衛權佐

〔章弘宿禰記〕元祿十六年二月三日戊寅去朔日自殿下兼照司以出納大藏大輔職直被仰下儀家君

令勸給注折紙大藏大輔許令送給記左右大臣重服之中一上與奪之事無所見當時右大臣殿○近衛家

照御重服之故也

一服解人五旬中任官例

藤原朝光卿

貞元二年十一月八日遭父喪

同年十二月廿日任左近大將權大納言未復任

同資仲

天喜六年三月廿六日遭母喪

同年四月廿五日轉左中辨元權左中辨未復任

同教長卿

永治元年十月廿五日遭父喪

同年十二月二日任參議元藏人顯右中將未復任

平盛兼

永治元年十二月四日任佐渡守

一昨日遭母喪

藤原行輔

元曆元年六月十日任和泉守

遭父喪未及十ケ日

小槻國定

建久九年十月廿九日遭父喪

同年十二月九日任左大史

藤原教家卿

同五年九月十二日

任權大納言

父服中也

〔圖太曆〕觀應二年四月十八日○中 古來當職人任大臣無養祿例○中

月輸入道關白〔藤原家〕實任內大臣子時重服

長寬二年閏十月十三日任之右大臣行變新任內大臣重服○之間不

近衛左大臣家通

同年○建保六年十二月二日任內大臣子時重服養祿以無沙汰○中略

後山本左大臣實雄

正和四年三月廿三日任內大臣母服解百ヶ日中仍無養祿召仰以下依

前太政大臣長通

元德二年二月廿六日任內大臣同前服假中

〔師守記〕貞治六年六月廿八日癸酉

無殊事候之間開筆候何條候哉○中 兼又服解人五句中任官叙位之間其沙汰候條若其例候乎打

任ては難有事歟兩條聊不審事之間令申候謹言

六月廿八日

判

四位大外記殿

仰旨跪奉候了指事不候之間乍存久不驚高聽候恐存候伺便宜可參上仕候○中 服假人五句中任

官叙位例注進別紙候每事可參入言上候師茂誠恐頓首謹言

六月廿八日

師茂

兩條



服者叙位任官

〔基量卿記〕元祿六年十月二日、中將室、行向新大納言局里藤谷故中納言○爲 廟所、有真如堂、件寺依改葬、各廿日之假有之候間如此也。

〔日本紀略十條〕長德元年八月廿七日辛丑除目、廿八日壬寅、入眼行、成、補、藏、人、頭、重、喪、間、

〔本朝世紀〕康和元年四月九日辛未、權左中辨能俊朝臣、任修理左宮城使、叔父陸奥守國俊朝臣服假內也。

〔尊卑分脈七藤原〕葉室一流祖顯隆 父卿○爲 永久三年四月死、重服內、同年八月十三日補藏人頭畢、

〔玉海〕長寬二年閏十月十七日戊戌、此日權大納言經宗卿并下官○藤原 奉可任大臣之兼、宜旨補大納言

任右大臣、余任今日殿下○藤原 御直衣也、重服人○此年二月端 上表事、依先例不詳、每事省略○中

抑今夜雖可定大饗雜事、重服之身任大臣日、依不可參內不定之、凡重服之人任大臣事、先例不分明、

且申殿下、又示合內府宗能 大略爲新儀之間、每事略定也。

〔吉記〕壽永二年二月廿一日丙辰、今日朝覲行幸也、○中 盛叙位二通於柳宮、次差笏、次取柳宮膝行取廻進之攝政○藤原 令取叙位給○中

正四位下

藤原朝臣公時○中

公時朝臣、當時重服也、而院司賞下臈等多依可加階所訴申也、然而忽非可洛朝恩、可謂殊恩、但初度者無先例、至于後々者有其例、所謂平清宗治承三年正月二日叙從四位下院御給、去、遺母

喪、

〔諸家傳四國寺〕實衡公

正和四年九月廿五日

服解父衡

同年十一月廿五日

復任

本服受七日者服一日

〔儀禮註疏十一〕改葬經註謂墳墓以他故崩壞將亡失尸柩者也改葬者明棺物毀敗改設之如葬時也其焚如大斂從廟之廟從墓之墓禮宜同也服總者臣爲君也子爲父也妻爲夫也必服總者親見尸柩不可以無服總三月而除之

〔台記〕久壽二年五月廿日丙寅依改葬假余○義原及三長不參入余請廿日假  
上不出兼長外記殿上本陣皇后宮出皇后宮文書樓候依改葬祖母所請如件師長下不出殿上又不出院宮動年々二東記春宮之外不該請十日假隆長不獻假文成雅朝臣雅國朝臣依七日假不出仕出之故也如西宮抄者院宮皆不出也  
云々

〔吉田家日次記〕應永十年十一月廿三日丙寅早旦尊堂令歸此亭給去三日令改父母墓所之間至昨日假廿日之間御遷坐他所也雖爲前齋元來別屋也予○兼不參此所但至椽片時構見參了二親事異他之故也重服人不受輕服也然而於此假者可憐歟之間存其旨了

〔禁忌集睡〕貞享二年乙丑五月廿日問來田監物親十三年已前於京都死去四五年以前彼墓所他へ移セシヲ今日告來此假如何長官家答ニ告ヲ聞タル日ヨリ廿日假又問右監物親死去ノ後八九年アリテ妻ヲ娶ル死者ノ爲ニハ子婦ナリ是ニモ今度舅ノ假カヽルヤ答舅ノ假カヽル

按ニ文保永正記改葬ノ下ニ日ヲ經テ開テ假ヲ減ズル法ヲ載ザレバ來田氏ノ改葬ノ假可ナラシ歟

〔季連宿禰記〕元祿六年五月八日辛亥主殿大允友治來云寺地就令移引他所友治亡母墓所令改葬件忌如何有不審云々即披舊記令見之一年服假廿日也若彼寺令通達者卅ケ日穢有之不可混彼穢之由示之了申承之由一兩日之間移墓所於他所之間若廿日忌之間於有公役等者可被仰下佐伯方之由申之也



地穢之限來正月廿四日迄二候、仍爲御屈如此御座候、以上

十二月廿六日

俊矩

萬里小路前大納言殿

正親町前大納言殿

五年正月廿五日

地穢昨日限也、仍從今朝、玄關毛氈草履撤却、障子（置也、前門如閉之）

〔大江俊迪先考御事雜記〕天保三年二月五日癸未、酉刻前御入棺以後爲穢設玄關敷毛氈、置上草履、

表門之小門掛簾、自今夕至來月五日、地穢三十日之間如此、（玄關障子明置也、有毛氈之間ハ不、但少計明々置、大方掃寄置也、）有自

他所來人時、敷毛氈或薄緣令坐之、其路用上草履也、六日甲申、穢限屆午後月番武傳德大寺家、江

差出使松浦左門、（續上、下、著編笠、）自門外乞案內、呼出取次侍附之落手也、取次村井中務、

杉原四折、上包美濃紙、無表書、

地穢之限、三月五日迄二候、仍爲御屈如此候也、

二月六日

俊迪

甘露寺一位殿

德大寺大宮大夫殿

〔季連宿禰記〕元祿五年七月十四日辛酉、今日辰終許、伊豫局之母儀死去、（日來有所勞、自昨、夜儀以外也云々、）自局來此

宅、不事切以前、令出他家之故此宅不穢、今朝即伊豫御局入來、令住別棟、別火不同座、是無穢之故也、

〔令義解（假九）〕凡改葬、一年服、給假廿日、五月服、十日、三月服、七日、一月服、三日、七日服、一日、

〔令集解（假四）〕釋云、改移舊屍古記曰、改葬謂殯埋舊屍、柩改移之類、（略）中朱云、改葬假者、長上番上无

別者、類同也、



督典侍殿死去ニ付當廿九日より九月廿八日迄三十日之間、日野家地穢候爲御届如斯御座候、  
以上、

八月廿五日

山 西

〔大江俊章清泉院是元死去喪中雜日記〕寶曆八年四月廿四日、地穢限届、月番柳原家へ早朝爲持遣  
ス、使多田源二、尤門前へ取次呼出被渡、

口狀 奉書四折、美濃紙、表包、北小路差次、藏人ト書付、

地穢之限、來月廿二日迄候、仍爲御届如斯御座候、以上、

四月廿四日

俊章

柳原前大納言殿

廣橋前大納言殿

一俊興届、小番所月番奉行衆へ遣ス、切紙尤番所口者、藤野井遠江番代右夫迄差出、

地穢之限、來月廿二日迄ニ御座候、仍而御届申上候、以上、

四月廿四日

俊興

小番頭御中

五月廿三日、地穢之限昨日迄、今日初月忌候故、除服出仕願、明日可差出、旨、同姓申ニ付、明日可差出候、

〔大江俊矩先考卒去喪中雜々日記〕寛政四年十二月廿六日庚寅、地穢限届、武傳月番正親町家へ差出、使近藤帶刀、着笠尤門外より乞案内、取次侍呼出ス也、

口狀 衫原四ツ折、上包、美濃紙、表北小路、新藏人トカグ、表

高貴有新儀者乎、

〔二水記〕大永二年九月八日、午後北野拜石塔、今日四十九日也、伴塔聖廟御母儀塔云々、世俗必詣此塔云々、不知其故、

〔基量卿記〕延寶九年七月廿四日、今日清光院殿四十九日也、於淨花院修法事、各參詣、其後靈松院殿白中將室子妹等同遺參、北野廟俗曰小野、蓋廟云々、近比四念、佛宗言來動之十九日、人々參詣、不知其故、其後於使所脫服衣、則給宗言了、晚來於河原解除除服之義、近日可申入也、

〔季連宿禰記〕貞享元年十月廿日壬子、今日桂芳院達母四十九日也、各參壬生寺廟、從夫參北野石塔、令解精進、廿一日癸丑、自今夜家中改火、今日五旬終也、

地穢

〔季連宿禰記〕元祿二年六月一日丙寅、後聞自今夜、天外記始之服假出來云々、有地穢、

〔季連宿禰記〕元祿六年七月十九日辛酉、衛士土佐重行去月廿五日死、然重行娘密々告示云、重行就相續之事有訴訟、問地穢限以後可言上、先內々申入云々、廿六日戊辰、衛士源右衛門重康來云、昨日地穢限也、仍所參也云々、去十九日所記、重行娘之事尋之、處重康申云、彼娘者、父義絕之娘也、父重行現存之中、勘當狀等出、置町內之故、去月廿四日證文不加之云々、

〔季連宿禰記〕元祿十一年十月十四日乙卯、右大史高橋春宜來云、依弟之事、自今日服假出來、地穢令混合云々、

〔季連宿禰記〕元祿十五年九月廿九日丁丑、大輔殿忠利宿禰女、爲子、帥也、今、年、自去八月八日所勞、令、惱、瘡、給、今夜丑刻許、既及閉眼、十月一日戊寅、依昨夜大輔殿事、地穢并予廿日假九十日服也、

廿日丁酉、今日予假之限也、然而地穢混合之故、不及出頭、十一月三日庚戌、今日地穢之限也、送之翌日、卅、仍今夜改火、

〔續百一錄〕延享二年八月廿五日

未刻前烏丸辨より消息來仕丁使

除服出仕復任之事被仰下候也謹言、

二月十四日

藏人大學助殿

資 董

右請文遣如左

除服出仕復任之事被仰下候之旨謹畏奉候恐惶謹言、

二月十四日

俊 矩

即刻着東帶參内以非藏人議奏卿へ御禮申上云除服出仕復任之事被仰下提存候右御禮申上候

略○中 夫より烏丸辨被居合故除服出仕復任提存候旨申入且披露之事謝辭了退出

拾遺和歌集<sup>二十</sup>恒德公父<sup>○道信</sup>爲光の服ぬぎ侍て

藤原道信朝臣

かぎりあればけふぬぎ捨つ藤衣はてなき物はなみだなりけり

萬代和歌集<sup>十八</sup>人のおやのぶくぬぎ侍けるにそのゆかりにておびをぬぐとて

さかみ

ふち衣ぬぐ人ましていかならんおびをとくだに袖はぬれけり

續後撰和歌集<sup>十八</sup>父秀能身まかりてつぎの年除服すとてよめる、

藤原秀茂

藤衣なれしかたみをぬぎすて、あらぬ袂もなみだなりけり

雍州府志<sup>十</sup>葛野郡 忌明塔 在北野宮石鳥居西南相傳昔神之父是善卿之塔也故倭俗失父

母入五十日忌明後詣斯塔使東向觀音寺僧誦經今無讀誦之儀<sup>○中</sup>一說古北野社官逢重輕服則

以除服日修禊於神谷川忌中所用之具悉納斯所因建塔故據假服除齋之由緣至今有除習云光源

院義輝公薨後四十九日忌辰齋饌畢後使高和泉守師宣爲使代公詣北野石華表然則中古以來雖

刻從益光被示除服出仕之事被仰出旨、即刻參內、

〔後中內記〕享保九年三月廿一日、以裏松、近衛左府殿久○家へ、廣橋除服之事當月廿七日穢明然者廿

八日、除服之事可沙汰候處、御徳日○廿九日新崇賢門院○東山后御命日也、可爲如何樣哉被尋窺、

多開門之後、除服之事及沙汰、是義不宜候間、廿八日早天、以職事除服之事及沙汰、追付開門、世間向

清ク成被申儀可然、但着服之覺悟候哉、可爲此兩夜之内、由御命云々、西大路三位可如何也、河端安

藝守、同右衛門遠水右京進家老野村主馬了簡難仕、如何可然哉ト申來、兼テ烏丸中納言○光へ相

談之通、父故侍從兼賴、實母桂林院兩親共勿論先年死去之時、着服被勤五旬、於故大納言者、曾祖父

也、服三十日服五十日ニテ可相濟、然者不及着服、左府御命之通、廿八日早天、職事及沙汰之後、開門

可然之由返答之、西大路三位可有御所存由返事申遣了、廿九日、日野西辨ヨリ、西大路三位除服

出仕之事被仰出、則參內仍被來廣橋拾遺、雖曾祖父家督遺跡取之間、開門今朝在之、今日除服出仕

被仰出、喪子共男女被勤五旬、所勞分不參御神事之内、火混雜如何、所勞分今日以西大路三位被申

上、可有心喪事、左府殿依御內證、及除服出仕之沙汰迄云々、

〔大江俊矩記〕寛政五年二月十三日丙子、同姓差次侍中、入來云、明日予除服出仕復任之事申上度、且

職事五位下薦烏丸辨へ可附所存に候、思食相同度旨、陽明へ被相伺候處、何之思食も無之、勝手ニ

可差出、尤烏丸辨へ可附之旨被仰下、由被示也、十四日丁丑、今朝忌明、早旦改火沐浴、辰刻計、除服

出仕復任之事、可預披露旨、以青侍近藤帶刀附一紙於烏丸辨、承知之分有返答、一紙如左、紙漉、奉書四ッ、折上包美

紙漉、

除服出仕復任之事、乍御苦勞宜御沙汰希存候也、

二月十四日

俊矩

右少辨殿



日次不宜其上於二親服者一日も日數多除服申事先例也其上上古除服自下申上事無之從上被宣下事也然者旁以月末其上當月一日より御神事之間今日出仕之義内々申入了未刻參内

〔季連宿禰記〕貞享元年十月廿七日己未今日參左中辨俊方亭季連除服之事可執給之由頼申了務他出之由仍申置歸宅了除服之事自口申之事也不及于折紙復任之事近年強而不申之歟仍今度略之 廿九日辛酉午刻許自小川坊城左中辨俊方賜書狀

除服出仕之事被仰出候可被朝參候也勿々

十月廿九日

俊方

大夫史殿

〔季連宿禰記〕元祿八年八月十九日丁未四位大外記師庸朝臣來臨僧中除服宣下例權大納言實照補記所存可言上之由被命之故只今折紙進之云々凡俗中往昔者重服之人一暮之間不出仕蒙除服宣旨出仕之條往昔無之事也俗除服宣下例漸文明以來之例繁多也略中是大外記所被語也〔基量卿記〕元祿十二年九月廿三日己未一予除服之義尋遣白川三品予服日數至今日卅々日相濟之間更不及申上事歟之由尋之

御返事

貴卿輕服假等日數今日相濟候地穰明日迄ニ候故來廿六日御出仕可被成由就夫服日數相濟之間除服出仕宣下被申請候ニ不可及哉如何之由承知候如御示先年も申入候通ケ様之時者除服被申上候ニ不及候條其御心得尤ニ存候以上

八月廿三日

雅光

東國大納言殿

〔丹波頼庸記〕寶永五年十月二日假日數終昨日朔日仍行向益光第申可致沙汰除服之旨三日未

文龜三年十二月十九日 宣旨

少納言清原真人宣賢

宣令除服出仕

藏人頭右中辨藤原實房奉

右返事之趣、大概取要註之。○中略

藏人頭右中辨藤原實房奉

一宣賢除服宣下御案、加一見了、位署相違候、官位相當者、以官書上不書行字候、位貴官賤は、以位書上、位與官之間書行字候、官高位賤之時、先書位書守字候、從三位守大納言如此侍從は從五位下相當候歟、然者行字候由にて、其上如此置候事は候はず、兼官多之時、位署むつかしく候、

〔宣胤卿記〕永正十四年十二月廿四日、頭辨來、關白○一條除服復任事被申、書樣問之、關白ハ無除服

宣下、一莽之間無出仕之由、後妙華寺關白○一條御演說、彼御母喪之時、爲其分被注置、御傳分明也、

其時關白無官也、仍復任事不及沙汰、今度御當官左大臣也、於復任者可被宣下歟、然只左大臣ト許ナルモ似非關白、又關白職也、不可有復任、是非當座無覺悟之由答之、後聞關白除服復任事無例云云、

云、

〔言繼卿記〕天文十三年閏十一月十四日己卯、御末之大隅龜千代、今日除服出仕云々、仍從廣橋御教書被相付、大所にて則遣了、

龜千代九可令除服出仕之由、可令下知給候之由、依天氣上啓如件、

後十一月十四日

左中辨國光

進上山科中納言殿

〔基量卿記〕延寶九年九月十二日、從坊城辨除服宣下到來、予母服去月廿六日五旬明日也、雖然月末

此本字不可然、自實首道中納言參議等、不書本字、大納言には書之、此子細先年令誦諫了、定忘却也、爲後見摺了申道、無子細了、外祖母服九十日、假三十日也者、假至來月一日訖、五月無何不庶幾之間、相尋侍從二位兼俱雖假中申除服宣下了、

〔宣胤卿記〕文龜四年元正三月廿六日戊子、頭右中丞賢房朝臣狀到來、略中

一重服除服宣下事、不載氏之由、甘寺元甘露演說候、不審存候、毎々無覺悟儀、其不可有正程候、不覺御心應可蒙仰候條、可畏入候併仰御扶助之外、無他候、猶以參上可申述候、誠恐頓首謹言、

三月廿六日

賢房略中

一重服除服宣下、不載氏之由、甘黃門申候、由承候、無覺悟候、必可載候、古來宣下案等分明候、去年隆永朝臣重服之時、除服伊長宣下候氏、如常候、位署相違事候了、復任は載位署除服出仕は不書位署候、若此事候歟、但無官者載位之條、又勿論候、

閏三月六日丁酉、賢房朝臣狀到來、

先日懇切之芳命、畏悅存候、略中又就除服宣下事、委細被注下候、返々畏入候、尸事其後甘へよく尋候へば、可書載之由、又被申候、已前は定失念儀候哉、旁可參言上候、誠恐頓首謹言、

閏三月六日

賢房

又宜賢除服事、去年早雖令宣下候、猶不審候間尋申候、此分候哉、官位相當之時、行ノ字候哉、然者可爲此分歟、已前宣賢母除服事ニ尙顯宣下候了、案には眞人の兩字不載候、于時六位候歟如何候哉、四位五位六位に不限、可書載尸事勿論候哉、

文龜三年十二月十九日 宣旨

少納言兼侍從從五位下清原真人宣賢

宣令復任

九月十三日、三條大納言之使、明日御除服計可宣下云々、同十四日宣下口宣案有別帖、同日未刻

御解除宣仲  
申沙汰

〔宣胤卿記〕明應二年二月十九日乙卯、自二條殿御狀宣秀方除服宣下可申沙汰云々、余進狀申曰、御

重服分也、先日御對面之時、幸見布黑塗衣着給。御輕服候者、宣下無益歟、近代就出仕、除服事申請常儀也、去々年歟、當

殿下御重服、依無除服復任例、一回不及宣下無出仕、今度如何之由申入之處、清三位入道并師兼朝

臣入道、可有宣下之由申之間所被仰也、今申入之旨可然宣下之事、不可申云々、又御輕服也云々、御

祖父御輕服、勿論雖不及尋申、父公御早世以後、如父御沙汰、御服又如重服、又輕服者不及宣下、以御

教書申本人常儀也、於無御出仕者、此儀又無益也、

〔宣胤卿記〕文龜二年四月十九日辛酉

折紙外祖母輕服九十日、假三十日云々、宰相輕服假中、申除服宣下、令出仕事、令爲如何候哉、又假中同

宿身、參內事可爲候哉、

宣胤

吉田殿

外祖父母服九十日、此內假三十日、御覺悟無相違候哉、御方御假中、被申除服宣下、御出仕事、近代

之通規候也、何子細候哉、次御同宿御方御參內、不可有其憚候、可得御意候、

兼俱

廿四日丙寅、頭右中辨賢房朝臣狀到來、○申

可令除服出仕給者、依天氣執啓如件、

四月廿四日

中辨賢房奉

謹上右大辨宰相殿



親王御服中御同宿禁中事  
此條先例管見又不詳候

禪閣持通公九月十日到來今日參申

大外記中原師富中上略○

親王御除服宜下并復任例事兩局勘例加一見了、貞常親王文安度、雖除服候不及宜下候歟、就中雖爲御重服中御同宿別殿例候上者、可被任先規條、何子細候哉、由存之、但管見之至、不足於信用哉、宜在時宜者乎、

近衛前關白政家公九月十一日給之

親王御方御除服事兩局勘例無相違之上者、可有御沙汰哉、中宜在時宜矣、  
關白冬良公九月十一日給之

親王御除服宜下事兩局勘例所見不詳云々、凡人臣遇喪有奪情從職之禮、而往古必無此宜下歟待一并除服、多分之儀也、因茲無其例乎、中宜在時宜矣、

右申詞三

九月十一日以使者三條大納言

實香親王家勅別當也

申詞各折紙引合也

加銘、近衛前關白如此、

右三ヶ所九月十日所參申也、同十二日三條大納言以使曰、昨日分申入處、按察大納言、勘修寺前大納言等所存可尋遺、

按察大納言

親王御方可有除服宜下否并、重服中禁中別殿御座事、凡猶以往之儀者、親王無細々出仕攝家之臣、猶以一回中依無出仕不及除服云々、中宜在時宜乎、

勘修寺前大納言

親王除服宜下、無先例之上者、今度之儀、任文安度例、不及宜下御除服可然哉、中

〔宣胤卿記〕文明十三年四月廿九日癸酉、先立寄一條亞相○藤原許、歸宅以後、樽一荷、菖蒲一折進、一條殿、明日御中陰○此月二日藤原兼實、冬、爲兄教房養子、可被結願云々、早速不可然之由雖申之、猶被憚五旬之條定而女中計敷中陰者、自葬禮以後結之、然者只廿日也不孝之至、莫言云々、又今朝有御使基弘御中陰被結願者、則凶服可令脫給敷云々、五旬以後被尋日次被申除服復任宣下、可令脫給之由申之、

〔宣秀卿記〕明應元年

親王除服并重服事 禁中御同宿事今度無御解宣仍無復任沙汰 親王重服之時、有除服宣下哉否事、同服中禁中御同居三等准據例等、可被勘申之由被仰下候也、

宣秀

### 大外記殿

### 四位史殿

當時李部親王除服儀候後如何也

宣下不及例之沙汰楚忽也

親王御重服有除服宣下否事、於御除服儀者勿論、於宣下之儀者所見不分明、但文安五年敷政門院藤原幸子○後崇光妃御時、伏見殿親王御除服復任事、業忠先規勘申之時、御復任注申之、於除服宣下事不得所見云々、康正二年、同親王御服解時、業忠不記置候、是當局不存知之故也、○中略可得其意候哉、

雅久

### 親王御除服事

文安五年四月廿二日、倭敷政門院御事、親王御方於伏見、令着御素服給云々、同五月十五日、親王御方御素服除御云々、藏人政仲、陰陽師在長朝臣參之云々、

件度被經御沙汰之處、親王御除服事先規不詳於御復任者有例云々、御除服事雖無先規被宣下之條、不背道理之由、有其沙汰、仍有御除服之儀、但不及宣下云々、

同七月六日、式部卿親王、有御復任宣下云々、

七月廿日

三條殿

追書

御心中察申候除服之時或門外或庭上其例等連綿候愚身は着除共門外候不及乘車候乎恐惶謹言

〔吉田家日次記〕應永九年五月三日乙酉既ニ御事切レケリ照○兼ト人々告之了十八日着服則除之其儀行水之後降庭上向王方着之黒帶許也青侍清種持來贖物陰陽師大藏少輔某送之散米解繩人形等居所數刺陳送之不及下行疎物吉服之時可給之也此陰陽師并大麻取之懸口則帶于時清種自後來取帶也大藏賜之大麻贖物帶應永祖母之時先人被仰付之等流樂河原主方

〔建内記〕嘉吉三年三月二日戊午資宗朝臣吉服事當番無人之間可被宣下歟然者可尋日次之由可仰遣本人歟以便宜内々可得其意哉之由今日參會之次示永基朝臣了於今者父卿尤可申沙汰事歟依窮困出仕不事行之間不悉存歟於父母服者過不可申請吉服事也但於母服者父現存之時尊在父之故早令除之禮也父沒之後母服是又代父之謂在之仍不似父服早除服事申請候禮也云々は故少納言入道常宗先年言談也以次記之

〔親長卿記〕文明八年六月十七日自勸修寺大納言秀○教許送使者云壹形萬里小路申除服宜下否予覺悟分可示云々返答云舊院花○後御代廣橋大納言光○總弟阿婦丸喪父之時不申除服五旬之後出仕阿庭丸故子永喪母之時不申除服五旬之後出仕畢可爲例歟十八日入夜參内言國番代也勸修寺大納言參會申昨日子細重尋予云彼兩童者不申叙爵歟予云未申爵萬里小路當時申爵之間可相替歟予云不可依爵是非歟仍奏聞勸答云可尋予云々即相尋之處彼兩人事注申之由重奏聞仰云此上者不及除服可參云々十九日阿子丸萬里小路實勸修寺大納言次男參内不及除服也

實繼

細候師定誠恐謹言、

四月二日

大外記中原師定 奉

謹請宜旨

散位正五位下丹波朝臣尙忠宜令除服出仕可從公事事

右宜旨旨早可令下知之狀謹所請如件師定誠恐謹言、

四月二日

大外記中原師定 奉

散位正五位下丹波朝臣尙忠

正二位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣公實宜奉勅件人宜令除服從公事者、

正和四年四月二日

大外記中原朝臣師定 奉

〔師守記〕貞治三年六月十一日癸卯今朝以狀麻三筋遣陰陽師許此次去日子衰日不可有憚歟之由相尋之而他行之間付置狀及晚重口之處除服事大麻等進之予衰日雖可有憚已被定日不延引之間可被有用之旨申返事陰陽師相計之歟不能左右者也今夕酉刻大炊權助師豐古禰房師豐姉女赤子等三人除服師豐予曹局於東向軒下除服向甲方寅典古禰赤子兩人ハ於同庇除服其段大麻如例則麻帶三筋遣陰陽師許了於大麻者指門前了師豐凶服直垂雖可遣陰陽師許之處下品口道間令略了除服後師豐古禰口調引入食事魚味赤子不改器物用古物了依不具也師豐吉服直垂可用意之處依不具不及沙汰追可被調歟師豐引入代四十口文也古禰等引入家君被用意

〔後愚昧記〕昨日申承候恐悅候○中さても除服近々罷成候父祖之時に向河原候キ近日難治至極陰陽師又申子細候門前常事候上先々日付などいか御沙汰候はん雖門外必乘車候乎只かどを出候條聊爾候哉庭上などにて除服事も候歟之由存候如何以次言上候條々可勘奉候恐惶謹言、



丹波尙忠除服出仕事

右仰詞內奉入如件

四月二日

左衛門督判 奉

大外記局

上申如卿相以上、近例多以御教書故仰下歟、

如此之輩、不及御教書沙汰候歟之由、故推量候歟、

正和四年四月二日 宣旨

散位正五位下丹波朝臣尙忠

宣令除服從公事

藏人民部少輔平親守 奉

謹請宣旨

散位正五位下丹波朝臣尙忠宣令除服從公事

右任職事藏人民部少輔口宣狀如此之例、粗雖引勘候、所見近今不詳候上、散位者前體異事候歟、已前之處除服宣旨可爲何樣事候哉、重任故仰下旨可存知候歟、師定恐惶謹言、

四月二日

大外記中原師定 奉

尙忠除服宣下同事委奉候、重喪人於後任者、可依官有無、於除服者、不可依官有無哉、先例雖不詳覺、前官不可除服之條、無本文者、任故仰下之旨可有宣下歟、有殊子細者、重可故示達之狀如件、

四月二日

左衛門督公實

四位大外記殿

尙忠除服宣下間事、不打任口相存候之間、聊申上候之處、重故仰下之間、早可存知候、此上不可及子

三月三日

權中納言判

大外記局

國友左衛門尉事口宜依爲難任略之、

宿紙

曆應四年正月廿一日

從四位下藤原實音朝臣

宜令除服

藏人頭中將兼春宮亮藤原隆持 奉

謹請

宜旨

從四位下藤原實音朝臣

宜令除服事

右宜旨早可令下知之狀謹所請如件師守恐惶謹言、

曆應四年二月十一日

大外記中原師守 奉

追言上

散班四品以下人除服宜下非常儀候歟然而故宜下候之上者可執行候乎、恐惶謹言、

前侍從從四位下藤原朝臣實音

正三位行權中納言平朝臣宗經宜奉勅件人宜除服、

曆應四年二月十一日

大外記中原朝臣師守 奉  
中略○

口宜一枚○以下悉  
傳記

川原依爲幼少之者隨宜也。

〔愚昧記〕安元三年五月廿二日辛酉、秉燭以後、於門前着除輕服、家妻同除之、乘車出門外也。

〔玉海〕養和元年十月十五日戊午、入夜余○藤原兼實及二息除服、余先向河原解除了、更大將侍從等同車

同出河原、陪瞻皆季長朝臣所勤仕也、陰陽師憲定兩人雖同車、於祓者人別兩度修之云々、又女院御

方於御所中在之、并此姬君、家中依無恒宜、乘車於同所除服也、是故中攝政落胤女子、去比所死去也、

〔三長記〕建久七年十一月十一日丙戌、今夜中宮○後鳥羽后有御除服事、御禊陪瞻頭亮定經朝臣役

送權大進兼時獻御帶許云々、

〔平戶記〕仁治三年二月廿六日戊寅、今夜左大臣殿○藤原良實令除四條院御服給○中於川原可令除給

之處、御蚊觸事出來、雖有御滅、忽御河原之條、如何之由、醫家計申之間、只出御門外也、召吉服御直衣

御御車○中出門外向吉方令除給也、政所獻先日御帶、先是召吉服御裝束、令駕御車給、其後獻御帶

傳獻之人不傳獻之人不召之一結ニテ給之或說、除服之時又不召之鈍色御直衣一襲○註置陰陽師前御車向

吉方立錫、次修禊、次家司兼教朝臣傳獻大廡便、撤御贖物、陰陽師切御帶、遣河原流棄也云々、

〔假服事〕文永三年七月廿六日、午刻許、頭中將具氏朝臣奉書到來、可令除服出仕者、申承了由了、入夜

召陰陽師、於堀河面小門前除服先着麻帶、次解除凡者除服事、本儀出河原可修禊、祓略儀於門前修禊、祓定事也、

祖父左大臣殿御坐五條堀河之時、於堀河西淮河原被修禊之由所聞置也、于蓬屋北炊御門西大路

爲堀河先令於大炊御門西也、略門雖修禊、今日示合陰陽師、於堀川面修之、頗有便宜歟、

〔師守記〕曆應四年二月十一日己丑、今日宣旨二通到來、上卿平中納言宗經卿、此內從四位下藤原實

音朝臣除服事到來、散班四品以下之人除服事、非常儀、然而被出御請文了、件事正和度、河州局務之

時有沙汰、故宣旨了、

口宣二枚藤原實音朝臣除服事、仰詞內令獻之、早可被下知之狀如件、

〔殿曆〕康和四年二月十五日庚子、今日北政所余○藤原同除服、委旨見裏、依神事不來服。○服下、恐僧尼入夜見馬、午刻許爲房朝臣來、除服の令勘、日時陰陽師安部兼吉、申刻出二條末、前驅衣冠、能登守基兼が車用之、隨身不乘馬車、副二隨身布衣余裝束あさぎ也、衣白也、除服了還亭、吉書用無文冠、官方文時範朝臣申之、北政所御除服、中御門末也、酉時也、御除服了、還御京極殿後余參煩之退出。  
〔假服事〕應保元年二月十一日、今夜於門外除服、外叔父內供服也。十四日、自外記以使部送除服宜旨、外叔父內供服也。  
書様

皇太后宮亮藤原定隆朝臣

左近衛權中將藤原忠親朝臣

右兵衛權佐藤原朝臣賴實

左兵衛佐藤原朝臣實清

正三位行權中納言藤原朝臣實長宣奉

勅件人宜除服令從事者

永曆二年二月十三日

少外記清原定雄奉

一見了返給了、頭辨宣下云々、

〔玉海〕永安三年九月十六日丙午、入夜向關白○藤原御許、○中被示事等、○中

一除服可出仕之由、被宣下之後可出仕也、其宣旨以前、催可參公事之由、是職事失錯歟云々、

〔玉海〕安元三年四月廿八日丁酉、戌刻於川原除服、陪膳季長朝臣役國行、其布衣也、陰陽師漏刻博士經明、余○藤原鳥帽口衣網代牛童遣之、前驅國行一人也、向坤解除也、件服假故攝政殿落胤小僧、去比天亡、在兄覺尊僧都之許云々、今夕女院同御除服、又傳說除服、於女院御所門外除之云々、雖須於



直ニ長官ヨリ除服出仕相達其旨可届出事、

但在東京之輩ハ出張所ヨリ太政官ヘ可申立事、

〔蟄蛤日記〕<sup>上</sup>としかへりて、はるなつもすぎぬれば、今ははてのこと<sup>○</sup>周すどて、こたびばかりは、かのありし山寺にてぞする。<sup>○</sup>中やがてぶくぬぐに、にび色のものども、あふぎ迄はらへなごする程に、

ふちごろもながす涙の川水はきしにもまさるものにぞありける、とおぼえて、いみじうなかるれば、人にもいはでやみぬ、

〔源氏物語<sup>七</sup>紅葉の賀〕御ぶくは、かたは外<sup>○</sup>祖母<sup>上</sup>三月こそはどて、つごもりには、ぬがせ奉り給を、<sup>下</sup>

〔源氏物語<sup>三十</sup>藤梅〕御ぶく<sup>母</sup>三月<sup>五</sup>薨<sup>祖</sup>も、この月にはぬがせ給べきを、日ついでなんよろしからざりける、十三日<sup>○</sup>八には、かはらへいでさせ給べきよしの給はせつ<sup>○</sup>下<sup>時</sup>源氏、

〔權記〕寛弘七年閏二月二日壬子、參内、參一宮御除服、一品宮同之、共用亥刻、前日奉勅<sup>○</sup>雨親王除服、不可向河原、天曆御日記、有親王只出陣外除服之由之故云々、仍宮達今日不出給河原、只引出御車於西門之外、可有御祓也、而今日甚雨暴風、仍一品宮出御東廊、此宮於寢殿西戸前、置子敷上御祓、陰陽頭文高奉仕、宮日來御典侍明子朝臣一條宅、

〔水左記〕承暦五年<sup>○</sup>永保<sup>元</sup>八月十八日壬申、此日子<sup>○</sup>源出河原<sup>近衛末</sup>除服、寢殿姫君、南御方同除服

給、先之陰陽頭道言、送日時勘文、<sup>今日壬申、時可</sup>

〔爲房卿記〕寛治元年八月十九日戊戌、左右大臣<sup>○</sup>源俊房、雨大納言除服、事仰治部卿以外記被告申

者、殿上人四人除服、事<sup>○</sup>爲房<sup>原</sup>以書狀告之、近代上卿除服、或職事以消息告之、然而尋申先例、依大<sup>○</sup>臣已下除服、猶可仰上卿者、

元亨二年十一月十二日

春宮大夫判

大外記局

〔統華業業〕一可覺悟條々國所見

攝家丞相以下、輕服之時除服職事仰上卿上卿下知外記、成宜旨持參於攝關者、或不待宜旨出仕、先規兩端也、前官之時者、不及除服宜下、無可從公事之由故也。

〔後水尾院當時年中行事〕二親の服には、女中已下、采女刀自女官女嬬にいたるまで、一周忌の間出仕せず、根本は男女ともに服の内出仕せざれども、近代男は五旬の後召出されて、職事除服を書つかはす也、女房は除服かくべきやうのなきにより、五旬の已後なほ出仕せず、一周忌の後出仕のときは、年中用たる衣服調度までをあらためて、御所にては服間用たるものをかつて不用、此ころ御人なき時は、女房といへども五旬後口づからいひつたへてめし出すことあり。

〔寶曆集成絲綸錄十六〕延享三寅年九月

若年寄父母之忌御免之儀、自今三十日ニ而御免可被遊候。

右之通被仰出之。

〔憲法類編二十二〕正忌不及、憚并忌濟ノ節出仕心得使府縣奏任官忌服心得ノ事○中

庚午三○明治 正月廿九日御布告

從來着服之輩忌濟之節、除服出仕宜下有之候處、自今前以、忌服何日迄ト相屆置、忌濟之日ニ相當リ候得バ、勝手ニ出仕可致事。

但忌濟當日、御神事中ニ候得バ、可相憚於重服者、御神事并御吉日トモ可相憚事。

辛未四○明治 十二月十日開拓使府縣へ御達

開拓使府縣奏任以上之輩忌服中、本廳事務其人ニ限リ候儀有之、不得止節ハ、忌日數半減ニテ、

〔本朝世紀〕久安五年正月廿三日丙午、内相府○藤原賴長服假之間、有從服事、仍家司可着服之由、日來被催云々、式部權少輔藤盛佐散位橘以長、藤盛憲經憲等着之、主計頭中原朝臣師安助清原真人定安、雖蒙催不着之、有所存歟、又内府令坐倚座給云々、○藤原忠通殿下○藤原忠通并法親王不坐倚座給云々、又无從服事云々、

〔台記〕久壽二年十二月廿四日丁酉、右大將○藤原兼長是着高陽院○鳥羽后藤原兼長、即參福勝院、

觸穢云々、本着宮司服、仍今日唯着布帶、即解之、月來不出仕、故不出假文、皇后宮○近衛多子須着高陽院

御服、三月而重服人有輕服時、有假無服、故不着之、

〔玉海〕養和二年○壽永元年二月七日戊申、此日依春日祭神齋、雖非重喪之間、猶忌僧尼服者、月水等如例、

但同服并從服之輩、不忌之、

〔拾遺和歌集文傳〕服ぬぎ侍て

ふちごろもはらへてすつるなみた川きしにもまさる水ぞながる、

よみ人しらす

〔名目抄長平〕除服

〔神祇道服紀令秘抄〕一服ノ人ヲ神事等に召仕セテカナハヌ時、天子ヨリ勅許ノ宣下アリテ服ヲ

ユルサレ、服ノカヽラヌヲ除服ト云也、

〔貞丈雜記凶事十六〕忌服と云事○中略服の日數終りて、かの衣服をぬぎ去事を除服といふ、

〔傳宣草上〕除服事

宣旨

左大臣○藤原房實

宣令除服出仕

右宣旨可被下知之狀如件

古事類苑

禮式部二十七

服紀下

從服

〔日本紀略村四上〕康保元年五月四日己卯、明經道重勸申皇太子冷爲母后村上后服制、并坊司管諸司近習官臣從服、

〔長秋記〕大治四年七月十二日戊子、參新院羽御方中攝政藤原內大臣有仁源申云、大略如人々

定申、被問諸道可有沙汰、歟、別當奏此旨、歸出仰云、於御服輕重此月七日、鳥羽本自有所存、其上殿

申、鋪設裝束御車、并院司殿上人御隨身等可輕服否、可被量申、又兩大納言被申云、縱發自御意、雖令

着御重服、殿中御裝束不可被改、若殿中御裝束被改者、院司殿上人皆可着輕服、歟、御車可被改、御隨

身可着服、如此事每事可憚歟、治部卿重被申云、萬壽四年、御堂入道藤原亮時、上東門院道長女、

子、等着服之由、見經賴卿記者、殿中御裝束被改、院司殿上人可着輕服、歟、然者與諒闇議同歟、如此

間可有憚之由所令申也、御車御隨身裝束條、凡人改之者被改有何事、又雖不被改不可有難歟云々、

新中納言云、萬壽度、宇治大相國議云、宮人可着服、但隨公事之時、可着吉服云々、下官源申云、院司

殿上人着輕服事、必不可、然只可依時儀也、萬壽有着由云々、天喜元年、鷹司殿源倫子母度、上東門院

院司着服之由所不見也、着例與不着例、相並依時儀、可有其沙汰也、儲御車御隨身着輕服事、必可候

也、殿中御裝束事、忽難申左右中、新中納言云、天曆間后宮服時、宮司不着服之由、彼萬壽度有沙汰、

之由所見給也、然而不忽覺、仍不能委申云々、





古事類苑

禮式部二十七

服紀下

從服  
除服  
地穢  
改葬假  
服者叙位任官  
服者遇神事  
服者遇公事  
服者遇節日  
神職服忌  
僧尼服忌  
爲僧尼服  
雜載

二四三  
二四四  
二六一  
二六三  
二六六  
二七一  
二九五  
三〇七  
三〇九  
三三二  
三三二  
三三九  
三四二



九日不宴樂，今七日止之者，雖有師禮，无所習之故也。

〔台記〕久安七年

元仁平

正月四日丙子，人傳去一日夜半入道式部少輔成佐卒，師有三日假，假寧仍自

今日至六日，不可出仕之由，使師元申禪開，○謹原仰曰：近代雖有師之喪，不籠居，吾有師之喪，不憚出

仕，早可出仕也。

〔禮記註疏〕

禮六

事師無犯，無隱，左右就養，無方，服勤至死，心喪三年，註：心喪，感喪，如父而無服也。凡此

以恩義之間為制。

〔禮記註疏〕

禮七

孔子之喪，門人疑所服，註：無喪師之禮。子貢曰：昔者夫子之喪，顏淵若喪子而無服，喪

子路亦然，請喪夫子。若喪父而無服，註：無服不為喪，甲服而加麻，心喪三年。



制次第ニ御座候制ニ無之義を私に服仕候義には不及候夫を五服の私親と同事の心得にて、自分衣服を着申事可爲非禮、今度増上寺參詣御位牌へ參詣仕候節一統ニ熨斗目長袴にて候御位牌へはク様ニ仕候て、私家にて麻を着申事、不埒なる事にも御座候、酒肉の事は只々諸大名衆旗本衆五十日は素食に相見申候至極疎賤の臣、去年被召出候義ニ候へば、至極輕方ニ御座候、夫とも厚方ニ隨て五十日素食可仕意得ニ候。

〔令義解九〕假事凡師經受業謂師博士也、依律已成、業者是也、私學亦同。者喪給假三日。

〔令集解四十〕假事古記云、師經受業謂大學國學是、在文書學皆是、唯按摩博士、舍入師之例、爲有餘叙法、故一云、見受業亦同舉輕明重之義也。略中朱云、於歌辭師等爲不可服哉、何、額云、然凡不學書者不

云者、但音書等亦同受業師者、穴云、師謂私業亦同、問僧尼於師與伯叔父同、未知爲師何、若此文爲官人生文、其僧尼等給假之法不見文。

〔法曹至要抄下〕假師喪假事

假事、令師經受業人者喪給假三日。謂師博士也、依律已成、業者是也、私學亦同。

案之爲成業之師、宜有斯假、師謂博士也、已成業者是也、但於僧尼者、雖爲弟子、爲其師匠不見、可給假之法、是父母之外不着服之故也矣。

〔台記〕元康治三年天養十一月一日戊申、朝召伶人舉樂、人傳云、式部大輔入道敦光以去月廿八日入

滅、余○藤原長實驚罷、伶人依爲師也、件人書始時師也、其外無所習、然而非可無尊敬、仍召明法博士有隣

問云、師死在心喪之內、欲奉遙拜、春日如何、勘申云、假事、令云、師經受業者喪給假三日、義解云、謂師博

士也、依律已成業者是也、私學亦同者、據件文爲師給假者、本條有限於服者、無其制歟、又有隣申云、過

三日了非假限、不可忌神事、仍自今日七ヶ日遙拜御社、雖非服依爲假後先有祓、又内々付僧事幣於

御社七日、此等皆依今曉吉夢也、雖非假限、七日之内止絃歌、喪過於哀之故也、去年大内記令明辛丑

乳母ノ家ニ將行テ置タレトテ、只出シニ出シ給ヘバ、乳母ト人ノ車ヲ借テ、糸心地澆テ、奇異シト思テ、物モ取リ不致ズシテ、泣々ク若君ヲ具シテ出ヌ。○中三四日ヲ經ルニ、若君心地不例シテ、身温ニテ臥ヌ。○中而ル間七日許ニ成ヌレバ、物忌固クシテ、人モ不通、其ノ日ノ亥ノ時許ヨリ、若君限リニ成給ヌ。○中此クテ三七日許過ル程ニ、此ノ御淨メニ參リシ男、日來ハ不見ケルガ、參ルヲ大臣見給ヘバ、服ヲ黒ク着タリ、大臣此レヲ恠ミテ、汝ハ祖ヤ失タリトモ不聞ヌニ、誰ガ服ヲ着タルゾト問ヒ給ヘバ、男低フシテ極ク泣ク、大臣禰ヨ恠テ、何事ゾト問ヒ給ヘバ、男若君ノ御服ヲ仕タル也ト申セバ、大臣此ハ何ゾ、汝多ノ人ノ中ニ、別ニ服ヲ黒クシタルト宜ヘバ、男泣々ク申ク、己レ御硯ヲ微妙ジト聞キ、責テ見マ欲ク候ヒシ餘リニ、殿ノ内ニ御シ、間竊ニ取出シテ見候シ程ニ、取口テ落シテ打破テ候シヲ若君ノ御シ會テ歎キ悲ミテ候シ氣色ヲ御覽ジテ、此ノ事ハ我ニ負セヨ、汝ガ此ク大事ニ思タルガ糸借ケレバ、我負タラムニハ何許ノ事カ有ム、汝ガ負タラムハ、必ズ咎有リナムト被仰シカバ、恐レ乍ラ罪ヲ遁レムガ爲ニ、其ノ由ヲ申テ候ヒシニ、若君其答ヲ蒙ラセ給ヒシダニモ歎キ思ヒ給ヘ候シニ、程无ク失サセ給ヒタレバ、哀ニ悲シク思ヒ奉ルト云ヘドモ、申モ愚ニ候ヘバ、堪ツルニ隨ヒテ御服ヲ仕テ候也トテ、泣々、ナミダ川アラヘドオチズハカナクテ硯ノ故ニ染シ衣ハ、トテ泣ク事無限シ、

〔鳩巢手簡〕服の義被仰聞候月。○正徳三年十月 徳川家宣薨其砌も私も常服にて罷在候儀、安堵不仕候、總麻の服申付候はんと存候へ共、思案仕候へば、五服の私親とは早替申義に候是は天下ニ掛申候義ニ候、既ニ御宗室を始服無之候處、私共御爲に麻を付申事、借禮と奉存候て止申候、彌思案仕候處是は只今不成義に候、漢土にては、短喪之已後ニ、國恤の時は、有司服制を議して、間々貴賤に依て違申候と見え申候、夫共に初喪の時、葬送の時迄杯と見申候、三代の時分、斬衰三年と申候、定て大臣貴戚の類にて可有之候群臣一統ニ、斬衰三年と申義にては決而有之間敷奉存候、兎角是は當時之

恩之甚也。情思舊恩。報謝在今。歟。短慮所存。聊以執達。欲着輕服之處。未尋得例也。但前一條院寬弘八年六月崩給時。小野宮記云。左大臣着輕服。有神事時。被着吉服云々。然者。御堂內覽問也。如何可量給者。予進返事云。廣大皇恩。尤可然候。內覽與關白萬機已同事。寬弘例凶事之吉例也。早令着輕服給可。宜歟。經數日。又被仰云。後一條院崩給時。宇治殿關白之間。令着輕服給之。由所尋得也。一日申旨了時。此事也。廿七日癸卯。殿下着輕服給。御直衣始令參院給也。

〔服假類聚〕大。中臣景忠卿服忌令曰。本主服一年。喪葬令曰。本主一年。法曹至要抄曰。穴記曰。家人奴婢。爲主亦一年。爲同子孫也。恩按。是義服也。重主恩。家人者着之。忘主恩。僮僕者不着之。爲義服之故。隨其志。今日之人情。異于古。仍此服。逐年而廢焉。中古以來。家人之中。蒙重恩之輩。一兩人定家僕。而着素服終期年。或家僕不多。猶有事妨家者。存生日。以家僕護嫡子。除家僕之名。不令着服者。也是雖似謀計。不忘舊實。不敗令條。於今時者。殊勝事也。

今昔物語 十九 依小兒破視侍出家語第九

今昔村上天皇御代ニ。小一條左大臣ト云フ人御ケリ。名ヲバ師尹トブ申ケル。眞信公。藤原忠平ト申ケル。關白ノ五郎ノ男子ニテナム御ケル。略中大臣內ヨリ出給テ。物共取出サムトテ。厨子ヲ開テ見給フニ。此ノ硯袋ヨリ被取出テ。糸直シク中ヨリ破レタリ。此レヲ見ルニ目モ暗レテ。奇異ク物モ思エ。不給暫ク思ヒ靜メテ。女房ニ問ヒ給フニ。不知ヌ由ヲ申ス。例ノ御淨メ參ツル程也ト申セバ。此ノ男ヲ召シテ。此ノ硯ノ破タルハ。何ナル事ゾ。汝ハ知テヤ有ルト問ヒ給ヘバ。男顔ノ色モ草ノ葉ノ様ニ成テ。袖ヲヲ打合セテ低フシテ候フ。大臣極テ腹惡キ人ニテ。目ヲ嚙ラカシテ。尊健ニ申セ申セト被責レバ。男振々テ氣ノ下ニ。若君ノ御前ノト許。二音許申ヲ。大臣何々ト音ヲ高クシテ被責バ。取出テ御覽ジツル程ニ。取口口テ打破セ給ヒタルニナムト申セバ。略中大臣ノ宜ハク。我此兒ニ目ヲナム見合マジキ。親子ノ契ナレバ。年經テハ行キ合フ事有トモ。忽ナム見ジキ。速ニ

ふしにはおもひいだすともいかでかつねにはわすれざらむと、おほせられければ、御ふくをぬぎ侍らで、この世をおくり侍らんすれば、かはらぬたもとの色に侍らば、わすれまいらすまじきつまには侍べきとそうし給ふことにその契りにたがはす、おはしければのちのみかどの御時も、色ながらことにしたがひ給けるを、御らんじて御涙もをさへあへず、かなしませ給けるとぞ、  
〔日本紀略九條〕正暦二年二月十二日癸丑、今日法皇融崩、十九日庚申、依遺詔停素服舉哀、國忌山陵、但天下諒闇、天皇及侍臣、侍女着素服。

〔春記〕長暦三年十月廿七日甲申、督殿被命云、昨日被行仁王會了、或云、爲内職事之人服身之外不着服也、重尹卿爲故皇太后宮亮之時、只御卅九日間着輕服、參内之日卽脫却了、頭人而輕輔此年中宮亮、後朱書中宮崩、藤原賴子崩、着服參内隨事、總無此例、尤爲奇云々、今代事皆非古跡、又何等事有乎云々、十一月五日壬辰、昨日主上朱書後仰云、輕輔非服身着服爲藏人頭之人、非服身之外、着服之事無其例云々、輕輔

令申云、神事間可參入、依仰欲脫服者、我更不可云、左右、只可任彼心也、重尹爲故皇太后宮亮同爲藏人、其間彼宮崩給云々、重尹裝束如何、予答云、重尹彼宮御卅九日間着輕服、參内日着吉裝束、但心喪也、仰云、太奇事也者、

〔中右記〕大治四年七月十日、從關白殿忠通給御消息云、去夕、自宇治忠實被仰云、我可着法王白

河御服給、歟、申合貴殿可進止者、情廻恩案、去嘉保二年、加首服以來、至于攝政從一位、太政大臣、一莫

非法、王深恩奉酬、其恩只在此時、但先例忽不覺侍、入道殿長藤執柄之間、三條院崩給、宇治殿原賴

通執柄之間、後冷泉院崩給、件等時、御服之由、不見歟、未引得日記侍、但後冷泉院崩給之時、宇治殿有

御服云々、是避嫌給後也、仍不相叶也、且尋先例、且廻今案、可示給也、予宗忠進返事云、件事其間

日記不候、仍不能引見候、廣大御恩、尤雖可然、先例不候者、忽難候歟、且又重可被尋歟、十七日關白

殿給御消息云、我幼少當昔奉父子契、成長如今、極人臣位、昔之道、踏萬人首、非是我運之至、偏只君



大目付

御目付 江

實相院門跡去ル十一日遷化ニ付○中略御臺様○繪川ニは御養方御弟御定式之御忌服ニ而來ル  
晦日迄殘日數御忌被爲請○中略

三月十七日

爲君主服

〔令義解九〕凡服紀者爲君○謂天父母及夫本主謂其文學家令一年

〔令集解四十〕君古記云君者指一人天皇是也中略凡君服者皆服○座聽政令行事間曹司聽本主

歸云家令等无服也○又云家人奴婢爲主亦可一年爲同子孫故也朱云則本主者未知於家人奴婢何類云不見同子孫耳○歟者何古記云同家令以下帳內實人等爲本主服以不答案還叙令帳內實人亡本主葬年之後皆申遺者即知葬年此期耳

〔類聚符宣抄四〕服紀

大納言正三位兼行右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣定方宣奉勅前奉宮○保坊司并被管諸司及爲彼宮臣者等服紀備無所見法式今須並終葬年服但有本司人者宜過卅箇日後及着本位色以從事者

延喜廿三年四月九日

大外記伴宿禰久永奉

〔西宮記臨時四〕喪服

天曆八年正月十日亥刻坐倚簾○註略此月四日村即着素服鉤色實布衣袴○同同刻左大臣實○藤原及殿上侍臣女房等於修明門外皆着素服○中略二十二日除素服出倚簾○中略侍臣女房等出修明門外除素服着皂衣

〔續世繼九〕村上のみかざの大納言○源延光にわれなからんよにわすれす思いださんすらむやなどのたまはせければいかでかつゆわすれまいらせ侍らんとこたへ申されけるををり

致挨拶候事

〔假服事〕應保二年十二月二日、臨時奉幣、右中將家通、朝臣爲御劔役、參上、件人爲故按察通重猶子、仍入道大納言通成、薨之時、除服云々、爲三ヶ月中、稱可有憚、退出了、此事如何、養伯父有服哉否、不可然事歟、但及除服至于今日者、尤可退出、本自不可有輕服事歟、

〔山槐記〕治承四年八月十五日乙未、放生會中、後聞右兵衛督中家申、姨母服之由、養母故師婦也不被用之、仍雖參入、不着極樂寺座、只供奉御輿云々、

〔速水見聞私記一〕養祖父母無服假之事

享保十四年七月三日、山口宮内少輔諡少死去八十、家督山口兵部丞少外記、是此子山口内藏助也、

爲内藏助祖父也、依而服假有之候哉、と白川神祇伯へ被尋之、養祖父には無服假之由申來に付、内藏助清り候而相勸云々、内堅丹後守物語也、

〔速水見聞私記十五〕爲養祖父請假服之事

實曆十三年正月三日、上田甲斐入道辛十五攝津守秋有實父也、秋有養子能登守、大炊御門大納言

家孝卿諸大夫也、此能登守養祖父也、仍假服之事、白河神祇伯資顯王に被尋之處、答曰、卅日假百五十日服云々、

〔服忌令撰註分釋地〕養父母之實母妻之時之事、寛政七卯年、南部伊勢守家來鈴木八郎より、池田筑後守へ問合、

養父母之實母、妻ニ而候得共、家督爲相續養子之方へは、筋目血脈無差別、祖母之續定式之忌服受候儀ニ御座候哉、

書面之通は、養方祖母妻ニ候得ば服忌無之、

〔天保集成絲綸錄五十三〕天保三辰年三月

而養方之妹之服忌之日數は、重く候得共娘定式之通忌十日服三十日受之、

其身家骨相續之養子ニ相成候處、養方之妹を養母方之伯父之養女ニ致し、姪養子を致す時、右養方之妹は從弟女之續ニ相成故、重キ方養方妹半減之服忌請之、右妹之娘は、姪ニ而も從弟違之續ニ成重キ方を用ゐ、而も實姪服忌無之、實姪之方ニ而は、伯父半減之服忌受之、時中

養母之養方之叔父、其叔父之弟を以、養子ニ致ス時は、其身之爲、是迄叔父之續之處、從弟之續ニ相成、重キ方ヲ受、叔父半減忌五日服十五日受之、

〔服忌令撰註分釋〕元文元辰年三月八日伊豆守殿御トテ被成候御附札左之通

大目付

御目付

此度相改候服忌令追加之内、江相加り候而も可然哉と奉存候趣、左に申上候、

一養子に參候もの、無據子細有之、又外、江養子に成候時は、其二度目之養子之親類は、相互ニ定式之服忌可受之、最初に被養候方者養父母計之服忌を可受、并親類之服忌は如何可有御座哉、勿論本實父母は定式之服忌を受け、其外本實之親類者、服忌は又如何御座候哉、

御附札

一最初之養父母は服忌無之候、若元より續有之候得者、實方に候故、其續之半減之服忌可受之事、

一總而親類は對面無之、又は義絶いたし候而も服忌受申事に候、或は他人に而も、幼少より其人之世話を請存生之時も養父母同前に敬ひ、死候時は三十日或五十日慎可申儀者、人々之志次第之事情、然ども元續無之におひては、服忌之不及沙汰候、畢竟服忌者親族にとり愁傷之儀とは別段に而候、此兩様にたる事に候故、服忌之品尋候者、不審も可有哉、右之趣を以宜

養母先夫之女子有之、其女子へ先方之方ニ而、娚養子致候時、右之女子は異父兄弟定式之服忌請之、右娚養子たる者は、異父兄弟之名目無之、

養母之先夫之女子へ、娚養子たる者も、異父兄弟ニ准候忌服と答有之、前條と異也可、礼

嫡孫 忌三十日

養父部屋住之内養子ニ相成候處、養父病氣ニ付、右養子たる者、嫡孫承祖ニ相願候節、養父母は相且ニ不爲相續、養父母ニ相當り、三十日百五十日之服忌、其外親類服忌無差別と有之、而ば養父母計は服忌輕ク相成、養方之親類は、定式之服忌請候哉之儀は、右養子たる者、嫡孫承祖ニ不相成以前、養父部屋住之内之養子ニ而、家督相續せざる養子ニ付、養方之兄弟姉妹は、相互ニ半減之服忌請之、其外養方親類服忌無之、實方親類定式之服忌之處、嫡孫承祖願相濟候得ば、家督相續相定候ニ付、養方親類、都而定式之服忌請之、實方は父母は定式之通、其外親類は半減之服忌受之、兩様之續之都

養子ニ罷越候處、養父も兄之養子ニ相成候者ニ付、養父之實母は、祖母之續ニ候得共、養方ニ而は曾祖母之續ニ成、然る時は、養父之實方服忌無之ニ付、養曾祖母定式之服忌請之、略中

養父は兄之養子ニ相成候時は、養方伯母は、大伯母ニ相成候、養父之實方服忌無之、養父之養方ニ而も、大伯母服忌無之、

養父は兄之養子ニ相成候故、養方之實妹は、大叔母之續ニ成、服忌無之、且亦父も養子、其身も養子之時は、養父實方服忌無之ニ付、養叔母服忌無之、略中

其身之甥之家を、養母方之叔父致相續候時は、又甥之續ニ相成服忌無之、養母方之叔父半減之服忌請之、略中

其身養子ニ罷越、家督致相續候以後、養方之妹を養女ニ致候上、娚養子致候時、右養女兩様之續ニ



繼父母 忌三十日

養子ニ罷越候以後養父後妻を迎候得ば、則繼母ニ而候、右之繼母を以、養母ニ定候儀、養父之存寄次弟之事ニ候、然る時は、略中繼母方之親類ニは服忌無之、

養女 忌三十日

養女致し、入贅を取候歟、或は他へ縁付候歟、御奉公ニ出候時は、略中養方之親類相互ニ定式之服忌受之、略中

養女ニ致置候迄ニ而入贅も不取、縁ニも不付、又は御奉公ニも不出候時は、略中養方兄弟姉妹計相互ニ半減之服忌請之、此外養方親類ニは服忌無之、略中

養女他へ嫁し、子出生し、離縁養方へ歸り居候時は、略中養方親類相互ニ定式之服忌請之、略中

養女致し、他へ縁付、右養女之妹を、又候養女ニ致し、贅養子ニ而其家相續之時は、他へ嫁候養女と、贅養子たる者は、養方兄弟定式之通服忌請之、

祖父母 忌三十日 養方定式 實方半減

養父之母、家女ニ候得ば、家督相續之養子ニ而も、祖母服忌無之、并養母之母、家女ニ候得ば、前條之通服忌無之、

養父之繼母は、服忌無之、并養母之嫡母繼母も准之、

伯叔父姑 忌二十日 養方定式 母方 忌三十日 養方定式 實方半減

養母方之叔父、他家へ養子之時は、叔父半減之服忌請之、

異父兄弟姉妹 忌三十日 養方定式 實方半減

養子たる者、養母先夫之子有之時は、異父兄弟姉妹同例にて、相互に定式之服忌請之、  
妾腹之子、嫡母繼母之養ひになり、右嫡母繼母先夫之子有之候時は、異父兄弟姉妹同例服忌受之、

久我大納言殿

葉室前大納言殿

〔兼胤卿記〕寶曆六年八月三日、依御招兩人詣關白殿。○一條道香被仰云、高屋遠江守事、兄三宅中務錄雖死去、無服假之由、斷縁之間、是迄實方之假服不受之由、可被申渡、被命之間、爲心得被仰聞之由也、

〔天保集成絲綸錄 三十四〕寛政七年九月

大目付江

松平筑前守○黒田齊隆卒去ニ付、公方様○徳川家實御實方弟御半減之御忌服被爲請、御忌者日數相立候

ニ付、今一日御遠慮被遊候事、

〔百練抄五〕寛治三年十月四日、諸卿定申源隆子莫事。右大臣源隆子件人雖爲當今外祖母、前中宮河后

改姓爲藤氏、仍令諸道勘申之、就所養不可有錫紵、但廢朝三ヶ日之由被定了、凡爲人養子之者、本生傍親服不可着之由、僉議了、

爲所養家服

〔法曹至要抄下〕養祖父母無服假事

儀制令五等親條、朱書云、養祖父母不入等親、

案之雖、令入等親輩之中、有無服假之法者、不入等親之族、未見可着服之文、然則養祖父母、已非等

親、何令着服矣、

〔令集解四十〕朱云、問養父母者、未知於養祖父母何、頼云、不見也、可來者何、

〔喪服議例抄〕養父母 忌三十日 遠路相續 忌五十日  
服百匁十日 分途配當 服十三日

名跡致相續候節、養父之妻は懷妊ニ而里方へ相戻、其以後名跡致相續候者、養父之妻は養母ニ可准處、里方へ相返し候得ば、離縁ニ准ジ服忌之不及沙汰、但懷妊ニ而罷歸、其以後出生之子は、養方兄弟定式之服忌請之、

廿一日爲滿限歟、凡不可然歟、但御賜食事也、又已過了更憚之、聊似可有差歟之旨申入之、亞相披露歸出、被示云、能々御思案、所詮有被思食子細、爲寢殿上様二位殿之姉也御猶子、向後不可令受本生外戚之服給云々、

〔親長卿記〕明應四年九月十一日、有女房奉書島丸冬光故日野前左府男、今度日野中納言政實、去五日、冬光公二男、賴他人家、仍可有輕服哉否事、伯二位忠富可有輕服云々、仍有勅問子細見于女房奉書、申恩報候、

かしこより候てうけ給候ぬ、冬光輕服の事につきてうけ給候ぬ、舊院の御代、うらついちの上擲の事、さ様にさふらひしと存候、それも御沙汰をへられぬ事は候はじと存候、其外も一向他人になり、何も本生の服さたといふ御事とも候じと存候、又服のある事も候しやらん、觀應の記おりふし座右に誤程に、まゐるし候てげざんに入候よし御心へ候て、御披露候べく候かしく、  
中國相國記 往折威 觀應二年正月十八日、大納言入道 實、宣光門院 子實、明、賴女、依、爲山本相國 公、守、猶

子、無服假之儀、御沙汰之様不得聞、

〔基量卿記〕元祿五年四月四日、清水谷亞相公、實、先日被尋條々、武者小路侍從公、被、莫、件亞相實父方伯父也、可着服歟、此度江戸御使被仰出之間、難儀也、養父方傍親服着之間、實父方不可着歟、先例兩様也、如何被尋之間、則百練抄、拾芥抄、北山抄等ニ、先例分明之上者、實父方着服無之歟之由返答、則類聚雜稿抄、再借遣了、右之趣漏其通ニ伯○白川、可被申、并一條殿下○冬、其通ニ御治定、依之此度不及着服也、此儀先日被尋之儀、失念之間、今日記置了、

〔續百一錄〕延享三年八月二十五日子

實父方姉死去候、二十日假、九十日着服候、爲御届、如是御座候也、

八月二十五日

資枝野〇日

議庶事之間也。語及此事，召子被問明法博士有異國任道志。中原範政申云：有異範政云：付本姓方可有七日服。國任云：所養方可有服也。三人所申已不同也。此事議定，公卿被申云：昔一條院御時，允亮允正二人博士所申如此，從昔及今不同也。允亮付本姓方者，允正付所養方者。但外宮主典七日服假出來，仍被尋宮司福宜等申云：內外宮雖造宮使，七日服昔無其忌。今度造宮使公義，七日服出來，已改定被補替了者，人々被申云：有事疑者，神慮難量，他人奉行何事有哉。

〔中右記〕大治二年三月二日，皇后宮權大夫師時依仰。○白河皇女令子內親王母藤原實子、藤原實美女實源、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。莫有無如何。年來付所養方，不令着御本姓服，而今度明法勘申云：可棄本姓方之由，令條無所見云々。可量申者，子○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。進返事云：明法可被用本姓方之由，申口御燈御

祓可有其憚歟。且又尋先例可被左右之由申了。

〔殿曆〕永久三年二月十三日癸丑，裏書今日故殿。○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。女子○忠實養方字治永實法印同母也。件人昨日午刻死去云々，仍余○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。并一家人皆服也。其由奏院○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。春日行幸延引○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。行事○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。所雖然

度奉行幸，夜中許還來云：雖付養父，本生方又有服云々。然者不可然歟，仍不定也。

〔吉田家日次記〕貞治五年七月八日戊子，今日大宮中納言○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。尋云：代々法師子異姓他人之子ニ成，然而實父弟他界可有服假歟，不可有歟如何。予○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。答云：雖爲不孝子，猶受本姓之服假候，又自年少爲他人之子被養育，雖受繼其跡，至于本姓之父母并傍親之服假者，一切不相通候。古今間如此忌來候，可受叔父服假○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。十日○藤原實子、藤原實美、藤原房女、送消息云：明日御燈御祓依入道大相國。候，內々可得御意候。

〔吉田家日次記〕應永十年十月十八日壬戌，晝程自北山殿○足利有召，北小路前大納言奉也，倒衣揚鞭馳參被仰下云：御喝食御所，具於田舍去月十日有事之由，去夕告申之來。廿三日御參宮如何。申入云：三十日御輕服，此內十日御假也。而三十日已馳過了，滿限之後始聞之，以假半分憚之。五ヶ日以來



養女ニ致置候迄ニテ入<sup>茂</sup>不取縁ニ<sup>茂</sup>不付又は御奉公ニも不出候時は<sup>略</sup>○中 實方は定式之通相互ニ服忌請之<sup>略</sup>○中

養女他<sup>江</sup>嫁し子出生し離縁養方<sup>江</sup>歸り居候時は<sup>略</sup>○中 實方は父母は定式祖父母伯叔父姑は半

減之服忌請之兄弟姉妹は相互ニ半減之服忌請之其外實方之親類服忌無之

養女他<sup>江</sup>嫁候上離縁ニ而養方<sup>江</sup>歸り罷在候時は右は病身ニ付總領除キ致し候養子ニ准じ<sup>略</sup>○中

略 實方は定式之通之服忌受之

伯叔父姑<sup>服忌二十日</sup> 養方定式<sup>略</sup>○中 減

父は養子ニ而其子實子之時右實子他家へ養子ニ相成候得ば實父之養實方之伯叔父姑半減之

服忌請之

異父兄弟姉妹<sup>服忌三十日</sup> 養方定式<sup>略</sup>○中 減

實方之異父兄弟姉妹は相互ニ半減之服忌受之右實方之異父兄弟姉妹他家へ養はる、其儘

半減之服忌受之

〔中右記〕寛治八年<sup>元</sup>○嘉保 正月十日壬午此曉正四位上行修理權大夫播磨守藤原朝臣師信<sup>師信</sup>卒

去<sup>年</sup>○中<sup>略</sup> 今夜内大臣殿<sup>師通</sup> 二條亭東對初新造之後有御渡出自西御門入御東門右衛門督

左大辨殿上人五六輩祇候密々之儀者仍無<sup>無</sup>撰<sup>撰</sup>并紙抑内大臣殿北方是入道大納言<sup>師通</sup> 女母

師信也雖可有師信朝臣服依爲前太政大臣殿<sup>師通</sup> 養子不可有服假仍有此御渡云々

〔中右記〕嘉保二年五月四日參内依當番供御膳晚頭退出之次參殿下<sup>師通</sup> 令經敏申事治部卿<sup>師通</sup>

後<sup>原</sup> 被申旨備中守政長朝臣女房已逝者依爲從父姉妹七ヶ日服可候也而我已爲故山井大納言

養子仍不可有服假也雖然遷宮行事可隨重仰者仰云明日重日也明後日早旦可來向可沙汰也者

六日早旦參殿下付有信申<sup>略</sup> 驚治部卿服假事<sup>略</sup> 于時帥大納言民部卿治部卿江中納言參來食

余○藤原以不審尋問事等○中

一本生所養服事

申云可有兩方服

輕服之人除服之後假日數之內其忌重日數過之後其忌輕哉如何將无差別歟

申云無差別只自事也

〔喪服議例抄〕嫡母 忌三十日

他へ養女ニ相成候者は實方之嫡母は服忌無之然處他へ養女ニ相成候計ニ而入智も不取縁ニ

も不付又は御奉公ニも不出候時は實方之嫡母服忌請之是は不爲相續養子と同例也

繼父母 忌三十日

實母死去後實母之妹を以父之後妻ニ致候得ば則繼母ニ候其身も他家相續之養子ニ罷越候得

ば實方之繼母は服忌無之實方之叔母半減之服忌請之

養子 忌三十日 遠跡相續 忌二十日 分地配當 忌九十日

養子願書差出未被仰付内養方之親類死去服忌無之實方之親類は相互ニ定式之服忌受之跡目

不被仰付内養方之親類相果忌之日數之内家督と相定候得ば殘る日數定式之通服忌受之右同

斷實方之親類相果定式之服忌請候内家督相定候得ば實方は半減之殘る日數服忌請之若半減

之日數相立候得ば不及請

養女 忌三十日

養女致し入智を取候歟或は他江縁付候歟御奉公ニ出候時は○中實方父母は定式之通服忌請

之祖父母伯叔父姑は半減之服忌請之兄弟姉妹は相互ニ半減之服忌請之此外實方ニは服忌無

之

〔資益王記〕文明十六年三月十三日、故五條爲親死去後、今五條文治丸高辻長直妻可爲子之由、彼實母申定候て下向播州、當年正月死去之由、注進後、實母可爲高辻妻之子之由、令契約之上者、不可着服候哉否之由、被尋仰出了、入見參候様御返事可有御申候、

忠富

故五條爲親死去之後、今五條文治丸高辻長直妻可爲子之由、彼實母令契約之間、不可着服否事、彼子、長直爲子遺跡可相續分候者、不可着服候歟、爲親遺跡相續分候者、猶實母之着服之條、勿論事候哉、

資益

〔基熙公記〕延寶七年十一月三日甲午、平少納言時方朝臣來、一位大納言○御原之事後始所來也、爲外祖父假廿日也、日次依不宜、未申除服之儀云々、此序談云、左衛門督爲一位末子、相續藤波家、然所今度卅日百五十日服假云々、伯二位○白川雅光所指南也、不審千萬、雖爲實子、相續他家之上は無服也、其理如何、重而可尋、

〔服忌令撰註分釋地〕兄弟之養子ニ成、親祖父之續ニ成候時之事、明和五子年四月、松平龜之助家來より服忌掛へ問合、

龜之助實父志摩守、今亥中刻死去いたし候、龜之助儀、大隅守養子ニ相成候付、祖父之服忌受可申哉、父之服忌受可申哉、

父之服忌可被受候

爲本生家服

〔法曹至要抄下〕養子可着本姓傍親服假、不可有着所養傍親服假事、  
喪非令云、服紀者養父母五月即養父母爲子一月養子妻妾於夫之養父母亦三

案之爲所養可着服者、養父母養子并養子之妻妾等也、所養之方、此外之養子親着服之由、全無所見、然則可有本生傍親之服假、不可有着所養傍親之服假矣、

〔玉海〕安元元年十二月廿日丁酉、明法博士範貞來、依召也、

雖相屈爲猶子之間、無忌服之由當審姉小路大納言へ入了、

右妻室昨夜迫危急ニ付、予攝政殿○一條へ申、園池三位先室實は松平越後守娘之處、櫛笥故一

位息女ニ而、園池へ嫁候處、死去之節も、櫛笥無忌服候、是の當之儀ニ候間、日野西妻死去候共、櫛

原不請假服可相濟口申内談、命云、櫛笥節は、其通ニ而可相濟歟、相當時は先達而柳原娘と届有

之上は内々は如何様ニ而も、表向實子之間、不請忌服儀如何ニ候、如本式請假服可然、乍然柳原

有忌服之上は、大夫典侍も兄弟之假服無之候而は如何候、今夜長橋は内侍所へ參向、大典侍は、

依、月水發退出之間、大夫典侍之儀、姉小路を以、大典侍江御談明、朝柳原請假服哉否可被命之由、

今朝賜御實大夫典侍、實他人之間、不請服忌之由、大典侍被申入、然ル上は柳原も無服假候、乍然

一兩日は引籠可然候、尤猶子之間、無服假由議奏中迄、柳原より申入可然之由依命、右之通取計

之、仍柳原今明日稱所勞不參也、

〔兼胤卿記〕安永二年五月五日、土井大炊頭○京師所養子遠江守、去月晦日死去ニ付、大炊頭儀來十

九日迄廿日之假、七月晦日迄九十日着服之由届ニ付、關白殿○近衛へ以書狀申入、

〔令義解九釋〕凡服紀者○中養父母五月○其養子爲一本生一年、即養父母爲子一月也、

〔令義解四釋〕釋云、養父母爲養子服庶子服也、穴云、於本生父母一年不依令釋也、

〔令集解十三賦役〕古記云、○中一云、○中左兵衛大荒木牛養爲所養父先解任復任後本生父母死、仍請翼

金○翼恐葛井連男成答贈左大臣藤原尊依、令爲人後者、不在兄弟之子不得出身、然則以父代伯宜爲

本生又五月服假給耳、

〔北山抄拾遺雜抄〕請假事

近代例、爲養父母爲重喪、爲本生父母爲輕服、此事大違法式○中本生父母、雖爲他養子、不可改其

爲本生父母服



兼而養女ニ不極縁組之期ニ至リ養女奉願他へ縁付候得ば養女定式之通服忌請之。略中  
 養方之妹を養女ニ致し入賀を取候得ば養女之服忌請之且又右之養女へ入賀も不取候得ば重  
 キ方を請候間養方妹定式之服忌請之

養女奉願他へ縁付候處右之養女を致義絶候共父子之縁不離候故養女定式之服忌請之

〔經房卿記〕永保元年十二月十五日申刻左衛門權佐行家送書狀云

殿○藤原實家御消息云右大臣○源子僧基左衛門佐死去云々而右大臣爲宇治殿○藤原賴通御養子之儀者

可有御服歟法家不請養傍親服云々爲之如何者令申云只今可令參啓之由可被申也者其後參殿  
 相逢行家云養傍親服假事世間所爲已無一定但師兼宰相右大臣卒去之時定被一定歟金吾答云

殿下思食出云件宰相事有沙汰不令着服

〔兼胤卿記〕寶曆二年七月十九日依召參女院○櫻町后二御所被謁小督局内々被示云青蓮院宮○御

養子御所勞自昨夜急變有之被及大切之由被聞召候若及事候共御養子之儀ニ候間不及御着服

之御沙汰候女御之間ハ等親服悉被着候立后之後ハ御父母之外無御服候由櫻町院仰有之候尙

又先例御吟味之處新上西門院○重元后靈司二房輔公薨去候時雖御連枝無御着服候且亦耕

宮ニも無御服忌候先年寶蓮華院宮薨去之時青蓮院宮子時重可有御着服哉櫻町院江被伺候處

御養子之儀ニ候間不及御着服候由仰云々其段被仰達候處被爲着服度由再應被相願候ニ付其

上ハ勝手次第櫻町院被仰候ニ付被着服候是ハ乍各別之儀紛敷可有之哉被思召ニ付青蓮

院故宮尊祐親王薨去之時有栖川中務卿宮着服哉否内々被尋下候處無着服候中務卿宮ハ重元

的王ハ御養子之例也依之彌不及御着服被思食定候若攝政實一坏不害も有之候者此思召之趣可演說

之由也廿日攝政入置了

〔兼胤卿記〕寶曆二年十二月五日日野西辨妻室今曉死去候右妻は柳原大納言息女之由婚禮之節

此度死去仕候故、即昨日御届申上候通、養母ニ而五旬十三月之假服届差出候處、傳奏月番六條家ヨリ段々取調有之、其往來殊外隙取廣橋も又々及相談、以差圖養母ノ養ノ字ヲ去リ母ト計認替差出相濟申候。○中宮内少輔委細承知御届之儀ニ有之候間、後刻可言上御届書取替之儀、承候旨被申、仍宜頼入旨申退出、

向細川家右之申述且承處武藏事、實方祖母トシ、三十日假百五十日着服、尤混穢之旨届替被差出治定云々、

〔令義解九〕凡服紀者、○中養父母五月、謂其養子爲本生一年、即養父母爲子一月也、

〔令集解四十〕釋云、養父母爲養子服、庶子服也、穴云、衆子一月、養子亦同、

〔喪服議例抄〕養子服三十日、遺跡相續分地配當服九十日、

養子願差出、未、被仰付内、養子死去之時は、願候迄ニ而、未養子ト不定内ニ付、養父母の方へ服忌之不及沙汰。○中

養父之實子を養子ニ致、總領ニ立置候處、病身ニ付、嫡子相除キ、其身之實子を總領ニ奉願候上は、總領相除キ候、養子は、末子之服忌請之且、又總領除キニ相成候者よりは、兄之服忌請之、右は實兄嫡子ニ立心ニ候。○中

家督相續分地配當せざる養子、其父之爲ニ養子被召出、新規御給分被下候共、忌三十日服百五十日、養子死去忌十日服三十日、

家督相續之養子は、未家督不讓部屋住之内死去候共、嫡子定式之通、忌二十日服九十日、

養女

養女之服忌は假令養女ニ致候計ニ而も、或は他へ縁付候歟、入智を取候共、忌十日服三十日請之、但婚禮ニ付而之養女は忌服之不及沙汰。○中

人死去之旨告來由依之假服之有無穿鑿ニ成予へ相談有之故養母と被定ば雙方之情可然様ニ存其趣申談處三臈甚感服仍其通相成今度モ養方ナレバ三臈一人無假服阿波同腹兄弟衆は各假服届被差出等相成也九月廿五日丁丑細川武藏來面三臈傳言被示曰母儀昨日急變有之自

昨夜及危篤由仍届書以下之事相談有之旨也○中略

自細川家假服届切紙來持題也如例請道如左

養母昨夜致死去候依之五旬假十三ヶ月着服候尤混穢候仍爲御届如是候也

九月廿五日

常顯

極 臈 殿

差次藏人殿

新藏人殿○中略

寅刻頃細川武藏來面先刻假服届同番傳奏六條家差出一旦落手之處未刻頃家來招來養母ニ而者三十日百五十日之假服故養ノ字ヲ去母ト計畫改可然之旨故自夫數度往來ニ成段々雙方共意味難相分遂亥刻頃松室常陸ヲ以向六條家意味委細及演說漸相分然則最初廣橋相談之事故向廣橋家其意味相談可然差圖ニ付自夫直ニ常陸向廣橋家段々懸合之意味并當春二月差圖之時儀等申述被談處何分一旦五旬十三月之届書差出事故減省相成間敷然則六條家差圖之通養字ヲ去母ト計畫替差出可然尤今晚中ニ何方も取替可差出○中略即刻萬里小路家へ届書替爲

持道子時寅刻過也尤養母之養ノ字ヲ去リ母ト許リ書改其餘は先文之通也即過刻差出候一紙直ニ取

替被返相濟了廿六日戊寅早朝參近衛殿以諸大夫齋藤宮内少輔申上曰細川源藏人母之儀當

春二月養母ニ相改候趣御届申上尤自幼年預養育候恩有之其上受家督ノ事故萬歲之後者五旬十三ヶ月着服覺悟勿論之事ニ而則其節廣橋内談仕以差圖御届申上且由緒書モ相改置候事也

〔先哲叢談 續編三〕松下眞山

眞山歳三十七、遺見林○眞山 養父、卒、特爲之服三年喪、或難之曰、不爲本生父服之、苟服、義父喪、幾乎不可、眞山曰、既爲之嗣、受其鞠養、出冒他姓、不得不爲如此、

〔常憲院殿御實紀 五十二〕寶永二年十月六日、紀邸に、土屋相模守政直、大久保加賀守忠増、御使し、内

藏頭頼職朝臣没前の願ひにより、主税頭頼方○頼職弟、即 頼方 吉宗を嗣子とし、襲封あるべき旨仰出され、  
略○中頼方には、けふより忌五十日服、十三月たるべしと仰下さる、

〔大江俊章卒去之記〕寶曆十二年九月廿五日、小番所へ俊興届如左、  
切紙ニ而申 遺上包中紙、

養父俊章儀、今日致死去候、依之五旬之間、小番不參仕候、已上、

九月廿五日

俊興

小番頭御中

〔公卿補任 後柏原〕永正十一年

參議從三位藤原公晉 十二月日喪養母輕服

〔大江俊矩記〕文化七年二月十六日庚子、細川源藏人母儀、今度養母ニ被立事、今日於宮中有相談故、愚存申述、即予相談、廣橋亞相風定稱申處、尙又被尋父卿、其通有子細間敷間、向後養母ニ相定可然、即廣橋相談之趣ヲ以、陽明御届可申上置、且又此後改之節、由結書亦可改置旨、胤定卿被示、其通三薦へ申入置了、今日退出掛、陽明御届可被申答也、是迄由緒書ニは、母ト計相認有之由、全體は繼母ニ候得共、幼少より養育之恩有之事故、養母ニ相立、萬歳之後は、五旬十三月着服本意之由、尤父存生中は、始終七月十四日ニモ參勤致來候事故、兎角繼母ニハ難相立、され共、實母之正忌、是迄内々ニ致有しからは、先實母同前之あしらひ、實母とすれば、眞實之實母薄ク成、殊常芳嫡妻之假服有し事故、實母は嫡妻ニ相違無之年來此事、甚苦心有之趣、兼而唯承居處、今日右後室之兄弟、在府之



正月九日

四位大外記殿

實父養父兩度着重服例事

雖引勘候當時家記紛失候之間管見不詳候、但仁明天皇承和七年五月八日、淳和崩、雖爲叔父、依擬  
父帝諒闇同九年七月十五日、嵯峨上皇崩、雖擬祖帝、依爲實父諒闇御孝心深切之故、兩度御着服云  
云臣下ニモ其例同様存候、廣御尋可然候哉、師富誠恐謹言、

正月九日

今度就室町殿御着服儀、實父養父有事之時、兩度重服例可勘申之由蒙仰候、此事既古來法令家所  
口神祇官所論雖異、同多端沿革區分、養子者當理着之、實父者至孝之者之所以續一跡也、所以存問  
極也、依其所意、着實父養父之例、不能左右歟、件條々度々及其沙汰也、仍文永年中、中原章國勘答  
所載、兩度之重服勿論也、去年慈照院殿御時、無御着服之上者、今度殊以可有御着服哉、於除服復任  
者、雖輕服宜下事也、又廣可被訪先例者歟、雅久誠恐頓首謹言、

正月十日

雅久上

〔季連宿禰記〕元祿十四年二月廿三日辛巳、左少史亮仲來云、行事官相續、一昨日廿一自津國高槻令

上洛云々、實名章純、呼名織部、近日養父故季雄之忌中過明之間、忌中限以後來廿五日可召具、其日

一級之事可申上之間、可執給云々、亮仲云、章純着服之事、尋申白川家之處、可爲百五十日之由被命

云々、十一月四日丁亥、左少史故亮仲相續山口源六來、權少外記中原友昌召連之福子一箱今日

初而相逢之、近日官位可申上、可執給之由申之、件源六爲養父亮仲假卅日服百五十日云々、此事尋

申白川家之處、可爲此分之由有命云々、行事官章純、養父之服假、又爲此分云々、但爲遺跡相續之間、

可爲重服歟、然而白川家商量之上者、不及子細、

恩按依繼遺跡養子如本生父母者一年之服事雖違令條并法家之定中古以來略有其例可任其  
人之心也抑正服者父子兄弟親族不無增減之道義服者本主養父母隨其志之故依時宜有增減  
之例歟一年服於道理者不叶既無服之他人依遺跡相續之恩准祖父母五月着服不可謂不足淡  
海公之定有其故乎法曹至要抄云嫡孫承祖與父母同一年云々按之祖父母正服五月養父母義  
服亦五月也五月着服之時者似不知家相續之恩因茲着一并服是加服也法家之定又有謂乎繼  
他遺跡養子爲養父母一年服雖過法養父母之心着一一年之服事好之爲本生父母着服事嫌之是  
故適知古實之子雖有之不任于心難變改歟實重養父母之恩者如法五月着服一并心喪可叶其  
理歟今時之形勢一年有着服之名而其身之行狀如尋常甚劣于心喪乎凡心喪者服紀有其限雖  
難背于法令猶不忘重恩哀戚之情不垢仍居心喪是起於實心也表稱着一并之服不從公役裏作  
音樂設遊宴豈可謂知恩人哉且不受本生父母之服而着其親族之服既本生之父母爲他人而何  
有其親族之服哉不得其意縱爲養父母雖一年之服爲本生父母亦必可受一年之服也於神宮者  
古來不易守令條爲養父母服百五十日爲本生父母服一年也

〔儀禮註疏卷十〕爲人後者疏傳曰何以三年也受重者必以尊服服之何如而可爲之後同宗則可  
爲之後何如而可以爲人後支子可也爲所後者之祖父母妻妻之父母昆弟昆弟之子若子註若子  
者爲所爲後之親一如親子

〔服假類聚四〕實父養父兩度着重服否事

滋野井公澄卿服假部類曰延德三年正月十一日家記云室町殿足利御凶服事去年慈照院殿足利  
政義御事之時雖可有御着服准后御坐之間依有其憚被加御掛酌雖然御除服復任被宣下畢抑今  
度御着可爲御本望之間實父足利養父足利兩度重服候哉能々可被引勘之兩度之儀無先規  
者今度可爲御輕服歟早々可有御治定之間今日中可被勘申之由被仰下候也謹言

無コト、貞觀十四年十月ノ勅ニ見エタリ、仍テ此兩公ノ跡ヲ考フルニ、往時父母ノ喪ニハ、必解官シテ、一周ノ後任官ス、奪情從公ノ輩モ、先解官シテ、數月ノ後別勅ニテ官ニ起ツ例ナリ、然ルニ三代實錄ノ所見、貞觀十四年九月二日ニ、忠仁公薨セラレテ、十月十日ノ所ニ、正三位守右大臣兼行左近衛大將藤原朝臣基經トアレバ、昭宣公ハ解官セラレズ、若強テ云バ、九月二日ヨリ解官シテ、十月十日ヨリ前ニ復任セル歟ト云ン、然レドモ同月十三日ノ所ニ、右大臣基經上表、辭大臣職曰、伏奉恩宣、以去八月十五日任右大臣、昔甘羅之一十餘二、以多智不爲少年、今微臣之三十有七、以無才猶謂太早、伏願陛下鴻慈、聽臣愚悃、退臣所帶、俾槐路絕、曠官之聲トアレバ、昭宣公ノ右大臣ハ、忠仁公ノ薨ゼザル前八月十五日ニ任セラレシマ、ナルト見エタリ、且官ヲ辭スルニ喪ノ事ニハ拘ラズシテ、謙ヲ以テ之ヲ辭セラレタレバ、忠仁公ノ事ニ依テ解官セラレザル事明ナリ、實ニ忠仁公ノ養子タル證アラバ、此ヲ以テ實父ノ服ニ同ジカラザル明證ト爲テ可ナリ、然レドモ忠仁公ノ養子ト爲ト云コト、人口ノ云傳ソル而已ニシテ、證ト爲ベキ文ヲ見ズ、忠仁公ノ終ニ臨ミテ、昭宣公ニ屬セシ詞ニモ、吾既無男、汝即猶子トアリ、清和天皇ノ昭宣公ニ賜フ勅ニモ、卿感其猶子之愛、甚於喪父之傷トアリ、昭宣公ノ表ノ文ニモ、亡叔忠仁公、屬續之タトアリテ、並ニ父トモ子トモ云ズ、但昭宣公、其兄國經卿ヨリハ、官位モ貴ク且早進ミ、忠仁公薨セラレシ時モ、其兄國經卿ハ事ニ關ラズシテ、勅モ表モ昭宣公ニ出人ス、是忠仁公ノ養子ナルニ似タリト雖、國經卿ハ昭宣公ノ兄ナルト云コト、是亦明文ヲ見ズ、且縱ヒ兄ニテモ國經卿ハ庶兄ニテ、昭宣公コソ其父長良卿ノ嫡子ナランモ知ベカラズ、忠仁公男ナクバ、猶子沒後ノ事ヲ進退スベシ、猶子ノ中ニテハ、嫡子專關ルベキ事歟、然レバ昭宣公ノ事跡モ、養子ノ徵ト爲ルニハ足ズ、

〔服假類聚〕大中臣景忠卿服忌異說辨論云、養父母服五月假三十日、○中略

紀父母ニハ十三月假ハ五十日養父母ニハ五月假ハ三十日但遺跡相續分地配當ノ養子ハ其養父母ノ爲ニスル事本生ノ父母ト同ジ今養子スル者ハ遺跡相續分地配當ニ非ザル者少ナシ故ニ養子タル者十ガ九ハ其父母ニ於ケル本生ノ父母ニ同ジ是ヲ以テ案ズルニ古ハ世祿ノ者至テ希ナリ皆官位ノ昇進ニ從フテ食封食田食祿等増益スル而已ニシテ其子ニ傳フルニ非ズ父ノ位ニ蔭スル事モ兄弟ノ子ヲ養子セルニ非ザレバ出身スル事能ハズ唯人ノ後タル者其先人ノ第宅資財ヲ受クルノミ然レバ養父ノ恩タル本生ノ父ニ比ブベクモ非故ニ古ノ制養父母ニ薄キト見エタリ爰ニ一ノ間ヲ設ケテ云戸令曰凡功田大功世々不絶上功傳三世中功傳二世下功傳子祿令曰凡五位以上以功食封者其身亡者大功減半傳三世上功減三分之二傳二世中功減四分之三傳子トアリ若其功田功封アル家ニ養子セバ父亡シテ後養子其功田功封ヲ受ルヤ否ヤ受タラバ今ノ世ニ云フ遺跡相續分地配當ニ同ジ然ル時モ其養父ノ服ヲ受クル事常ノ養父ノ如クナランヤ抑實父ノ如クナランヤ答テ云ク戸令應分ノ條ノ本注ニ其功田功封唯入男女義解謂不依財物之法男女嫡庶並皆均分也トアリテ養子ノ事ハ論ゼズト雖法曹至要抄養子承分事ノ條ニ戸令應分ノ條ヲ引テ養子亦同此所ノ文今ノ印本多トアリ是ハ家人奴婢田宅資財ヲ分ツ法ナレドモ此ニ准ジテ功田功封モ養子均分シテ受ベキナリ但受タリト云フトモ養父ニ喪スル事實父ノ如クト制セル文ヲ見ザレバ猶養父母ノ定ニ從フベキ歟

一功田功封アル家ニ養子シテ其養父ノ死セル時服紀如何ナリシト云事之ヲ國史ニ考ヘ略記錄ニ尋ヌルニ明文ナシ凡養子ノ事令ニハ其法アレドモ國史等ノ文ニ某ハ某ノ養子ト云ヘル事至リテ見エザレバ先例審ナラズ但其中ニ昭宣公基ハ忠仁公房ノ姪ニシテ長良卿ノ子ナリ而シテ忠仁公養子ト爲ト云事世ニ普ク云トコロナリ其忠仁公ノ封ハ永々絶ルコト



不被仰付、養ひ者一向受不申義に候得共、養方忌服定式不受候様之御定者、甚重き儀と奉存候。養方里方ニ戻し候而者、再縁不仕内者、やはり養母定式之服忌受候儀、年來一日ニても養ひを受候厚恩を忘れ不申候ため之義、雖有御趣意奉存候、併再縁仕候得者、實母と者違ひ、又輕き事故、再縁を限りに、養母子之情離候義と奉存候。服忌令被仰出候以來有之心得にて、取扱來り申候義ニ御座候。先年私義取扱、御目附勤役仕候、十ヶ年來取扱、其砌掛り大目附池田先筑後守、養子ニ御取扱重き御趣意、五常之道理第一之義、雖有評儀仕候義ニ御座候。此度評義之趣者、養子願書御請取を定ニ仕候得ば、差戻願ひ御請取も定ニ可仕評義者、前後相當不仕候。願書御請取之處者、前後同様御座候得共、前書申上候通り、養ひを請不申以前より、定式之服忌者、御定通り受不申。差戻願書を進達相濟候て、服忌受させ申間敷と申候者、是迄養ひを受候重き恩を忘申候に相當り、第一實情無御座候。甚如何哉ニ奉存候。且又繼母之義も申上候得共、是者前條之儀にて、養母之見競ニ相成候趣意ニ者無御座候。數年來追加之御文意、相當之義ニ御座候間、御定之通り相心得候方可然哉ニ奉存候。當時服忌之相掛り不申候義ニ御座候得共、御尋之義ニ付、此段申上候。以上。

六月

桑原伊豫守

【羽倉考】君臣養父母服紀微考

一喪葬令曰、凡服紀者爲君父母及夫、本年一年、祖父父母五月、義解謂其養子爲本生父母、一年、即養父母爲子、一月也。假事令曰、凡職事宜、遭父母喪、並解官、自餘皆給假、夫及祖父母、養父母、外祖父、卅日、義解謂其養子於本生亦解官也。案ズルニ、服紀ハ其親疎尊長卑幼ニ依テ、多少ヲ制スル禮ナリ。假ハ其ニ從フテ、哀ノ日數ヲ給フナリ。父母ノ喪ハ禮ニ於テモ大ナリ、哀ニ於テモ深シ、故ニ一年ノ服ニシテ、其服中ハ假ヲ給フ其久キガ故ニ、先解官シテ、十三月ノ後官ニ任ズ。祖父母以下トハ異ナリ。養父母ニハ五月ノ服、三十日ノ假ナリ。本生ノ父母トハ大ニ異ナリ。又當時ノ服

候義、願相濟候上者、舅姑之服忌無之旨、挨拶可仕候哉、且養母子之服忌者無之儀と相心得可申哉、服忌令追加之内、養父死去以後、養母同居せずといふことも、他江不嫁候得者服忌不受之、他江嫁する二においては無之と申ケ條ニ而是迄願之有無不拘里方ニ罷在、他江不嫁内は養母子之相たがひに、定式之服忌受之候旨、挨拶仕來候、乍去右同居をせずといふことも申者、奉願候而養母戻しに仕候義共不相聞、夫死去以後、夫之家に不罷在候、別居仕候、又者養子たるもの、儘實家ニ罷在候而同居不仕候類も可有之哉、繼母之ケ條に、初より同居せざれば服忌無之と申御文言、是又離縁仕候ニは無之、別居のみ之義と相決候得共都而同居不仕と申者、勝手ニ付別居仕候義ニ可有之候哉、依之評義仕候處、是迄之挨拶追加之御文言ニ而答候義者、相當に仕候義と奉存候、養母再縁のため、里方戻し候迄者、心底ニおいても死去仕候ものと、最早夫婦之縁者切れ可申義と奉存候、然ル上者、母子舅姑之縁も切れ申候、追加之御文意之内、養子願御請取被成候得ば、定式之忌服と有之候得ば、養母戻し候義、願書御請取被成候上者、趣意同様之義と奉存候、其上離別之女者、他江不嫁候共、夫婦之縁者切候と申候文言も有之、是等ニ見就候而も、何れニも願書御請取之上者、未被仰付、無之以前死去仕候而も、相たがひに母子之服忌受不申方相當之義とも可有哉、左候得者、右之もの夫之父母之服忌も、同様請不申候方と奉存候、

此儀前々より養子之御定者、親子之情厚御取計之御趣意ニ而、すでに養子之願ひ御請取之上者、定式服忌受候御定ニ御座候、是者いまだ養ひも受不申候義ニ御座候處、養ひ請候同様之御定ニ御座候、夫死去後、里方ニ罷在候而も、再縁不仕候内者、母子定式之服忌受候御定、是亦御趣意同様と相心得申候、此御趣意、是迄養を受候厚恩を報じ候ため、再縁且は受候義と奉存候、差戻願御請取候義、養子願御請取と同様ニ相心得候而者、右厚恩を報じ候趣意、一向ニ無御座候、左候得者、自仁義之道理も離れ候哉ニ奉存候、前書申上候通、養ひの義重き御趣意故、養子願御請取被成候而

准處里方江相返し候得ば、離縁准ジ服忌之不及沙汰○中

養父之妾腹之娘へ賀養子ニ相成、家督致相續候者、養父之妾は妻之實母ニ候共、養母之名目無之、服忌不及沙汰

分地配當せざる養子、其父之爲ニ、其養子被召出、御給分被下候而も、服忌令ニ不相載上は不及沙汰、養父母三十日百五十日之服忌受之、

家督致相續候、養子出奔、家可及斷絶處外より家名相續致候時、先養子之養母は、後相續之者之爲ニ、養母ニ可成哉、養祖母ニ可成哉之儀は、御家ニ無之儀ニ付、不及沙汰、但外より相續致候者之爲ニは、養母ニ可准儀ニ候○中

嫡母 服三十日

妾腹之子、其父嫡母繼母を以養母ニ定候時は、五十日十三月之服忌請之○中

妾腹之子、嫡母之養子ニ成、嫡母死去以後、又候繼母之養子ニ成候時は、妾腹之子たり共、一旦嫡母之養子ニ成候故、養母ニ極候繼母計五十日十三月之服忌受之、元之繼母方之親類ニは服忌無之、

養女 服三十日

養女致し、入贅を取候歟、或は他へ縁付候歟、御奉公ニ出候時は、養父母は五十日十三月之服忌請之○中

養女ニ致置候迄ニ而入贅も不取縁ニも不付、又は御奉公ニも不出候時は、養父母は三十日百五十日之服忌受之○中

養女他へ嫁し、子出生之後、離縁、養方へ歸り居候時は、養父母は五十日十三月之服忌請之、

〔視聽草二集六〕服忌議

服忌掛り連名ニ而申上候書面、御下ヶ被成、一覽仕候處、悴死去以後、嫁儀再縁之ため、里方江相戻

養父死去以後、養母と不和ニ付、養母里方江歸り、養子と致義絶候共、他江不嫁候得ば、相互ニ定式之服忌請之、

養父死去後、祖父之差圖ニ而、養母を致義絶候共、家督致相續候上は、養母之縁切レ不申ニ付、養母定式之通五十日十三月之服忌請之、尤養母他へ嫁するにおいては服忌無之、其外養母方親類、養母他へ不嫁候得ば、義絶といふ共、服忌無差別、

養父は、智養子ニ而、養母は、養祖父之實娘ニ而、養父死去以後、養母他江嫁候時は、服忌無之、右之養母他江嫁候處、離別ニ而、養子方江立戻り、致同居候共、一旦他江嫁候得ば、養母縁離レ候ニ付、服忌無之、

養父は、智養子ニ而、養母は、養祖父之娘ニ候所、夫婦合不熟ニ付、願之上、養母縁離ニ相成候以後、養子ニ罷越候者、右離別之養父之妻は、養方叔母定式之服忌受之、但其身養子ニ罷成候前後之差別無之、

養父と可嫁養祖父之娘、養父と婚儀相調不申内、養父病氣ニ付、急養子ニ罷越候者之爲、養父之妻ニ可成養祖父之娘は、養母之名目無之、養方叔母定式之服忌請之、○中

養子願相叶未引取不申内、養父死去、養母は、年若ニ付、親元江引取候而も、養子被仰付候上は、養母定式之通服忌請之、○中

妾腹之子、嫡母之養子ニ成、其以後他江家督相續之養子ニ罷越候節は、右之養方養父計ニ而、養母無之候而も、實方之養母は、服忌無之、

養子ニ罷越養父死去ニ付、定式之服忌受之家督相續致候上、故有而家斷絶ニ付、養母連レ候而、又外江養子ニ相成候而、最初之養母服忌無之、

名跡致相續候節、養父之妻は、懷妊ニ而里方江相戻、其以後名跡致相續候者、養父之妻は、養母ニ可



案之兄弟并從父兄弟之子、年齒相適、又遺棄之小兒、年三歲以下、及養女子之類者、可收養也、除之外、不聽收養、縱違而雖乳育、不得養子之號、仍不可有服假矣、

〔玉海〕永安五年○安元年六月十三日壬戌、今日明法博士中原基廣奏來、依召各相尋事等、○中略

一本生所養服事

問云、於親者、本生所養共可着服歟、又傍親服可付何方哉、

申云、於四等已上親者、聽爲養子、然者本生所養共可着之、昭禮不相叶、於傍親者、一向可依本生、不可

付所養、是允容說也、允正は可付所養云々、是謬說也、

一覆問云、戸令云、無子者聽養四等以上親於昭穆合者、即經本屬除附、如此文者、何付本生乎、依經本屬除附文也、又如服條者、爲實父一年、爲養父五月者、如此文者、何所養可重本生哉、允正允容勸文意如何、

申云、追可勸申、忽不語其趣、

〔喪服議例抄〕養父母 忌三十日 服百五十日 遺跡相續 忌五十日 分地配當 服三十日

本家より末家之養子ニ成、家督致相續候處、立戻り本家之養子ニ相成候得ば、最初之養方離レ候間、養父母并兄弟姉妹、其外親類服忌無之、

親養子ニ相成候上、又本家江養子ニ相成候得ば、最初之養父母は舅姑之續ニ成、

子無之死去候者、翌年より名跡致相續候共、其日より如養父五十日十三月之服忌請之、其外親類相互ニ定式之服忌請之、

家斷絶之後、年經而新規名跡致相續候共、其日々如養父五十日十三月之服忌請之、致相續候者之子も、祖父定式之服忌請之、

養母ニ被養候以後ニ而も、養母離別せられ候時は、他江不嫁候得ば服忌請之、

書面之通は、夫之繼母服忌無之、

〔國師日記〕元和六年正月十六日、丹羽五郎左衛門殿より、西尾丹後守の弟下總殿は、翌にて候が、丹後どの、忌は掛間敷歟と問に來る、舅の忌よめには掛候、甥舅の忌は無之候間、甥の兄弟の忌は掛申間敷由申遣す、

爲養父母服

〔令義解<sup>九</sup>衰葬〕凡服紀者<sup>略</sup>○中、養父母五月、

〔令義解<sup>十三</sup>賦役〕古記云、○中、一云、孝禮律、重本姓、輕所養、然依律名例所養並合、非年、唯新令爲所養父母、

五月服也、

○按ズルニ、養父母ハ古令ニハ本生父母ト同ジク一年ノ服ナリシガ、新令ニハ五月ト爲セリ、  
〔令義解<sup>四十</sup>衰葬〕古記云、問所養本生何爲服、答並一年須服、何有開元令云、諸哀斬衰三年、齊衰三年、齊衰杖非爲人後者、爲其父母並解官<sup>勅官</sup>申、非心喪故也、

〔北山抄<sup>拾遺雜抄</sup>〕請假事

近代例爲養父母爲重喪爲本生父母爲輕服、此事太違法式、養父母假卅日服五月、已有其限、但隨其志可有心喪、

〔法曹至要抄<sup>下</sup>服紀〕違法養子爲養父母無服假事

戸令云、無子者、聽養四等以上親於昭穆合者、則經本屬除附、義解云、謂昭者明也、爲父故曰明也、穆者敬也、子宜敬父也、凡取養子者、年齒須相適、何者下條云、男年十五聽婚、既定夫婦、理當有子、然則年十五者、則於三十者有爲子之道、年四十者、則於二十五者有爲父之端、舉其一隅、餘從可知也、雖異姓聽收養、即從其姓名、例律蔽匿條注云、違法養子之類、須改正戸婚律云、卽養異姓男者、徒一年、<sup>其姓之男、本非族類、</sup>違法收養、以故徒一<sup>逆義、女者不坐也、</sup>說者云、謂四等以上兄弟之子、從父兄弟之子也、與者笞五十、其遺棄小兒、年三歲以下、

妾腹之子其父嫡母繼母を以養母ニ定る時は其子たる者之妻夫之母姑之服忌請之、

夫は妾腹之子ニ而嫡母繼母之養子ニ相成候時は其妻姑定式之服忌受之、且亦夫之先妻之子ニ而繼母之養子ニ相成候時は其妻姑之服忌無之、略中

夫之母、家女ニ候得ば、服忌之不及沙汰、但夫妾腹ニ而も、妾母由緒正敷親類書ニも書載候程之儀ニ候得ば、其妻姑之服忌請之、

夫は嫡孫承祖ニ相成候後夫の方へ嫁し、夫之父母は死去後ニ而も、夫之祖父母ニは服忌之不及沙汰、

夫は遺跡相續分地配當せざる養子之時は、其妻夫之養父母ニは服忌無之、略中

夫は家督相續可致處、病身ニ付退身致し、其儘養家ニ罷在候共、其妻夫之父母、養實共服忌無之、

養父部屋住之内、養子ニ相成候處、養父病身ニ付退身致し、其身嫡孫承祖ニ相成候時、其嫡孫承祖たる者之妻より退身致し候夫之父母は定式之服忌請之、略中

夫婦之者、子細有而養子ニ願候時は、其妻は嫁ニ而、夫之養父母は舅姑定式之服忌請之、

〔服忌令撰註分釋地〕夫之實父母、夫之養父母と有之時之事、安永八亥年八月、秋元但馬守家來長山庄右衛門より服忌掛りへ問合、

夫之父母は三十日百五十日と服忌令に有之候、夫養父母實父母とも服忌同様に御座候哉、

書面之通は、夫之養父母定式之通受之、實父母服忌無之、

夫之繼母之事、安永八亥年、仙石兵部少輔家來より松平對馬守江問合、

嫁候もの、姑夫之繼母にて候時は、右妻へはやはり姑と唱可申候哉、忌服之儀も、姑之忌服、三十日百五十日受可申候哉、但夫へは繼母之忌服、十日三十日受可申候、左候而は妻之方忌服重ク受候様に相成候、此差別如何御座候哉、

之法哉、况夫在而出妻妾哉、縱雖有子息、不可服假、

〔國師日記〕元和三年七月廿七日、本多上野介殿より舅之服之事尋ニ來る之間、則服紀令取寄候而書付遣ス、案左ニ有、

只今服紀令取寄見申候

一舅服夫之父母也 九十日

荒忌二十日  
是はよめの事也、むこには忌なし、

如此御座候間、爲御心得書付進候、恐惶謹言、

七月廿七日

金地院

本多上野介様

人々御中

〔國師日記〕元和十年〇寛永元年三月十九日、酒井阿波守殿より狀來、隱岐殿川〇松平定勝、德家、康興、父、弟、

忌尋ニ來、則返事遣、

神祇道服忌令云

舅服九十日忌廿日 夫之父母也 如此申遣也

右是はよめの事にて候、むこには忌なく候、

如此御座候由其様には忌かゝり不申、其御心得可被成候、

〔喪服議例抄〕夫之父母 忌三十日 服百五十日

縁組願相濟、結納も取替し候處、未婚禮不相整内、夫之父母之服忌不及沙汰、

夫は智養子之時、其妻夫之實父母服忌無之、

夫之繼母ニは服忌無之、



〔百練抄五〕承曆元年二月十八日、依右大臣顯房顯中宮女藤原師實女藤原師實女出御哉被尋先例、大外記師平申、去天喜元年、應司殿長妻倫子長其間二條院後一條皇后女道長外孫王爲后宮御坐內裏不出御、召明法博士定成有真等、被問中宮服有無兩人共就、本生可有服之由、進勘文、然而不出御、又不着服給。

〔基量卿記〕元祿二年十一月五日、辰刻從柳原亞相有使、三室戶三位威光只今絕氣云々、年來胸痛肺痿云々、不便々々、誠年來舊識、從弱冠昔、如兄弟申通之間、予愁傷無他、病氣聊發氣了、人間生死素難覺悟事、四十未滿亡命、絕言語了、當年卅八歲、彼卿母義子伯母也、依母方不能着服也。

爲妻兼服

〔喪服議例抄〕妻 服九十五日

妻他之養女ト成、其身之方へ嫁候得ば、妻之實方之父并妻之兄弟は、實男實小男ト申名目無之、妻之養方之父母并兄弟は、則舅小舅ニ候事。

〔台記〕仁平四年元年久六月六日戊子、或曰、左兵衛督忠雅家成居家成卿喪云々、伴卿依家成卿恩昇

納言、今居其喪可謂知恩、就中儀禮昏禮記曰、錚有子道又二東通日記長久二年正月三日癸丑記云、故入道公任入棺、抑依忌日喪日不向彼場、又依三位事去年十二月八日三位也、不觸穢、歎中彌遣

恨也云々、僅是等文者、縱無殊恩、居妻父喪可無其難、况飽蒙恩哉。

〔令義解九〕凡服紀者中夫之父母前妻子之妻於夫之三月、

〔令義解四〕朱云、問夫之父母者、未知於養子之妻妾何令釋云、亦同者、類云難也。

〔法曹至要抄下〕舊夫之父母無服假事

戶令應分條云、寡妻妾無男者受夫分、義解云、謂家長之妻、夫亡寡居者、說者云、家長亡後、其妻守

志猶寡居者、

案之夫亡守志之日、有妻妾之號、改嫁適他之後、於夫義既絕、是以無預、其分豈亦爲其父母有着服

爲夫兼服

濟ニ而、全實母ニ候、仍今度も假服之届被差出候由被示了、

〔兼胤卿記〕安永三年十月八日、關白殿○近衛内前外戚御叔父高木下野守京極家諸大夫今日死去ニ付、自今日

到十七日、十日之御假卅日御着服之届有之、如例寫附議奏評定了各以使附之、普通之通也、

〔實久卿記〕文化十年四月十二日己酉、今日總持院殿遷化披露了、予姨也、仍十日假三十日着服了、以

折紙付山科前大納言江披露了傳奏代以使遣之如左奉書四折、美濃紙上裏

姨總持院瑞詰、昨夜遷化候、依之自昨夜十日假三十日着服候、仍御届申入候也、

四月十二日

實久

花山院右大將殿

山科前大納言殿

〔大江俊矩記〕文政三年二月廿一日丁未、近衛殿諸大夫來書京職宮内少輔一名也左府公○近衛基前御舅有栖川

一品宮仁昨夜薨去ニ付、十日御假三十日御着服之旨、爲御知也、

〔天保集成赫繪錄 五十三〕天保三辰年三月

大目付

御目付

實相院門跡去ル十一日遷化ニ付、内府様○鎌川家慶御母方御叔父御定式之御忌服ニ而、來廿日迄○中略

略 幾日數御忌被爲請○中略

三月十七日

〔實久卿記〕天保八年十月十七日辛酉、辰刻計野宮故定業卿室、所勞俄ニ以外之由、自相公羽林被示、予姨也、十八日壬戌、辰終刻計、自野宮相公羽林、故定業卿室、此夜亥刻過薨御之旨、被告、依之自昨夜十日假三十日着服之事、武傳卿藤谷前宰相等申届了、其餘一門人々申示了、

之間從今日廿日假也。以別棟殿別火令居住了。禁中松木前内府宗室東二條常ニ宮中ニ伺公依外祖母也。伯母之假可爲廿々日之處。以別勅令進侍云々。

〔基量卿記〕元祿三年七月六日清岡中務室從去二日病惱痢疾云々。今日申刻急人來。已絕氣云々。家姉姊也。依之基長朝臣以下恐息各輕服也。依之別火別屋令沙汰了。今小路局殿退出。朝臣同依服乞假。

〔續百一錄〕享保十八年七月廿八日

日野前大納言時賞母方之姨。今廿八日被致死候。依之今日より八月八日迄之間假ニ御座候得共同居ニ付。八月朔日より同晦日迄。地穢ニ御座候。右爲御届如此御座候以上。

七月廿八日

日野前大納言家佐

西

中山

三條

〔難波宗城卿記〕享保二十一年元文九月十九日。外祖父鷲尾前大納言長隆薨。自今日二十日假九十

日着服。是卜部家說也。家公爲卜部家門流之間。予亦如此。予未不爲神家門。母公御重喪。不混雜於當日。此時節不。因令神道行事門下之輩。其家說着服。非假事令說。母公御重喪。隔棟被喪了。

〔遠水見聞私記〕外祖父母服假の事。卅日假三月服。

于時寛保二壬戌年十一月十七日。准后御諱舍子。繼町后。御外祖母。政所從三位利子。御母於。因茲准后御方御假三十日云々。當十二月十七日。御參内被仰出云々。右御假。神祇伯雅富卿考給云々。

〔兼胤卿記〕寶曆六年十月十一日。水無瀬少將成。依八條前中納言英死去。外舅之由。假服届被指出候。母儀八條妹ニ而當少將ハ實子ニ而。有之候哉。不審候間尋之由。町尻三位申之處。實母ニ而ハ

無之候。別腹ニ候。併實母。經業卿成。父師被勸氣候者。故實母ヲ捨。全八條妹を實母と被立候。則先年母之事御吟味之節。母と被書出候付。殿下道香一條より頭中將隆前臣を以。御不審有之。右之段申入。御聞

也、可有差歟者、答云、於異父者、差異勿論、異母如常、可爲三十日服、此內服十日也

〔建內記〕嘉吉三年六月廿六日庚戌、兵衛佐成房阿古鶴等、依外祖父輕服、今日以吉服令除服、於酒邊、著麻帶、

乍結脫了、令解除、件被今日所留、在、真朝臣也、向、東沙汰之次、堂上也、

〔實隆公記〕永正四年十月廿日庚寅、早朝告來云、右大辨相公、○藤原教房、冬房、美子、去夜子刻已卒去云々、言

語道斷驚歎無極者也、生年四十二歲、六七歲以來見來之尤不便、孟光、○實隆妻、又周章無比類者也、

仍公條卿、○實隆子、輕服事、可爲如何哉之由、思惟之處、新大興侍不可有、着服之由、勅定云々、其上各不及

沙汰、所詮近年風儀、以養子之號、一向可爲異姓他人之由也、隆康朝臣近故、住心院實瑜法印、叔父、服不

及沙汰云々、其外人々如此之間、勅定如此云々、以一紙相尋伯二位、○白川、忠富、之處、則來臨粗有談旨等、

其儀猶不得意事也、假令菩提院儀同、○藤原冬房、之時、故賢房卿令着服云々、然者所養之方爲本也、骨肉

之儀一向可絕云々、是背令條之事也、如何、子問題續左、

### 輕服事

不謂養父之親類、於輕服者、必可續本姓血脈之條、勿論歟、今度右大丞、○實房、事彼本姓姊妹等、皆可

着輕服、然者公條卿同、可爲一ヶ月服十日假申、除服可出仕之由、存候、爰新大興侍局着服事未落

居之由候、御沙汰次第如何候哉、不審候、委細示給可成覺悟候、就中雖假日數中、申除服參內之條、

如例無子細候哉、但於事無骨候歟、同仰御處分候也、

判

### 伯二位殿

〔基量卿記〕延寶八年九月十日、傳聞伯少將、○白川雅光、外祖母死去、依之伯廿日九旬之服也、御拜御手替

大卿、○白川雅光、勤仕云々、

〔基量卿記〕元祿三年四月十一日、持明院中納言、○基時、母堂法壽院死去云々、八十有餘、家婦爲外祖母



愚案白川家祖卜部家祖共以外祖父母之假稱三十日之由、不乖法意、今有廿日之說、孰是孰非、

〔榮花物語〕

三十一の花見中ぐう○後一條后には、をんなみや二人○草子親王のおはしまして○中ひ

めみや○草子はにうだう長萬壽四年十二月薨の御ぶくにて、ひと、せは御袴もたてまつらざり

しかば○特いつ、にてたてまつる、

〔小右記〕長和二年七月十四日甲辰、四條納言○藤原公任消息云、定頼有欲參相撲之心、外祖父假内也、半

藏有召可參乎、祖父在山林其穢不來之故者、予○藤原實資報云、外祖父母服三月假三十日也、依母必可

穢子又不可不忌穢、仍給三十日假、又無半藏召縱認、雖有半藏之召不可參入之者也、又外祖父雖在

深山幽谷之口不可不忌其穢云々、予又不可不忌、若内令禁穢、外聞可無便、可謂不義似背文法歟、以

不參可爲善、必有傍難歟如何者、大納言報云、尤可然々々者、

〔本朝世紀〕康和五年四月一日己酉、平座見參也、○中今日右大臣忠實不參入見參、依外祖母喪也、

〔平戸記〕仁治三年五月廿日辛丑、早旦土御門前内府殿○久我通光被送使者、消息之仍相逢、被申送云、故宰

相中將○通宗内府會兄自襷襟中收養○此相府於後相仍大旨立家嫡了、此故不着實母服過了、而外戚傍親

服可懸哉否、雖非常時事、大祀期日已近、如然事、本來者御神事中不可參内、兼爲用心所申合也、能々

相計可示云々、但當時非可切事、聞可案之由也、予○平經高申送云、件事可被問法家歟、但法曹之習事不

一揆、極以不定事也、雖不存法意、不昭穆合之人異姓他人者、年之以前者聽養歟、是棄小兒、卽性命將

絕之時事歟、已有許之文、依之者又實母之服不可着、何況於傍親哉、如此自襷襟之中有收養者、已異

姓他人之儀也、不可有傍親之服之由存之、先年初齋宮行事官止之、國兼傍親服事、有勅問之時、可隨

重之由令申了、其時又多有申此由之輩、歟、然而件事者、不似此議歟、但聞可計案之由蒙仰、又々且相

計可被申歟之由返答了、

〔吉田家日次記〕應永九年十一月廿三日壬寅、新藤黃門使者到來云、姨輕服日數不審、但母與姨異母

母方之祖母、其家斷絶致し候ニ付、婚儀ニ付、祖父之養女ニ致シ、他へ嫁候時、母方之祖母定式之服忌ニ而、叔母之續ニは不相成、

兩様之續之部

兄之養子ニ相成候時、母方之伯父は、養方ニ而、大叔父之續ニ相成候得共、實母方半減之服忌受之、

兄之養子ニ相成候者、母方之祖母は、父之母方曾祖母之續ニ成候故、服忌無之ニ付、實母方祖母半

減之服忌請之、○中

母兄之養女ニ相成候時、母方祖母は、母之養方曾祖母之續ニ相成、重キ方を用ひ、母方祖母半減之

服忌請之、○中

母は祖父之妹ニ而候處、祖父養女ニ致候上、父惣養子ニ相成候時、○中其身之爲ニハ、母之實妹ニ

而も、大叔母之續故、母方之實方ニ取リ、叔母半減之服忌受之、

母は兄之養女ニ成候上、父惣養子之時、母之姉妹は、父母之養方ニ而は、大伯叔母之續ニ成候故、服

忌無之、重キ方を用ひ、母之實方伯叔母半減之服忌受之、○中

母方之祖父之養子ニ相成候者は、母方伯叔父姑は、養方ニ而、兄弟姉妹之續ニ相成、定式之服忌受

之、他へ養る、者は、養方兄弟姉妹半減、○中

母方之從弟を、母方之祖父之養子ニ致候時は、母方叔父定式之服忌受之、右叔父之方よりは、甥定

式之服忌受之、○中

兄之養子ニ相成候者、實母方之叔父は、大叔父之續ニ相成候故、實叔父半減忌五日、服十五日、實母

方從弟は、從弟遠之續ニ相成、重キ方を用ゐ候而も、實從弟服忌無之、

〔師友雜錄〕服假事疎波家最忌痛

外祖父母 服三月 假三十日 ○中

爲祀高服

二位○雅以手跡服忌令一冊令書進申院之作記則爲見被下伯卿楚忽之由仰之間退出停止了其後又伯卿有使從弟子無服之由也家業義甚以不便々々

〔令義解九喪〕凡服紀者○中外祖父母○中三月○中舅姨○中一月

〔喪服議例抄〕父母服忌五十日但同月へ不算

母は養女之筋ニ而は母之養方之親類定式之服忌受之母之實方祖父母伯叔父姑は半減此外母方實方親類服忌無之

妾母服忌五十日同月へ如前

母家女ニ而は其妾母方之親類服忌之不及沙汰但妾母筋目正敷其子之親類書ニも書載セ候程之事ニ候得ば妾母方之親類定式之服忌受之且亦妾腹之子本妻之養ひニ相成候時は其妾母方親類半減之服忌受之

祖父母○中母方服忌二十日實方定式

祖母妾ニ而も血脈之事故服忌無差別父方忌三十日服百五十日母方忌二十日服九十日○中其身妾腹之子ニ而母方之祖父母は服忌之不及沙汰但母妾ニ而も由緒正敷親類書ニも書載セ候筋目有之時は母方祖父母定式之服忌請之○中

母は他之養女ニ成候時は母之養方祖父母は定式之服忌受之母之實方祖父母は半減之服忌受之

母は他之養女ニ而父方へ嫁已出生之後母離縁ニ成母は養方へ戻候上又實方へ差戻ニ相成候時は母之養方祖父母を初親類都而服忌無之母之實方祖父母を初親類定式之服忌請之

母は妾腹之子ニ而祖父之本妻之養女ニ相成候時は母之實母妾は祖母半減之服忌請之但祖父之本妻は祖母定式之服忌請之

傳奏月番六條家へ差出落手也、取次間、因

從父妹、今晚致死去候、依之三日假七日着服候、仍爲御届、如是御座候也、

八月十九日

俊矩

廣橋一位殿

六條前大納言殿

〔基量卿記〕貞享三年閏三月五日、參内、大聖寺宮當今、（靈）今朝亮御略、中予姑新廣義門院後水尾御腹之宮也、然者予父方從父兄弟也、若可着服之旨、主上仰之間、窺殿下一條之處、御返事續左、

法曹至要抄云、喪葬令曰、從父兄弟姊妹七日假事令曰、給假七日服三日假、

案之稱從父兄弟者、父之兄弟子也、稱從父姊妹者、父之兄弟女也、案之已下文法、

後成恩寺關白服忌令曰、七日服從父兄弟父之兄、從父姊妹父之兄、

如右所見者、於父之姊妹子者、不論男女無服候歟、自此方雖父方候、於彼方者母方候故、此方之服

無之候、仍此方雖着服、彼方無服、依無報服、不及着服候歟、猶近代法制、被尋問伯中將、以彼所存可

被決定候、

後三月五日

判

東園中納言殿

此上者不及着服了

尋更註記

〔基量卿記〕元祿六年二月廿八日、妙門灌頂可見訪、再三被仰下之處、昨夜予從弟父方圖儀同○基娘、宗

尙朝臣室也、俄死去、日比所勞之處、急病云々、依之予假三日服七日之間、不及行向也、○中昨夜中將、

今小路局服之義、尤無覺悟之間、不及沙汰處、伯卿○雅被示中將昨夜令退出朝公之間、驚入以、



家之姉妹候時は、母方ニ付、從弟相互ニ定式之服忌請之、

兄之養子ニ相成候者、實姉は養方ニ而、叔母之續ニ成、右叔母他へ嫁候上ニ而、養子致候時は、實は妹之養子ニ而、從弟定式之服忌受之、

伯叔母他へ嫁候上、家督相續之養子致候時は、從弟相互ニ定式之服忌受之、

叔父他へ養子ニ成、其子從弟服忌無之、

〔忠利宿禰記〕明曆四年二月三日、久我右大將入來仰云、梅溪前、宰相從三位季通卿、昨日死去也、廣通卿從弟也、三日七日服故、神宮傳奏辭退申由被仰也、

〔基量卿記〕貞享三年九月十二日、向四辻亭、今日辰刻、葉川中將基淳朝臣卒之由告來、予父方從弟之間、從今日三ケ日假也、

〔季連宿禰記〕元祿二年閏正月十九日丁巳、權少外記中原友昌來、就行事官重基之事、左少史亮仲、服假之事申之、爲從弟之間、假三日服七日云々、

〔基量卿記〕元祿十四年正月廿日丙午、葉川少將基章朝臣令死去、由自石山羽林示送、不便云々、予依父方從弟三日假也、依之令別火了、

〔兼胤卿記〕寶曆六年六月廿八日、依御招<sup>兼胤</sup>詣關白殿、<sup>道香</sup>被命云、西園寺前左府<sup>致</sup>日來所勞

之所、不勝様ニ御聞及候老體之儀、故急變難計、及事言上之上は、可爲三ケ日廢朝候、今日ニも及大變言上候得者、廢朝卅日迄之儀、名越祓等御祝、可爲指支之間、薨去屆之儀、押置、朔日は先例は有之

候間、御盃相濟後ニ而、差支も有之間敷哉、關白殿ニも從弟故、三日之假被仰上候、女御御方<sup>富子</sup>も同様ニ候、右之趣同役申合、兩人心得を以、御内儀之様子可承合候、朔日も不相成候へば、二

日ニ言上之儀ニ而可有之由被仰了、

〔大江俊矩記〕文化十年八月十九日癸丑、乘燭前、假服屆書差出如左、<sup>使</sup>門外乞<sup>案</sup>內差出之、各自也、

持參歸參之時於途中落手於宮中被見松室飛驒二女急症云々氣毒千萬也依幸談廣橋頭辨頭辨被示云無服瘍屑不差出類例隨分有之然不一様則可惡御神事中差出事は少無禱云々其由認返書申遣了子歸宅之時俊迪既向九太町爲先例吟味歸宅仍萬事申含更遣即刻屑書被差出相濟也子依神事中不行向也

戊刻過自二膳持廻文來如左

姪今朝致死去候依無服瘍假一日引籠申候仍爲御屑如此御座候也

九月十日

俊常

江藏人殿

新藏人殿

爲從父兄弟姉妹服

〔令義解九葬〕凡服紀者○中從父兄弟姉妹○中七日、

〔喪服議例抄〕從父兄弟姉妹 忌三日 喪方定式 服七日 忌共無服忌

父母之種變伯叔父母之子相互ニ服忌無之

伯叔母他へ嫁子出生以後離縁ニ而伯叔母里方へ立戻り候而も右嫁候先ニ而出生之子は從弟

定式之服忌請之

伯父他家へ養子ニ罷越女子出生有之候處伯父離縁ニ成男子は實方へ召連候而立戻り女子は

養方へ殘し置候時召連立戻り候男子殘し置女子右何も從弟從弟女定式之服忌請之此服忌受方不害次

之條可ニ見食

伯父他家へ養子ニ罷越女子出生有之其後伯父離縁ニ而實方へ立戻候節右出生之女子養方へ

殘し置候得ば從弟女服忌無之

兄弟其他家相續之養子ニ相成雙方ニ而出生之子は實從弟相互ニ服忌無之處右兄弟之妻も他

酒井備後守樣

尊報

〔忠利宿禰記〕明曆二年七月十四日、影山新五右衛門女房、昨日相果由告來、予姪也、三日七日服也、

〔假服事〕文治元年十二月七日、自東山殿松殿御座、東召少將忠季朝臣、事問子細、北政所可令除皇太

后宮亮行雅服給云々、行雅者花山院入道大相國御妹子也、不可有其服歟之由、以少將令尋女房之

處、歸來曰、入道殿殿松殿被仰曰、可有服之由有所見如何、予不申左右之處、被尋申花山院、不分明之由、令

申給、但源中納言親通室家除服了云々、然而依不被一決、無北政所御除服云々、此後予引勘之處、抄曰、

四等

甥謂姉妹之男、可無服、

五等

姑子謂父之姉妹之子也無服

又曰

姉妹子不可有服事

外甥也、四等親也、不可有服之由、見本條也、○中略

如右者、外舅已無服、其子何可解除哉、猶依不審相尋明法博士章良之處、申云、姉妹之子、父之姉妹之

子、無其服歟者、

〔基量卿記〕元祿十三年六月廿四日乙酉、定基朝臣室及死去、東向姪也、故一品照房卿女也、東向爲姉

子之間、不及着服也、

〔大江俊矩記〕文政三年九月十日癸亥、同姓侍中○大江俊常姪病狀危篤之由、無服應假、今日一日引籠云、

云、屆書之儀、聊有間違、依之有被尋合儀、被送書於俊迪神事也、俊迪他行不在、仍其書、追予迹、彼家來

十日九十日請之。

甥姪 忌三日 養方定式  
服七日 實方無服忌

甥姪他家へ養子ニ相成候處、離縁ニ相成、實方へ立戻り候得ば、元之如く定式之服忌受之、

異父兄弟姉妹之子は、半減忌ニ日服四日請之、右之外三日七日之忌服半減之義無之、

異父兄弟姉妹之内、他家へ養子ニ相成候者之子は、甥姪服忌無之、

兄弟姉妹、他家へ養はるゝ者之子は、甥姪服忌無之、○中

實兄他家へ養養子ニ罷越候處、養方前、嫡子之男子出生有之候ニ付、右之男子を實兄之養子ニ致

候共、叔父甥相互ニ服忌無之、○中

妹他へ嫁候上子出生有之然處、妹離縁ニ相成、出生之子は、妹嫁之方ニ罷在候共、甥姪定式服忌請

之、

兩様之續之部

兄之養子ニ相成候者、其身之兄弟姉妹は、伯叔父姑之續ニ成、○中 右伯叔父姑之子供は、實甥姪ニ

候得共、從弟之續ニ相成、從弟定式之服忌請之、甥姪之方へは、實叔父半減之服忌請之、○中

甥之名跡致相續候者、○中 實姪は、養方ニ而、伯母定式之服忌請之、伯母之方へも、實叔父半減之服

忌請之、

〔國師日記〕元和六年正月十五日、酒井備後殿より甥忌之事、問に來候間、返書に書付遣し案在左、

尊書拜見仕候、甥忌之儀承候、

神祇服紀令ニ甥姪服七日假三日、如此御座候間、三日之御いみにて御座候、可被成其御心得候、

恐惶謹言、

正月十五日、

判  
金地院



去之處久世家へ養子相續之間大炊頭忌服半減ニ候由以御附申越、

忌十日 正月十三日迄

服四十五日 正月十三日迄

右書付關白殿へ入御覽爲心得櫛笄へも申入了、

〔大江俊矩記〕文化七年十二月廿四日甲辰俊迪假服扇書同時差出如左、  
下部使先持參小番所、次兩奉行四條家橋本家等持參、

已上三通也、

伯父 ○松室伊重滿 今朝致死去候、依之二十日假九十日着服仕候、仍御届申上候、以上、

十二月廿四日

俊迪

小番頭御中

〔權記〕寛弘七年六月廿九日丙子、依姑喪請廿ケ日假酉刻着服、

〔季連宿禰記〕元祿十二年七月八日乙亥、傳聞祭主二品之姉去比死去云々、今年例幣使定而難勤仕、

歟、息德忠朝臣爲姑服假、是又難勤仕歟、

〔兼胤卿記〕寶曆七年七月廿五日、松平右京大夫 ○京都所司代 伯母去十九日死去候由、昨夜告來ニ付來月

九日迄忌中ニ候由治部卿へ申入置了、

舊註明服

〔令義解 九葬〕凡服紀者 ○中 兄弟子七月、

〔拾芥抄 下本〕爲姉妹子不可服事

外甥也、四等親也、不可服之由見本條、又保安元年九月、院河 ○白 御熊野御精進之間、敦兼朝臣女子 成

妻、天亡、爰家保顯輔朝臣等、雖爲彼亡者外舅、參御幸、非服親之故也、

〔喪服議例抄〕養父母 忌三十日 遠跡相續 忌五十日

甥之家督、叔父致相續候時は、甥を如養父、忌五十日服、十三月受之、叔父は甥の方へ、嫡子之服忌二

祖父之養子ニ相成候時、祖父母ハ養父母ニ定式之服忌、其外親類ハ他家より養子も同事ニ而忌服も准之、然れ共伯叔父姑ハ兄弟姉妹ニ相成此類重キ方を受候と有之、右養方伯叔父姑、他家へ養るゝ者は、實伯叔父姑ニ而も、養方兄弟姉妹ニ而も、半減之日數同様故、其儘伯叔父姑半減之服忌請之、右伯叔父姑、他へ不養者は、養方兄弟姉妹定式之服忌請之、

〔權記〕寛弘五年七月十八日丙子今日依叔父喪、奏假文廿ヶ日、

〔國師日記〕寛永元年三月廿二日、内藤伊賀殿より爲將軍様○德川家光御意、松平隱岐殿○松平定勝、德川家康異父弟

叔父、御忌尋ニ來ル、則西丸へ登城候而、内藤伊賀殿に掛御目、將軍様御忌無之由申上ル、大御所様

○旁ハ廿日之忌之由も申上候、

〔季連宿禰記〕元祿十三年四月一日甲子、左官掌紀氏親、依叔父之事、服假出來、然而無地、穢云々、今所告送也、

〔續百一錄〕元文三年四月十四日、冷泉前大納言様へ傳奏月番

口狀

伯父外山前大納言○光昨十三日之夜死去ニ付、至來月三日廿日之間、假候仍爲御届如此候也、

四月十四日

資時

冷泉前大納言殿

葉室前大納言殿

〔浚明院殿御實紀〕二十四、明和八年十一月廿日、内藤駿河守頼多卒せしかば、○德川宗勝男、内藤頼多、頼多孫

御使して、尾張中將治休卿○宗勝孫、喪居をとほせらる、頼多は治休卿の叔父なればなり、廿九

日、尾張中將治休卿、叔父の喪制はて、出仕せらる、

〔兼胤卿記〕安永二年正月廿一日、土井大炊頭○京都所司代伯父寄合、久世斧三郎父久世主水、去十三日死

養女致し候上、他へ縁付出生之子は、忌三日服七日請之、但養父の方より不縁ニ付、養女之子并婚儀ニ付而之養女之子供は服忌無之、

養女致し入贅を取り、孫出生之上右掣養子致離縁右之養女は、其以後再入贅も不取縁ニも不付、其儘養ひ置候計ニ而も、右出生之子は末孫之服忌請之、

養女他へ嫁子出生有之候處、右養女離縁ニ成、出生之孫は掣の方へ差置、養女は養父の方へ引取候上、實方へ差戻候時は、養祖父母と孫と相互ニ服忌無之、

娘他へ縁付子出生有之候處、離縁ニ相成、右出生之子、掣方へ差置候共、相互ニ定式之通服忌請之、次男三男他へ養子ニ罷越子出生之上離縁ニ相成、右出生之子も召連實家へ立戻り候得ば、右出生之孫、忌三日服七日受之、

爲伯叔父姑服

〔令義解九〕凡服紀者、○中 伯叔父姑 ○中 三月、

〔喪服議例抄〕伯叔父姑 忌二十日 服九十日 養方定式 中減

實方之伯叔父姑、實方之伯叔父姑他家へ養る、者、實方へ他より養はる、伯叔父姑、養方之伯叔父姑他より養はる、者、父母之實方之伯叔父姑并右伯叔父姑他より養はる、者、實父母之養實共伯叔父姑并右伯叔父姑他へ養はる、者、右孰も半減之服忌受之、都而伯叔父姑、入組幾重に養はる、とも、半減之服忌也、諸家問合之内より、例書其大概を記す。○中

父之實方祖父之養女は、叔母半減之服忌受之、右叔母他へ不嫁、入贅も不取、養女一ト通りに候得ば、叔母之服忌不受、

兩様之續之都

兄之養子ニ成候時、實父之弟、他へ養子ニ罷越候者は、養方ニ而大叔父之續ニ相成故、重キ方叔父半減之服忌請之、但養父よりも、是又叔父半減之服忌受之。○中

六郷伊賀守妻者、永井日向守妹ニ而、初縁本多伯耆守様江被嫁候之節、御男子當豊前守様ニ御座候、其後不熟ニ而離縁再縁ニ而伊賀守方江被嫁候處、男子無御座候ニ付、伊賀守妾腹之男子兵庫頭を養ひにいたし、尤豊前守と兵庫頭と者、異父兄弟相當可申哉、服忌之儀如何相心得可申候哉、右ニ付、豊前守様御出生御座候得者、出生之子とは異父兄弟之從弟ニ相當可申哉、服忌之儀如何相心得可申哉、

書面之通者、豊前守兵庫頭と者、異父兄弟忌十日服三十日、豊前守出生有之候而も兵庫頭子供と、異父兄弟に出生之從弟服忌無之、

〔禮記禮一〕公叔木有同母異父之昆弟死、問於子游子游曰、其大功乎、狄儀有同母異父之昆弟死、問於子夏、子夏曰、我未之前聞也、魯人則爲之齊衰、狄儀行齊衰、今之齊衰、狄儀之間也、

〔令義解九義舉〕凡服紀者、略中 嫡孫 一月略中 衆孫略中 七日、

〔喪服議例抄〕嫡孫 忌十日 養實と成候時は實方服忌無之、

養方に而は、嫡孫之續實方に而は末子之續之時、末子に而も嫡孫ニ而も、忌服之日數、同様ニ候得共、嫡孫と相定メ候上は、嫡孫之服忌受之、略中

末孫孫女 忌三日 養實と成候時は實方服忌同前 服七日

次男三男、他家へ家督相續之養子に罷越、子出生之時、實祖父母之方へは、孫之服之服忌無之、實孫之方へは、實祖父母半減、

孫他家へ家督相續之養子ニ罷越候得ば、祖父母之方之服忌無之、右孫若も離縁ニ相成候時は、如元定式之服忌受之、略中

養子致し、孫出生有之以後、右養子離縁之時は、父子縁離候ニ付、嫡孫之服忌も無之、實娘へ嫁養子致し、孫出生之上、右嫁養子致離縁候時は、其出生之子は、末孫之服忌受之、



妾腹之子、右妾母儀、他へ嫁出生之子は、異父兄弟ニ候得共、服忌は無之、但右妾母、筋目正しき其子之親類書にも書載候程之縁者においては、母方之親類も定式之服忌受候間、異父兄弟も定式之服忌受之。略中

繼母之連子、父養育致候計ニ而は、異父兄弟之名目無之、服忌不及請、但右連子、父養子ト定候時は、他より養子も同例、兄弟定式之服忌受之。略中

後妻呼迎候時、先夫之方ニ而、出生之女子を連來、其以後後妻ニ子出生之時は、異父兄弟定式之服忌請之、右連來候女子を、他家へ養女ニ遣ス時は、最初之養父ニ准じ、服忌無之、女子ト出生之子とは、異父兄弟、相互ニ半減之服忌受之、

〔玉海〕安元二年六月三日丙寅、去夜半許、最仁法印入滅了、賴輔朝臣異父同母之兄也、仍基輔不服假也、

〔服忌令撰註分釋〕天寶曆三百年九月、島崎一郎右衛門方より服忌聞合奮付、下ケ札を以、及挨拶候、  
覺

島崎一郎右衛門叔父浪人 小川空禪

右空禪は、私母之異父之弟ニ而御座候、且私母儀は、父方へ嫁候節、嚴有院様御中、臈相動候後、落髮仕御扶持方被下置候、日照と申もの養娘仕候而、父方へ嫁申候、  
右之通御座候、空禪相果候は、服忌之儀、如何相心得可申哉、夢伺候、以上、

九月

書面之通は、母儀日照養娘に相成、父方へ嫁候而も、右母は、異父兄弟、其儘半減之服忌ニ而候、

〔服忌令撰註分釋〕初縁ニ而男子出生後、離縁外江再縁子無之、養子いたし候時之事、文化五辰年九月、六郷伊賀守家來荒川藤次郎より、佐野宇右衛門江問合、

〔基量卿記〕延寶九年五月七日從江戸飛札到來、松和州室藤原基子廿三歲、子姉也、去二日寅刻死去云々、誠無常世界、今更非可驚、雖然兩親之御愁傷難盡筆舌、各愁傷不足論、不可說々々々、從今日予輕服也、已二日死去之由也、則日ヲツキ外廿一日迄輕服也、

〔季連宿禰記〕元祿八年十一月十四日壬申、入夜、自日州伊東左門館便風到來云、伊東左門妻子利宿也、去十月十四日申刻被逝去云々、自去夏有所勞之處、不叶醫術終事給云々、周章只落涙之外、無他、去年兄僧普岳入滅、今年又逢此憂、何等之祟歟、可恐、予假廿日之限過了之間、自去十月十四日、九十

日輕服之日數也、

〔季連宿禰記〕元祿十五年十月一日戌寅、神拜等一向停止、天龍拜、日、之依昨夜大輔殿季連事、地穰、并予廿日假九十口服也、

〔續百一錄〕元文三年十二月六日

口狀

新典侍殿妹御○日野、資時女、昨五日晚、被致死去候ニ付、新典侍殿、廿日假、當廿四日迄ニ假明申候、尤別家被罷在候故、地穰無御座候、右爲御斷如此御座候、以上、

十二月六日

西野左近

森文藏殿

〔後撰和歌集哀傷〕二十あに○藤原のふくにて、一條にまかりて、太政大臣○忠平

春のよの夢のうちにも思ひきや君なき宿を行てみんとは

〔令義解九〕凡服紀者○中、異父兄弟姉妹○中、一月、

〔令義解四〕古記云、異父同母、故曰、異父、既異姓、故服降身之兄弟姉妹一等、

〔喪服議例抄〕異父兄弟姉妹忌三十日、服三十日、養方半減、實方半減

爲異父兄弟姉妹服

表、廿日之忌懸リニ候、

〔兼胤卿記〕明和五年六月七日、阿部飛騨守<sup>○京師</sup>所<sup>○京師</sup>代實弟志摩守、先月廿五日死去ニ付、半減之忌服請

候由届候、明和元年三月、伊豫守實弟忌服之節之通、關東ニ而ハ半減ニ候ヘ共、當表ニ而廿日忌九

十日服ニ候、其心得候様ニ可申達哉、其外其間往來等、是又其節之通ニ而可有之哉、御附尋越ニ付、

攝政殿<sup>○近衛</sup>内<sup>○近衛</sup>前<sup>○近衛</sup>ヘ申入之處、伊豫守相當ニ候間、其通可然被命、御附ヘ可爲伊豫守實弟之節之通及

返答、

〔大江俊矩記〕文化七年十二月廿四日甲辰、假服届書差出<sup>但使在々木在門、縁上下、不及皆、其</sup>尤此後立

關障子閉置、不<sup>及</sup>及<sup>閉</sup>、届書左之通、時未刻頃也、

傳奏<sup>杉原四折、美濃紙上、包、無、表紙、月番六條、家</sup>松<sup>○松</sup>蜜<sup>伊</sup>今朝致死去候依之二十日假九十日着服候、尤不混穢候、仍爲御届如此御座候、以上、

兄<sup>○松</sup>蜜<sup>伊</sup>今朝致死去候依之二十日假九十日着服候、尤不混穢候、仍爲御届如此御座候、以上、

十二月廿四日

俊矩

廣橋前大納言殿

六條前大納言殿

〔台記〕天養二年九月十九日壬戌、或人云、待賢門院<sup>○鳥羽</sup>子<sup>○鳥羽</sup>崩後、大納言實行卿<sup>○鳥羽</sup>子<sup>○鳥羽</sup>數日不着服、法

皇<sup>○鳥</sup>仰云、實能卿着之、實行重着乎、可謂不忠之臣焉、聞者告之、實行俄而着之、蓋則續而盤有匡、范

則冠而蟬有綏、兄則死而子阜爲之衰<sup>○鳥羽</sup>下<sup>○鳥羽</sup>此謂也、于嗟悲哉、爲朝之重臣、不免不悉失禮之譏矣、

〔爲親記〕久壽二年十二月廿三日丙申、申刻參殿下、<sup>○鳥羽</sup>子<sup>○鳥羽</sup>通<sup>○鳥羽</sup>原<sup>○鳥羽</sup>酉刻、令着高陽院<sup>○鳥羽</sup>子<sup>○鳥羽</sup>通<sup>○鳥羽</sup>原<sup>○鳥羽</sup>御輕服給、

先是、奏親於侍所勘日時、有成朝臣着衣冠、令勘之以式部大夫傳覽之、返給着御服<sup>○鳥羽</sup>子<sup>○鳥羽</sup>通<sup>○鳥羽</sup>原<sup>○鳥羽</sup>御輕服給、

〔孝亮宿禰記〕寛永二年二月五日甲申、大膳職來云、去年十二月五日姉死去、<sup>○中</sup>兄弟之服、廿日九十

日也、

義放服其統故可被着何乎事經與卿奉行トシテ關白二條○右府一條○兩家へ被尋申キ自關白  
被申云爲猶子着重服或着輕服事先例兩様ニ見候宜爲時宜候哉當關白事兄福勝院關白基○滿ノ  
猶子トシテ家門雖相續執柄之儀二親之外不着重服事故來法式間無其儀候キ但以之只今ノ御  
例ニ非申入分候只經與卿爲才學計也云々所詮實父母養父母之間雖爲何着重服事二度之外ハ  
不可在之或ハ實父時ハ不着重服養父時着之例或ハ實父母時已ニ着之時ハ雖相續跡於養父時  
ハ不着之條先例又分明也云々乃至官外記等ニモ爲關白内々被相尋處ニ二親兩度重服之外不  
存知由申入云々次右府一條被申云今度可被着重服條尤爲御冥加珍重ニ存申也三ク度着重服例  
勿論也云々退可勘申云々予意見ニ云所詮今度可被着御輕服條旁叶其理又可宜存者也且ハ周  
ク諸家ヘモ可被尋仰歟ト云々此儀尤由則御同心今日被着輕服布御道服法體着輕服事知足院  
例云々爲執柄計申了於等持院南門下御除服之儀在之陰陽師有富朝臣參申御除服之儀申沙汰  
云々

〔季連宿禰記〕元祿九年十一月十八日辛未大炊御門前右大臣殿光經折紙云

他家ノ養子ニ成リ不受遺跡其兄弟死去ノ時本家ノ人着服有之哉○中略

十一月十八日

壬生官務殿

山本殿殿守

正義

晚景奏大炊御門殿門外招諸大夫內匠尋申子細之處返答前右府殿御連枝御姉云々去七日於他國

令他界給由昨夜有飛脚云々予雖爲他家養子本家人着服勿論也

〔兼胤卿記〕寶曆十四年○明和元年三月廿七日阿部伊豫守○京都事弟阿部因幡守去十一日死去弟酒

井下總守去十九日死去兩弟其他家相續之儀故忌服半減ニ被申付候因之因幡守忌ハ去廿日迄  
ニ而相濟下總守忌ハ明廿八日迄ニ而相濟候由申越候關東之儀ハ此通ニ而相濟候ヘ共於御所



兄之養子ニ相成候者養父之弟は其身之爲ニも實弟ニ候得共叔父之續ニ成然處養父部屋住之内死去ニ付其身嫡孫承祖ニ相成候而も實弟は叔父之續離レ不申其儘叔父定式之服忌受之○  
略

姉他家へ嫁候處右姉之養子ニ相成候時其身之實兄弟姉妹は養母方伯叔父姑之續ニ相成然レ共養母方伯叔父姑之定式之服忌之日數より實之續兄弟姉妹半減之服忌之日數は服之日數多ク候故實兄弟姉妹半減之服忌受之○  
略中

妹叔父之養女ニ相成候得ば從弟女之續ニ相成重キ方を受實妹相互ニ半減之服忌請之

實方之弟を養方妹之養子ニ相成候時は重キ方を受實兄たる者よりは養方ニ而甥之續ニ候得共實兄半減之服忌受之實弟よりは養方ニ而は實兄を伯父之續ニ成養方伯父定式之服忌請之

兄之養子ニ相成候者實兄は叔父之續ニ成他家相續致候故叔父半減之服忌○  
略中

兄妹其他之養子養女ニ成伯父姪之續ニ相成候時重キ方を請候ニ付雙方養子ニ相成候故兄弟相互ニ半減之服忌請之

〔榮花物語月〕小一でうのさ大じん○  
師尹藤原ひごろなやみ給ける十月○  
二年安和十五日御年五十に

てうせ給ぬどのゝしる宜耀殿女御○  
原芳子師尹女をどこきんだちよりはじめてよろづにおぼしまごふいまのせつしやうどの實○  
頼原の御はらかなれば御ぶくにならせ給へば大じやう

ゑのをりのこといとくちをしうおぼせどなごてか御おとうとなれば一月の御ぶくこそあらめなどさだめさせ給もあはれなるよの中なり

〔假服事〕寛元二年十月廿二日小舍人草部久直去比輕服事出來兄男某自幼年爲異姓他人子被養

去月就去比死去仍服有無訪法家之處昭穆不叶之養子猶可有本輕服云々

〔滿濟准后日記〕正長元年二月十九日當御所○  
足利重服輕服之間○  
此年正月十八日茂歌兄義持  
義持子義盛義無義至是

四月廿三日

俊章

柳原前大納言殿

廣橋前大納言殿

神祇伯顯仲

〔詞花和歌集〕むすめにおくれて、服き侍る。とよめる、

淺ましや君にきすべき墨染の衣の袖を我ぬらすかな

〔萬代和歌集〕むすめの思ひにて侍けるころ

中納言定頼

たぐひなく悲しき物は世中においてわかるゝわかれなりけり

爲兄弟姉妹服

〔令義解〕凡服紀者、兄弟姉妹、三月、

〔喪服議例抄〕兄弟姉妹、服九十日、養方半減

嫡母歟繼母家を離出之時、其身出生之子を召達出候而も家督相續之子之爲ニ、兄弟定式之服忌

請之、○中

父子其相勸罷在候者、父子兩家ニ相成候ニ付、父之家督は其身之次男ニ而相立候時は、養實之不

及差別其身之總領と、父之家督別ニ相立候其身之次男とは、兄弟定式之服忌請之、且又其身之次

男を父之方へ養子ニ遣候時は、養方之續ニ成、其身之總領と、父之方へ遣候次男は、叔父定式之服

忌請之、次男とは實方之兄、半減之服忌受之、○中

兄弟姉妹之内伯叔父之内へ養子ニ相成候時は、實兄弟姉妹相互ニ半減之服忌受之、

兩様之續之部

兄之養子ニ相成候者、其身之兄弟姉妹は、伯叔父姑之續ニ成、伯叔父姑定式之服忌請之、伯叔父姑

之方へは甥之續ニ成候而も實兄弟姉妹、半減之服忌受之、○中

甥之名跡致相續候者、實姉は養方ニ而大伯母服忌無之、實方之姉、半減之服忌受之、○中

七月十三日

兼照

〔季連宿禰記〕元祿八年八月廿四日癸丑主殿允伴友治來云男亮信病事無賴之間明日着陣可語出左官掌紀氏辰云々此事有先例云々は依一家之由緒歟定而可爲近例追而可考也友治云亮信雖爲嫡子依年來病事以次男尙方去年冬申請察官之間於亮信事切者可爲末子服假歟但又可爲嫡子之服假歟此事難計云々可尋伯三品雅光之由仰云々後聞亮信今日事切了云々中友治服假之事自氏辰尋申伯三品之處伯卿云可爲嫡子服之由被答云々此事後日廿七日氏辰所語也

〔兼胤卿記〕明和二年七月八日攝政殿近衛御嫡篤君八今朝逝去ニ付攝政殿廿日之假九十日忌服被成候穢ニハ不被混之由届書今朝辰半許被差出以使附平松中納言了

〔續百一錄〕元文三年十二月六日葉室前大納言殿へ冷泉物品故障也

口狀

資時野○日末之娘昨五日晚致死去候仍十日假當十四日假限ニ候尤別家罷在候故地穢無之候爲

御届如此ニ候也

十二月六日

資時

葉室前大納言殿

〔大江俊章清泉院是元死去喪中雜日記〕寶曆八戊寅年四月廿三日武家傳奏へ届書月番柳原家へ差出ス使多田源二門外ヨリ乞案内相渡取次侍持入歸出云大納言參内歸宅可申聞雜掌承候由也

口狀奉奉西折美濃表包北小路次藏人トカク

娘大○大江今曉致死去候依之十日之假三十日着服仕候同居故混地穢候穢之限追而可申入候

爲御届如斯御座候以上

女子は最初ニ生れ候而、入迎を取候而も、又は他へ養女ニ遣し候歟、縁付候共、服忌無差別、忌十日、服三十日、

兩様之續之部

其身之次男三男之内、父之養子ニ相成候時、兄弟之服忌ニ而は、日數は重く候得共、父子之間は、別段重キ事故、服忌之日數ニ不拘、末子之服忌受候方重キ筋ニ候事、

〔榮花物語月〕をの、宮のおとゞ實賴の御太郎、せうしやうにて、敦敏とて、いとおぼえありておはせし、一とせうせ給にしぞかし、そのおほんおもひにて、いみじくこひえのび給けるを、略下

〔山槐記〕永暦元年十二月四日戊申、向太政大臣伊通、亭九條北堀、於佛前被謁、重服小直衣中納也、仍此間被生此堂也、此年九月二日薨之故也

〔山槐記〕治承三年正月十日己巳、今夕左衛門權佐光長嫡男母左大辨後經嫡女、年十、母堂去々、年九月逝去、加首服、右中辨經房朝臣猶子也、略中一獻前馬助季佐持參、盃居折敷、散位忠光取杓、去十二月逝去、續男内職人、學助時長死、去、續男内職人、

〔假服事〕文永十一年七月廿四日、花山院前右府、通今夕被參院云々、去二日長男中納言家長卿薨去、假廿日間所被龍居也、無餘服出仕宣下、

〔吉田家日次記〕貞治五年七月十三日癸巳、今日九條前關白殿、公被尋下云、

子死去、其父服假嫡子三月、庶子一月候歟、不加首服、雖不帶官位、爲嫡子者可爲三ヶ月候哉、御不定之由内々被仰下候、恐恐謹言、

七月十三日

公照

吉田神主殿

子死去、其父服假事、嫡子三ヶ月、此内假廿日、不可依首服、不可依官位候、自年少改姓了、雖爲他人之子、猶以不遁實父母傍親之服假候之由、可得御意候、恐恐謹言、



爲子女服

〔令義解九〕凡服紀者、略中 嫡子三月、略中 衆子嫡孫一月、

〔令集解四〕嫡子古記云、戶婚律云、嫡妻之長子爲嫡子、案嫡制令、父子爲嫡母、古記云、中略、爲妾子、略中 衆子古記云、除嫡子之外、庶子及妾之子、案嫡制令、父子爲一等是也、俗云男女也、

〔喪服議例抄〕嫡子服二十日、略中 衆子服三十日、

嫡子家督致相續候上、其以後病身ニ付爲致退身、父再勤致候時は、一旦家督を譲り候儀は不及沙汰、嫡子退身之上は、末子之服忌請之、

父子共相勤罷在候處、父子兩家ニ相成、父之方ニ而、末子を嫡子ニ相立候時は、最初之嫡子は、別家ニ相成候得ば、末子之服忌請之、後嫡子ニ相成候末子は、嫡子之服忌請之、

嫡母之子、繼母之養子ニ相成其子嫡子ニ相立候得ば、其養母ニも嫡母定式之服忌請之、其外は養ひ候共、末子之服忌請之、

男子出生之後、夫死去、右男子家督致相續罷在、右之後家は他へ嫁し、又男子出生之時、其母之爲先夫之子、可爲嫡子哉、後夫之子之爲嫡子哉之儀は、嫡子は其家々ニ而立候事ニ而、父之極次第、女は夫に隨ふもの故、父嫡子ニ定候時は、其母之爲ニも嫡子ニ候、父嫡子ニ不立時は、其母之爲ニも末子にて候、

末子女子服三十日

父子共相罷在、父より高知ニ成、別段相勤、父之家督は其身之次男三男之内を父之養子ニ遣し、家督相續之時は、其身之方へは、其儘末子之服忌受之、勿論父之養子たる者は、實父定式之服忌請之、都而子は何方へ養子ニ遣候共、半減と申儀無之、父子之間は、別段重キ事ニ付、忌服之日數ニ不拘、子供之内、父之養子ニ成候共、其儘末子之服忌請候方重キ筋ニ候事、略中 女子出生有之妻離縁致し、右出生之女子も、舅之方へ引取候而も、娘定式之服忌受之、略中

四月廿三日

小番頭御中

俊興

〔大江俊矩記〕文化十四年七月六日戊申、午刻過假服、肩書差出如左、

傳奏月不番六條家ニテ相濟、使近藤帶刀、腰上下着、  
川、及着、笠、杉、原、四折、美濃紙、上包、無表書、

妻昨夜致死去候、依之二十日假九十日着服候、尤混穢候穢限追可申入候、仍爲御届如此御座候也、

七月六日

俊矩

六條前大納言殿

山科前大納言殿

〔諸家服忌伺〕文化十四丑八月二十四日、荒川常次郎様へ出同廿六日御附札、

緣組願候處、結納差遣以前緣女死去仕候節者、忌服之儀如何相心得可申候哉、  
此段御問合申上候以上

八月二十四日

京極長門守家來  
近藤次郎右衛門

書面之通者、緣組願相濟候共、祝儀取替シ不申候得者、夫婦相互ニ忌服無之、

〔實久卿記〕文政十年十二月十五日丙戌、實麗室常子、有庸出產後不勝、到今曉甚大切也、○中實麗廿

日服九十日着服混穢了、傳奏卿院傳奏卿申入了、仍以使源一位有言中將亭申遣、則有言中將入來、  
則召寄醫師種々雖加療治、不叶養生卒去了、依之予混穢了、

〔伊豫田御家系譜〕村賢公

一寶曆十三癸未年正月七日、右御緣女於弘様○牧野御死去、三田濟海寺江葬、後於幸様

但御結納不被進故御忌服無之、御用番様江御聞置之御届書を指出、

る人有之、異朝の趙武は程嬰が服を三年迄着しけり、此院もとより官仕の人にあらす、悲嘆切なるによりて、重て着し給共何事有哉、

〔殿曆〕天永元年十二月四日戊戌、今朝丹波守敦口朝臣來云、來七日、公卿勅使宸筆宣命事如何、余原忠實云、昨日付頭辨奏院了、九月妻死去三月服也。而日數已過了、雖然忌内也、可有何様哉、而御返事未承、仍頭許可尋也、

〔假服事〕安元二年十二月十四日、花山院中納言雅家去九月十三日室家逝去、着服滿九十日、今日始出仕、着直衣云々、

〔兼胤卿記〕寶曆三年九月三日、正親町宰相中將實繼妻昨夜死去ニ付、假服泥穢之届、息侍從、廣幡父子轉法輪前内府、小倉侍從、服假之届書、雖御神事中、爲心得密々姉小路へ附了、

正親町宰相中將繼妻ニ而、十日假三十日服、息侍從、實母ニ付、五旬之假十三月之服之由届、右之通ニ而宜哉否、攝政道香殿一條へ御尋申候處、届之趣無相違、由被仰、

此序嫡妻繼妻、嫡子有無之儀、假服如何候哉、御尋申之處、左之通被仰、

本妻始之不依、嫡子之有無、夫廿日假九十日服、

繼妻後之爲、嫡子之母者、夫十日假卅日服、非嫡子之母は、雖有子夫無假服、

自今右之通ニ相心得、届書出候節も、此通ニ可申達之由被命、

〔兼胤卿記〕寶曆六年六月廿日、上總宮簾中格宮逝去之由有届實刻、元文三年九月岩宮松平出羽守延享四年二月廿五日始宮内本願寺宮、開院殿姫宮、右兩例逝去之儀、無言上之間議奏、關白へ不申入、上總宮

假服届計差出了、逝去之届書は、右京大夫御附等へハ相達了、當時關東之儀、依爲連枝也

〔大江俊章記〕寶曆八年四月廿三日、俊具届書、小番所月番奉行衆へ斷狀遣ス、切紙、妻今曉相果候ニ付、廿日之間小番不參仕候、尤泥穢仕候、追而穢限可申上候、以上、

而迎後妻其妻死去者可着其服也異說不生一子妻者雖死去不着服云々不生子妻者非本妻歟  
令并法曹至要抄等妻服稱三月不謂子之有無今以子之有無差別不知其所被古來不依子之有  
無着嫡妻之服不着繼妻之服事分明也法曹之說注于左

古記康和三年七月廿二日

就問明法博士中原範政答云不依息子之有無爲繼妻不可着服云々

〔後撰和歌集二十〕七月ばかりに左大臣實賴のは、子藤原忠平妻身まかりにける時に思ひ  
に侍けるあひだきさいの宮よりはぎの花ををりて給へりければ

太政大臣平忠

をみなへしかれにしのべにすむ人はまづ咲花をまたでともみず

〔源氏物語九〕とのうち人すくなにしめやかなる程に俄に例の御むねをせきあげていといた  
うまごひ給うち御そうそきこえ給ほどもなくたえいり給ぬ源氏妻にばめる御ぞたて  
まつれるも源夢のこちしてわれさきだましかばふかくそめ給はましとおぼすさへ

かぎりあればうす墨衣あさけれど涙ぞ袖をふちどなしける

〔源氏物語四十一〕

女房などもかの御かたみのいろかへぬもあり源氏れいのいろあひなるも

あやなどはなやかにあらずみづから源の御なほしも色はよのつねなれどことさらにや  
つしてむもんを奉れり御まづらひなどもいとおろそかにことそきてさびしくものごころは  
そげに定めやかなれば下

〔河海抄二十五〕みづからの御なほしも色はよのつねなれどことさらにやつしてむもんを奉  
れり

或人云妻服は一期中に一度着之云々六條院源氏葵上の時已に着服の義有何かさねて着

せらるべき哉と云々案之着服の淺深は志の厚薄によるべしされば主君の服を一生着す



爲妻妾服

〔令義解九〕凡服紀者、中妻、兄弟、姉妹、夫之父母、嫡子三月、

〔令集解四〕古記云、夫爲妻服三月、次妻无服也、朱云、問妻者未知、於妾何、額云、爲妾无服者、

〔延喜式二十〕凡妾爲夫服一年、夫爲妾無報服、

〔玉海〕承安五年元安元六月十三日壬戌、今日明法博士中原基廣參來也、依召各相尋事等、略中

一妻妾事

問云、假令人妻有三人、嫡妻、本妻、妾妻其嫡妻本妻、歷年序無一子、妾妻今嫁娶有子、而其妻等亡者其

夫何忌哉、

答云、嫡妻雖繼不生一子亡者、可爲其服、其後數子之母雖亡、不爲其服、是則夫再不着妻服之故也、

〔神祇道服紀令秘抄〕一妻服 九十日 假廿日

始ノ妻バカリヲ受ル也、但子アラハ後ノ妻タリトモウクニシ、問云、子アル妻ヲ離別シテ、其妻未

ダ夫ヲモタズシテ死スル妻ノ服ヲウクベカラズヤ、答不及汰沙、

〔喪服議例抄〕妻 服九十日

妻不義有之、夫及殺害候時は服忌之不及沙汰、離縁之届にも不拘、且家之娘にても無差別、右之妻、

元來忌掛候者にても無差別、

妾之遠慮三日

妾ニ子出生有之、其出生之子、死去致し候後ニ而も、妾死去候時は三日遠慮、且子有之妾ニ而も暇

遣し他へ嫁候得ば、離縁ニ准じ不及遠慮、

〔師友雜錄〕服假事藤波家景忠編

妻 服三月 假廿日

愚按嫡妻一人之服、不依子之有無着之、後妻并妾死去之時、不依子之有無不着服也、但嫡妻離別

婦其姓源其氏石川故從五品石見守正次娘母松浦氏產於東武從父往長於洛復東來嫁讀耕齋林  
彥復○中辛丑元年三月彥復疾病晝夜侍側不解衣帶及其蓋棺哭泣哀慟水漿不入口自誓曰幸  
而死則同穴不幸而生則行三年之喪其克々之容瞿々之貌自合古禮有遺腹之子及秋仲而誕則男  
也僅歷百日而夭哀戚愈加彥復沒後俗忌既畢卒哭既過逾年以至小祥不食魚肉不向粧鏡手自斷  
其髮示無異心不圓其頂者嫌類俗尼也詣墳之外未嘗出其門○下略

〔大江俊矩記〕文化七年十二月廿四日甲辰兄松室伊豆重滿今朝死去之旨可致披露故先早朝同姓  
新藏人入來之儀類遣廿五日乙巳民衛○松室重滿妻進退之事去廿日安藝被申來旨今日蓮要院肥前  
三品公越中公隅州公等打寄及示談其後自予安藝へ返答申入曰民衛殿事各及示談處表立未離  
緣無之事故夫之假服被受事可爲勿論併華髮之事者親類共存寄も有之事故先見合可被申○中略  
猶又行末之儀者追々可及相談一統所存之旨申候也

〔吉田家日次記〕應永十年十一月卅日癸酉隨思出記之所召仕之青侍清種入道去比歸泉伴妻同召  
仕之官女也生一子了而絕交及三四年之間不可受服假也且披文簿廻分見之處不可着服之條勿  
論也然而法曹所存不審先日藏人右衛門佐逗留之時分乞彼狀付大判事章忠了返答之趣同前不  
能左右然間彼女如日來召仕者也以折紙田舎之觀不審ト云ニテ金吾道狀了

或女舊夫他界五歲息女有之若可有服假哉但絕夫妻之儀已及三四ヶ年訖雖不嫁他夫義絕已經  
年序上者不可有服假歟之旨有稱之仁所詮御所存分可示給者乎

答訪之憲章無服之殯生三月至七歲然則今五歲息女爲無服殯上者父母以下服親不可着服將又  
妻女義絕云々凡妻妾共以爲夫可着一年服之條文法明存而就義絕可有義矣凡夫妻義絕事令典  
設文仍無左右雖難資義絕止夫妻儀之後既及三四年之由被載御問題之上者不可有其服矣而已

大判事中原朝臣章忠

〔季連宿禰記〕寶永三年八月廿四日己酉昨夜子刻、光壽院殿廣橋故中納言良光細母入滅父方、祖母也、仍自今日卅ヶ月假五ヶ月服出來、但地穰無混合、其趣申屆兩傳奏家了、

〔服忌令撰註分釋〕父之實方祖母、祖父之妾之時之事、安永二巳年、宮城久三郎より、服忌掛へ問合、私父之實方祖母儀、松平肥前守方罷在候、尤家女而御座候、服忌之儀、定式之通、忌三十日服百五十日請可申候哉、

書面之通は、父之實方祖母、半減之服忌ニ而候、

爲替親父母服

〔令義解九〕凡服紀者、略○中曾祖父母略○中三月、

〔喪服議例抄〕曾祖父母略服二十日實方無服忌、

父之母方之曾祖父母も遠慮一日

曾祖母は、妾ニ而も筋目之無差別、定式之服忌請之、母方も一日遠慮、父之母方も同じ、

祖父母は父爲養父母ニ而、其母妾ニ候得ば、曾祖母之服忌無之、母方一日之遠慮も無之、

〔康富記〕寶德三年七月八日甲辰、參清給事中、文第見參禪尼事予申之、令語給云、略○中局務口曾祖母

輕服三ヶ月假廿日也、自元不可有混合之由所存也云々、

爲夫服

〔令義解九〕凡服紀者、爲君略○註父母及夫、本主略○註一年、

〔令集解四十〕古記云、妻妾爲夫服一年、夫爲妾无報服也、

〔延喜式二十〕凡妾爲夫服一年

〔玉海〕承安五年、○安元年六月十三日壬戌、今日明法博士中原基廣參來、依召各相尋事等、○中

復問云、假令女着夫之服了、再嫁之後、又着夫服否、

答云、於女者、不論嫡妾、每夫着其服、

〔爲峯文集六十八〕潔婦石川氏柳月墓碑

雖祖母我從誕生昔及成人今偏被養育申了、仍着重服、可過一芥之由深雖存心中、於有院御氣色者、不可有異議、然者可着輕服者、及深更歸了、夜源按察大納言送書札云、殿下之御事猶不可及、一年之由、重有院御氣色者、仍申殿下了、廿一日、早旦參殿下、被仰萬事之次、御服之事被問、前大納言并明法博士信貞之處、猶付養母祖母儀可有五月服也、強不可及濃色、但雖然於素服者、令着給可宜者、本云服者是素服也、仍不論重輕服、可着素服者、殿下令信其事給也、但被談仰云、從少日養育之恩、不可報盡、仍及一年可着重服之由、雖存心中、院御氣色有限之上、人々皆有不許氣、然者、然者可着輕服并素服也、

〔康富記〕寶德三年七月八日甲辰、參清給事中、次第見參禪尼事、予申之、令語給云、祖母輕服五ヶ月假卅日也、中陰之間、被裏籠之由存候處、自萬里小路前內府被送消息、不可混穢之由爲、叙慮被仰下了、此上者無力不混合、於淨居菴、可行中陰之由被仰之、

〔公卿補任後柏原〕永正十四年

權大納言從二位藤原季孝 三月九日輕服祖母

〔國師日記〕元和六年七月十三日、脇淡州より、祖母之服尊ニ來、あらいみ卅日と申遣ス、

〔季連宿禰記〕貞享元年九月一日甲子、已終計、家母桂芳院入滅、兼而覺悟之處、今更落涙無限、忘前後

了、道號蓮廓、今年七十四歲、

桂芳院者、故忠利宿禰之妻也、兼高伊興御局、山門尊壬生地藏院普岳子等之母也、東宮侍從御局

今度服假之事無之、子細者、侍從局者、故重房宿禰之娘也、重房宿禰者、忠利宿禰之男、然而重房宿禰與子實者、口別腹之兄弟也、依之今度侍從局服假之事無之也、

〔季連宿禰記〕元祿五年四月四日癸未、右大史高橋春宜來云、卅ヶ日地穢出來云々、春宜母方之祖母さつ死去、然而春宜母非實母、爲繼母之故、於春宜者無服假也、略下



ルベカラザル上、先公實御服ノ中ニ、大將ニ任ゼサセ給ヒシ間、接元久三年三月其經薨、除服ノ期同年六月道家任右大將ヲ相待テ、イマダ慶ヲ申サレザル處ニ、又服ヲ重テラレバ、任槐ノ後、四箇年迄、拜賀ヲ申サレザル事然ルベカラズ、是ニ依テ別シテ其旨院宣ヲクダサレシ間、アルベカリシカドモ其儀ナシ、次ニ東山殿薨去ノ時、建長四年道家一音院攝政ハ、藤忠家、敦實、子道家孫也、凶服ヲ着シ給ハズ、康和ノ佳例尤准のタルベキ上、御家務等、禪閣ノ御讓受サセ給フ上ハ、一井ノ服ヲ用ラレン事、法曹ノ意ニ相叶ベシ、就中承元ノ例ニ准ゼバ、今度兩度、相續テノ喪ニアラズ、幕下ノ拜賀又過タリ、旁御着服ノ事、其理ニアタルベキカト、有職ノ人々ハ、面々ニ傾キ申サレケルトカヤ云々、

〔速水見聞私記十五〕祖父之假服之事

滋野井公廉卿祖父入道良覺薨之時、假服五十日一ケ年被務之、實父實全卿先父入道而薨、仍受家督於祖父入道依茲假服如現父被受之云々、是則入道之兼而御命如此可有之御事也、

又岡崎前大納言國久卿被薨之時、國榮者孫也、假服之事吉田家へ被相尋之處、返答三十日百五十日と申來ル、其通被務云々、國榮之父、大藏卿國廣、先前大納言而薨、然ば受家於祖父事同例也、是は吉田家之不勤也、能可存知事也、

〔源氏物語三十〕内侍のかみ玉

○中うすきにび色の御ぞ、玉玉著なつかしき程にやつれて、れいにかはりたる色あひにしも、かたちはいと花やかにもてはやされて、玉玉著○下

〔中右記〕永久二年四月三日戊申、夜半許、兵部少輔知信、爲殿下、藤原御使來云、子刻許、京極殿大政

所藤原師實妻源子忠實祖母、途薨給了、廿日、參殿下、乍庭前申萬事之次、御服沙汰有被仰合事、中從院白

河有召清隆本也、則馳參、中被仰云、關白服不可及重服、只付養母祖母等可着輕服也、執柄之人、於二親

者不可有左右、此外不可着重服之事也者、中則參京極殿、密々院御氣色旨告申之處、中於服者

祖父之養子ニ相成候而も祖父之妾は養母ニ不相成服忌も無之處右祖父之妾は母之實母ニ候得ば祖母半減之服忌請之、

〔榮花物語月〕太じやう大じんぎの○藤原月ごろなやましくおぼしたりつるにでんりやく三  
 年八月十四日うせさせ給ぬ○中みかご上村うごからぬ御なからひにてよろづかた々のお

ほんこどもめてたくてすぎもていきて、によご原○村上女御孫、も、おなじくぶ。にていで給ぬ、によご原○村上于忠平孫、も、御服にて出給ひぬ、宜耀殿の

〔中右記〕大治四年七月十二日密々仰羽云此宇治前太政大臣往年康和之比祖父有事時雖祖父年來爲養子已變孫儀如實子也重服也、

〔諸家傳〕實兼公  
文永六年六月七日 廿一歲 遭祖父○實喪氏

就家嫡之儀遺跡之  
〔公卿補任伏見〕永仁二年

權大納言正二位藤家教  
二月卅日遺祖父亮龔居五ヶ月

〔參考太平記〕<sup>五</sup>光嚴院御即位附梶井宮補天台座主事

ルベシヤ否ト尋沙汰アリケルニ、時宜然ルベカラザルノ由仰出サレシカバ、御着服ノ儀ハナカ

實子 御早世ノ後、京極太閤實師知足院殿ヲ藤忠實師御扶持アリシニ、康和ニ御薨去ノ時、按康和三年實和實和三

知足院殿御着服アリ是任仰トスルニ足レリヲニ移京極攝政實千、寛享世ノ後、長經、月  
殿承元ニ薨去ノ時、按承元元年、東山殿藤道家、已ニ御着服アラントセシヲ、去今兩年ノ御着服然

繼母之養子ニ相成候時は、其繼母方親類、服忌無之ニ准ジ、祖父母之服忌不請、但母妾腹之子ニ而、嫡母繼母之養ひニ成候も右ニ可准、

父は妾腹之子ニ而、嫡母之養子ニ成、嫡母死去、又候繼母之養子ニ相成候時、父妾腹ニ而も、一旦嫡母之養子ニ相成候故、父之再養母ニ成候繼母は、祖母之服忌無之、但母妾腹ニ而、嫡母繼母之養ひニ相成候節も右ニ可准、

祖母妾ニ而他へ嫁、通路も不致候共、血脈之事故、服忌定式、○中略

父は翌養子ニ而母は妾腹之家之娘ニ而候處、父離縁歟、死去ニ付己祖父之養子ニ相成候時、養父之妾は服忌無之、母之實母ニ付、祖母半減之服忌請之、○中略

嫡孫 忌十日  
服三十日

嫡孫承祖ニ相成候者、祖父母は養父母之如く、定式之服忌受之、○中略

嫡孫承祖之儀、遠國より相願、未被仰付候内、祖父相果候節、忌服請方、養子願書、老中請取候之後死去候は、家督と不定内ニ而も、養父母計、五十日十三月之服忌可受との御定ニ准じ、承祖願書御請取有之候は、願不相濟候とても、祖父母死去之日より、五十日十三月之服忌受之、

養父部屋住之内、養子ニ相成候處、養父病氣ニ付退身致し、右養子たる者、養祖父之嫡孫承祖ニ相成候得ば、養祖父母は五十日十三月之服忌受之、其外親類無差別、○中略

嫡孫承祖たる時、繼祖母ニ候共、嫡孫承祖ニ相成候時は、五十日十三月之服忌受之、嫡孫承祖ニ相成候後ニ、祖父後妻を迎候時は、繼母ニ准じ忌十日服三十日受之、

嫡孫承祖たる者、繼祖母ニ候共、承祖ニ相成候時は、其身計は五十日十三月服忌受之、嫡孫承祖たる者之子よりは服忌無之、

兩様之續之部

〔最有院殿御實紀四十八〕延寶二年六月八日、本理院殿○鎌倉家光うせ給ひしかば、家門諸大名、ま  
うのぼり御けしき伺ふ。○中當代○家光御嫡母にもた、せたまはねば、御服もなし。

〔兼胤卿記〕寶曆二年十二月廿一日、樋口中移少輔母儀松平煥死去二付、五旬之假一年服之由、一昨

十九日二屆之處昨日攝政殿○一條道誓被命云中務少輔叙爵候節母家女房と有之然者今度死去之

母は繼母也、繼母之服ニ改可然之段、可申達之由被命、同改被申達之處、存生之間、實子之通故、實母

之服忌請候、仍先年實母死去候節は、不請服假之由故、今日同役詣攝政殿御亭被申入之處、兎角繼

母之假服ニ改候様、攝政殿命候由、可申達被命候由也。同役此旨ハ、櫛口被申達。

〔續百一錄〕寛保四年四月廿七日、出納家へ参り、深尾届ケ書出ス。

口上覺 中切紙奉書

一私繼母去ル廿二日死去仕候付、假十日服三十日相引申候他所ニ而相果候之故地穢者無御座候、右爲御届申上候、以上、

四月廿四日

深尾縫殿屬

慈親父母恩

〔令義解喪九葬〕凡服紀者、略中祖父母、養父母、五月。

〔令集解〕十三古記云、問嫡孫承重、並免其年徭役、未知服其年不答服、名例律云、嫡孫承祖、與父母同故

〔喪服議例抄〕祖父母  
服忌  
百三十日  
實方半  
方定式

實方之祖父母、父母之實方之祖父母、實父母之養方實方之祖父母、右何も半減之服忌請之祖父母

は入組、幾重ニ養る、共、其儘半減之服忌請之、

祖母妾ニ而も、血脈之事故、服忌無差別、父方忌三十日服百五十日、母方忌二十日服九十日、

父母之嫡母繼母ニハ服忌無之○  
略

父は妾腹之子ニ而、繼母之養子ニ相成候時は、養母方祖父母、定式之服忌請之。父は嫡母之子ニ而



〔法曹至要抄服下〕一繼父同居無服假事

古記云、繼父若不同居者不服者也、

案之於繼父者、令同居之時雖有服假、不同居之日、其無服假者也、

〔喪服議例抄〕繼父母 服三十日

父死去以後母へ入壻を取祖父之家督致相續候時は、則繼父定式之服忌受之、且父死去以後母他へ嫁候得ば、母之後夫ニ而繼父之名目無之、中

後妻を迎候時、先夫之子連來、致養育候得ば、其連子之爲母之後夫は則繼父、定式之服忌受之、且又連子を養子と定候得ば、他より養子も同例也、右連子成長之後、他へ養はれ候時は、繼父之服忌無

之、且又縱一旦養子と極候而も、他へ養子ニ參り候得ば、最初之養方服忌無之ニ准シ候事、中

繼母は致通路候得ば、對面無之共、繼母之定式之服忌、諸之繼父は同居せざれば、通路致し候共、繼父之服忌無之、

〔儀禮註疏卷十〕繼父同居者、略傳曰、何以期也、傳曰、夫死妻穉子幼子、無大功之親、與之適人、而所

適者亦無大功之親、所適者以其貨財爲之築宮廟、歲時使之祀焉、妻不敢與焉、若是則繼父之道也、

同居則服齊衰期、異居則服齊衰三月、必嘗同居、然後爲異居、未嘗同居則不爲異居、

〔本朝世紀〕康和五年四月一日己酉、今日梅宮祭也、分配宗通卿、依繼母喪不被參、他人參勤了、

〔假服事〕應保二年十一月十七日、午刻參内付藏人家實奏事、一修理大夫賴盛朝臣、母病危急、仍辭申臨時祭使事、仰次第可相備者、次人能登守教盛朝臣也、件人又候、仍以藏人示其旨、申之賴盛朝臣、母者繼母也、父忠盛死去後若無服歟之由、内々相尋可申左右者、

〔孝亮宿禰記〕寛永四年六月十日乙巳、午刻妻死去、今夜子刻、令送妙傳寺、依此日臨宗稱久光院妙法、

爲忠利繼母也、仍假十日服卅日也、

〔喪服議例抄〕離別之母 忌十五日 但閏月ハ不算

離別之母方之親類相互ニ定式之服忌可受之

離別之母養實有而母は養方 江 戻り罷在候得ば母之養方親類定式之服忌受之母之實方親類半減之服忌受之

離別之母養實有而離縁後養方 江 歸候上實家 江 差戻ニ相成候時は母之養方親類相互ニ服忌無之

〔台記〕久安六年十一月五日丁丑戌時禪閣 ○藤原忠實 使忠正傳仰曰以巳時一條殿 藤原師通妻、忠實母、從一位准三宮年九

十入滅不可忿參者于時在小川第禪閣已籠御云々

〔台記〕天養二年十二月廿四日甲子詣御所及禪閣 ○藤原忠實 語次 ○中 又被仰云故二條殿 ○藤原出師通家

一條殿 藤原母、藤原俊家女全子 嫁九條大相國 信長、藤原 養女之時一條殿結怨使畫工畫大宮右府 俊家 形貌

恭敬禮拜請報怨夢中右府來云莫憂吾必報讎矣不久而二條殿薨其婦人零落

〔公卿補任 後光 〕延文二年

權大納言正二位藤實夏 六月十七日喪母 依出母比丘尼不着服

〔服忌令撰註分釋 天 〕元文五庚申年三月十九日

有馬備後守より服忌聞合書付下ケ札を以て挨拶候覺

先頃申達候通拙者妹八島儀前方紀伊殿家中法輪新兵衛と申者方へ嫁し子ども致出生候以後離縁いたし其後は八島と子供共通路無御座候得共親子之儀ニ候間定式之服忌請可申存候書面之通は離別之母通路對面無之候而も其親類定式之服忌ニ而候

〔令義解 九 〕凡服紀者 ○中 繼母繼父同居 ○中 一月

〔令集解 四十 〕古記云母之後夫爲繼父繼父爲妻之前夫男女无報服也繼父若不同居其財不服也

爲繼父母服

可爲其母着如本法令之文可爲嫡母之服一ヶ月可叶理之由令申候之由被語仰之承保之時知足院殿○藤原忠實雖爲御重服令從吉事給是依事難避也云々此例外不打任之由被語申云々

〔御當家令條 三十六〕服忌之儀付覺

高巖院殿江○德川家綱御對面無之其上御養子御契約之儀も無之上者御養母之道理無御座候

間御嫡母に御究可被成候然者桂昌院殿○家綱子綱吉之方おもく御座候乍去よの常の御實母

とは違申候間御續之方半減之服忌御定可被遊候

右隨分途吟味其上京都江も申道之

禁中方之例をも取合申上事候間此通御究可被遊候以上

卯○貞享四年二月九日

爲出母服

〔服忌令撰註分釋〕離別之母

離別之母とは實母を父離縁いたし候也實母は妻妻之差別無之離縁以後他へ嫁或不縁付も差別無之定式之通五十日十三月にて候間月を不數○中離別之母方親類受方無差別定式之通若

其母妾にて候得ば其子之親類書にも書載せ候程之儀ニ候得ば妻妻之差別無之但家女にて候

得ば其親類服忌無之實母之外養母嫡母繼母其外之母離別においては服忌無之

〔禮記註疏六〕禮子之上之母死而不喪註子上孔子曾孫子思優之子名白其母出門人問諸子思曰昔

者子之先君子喪出母乎曰然註禮爲出母期父本爲父後者不服耳子之不使白也喪之何也子思

曰昔者吾先君子無所失道道隆則從而隆道汚則從而汚註汚猶殺也有隆有殺道退如禮殺則安

能註自予不能及爲伋也妻者是爲白也母不爲伋也妻者是不爲白也母故孔氏之不喪出母自子

思始也註記禮所由廢非之

〔禮記註疏三十二〕爲父後者爲出母無服註不敢以已私廢父所傳重之祭祀

〔禮記註疏三十二〕爲父後者爲出母無服註不敢以已私廢父所傳重之祭祀

〔康富記〕寶德元年八月九日丁巳、是日大御所瑞春院殿薨給、故普廣院殿○足利御嫡妻從二位藤原

尹子也、嘉吉元年普廣院殿薨御之後、有御出家着禪衣給、三條帥大納言殿御妹也、御年卅八、自此夏

比御長病也、室町殿○足利御嫡母也、無御養母儀云々、十日戊午、參局務支第官務參會有一局務

令語給云、昨日瑞春院殿御逝去、就之室町殿御服假并御禁忌事、如何様可有御沙汰哉、可破計申之

由、自室町殿以御使布施民部大夫、飯被仰出傳奏中山宰相中將之間、今日爲申、其御返事、武家近年

先例可注給、且可奉意見之由、自傳奏以使者伊賀被示局務之間注進之云々、鹿苑院殿○足利御代明

德三年六月廿五日、御繼母香嚴院殿薨給時、鹿苑院殿五十日令着輕服給、勝定院殿○足利御代應

永十二年、定心院殿薨給時、勝定院殿爲御輕服、應永廿六年十一月十一日、北山院崩御、雖然已前以

定心院殿令着輕服給之間、北山院御時、無御輕服之儀每事無、共皆非天下觸穢之由、被註申之、又傳

奏招兩局務猶委被尋問之、官務注進問局務云々、後日承分、今度儀所詮公方様不可有御輕服也、先

年御嫡母觀地院殿今大方殿御嫡母、觀地院殿有御子、經君故被用嫡母儀了又自元

也、今度大御所無御子、只爲繼母分、不可有御輕服云々、此事執柄一條近衛前殿下、右大臣殿二條

々所御意見被尋申之、大略御申詞相似歟、執柄之御申、法令文雖有兩端、今度者猶可爲此分之由被

申之、且武家管領右京大夫勝元被執此旨之故歟云々、

〔康富記〕康正元年九月十八日庚寅、畫參三條殿、彼女中様御違例此四五日及御大事之間、青侍若槻

四郎兵衛許令出給、一昨日十七女中様有落飾四〇年四十清三品○清原今朝被招引被參申、其歸路

令立寄此亭給、此女中様、若及御大事者、中將殿公約可爲御輕服歟、又可爲重喪歟之間事被談合申

云々、女中無實子候間爲養子分然者可爲重服候歟之由、帥殿被仰談之、清三品被申云、只爲嫡母之

輕服一々之由被申候、又其上明年八月、室町殿○足利可有右大將御拜賀也、重服人不交吉事之間、

可有御見所哉、可云無念也、云養子者就無相續之仁體、令養子之時者、爲養父母、可爲重服歟、有實父



爲父之先妻は嫡母ト不言、

妾ニ子出生以後、本妻を初而呼候時は、妾之子之爲嫡母也、妾之子出生有之以後、父後妻を呼候得ば、繼母也、且又後妻を呼候以後、妾ニ子出生之時は、其子之爲嫡母也、

先妻離縁ニ相成以後、妾腹に子出生致し、其以後父後妻を迎候得者、妾腹之子之爲嫡母ニ相成候事、○中

父死去以後、子細有而嫡母ニ而も、繼母ニ而も、家を離出之時、嫡母繼母之縁を切候は、服忌無之、

〔師友雜錄〕服假事諸波家景忠卿

嫡母父之嫡妻也 服三十日 假十日

令集解曰、妾之男女、謂父嫡妻爲嫡母、嫡母爲妾子無報服、

愚按、以父之本妻爲嫡母、妾之男女子着服也、以家督男子之母稱嫡母之說、甚詛也、

〔西宮記臨時〕喪服

同年○康保元年 四月七日、民部卿藤原朝臣○在申云、當時親王着服事、○此年四月村上藤原安子崩依令爲嫡母繼

母、可着一月服、抑爲皇后所服如何、仰云、須依令文着之、但延喜七年六月、先帝○醍醐爲七條中宮、○宇多

溫藤原子着給錫紵三箇日、是異繼母之例、藤原朝臣令申云、貞觀十三年、太皇太后崩、○仁明后此天皇清和

和祖母也、而被定心喪五月服制三日、此與令文不相合、以諸道勘文取捨彼此之文、被定行也、又延喜

七年例如此、左右只可隨勘定、仰云、此兩度例、爲朝家服制被儀定也、至于親王等、猶依令文及尋常例

着之可宜之、

〔本朝世紀〕寛治元年十一月廿二日庚午、今日從一位隆姫女王薨逝、宇治前大相國○藤原室、號之高

倉殿北政所、廿四日壬申、吉田祭也、攝政○藤原依御服、不被儲社頭饗、被付諸司了、十二月七日

乙酉、今日攝政殿下有御除服事、依高倉殿事也、御嫡母也、

由、常覺相屈ニ付、昨日同役被沙汰了、元陳事、忌明後御用可被仰付候由、攝政殿○近衛被仰渡了、  
〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年四月十五日戌辰假服届并賀茂祭早參御理申沙汰與奪等之事、  
書付如左、

傳奏月番之方へ爲持遣、書待自門外乞案内、取大呼出、差出、落手承歸也、廣幡家ニ而相濟也、杉原、四ツ折上包、美濃紙、無表書、以下同、

母昨夜死去候、依之五旬假十三ヶ月着服候、尤混穢候穢限追而可申入候、仍爲御届如此御座候、  
以上、

四月十五日

俊矩

廣橋前大納言殿

千種前中納言殿

〔實久卿記〕文政四年十月廿六日癸卯、參關白殿○一條、御實母去廿四日死去、依之五旬御假十三ヶ月御着服爲御見舞參入了、

〔古今和歌集十六〕ちゝかおもひにてよめる

たゞみね

ふぢ衣はつるゝいとほわび人の涙の玉の緒とぞなりける

〔新葉和歌集十九〕妙光寺内大臣○良親身まかりて後、三年の服いまだ果ざりけるに、又後村上院

の素服をたまはりて、思ひつゞける、

右近衛大將長親

三とせまでほさぬ涙のふぢ衣こは又いかにそむるたもとぞ

爲嫡母服

〔令義解九〕凡服紀者、○中嫡母○中一月、

〔令集解四十〕古記云、妾之男女、謂父嫡妻爲嫡母、嫡母爲妾子无報服也、

〔喪服議例抄〕嫡母

忌十日  
服三十日

明律、妾生子、稱父之正妻と有之は、妾腹の子たる者の爲、父之正妻ヲ嫡母ト云、後妻之子たる者之

彼卿者故大納言資藤卿次男也而故大納言入道資衡卿資藤卿弟也依無實子爲養子了實父資藤卿薨之時不着重服養父資衡卿薨之時重服也

養母事養父令離別在國之間不知其存亡今實母逝去之上者重服無所讓云々

〔舊案文集七十四〕泣血餘滴

明曆二年丙申三月二日辛巳申酉之交余○中養母荒川氏○中終於寢○中四月二日當一周月忌拜神

主獻齋膳按古禮所稱忌日者一年一度也○中本朝舊記所稱國忌亦一年唯一日也然則月忌之說

者出於中古以來流俗者歟然追遠不忘之情誠是孝道之一事也不廢之而可乎春德○中謂三年之

喪本朝古來不能行之而父母喪服以一年爲限故遭親喪者一年解官辭職近世唯以五旬爲假謂之

忌中而已偶有月忌之稱者存之而可也若倣古禮而除之則情之淺而志之薄也余謂此議固當然○中

略本朝之制妻服三月假二十日爲限故家君○中既除忌登營哀情雖切官事無暨祖母服五月假三

十日爲限春信春常○二人並等亦明日可除忌也且余及春德亦至今月二十二日既過五旬則隨俗

禮以詣執政受其旨而可入公門乎既入公門則可食肉飲酒而脫凶服乎倣古禮則父在則母喪期年

而中月而禋凡十五月而除服以本朝古例言之則解官一年之間可着喪服者明矣有舊記之可據又

有哀歌之可證也然近世唯五旬忌畢則諸事與平生不異唯一年之間不觸神社之事而已嗚呼流俗

之不可變也使親子之情漸薄如此無奈之何嘗聞應安年中南朝右大將藤原長親行三年喪而詠倭

歌以述其意也其歌并小序載在新葉集有志者如此我朝不可謂無人乎我輩不能行之何不慚之乎

然生乎今之世反古之道者聖人之所戒也昔朱文公忌日着雖素之服有問其故者公曰忌日者終身

之喪也然則余縱雖隨俗過五旬而除忌脫服至忌日則每月着雖素追遠之志其誠於中而形於外乎

雖今之世行之而可無妨乎

〔兼胤卿記〕明和四年四月廿四日吉田元陳母死去二付一昨廿二日より六月十二日迄五旬引籠之

也同年十二月十二日爲泰連卿子泰邦卿叙爵因之泰福卿ハ雖泰邦卿之實父正忌日も稱所勞小番等不參候、依此例今度泰兄請祖父之假服之由陳答之趣、攝政殿申入候處、兎角實父之儀候間、五旬十三ヶ月之假服、尤之由被命其趣相達、今日屆書書改、五旬之假十三ヶ月着服之由、示附姉小路大納言攝政殿にも寫進入了、

〔大江俊矩先考卒去喪中雜々日記〕寛政四年十二月廿四日戊子、申刻頃披露、即閉門、開小門、假服屆書差出如左、

武傳月番正親町家へ差出、使近藤帶刀、門外ヨリ乞案内相渡ス、取次侍持入、歸出落手之旨告之、

口狀 杉原四ツ折、表也、美濃紙、表  
北小路新藏人トカケ、表

父 俊冬 昨夜死去候、依之五旬假十三ヶ月着服候、尤混穢候、穢限迫、而可申入候、仍爲御届如是御座候、以上、

十二月廿四日

俊矩

萬里小路前大納言殿

正親町前大納言殿

〔先哲叢談 續編十二〕源琴臺

琴臺喪父爲之服三年、能終禮制、大溝侯聞其異行、將旌之門閭、而警戒衆庶、辭謝曰、爲受賞賜、不服親喪、供爲子之職而已、

〔實久卿記〕文化十四年二月廿三日丁酉、已刻許、中納言殿 實久父 御違例甚々御勝無之、醫師各召

寄御診察候處、甚々御大切之由也、中 則今日令薨給、御歳六十歳也、誠ニ渡口無限無是非無是非、

依之傳奏卿以四折御容體書予五旬假十三ヶ月着服之事届了、自今日門閉了、

〔建内記〕嘉吉元年三月十二日己酉、日野大納言 忠勢 喪實母、正月十日歟 昨日歟、復任吉服云々、所參候也、



年、今制爲十三月、誠天運之當然也、自今而後、人壽益短、更復改正、亦不可知也、學者必以三年之喪爲不可易、恐似不通、垂加不答、

〔南嶺子〕禮記曲禮上

曰、入竟而問禁、入國而問俗と云々、然るに今の儒者神道を議る、禮記をすて

て、我意にまかすにや、曲禮下に、君子行禮不求變俗、祭祀之禮、居喪之服、哭泣之位、皆如其國之故、謹修其法而審行之とこそあるに、わが國の祭法にかゝはらず、國風の服を過て三年つとめ、神主を造るに、周代の尺を用ゆ、わが國風に戻れるのみにあらず、禮記に背るを儒者とやいふべき、おぼつかなし、

〔先哲叢談續編〕野中止字良繼、小字傳右衛門、號兼山、○中略

兼山早喪、父事母至孝、執喪三年、一遵文公家禮、不用浮屠法、朱舜水、答安東守約書云、前聞久留米磯部勘平、目下行三年之喪、今日有書至者云、土佐大夫野中傳右衛門、葬父依聖法、甚惡佛氏、居喪三年不弛、往往使國中行喪禮、如此則貴國非盡呂邪教、陷其親、特人自沒溺而不能振耳、此後有行之者、亦不爲驚世駭俗、居今反古、不足慮也、

〔先哲叢談續編〕向井靈蘭

靈蘭事親至孝、鄉黨稱之、歲四十六喪父、爲三年服、悉遵禮制、伊藤仁齋、貝原益軒等、皆稱其謹慎之行、

〔先哲叢談續編〕柳川震澤

震澤幼而孤、不及居喪、逾弱冠、喪母、素無昆季、形影相憐、能絕酒肉、不近聲色、爲三年服、其儀一從順菴○木之所行焉、先是順菴居親喪、能遵禮制、爲三年服、

〔兼胤卿記〕寶曆二年七月廿九日、去廿七日、泰連卿死去、付、泰兄、祖父之忌服十日假九、注進之處、泰

兄は泰連卿次男ニ而泰邦卿養子之間、可爲五旬之假十三ヶ月服、攝政殿道香一條被命ニ付、所意昨

日尋遣候處、泰邦卿ハ、泰福卿次男之處、享保七年正月十二日、泰連卿依願養子被仰出、泰福卿ハ享保二年薨去

し給へる御すがた、うすにびにて、いさなまめかしうて、なかのきみは姫○八宮げにいささかりにて、うつくしげなる、匂ひまさり給へり。

〔太平記九〕足利殿御上洛事

先朝○後醍醐船上ニ御坐有テ、討手ヲ被差上、京都ヲ被責由、六波羅ノ早馬頻ニ打テ、事既ニ難儀ニ及由、關東ニ聞エケレバ、相模入道○北條大ニ驚テ、○中名越尾張守ヲ大將トシテ、外様ノ大名二十人ヲ被催、其中ニ足利治部大輔高氏ハ、所勞ノ事有テ、起居未快ケルヲ、又上洛ノ其數ニ入テ、催促度々ニ及ベリ、足利殿此事ニ依テ、心中ニ被憤思ケルハ、我父○貞氏ノ喪ニ居テ、三月ヲ過ザレバ、悲歎ノ涙未乾、又病氣身ヲ侵シテ、負薪ノ憂未休處ニ、征討ノ役ニ隨ヘテ被相催事コソ、遺恨ナレ、下

〔大日本史百八十四〕按常樂記、尊氏父貞氏、元弘元年九月卒、爲健據、而梅松論以尊氏喪父係三年、見行本太平記、以居喪嬰病爲一時之事、皆誤矣、

〔先哲叢談後篇二〕川井東村

正保丁亥之春、正次○東村父罹病、東村雖異居處、日至其家、至益篤、日夜不離側、衣不解帶、○中至己丑正月、遂不起、東村哀戚踰節、饘粥絕口、於喪紀咸從朱子家禮、而損益之、屋後有一室居之、以爲喪次、自非省母、不敢出戶、家事一委之妻子、無所聞、潸然涕泣不已、如是凡十有九月、而母小山氏又歿、東村毀瘠雖甚、哀禮兩不怠、如其棺斂窆窆之事、三虞卒哭之奠、皆不敢降於前喪、其所自執、久而愈謹、通二喪凡四十有餘月、而憂色猶未去云、按○東條我邦慶元以來、學問大闡、當是之時、有識之士、能斷然行之、服三年喪、往々有焉、安知非其感發於東村之所爲也哉、

〔泰山集甲乙錄一〕耶麻止小學、垂加翁未定之說多、如服忌之說是也、○中予又問神代至人皇之初、人壽極長、親喪或五年、或三年是也、後世人壽漸縮、以曆之消長驗之、天運亦漸縮、古爲五年、中爲三

母は家女に而父假遣し、他<sup>江</sup>嫁候共五十日十三月之服忌受之、但他<sup>江</sup>嫁、通路不致候共、外より告來候は、其日より五十日十三月之服忌受之、

母は家女に而己出生以後父假遣し、己は嫡母之養育を請、實母有事を不知、己も他家<sup>江</sup>養子ニ成、成長之後實母有事を知る時は、實母定式之服忌受之、養育請候共、嫡母之服忌は不受、

〔服忌答批集〕一寅四月九日<sup>元○安政</sup>願大目付戸川様<sup>江</sup>さし出翌十日御付札濟

何某儀不埒筋有之、逼塞申付置候處、逼塞中致出奔行衛相知不申候ニ付、主人より永尋申付候、然處、尋先ニ而病死仕候旨相分申候、右ニ付何某忝承知仕候上者、主人<sup>江</sup>其趣申達、實父定式之忌服受可申儀ニ御座候哉、左候は、其外忌掛り之ものも、夫々忌服受可申儀に御座候哉、又は出奔之儀表向主人<sup>江</sup>者申出難相成筋にも御座候哉、兼而心得罷在度、此段奉伺候、以上、

四月九日

小笠原土佐守<sup>來</sup>

林小源太

御付札

書面之通者出奔之者に候共、忌服差別無之候、

〔三代實錄<sup>清和</sup>〕貞觀八年九月廿二日甲子、是日<sup>略○中</sup>從五位上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國、<sup>略○中</sup>

數年母亡、夏井至孝、冥發居喪過禮、建立草堂、安置骸骨、晨昏之禮無異生時、本自崇信備禮、至是於草堂前、每日讀大般若經五十卷、以終三年之喪、

〔源氏物語<sup>四十七</sup>〕あまたとし耳なれ給にし川風も、この秋は、いとほしたなくものがなしくて、御

はて<sup>宮周</sup>父八のこといそがせ給<sup>略○中</sup>みづからも<sup>○</sup>まうで給ひて、いまはさぬぎ捨給<sup>○</sup>ほどの御と

ぶらひ、あさからすきこえ給<sup>略○中</sup>御ぶくなごはて、ぬぎすて給へるにつけても、かた時もおく

れ奉らんものと思はざりしを、はかなくすぎにける、月日のほごをおぼすに、いみじう思ひの外なる身のうさとなきしづみ給へる御さまども、いと心ぐるしげなり、月ごろくろう<sup>○</sup>重ならは

古事類苑

禮式部二十六

服紀中

爲父母服

〔令義解<sup>九</sup>〕凡服紀者、爲君<sup>○</sup>、父<sup>○</sup>母<sup>○</sup>及夫、本主<sup>○</sup>、<sup>略</sup>一年、

〔令集解<sup>四十</sup>〕古記云、<sup>略</sup>中僧子亦服解、

〔西宮記<sup>略</sup>時<sup>四</sup>〕心喪裝束、

除重服之後、一月着輕服、

〔法曹至要抄<sup>下</sup>服假〕一不孝子死去、父母并服親着服、又父母并服親死去、不孝子可着服事、

名例律云、其婦人犯夫及義絕者、得以子蔭疏云、爲母子無絕道故、

案之、夫婦雖有義絕之法、父子可無義絕之道、仍不孝之子死去之時、父母并服親、最可有服假之、又

父母并服親死去之時、不孝之子、同着服之條、不可有其疑矣、

〔神祇道服紀令秘抄〕一間云、子アル妻ヲ離別ノ時、其子ハ母ニ隨テ共ニ去ル、母未ダ夫ヲモタザル

ニ、父死スルノ由ツタヘ聞ク時、母ニ隨フ子ハ服アルベカラズヤ、答云、不及沙汰、但義絕之例ヲ用

ベキ歟、

〔喪服議例抄〕父母 服<sup>略</sup>三十日 但閏月ハ不算

父母子之續には服忌半減之受方無之事、<sup>略</sup>中

妾母 服<sup>略</sup>三十日 閏月ハ如前



爲從父兄弟姊妹服

一九九

爲從姪服

二〇一

爲母黨服

二〇二

爲妻黨服

二〇八

爲夫黨服

同

爲養父母服

二一一

爲養子女服

二二三

爲本生父母服

二二五

爲本生家服

二二六

爲所養家服

二三一

爲君主服

二三六

爲師服

二四〇

古事類苑

禮式部二十六

服紀中

爲父母服

一六—

爲嫡母服

一六七

爲出母服

一七〇

爲繼父母服

一七一

爲祖父母服

一七三

爲曾祖父母服

一七八

爲夫服

同

爲妻妾服

一八〇

爲子女服

一八四

爲兄弟姊妹服

一八七

爲異父兄弟姊妹服

一九一

爲孫服

一九三

爲伯叔父姑服

一九四

爲姪甥服

一九六

〔後撰和歌集<sup>二</sup>〕<sub>哀<sup>十</sup>傷<sup>十</sup></sub>〕なくなりて侍ける人のいみにこもりて侍けるに、雨のふる日、人のとひて侍ければ、  
よみ人<sup>三</sup>を<sup>四</sup>ら<sup>五</sup>す

袖かわく時なかりける我身にはふるを雨ともおもはざりけり

人のいみじで、もとの家にかへりける日、

故郷にきみはいづらこまちはいづれのそらの霞といはまし

〔權中納言兼輔集〕思ひにて、人の家にごれりけるに、其家にわすれぐさ多かりければ、その家に  
いひける、

なき人を忘れかねてはわすれぐさおほかるやごにやごりをぞする

〔後拾遺和歌集<sup>十</sup>〕<sub>哀<sup>十</sup>傷<sup>十</sup></sub>〕左兵衛督經成、身まかりにけるそのいみに、いもうこのあつかひなどせんと

て、師賢朝臣こもり侍りけるにつかはしける、

小左近

よそにきく袖も露けきかしはぎのもとのまづくを思ひこそやれ

〔續詞花和歌集<sup>九</sup>〕<sub>哀<sup>九</sup>傷<sup>九</sup></sub>〕待賢門院<sup>〇</sup><sub>鳥羽后<sup>〇</sup>原璋子</sub>かくれさせ給て、四十九日のみわざはて、まゐりこもれる人々まかであへりけるに、兵衛におほせごとありける、

新院<sup>〇</sup><sub>崇</sub>御歌

限りありて人はかた<sup>〇</sup>ゝわかることも涙をだにもとめましかは

返し

兵衛

ちり<sup>〇</sup>ゝにわかる、<sup>〇</sup>ふのかなしさに涙しも<sup>〇</sup><sub>しも<sup>〇</sup>木作<sup>〇</sup>まへ</sub>こそぞまらざりけれ

さよみ給ひしに右相禪府の御うた、

なき人のめでし心はかへりきて見るらんものを庭の梅がえ  
など侍りけるよし

〔建内記〕嘉吉元年四月十三日乙卯、景愛寺長老眞業院、故養女、依夷母、自去月、龍居給、仍結夏可事、闕之間、通賢寺内曇華院、故養女、眞業院、御姉、景愛寺前住也、自今日御再住事被仰出候、移給云々卅ヶ日之逗留之由被申云々、

〔池の藻屑十二〕三條の入道〇藤原は神無月〇天文六年に失給ひき、八十三に成給ふとぞ聞えし、所  
所に御孫の殿原やむごなくしておはしませば、後の御わざごもいかめしうし給ひぬ、公條〇實子  
の大納言も御忌の程籠り居給へり、

〔伊勢集〕つねになやましうせさせたまひけるを、つひに六月〇延喜七年八日になんかくれさせ給に  
ける〇字多后藤原温子あさましくいみじくかなしくて、つかまつりし人々も、さまんにあつまり  
て夜盡なきこひたてまつるに、のちの御わざのをりにやう／＼成ぬ、雨のふる日、心うしと  
いひし人しもになむこもりゐたりける、うへの人あつまりて、御わざのくみをなんしける、  
しも成人いとはよりはてたまふべかなり、たゞいまなにわざをかし給こゝにはあめをな  
ん見いだして、ながめ侍といひあげたりければ、うへの御もごたちのかへしには、いとはよ  
りはて、いまはねをなんよりあはせてなき侍といひおこせれば、しもなる人、

よりあはせてなくなる聲をいごにして我涙をび玉にぬかなん

〔後撰和歌集二十〕きよたゝが、枇杷大臣〇藤原仲平のいみにこもりて侍けるにつかはしける、

藤原守文

世のなかのかなしき事をきくの上におくしら露ぞなみだなりける



行佛事以是所可爲七七日喪家之故也、

〔古今著聞集十三〕明義門院順德皇女寛元元年三月廿九日にかくれさせ給ひしに侍從隆祐備

後園にて聞參らせて讀て送侍し、

袖の上によよひの雨のはれやらでかげとたのみし花や戀しき此謝をはるかに程へて持て  
來られしに其年の九月に又陰明門院土御門后うせさせおはしまし、かば醍醐殿の御葬に、  
家にこもり侍りしにかの使下るとて返事こひ侍しかば人にかゝせてつかはし侍し、

思ひやれやよひの雨もはれやらで又しぐれそふ秋の山里

〔圖太曆〕文和二年七月廿五日關白被談重喪間不審條

一四十九日夜渡御他所事

渡御近衛殿不可有子細候哉凡五旬以後御座所強不及沙汰如神事之外不可被憚御座所歎可

被任御意乎云々

〔將軍義尚公薨逝記〕かぎりある御日數よりもいそがはしくごりかさねつゝ御はての事などあ  
りさらぬだに御名殘かなしきにこもりゐさぶらふ僧達などもちり／＼にまかでわかるらん  
ほどいふばかりもなくおはしますらん誰も／＼戀かなしび奉るにはかぎりもはべらぬをけ  
ふまでにやかの物語氏源に中將の君とかやいひし女房の扇に君戀る涙はきはもなきものを  
けふをば何のはてといふらんとかきつけてもたりしそれはまへの年の秋紫の上におくれ奉  
りて一めぐりの正月のことか是ははづかに三十日にさへなるならぬほどなればいつのほど  
にかはまぎれはべらん

〔あしたの雲〕此春四年明應北堂におくれ給ひて政弘大内いみにこもられし中に梅花を見て、

たましひを返すにほひはなかりけりなき人こふる宿の梅がえ

よるは御帳のうちにひさりふし給に、どのの人々は、ちかうめぐりてさぶらへど、かたはらさ  
びしくて、ときしもあれど、ねどめがちなるに、聲すぐれたるかぎりえらびさぶらはせ給念佛の  
あかつき方など、まのびがたし、略御法事などすぎぬれど、正日まで猶こもりおけす、

〔源氏物語御法四十〕夜一夜、さま／＼のこををしつくさせたまへど、かひもなく、明はつるほどに消は  
て給ぬ、中略上、大將の君子紫上も御いみにこもり給て、あからさまにもまかで給はず、明暮ちか  
くさぶらひて、心ぐるしくいみじき御けしきを、こどわりにかなしみ奉り給て、よろづになぐさ  
め聞え給ふ、

〔源氏物語四十〕かねのこゑ、かすかにひゞきて、明ぬなりと聞ゆるほどに人來て、此よなかばか  
りになん、うせ給ぬる宮、入と泣々申す、略中、こゝにも略八、念佛の僧さぶらひて、おはしまし、  
かたは、はとけをかたみに見奉りつ、時々参りつかうまつりし人々の御忌にこもりたるかざ  
りは、あはれにおこなひて過す、

〔おちくぼ物語四〕つひに七日に消いり給ひぬ、略大、十一月の事なりけり、略中、御いみの間はたれ  
もたれもきんだち、例ならぬ屋の短きにうつり給ふて、寢殿には大どこ達いと多くこもれり、中  
略、三十日の御いみはてぬれば、今はかしこにわたり給ひぬ、子ども戀きこゆとの給へば、今いく  
ばくにもあらず、御四十九日はて、わたらんとの給へば、こゝに、なん夜はおはしける、

〔水左記〕承保四年九月十五日壬戌、今曉宰相源中將母上入棺、略中、木工允俊章、相具侍男共一兩、行  
向宰相中將、自今日、至法事之日、可居住、件所也、

〔兵範記〕久壽二年六月一日丁丑、今夕左府略藤原、北政所卒去、生年四十四、日來病惱、去月九日以後  
危急、十三日出高陽院御所、渡給公親朝臣宅、此間倍増、令遂入滅也、嚴親内府、左府右大將新中將等、  
籠給了云々、八日甲申、今夕左府北政所御葬禮云々、略中、今朝左府以下、於五條壬生憲親宅先被

〔新古今和歌集<sup>八</sup>〕とし比すみ侍ける女の身まかりにける四十九日はて、猶山里にこもりゐ  
てよみ侍ける。  
左京大夫顯輔

誰もみな花のみやこに散果てひとりしぐる、秋のやまざと

〔後拾遺和歌集<sup>十</sup>〕親なくなりて、山寺に侍ける人のもとに遣しける、

よみ人まらす、

山ざこのは、その紅葉散にけりこのもどいかにさびしかるらん

〔榮花物語<sup>二</sup>〕天祿三年十一月の一日かくれ給ぬ<sup>〇藤原伊尹</sup>、かくて御いみのほど何事もあは

れにて過させ給、御法事などあべいかぎりにてすぎぬ、今はとて人々まかづるに、義孝少將のよ  
み給、

今はとてとび別れぬるむら鳥のふるすにひとりながむべきかな

修理のかみ惟正かへし

はねならぶ鳥となりてはちぎるども人わすれずばかれじこそ思ふ

〔榮花物語<sup>四</sup>〕同<sup>〇長元</sup>日<sup>〇五月八日</sup>の末の時ばかりに、淺ましうならせ給ひぬ<sup>〇藤原</sup>あなま

がまがし<sup>〇中</sup>、其夜さりやがて粟田殿にゐて奉りぬ、十一日に御葬送せさせ給<sup>〇中</sup>、かくて御忌

のほど、皆粟田殿におはすべし、

〔源氏物語<sup>九</sup>〕どの、うち人すくなにまめやかなる程に、俄に例の御むねをせきあげて、いといた

うまごひ給、うちに御せうそこきこえ給ほどにたへいり給ぬ<sup>〇源氏</sup>、妻はかなくすぎゆけば、

御わざのいそぎなごせさせ給も、おぼしかけざりし事なれば、づきせすいみじうなん<sup>〇中</sup>、大將

の君<sup>〇源氏</sup>は、二條の院にだにも、あからさまにもわたり給はず、あはれに心ふかく思ひなげきて、

おこなひをまめにま給ひつゝ、あかしくらし給ふ所々には御ふみばかりぞたてまつり給<sup>〇中</sup>、

〔玉海〕文治四年二月廿日丙戌、入棺。○藤原同夜、可益出嵯峨遊幸。○中余女房等今夜向九條亭、內府女房猶留此亭、來廿二日、可向九條也。以九條堂可爲喪家也。

〔玉葉〕嘉禎元年四月三日乙丑、此日故攝政殿。○藤原葬禮也、用如在儀。○中今朝北政所移報恩院、可爲喪家所。

〔徒然草〕人のなき跡ばかりかなしきはなし、中陰のほど山里などにうつろひて便あし、せばき所にあまたあひゐて、後のわざごいとなみあへる、心あわたし、日數の早く過る程、物にも似ぬ、はての日はいとなさけなう、たがひにいふ事もなく、われかしこげに物引た、め、散々にゆきあがれぬ、もとのすみかに返りてぞ更になしき事は多かるべき。

〔古今和歌集〕十卷思ひにはべりける年の秋山寺へまかりける道にてよめる、

つらゆき

朝露のおくての山田かりそめにうき世の中を思ひぬるかな

女のおやの思ひにて、山寺に侍けるを、ある人のごぶらひにつかはせりければ、返事によめる。  
よみ人ゑらす

足ひきの山べに今はすみぞめの衣のそでのひるときもなし

〔權中納言兼輔集〕おやの思ひにて、山寺にこもれるに、いづくにてど人たづねたりける返事、

あし引の山べに今はすみぞめの衣の袖のひるときもなし

藤衣人のたもと、見しものをおのがなみだに流しつるかな

〔金葉和歌集〕兼房朝臣重服になりて、こもりゐて侍けるに、出羽辨が許よりごぶらひたりける

を、是が返しせよと申ければよめる、

橘元任

かなしさのその夕暮のま、ならばありへて人にごはれましやは



はせて草などもわづらひしより初めて打捨たりければ生ひひろがりていろ／＼に咲亂れた  
り。○中これかれぞ殿上などもせねばけがらひもひとつにまなしためればおのがじ、ひきつ  
ばねなどまづ、あめるなかに、われをのみぞまざる事なくて、夜はねぶつの聲き、はじむるよ  
り、やがてなきのみあかざる。

〔榮花物語二十卷〕さて御車○藤原長まきおろして、つぎて人々おりぬ、さて此御いみの程は、たれ  
もそこ○住法寺におはしますべきなりけり、山の方をながめやらせ給につけても、わざとならずい  
ろいろにすこしうつろひたり、鹿のなく音に御めもさめて、今すこし御心ほそまさり給、宮々  
よりもおぼしなぐさむべき御消息たび／＼あれど、たゞ今は夢を見たらんやうにのみおぼさ  
れてすぐし給、月のいみじうあかきにも、おぼしのこさせ給事なし、うちわたりの女房も、さまざ  
ま御消息きこゆれ共、よろしきほどは、今みづからとばかりか、せ給。○中年ごろかきつめさせ  
給ける繪物語など、みなやけにしのちこそ、ことしのほどにまづめさせ給へるも、いみじう多か  
りし、里にいでなば、どりでつゝ、見てなぐさめんどおぼされけり、月のいみじうあかきに、ふる  
さどをおぼし出て、

もろどもにながめし人もわれもなきやごには月やひとすむらん、かくいふほどに、やうや  
う御法事のはごもちかくなりぬれば、かの御さうぞくや、僧のはうぶくなどさま／＼すべなく  
うちなき／＼いそがせ給。○中中納言殿家○長おぼし、いたらの事なく、いかめしうせさせ給て、御  
いみもはてぬれば、廿よ日京にいでさせ給、

〔榮花物語三十卷〕萬壽五年になりぬ、ことしはあたらしき車みえす、さきはなやかに、おふ事なく、  
こどねりわらはべだには、ななやかなるきぬきせたる人なし、女院中宮、關白殿、なんど、みななくて  
おはしませば、よの人みな御堂○法成寺にこみたり。○去年十二月

年連染伴健岑謀反事、掠拷不服、減死配流伊豆國、初逸勢之赴配所也、有一女悲泣步從、官兵監送者叱之令去、女盡止夜行、遂得相從、逸勢行到遠江國板築驛、終于逆旅、女孿號盡哀、便葬驛下、廬于喪前、守屍不去、乃落髮爲尼、自名妙沖、及詔歸葬、女尼負屍還京、

〔文德實錄〕六、齊衡元年五月己酉、賜加賀國節婦和邇邇廣刀自女、爵二級、廣刀自女年十四、適山城國人秦真勝、真勝亡後、廬於家側、于今三十餘年、追慕其夫、言及哀泣、

〔三代實錄〕十一、貞觀七年十一月二日己卯、阿波國名方郡人忌部首真貞子伉儷亡後、三十餘歲、身臥家側、心存念佛、遂不再醮、將終一生、

〔三代實錄〕十八、仁和元年十二月廿九日己卯、節婦加賀國加賀郡大野鄉人道今古、授位二階、免戶內田租、表其門閭、以旌貞節也、今古生年十三、適故前加賀權掾大神高名、經二十餘年、高名身死、今古廬于墳側、歷年不去、哭泣之聲、日夜不斷、

〔高山彦九郎傳〕高山彦九郎正之、字仲繩、上州新田郡細谷村ノ人也、○中略嘗テ其母ヲ喪テ、墓上ニ廬スルコト三年也、少シク葉ヲ以テ葺ル屋ヲ作リテ是ニ獨居シテ、母ノ墓ヲ守リシトゾ、村人は是ヲ憐ミ、食品ヲ携ヘテ贈ル者アルニ至リシトゾ、

寺院品類

〔蜻蛉日記〕一、女おや○藤原道といふ人、あるかぎりはありけるを、ひさしうわづらひて、秋のはじめのころほひ空しくなりぬ、さらにせん方なくわびしき事の、よの常の人にはまさりたり、○中略

かくてとかうものする事など、いたづら人おほくてみなしはてつ、今はいと哀れなる山寺につどひて、つれづれとあり、夜めも合ぬまゝに、なげきあかしつゝ、山づらを見れば、霧はげにふもごをこめたり、京もげに誰がもごへかは出んとすらん、いで猶みながら死なんと思へど、いくる人ぞいとつらきや、かくて十餘日になりぬ、○中略心にしまかせねばけふみな出立つ日になりぬ、○中略道すがらいみじうかなし、おりて見るにも、更にももの覺えずかなし、もろ共に出居つゝ、つくる

〔薩戒記〕永享六年十月廿日癸亥後小松院周非御法事無殊事○中御導師仲承僧正題名僧四口中

陰之時僧等也

〔山賤記〕こよひ○文明三年正月三日よりしやう玄ゆ寺にて御中陰○後はじめらる元應寺の住持惠忍上人のさたにて籠僧十人ごやらむ聞たまふる、玄かるべき名僧などのかゝる亂によりてさぶらはねば、御前僧のなきぞいとほいなく侍る、

〔常徳院殿薨逝記〕卯月廿七日には○延徳元年かざりある御日數よりもいそがはしくごりかさねつ

つ、御はての事なごあり、さらぬだに御なごりかなしきに、こもりゐさぶらふ僧たちなども、ちり

ちりにまかでわかるらんほどいふばかりもなくおはしますらめ、

〔萬松院殿穴太記〕けふ○天文十九年五月七日此月四日足利義晴薨より此處にて、不斷陀羅尼廿一日迄侍り籠僧十人

北山鹿苑寺の僧衆も例なればとて四五人参りぬ、

〔日本書紀二十三〕以三十六年三月天皇崩九月葬禮畢之嗣位未定○中大臣○藤我傳阿倍臣中臣

連更問境部臣曰誰王爲天皇對曰先是大臣親問之日僕啓既訖之今何更亦傳以告耶乃大忿而起行之適是時蘇我氏諸族等悉集爲島大臣○馬造墓而次于墓所爰摩理勢臣墳墓所之虞退蘇我田

家

〔類聚國史五十四〕弘仁十四年三月甲戌下野國芳賀郡人吉彌候部道足女授少初位上免田租終其身標門閭以褒至行也道足女同郡少領下野公豐繼之妻也夫死之後誓不再醮常居幕側哭不絕聲

〔續日本後紀十六〕承和十三年五月壬寅武藏國言多磨郡猪江郷戸主刑部直道繼戸口同姓眞刀自

畔爲同郷刑部廣主妻生四男三女經廿一年夫乃死矣眞刀自畔居喪有禮事死如生墳側結廬晨昏

悲泣推移歲月終始不渝

〔文德實錄〕嘉祥三年五月壬辰追贈流人橘朝臣逸勢正五位下詔下途江國歸葬本郷○中承和九

可直御座之處、御身猶溫、仍覺相待、此間今夜御葬禮并龍僧已下事被沙汰、偏以鳴咽敢不能成敗只溺淚、○中今日差遣前豐前守能業御乳母也爲行事、龍僧等遺請了、

〔玉海〕文治四年二月廿八日甲午、此日內府○藤原通葬送也、○中龍僧名權律師覺光、法橋性憲

已講公雅、阿闍梨伊覺行家、昌圓

〔明月記〕元久元年十一月卅日、運明欲奏之間、口有使周章馳參、念佛音聞、已令終給云々、入臥內已令閉給、御氣猶通之間也、○中遂以御氣絕○藤原俊成給聞、事伏了、○中今日龍僧事大略定了、陸奥闍梨庫

信乃房兩人放御前龍僧臨終伺候小僧、已上三口、

〔法然上人行狀畫圖二十五〕武藏國那珂郡の住人彌次郎入道不註は上人○法然の教誡をかうぶりと、一向專修の行人となりけり、○中病惱の時、八月廿九日不註に、近隣なる僧蓮臺房來りとぶ

らひければ、此所勞は日比ねがふところなり、明後日來臨し給へ申べき事侍りと申けり、○中三日○九に、又ゆきむかふに、病者のいはく、往生すでにかづけり、よくきたりたまへり、四十九日の間は、こゝに住して念佛したまふべし、○中念佛三遍唱へて、端座合掌して息たえにけり、四十

九日の夜蓮臺房ゆめに見る様、○下

〔後愚昧記〕應安七年正月廿九日、崩御○後光嚴

自二月二日、御中陰御佛事等被始之、御教書云、御中陰間爲御龍僧可令參候給候也、仍執達如件、

正月廿九日

權中納言忠光

岡崎法印御房

請文云

御中陰之間、爲御龍僧可令參候之由、謹以奉了、早可存令其旨候、經深謹言、

二月一日

法印經深



〔後成恩寺關白諒闇記〕諒闇事可下母屋御簾敷將又可垂座御簾敷先例上皇崩御之即日於內裏下

御簾御前御手水間以下格子下之御殿格子不之必下之應安明

諒闇間御殿御裝束懸簾純色布障子屏風以下用純色絹白木御帳不立大床子敷筵二枚上敷圓

座黑端御疊男女房不立倚子敷圓座

〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年四月十四日丁卯亥刻御終焉〇俊矩母十五日戊辰神棚大黑荒神

以紙張之從是十三ヶ月之間如此閉置也

〇按ズルニ喪中神棚ヲ鎮スコトハ神祇部第宅神篇ノ附神棚篇喪中鎮神棚條ニ在リ

〔榮花物語十六卷〕〇藤原はをり／＼にはほうしにならんごおもへどこのみや／＼〇小一

延子顯光女のおほんありさまみはてんのほいなりいまのみかど〇後東宮朱まだいとわか

おはしませばみやたちをもうけ給べきにあらずこのゐん〇小一のみやたちはつぎの世には

かならずたちいで給はんだゞしその御ときの攝政關白は我おほぢなりそれをおきていみじ

からんいまの攝政のおとゞ〇藤原内のおとゞ〇藤原もしはおほくらきやう〇藤原などやた

ち心ちつかむそれらはいどやすしなどいふあらまし事を給あかしくらさせ給へば御いみ

寛仁三年四月小一にこもりたるそゝなどおのがごぢしのびてうちわらふべし

〔榮花物語三十五卷〕〇藤原大將殿よのなかの御こゝちわづらはせ給けり七日といふにうせさせ

給ひぬ〇中四十九日はてゝ山にのぼりて申たりける座主

たぐひなき君がわかれは程ふれどおつるなみだの色ぞかはらぬ

〔おちくぼ物語四〕つひに七日に消入給ひぬ〇大納殿には大とこだちいと多くこもれり

〔玉海〕治承五年〇後和十二月五日丁未寅刻御閉眼〇後以後聖人退出猶覺不止舍殺〇不

誤二位中將自去二日伺候崩御之刻不候合御前被退出僧都猶隨候近習女房一切伺候御邊即

〔兵範記〕久壽二年十月廿一日乙未、參法性寺殿下○藤原忠通所御也、寢殿南面東第三間、以西母屋三間

庇四ヶ間爲堂場、北母屋置戸三ヶ間、東棟分并南庇、子午鴨柯下等懸、黑色御簾出、同色几帳帷北母屋爲女院御所、東邊爲女房候所、母屋中央間立佛臺、奉懸御佛、其前立前机禮盤燈臺、磬臺等如常、南面兩方庇敷高麗

端疊五枚爲僧座、立經机、每間懸幡花幔代、母屋庇撤御簾也、西南子午廊爲六道師御讀經所元上達部座也、西母屋際放給障子、副其壁下立佛臺、奉懸御佛日來御逆修阿彌陀像也、其前敷紫綠帖三帖立經机、六前日來供養經同

安東弘庇又撤給障子、張替布、面不圖繪、凡撤所々畫障子、併成白布面、又撤翠簾、懸伊與簾白革之

〔明月記〕天福元年九月卅日辛未、參舊院○中略、西中門方、寢殿御裝束、遲々高嗣行之、黑御簾大略只今塗

之間、未晡云々此事近古以來、本御簾塗着云々、舉灯之後、漸敷疊了、公卿座床子鈍色布同綠疊○此月二十日後、堀河后増子崩

〔園太曆〕文和二年七月廿五日甲寅、關白殿被談重喪間事不審條々之事○中略、一便宜所懸伊豫簾敷、鈍色綠疊等、

〔後光嚴院御記〕貞治四年七月十一日丁卯、今日諒闇畢○去年七月光嚴崩、大祓日也、白朝敷藏人式部丞菅原長季、藏人所衆諸司女官等、奉仕裝束、午時撤白木御帳、改直黑漆帳、撤唐懸翠簾、所々撤鈍色端疊、鋪縹緗高麗帖、立頓日時無動文、陰關頭在音、未以詞申之乎、嗣往年例不分明、歟、嘉承爲房、夜御殿又鋪縹緗高麗帖、鋪記云、寬德勅之、延久不令勅之云々、嘉承以來、每度無勅文、以詞申先例、、立御帳、如元諒闇之間、立鈍色屏風、殿上臺盤所撤口圓座立倚子以黑漆改、未漆、日記置机退之、御厨子等如元各今度加修理、障子或修理或新調、

〔後深心院關白記〕貞治六年十月五日戊申、申刻禪尼遂遷化、卅日、今夜余○藤原道嗣、有若服事、次改鋪

設、北向四面并二間懸伊與簾白革懸緒、敷鈍色綠疊、

〔薩戒記〕永享五年十一月四日癸未、抑昨夕改御裝束○此年十月二日、後小松崩、寢殿覆御簾等皆墨染、色、竹於黑、

之歟、綠淺、放絹、於疊者如元、撤庇御簾、公卿座御簾又撤之、懸墨染御簾、兩樣也、今度就多分例、不懸、或撤

云、墨又如元雖可改之、未出、來云々、

禮式部二十五 服紀上 一四九

御くせにて、御どぶらひなど、いとしげうきこえ給ふ。○中あなたの御まへを見やり給へれば、○中略くらうなりたる程なれど、にびいろのみすに、くろき御木丁のすきかげ。袷におひ風なまめかしく吹とほし、けはひあらまほし。

〔花鳥餘情二十〕にびいろのみすに、くろき御木丁、

服者の所の御簾のへり、もかうには、にび色の布を用也、くろき木丁とは、几帳の手黒ぬりに玄て、蒔繪螺鈿なしかたびらは、是もにび色也。

〔源氏物語四十六〕八月廿日の程なりけり。○中人きてこの夜中ばかりになんうせ給ぬる。○八どなくく申す。○中げによりづ思ほれ給へるけはひなれば、○大いと哀さき、奉り給。○中くろき几帳のすきかげの、いと心ぐるしげなるに、ましておはすらんさまほのみし明くれなど思出られて、

色かはるあさちをみても、墨染にやつる、袖を思ひこそやれ。○中中納言の君。○中は、あたらしき年は、ふとしもえとぶらひきこえざらんとおぼしておはしたり。○中訪字治經例よりはみいれて、御ましなどひきつくろはせ給ふ、すみぞめならぬ御火桶もの、おくなるとりいで、ちりかきはらひなどするにつけても、宮のまぢよろこび給ひし御けしきなど、人々も聞えいづ。

〔榮花物語二十九〕三月八日よりなやませ給ひて、萬壽四年九月十四日のさるの時に、うせさせ給ぬ。○三條后藤一品宮子、○三條皇女、○中嬪ひんがしの廊のいたじきおろして、おはしますべきなれば、さしあひていみじめのとたちえまゐらず、みやの御こゑえしのびあへさせ給はず、あはれにかなしとおろかなり。

〔殿暦〕康和三年二月十三日甲辰、寅刻入道殿下。○中藤原御入滅、廿一日壬子、今夜御葬送也、時戌刻、今日下土殿、北政所同是。

年不遇之元日祝着陪膳如何、

〔實久卿記〕天保十三年七月廿一日丁卯、午初刻參内、兩役可參集、殿下○宣司政通被命旨、昨日自三條被示、午刻後、殿下令參給、小時於御學問所、相役被仰出之趣、被傳候先是武傳兩續左、

勸修寺宮○濟

昨年十月他國江密行、殊實妹幾佐宮同伴、無賴之所行候、其上諒闇中、○天保十一年實父貞敬親王、天保十一年正月、重服中、重々不愼、不行狀候間、雖可被處嚴科、以格別御憐察、被止親王宜旨二品位記等、自今戒師海寶僧正生涯之間、被預之、於東寺寺中、嚴重籠居、被仰付候事、

右被止親王宜旨二品位記、東大寺別當等事、兩廷尉佐可申渡、被止護持僧之事、御祈奉行後光同上、

同宮諸大夫二人侍一人、略其解官止位記、同各明廿二日可申渡、被命宮實行之節、依各奉之丁、候佐、

候略之、中終廻退出、

〔二禮儀略三〕今ノ所謂忌ハ、先王令文ノ假也、コノ日數ノ間ハ、斷然トシテ服ヲ製シテ服スルト

モ不可ナルコトナシ、假アケスレバ服トイフ名ノミニテ、肉ヲ食ヒ酒ヲ飲ミ、宴樂ニアヅカリ、甚シキハ小祥モタ、ザルニ婚姻ヲ議スル者、民間ノミナラズ、士大夫モ公然トシテコレヲナス、コレタイヘバ心又惻ミ歎クニ堪ズ、苟クモ人心アル者、又カクノ如クナランヤ、假盡テ公務ニツキ、私事ヲナズ、レムコトヲエズトイヘドモ、豈肉ヲ食ハズ酒ヲ飲マズ、内ニ御セズ、宴樂ニ與カラザルノ類ノ心喪ハ行フニ何ノ妨グアラシヤ、人心腸ナキヨリ、俗ニ牽レ道ヲ破ル、惡ムベキノ甚キ也、

喪履雜設

〔榮花物語三〕條々の悦かゝる程に、大殿○藤原兼家の御なやみ、よろづかひなくて、七月二日○正月うせ

させ給ひぬ、○中東三條院家○兼家の廊わた殿を、みな土殿にまづつゝ、みや殿ばらおはします、

〔源氏物語二十〕齋院は御ぶくにておりぬ給ひにさかし、おさゞれいのおぼしめつる事、たえぬ



可諷諫左右者也予入夜歸之督殿被命云令參故中宮邊乍立相遇章信○中又云○章中宮間事太以非常也所寵候上達都殿上人吐萬人短惡一切非喪家之儀云々又資通師良候此宮希有事也者云々抑子共盜取絹之事是太無實也無預一分之遺財又無遺物候女房萬物皆領知長絹此奉故守上道之次多有其實之由云々而北方皆總取云々

〔公卿補任 後編 河〕嘉祿二年

右大臣正二位藤師經七月日母○

〔小右記〕寬仁元年十一月廿二日丙辰今日多事謂多事者院三條皇子小一應可坐高松仍大殿藤原道何或云院吹笛給有管絃之與云々重寶此年五月三院今夜可坐高松云々以大殿高松腹大娘被

牽合云々左大將敦通左衛門督賴宗指燭已重喪令有婚禮匹夫豈然乎嗟嗟可彈指或云院御方違

所常命管絃云々自吹笛給云々

〔小右記〕寬弘八年七月一日壬申去月廿七日公誠朝臣云故花山院宮達御元服八月廿三日者天下

大事間○一條此年六密々可被行之由相示了亦仰可從待從中納言行成指歸之由○中入夜重來

云案內觸拾遺納言答云御元服事有何事乎但院崩給之間如何被尋前例被行可宜歟但密々被行

又有何事有御元服者被奉仕御即位威儀役依其事被奏叙位品事有便宜歟者余○藤原云院崩給

間御四十九日內不可有也過御忌之後密々被行可無事難歟重喪人非無元服例其例多云々何况

論實不坐服親但入給冷泉院御戶仍可申從父兄弟其服七々日歟可無事忌者也

〔康富記〕文安四年十二月八日丙申今日滋野井故實益朝臣之息教國元服云々此人父重服中也重

服人元服例師遠大外記注進之內有之伯耆守訓盛元永比有之由見及候間注申云々

〔園太曆〕貞和四年正月一日仙洞○光御藥儀如例陪膳竹林院大納言元三不可出仕仍雖申子細依

闕如例被仰仍直衣出仕參內云々雖不打任事別勅之上勿論歟亦此卿去年九月喪母雖不着服并

闕如例被仰仍直衣出仕參內云々雖不打任事別勅之上勿論歟亦此卿去年九月喪母雖不着服并

希有奇恠事也。近親在民間衆人不知之者。或攝政關白。或大中納言。皆有如此之近親而死亡之時。更不能隱忍。皆請假罷居不隨公事。无心之人有凡近親皆以如此。是古今之恒例也。兒女子存此旨者也。又法之所指灼然無違也。是上下之禮節。古今之恒規也。而故經相是時中大納言子也。當時女院○後一

之兄弟也，只不學公卿之位許也，與濟政有何優劣哉？資通是雖英雄，是非參議也，而件兩人有廿日假并三月服，是愷伯父也，今關白之第，是不異朝廷，又中宮猶存宮僕，兩端相合之公廷也，而今資通師良

不存其由着衣冠祓候希有奇恠事也古今無此例歟若是關白御定歟今代之事穰并如此之事皆有  
 櫛議悉以毀古事主○主恐代之事已無古跡總無應恥之代也雖有放火殺害盜犯之罪近習關白之

人何有其咎哉，但此服事是希有之中希有也，資通師良不候者，彼宮事可闕乏歟，將彼宮後生菩提可闕歟，忽以希有事也者，十五日壬申，相遇經宗，經宗云：經季深屬託北方，談經宗不了之由。

倉代開闢事經宗所知，但無物，又其鑑北方納置，依彼命開件倉之時，彼北方目代等相共開闢，敢不可有疑者也，而有事疑之由，經季談言北方云々，又其倉有可相預之心云々，所有之物長相十餘疋，七十

知此事之者奉則也皆作結解已以明白也而如此希有事也又故守相○經騎用鞍二具也而經季云此

鞍相分可取者，隨云可許而還取第一鞍，殘與不中用鞍，然而不吝思此外事，太以不了也。所行非常也。爲之如何？予○源答云：遺財如山，積置之人，子息成諍論，略有先跡，世以不爲吉也。今已無一分遺物，以

何可相爭乎。已一腹之親也。知恥之人。有此事乎。尤可彈指之謂天下如何。尤可悲事也。經季尤倭人也。又凶人也。雖然不可相違之由示已了。又遇經季。予云。昨日人々有訪來云々。而兩子有相遇事云々。此

事希有之事也。遭喪之人，不向日景，何況無相遇外人是皆例事也。今不存此由，被相遇外人之事，太以不足言事也。經宗失錯，尤道理也。自今以後，不可相遇之由，答了。經季不信受其心，不足言之候人也。不

居喪遠制

〔續日本紀〕<sup>二十</sup>天平寶字元年三月丁丑、皇太子道祖王、身居諒闇、<sup>武</sup>聖志在淫縱、雖加教勅、曾无改悔、

<sup>略</sup>○中是日廢皇太子、以王歸第、四月辛巳、勅曰、國以君爲主、以儲爲固、是以先帝<sup>武</sup>○聖遺詔立道祖王、

昇爲皇太子、而王諒闇未終、陵草未乾、私通侍童、無恭先帝居喪之禮、曾不合憂機密之事、皆漏民間、雖

屢教勅、猶無悔情、好用婦言、稍多狠戾、忽出春宮、夜獨歸舍、<sup>略</sup>○下

〔大鏡〕<sup>六</sup>右大臣道兼、此殿御父おと<sup>○藤原</sup>の御いみには、御殿などにも居させ給はで、あつきにこ

とつけて、御態もあけわたして、御ねんすなどもま給はす、さるべき人々よびあつめ、後撰古今ひ

ろげて、興言しあそびて、つゆなげかせ給はざりけり、其故は、花山院をばわれこそすかしおろし

奉りたれ、されば關白をもゆづらせ給ふべきなりといふ御うらみ也けり、よづかぬ御事なりや、

〔讀史餘論〕道隆の嗣微なりしも、其子伊周隆家が不忠の罪によれるなるべし、町尻殿<sup>○藤原</sup>

の嗣なき事も、花山院をすかしおろして、其功につのりて、父大入道殿<sup>○藤原</sup>に恨をふくみ、居

喪いさ、か悲傷の色なきの類、不忠不孝の人なり、

〔春記〕長曆三年十月八日乙丑、實基來訪、隔簾相退、談世間事之中、<sup>○中</sup>資通<sup>○源氏</sup>乍聞、經相<sup>○資通</sup>入

滅之由、着朝衣役仕、至于師良<sup>○經相</sup>者、不參入、而隆國卿遣召師良云々、希有事也、雖在民間之者、

爲近親之人、豈可隱忍哉、何況經相與濟通<sup>○資</sup>已一腹兄弟也、敢不可云左右而資通等皆如此、是關

白<sup>○藤原</sup>御定款、今代之作法、觸穢并服親等事、只在關白唇吻、歟不異夷狄之地、可彈指之代也、又云、

上達部殿上人、近日有往生要集傳、依是公成所讀云々、<sup>○中宮亮</sup>經輔<sup>○此年九月後</sup>着烏帽直衣、祇候

了、權折萬人短惡、或皆相到趣、夜行云々未聞事也、總官司皆布衣祇候云々、卅九日間皆存宮儀、何故

可着布衣乎、何況主人已存、尤有憚、爲藏人頭并官司之人、布衣烏帽祇候、誠如狂亂世間事已、無廉恥

耳、十二日己巳、實基來談世間事之中、尤有可相驚之事、資通師良、着尋常衣冠候中宮、去七日、參河

守<sup>○經</sup>卒去之由、已以普告、其日着朝衣隨事、是希有事也、而又其後件兩人祇候者、此由申督殿、命云、

守相



〔和長卿記〕大永六年六月廿九日辛巳、五月五日菑滿者、非神事、避火事之祈禱云々、故諒闇歲不苦之由、後成恩寺關白○藤原御記分明也、於菑滿者、非神事之間、雖諒闇中猶菑之者也、云々、仍禁中被菑畢、明應度同被菑畢、但內侍所菑滿御輿者、禁中觸穢中也、張注連穢者、依不通達當年不調進、明應度者、穢限已後之間、所令調進也、

〔基量卿記〕延寶九年○天和五月五日、參內依飛鳥井羽林番代也、內侍所清涼殿菑滿、與如例進上之體也、諒闇年○去年八月舊例如此、於菑滿不飾、爲避火災云々、雖然喪家ニハ不菑由也、見後成恩寺

殿下記、定而此度此例歟、

〔大江俊章清泉院喪中雜日記〕實曆八年五月四日、菑蓬菑滿、如例年、此事當時不菑家有之、古賢菑不菑有論、除火災邪氣之呪歟、惡意可菑之論につく、

〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年五月五日戊子、菑菑滿艾葉事、雖此節○此年四月如例年令菑之、據實曆四年一到堂御記也、佛供棕亦如例年、但神棚不供之、家內祝儀勿論無之、

〔玉海〕壽永元年四月廿日庚申、賀茂社司持來葵桂、聞着重服之由、稱可有憫、故進少將方家不懸葵、但少將姬君等方懸之、

〔玉海〕安元三年四月廿六日乙未、定能朝臣來語云、祭○賀之間、虛簾可懸葵、衆哉否有其儀、忠親問曰、

保元懸之由覺悟也、彼時爲職事憶見之、但可否者不知云々、藏人次官基親云、保元依亮聞不懸葵之由、祖父範家所記置也、是定例也云々、兩人之說、已以參差、然而遂付基親說不懸之云々者、余案此事從神事之時、主上臣下、皆改亮聞服是例也、於內裏之鋪設者、已足諒闇之御裝束也、豈觸神物哉、憶事理不懸何事之有哉、隨又社司等申云、亮聞早、雖進葵、置黑漆臺盤、不懸虛簾云々者、

〔和長卿記〕大永七年四月十四日辛酉、今日第二番酉日賀茂祭日相當、但近代祭退轉社家葵桂進上、御殿被懸葵許也、諒闇年、社家不進之例也、



嘉樂門院後花園后御殿不葺之、內侍所計葺之由報之、勸例一紙、寫以給左諸家、今日不憚葺之條勿論、勿論、後日見明德成恩寺開白記之處、明德執柄之申沙汰、不甘心、雖七々中禁中然不可憚之由被注之、可否不辨者也、

諒闇時禁中葺葺蒲例

寬德二年五月葺葺蒲於南殿後朱雀院

嘉承三年五月同葺之堀川院

文明三年五月同葺之後花園院

不葺葺蒲例

明德四年五月不葺之、自殿下被計申之、

內侍所上葺之云々

雅久

雖可參言上候、如御存知、正月以來不例起居、不能合期、無力至極候間、口存口諒闇中、禁中被葺葺蒲否事、今朝附御使、一通注進之候而、引見委細之舊記候處、此條天喜度就寬德事被尋下候、其時注進可爲七七日中者、不可葺由、據古說勸申候、寬德嘉承諒闇時、五月五日非五句中候、文明度雖不及此御沙汰候、此節自然五句後候、明德度不葺之、內侍所上許爲殿下御計葺之條、不審之間引勸候處、此節相當五句中候、與天喜御沙汰是又符合候、今度儀、若可及御沙汰欺旨存候間、內々令言上候、宜得御意候、雅久誠恐頓首謹言、

五月三日

雅久 奉

勸修寺殿

人々御中



御絶入間、被出重服輩不能參向云々、重服人參入御喪所例、

一條院崩給參議賴定、依先規爲平親王、重服、而依爲服身者、給素服、但依爲私服、不可參新宮、可候前院御所者、

後一條院崩給長元九年五月廿五日、於上東門院、被行御法事、右兵衛督降元、雖重喪有議著座公卿、座一條院御時賴定、補例也、

圓融院崩給入道、重服之由、參議云々、殿親大、

以上兩條見小野宮右府記、勸使例顯賴辨等雖奏聞不及沙汰云々、此事如何在喪限之時、不問

喪歟、五十日以後服者、何不參入哉、

仰云、經賴記入道相國薨後、服者不可參之由被仰之、

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、行盛朝臣入來談云、民部卿○藤原忠教顯賴朝臣、斷能、自本重服者也、

而欲參仕院之處、如此重服人、參入喪家○此月七日、白河崩、有其忌之由世俗說、仍問大外記師遠、返答云、件忌

本書無證文、但先々有被忌時、或不被忌有參入、以此旨今度被申新院○鳥羽仰云、不知食子綱相量可、

左右者、仍人々不被出仕也、

〔類聚名物考凶事〕喪中調度

喪の中は、手ならず調度も常に異なる故、多くは鈍色黒塗の物を用ゆ、扇も黒骨にび色、灯臺も黒ぬり、筆も黒管也、それ故黒ぬりにび色は常に忌事也、

〔年中行事秘抄五月〕四日主殿、葺内裏、殿舎葺蒲事

不吉家或葺或不葺

天喜二年五月四日、左中辨定親尋云、故院○後朱雀登遐年、内裏葺葺蒲哉、尋勘彼年無所見、但私記云、

寛德二五葺南殿葺蒲、又典藥寮獻御藥、又說云、不可葺、又云、遺喪所々葺葺蒲、七七忌外不禁忌、

永久二年五月五日、東三條高陽院、三條殿雖觸京極殿北政所御事、穢葺葺蒲了、於京極殿不葺、

高倉院御所可被葺葺蒲、否事治承五年、師範申狀

たてぬ松かざらぬしめの一寸ちのこゝろばかりはどほりける哉  
又

雲井まできこえけるかなあしたづのあしまがくれになきし一こゑ、どありしが又更に雲の上  
にきこえのぼりて、大宮人の言草にとりはやされけり、いで此事の本末をおのが見聞きたる  
まゝに、どりすべて記したるに、遠くて見聞のこまやかならぬあたりにも知らしめ、かつは五百  
とせ、千年の後までも、語りつぎてむためぞとは、人思はざらめや、  
門の松たてぬはやがてあめつちの中にみさを、たつるなりけり

穂井田忠友録

〔徳川禁令考<sup>二</sup>〕慶應三丁卯年從正月四日至四月十四日

主上<sup>明</sup>崩御ニ付達<sup>凡十二通</sup>

主上崩御ニ付、來年始御禮者無之候事、

右之通舊臘廿九日、於京都被仰出候間、其段向々江可被達候、

正月四日

〔嘉永明治年間錄〕慶應二年十二月廿九日主上<sup>明</sup>崩御

周防守殿渡書付、主上御不豫の處、御養生不被爲叶、舊臘廿九日崩御被遊候に付、御機嫌伺ひ、明  
五日總出仕、今日より鳴物停止、松飾取拂ひ、殿中着服平服の事、

卯<sup>年</sup>○三 正月四日

〔永昌記〕大治四年七月八日甲申、尙書依按察事爲重服人、仍不被參入、坐喪不弔、喪之儀、歟、世俗又忌  
來之事也、但忌案雖不從事、可參入、歟、賴定卿重服之間、有其例之由傳聞、以彼等例、雖取御氣色、無出  
仕仰云々、然而右金吾相共、夜陰參新院<sup>羽</sup>○爲御方者、民部卿忠教卿、母重服未、被出仕云々、後一條院



〔立てぬ松〕天保十一年十一月十九日、光格天皇崩御ましましてければ、京中畏りつゝ、しみて聲高にも  
ものいふ人もなし、十二月の二十日、月の輪山に御葬ありける後は、改りたる觸穢蒙りて、倚廬の  
御所には、蘆のみす布の帽額など傳承りつゝ、雲の上の御嘆思ひやり奉りて、高きも賤きも、い  
いよひそまりをるほどなれば、春を迎ふる心がまへは、かつても聞えず、門松しめ飾も、誰かは思  
ひよらむかゝる折にも、武家とあるあたりは、正月の設、大方平年にことならず、定まりて出入る  
ものども、互に新春の祝言をいふめるは、都のうちに、唐天竺の人の交り住たらむやうに見  
なさるゝを、さすがにいぶかしみ思へる人々も、少からぬ中に、薩摩の御館の預、山田清安、獨畏り  
に堪へず、殿の京におはしまさば、いかでかさる手ぶりには、交はりたまはむ、殊に正月の二日に  
は、月の輪の御陵に、御香獻らるべき御使の事奉りたれば、我身をさへ清め、て深く謹みをる  
時しも、何かは常ざまの心はあらむ、いかでか春の設はせむ、せめては觸穢の日數過してこそ、年  
並の春にも逢はめど、男々しく思定められたるを、土佐の御館の預なる柴田勝世、おなじ心には  
競進みて、かのいぶかり深はれし人々にも、この思取れるやうども傳へられしかば、其交らひあ  
る九ヶ所の御館は、一列に事定まりて、門松もしめ縄もなく、歳暮年始の行ひもすべて省かれた  
れば、實に亮闇のとしのさまは、かくすべくぞ見えたりし、此事大内山の御にひゝきて、正月の七  
日に、徳大寺の大納言<sup>聖</sup>○<sup>實</sup>參内せさせたまひし折から、關白殿<sup>政通</sup>○<sup>聖</sup>司にきこえあげさせたまひ  
しかば、いづれも心得のほだめでたし、なほ心得て褒おきたまふべしとの仰せごどありければ、  
大納言殿の御もどなる右馬大允滋賀の某に仰せて、御威の狀をなんたまはりける、其九所の歌  
畏り申しに、清安、勝世、徳大寺殿にまゐられし時、右馬大允申されしは、殿下の仰に、此心得の事、始  
めていひ出でしは、薩摩の館の預ぞと傳へきこしめせば、分けてよく仰せたまはるべしとの事  
にておはしけるよしなりき、かくて清安のよみ出でられしは、

如<sup>日々</sup>此、玄關障子開置但襖之設毛氈上草履は入棺迄不及設之也。三月二十日丁卯、忌明也、自今朝開門、玄關障子等令如尋常。

〔德川禁令考<sup>二</sup>案〕天保十一庚子年十一月廿四日ノ令

仙洞<sup>光格</sup>天皇崩御ニ付<sup>尊請鳴物五日停止、大</sup>

<sup>諫訪氏ノ職本ヲ按ズルニ、仙洞崩御ニ付、在京ノ武家方、門飾有無ノ議同一則ヲ載ス、其書關係アルヲ以テ左ニ附記ス、</sup>

門飾之儀は、御所司代之方、有無見合せ、同様ニ可致旨申合候由、組合類役より申送有之、但シ類役向組之方にては、主上倚廬渡御之折柄、門飾可致筋ニ無之旨申合候由ニ相聞候得共、別ニ申送に無之、此方組合之方にては、右様之儀、武家は武家之風ニ隨候外無之、御所司代を手本に取扱候而、越度は有之間敷旨申候處、其後難掌滋賀右馬大允より紙面遣候端書に、御屋敷之門飾有無相尋遣し候に付、面會候節、右之趣を以申答候處、御所向之御主意ニハ、向組之申合相當之由申居候、其後秋岡縫殿御座敷<sup>江</sup>罷越候節、先日滋賀より尋候趣は、如何様之次第ニ候哉、内々相尋候處、必竟大晦日に至り、所司代之方<sup>江</sup>傳奏衆より、如何様之心得ニ而、箇様ニ門飾被致候哉、御尋有之候處、先達而右様之儀一體に被相伺候處、何事も文化十四年之度之通<sup>〇</sup>、<sup>町</sup>關白殿<sup>政通</sup>より被仰出候由ニ付、其通相心得候旨被申答、一通りは夫に而相濟候得共、文化之度、主上御肉縁にても不被爲在、御心喪と申位之事にて、此度實之御父子ニ付、倚廬に被爲在候程之御儀、一體倚廬と申儀、如何被心得候哉、御尋に候處、夫者尊位之上に候御事に而地下<sup>江</sup>迄及候程ニ無之旨被相心得候段、御答有之由候處、左様之譯には無之、詳に承知無之、被相伺可然候、容易之心得方之旨、色々難間に相成候得共、元來倚廬中、武家にては箇様と申御例も無之ニ付、屹度御察度之御沙汰にも難相成、大晦日夜中過より揉合候由、左様之事にて先言ひし、らけ候方に相成候旨、右ニ付諸武家屋敷門飾之有無、此度之御記錄ニ書載置申候、

軍在京ノ故ヲ以テナリ、後皆同シ、

正月四日○中略

一御目見以上之面々、明後十一日より髭剃可申候、

右之通萬石以下之面々、江可被相觸候

右之通去ル九日於京都相達候間、當地之面々、今十四日より髭剃可申旨、萬石以下之面々、江可被

相觸候事、

正月十四日

〔大江俊矩先妣御事雜誌〕文化二年四月十七日庚午、中陰之間○此月十四日俊矩母死男子不剃髭髮等、婦人雖

施白粉不付紅、髮島田わけ也、總解飾也、鉾漿如常、男女共不切手足之爪、予特結髮不用油、用髮水也元結

用麻紐、俊迪○俊矩子用黑元結也、侍下女迄如此於下部者、令任所存了、六月四日丙辰、僕左門、今朝髮

月代令如常、曉景入湯洗髮剃鬚切爪、

〔玉海〕文治五年八月六日癸巳、今日以宗賴朝臣奏院○河後云、上西門院○鳥羽皇女統子内親王、後白河御准母御事、舉哀

過禮、人盛稱其御志深、○中其上閉門戶下格子、已經旬日云々、准天子不事親之儀者、不可過三日、數

日被閉門之條、事涉禁忌、○中於今者上格子被開門戶、尤宜歎和、總雖有恐存忠所申上之者也、

〔後中内記〕享保九年三月廿一日、以裏松近衛左府殿○宋久へ廣橋除服事、當月廿七日穢明、○中被尋

窺、多開門之後除服之事及沙汰、是義不宜候間、廿八日早天、以職事除服之事及沙汰、追付開門、世間

向清々成被申儀可然、但着服之覺悟之哉、可爲此兩夜之内由御命云々、

〔大江俊矩先考卒去喪中雜々日記〕寛政四年十二月廿四日戊子、申刻頃披露○二十三日俊矩父俊冬死即閉門

開小門、五年二月十四日丁丑、今朝より開表門、玄關障子明ヶ置也、

〔大江俊迪先考御事雜誌〕天保三年正月三十日戊寅、假服届○二十日俊迪父俊矩死差出後、表門閉之、○小門開是

但御目見仕候陪臣も同斷

右之通可被相觸候

八月十四日

左之通大目付御目付<sup>江</sup>達之

御目見以下之者共、御本丸西九共來廿三日より月代刺可申候、

坊主組頭共ニ、明十九日より月代刺可申候、

同心以下其外輕き者共、右同斷、

右之通可被相觸候

八月十八日

上様<sup>○德川家茂</sup>御月代被遊、御精進被爲解候様、京都より被仰進、老中よりも相願候ニ付、明日にも御

中刺被遊候得共、御精進之方ハ、新御廟<sup>江</sup>御參詣被爲濟候得ハ、被爲解候旨被仰出候、

右之通大目付御目付被達之、國持并庶流、外様萬石以上、交替寄合、表高家并小普請之面々ハ、明後

八日より月代刺可申候、留詰同格御譜代大名高家、屬之間詰、御奏者番菊之間縁類詰諸番頭諸物

頭、諸役人、御番衆、月代刺候儀ハ、先可有延引候、

右之通可被相觸候

九月六日

〔德川禁令考<sup>公家</sup>〕慶應三丁卯年從正月四日至四月十四日

主上<sup>○明</sup>崩御ニ付達<sup>凡十二</sup>中略

主上崩御ニ付、御目見以上之面々、月代并雲刺候儀ハ、追而可相達候、

右之趣舊臘廿九日於京都被仰出候間、萬石以下之面々<sup>江</sup>不洩様可被相觸候<sup>按云フニ此ニ於ニ京都ト</sup>



但御目見仕候陪臣も同斷

右之通可被相觸候

七月

八月三日

久世大和守殿御渡

町奉行衆

御勘定奉行衆

大目付江

御目見以下のもの共御本丸西九共來ル八日より月代剃可申候、

一坊主組頭共ニ、明四日より月代剃可申候、

一同心以下輕もの共、右同斷、

右之通可被相觸候

丑八月

〔徳川家禮典附錄六〕安政五戊午年

公方様

○徳川家定

薨御ニ付、萬石以上以下、輕きもの共并陪臣迄、月代剃候日限之儀は、追而可相達候

間、其段向々へ可被達候、

八月八日

左之通大目付御目付江達之

御直參之面々、御初七日過、月代剃可申候、

陪臣ハ御初七日過、月代剃可申候、

但陪臣は、月代剃候ヲ精無之候、

三御屋形勤之者月代之儀、左之通伺濟、

伺

七名

大御所様薨御ニ付、清水一橋田安相勤候者共、月代之儀、御目見以上御付人御返ニ相成候者は、御三七日過月代爲剃可申候哉、

一御目見以下、右同様之御返ニ成候者は、御一七日過月代爲剃可申候哉、且御附切之者共、外共、右ニ准ジ月代爲剃候積リニ御座候以上、

可爲伺之通候 御下ゲ札

二月二日

御目付へ

大御所様薨御ニ付、御屋形勤御目見以上之面々、御三七日過月代剃可申候、

一御用人、支配小普請、小普請組支配之小普請、御二七日過月代剃可申候、

一御目見以上之者、小普請共、御一七日過月代剃可申候、

右之通得其意、向々へ可被達候、

〔嘉永六年御中陰一條書留〕七月廿八日

和泉守殿御渡

大目付江

御直參之面々、御初七日○徳川家慶薨過、薨剃可申候、

陪臣は御初七日過月代剃可申候、

右之通可被相觸候事

六月廿三日

閏六月五日御渡書付

大御所様付之面々之中大納言様

子吉宗家重

御用兼勤いたし候分は大納言様付之通り月代剃候様

ニ可致候、

右之通可被相觸候

一御三家様方御三十五日過御月代可被成旨被仰出之、

〔文恭院様薨御一件〕天保十二年閏正月晦日

一右衛門督殿家老衆へ

大御所様薨御ニ付一位殿御月代右衛門督殿御中剃之儀御三七日過御剃被成候様可申上候、

但陪臣は月代剃候儀構無之候、

閏正月

大目付へ

大御所様薨御ニ付松平加賀守溜詰御普代大名高家雁之間詰御奏者番菊之間縁頗詰諸番頭諸物頭諸役人御番方迄不殘、

右御三七日過月代剃可申候、

一國持大名并庶流外様大名交代寄合表高家寄合小普詰之面々、

右御二七日過月代剃可申事、

一御目見以下之者共坊主同心輕き者迄、

右御一七日過月代剃可申候、

一御直參之面々、鬚そり可申候。○十月十四日  
德川家宣薨

二陪臣之輩は、さかやきそらせ可申候、尤御目見仕候陪臣も同前に候、

以上

正徳二最年十一月

御譜代衆、詰衆、詰衆並、番頭、物頭、諸役人、御番衆不殘、明後十八日よりさかやき剃可被申候、以上、

〔有徳院殿御實紀〕享保元年五月朔日、御所○德川家には、昨夜遂に大漸に及ばせたまへり、御家人

等いよ／＼中納言殿○德川家を奉戴すべきむね御遺命なりと傳ふ、十日、げふより賤吏等頂髪

を削ることをゆるさる、六月三日、井上河内守正岑の宅にて明後日より、譜代、雁の間、菊の間、縁

詰、番頭、諸有司番士までも、頂髪をすることをゆるさる、五日、喪制すでに三十五日も過ぎせたま

ふによりて、明日より頂髪をせらるゝしと、三家の方々に仰下さる、

〔快晴紫雲鑑〕寛延四年六月御用番

本多伯耆守

小出信濃守

大御所様○德川家薨御ニ付、松平加賀守、溜詰、御普代大名、雁間詰、菊間縁、頼詰、諸番頭、諸物頭、諸役人、

御番衆迄不殘、御三七日過月代、剃可申候。

國持大名并庶流、外様大名交代寄合、表高家寄合、小普請之面々、御二七日過月代、剃可申候、

御目見以下之者共坊主同心以下輕き者迄、御一七日過月代、剃可申候、

但陪臣ハ、月代剃候義構無之候、

大御所様付之面々ハ、御目見以上ハ、五十日過御目見以下ハ、三十日過月代、剃可申候、

但御一七日過、大御所様付御直參之面々ハ、髷剃陪臣ハ、月代剃可申事、



二月廿三日癸卯、今夜自倚廬還御本殿也。略○中

此後主上着御諒闇御服也。櫛色御引直衣、袴、平組

也。椽色御引直衣、平絹

御眉之

事一井間猶可被拭哉否被相尋侍從亞相帥卿等頭辨出殿上談此事兩卿被相議云此儀無慥所見歟但令着御凶事之冠服給之上者可被拭之條何違其儀設之由被申之間御眉無御沙汰

歟、但令着御凶事之冠服給之上者、可被拭之條何違其儀、設之由被申之間、御眉無御沙汰

〔後中内記〕延寶八年八月十九日、法皇○尾後御惱危急、遂以崩御也。

水○  
尾後

御惱危急遂以崩御也

廿三日、權大納言、權右少辨、卷櫻

伺候、飛鳥井羽林、無卷、櫻令拭眉。

〔嚴有院殿御實紀〕慶安四年四月廿日、申刻遂に薨じ給ふ。○徳川家光

家○  
光德  
川

廿八日、明日より長髪の輩、月

代辦べしと仰出さる。

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年正月十日、卯刻はや御大漸に及ばせ給ふ。○鎌倉

網○  
吉雄  
川

十六日七日過て

後、御家人髭をそり、陪臣月代をるべしと仰出され略○下

略  
下

〔享保集成絲綸錄<sup>九</sup>〕寶永六<sup>丑</sup>年正月

御直參之面々、明十七日  
○徳川正月十日  
綱吉薨

德○  
川正  
綱月  
吉十  
薨日

より鬚剃可罷出之

之由書付を以、大目付江加賀守、御目付江久

世大和守達之

寶永六<sub>丑</sub>年二月

御譜代衆、高家衆、詰衆、詰衆並番頭、諸役人、御番衆不殘、明後十五日より月代そり可被申候、尤上野

江相詰候面々も同断。

寶永六丑年二月

明十六日、御三十五日も御過被遊候間、御月額御削被成候様可申上候略

○ 卷

右書付御三家御城附江佐渡守渡之

〔享保集成絲綸錄〕正德二年十月廿日

於院中女房者、拭眉者、白色小袖、可有經通、歟由申了、仍各其分有沙汰、  
寺後花園院御月忌始也。○中舊院女房、上藏左衛門督除素服云々、仍如元被着有色之小袖、作肩

〔實隆公記〕長享二年五月二日乙丑、明日爲女院國母嘉樂門院（後土御門母）御葬禮供奉、七日庚午、或人語云、去三日中院中將通世朝臣、依誓固儀、俄卷縵、蛾眉又依海住山亞相命、拭之云々、先日父公有被談之旨、予報云、文明度口下官舊院崩御之刻、拭假粧、其時之儀、頗不甘心之事、候件度又不知、先規與有無、今又不知、先規退而廻思、案拭蛾眉之條、無謂歟、今度不可被拭之、十三日丙子、通世朝臣候番、拭眉卷縵、十五日戊寅、源亞相云、昨日重經朝臣四品事、爲畏申參內之時、假粧如常之處、有御不審之氣、人々大略拭之所爲如何云々、予返答云、文明度上皇崩御、刻予等無左右拭眉、此事不知、先規不分別是非事也、情案道理、喪事大略以禮文爲根元、漢朝儀、男子蛾眉事、無其沙汰歟、日本又上古之儀、此眉事不見沙汰、只若年時如此沙汰、來計歟、其身着吉服之日、何可拭去之哉、於着凶服日者、可有沙汰哉、其儀猶女中着素服、日不被略之歟、猶能有思量事也者、兼又賜素服之儀式、次第云、雖若年不可掃蛾眉、如此載之云々、十八日辛巳、抑重經朝臣眉事相談、予云、賜素服上者、於今可拭之、廿七日出仕候、而可拭、則着諒闇服者、同可拭、若未着用彼服者、廿七日已除服也、吉服出仕日、垂縵可作眉歟之由報了、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今晚丑刻許、言局有使者云、主上御門後土漸可有御事之儀也、云云、仍着衣冠、馳參、既有御事也。○中侍從亞相實隆息子公條朝臣、雖卷縵猶不掃眉、尤不審事也、侍從公音同隆康等同前、於新藏人諸仲者、予加意見、令掃眉了、人々所存尤不審、凡東山左府所存等者、有御事皆參申之時、掃眉可卷縵云々、以此說、文明度後花園院崩御之日、即時馳參之人、數內前權中納言公兼卿侍從大納言實隆卿、其時皆爲頭中將、亂中警固之間、卷縵者、日比之沙汰也、於眉即拭之、參仕是則依正親町故一品之諷諫也云々、今度侍從亞相所存如何哉、不甘心之由、有演說之人、十

今日三ヶ日洛中停止音曲之由風聞又自今日町中令致自身番云々

〔季連宿禰記〕元祿十二年八月廿五日辛酉傳聞去比關東郎中本庄因幡守被卒去依之自今日洛中

音曲三ヶ日被停止之云々

〔基熙公記〕元祿十二年九月十七日壬午關東執權戶田山城守去十一日卒云々依之洛中從昨晚至

明日停止歌舞音曲等之由從山口安房守告傳奏旨也近頃過分之至歟凡所司代了簡每事非義多

歟關東之時宜不快近日可被改所司代役由有風聞大概實說也

〔大成令十六〕寶永元年申年九月十八日

阿部豐後守正武老中卒去ニ付左之通書付

覺略中

一鳴物今日より三日停止之事

一普請者不苦候事

以上

九月十八日

〔享保集成絲綸錄十一〕享保十七年七月

一安藤對馬守信友老中卒去付而國持衆妻向之面々老中宅江明廿六日以使者御機嫌可被相伺事

略中

一鳴物は今廿五日より廿七日迄停止候但普請不苦候事

右之趣可被相觸候

〔親長卿記〕文明三年正月廿日辰刻右大辨番依所勞予相代存知之入夜多羅尼如常帥直衣帶腰多

羅尼畢舊院花圖女房上傷局右參燒香着素服如二重衣一生拭此度舊院御事切之後月二日女

覺中

一書請は明廿日迄停止之事

一鳴物は來廿五日迄停止之事

以上

〔兼胤卿記〕明和六年十月五日、入夜四時許御附より書狀差越、去月廿六日、松平薩摩守妻德川利部死

去ニ付、大樹家治、定式之忌服、爲請候、自今日三ケ日、町中鳴物停止、書請ハ構無之段示越、

〔天保集成・縁繪錄三十四〕寛政六寅年正月

大目付江

水戸少將殿御簾中方姫逝去ニ付、鳴物は今日より三日停止、書請は不苦候事、

右之通可被相觸候

〔百一鐘〕正徳三年十月廿五日、尾州德川五郎太卒去、三歳、七ケ日市中禁音樂、

〔享保集成・縁繪錄十〕正徳三巳年十月

德川五郎太殿逝去ニ付而、左之書付渡之、

覺

一書請は今日一日停止之事

一鳴物は今日より來廿五日迄七日停止之事

以上

〔基量卿記〕元祿三年十一月廿七日、内藤大和守○京都所司代自去奉所勞、今日死去、誠無雙之忠臣不便候、

今明日洛中止物音云々、於御所及諸家者無異事、但後聞町中一日停止云々、

〔季連宿禰記〕元祿四年閏八月十三日乙未、所司代松平因幡守日比病惱終不平、遂昨日卒去、依之、自



〔柳營秘鑑〕一御三家逝去之時、鳴物音曲七日、普請三日、停止、被仰出。○中  
一老中御役之内は、死去之時、鳴物音曲三日、停止之。

〔基顯公記〕元祿十二年六月十日丁酉、柳原前大納言來、尾州中納言綱誠卿、去五日於江府卒去、大樹

綱吉從弟也、仍從今日一七日中世間爲武邊沙汰令停止音曲等、明日向所司宅可、述悔禮旨也云

○中道使於所司宅、依尾州中納言事、大樹御機嫌宜哉之由言遣之了、凡近年武邊有凶事時、一七日止世間音曲、頗過分也、公家親王大王有事時、不過三日、其謂如何、余習世間止音樂五日許後、可始之者也、尤禁中無異事者也。

〔大成令十五〕元祿十三辰年十月十九日

尾張大納言殿就逝去、明日日出仕、并普請鳴物停止之儀申渡之。

覺○中

一普請者今十九日計停止ニ而、從廿日可申付候事、

一鳴物者來廿五日迄ニ而、從廿六日不苦候事、

十月十九日

〔享保集成絲綸錄〕元祿十三辰年十二月

水戸中納言殿逝去付而、明日日出仕、并普請鳴物停止之書付相渡之。○中

一普請は今八日一日停止、明九日より可申付事、

一鳴物は來十四日迄停止、十五日より不苦候事、

以上

〔享保集成絲綸錄〕寶永二年五月

紀伊中納言殿逝去ニ付、左之書付渡之、

〔享保集成絲綸錄<sup>十二</sup>〕享保十八<sup>五</sup>年十月

御簾中樣<sup>○</sup>鎌川吉宗妻被遊御逝去候付而、普請は昨三日より來七日迄、鳴物は來十二日迄停止候、此段可被相觸<sup>二</sup>候、

〔有德院殿御實紀<sup>五十三</sup>〕寛保元年二月廿九日、増上寺には奉行大岡越前守忠相因幡守豐就御使

して御葬送<sup>○</sup>鎌川家室近衛照子の事を仰つかはさる、音楽を停廢せらる、事十四日、營築は七日なり、

〔倅信院殿御實紀<sup>十六</sup>〕實曆二年九月十九日、月光院殿<sup>○</sup>鎌川家繼生母勝田氏中略已の刻のをはりに逝去し給

ふ、<sup>○</sup>中この事により音楽を停止せらる、事けふより十日、營築を廢する事五日、

〔季連宿禰記〕元祿十一年七月十二日甲申、傳聞自今日三ヶ日洛中音曲停止云々、尾張殿姫君歟爲

大樹<sup>○</sup>鎌川吉御養子之處、彼姫君令他界給云々、件姫君吉姫君云々、

〔季連宿禰記〕元祿十一年十二月十七日丁巳、自今日洛中停止音曲<sup>○</sup>日數未定云々、依千代姫君他界云々、千

代姫君者、爲大樹御姉<sup>○</sup>放張大納言殿御息女也、後聞今月十日令他界給、

〔章弘宿禰記〕元祿十七年四月十八日丁亥、自今日鳴物可止之由、町中相觸と云々、傳聞鶴姫<sup>○</sup>大樹公女

也、御逝去之由風聞、

一從兩傳奏書付一紙到來、則以使部催諸司令相觸畢、

口上覺

鶴姫君御逝去ニ付、此節鳴物音曲普請等被相止、諸事御慎可然之由、兩傳奏被申候ニ付、如此已上、

四月十八日

壬生官務樣

尤右之通御催方へも、其元より御通達可有之候已上、

高野家  
雜掌  
柳原家  
雜掌

止之事不及沙汰之由或人所語也。廿二日癸未。自今日至廿六日五ヶ日。洛中止音曲以下鳴物云云。是依一條前攝政殿○兼并紀伊國內藏頭殿○故紀伊中納言御事歟。

〔嚴有院殿御實紀〕慶安四年春の比より大猷院殿○德川家光御不豫の事聞えけるに、いつしか重らせたまひ○中四月廿日○中申刻遂に薨じ給ふ。七月二日、市井音樂停廢をゆるさる。

〔百一錄〕延寶八年五月十日、去八日、大樹家綱○公于時爲大臣御他界、四拾歳。今宮祭禮延引、鳴物五十日制止。

〔享保集成絲綸錄九〕寶永六丑年正月十日

公方様○德川綱吉就薨御、左之書付渡之。

今日より普請鳴物御停止候間、其段可被相觸候以上。

正月

寶永六丑年二月廿九日

鳴物之儀、所作ニ仕候者計、明後朔日より可被差免候以上。

〔文恭院様薨御一件〕天保十二年五月十三日

御百ヶ日相立候ニ付、表向鳴物不苦候旨、丹羽近江守殿御達之事。

〔季連宿禰記〕寶永二年六月廿七日、大樹○德川綱吉御母儀從一位藤原光子○號桂昌院、御比丘尼、御三

日從一宣下、今月廿二日薨逝之由有其聞、依之自今夜先、洛中音曲造作、停止之由觸之云々、日數未定。

七月十六日丁丑、自今日洛中音曲被免之由、風聞、自今日鳴物被免、其旨自傳奏、被告知諸家○自去廿七日停

止至今日

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年六月廿二日、よべ從一位桂昌院殿○德川綱吉生母木庄氏○吉うせさせ給ふ○中略けふより營築七日、音樂十六日、停廢せらる。

〔基量卿記〕貞享三年十二月二日、今晚八百宮令薨給、自今日三ケ日廢朝也。去七月有、內親王宣下、依之及此御沙汰候、○中時  
御修理方三ケ日停止、洛中物音停止了、

〔基量卿記〕元祿三年七月廿日、今日未刻、喝食御所薨去云々、鷹司前殿下息女仙洞元豐爲御猶子、高松局奉養育、南都圓照寺宮御附弟御契約相濟了、今年五歲御死去堪嗟歎、廿一日傳聞昨夕養德院宮薨去大聖寺宮御隱居八十歲餘云々、兩御所薨去ニ付、三ケ日洛中鳴物令停止云々、武家沙汰云々、

〔季連宿禰記〕元祿三年十二月廿日丙子、聖護院宮○後四院皇子道祐親王、此月十八日薨、就御事、自今日三ケ日、洛中可止音曲、由觸之云々、

〔季連宿禰記〕元祿五年四月廿三日壬寅、此曉常磐井宮薨去、彼宮者仙洞元豐皇子、今年御四歲、故八條宮御相續也、八條宮薨去後、御稱號被改、常磐井、御母者仙洞典侍菅中納言局云々、今明兩日、洛中音曲停止云々、

〔百一錄〕元祿七年五月十八日、伏見殿一品式部卿貞致親王薨、過市中歌舞三ケ日、

〔季連宿禰記〕元祿十一年六月廿六日己巳、昨夜亥刻許、今上○東二宮御母、御中納言隆慶、日乳味不聞食、御機嫌不快之處、昨夜俄御事令切給云々、傳聞洛中、自今日三ケ日停止音曲云々、

〔季連宿禰記〕元祿十年十月廿六日癸酉、依今出川前右大臣○公規公薨去、○中今明兩日、洛中音曲停止云々、

〔季連宿禰記〕元祿十三年正月八日壬寅、鷹司前殿下○房薨去之事、今夜傳奏等被奏之、○中又自今夜三ケ日、洛中可止音曲之由觸之云々、

〔季連宿禰記〕寶永二年九月十一日壬申、紀伊國大納言殿○德川貞貞御末子內藏頭殿○賴、今者無賴之由風聞、不知其實、但今月八日卒去之由人々稱す、然而御家督未治定之故、京中音曲停



右之通去ル三日、於京地被仰出候間、向々江可相觸候事、

二月十日

一鳴物之儀、渡世にいたし候分、二月十九日より御免被成候旨、於京都被仰出候段、昨日御書付出候間、此段申達候、

二月廿二日

一此度御國喪ニ付、鳴物停止之處、御百箇日御法會も被爲濟候ニ付、此節より海内鳴物不苦候、右之通去ル八日、於京地相觸候間、此段相達候事、

四月十四日

〔百一錄〕享保五年二月十一日、女院○東山后幸于女王御所崩御、市中禁音樂、廢朝七ケ日、

〔享保集成絲綸錄三〕享保五年正月

新准后女御事○中御門后近衛尚子去廿日薨去付、今日より廿六日迄鳴物三日停止ニ候、

但普請は不苦候

右之通可被相觸候

〔天明集成絲綸錄一〕天明三年十月

新女院大宮御事○後桃園后近衛維子去十二日崩御ニ付、而今日より十八日迄鳴物三日停止候、

但普請者不苦候

右之通可被相觸候

十月十六日

〔季連宿禰記〕貞享三年閏三月五日己丑、今晚寅刻大聖寺殿後水尾院皇女、當今(靈元)御妹御入滅、廢朝三ケ日之由風聞可委尋注、洛中停止鳴物三ケ日云々、

〔季運宿禰記〕元祿九年十一月十日癸亥、今日本院正○明崩御云々、略○中傳聞自今日卅五ヶ日之内、洛中停止音曲云々、是本院御事也。

〔常憲院殿御實紀三十四〕元祿九年十一月十三日、本院正○明この十日崩じ給ひしよし、京職より注進す、略○中凡將軍家秀忠○德川の御外孫にて御即位あらせ給ひしは、これはじめにぞまし／＼ける、この事により三日が間音樂を停廢せらる、

〔大成令六〕享保十七子年八月

一法皇元○重御不豫、御養生不被爲叶、去六日被遊崩御付而、爲伺御機嫌、明十一日總出仕之事、略○中

一普請鳴物今日より來十四日迄五日停止之事、

右之通可被相觸候

八月十日

〔天明集成絲綸錄〕寶曆十二年七月

主上圖○崩御ニ付而普請鳴物、今日より來廿八日迄五日停止之事、

右之趣可被相觸候

七月廿四日

〔德川禁令考二家〕慶應三丁卯年從正月四日至四月十四日

主上崩御ニ付達凡十二通

主上天皇明御不豫之處、御養生不被爲叶、舊臘廿九日崩御被遊候ニ付而、普請鳴物停止之事、右之通可被相觸候

正月四日

一普請は來ル十九日より被成御免候

候無程御精進可被爲解旨御答同人ヲ以被仰出候、

〔溫恭院様薨御一件〕安政五年八月内藤紀伊守殿御渡御書付寫 大目付へ

例年當月指上候在所之魚類ハ、御中陰明ヶ差上候様可被致候、尤時節後れ損候品は追而引替獻上ニ不及候、

右之通可被達候

〔蜻蛉日記〕女おやといふ人あるかぎりはありけるを、しさしうわづらひて、あきのはじめのころほひひなしくなりぬ。○中いみなき程にもなりにけるを、あはれにはかなくともなどおもふほどに、あなたより、

いまはとてひき出る琴のねをきけばうちかへしてもなほぞかなしき、とあるに、ことなることもあらねど、これをおもへばいとゞなきまきりて、

なき人はおとづれもせで琴の緒をたちし日數ぞかへりきにける

〔德川禁令考二家〕延寶八庚申年八月廿六日

法皇崩御ニ付普請鳴物停止ノ令

法皇後水尾院崩御被遊候間、町中鳴物見世物普請等可爲停止、每日數之儀ハ、御免之時分相觸可申候、勿論何にても物さわがしき事無之様ニ、町中裏々迄不殘可被相觸候、以上、

八月廿六日

町中なり物見世物并普請明朝日より御赦免被成候間、町中裏々迄不殘可被相觸候、以上、

八月晦日

〔季連宿禰配〕貞享二年四月十五日甲辰、抑壬生大念佛、去月依後西院御事、洛中被停止鳴物之故延引、自昨日十四日執行之云々、

右者來五日之朝可被差上候

十二月

但御看之儀、魚鳥類何に而も不苦之旨可相達由大目付江加賀守申渡之、

〔柳營水無月記〕寛延四年○寶曆元年六月廿二日御達

御中陰○德川吉宗

ニ而も在所之產物其外土用中伺御機嫌獻上之品御精進物之分ハ不苦候間獻上

候様信濃守申渡之、

〔兼胤卿記〕寶曆十一年六月廿八日、已刻向伊豫守役宅○此月十二日、○此月十二日御精進永々之儀、御障にも成候而ハ如何被思召、○此月十二日漸日數も相立

關東御忌中、

御精進永々之儀、御障にも成候而ハ如何被思召、○此月十二日漸日數も相立

候間大樹公

御精進被爲解候様ニ被思召候、且又暑氣之節にも候間、御月額をも被遊候

様にと被思召候、此段宜被申入候由、被仰出候由演達、且心覺之書付渡之、

伊豫守謹奉早速關東へ可申達之由也、七月九日伊豫守示越

故前大樹遺體増上寺江葬送之事

大樹精進解月額之事申達候處忝被存出棺も相濟候ハ、早速可被致月額精進も見合可被解、

此節之儀故表立御禮ハ被見合、追而可被申上之由之事、

右書狀二通、殿下

○近衛内前

へ入御披見、附平松中納言言上了、

〔文恭院機毫御一件〕天保十二年三月朔日御登城之節、公方様

○德川家慶より無屹度御小納戸頭取ヲ

以久々御對顔無之、御三卿様方御障も不被爲有候哉之旨上意之趣、御家老承之御用人を以て御

聽ニ入、右御禮申上、三日、御前御登城、御用掛水野美濃守へ御達被遊、公方様御中陰も御永く被

爲在、追々暖氣之時節にも相成候ニ付、御精進被爲解候様御願被遊候之旨、一位様民部卿ニも同

様御願被遊候旨、御口上被仰含、相濟御歸殿、四日、公方様御精進解之儀、昨日被仰上、御満足思召



天仁爲房卿云、次供朝膳余供。朱御臺盤銀器如例供魚味、安和供魚味、天層供御修注、猶進之、寛德又云、魚味元曆養和親經卿記、有夕臺盤事初居魚者、於慶人所着之。

〔季連宿禰記〕貞享元年十月廿日壬子、今日桂芳院連學。四十九日也、各參壬生寺廟、從夫參北野石塔分。解。精。進。

〔大猷院殿御實紀十九〕寛永九年正月廿四日夜亥刻大御所○細川。大漸に及ばせ給ふ、二月廿九日三家へは酒井雅樂頭忠世もて開葦のこ○仰下さる、三月十三日酒井讃岐守忠勝もて明日御開葦の事を三家につげ給ふ、十四日御さうじ○とけ給ふにより、三家まうのぼらる、

〔嚴有院殿御實紀一〕慶安四年四月廿日申刻遂に莫じ給ふ○細川。五月朔日御所○家光。御幼稚なるをもて早く魚物をすゝめ進らすべき旨三家より再三聞え上られ、毘沙門堂門跡公海よりも御開葦の事申さるゝをもて今朝より魚味を奉る、六月十日御開葦により、三家より鮮鯛奉らる、老臣近習の重饗膳を給ふ、

〔嚴有院殿御實紀四〕承應元年十二月二日實樹院殿○細川家綱生。此曉にはかに重くなりてうせたまふ、十二日昨夜御開葦により、三家より魚物さゝげらる、

〔大成令十六〕寶永二百年七月十八日、

禁裏より被仰出者、公方様○細川。御忌中○此年六月。井御精進長々之儀、御機嫌之御障にも

成候得者如何候間別勅之例ニ而御忌三十日御精進も可爲御同前被思召候間被仰遣候、兩様共御辭退も難成被任勅定御精進三十日可被遊候御忌者五十日御請可被成旨京師江も被仰遣候、〔享保集成絲繪錄十〕正徳二年十二月

御中陰○細川。明付面御肴獻上之覺

四品拾萬石以上在江戸在所共

〔續日本後紀<sup>仁</sup>〕天長十年十月辛卯、安藝國言賀茂郡人風早富麻呂、德行懿美、孝養自厚、父母歿後、口絶五味、哀慕之情无暫忘、特勅叙三階、免戶田租。

〔續日本後紀<sup>仁</sup>〕承和十一年五月丙申、甲斐國言山梨郡人伴直富成女、年十五、嫁鄉人三枝直平麻呂、生一男一女、而承和四年平麻呂死去也、厥後守節不改、年已四十四、而華貌不止恒、事齋食、敬於靈床、宛如存日、量彼操履、堪爲節婦者、勅宜終身免其戶田租、即標門闕以旌節行。

〔榮花物語<sup>後二十一</sup>〕さて夜ひとよ、とかくしあかさせ給て、あかつきにかへらせ給ふ、<sup>○藤原教通妻藤道</sup>御骨は内供の、さるべき人にぐしておはす、殿にはまぢ奉らせ給て、厄うへまごはせ給ふ、<sup>○中</sup>の<sup>○教</sup>は其まゝに御精進にて、御おこなひにてのみすぐさせ給ふ、

〔源氏物語<sup>九</sup>〕院へ参り給へれば、いとおもやせにけり、さうじ<sup>○緒</sup>にて日をふるけにやと、こゝろくるしげにおぼしめして、御前にてものなどまゐらせ給ひて、さやかくやとおぼしあつかひ聞えさせ給へるさま、あはれにかたじけなし、

〔源氏物語<sup>四十</sup>〕木<sup>六</sup>としかはりぬれば、そらのけしきうらゝかなるに、汀の水とけわたるにつけても、かうまでながらへけるも、有がたくもとながめ給ふ、ひじりの坊より、雪ぎえにつみてはべるなりとて、澤のせり、峯のわらびなど奉りたり、いも<sup>○食</sup>の<sup>○御臺</sup>にまゐれる、

〔おちくば物語<sup>四</sup>〕つひに七日に消入給ひぬ、<sup>○大納言</sup>女君の御ふくのいと濃きに、精進のけに、少し青み給へるが、あはれに見え給へば、<sup>○下</sup>

〔日本紀略<sup>十一</sup>〕長徳元年九月廿七日庚午、今日陸奥守實方朝臣奏赴任之由、於殿上給酒肴、於晝御座方給祿、叙正四位下、爲重喪者給精進肴、

〔後光嚴院御記〕貞治四年七月十一日丁卯、今日諒闇月<sup>○去年七月</sup>光嚴崩畢、大祓日也、<sup>○中</sup>御膳并臺盤魚味精進事

居處 今士庶ノ家古制ノ如クナルコトアタハズ然レドモ三年ノ間ハ一室ニ靜座シ婦人ハ男子ニ近ヅカザルヤウニスベシアハデカナハザル客アリトモ親族ノ外ハコノ間ニテ對話スベカラズ外應ニテ接待スベシ

出入 三年ノ間ハ已ムコトヲ得ザルコトアラバ其事ノ間バカリ出テ事ヲハラバ早クカエルヲヨシトス家業家事ハツトムベシ用ナキニ人ヲ招クベカラズ假五十日ノウチハ慶事ハ使ヲ以テモ禮ヲ行フベカラズ弔禮ハ既ニ葬ムル以後ハ遠クトモ親族中ハ往テ弔スベシモシ親族ニテ非レバ隣家ヘモ往カザルベシ假滿ルノ後ハ君及ビ官長ヘハ弔賀トモニ往カザルコドアタハズタビ吉宴ハ疾ニ託シテユカザルヲヨシトス三年之喪弔哭スルノ虚僞ニワタルコト禮同會子ニイヘドモ朱子答胡伯量書云吉禮固不可預然弔送之禮却似不可廢所謂禮從宜是也トコレヲ以テ斷トスベシ

〔貞丈雜記<sup>十六</sup>〕又云精進と云は、まらげす、むとよみて、身をきよめ心つ、しみて、專佛事に進て怠らざるを云也、鳥獸魚肉などはなまぐさくけがらはしき物なり、故不用之、いさぎよき食物を用るはつ、しみ也、精進はつ、しみの事也、腥を食ざれば、亡者の爲になるとおもふは心得違也、不幸の時の身のつ、しみ也、口に腥からぬ物を食するは、慎の一ツ也、諸事をつ、しむ故、食物をも慎む也、

〔禮記註疏<sup>七</sup>〕會子曰、喪有疾、食肉飲酒、必有艸木之滋焉、註、増以香味、爲其疾不嗜食、以爲薑桂之謂也、註、爲記者、正會子所云、艸木滋者、謂薑桂、

〔禮記註疏<sup>十四</sup>〕期之喪、三不食、食疏食、水飲不食、菜果三月既葬、食肉飲酒、終喪不食肉不飲酒、父在爲母爲妻、九月之喪、食飲猶期之喪也、食肉飲酒不與人樂之、疏<sup>正義曰、此一節論期與大功喪食士旁期之喪、三不食者、謂疏服也、其正服則二日不食也、故問傳云、齊衰二日不食、九月至喪也、名謂事同、期也、</sup>

シテハ恥ナク、朋友アフマリ、中オテトヲ魚肉ヲ食フ、惡ムベキノコト也、記文ニ託シテ本心ヲ失フベカラズ、又酒肉イラズトテ、麝類ノ如キ者ハ、一年ガ間ハ決シテ食フベカラズ、

言語 其大要ヲイフトキハ、士庶ハ喪事ノ外ハ云ハザルヲヨシトス、弔客アリトモコトバ少キヲヨシトス、スデニ葬タリトモ、家事云ハズシテカナハザルノ外ハ、無用ノ談ハカタクナスベカラズ、流俗ハ口ヲヒライテ戲談スレドモ、アヤシミトセズ、哀ヲ忘ルルノ甚シキト云フベシ、假滿テ出仕フルトモ、口ヲ開キ笑語スベカラズ、其他己ニ預ラザル人事ハ云ハザルヲヨシトス、五十日ノ内ハ、經書トイヘドモ、講論スベカラズ、陸象山ハ、呂東萊ノ制中、帷ヲ下スヲ非トシテラモヘリ、儼然タル喪服ノ中チ、戶外ノ屢常ニ滿ツト、シカレドモ朱子モ又子ヲツカハシテコレヲ學バシム、范文正公モ亦母ノ喪ニ教授スルトキハ、必シモ非トスベカラズ、孔子モ門人ヲツカハシテ防ノ墓ヲ治メ、孟子モ虞ヲシテ匠ノ事ヲ教フセシム、後世講書ノ屬ヒニハアラザレドモ、是又生徒ヲ謝シヤラザルニ似タリ、日ヲ極メテ生徒ヲアツムルハ不可ナレドモ、假滿チテ出ルノ後ハ、人ヨリ請ハ辭セズシテ講説モスベシ、書牘等ノ論説モクルシカルマジキコトナリ、但人ノ爲メニ書テ送り、或ハ記銘序跋等ノ類ハ書スベカラズ、東萊右ノ通り帷ヲ下シテサヘ、序跋等ハ制畢ルヲ俟テテ書スベシト云ヘルコト、書牘中ニ見エタリ、況詩賦ノ華詞ナドハ、イヨク非禮ナルコト也、

身體 五十日ノ内ハ、鬚頭剃ルベカラズ、髮モ油ツクベカラズ、紙ヲヒテリテユヒ、髮洗フベカラズ、爪トルベカラズ、痰ナクシバ浴スベカラズ、

衣服 イマダ葬メザル間ハ、晝夜トモニ服ヲスガザルベシ、既ニ葬メバ、夜ハ上ヲパトリ、下ハ其マヽニテ丸、寢ニシ、五十日假ヲハリタラバ、コレヲスグベシ、三年ノ間、小祥大祥ニハコレヲ服スベシ、右ヲハリテ貧キ者ニアタフベシ、前ノ大祥ノ條ニ詳也、



戚ノ心已ムコトナシトイヘドモ、漸ヲ以テコレヲホドヨクセンコトヲ欲ス、  
聲色 三年ノ間ハ、聲樂ヲ聞クベカラズ、假滿テモ公會ノ外ハ他所ニイタリ、聲樂アラバ其場ヲ  
去リテキカザルベシ、正樂スラシカリ、况淫聲ノ類、平日スラ絶ツコトナレバ、聞クベキニアラズ、  
盤上ノ戲ナドハ、君子ノ常ニ戒ルコトナレバ、固ヨリ云フニ及バズ、ナスベカラズ、其外君子モ遊  
山玩水藝術等ニ、□□道ヲ害スルコトニアラザレドモ、アソビ事ニカゝリタルコトハ皆不可也、  
女色ハ三年ノ間ツヽシミテ、其ニ衰ヲ同フセズ、衰住居スベシ、禪後ツチニ復スベシ、コヽニユル  
カセニシテ、イサヽカモ慾念萌サバ、タトヒ犯サズトモ心喪ハヤブレン、深クオソルベシ、妻ノ父  
母ノ喪ニモ、又カクノ如クニシテ禮ヲトグシムベシ、先輩大儒ト稱スル者モ、此禁ヲ犯シ恥ヲシ  
ラズ、コレヲ策ニアラハシ、百年ノ下ヨリコレヲミレバ、云フベカラザルモノアリ、  
飲食 父母死シテ、飲食咽ニ下ラザルハ自然ノ情ニシテ、人心アル者イヅレカオタノ如クナラ  
ザラン、然レドモ下モ士庶人ニ至リテハ、自ラ事ヲ執リ、ツトメテ此大事ヲツヽシマズンバアル  
ベカラザレバ、シヒテ粥湯漬ノ類ハ食フベシ、旁側ノ人モスヽメテ食ハシムベシ、然レドモ口ニ  
甘旨ノ味アレバ、人ノ志ヲシテ情ヲシム、ユエニコレヲ絶ツヲヨシトス、五十日ノ間ハカクノ如  
クナルベシ、雜記曰、飢而廢事非禮也、飽而忘哀非禮也、五十日過レバ、一年ノ間ハ蔬食水飲シテ菜  
菓ヲクラハズ、小群終ヲ始メテ菜菓ヲ食ヒ、三年禪終ヲ肉ヲ食フコトナレドモ、五十日過レバ力  
役ノコトニ從ヘバ、鹽氣ナクテハ力脱シ事ヲ執ルコトアタハザル人モアリ、左様ナル人ハ一菜  
蔬ニスグベカラズ、然レドモ三年ツヅケテ食フベキニアラズ、吾力ヲ量テ食フベシ、仕ル者ハ君  
命、或ハ官長ノ命ズル處ハ、ヤムコトヲ得ズ、食フトモ、其他ハ疾ニ託シテ、宴會ヲ辭シ、酒肉ヲ絶ツ  
ベシ、其内酒ハ官長ノ命ナリトモナルベキ、ダケハ飲マザレ、喪大記ヲ考ヘテ見ツベシ、喪有疾食  
肉飲酒ノ禮文アリ、然レドモ今風俗薄ク、五十日ノ内モ肉ヲ絶ツ外ハ、甘旨ヲ食ヒ酒ヲ飲ミ、甚フ

〔類聚三代格<sup>十二</sup>〕大納言從三位神王宣奉勅、喪制未終、私着吉服、禮教所不容、法律所重刑、如聞諸司番上人等、自非要籍、驅使別勅、微起或匿、喪不申送、或自縱求出仕、宜頒告諸司、若有此類者、依法科斷、不得隱容、

延曆十六年六月十七日

〔下學通言<sup>三</sup>〕論禮三之三<sup>四</sup>禮

聖人制禮、服制有等、忌期有殺者、所以明人倫、大實之令、亦分爲五等、其三年之喪、雖降爲期、而遭父母喪者、解官、自餘重喪、皆給假、雖奪情從職者、亦猶終服不弔、不賀、不與宴、朝依衣、色家依服、制衛士上番、心喪從公、百姓遭父母喪、免期年徭役、凡居父母喪、身自嫁娶、若作樂、釋服從吉、聞祖父母、父母喪、匿不舉哀、爲不孝、聞夫喪、匿不舉哀、若作樂、釋服從吉、及改嫁爲不義、皆居八虐之一、常赦不原、不與、今時五旬從吉、服期有名、無實者同焉、而名實至孝、不慊於期喪、在家持心制以終三年者、亦往往有之、比之於五旬就吉、飲酒食肉於汝安者、其厚薄何如也、<sup>略</sup>○中而五旬之忌、又與佛家七七追善之說相混、務求其往淨土、而不知神之當反室堂、使死輒忘之、既悖人情、慎終追遠之禮、先廢、民德之日薄、風俗之日漓、亦何怪也、

〔泰山集<sup>甲</sup>〕

錄<sup>乙</sup>

〔公卿之禮〕父母忌五十日、服十三月、五十日之間、无他人之交、十三月之間、公事與人

相談、其禮隔闕相見、外門之闕鋪薦、如不鋪薦爲有穢也、天子十三月之後、擇月日變吉禮、是安家之職也、

〔二〕禮儀略<sup>喪四</sup>〔居喪〕

哀戚 君子親ノ喪ニ居ル、禮ヲ盡スベキコト固ヨリナリ、然シテ夫子ノ喪、與其易事成トノ玉ヘルトヲリ、哀ミノ心ハ喪ニ居ルノ本ナリ、コヽニ於テ薄ケレバ、禮欠クルコトナシトモ、觀ルニタラズ、然レドモ哀戚ノアマリ、疾テ死ニイタルハ不孝ナリ、雜記曰、毀而死者、君子謂之無子、ユエニ哀

願主婦不同入處故也其男父居喪娶妾舍免所居一官女子居喪爲妾得祔妻即二等也不入不孝若作樂者自作違人等樂謂擊鼓吹笙舞歌舞樂之類釋服從吉謂喪制未終而在十三月之內釋去絰衣聞祖父母父母喪不舉哀詐稱風父母父母死父母之喪創巨尤切聞即崩殯辦勝故而著吉服者衣聞祖父母父母喪不舉哀詐稱風父母父母死父母之喪創巨尤切聞即崩殯辦勝故天今乃置不舉哀或簡擇時日者並是

八曰不義謂○中聞夫喪不舉哀若作樂釋服從吉及收殮而有妻之天也恩義既隆聞喪即須號慟忘哀皆是背禮違義故俱爲八虐其收殮爲妾者非

〔金玉章中抄〕八虐罪事

七曰不孝○十一色○中略

居父母喪嫁娶者同○中略律云居父母喪而嫁娶徒二年各離之○中略

八曰不義○八色○中略

居夫喪改嫁已上犯八虐之時本謂釋輕先以除名該行常赦之日今按妻收殮者不入八虐居夫喪改嫁已上犯八虐之時本謂釋輕先以除名該行常赦之日今按妻收殮者不入八虐

〔律疏名例〕凡○中在父母喪生子及娶妾在父母喪生子者皆謂十三月內而繼除服以續給者生但計胎是服內而懷者皆依律得謂其妻兄弟別籍異財者免所居官異財不相須進合免所居之官財不相須進合免所居之官

所居之一官若係帶勳位者免其官位

〔律疏名例〕凡聞父母若夫之喪匿不舉哀者徒二年喪制未終釋服從吉若忘哀作樂自作違人等徒一

年半難嚴杖八十卽遇樂而聽及參預吉席者各杖六十○人父母之恩昊天莫報茶毒之類豈若聞喪擗

日待時若匿而不卽舉哀者徒二年其嫡孫承繼者與父母同喪制未終聞父母及夫喪十三月內釋服從吉若忘哀作樂注云自作違人等徒一年中繼杖八十樂謂金石絲竹笙歌鼓舞之類難嚴杖六十

聞者預吉席卽遇樂而聽之席參預其中者聞祖父母外祖父母喪匿不舉哀者徒一年喪制未終釋服從吉杖一百二等以下尊長各遞減二等卑幼各減一等終期二尊尊長者杖九十喪制未

從吉杖一百二等以下尊長各遞減二等卑幼各減一等終期二尊尊長者杖九十喪制未從吉杖一百二等以下尊長各遞減二等卑幼各減一等終期二尊尊長者杖九十喪制未

十喪制未終釋服從吉杖六十四等尊長者杖五十喪制未終及終比爲兄弟卽是妻同於卑幼不舉哀及釋服從吉各減當色尊長一等其妻既非尊長又殊卑幼在禮及終比爲兄弟卽是妻同於卑幼不舉哀者各從不舉之應又居二等親喪作樂及違人作者律雖無文不合無罪從不應得爲輕答若未舉

雖無服上臍乘被尋舍之處三日心喪可然之旨二付今日被下由讓岐守之喻也

〔大江俊矩記〕文化七年八月廿二日甲辰越中公御出玉林坊死去之由山城忌服之事御相談也故村

昌殿爲養母者不及假服旨申入了其通二可致と被仰也其上心喪は了簡次第之旨と爲御心得申

入置了

〔烈公行實〕文化十三年年十七歲秋閏八月武公治起齊昭父薨公哀毀過禮欲服喪三年以哀公修齊

兄昭礙國制不娶公昭獨服則嫌於專擅故不得已服心喪三年文政元年年十九歲心喪闋

〔令義解六〕凡遭重服有無情從職並終喪不弔不賀於吉也不預宴謂雖是公會

〔令義解二〕古記云不弔謂不問他人喪服親者非也跡云不弔謂服親之喪者不在禁之例也中

釋云不弔不賀不預宴謂雖此公事亦不得預耳其於親喪有別式古記云不賀不預宴謂公事共

是唯別勅者非朱云雅樂師等可教習歌舞無情從職故但治部官人喪事不監護也釋云此不在弔

猶可監護者何亦雅樂官人奏樂不預類同耳者後反云爲公事不可制件事者釋違也

〔令義解六〕凡凶服不入公門謂內服者麻也公門者宮城門及諸司曹司其遺喪被起者朝參處亦

依位色謂入公門及朝參處依位也在家依其服制

〔令義解二〕釋云凶服也喪服也不入公門者市門倉庫國郡府院驛家等類不稱公門但國郡廳

院市司廳院門者是爲公門耳古記云不入公門謂市不在公門之例以午後集故自餘國郡廳院爲

公門略穴云凡公門皆是宮城內亦爲公門也於市其曹司院是爲公門耳中朱云凶服不入公

門者假五月服假卅日而則卅日不入公門耳不顧本五月也

〔唐六典四〕凡凶服不入公門遺喪被起在朝者各依本品著淺色純綬

〔律疏〕八虐

七曰不孝謂居父母喪身自嫁娶若作樂釋服從吉居父母喪身自嫁娶皆謂首從得親者若其獨

七曰不孝謂居父母喪身自嫁娶若作樂釋服從吉居父母喪身自嫁娶皆謂首從得親者若其獨

喪中雜制



心喪

口若干次丁

口若干中男

〔伊呂波字類抄志〕心喪

〔北山抄拾遺抄〕請假事

近代例爲養父母爲重喪爲本生父母爲輕服此事大違法式養父母假卅日服五月已有其限但隨其志可有心喪本生父母雖爲他養子不可改其體而如輕服只爲心喪不知法意也

〔花鳥餘情八〕輕服に紅の衣を用る事は長保三年二月定子皇后〇后心喪に御堂關白〇藤原火色下襲を着し給ふ由見えたり

〔町人囊五〕ある人のいへるは町人百姓などは儒學ありといふ共三年の喪などをつとむるは無用成事也道に志しあらん人はさいはひ日本相應なる服忌令あり此法にまたがひ父母の服忌ならば五十日の精進にて世間に交はらず五十日過ぎても孝心の誠を守らんと思ふ人は酒飲ます何にても厚味のものを食せず乾魚を食して生魚のたぐひを食はず厚味成物或は五辛の類は壯年の人には淫欲をおこすものなれば是を忌むべし但老人が病氣なる人ならば養生の爲に少酒をのみ又は肉の類を折々用ゐてもくるしからずと見えたり又諸樂府の座敷へ交はらず神前に參らずかくのごとく守る事十三箇月也是我朝服忌の法なり去りながら町人百姓などは五十日の間外へ出て渡世をいとなまずば飢に及ぶ類も多かるべし其日ぐらしの貧なるものなどは三日のいとなみを關く事叶はざる事なれば是さへなべておこなひがたし唯心喪とて外むきは兎にも角にも世にまたがひて内心のつとめを右の如く勤め守る事は貧賤なる士民といふとも行ひ安き事也

〔大江俊矩先考卒去喪中難々日記〕寛政四年十二月廿四日戊子上總局養方從父弟〇大江俊冬故

〔東大寺成卷文書〕右京三條三坊

戶主出庭德麻呂戶手實○中

今年計帳見定良大小口拾肆人○中

課口貳人

見輸貳人 正丁 遺服每

輸調

課屋出庭德麻呂年伍拾陸 正丁親左黑子、母服、○中略

弟出庭小虫年肆拾捌 正丁母左手上黑子、母服、○中略

天平五年六月九日

坊令大初位下尾張連牛養

〔延喜式主計〕凡勸大帳者皆據去年帳勸其出入但死亡篤廢殘疾服侍隱首括出并中男鄉戶課丁等色計會別籍

〔延喜式主計〕某國司解申預計某年大帳事

國府在京若千里

合管郡若干○中略

某郡在國東去國府若干里

管鄉若干○中略

都合今年計帳定見良賤大小口若干欠乘去年若

口若干半輸若干正丁 若干次丁

口若干遺喪

口若干正丁

請假廿箇日

牒依

高陽院崩所請如件謹牒

久壽二年十二月廿二日

從二位行權中納言兼左近衛權中將藤原朝臣師長牒

出本陣樣

請假廿箇日

牒依

高陽院崩所請如件以牒

久壽二年十二月廿二日

從二位行權中納言兼左近衛權中將藤原朝臣師長牒

假文書樣據西宮臨時記也檢公式令皇后平出中宮關字今案指其身平出指其居關字若然書太皇太后皇太后皇后之時平出也書太皇太后宮皇太后宮皇后宮中宮之時關字也至于高陽院者指身指居不能異文探其意可分別平出關字今指其身故平出也

〔服假類聚五〕弘調云上古父母喪不給假日遺父母喪被起者是稱重服奪情從公而近來父母喪普通上下有五十日假此間既載五旬假又文保服假令有父母假卅日但五十日忌之文是以可知父母假五十日中世既有之非近俗之所定

〔令義解賦三〕凡遺父母喪並免非年徭役

〔令集解賦十三〕古記云問遺父母喪者所養本生有別以不答所養父母者免非年但於本生父母者且

待孝禮一云孝禮律重本生輕所養然依律名例所養並合非年唯新令爲所養父母五月服也略中

問嫡孫承重並免非年徭役未知服非年不答服名例律云嫡孫承祖與父母同故朱云遺父母喪謂

養父母不入此例也爲服期限輕就也免非年徭役者爲哀痛重也雖水旱恩復年來年不折

國書役

例奉之。天曆元年六月二日雖非着座猶送外記。據二東記月廿一日北山抄十一月五日丁丑戌時、禪閣使忠正傳仰曰、以巳時一條殿入滅。從一位准三、宮年九十二不可忿參者、于時在小川第禪閣已罷御云々、即奉消息、卅日壬寅、早旦獻假文於殿上、又付外記、禁中神齋之間、于今遲引、須着輕服、而依禪閣仰不着。

殿上書機

請假卅々日

右依祖母喪所請如件

久安六年十一月卅日

從一位行左大臣藤原朝臣某

外記書機

請假卅箇日

藤依祖母喪所請如件以牒

久安六年十一月卅日

從一位行左大臣藤原朝臣某

〔台記〕久壽二年十二月十六日己丑戌刻高陽院○皇羽后藤原朝臣某、賴長姉結、崩、廿二日乙未、師長着高陽院御服、淺鈍色、是尋常輕服也、即參福勝院觸穢云々、又出假文云々、

出殿上樣東宮同之

請假廿箇日

右依

高陽院崩所請如件

久壽二年十二月廿二日

從二位行權中納言兼左近衛權中將藤原朝臣師長

出外記樣



也者、隨此命召陰陽師、可令勘日時、以酉刻着服、奉假文、

〔本朝世紀〕寛治元年七月廿七日丙子、是日左大臣○源賴朝依姑喪被獻廿日御假文、但依爲代姑○堀河最

初先被奉犬產假文、

〔兵範記〕仁平三年十二月六日庚申、御室○白河皇子御大事之由、京中風聞、自女院有御使、申刻已令

崩逝了、○中一院御假廿日、高陽院并關白殿○藤原御假十日、皇嘉門院三位中將殿、宇治法印御房

等、無御假○御室與殿下是異父兄弟之故也、左府○藤原令成十日假給之、由自令稱給云々、是故大北政所御猶子

儀之故歟、

〔台記〕久安三年十月十八日戊申、依栖霞院姬君事獻假文、是故三條殿之女、禪閣之妹也、戊刻出川原

着帶卽除、戊日憚之由、陰陽家所申也、然而康平三年正月廿八日戊午、着帶由見二東記仍行之、

假文書樣

請假廿箇日

右依姑喪所請如件

久安三年十月十八日

內大臣正二位藤原朝臣賴長

進殿上如此

請假廿箇日

藤依姑喪所請如件以牒

久安三年十月十八日

內大臣正二位藤原朝臣賴長

出外記如此

〔台記〕久安六年七月二日丙子、賀陽院御匣殿辛、余○藤原放生會上卿停止、九日癸未、戊刻出門外

着除御匣殿服○中依公家御衰日不奉假文、十一日乙酉、依御匣殿喪奉假文、雖凶欠日、依有除服

政關白人遭親喪之時皆奉假文即日召之而近代不被奉云々不知其是非耳

〔朝野群載二十〕假文

請假某箇日

右依

太后若某院崩所請如件

年月日

官位姓名外記本陣如何

是院宮崩時御傍親人假文樣也

〔拾芥抄下本〕妻子假文事

先達云妻子死去之時不獻假文云々是多可籠穢中之故歟穢內假日數可滿限也但女子假文令獻云々是又不觸穢之時事歟如何

〔續修東大寺正倉院文書十九〕史戶赤麻呂不參解文

史戶赤麻呂謹解 申不參向事

右以今月十七日姑死去仍請三箇日假欲看治今錄狀謹解 以廿一日夕參

天平寶字四年九月十八日

判史生下道朝臣福麻呂 領賀茂朝臣馬甘

〔本朝世紀〕天慶八年九月十九日壬子今日有召名參入○中着宜陽殿西庇座相次大納言藤原師輔

卿參入着同殿座件卿依伯父前左大臣喪議原仲平此月五日薨以去八日被進廿日假文不參而今日有召參入也

〔小右記〕寛仁二年四月十三日丙子請姉喪假廿箇書樣請假廿箇日右依姉喪所請如件年月日

〔左經記〕長元七年九月十七日癸卯今日之外無可奉假文日仍令案內右府邊云今日外廿一日以前

無可奉假文之日仍今日奉假文并欲着服葬送以前奉假文如何御報云葬送以前奉假文又是恒例

案之遺喪之假令條之限外舅十日叔父廿日其喪御假又是同時須依多限被請廿日至于彼十日自滿此限內矣

長德四年七月廿七日

左衛門權佐惟宗允亮

〔北山抄拾遺雜抄〕請假事

請假日

右依其親喪所請如件

年月日

親喪假文如之隨親疎有日數隨尋案內可請也○此外雖有種々假近代或不必請之但不能出仕有二假時依重請之至輕此內可滿服又如此云々○近代例爲養父母爲重喪爲本生父母爲輕服此事大違法式養父母假卅日服五月已有其限但隨其志可有心喪本生父母雖爲他養子不可改其體而如輕服只爲心喪不知法意也但其傍親就養父母之族可有其假至于本生之族不可有假但可有具見記親喪之假或半減召之

請假日

右依照其親喪所請如件

年月日

聞違所喪假文如之其日數可半減但三日之假可請二日也或無聞字唯減日數云々

請假日

右依其人御喪所請如件

年月日

天曆八年太后○顯嗣后於禁中崩時令法家勘之御傍親公卿皆奉假文其狀如之或依崩云々攝

殘者計殘給耳。不給舉哀之假。又不依先說也。假防人衛士等聞祖父母等喪。爲服已過。於服不擾也。間凡職事番上庶人等。過服月。聞者何。答只止耳。若有殘月者。如上解。私家於番上然耳。不給舉哀之假。故其職事服月已過。給舉哀之假耳。但於父母。全起自聞日。給一年耳。禮家何者下條云。給喪假以喪日爲始。故知於給之色。自喪日計耳。

〔令義解假九〕凡給喪葬假。三月服以上。並給程。

〔令集解假四〕古記云。給喪葬等假。謂喪假改葬假是也。三月服以上。並給程。謂本服三月以上。親是唯

喪所雖近。以喪日爲始。假日已盡者。皆給舉哀假耳。不在給程之例。朱云。問三月服以上。並給程者。雖无服殯。本服三月以上者。尚給程耳。歟。何。穴云。喪葬。謂喪假改葬假等也。舉哀者約喪。仍亦給程。无服殯亦本服三月給程也。

〔令義解假九〕凡給喪假。以喪日爲始。謂喪日。舉哀者以聞喪爲始。計凡給聞喪假者。以聞時爲始。不可追。

四辨

〔令義解雜〕凡官戶奴婢者。每旬放休假一日。父母喪者。給假卅日。產後十五日。其懷姙。及有三歲以下男女者。並從輕役。

〔神祇道服紀令秘抄〕一假トハ荒忌ヲ云。此間ハ主君ヨリ假ヲ乞テ。人ニ對面セズシテ。引コモリ居故ニ假ト云也。

〔令集解假四〕詐僞律云。凡父母死。應解官。詐言餘喪不解者。徒二年。若詐稱祖父母父母夫死以求假。及有所避者。徒二年半。

〔小野宮年中行事〕雜穢事

假事令。遭喪給假三月。服廿日。一月服十日。說者云。問縱祖父母喪。其假卅日也。未訖間。又遭養父母喪。其假重給哉。答從後日更計始耳。重不可給六十日。



コト知ルベシ、今ノ服忌令ニ、父母忌五十日トアルハ、先王ノ令ニハナキコトナリ、何レノ代、誰人ノ立テシ法ナルヤ、文保記永正記ナドニ、父母并夫假五十日十三ヶ月トアレバ、ソノ時代已ニ專ハラ行ハル、コト、思ハル、令ニ祖父母養父母假三十日服三ヶ月九十ナレバ、本生父母ニ假ノナキ理ハアルマシ、本生ノ父母ハ、養父母ヨリ一等重クシテ、假五十日ニテ相當ナルベシナド心得違シテ、カク杜撰セシニヤアラン、高麗ノ制ハ、五服ヲ建テ、假ヲ給ヒ、假モ亦本朝ト異同スルハ、蓋其損益スル所ナラン、但シ成宗ノ四年乙酉ハ、宋ノ雍熙二年ニシテ、皇朝花山天皇ノ寛和元年ニ當リ、文武天皇ノ元年、令律修撰既訖、施行天下セシヨリ、二百八十五年ノ後ナレバ、高麗反テ皇朝ノ制ヲ受ルニ似タリ、コトニ新建トアレバ、コレヨリ前高麗ニ此式ナキコト知ルベシ、

〔令義解九〕凡師經受業謂師博士也、依律、已成者、喪、給假三日、

凡聞喪喪、其假減半、謂假有官人遭祖父母喪、本假十日、若在遠、有乘日者、入假限、謂假有本假三日、

入假限、給二日之假、

〔令集解四〕古記云、聞喪舉哀、謂喪者在遠、遲聞已過假期、不得往事、故其假減半耳、但三月服以上

親、假日未盡、須向喪所、不合舉哀、並給程、故凡舉哀假並不給程也、跡云、給喪假舉哀之法、不求屍葬不之狀、依多而給、假令一月服給十日、此人以喪後四三日聞者、給喪假七日六日、以六七日等聞、給

舉哀假五日之類、朱云、已上說、令釋問答並同、但貞不同耳、未明何、然此說於不可往所○一本所上

說何、賴云、往於可預喪、尚可隨多給耳、而但依喪假給者、可給程也、依哀假給者、不可給程、其間能折

耳者、又舉哀假三月以上、合給程、改葬是輕、尚給程故也、朱云、貞云、不可給程者、未知何、賴亦同、貞說

依文、不可給程者何、案上條、長番无別、朱云、聞喪其假減半者、未知於番上人、猶令給本服哉、若如言

此問答、減半本服上可給哉、私同問答、然未明、賴亦不明、決何、穴云、於番上人服月已過者、无追服、日

條男官女官無別並同云云といふは、後宮職員令に其外命婦、准夫位次と云、職員令、申務省の義解に五位以上妻曰外命婦とあれば、女子の官位を帶して、人の妻たる者の爲に設うけられしなり。

〔唐六典〕凡諸司置直皆有定制。

○註

内外官吏、則有假事之節。中略齊衰周給、假三十日、葬三日、除服三日、小功五月、給十五日、葬二

日、除服一分、減一私忌給、假一日、忌前及夕、除服五日、周已上、親皆給、若聞喪、舉哀、行、行李之命、

〔晉書〕禮志、秦始皇十年、武元楊皇后崩。

○中

博士陳連等議、以爲三年之喪、人子所以自盡、故聖人制禮、

自上達下、是以今制將吏諸遺父母喪、皆假事二十五日、敦崇孝道、所以風化天下。

〔東國通鑑〕高十四成宗文懿王四年<sub>宋雍熙二年</sub>、冬十月、新定五服給假式、斬衰齊衰三年給百日、齊衰期年

給三十日、大功九月給二十日、小功五月給十五日、緦麻三月給七日。

〔善庵隨筆〕下皇朝ノ古ヘ、律令格式等、何事モ唐ノ制ヲ遵用セラレシコトナルニ、獨リ服紀令ノ

ミ、○中一年、五月、三月、一月、七日ノ五等ニ服紀ヲ建ラレシハ、唐土古今ニ其制ヲ見聞セズ、皇朝

ノ創制ナルニヤ、若シヤ三韓ナドノ法ヲ用キレコトモアラン歟ナド疑ヒシニ、東國通鑑卷十

高麗紀成宗文懿王<sub>西乙四年</sub><sub>宋雍熙二年</sub>、冬十月、新定五服給假式、ケルヲ以テ略ストアリ、假ハ休暇ノ

暇ニシテ奉公ヲ免ジ、家居シテ喪ヲ行フノ暇ヲ給フヲ給假ト云フ、神祇服紀令ニ、假俗號荒忌

トイヘバ、今日所云ノ忌ノコトニテ、忌トイフ稱ハ、神祇服忌令ヨリ出シ詞ナルベシ、拾芥抄ニ、

假事令ヲ引テ、凡職事官、遭父母喪並解官、○本文前條ス、コノ文ニヨレバ、父母ノ喪ハ、並ニ解官

シテ給假ノコトナク、一年ノ服ヲ受ケシム、尤モ本生父母ニ限ルコトニシテ、養父母ハコノ例

ニアラズ、コレ先王以孝治天下、萬代不易ノ難有制度ナラズヤ、法曹至要抄ニ假事令說者云、問

僧尼遭父及餘親喪何處分、答於僧尼不見給假法於父母無疑矣トアルナド、僧尼ハ世外ノ人ト

イヘドモ、服紀爲父母一年ナルコト疑ヒナシ、給假ノ法ハ不見トアルニテ、父母ニ給假ノナキ

至京師依中人張懷德爲助王欽若方善策遂起復知制誥以左司郎中爲翰林學士楊億丁母憂未卒哭起復爲工部侍郎元史監察御史陳思謙言内外官非文武全才及有金革之事者不許奪情起復是元時亦尙不以服闋爲起復也

按宋史向子謹坐言者降三官起復知潭州則凡降官而復職者亦皆謂之起復不專指停喪授職者

服假

〔拾芥抄〕下本服紀服可依親假波可依恩見内典道祐所談也

〔令義解〕九假事凡職事官遭父母喪並解官〇註自餘謂非重喪者皆給假夫及祖父母養父母外祖父母卅日

三月服廿日一月服十日七日服三日

〔令集解〕四假事朱云此文稱夫則知此條男官女官无別並同問稱祖父母者有高並同者未知依下服紀條於高祖未明凡任此文皆依三月一月服可給廿日十日假哉何任此文額云然

〔假事令講義〕義解に謂非重服者といへば自餘と斥は父母を除くの外をいふなり喪葬令に依に夫は一年祖父母養父母は五月外祖父母は三月の服といへり然れば一年の服を重服として假一年を給はれど父母の喪の外は卅日廿日十日三日の別を定められしにて服紀の厚薄には依ざるにや夫は一年の服なるを卅日の假を給はり祖父母養父母は五月の服なれども猶卅日を給し外祖父母の如き其服三月なるも亦卅日の假を給はるは人心の哀傷する所の厚薄に依て定められしならん其他は三月一月七日の服に准することしらる三月の服と云は曾祖父母伯叔父姑妻兄弟姊妹夫之父母嫡子なり是等は廿日の假を給し一月の服は高祖父母舅姨嫡母繼母繼父同居異父兄弟姊妹衆子嫡孫なりこれは十日の假を給はり七日の服とは衆孫從父兄弟姊妹兄弟子をいふ是は三日の假を給はるとなり但此條に云る卅日の假以下廿日十日三日は何れも解官するには及ばずとしるべし集解に朱云此文稱夫則知此

日めなり、應永六年五月八日權中納言義持母喪に因て解任、八月廿二日復任、百二日なり、延文例  
十一月八日、除服宣下あり、七月百七十七日なり、十五年五月六日權大納言義持父喪にて解  
任、六月十一日復任、はつかに三十五日なり、後云はじめなり八月十三日除服宣下あり、四月  
九十六日なり、寛正四年八月八日、室町左大臣義政母喪にて解任、九月十二日復任、三十五日な  
り、十七日除服宣下あり、四十日なり、延徳三年正月七日、參議右中將義植實父入道准后義親喪  
にて解任、二月十五日復任、三十九日なり、廿四日除服宣下あり、四十八日なり、天文十九年五月  
四日、參議左中將義藤父喪に解任、六月廿六日復任、除服宣下あり、五十二日なり、同月を此際服  
制一定ならず、慶長の服忌令に、父母卅日とありしを、寛永に、忌五十日、服十三月と定められ、今  
日に至るは、神道服忌令に、父母服一年十三假俗號、五十日とあるに依れしなりとかや、

〔除服叢考 二十七〕起復

俗以滿服後補官爲起復、此甚非也、霏雪錄云、起復者、喪制未終、而奪情起視事、如歐公所作晏元獻  
神道碑、邊著作佐郎、丁父憂去官已、而其家起復、爲淮南發運使、及嵩之遭父喪、經營起  
復是也、又宋制並繫之官銜、如起復左僕射中書門下平章事臣趙普是也、今以服闋爲起復誤矣、又  
趙昇朝野類要云、已解官持服、而朝廷特擢用者、名起復、卽奪情也、王阮亭亦引此以證俗說之謬、今  
按南史蕭坦之居母喪起復、爲領軍將軍、舊唐書蘇環卒、詔其子頌起復爲工部侍郎、頌抗表固辭、詔  
許終制、張九齡喪母、詔奪哀起復、同中書門下平章事、九齡固辭不許、通鑑唐順宗時、王叔文用事、旣  
而有母喪、革執隨多不用其語、叔文乃日夜謀起復、憲宗時、昭義節度使盧從史遭父喪、朝廷無起復  
之命、乃賂宦官吐突承璀、請發本軍討王承宗、以冀起復、昭宗時、韋貽範爲相、多受人賂許以官、遭母  
喪去位、日爲債家所誤、乃日夜謀起復、此皆在喪起復者也、五代史鄭餘慶嘗探唐士庶吉凶禮、爲書  
儀兩卷、明宗見其有起復之制、嘆曰、儒者所以隆孝悌、無金革之事、而起復可乎、宋史夏竦丁母憂、潛



呂藤原朝臣永手房前二男、房前今年四月辛酉薨、是に至て六月百五十九日なり藤原朝臣廣嗣字舍一男、字舍今年八月從五位下に叙す、みな違令なり、天平神護二年三月丁卯大納言正三位藤原朝臣眞楯薨じ給ひし時、長男藤原朝臣内麻呂十一歳なり、依ていまだ叙爵せず、弘仁三年十月辛卯日、右大臣内麻呂薨じ給ひ、十二月己丑日、五長男冬嗣を左近衛大將となし、正四位下を授けらる、三月五十九日めなり、天長三年七月己丑日、十四左大臣正二位藤原朝臣冬嗣薨す、四年正月癸未、長男長良從五位上、二男良房從五位下に叙す、七月二百三十五日めなり、貞觀十四年九月二日、攝政太政大臣良房薨す、十五年正月七日、右大臣基經從二位に叙す、五月百廿五日めなり、仁和三年三月廿九日癸卯晦、前參議正四位下源朝臣光、正月十九日癸巳、母憂去職、是日有勅以本官起之といふ、一月四十一日なり、寛平三年正月十三日、大相國基經薨じ給ひしに、三月十九日、長男從三位時平、參議に任せらる、三月六十六日なり、延喜九年四月四日、左大臣時平薨じ給ふ時、長男顯忠十二歳、いまだ叙爵せず、延喜十三年正月七日、顯忠十六歳、正二位、長德元年四月十日、關白道隆薨じ給ひける、位の嫡子と云ふを以て、從五位下に叙す、長德元年四月十日、關白道隆薨じ給ひける時、嫡男内大臣伊周服解、八月廿八日、東宮傳に任す、五月百三十七日めなり、是より後、期年の喪を行ふもの絶て聞ことなし、萬壽四年十二月四日、御堂入道道長薨じ給ひしかば、關白賴通、服解ありしに、はつかに廿五日にして復任あり、如是は前に聞ことなし、保元四年三月朔、源賴朝朝臣母憂に丁り、上西門院藏人を解給ひしが、六月廿八日復任あり、四月百十六日なり、四月を康永元年十二月廿三日、征夷大將軍權大納言尊氏母の憂にて解任ありしが、二年三月七日復任あり、四月七十三日なり、延文三年四月廿九日、宰相中將義隆、父の喪にて解任ありしかば、八月十二日復任せらる、五月百二日なり、貞治六年十二月七日、左馬頭義滿、父の喪に依て解任ありしが、廿四日復任せらる、はつか十八日めなり、翌る正月廿四日除服宣下あり、喪服四十八日なり、明徳三年六月廿五日、室町准后母の喪に丁り給ひしが、八月十八日、除服宣下あり、五十三

者左大臣贈正一位常朝臣之子也。○中齊衡元年六月丁父大臣憂解職。七月詔以本官起之。○中貞觀元年六月母喪去職。二年正月詔奪情起之。

〔三代實錄二十〕貞觀十七年九月九日戊子神祇伯從四位下兼行美濃守藤原朝臣良近卒良近者太宰員外帥正三位吉野之第四子也。○中四年○貞遺母喪解職服紀未終詔以本官起之。

〔三代實錄五十〕仁和三年六月廿日壬戌從四位上行太宰大貳源朝臣行有卒行有者文德天皇之皇子也。○中仁和元年正月出爲太宰大貳母憂去職數月詔以本官起之。

〔本朝世紀〕康和元年七月一日壬寅是日參議從三位行皇太后宮權大夫兼美作權守藤原朝臣公定薨公定者正三位行權中納言藤原朝臣經家第一子母正四位下行美濃守大江朝臣定經女也。○中治曆二年二月八日任少納言。○中五月廿五日遭父喪去職延久元年○治曆正月廿七日詔以本官起。

〔本朝世紀〕康和元年九月九日戊申此日參議正三位行備前權守藤原朝臣長房薨長房者故正二位行權大納言兼太皇太后宮大夫藤原朝臣經輔第二男母故從二位行式部大輔藤原朝臣資業女也。○中承保二年六月十三日任大藏卿。○中二年○承兼備中權守永保元年八月七日丁父憂解官十月十七日以本官起。

〔賦役令講義〕信充○原云綾日本紀に大寶三年閏四月初日右大臣阿倍朝臣御主人薨せられ慶雲元年七月乙巳長子從五位上廣庭に功封百戸四分之一を傳賜はりしは十六月めなり是は令の如く期年の喪を全く終りしなるべし養老四年八月癸未○藤原淡海公不比等薨じ給ひしに同五年正月壬子○日長子武智麻呂を中納言從三位となし玉ひしは五月百五十日めなり是違令の始と云べきか天平九年七月丁酉○日正一位左大臣武智麻呂薨せらる九月己亥○日長子正五位上藤原朝臣豐成從四位下に叙す六十三日めなり同日三男從六位上藤原朝臣乙麻呂

一奪情從公之輩指何人哉、

申云重服之人十三ヶ月之間、舉哀不出仕而被下復任之宜旨之後從公事之輩、謂之奪情從公於輕服、專無此儀云々者、

十五日己卯午時許、大外記賴業真人來略○中賴業、漢家本朝事等多以相語、余略○藤原家實又尋問之、一奪情從公事

賴業申云於重服不可有此儀、輕服人日數之內除服令出仕之名也、但於法家不學道也可被尋道者、

先日範貞所申重服之者復任之後出仕之名也云々、兩人所申已以水火、尚可尋檢也、

〔三代實錄清三和〕貞觀元年七月十三日丙寅、從四位上行備前守藤原朝臣春津卒略○中嘉祥三年丁母

憂解職、未幾奪情起之、拜右兵衛督、

〔三代實錄清七和〕貞觀五年正月十一日甲戌、從四位上行中務大輔清原真人胤雄卒、胤雄者右大臣贈正二位夏野真人之第二子也略○中四年略○承和多十月父大臣冀、胤雄居喪哀毀過禮、十二月、詔奪情以

本官起之、

〔三代實錄清十五和〕貞觀十年二月十八日壬午、參議正四位下行右衛門督兼太皇太后宮大夫藤原朝臣良繩卒、良繩字朝台、左大臣內麻呂朝臣孫而正五位下備前守大津之子也略○中齊衡元年兼播磨介、

俄而拜春宮亮侍從內藏助播磨介、並如故、是年冬、父大津卒於任國、始聞、父病即欲奔赴、天皇略○中文不聽、及得審問、唯血氣絕、數廻乃蘇、去職不仕、詔奪情以本官起之、俄而兼左兵衛權佐略○中三年略○貞春、

遷左大辨、左近衛中將備前守並如故、母紀氏、寢疾瘦弱、良繩晝夜扶持、不捨左右、衣不解帶、目不接睫、終然丁憂、解去官職、哀號過禮、殆於毀滅、數月之後、以本官起之、

〔三代實錄清二十和〕貞觀十四年十一月十九日乙酉、從四位上行右近衛中將兼阿波守源朝臣與卒與

〔類聚名物考 凶事〕褻喪

奪情 起復

今江戸の制に、忌御免といふ是也。官人の喪有時に、その喪を勤るの志をうばひて、官に就しむる也。此事唐の時に始る也。

〔年年隨筆〕服は素服、鈍色に染たる布の衣なり。○中 假の日數だにたてば、服者といへども事にしたがひて、素服ながら内裏へも曹司廳へも參入せし事なり。中ごろよりは父母喪にも、除服を仰らるゝ事となりしかば、今においては公家さまといへども、服を着ながら出ありく事はなし、まして下ざまには、服きる事は跡たえて名の義をもしらざめり。結句は火の穢るゝ、日限と心うる人もいできにたり。これはさらに穢にはあらず、たとへば國をへだて、親の喪にあふ時は、服は一年なれども、穢は一日もなし。神事に服者をいむは、その哀戚に情のうつらん事をおそるゝ也。神事は志を精一にせむと構るものにて、佛像經卷をいむと同じ趣意なり、きたなき故にはあらず。輕服にては神事に從がへる例さへまれにはあるをや。

父母の喪に遭人は、本服一年、服中すべて事に從べきにあらざる故、官を解るゝ事也。これを喪解といふ。罪なくて、官を解るゝ事なる故、公さまにもその御心しらひありて、あるべき限は其官を虛して、服の期みちて後復任せらるゝ也。さて又奪情從公といふ制あり。官も樞要の官久しく虛くすべからず、人も器量たる人久しくこめ置がたき時は、相構へて出仕すべきよしを仰られて事に從ふなり。此制事に便あれば、誰もく此定になりて、服解の跡たえたるがごとし、名數のためには少し輕微ぬやうなれど、何事もしかのみなりゆく勢なれば、さていかゞはせむ。假五十日といふさだめは奪情從公の日限を、あらかじめ立たるがごとし。

〔玉海〕承安二年閏十二月十二日丙子、明法博士範貞來、依昨日召也。尋問事等。○中



高野黃門書札加之

別紙

追啓先年右大將除服出仕之節も、復任ともニ被申候様に覺申候保奉、只今方退出其上少々

所勞之間議奏迄可申達候也、

被仰下候趣承知仕候、只今迄者、除服復任共ニ職事及言上被仰出候昨日も源大納言迄相談候處、復任之義ハ被申上可然哉之由被申候故右之通ニ候、猶令相諒、彼是可申入候以上、

九月十八日

保春

十九日丁卯、早朝自高野黃門書札到來、即加之定而被遂先規款、但復任事猶彌可尋決之、已刻左中辦兼廉來、右府方除服并復任事宜下云々、右府令參內院了、

〔公卿補任仁事〕文化十五年

權大納言正二位源通明 八月十六日服解實、十月七日除服出仕復任、

〔本朝世紀〕康和元年八月十六日丙戌、此日從二位行權中納言兼治部卿藤原朝臣通俊、莫通俊者故散位從三位藤原朝臣經平卿二男、母故從四位下藤原朝臣家業女也、中應德元年六月廿三日任

參議、又轉右大辨、于時年卅八、中十二月二廿五日、兼越前權守、三年三月中遭母喪、不解官、中

五年七月四日、遭父喪、不解職、

〔令義解六制〕凡遭重服有事情從職、並終服不弔不賀謂不弔賀於吉凶也、不預宴謂雖是公會、亦不得預、

〔令集解二十八制〕朱云、遭重服謂父母喪也、五月以下不云、一云、此亦服內不可爲者、未古記云、事情從

職、謂高行異才之用灼然、要籍驅使之類也、穴云、聞於祖父母父母及承重者、或假內或假外、於服內何論、答、此文爲父母喪生文、其於祖父母喪假內亦放此、或云、此條爲在職事生文、下條爲徑被召同

人生文、或云、下條遭喪被起者條、事情從職者是、私思順之、在

〔延喜式十八式部〕凡官省判補雜色之輩、遭喪解任若有才用者、聽事情復任、

〔師守記〕貞治六年七月十三日戊子、今曉寅刻、入道修理大夫源高經法名道朝、從四下、他界年六十三、於越前國、他界云々、子息治部大輔義將、次男民部少輔氏種服解、

〔公卿補任〕正親町永祿二年

權中納言正三位源重保 四月三日服解、五月廿日除服出仕、

〔公卿補任〕東山元祿三年

權中納言從二位藤原基時 四月十日服解、母六月二日除服復任、

〔基熙公記〕元祿十五年九月十七日乙丑、高野前中納言○保來、數刻言談、于中右府家、除服之事、

可爲明日哉之由御内意云々、今日御德日也、明日明後日可被仰下歟、又云右府服解也、復任事可爲、何樣哉者、余云、忌中忌萬事、不能思案、然而復任事可申入之者、起座後有書狀云、除服事、爲明後日旨御内意云々、十八日丙寅、右府來復任事、除服同時可被仰下事之由存之、從下可申條如何之由申、尤有理屈歟、所詮招親人可有内談旨示了、又談合被治定者、密々可言上旨同示了、就此間有所思難記者、夕准程右府來云、右衛門督來間所談合、復任尤可有宣下歟之由申之云々、仍遣書狀於高野前黃門如此、

昨日承候復任事、從是可申入之旨申候き、今日右府とも令相談候處、除服之後、更用復任候條頗背理候様有之候歟、向後除服同時、可被仰復任事可叶道理歟之由相存候、所詮明日除服宣下同被下復在宜様ニ密々可有言上候哉、但猶能々被正先規候而被仰下候様にと存事候、昨日如申入、每事忘却、卒爾之體候間、被相察可有披露候以上、

追申、先年右大將父公事之時、宜不覺悟候、如何候つる哉と存事候、同可有御沙汰哉と存候也、

九月十八日

基熙

高野前中納言殿

賀守統理辛十二月口日復任七 內是明年依可得替被行者于遠州之任此春得替復任延引頗無其謂歟末代之事蓋以如此

〔公卿補任二〕應保二年

中納言正三位藤原實長 七月廿八日服解繼父九月十三日復任

權中納言正三位源定房 五月廿七日服解妻父九月十三日復任

權中納言從三位藤原俊通 正月卅日服解父五月十八日復任

〔公卿補任伏見〕永仁二年

權大納言正二位藤定教 二月卅日遭父喪四月廿八日復任

〔師守記〕貞治二年閏正月廿四日乙未今日前大納言正二位源朝臣通冬薨年四十九內損所勞於千本宿所被薨依所勞危急被叙從一位不任大臣無念云々子息右少將通氏從五下通清無下也等服解

〔師守記〕貞治四年五月廿九日丁亥殿下其基藤原仰

故大樹○足利氏康永二年大納言遂不及復任候歟其以來爲前官候哉御不審候可被注進候征夷

大將軍ハ何樣候哉由同內々被仰下候恐惶謹言

五月廿九日

大藏卿  
長綱

四位大外記殿

故大樹康永大納言不及復任哉事康永元年十二月廿三日服解去大納言不及復任爲前官於征夷大將軍者猶帶之候令得其御意給可有御披露候哉師茂誠恐謹言

五月廿九日

〔師守記〕貞治六年六月一日丙午今日洞院前內大臣從一位藤原實夏公薨去年五十三 中略子息前中納言公定卿服解

延曆十七年五月十一日

〔延喜式<sup>十八</sup>〕凡白丁緣才伎補諸司雜色遺喪解退者服闋復補不得輒聽留省更取白丁但預把笏者不用此例

〔續日本後紀<sup>十</sup>〕明承和八年二月乙卯式部省言式云諸國博士醫師解任之後各還本司令熟本業若望更任者聽之不勞覆試其被試及第既任遺喪者服闋之後復任滿歷但不經試者不在此限省依式文喪解之所不補他人服闋之後令遂其歷因茲教授醫療一年曠職謹案式云官省判補雜色之輩遺喪解任若有才用者聽奪情望請不待服闋特從復任者許之但其先得試復更任者亦同此例

〔三代實錄<sup>三</sup>〕貞觀元年七月廿一日甲戌存問兼領渤海客使直講茹田安雄復命奏言客徒今月六日解纜歸蕃大內記安倍清行去四月丁父憂去職故安雄獨歸奏事

〔三代實錄<sup>七</sup>〕貞觀五年正月廿五日戊子大納言正三位源朝臣弘美弘者嵯峨太上天皇之子也○  
二年○承遷刑部卿未幾遷治部卿信濃守如故九年七月遭太上天皇崩解職同拜參議九月復

本官治部卿

〔三代實錄<sup>十</sup>〕貞觀七年二月二日甲寅從四位上行伊豫守豐前王卒贈一品舍人親王後四世木工頭從五位上榮井王之子也○  
中齊衡二年爲左京權大夫大和守如故天安元年九月丁母憂解官服

闋之後二年十一月拜民部大輔

〔三代實錄<sup>二十</sup>〕貞觀十四年正月廿六日丁酉以正五位下行少內記大春日朝臣安守爲存問渤海客使以少內記普原朝臣道真丁母憂去職也

〔爲房卿記〕承曆三年五月九日丙子今日被行復任○  
此間先人永承口年十二月十七日依備州禪門

御事遺喪次年正月廿七日被復任○  
中宮大進又天喜五年十月十八日遭喪<sup>尼上御事</sup>十一月卅日被

復任○  
子時右衛門權佐等件等例皆七七內也去正月除目之次必可復任也子外史注漏仍于今連延也就中伊



論定率耳申官謂所在官司之申耳問若有人告者何答其人往告耳任居邊要者隨告任所申耳問任所言上待報之間釐務如何答還叙令待報之間大宰遣判事以上官權攝者則不理務灼然正云不解官言上爲非也

〔令義解〕四凡在官身死謂主典以上其任亦准此也及解免者謂此云解免後云解去即喪解病皆即言上

凡初位以上謂一品以上也長上官遷代略皆以六考爲限○中其考未滿而以理解○中略其以理解有七色致仕考滿

官省員宛侍還喪患解是也及考在中下以下者不在通限

〔令集解〕十三古記云左兵衛大荒木牛養爲所養父先解任復任後本生父母死仍請益葛井連男成答

贈左大臣藤原尊○房依令爲人後者不在兄弟之子不得出身然則以父代伯宜爲本生父五月服假

給耳依此答宜此府獨行例如此唯百官人等依律並解任也

〔類聚三代格〕七勅服解郡司理須復任不可停前人擬他人但被百姓訴及受財枉法如此之類不得復任其主政主帳身才衰劣意涉奸僞縱非被百姓訴及受財枉法不得復任

寶龜六年四月廿三日

勅諸國郡司主帳已上員外之職遺喪解任更莫復任自今以後永爲恒例權任亦同

天應二年三月十八日

〔日本紀略〕祖武延曆十六年六月庚午勅遺喪之徒復任以前出仕捕身奏聞

〔類聚三代格〕十二太政官符

應勘當匿服國司及容許者事

右被大納言從三位神王宣解重喪解職古今恒典若有隱匿即處嚴科此間或貪榮匿服遂待秩滿同僚阿容都無言上或沒故之狀預聞遠近國解運到不得解替此而可恕焉用法令自今以後莫令更然若致淹遲所由之人除行程之外計日科罪

又元の官になるを復任と云、これは服解に限らず、子細ありて一旦官を去て、又元の官になるをばすべて復任と云、

〔令義解九〕

假九

凡官人、遠任及公使、父母喪應解官、無人告者、聽家人經所在官司陳牒告追、謂官司得喪

使移告、若無便使者、亦差專使報告、其告追之間、已經若奉勅出使、謂奉勅在名及令及任居邊要

周美而聞喪之禮、以聞爲始、即解官終服並皆如法也、

〔令集解假四〕

假四

朱云、史生等亦可准此文、何者於父母皆同可解任故者、謂云、此條遠任者不見其限、猶

家人告遣、无由耳者、略中朱云、此文應解官者、則知釋父母喪者、養父母不入者、略中釋云、經所在官

司陳牒告追、官受家書遣送報告耳、古記云、經所在官司告、謂川內人任筑紫國、申川內國司、即國付

便使告遣、不得差專使也、跡云、若有人服闋後聞喪者、猶解官耳、朱云、略中古記云、若奉勅出使、

謂詔勅定名并令所司差發、是太政官以下遣使奉勅依奉使者、非也、跡云、奉勅使任邊要人等、自親

知喪者、申官令聞裁、不合急政事、但須臾之間、在所在館舉哀耳、餘使及祖父母以下、依法給舉哀假

而舉哀耳、略中釋云、邊要、謂居邊爲要耳、假如晝岐對馬之類、見捕亡律、史生亦同、但郡司不同、

何者、國司隨關即擬補故、古記云、及任居邊要、謂伊伎對馬陸奥出羽是、今行事主典已上不解官、一

云、史生已上皆不解官、跡云、任謂郡司史生等不在此例、但對馬國人任其國守、遭父母喪者、不解官

而申官耳、穴云、任居邊要、謂國司也、於郡司爲差代任意故、不申上耳、又文稱官人、故史生亦不申上、

略中跡云、申官、謂家中所司、所司申官、朱云、願不朱云、若奉勅出使、及任居邊要者、申官處分者、任所

官司所申耳、元承告所在官司、不可申官者、未明、而者還叙令、與在官身死及解免、皆則言上、條細可

計會何私案、而者依還叙令心、省判補不申官、直可申省、但依此令、雖省判補、任居邊要者、猶申官耳

歟、此以此文與還叙令爲別耳、歟何、凡此文申官者、所在官司申官歟、爲當任官司申官歟、此兩說何

長何、問申官處分者、雖奉勅使、尙任文官處分耳、歟何、穴云、處分、謂代不論定處分、但爲奉勅之使、官

以十三月爲限、然五月以下服、計日合給也。養父母謂若遺本生父母喪者、合解官也。朱云、於父母者、雖番上人可解官、但於祖父母以下者、可給本服、不依此條者、未明、或云、物云、皆依此條、可給假者、未知何、類不明決、凡於親服、僧尼无別者、類不同、而私不知何、又三后皇太子、可服本服者、類云、嫡孫承祖與父母同者、未明、亦違二卷私記何、穴云、稱官先言職事、番上亦同解官及給假也、一云、但於祖父母等、給服之說、无難、承前博士因此勘耳、其不解官者、依律職事官徒一年、雜任不解從杖罪、云、張兩耳、古記云、喪爲父母並解官、自餘皆給假、謂長上分番並同、何者、詐僞云、凡父母死、應解官、詐言餘喪、不解者、徒二年、若詐稱祖父母、父母夫死以求假、及有所避者、徒二年半、開元令云、諸哀斬衰三年、齊衰三年、齊衰杖非爲人後者、爲其父母並解官、動官、申其心喪、又條云、諸軍校尉以下衛士防人以上及親勳翊衛備身假給一百日、父卒母嫁及出妻之子、爲父後者、雖不服亦中心喪、其繼母改嫁及父爲長子、夫爲妻、並不解官、假同齊衰、其所養所生者、喪葬令服紀條、具說訖也、但帳內責人、還上本土也、其郡司亦同職事、唯復任耳、若公使遭父母喪、經九月以上、餘喪日不至解官之限、欲仕者、聽之、或欲追服者、亦聽之、

〔假事令講義〕公式令に依に、内外諸司有執掌者爲職事官、無執掌者爲散官とあれば、大臣以下主典以上、皆執掌あるものと云べし、續日本紀に、養老四年八月癸未、三日右大臣正二位藤原朝臣不比等薨す、この時に長男武智麻呂正四位下、次男房前從四位上、三男馬養正五位上、四男麻呂從五位下にして、長子武智麻呂は式部卿、次男房前は參議、三男馬養は常陸の國司たりしが、五年正月壬子、五日武智麻呂は從五位して中納言となり、房前は從三位、馬養正四位上、麻呂從四位下を授けられたり、父薨じて後百五十日なり、但其間に武智麻呂は式部卿を解官し、房前は參議を解官ありしなるべし、

〔貞丈雜記十卷〕忌服と云事、中略官位ある人は、服の内は解官とて、官を去るを服解と云、服終て

重之。嫡子之服忌受候事。可有之候哉。其者。對候事故難及。御挨拶候。

〔律疏名例〕凡犯死罪。非入唐。而祖父母。父母。老疾。應侍家。無二等親。成丁者。上請。○疏。犯流者。權留養親。

謂非會。故猶流者。○疏。不在赦例。仍准同乎流人。未上道。限內會赦者。從赦。○疏。課調依舊。○疏。若家

有進丁。及親終三月者。即從流計程會赦者。依常例。○本。家無成丁。故許留侍。若家有二等親。進丁。及親

例。即至配所。應待合居作者。亦聽親終三月。然後居作。○疏。人至配所。親老疾。應侍者。並依侍法。合居作者。

留養親。中間各犯死罪。以下者。依下文。○下。略。

〔令義解十〕凡流移囚。○中。若祖父母。父母。喪者。給假十日。○明。從。流移人在路。喪亡者。即夫喪。家口有死者。

三日。家人奴婢者。一日。

凡流移人。未達前所。而祖父母。父母。在鄉。喪者。當處給假三日。發哀。其徒流在役。而父母。喪者。○明。在鄉。喪

亦同。此法。給假五十日。舉哀。○疏。依律。流移人至配所。祖父母。父母。老疾。應侍。合居作者。聽親終三月。然後

也。祖父母。喪。亦同。二等親。七日。並不給程。○明。從。流移人至配所。其父母。喪。亦不給程。○疏。依律。流移人至配所。其父母。喪。亦不給程。

凡犯死罪。在禁。非惡逆。以上。遭父母。喪。婦人。夫。喪。及祖父母。喪。承重者。○明。依。假。事。令。美。父母。與。祖。父母。同。

皆給假七日。發哀。流徒罪。廿日。○明。其在役。在禁。輕重不同。故上條給五十日。此條唯給廿日。○疏。上條。流徒。罪。其

亦與。僮尼。在。禁。遭。喪者。悉不給程。

〔令義解九〕凡職事官。遭父母。喪。並解官。○註。自餘。前。非。重。皆給假。

〔令集解假十〕釋云。職事官。遭父母。喪。並解官。舉職事。此重。明。番。上。此輕。解官。無疑。或說。番官。不解者。非

何者。還叙。令云。職事官。患經。百廿日。及緣親病。假滿。二百日者。解官。其番官者。本司判解者。即知緣親

病。假滿。二百日。解官。還喪。豈不解乎。但唐令。諸軍校尉。以下。衛士。防人。以上。及親。勳。衛。備身。給假。不

解官。師說云。其郡司。亦同。職事。准復任耳。跡云。番。上。人。遭。父。母。喪者。合解官。何者。依。親病。假滿。二百日。

時者。解官。令。還喪。而居。三百六十日。豈不可解哉。但祖父母。以下。依。文。給。五。月。三。月。之。類。耳。凡。父。母。喪。



〔服忌令撰註分釋〕<sup>天</sup>寶曆九卯年閏七月十一日、神保新五左衛門方より服忌聞合書付以下ケ札及、  
挨拶候覺、

養子被仰付未養父家督相續無之内養父御咎之儀有之、遠島又は追放改易等被仰付其家斷絶之  
節養父たる者家督相續爲被仕之養子ニ付家督相續は無之候共、一旦養子被仰付候事故、其家斷  
絶候共、右養父相果候節、忌五十日服十三月受可申哉、左候は、養方親類相互ニ定式之服忌受可  
申事と存候、

但家督等相續無之事故、忌三十日服五十日ニ而御座候哉、左候は、服忌令初メ之ケ條之、遺  
跡相續せず分地配當せざる養子之忌服と、相心得可申候哉、

附遠島追放改易被仰付候節、養子たるもの、養父養育のため、奉願附添ひ罷在候而も、服忌差  
別無御座候儀と奉存候、

<sup>下ケ札</sup>書面之通は、家督相續之養子ニ相順、順之通被仰付未右養子部屋住ニ而罷在候内、養父御咎之  
儀有之、遠島又は追放改易被仰付養父御咎ニ付、養子たるものも相應御咎有之、其家斷絶之時  
は忌五十日服十三月服忌ニ而候、左候得ば養方親類相互ニ定式之服忌ニ而候、

但御咎之筋ニより、養子たるもの實方へ相越候事も相成筋之事ニ候得ば、服忌意味違候事  
ニ候、左候得ば其者之御咎之輕重ニ寄候而之事ニ候得共、其者ニ對候事ニ候間、此段は難及、  
御挨拶候、

養子被仰付未家督相續無之以前、右養子御咎之儀有之、遠島又は追放改易被仰付候而右養子相  
果候節、嫡子之忌服受可申哉、是又先條之通、同様之儀と奉存候、

<sup>下ケ札</sup>書面之通は、服忌令ニ家督と不相定時は、末子の服忌可受と有之候得共、養子たるもの家督以  
前御咎遠島又は追放改易等被仰付候得ば、家督は無之事ニ候、併は以前書附札之通、御咎之輕

〔貫之集九傷〕延長八年九月日、京極中納言の諒闇のあひだに、○此年九月二は、のふくになりて、  
ひとへだにきるはわびしき藤衣かさぬる秋をおもひやらなん

とよみて、土佐國にあるあひだに送られたりし返し、

藤衣かさぬる思ひおもひやる心はけふもやすまざりけり

軍人過喪

〔令義解五〕凡衛士○中其上番年雖有重服謂父母不在下限下番日令終服謂凡衛士雖有重服不在下限心喪從公猶事

情從親者而稱下番日令終服者是欲免年之捨役非言更行居喪之禮即諸作樂

繪聖之類皆以正服年論下番日者非其防人遭喪准衛士但火頭者非在此例也

〔令義解五〕凡征行大將以下有遭父母喪者皆待征還然後告發謂大將以下者戰士以上也征還者

刀及戰士以上將行官物返納本司之後然乃告喪故令其

學生過喪

〔令義解三〕凡學生○中每年終○註大學頭助國司藝業優長者試之○中頻三下謂三年及在學九年

不堪貢舉者並解退其從國內大學者年數通計服闋重任者不在計限謂闋者終也言服終重任者

凡學生年廿五以下遭喪服闋求還入學者聽之謂在學未滿九年者也

爲親者服

〔令集解四〕古記云問雖犯罪被戮猶爲服以不答亦爲服无妨之文也

〔杜氏通典百一〕罪惡絕服議

周制公族有死罪則啓於甸人○註公三宥之有司不對走出致刑於甸人公又使人追之曰雖然必

赦之有司對曰無及也反命於公○註公素服不舉爲之變如其倫之喪無服○註親哭之

〔喪服議例抄〕雜事

親類之内罪科ニ相成候共服忌無差別實方之兄遠島に相成後養子ニ罷越其以後右養兄死罪ニ  
相成候時養兄定式之服忌請之

礎獄門斬罪死罪切腹右之仕置ニ相成候親類は父子并祖父母伯叔父姑兄弟姉妹忌掛り候親類  
定式之服忌請之

給也者、明法博士道成申云、更重不可令服給、只及明年九月可令服給也者、

此外尋世俗例、故左兵衛督公信卿子息等所爲、先遭父喪之後、又遭母喪之日、重服云々、右兵衛督朝任卿子息等所爲、如法家云々、仰依法家說、可被行歟、

保元二年九月、德大寺左府○藤原實能、崇同三年八月、室家又薨、大炊御門右府○實能、不除本服云々、就

此等說、件女子不改服、可及明年二月也、

〔増鏡三〕おなじころ○天福元年四月、中宮○後堀河后も位さり給て、さうへき門院とぞきこゆなる。○中略

略 九月十八日にかくれさせ給ぬ。○中略この御なげきに、いよく院○後堀河は、しづみまさらせ給て、

略 ○中略八月○文暦元年六日いとあさましようならせ給ぬ。○中略こ宮○子堀河の御はてだにすぎず、又とりか

さねて、りやうあんの三とせまでにならんことをいどまがくしくゆ、しとみな人おもふべし。

〔吉田家日次記〕應安四年七月十九日己巳、兼遠宿禰女性之舅、十日他界之由、自若州告之、去六月祖

母父方、他界、輕服日數中也、到十月、是者卅日、可到來月、可有輕服之段、先規勿論、然而猶稱不定、兼遠

相尊章世、重無有輕服之由、返答云々、

建長六年正月十六日、縫殿大副記云、母堂御傍親二人叔父去年十二月十五日、舍兄去年十二月十三日、死去之由、同時告申之、

而御除服兩度、可爲各別哉之由、入道殿被尋申、前民部卿返事云、如此之時、就重除服餘事不及別、

除服沙汰不可有兩度之儀、候歟爲房卿昔有如此事、引先例、如此所爲之由見候也、恐老高先年如

此事候キ、定事云々、

〔季連宿禰記〕元祿十一年十月廿六日丁卯、妻之外祖父、去八月廿三日、於讃州高松死今年百歲云々、又妻之

弟今年十七歲、去年九月十六日、於攝州大坂乘小船、不慮墜身於河中、橫死之由、今日便風到來、共以假以後也、家妻

服相重、不便不便、

歟謹言

三月廿四日

晴光

於遠所聞喪之人二親之外至于傍親者假者自開始之日半減於服者自死日可計之候然者平大納言殿○時去月十七日令苑給云々奉爲外孫君達也外祖父母四等親假服三月廿日自聞食始之日御假十日可候至于御服者自去月十七日經九十日御除服可候歟但自八歲之時可爲服親之故於七歲之人者不可有御服并御假候兼又平大納言殿他腹姬御前去年九月奉爲母御前遭喪未過一周以前奉爲彼大納言殿相重可令着御服者重喪指合之時忘前喪初着後喪之服經十三月先例也然者平大納言殿御事自聞食之日迄于明年聞食之日可着喪服等給候經泰恐謹言

三月十三日

左衛門大志三善經泰

勘申重服重疊例事

右件事去長元九年中宮之一宮着先皇之御服不經幾程同年九月比令着中宮御服間被問先例之則大外記賴隆依禮文脫先皇御服新可令着此御服給之由雖勘申明法博士令宗道成脫舊着新之文依不見本朝之法只不別先後之御服至明年九月可令除服給之由依勘申即就道成之勘狀被行候了仍大概勘申

文治五年三月廿四日

修理左宮城主典右衛門大志三善經泰

長元九年四月十七日後一條院崩

同年九月六日皇后威子崩

長元九年九月十九日經類曰

宮宮御服事

御先例如何申云明經博士賴隆申云明年四月先令脫故院御服之後次令着宮御服及九月可令脫



覺○中 遂以入滅、九月四日癸未、或云關白并舍弟卿相着院御息所○小一轉此年七月、服亦尙侍服重着、未除、初帶又重着帶未聞事也云々、五日甲申、宰相來云、宮宮關白重着服帶、萬人驚奇、大外記賴隆云、見經家書重着極奇、惟也、廿二日辛丑、昨宮宮重着尙侍服給云々、關白先着院御息所服、未除又着此服、又改此例所着給云々、

榮花物語三十 九月○萬壽よりは、殿ばら○藤原みな皇太后宮○三條后藤原の御うすにはひ

にておはしまし、みやづかさなどこまやかなりつるに、くろつるばみにならせ給ふ○此年十二月、  
〔台記〕久壽二年十二月廿四日丁酉、皇后宮○近衛后藤原須着高陽院○鳥羽后藤原御服三月而重服之人有輕服時、有假無服、故不着之、陸長○輕亦同、

〔滋草拾遺 服假以下葬儀〕重服間輕服出來時重不可着事

公事間答、安元二十五、經房卿記云、外祖帥卿○後忠息、價當時凡卑者也、去比逝去云々、雖非人、非可

無服假而女院○後白河后建春門院平素服、未除之間、依不審先尋明法博士章貞之處、他行云々、仍

尋基廣其返狀云、

被仰云、建春門院素服、未令除服之間、私輕服出來可除哉否、可令勘申者、檢喪葬令云、服紀者、爲君一年、說者縱居重喪間、遭輕親喪者、即不可更着、若居輕服間、遭重喪者、須着服滿其服者、

據此等文、居重喪之間、遭輕親喪之時、更不着其服、爰令賜女院素服給、既可准重喪間遭輕親喪之時者也、然則其間、私輕親服雖出來、更非可令着用給、仍言上如件、

十月十五日

明法博士中原基廣

〔假服事〕文治五年三月廿五日、女房爲嚴親亞相修佛事、今夕着服同父異母女子同宿、件人母、去年九月逝去、周忌之内、有此事、仍相尋主稅助安倍晴光道志、經康等、脫本服着新服、三人○服令喪母、遺父之喪也不行解除、只着之也、新服日數滿了之時、一度各除之、當道如此所習傳也、委細可被問明法候

〔御當家令條 三十六〕服忌令

一重る服の事

父の服いまだ不明内、又母の服有之ば、二年服を不可受、父の服二三月過て後、母の服有之ば、母の死去の月より十三月可忌服、重き服の内に、輕き親類の服有之ば、服を改に不及假は五十日の重き服の日數四十日過て廿日の輕き服有之節は、重き服の日數過て後、右の輕き服を着す、廿日の日數は、重き服の内よりかぞふべし、輕き服の内に、重き服有之ば、其間付る日より服を改、其日數可忌。

貞享元子三月朔日

〔禮記註疏

四十二

〕有父之喪、如未沒喪而母死、其除父之喪也、服其除服、卒事反喪服、註、沒喪、竟也、除

服謂祥祭之服也、卒事既祭反喪服、服後死者之服、雖諸父昆弟之喪、如當父母之喪、其除諸父昆弟

之喪也、皆服其除喪之服、卒事反喪服、註、雖有親之大喪、雖爲輕服者、斷骨肉之屬也、唯若之喪、不除

私服、言當者、期大功之喪、或終始皆在三年之中、小功麻則不除、麻長中乃除、○中如三年之喪、則

既顯其練祥皆行、註、言今之喪、既顯顯、乃爲前三年者、變除而練祥祭也、此主謂先有父母之服、今又

喪是子者、其先有是子之服、今又喪父母、其禮亦然、然則言未沒喪者、已練祥矣、顯其名、無寓之嫌、去

麻則用、○中王父死未練祥、而孫又死、猶是附於王父也、註、去練祥、未禭祭、序於昭穆、謂王父既

附、則孫可附焉、猶當爲由、由用也、附當當作、○

〔源氏物語

四十五

〕むなしうなり給ひし木、さわぎに母にはべりし人は、やがてやみつきて、程も

へずかくれ侍りにしかば、いこゝ思給へしづみ、藤ごろも立かさね、かなしき事を思ひ給へしは

どに、○下

〔小右記〕萬壽二年八月五日甲寅、乘燭間、闌白、○藤原

禮隨身府生保重馳來云、尙侍、○藤原、後藤、子、不

知遵行、

〔日本紀略<sup>二</sup>〕承平元年七月十九日甲辰戌時宇多院太上法皇崩於仁和寺御室、廿五日庚戌、依

法皇遺制止諸司諸國舉哀素服、

〔日本書紀<sup>十</sup>〕大鸕鷀尊<sup>○仁</sup>聞太子<sup>○寬</sup>薨以驚之、從難波馳之到苑道宮<sup>○中</sup>、於是大鸕鷀尊<sup>仁</sup>

素服爲之發哀哭之甚慟、仍葬於苑道山上、

〔日本書紀<sup>二十五</sup>〕大化五年三月辛酉阿倍大臣<sup>○倉</sup>薨、天皇幸朱雀門舉哀而慟、皇祖母尊<sup>○齊</sup>皇

太子等及諸公卿悉隨哀哭、

〔令集解<sup>四</sup>〕古記云、問頻累者何服也、答從值後喪日始計年也、

〔北山抄<sup>四</sup>〕拾遺雜地、請假事

有二假時、依重請之、至輕此內可滿服、又如此云、

〔小野宮年中行事〕雜續事

喪葬令云、服紀者、叔父三月、舅一月、脫者云、問縱遺服喪未服、問重遺母喪何服、答重遺父母之喪、更

二年不可服、縱父喪經二三月之後、又遺母喪、隨母計耳、

又云、居重喪間、道輕親喪者不可更着<sup>若在服未還者</sup>、若居輕服間、遺重喪者、須與若服滿其限、

案之法令之意、舉重明輕、傍親之服若是重疊、更不着服、依後滿限耳、假令外舅先薨、則一月、叔父後

薨、服已三月、其喪在同時、依一滿兩限耳、<sup>○中</sup>

長德四年七月廿七日

左衛門權佐惟宗允亮

〔法曹至要抄<sup>下</sup>〕服假相累時事

案之重服之者、重遺重服、從後日可着之兩方不可着、若遺輕喪計日矣、爲重服限內者不可着、及于  
限外者、餘月更着輕服可滿也、又輕服相累、准而可知矣、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申左中辨經輔朝臣奉關白仰參左衛門陣外令大外記賴隆真人申云後一條院遺詔僞任葬實素服舉哀國忌山陵等類悉可被停止者即以此旨申右衛門督督令藏人頭左中將良賴朝臣奏於伏應令御報云令聞食憫給云々略○中次召賴隆仰云略○中可停國忌山陵素服舉哀等之由可仰下者召仰定親朝臣云々

〔續日本紀文武〕大寶二年十二月甲寅太上天皇統崩遺詔勿素服舉哀內外文武官釐務如常喪葬之事務從儉約

〔續日本紀聖武〕天平二十年四月庚申太上天皇正崩於寢殿辛酉勅令左右京四畿內及七道諸國舉哀三日

〔續日本紀孝德〕天平勝寶二年十月癸酉太上天皇正改葬於奈保山陵天下素服舉哀

〔續日本紀孝德〕天平勝寶八歲五月乙卯是日太上天皇武崩於寢殿己未文武百官始素服於內院南門外朝夕舉哀

〔續日本紀桓武〕天應元年十二月丁未太上天皇仁崩略○中詔曰略○中從今月二十五日始諸國郡

司於廳前舉哀三日若遠道之處者以符到日爲始施行禮日三度初日再拜兩段但神郡者不在此限

〔續日本後紀仁明〕承和七年五月癸未後太上天皇和崩于淳和院略○中令五畿內七道諸國始自九日未四刻國郡官司着素服於廳前舉哀三日每日三度甲申近習臣權中納言藤原朝臣良房等以下於殿下舉哀右大臣藤原朝臣三守準公卿百官及刀禰等於會昌門前庭舉哀三日每日三度

〔續日本後紀仁明〕承和九年七月丁未太上天皇略○中崩于嵯峨院略○中准據遺詔仰百官及五畿內七道諸國司停舉哀素服之禮

〔三代實錄三十八〕元慶四年十二月四日癸未是日申二刻太上天皇和崩於圓覺寺略○中遺詔略○中使百官及諸國不舉哀停素服五日甲申是日頒告內外曰太上天皇崩有遺詔停素服舉哀之禮宜



適殯宮而慟哭。辛酉，梵衆發哀於殯宮。壬午，以天皇崩，率宜新羅金霜林等、金霜林等乃三發哭。

八月丙申，薨于殯宮而慟哭焉。十一月戊午，皇太子率公卿百寮人等與諸蕃賓客適殯宮而慟哭焉。

〔續日本紀三十三〕慶雲四年六月辛巳，天皇崩，遺詔舉哀三日。

〔續日本紀三十三〕實龜元年八月癸巳，天皇崩于西宮，癸卯，乙未，天下舉哀，服限一年。

〔日本後紀十三〕延暦二十五年三月辛巳，天皇武崩於正寢，皇太子武哀號踴躍，迷而不起。甲申，

有司言上生年及重復日，並依故事停舉哀，不許。

〔類聚國史三十五〕大同元年十月辛酉，令天下諸國，以今月十一日素服舉哀，改葬皇統，彌照天皇武。

也。庚午，改葬皇統，彌照天皇於柏原陵。天皇城平御前殿東廂下，群臣於前庭舉哀，奉宮官屬於坊內。

並朝夕二時，文武百官素服一日，各在所職，不就哭位。

〔文德實錄〕嘉祥三年三月己亥，仁明皇帝崩於清涼殿。庚子，命京畿七道舉哀，成禮限以三日。○中

式部省率百寮於紫宸殿前舉哀，公卿及侍臣以下於東宮舉哀。

〔三代實錄清和一〕天安二年八月廿七日乙卯，文德天皇崩於冷然院親成殿。九月四日壬戌，命五畿七

道始著素服，舉哀成禮，舉哀之禮，每日三度，限以三日。式部省率百官於冷然院南路頭舉哀，公卿及侍

臣已下於東宮。○中其違所者以詔到日爲期。

〔日本紀略宇多〕仁和三年八月廿六日丁卯，今日已二刻，光孝天皇晏駕于仁壽殿。廿九日庚午，令五

畿七道舉哀三日。

〔日本紀略村上天〕康保四年五月廿五日癸丑，已刻，天皇崩于清涼殿。廿七日乙卯，仰諸國止素服舉哀，

但可有心喪者。

〔日本紀略冷光〕康保四年六月二日，己未，停止素服舉哀，宴飲，作樂，美服，承知官符，下左右京，五畿七道

諸國，合十八通也。



二月九日

廣橋一位殿

六條前大納言殿

〔大江俊昌公用侍中往來記〕嘉永六年三月八日

右大臣殿姫君、紀伊故大納言殿御室親如院御方、去月廿四日御逝去之旨、今日告來候、依之來八日迄、半減五日御假、來廿四日迄三十日御着服被成候、大納言殿姉君、紀伊故大納言殿御室親如院御方、去月廿四日御逝去之旨、今日告來候、依之來十四日迄、殘十一日御假、五月二十四日迄九十日御着服被成候、仍而爲御知、被仰入候、此段御門流御一同江御通達之儀、賴仰御座候、以上、

三月

御使

仙石大炊

華衣

〔儀式〕舉哀儀

國有不諱、諸司着凶服、式部錄率史生省掌等入朝集院立標、訖彈正就應天門內左右廊座、所用設座、並在地、上、巡席在四東上、並北、面、史生省掌等在其後、次式部亦相分就同座、並檢按凶儀、訖共起而出、式部率四位以下刀禰、左右列立朝集堂前、北、面、東上、彈、正、在、式部、下、訖參議以上列立定共再拜、不、拜、後日居而舉哀三段、段別三聲、訖依次退出、日別三節、至於歛葬之夕、乃罷、

〔令義解〕

九、凡聞喪舉哀、其假減半、謂假有官人、祖父母喪、本假廿日、若在、

凡給喪假、以喪日爲始、謂喪日、舉哀者、以聞喪爲始、凡給喪假、以聞喪爲始、不可追計、

凡外官及使人、謂勅使、官、使、皆是也、聞喪者、聽所在館舍安置、謂假日之內、仍得居館舍、但使事速、不得於國郡廳、

內舉哀、

〔律疏〕凡聞父母若夫之喪、雖不舉哀者、徒二年、喪制未終、釋服從吉、若忘哀作樂、自作遺人等、徒一年、半、雜處杖八十、卽遇樂而聽、及參預吉席者、各杖六十、謂父母之喪、晨天、莫、親、茶、罷、之、極、登、若、聞、喪、婦、年、半、雜、處、杖、八十、卽、遇、樂、而、聽、及、參、預、吉、席、者、各、杖、六十、人、以、夫、爲、天、真、婦、父、母、聞、喪、卽、須、哭、泣、豈、得、擲、

〔台記〕久安四年六月十六日壬寅早明除服是從父兄弟臣叔家隆朝死于遠所昨日聞之其假半減仍假唯昨今二日於服者過了云々依非其人臣子儒不獻假文、

〔吉記〕承安元年二月廿七日□□□□親外姨死去之由隔四ヶ年聞之相尋明法博士章貞廷尉重成等處姨服一月假十日半減服以聞爲始了滿日數者、

〔吉田家日次記〕應安四年九月廿五日乙亥自尊黨被告示云予○兼姨去年九月於備前國他界云々仍假半減五ヶ日也、

〔基量卿記〕元祿十五年十二月一日入夜神齋家婦有輕服田會伯父佐竹主計於假者途中日數過了中院大納言○通又如此母方伯父也假之事自聞付日半減十日着服歟至來八日令着服之由風聞也依之高

倉相公滋野井中將談伯○白川昨日俄申除服云々遠所服之義日數過後於聞所者不及沙汰歟然

ども伯被申如此之間俄申除服由也議奏右大將川○今出又如此云々○中中院半減服之義猶可尋聞事也、

〔丹波賴庸記〕寶永五年八月十一日未刻自因州飛脚到來被告母公八日寅半刻御逝去之旨至七日之晚景御景色御快如平生八句多羅尼御口福無斷絕及寅半刻御氣絕云々愁傷無極設佛壇供香華假之日數着服之事家所窺○近衛下○近衛之氣色聞不吉之後以極薦可尋吉田白河兩家之內被命之依所示極薦入夜來臨談話十二日自極薦被遣書假服之事所問神祇伯自聞付日可爲假五十日着服十三月云々、

〔大江俊矩記〕文化十年二月九日丁未假服眉書差出如左○中

傳奏月番廣御家へ差出杉原  
傳奏四折美濃紙上包無表裏

遠方ニ罷在候異去六日死去候旨告來候依之至來十五日假至來月六日三十日着服候仍爲御届如是御座候也、



答此條の例なり、假の日數卅日は殘らず過たれば、聞つけたる日より半減十五日なり、服はもとより百五十日なり、死日よりかぞへて、百五十日、目にきよまるべし、

假も服もすぎて後に聞く事

假も服もをはりて後に喪をきくとは、日數半分を減じて、卅日なれば十五日、廿日なれば十日、十日なれば五日、三日なれば二日の假をうくる也、此時は服なし、

或問云、異父の弟、遠方にて没したるを、年を経て後聞たり、半減の假をうくべし、それにつきて疑惑あり、服卅日假十日なり、服の半減をうくべき歟、假の半減をうくべき歟いか、

答遠境にありて死亡をしらず、服假の日限すぎて告を得たる者は、假は半を減じ服なしと、文保服忌令にみえたり、假十日の半減五日をうくべし、服の半減といふことは、かつてなき事なり、

七歳未満の時、遠方において親族死したるを、八歳にいたりてきく者の事

いまだ七歳に滿ざる時、遠方において親族の死したるを、八歳にいたりて告を得たる者は、服假をうくべきよし、文保服忌令無服瘍條の註にみえたり、

〔榮花物語五の別〕

神無月のはつかあまりのほどに、二年長、京には北方貴子、伊周原道隆、家母高階、うせ

給ひぬ略、但馬配所隆家には夜を晝にて人まゐりたれば、泣々御ぞなどそめさせ給ふ、筑紫周配所

所にも人まゐりしかど、いかでかは、ごみにまゐり着くべきにもあらず略、中つくしのはい、ま十

餘日といふにぞ参りつきたりける、哀れさればよ、よくこそ見え奉りにければ、今ぞ思されける、

おんおくなど奉るとて、

其をりにきてましものを、藤衣やがてそれこそわかれなりけれ

とぞ獨ごち給ひける

〔服假類聚〕<sup>三</sup>遠所にありて親族の喪を聞く事

遠方にありて、親族の喪をきくに、假の日數の半より以前に聞くこと、假の日數の半より以後に聞くこと、假の日數過後服の間に聞くこと、假も服もをはりて後に聞くこと、四つの差別ありて、よく心得ざれば、紛らはしき事あり、下に辨すべし。

假の日數の半より以前にきく事

假の日數の半より以前に聞くことは、たとへば朔日に親族死す、この假卅日なり、半とは假の日數の半分をいひて十五日目なり、遠所を隔てたる者、十五日以前に右の喪を聞く時は、常のごとくその死日<sup>期</sup>より日數を算計して、卅日<sup>期</sup>の算計<sup>也</sup>まで假をうくるをいふ、

假の日數の半より以後に聞く事

假の日數の半より以後に聞くことは、右の喪を十六日目より以後に聞く時は、其間たる日より半減十五日の假をうくる故に、定まりの日限<sup>也</sup>日をこえて、來月までに及ぶなり、たとへば十七日に聞く者は來月朔日、十八日に聞く者は來月二日、廿日に聞く者は來月四日、廿八日に聞く者は來月十二日を以て、假の限とするをいふ。<sup>○中</sup>

假の日數過後服の間にきく事

假の日數過後服の間にきくことは、たとへば祖父母死す、此服百五十日假三十日なり、然るを百日たちて後に聞く時は、假はすでに過ぎて、服の日數五十日残りたり、此時は假は半減十五日をうけ、服は常のごとく死日より百五十日目にきよまる也、法曹至要抄にも假は半を減ずといふ文あれども、服においては、常のごとく死日より日數をかぞふるよし載せたり、

或問云、遠方において、去年十二月十日祖父死したるを、五十日過ぎて今年二月朔日に聞たる者あり、假卅日の日數はすぎたれども、いまだ服五十日のうち也、此服假如何、

明彙云、二親於遠所亡沒之時、雖經年序、以有告爲始、可昇年服舉哀、聞喪爲始之由、見本條云云。（中略）貞和  
四年間、去年五月十七日、遭母喪、親在邊鄙之間、不知此事之處、五旬中、廿箇日許、六月三日告來、仍  
聞喪已後、更五十日、禁忌、飢居之、答遺父母之喪、人經廿餘日之後、雖告來、其服假以聞日爲始、然者、仍  
開始日六月三日十三箇月服之條、勿論、仍言上如件、大列事、坂上明成、如令條者、給與假、以喪日爲始、  
事宜、以聞喪爲始云云、然者、自去年六月三日、今年六月中、可爲一、兩之期、爲主計、勸兼左衛門大尉、紀  
伊備介中原朝臣、幸有、

〔御當家令條 三十六〕服忌令

一聞忌の事

遠國において死去、年月をへて告來時は、父母は聞付る日より忌五十日、服十三日、其内閏月を  
かぞへず、縦ば今年の二月死すれば、來月の二月中は忌服也、外の親類は、忌の内に告來ば、其殘  
る日數忌べし、服忌の日數過て告來時は、無服にして半減の忌を可受、

貞享元子三月朔日

〔天保集成絲綸錄 七十九〕文政元 實年八月

在邑之面々、忌服請方、主人承知之上、聞忌一日遠慮、又者殘日數受候旨、御届可申筈之處、當地ニ而  
家來承知之日を一日遠慮致し候旨、相届、或は忌日數日相立候得者、服日數相殘候共、忌服之日數  
書付不差出向も有之候、右聞忌之儀者、主人承知之日を遠慮可致儀ニ、而且服日數殘候は、忌服  
之書付も可差出舉ニ候間、以來在邑之面々、於當地家來より先届申聞候節、右之通相心得追而主  
人承知之上、遠慮之日限等、猶又相届候様可被致候、右者青山下野守殿、江伺之上、此段申達候、以上、

八月

曲淵甲斐守

牧助左衛門

内藤華人正

花村忠兵衛

也減半給十五日之類也餘者可准于此又有所乘日入假限謂假有本假三日減半以所乘一日入假限給二日之類也但至于假日雖立減半之文至于服限猶可計死日之後仍祖父死去服五月也而過百日聞之者給五十日服之類也以下無異且見穴記矣過百五十日聞之者不可有其服

〔玉海〕永安二年閏十二月十二日丙子明法博士範貞來依昨日召也尋問事等○中

一假令服親死去之後經日月聞付之自聞初之日可有服限歟或半減云々如何

申云於重服者無其假服之差別仍自聞付之日全可滿本服之日數於輕服者假日數半減之假令分假十五日十日之假五日也至于服日數者不可半減只自死日計之自聞付不計之

〔玉海〕文治二年閏七月廿五日庚午明法博士範貞問云父母在遠國之人即不聞其死亡經數月之後聞之其着服日數如何申云輕服半減重服聞爲始全可滿十三ヶ月服限者仰云令文云告追之間經周井而以聞爲初着服給假皆如法云々此文意終周井之後聞之儀歟若罷井月假令兩三月之間聞之者只至于忌月可着之歟如何申云猶法家之所習只周井之內雖聞猶可滿十三月云々昨日明基申狀又如此

〔拾芥抄〕下本於遠所亡沒傍親假日數半減事七日假如何三日可給四日假者見本文乘日是也他准

可給四日之假可減十五日之類也七日假如何減三日可給四日之假云云是本文之由明兼示他准之可知

基明神社如何已無服之法更不可有除之禮然者假半減之後參詣神社不可有其憚耳明法博士中原

於服者日數過者不可有沙汰云云又業倫談云傍親於遠所亡沒之後歷數月有告之時以開始之日爲服假之始仍自聞日計日數滿假服之限宇治殿御弟子椎山禪師浮浪之間亡沒數月之後初聞召之自其被滿御假日數云云見舊記之由所談也○中  
父母於遠所亡沒事



開喪

以爲未入歲者服其近屬布深衣或合禮意

〔令義解九〕

凡聞喪舉哀其假減半謂假有官人遭祖父母喪本假卅日若在遠有乘日者入假限

假三日減半以所乘一日入假限給二日之類

〔律疏〕八

七曰不孝謂略

○中聞祖父母父母喪匿不舉哀詐稱祖父母父母死依禮聞親喪以哭答使者慟哀而問故父母之喪創巨尤切聞卽崩殯

謂號天今乃匿不舉哀或謂擇時日者並是

〔開元禮百五十〕追服

小功以下日月過制而聞喪則不追服論爲降而在總麻小功者追服之生不及祖父母諸父兄弟而

父追服已則否謂于生於外者父以他故居異邦而生已不及見此親存時歸見之今其死於喪服年月已過乃聞之父爲之服已則否者不責非時之思於人所不能爲其時則服之

〔法曹至要抄〕服下父母死去經年序雖聞之以聞日爲始猶可服一年服假事

假事令云官人遠任及公使父母喪應解官無人告者聽家人經所在官司陳牒告追條義解云謂官司

得喪家牒更付便使移告其告追之間已經周葬而聞喪之禮以聞爲始卽解官終服並皆如法也穴記

云於番上服云云但於父母者起自聞日終一年耳

案之父母死去之後或過五六月或歷二三年始雖聞之着服之禮自始聞日猶可爲十三月之服矣

減半假事

假事令云聞喪舉哀其假減半義解云謂假有官人遭祖父母喪本假卅日若在遠聞喪所在舉哀者減

半給十五日之類也又云有乘日者入假限義解云謂假有本假三日減半以所乘一日入假限給二日

之類穴記云於番上服月已過者無追服日殘者計殘給耳又云問凡職事番上庶人等過服月聞者何

答只止耳若有殘月者追服之如上解

案之聞喪舉哀謂在遠聞喪故減半給之假有祖父母喪在遠所過四五十日之後聞之者本假卅日

じめ、さらぬ家々までも、昔よりをさなきものに、服ありとして、喪家にいれず、庇にのみすませ、何くれのことゝも、おとなに同じやうにす、そのおやめのことなど、たへがたくくるしけれど、昔よりのならはしなれば、ねんじて、そのものすなる、人はさらなり五畜のたぐひまでも、死にたる處は、ほどほどにけがる、ことにて、おとなもをさなきも、其けがれこそ同じからめ、服といふものは、心ありてきることなるに、ものゝ、わきまへなきをさなき人の、さることすべしやは、させざらんに、人のいみきらひぬべきことわりは、たえてなきことなるをや、わが里はひなかなければ、むかしよりものしれる人なく、かゝるひがことはするに、なん、されど年久しくならはしとなりぬれば、今はあらためんことはやすからず、おろかなる高尙○麻が、いさめたりども、人のきゝ、いるべくもあらねば、たゞおのがおもへるやうをこゝにいひおくになん。

〔儀禮註疏十服〕童子唯當室緦註、童子未冠之稱也、當室者、爲父後、承家事者、爲家主、與族人爲禮、於有親者、雖恩不至、不可以無服也、○疏傳曰、不當室則無緦服也、

〔杜氏通典八十二〕童子喪服議

漢戴德變除曰、童子當室、謂十五至十九、爲父後持宗廟之重者、其服深衣不裳、○中晉劉智釋疑曰、嬰兒無知、然於其父母之喪、則以綏抱之、其餘親八歲則制服矣、七歲曰悼、過此有罪、則入於刑、必致之於禮、故在下殤之年、爲之制服、按小功章昆弟之殤、服昆弟之下殤、是已下殤之年、則行服也、○周童子不葬、成人小功親以上皆服、本親之殤、童子不杖、不履、不說、不麻、當室者、統麻、十四以下、不杖、不麻、則不哭、除變、問爲姑、姑長殤在大功、下殤在小功、爲姑、下殤以下、說、六、七歲未成童子、爲父母、不杖、不麻、可恕、六、七歲、兒雖能服、此何以終得爲姑、婦服、備大功小功之制乎、十七、八歲、未成童子、爲父母、不杖、不麻、已下、不堪麻、則不記云、十五成童舞象耳、豈是經所云童子當室者耶、按禮稱童子參差不一、以事推之、則大小可知矣、愚謂當室與族人爲禮、均是八歲以上及禮之人、以其當室、故令與成人同若謝慈

言以正之、今彼誦服、以爲己議非禮經之說、則得此一言、示信於天下後世足矣、至於其引異家小說、近世非禮之事、以爲我國不可行聖人之法、則彼之謬妄自爲、非我之所知也、士大夫見信篤前後狼狽失對、皆非笑之、惟日君美、以事語其友室直清、直清退而記之、以俟後世之議禮者觀焉、實正德三年正月某日也、

〔續百一〕寛保三年二月十四日、久我家へ口狀、

日野廻壽丸姉、昨夜死去被致候併廻壽丸義七歳未滿故、服無之候、三月十三日迄、續三十日、右爲御届、如此御座候、以上、

二月十四日

日野廻壽丸家

山本隼人

西野左近

久我大納言樓御家

森但馬殿

小島一學殿

葉素前大納言樓御家

柴田主計殿

松崎主水殿

〔繼草拾遺 服部〕公麗云、童體着服、猶布黑染狩衣、可宜、安永二年三月六日、山科左衛門督息從五位

下忠言<sup>十二</sup>童體<sup>母</sup>冷<sup>歳前</sup>大納<sup>言</sup>入道女<sup>死</sup>去之時被尋之、以此旨答了、

〔松の落葉〕な、つにならぬ子は服なき事

榮花物語月の宴の卷に、五の宮は、いつゝむつにおはしませば、御服だになきを、あはれなるおはんありさま、よのつねの事にかはらず、ぎもていくと見えたるは、康保のころのことにぞありける、七つにもならぬをさなきは、ものゝわかまへなければ、かゝるもげにことわりになん、今のおほやけの服紀にも、さやうにぞ見えたる、さるをわが宮<sup>備中</sup>國<sup>高</sup>神<sup>津</sup>の郷にては、神の宮人をは

子爲父妻爲夫皆服一年未嘗有少長之異而其有本服無服者給假獨止於無服之殯夫七歲以下兒爲父母無服亦有本服無服者也小兒雖無給假之事然或當有斷例之言及此而初無小兒爲父母無服之說是父母之喪無少長服一年亦已明矣其八皇年代略紀載烏羽院嘉承二年七月十九日卽位年五歲是日堀川上皇崩亮陰又六條院永萬元六月廿五日卽位年二歲七月廿八日二條上皇崩亮陰又四條院貞永元年十月四日卽位年二歲天福元年九月十八日皇太后藥壁門院崩亮陰文曆元年八月六日後堀川上皇崩亮陰今按本朝七歲以下幼主有父母喪此三帝爲然前史皆以諒闇爲稱則是固有與喪葬令相證而無疑者但法曹之書有七歲以下無服之說又吉田家神祇道服忌令伊勢兩宮服忌令皆同法曹之說然聞之吉田二位兼敬之言曰諸社服忌不同我家所傳自爲吉田家禮非朝廷之制也然則此等之說皆爲一家之禮不可行之於天下又近世禁中服忌條令亦曰七歲以下爲親族無服又曰爲父母無服蓋以父母之喪不可與他喪例也今以異同疑似之說斷之孰若從喪葬令與前代幼主諒闇之明證爲信而無疑哉若倭瀧之史有載幼主七歲以下卽位天下無諒闇之儀及君臣無服者其具錄以聞信篤於八條一無辨明乃上對曰儀禮家禮中無小兒爲父母服之制故前日上議云々其他無明證可考今據禮經之言實有不可以爲無服者所下逐條不得以貼于對神祇服忌令云七歲以下不服二親之喪其餘六親可知其卷之首云禁中百官用之又貞享元年禁中所出服忌令有七歲以下不服父母之喪其卷之首又云神祇道之神事者一朝之法令也君臣遵之又寬仁元年五月三條院崩後一條院年九歲八月舉釋奠之禮十月納神寶于諸社是皆無服之故也又源氏花鳥餘情有云延喜七年勘文七歲以下不服親喪由是神事亦行之又云烏羽院亮陰事不可據信七歲以下雖二親之喪亦不可服今據此等之文七歲以下不服親喪者本朝之通制也今乃棄之從異朝之制則爲父母服一年是本朝之制也如必以異朝爲法自今以往使我國之人行三年之喪然後可也其不可行也決矣君美見其對謂問部侯曰彼首建橫議以爲今代喪服之議違周孔之明訓故某舉禮經之



經往往有與所言不合者。願聞其說。今抄舉以爲問。其逐條以貼子錄其對務使明白。其一喪服斬衰傳曰。童子何以不杖。不能病也。又禮曰。童子不杖。不能病也。疏云。童子謂幼少之男子。據此文。小兒爲父母服斬衰可知。不知別有說否。其二禮曰。童子哭不偯不踊不杖。註未成人者。不備禮也。當室則杖。集註云。童子爲父後者。則杖。據此文。小兒於父母之喪。雖未能備禮。然爲父後者。斬衰杖如成人也。不知別有說否。其三喪服記曰。童子唯當室緦。傳曰。不當室則無緦服也。註童子未冠之稱也。當室者。爲父後承家事者。爲家主與族人爲禮於有親者。雖思不至。不可以無服也。據此文。凡童子雖無緦服。然爲父後者。爲族人緦。然則爲父後者。不可與其餘小兒比。又爲族人有服。則其爲父母有服。不言可知。不知別有說否。其四禮曾子問曰。君薨而世子生如之何。孔子曰。三日大宰。大宗大祝皆裨冕。少師奉子以衰。祝先子從。宰宗人從。入門哭者止。子升自西階。殯北面。祝立于殯東南隅。祝聲三曰。某之子某。從執事。敢見。子拜稽顙哭。註奉子者。拜哭。疏少師主養子之官。又奉子故與子皆著衰也。皇氏及王肅云。謂以衰衣而奉之。集註奉子以衰。以衰服承籍而捧之也。據此文。君之世子雖初生。君薨有斬衰之服。況初生以上者乎。魏晉故事載。章郡王年七歲。爲其祖當倚廬服成人禮。是雖後代亦八歲以下有成人服也。凡此等別有說否。其五禮曰。子不殯。父臣不殯。君。據此文。凡十九歲以下人死。其爲臣子者。爲之服斬衰如禮。不敢以殯待其君父也。今日七歲以下人。以其父爲己無服。己亦爲其父無服。非殯其父而何。不知別有說否。其六論語子曰。三年之喪。天下之通喪也。禮亦引孔子之言曰。三年之喪。天下之達喪也。又曰。三年之喪。達于天子。父母之喪。無貴賤一也。夫謂父母之喪曰通喪。曰達喪者。凡天下之人。通貴賤少長。皆服斬衰三年。是通達之喪也。若七歲以下。爲父母無服。是天下有所不達也。何以爲天下之通喪乎。右禮經所載如此。而文公家禮及大明會典集禮。皆從禮經。未見有七歲以下爲父母無服之說。而今斷然以爲儀禮家禮大明之制。意必有明文可證者。其錄而出之。使人無疑。其七本朝喪葬令曰。凡服紀爲君父母及夫。本主一年。假寧令曰。凡無服之殯。生三月至七歲。本服三月。給假三日。一月服二日。七日服一日。據此文。臣爲君

歳以下の人、父母のために服なかるべき明證はなし、禮經の言によるときは、服なしとは申し難ければ、答申す所もなしと申して、我別にしるし出せし二條に答ふる所は、花鳥餘情などいふ草子を引據として、七歳未満の人、父母のために服なきは本朝の俗なり、もし禮經によりて其服あるべくは、また禮經によりて父母のために三年の喪をも舉行はるべきにやなどしるし出せり、我これを見て、某が議、周公孔子の法にあらずと申すが故に、これを正すに禮經の言を以てす、かの人前に申せし所は、禮經の言にはあらずと意狀をまゐらする上は、此一言を得て、我申す所の信をば天下後世に示すにたりぬ、大學頭たらんものゝかゝる天下の大議に當りて、源氏物語の抄引用ひて、我國にしては聖人の法行はるべからずなど申すに至ては、天下後世の公論あるべければ、我論するにも及ばずといひて、そのしるし出せしものどもをば請ひ受て歸れり、當時天下の爲に、父子君臣を定めしものにあらず、周公孔子の道を我國萬世のために守りまゐらせし證狀なれば、かのしるし出せしものどもは、我後に傳へんもあしからじ、此事の詳なる事は、我その時の議草ならびに鳩巢○室の國喪正議の書に見えたれば、併せ見つべし。

〔國喪正議〕正徳二年十月十四日先主文昭王○德川升遐、諸大臣奉幼主○德川嗣位、年四凡凶禮如

前朝故事、越十二月、五旬忌限將滿、國制爲父喪服一年、內五十日爲忌、經酒肉樂舞、不預、大學頭林

信篤告幸輔曰、公等欲使朝廷喪殆不可也、元祿中、憲廟○德川命信篤依舊制定服忌、令父母爲七

歳以下人、及七歳以下人爲父母、皆無服、既頒天下、以爲令、今當遵之、幸輔以爲然、於是議遣使告祭日

光神廟、及諸大禮、以次舉、且有日、筑後守新井君美聞之、○中遂上劄子、劄子、繪圖字、成文、今以漢語譯

此、故曰、○中由是議定、諸吉禮如西內廟、見伊勢奉幣、皆待十三月後行之、信篤聞之、深以其言不用爲

恨、因輒錄其說以上幸輔、○中於是君美代間部侯、設爲問目、歷舉倭漢八事、以難信篤、其書曰、前所上

云儀禮家禮及明朝之說、皆以小兒七歳以下爲無服之殯、故其於父母之喪、無服、然考儀禮及其餘禮

じにておはしませし御父の御服忌の事なからむは天道の冥鑑も畏るべき事なり、又御成人の  
のち、これらの事をしうしめされて、うらみ悔ませ給ふ事もこそあれ、われらがねがひ思ふ所の  
よしをもて心喪の御事申行ふべしとぞ仰られける、人々も此由を承りて、かさねて議し申さる  
べきにもあらねば、御神事等の議、ことごとく十三月の後に至りて舉行はるべきにきはまる、信  
篤其説の行れざりしことを深く憤りて、周公の儀禮にも、朱子の家禮にも、明朝の法にも、喪服は  
相互にさる故に、彼よりこれへ、これより彼への服の法を一々舉て、小兒七歳まで無服の禮と申  
せば、無服の小兒よりは、父母を始て諸親への服はなし、神道服忌令、吉田家服忌令、禁裏服忌令、こ  
れに相同じき由をしるして、十一月廿九日、老中の人々にまゐらせたりしを、我にもまた詮房朝  
臣みせられたりけり、此事我が思ひしまゝに御沙汰すでに訖りぬれば、我またかさねて申すべ  
き所もあらず、されど我此ほど心をも盡し、慮をも盡せしは、古の聖人の制によりて、天下の父子  
君臣を定むべき所を思ふがためなり、しかるを某が論じ申す所の、周公孔子の法にあらずなど  
申すは、たゞに當世を誣るのみにあらずして、古の聖人を誣申す所なり、此人一時の遭遇を辱く  
して、天下の人を教ふる事をもて職とす、もし其説の行はれんには、其人をして不忠不孝のみちび  
きとせしまゐらするにこそあれ、これまた萬世の患なり、證するに禮經の言を以てして、其妄誕  
の説を折かざる事を得べからずといひて、儀禮禮記等の書を始として、大明會典集禮等に至る  
まで引用ひて、七條をしるし出し、これらの書による時は、ことごとく皆七歳以下、父母のなめに  
服あるなり、しかるを儀禮家禮大明の制、其服なしといふは、かならず明文の證とすべきものあ  
るべし、各條の下に録し出すべしと、しるして、また本朝の喪葬令等によりて、二條をしるしてま  
ゐらす、詮房朝臣我しるせし所をもて、信篤に問れしに至て、儀禮家禮等五等の服の中に、無服  
に父のためにする語の見えざりしゆゑに、はじめのごとくにはしるしまゐらせたり、その餘七

令によられん上は、今はた新たに服忌の事御沙汰あるべきにもあらず、但し前代多くの御子おはしませしかど、幸に上の御事のみ大統をうけつがせ玉ふも、御幼稚の御事をもて、御服忌もあるべからず、また天下の事しろしめされ多くの御家人めしつかはれしにも、人々の服忌もあるべからざらむには、なに、よりてか國家の大喪とは申すべき、本朝にも心喪など申して、其服はなけれども、其心には其喪をたもつ事侍れば、上を始めまゐらせ御家人にも、たとひ御服忌ならむ事、元祿の令のごとなりども、せめては御服あらむ日の限りは、凡の事吉に従はせ給ふ事おはしませらんには、元祿の令をも妨ぐる所なくして、臣子の情少しく伸る所を得て、天下の父子君臣の道、これによりてならびたつ所を得つべし、但今に至りて心喪の御事など申す事あらむには、天下の人、元祿の令に疑ふ所も出来なむと申す事もあるべけれど、たとひ天下の人疑ふ所ありども、たゞ七歳未滿の人、その父母のためにする一條の事のみにて、其餘事にあづかるべきにもあらず、其上天下の御政と申すも、御法と申すも、皆々人倫を正しくせらるべき御事にて、父につかへ、君につかふる所をもて、その大本となし侍れば、わづかに七歳未滿の人、父母のためにする服の世の疑ひを致さむ事を憚りて、天下の大本をうしなひ、天下の大倫をほろばされん事、いづれか重くいづれか輕かるべき、むかし宋の英宗の御時と、明の世宗の御時ど、かゝる御事に似たる事ごもありて、天子御成人ののちに至り、當時の大臣、罪かうふれる事もありき、當時は御幼稚の間なれば、いかにとも思召わかたる、所おはしませずとも、御成人の御時に至りて、かへり思召れん所をも、よろしく思ひはかり給ふべき所なりと申し、なり、詮房朝臣我が議を袖にして、まづ人々に問試られし事ありしに、先入の言すでに主となりて、我議の行はるべからずと見えしかば、我議をもて大御臺所○家繼所 妻近衛昭子にまゐらせ、我心のほごをも申されしかば、御母上○家繼所 生勝田氏と、共に其議を見させ給ひ、上御幼稚の故によりて、世の人々と共に、世のある



てや當時は天下の大統をうけつがせ給ひて、億兆の君たらせ給ふ御事なり、いかでよのつねい  
どけなきものに例しまゐらすべきといひしかば、詮房朝臣、其由をもて、信篤に問ふ事おはせし  
に、信篤答へて、我奉りて撰びし元祿の服忌令は、天下不易の制なり、いかなるものか、る事を  
ば申すらむといふ也、老中の人々、すでに信篤の議によられぬ、信篤の答ふるところ、またかくの  
ごとくなれば、人々の心をめぐらさん事、いかにかなふべからずとぞ、詮房朝臣もいひける、此  
事その係る所最大なり、されど此事をもて人々と議し申されむ事しかるべからず、某がごとき  
は、一身の用捨、國家の輕重をなすにあづからず、たゞ某が議をもて、人々には申し玉へといひて、  
やがて其議をぞまゐらせたる、其事の大要は、古の聖人、喪服を制し置れし事は、父子君臣より始  
て、凡て人倫の道を厚くし玉ふべきためと見えたり、異朝にしても後世に及びては、古の制と同  
じからぬ代々もあれば、ましてや、我國の制の古に同じからぬ事どもはあれど、すべてこれ古の  
聖人の制によられ、其時の宜き所を斟酌せられし所にあらざるはなし、元祿の時、服忌令改め定  
められし所も、古の聖人の御心にはかはり玉ふべからず、されど前代御治世の始より、いかに思  
召す所もありしにや、倭漢古今喪服の制ども、害に問はせ玉ひし事ありて、某書にしるし圖作り  
てまゐらす、いまだこれらの御沙汰に及ばれずして、今日には至りぬ、謹按るに、元祿の令には、七  
歳未満の人、相互に服忌なしと載らる、此令は本朝の令によられしと聞えしかど、本朝の令にも、  
七歳未満の人のためには、服なき由みえたれど、七歳未満の人、其父母の爲に服なしとは見えす、  
古の服制には、童子其父母のために喪すと見え侍るに、いかなるゆゑによりてか、相互に服なし  
とは見え候ひしやらむ、これによりてこそ、當時御幼稚の御事なれば、御服忌あらずとは聞え侍  
れ、又本朝の令にも、君のために臣たるもの、服一年と見えしに、元祿令には、臣下たるもの、君  
の爲に服する制をも除れしかば、當時御家人の服あるべしとも聞えず、これらの事ども、元祿の

但五品兼季七歲也、可有服哉之由、相尋明法博士章貞之處申、可無服之由、又副進勘文仍不可解除也。

〔三長記〕建永元年六月廿九日己卯、六月祓如例、若君御祓事、昨日申入道殿曰、於重輕服人者、憚之而依七歲以前無御服、可被行御祓、被仰云、可依先例、且又可問陰陽師、依問在宜朝臣之威、申云、無御着服之儀、可有御祓歟、但於先例者、不分明、先例不勘得、以此旨、可申沙汰之由、仰遣以經了、被行御祓了、此事猶可勘先規。

〔吉續記〕文永十年八月十七日丙寅、參內春宮○破字多年七歲、此月十日外祖父藤原實雄薨、不可有御輕服之儀之由、治定之由、藏人大進示之、七歲爲無服、殤云々。

〔後愚昧記〕貞治六年七月十九日、今日申刻、入道中務卿親王全仁、故武部賴義、逝云々、八月七日、按察卿送狀、常盤井宮放全仁、可被着服、而爲童體之間、先規希有也、其間事、自彼宮可計申之由、所示給也、可爲何樣哉、御意之分、可計奉云々、予公藤原忠忠、答云、文永九年、春宮于時六歲、童體之時、母后○龜山信子、崩御、重々有沙汰爲御着服之儀、依爲童體、每事如此法之儀歟、

〔基量卿記〕元祿六年正月十一日、朝間病人、又以外也、終日逐電、酉刻遂絕氣、言語道斷之仕合也、○中男子友丸、七歲未滿、無服之間、其儘養育了、桐壺更衣御別離、今更徹心頭了、

〔折たく柴の記〕かゝりしほどに、○德川家宣、正徳二年十月薨、十一月に至て、當時は幼主、○德川家、年四歲、の御事なれば、御服もおはしまさず、程なく日光にも伊勢にも奉幣の御使あるべしなど聞ゆ、こはいかなる事にやと驚き思ひしかば、詮房朝臣○同、此事を問しに、大學頭信篤○七歲未滿の人、父母の服なしとて、かくは議し申たりけるなり、前に思ひし事のごとく、當代の御事に、我しるべき所にあらねば申すべき所にあらざるはもとより也、されど此御事に限りては、さてしもやむべき事かは、禮に七歳以下を無服の處とする事はあれど、七歳以下の人、其父母の爲に服なきにあらず、まし

〔源氏物語若葉〕君○紫上年は御ぞにまどはれてふし給へるを、せめておこして○中をかしき繪あそびもの共さりにつかはしてみせたてまつり、御心につくべきことをもをし給ふやう／＼おきゐてみ給にび色のこまやかなるが、うちなえたる共をきて○外、服○外にこゝろなくうちゑみなどしてゐ給へるが、いどうつくしきに○下

〔榮花物語一〕やがてきえいらせ給ひにけり○村上○村后かくいふことは、應和四年○康保四月廿九日、いへばおろかなりや、おもひやるべし○中五のみや○四融年○安子○所生、はいつゝむつにおはしませば、御服だになきを、あはれなるおほんありさま、よのつねのことにかはらす。

〔十訓抄十二〕基綱卿○源年たけて後、帥に成て下されける時、白河院年高くなりて、遙に赴く心ばそくおぼしめす、琵琶の秘事など、誰にか傳へおかれける、聞召おくべき事也と仰られければ、時俊重通などに、かたのごとく傳へ置侍れ共、其器にたらず侍れば、孫にて候小女に、秘事の底を拂て教へおきて侍りし、もし聞召べき事あらば、かれを召べしと申て下にけり、その、ちつくしにてかくれ給ければ、法皇かしこくぞ尋置けると思召出て、後小女を召て、琵琶を聞召事有けり、いまだ色なりければ、かうじ色の袴着て、にぶいろのきぬどもきて、かき合より三曲まで數をつくしてひきたりける、いとゞめでたかりけり、としは十三にて、いどちひさかりければ、琵琶引の昔がたりおもひやられてあはれなりけり。

〔台記〕久安二年九月九日、一日比、女御代○藤原○長美○多子○年七歳、外舅刑部大輔忠定卒、度女御代自賀茂可出否問法家、明法博士有隣申云、可有二日心喪、早可出給、左衛門志兼成申云、七歳以前無心、不可有心喪、仰勘申證文若例者、即勘申延喜七年、太子七歳以前無心喪之例、奉件度勘文、因之、不令出。

〔假服事〕文治元年十二月十五日、今夜子刻、法印忠雲○花山○院入道○大相○國卿、入滅、翌日、聞此事、參花山院、存不可見、參之由、示付前駿河守泰房、自門外歸東山、又差使問彼房、子并子息等服七日假三日也、

勘申七歳以下人遺親喪并件親遺七歳以下人喪之間各行神事否事

右檢假事令云無服之殯本服三月假三日一月服二日七日服一日注云生三月至七歳式云緣無服之殯請假者限日未滿被召參入不得預祭事者據此等文除假之外無礙神事又七歳以下之人無可着服之由然則於行神事有何妨哉仍勘申

延長四年十一月廿五日

明法博士兼左衛門佐惟宗朝臣公方

今案醍醐御門の御世に七歳以下の人の親の喪に着服有無の事如此兩度まで法家に仰て勘申さしむいづれも服假不可有由を申き此物語の桐壺の御門を延喜帝に準らへ奉りてしかも源氏君三歳にて更衣源氏母にはなれて宮中を出給ふは服假あるべきに定れりそれをいかにといふに法家に仰て服假あるべからざるに定れるは延喜七年の事也源氏君の母の喪にあひて退出し給ふ事は七年以前服假の有無いまだ定らぬ時の事に見侍るべきなり一義云七歳以下の人の服假あるまじきと云は二等以下の親の喪なり父母一等の喪に至ては本文たしかならざれば猶神事にはゝかるべしと云べし後の代の事なれど堀河院崩御の時鳥羽院五歳にて諒闇の事あり則以日易月の義をもて錫紵を着し給是等に准據すべきにや又一義云延喜七年法曹の勘狀に職制律の可着服人の聞喪匿不舉哀者徒罪以下と云は職制律の文を見るに聞父母若夫喪匿不舉哀者徒二年聞祖父母外祖父母喪匿不舉哀者徒一年とあり父母の喪をかくすも既に徒罪といへり又七歳以下雖有死罪不可加刑とみえたるうへは二親の喪たりといふことも不可着服之由は無疑ものなり是によりて今の世に及まで七歳以下の人は父母の喪にも着服の事はなき也鳥羽院の五歳にて着錫紵給ふ事は一人の養天下の人の心喪なれば各別の事也凡庶の禮に比すべからず故に源氏の君の宮中を退出し給ふは延喜七年以前のことみ侍るべきなり



祭事云々蓋所載于令條服假之輕重深有意味歟後人之才不可及漢海公之智莫妄削令條之制  
欺法家之說焉

〔源氏物語桐壺〕夜なかうちすぐるほどになんたえはて給ぬる○源氏母とてなきさわけば御つかひ  
もいとあへなくてかへりまゐりぬ○中みこ年三歳はかくてもいと御らんせまほしけれどか  
かるほどにさぶらひ給れいなきことなればまかで給なんどす○下

〔源語秘訣〕桐壺卷云、みこはかくても御らんせまほしけれど、かゝる程にさぶらひ給ふ例なき  
事なれば、まかで給ひなんどす、

無服の殯の事は、令條の文に見えたれど、七歳以下の人の親の喪にあひて服假の事は、法令  
にみえざるに依て、延喜七年二月保明太子五歳の時、嫡の服ありし時、法家に尋ね、被仰しか  
ば、七歳以下は、服假あるべからざるよし、勘申、其詞云、

勘申東宮間食、嫡喪雖未成人可有御服哉否、又假令無御服者、例行神事、不停止否事、

右蒙上宣、僞上件兩事、臨時有疑、宜勘申者、喪葬令云、嫡服一月、假事令云、職事官遣一月、喪給假  
十日、又條云、無服之殯、一月服給假二日者、今案件文、七歳以下、服親死日給假法也、七歳以下不  
可着親服、令條無之、名例律云、七歳以下、雖有死罪、不加刑、又職制律云、可着服人、聞喪、不舉哀  
者、其徒罪以下也、由是案之、死罪之重、不可加刑、何況徒罪以下、無可更論、既無罪者、不可有御服、  
又神祇令云、散齋之内、不得弔喪、問病者、據檢此文、弔喪、問病、爲禋然、則既無御服、行諸神事者、有  
何妨哉、仍勘申、

延喜七年二月廿八日

大判事兼明法博士惟宗朝臣善經

主計頭兼明法博士惟宗朝臣直本

又延長四年勘狀云

當時之新制ニ相成如何敷候、主上<sup>○</sup>御成長之後、思召モ可有之儀候間、是迄普通之通不及無服之病假之沙汰、尤御所勞ヲモ不被稱候、因之兩人方江御届書をも不被差越候爲心得、被示聞候由也。

〔實久卿記〕文政四年四月十四日甲午、予末女、戰所勞之處、到曉刻甚不勝、依之爲養生別屋ニ出了、今夜死去了、仍予無服、二日、實麗三日引籠了、

〔實久卿記〕天保三年七月十五日己未、去月出生小兒、自昨夕所勞今晚以外不勝爲養生出他屋了、今夜死去了、予今日稱所勞不參<sup>不到三月之間、無服之事、無之</sup>、

〔令集解<sup>四十</sup>〕朱云、問凡於今可着服人、年多少可有否何、私案依名例律、十六以下十一以上、犯流罪以下、可收贖、然則十歲以下者、雖不服可、無罪哉、何額云、然也、十歲以下雖着服及不着並不可責、但可着年限不明見者、私案反報始八歲可着乎、何者名例律云、九十以上七歲以下、雖有死罪不加刑、即有人教令、坐其教令者、然則八歲子、雖不着服於父母爲無罪乎何、

〔服假類聚<sup>六</sup>〕無服、有無之論

大中臣景忠卿服假異說辨論曰、凡服假事、近世之習俗不拘舊規、不論是非、唯以輕爲要、<sup>○中</sup>或人

曰、無服、病之假事不甘心、七歲以下人、父母以下親族、雖死去無服假、況七歲以下之小兒死去之時、

其父母以下親族、奚有假哉、不當其理云々、予不傳法曹之業、不辨令條之理、區々之心、迷于歧路而

已、竊按之、七歲以下人者、親族雖死去、強無哀情、仍無服假乎、七歲以下之小兒、病亡之時、父母兄弟、

事無哀情乎、依之、雖不着服、衣有假、歟、愛者則爲喪、令義解云、若不帶官人、遭此喪者、准假日數、心喪

居憂、<sup>無服、禮記檀弓曰、君子有終身憂、注云、於親忌日必哀、終身之喪是也、祭儀云、君子有終身之</sup>

喪、<sup>之、終日之謂也、禮爲忌日之文、以憂和、漢既以憂爲喪、以之思之、給假誠有故乎、心清淨而從神事爲</sup>

本、<sup>內含憂心、外構神、查豈神有威應乎、故式文曰、凡緣無服、病請假者、限日未滿、被召參入者、不得預</sup>

所存也、黃門退出、了。

〔桃記〕享保十二年十二月廿九日ノ夜ノ仰

○近衛家照

ニハ、世君ノ逝去ニ付、關白

○近衛家久

出仕ノコト、御

ウカガヒニ成リシガ、七歳未滿ニハ服忌ナシト雖、ドモスデニ舊冬廿五日立春ナリシ上ハ、八歳

カト云ノ御食義サマハニテ、勅問モアリ、藤波白川吉田等モ召サレテ評議アリシガ、ツヒニ苦

シカルマジキ義ニ極リテ、夜前傳奏衆ノ本殿ヘ參ラレシハ、夜寅ノ刻ニテアリシ由也、御上ハ勿論ノ義、御

大夫已下一ハ是ハイカナルコトニヤ、七歳カ八歳カト云吟味ナラバ、年ニコソヨルベケレ、節ニハ

ヨルベカラズ、藤波ノ二位ナド生テ居ラレバ、一理屈云ベキ由ナリ、イカナル故ニヤト仰ラルト

免ハ出仕ハアルベカラズ、御大格七歳未滿ノ人、無服ト云コトハ、死シタル人ノコトニテハナサ

ソウ也、上古ノ無服トサシタルハ、七歳未滿ニテ生テ居ル人ニハ、何ノ服モナシト云コトソウ也、

服忌ハ情ノ感ズルコトノ深キ口ト服モ長キ筈也、情ノ感ナキ人ハ、服モナキ筈也、シカレドモ近

代ノ通例、イサハカ以テ違背スベカラズ、必ヤ此ノコトナド、人ニハ語ルベカラズト仰也、

〔續百一錄〕享保廿一年

○元文元年

四月十六日

兩傳奏ヘ御届書左記

口狀

息男

資雄

昨十五日致死去候、就幼年忌服無之候得共、五月十九日迄地穢候、爲御届如是候、以上

四月十六日

資時

冷泉大納言殿

葉室前大納言殿

〔兼胤卿記〕寶曆二年六月十八日、攝政殿

○一條道香

被仰、昨日末ノ御妹

三歳

被卒去候、去年正親町宰相

息女死去之節、宰相野宮父子等、無服之禰、假届書被出候得共、當時珍敷殊攝政殿及其沙汰候而ハ、

去年己亥<sup>○</sup><sub>二</sub>年<sup>○</sup>六月九日己亥余<sup>○</sup><sub>林</sub>宜人產男以年與日同支干故名之曰亥兒今年庚子十二月六日丁亥天亡<sup>○</sup>嗚呼生于亥死于亥其運數命矣夫余名之唯知其生而不能知其死亦命也<sup>○</sup><sub>中</sub>又按中華之制庶子之服期年本朝古制一月長殯中殯下殯殺之有差至若無服之殯則以日易月故本朝古制唯一日我敢不紹之中華之制十二日今雖欲倣之然既從國俗不能行父母三年之喪豈以難行者從國俗而以易行者倣中華哉故一日而釋服葬之時着素服而已然當時之制不拘於成人未成人及無服殯逢庶子之喪者觸穢之假或十日或二七日則自與中華十二日服相近故無公事之敦無執政之招是亦不幸之一幸也

〔歸峯文集<sup>七十五</sup>〕哀悼任筆五條 其五

先考壯歲有長吉之喪長吉與亥兒共是無服之殯也然長吉已五歲比亥兒則長矣僅有長少之差均是天亡也

〔基量卿記〕元祿十年四月六日尹九夜中宜之處午刻大便溲其後一向無正氣諸醫召寄色々雖令療治難叶之間以基長朝臣清閑寺中納言<sup>○</sup><sub>定</sub>申遣<sup>○</sup><sub>當時賀西</sub>輝光嫡子病氣及難義候自然相果候ハハ祭申沙汰事可辭申哉但七歲未滿無服之殯其 upper 家內不穢臨期家來宅へ可遣候如何被經沙汰給候ハハ可畏入由也清閑寺今夜議奏へ可達由被申也戊刻已絕氣之體候間醫師相具退家來宅了官語道斷之事也三歲如夢不便事也八日昨日殿下<sup>○</sup><sub>近衛</sub>へ申入傳奏議奏等評議之上伺天氣今日被仰出由也依之日野宅諸事改愁情氣諸事復吉自明日令潔齋可申沙汰由也又尹九乳母事吉田家へ相尋處雖乳母之子七歲未滿着無服之沙汰無之由也其儘可召遣哉之旨也此儀專被守吉田說無子細事之由返答了

〔基照公記〕元祿十年四月七日丙辰清閑寺中納言來云藏人右中辨輝光息男<sup>三</sup>歲病氣危急祭奉行等雖若事切無服身也如此間可爲何樣哉答尤爲無服之間奉行不可有子細也但如此事可在其身



庶子 養子 嫡孫 異父弟 異父妹

本服七日 無服期假一日

庶孫 從父兄弟姊妹 姪女

〔山槐記〕治承四年三月十九日辛未、勘解由次官定經嫡男去年冬、誕生、母民部卿入道親範女夭亡云々、祖父藏人頭左中辨經房朝臣、辭申禊祭行事、翌日示送曰、雖無服之殯、假有二ケ日、依有神慮之恐、所辭申也、或人云、俊明卿奉<sub>上</sub>卿勅、使事之時、有此事、雖無服、改定云々、

〔仲資王記〕建久五年閏八月廿七日、今日乙姬君事云々、略中廿三日、渡清康家、廿四日曉、邪氣相加之由、有其告云々、乳母口亂、午刻計遂空云々、二歳年可哀云々、略中抑予憚事、明法博士明基云、自生三月

至于七歳、是名無服殯、仍遭件喪之人、不可有其憚、但可有二日御假、此外全不可有其憚云々、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年元年十月廿六日癸未、依四宮皇于後深草御事并相州輕服三島御神事已

下、皆被停止之、爲太宰權少貳景賴奉行召參河守敦隆、被問可有御除服否、申云、彼宮御年三歳也、七歳以前無重輕服、仍被止此儀云云、

〔資益王記〕文明十五年七月廿三日、自室町殿足利賴尚御尋折紙案

七より内子、今月十一日死去候、親其刻面をも不見候、殊人之養子成候間、不可苦候哉、委細注可有御申候也、

七月廿三日

大和太耶

政宗 列

伯姫

七歳より内の子死去、其親に不可有服假死穢にまじはり候はずば不可有苦候、

〔爲聖文集 七十五〕記亥兒事

資益

外の親類は不殘三日、母方并聞忌不及遠慮、

貞享元子三月朝日

〔御當家令條<sup>三十六</sup>〕服忌令

一七歳未滿の小兒は無服、但子死去之時は遠慮三日、其外同姓之親類は遠慮一日、當歳たりといふとも同前死去の日數過候は、追而不及遠慮、

貞享三年丙寅四月廿三日

〔喪服議例抄〕七歳未滿の小兒

七歳未滿の小兒、他家へ家督相續之養子ニ遣ス時は、實父母は三日遠慮、兄弟は一日遠慮、甥之分へは叔父一日之遠慮、

家督相續之養子、七歳未滿にて死去養父母は三日遠慮、其外祖父母、伯叔父姑兄弟姉妹、甥姪各一日遠慮、

七歳未滿之養女、未入贅も不取、縁にも不付候内、養父母死去之時は、三十日遠慮、七歳未滿之養女死去之時は、養父母三日遠慮、

七歳未滿之寡父母死去五十日遠慮、日數之内年を越候ても其儘無差別、

七歳未滿之寡父母并親類、遠國にて死去候時、翌年八歳之時に告來候得ば、父母は五十日十三月之忌服受之、其外親類は服忌之殘の日數受之、

〔服假類聚<sup>六</sup>〕無服殯假提覽

本服三月 無服殯假三日

嫡子 弟 妹

本服一月 無服殯假二日

後云々其上就嘉祿二年八月乃問狀左衛門大志中原名列答云律云稱年者以三百六十日稱入年者以籍爲定集解云至正月爲一年令云無服之期本服三月給假三日注云生三月至七歲集解云於計七歲何猶始自生月可計者就之言之不依立春可計生年歟云々假令七歲十二月晦日親族他界不受服假既不受服假之間雖至八歲正月又不受服假也但於遠所七歲未滿之時親族他界至八歲得告者可受服假也

〔拾芥抄下本〕服假雜例

或抄云八歲以後可有服假七歲以前者天亡之時傍親不可有服假至于二親者本服三月假三日一月服假二日七日服一日是信貞說也

〔滋草拾露服假雜事〕白川家服記

一七歲未滿無服事

七歲以下之子死去父母親類ニ無服假又親族雖死去七歲迄者無服也

吉田家服記

一七歲未滿服事

七歲マデハ二親服ヲ不着上ハ六親悉以テ無服ナリ件小生死去之時又六親無服ナリ八歳ヨリ自他ノ服アリ

〔神祇道服紀令秘抄〕一七歲マデハ父母逝去ノ服假ナキ也應永十一年家記云七歲無服焉然其服者及明年八歲可受服假哉否事明年八歲ニ及テモ不可有服也

〔御書家令條三十六〕服忌令

一七歲未滿小兒自他共に無服但遠慮

父母

七日

之殯無服之殯以日易月以日易月之殯殯而無服故子生三月則父名之死則哭之未名則不哭也  
〔小野宮年中行事〕雜穢事

勸申七歲以下遭服親喪并件親遭七歲以下人喪之間各行神事哉否事

右檢假事令云無服之殯本服三月假三日一月服二日七日服一日注云生三月至七歲式云緣無服之殯請假者限日未滿被召參入不得預祭者據此等文除假之外無礙神事又七歲以下之人无可着服之由然則於神事有何妨哉仍勸申

延長四年十一月廿五日

明法博士兼左衛門大志惟宗公方

〔法曹至要抄下〕七歲以下人不着服事

假事令云無服之殯注云生三月至七歲者義解云謂未成人死曰殯也

案之七歲以下無服之殯也仍父母以下有服之等親雖令死去不可有服假矣

無服殯假事

假事令云無服之殯謂未成人死曰殯也生三月至七歲本服三月○中

案之令隨彼本服宜有此假限矣生三月至七歲本服三月謂其於五月以上服親無無服之殯故唯

云本服三月矣

〔永左記〕永保二年四月十四日明法博士有真云無服之殯有假之由見令文但誕生之後三月之中不可然歟如何者有真云無服之殯有假之條三月以後之事也疑生之後三月以前專無其事者

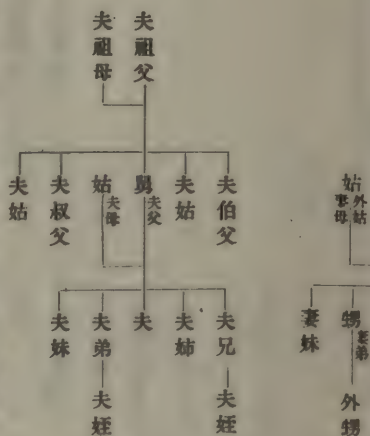
〔文保記〕無服殯生三ヶ月以後至七歲謂之

本服三ヶ月假三ヶ月一ヶ月假二ヶ月七ヶ月假一ヶ月以上無服百日内死赤子假服無之

至八歲受服假也康和二年五月日明法博士中原範政答曰無服殯自生三月至于七歲者以七歲滿之十二月爲限內無服殯也八歲正月以後可稱有服之故云々定人歲事既此勘答不謂立春正月以



夫黨



無服之殯童子著服

〔令義解假事九〕凡無服之殯謂未成人死謂成人自三月至七歲本服三月謂其於五月以上服喪無服之殯故

值假日數心喪居憂但給假三日一月服二日七日服一日

〔令集解假事四十〕古記云殯謂七歲以下死謂之殯也中朱云生三月至七歲者然則生二月內死者專不

可給假者問假今年十一月生人者來年正月初可名無服殯未知於計七歲何猶始見生年可計耳歟

而案文難何中朱曰問此文本意為服歟為當為殯歟答案律義知耳但為服生文故庶人亦依此

法服耳額云此文無服之殯者然則雖給假日更不可看服衣又於庶人專不可服但心喪耳者私難何

問此條假及經受業條假等於舉哀亦更減半耳歟在記實

〔令集解假事四十〕古記云凡服紀者八年以上皆為報服七歲以下名為無服殯也

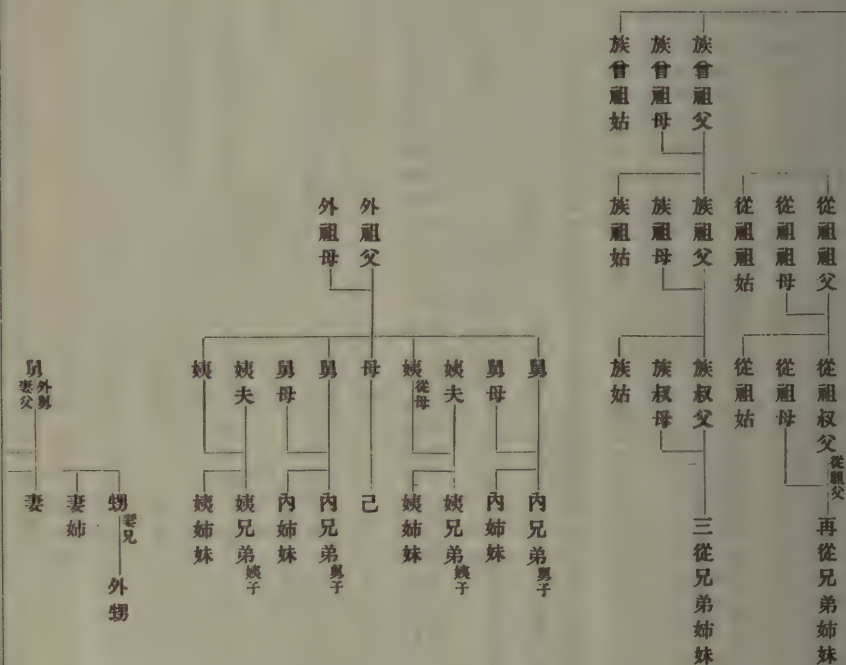
〔儀禮註疏喪服十〕子女子子之長殯中殯註殯者男女未冠笄而死可殯者女子子許嫁不為殯也疏

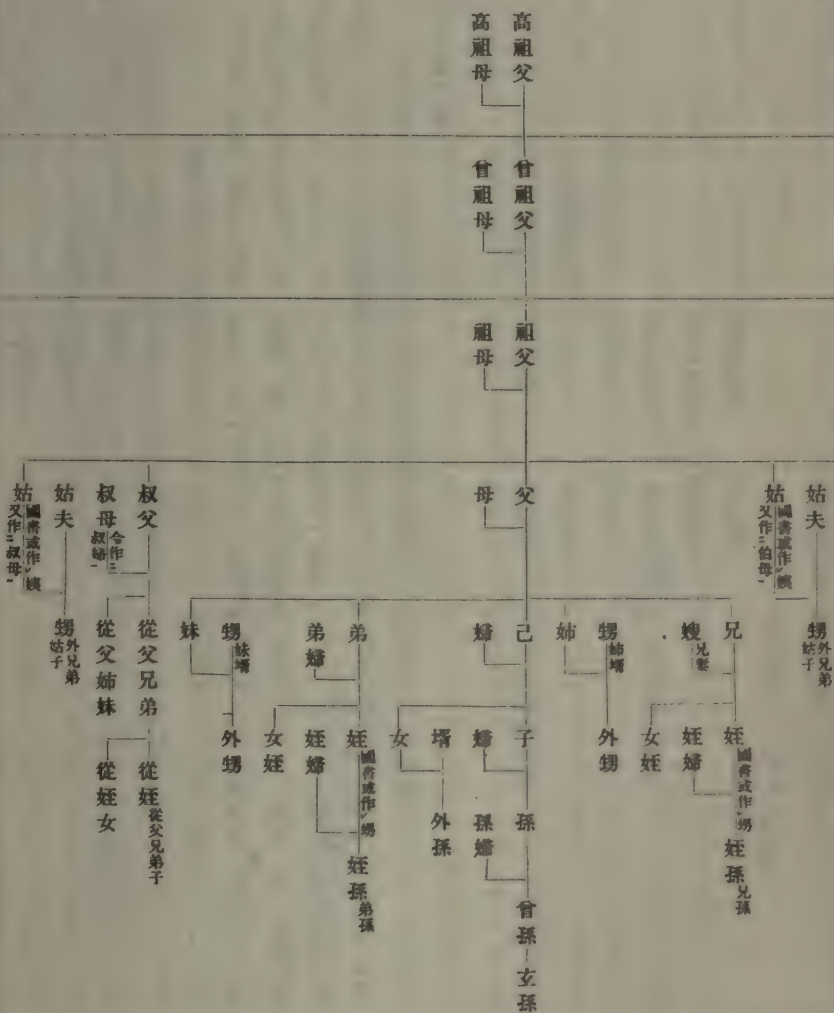
傳曰何以大功也未成人也何以無受也喪成人者其文緦喪未成人者其文不緦故殯之經不緦垂

蓋未成人也年十九至十六為長殯十五至十二為中殯十一至八歲為下殯不滿八歲以下為無服

母燕

妻黨





ながらに出てつかへんになでふことかあらむ。さてかくいふは、服てふ事のありなしの本のあげつらひにこそあれ、すでにその御おきてのあるうへは、かたく守りておかすまじき物ぞかし。すべて何わざもいにしへをたふさむともがら、おのが心にふさはしからず思はむからに、今の上の御おきてにたがひてまもらざらんはいみじくかしこきわたくし也かし。

宗族



母ハ何月兄弟ハ何日ト究メ若之ヲ犯セバ其罰何ト罪科ヲ細密ニ記シ天下ニ令ヲ下シ嚴刻ニ  
賦メ給ハハ庶民モ喪禮ノ重キ事ヲ知ルベシ、

## 〔玉勝間〕人のうせたる後のわざ

人の死たる後のわざ上代にはいかに有けむ○中 さて死を穢とすることは神代より然りされ  
どそれも日數のかぎりの定まりしは後なるべし又忌服はがら國をまねびたる後の事也舊紀  
の仁德天皇の御容に素服といふ字など見えなれど例の漢文のかぎりにこそあれそのかみさ  
る事有しにあらす仲哀天皇崩りましゝていくほどもなく神功皇后の重き御神わざの有し  
にても服なかりけむことしられたりぞも漢國に喪服といふことのかぎりをこまやかに  
さだめたるはねもごろなるに似たれども中々に心ざし淺きうはべのこと也親などにおくれ  
たらんかなしきはその月の其ころまでときはやかにかぎりの有べきわざにはあらざるに、し  
ひてかぎりをたて、きはやかに定めたるはかの國のなべてのくせにていひもてゆけば人に  
いつはりを教るわざ也親を思ふ心の淺からむ子は三年をまたではやくかなしきはさめぬべ  
きになほ服をきてかなしきさまをもてつけ又こゝろざし深からんは三とせ過たらむからに  
かなしきはやむべきならぬにぬぎすて、なごりなくしなさむはどもにうはべのいつはりに  
あらずやさるを皇國に此服といふことのならしきはきはやかなるかぎりのなきかなしきの  
まゝなるにて長くもみじかくもこれぞまことになしむには有ける服はきざれどもかなし  
きはかなしくきてもかなしからぬはかなしからねばいたづらごと也さればかの國にても漢  
の文帝といひし王はこよなく服をちめたりしを儒者はいみじくよからぬことにもどきい  
へどもことわりある事ぞかし皇國にならひまねばれたるにもちめておやのをも一とせと  
定められたりさるはいと久しく身のつとめをかゝむもえうなきいたづらごとなればかなし

クシテ其實モナク却テ五刑ノ重ニ非ザル小盜ハ、時時罰ニ處スルハ、頗賞罰ノ輕重不中ト見ユ、  
婚喪ハ一代ノ大禮ユエ、華域ハ古ヨリ最重クシテ、犯禮ノ罪、細密ニ致セリ、然ニ元主夷狄ヨリ出  
シユエ、此禮ヲ廢棄セシニ、僅九十餘年ニシテ亡ビ、明興テ再古ニ復ス、今清朝モ夷狄ナレドモ、太  
祖實明ユエ、天下ノ治道ハ、固ヨリ禮ヲ本トスル事ヲ知リ、明朝ノ舊政ニ沿ヒ、渣逝ノ禮至テ嚴重  
ニシテ、居喪二十七月内、不燕會、不鼓樂、不娶妻會出大清、其餘ノ法律、悉明朝ニ因循ス、其明律居父母  
及夫喪而身自嫁娶者、杖一百、若男子居喪娶妻、女嫁人爲妻者、各減二等、若居祖父母伯叔父姑兄  
姉喪嫁娶者、杖八十、妻不坐、若居父母舅姑及夫喪而與應嫁娶人主婚者、杖八十、又兄亡收嫂、弟亡收  
弟婦者、絞刑收父妾及伯叔母者、各斬刑、又服中肉食酒宴ハ杖八十、父母ノ喪ヲ匿ス者ハ徒罪一年、  
是刑天下一般能行ル事カ、今長崎唐館ニ居ル夏商共喪ニ丁レバ、一月二十日酒肉ヲ絶テ、鼠色ノ  
喪服ヲ着ル、月ヲ以テ日ニ易ル、省略ト見ユレドモ、我邦ノ忌ト云日數ヨリ長シ、故郷ヲ去ルコト  
數百里、異國ニ居テサヘ、斯喪ヲ勤ル事深切ナルニ、我邦今世ノ風俗ハ、父母死スルニ僅五十日ヲ  
待兼テ、死日ヨリ飲酒噉笑、族類知音、一村ノ者共、慰弔悲禮ナド、呼テ、酒樽ヲ携ヘ、大ニ燕會シ、兄  
弟叔父迄ハ、押押二十日、髮ハ立レドモ、酒肉遊樂、喧嘩口論、物見ニ往ザルハナシ、況華域ハ兄死シ  
テ、此嫁ヲ妻ト爲セバ、死刑ナルニ、今時ハ兄弟死スレバ、已ニ二三月ヲ過セバ、家事不自由ユエ、能  
キ配偶ト途ニ婚ヲ結ブコトハ、天下皆然リ、實ニ胡狄ノ俗ニ諂ヘル事太息ニ堪ヘタリ、是弊俗ハ、  
必竟是迄、每年奉行人民ヲ集メ、憲法條目ヲ讀ムトイヘドモ、曾テ喪禮犯誡ノ條目教訓無キユエ、  
人ハ木石ニ非ザレドモ、知ラズシテ行フ者無シ、是國家ノ大缺典ナリ、間ニハ儒學ノ人ハ、五服ノ  
日數省略有リト歎慨スレドモ、假令法制ノミ出シテモ、行レズシテハ何ノ功モ無キコトユエ、今  
御定通服令ノ日數ヲ能勤メナバ、此上ナキ事ナレドモ、僅ノ忌日ザヘ守ル者希ナリ、今喪家、毎ニ  
服忌ノ分ヲヲ論談スレドモ、之ヲ斷ムル者曾テ有ラズ、由之孰カ一條ニ致シ、律ハ明朝ニ沿ヒ、父

服忌令ノ事、民間ニ服ト云事ヲ知ル者、天下廣シトイヘドモ、之ヲ知ル者萬人ニ一人モナキト見ユ。夫制令ハ、人ニ行ハシメンガ爲也、知ラズシテ行フベキ様ナシ、然レバ法ノミ出シテモ無用ト成ル、今世ハ只忌中ト云テ、父母ハ四十九日、兄弟ハ二十日ト知ルノミニテ、是日數モ孜孜タル事モナシ、固ヨリ喪中忌ハ云ニ及バザレドモ、古來言ヒ傳フル所ハ、死穢有ルユエ、神事ニ憚ルヲ云、古ハ服忌ト連テ云事ナク、神事ノ期ニ臨ミ、素服ヲ着ル迄ハ、神事ニ憚ルユエ、別ニ忌ノ日數ハ無シ、故ニ上古ノ書ニ、忌ノ日數ノコト見エズ、服忌ト云テ、假ハ暇ナリ、禁廷ニ出朝スル者ニ、喪中ハ陳ヲ許シ給フト部兼俱神祇服假、暇ヲ忌ト爲スハ、近世ノ事ニテ、大ニ人ヲ惑セリ、今文明ノ世ニ當リ、如何ノ事ニテ、斯ニ條ヲ建給フヤ、孰レカ一條ニ決シ給ハハ、事煩シカラズ、萬民皆育テ迷ハズ、一決スベシ、又官吏ノ儻、父母ノ喪ニツリ、未五日ヲ過ザルニ忌御免ト云テ、髮ヲ剃リ、酒肉ヲ食ヒ、官署ニ出テ公事ヲ勤ム、夫人倫ノ道ニ於テ、父子ノ情ヨリ厚キハナシ、若國家ノ一大事ニ至リ、此人ヲ得ズンバ、叶ハザル時ハ已ム事ナシ、然ドモ、今太平無事ノ世ニハ、官人五十日、百日、闕タリトイヘドモ、別ニ代人幾許ゾ、不肖ノ者サヘ、能其職ヲ勤メテ世ヲ過スハ、天下皆爾リ、奪情起復ノ法ハ、人心ヲ失フ基ユエ、必無キヲ善シトス、足利尊氏喪中ニ、北條高時、屢出陣ヲ促セバ、尊氏ツヒニ叛逆スル、是等ハ君タル人、全恕ト云フコトニ味キ故ナリ、故ニ仁莫如恕ト云、我邦モ古ハ公卿、皆素服ヲ着テ、倚廬ニ居レリ、其故ハ藤原道信ノ歌ニ、限リアレバ今日脱ギ捨ツ藤衣ツキセヌモノハ、深ナリケリト見ユ、喪禮ハ人ノ大禮ナレドモ、戰國ト成テ、竟ニ廢シ、今ニ於テ舊弊ニ因循シ、曾テ行レズ、近年仁孝天皇倚廬ニ居リ、帶經シ給ヘリ、今西海ノ某國ニハ、父母ノ喪ニハ、五十日麻布ヲ着ル所モ有リ、是モ實ハ定服ノ日數ニハ非ズトイヘドモ、當時ニ於テハ、天下ニ希ナルユエ、斯ル所ハ最貴アルベキナリ、夫孝ハ萬善之長、百行之本、孝悌ニシテ上ヲ犯ス者無シ、上ヲ犯ス者無ンバ、兵氣何ノ所ヨリ起ランヤ、今士庶人モ、間ニハ三年ノ喪ヲ勤ル者ナキニ非ザレドモ、上遠

一伯叔父母但母方十日忌二十日

七日

一兄弟姊妹

忌二十日

七日

一異父兄弟姊妹

忌十日

三日

一嫡孫

忌十日

三日

一末孫

忌三日

一日

一曾孫玄孫

忌三日

一日

一從弟

忌三日

一日

一甥姪

忌三日

一日○中略

右朱書之通、日數相立候は、向後下御勘定迄出勤可有之事、

寶曆四戌年十一月。

〔憲教類典三之十五〕享保元丙申年二月

忌有之者立合内寄合江出座之事

一忌中之時、立合内寄合出座之義、父母之外之忌中は、日柄立候は、出座可致候、左候得ば廿日之

忌中は七日立候は、致出座候様可相心得、旨伺之上相極候事、

〔憲教類典三之十五〕享保十八癸丑年四月十六日

水野主膳

實母死去ニ付、出火之節、濱御住居江被相、詰候儀如何可仕哉と被伺候、忌之内は罷出ニ不及候、

三日過候は、家來計可被差出候、尤仲々間中江可被申合候、

右之通申渡候間、可被得其意候、

〔天明錄五〕服忌輕重



父母之忌は三十五日過、其外廿日程之忌は七日過、輕忌產穢等之儀は右に准じ、日數相立候は、下御勘定所迄罷出候様可仕候哉、尤差掛候御用向も有之節は、御殿御勘定所迄罷出御用相立候様可仕候哉、

右之趣堀相模守殿へ御頭衆御伺被成候處、伺之通可致旨、但御殿へ罷出候儀は、可爲無用旨被仰渡候ニ付、爲御心得申進候様、御頭衆被仰聞候間、如斯御座候以上、

酉十二月十三日

大塚權之助

兒玉喜兵衛

忌日數之内、下御勘定所へ出勤日數書付、父母之忌は三十五日、其外廿日程之忌は七日過、輕忌產穢等之儀は右に准じ、日數相立候は、下御勘定所迄罷出相動候様可仕旨、去ル酉十二月伺之上、右之通被仰渡候ニ付、右日限ニ准じ、其外輕忌產穢等迄、日割左之通、

一 父母 但養父母も同斷 忌五十日 三十五日

一 嫡母 忌十日 三日

一 繼父母 忌十日 三日

一 離別之母 忌五十日 三十五日

一 妻 忌二十日 七日

一 嫡子 忌二十日 七日

一 末子 忌十日 三日

一 養子 忌十日 三日

一 祖父母 但母方二十日七日 忌三十日 十日

一 曾祖父母 忌十日 三日

御不幸、服忌掛へ伺候處當丑閏五月より來寅五月迄之由、御差圖有之由也、又例同年安藤對馬守様にも有之候、閏月仕廻之月に有之時も、閏月をかぞへ不申候事、閏月中ニ有之時は勿論候、閏月仕廻ニ有之候伺之例、安永七戌年土屋健次郎様ニ而、御掛へ伺候處、初之七月迄ニ而、後之七月數ニ入不申候由、御差圖相濟、

〔晉書〕

志十

事康二年七月、簡文帝崩、再周而遇閏、博士謝攸、孔叅議、魯襄二十八年十二月乙未、楚子

辛實閏月而言十二月者、附正於前月也、喪事先遠、則應用博士吳商之言、以閏月祥、尙書僕射謝安中領軍王劭、散騎常侍鄭襲、右衛將軍殷康、驍騎將軍袁宏、散騎侍郎殷茂、中書郎車胤、左丞劉遵、吏部郎劉耽、意皆同、康曰、過七月而未及八月、豈可謂之臘、非必所不了、則當從其重者、宏曰、假值閏十二月、而不取者、此則歲未終固不可得矣、漢書以閏爲後九月、明其同體也、襲曰、中宗肅祖皆以閏月崩、祥除之變、皆用閏之後月、先朝尙用閏之後月、今閏附七月、取之何疑、亦合遠日申請之言、又閏是後七而非八也、豈臘月之嫌乎、尙書令王彪之、侍中王混、中丞譙王恬、右丞戴謐等議異、彪之曰、吳商中才小官、非名賢碩儒、公輔重臣爲時所準則者、又取閏無證據、直攀遠日之義、越祥忌限、外取不合卜遠之理、又丞相桓公符論云、禮二十五月大祥、何緣越非取閏、乃二十六月乎、於是啓曰、或以閏附七月、宜用閏月除者、或以閏名雖附七月、而實以三旬、別爲一月、故應以七月除者、臣等與中軍將軍冲參詳一代大禮、宜準經典、三年之喪、十三月而練、二十五月而畢、禮之明文也、陽秋之義、閏在年內、則略而不數、明閏在年外、則不應取之以越非忌之重、禮制祥除、必正非月故也、己酉晦、帝除縞、卽吉、徐廣論曰、凡辨義詳理、無顯據明文、可以折中、奪易則非疑如何、禮疑從重、喪易寧戚、順情通物、固有成言矣、彪之不能徵、故正義有以相屈、但以名位格人、君子虛受、心無適莫、豈其然哉、執政從而行之、其殆過矣、

〔公裁錄〕

五

忌服并出勤日數之事

間假令去年九月有父喪之者、今月已十三ヶ月也、自來月可從神事之處、有閏九月、猶可爲忌月哉否、非無不審父母服一年、以十三ヶ月爲限、不計閏月云々、是則閏月者依本月歟、然則閏九月可爲忌月歟云、先例云、法意若會釋者尙欲承矣、而已、

貞永九年九月廿一日

答就問狀案法意者、父喪之者、十三ヶ月之中、有閏月之時、可着十四ヶ月服相當十三ヶ月外者、除閏月可終其服、仍於來月非服之限而已、

大判事從五位下明法博士左衛門尉中原章久

義解曰、謂以十三ヶ月爲限、不計閏月者、就之言之、不計閏月者、十三ヶ月之中之閏月也、是稱年者用三百六十日故也、及十三ヶ月是得三百六十日、紀者節也、喪服之法給之是以十三ヶ月、一月、七月、皆一節也、然則十三ヶ月之外、閏月更非可爲忌、今被從神事、不可有其憚矣、

明法博士中原章行子時左衛門少尉中

〔文保記〕閏月服事

十三ヶ月内閏月依爲一廻内忌之、十三ヶ月之外閏月不忌之、假令正月父母喪者、翌年正月雖有閏月不忌之、法家勘答雖爲不同、已載此目六治定畢、

〔神祇道服紀令秘抄〕一父母ノ逝去、去年正月ナレバ、今年正月マデノ可爲服、然ニ今年正月ニ有閏トモ、閏月ヲバ不可服之、前月ヲ以テ可爲本也、見禮元閏正十一家記

〔服忌令撰註分釋〕父母

忌五十日服十三月也、五十日之日取は、一日之積りは、今子之刻より明日夜之子之刻迄を一日の積とす、服十三月は其月數之内、閏月有之候得ば、都合十四ヶ月ニ成ル也、期月之晦日を限とす、閏月より忌中に成り候へば、閏月をかぞへ申候例、天明元丑年五月廿三日、板倉左近將監様御母様

〔晉書志九〕太康初，尚書僕射朱整奏，付尚書郎韓處討論之。處表所宜損增曰：臣與校故太尉頤所撰

五禮，臣以爲夫革命以垂統，帝王之美事也。降禮以率教，邦國之大務也。是以臣前表禮事稽留，求速

訖施行，又以喪服最多疑闕，宜見補定。又以今禮篇卷煩重，宜隨類通合，事久不出，懼見疑嘿。蓋冠婚

祭會諸吉禮，其制少變。至於喪服，世之要用，而特易失旨。故子張疑高宗諒陰三年，子思不聽其子服

出，母子游，謂異父昆弟大功，而子夏謂之齊衰，及孔子沒，而門人疑於所服。此等皆明達習禮，仰讀周

典，俯師仲尼，漸漬聖訓，講肄積年，及遭喪事，猶尚若此，明喪禮易惑，不可不詳也。况自此已來，篇章焚

散，去聖彌遠，喪制詭譎，固其宜矣。是以喪服一卷，卷不盈握，而爭說紛然。三年之喪，鄭云二十七月，王

云二十五月，改葬之服，鄭云服總三月，王云葬訖而除。繼母出嫁，鄭云皆服，王云從乎繼，寄育乃爲之

服，無服之殯，鄭云子生一月，哭之一日，王云以哭之日，易服之月，如此者甚衆。喪服本文省略，必待注

解，事義適彰，其傳說差詳。世稱子夏所作，鄭王祖經宗傳，而各有異同，天下並疑，莫知所定，而顛直書

古經文而已。盡除子夏傳，及先儒注說，其事不可得行，及其行事，故當還顧異說，一彼一此，非所以定

例也。

〔令義解九〕凡服紀爲君前天父母及夫，本主。○註一年，謂以十二月爲限，不計閏月。其五月以

〔令集解四十〕釋云：師說云，一年服者以十三月爲限，五月以下計日先宜。古記云，一年謂十三月也。五月

謂計月之數滿五月耳。三月謂計月之數滿三月耳。一月謂計三十箇日爲一月耳。穴云，五月以下服計

日如令釋也。以百五十日爲五月耳。或云五月三月計月，於一月計日爲下也。

〔滋草拾露服儀雜事〕期喪當十四ヶ月，有閏月進退事。下如閏月先

古記曰：期喪閏月相當十三ヶ月之外者，除閏月事。重服者不計閏月十三ヶ月也。假令當十四ヶ月，而

閏月有之時者，十三ヶ月服限既罷過之間，閏月一日吉服也。

勘例



一白川家爲伯職服忌之事沙汰來事、永正時分以來之事歟爲神祇職甚以不可然、服忌之事、法家之輩家業之事也、伯卿申沙汰之事、當時法家如無之間如此歟、不便々々、誠零落事可悲歟、

〔享保集成絲繪錄<sup>十七</sup>〕元文元<sup>辰</sup>年九月

服忌令追加、此度林大學頭其外儒者共へも吟味被仰付候而被書加、或被相除、或省略之所も有之候、只今迄は服忌之儀臨時ニ林大學頭<sup>江</sup>被承合候へ共委細被相載候上は、大學頭へ承合候ニ不及紙面ヲ以平日相糺し置可被申候、若難心得所も候はゞ、兼々大目付御目付へ承合置、向後差懸リ尋候儀無之様ニ可被致候、

一所々<sup>江</sup>相渡候服忌令敷通之儀ニ付、若書違等有之候而は如何ニ候間、板行申付候、大目付御目付より可相渡候間、承合可被請取候、

〔享保集成絲繪錄<sup>十七</sup>〕元文元<sup>辰</sup>年十月

此度服忌令追加之内被除加候ニ付、先達而も相觸候通、難心得處は、此節大目付御目付之内<sup>江</sup>彌承合相糺置可被申候、若此節糺不置差懸リ尋候様成義も候はゞ、可爲不念候、尤延引之品急度可承届候間、此旨可被存候、

右之趣詰合之面々<sup>江</sup>寄々可被達候

〔天明集成絲繪錄<sup>二十三</sup>〕安永四<sup>未</sup>年七月

大目付

御目付

<sup>江</sup>

諸向より忌服之儀承合有之節掛り一同申談候上ニ而、挨拶有之事ニ候、差掛り候儀も候節差支にも可相成候、兼て掛り申談置、差定り候儀者、早速挨拶有之候様可被致候、入組候儀ニ而、手間取候談も有之候はゞ、伺之上挨拶も可有之候間、其節者、其譯承合候人<sup>江</sup>も申聞置候様可被致事、

孫甥姪從弟、曾孫、玄孫等也。

片服忌ニ成は、孫甥姪繼子、嫁并養子願出未濟内養子死去等也。

〔兼胤卿記〕寶曆二年十二月廿二日、攝政殿被命諸家假服不守令條、或白川吉田等家ニ私之服假之趣も被用、甚混雜、至地下者、猶以様々有之、甚如何候間、自今諸家之輩、守令條候様より可申達之由也、兩人申云、此間も樋口母服忌ニ付、指かゝり往來も有之、如何ニ候、今度諸家一統母之書付被召置可然、其節御不審も有之候は、御尋等有之、常ニ養實繼母之譯、相立候様致度由申入、尤之由有命、近日仰職事被召寄可給候由也、廿六日、頭中將被示、近年地下之輩、假服紛敷事共有之候ニ付、自今一統ニ令之趣を守、他說不可用候、但父母之假五旬、養父母讓受候は、五旬之假一年之服普通之通ニ可覺悟候、無服之殯ハ、近代不及其沙汰、可任所意之段、攝政殿道香一條命之趣、諸司諸大夫坊官不被申渡候、尤假服之節兩頭ハ、相屆候様、是又被命候、此段西本願寺候人ハ、可申渡之由也、相尋候處、坊官候人、俗之通可爲服假之由、攝政殿被仰之由也。

今日攝政殿兩頭ハ、御渡之書付借請、寫注如左、

一諸家忌服紛敷、殊母之儀、養實繼之差別、近年猶更紛敷候、諸家ハ被尋母之儀書付可被取事、

一地下輩諸司諸大夫忌服紛敷候間、令之趣相守、他說用間敷候、尤養子爲養父母、五月服ニ有之候、雖然相續讓受候輩ハ、近例之通、一年服ニ候、五旬之假、是又普通之例ニ候、七歳未滿無服假者、近年

無之候、其人々之可任所意事、

一吉田白川藤波以神家法被立服忌候、併堂上列ニ被加候上者、令之趣可被守事、

一祠官等、一社ニ而、社法相立候者、格別禁中之儀ニ而者、社法不申立、令之趣可相守事、

一諸大夫坊官、社司百官、略ニ乗候分ハ、各忌服之書付可出事、

〔基量卿記〕元祿六年二月廿八日

附 書面父母之親類相互に定式之通にて、名字授候計に准じ、其親類服忌無之、  
猶子

猶子之儀、服忌令御定無之候ニ付、前々より問合有之候而も、挨拶におよびがたき旨挨拶仕來候、  
其譯は猶子之義者、公家衆寺院等之外、御家に無之、御條目にも無之、服忌令御定にも不被書載哉  
に相心得罷在候し、かれども稀には武家にも猶子有之、右服忌之儀、承合候向も有之候得共、忌服  
之品計りに無之、一體猶子之名目、前條之通り御定無之候事故、御定無之品有無相答候得者、則有  
無之極ニ相成候ニ付、前々より有無とも不相答仕來ニ御座候、元文之度、服忌令御改正之砌、洩候  
分、其外委しく御書載可然旨、掛り一同評議之上、相伺候處、數々條御附札之内、すべて服忌令江不  
書載分者、彌以不及沙汰と有之候間、猶子之服忌、不及沙汰之旨、相答候段、此度被仰渡候趣に而者、  
行届不申事、恐入候、以來猶子服忌之沙汰ニ不及本姓之親類、定式之通受可申旨、取極候事、  
養子江御給分被下候時分、配當せざる養子迎も、其父之爲ニ者、養子被召出、御給分等被下置候得  
者、分地配當同前に忌服受申候哉、養實親類共に、分地配當之養子之通、忌服受可申候哉、

附 書面之通は服忌令に不書載上は不及沙汰、服忌令ニ有之は三十日百五十日ニ而候、

〔喪服議例抄〕雜事

服忌之半減之半減と申儀無之處、父之稱替之伯父、他處へ相頼之養子ニ相成、半減之半減、忌五日  
服二十三日請候届之例有之、

養實ニ而半減之服忌ニ相成候は、祖父母、伯叔父姑、兄弟姉妹、異父兄弟姉妹計、此外之親類は、半減  
之事無之、且又異父兄弟姉妹之子甥姪は、養實ト不相成候共、元來半減之服忌は勿論之事、右甥姪  
他へ養る者は服忌無之、

服忌無之分は、大伯叔父姑、從弟、連、又甥姪、娘方之曾孫玄孫等也、實方と成時は、高祖父母、曾祖父母、

幼年ニ而相果、家斷絶之者、家筋思召を以、名跡相續、同姓之内江、被仰付候者、養父之通、定式之服忌受之。右親類家督相續之養子之通、服忌受候哉、右養父之妻、婚儀不相整、養母とは難申、此服忌如何候哉、但妻家之娘歟、養女ニ而、右幼年之者、娶養子ニ而婚儀不相整候得者、名跡被仰付候者之爲、叔母定式之服忌ニ候哉、

附 書面名跡相續致候得ば、右親類家督相續之養子之通、服忌受之、養父之妻ニ可相成娘婚儀不相整、内養父病死致候得者、養母之名目無之、家之娘歟、養女ニ而候得者、養方叔母定式之服忌ニ而候、并ニ相果候者之父母、存命ニ候得者、祖父母定式之通、服忌受可申之、

御抱

養子之名目無之候、共名跡相續致候得者、養父母家督相續之通心得可申、例有之、略、

故有之、蟄居等被仰付、他より名跡相續被仰付候上、右蟄居之者死去之時、親之通、服忌受可申哉、

附 右蟄居之者死去之時は、養父定式之通、五十日十三月可受之、

番代

苗字讓受候ニ者無之、元同姓之甥を以、番代相立、厄介家財引受候者、

附 書面之通は、同姓之甥、番代ニ相立、厄介家財引受候得者、名跡相續者、養子ニ准じ、養父母并養方親類相互ニ定式之服忌ニ而候、且又御抱替番代ニ相立、家財厄介不引受候とも同様之事、

苗字授

母方名跡及斷絶候ニ付、父方之名跡者、嫡子相續いたし、二男三男之内、母方之苗字相唱へ、其身之力を以、仕官又は家業も宜先祖之祭祀をも相勤、名跡引起候得者、遺跡相續之養子ニ准じ、右母方之親類相互ニ定式之服忌を受、父方親類者、實方ニ准じ、相互ニ半減之服忌を受可申哉、又者遺跡相續せず、分地配當せざる養子に准じ、養方兄弟姉妹相ながひに半減之服忌を受可申哉、



右五十日遠慮

一婚姻不調夫、祝儀取替せ候時、

右三十日遠慮

一婚姻不調妻、祝儀取替せ候時、

右二十日遠慮

一方曾祖父母

一方高祖父母

一七歳未満之小兒親類

一聞忌明け候時

一義絶之親類より爲知なく、忌明け外より承り候時、

一出棺當日○中略

右一日遠慮

一如何様入組候とも、相互に定式に可受ものは父子也、

一一段にて切れ候ものは、曾祖父母、高祖父母、從弟、從弟女也、

一半、可受續は、祖父母、伯叔父、姑、兄弟姉妹、異父兄弟姉妹、同甥姪也、

一半、就より服忌不減もの、額は、祖父母、伯叔父、姑、兄弟姉妹、異父兄弟姉妹也、

一片服忌に成候ものは、孫、甥、姪、繼子、養妻之子より、嫡母、養方曾孫、玄孫、并養子、願書老中受取、願不

濟内養父母、母、大概是也、

〔服忌令公案集成〕服忌令無之雜事

名跡相續

一 退身之嫡子

一 義絶之嫡子

一 末子 次男より何人にて

一 父高祖父母

一 母伯叔父姑

一 異父兄弟姉妹

一 嫡孫 女子は最初に生れても末子に准ず

右忌十日 服三十日

一 末孫

一 曾孫玄孫 無方には服忌なし

一 甥姪

一 從弟

一 從弟女

右忌三日 服七日

一 異父兄弟姉妹之甥姪

右忌二日 服四日

一 七歳未満之子

一 妾 出生有之時、但流産血産有之計にては遠慮無之、

右三日遠慮

一 七歳未満之者、養父と定る時、

右忌五十日 服十三月 四月なかぞへす

七歳未満之者は五十日遠慮

一 養父母遺跡相續無之

一 父祖父母

一 失之父母 養育有之時は養父母計

右忌三十日 服百五十日

一 妻

一 嫡子 女子は最初に生れても末子に准す

一 家督と定る養子

一 母祖父母

一 父曾祖父母

一 父伯叔父姑

一 兄弟姉妹

一 嫡孫承祖

右忌二十日 服九十日

一 夫

右忌三十日 服十三月 四月なかぞへす

一 嫡母

一 繼父母

一 養子并養女

父も養子、其身も養子之時は養子之實方服忌無之、若實方ニ付而半減之服忌可受續有之者、服忌可受之、

一半減之服忌に祖父母伯叔父姑兄弟姉妹有之は、母方之祖父母伯叔父姑異父兄弟姉妹も同例、一嫡子を人の養子に遣す時は服忌末子之如くたるべし、  
石七ヶ條更増補之、

元文元辰年九月十五日

別紙添書

一父妾を妻に准じ候忌服之箇條、此度被相除候、然共享保十八年、妾を妻に致候儀、可爲無用旨被仰出候以前、相届置候者は、只今迄之通たるべく候、

一父計之養子、母計之養子、忌服之箇條、此度被相除候、然共相濟有之分は、只今迄之通可爲候、  
九月

（服忌令）服忌日數之事

一父母

一遺跡相續之養父母

一無縁付候養父母

一義絶之父母

一嫡母繼母を以養母に定る時、

一離別之母

一實母妾、父假差出候ても、

一嫡孫承祖之祖父母へ



者の妻は、養母に可<sub>レ</sub>准<sub>レ</sub>之、死去候者七歳未満に候は、服忌無<sub>レ</sub>之、五十日可<sub>レ</sub>遠慮、死去候者の親類は、相互に定式之服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、實方之親類は、父母は定式之服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、祖父母伯叔父姑は、半減之服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、兄弟姉妹は、相互に半減之服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、此外之親類服忌無<sub>レ</sub>之、

一 養子願書差出<sub>レ</sub>之、老中請取<sub>レ</sub>之、其以後死去候は、家督不定内にても、養父母計五十日十三ヶ月服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、

一 半減之日限、三十日は十五日也、餘は准<sub>レ</sub>之、

但七日は四日也、三日は二日也、

一 一日と有<sub>レ</sub>之は、當夜之九時より明る夜之九時迄也、九時前に候へば、たとひ四半時過にても一日之積也、

右十六ヶ條、元祿六年追加之内也、今般聊省略而書載す、

一 妾腹之子、其父嫡母繼母ヲ以養母に定る時は、忌五十日服十三月可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、母方之親類之服忌、養實之差別、家督相續之養子之如くたるべし、嫡母の子、繼母之服忌においても、父之極次第右に同じ、但繼母之親類には服忌無<sub>レ</sub>之、

一 家督相續之養子たる者、實方之養母嫡母繼母服忌無<sub>レ</sub>之分地配當せざる養子は、右之服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、

一 養方之伯叔父姑兄弟姉妹、人に養はる、者は、半減之服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、實方之伯叔父姑兄弟姉妹、他家より養る、者も服忌無差別、

一 其身養子に參り、實方之伯叔父姑兄弟姉妹之内人に養はる、といふ共、其儘半減之服忌たるべし、

一 父養子ニ而、其子人之養子に參り候時は、父之父母兄弟姉妹、養實共に半減之服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、或は

〔享保集成絲綸錄 十七〕元文元 辰 年九月

服忌令○中

追加

一 養父死去以後、養母同居せずといふ其他へ不嫁候得ば、服忌可受之、他へ嫁するにおひては服忌無之、

一 養父之妻、養はれざる以前に死去候はゞ、嫡母に准じ、其親類服忌無之、

一 父之後妻と通路いたし候はゞ、對面無之、共繼母之服忌可受之、

一 義絶之嫡子之服忌は、末子に可准之、此外之親類義絶といふ共服忌別義なし、

一 女子婚儀以前より養はれ、或は入贅を取り、家督相續之時は、養方之親類實の如く、相互に服忌可受之、

一 婚儀未相調内にても、祝儀取かはし候へば、夫婦相互に定式之忌之日數可遠慮、

但服無之

一 父之妻服忌無之

一 妾は服忌無之、但子出生においては三日遠慮、血荒流産有之計にては、妾死去之時遠慮無之、

一 遺跡相續せず、或は分地配當せざる養子、養方之兄弟姉妹他家江養はるゝ者には、相互に服忌無之、

一 同姓に而も異姓に而も、一人江兩様之つゝ、有之は、重き方之服忌可受之、

一 名字を授候計にては、相互に服忌無之、本姓之方之親類、定式之通服忌可受之、

一 離別之女は、縦實子有之、他人へ不嫁候共、夫婦之縁きれ候故、相互に服忌無之、

一 子無之死去候者、名跡相續のため、新規に家督相續之時は、養父之時の如く服忌可受之、死去候

一父母養子に參候は、稱替りの伯叔父姑は、三日之忌七日之服可受之、

〔服忌令撰註分釋<sup>天</sup>〕服忌令箇條被除候十ヶ條

元文元<sup>辰</sup>年四月服忌令箇條被除候十ヶ條、左之通當時不用分、

一家財讓請候恩深き養子者、分地配當と可爲同然、

一遺跡相續之養子、又は實方之分地をも請候而實方養方之親類兩様共輕重なく、相互に定式之通可受之、

一養子たるもの實方之嫡母ニ而も、養育を請候は、遺跡相續之養子の嫡母繼母半減之服忌可受之、相續せざる養子は、嫡母繼母定式之通可受之、

一婚禮ニ付養娘に相成候分、養父母は定式之通可受之、養方之兄弟姉妹は相互に半減之服忌可受之、此外之親類は服忌無之、實方親類定式之通相互に服忌可受之、

一父之妻妾に准する時は、繼母之服忌可受之、養子たるもの養子之妻も同斷、

一父計之養子、母方<sup>江</sup>者服忌無之、母計之養子父方<sup>江</sup>者服忌無之、養方兄弟姉妹相互に半減之服忌可受之、此外親類服忌無之、實方親類之服忌定式之通可受之、

一母之縁を受候子者、母方之親類母方同然服忌可受之、總而女より縁を受、養ひに相成候もの、遺跡相續之養子之通服忌可受之、

一父方之祖母之父母、曾祖母之母方ニ候間、服忌無之、遠慮一日、

一娘方之孫、姉妹之方之甥姪、父之姉妹方之從弟、稱替候間、母方に可准、

一父母養子に參り候もの、稱替之伯叔父姑は、三日之忌七日之服可受之、

右之通拾ヶ條御除被成候上は、服忌不及沙汰候事、

以上

一名字を授候計にては、相互に服忌無之、本姓方の親類定式之服忌可受之

一父計之養子に候は、江母は服忌無之、母計之養子に候は、江父は服忌無之、父計養子は、父方の親類の服忌計可受之、母計之養子者、母方の親類之服忌計可受之、但養父之妻死去之時、養子致同居候は、三十日遠慮すべし、養母之夫も同例也、父計之養子も、母計之養子も、養兄弟姉妹には服忌無差別、

附子分に致し候迄にては、相互に服忌無之、

一子無之死去候もの、名跡相續のため、新規に家督相續之時は、養父のごとく服忌可受、死去候者之妻は養母に准すべし、死去候者七歳未満に候は、服忌無之、五十日遠慮すべし、死去候者之親類は、相互に定式之服忌可受之、實方の親類は、父母は定式之服忌可受之、祖父母伯叔父姑は半減之服忌可受之、兄弟姉妹は相互に半減之服忌可受之、此外親類服忌無之、

一養子願書差出、老中請取之、其以後死去候は、家督不定内にても養父母計五十日十三ヶ月の服忌可受之、

一半減之日數三十日は十五日也、餘は准之、

但七日は四日也、三日は二日也、

一日と有之は、當夜之九時より明ル夜之九時迄也、九ツ前に候得者、たとひ四ツ半過にても一日之積也、

元祿六年十二月廿一日

〔享保集成絲綸錄十〕元祿十一寅年六月

服忌令追加之書付被仰出之、因茲大目付并御目付より諸向江書付相渡之、

一娘方之孫、姉妹方之甥姪、父之姉妹方之從弟者、種替り候間、母方に可准之、



追加

一養父死去以後、養母同居せずといふ其他へ嫁せず候得ば服忌可受之、他<sup>レ</sup>嫁するにおゐては服忌無之、

一養父の妻養はれざる以前に死去候はゞ、嫡母に准じ、其親類服忌無之、

一妾腹の子、嫡母死去以後後妻と致通路候はゞ對面無之とも繼母之服忌可受之、養育を受候はば養母定式之服忌可受之、

一義絶之嫡子の服忌は、末子に准すべし、此外の親類義絶といふども、服忌無別儀、

一家財受候思深き養子は、分地配當と同前たるべし、

一遺跡相續候養子、又實父之分地をも受候はゞ養方實方の親類兩様ともに輕重なく相互に定式之通服忌可受之、

一養子たるもの、實方の嫡母にても繼母に而も養育を受候はゞ遺跡相續之養子は、嫡母繼母半減之服忌可受之、遺跡相續せざる養子は、嫡母繼母定式之服忌可受之、

一女子婚儀以前より養はれ、或は入婿を取家督相續之時は、養方の親類實のごとく相互に服忌可受之、婚儀に付養娘に成候分は、養父母は定式之服忌可受之、養方の兄弟姉妹は、相互に半減之服忌可受之、此外の親類は服忌無之、實方の親類は、定式之通相互に服忌可受之、

一婚儀未相調内にても、祝儀取替はし候得ば、夫婦相互に定式之忌の日數遠慮すべし、但服無之、

一父之妻服忌無之、但父妻に准する時は、繼母之服忌可受之、養子たるもの養父の妻も同例、

一妻は服忌無之、但子出生におゐては三日遠慮、血荒流産有之計に而は、妾死去之時遠慮無之、

一遺跡相續せず、或分地配當せざる養子、養方の兄弟姉妹他家へ養はる、者は、相互に服忌無之、

一同姓にても異姓にても、一人<sup>ハ</sup>兩様之つゞき有之ば、重き方の服忌可受之、

一曾孫玄孫

忌三日

服七日

娘方には曾孫玄孫共に服忌無之、

一從父兄弟姊妹

忌三日

服七日

父の姉妹の子并母方も服忌同前

一甥姪

忌三日

服七日

姉妹の子も服忌同前

一異父兄弟姊妹之子も半減之服忌可受之

一七歳未満の小兒は無服忌

父母は三日遠慮其外之親類は同姓に而も異姓にても一日遠慮日數過承候はゞ追而不及

遠慮但八歳より定式之服忌可受之

附七歳未満の小兒之方<sup>江</sup>も服忌無之父母死去之時は五十日遠慮其外之親類は一日遠慮

父母は年月を経て承候ども聞付る日より五十日遠慮すべし

一聞忌之事

遠國におゐて死去年月を経て告來ると云ども父母は聞附る日より忌五十日服十三ヶ月

外之親類は聞附る日より服忌殘る日數可受之忌の日數過て告來ば一日遠慮服明候ども

同前

一重る服忌之事

父の服忌未明内母の服忌有之ば母之死去の日より五十日十三ヶ月の服忌可受之おもき服忌之内かろき服忌有之日數終ば追而不及受服忌日數あまらば殘る服忌之日數可受之

略○中

家督と定る時は嫡子の服忌可受之

一 夫之父母

忌三十日

服百五十日

一 祖父母

忌三十日

服百五十日

母方

忌廿日

服九十日

離別せられ候祖母も服忌無別儀

一 曾祖父母

忌廿日

服九十日

母方には服忌無之但遠慮一日

一 高祖父母

忌十日

服三十日

母方には服忌無之但遠慮一日

一 伯叔父姑

忌廿日

服九十日

母方

忌十日

服三十日

一 父母稱替之兄弟姉妹は半減之服忌可受之

一 兄弟姉妹

忌廿日

服九十日

別腹たりといふとも服忌に無差別

一 異父兄弟姉妹

忌十日

服三十日

一 嫡孫

忌十日

服三十日

嫡孫承祖たる時は嫡子之服忌可受之祖父母死去之時も嫡孫の方江も五十日十三ヶ月之

服忌可受之此外之親類服忌無差別曾孫玄孫たりといふとも同例也

一 末孫

忌三日

服七日

女子は最初に生れても末孫に准ず娘方の孫服忌同前

如く相互に服忌可受之、實方の親類は、父母は定式の服忌可受之、祖父母伯叔父姑は、半減之服忌可受之、兄弟姉妹は、相互に半減之服忌可受之、此外之親類は服忌無之、遺跡相續せず、或は分地配當せざる養子は、同姓にても異姓にても、養父母は定式之服忌可受之、養方の兄弟姉妹は、相互に半減之服忌可受之、此外之親類は、服忌無之、實方の親類は、定式之通相互に服忌可受之、

一 嫡母

忌十日

服三十日

對面無之候は、不可受服忌、致通路候は、對面無之共服忌可受之、父死去之後他へ嫁し或父離別するにおゐては、妻の子不可受服忌、但嫡母之親類は服忌無之、

一 繼父母

忌十日

服三十日

初より同居せざれば無服忌、

父死去之後繼母他へ嫁し、或は父離別するにおゐては、不可受服忌、但繼父母の親類には服忌無之、

一 離別之母

忌五十日

服十三月 同月なかぞへす

一 夫

忌三十日

服十三月 同月なかぞへす

一 妻

忌廿日

服九十日

一 嫡子

忌廿日

服九十日

家督に遣し候而も服忌無差別、家督と定る時は、嫡子之服忌可受之、

一 末子

忌十日

服三十日

養子に遣し候ても服忌無差別、家督と定る時は、嫡子之服忌可受之、

一 養子

忌十日

服三十日



一同姓にても異姓にても、江一人様之續有之ば、重き方の服忌可受之、

一縁類之名氏を授候計にて、分地配當無之候は、ハ本姓之方の親類定式之通服忌可受之。○中

以上

口上之覺

最前相渡候追加之書付、被致無用、此追加之趣可被用候、服忌本書は、最前之通少も相違無之候間、  
左様可被心得候以上、

貞享五辰五月十日

〔御當家令條三十六〕服忌令追加

一子無之死去候者、名跡相續のため、親類縁者之内、又は他人に而も、新規に知行被下候は、ハ家督相續之養父のごとく服忌可受之、死去候もの、妻は養母同前たるべし、死去候者、七歳未満に候は、ハ服無之遠慮可仕候、死去候もの、親類は、不殘相互に定式之服忌可受之、實方の親類は、父母は定式之服忌可受之、伯叔父姑兄弟姉妹は、半減之服忌可受之、外之親類は、相互に服忌無之、

一養子願書指出年寄共請取之、其以後死去候は、ハ家督不被仰付内にても、致死去候日より、定式之通五十日十三ヶ月忌服可受之。○中

右は元祿五年申九月十三日被仰出之、

〔御當家令條三十六〕服忌令

一父母

忌五十日

服十三ヶ月 四月をいぞへす

一養父母

忌三十日

服百五十日

遺跡相續、或は分地配當之養子は、實父母のごとし、同姓にても異姓にても、養方の親類實の

一父母と稱替之伯叔父姑は、半減之服忌可受之、

一異父兄弟姉妹之親類は、相互に半減之服忌可受之、

一母方之親類、父不通候とも服忌無別儀、養母之親類も同前たり、

一嫡子相果候以後、次男にても家督と定る時は、其服忌嫡子に准すべし、次男にても家督と定ざる時は、末子に准すべし、

一義絶の子も服忌差別なし、嫡子たりといふ其末子に可准之、外の親類同姓たるにおゐては、定式之服忌可受之、

一家財受候恩深き養子は、分地配當と同前たるべし、

一他家之遺跡相續之養子、又實父之分地をも受候者、養方實方親類兩様どもに輕重なく定式之通可受之、

一他家之養子たるもの、實方の嫡母にても、繼母にても、養育せられ候はゞ、養母半減之服忌可受之、但養育無之候はゞ、服忌無之、

一女子婚儀以前より養はれ、或入婿を取、家督相續之時は、養方の親類不殘、實のごとく相互に服忌可受之、伯叔父姑兄弟姉妹は、半減之服忌可受之、此外養方の親類服忌無之、養父母伯叔父姑兄弟姉妹の方よりは、半減之服忌也、

一婚儀不相調死去候はゞ、前方祝儀取かはし候とも相互に服忌無之、

一七歳未満之小兒も、親類相果候節は、定式之服忌之年月日數相應に違慮すべし、

一父之妾服忌無之、但父妾に准する時は、繼母之服忌可受之、

一妾は服忌無之、但子出生におゐては、違慮三日、

一養子たるもの、養方の親類他家へやしなはるゝものには、服忌無之、

一 嫡子相果候以後、次男に而も末子にても、家督と定る時は、其服忌嫡子に准すべし、  
一次男にても家督と定ざる時は、末子に准すべし、

一 養娘たりといへども、幼少より養育せられ、或は入贅を取、家督相續之時は、養父母の服忌も實父母と同前、

一 義絶之子も服忌差別なし、嫡子たりといふども、末子に可准之、外の親類同姓たるにおゐては、定式之通服忌可有之、

一 同姓にても、異姓にても、一人江兩様のつゞき有之ば、おもき方の服忌可受之、

一 養子たるもの、養方の親類他家へやしなはるゝものには服忌無之、

一 半減之日數、三十日の忌は十五日也、餘は是に准す、但三日之忌は二日也、七日の忌は四日也、  
以上

貞享三年丙寅四月廿三日

〔御當家令條三十六〕服忌令追加

一 父死去之後、母他へ嫁して死去之時は、定式之服忌可受之、

一 養父死去以後、後家何方に罷在候ども、他江嫁せず候得者、家督相續之者、養母之服忌可受之、

一 養父死去の後、養母他へ嫁して死去之時は、養子服忌無之、

一 養方之母、先達而死去、一度も對面無之候はゞ、嫡母に准じ、其親類不殘服忌無之、

一 嫡母死去以後、妾腹に出生候子、繼母養育候はゞ、繼母之服忌可受之、

一 父と縁され候母は、たとひ他へ嫁せず、父死去以後、一所に罷在候ども、離別之母之服忌可受之、

一 離別之母の親類は、不殘半減之服忌可受之、

一 繼父母之親類は、服忌無之、

父の姉妹の子并母方之服忌同前。

一甥姪

忌三日

服七日

姉妹の子も服忌同前

一七歳未満の小兒は無服、但子死去之時は遠慮三日、其外同姓之親類は遠慮一日、當歳たりといふとも同前、死去の日數過候は、追而不及遠慮。

一聞忌之事

遠國におゐて死去年月を経て告來と云とも、父母は聞附る日より忌五十日、服十三ヶ月、外之親類は聞附る日より服忌殘る日數可忌之忌の日數過て告來ば、一日遠慮、服明候とも同前。

一重る服の事

父の服忌いまだ不明、内母之服忌有之ば、母の死去の日より五十日十三ヶ月の服忌可受之、不及二年服也、おもき服忌之内かろき服忌有之、其日數終ば追て不及服忌、若日數あまらば其殘る服忌之日數可受之、かろき服忌之内、おもき服忌有之ば、聞附る日より重き服忌可受之。○中略

追加

一父死去之後、母他へ嫁して死去之時は、定式之服忌可受之。

一離別之母之親類は、不殘半減之服忌可受之。

一養父死去之後、養母他へ嫁して死去之時は、養子無服忌。

一繼父母の親類は無服忌。

一父之妻服忌無之、但父妻に准する時は、繼母之服忌可受之。

一妾は服忌無之、但子出生におゐては遠慮三日。

一離別之祖母は半減之服忌可受之。



一祖父母 忌三十日 服百五十日

母方 忌廿日 服九十日

一曾祖父母 忌廿日 服九十日

母方には服忌無之

一高祖父母 忌十日 服三十日

母方には服忌無之

一伯叔父姑 忌廿日 服九十日

母方 忌十日 服三十日

一兄弟姊妹 忌廿日 服九十日

別腹たりと云とも服忌に差別なし

一異父兄弟姊妹 忌十日 服三十日

一嫡孫 忌十日 服三十日

女子は最初に生れても末孫に准ず、父死去之後、祖父の家督たる時は、祖父母たりといふ共、  
實父母のごとく服忌可受之、祖父母の方よりも嫡子に准ずべし、曾孫玄孫たりといふ共、同  
例也、外之親類は、定式之通相互に服忌無別儀、

一末孫 忌三日 服七日

娘方の孫 忌三日 服七日

一曾孫玄孫 忌三日 服七日

娘方には曾孫玄孫共に服忌無之

一從父兄弟姊妹 忌三日 服七日

遺跡相續或分地配當之養子は實父母のごとし、同姓に而も異姓にても養方之親類不<sub>レ</sub>廢實の如く相互に服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之實の方の父母は、五十日十三月の服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、伯叔父姑は半減之服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、此外實の方の親類相互に服忌無<sub>レ</sub>之、此外養方の親類は、定式之通相互に服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、

一 嫡母

忌十日

服三十日

父存生之内に而も、又父死去之後にても、他へ嫁せずして死去之時は、妻之子可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>服忌、父離別するにおゐては、妻之子不可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>服忌、

一 繼父

忌十日

服三十日

一 繼母

忌十日

服三十日

父死去之後他へ嫁して死去之時は不可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>服忌、

一 離別之母

忌三十日

服百五十日

一 夫

忌三十日

服十三ヶ月

一 妻

忌三十日

服九十日

一 嫡子

忌廿日

服九十日

女子は最初に生れても末子に准す

一 末子

忌十日

服三十日

一 養子

忌十日

服三十日

家督と相定る時は嫡子に同じ、其外の養子は、定式之通服忌可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>之、實方の父母は末子に准すべし、

一 夫之父母

忌三十日

服百五十日

一 聞忌の事

遠國におゐて死去年月をへて告來時は、父母は聞付る日より忌五十日、服十三ヶ月、其内閏月をかぞへず、縦ば今年の二月死すれば、來年の二月中は着服也、外の親類は忌の内に告來ば、其殘る日數忌べし、服忌の日數過て告來時は、無服にして半減の忌を可受、

一 重る服の事

父の服いまだ不明内、又母の服有之ば、二年服を不可着、父の服二三月過て後母の服有之ば、母の死去の月より十三ヶ月可着、服重き服の内に輕き親類の服有之ば、服を改に不及、縦ば五十日の重き服の日數四十日過て、廿日の輕き服有之節は、重き服の日數過て後、右の輕き服を着す、廿日の日數は重き服の内よりかぞふべし、輕き服の内に重き服有之ば、其聞付る日より服を改、其日數可忌、

一七歳未満小兒、自他共に無服、但遠慮、

父母 七日

外の親類は、不殘三日、母方并聞忌不及遠慮、○中

貞享元子三月朔日

〔玉海〕安元二年十月廿六日丁酉、今日有六條院遺詔、高松院遺令等云々、○中

抑高松院本服三月、然者、易月之禮、可有三日之錫紵、而日內着除如何、○中 准凡人半減之儀、歟、可尊之、

〔御當家令條三十六〕服忌令

一 父母 忌五十日

服十三ヶ月、閏月をかぞへず

一 養父母 忌三十日

服百五十日

母方

忌廿日

服九十日

一曾祖父母

忌廿日

服九十日

一高祖父母

忌十日

服三十日

一伯父叔父

忌廿日

服九十日

母方

忌十日

服三十日

一姑

忌廿日

服九十日

母方

忌十日

服三十日

一兄弟姉妹

忌廿日

服九十日

別腹たりといふ其服忌に差別なし

一異父兄弟姉妹

忌十日

服三十日

一嫡孫

忌七日

服三十日

娘方の孫

忌三日

服七日

女子は最初に生れても末孫に准ず

一末孫

忌三日

服七日

一嫡孫承祖

嫡子と同じ

祖父母も實父母に准ず

一従父兄弟

忌五日

服七日

父の姉妹の子并母方

忌三日

服五日

一甥姪

忌五日

服七日

姉妹の子

忌三日

服五日



一父母

忌五十日

服十三ヶ月

一離別之母

忌三十日

服百五十日

一嫡母

忌三十日

服九十日

父存生之内にても又父死去の後にても他へ嫁せずして死去之節は、妻の子可受服忌、又父存生之内離別其後本妻死去の時は、妻の子不可受服忌、

一繼父

忌十日

服三十日

一繼母

忌十日

服三十日

父死去の後他へ嫁して死去の時は、不可受服忌、

一養父母

忌廿日

服百五十日

遺跡相續の時は實父母の如し、此時本姓之方、不殘半減の服忌可受之、養父死去の後養母他へ嫁して死去の時は、養子不受服忌、此後實母死去の節は、本親へかへり、實母の服忌可受之、

一夫

忌三十日

服十三ヶ月

一妻

忌二十日

服九十日

一嫡子

忌十四日

服九十日

女子は最初に生れても末子に准ず

一末子

忌七日

服三十日

一養子

忌三日

服五日

家督相續之時は實子に同じ

一夫之父母

忌廿日

服九十日

一祖父母

忌三十日

服百五十日

あにおと、おなじ、あねおと、おなじ、

をどこのち、は、おなじ

め三月、いどま廿日、

おもひ人はよくなし

めひ七日、いどま三日、

父方のあにおと、が子なり、あねおと、の子にはよくなし、

うまご、ちやくしが子一月、いどま十日、するの七七日、いどま三日

おほおほちうば三月、いどま卅日、

ち、かたのいどま七日、いどま三日、

ひとつはらのあにおと、一月、いどま十日、

あねおと、おなじ

ま、ち、一月、いどま十日、

たゞし母とぐしたるが事なり

大つおほちうば一月、いどま十日、大おほちがおやなり、

母かたのおほちは三月、いどま廿日、

をちをば一月、いどま十日、

この外は、よくいどまなし、又子のよくあるべきなれど、七歳まではおはす、たゞしいどまばかりはあり、三月のよくあるべきは三日、一月のには二日、七日のには一日、ものならひたる師は、五月よくあり、あるひはなし、たゞいどま三日ばかりといへり、

〔御當家令條 三十六〕服忌令

侍服例

稱期服者十三月云大功服者九月但唐令也、本朝無之、言小功服者五月名總麻者三月輕服人節會時從吉

服祖父母之類不可着之○中

養兄弟服事

法家云養父母養子各有服之由見本條也養子服本生子不可服云々養兄弟服不見本條也○中

女子服事

故資清云女子服准庶有云々は女子無嫡庶之故云々

〔簾中抄〕服假

父母一年

きみ主これらも一年のぶくなりたゞしつかさある人はわたくしの主の服はえ着す

やしなひおや五月いごま卅日

をどこ一年妻もおもひ人もみないむべし

子ちやくし三月いごま廿日

つぎの子は一月いごま十日

やしなひ子も一月いごま十日

嫡子なれども法師になりぬれば一月いむべし

おほちうば○うば一本作以下並同五月いごま卅日

ま、は、一月いごま十日

當時おやにぐせぬは服なし

ち、かたのをちをば三月いごまはつか

服一月、假十日、假令雖有伯叔父服三月、假廿日、我父之兄為叔父、姑假廿日、服三月、兄弟姊妹三月、假廿日、本妾依生庶子有服、假伯叔父服三月、假廿日、我父之兄為叔父、姑假廿日、服三月、兄弟姊妹三月、假廿日

夫父母服三月、假廿日、我夫妻妾三月、假廿日、姪服七日、假三日、兄弟姊妹服一月、或假十日、我子也、我孫

七日、假三日、我庶子婦無服、我子之妻妾也、治部省式云、妻為夫服一年、夫為妻無服、前

三等親、曾祖父母三月、假廿日、或十日、伯叔婦無服、叔父之妻也、及夫姪無服、我子兄弟從父兄弟姊妹

服七日、假三日、我父兄弟子也、男為異父兄弟姊妹服一月、假十日、我兄弟姊妹也、夫祖父母無服、我夫之

也、夫伯叔父姑無服、我夫伯叔姑也、繼父服一月、假十日、我母之同居、不娶、養非限也、同居夫前妻妾子無服、夫

前妻妾男姪婦無服、我兄弟姊妹也

四等親、高祖父母服一月、假十日、我曾祖從祖父姑無服、我兄弟從祖父姑無服、我兄弟姊妹也、從祖伯叔父姑

父之兄弟男女、夫兄弟姊妹無服、我夫之兄弟兄弟妻妾無服、我兄弟之再從兄弟姊妹無服、外祖父

及姊妹等也、母服三月、假廿日、我母舅姨服一月、假十日、我兄弟姊妹兄弟姊妹孫無服、我兄弟姊妹從父兄弟姊妹無服、伯

叔父之甥無服、我姊妹之外甥無服、我姊妹之曾孫無服、我孫之男孫婦妾無服、我孫之妻妾前夫子

無服、臣說、非服親之限云々、今案五等親、皆是九族圖內也、即又任儀制、令次第所書等也、但至子服

年月者、已見喪葬令也、假日數者、亦有假令也、

五等親、妻妾父母無服、我婦之姑子無服、我父之姊妹無服、我子之兄姊妹子也、姨子無服、我母之姊妹子也、姪孫

無服、我曾孫外孫無服、聲無服、我女之夫也、其族類分別方族、

母方族、外祖父母三月、假廿日、舅四月、姨五月、異父兄弟姊妹三月、繼母父同居三月、

婦方族、妻三月、假廿日、妻妾前夫子、無服、妻妾父母、無服、

夫方族、夫一年、服、夫父母三月、假廿日、夫姪三服、夫兄弟姊妹四服、夫伯叔姑三服、夫前妻妾三服、

一君、本主師服條、

君、謂天子、假日、無、本主前師、儀制令不見、服、無所見、但門主服、假三日、

君所見、服一年、假日、無、本主前師、儀制令不見、服、無所見、但門主服、假三日、





下並 二曰齊衰三年杖期不杖期五月三月三日大功九月四日小功五月五日總麻三月凡為殯服

以次降一等凡男為人後女適人者為其私親皆降一等私親之為之也亦然

〔居家必用〕十六五服夫服者象天有五景地有五嶽間有五刑利法有五等故喪服有

三年實二十七箇月也蓋服者言死者既喪生者親服俱說以表心服以表貌也

斬衰喪服不言衰制而言齊衰喪服也

期年實一十二箇月謂至天道之

杖期婦人服用竹不杖期服用木

大功九月功者治布之功有精麤也九月者

小功五月輕者治布之功有精麤也九月者

三殯子已娶女子以嫁皆不為殯

長殯十九歲至十六歲中殯十五歲至十二歲下殯十二歲至八歲其

〔令義解〕凡五等親者父母養父母夫子為一等亦同也祖父母嫡母繼母伯叔父姑兄弟姊妹夫之

父母妻妾姪孫子婦為二等之父母及妻者不得復為夫之父母及子婦也曾祖父母伯叔

婦夫姪從父兄弟姊妹異父兄弟姊妹夫之祖父母夫之伯叔姑姪婦繼父同居夫前妻妾子為三等

猶子引而進之即此義也從父兄弟姊妹之伯叔姑姪婦繼父同居夫前妻妾子為三等

祖父姑謂祖父之兄從祖伯叔父姑謂從祖父之兄兄弟姊妹也夫兄弟姊妹兄弟妻妾再從兄弟

也姊妹外祖父母舅姨謂母之兄弟曰兄弟孫從父兄弟子外甥曾孫孫婦妻妾前夫子為四等妻妾父

母姑子舅子姨子玄孫外孫女孫為五等

〔令義解〕凡五等親者父母養父母祖父母曾祖父母祖父母曾祖父母祖父母曾祖父母

子亦同也謂云男子女及養子亦同戶令見文古記云則等親祖父母嫡母繼母伯叔父

子女以不答云入唯不得繼繼入耳一云照等者女亦同他准此祖父母嫡母繼母伯叔父



り穢にかゝはりたる事にもあらず

假服汚穢神事みな法度に拘りたるものにしあれば事に臨て疑あれば明法道にとはれし事

なり○中假をいみといふも神事の禁忌よりうつれる名也そのかみ忌さきこゆるは七七日

の法事のこと也いみにこもるこいふ事のありて四十九日のほど親しき人法師など本家に

こもりて念佛讀經などせし事也いみといふ名これよりうつれるかとおもへどしからず

〔居家必用十六〕服制

正服謂正先祖之體義服謂元李本族因義共處者如加服也謂本服輕而加之於重降服謂合服重而

出繼女適人報服謂報母也母被出之類報服相報服也

服紀制

〔令義解九〕凡服紀爲君子謂天父母及夫本主謂其文學家令一年謂以十二月爲限不計閏月祖父母

養父母五月謂其養子爲本生一年曾祖父母外祖父母伯叔父姑妻兄弟姊妹夫之父母謂養子之妻

亦父母謂其養子爲本生一月也嫡子三月高祖父母舅姨嫡母繼母繼父同居異父兄弟姊妹衆子嫡孫一月衆孫從父兄弟姊妹

兄弟子七日

○按ズルニ義解ニ謂以十二月爲限トアルハ令集解法曹至要抄ニ此文ヲ引キテ十三月トシ

名例律職制律等ノ疏モ亦十三月トアレバ十二月ハ十三月ノ誤ナルベシ

〔令集解四十〕凡服紀者謂君天子也謂云君天皇帝古記云君者指一人父母古記云爾雅釋親

知知於毛也謂子亦服解及夫古記云中時俗本主被出曰出母也俗云知知爾夜麻禮爾多流於毛

也一年略註祖父母案生父之考爲曾祖王父王之考爲曾祖父母父之考爲王父父之考爲王母養父母五月略註曾祖父母

古記云釋親云王父之考爲曾祖王父王之考爲曾祖父母父之考爲王父父之考爲王母外祖父母古記云釋親云母之考

父母之父母曰曾祖父母自我三繼祖父母也俗云於保保知也外祖父母古記云釋親云外

俗云王母養父母之身曰外祖父母也伯叔古記云釋親云父之兄弟也俗云兄弟兄弟古記云釋親云父之兄弟也俗云兄弟



〔源氏物語五十二〕后の宮の御きやうよく。○明石中宮のほどは猶かくておはしますに、二の宮な  
ん式部卿になり給にける、

〔令義解九喪九〕凡服。紀者、爲君親天父母、及夫、本主。○註一年

〔令集解四喪四〕古記云、問服紀者爲答服耳、年紀一種也、穴云、紀者、節也、事也、

〔新撰字鏡十三〕忌 イム カナシ

〔榮花物語七鳥邊野〕御い。みの。ほ。ども。い。み。じ。う。あ。は。れ。な。る。事。ど。も。お。ほ。か。り。か。く。て。御。法。事。の。程。に。も  
なりぬれば、花山の慈徳寺にてせさせたまふ。○中院源僧都講師つかうまつりたる程思ひやる  
べし、かやうにあはれにて御い。みの。ほ。ど。す。ぎ。ぬ、

〔安齋隨筆後編十〕忌 榮花物語卷七、とりべ野の巻に、御い。みの。程も哀におもほさる。○中是は

御服のうちをい。み。と云也、舌は服の外に、い。み。と云ふ事なし、後代は忌服とて服の外に忌と云  
事あり、令に假事令あり、服は素服をきるなり、假のいとまを給はりて、其間は奉仕せぬ也、後代  
の忌は古の假に似たり、服忌令と云書古はなし、

〔年年隨筆〕忌服と汚穢とは別事なるを、世には服中は火のけがれたるやうにおもふ人も多  
かるにや、これは凡の人のみにもあらず、書などよみて、物の意しりたる人も、なほ此まどひあ  
りげ也、つぎく、これをわきまへばや、今い。み。といふは、い。み。といふ名は外よりうつれる物な  
れど、事はいにしへいはゆる假にて、奉公せぬ日數なり、親戚の喪にあひて、かなしびまどふま  
まに官を治る事もはかなく、しからじとて、そのなげきのさむるほど宮づかへのいとま給は  
る趣なり、假事令に、凡職事官、遭父母喪、並解官、自餘皆給假、夫及祖父母、養父母、外祖父母、卅日、三  
月、服十日、七日、服三日とあり、日數などいさゝか違へるは、代々の制度の沿革にて、趣意はいま  
のいみに相當せり、かゝれば假は宮づかへにつきたる事にて、凡の人には無用の物也、もとよ

於在者乎皆存亡與生死分別言之凶禮謂之喪者鄭禮自稱身喪魯昭公自憐與人之喪字之本義  
 也凡別於死喪平聲非古也  
 從哭亡亡亦聲文此所引禮記齊邱十節釋

〔神祇道服紀令移抄〕一服トハ二親ハ十三箇月、親昵ノ服日數ホド墨染ノ衣ヲ服シテ、神事ニ不出仕、故ニ服ト云也、今ハ平人ハ墨染ノ衣ヲ服スル事稀也、然ドモ其日數ホド、其人神事ニ憚也、二親

ノ恩ヲカキ故ニ重服ト云其餘皆輕服ト云也。

〔令義解五防〕凡衛士，○中其上番年，雖有重服，謂父母也不在下限。

〔名目抄〕喪服  
重服 デレブツ  
主父母、夫、  
君、母、妻、  
輕服 キヤレブツ

○按ズルニ、重服ノ稱ハ父母ニ限レリ、夫主君ノ服ハ父母ト同ジク一年ナレドモ、重服ニアラ

ズ、名目抄ノ説非ナリ

〔滿濟准后日記〕永享三年九月十五日、一重服事、二親并灌頂師匠勿論也。

○按ズルニ、灌頂師匠ノ喪ヲ以テ重服トセシハ、特ニ灌頂ヲ重ンゼシモノナリ、

〔晴豊記〕文祿三年十月十七日今日大徳寺入院有之立成也光豊勅使立ちやうらうは、にはなれられ重ふく也勅使いかゝあるべき由吉田相尋られ候へば不衆の重ぶくさて玄にんの所へ参申さす候へばくるしからす候勅使ぬし一日のいまればかりのよし申入勅使被立候也

〔季連宿禰記〕元祿八年十二月廿一日己酉，右少史小槻陳昭來，實父喪五旬以後初所來也。遂面了，陳昭今年着陳分配也。然而重服之間來廿四日，他史可相催之由示含了。

テハ、差同ジカラザルモノアリ、要スルニ喪制ハ、中世ヨリ中陰ト相混ジタルガ如キモノアレバ、佛祭篇ニ附スル所ノ中陰篇ヲ參觀スベシ、

喪制ノ事タル、變態百出シ、多岐ニシテ迷ヒ易シ、故ニ其決シ難キ事アルニ臨ミ、往時ハ毎ニ法曹家ニ質シタリ、法曹家等ハ各、其家説ヲ守リ、或ハ其私見ヲ逞シクシテ、各、相爭ヒタリキ、後世ハ白川吉田等ノ家ニ問ヒテ定メ、又徳川幕府ノ時ニハ、大目附目附ヲシテ忌服ノ事ヲ司掌セシメシガ、其伺指令ハ、煩碎ニシテ、載スルニ勝ヘザレバ、今ハ唯其大綱ヲ擧グルノミ、

名解

〔古今和歌集<sup>十六</sup>〕は、が思ひにてよめる<sup>〇歌</sup>

〔古今和歌集打聽<sup>十六</sup>〕父母の喪は、おもひといへり、

〔下學通言<sup>三</sup>〕論禮三之三<sup>凶禮</sup>

大寶令亦爲受業師喪給假三日、私學亦同、皆因其悲慕之至情、而明人倫、民德歸厚、風俗以淳、故喪呼爲於茂比<sup>ヒ</sup>、卽思慕之義、而非汚穢之謂、近世時俗混服與忌、以爲汚穢之義、不曉悲慕自致之旨、不知君臣師弟之恩義、同骨肉、

〔詞花和歌集<sup>十</sup>〕子のおもひに侍ける比、人のとひて侍ければよめる<sup>〇歌</sup>

〔伊呂波字類抄<sup>人</sup>〕喪<sup>モ</sup>亦作<sup>モ</sup>喪<sup>モ</sup>也、音

〔古事記傳<sup>十三</sup>〕喪てふ言は麻賀事の切りたるにて、麻賀<sup>マカ</sup>を切れば麻賀<sup>マカ</sup>を切れば許に死たる

ことのみにも非ず、何事にまれ凶事を云なり、されば萬葉五<sup>三</sup>十<sup>七</sup>に鑢刻内限者平氣久安久母阿良牟速事母無裳無母阿良牟速<sup>中</sup>是等の母那久は無恙と云意なり、さて死は有が中にも凶事なる故に、其時の事を凡て母と云て、喪字を當たり、

〔貞丈雜記<sup>十六</sup>〕一人死したる時、かなしみ引こもり、喪服<sup>モツ</sup>を着して居るを喪と云、今時臙中と云は、喪中と云事をあやまりて、臙中と書也、臙臙とつゝく字にて、月のおほなるをいふ也、凶事

ヲ給シ假ノ期既ニ過ヅ所在ニ舉哀スルモノニハ減半ノ假ヲ賜フ又喪ニ居リテ重テ喪ニ過フコトハ輕服中ニ重服ニ過ヒ重服中ニ輕服ニ過フ等ノ數種アリテ其法各殊ナリ服制中ニ於テ絶異ナルモノハ關白ノ著服ナリ親屬ノ喪ニ父母ノ外ハ服セズ喪ニハ又心喪ト云フアリ心中ニ敬慎シテ通常ノ凶服ヲ著ケザルヲ云フ

喪屋ノ鋪設ハ平日ノ裝飾ヲ撤シ簾簾ヲ垂レ其緣ハ鈍色ニス臺ノ緣几帳ノ帷モ亦同色ヲ用キ調度ハ總テ黒色ニシ床ヲ下シテ地ニ至ラシメ此ニ靜居ス是ヲ土殿ト云フ居座ノ遺風ナルベシ又端午ニ菖蒲ヲ屋上ニ葺クハ例ナリ而シテ喪ニ居ルノ家ハ多ク之ヲ葺カズ喪屋ニ籠リ居リテ佛事ヲ修スル僧ヲ籠僧ト云フ抑上古ハ服紀中墓側ニ廬シテ居ルコトアリシガ中古ニ至リテハ吾家又ハ寺院ニ籠居シタリ

除服ハ凶服ヲ除クコトニテ河原ニ出デ解除スルヲ以テ常トスレドモ門前ニ於テスルアリ家内ニ於テスルアリテ一ナラズ中古以來ハ官人ハ除服ノ宜下ヲ待テテ出仕スレドモ或ハ宜旨ヲ待タズシテ出仕セシ例ナキニアラズ而シテ父母ノ喪ニハ例ニ後レテ除喪シ父現在ノ時ニ母ノ喪ニ過ヘバ早ク除服スル事アリ又服中ニハ進位陞官ノ事アルベキニアラザレドモ是モ中古ヨリ大臣ニサヘアリテ一般ノ風ト爲レリ

服者ノ神事ニ預ラザルハ其身ノ觸穢セルガ爲ナレドモ輕服ノ人ハ避ケザル事アリ而シテ北野社ノ如キ服者ノ參詣ヲ聽スモノハ特例ナリ又服者ハ公事ニ從ハザルヲ以テ例トスレドモ此例ニ背キシ事往々アリ

神職ノ服ハ伊勢神宮ニ文保記永正記アリ其他諸社ニ於テモ別ニ規定アリテ服紀ヲ制シ痛ク汗穢ヲ忌メリ齋宮齋院ノ如キハ重服ニ過ヘバ職ヲ停メ傍親ノ喪ニ於テハ月ヲ以テ日ニ易ヘテ服セリ僧尼ノ二親ノ喪ニ於ケル常人ノ異ナル所ナレドモ其餘ノ親屬ニ於



士防人ニ於テハ上番ノ年、即チ在京ノ間ニ二親ノ喪ニ遇フト云ヘドモ、官人ノ例ト絶異ニテ解任セシメズ。

父母ノ喪ニハ、酒ヲ飲マズ、肉ヲ食ハズ、帛セズ賀セズ、音樂ヲ作サズ、嫁娶セズ、兄弟財ヲ分タザルヲ以テ法ト爲シ、又服者ノ徭役ヲ蠲キテ喪ヲ行ハシメ、罪人ニ假ヲ賜ヒテ舉哀セシメタリ、舉哀トハ聲ヲ發シテ哭泣スルナリ、徳川幕府ニ至リテハ、服忌ノ令ヲ頒チテ、指紳家ヨリ外ハ、皆之ニ依ラシメタリ、指紳家ニ於テハ、大寶和銅ノ古制ノ外ニ、別ニ更革シタルコトハナカリシカド、後世ニハ多ク其時ニ臨ミ、白川家又ハ吉田家等ニ問ヒテ之ヲ行ヒタリ、忌トハ汗穢ヲ嫌惡スル意ニテ、原來神社ヨリ起リシナレドモ、亦服假ノ制ヲモ參酌セシナウンカ、又徳川幕府ノ制ニ、遠慮ト云ヒテ、吏員ノ無服ノ親ノ喪ニ遇フ者ヲシテ、尙ホ汗穢ニ觸レシヲ以テ、日數ヲ定メ出仕ヲ止メテ家居セシメタリ、且ツ忌ノ中ニハ、門戸ヲ閉ヂ、魚肉ヲ食ハズ、髣髴ヲ剃ラザル等ノ事アリテ、吏員ハ忌御免ト稱スル命ヲ受ケテ、始テ出仕スルナリ、而シテ服ノ事ハ、神社ニ詣セザルヲ除ク外ハ、殆ド名ノミアリテ實ナキガ如シ、又眉ヲ掃フコトハ、足利氏ノ末ニ起リテ、指紳家ニテハ、近代マデ之ヲ行ヘリ、又普請鳴物停止ノ令ハ、徳川氏ニ始マリシモノニテ、國恤ヨリ以下、老中ノ喪アルトキハ、之ヲ江戸若クハ京都ニ發シテ、一般人民ヲシテ、音樂及ビ營繕ヲ作サシメザリキ。

喪ハ親戚ヲ主トシ、是ヲ正服ト爲シ、君ノ如キ、本主ノ如キ、皆義服トス、然レドモ至親ニモ服ナキモノアリ、姉妹ノ子ノ如キ、孀ノ如キ是ナリ、孀トハ七歳以下ニテ死スルモノヲ云ヒテ、父母モ之ガ爲ニ服セザルナリ、童子ノ人ノ爲ニ服スルト服セザルトハ、古來ノ例一樣ナラズ、又親戚ノ遠所ニ於テ死去スルヤ、歳月ヲ經テ其喪ヲ聞クコトアリ、父母ノ喪ハ、聞日ヲ以テ始トシ一年ヲ服ス、其餘ノ喪ニハ官人ハ賜假アリ、喪地ニ至ルモノニハ別ニ路程ノ日數

# 古事類苑

## 禮式部二十五

### 服紀上

人ノ死ヲ哀ミテ、憂ニ宅ルヲオモヒト云フ、思慕ノ義ナリ、又モト云フ、禍孽ノ意ニテ、古來喪ノ字ヲ用キル、喪ノ字ハ、死ヲ哀ミテ哭泣スル象ナリ、其喪ニ居ルニハ、別ニ喪服ヲ製シテ之ヲ著ル、是ヲ服ト云フ、此喪ニ居ルコトハ、神代ヨリ起リテ、上古ニハ其間許多ノ月日ヲ歴シカドモ、未ダ其定制ハアラザリシニ、大寶ノ令ニ至リ、始メテ支那ノ法ニ依リ、稍、減殺ヲ加ヘ、輕重ヲ量リテ法ヲ立テタリ、即チ三年ノ喪ヲ一年ト爲シ、并ノ喪ヲ五月ト爲シ、以下總テ親疏ニ因テ、遞ニ之ヲ降セリ、是レ則チ服紀ナリ、一年ノ喪ニハ、閏月ヲ計ヘザルナリ、而シテ特ニ父母ノ喪ヲ以テ重服トシ、其餘ハ輕服トス、職事官ノ重服ニ遇フモノハ、徑チニ解官シテ、一年ノ間家居シ、服闋ハルノ後ニアラザレバ職ニ就クヲ得ザルナリ、後世ニ至リテハ祖父母及ビ養父母ノ喪ニモ亦服解セリ、蓋シ人ノ後タル養子ナルベシ、サレドモ亦奪情從公ト云フ制アリテ、居喪ノ間ニ、勅アリテ哀情ヲ奪ヒテ本官ニ就カシムルナリ、亦之ヲ起復ト云フ、大寶令ニ奪情從公ノ制ヲ掲ゲタレバ、多クハ起復セシナリ、其起復スル者ハ、朝ニ在リテハ吉服ヲ著クレドモ、家ニ在リテハ國服ヲ著クルナリ、而シテ輕服ニ遇フモノ、爲メニハ、賜假ノ制アリ、例ヘバ一年ノ服ナル夫ノ喪ニ、三十日ノ假ヲ賜ヒ、假過ギテ後ニ出仕セシムルガ如シ、後世ニ至リテハ、解官ト賜假トヲ混ジテ、重服ニ遇フ者ニモ五旬ノ假ヲ賜ヘリ、衛

心喪

一一〇

喪中雜制

一一一

居喪遠制

一四四

喪屋鋪設

一四七

龍僧

一五〇

墓側廬

一五二

寺院忌籠

一五三

喪屋忌籠

一五六

古事類苑

禮式部二十五

服紀上

名稱

服紀制

無服之期童子著服

開喪

舉哀

喪中重過喪

軍人過喪

學生過喪

爲犯罪者服

犯罪者過喪

服解

奪情從公

服假

獨衛役

四

七

五〇

七〇

七六

八〇

八五

同

同

八七

同

九四

一〇〇

一〇八



禮式部三十一

冢墓下

禮式部三十二

國忌

禮式部三十三

神祭

儒祭

禮式部三十四

佛祭上

禮式部三十五

佛祭下

中陰圖

禮式部三十六

哀悼文

古事類苑

禮式部第三冊目錄

禮式部二十五

服紀上

禮式部二十六

服紀中

禮式部二十七

服紀下

禮式部二十八

凶服上

禮式部二十九

凶服下

禮式部三十

冢墓上

AE  
35  
K6<sup>2</sup>  
1933  
V.42



神宮司廳藏版

禮式部三

# 古事類苑

古事類苑刊行會







AE  
35  
.2  
K6  
1933  
v.42

Koji ruien

East  
Asiatic  
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---



